# 【習作】とある仮面の一方通行

はいんちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

**注意事項**

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【習作】とある仮面の一方通行

【Ｎコード】
Ｎ４４７７Ｔ

【作者名】
はいんちゃん

【あらすじ】
妹達の一人、９９８１号が失踪したことにより、第９９８１次絶対能力進化実験が一時中止になって早一週間。

中止になった原因の９９８１号が死体になって見つかる。

９９８１号が何者かによって殺害されたことにより、
一方通行は第９９８２次絶対能力進化実験で使われる予定の９９８２号の護衛をしばらくの間行うことになった。

## そのいち（前書き）

初登校です
禁書×ペルソナのクロスを読みたいのに見かけない
なら自分で書けばいいじゃないと意気込んだはいいけれど、
筆が全く進まない。

ＳＳ書きのみなさんがマジですげえと思う今日この頃。

拙い文ですがお手柔らかにお願いいたす

５／２１　２２：３６　一方さんの２人称訂正
６／１９　０７：２１　セリフ前に付く名称削除

## そのいち

「……ンだァ？ここは」

帰ってベッドの上で寝たつもりだったが、などとと考えている一方通行。

確かに彼が今いる場所は彼自身の部屋ではない。

どうやら車内にいるようだ、この広さを考えるとベンツか何かだろうか。

目の前には鼻の長い爺と少し色の落ちた金髪の女がいる。

「ようこそベルベットルームへ。おやおやこれは……

フフ……どうやらかわった定めをお持ちのようだ……」

目の前の爺は嬉しそうに笑うが、一方通行にとって重要なのは、どうしてここにいるのかと、どうやってここに連れてきたのか。

それが分からない一方通行は、その笑みが気にくわない。

「なァにわけわかンねェことのたまってンですかァ？

ンで、ここはどこだ？どうやってこの俺を連れてきた？

質問に答えねェとプチッとひねりつぶすぞコラ」

少しイライラした面持ちでイゴールを脅すが、イゴールは意に介していない。

「おっと、これは失礼。私の名は、イゴール。お初にお目にかかります。

ここは夢と現実、精神と物質の狭間にある場所……

本来は、何かの形で”契約”を果たされた方のみが訪れる部屋…

…。

貴方には、近くそうした　未来が待ち受けているのやも知れませんな。」

精神と物質の狭間？夢と現実の間？一方通行には全く意味がわからない。

それでも考えてみるが結論は出ない。

「それで？その夢と現実の間とやらにわざわざ呼び出して、なンのつもりなンですかァ？」

自ら進んで一方通行に関わろうとする輩は大抵碌な人種ではない、ということを一方通行はよくわかっている。

この爺も学園都市の暗部や科学者と同じような人間なのだろうか。

もっとも、あの長い鼻を見ると普通の人間ではないと言う事だけはよくわかるが。

「どれ……まずはお名前をうかがっておきましょうか……」

「ハァ？お前は俺の事知らないのかァ？」

妙だ。

学園都市の人間でわざわざ一方通行に関わろうとするなら、ある程度の事は知っていてしかるべきだろう。

となると、学園都市は関係ない・・・？

「……一方通行（アクセラレータ）だ」

「一方通行さま、ですな。それでは、貴方の未来について、少し覗いて見ると致しましょうか。……あなたは占いを、信じら

れますか？」

そう言うと、イゴールはおもむろにテーブルにタロットカードを並べ始める。

「常に同じカードを操っておるはずが、まみえる結果はそのつど変わる。

まさに、人生の様ですな……おっと、『塔』正位置ですか……どうやら近い未来、大きな『災難』を被られるようだ。

次にその先の未来を示しますのは……『月』の正位置。

このカードは……『迷い』、『謎』を示すカードですな。

……実に興味深い。」

「（……何言ってンだ、この怪人鼻爺は。

未来を覗く？未来予知？樹形図の設計者でもあるまいし、

そンなことが一個人に出来るのか？）」

わけのわからないことをのたまうイゴールを、一方通行は訝しげに見つめる。

「で、つまり何が言いたいんですかァ？」

「つまり、貴方はこれから向かう地にて災いを被り、大きな謎を解く事になる、という事ですな……

近い未来、貴方は何らかの形で契約を果たされ、再びこちらにおいでになるでしょう」

「……あァ？誰がこンな不可思議空間に好き好んでやって来るかよ？いいからさっさと帰らせろ。」

いい加減イゴールの思わせぶりな話し方に飽きが来たのだろう。
表情に冷静さが失われてきている。

「ふふ、まあそう仰らずに最後まで聞いていただきたい。
……もし謎が解かれねば、貴方の未来は閉ざされるやも知れません。
お客人がそうならぬよう、手助けさせていただく事が私の役目なのでございます」

イゴールが手を振ると、テーブルの上にあったタロットは一瞬にして消滅した。

「おっと、紹介が遅れましたな。こちらは私と同じここの住民の、マーガレットでございます」

「ンな自己紹介どうでもいいンだよ。さっさと帰さねえとその長鼻三等分にさばくぞコラ」

飽くまでマイペースを貫くイゴールに嫌気がさしたのか、一方通行は能力を発動させようとする。

「……ッ！？」

能力が発動しない。自動で展開していた反射も発動していなかったのだが、何故気付かなかったのだろうか。
この空間が普通じゃないのか、目の前の爺と女が普通じゃないのか。あるいは両方なのか。
思考を加速させるが、追いつかない。

「ふふ……お客人もこの対談に飽きが来たようだ。詳しくは追々に

致しましょう……
では、その時までごきげんよう」

イゴールが笑顔で別れを告げ、一方通行の視界がブラックアウトした。

・・・

「……夢、か」

一体何だったのだろうか、夢にしては鮮明に焼き付いている。いけ好かない長鼻に金髪の女。
考えるが、分からない。
すると携帯の着信音が鳴っている。芳川桔梗からだ。

「ンだァ？久しぶりに楽しい楽しい実験の再開ってかァ？」

思考は放棄された。

・・・

「何の用だ？今日も実験は無かったはずだろォが」

変な夢のせいで、正直何も考えたくないので、
さっくり実験再開でもしてくれないか、と期待していたのだが

「突然だけど実験はもうしばらく延期よ」

その期待はさっくり裏切られた。

「はあ？ンだそりゃ簡潔すぎて意味分かんねェぞ詳しく説明しやがれ」

わざわざ延期の連絡の為だけに呼び出された事に納得のいかない一方通行は、芳川桔梗に説明を求める。

「最近霧が多いじゃない？」

芳川は頬杖をつきながら、けだるそうな表情で返答した。

しかしその返答ではどうにも要領を得ない。

「そう言われりゃそうだな……で、それがどォしたってンだよ？」

一方通行は相槌を打ちつつも、内心舌打ちをして話を促す。

「樹形図の設計者がその霧を予測しきれないのよ」

実験中断の延期の原因は、根本にある機械が原因らしい。

「あァ？つまり樹形図の設計者の予測が本当に正しいのかあやしいから、

再計算が終わるまで実験はお預けってことですかァ？」

樹形図の設計図が使えないとなると、さまざまなところに影響が出るのではないか？

このような暗部の実験では特に。と、考えるが、そんなことは一方通行にとって、割とどうでもよかった。

「ええ、そういうことになるわね」

一方通行は考える。あの樹形図の設計者でも予測があやしいから再計算、なんて事があるのだ。

爺の占いなど信じるに値しないのではないか、と。

しかし、あれはただの夢だった、と結論付けるのになぜか違和感を覚える。

その違和感が何なのかはわからない。だがもし仮に夢でないとするなら、再びあの爺と会うことになるだろう。

会う事が無いのなら夢だし、万が一会う事になったなら。

「（……くだらねェな）」

夢じゃないから何なのだろうか。結局その時にならねばわからないのだ。

ならば今は実験だけ考えていればそれでいいだろう。

一方通行は思考を切り替える。

「……たかが連絡ごときでわざわざ呼び出してンじゃねェぞクソが」

延期の理由は納得できたが、そんなことで呼び出す事には不満があったので一方通行は一言文句を言った。

「ごめんなさいね、でも延期の理由はもう一つあるの」

芳川は謝りつつも、思わせぶりな表情で一方通行のリアクションをうかがう。

「……もったいぶってねェでさっさと言え。俺は眠いンだよ」

しかし、それが気に障ったのか、若干語気が強くなる。

「失踪していた９９８１号が殺害されたの」

「どういうことだ？妹達はてめーらで管理してるはずだろォが、しっかりしやがれ」

ようやく理由を話した、と思ったら割と重大な事実に驚きを隠せないようだ。

「そうね、まず最初に実験が中断されたのは９９８１号が失踪したからなんだけど、
これは確認済みよね？」

「あァ」

「それで９９８１号が見つかり次第実験を再開しようってことになってたのだけど……
私だって詳しくは知らないわよ。殺害された、というのは今さっき報告が上がったばかりだから。
で、９９８１号は殺された……みたいなのだけれど、死体が上がった場所が妙な場所なのよ」

「どこだよ？」

「学園都市の外壁の上。最初に発見したのが暗部の部隊でよかったわ。秘密裏に処理できたから」

「ハァ……何だってまたその犯人とやらはそンなわけわかンねェとこにポイ捨てしてやがンだァ？
はン、不法投棄はダメゼッタイってなァ」

「……まあ妹達が自殺なんてありえないし、殺されたと見て間違いないんだけれど、
犯人の情報が全くあがらないのよ」

「そりゃあ、てめーらが無能なだけなンじゃねェの？
まァ学園都市のクソ暗部ども相手に情報を全く見つけさせねェってのは確かに不可解だな」

「ええ……自惚れてるわけじゃないけど、ここまで何も分からないと言うのはありえないわ」

「それで？結局俺になにをやらせたいわけ？俺を呼び出すってこたァなんかあるんだろォが」

「護衛よ」

「誰のだよ？」

「９９８２号」

芳川の言葉に、一方通行は驚愕した。なぜいずれ殺すであろう相手を守らねばならないのか。

「アァ！！？なンでガキの子守なンざしなきゃならないンですかァ！？」

「意図的に９９８１号を殺したと考えたら次は９９８２号が狙われるかもしれないからかしら？
敵は未知数だし戦力が必要なのよ……あなたが負ける可能性もあるのが不安だけど」

ニヤリと笑みを浮かべる芳川に対し、軽く怒りが込み上げてきたので、

「チッ……誰に向かってそンな口きいてンだよ……まァいい、やってやろォじゃねェか。
どォせ実験がなきゃ暇だしなァ」

勢い余って任務を引き受けてしまった。
一方通行は自身の軽率な発言に少し後悔する。

「あなたならそう言ってくれると思ったわ、それじゃあ頼んだわよ」

「それで９９８２号はどこに居ンだよ」

「ここにいます、とミサカはささやかに自分の存在をアピールします」

そこには、ジョジョ立ちっぽい決めポーズで扉に寄りかかっていた。
どこがささやかだ、と心の中で突っ込みを入れつつ、一方通行は事実確認を行う。

「てめェが９９８２号か？」

「だからそうだと言ってるじゃないですかこのアンポンタン、
とミサカは理解力が少し弱そうな一方通行を馬鹿にしてみます」

したり顔で話す９９８２号は、とてもじゃないが感情のない人形には見えない。

「あァ！！？ぶっころすぞコラ！！
……チッ、今まで殺してきた相手を護衛するとかわけわかンねェなァ……
どこのＢ級映画だよ……」

９９８２号の言葉にイラッとしつつ一方通行は愚痴る。

「ミサカも不本意なんです、我慢しやがれ、とミサカは嫌々一方通行を激励してみます」

「はいはい、クソむかつく応援アリガトウ。……さっさと行くぞ、来やがれ」

「実験以外で死ぬのは困るのでしっかり守ってくださいね、
と、ミサカは学園都市第一位の能力にだけは期待してみます」

「チッ……めンどくせェ……」

口の減らない９９８２号を護衛すると言うのは、本気で面倒だと感じる一方通行だった。

・・・

「ところでどこに向かっているんですか？とミサカは黙々と歩いている白髪に尋ねてみます」

「飯食いに行くンだよ……こちとら起き抜けに呼び出されてなンも食ってねェンだ」

「ほほう、流石の第一位も空腹には勝てませんか……

これは打倒第一位作戦の一つになるかもしれませんね、とミサカは自分の知謀に恐れを抱きます」

明らかに無謀な作戦だというのに、大げさな態度で自画自賛をする。

一方通行は思わず突っ込みを入れてしまった。

「兵糧攻めされるとか俺はお前一人の実験にどンだけ時間費やしてンだよ！？」

「ミサカの華麗な逃げ足を知らないからそんなことが言えるんですよ、とミサカは自信ありげな表情を浮かべてみます」

「追いつかれるかヘバるかのどっちかだと思うけどなァ……っと、お前もあそこのレストランで良いだろォ？」

「そうですね、ミサカはこうやって娑婆で食事をすると言うのは初めてなのでどこでもいいですよ、

とミサカは初めてのレストランに胸をときめかせながら同意します」

「はっ！娑婆ってなァ言いえて妙だなァ。あンな牢獄みてェな場所いつまでもいるもンじゃねェよ」

「……ですが、ミサカにとってはあそこが世界のすべてでした」

９９８２号はうつむくと、その表情を少し曇らせた。

「……チッ、さっさとついてこい」

本当に目の前の９９８２号はただの人形なのだろうか、と一方通行は考える。

レストランに向かう道中で、周りの景色を見てコロコロと表情を変える姿。

そして今の悲しそうな表情。

果たしてこれのどこが感情のない人形なのだろうか。どう見てもただの人間にしか見えない。

――――なら、今まで殺してきた妹達は？

確かに、かつて手をかけてきた妹達からは、話し、脅し、害をなしてきても、感情の欠片も見いだせなかった。

しかし、目の前の少女の姿を目の当たりにすると、今までの妹達もこうなる可能性があった、いや、こうなれたのではないだろうか。

だとしたら、今まで自分のやってきた事は何だったのだろうか。

無敵になりたかった。味方がほしかった。ただ、それだけだったのに。

１万人近くの人間を殺し、これから更に１万人近くの人間を殺す。

１人殺せば殺人者、１００万人殺せば英雄というが、

それはあくまでも戦時下における自国からの評価であり、敵国からしたらただの悪魔だろう。

なら、戦時下でもないし、敵でも無い。そんな人間を２万人も殺す自分は一体何者なのだろうか。

気の遠くなるような時間をかけて、千切り、潰し、引き裂き、殺し尽くした果てに、自分には何が残っているのだろうか。

「……クソったれが」

考えても、詮無きことだと切って捨てた。

## そのいち（後書き）

あれだなぁ。むずかしいなあ。文。
臨場感あふれる地の文を書きたい。

あ、時系列的に「樹形図の設計者」は既にぶっ壊れてんじゃね？って感じだけど、
ご都合主義です。
あと禁書勢のキャラクターは性格が若干丸くなってたりする気がします。
ご都合主義です。

## そのに（前書き）

２万字くらいしか書きためないですし
その２万字を放出してもいまだペルソナ発現しませんし。

６／１９　０７：２８　セリフ前の名称削除

**そのに**

レストランに入ってメニューを開くなり、９９８２号は高らかに叫んだ。

「とりあえず、メニューにあるもの片っ端からもってこい、とミサカはどれが美味しいのかわからないので広く浅く行く道を行きます」

一方通行も、店員すら「何言ってんだこいつ」という目を向けた。店員の心を代弁するかのように一方通行は突っ込みを入れる。

「……食えねー量を頼むな。勿体ねェだろォが」

実験やら何やらで経済力も学園都市第一位であり、たとえいくら無駄遣いしても金が有り余る一方通行だが、本当に無駄な事に金を使うのは躊躇われるようだ。

「何ですか、ケチケチしやがって。金持ってんだろ？ホラジャンプしてみろよ、

とミサカは昔の不良のごとく一方通行にたかります」

「たけェモン食うのはかまわねェンだが、最初っから食えねェ量を頼むのが許容できないンだよそン位わかれ！」

「……仕方ないですね、あなたと同じものでいいです、

とミサカはどれを食べるべきかわからないので思考放棄します。

それでは、準備はいいですか？とミサカは尋ねてみます」

「……ハァ？何の準備だよ？」

「もちろん、店員さんを呼び出す準備です、
とミサカは目の前にあるボタンを見つめ、ドキドキしています」

あれもこれも何もかも初体験な９９８２号にとって、目の前の店員呼び出しボタンも未知の対象らしい。

そろそろとボタンを押そうとする９９８２号の手を取り、それを阻止した。

「ハッ、ンなもンにビビってどうすンだよ。いずれてめーはこの俺と対峙するってのによォ」

そう言うと、一方通行は９９８２号の手をどかしつつ空いてる手でボタンを押す。

当然、ピンポーンと甲高い音がレストランに鳴り響いた。

「あ、あ、あなたという方は、乙女の初体験を何だと思ってるんですか！

とミサカは一方通行の行動を批判し憤慨します！」

顔を真っ赤に赤らめながら９９８２号は一方通行に必死の抗議をする。

その内容はパッと聞くだけだと痴話喧嘩にしか聞こえない。幸い、周りに客はいなかったため目立ちはしなかったが。

「バッ！テメェ何わけわかんねェ事言ってンですかァ！？
つゥか何もしらねェ奴が聞いたら誤解するような言い方すンじゃねェよ！！」

「ひ、酷いです……非常にワクワクしていたと言うのに……
とミサカはうらめしそうにあなたを見つめます」

「なンだなンだよなンですかァ！？あれか！？
てめェはバスのつぎおりますボタンを押そうとしてたら
他の人が先に押しちゃって残念がるガキですか！？」

「そうです、ミサカはまだ０歳ですから。
そしてあなたが空気を読まずに先につぎおりますボタンを押しちゃう乗客です！
とミサカはあなたをＫＹな乗客認定します」

子供の様な言い合い（事実子供なのだが）をしていると、
メニューを聞きに来た店員が話をかけるタイミングをはかっていた。

「……チッ、下らねェ言い合いは終わりだ。おい、そこの店員いいかァ？」

「は、はい！お待たせしましたー！」

と、そこで一方通行は自分がメニューを決めてない事に気付いた。
自分で呼び出した手前、メニューを見て考えるのもあれなので、
目に付いたハンバーグを頼むことにした。

「……和風ハンバーグの洋食セットにドリンクバーを二つずつ」

「は、はいかしこまりました！和風ハンバーグの洋食セットを二つですねー！少々お待ち下さい！
ドリンクバーはお客様のご自由にお願いします！」

店員は元気に返事をすると、厨房へ向かって歩いて行った。

「……和風なのに洋食セット……ブフッ」

なぜかツボに入った９９８２号はテーブルに突っ伏して笑いをこらえていた。

「和風ハンバーグ洋食セットのどこがおかしいンですかァ!?あァ!?」

「和と洋という相反する二つがおりなすハーモニー……ブフフッ」

「……てめェのツボがわかんねェよ。つゥか語尾抜けてンぞ」

特に大きな出来事も無く、緩やかに時間は過ぎていく。

・・・

部屋に戻っても特にする事は無いので、適当に散策して時間つぶしをしていると、

辺りはすっかり暗くなっていた。

「それで、てめェはこれからどこに泊まるンだ?」

「もちろんあなたの家ですが?あなたは護衛の任務を忘れたのですか?

とミサカはあなたの記憶力を疑います」

「チッ、どうなってもしらねェぞ……」

「何か見られたくないものでもあるんですか？」
と、ミサカはあなたの弱点がつかめる可能性を発見してわくわくしながら尋ねます」

「あァ。俺の外出中に小人さんが部屋を荒しちまうからなァ。とてもじゃねェが普通の人間が住める場所じゃねェンだ」

スキルアウト等から多大な逆恨みを受けている一方通行の部屋は、能力が暴走した直後なんじゃないかというくらい荒らされている。初めはいちいち修繕や買い替えをしていたが、最近は面倒になったのでしていない。
おかげで学園都市という巨大都市の中で一方通行の部屋だけ世紀末。
まるでスキルアウトが跋扈する路地裏のようなのである。

・・・

「そんな訳で一方通行の部屋にたどり着いたわけですが。」
と、ミサカはドアの前で一方通行がドアを開けるのをハリーハリーとまってみます。
ところで一方通行の部屋って表現、あれですね、二度と出られない部屋みたいな……ブフッ」

「ンだよそのホラーじみた部屋は……まあ確かに荒れ具合はホラーだがな」

そういいつつ若干形の歪んだ部屋のドアを開けると、そこは異界だった。

「これはひどい、開いた口がふさがりません、どうしてくれるんですか
とミサカは尋ねてみます」

「あァ？口を閉じてェなら縫いつけてやろうか？それとも優しくキスでもしてやろォか？」

「なんですかそれは？まさか人形のミサカに欲情したというのですか？
と、ミサカはあなたの趣味を疑います」

「ンなわけねェだろォが！真に受けンじゃねェよ！！」

「ところでどこで寝たらいいんでしょう？流石に床は何か破片とかゴロゴロしてて嫌なんですけど。
と、ミサカはベッドを要求しないあたりものすごく謙虚な自分をほめたたえます」

「あァ？テメェは勝手にそこのベッドで寝てろ。俺はそこのソファーを使う。」

「おや、やけに素直ですね。……まさか寝込m「いいから寝やがれクソったれ」
……ノリが悪いですね、とミサカはしぶしぶ布団にもぐりこみます」

「チッ……めんどくせェ」

しばらくすると、二つの寝息が響き始めた。

## そのに（後書き）

ペルソナァァァ！

アリスゥゥゥ！俺だァァァ！！！結婚してくれェェェ！！！

## そのさん（前書き）

好きなペルソナキャラはアイギスです。
なるほどなー。

## そのさん

「……はァ？」

一方通行が目覚めると、そこは霧に包まれた空間だった。
霧しか見えないが、足場はしっかりしている。能力は……発動しない。

「イゴールとやらの時とは状況は違うが、似たようなモン……かァ？」

判断材料もないので、とりあえず前に進みながら考える。
しばらく歩いていると、頭の中に直接話しかけるように、声が響いた。

真実を知りたいか？

「……ハァ？何の真実だよ」

歩く。

それならば、捕まえてみたまえ

「……誰をだよ」

歩く。

すると、扉のようなものが見えてきた。
この先から気配がする。

おそらく、この先に居るモノが何かを知っているのだろう。

迷わず先へ進んだ。

「追いかけてくるのは、君か？」

「……誰だァ？」

「ふふ……知りたいなら、かかって来たまえ」

「あァ？」

どういう訳か知らないが、反射が発動している。

「ハハッ！能力がありゃこっちのモンだ！姿を見せやがれェ！！」

能力を遺憾なく発揮し、霧を吹き飛ばそうとする。

が、霧は晴れるどころかいっそう濃くなっていた。

「！？（……どういうことだ……？能力は間違いなく発動している。

……という事はこの霧自体が俺にとって未知の法則で動いてるってのか！？）」

「成程……確かに、面白い素養だ。でも、簡単には捕まらないよ。

……求めるものが真実なら、なおさら、ね……」

辺りの霧が更に深く、濃くなった。

「チッ……何も見えねェ」

「誰だって見たいものだけを見たいように見るものさ。」

霧が、濃くなる

「そして霧は何処までも深くなる」

霧が、深くなる

「いつかまた会えるだろうか？ここことは別の場所で……フフ、楽しみにしているぞ」

意識が、遠くなる……

・・・

「おきなさい、とミサカはあなたの自堕落っぷりを見てあきれながらおこします」

「……あァ？」

９９８２号が一方通行の毛布をはぎ取っていた。
反射があるため、毛布をかぶる事にあまり意味は無いのだが、精神衛生上そのようにしている。風呂もまたしかりだ。

「……夢、か……」

「何時だと思っているのですか、とミサカはこれ以上空腹を抑える事は不可能だと言う事をアピールします」

現時刻、午後１時。

「あァ？まだ午後じゃねェか。後3時間待て」

「ちょ、何言ってるのですか？ミサカが目を覚ましてから5時間は経っていますよ？
というか後3時間も待ってたらそのままそれが晩御飯になってしまうじゃないですか！
と、ミサカはあなたの寝起きの悪さに絶望します！」

「チッ……なら適当に食ってくりゃァいいだろォが。
金ならやるから」

この男、育児放棄した親の様だ。
弁当箱の中に１０００円札1枚入れて渡す親の様だ。
あれの絶望感は異常だ。

ある中学校の体育祭での出来事である。

少年は母の弁当を楽しみにしていた。

暖かいご飯ももちろん好きなのだが、弁当の冷めてちょっと堅めなご飯も大好きなのだ。

そして迎える昼休みの時間。

ここで少年はある事に気付いた。

弁当箱が軽いのだ。いつもの重量感が感じられない。

嫌な予感がしたのだが、ふたを開けねば先には進めない。

しかし、ふたを開けるのが怖い。ふたの先にある現実を見たくない。

だが、友達の「どうしたの？大丈夫？」という不安そうな声で目が覚めたのか、

意を決してふたを開けた！！

『ごめ、寝坊したから適当に買ってきてマジごめん　ちあき』

ポツンと置かれた手紙の裏に、夏目漱石さんのご尊顔。これには少年も苦笑い。

ここで友達が一言、

「お前って紙食うん？」

少年のあだ名は羊になった。

閑話休題。

「あなたは自分の任務を忘れたのですか?とミサカは確認をとります」

「あァ。お前の護衛だろォ?」

あくびをしながら、背骨をバキバキと鳴らす一方通行。本気でやる気が見られない。

護衛?あったね、そんなのも。と言わんばかりだった。

「だったらお金渡してポイは酷いんじゃないですか?と、ミサカはあなたの薄情っぷりに驚きを隠せません」

一方通行のやる気のなさに軽く憤慨しながらも９９８２号は説得

を試みる。

「だァから出前頼めばそれで済むだろォが」

名案と言えば名案だが、正直言ってこの惨状を知らない人に平気で見せられる一方通行が信じられない。

「おお、頭良いですね。ですがこの惨状を出前の人に見せるのですか？

と、ミサカはあなたの恥知らずっぷりにも驚きます」

「あァー。それもそォだなァ……なら、なンか食いに行くかァ」

「ところであなたは料理とかしないんですか？まぁ、冷蔵庫の中を見れば一目瞭然なのですが

と、ミサカはコーヒーしか入ってない冷蔵庫に戦慄します」

「俺がエプロンつけて台所に立ってる姿を想像してみろォ

巨漢が女装する方がまだ様になってンぜ」

「確かにあなたのエプロン姿……ブフゥ！！」

「まァた語尾が消えてんぞォ！！どンだけツボってンだよ！！」

どうやらツボにハマるとミサカは以下略が消えるようだ。

## そのさん（後書き）

一応主人公は一方通行なので、一方通行はペルソナを発現させるはずです。
が、名前が決まらんぬですよ

## そのよん（前書き）

会話の中に地の文挟むのって、大変。

## そのよん

昨日訪れたレストラン。
その入口に立つ二人のうち、一人がポツリと愚痴をこぼした。

「で、またこのレストランですか。と、ミサカは一方通行のバラエティの乏しさに残念がります」

「はン、俺とお前が綺麗な夜景の見えるイタリア料理店でロマンあふれる夜を過ごすってかァ？ありえねェありえねェ」

「バラエティに乏しいと言ったからって、それは極端すぎでしょう……
普通にラーメンとかそば屋とかうどん屋とかあるじゃないですか。
と、ミサカはあなたの想像力を鼻で笑います」

「チッ、お前も麺類ばっかで他の提案を挙げれてねェじゃねえか」

「麺類を馬鹿にすんなァァ！！！」

「何その麺類に対するただならぬ愛！？」

・・・

「ところで変な噂を耳にしたんですが」

ズゾゾゾ、と大きな音を立てながらナポリタンを食べる９９８２号は、一方通行に話しかけた。

「……行儀が悪ィぞ」

この男、意外と面倒見はいいのかもしれない。

「これは失礼。と、ミサカは淑女っぷりをアピールしつつ静かに食べます」

「で？噂ってなンだ？」

「ええ、さっきレストランに向かってる道中で少し耳に入った程度ですが。

と、ミサカは記憶をよみがえらせます」

「人の会話に聞き耳立てるとか、お前も案外俗物なのな」

「ええい黙れ黙れい！……おっと失礼、続けますね。

ここ最近霧が続いていますよね？と、ミサカは確認をとります」

「そォだな。その霧の予測がたてれねェせいで実験が中断されてるみてェだしな」

「ええ。それでですね、霧に覆われた日の深夜０時に、

テレビに運命の人が映るって話なんですが、どう思いますか？

と、ミサカはワクワクしながらあなたの意見を促します」

「はン、そンなモンあるわけねェだろォが。樹形図の設計者でも予測出来ねェ事があンだぞ？

なのにテレビごときに運命決められちゃたまったモンじゃねェよ」

「……夢が無いですね。と、ミサカはあなたの冷めっぷりに冷めて

みます」

「むしろ俺なんかについてこられる運命の人なんざいるのかねェ？」

「私とかどうですか？と、ミサカはセクシーポーズをとりながら一方通行を見つめます」

一方通行は、鼻で笑った。

「無言で笑うだけとか、流石に自信がなくなりますね……

と、ミサカは自分のプロポーションに絶望します」

「まァ、与太話としてなら上等なンじゃねェの？

ただし、オチとしてそれは運命の人じゃなくて実は次死ぬ人の予告とかだったらな」

「一気にただのホラーと化した！と、ミサカはあなたの想像力に恐怖を隠せません」

「なンか前にそんな感じの話を聞いたことがあンだよ。

深夜に砂嵐のテレビ見てっとだンだン砂嵐が弱まってくンだ」

「ほ、ほほ～。つ、続きをどうぞ。と、ミサカはビビってねぇしアピールしながら続きを促します」

「で、だ。砂嵐が弱まったと思ったら、突然名簿みたいな感じのテロップが流れだしてよォ、

最後の一人にあったンだよ。……自分の名前が」

「そ、それで？全然怖くねぇし？と、ミサカは声を上ずらせながら

も虚勢を張ります」

「したらテロップが消えて元の砂嵐に戻ったンだが、この後どうなったと思う？」

「な、何が起こったんですか……？と、ミサカはあまり想像したくないので続きをお願いします」

一方通行はゆっくりと両手を広げ、そして一気に手を合わせた。

パンッ、と音が鳴り、その音に恐怖した９９８２号はヒゥ、と小さく悲鳴を上げた。

この時の一方通行は夏の風物詩、恐怖の語り部稲川淳二には及ばないものの、それに近い程の臨場感を持ち合わせており、９９８２号はその異様な空気に当てられたのか、すっかりなみだ目である。

「……そいつがチャンネルを確認すると、ＮＨＫだったンだ。だから次の日、ＮＨＫに問い合わせたらよォ、受診料金未納者一覧が流れただけらしいンだ」

「……は？いやいや、はぁ？どういうことですか？と、ミサカは若干納得がいかないので尋ねてみます」

「ただの受診料金未納者集を流しただけの話だァ」

「ミ、ミ、ミサカの涙を返せェェエエ！！！」

「それよりどォだった？俺の語り部っぷりはよォ？茶うけ話には丁度イイだろォ？」

ニヤニヤしながら９９８２号に尋ねる。一方通行はドS。逆にドMな一方通行を見たい。

「ふざけんなぁ！ホントに怖かったんだぞ！！」

「ハッハ！こいつ語尾が抜けてらァ」

ちなみに、そのテロップが次の日の犠牲者リストオチもあったのだが、

あの場で語れば９９８２号が失禁するのではと懸念した一方通行の優しさが、

ＮＨＫオチにさせたのだろう。

「ちょっと！あんたらうるさいわよ！！」

すると、騒がしくしたのが悪いのだろうか、

９９８２号と同じ常盤台中学の制服を着た茶髪の女の子が一方通行達を注意している。

「あァ？そいつァ悪かったなァ。もう出てくから勘弁してくれや」

「納得いかねぇ……と、ミサカは怨念の炎をメラメラとたぎらせます……」

「ってアンタ……！？」

茶髪の女の子は、９９８２号を見て絶句している。

それもそのはず、９９８２号は絶句している女の子の遺伝子から生まれたクローンであり、

その女の子は常盤台中学の誇る第３位、レベル５の『超電磁砲』

その人であったからだ。

「ンだァ？お前は……妹達か……何号だァ？」

一方通行はその事実に気付かず、あっさりと御坂の知らない事実の断片を漏らしてしまう。

「妹達！？何号ってどういうこと！？そこに居るのは一体何！？」

「あァ～、オリジナルかよ……チッ、めんどくせェ……」

「流石に今のは一方通行が迂闊すぎますよ。
と、ミサカはあなたに落ち度があると少し責めてみます」

「私のことを無視すんな！！あんたら何者よ！？言わないとどうなるかわかってんの！？」

「どうすっかなァー……逃げても良いンだが……」

一方通行という人物は、その能力の性質上、善意も悪意も全て跳ね返して生きてきたので、
今御坂美琴が一方通行に向けている敵意も本来跳ね返していたはずなのだが、
なぜかそれをする気にはならなかった。

「逃げてもこいつしつこそうですよ。ここは適当に嘘ついて煙に巻くのがいいんじゃないですか。
と、ミサカは提案してみます」

「丸聞こえよ！！」

煙に巻く作戦は初っ端から失敗に終わった。

「あのな、そこにいるのはお前の生き別れの妹の御坂久々葉（くくは）ってンだ」

「それは私が９９８２号の９９８でしょうか。と、ミサカはあなたの若干残念なネーミングセンスを馬鹿にしてみます」

「コラッ余計な事言うンじゃねェよ」

この二人、ごまかす気が無いらしい。ぞんざいな態度に御坂のボルテージもマックスだ！

「あんたらホントの事言う気ないでしょ」

「あ、わかるゥ？わかるなら回れ右してゴーホームだ」

一方通行はシッシと手を払う。御坂はマックスボルテージを解放した！

「……ホントに、いい度胸してるじゃない……！！」

「やべ、こいつ漏電してんぞ。と、ミサカは一方通行を盾にして逃げる準備をします」

「まァ、待て落ちつけよ。ここで暴れりゃ一般の方々に迷惑だぜェ。つか、お前にも連れがいるじゃねェか。さっさとそっちいけよ。後、俺ァ基本的に飯はこのレストランで食うからよ。適当な時間にまたここ来たら俺達いるだろォからよ。その時話し

よォや」

実際、一方通行はこの店の常連であり、店員にも顔なじみが多い（別に仲はよくないが）。

なので御坂が店員に聞いたところ、

「はい、この方は良くこちらにお越しになられておりますね。いつもありがとうございます」

と、丁寧な対応をされた。一方通行は内心ＧＪと店員を褒め称えた。

「……なら、今日は引きさがってあげるわ。逃げたら、承知しないんだから……！」

「はいはい、さっさと行けよ。ダチは待たせるもンじゃねェ」

「ダチ居ない癖に、とミサカは一方通行を内心馬鹿にしてみます」

「声出てンぞクソったれ」

「クソたれてるときにカレーの話すんなよ。と、ミサカはレストランにあるまじき暴言をぶちまけます」

「逃げんじゃないわよ！絶対逃げんじゃないわよ！！」

と、御坂は捨て台詞を吐き、友達と思われる集団の輪に戻って行った。

お姉さま、あの白髪とお姉さまに酷似したお方はどちら様！？と誰かがハスキーボイスで騒ぎ立てていたが、

電撃が走り、静かになり、少女たちは店を出た。

「チッ……なンだあいつハタ迷惑な奴だなオイ」

「それで？一体どうするのですか？と、ミサカは一方通行に今後を尋ねます」

「あァ？あー……そォだな、アイツの為に飯食うとこ変えンのも癪だしなァ
　下手に嘘ついたり逃げたりすると、あの感じじゃ自分から首突っ込ンで来るだろォな」

「そうですね……ならそれっぽい嘘をつくと言う具合で行きましょうか。
　幸い他の個体は外出禁止なので、下手にオリジナルと出くわす事もないでしょうし」

「それがいいだろォな。生き別れの妹って設定は悪くないだろうが、相手は『超電磁砲』だ。ハッキングなんぞお手のモンだろうしな……
　ちょっと調べられたら一発でアウトだ」

「馬鹿正直に本当の事を話すのなんてもってのほかですしね。
と、ミサカは案が思いつかない事に頭を抱えます」

「どォすっかなァ……まァ、今日はもう帰るか。眠てェ」

「そうですね。問題は次あった時の私たちに丸投げしましょう。
と、ミサカは思考放棄します」

二人は会計を済ませる前に、コーヒーを飲んで少し落ち着いてか

ら会計に向かった。
そしていざ帰らんと店を出たところで、
「それで、ちゃんと事情を話してくれるんでしょうね？」
御坂は、レストランの出入口で待ちかまえていた。
「ないわァ～、つかお前、連れはどォした」
「レストラン出口で出待ちとか流石の私もそれは引きます、
と、ミサカはオリジナルの執念にドン引きします」
「なによ！？もう会計するってアンタ言ってたじゃない！
すぐ出てくるかと思ったのに、いつまでも出てこないから皆帰らせたわよ！！」
「成程なあ。それは重畳」
「ど、どういうことよ……？」
「ここで話せる内容じゃねェな……ついてこいよ、真実を教えてやる」
９９８２号は一方通行の発言に驚き、ヒソヒソと尋ねた。
「教えちゃっていいんですか？と、ミサカはオリジナルの心が折れるんじゃないかという懸念を抱きます」
「いいンだよ。どォせお前以外の妹達は研究所の中だからなァ。
ある程度のホントの事を教えてやっといた方が、下手に調べられ

て妹達の群れに遭遇するよかイイだろ」

凶悪な笑みを浮かべつつそう言うと、一方通行はスタスタと歩きだした。

「そうですね。なら特に言う事はありません。と、ミサカは一方通行に追従します」

続いて９９８２号が一方通行の隣にならんで歩き、

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！！」

そして二人を追って、御坂が歩きだした。

## そのよん（後書き）

アリスが好きだけど、相棒はティターニアです。
つか一方さんの二人称、「オマエ」なのな。
ちょっとしゅうせいしないと

## そのご（前書き）

調子こいて書きため放出したせいで、
あっという間に書きため打ち止め（ラストオーダー）かも！ってミサカはミサカは嘆いてみたり！

不定期更新になるだろうな！

## そのご

「うわっ、何これ空き巣？」

御坂美琴は一方通行の部屋の惨状に驚きつつも、ある程度無事なソファーに腰をかけて一方通行に声をかけた。

「いつもこンなンだよ」

「はぁ！？あんたの部屋のセキュリティはどうなってんのよ？片付け下手ってレベルじゃないとこを見るとやっぱり誰かに荒されたんでしょ？」

どんな生活を送ればいつも空き巣状態な部屋が出来るのか、なんだかんだでお嬢様な御坂の理解からは遠く離れていた。

「ところで、結局あんたらは何者なのよ？あんたらのリアクションからして私の事は知ってるみたいだけど、
一応、自己紹介しとくわ。私は御坂美琴。第三位『超電磁砲』よ。」

「あー、そりゃご丁寧にどうも。俺ァ一応学園都市第一位をやってる、
『一方通行』だ。呼び名も能力名でかまわねェ」

「はぁ！？第一位？……うそでしょ！？」

「嘘じゃねェよ。まあいい、続けンぞ。で、こっちに居るのが……あァー、多分信じねェと思うが、事実だぜ？

テメェのクローンだ」

「……は？」

「そうです私があなたのクローン、御坂久々葉です
と、ミサカはオリジナルたるあなたに自己紹介します」

「……はぁぁあぁあ！！？」

流石に突拍子もない。御坂は2人の言葉に空いた口がふさがらないようだ。

「まァ、信じらンねェと思うが、事実だ。お前、俺らが嘘ついても絶対後で調べるだろォ？
したらお前の知らなくていい事まで知っちまうかもしれねェからなァ。
ある程度の質問なら受け付けてやる。なンかあるだろ？」

当然と言えば当然だが、御坂はその衝撃的事実に驚きを隠せないでいる。

「……いつ私のＤＮＡを採取したのよ？」

「その気になりゃどこでだって採取出来ンだろォ？
髪の毛ならお前の部屋行けば取れるし、身体検査で血液検査だってしたことあるだろ？
まァ、髪の毛からＤＮＡ採取すンのは困難だが……
お前、幼少時に善意のつもりでＤＮＡマップを提供した事あンだろォ？」

「……ええ」

御坂は幼年時代に、筋ジストロフィーの治療の研究のために、電撃使いたる自身のＤＮＡマップを提供することで研究所に協力していたのだが、まさか自分のクローンをつくられるとは思っていなかっただろう。

「でだ、なンでクローンなンぞ作ったかっつーと、お前レベル1から努力してレベル5になっただろォ？
それは元々素質があったのかもしれないし、努力の結果かもしれない。
その事実を調べる為、らしいぞォ」

「……どうして私なの？」

「他のレベル5は能力が発現した時点でレベル5だったりするからなァ。
逆に能力発現した時点でレベル5だったやつらのクローンを作って、
レベル5じゃなかったらそれはそれで研究としてはおもしれェかもな。
だが、実際にクローンを作ってそいつらを御せなかったら話になンねェしな。
つまり能力の性質上お前の能力が一番制御しやすいってのが有るンじゃねェか？
まァ、今のところは実験中断されてっけどな」

「……実験はなんで中断されてるの？事故？」

「なンか最近樹形図の設計者が調子悪いみたいでよォ。

実験内容に不備があるかもしンねェってことでしばらく中断だってよ」

「樹形図の設計者が？あのスパコンに調子悪いとかあるの？」

「あァ。ここ最近霧の日が多いだろ？その霧の日の予測に失敗してるみたいだぜェ」

「ふぅん。まあいいわ。で、肝心の実験内容は？」

「俺と戦闘。まァこいつと戦闘した事は一度も無いけどなァ。実験中断してるしィ。だからかしらねぇけど、こいつのレベルは１の電気使いだ」

他のクローンとは幾度となく戦闘してるし、こいつのレベルは２なんだけどなァ、

と、一方通行は心の中で付け加えた。

「あんたと戦闘？ふぅん、それはいいレベル上げになりそうね……」

御坂は少し頭を抱えている。情報を整理しているようだが、一方通行の言っている事は信じたらしい。

「（……これで下手に詮索してこなきゃいいンだが）」

と、ここで沈黙を保っていた９９８２号が声を上げた。

「あの、ちょっといいですか？と、ミサカはオリジナルに尋ねてみます」

「ん？何？て言うかオリジナルって呼び名嫌ね……
そうだ、あんた私の後に生まれてるんだから私の事はお姉ちゃんと呼びなさいよ！」

「……どうして？私みたいなのがいるのって、気持ち悪くないんですか？
と、ミサカはあなたの提案に耳を疑います」

クローン。

ドッペルゲンガーのような存在が眼の前に居るのだ。
普通気味悪いと思うはずだ。だが、御坂はそんなことを毛ほども感じてないように見える。

「……そうね、確かに私の知らないところで勝手にクローンを作って好き勝手やられるって、すごく嫌。
だけどね、あなたはこうやって生きている人間じゃない。
……私は、あなたが生まれて、生きている事を、否定するつもりは無いわ。」

「……人間、ですか？……そんなわけないじゃないですか。
と、ミサカはミサカがただの人形であると否定します」

「そんなわけないじゃない……こうやって顔合わせるのは今日が初めてだけど、
あなたはどうみたって感情のある人間よ。それくらい私にだってわかるわ。
どうやって生まれてきたって、あなたは人間なの。自分で自分のことを否定しちゃ駄目よ」

「……私は……生きてても、いいんですか……？」

初めて自身の存在を認められて感極まったのだろう。
その時９９８２号の頬から一筋、涙が流れた。

「あたりまえじゃない！あなたは、私の妹なんだから！」

御坂は優しい笑顔を浮かべながら、９９８２号の頭を撫でる。
その様子はまさに姉妹と言っても差し支えが無いと言えよう。
しかし、二人を見ていた一方通行は、

「（……っべー、マジっべーわ。本当の事ばれたらどうしよう）」

言い訳を考えていた。

・・・

「ところでもう一個聞きたいことあるんだけど」

「あァ？言ってみろ」

「マヨナカテレビって、聞いたことある？」

「あン？ンだそりゃ。しらねェ」

「雨の日の深夜０時にテレビを見ると、運命の人が映るとか何とかって奴」

「ハッ！科学の街の頂点たるレベル５、その一人のお前がそンな与

太話信じるなンてな！」

「私だってそんなデマ信じてないわよ。でも、気になる事を聞いちゃって……。

あんたら何か知らないかと思ったのよ」

「気になる事、とは？と、ミサカはお姉さまに尋ねてみます」

「お、お姉さまって……どこの黒子よ……いや、まあいいわそれで。えっとね、そのマヨナカテレビに、私に似た姿が映るって言うのよ……

私テレビに映るようなことした覚えないし、あんたらに関係してるかと思ったの」

「なンだと……？それがマジだとして、俺らだって初耳だぜそれは」

「マヨナカテレビの噂は聞いたことあるけどね、とミサカはどうでもいい補足をします」

「どういう事なんだろう……」

「そンなら、とりあえず雨の日の夜を待とォぜ。その日の夜テレビ見りゃ全部わかンだろ」

「それもそうね。なら連絡先聞いとかないとね。何かあった時の為に」

「あァ、かまわねェよ（やべェ、なンか有った時真っ先にここに連絡来るじゃねェか……

かといって嘘ついたらそれはそれで疑われる原因になるし）」

「私は連絡用の端末を持たされていませんので、と、ミサカは注釈しておきます」

「あら、あんた携帯持ってないの？なら明日にでも買いに行かない？どうせ暇でしょ？一方通行も付き合いなさいよ」

「（えェ～……どンだけ関わりたがりなンだよ……マジで下手に疑われる事言わなくてよかった）

あァー、いいンじゃねェの？そンなら明日適当な時間に連絡よこせ」

「決まりね！それなら私は帰るけど……久々葉はどこで寝泊まりしてるの？」

「えっ……ああ、そういえば私の名前は久々葉でしたね。

私は一方通行の部屋に泊っていますよ。と、ミサカは一方通行との同棲を暴露します」

「どうせっ……！？あんたやらしい事してないでしょうね！？この子に手だしたらただじゃおかないからね！」

「してねェしこンなンに興味ねェよ！！」

「そこまで否定されるとそれはそれでショックですね……。

と、ミサカはお姉さまの体を見て溜息をつきます」

「なっ……！それ私に魅力ないって言いたいの！？どうなの一方通行！？」

「だァァ～！うるせェうるせェ！散れ！とっとと帰れェ！！」

「言われなくても帰るわよ！！」

と、言いつつも、なぜか動かずに一方通行を見つめている

「……ンだよ？」

「もう日も暮れ始めてるのに、あんたはか弱い女の子に一人で帰らせるの？」

「ハッ、お前がそンなタマとは思えねェがな」

「そう、なら決まりね。久々葉はこの部屋で待ってて。こいつと話したい事があるから」

「……チッ」

舌打ちをしつつも腰を上げる一方通行に、９９８２号は御坂美琴に聞こえないよう小さく声をかける。

「大丈夫ですか？と、ミサカはミサカが一人になる事で任務に支障をきたす可能性を考慮します」

「……まァ、大丈夫だろ。すぐ戻る。だからお前はおとなしくしてろ」

一方通行もまた、小さく返答した。

## そのご（後書き）

一方通行の嘘八百の内容に文句がある方、どしどしコメントください。

否の意見は耳ふさいで膝をついてやり過ごす以外なかろう……

一方通行、御坂に嘘ばれたらどうするんだろ……（他人事

## そのろく（前書き）

ＳＳ速報でも更新開始。
風呂敷広げすぎて大変なことにならないようにしよう。

夕焼けで辺りがオレンジに照らされる中、学生たちはまばらになっている。
二人はここまで無言で歩き続けていたが、御坂美琴は一方通行に声をかけた。

「ねぇ」

「あァ？」

「あの子の事、よろしくね？」

一方通行は突然の事に、怪訝な表情を浮かべながら、御坂に尋ねる。

「どォいうことだよ」

「ほら、あの子って人間とはいえ、作られた存在だから。
友達もまだ全然いないんでしょ？だからあんたにあの子を守って欲しいなって」

「守りてェならテメェで守ればいいじゃねェかよ」

「もちろんそのつもりよ。でも私だけじゃ力不足かもしれない。
そりゃ学園都市第三位の肩書きは伊達じゃないって自負はあるわ

よ？

でも所詮はただの人間なの。守ってくれる人が多いに越した事は無いじゃない？

後あんたは第一位だし」

「ついでｋ……」

一方通行の言葉をさえぎるように、それに、と御坂が付け加えて話を続ける。

「悔しいけど、姉たる私よりも、あんたの方にあの子は懐いてるみたいだしね。

でも、あんたには負けないからね！」

御坂は快活に笑いながら、一方通行の胸を軽く叩く。反射した。

「勝手に言ってろォ。……もうこの辺でイイだろ？俺は帰る」

「痛いっ、何すｎ……ってあんたの能力はそう言う能力だったわね……。

まあいいわ、ありがと。……じゃあ、またね」

御坂は一方通行に向かって軽く手を振ると、そのまま帰って行った。

「……チッ」

一方通行は９９８２号について考える。

彼女はやはり人間と呼べるのだろう。オリジナルお墨付きなのだから確実に。

となると、およそ１万人もの人間を殺しておいて、自分だけ無敵になる―敵を無くす―なんて甘い事が許されるのだろうか。

そんなわけがないだろう。自分はただの人殺し。敵は世界で、味方なんているはずも、ましてや出来るはずなんてない。

そう考えると、自分が今までやってきた事の愚かさがよくわかる。

「……クソったれが」

味方が欲しい、という自分の欲求だけで１万人もの人間を殺したのだ。

自分だけのうのうと生きていると言う事自体おかしいのだ。

人を殺す―その罪は重く、更に殺すことで、罪重なっていく。

いっそその重みで押しつぶされてしまえばいいのに、とも考える。

しかし、自分の『一方通行』という能力がそれを許さない。

全てを反射する『一方通行』は、罪の重さすら反射してしまうのだろう。

それならば。

罪を背負う事すら許されないのなら。

「……俺はクソったれの悪党だ」

悪になろう。

とびっきりの悪に。

中途半端な悪は全て吹き飛ばす。くだらない悪が、闇が、光を侵さないように。

光の住人が闇にのまれないよう、自分がその闇をのみこんでやる。

許されるつもりなど毛頭ない。
懺悔などもってのほかだ。

「だけど、あいつらに手は出させねェ」

これはただの自己満足だ。

「……守ってみせる」

一方通行の独白は、日の光と共に、闇の中に沈む。
しかし、その心には、確かな炎が宿っていた。

「おかえりなさい、ホ・ア・タ（はぁと）。北斗にする？南斗にする？それともア・タ・タ？
と、ミサカは新妻ぶってみます」

「……貴様のような妻がいるか、とでも返せばいいのかァ？」

ちょっとシリアスぶって心機一転したと言うのに、当の本人はこれだ。
気が抜けて仕方ない。しかし、こんなくだらないやりとりも悪く

ない、と思う一方通行だった。

## そのろく（後書き）

一方さんのペルソナ決めました。
うまいことペルソナと能力のパワーバランスを測りたいと思う

## そのなな　ようやくマヨナカテレビ入りますよ（前書き）

ようやくマヨナカテレビです

## そのなな　ようやくマヨナカテレビ入りますよ

「ねぇねぇ、これ可愛くない？」

御坂美琴は、自身のお気に入りであるカエル型マスコットの「ゲコ太」……を模して造られた携帯電話を指差している。

「「えェ～……ないわ」と、ミサカはお姉さまのセンスを全否定します」

二人には不評のようだが、御坂は往生際が悪く、執拗にゲコ太を勧めてくる。

「流石に子供っぽ過ぎるんじゃないですか？と、ミサカはお姉さまのギャップに萌えてみます」

「つか、なンでその機種なンだ？カエルの奴ならあっちにもあるだろォが。
まァ、どっちもどっちなンだが」

どんなデザインでも、機能性が良いのであればそれでいい、と考える一方通行でさえそのデザインはあんまりだろ、と思っている。
もっとも、あんまり否定するのもかわいそうだからそこまで口をはさむつもりはないのだが。

「……いなの」

御坂は恥ずかしそうにうつむきながら、ボソボソと何かを言う。

その顔は上気し、まるで湯上りのような顔であった。

「あァ？ンだよ聞こえねェし」

そんな御坂にニヤニヤしながら話を聞き返す。

「私のとおそろいなの！！おそろいがいいの！悪い！？」

恥ずかしさが一周して混乱に昇華したのか、大声で心の内を高らかに叫んだ。

「……だ、そうだが、その辺どォなンだ？」

一方通行はニヤニヤしながら９９８２号に話を振る。

９９８２号はというと、

「ヘイヘイそこの子猫ちゃん、暇なら俺と遊ぼうぜ。

とミサカは首輪のついてない野良猫を撫でようと試みますが逃げられました……」

全く聞いてなかった。

「……」

「まァ、なンだ。……ドンマイ」

流石に居た堪れなくなったのか、御坂を慰めようと試みるものの、

「もおおおおお！！」

牛の鳴き声のような叫びを上げながら、漏電しながら、顔を真っ赤にしながら、

御坂は走ってどっか行った。

「あれ、もう決まりました？と、ミサカはお姉さまがいない事をスルーしながら尋ねます」

「お前、案外酷いのな」

結局、御坂の提案したゲコ太携帯を購入して（なんだかんだで姉とお揃いがいいらしい）、帰路に就いた。

「今からアイツの連絡先と俺の連絡先をお前の携帯に登録すっから、アイツに連絡してやれよ？後フォローもしとけ」

「そうですね、流石にかわいそうでしたから。

と、ミサカはゲコ太携帯を買った旨を伝えるメールをしたためます」

９９８２号がゲコ太携帯を購入した事をメールで御坂美琴に伝えたところ、

十分ほどして「ありがと」と、一言書かれたメールが届いた。

おそらくなんと返信しようか考えに考えた挙句、恥ずかしかったからありがとうとだけ書くことにしたのだろう。

……というのは９９８２号の想像ではあるが、ツンデレ気質の御坂の事であるから、

それに似たような行動を取っただろうと言う事は何となく予想で

きる。
９９８２号は、御坂の照れる姿を想像して、クスリとほほ笑んだ。
・・・
シトシトと雨が降っている。「マヨナカテレビ」は雨の日に映るとのこと。
だが部屋のテレビは使い物にならないため、一方通行と９９８２号は現在芳川桔梗のいる研究所に出向いている。
テレビを借りるついでに、先日御坂美琴から聞いた「マヨナカテレビ」について意見を求める為だ。
一方通行は所詮噂だと口にしていたが、最近見た「夢」と何か関係があるのではないか、と実は考えていた。
根拠は無いし、「そンな気がする」というだけなのだが、もし「夢」が「現実」だったとしたら、
ほぼ確実に「マヨナカテレビ」と関係しているのではないか、と。
その事を芳川に話したところ、
「「夢」と「マヨナカテレビ」、ね……。実は噂の方は既に知っているのよね。
あれでしょ、雨の日の夜中にテレビを見てると～って奴。
実際に確認する機会がなかったのだけれど」
どうやら噂は既に聞き及んでいたらしい。
好都合だ、と一方通行は考え、こう提案した。
「今日雨だしよォ、確かめてみよォぜ」

「良いわね、どうせ暇だし」

暇だ、という理由で芳川は二つ返事で了承した。

一方通行は、仕事しろよと心の中で思ったが、（他人に）優しいのではなく（自分に）甘い芳川は既にニートの片鱗を見せていた。

そしてここから０時まで、特筆すべき事は無いので……

キングクリムゾン。

この世の時間はけし飛び……そして全ての人間は、この時間の中で動いた足跡を覚えていないッ！

そして来たる深夜２３時５９分。

「まさかあンなオチだったとはなァ」

「ええ、流石の私もあれはスタイリッシュすぎると思ったわ」

「何の話ですか。と、ミサカはさっきまで何をしていたのだろうと首をかしげます」

他愛のない話をしていると、ついに時計は０時を回った。

が、テレビはやはりというか案の定というか、いつもの電源オフなテレビだった。

「……なンもねェな」

「そうね……暇つぶしにはもってこいだったけど」

「所詮噂は噂にすぎないということですか、ははっ。と、ミサカは

嬉しいような残念なような複雑な気分で半笑いします」

一方通行は、根拠のない考えとは言え、割と確信を持っていたにも関わらず、

「夢」と「マヨナカテレビ」についての予想が見事に外れたため、若干拍子抜けした表情でテレビを見つめていた。

すると、

「……！！～～……！」

テレビには誰かの形をした影が浮かび、その誰かは何かを叫んでいる。

芳川と９９８２号は驚いた表情を浮かべているが、一方通行はなぜかこうなることが当然だと感じていた。

そして、

「我は汝……汝は我……汝、扉を開くもの……」

「ガァッ……！？」

突然頭の中で声が響き渡り、割れるような頭痛に一方通行は頭を押さえた。

その様子を見た芳川と９９８２号は一方通行に駆けよる。

茫然としていた一方通行は何かを思い出したかのように立ち上がり、

テレビの画面に手を伸ばしていく。

そして、一方通行の腕は、

「「一方通行!?」」

そのまま画面の中に沈んで行った。

・・・

「……どぉいうことだ?」

あの後どうしたかというと、画面に沈んだ腕は普通に戻ってきた。

「画面が小さすぎて入れなかったみたいね」

「いやいや、そもそもテレビの中に入るってどういうことですか。
と、ミサカは一方通行の奇行もさることながら、画面の中に腕が
入ったと言う事実に驚きを隠せません」

「……反射はきいていたはずだが……?」

そうぼやきながら、もう一度テレビに手を伸ばすと、

「あら、また入ってったわね」

「いやいやいや、なんであんたそんな冷静なんですか。
と、ミサカは逆に芳川の冷静っぷりを高評価します」

「気になるなァ……おい芳川よォ、全身通りそォなデケェテレビ用意しろよ」

「いいわね、面白そうだわ。来週までには用意しておくわね」

割と乗り気な芳川と、それがさも当然かの様に話す一方通行。
納得のいっていない様子の９９８２号。この中では９９８２号が実は常識人なのかもしれない。

・・・

次の日、御坂美琴に連絡を取った一方通行と９９８２号は、「マヨナカテレビ」の事を話すべくいつものレストランに集まった。

「ねぇ、昨日のあれ。……見た？」

「おォ。すごかったぜェ？なンせ誰か人っぽい姿があるなァーって思ったら腕がテレビの中「一方通行！と、ミサカは声を荒げます！」」

昨日の顛末を話そうとしたところ、９９８２号が一方通行の言葉を遮った。

「ンだよ邪魔すンじゃねェよ……」

「何よー、何隠してるのよー？」

御坂は話が遮られたことへの不満から、ジトっとした目で９９８２号を見つめる。

「言ったって信じませんよ。ミサカ自身今だ信じられませんから。
と、ミサカは昨日の出来事を振り返ります」

「信じる信じないは置いといて、教えてよ。何あったの？」

元々信じてもらう気がない一方通行は昨日の顛末を丁寧に話した。

「うっそだー！」

やはり信じなかった。

「はン、だからそれを証明するためにこれから家電量販店に行くんだろォが」

「まてまてまて」

９９８２号は信じられないと思ってはいるが、昨日の出来事が事実である事は確かであるため、
人目の付くところでテレビの中にプラグイットされた日には大騒ぎ確実である。
９９８２号としては目立ちたくないため、一方通行の行動を阻止せざるを得ないのだが……

「ンだよ止めンじゃねェよ」

この男を止めるのは不可能というものだろう。
というか最初と随分キャラ変わってね？

「そんなに自信満々に言うなら、本当なのかしら……？」

あっさり一方通行の言葉を信じる御坂。良くも悪くも純粋なのである。

兎にも角にも、テレビが無ければ始まらないので、移動することにした。

一方通行と、９９８２号、御坂の三人は家電量販店、ＤＡＭＡＹＡ電機に来ていた。

ここで一つ疑問が浮かんだ御坂は一方通行に質問する。

「ねぇ、あんたんちの家電って買い換えたりするの？はっきり言って無駄じゃない？」

「おォ、最初は律義に買い替えてたんだけどなァ。たび重なる襲撃にうンざりして買い替えるのは止めてるンだわ」

羽振りのいい一方通行ではあるが、無駄遣いはしないのだ。

「……あんたも中々壮絶な人生送ってるのね……」

「まァな……」

ところで、この町の名称は「学園都市」であるが、文字通り「学生の街」である。

住人の大半が学生であり、その大半が学生寮に住んでいる。

その学生寮というのは、学校のランクによって差はあるが、大抵家電完備だったりする。

何か有れば管理人にその旨を伝えればＯＫだし、ネット等での家電購入も利用できる。

ついでに、放課後の学生たちが何をしているかというと、大抵セブンスミストだったり、最新設備の整ったゲームセンターだったり、

暇つぶしをする空間は多数存在するのだ。

つまり何が言いたいのかというと、

学園都市の人間でわざわざ家電量販店に足を運ぶ人間など居ない、という事だ。

幸か不幸か周りに誰も居ないのを確認した三人は、

「見てろよ……」

「え、ええ……」

「す、少し怖いですが、頑張りましょう。と、ミサカは心を落ちつけます」

何をがんばるのかはさておき、一方通行は目の前にあるおよそ１００インチ程度のプラズマテレビに手を伸ばした。

「「うわ！！」」

誰の声かはわからないが、驚きの悲鳴と共に、

３人は科学とも魔術とも違う力の入り口、地獄の一丁目に足を踏み入れ、家電量販店から姿を消した。

## そのなな　ようやくマヨナカテレビ入りますよ（後書き）

口内炎めっちゃ痛いんだけど
こいつマジ強敵

## そのはち（前書き）

一方さんをペルソナ的な意味でワイルドにすべきか否か迷う

「お前ら、起きろ」

気絶している９９８２号と御坂美琴を叩き起こし、状況を確認する。

「う、ううん……」

「こ、ここは……？と、ミサカは知らない天井だというベタなリアクションはとりませんよ」

「うるせェよ。……つゥか天井って何処だよ」

辺りは霧に覆われていて視界が悪い。しかし、どこかのテレビスタジオである、という事だけは把握できた。

一方通行は、この間見た夢の霧を思い出す。能力を発動させるが、やはり霧は晴れない。

やはりと言えばやはりだが、焦っても仕方ないので、二人の能力がどうなっているかの確認も行う。

「チッ……お前ら、能力は使えるか？」

「私は……うん、ちょっと変な感じがするけど、大丈夫よ。この霧が悪いのかな……？」

「ミサカは……駄目ですね。と、ミサカはミサカの微力すら発揮できない状況を嘆きます……」

「さァて……どォしたモンかな……」

テレビという入口があったのだから、たどった道を引き返せば元の場所に戻れるのだろう。

しかし、

「あァ～……俺達が落ちてきた道、というか出口、どこにあるンだ？」

（＾ω＾）出口君が失踪したようです

「言ってる場合ですか。と、ミサカはあなたの悠長っぷりに憤慨します」

「そ、そうよ……帰り道、探すんでしょ……？早くしないと、門限が……」

御坂美琴は、現状よりも、別の事に恐怖していた。

「あァ？門限だァ？思春期のお子様は門限破ってナンボだろォが。違うか？」

それがさも当然かの様に尋ねる一方通行。

「それが出来ればこっちだったこんなにビビらないわよ！！
あんたはあの寮監を知らないからそんなことが言えるんだわ……」

――――戦闘特化型人型汎用決戦兵器、寮監大総統閣下
別名、常盤台の赤い稲妻（ジョニーライデンではない

彼女の体術はレベル４のテレポーターや、レベル５の電撃使いを軽く凌駕している。
それこそ一方通行の反射を体術で打ち破る事が出来るのではないかと御坂が考えている程である。

くだらない事を話している暇があったら、とりあえず歩きましょう。
という９９８２号のありがたい説教により、３人は周辺を探索することにした。

「つゥかよォ、ホントになンなンだろォな、ここ」

「正直馬鹿な研究者が作った馬鹿な研究の産物だとかの方が信憑性有るけど……」

「……入口がなんでもない売り場に置かれていたテレビ、なんですよね。と、ミサカは現状に頭をかかえます」

どう考えても科学サイドの介入はありえないだろう、というのが3人の結論であった。
もちろん、知らないこととはいえ、魔術サイドの方も関係ないのだが。

――しばらくの間、あても無いまま迷宮をさまよった。

・・・

「お？なンだありゃ。変な入口みたいなのがあるぜェ？」

一方通行が指差した先には、壁の中に四角く切り取られた、禍々しい雰囲気をもつ赤と黒の空間があった。

「……正直先に進むのが億劫なんだけど」

げんなりとした表情で御坂美琴がつぶやいた。
それに対し、相槌を打ちつつ、

「ええ、私も行きたくないですけど、行くしかないんですよね……
と、ミサカは恐怖を紛らわせるためお姉さまと腕を組みます……」

「ビビってねェでさっさと行くぞォ」

なんでもないようにスタスタと先へ進む一方通行に、二人は何とかついて行くのであった。

先の入り口のような空間を抜けると、そこには実験室のような部屋があった。

広さにしておよそ２４畳と言ったところだろうか。中央には診察台と両手足用の拘束器具や、

メスやペンチと言った、何に使うのか、あるいは使ったのか、わからない器具がある。

「うわ……何あれ怖っ」

素直な気持ちを吐露する御坂に対し、流石の一方通行もそれに同意した。

「趣味悪ィことしてンだろォな……つゥか奥のパソコン、あれだけなンか表示されてンぜ？」

一方通行が見つけた、電源の入ったパソコンには、

顔のない画像―着ている服は長点上機学園の制服だろう―が表示されていた。

それを見て吃驚した９９８２号がヒィッっと小さく悲鳴を上げた。

「これって長点上機学園の制服よね？」

「あァ、間違いねェな。俺が通ってた頃はこンな感じの制服だったはずだァ」

サラッと高学歴アピールをする一方通行に御坂は突っ込みを入れる。

「は？あんた長点上機だったの？！……まぁあんたの能力なら当然よね」

「はン、俺くらいになりゃあっちが土下座して入学してくれって頼ンで来るンだよ」

「長点上機の白い悪魔め……」

こんな異空間にいるというのにどこか余裕のある二人は軽口を交わす。

レベル５が二人も居れば大抵の事は何とかなる、という自信の表れだろう。

「なんだか……気分が悪いですね……と、ミサカは若干の体調の異変を訴えます」

しかし、９９８２号はこの空間の異様な雰囲気にあてられたのか、随分と顔色が悪い。

「えっ！？大丈夫！？一方通行、最初のとこに戻ろうよ！ここ絶対おかしいわよ！！」

「そォだな……」

一方通行は御坂の意見に同意し、引き返すことにした。

## そのきゅう（前書き）

かきためがなくなっちゃった！

## そのきゅう

帰り道は、一方通行が９９８２号と御坂美琴を抱えて元の場所へ高速で走っていった。
能力がどのくらい働くのか調べるため、である。
そこで一方通行は有る事に気づく。
先の９９８２号が能力を出せなかった事を鑑みても、この霧はおそらく能力者を阻害する効果があると考えられる。
本来なら「走る」という手段をとらずともベクトル操作で「飛ぶ」事が出来るはずなのだが、
どうにも「飛ぶ」力の調整が上手くいかない。「走る」でも気を抜いたら勢い余って飛んでしまいそうだ。
それで慎重に動いても、十分速く移動できるのでそのまま戻ったのだが。

「ふう、やっと着いたわね」

「こっちに戻ってきたら、少し気分が楽になりました。
と、ミサカは人心地が付きます。」

二人も落ち着いたので、一方通行が先ほど気付いた事を言おうとした瞬間、
それを遮るように御坂が話しかけてきた。

「ねぇ、あああそこにいいいるのって、だだ、誰？」

声が上ずっているのを聞いて、これは本当に何かいるんだろうなあ、
等と他人事な風に考える一方通行は、御坂が指をさす方向に顔を向いた。

「……ンだァ？このすっとこどっこい」

そこには、クマ？のようなきぐるみを着た何かがいた。
その何かが、一方通行の暴言に対し腹を立てて言い返す。

「君らは何者クマ！？何でこんなところに居るクマか！？このひょっとこ！」

「あァ！？だァれがひょっとこだってェ！！？」

一方通行の剣幕に恐れを成したクマは、ボソボソと小さな声で弁明する。

「いやぁ……ひょっとこっていったんじゃなくてぇ……
ひょっとしてここに迷い込んだのかなぁ？って聞こうとしただけでぇ……」

その様子を御坂が眺めている。その目はゲコ太を見つけた時の目

であった。

「（可愛い……）」

「お姉さま、まさかとは思いますがあの珍妙なのがカワイイとでも？」

と、ミサカはお姉さまのセンスを固く否定します」

「えっ！？そ、そそそうよね！可愛くないよね！」

と、御坂は懸命に否定するが、９９８２号は「可愛いと思ってるんだろうなあ」と思ったがそれを口にはしなかった。

「で、お前は一体何者だ？というか何物だ？」

字にしないとわからないような暴言を吐く一方通行。

もっとも、クマはその暴言には気付かなかったが。

「クマはクマクマ」

「ハァ？クマクマ言ってンじゃねェよ。知ってる事を全部吐け。

こちとらこっから出られねェってンでクマってンだよ」

クマ語が一部うつってしまったようだが、それ以上に一方通行に迫力があり、誰も突っ込みを入れられない。

クマに至ってはビビり上がって震えている。

それに見かねた御坂が助け船をだす。

「はいはい、焦ってるからってそんなにおどさないの。
この子震えてるじゃない。ねぇ、あなたはここから帰る方法しらない？」

「……知ってるクマ。というかクマはずっとここに住んでたから大抵の事は知ってるクマ！」

立場が逆転したことを察したのか少し態度が大きくなったクマ。

「ほォ、中々やるじゃねェか。だったらこっから出せよ。
こいつが体調崩してンだ」

自分を気遣ってくれている事に気付いた９９８２号は、少し嬉しくなった。
が、次の一言でその思いは淡くも崩れ去った。

「こンなとこでゲロ吐かれちゃたまったモンじゃねェからな。
さっさとこいつ寝かしつけてェンだよ」

なんだそれは、ゲロとは失礼な！
というか寝かしつけたいって何だ！！お前はお母さんか！と心の

中で突っ込みを入れつつ、
一方通行をにらみつける。下手に叫んでクマの機嫌をそこねないように、という判断だ。

「仕方ないクマねぇー……そうだ、最近誰かがココに人を放り込むから、
クマ迷惑してるクマ！なんか知らないクマ？」

「はァン？人を放り込むだァ？生憎そンな話初めて知ったぜ。
まァ良い。とりあえず俺らはそンな事は知らない。だから帰せ」

なんで一方通行はこんなに強気なのだろう、と９９８２号と御坂は疑問に思うが、
クマは良い具合にビビってるので、多分これが正解なのだろう。

「わかったクマ」

クマが了承するとともに、３人の目の前にテレビが降ってきた。

「……テレビ」

「入口もテレビってンなら、」

「出口もテレビ、ですか。と、ミサカは笑えない冗談に苦笑します」

「何をごちゃごちゃ言ってるクマ！早く帰るクマよ！こっちは忙しいクマ！」

クマは無理やり三人を押し込む。

一方通行は、「反射が……効かねェ！？」とか考えながらテレビに押し込まれて行った。

気づけば、元居た家電量販店のテレビ売り場のところで、尻もちをついていた。

どうやら帰れたらしい。

「……はぁ～戻ったぁ……って、うーわ。もうこんな時間？まあ門限には間に合うだろうけど」

「流石のお姉さまも疲労困憊の様ですね……。と、ミサカはお姉さまを労います」

いつまでもこの場にとどまっていても仕方ないので、情報を整理するためいつものレストランに向かった。

・・・

情報をまとめると以下のようになった。

・入口も出口もテレビ。

・ひょっとしたら別のテレビから入るとさっきのスタジオとは別

の場所に出るかも
危険なので確認は出来ないが。

・謎の長点上機ポスター。

・今のところ出口はあのクマに頼るしかなさそう。

・長時間あの霧の中にいると気分が悪くなる。

「あァそうだ」

霧について話が及んだ時、一方通行は思い出したかのように二人に話しかける。

「な、何？まだ何かあるの？」

さすがに疲れたのか、御坂はうんざりした顔だ。

「いや、さっきのテレビの中の霧についてなンだが……」

疲れたとはいえ興味深い話が聞けそうなので二人は身を乗り出して耳を傾けた。

「俺が能力を使って移動した時の感じで、あくまでも主観だからなンとも言えねェンだが」

と、前置きとして注釈する。

「あの霧、ひょっとしたら俺たちの能力を阻害する働きがあるのかもしれねェ。

天然のＡＩＭジャマーってとこか。まァ、厳密にＡＩＭジャマーと同じ働きをしてるかっつったらそうでもねェンだが。

表現として近いからＡＩＭジャマーと言ってるだけで……

そうだな、アンチＡＩＭミストってとこかァ？」

一方通行があの霧の中で飛ぼうとした際、調整が困難な状態にあった、というのは前述したとおりだが、

ＡＩＭジャマーというのは能力者の力を意図的に暴走させると言う効果があり、それにより能力者の力の発現を抑制すると言うものなのだが、

このアンチＡＩＭミスト―便宜上ＡＡＭ（Ａｎｔｉ　ＡＩＭ　Ｍｉｓｔ）としようか―はＡＩＭジャマーの効果だけではなく、微弱ながらもキャパシティダウンの効果も併発させるようだ。

本来のキャパシティダウンはレベル４程度の能力ならその発動を阻止できるし、レベル５でもかなりのところまで能力を抑制できるが、

ＡＡＭはレベル２か３程度までしか抑えられないようだ。それでも十分脅威なのだが。

更に、ＡＡＭは一方通行の知らない法則によって動いているらしく、一方通行が風で吹き飛ばそうとしてもそれは叶わなかった、と彼は話した。

「いつもの状態で演算出来りゃあ解析も出来そうなもンだが……」

「アンチＡＩＭミストのせいでその演算能力が阻害されてるから、」

「いつものように演算出来ないせいでアンチＡＩＭミストはどうにもできないという事ですね。と、ミサカは意見をまとめます。」

演算阻害→能力ダウン→そのせいでＡＡＭをどうにもできない→結論：演算が阻害されるのは必然

という堂々巡りな状況に陥るという寸法だ。

「やっかいなモンだぜ。最初から霧を反射するつもりで行っても、その霧自体が未知な物だから、触れて解析しなきゃなンねェンだが、触れた時点でアウト、演算が阻害されちまうからなァ。これぱっかりはどうしようもねェや」

「というか……なんでこんなに真面目にあの空間について考えてるの？」

それもそうだ。クマ曰く「こっちこられてもクマる。」という事は別に行かなくて良いのだろう。

それなら疲れを押してまで無理に議論する必要も無い。

「そンなら、今日のとこは帰るとすっかァ」

「そうですね。そろそろ疲れも限界ですし。と、ミサカは眠気をアピールします」

「あー、なら能力使って帰るかァ。おらオリジナル、こっちこいや」

「……あんたねぇ、オリジナルって呼ぶくらいなら御坂って呼びなさいよね」

一方通行自身としては呼び方などどうでもいいのだが、

この二人の前で「オイ、みさか」と呼ぶと、

「呼びましたか？とミサカは返事します」と、

「なによ？」

……という返答が帰ってきてややこしくなりそうなのでオリジナルと呼ぶ事にしていた。

下の名を呼ぶほど仲が良いわけでもねェだろ、とも考えたので。

それでもオリジナルという呼ばれ方は嫌いらしく、結局「超電磁砲」と呼ぶことにした。

御坂は「美琴さまと呼んでも良いのよ？」とか何とか言っていたが、

一方通行はその発言を鼻で笑って受け流した。

## そのきゅう（後書き）

かきためてきます。

# そのじゅう（前書き）

えごころがあれば、挿絵とかかんがえたのに。

## そのじゅう

一方通行と９９８２号は、御坂美琴と別れ、部屋に戻ってきていた。
そして部屋に入るなり一方通行が口を開く。
「なァ……明日またテレビン中、行かねェ？」
「へ？いやいやなんでわざわざ虎児の居ない虎穴に入ろうとしているんですか。
と、ミサカはあなたの無謀っぷりを批判します。
つーかお前はミサカの護衛役でしょうが」

一方通行はどうにもテレビが気になる。
クマの言う「人を放り込む」、そして「マヨナカテレビに映る人影」。
この二つに何らかの関係があるのでは、と考えているようだ。
「そもそも、さっき入ったテレビから再び中に行ったところでクマのいるテレビスタジオに出られるとは限らないじゃないですか。
と、ミサカは最悪の場合を予想して一方通行の諦めを促します」
別のテレビから入れば別の場所に出る、というだけならまだしも、同じテレビから入っても別の場所に出る、という可能性もあるから下手な真似は出来ない。と言って、９９８２号は一方通行を全力で説得する。

「はン、芳川辺りに命綱持たせてテレビの前にたたせてりゃイイだろ」

効果があるかはわからないが、適当な策を挙げる。
それほどまでにあのテレビの中が気になるのだろう。
学園都市第一位の能力者は、好奇心も第一位だった。

「無駄な気がするんですけど……と、ミサカはやっぱり怖い事をアピールします」

能力を阻害する霧の中に自ら向かう事はないだろう、と９９８２号は考えるが、

「ハッ、俺を誰だと思ってやがる？お前一人くらい軽く守ってやるよ」

どこぞのウニ頭のように、無意識口説き文句を垂れる一方通行。

「……そうやって思わせぶりな発言をして何人の乙女を泣かせたのですか
と、ミサカは内心ドキドキしながら尋ねます」

しかし、９９８２号の表情を見ても一方通行は意に介さず。

「生憎と俺についていける女を見た事がねェ」

「それもそうですね。なら、ミサカのお姉さまは如何ですか？
と、ミサカは一方通行と同じレベル５の姿を想像します」

「はン、あンなンじゃまだ足りねェなァ」

何が足りないのかは想像にお任せしよう。

「……大きい方が良いのですか？と、ミサカは自分の体を見てうなだれます」

「大は小を兼ねるって言うだろ、違うか？」

「なっ！それはすべての小さい方々への冒涜です！
小さい方々は……そう、大きいのと違って密度があるんです！
敷き詰まってますよ！！夢が！と、ミサカは必死アピールします」

なぜここまで９９８２号は必死になってアピールしているのだろうか。
それは当の本人にもよくわかっていないようだった。

・・・

一晩ぐっすり休み体力を回復させた二人は、芳川桔梗の待つ研究所に居た。
外は霧がかっていた為、二人の髪は若干湿っていた。
髪の毛を拭きながら、二人は昨日の出来事を説明する。それを聞いた芳川は、

「ずるいじゃない、私に黙って勝手にイクなんて」

軽く拗ねていた。

「なンかイントネーションおかしいぞお前」

「それで、結局どうするのですか?と、ミサカは正直行きたくねぇと内心を吐露します」

「なら、一方通行と私の二人で行く?テレビ、今日届くんだけれど」

「あァー、それでもイインだけどよォ、
昨日入ったテレビ以外のテレビから入ると、昨日の場所とは別のところに出るかもしれねェンだ
それの実証を行うってンなら俺はかまわねェが」

「私からしたらあなた達のいうテレビスタジオだろうと別の何かだろうと、
謎空間には変わりないわ。テレビが着き次第入りましょう」

やはり研究者だからだろうか、芳川は、気になることは徹底的に追及する、そんな人間だった。
では、具体的にはどうするのか。めんどくせェから命綱持たせとけばイイだろ、と一方通行は提案しているが、
それだけではいささか不安が残る。

「そう言えば携帯は圏外だった？」

「そういや確認し忘れてたわ、だからわかンねェ」

「無駄だとは思うけど、無線でも持って行く？何となくこっちとあっちじゃつながらないとは思うけど、
仮にその空間内だけでも無線が使えるなら、もし離ればなれになった時使えるかもしれないし」

「はァン、気休めにはなるだろうなァ」

着々とテレビ突入計画をまとめていく。
すると芳川の携帯に連絡が入った。

「なんですって？……まあ仕方ないわ、それでお願い」

芳川は残念そうな表情で携帯を切った。
その表情を見て一方通行は尋ねる。

「どォした?」

「……テレビ、持ってきてくれるの明日になるみたい」

「……チッ、仕方ねェな……かといって外に無線だ命綱だと持っていくのは目立つしなァ。
テレビの中行くのは明日にしよォか」

完全に仲間外れにされている９９８２号は、いじけて芳川のパソコンをいじっていた。
すると、メールボックスに一通のメールが届いたのを確認する。

「メールが届いてますよ。と、ミサカは芳川に報告します」

「あら、ありがとう。……これは……!?」

メールを開いた芳川はその内容に驚愕する。

１９０９０号、失踪。

・・・

どうやって、とかどうして、とか考えるが、一つだけわかっている事がある。

１９０９０号は、おそらくテレビの中にいる、ということだ。

それを確信へと至らせたのは、失踪の報告が上がった日の夜、マヨナカテレビに御坂の姿が映ったからだ。

はっきりと映ったわけじゃないが、あの影の形を見ると、十中八九そうなのだろう。

そして、おそらくこれは御坂美琴ではなく１９０９０号なのだろう、と予測した。

と、ここで一方通行の携帯が鳴る。……御坂からだ。

『ねぇ……今の、見た？』

『……あァ。見たぜ』

『あれって……』

御坂は言い淀む。

なぜならテレビに映ったミサカの姿は酷く苦しんでいる様子だったからだ。

『……明日またテレビの中に行く。……来るか？』

御坂は迷わず了承した。

御坂との通話が終わるのを確認して、９９８２号は一方通行に話しかける。

「私も行きます。と、ミサカは確固たる決意を表明します」

「あァ？あれだけ嫌がってたじゃねェか。無理すンな」

「お気づかい感謝します。でも、ミサカもいかなくちゃならないんです。

と、ミサカは自分の妹たる１９０９０号を心配します」

姉が妹を助けるのは当然だから。と、９９８２号は付け加える。

「チッ……どォなってもしらねェからな」

と、一方通行は冷淡に返し、そっぽ向いた。

つっけんどんな口調とは裏腹に、一方通行の表情は穏やかだった。

そっぽ向いたのは、それを見られるのが恥ずかしかったためだろう。

「良い雰囲気を作ってるけど……この分だと私は留守番かしらね。

足手まといにはなりたくないし」

出番が減った、と心底残念そうな口調で一人つぶやく。

そして、優しくなったわね、と付け加えてつぶやき、小さく微笑んでいた。

・・・

次の日、一方通行と９９８２号の二人と合流した御坂美琴は、昨日のマヨナカテレビについて尋ねた。

「あんたはやっぱりマヨナカテレビとテレビの中が何か関係有るって考えてるのね？」

「あァ。おそらく……いや、十中八九関係有ると見てる」

「そう。なら行きましょう、テレビの中」

あっさり信じる御坂に一方通行は首をかしげる。

「おいおい、そんな簡単に信じちまってイイのかァ？俺が嘘ついてるかもしれねェンだぞ？」

すると御坂は何を馬鹿な事を、と言いたげな表情で返答した。

「そこまで付き合い長くはないけど、信頼はしてるから」

続いて、御坂はニヤッと笑い、

「裏切ったら、怖いわよ？」

「おーおー怖ェ怖ェ」

これはマジで絶対能力者実験についてばれたら殺されるな、と一方通行は考える。

だが、信頼してくれている彼女に、いつまでも嘘をついていていいのだろうか。

おそらく、このまま御坂と事件を追って深いところまで行きつけば、きっと彼女は真実を知ることになるはずだ。

真実を知った時、彼女はどう思うだろう。

悲しみに暮れるだろうか。怒りで自分に立ち向かってくるだろうか。

自分の事はどうでもいい。ただ目の前に居る御坂にまで辛い思いはしてほしくない。

御坂が自分を殺すと言うなら喜んで受け入れよう。

御坂が一生苦しんで生きろと言うなら、一生苦しみにあえいで生きてやろう。

だがそれは、９９８２号や残りの妹達が普通に生きる事が出来るようになるまでは出来ない。

今自分が死ねば、妹達は必要なくなる。もしくは第二位辺りに研

究が引き継がれるだろう。
そうなったとき、御坂と妹達が、学園都市の闇に飲まれるという最悪の結果に終わるだけだ。
一方通行には、それだけが許容できない。光の住民が、闇に侵される事だけは許してはならないのだ。

――全て話そう。判断は御坂自身に委ねよう。

全て話して、自分を殺すと言うのであれば、無様に命乞いをして、殺すのを先延ばしにしてもらおう。
どんなに罵倒されても、足蹴にされてつばを吐きかけられても、どんなに無様で惨めな末路を送る事になっても、

必ず守ると誓ったこの心だけは、信じてもらいたい。

・・・

芳川桔梗の私宅に、一方通行と９９８２号、御坂美琴の３人は居た。
御坂も来る、という事で急遽研究所からテレビを移したのだ。

「それじゃあ、３人とも準備はいい？」

無線と命綱の準備も万端だ。
テレビの中では能力が使えない９９８２号は鋼鉄破り（メタルイーター）を手にしている。
レベル５二人に戦闘訓練を受けて武装している一人を加えたこの３人なら、大抵の事は何とかなるだろう。
３人は、芳川の問いに無言で肯定した。

「それじゃ、行くぜェ」

一方通行は反射を切り、９９８２号と御坂の手を握る。
３人は、再びテレビの中、地獄の一丁目に足を踏み入れた。

・・・

前回は驚いて気絶してしまったが、今回は３人とも綺麗に着地した。
辺りを見渡すと、前回見たテレビの中とは全く違った風景だった。

「どうみてもテレビスタジオではないですね。
と、ミサカは周りを見て素直な感想を述べます」

目の前には空き地が広がっている。荒地と言うほどは荒れておらず、
それなりに小奇麗な地面に数本、こぢんまりと枯れ木が立ってお

り、それが異様な雰囲気を醸し出している。

「無線は……おっ、一応使えそォだな。……芳川には繋がンねェけど」

「どうにも変な所に出てきちゃったわね……
ってか……命綱、千切れてない？」

「「あっ」」

御坂美琴の突っ込みによって命綱が千切れているのに気付き、２人は思わず声をあげてしまう。

「ま、まあ、終わった事は仕方ありませんし。と、ミサカはまずは昨日のクマを探す事を推奨します」

一方通行と御坂に異論はなかった。

・・・

一方その頃、芳川桔梗は。

「あれ、命綱千切れてない？」

「無線も……駄目ね」

「……本格的に、出番無しなのね」

出番の少なさを嘆いていた。

## そのじゅう（後書き）

えごころがあれば、さしえで状況説明できたのに。
……絵がかけねェから文にしてるンだけどな。
その文すら上手でもねェし

## そのじゅういち（前書き）

やつが……来る……月曜が……来るッッ！！！

## そのじゅういち

3人はこの空間の異様な雰囲気を感じ取り、辺りを警戒している。
すると、一方通行があるものを発見し、拾った。

「これは……」

軍用ゴーグル。妹達の能力補助として支給されている電磁波を視認するための道具だ。
これがここに落ちていると言う事は、

「……（１９０９０号がここに居た可能性が大きいな……）」

１９０９０号の所在。それの可能性を一方通行は握りしめ、赤と黒に染まった空を仰いだ。
と、そこに聞き覚えのある声が響き渡る。

「あー！君たち何をしてるクマかー！？」

クマである。

「あァン？調べ物だよ、調べ物。丁度イイ、お前ここに人を放り込

む奴がいるとか言ってたな？」

「そ、そうクマね……あぁ！！わかった！君たちが犯人クマね！！
こうやってこの場に自分の意志で居る人間は初めてクマ！つまり君たちが一番怪しいクマ！！」

とんでもない言いがかりである。
この言い分にクマがちょっと好きな御坂美琴も流石に反論する。

「ちょ、ちょ、ちょっとそれどういうことよ！！」

反論するが、一方通行がそれを制した。御坂も言いたいことはあったのだろうが、渋々引き下がった。

「まァ待て。こっちも色々あって困ってンだよ。
その困りごとを解決すると、お前の悩み事も解決出来るかもしンねェ。
だから協力しろ」

「どういう事クマ？君たちが犯人じゃないクマ？」

「あァ。俺らもその犯人とやらにゃ苦労させられてンだ。
雨の日の夜にこいつらと似た顔の人間がテレビに出ててよォ。
それがこの空間となンか関係あるンじゃねェか、って考えてンだ」

「むむむ……テレビ、クマ？クマは知らないクマよ？」

「しらねェならしらねェでかまわねェよ。お前、ここに住んでンだろ？
教えろ、ここがなンなのか」

「ここが何かって言われても……ここはここ。別に名前なんてないし、何かの為の場所でも無い。
ただここにあるだけクマ。そういう場所だから、勝手に人を放り込んできて場を荒されるのは勘弁してほしいんだクマ。
おかげで最近騒がしくてかなわんクマー」

「で、最近ここに放り込まれた奴はいねェか？」

「いるクマよ、でも気配でしか確認してないから、どんな人かは知らないクマよ。知ってる人クマ？」

「あァ、こいつらみたいな顔した奴だァ」

「ふんふん、この子たちみたいな子クマね……わかったクマ！
クマに着いてくるクマよ！」

それを聞いた御坂は驚きの声をあげる。

「えっ、ひょっとして久々葉以外にも私の妹いるの？初耳なんだけど」

真実の断片を漏らした一方通行に、９９８２号は思わず尋ねる。

「……よろしいのですか、一方通行？と、ミサカは質問します」

「あァ、かまわねェ。いずれ知っちまう事だろォしな……
それに、俺は自分がどうなっても良いと言う覚悟も出来てる」

「ふーん……一方通行がそこまでいうなら、私は知っておくべき事なんだろうけど……
そうね、ここから出た時にしましょう。そしたら全部教えてね」

御坂は二人に笑顔を向ける。
その笑顔には、二人に対する疑いの欠片も見られない。本当に信頼している証だ。
しかし、一方通行にはその笑顔がまぶしく、その真っすぐな目を見つめ返す事はできなかった。

・・・

＜異様な研究所＞

「ここクマね」

「どっかの研究所みてェだな」

それは近未来的な建造物だった。
広さは目算でおよそ１００平方メートル、と言ったところだろうか。
階層は3階、ひょっとしたら地下があるかもしれないが。

「不気味ですね……と、ミサカはなんだか夜の校舎チックな不気味さを放つ目の前の建物に恐怖を覚えます」

夜の建物というのはどうにもそれっぽい雰囲気を醸し出すから困る。

一方通行が先日話したちょっとしたホラー（？）話に本気でビビっていた９９８２号は、やはり目の前の雰囲気ある建物にもビビっていた。

「それで、君たちは大丈夫クマ？昨日霧が晴れたばっかりだから、シャドウもまだ暴れてるかもしれないクマ」

「あァ？シャドウだァ？ンだそりゃ」

「シャドウはシャドウクマ。ここの霧が晴れた日が一番危ないクマよ。

あ、こっちで霧が晴れた日は、そっちで霧が出てる日クマー」

「ここの霧が晴れる日に、あっちでは霧が出る……ですって？」

一方通行は考える。確か９９８１号が死体で上がった日も、霧が出てなかっただろうか。

１９０９０号が失踪した、という報告が上がった昨日も霧が出ていた。

こっちで霧が晴れるとシャドウとやらが暴れる。
あっちで霧がかかると死体が上がる。

この仮説が正しかったら、１９０９０号は……

ここで考えを打ちきった。最悪の場合を想定して動くべきだろうが、何も常にネガティブに考える必要もあるまい。
何にせよ目の前の建物の中に入らねば何も分からないのだ。

「ンじゃ、ちょっくら行ってくっかァ。お前ら、準備はイイかァ？」

御坂と９９８２号は準備は万端と意気込んでいるが、それを聞いたクマは驚いた表情で一方通行の方を向く。

「クマっ！？この中に入るクマか！？シャドウもいっぱいいるだろうし、危ないクマよ？」

「当たり前だろォが。虎穴に入らずンば虎児を得ずって言うじゃねェか。
……逃げンなよ？お前にゃナビゲートっつゥ重要な使命があるからなァ」

と、脅しをかける。クマは一方通行の凶悪な笑みに震え上がった。
その様子を見た一方通行はこの分なら逃げださないだろ、と考えクマに無線を渡す。
あらかじめ余分に持ってきていたのだ。

「……仕方ないクマね……でも、本当に危なくなったら逃げるクマよ」

クマは渋々ナビゲートすることを受け入れた。
流石の一方通行も少し申し訳ないと思ったのか、余り無茶はさせないようにしようと考えた。

「あ、忘れてたクマ」

クマは3人に眼鏡を渡す。

「何これ眼鏡じゃん。なんで？」

「これをかけると、周りの霧が晴れたように見えるクマ！」

それを聞いた3人は眼鏡をかけると、驚きの表情を浮かべた。

「うおっ、すっげー、霧晴れてるよ。覗き界の革命児やー！と、ミサカはグヘヘと言いつつ温泉に向かいます」

「コンな場所にある温泉なンか入りたくねェよ！てか温泉あンの？つゥかこの特殊な霧専用の眼鏡かもしれねェだろォ？湯気にゃ効果ねェンじゃねェか？」

「マジレス乙、と、ミサカは冗談がスルーされた事を憤慨します」

「温泉あるクマよ？」

「マジで？正直入りたくないけど」

「嘘クマ」

冗談を真に受けた御坂は、無言でクマをひっぱたく。

クマはポテン、と変な効果音を立てつつ倒れた。……起き上がれなくなっている。

「起こすクマー！助けてクマー！」

「こ、コイツ……」

「滅茶苦茶弱いんですね……と、ミサカはクマに戦力外通告いたします」

「な、なんか……ゴメン」

クマの戦闘力の低さに驚いていると、研究所の入り口から不穏な雰囲気を感じた。

４人は入口の方をふりむくと、そこには。

「うわっ！な、なによ……これ……？」

「……仮面、かァ？」

「なんですか、こいつ。と、ミサカは仮面にヘドロが着いたような目の前の何かを指差します」

「こ、これがシャドウクマ……クマはこの通り、弱いから後ろの方に居るクマね！」

クマは短い脚の割に素早く一方通行の影に隠れた

「あァ、もとより期待してねェよ……」

すると、突然シャドウが宙に浮かび、ドロドロした体は黒とピンクの縞模様がついた直径１ｍ程の球体に変化した。
その球体に対して大きな口がついており、その口からは長い舌が垂れている。

「失言のアブルリーって奴クマ！さっさと倒すクマ！」

「チッ……どォ言うモンかわからねェ以上、接近するのは危険だな……」

「では、私の出番ですね。と、ミサカは鋼鉄破りを構えます」

９９８２号が射撃を開始する前に、御坂が電撃を放つ。

「うわぁ……き、気持ち悪！」

どうやら相当気色悪かったらしく、思わず能力を発動させたようだ。

「おお！どうやって電撃を出したクマ！？でも、どうやら電撃が弱点みたいクマね！」

弱点をついたのが功を奏したのか、失言のアブルリーは一瞬で消え去った。

「き、消えた……？はあ、見かけ倒しじゃないの」

御坂の電撃を前にあっさり消滅したシャドウを見て、御坂は軽くため息をつく。

「すごいクマ！あっさり倒すなんて見直したクマよ！」

「そ、そう……？というか、あんたシャドウって奴の弱点はわからないの？」

クマにおだてられて御坂は少し顔をほころばせるが、シャドウはあれだけではないだろう。

何か知らないかクマに聞く物の、

「う……残念だけど、クマは弱いから、弱点なんて知ってても意味ないクマ……」

「つまり、しらねェってことか……」

「で、でも君たちがああやって攻撃して弱点を調べてくれたらちゃんと覚えるクマよ！」

「あァそうかい、期待しねェけど任せたぜ」

「頑張るクマ！」

「畜生、ミサカの出番が奪われました。と、ミサカは最近影が薄いのでここでアピールしたかった事をお姉さまにジト目で訴えます」

「う……ごめんごめん。でも次があるじゃない、次が！」

御坂は９９８２号を励ますものの、正直あんなのが次々と出てくるとは考えたくなかった。

「よし、今度こそ行きますかァ」

御坂と９９８２号はそれに同意し、３人は、研究所の中に入って行った。

「……大丈夫かな……クマ心配クマ」

## そのじゅういち（後書き）

げつようなんてこわくないもん

## そのじゅうに（前書き）

とくにない

## そのじゅうに

研究所の中に入り、一方通行はある確信を得る。確信の裏付けをするために、一方通行はクマに無線を飛ばした。

『おいクマ、聞こえるかァ？』

『聞こえるクマよ、どうしたクマ？』

『なァンであっちの世界に実在する建物がこっちにあるンですかァ？』

『そうクマ、最近おかしな場所が出現しだしたクマ！
ここもそれの一つクマ！』

『つまり、誰かが放り込まれるたびにおかしな場所が現れるってことかァ？』

『多分、そう言う事クマね。すごく騒がしくて迷惑してるクマ』

ああそうかい、それは御愁傷さまァ、と言って一方通行は無線を切る。

「ここってあっちの世界にもある建物なの？」

何ここ、と御坂美琴は一方通行に尋ねた。御坂にとってもなじみ

の深い場所であるはずだが。

「あァ……外に居た時は確証はなかったンだが……中を見て確信した……
お前も知ってるはずだぜェ……『樋口製薬・第七薬学研究センター』を」

御坂はアッ、と声をあげた。幼少時代に一度その場所に来ていたのだが、
一方通行の言葉でそれを思い出した。

「な、何だってそんなのがここにあるのよ……」

当然、御坂美琴は疑問に感じる。

「わからねェ……わからねェが、クマが言うには誰かが放り込まれるたびにこンな場所が出来るらしい」

「つまり、放り込まれた人に関係のある場所がこちらにも出現する、ということでしょうか。
と、ミサカは推理します」

「かもしれねェな……何にせよ情報が足りねェ。
……ついてこい。この場所の内部構造は大体把握してる」

何か調べるあてがあるのだろう。一方通行は真っすぐ歩いて行く。
二人は一方通行の意図はわからないものの、とりあえずついて行

った。

・・・

道中は特に問題はなかった。
出現するシャドウも最初に戦った失言のアブルリーのみで、むしろ電撃以外の弱点が無いか探す余裕すらあった。
そして3人はある一室にたどり着いた。一見ただの薬品室に見える。

「ねぇ、ここがどうしたの？」

当然の疑問を抱き、御坂美琴は一方通行に尋ねる。

「……」

しかし、一方通行の表情は暗い。何か思いつめた様子だ。
御坂は首をかしげていると、一方通行が何か意を決したのか、口を開いた。

「……こっから帰ったら、って話。ありゃなしだ。」

「え？」

御坂はきょとんとしている。

「今から、真実を教えてやる」

一方通行は薬品の置かれた棚の一つの前に立ち、その棚を横にずらす。

すると、そこには隠し扉があった。

「ついてこい」

その表情は硬く、何かを覚悟したかのようであり、それでいて悲しげな雰囲気をまとっている。

一方通行の有無を言わさぬ様子に、二人は無言でついていった。

・・・

「ここは……」

最初にテレビの中に入った時に見た実験室。

それよりも数倍広い実験所がそこにあった。

「……」

一方通行はパソコンに電源が入るかを確認し、舌打ちをする。

「使えねェ、か……まァ仕方ねェな」

続いて何やら棚から書類をあさっている。何かあるのだろう。
邪魔をしてはならないと感じた御坂は、９９８２号に声をかける。

「久々葉も、一方通行が隠してる事知ってるの？」

「……知っています。と、ミサカは肯定します。
が、それは一方通行の口から聞いてください。と、ミサカは自分が話すべきではないと考え、口を閉ざします」

「そう……ならいいわ」

御坂はそれ以上尋ねること無く、一方通行の作業を眺めた。
しかし、一方通行の作業は何処からともなく聞こえてきた声によって、中断された。

《量産型能力者（レディオノイズ）計画の件、聞いたか》

《あぁ。樹形図の設計者の計算によって、無駄だってことがわかったらしいな》

《このクローンどうするんだろうな》

《何か別の計画に使うらしいぜ》

「……！？」

一方通行は突然聞こえてきた声に辺りを見渡すが、声の主はどこにも見られない。

「何……これ……？」

「……」

御坂もまた声を聞いて周りに誰かいないか探るか、やはり誰も見つからないため、狼狽する。

９９８２号はただただ唖然としていた。

《マジかよ……一体くれねーかなぁ。見た目はあの『超電磁砲』で滅茶苦茶かわいいじゃん》

《やめろよ、趣味わりーな》

《だってよぉ、あいつら、単価１８万だろ？買えるんなら、そりゃお買い得だっつーの》

《人形何かにそんな金かけんなよ、たまってんなら適当に見繕ってやろうか？》

《お、いいねぇ！お前センスいいもんなぁ！》

《はっ、誰にも必要とされない『チャイルドエラー』もこうやっ

てお前に必要とされるなら本望だろうよ》

《はっはぁ！ちげえねえや！》

「や、やめて……止めてよ！！」

御坂は耳をふさぎ、その場にしゃがみ込む。

『おいクマァ！』

思わず一方通行は怒鳴りながら無線を飛ばした。

『どうしたクマ！？』

『誰も居ねェのに、俺らじゃねェ誰かがずっと話してンだけどよオ、こりゃなンだァ！？』

『クマ……この空間は、ここに居る者にとっての現実クマ。だから、放り込まれた誰かにとっての現実が、３人に聞こえているのかもしれないクマ』

放り込まれた誰かにとっての現実。つまり、これが１９０９０号にとっての現実なのだろうか……

「こんなの……こんなのってないよ！ひどいよお！！」

御坂は学園都市の暗部を垣間見た。そして、泣く。自分が安易にＤＮＡを明け渡したことでこんなことになってしまったのだと気づいて。

一方通行に、その涙を止める手段は……なかった。

誰かの会話が終わったと思えば、今度はまた別の声が聞こえてくる。

《ｉｎｄｅｅｄ、この子たちは作られた存在かもしれない。ｂｕｔ、この子たちはこうやって生きている！それなら感情が芽生えないわけが無いわ！！》

《……あなたが何をしたいかは超わかりますが、こちらも超仕事なんです。諦めて下さい》

《……やはり、駄目みたいね。ｈｏｗｅｖｅｒ、私は……あきらめない》

《……今度は超バレない様に動いてください。無理でしょうけど》

「ねぇ……これは一体、誰の現実なの？ねぇ、教えてよ！一方通行！！真実を！！」

御坂は狂ったように声をあげる。

一方通行が教えようとした事が、まさかこんな形で。

しかもついでに暗部のクソっぷりまで教えられるとは思いもよらなかった。

《ずっと、言えませんでした。と、ミサカは心中を吐露します》

「……私じゃないですよ、と、ミサカは一応弁明します」

「……わかってるっつゥの」

《ミサカたちを、家畜以下の扱いをする研究者たち。
このような生き方を当たり前のものと、理解はしていましたが、
納得はしていませんでした。と、ミサカは衝撃的事実を告げます》

静かに、声は続ける。

《どうして、ミサカはオリジナルでは無いのでしょう。
どうして、ミサカは作り物の存在なのでしょう。
どうして、ミサカは何度も殺されて行くのでしょう》

徐々に、語気が荒くなる。

《許せなかった。ミサカを生んだ研究者も、同じく被害者とはいえミサカ達を何度も殺した一方通行も。》

その言葉に、御坂は息をのむ。

《……何が「絶対能力者」だ！２万もの犠牲の上で成り立つモノに何の価値があるんですか！！

ミサカは……！もっと！生きたかった！！いろんな事を知りたかった！！いろんな事に触れたかった！！》

叫ぶ。まるで今までの鬱憤を晴らすかのように。

もう２度と、心の内を明かす事が無いから、と言わんばかりに全てをさらけ出す。

《……皆、死ねばいい。皆皆、ミサカと同じように、無様に、惨めに、あっけなく死んでいけばいい！！研究者も、一方通行も、オリジナルも、そして、ミサカ達も！！》

言いたい事は言った、と言わんばかりに、辺りは平静を取り戻した。

誰の声か大体見当はついていたが、信じたくないとばかりに一方通行は９９８２号に確認を取る。

「今のは……」

「……おそらく、１９０９０号でしょう。と、ミサカは予想します」

１９０９０号。今だ姿を見せないが、おそらく……

「……あ、はは……何、コレ……」

御坂は何が何だかわからない、といった表情で続ける。

「う、嘘よ！こんなの絶対に、嘘！！こんなことあるわけないでしょ！！」

頭を抱えながら、全てに絶望したかのような声で、叫ぶ。

「悲しいね……辛いわよね……私」

３人は、一斉に声のした方へ振り向く。そこには、御坂が二人居た。

「あっはっは！チョーウケる！信じてた人たちに裏切られた気分はどうですかー？」

「実験の真実、全部教えてあげようか？と、ミサカは哀れなオリジナルを眺めながらほくそ笑みます」

そこには御坂美琴、９９８２号の姿をした人間がいた。

「「「なっ！！？」」」

３人は思わず驚愕の声を上げる。御坂は目の前の現象を信じられずに、叫ぶように尋ねた。

「ど、どういうことよ？！」

御坂の声を聞いて９９８２号の姿をした人物は淡々と事実を述べる。

「どーしたもこーしたもねーよ。なんのこっちゃない、ただ単にオリジナルは利用されて、
そうして生まれたクローン２万体をぶち殺すことでレベル６に昇格するとかいうわけわからない実験をしていた、
ただそれだけの事ですよ。と、ミサカは事実をカンタンにまとめます。
あ、ちなみに９９８０体のミサカが今のとこぶっ殺されてますよ」

続いて御坂の姿をした人物は御坂のことを嘲笑する。

「ウケるよねー！レベル１からレベル５に上がるのにどれだけ苦労したと思ってるんだろうね？
頭に電極ブッさして、血便でるほど妙な薬をぶち込んで、文字通り血反吐吐くほど訓練重ねて、
そうやって完成されたレベル５が、こんな形で利用されるなんてねー！！
いや、もうそれだけでちょっとした鬱ＳＳ書けるっつーの！ぎゃは！」

突然の来訪者に、３人は狼狽した。

「だ、誰よあんたら……わ、私はそんなこと思ってない！！」

「あはは、カッコつけるねー！でも、いつまでカッコつけてるのかなー！？
いい加減うざいんでしょ！？くっだらない授業に、くっだらない実験。
望んでもねーのにお嬢様ぶるのを強要して来る教師！
くだらないメンツの為にいやしい顔して近付く豚共！！
挙句の果てに、クローン２万体！？あっはっは、気持ち悪！！
もうさ、そいつらの事、うざいならうざいってはっきり言っちゃいなよ！」

「な、何言ってるの……違う、私は、そんなこと……」

「さっきから沈黙を貫いてるそこのあんたはどう思ってる？
家畜にも劣る実験材料として生きていく事についてさあ。
と、ミサカはそこの人形に声をかけます」

「み、ミサカは……今は、とても楽しいです。一方通行と、お姉さまと過ごせてとてもうれしいです。と、ミサカは正直に思っている事を話します」

「それは嘘だね。正直に言いなよ。普通の学生生活を送ってるオリジナルも、
１万人近くの姉妹を殺しておいてのうのうと生きてる一方通行も、
全部許せないってさぁ。と、ミサカは本当の事を認めるよう促し

ます」

「違います、そんなこと、思ってません！と、ミサカは声を荒げ強く否定します！」

「あんたは、ただ誰かに認められたいだけなんでしょ！
認められたいから、糞みたいな実験受けて、
認められたいから、レベル5までのぼりつめて、
認められたいから、つまらない授業を律義に受けて、
認められたいから、学校では八方美人貫いて、
認められたいから、利用されてＤＮＡマップなんて持っていかれる！
……1人は寂しいよねぇ？皆に囲まれていたいよねぇ？」

「あなたは、ただ死にたくないだけだよね。と、ミサカはミサカの心を暴露します。
死にたくないから、一方通行の金魚の糞で、
死にたくないから、研究者に媚びへつらい、
死にたくないから、こんな場所に来るのに否定的、
死にたくないから、実験延期のお知らせに小躍りする。
……死ぬのは怖いよねぇ？実験なんてつぶれて消えればいいのにねぇ？
と、ミサカはあなたの願望を代弁します」

「「１９０９０号が居なくなって心配だからここに来たって？
あはは、違うでしょ（よね）！そんなわけないじゃん（ですよ）！本当は……」」

「「やめて（ください）！！！」」

「「何焦ってるの（ですか）？本当の事でしょ？あなたの事なら何でもわかるよ！
だって私（ミサカ）は……あなたなんだ（です）から！」」

「ぎゃっは！あなたはただ単に、認められたかっただけ！」

「違う……」

「あなたはただ単に、一方通行のそばに居れば死ににくくなると思っただけ！」

「違います……」

「ここへ来た理由なんて簡単だよ！力を示して、学園都市第一位に認められたかっただけ！」

「止めて……」

「ここに来たら体調を崩しやすくなるのに、わざわざついてきたのは、守ってもらうためだけでしょ？」

「止めてください……」

「「あわよくば１９０９０号を助けて、ヒーローにでもなるつもりだった？」」

「「違う！！」」

「だとしたらチョーウケるんですけど！そんなのなれるわけないでしょ！
あなたは2万もの人形を作るのに手を貸し、その事実を知らずに今までのうのうと生きてきたんだから！」

「……違う！！あんたら、誰！？一体誰なのよ！！？」

「あっはっはぁ！言ったでしょ？」

「ミサカは、あなた……あなたの、「影」……」

「「あなたのことは、全部お見通し（です）！！」」

「……ふざけないで。私は、知らない！あんたなんか、知らない！！」

「ミサカも、あなたの事など知りません。と、ミサカはミサカの偽物を糾弾します！！」

「あんたなんか……」

「あなたなんか……」

「「私（ミサカ）じゃない！！！」」

「はっはあ！言ったね！よくぞ言ってくれた！あんたは私じゃない！ザッツライトその通り！」

「もう、ミサカは、あなたなんかじゃないよ。と、ミサカはそこのウソツキを見下します」

「二人」による存在否定の言葉により、
この瞬間から、「二人」は完全な個となった。

完全な個となった二人の体は、異形へと変化していく。
その変化の中で、否定した二人は気絶していった。

## そのじゅうに（後書き）

御坂Ａが美琴の影
御坂Ｂが９９８２号の影。

次回ようやく一方さんがが。

## そのじゅうさん　ようやくペルソナでますよ（前書き）

やっとペルソナァァ！です

**そのじゅうさん　ようやくペルソナですよ**

事を完全に静観していた一方通行は、

「……ンだァ、こりゃァ……」

目の前の変化についていけていなかった。
事情を説明しようとしたら、口調のおかしな御坂二人に横やりを入れられ、かと思ったらその二人は異形になり果てた。

「『影』っつってたなァ、こいつら」

影、つまり……シャドウ。
シャドウとは、人間の心そのもの、ということだろうか。ならば影の言い分は、全部二人が心に秘めていた思いそのものだというのだろうか。

などと思考を重ねていたら、頭の中にあの時の「声」が響いた。

「……　我は汝　汝は我　双眸見開きて汝、今こそ発せよ！」

あの時は頭が痛かっただけだが、今は確かな「力」を感じる。
右手を見ると、タロットカードがある。裏面はイゴールが占いに使ったタロットカードと同じものだ。
表を開くと、そこには何も載っていなかった。しかし開くとすぐさまカードが青白く発光する。

一方通行は光るカードをみて、ニヤリと笑った。

――――これは「力」だ。

超能力とは違う、目の前に居る「影」と戦うためだけの。
そして言葉にする。「力」を発するための「合言葉」。

「ペ、ル、ソ、ナァ……！」

「オォオォアアァアァアァアァ！！！！」

一方通行は、己を奮起するために叫んだ。

青白い光と叫びと共に、一方通行の影からナニかが現れる。

「シナツヒコォ！！」

――――志那都比古神（シナツヒコ）。「神生み」において、イザナギとイザナミの間に生まれた風神。いっぽうさんが、かぜをつかうし、ちょうどいいかなっておもったとか、そんなんじゃねーから！

条件は整った。後は目の前の二体の怪物を倒すだけだ。

二対の影は、互いに手を取り合い、歌うように言う。

「「我は影…真なる我…」」

「認めてもらえないなら、ぶっとばす！」

「殺されたくないから、殺します！」

そう宣言すると、二対の体から炎が噴き出してきた。

「ハァ？ンだそりゃ、てっきり電気使う奴らかと思ったのによォ」

電撃使いが炎使うってそりゃ浮気って奴かァ？とからかうような軽い口調でたずねる一方通行。

「はっはあ！もう私はそこで寝てる奴とは違うんだよ！たとえ元が同じだったからって、同じ力のままとは限らないっつーの！」

御坂の影は高らかに笑いながら力を説明する。

「ご丁寧な説明アリガトウ。ンじゃとっととくたばりやがれェ！！」

一方通行は疾風属性のスキル「ガル」を唱えた。

シナツヒコによってつくられた一陣の風は、一方通行の能力によって増幅され、

御坂と９９８２号の影へと向かう。

「クハッ……！へぇ、結構やるじゃない……んじゃ、こっちも本気だから！！」

「行きます、覚悟はいいかな？と、ミサカは見敵必殺の心構えで迎えます。

まあ、敵は目の前に１人なんですけどね」

そんな二対の影からの言葉を無視して、一方通行は考える。

「……！？（無意識のうちに風を操作したが……はン、どォやら新

たな「力」の発現によってクリアランスを新たに取得。
自分だけの現実を再設定してコイツの風を操作できるようになったってとこかァ？
なンにせよ、好都合だ。霧の方は操れっかなァ？）」

一方通行は力の拡大を確信し、内心高笑いしながら（何だかんだ言って強い力は嬉しいようだ）眼鏡をはずして霧の操作を試みる。

「チッ、霧は使えねェか……だがまあ、霧を操作できるかもしれないって事実を知れただけ上出来だァ」

一瞬だけ、意識を完全に霧だけに向けていた。その隙を９９８２号の影が突く。

「よそ見なんかしないで、こっち見てよね。と、ミサカは存在をアピールしながらドーン」

ドーン、などと、間抜けそうな効果音を言いながらする攻撃は、実に苛烈なものだった。
９９８２号の影は両手を突き出すと、腕のいたるところから重火器が生み出され、
重火器からは火を噴くように銃弾が飛び出してくる。

一方通行は反射を試みるが、

「ガァ……！！」

反射しきれずに、受け流すだけにとどまる。受け流せはしたが、衝撃を完全には抑えられなかった。
それによりひるみ、うめき声を上げた一方通行に、次なる攻撃を回避する事は出来なかった。

「はっはあ！隙みっけ！」

くたばれ、と言いつつ御坂の影はどこからともなく巨大な岩石のようなものを持ってきていた。
それを思い切り殴ると、岩石は炎をまとった隕石のようなものになり、一方通行へと向かう。
９９８２号の攻撃は、量は多かったが威力自体は弱かったので、たとえ未知な力での攻撃でも十分耐える（衝撃までは抑えられなかったが）事が出来た。
しかし、この隕石は。

「～～！！（デカすぎだろォが！！）」

直径５ｍ程だろうか、中々に大きなその塊は、地面をとかすほどの熱量を帯びて一方通行に向かって飛んできた。

避けられるか？即座に無理と判断して、受け止める覚悟を決めた。

岩石そのものも未知の法則にしたがっている可能性がある。そう考えると反射に頼るのは論外だ。

「舐ァめンなァァアァァアァァ！！！！」

シナツヒコを呼び出し、ガルを何度も使用する。

そして、一方通行のベクトル操作で幾重にも風を重ね、空気を圧縮する。

一方通行はその気になれば、街一つ分の風を操る事が出来る。

時間をかければ街の風を集め、圧縮することでプラズマすら作る事が出来るだろう。

しかし、敵の攻撃が向かってきている今。そんなことをしている余裕はない。

そもそもこっちの世界の風がどうなっているのかもわからない。

だが、今の一方通行には「力」がある。風の神と呼ばれるシナツヒコの力が。

演算しやすいように一定量の風を何度も何度も生成し、その都度圧縮する。

ここで風がほんの少しでも乱れたら一方通行の目論見は失敗するだろう。

それでも、一方通行はそれを成した。繊細な演算を要求されながら、時間にして1秒にも満たない時間で大量の風を一つにまとめ上げ、それによりプラズマを生成。

流石に二対の影も驚きを隠せていなかった。

「な！何その技！？ただの人間がやっていいレベルじゃねーっての！？」

「はっはァ！！ニンゲン、死ぬ気になりゃなンでも出来るってことだなァ！！」

一方通行はプラズマを隕石にぶつけた。

隕石とぶつかったことで風が乱れたため、プラズマが消滅するが、隕石も一緒に消滅した。

それの余波は強烈な突風となって表れ、実験室に置いてあった物だけでなく御坂の影をも吹き飛ばした。

風が吹き止むと、静寂が訪れる。

９９８２号の影は最初は吹き飛ばないよう踏ん張っていたが、運悪く（こちらにとっては僥倖だが）吹き飛んでいた巨大な瓦礫と正面衝突した上、

その勢いのまま瓦礫一緒に壁まで吹き飛んで、瓦礫と壁に挟まれ、力尽きていた。

一方通行はプラズマを生成するためにガルを大量に使ったが、それによって「力」が消費されたため、休まなければガルは使えないな、と感じ取った。

それだけではない。プラズマの生成にあたり、かなり無茶な演算を要求されたため、少しばかり知恵熱で頭が痛い。

出来ればもう瓦礫に埋もれてそのままきえねーかな、とか思っていたら。

「クソッ……こんな……ところで……終わってたまるかぁああ！！！」

御坂並みにしつこいな、やはり御坂から生まれた存在だからだろう。と、考え。

「はっ！！わりィーが、こっから先は一方通行だァ！」

一方通行はふらついている御坂の影に向かって飛ぶ。
そして右手の拳をふりかぶり、

「おとなしく尻尾巻きつらいて、元の居場所へ引き返しやがれェ！！！」

右ストレートを叩きこみ、御坂の影は１０m先の壁まで吹き飛ぶ。
その壁に体をめり込ませたところで、御坂の影は止まった。

と、ここに騒ぎを感じ取ったクマがやってきた。

「クマッ！？何があったクマ？！」

「あァ……？そこで伸びてる二人の……「影」と名乗る奴らに……

襲われたァ」

一方通行は肩で息をする。よほど疲れているらしい。
クマが一方通行を気遣う中、気絶していた二人が目を覚ました。

「うう……私は……」

「ここは……と、ミサカは記憶をさかのぼｒ……！？」

目を覚ました二人の前には、それぞれの『影』が立っていた。

「ッ……あんたなんか……私じゃ、ない……！」

「……この二人は、元々、君たちの中に居たモノ、クマ……
認めてあげないと、「暴走」するしかないクマ……」

「そう言われても……と、ミサカはやはり認めたくないことを主張します……」

やはり二人は認めたくないようだ。
しかし、認められないと、抑圧された「影」は再び暴走することになるだろう。
先程は運よく止められたが、本当に運が良かっただけなので、今度も無事で終われるとは限らない。

一方通行は、二人に声をかけた。

「……別に、その「影」が言ってる事がお前らの全てとはおもわねーよ。
誰だって隠したい事はある。俺だってそうだ。
だからよォ、例えお前らがどンな思いを抱えてようと、」

一息つく。そして、

「……俺はその思いを否定したりはしねェよ」

意を決したのか、御坂はポツリとつぶやく。

「……私ね、……最初からわかってたんだ。この子は私の一部だって」

御坂の言葉に相槌を打つように、９９８２号が続ける。

「ですが、自分の汚いところを、受け入れられませんでした。と、ミサカは自分の弱さを認めます」

「「……」」

影は黙って２人の告白を聞き続ける。

「あはは、難しいわね、自分と向き合うのって。でも、この子は私で、私はこの子。そうよね！一方通行！」

「あなたはミサカで、ミサカはあなた、か。全部まとめて、これがミサカという事ですね。と、ミサカはありのままの自分を受け入れます」

二人の、自分自身と向き合える強い心が、「力」へと変わる……

御坂はもう一人の自分……困難に立ち向かうための人格の鎧、ペルソナ「オオヒルメ」を手に入れた！

――大日霎尊（オオヒルメ）。アマテラスの別称。太陽の女神であり、天神の代表神の一柱。

漢字の読みはおおひるめのみこと。みことがつくからちょうどいいとおもってえらんだわけではない。

ほんとだよ。

９９８２号はもう一人の自分……困難に立ち向かうための人格の鎧、ペルソナ「ワカヒルメ」を手に入れた！

――稚日女尊（ワカヒルメ）。若い太陽の女神。アマテラス大神の分身もしくは妹的存在であると考えられている。

アマテラスのいもうとてきそんざいだからちょうどいいとおもってえらんだわけではない。

ほんとだよ。こいつらみたいな姉妹関係にある神で雷神が居なかったせいだ（探し不足かもしれないが）

余談ではあるが、二体の影のところを二対の影、と表現したのはオオヒルメとワカヒルメの相互関係からだ。
姿形は異形の一言で片づけたが、これは作者の表現力が足りないせいであるからして、読者諸君には各ペルソナやシャドウの姿形を好き勝手に想像してもらいたい。
という言い訳という名の保険。

・・・

「はぁ……それにしても疲れたわね……」

疲労困憊のところを申し訳なく思いつつも、一方通行は御坂美琴に声をかける。

「なァ、俺ｈ「言わないで」」

「実験の事とか、久々葉以外の妹達の事とか、聞きたい事は山ほどあるけど」

でもね、と続けて、御坂はとても透き通った笑顔で、こう言った。

「私はあなたを信じるわ」

流石の一方通行も驚く。

まさか御坂の思いを踏みにじった自分がそんな言葉をかけられるとは思っていなかったからだ。

「確かに、実験で何があったかはさっき久々葉の影から聞いたわ。でもね、それはただの事実、客観的な事実にすぎないの。私が聞きたいのは……あなたの主観。一方通行が何を思って、何を考えながら実験を受けたのか。正直に話してほしい。……あんたは多分、自分ひとりで罪を背負う気なんでしょうけど……」

「あんたと一緒に、その罪を背負うわ」

「ンだァそりゃァ……ふっざけんなァ！！！」

一方通行も、御坂の言葉が冗談ではない事を理解しているため、声を荒げて反論する。

「俺はあいつらを、お前の妹達を1万人近く殺してきた殺人鬼だぞォ！？そんなクソったれ以下の外道に向かって、なンつーこと言ってンだ！アァ！？」

「はっ、何言ってんのよ、確かに実行犯はあんたかもしれないけど、そんな実験計画立案した研究者が諸悪の根源だし、私が迂闊なことをしたせいでそんな事態に陥ったわけだし、所詮あんたと私は同じ穴の狢、一緒に地獄に落ちるべきなのよ」

御坂は呼吸を整え、更に口を開く。

「それに、私がＤＮＡマップ提供しなくちゃ、あんたという超能力者がいなくちゃ、
久々葉や他の妹達は生まれてこなかったじゃない。
私たちはそれだけは誇りに思うべきなのよ。
確かに、妹達を殺したということ、それは許されていいものじゃない。
だからあんたは一生かけて罪を償いなさい。私も一緒に償う」

それでいいわよね、共犯者♪と、御坂は笑った。
そこまで言われてしまっては、一方通行は何も言い返せない。

「はっ、イイ度胸だ。だったら必死こいてついてこい。
ついてこれねェなら容赦なく一般人に戻すからなァ」

「誰に向かってもの言ってんのよ！こちとら学園都市第三位よ！」

一方通行は御坂の覚悟を受け取り、ニヤッと笑うと最後に一言、

「やる事全部終わったら、教えてやるよ。なにもかも、な」

と、告げた。

このようなやりとりを、クマと９９８２号はボーっと眺めていた。

「ねぇねぇ、あれって、愛の告白って奴クマ？」

確かに、見る人が見れば勘違いしそうな言い合いではあったが。
イイ愛かどうかまではわからない。

「おのれオリジナル……！ミサカの出番どころかヒロインの座まで狙うとは……！
と、ミサカは歯ぎしりさせながら恨めしげに二人を見つめます……！」

「う、うわー、久々葉ちゃん、こ、怖いクマ……」

血走った眼で二人のやりとりを見つめる９９８２号は、さながら浮気現場を目撃した女のような、鬼の形相だった。

・・・

４人は疲れた体に鞭打って、情報を整理をしに、最初に出てきた空き地まで戻った。

「……結局１９０９０号は見つからず、かァ……」

研究所には居なかった、そして前日はあちら側で霧の日だった。
それを鑑みると、

「私たちの様に、もう一人の自分を認められずに……」

「助けてくれる人も居ないまま、一人ぼっちで……」

「多分、そうだと思うクマ……ここに居るシャドウは元々、人間から生まれたんだクマ……
そして、霧が晴れると暴走する。さっきみたいに、「意思のある強いシャドウ」を核に大きくなって宿主を殺してしまうんだクマー」

意思のあるシャドウ。すなわち心の奥の奥。
もし妹達が作られた心のない人形だったなら……シャドウは発生しなかっただろう。
皮肉にも、人間であったため己が心に殺されることとなってしまった。
それを理解した一方通行は、何とも言えない気分になる。

「……クソったれが……」

手がかりも無く、全員疲労の限界に近付いていたので、これ以上考えても無駄だと判断し、今日のところは一旦帰ることにした。

クマは、少しさみしそうにしていた。何だかんだで一人で過ごすのは寂しいらしい。

また来てくれるクマ？という質問に対し、あァ、多分なァ。とぶっきらぼうに返した。

・・・

クマのテレビから現実の世界に戻ってきた３人に芳川桔梗が声をかける。

「あら、お帰り。命綱も無線も使えないからどうしようかと思ったわ」

一方通行が、あァ、そォだな。と気のない返事をしている。
続けて芳川は報告があるわ、と言いつつ御坂美琴を見つめ、悪いけどここから先は部外者禁止、と言った視線を送る。
その様子を見た一方通行は、

「あァ、こいつも既に共犯者だ。事情は知ってる」

「あらそう。なら、このまま話すわね。……残念だけど、１９０９０号の死体があがったわ……」

やはり、と３人は思う。覚悟はしていたが、こうして事実を告げられると、
どうしてもっと早くに行ってやれなかったのか。と、口惜しそうな表情を浮かべる。

「でね、一方通行は９９８２号の護衛をそのまま続けてもらうわ。
でも、実験の方は無期限凍結」

無期限凍結、と聞いて、御坂はホッとした表情になる。
しかし、一方通行と９９８２号は納得がいっていない。

「なぜ、実験の中止がほぼ確実になっているのに、護衛はそのまま継続なのでしょう。
と、ミサカは当然の疑問を投げかけます」

「実験をやらないからと言って、妹達が狙われないとは限らないしね。
９９８２号が希望するなら、護衛は終わっても良いけど……
これから妹達の調整が行われて……妹達は、実験で殺される、というのが規定事項だったからね。
何もしなくても短命なのよ。調整ってのは寿命を延ばすための措置」

妹達の調整、と聞いてムッとする御坂だったが、延命措置と聞いて安心する。

「寿命はどのくらいのびるの？」

「そうね、少なく見積もっても２０年は余裕ね。

調整が終わったら、世界各地の学園都市の研究機関に向かう事になるわ。
実験の為でも無いのに1万人近くもの人間を養う事つもりはないみたいね。
勝手に生みだしておいて無責任極まりないけど。
あ、でもこれだけは安心して。もう妹達を悪用する事はないはずだから」

少なくとも20年。これだけあれば、更にはこれから技術も伸びるだろう、きっと普通の人間と同じように天寿を全うできるはずだ。
そう考えると、御坂は安心して涙をこぼす。

「よかった……もう、実験の為の道具なんかじゃ、ないのよね……」

「ほら、愛しの超電磁砲が泣いてるわよ。慰めなくて良いの？一方通行」

二人の会話をボーっと眺めていた一方通行は、突然の無茶ぶりに狼狽する。

「あァン！？だァれが愛しいってェ！？」

そうして芳川を怒鳴っている間も、御坂はグズッている。

「目の前に泣いてる女の子がいるのに、慰める事も出来ないの？……情けない人ね」

そこまで言われたら、慰めないわけにはいかないだろう。
一方通行は御坂の目の前に立つ。
「チッ……ほら、泣くンじゃねェよ。……泣き止ンだらゲコ太でもなンでも買ってやらァ」
ゲコ太、と聞いてピクリと反応を示すが。
「こ、子供……じゃ、ないんだからぁ……」
結局、一方通行は御坂が落ち着くまで、頭を撫で続けた。
「……なぜか、姫神。という単語が浮かびました。
と、ミサカは急速に影の薄くなりつつある事に焦りを覚えます」
９９８２号が■■■■号になる日も、そう遠くはないのかもしれない

## そのじゅうさん　ようやくペルソナですよ（後書き）

戦闘描写難しい……最初のボスってことで短いのはマジ勘弁。

御坂・９９８２号のペルソナがおかしいって意見があるかもしれない。

でもね、僕はこれしか思いつかなかったんだ。へけっ☆

ただ、雪子ちゃんのコミュマックスペルソナとかぶってるのはあれなんだよな。

もしかりにコミュイベントとかやることなったときアマテラスの上位ランク考えないといけないってことじゃんよ

## そのじゅうよん（前書き）

ちょっと上条さんが通りますよっと

## そのじゅうよん

芳川桔梗の家から出て、御坂美琴とわかれた二人は一方通行の部屋に戻るなり、疲労の限界だったのだろう、倒れるように眠りこんだ。

「ここは……」

またあの夢だ。目の前には鼻の長い爺……イゴールと、金髪の女……マーガレットだったか。とにかく、あの時の二人が居た。

「……またお前らか」

「御心配めさるな。今現実の貴方は、眠りに着いていらっしゃる」

「はっ、ンなこと心配してねェよ。一体何の用だ」

敵ではないかもしれないが、まだ信用するには早すぎる。
一方通行はそれを見定める為、ストレートに用件を聞いた。

「そうですな、前置きはさておき……」

イゴールから引き継ぎ、マーガレットが口を開く。

「ここは、何らかの形で「契約」なされた方のみが訪れる部屋……貴方は日常のなかで目覚めを促され、内なる声の導く定めを選びとった……
そして見事、「力」を覚醒なされたのです……」

一方通行からしたらよくわからない話を繰り広げる二人。
どうにもここの住人（というか二人）は比喩表現が過ぎるきらいがあるようだ。
「力」とは、おそらくペルソナの事なのだろうが。

「これをお持ちなさい」

そう言うと、何処からともなく青い鍵が出現した。
何の鍵だろうか、と考えていると、イゴールが説明をする。

「今宵からあなたは、ここ「ベルベットルーム」のお客人だ。
あなたは「力」を磨く運命にあり、必ず私共の手助けが必要となるでしょう」

随分な自信だ。ここまできっぱり言われると、そうなんだろうなと思ってしまう。

「貴方が支払うべき代価は一つ。「契約」に従い、ご自身の選択に相応の責任を持っていただく事です」

「契約」が何の事かわからない以上、はいそうですかとうなずくわけにはいかない。

しかし、「契約」は既に為されているのだろう。ここでイゴールに「契約」とは何か、と聞いたところで本当の事を話してもらえるかはわからない。

ならばとりあえず後悔しない選択をすればいいだろう。

「要領を得ねえが……俺が選んだ道は、俺で責任取れってことだな。問題ねェよ」

イゴールはその言葉に満足そうにうなずいた。

「結構。さて、貴方が手に入れられたその「ペルソナ」……

それは、貴方が貴方の外側の事物と向き合った時、表に現れ出る「人格」

様々な困難と相対するため自らを鎧う、「覚悟の仮面」……とでも申しましょうか」

やはり、ペルソナも己の心なのだろう。

シャドウも同じく己の心であるが、ペルソナとシャドウはどこで袂を分かったのか。

おそらく自身の心を「認める」か「認めない」かでペルソナとシャドウにわかれるのだろう。

そう考えると、御坂美琴と９９８２号の身に起こった出来事は納得できる。

しかし自分はどうなのだろうか。知らないうちに自分の心を認めていたと言うのだろうか……？

自分のことながら、よくわからない。そう考えながらも、イゴールの言葉には耳を傾ける。

「しかも、貴方のペルソナ能力は、「ワイルド」……。

他者とは異なる特別なものだ。からっぽにすぎないが、無限の可能性も宿る。

言わば……数字のゼロのようなもの」

数字のゼロのようなもの……

つまり、ゼロはどの数字に足しても増えも減りもしないから、何処にでも属する事が出来る、そう言うことだろうか。

と、一方通行は考えるが、やはり何の事かすらわからない。

「ペルソナ能力は「心」を御する力……「心」とは、「絆」によって満ちるもの。

他者とかかわり、絆を育み、貴方だけの「コミュニティ」を築かれるがよろしい。

「コミュニティ」の力こそが「ペルソナ能力」を伸ばしてゆくのです」

「はっ、学園都市第一位たるこの俺が有象無象の雑魚どもと仲良しこよしってかァ？

そりゃ木原の野郎も大爆笑だぜ」

口ではそういうものの、「絆」とやらを育めば、二対の影と相対した時に感じた「力」をより大きく感じる事が出来る。

一方通行は、それはとても面白そうだと思った。

「コミュニティは、単にペルソナ能力を伸ばすためだけではありません。

ひいてはそれは、お客様を真実の光で照らす輝かしい道標ともなってゆくでしょう」

「貴方に覚醒した「ワイルド」の力は、何処へ向かう事になるのか……

ご一緒に旅をしてまいりましょう……フフ」

イゴールは最後に微笑みを浮かべ、別れのあいさつを述べた。

結局、何が言いたかったのかよくわからないまま、夢から覚めた。

一方通行は、＜契約者の鍵＞を手に入れた。

・・・

いつものレストラン。
3人は一晩休み、体力を回復させてから再び集まった。
もちろん話題はテレビの中についてだ。

「シャドウは人から生まれるってことは、これからもし放り込まれたりしたら、
ほぼ確実にシャドウの餌食だろォな」

「そうですね、お姉さまや私ですら最初はあの影を受け入れられませんでしたし。
と、ミサカはあの時の恐怖を思い出し身震いします」

9982号はコーヒーカップを手に取ると、カップが震えている。
本気で怖かったらしい。

「深層心理としてああ思っていたのかもしれないけど、それがあたかも自分の思ってる事の全てみたいに言われたら、否定せざるを得ないわよね……
もしかすると、シャドウたちは宿主から切り離される為にああいってるのかもね」

霧が晴れると暴走する。
理由はわからないが、とにかく霧が晴れるとシャドウは宿主から抜け出すように行動するらしい。

「まァ何にせよ、テレビの中自体は問題ねェ。「マヨナカテレビ」っつう情報源があンだからな」

「しかし、それでは対応が後手後手に回りませんか？と、ミサカは１９０９０号の事を思い出して悔しさで顔をゆがめます」

「あァ、確かにそうだ。だけどな、一つ不可解な事がある」

「不可解なことって？」

「芳川ンとこに１９０９０号が失踪した事実が知らされたのは、俺らがテレビの中に行く前日だ」

「それが知らされたその日のマヨナカテレビに、１９０９０号と思われる人物が映ったから、我々はテレビの中に行ったのでは？と、ミサカは事実確認をします」

一方通行「あァ、まァ元々テレビン中は行く気満々だったわけなンだが、この際それはどうでもいい。

とりあえず、俺らの対応は間違いなく最速だったと、言っても良い。

だが、最速ですら間に合わなかったのは何故だ？」

何かに気づいたように御坂美琴は声をあげる。

「失踪したって事実を知らされたのが、１９０９０号が殺されたと思われるその日じゃ、対応しようが無いわよね」

一方通行「その通りだ。シャドウが暴走するのはこっちで霧の晴

れた日、という事を踏まえると、１９０９０号を助けられなかった理由は何パターンか考えられる」

と、ここで一方通行は何処から取り出したのか、紙とペンでサラサラと何かを書いていく。

・１９０９０号がテレビの中に行った（偶発的か人為的かは不明だが）のが運悪くテレビの中で霧が晴れるその日だった。

・１９０９０号が失踪した日はそもそももっと前だった（人為的な情報の封鎖）。

・そもそも１９０９０号じゃない。

「ねぇ、一番最後のってどういうことよ？意味がわからないんだけど」

簡潔極まるその文章に要領を得ない御坂。

一方通行は説明を補足する。

「あァ、一番上のはわかるな？最有力パターンだ。これがただの不慮の事故だったってンなら、もう２度と同じような事は起きないだろォな。

だが、もし仮に、霧の日にシャドウが暴走する事を知ってる奴が居たら、それは不味い」

「そうですね、決行は難しいかもしれませんが、霧の日にあっちにぶち込んでしまえばほぼ確実に宿主からシャドウが切り離されますしね。
それが事実なら、恐ろしいです。と、ミサカは人間の悪意に身をふるわせます」

「今回は１９０９０号の失踪自体はしらされたが、もし意図的に情報が封鎖されたら？」

それを聞いた御坂は、顔を悔しそうにゆがませる

「……なにもできないわね」

「まァ、霧が現れる前に失踪したってンなら、マヨナカテレビもあるし、いくらか手の施しようがある。
クマっていうレーダーもある事だしなァ。定期的にテレビの中に行って誰か入った気配が無かったか聞けば良いンだからなァ」

それを聞いた二人は少し安心する。
しかし、まだ最後の一つを聞いていないので、それについて尋ねる。

「で？そもそも１９０９０号じゃないってどういうことよ」

「１９０９０号はそもそもテレビの中に行ってなくて、別の妹達か

もしれないってことだ。
１９０９０号の死体が上がった。ってのは確実だろォよ。暗部が間違った情報を送るなンてのはほぼありえねェ。
つまりテレビにかこつけて１９０９０号を殺したって可能性だ」

少し考えこんでいた９９８２号はそれに反論する。

「しかし……それはいささか暴論ではありませんか？
だってそもそも、テレビの事知っている人ってミサカ達以外に居るのでしょうか？
テレビの事を知らないのなら、テレビをフェイクに使う意味はありませんし……
また、仮にそれが事実だとして、別のミサカは何処に行ったのでしょうか？
と、ミサカは流石にありえないと否定します」

「そォだな。まァ、そもそもこれらはあくまで推論であって、正解ではないからなァ。
しかし、俺らだけしかテレビの事しらねェって可能性は捨てた方がイイ。
なンせ暗部の人間は狂った連中が多い。どっから持ってきた情報かしらねェが何でも知ってやがるからなァ。
つまり、そォすることで得する連中がいるかもしれねェってことだ。
１９０９０号以外の妹が失踪したって事実も、隠蔽しちまえば探さないとバレないしなァ」

ここで、二人のやりとりを聞いていた御坂が口を開く。

「でも確かにその可能性はあるけど、相当薄いところなんじゃないの？
私は暗部がどうとかはよくわからない。でもそう簡単に起きる事じゃない、ってことくらいはわかるわよ？」

「あァそうだな。俺も正直最初のパターンで鉄板だと思ってる。
それでもわざわざ説明したのは……暗部はそれすら可能にするほど、力があるって事を知っててもらいたかった。
……腐ってやがるけどなァ」

「成程ね。暗部相手に無茶すんなって事？心配してくれたんだ、やさしーわね！」

御坂の言葉に、一方通行は顔を真っ赤にして否定する。

「ばっ！ちげェよ！」

「ツンデレ乙。と、ミサカは男のツンデレは罪と称します」

一方通行は照れ隠しにホットコーヒーを一気に飲み干して、あっちィ……とつぶやいた。

「何にせよ、もっかいクマのとこに行って情報を整理しましょ。
他にテレビの中に人がいないかも調べてもらわないとね」

「そうだ、どうせですからこのテレビの中調査隊の正式名称を決め

ましょう。
と、ミサカはグッドアイディアを提案します」
「あァン？ンだそりゃ遊びじゃねェんだぞォ？」
「良いわね！チームｔｈｅゲコ太にしましょう！」
「いやいや、それは流石にねーよ。と、ミサカはお姉さま提案を断固拒否します」
「な！なによそれ！ねえねえ、一方通行はイイと思うでしょ？これ！」
「ハァ……俺ァなンでもかまわねェよ……好きにしろォ」
一方通行は力なくつぶやく。しかし、それに反論するのは９９８２号。
「なんでもいい、が一番困るんですよ？と、ミサカは晩御飯のメニューを尋ねる妻のごとく一方通行を叱ります」
「つ、妻！？あんた達いつからそんな関係に……！」
９９８２号の冗談を真に受ける御坂。
「バカ野郎そンな関係なわけねェだろォが。
つゥか９９８２号の理論だと、俺が何言っても結局９９８２号の意見に沿う形になっちまうだろォが。

今日の晩御飯何が良い？っつって希望通りになった試しなンざ聞いたことねェよ」

ボケが二人になるとさばくのもめんどくせェ、と思う一方通行であった。

とりあえずチーム名は保留にして、とりあえず芳川の家からテレビの中に向かうことにした。

・・・

芳川の家に向かう道中、御坂美琴はツンツンヘアーの男子高校生を見つけた。

その男は「げっ、ビリビリ」と言うと、御坂は「ビリビリ言うな！」と怒りながら、男に向かって能力を放っていた。

「……何やってンだ、あいつら」

別段急いでいるわけではないが、いささか気を抜きすぎではないだろうか。

というか、学園都市の第三位がその辺に居るような高校生に遺憾なく能力を発揮するとは……

と、ここで妙な事に気づく。仮にもレベル５な御坂美琴の能力に、傷一つなく逃げ回るあの男は何だ。

御坂が手加減してるにしろ、あの男は何らかの能力があるのだろう。

そんなことを考えていると、ラインナップが確実におかしい自販

機の横に、急に扉が出現した。
あまりに急だったので、一方通行は声をあげる。
「……どうしたのですか?と、ミサカは急に声をあげられた事に驚きつつ尋ねます」
「あァ、なンでもねェよ。オラ、金やるからそこの自販機で飲みもンでも買ってろ」
どうやら９９８２号はこの扉が見えてなさそうだ。
９９８２号は自販機のラインナップを見てげんなりとしているが、一方通行からもらったものだからと渋々飲み物を買う。
しかし、比較的まともそうなヤシの実サイダーは、売り切れていた。
その事実に愕然としている９９８２号を横目に、扉について考える。
すると頭の中にあのいけ好かない鼻爺の声が響く。
『ついに始まりますな』
一方通行は、何が始まるンだよ、と思いつつもイゴールの言葉に耳を、というか意識を傾ける。
『では、しばしお時間を拝借するとしましょうか』

この扉の中に入れと言うのか。しかし、鍵穴があると言う事は鍵が存在するはずだ……

と、ここで「鍵」の事を思い出す。するとそれに呼応するように、ポケットに入れていた「契約者の鍵」が発光する。

ガチャ、と鍵の開く音を最後に、意識が遠くなった。

・・・

一方通行の目の前には、またもイゴールとマーガレットが居た。

イゴールは無意味に一方通行を呼び立てる事はしない。何か伝えるべき事があるのだろう、という事で、イゴールが口を開くのを待つ。

「お待ちしておりました。……貴方に訪れる災難は、既に人の命を奪いながら迫ってきております……

ですが、恐れる事はございません。貴方は既に抗う「力」を手にしております。

いよいよ、貴方の「ペルソナ能力」を使うときが来ましたな……

フフ」

「貴方のペルソナ能力は、「ワイルド」……それは、正しく心を育めば、

どんな試練とも戦いうる「切り札」となる力……

私共も、その為のお力添えをしてまいります」

「私どもの仕事、それは新たなペルソナを生み出すこと。
お持ちの「ペルソナカード」を複数合わせ、一つの新たな姿へと転生させる……
言わば、「ペルソナの合体」でございます」

ペルソナの合体、すなわち、ペルソナは複数扱う事が出来ると言うのか。
だとしたら、つじつまが合わない。ペルソナ、すなわち心の鎧。
心とは、一人に一つと相場は決まっているのではないか。
その事について尋ねると、それが「ワイルド」の能力である。と答えられた。
どうやら、自分に備わった特殊な力らしい。
戦力はあって越したことにはないので、ありがたく使うとしよう。

「で、そのペルソナカードってのは何処で手に入れンだ?」

当然の疑問である。
イゴールはまた比喩表現で遠まわしに説明する。要約するとこうだ。

敵を
倒すと
出てくるよ。

敵倒出。なんともわかりやすい事を何行にもわたって説明するイゴール。
何にせよ他者との「絆」を育むことで、ペルソナを生み出した時

に能力を付加でき、
ペルソナを生み出すには敵を倒してカードを手に入れればよい。
ＲＰＧ等によく見られる「敵を倒すと経験値」みたいなものだろう。

「こちらに見えますのが、「ペルソナ全書」でございます。
こちらは、手に入れたペルソナを記録し、再び引きだす事が出来る仕組みでございます」

何と便利なことだろう。マーガレットが言うにはペルソナによって値段が異なるらしい。
これは心すら金で買えてしまい、それも心によって価値は異なる……
ところで現代では、金があれば大抵の事が出来てしまう。
……と言う事に対する風刺とか皮肉か何かだろうか。
などと下らないことを考えていると。

「フフ……以前私が申しました事を覚えておられますかな？
……もし謎が解かれねば、貴方の未来は閉ざされるやも知れません。
言葉の通りでございます。戦いに敗れる以外にも、終わりはありうる……
努々、お忘れになりませぬよう」

イゴールは一息つき、一方通行を見据え、全てわかっているかのような表情で続ける。

「次にお目にかかります時。貴方は自らここを訪れることになるでしょう。
フフ、楽しみでございますな」

正直、こんなところに何度も足を運びたくはないが、新たな「力」を手に入れられると言うのであれば、再び自分の意志でここに来ることになるのだろう。
イゴールの言うとおりになるのは癪ではあるが。

ではその時までごきげんよう。その声と共に、意識が再び遠くなった。

・・・

一方通行！と、自分を呼ぶ声を感じ、意識を取り戻す。
目の前には９９８２号と、御坂にツンツンの高校生が居た。

「あァ？どォしたってンだ？」

サラッと返答したことに安心したのか、９９８２号が言う。

「どうしたもこうしたも、ずっとボーっとしてるから、どうしたのかと心配しましたよ。

と、ミサカは一方通行の集中力に感嘆の念を抱きます」

「久々葉が急に呼ぶからどうしたのかと思ったわ」

もう少しでこいつ仕留められると思ったのに。と御坂は不満そうな表情だ。

一方で、仕留められるという言葉を聞いて表情を青くする高校生。

「あはは、あんたがボーっとしてたおかげで助かったぜ。あ、えーっと、俺は上条当麻だ。よろしくな」

よくわからないが感謝されている。握手を求めてき手を差し出してきたので、こちらも無意識に手を出す。

すると、甲高い音が鳴り響き、そのまま握手した。

「……！？」

目の前の男に触れるとともに反射を切り忘れていたことに気付くが、その反射が発動していない。

この事実に驚きを隠せない一方通行の表情は硬い。その様子を見ていた御坂は笑いながら説明した。

「あっはっは！まさか一方通行が握手くらいでそんな表情するなんて思わなかったわ！

こいつ、「幻想殺し」っていう変な右手を持ってて、どんな異能

でも打ち消す事が出来るのよね」

無能力者ってくくりのくせに、この私を完全にあしらってるのが許せない。と、御坂は言う。

「つまり、目の前のウニ頭をぶちのめせば、ミサカ＞＞＞＞越えられない壁＞＞＞＞ウニ＞お姉さまの図式が成り立つわけですね。

と、ミサカは鋼鉄破りを構えて戦闘準備します」

「おいおいおい冗談は止めてくれよ！こちとら右手なかったらやんごとなき一般人なんですことよ！？」

「……多分お前は「自分はただの男子高校生だ」って事を言いたかったンだろォが、

ヤンごとなきって「高貴な」とか「ただものではない」とかそンな意味だぞ」

自分で自分をただものではないと言う男子高校生。

一見してただの厨二病患者にしか見えないが、先ほどの右手を見たらその評価は一変する。

学園都市第一位の能力ですら打ち消すというその右手。

やんごとなき高校生という評価は正しいものだろう。

にもかかわらず無能力者というのは、おそらく「幻想殺し」という特殊性を隠蔽するための工作か何かだ。

なら、レベル5の中でもかなり目立つ位置に居る自分と一緒に居れば、
この幻想殺しを目立つ場所に立たせてしまうことになるだろう。
とはいうものの、この幻想殺しの少年は、困ったことに困った人を助けるとズブズブと深い所まで行ってしまい、
何だかんだで事件の中心に立ってしまう困った性格なので、
知る人ぞ知る原石（原石かどうかすらわからないが）、のような扱いになっている。

しかし、そんなことを一方通行が知る由も無いので、一方通行は幻想殺しを巻き込むべきではないと感じ、
さっさとこの場を立ち去ろうとするが、次の御坂の言葉に驚愕する。

「ねぇ、こいつテレビの中連れてったら役に立たない？」

「なンだなンですかァ？学園都市第一位であるこの俺をして役者不足だってンですかァ？」

御坂はそんなこと無いわよ、と言いながらもチラチラと幻想殺しを見ている。
どうやら御坂は上条当麻に気があるらしい。

「うげっ、だ、第一位!？おいおいすげえな、２３０万分の７のうち二人がこの場に居るのかよ……」

上条は一方通行と御坂の顔を交互に見て何だかめんどくさそうな

ことに巻き込まれそうだ、とつぶやいた。

そんな上条とは裏腹に、巻き込むべきではない。と、一方通行は考えるが、そう考えるのは彼だけだったようで、９９８２号も

「良いですね、そいつがいれば上条×御坂の図が成り立ち、ミサカは一方通行と……

と、ミサカはぐふふと笑いながら一方通行との輝かしい未来予想図をうちたてます」

等と意味のわからないことを述べている。

事情を知らない上条はというと、

「なんだ？何か手伝ってほしい事があるのか？今日は特売も無いし、遅くならないなら構わないけど」

乗り気ではないが、断るつもりもないらしい。

一方通行はボケが３人になってしまう事を危惧して、頭を抱えた。

## そのじゅうよん（後書き）

ホントは出す気なかったのに
でも出しちまったもんは仕方ない。

どういう展開にしよう……

５／２５　２３：４４　各キャラステータス紹介。
一方通行　＜シナツヒコ＞　愚者　武器：特になし
スキル　ガル　マッハパンチ　圧縮圧縮空気を圧縮（一方通行固有スキル→ガル＋疾風ハイブースタ　今のところ一度使うのが限界）
物　火　氷　雷　風　光　闇
耐　耐　耐　耐　耐　　（耐は反射稼働時に限る。反射が切れたら耐→弱になる。もやしなので）

御坂美琴　＜オオヒルメ＞　女教皇　武器：特になし
スキル　アギ　ディア　ビリビリ～超電磁砲（御坂美琴固有スキル→ジオ～ジオダイン　威力は御坂の任意で変更可能。ただし威力が高いほど使用回数に限度がある）
物　火　氷　雷　風　光　闇
　耐　弱　耐

９９８２号　＜ワカヒルメ＞　戦車　武器：鋼鉄破り（メタルイーター）

スキル　二連牙　タルカジャ　めっちゃすごい弾幕（９９８２号固有スキル　敵全体に小ダメージ２～４回与える。連射性のある武器のみでしか使用不可）

物　火　氷　雷　風　光　闇

耐　耐　弱

## そのじゅうご（前書き）

上条さん、インＴｈｅテレビ。

普通に投下出来ましたァ

テレビの中、と聞いて上条当麻は訝しがっていたが、実際にテレビに手を突っ込んだところでそれを信じた。

しかし、幻想殺しがあるとなると、どうなのだろうか。

上条を連れてみてはと提案した御坂美琴は、「あーそこまで考えてなかったわー」という表情で一方通行を見ていた。

それでも一方通行なら……一方通行ならきっと何とかしてくれる。

そう言いたげな表情で一方通行を見ていた。

その視線に気づいた一方通行は溜息をつく。

「手袋でもつけてみたらどォだ？」

などと適当なことを言ってみたところ、それを真に受けた芳川桔梗は、黒いレザーの手袋を持ってきた。

どうみてもメンズなのだが、芳川は何故持っているのだろう、という素朴な疑問を抱いた一方通行は、素直に聞いてみる。

芳川は、「男っ気が無くて悪かったわね」と少しご立腹の様子だった。理由は聞けなかった。

兎にも角にも、手袋を装着した上条当麻の右手に軽く触ってみた

ところ、能力は打ち消されなかった。
これなら大丈夫だとは思うが、テレビの中に幻想殺しを放りこんだらどうなるのだろうか。
どう見ても普通の空間ではない異空間だ。
そんな場に幻想殺しの効果が及べばどうなるのか。

そう考えると幻想殺しを使う訳にはいかない。
幻想殺しを使えないなら上条当麻はただの一般人。

その旨を伝えて、わざわざ呼び立てたことを謝罪し、
財布からいくらか金を掴ませて口封じして、帰らせる事にする。

しかし当の上条はと言うと、

「うわ、ななななんだこれこれだけあれば3カ月は生きていけますことよ?!ま、マジでいいのか?
というか、お前ら何か困ってることあるんだろ?だったら見過ごせねえよ!」

固有スキル「おせっかい」を発動させていた。

しかし、受け取った現金はしっかり財布に入れていることから、
よっぽど貧困にあえいでいたらしい。
逆に、こんな現金受け取っちまったら、手伝わないわけにはいかねーよ、と言ってきかなかった。

それなら金を返せ、と一方通行が突っ込みを入れるが、
上条はそれはできませぬ!できませぬぞ、殿ォ!!とわめいてい

た。

どちらかと言うと突っ込み属性持ちの上条であったが、今日はボケ属性らしい。

一方通行は、突っ込み属性専門の人間が欲しいと本気で考えた。

仕方が無いので連れて行く、と上条に言うと、彼は顔をほころばせていた。

改めて、よろしくな！と言って握手を求めてきたので、

一方通行は、今度は反射をしっかり切ってから、握手をする。

すると、心に小さな「力」を感じた。

あの時感じた「力」程ではないが、確かにそこに存在している。

――――上条との間に、ほのかな絆の芽生えを感じる。

我は汝…、汝は我…

汝、新たなる絆を見出だしたり…

絆とは、まことを知る一歩なり。

汝、「正義」のペルソナを生み出せし時、

我ら、更なる力の祝福を与えん…

上条との絆に呼応するように、「心」の力が高まるのを感じた。

「正義」属性コミュニティである「上条当麻」コミュを手に入れた。

一方通行は、これが「ワイルド」の能力なのだろう。と、イゴールの説明を思い出しながら考えた。

・・・

4人は、テレビの中に入る。

これでもし幻想殺しがきいたらどうなるのだろうかと、一抹の不安を感じながら。

いつぞやの空き地に出たが、やはり同じテレビから入ると同じ場所に出るようだ。

それ以上に無事にテレビの中に入れたことにホッとする一同。

しかしクマの姿は見当たらない。

「チッ……この場所に来るってことは伝えてなかったからなァ……」

「あ、でも無線があるじゃない、使えないの？」

御坂美琴は無線を使い、クマに呼び掛ける。が、反応はない。

「何処をほっつき歩いてるんでしょう。と、ミサカはクマに対し仕事しろよと愚痴ります」

状況を把握できてない上条当麻は、辺りを見渡して、仮想空間か何かなのだろうか、等と考えていた。

それなら異能でも無いし、手袋を外しても良いんじゃないかと思い、一方通行に提案するが、とりあえずつけとけ。と一蹴された。

「へ？ここって電脳世界とか、仮想空間とかそういう類のものじゃないのか？

て言うか霧すげえな」

上条はこの空間が何なのか把握していないので、一方通行の否定に首をかしげる。

「ここがどンな空間か、俺達ですら把握できてねェンだよ。

把握できてない以上、不用意に幻想殺しを使う訳にはいかねェだろ。

あとこの眼鏡が無いと視界は晴れねえ。これをくれた奴がこの場にいると思ってたンだが…

今は居ねェみたいだから、視界に不安があるなら超電磁砲の手でもつないでろォ」

一方通行の言葉に御坂は顔を真っ赤にして、「べ、べべべ別にてて手なんて」とどもっていたが、
上条はそれをやんわり断る。

「じゃあ、俺っている必要ないんじゃないか？この手が無けりゃ一般人だし。
前見づらいっつってもそこまでひどくはないから、御坂も気にすんな」

御坂は少しションボリした顔をする。ツンデレは損気である。

「……それはさっき説明しただろォが。だから帰れっつったンだよ、俺は」

「え？マジ？……わ……わりぃな、なんか……」

上条は目の前の金に浮かれて、一方通行の説明を全て忘れていたらしい。
一方通行は、端から期待してねェよ、と冷たくあしらった。
申し訳なさそうな顔をする上条に、御坂が声をかける。

「な、何か……ごめんね？」

「いや、良いんだ……金もらっといて足手まといって、流石に笑え

ねぇよな……」

事態を重く受け止めた上条は、ますます意気消沈している。
それを見た一方通行はバツが悪くなり、

「チッ……お前一人守る位朝飯前なんだよ。それにさっきの金はあくまで口封じのための金だ。気にすンじゃねェよ。
ただ、こっから帰せる奴が今ここに居ねェから、すぐには帰れねェが、とりあえず我慢しやがれってンだ」

「そうですよ。あなたはお姉さまに守られて、お姉さまに惚れてしまえばいいのです。
と、ミサカはお姉さまの恋路を全力で、まさしく全ての力を持って応援します」

９９８２号の言葉に御坂は顔を真っ赤にして本気で慌てて否定するが、
上条は一方通行の気づかいに感激したのか、二人のやりとりを全く聞いていなかった。

・・・

＜異様な研究所＞

とりあえず何か情報が残ってないか探すため、
樋口製薬・第七薬学研究センターにやってきていた。

地下は探ったが、２階と3階には見向きもしなかったので、
今日はそこを探る。と一方通行は提案した。

「そういえば、一方通行はこの研究所の事知ってたみたいだけど、
なんで？」

先日この研究所に来た時は、真っすぐ地下の隠し通路までたどり
着いたが、
疑問に思ったのだろう。御坂は質問する。

「あァ、ここでも実験につきあわされてたんだよ」

さらりと実験について話す。御坂は申し訳なさそうな顔をするが、
一方通行は気にした様子ではない。

上条は何のことかよくわかっておらず、辺りをキョロキョロと見
回している。
そんな様子を見た９９８２号は、

「勝手な行動は死に直結すると思いなさい。と、ミサカは鬼軍曹の
ごとくツンツンヘアーを叱咤します」

「へ？お、おう。何かやばそうな雰囲気だしな。俺は何もわかんね
ーし勝手なことはしねーよ」

「ンじゃ入るぞ。あンまりしゃべるンじゃねェぞ。何がいるかわからねェ」

４人は、静かに研究所内に足を踏み入れた。

「んがっ」

「どうしました?と、ミサカは突然の奇声に少しだけ驚きます」

ここまでかなりのホラー体験をした９９８２号にとって、最早奇声など恐怖の対象どころか、ちょっと躓いた程度の驚きなのだろう。

それはさておき、上条は突然の頭痛に頭を抱えたのだが、一瞬だったので無視した。

・・・

＜異様な研究所Ｆ２＞

一階は異様なまでに静かだった。先日突入したときは数十匹の「失言のアブルリー」と戦闘したと言うのに。

その事情を知らない上条当麻は、

「何か出てきそうで怖いなー」

などと、のんきなことを言っていたが、3人としては何も出てこなくてよかった、という心境だろう。
しかし、2階に上がってから状況は一変する。

「げっ、なんだありゃ！？」

と、騒ぐ上条の前には、どう見てもシャドウが居た。しかし、こちらには気づいていない。

「静かにしろォ。こちとら戦いに来てンじゃねェ。情報を集めに来てンだ。
なるべく見つからないよう行動しろ」

なるべくバレないようにするため、静かに移動するように諫める。
上条もそれを理解し、口を閉ざす。

「あのシャドウは初めて見るタイプですね。と、ミサカはいつ戦闘になってしまっても良いよう準備を確実にします」

クマがいないため、二種類シャドウがいるが、どちらもシャドウと呼んでいる。
一体、クマは何処に行ったのだろうか。しかし、居ないものを今さらどうこう言っても仕方が無い。

これからどうしたものかと思考していると、御坂美琴が提案し、９９８２号がそれに激しく同意した。

「二手に分かれない？３階探す班とこのまま２階を探す班と。無線でやり取りすればいいことだし」

二手に分かれる。悪くない案だ、と考えるが、それは戦力が均等に分散できる場合だ。

だがしかし、上条は右手が使えない。となると、自分と上条、御坂と９９８２号という組み合わせが良いだろう。

この別れ方でどうだろう、と一方通行は提案する。

上条は納得したが、御坂と９９８２号は若干不満がっていた。

お前ら姉妹なンだから仲良くコンビネーション技でも編み出してろ、と一言残して、

一方通行と上条は３階へ向かう。

・・・

＜御坂・９９８２号ｓｉｄｅ＞

あわよくば上条当麻と二人きりに。

あわよくば一方通行と二人きりに。

利害の一致を果たした二人は、全力で一方通行に二手に分かれる案を通そうとした。

一方通行も悪くない、という顔をしていて、二人は作戦の成功を確信した。

しかし、ここで期待を裏切るのが一方通行という男だ。

こちらの意図に全く気付かず、男二人女二人にわけてしまった。

しかし戦力的にはそれが一番いいと理解出来るので文句も言えない。

二人は渋々それに同意して、2階の探索にあたる。

「うまいこと分けられなかったわね……」

「仕方ないです……でも、チャンスは今後探せばいくらでもあるはずです。

と、ミサカはお姉さまと上条をくっつける策を全力で考えることを宣言します」

ここに、みさか同盟なる同盟が結成された。

＜異様な研究所Ｆ２・資料室＞

二人は、１９０９０号や、他の実験などに関する資料が無いか探す。

「……ないわね」

「薬品に関する資料ばかりですね。と、ミサカは表向きは薬学研究センターであることを思い出します」

が、しかしめぼしいものは見当たらない。やはり表向きは通常の研究センターだからだろう。

あの時行った地下研究室になければ、ここにはないのだろう。

そう判断し、一方通行に無線で連絡を試みる。

が、それは叶わなかった。

「久々葉！伏せて！」

９９８２号の背後に、シャドウが迫っていた。御坂美琴は迷わず電撃を飛ばす。

失言のアブルリーとは若干色の異なるシャドウは、

こちらも同じく電撃が弱点だったのか、その場で消え去る。

しかし、騒ぎを感知したシャドウたちが、次から次へと現れ、二人を囲う。

「……不覚を取りました。と、ミサカはお姉さまの足を引っ張ったことを謝罪します」

「構わないわ、これから挽回したら良いじゃない！」

もう隠れても仕方ない。そう考えた二人は、目の前のシャドウ達を殲滅する事に決めた。

・・・

＜一方通行・上条ｓｉｄｅ＞

二人は無言で研究所を歩く。

一方通行は何かを探している様子だが、上条当麻は何をしたらいいのか分からず、ただ一方通行について行くだけだ。

それに耐えきれなくなった上条は、一方通行に尋ねる。

「なぁ、何を探してるんだ？」

「あァ？資料だよ、実験の資料。詳しい事は聞くな、説明がめんどくせェ」

一方通行は１９０９０号に関する資料が無いか探しているようだが、上条には教えない。

下手に事情を知って深いところまで来られたら互いに困るだろうと考えたからだ。

今回、上条をここに連れてきてしまったのは自分の過失だ、と、考える一方通行は、上条を確実にあちらへ帰すと誓う。

しかし、そんな思いの一方通行とは裏腹に、上条は自らの意志で

深入りしようとする。

「なあ、どんな事情を抱えてるか知らないけどな。困ったことがありゃ相談してくれよな？俺ら友達だろ？」

誰が友達か。一方通行はすぐさま否定しようとするが、なぜかそれは出来なかった。

一方通行はただ無言でうなずく。上条はそれに満足したのか、再び無言になった。

＜異様な研究所Ｆ３・主任室＞

一方通行は部屋の機器が使えないか調べる。が、どれも電源が入っていない。

どうやら電気が通ってないようだ。当然と言えば当然だが。

御坂美琴を使えば無理にでもパソコンの電源をつけられたかもしれないが、今更言っても栓無きことである。

仕方が無いので棚に収納してある書類に手をつける。

こちらも表向きは薬品研究センターだけあって、薬品に関する記述しかない。

ここで、ふと名簿が目に入ったので、手に取り目を通す。

すると、研究者の中に長点上機の人間がいるではないか。

能力に限らずある才能に関して秀でたものがあれば通ることのできる長点上機。

ならばそこに通う学生が研究者であったとしてもおかしくはないが、なぜか、この写真に既視感のような違和感を覚えた。

何処で見たのだろう。

何処かで見たはずだ。

そうだ、初めて「ココ」に来た時、パソコンの画面に表示されていたな。

顔のない長点上機の生徒。

「長点上機」しか共通点はないが、おそらく同一人物だと思われる。

なぜかその確信があった。

同一人物だとして、なぜあの時パソコンの画面には顔のない画像が乗っていたのだろうか。

そもそも同一人物かどうかなど、自分の根拠のない確信でしかないため、

これ以上考えても仕方ない、と思考を打ちきる。

すると下の階から銃弾が炸裂する音が聞こえる。

上条もそれに気付いたようで、すぐにこの部屋を立とうとする。

「待て、こっからシャドウにバレないように戻ろうと思うと面倒だ」

「じゃあ、どうするんだよ!?」

「俺を誰だと思ってやがる?学園都市第一位の「一方通行」だぜェ?

床の揺れや物音から、あいつらの居る場所の把握なンざ朝飯前なンだよ」

捕捉したらここの床ぶち抜いてショートカットだ。と、言いながら、床に掌を置く。

その様子を眺めていた上条に、またも鋭い頭痛が襲う。

「ッ……！」

今度は先ほどよりも酷い痛みが上条を支配した。
まるでこめかみにボルトをねじ込んだような痛みに、流石にうめき声をあげ、膝をつく。

「……どォした？体調でも悪いか？」

初めて入った時も、９９８２号が体調を崩していた。
なら、目の前の上条も体調を壊しておかしくはない。
何故こんな簡単なことに気付かなかったのか……

一方通行は己の浅薄さを恥じる。
しかし、休ませようにも二階で戦っている二人が心配だ。
かといってこんなところに上条を置いて行くのも論外である。
どうしたものかと思考していると、

「あぁ……もう、大丈夫だ」

少し冷や汗をかきながら上条は立ち上がる。

「わりィな……合流したらすぐ帰る」

クマをなんとかして見つけなければならないな、と一方通行は気を引き締め、
床を破壊し、上条を抱え下の階へ向かう。

・・・

＜異様な研究所Ｆ２・資料室＞

御坂美琴と９９８２号はひたすらシャドウを殲滅する。
火か雷が弱点なら御坂が、その二つがあまり効かないなら９９８２号が、どちらでも無いなら早い者勝ち。

二人はペルソナで戦うのは初めてであるが、やはり戦闘慣れしているからだろう。
すぐに順応し、息の合うコンビネーションを見せていた。

「こうやって！背中合わせで！戦うってのも！！悪くないわね！！」

御坂は正面の敵，
「トランスツインズ」にアギを唱えつつ、左に見える「虚言のアブルリー」に電撃を放つ。

「そうですね！ならば！どちらがより多く倒せるか！競争でもしますか？！
と、ミサカは！素敵な！提案をしてみます！」

９９８２号は御坂と背中合わせになり、正面に見える3体の「ブラックレイヴン」に向かって銃弾を放つ。

たまに「攻撃を反射」や「吸収」する奴がいてこれがまた厄介であった。
それでも流石は学園都市の学生。
相手に攻撃が効かないと見るや、二人の配置はくるりと入れ替わり、相手に効く攻撃をそれぞれ繰り出す。

二人の戦いぶりは、さながら舞いのようであった。

弱点がある相手にはもちろんそこを突き、
特に弱点が無い相手にはタルカジャで攻撃力を底上げして一斉攻撃。

「失言のアブルリー」の亜種みたいなやつ。鳥みたいなやつ。
サイコロみたいなやつ。十字架みたいなやつ。王様みたいなやつ。
王様が召喚したへんなの。手みたいなやつ。

ひたすら殲滅していた。

しかし、ようやく敵の数が少なくなったのだが、異変に気づく。

「ねえ、あのテーブルみたいなの、どの攻撃も効いてなくない？」

「笑うテーブル」の事なのだが、このテーブル、弱点は風のみで他の攻撃は全て無効である。

そんなこと御坂と９９８２号が知っているはずもなく、

敵はほぼ殲滅したが、テーブルが５、６台残っている。

どうしたものかと思考をするが、敵はいつまでも待ってくれない。

とりあえず逃げようと二人は決めるが、そこに上条当麻を抱えた一方通行が現れる。

「ナイスタイミング！こいつ私らの攻撃効かない！」

「や、やあ！良いところで会った。グッジョブ！と、ミサカは正しい真田明彦先輩を演じます」

こいつら意外と余裕あるな、なら上条の方をもっと気遣えばよかったか。

と、考えつつもとりあえず目の前のテーブルにガルを放つ。

テーブル＜バシュッ

一発で退場なされた。
これには御坂と９９８２号も苦笑い。一方通行はあきれた目で二人を見ていた。

「オイオイ、あれですかァ？ＭＰ切れましたってかァ？疲れたンなら宿屋行って一晩休ンでこい」

「な、何よ、あいつには炎も電気も銃弾も効かなかったのよ！！仕方ないじゃない！」

「そうですよ、奴にはきっと風しか効かないんです。と、ミサカはあなたの援護を高評価します」

「ていうか、そいつどうしたのよ？」

上条の様子がおかしいことに気づく御坂。

「あァ、ここの瘴気？にあてられて頭が痛いらしい。クマと連絡取るからこいつの事見ててやれ」

と、御坂に上条の面倒を見させることにする。
御坂は上条の肩を持ってあわわわ、とゆでダコのようになっていたが、
上条の様子に本気で心配しているようだった。

クマに無線で声をかける。するとようやくつながったが、焦った声をしている。

『ゴメンクマ！ものすご～く考え事をしてたら無線に気付かなかったんだクマ！』

『言い訳なンざどうだってイイ。とりあえずこないだの研究所、来れるかァ？』

『クマ！今から行くクマよ！でも気をつけて！何だか研究所の方から強いシャドウの気配がするクマ！』

クマの言葉と合わせるように、９９８２号が銃を構える。
そいつは、入口を破壊してゆったりと入ってきた。

「ンだァ……？こいつは……？」

騎士。一言でいえばこういい表わすだろう。
巨大な体躯に、身の丈ほどのスピアを携え、
それは宙に浮く鉄の馬のようなものにまたがっていた。

しかしその体には中身が見られない。
どちらかと言えば鎧が一人歩きしている感じだ。

騎士の発する威圧感に思わず後ずさる。
強いシャドウの気配とはおそらくこいつのことだろう。
それを判断した一方通行は、先の戦闘で消耗している二人を上条の護衛に回す。

「チィ……」

一方通行は舌打ちする。もしクマと連絡がつくまで待っていれば、クマというレーダーさえいたら。ここまで窮地に追い込まれることはなかっただろう。

しかし、今更後悔しても遅い。

思考を切り替え、目の前の鉄の塊をどうするかに集中する。

出来れば余力を残しておきたい。そう考えたのが甘かったのか。

先手は騎士に奪われてしまう。

騎士は一方通行に向かい、真っすぐスピアを伸ばす。

反射に頼るのは危険と、以前の戦闘で理解した一方通行は、盾として壁の一部をはぎ取り、スピアに向かって放り投げた。

スピアは恐るべき速度で向かった壁の一部をあっという間に貫く。

しかし、貫いた時に壁は砕け散り、散弾となり騎士を襲う。

その隙をついて一方通行はガルを唱えつつ、身近な破片を手に取り、再び放り投げる。

破片は騎士にぶつかるが、騎士には効いた様子ではない。

一方通行は更に床を蹴りあげると、床の一部がはがれ飛ぶ。

それを目くらましに騎士の背後に回り込み、

ベクトル操作で何十倍にも威力を高めた回し蹴りを喰らわせた。

騎士はそのまま壁を突き抜け、隣の部屋まで行ってしまう。
御坂と９９８２号は辺りを警戒しつつも、一方通行を一瞥し、注意を促す。

一方通行もその視線に気づき、無言で答えるが、壁に出来た穴からスピアが飛び出してきた。

２人は一方通行へ向かって叫び声をあげるが、時すでに遅し。

反射をなんとか稼働させたため、貫通には至らなかったものの、やはり完全に操作することは出来ず、腋の下辺りに裂傷を負う。

一方通行は気を抜いた、と内心舌打ちをするが、まだ戦える。
再び足元にある瓦礫を掴み、隣の部屋にいる騎士に向かって投げようとするものの。

「ガァ……！？」

体に異変が生じる。
先ほどのスピアに毒があったのだろうか、体が急に重くなり、めまいもする。
思考が定まらない。体、動け、体、動け。

動かない。

しかし目の前にはスピアを携えた騎士。

スピアを構える。

動かない。

動け。

動け。

いくら動かそうとしても動かないなら。

「ちったァ働きやがれクソがァァァ！！」

己を能力によって操作する。

思考が定まらないせいで、うまく動かない。

それがどうした。俺は誰だ？学園都市の第一位、レベル６に最も近い人間、「一方通行」だ。

普通の人間が匙を投げるようなことすら、鼻歌交じりで出来なくてどうする。

「体を操作」しながら、「体内に侵入した毒の排除」をするくらい造作も無いことだ。

――体を動かせ、体内の異物を排除しろ。

――敵が目の前にいるぞ、攻撃をしろ。

――攻撃がやってくる、回避しろ。

極限の状態に追い込まれた一方通行は、ここにきて一つ成長する。

今までは反射＋操作の同時進行は行っていたのだが、反射はあくまでも自動であり、
操作は触れたものについて一つの事柄でしか操作が出来なかった。

分割思考による演算の最適化。これにより複雑な操作の同時進行が可能となる。

一方通行は毒を抽出すると、演算区分に余裕が出来たことを感じ、騎士に瓦礫を飛ばして迎撃をしつつ、ガルを少しだけ集めて、小さな力の塊を作った。

この場でこの塊をぶつけると、３人に被害が及ぶかもしれない。
そう考えた一方通行は騎士のスピアを回避しつつ懐まで近づく。

そして先ほど穴を開けた隣の部屋に押し込み、自らを穴の開いた壁代わりとして、
手にした力の塊を、ぶつけた。

ゴウ！！と、大きな音を響かせ、巨大な竜巻が渦巻く。
一方通行は３人には被害が及ばぬよう抑え込む。
隣の部屋の様子は見えないが、おそらく存在するもの全てを巻き込み、全てを蹂躙しただろう。

風が鳴りやんだ頃にはボロボロとなった騎士が転がっていた。

あれだけの攻撃を喰らってもなお、原形をとどめているのは称賛に値するが、
これ以上相手にするのは危険なので早々に止めを刺しにかかる。
あれ程の苦戦を強いた騎士は、一方通行の攻撃を前に、あっけなく消え去った。

「……ぶっはァ！！なンだありゃ！？マジで死ぬかと思ったわ！！」

今回は本気で命の危険を感じたのか、滝のように冷や汗を流す。

「流石一方通行！よっ！天下の第一位！と、ミサカは称賛の嵐を送ります」

「あんたって、ホント規格外よね……同じレベル５とは思えないわ……」

二人は騎士が消えたことに安心をおぼえるが、上条の様子は一向に良くならない。
クマが早く来ないものかと連絡を取る。

『おいクマァ。早くこねェか、敵は倒したぜェ？』

しかし、クマの一言に、一方通行は驚愕する。

『強いシャドウの気配はまだ残ってるクマ！ひょっとして、うまいこと隠れてるクマ？
何とかそこから脱出出来ないクマか？』

先ほどの騎士。あれほどの強敵は居なかった。
あれより強いのがまだいると言うのか。
御坂と９９８２号にここから脱出する旨を伝えようとしたその時。

上条の体がビクン、と跳ね上がり、

何かが現れ、それは右手の力を根本から掠め取って行った。

## そのじゅうご（後書き）

この話では、一方さん主人公で、上条さんが裏主人公的な？

## そのじゅうろく（前書き）

ペ・・・ル・・・ソ・・・ナ・・・

カッ！

テクパトルゥウゥウゥ！！！

なンでもない

## そのじゅうろく

上条当麻は不幸である。

一歩歩けば財布を落とし、

二歩歩けば靴紐千切れ、

三歩歩けば不良に絡まれ。

気づけば疫病神、等と揶揄されるようになっていた。

それでもすくすくと真っすぐな心根を持った少年に育ったのは、
ひとえに両親のおかげであろう。

そんな上条当麻という人間は、両親の教育の賜物であろうか、
ものすごいおせっかいな人間であり、
不良に絡まれるのは人助けの結果である、という事が大半である。

よって人助けをしなければ、不幸の一端を減らすことが出来るのかもしれないが、
上条当麻にとっては人を助けるのは当たり前の事である。

どんなに相手が多くても、強い能力を持っていたとしても。
相手がどんなに固い信念を持っていても、どんなに強い思いを抱

いていたとしても。
誰かが涙を流す結果を、上条当麻は許さない。

例え、その結果、自分が死ぬこととなっても。

こうして上条当麻は、己が信念の元、一度死んだ。
そして、とある少女の笑顔を守るため、自分の心を殺し、他人の心を欺き続けながら今を生きる。

どんなにおそろしいことだろう。

どんなにさみしいことだろう。

どんなにつらいことだろう。

どんな、きぶんなのだろう。

――――心を殺して生きていく、というものは。

・・・

上条当麻の体がビクン、と跳ね上がり、３人は一斉に上条のことを見る。
本人は周りの様子を把握できていない。

「おい、大丈夫か？」

と、上条の事を気にかけるが、先ほどまでの頭痛で歪んでいた顔が、嘘のようにさっぱりしている。

一方、９９８２号が何かに気付いた様子で、一方通行の背後を見ている。

残りの３人もそれに気付き、驚愕する。

「ははっ……あーっはっはっは！！やっとあの騎士ブッ倒したんかよ、

一方通行ならさっさと倒せると思ったんだけどなぁ！！！」

「こ、これは……！？」

「上条当麻の、影……でしょうか？と、ミサカはあの時の記憶が蘇ります」

上条当麻の影。完全に失念していた。テレビの中、という場にいるんだ、出てもおかしくなかった。

むしろ、今まで出てこなかった方がおかしい。まさか……

「テメェ……」

「あははは！！気付いた！？おめーらが勝手に消耗してくれんの待

ってたんだよなぁ！！」

「て、てめえ……てめえは一体、何だ……？」

ありえないものを見た、という顔で上条は問う。

上条の影は、上条のリアクションを見て大喜びをしている。

「はは……ははははは！！ここは、「ハジメマシテ」っつったほうがいいかなぁ！？

ええ！？上条くぅん！？」

４人は、どういうことだ、という顔をして、上条の影をにらむ。

上条の影は、何故だかわからないがいたく上機嫌で、勝手にペラペラと話し始める。

「てめーらには感謝するぜぇ！？何せこいつの中から抜け出す機会をくれたんだからなぁ！！

悪ィが、俺は端からお前なんかじゃねぇ！！」

その言葉に３人は驚愕し、上条は意味がわからない、と言った顔をし続けている。

本来、シャドウは宿主に「存在を否定」されることで宿主から離れる。

一方で上条の影は、「最初から宿主から離れている」という言動

をした。

どういう事かわからない。幻想殺し、という特殊性がそうさせたのだろうか。

しかし考えたところで、相手は既にシャドウ。いつでも戦える様に警戒する。

「おいおい、そんな警戒しねーでくれよ、俺は感謝してるんだぜ？お前らの消費を待ったのだって、お前らから無傷で逃げる為だしなあ」

「どぉいうつもりだァ？お前は上条から生まれた存在だろォが。とっとと宿主の元に戻りなァ」

「それは恩人たる一方通行の願いでも出来ねぇなあ。俺がそいつの心ん中で何回殺されたと思ってやがる？俺は怖い、辛い、痛い、止めろ、って何度も何度も叫んでたってのによぉ」

上条の影は、何か薄汚いものを見るかのように、上条当麻を見降ろした。

「はぁ……？どういうことだよ！？」

「はん、てめえが人助けと称して、てめえの恐怖心押さえつけて偽善やってたのは何のためだ？嫌われない為だろ？怖がられない為だろ？一人になりたくないからだろ？

嫌だよなあ？疫病神扱いされるのは。

嫌だよなあ？俺でも無い奴にお前は不幸だな、と同情されるのは。
嫌だよなあ？自分の不幸に他人を巻き込むのは。
嫌だよなあ？＋になることして、それでやっと０になれるってのは！！」

「な、なに意味分かんねー事言ってんだよ！？お前は、一体誰なんだよ！！
勝手に人の心決めつけてんじゃねえ！！」

「どうしたもこうしたもあるかあ！！お前はあの時一度死んでんだ。
あの時既に俺とお前は切り離された別モンなんだよ。
俺が言ってんのは、あの時以前のお前の事だよ。
お前の事なんかじゃねえ、俺はお前じゃないんだからな。
お前の事なんか知らねえよ！」

「あ、あの時死んだって、どういうことよ！？こいつは現にこうして生きてるじゃない！」

何やら重大そうな言葉を吐いた上条の影に対して御坂は声を荒げて反論する。

「あぁん？んだぁ？知らねえのか？ほんなら、教えてやろうか？」

上条の影は、ニタニタと普段の上条とはかけ離れた笑みを浮かべていた。
あの時、の事は覚えていないが、上条の影が言おうとしている事はわかる。
それを言わせないように、上条は、やめろ！と大声をあげるが。

「はっ、止めねえよ！こいつ、７月２４日に記憶喪失してんだよなあ」

ニタニタと、表情を変えないまま、上条の影は、上条当麻の抱える爆弾を投下した。

続いて誰にも聞こえない声で小さく、それがただの記憶喪失だったら、俺もこうはならなかったっての。と、ぼやいた。

・・・

上条の影は、「ほんじゃま、あとはごゆっくり」と、言いつつ手をひらひらと振りながら去ろうとしたが、

一方通行がそこに立ちふさがった。

「わりィがこっから先は一方通行だァ。シャドウの類は進入禁止ってなァ！！」

一方通行はガルを唱え、ベクトル操作によりそれを圧縮する。

それは小さなプラズマとなり、上条の影へと向かう。

一方で上条の影は、そんな一方通行を歯牙にもかけずに、

「ははっ、あんなへっぽこ騎士なんぞに苦戦する時点で優劣は決まってんだよ」

と、言いながら右手を前に突き出した。すると上条の影の右手から竜のようなものが現れ、それは唸り声を上げながら、大きく口を

開く。
そしてそのままプラズマを飲み込んでしまった。

竜を目の当たりにした全員が信じられないものを見る目で上条の影をみる。

「お前……それ、一体何だ？」

一方通行は再びプラズマの作成を試みる。
しかし、既に限界が来たのだろう。何も起きない。
体力もつきている為足が震えだす。「一方通行」の能力による庇護すら得られなくなり、立っているのもやっとの状態だ。

それでも、立ち続ける。せめて後ろにいる連中の盾くらいにはなれるように。
そんな様子を上条の影は、見世物を笑うように眺める。

「あっはっは、流石にそれは企業秘密だぜ？
強いて言うなら、あの時以前の俺の方が、その右手について理解があった。とでも言おうかね。
ああそうそう、君らのその勇気に免じて、見逃してやるよ。
つっても元々お前らの相手なんぞする気なかったんだがな！
お前らがちょっかい出すからそうなるんだぜ？」

さらばだ、明智君と４人に告げ、上条の影は姿を消す。
辺りは静寂に包まれ、しばらくの間全員が茫然として動けなかった。

・・・

「……何だったンだ、ありゃあ……」

「命拾いした、と言う事でしょうか……と、ミサカはあの影の実力を目の当たりにして恐怖を隠せません……」

「分からないわ……あ、あんたは体に異変とかないの？」

「……ああ、大丈夫だ……」

上条当麻はいまだに何が起こったのかわからない、と言った表情だ。

「……とりあえず、クマが来たら帰るぞ。上条も、「シャドウ」って奴の事、気になるだろ？説明は後だ」

「ああ……でも……」

上条は御坂美琴を気にしている。

どうやら記憶喪失がばれた事を気にしているらしい。

「あんたにも聞きたいことはあるけど……今は疲れてるでしょ？詳しい事は、また今度にしましょ」

気持ちの整理もしたいしね。あんたもそうでしょ？と、御坂は弱弱しく笑った。

『おいこらクマ早くこいってんだ。と、ミサカはマジで気まずい空気を吸いたくないですと叫びます』

ものっそい気まずい空気をなんとかするべく、９９８２号はクマに無線を飛ばすのだが。

「お？もう入っていいクマ？」

クマは物陰に隠れていた。

「オイ貴様、何でもっと早く来なかった。と、ミサカは職務怠慢の容疑で断罪します」

「ま、待つクマ！クマは足手まといにならないようにですねクマ……！」

「正直に答えないと鋼鉄破りのさびになるぜ……？クマ、てめーはいつからそこにいた？と、ミサカは尋問は既に拷問に変わっていることを示します」

「え、えーっと、丁度騎士が倒れたあたりですかねクマ……」

９９８２号は親の仇を見るような眼でクマをにらむ。

「わわわ、助けて一方通行ン！」

「だァれがアクセラレータンだぁ！？」

「ぶふっ、良いですね、あくせられーたん……と、ミサカはクマのネーミングにＧＪを送ります」

「へ？そうクマ？へっへへー、やっぱクマはすごいクマね！あ、そこのツンツンも霧の中見えるように眼鏡いる？」

「あ、ああ……もらっとくよ、ありがとな」

やはりあのようなわけのわからないことがあった上に、
ひた隠しにしていたことがばれたせいだろう。普段の上条からは考えられないほど気が落ちている。

「つぅかよぉ、クマお前何処行ってやがったンだ？
これからはあの空き地に居やがれってンだ」

「ゴメンクマ……前シャドウは何から出来てるんだろって話した時に、
人の心から出来るって話だったクマよね？だったらクマは何から出来てるんだろうって思って……」

「そういえばそうですね、クマのきぐるみの中は何ですか？と、ミサカはきぐるみをｔ――！！」

中身が無かった。
これには気落ちしていた上条の顔もこわばる。

「な、なな……なにそれ！？」

「クマー！クマは見ての通り空っぽクマ！だからそれ返すクマー！」

きぐるみの頭を再び装着するクマ。
４人の表情は上条の影を見た時のような表情である。

「変だ変だとは思ってたがここまでとはなァ……」

「あ、あはは……ここまでトンデモ体験したのは流石の上条さんも初めてですことよ……」

「あァ、そうだ。上条、お前これからどうする？」

「へ？どうするって？」

「いや、お前の分身だよ。あれ、放っておくのか？」

「あいつな……あのままでも、良いと思うんだ」

「なっ……！何言ってんのよ、あんた！」

「だってそうだろ？アイツ言ってたじゃん、俺はもうお前じゃない、って。
それなのにいつまでも俺の中に閉じ込めてたんじゃ、かわいそうだと思わないか？」

「それなら……！」

あんたの心はどうなる。自己犠牲も甚だしい。
自分の為に自分を犠牲にすると言うのか。
御坂は再び異を唱えようとする。

「良いのか、それで？」

しかし、そんな御坂を一方通行が止める。

「ああ」

「後悔しねェか？」

「ああ」

「本当に？」

「～～ッ！ああ！！」

「……お前、言ったよな？困ってる事があったら、頼れって。ダチなんだからって。
だったらよォ、頼れよ。俺を、俺らを！！」

「でも、あいつは……！俺から出て行きたいって…！」

「……シャドウってのは、お前が表なら、あいつらは心の裏側だ。
もしあいつがお前じゃないってんなら、
お前からはもう一体、お前の心として、シャドウが出ないとおか

しい。
でもよォ、いつになったらお前の心は出てくるんだ？
それが何よりの証明だ。アイツはどこまでいこうと、お前なンだよ。
……例えお前が死ンでも、なァ」

「……いいのかよ、俺が絡むと確実に面倒なことになるぜ？」

「あァ、問題ねェよ。事のついで程度にやってやる」

「ははっ、俺の不幸も第一位なら片手間に片付けてくれるってか、そりゃ助かる。
……俺は、あいつともう一度話し合いたい……
今まで押し殺してきた事を謝って、もう一度、一緒にやり直してえよ……！！」

上条がギリッと悔しそうに歯を食いしばる。
一方通行はそれならどうする？と尋ねる。上条は既に決意を固めている。
その目は再び決意の炎に燃えていた。

「一方通行、御坂、えーっと御坂妹、そんでクマ？
……力を、貸して下さい。頼む！」

４人は迷わず同意した。

・・・

「それじゃあ、これからはちゃんとここにいるクマねー」

「おォ、ちゃんと居やがれ。ほぼ確実にまたひと悶着あるに違いねェからなァ」

「当面の目標はか、かみ…あ、あんたの影を見つける事と、」

「実験に関する情報収集にマヨナカテレビの監視、ですね。
と、ミサカは心機一転気を引き締めます」

「え、えーと、俺だけほぼ戦力にならないのは確実だから、鍛えてもらえるとありがたいかなーなんて」

5人は決意を新たにし、「仮称特別捜索隊」を結成した。

――――4人との間に、ほのかな絆の芽生えを感じる。

我は汝…、汝は我…

汝、新たなる絆を見出だしたり…

絆とは、まことを知る一歩なり。

汝、「愚者」のペルソナを生み出せし時、

我ら、更なる力の祝福を与えん…

４人との絆に呼応するように、「心」の力が高まるのを感じた。

「愚者」属性コミュニティである「仮称特別捜査隊」コミュを手に入れた。

クマと別れテレビから戻り、４人は各々自分の部屋に帰って行った。

・・・

＜???＞

「良いのか?」

「何がだね」

「一方通行と幻想殺しについてだよ。幻想殺しに至ってはその能力を全部影に持っていかれてるじゃないか」

「ああ、そんなことか。問題あるまい」

「ッ……!幻想殺しはプランの要ではないのか!?それをあっさり

奪われて！」

「あれは奪われてなどいないよ。あの力は、上条当麻に宿っていなければ、正しく力を発揮できない。
良くも悪くも、あの影もまた、上条当麻なのだよ」

「……いつか強くなりすぎた影が貴様の喉笛を噛み切る事になっても、俺は知らんからな」

「それこそ要らん心配だよ、いざとなったら影も取り込む。
あれは今の上条当麻よりも幻想殺しを理解し、使いこなせている」

「チッ、貴様の不幸と不穏を祈ってるよ」

「あぁ、それらも計画に取り込んでみせよう」

男が別れを告げ、その人間の前から消えた。

## そのじゅうろく（後書き）

作中に出てくるトンデモ理論にはもうウンザリだ！というそこの貴方！
仕方ないんです！仕方ないんです！許してください！

## そのじゅうなな（前書き）

日常パート。
淡々としてつまらないかもな

**そのじゅうなな**

上条当麻は、不幸だった。

一歩歩けば財布を落とし、

二歩歩けば靴紐千切れ、

三歩歩けば不良に絡まれ

……ていたのだが、ある日を境に、財布も落とさないし靴紐もちぎれない。

不良に絡まれるのも自分から首を突っ込む場合のみだ。

しかし、不幸になりにくくなったと言うのに、上条の表情は暗い。

「俺って、幻想殺しが無いと、無力なんだな……」

幻想殺しと言う異常。

これの恩恵を得られなくなった上条は、相手が能力者とわかるや否や、

１対１でもなるべく逃げるようにしようと思う。もちろん助けた相手が逃げたのを確認してからだ。

幻想殺しの力に頼りきっていたんだなあと実感したのは、

自分から影が居なくなった日の次の日だ。

力が無くなったと言うのに、それでも人助けの為に動けると言うのは流石としか言いようが無い。

しかし、力が無くては何も出来ない。

いくら立派な理想を掲げても、

力が無ければ、

ただの高望みだ。

しかし、上条当麻はそれでも抗う。

守るために。

力が無ければどうするか。

そう、鍛えればいい。

「成程なァ……言いたい事はわかった。けどよォ……」

一方通行は、上条の言い分に理解を示す。

しかし、納得はしていない。

「言っとくが、俺なンか能力に頼り切ってきたせいで、自分で言うのもなンだが、滅茶苦茶弱いぜェ？」

俺を鍛えてほしい。と、上条が一方通行に頼みに来たのは、自分の無力さを痛感したその日だ。

行動力があるのは立派であるが、いささか早計ではないか、と一方通行は思う。

だが、一方通行にはアテがあった。鍛えてもらえそうなアテが。

あわよくば自分も体を鍛えられたら、とも考える。

テレビの中に行って実感させられた。

「俺には、体力がねェ。つゥかなさすぎる」

テレビの中、あの場を戦い抜くには能力一辺倒ではいざという時困ったことになる。「能力はもう使えないンで、ここは見逃して下さい」なんて、笑い話にもならない。

こうして一方通行と上条は、とある人物のコネを頼ることにした。

ちなみに、９９８２号は、体の調整の為、とある病院に足を運んでいる。

護衛の任はどうしたと言いたいが、基本的にはミサカネットワークによって、互いの動向は互いに監視できるので、普段からそこまでピッタリくっついている必要はないらしい。

そんなわけで、９９８２号が泊りがけで病院に行くと一方通行に告げた時、ついてくる気配のなかった一方通行に若干の不満を抱いていたのは余談である。

・・・

芳川桔梗の知り合いにアンチスキルがいるらしい。
その情報を頼りに一方通行と上条当麻の二人は芳川に事情を説明し、アンチスキルを紹介してもらうよう頼み込んだ。

芳川は一方通行のもやしっぷりはすさまじいけど、立派な能力があるせいで何も言えなかったこともあったのか、喜んでその人物を紹介した。

「……黄泉川先生？」

「おー、鍛えて欲しいってのは月詠センセんとこの３馬鹿じゃん？こっちは……誰？私は黄泉川愛穂、教師じゃん」

黄泉川愛穂は自分が教鞭をふるう学校で、いつも馬鹿をやらかしてる３人の一人を見る。
これは面白そうだと喜びを示すが、もう一人はうちの学校の人間じゃないと察し、自己紹介を求めた。

「「一方通行」だ。呼び名もそれでいい」

「一方通行ってーと、第一位じゃん？どうしてそんな大物としがない学生であるはずの上条は友達やってるじゃん？」

「……まあ、長い人生生きてれば第一位の一人や二人と仲良くなりますよははは」

「いや、相当珍しいと思うじゃん、その体験は……」

「で、俺らを鍛えてくれるのか？くれねェのか、どっちだよ」

頼む側だと言うのに高圧的な頼み方をする一方通行。

黄泉川は、私らの訓練に一緒に参加するってことなら構わないじゃん、と返答するとともに、この超能力者の高圧的な態度も、死ぬほど鍛えて変えてやろうと心に決めた。

「ホントですか！？ありがとうございます！」

「まァ、よろしく頼むわ」

思い切り嬉しそうに喜ぶ上条と、表情は変えないが嬉しそうな雰囲気を出す一方通行。

全然違うタイプに見えて、意外と似てるとこもあるかもじゃん、と思う黄泉川だった。

・・・

今日は顔合わせだけで、そのうち吐くほど鍛えてやるから、今日のところはジムで筋トレでもやってるじゃん。

という黄泉川愛穂のありがたい言葉の元、一方通行と上条当麻はジャージに着替え、アンチスキル・ジャッジメント共用のトレーニングジムに足を運んでいた。

黄泉川を紹介した芳川桔梗は、二人がサボらないか監視する役、という名目で一緒にジムについてきて、二人が死にそうな顔になっ

ているのを鼻歌交じりに眺めている。

「お前……マジで大丈夫かよ……？はぁ……魂抜かれたみたいな顔してんぞ……

顔面蒼白っていうか……あぁ、元々白いんだっけか……」

と、肩で息をするものの、軽口を話す程度には余裕がある。

流石に喧嘩慣れしているだけあって、ある程度の土台は出来上がっているようだ。

しかし、一方通行の方はというと

「……」

上条の言葉に返答する余裕すら無くなっていた。

最初の腹筋で既に肩で息をし始め、続く背筋で汗だくになる。

上条はその辺の段階ではまだまだ余裕があったのだが続く腕立て伏せ当たりで、流石の上条の表情にも疲れが見え始め、今現在、ランニングマシンで死にそうな顔をしている。

上条ですらこのざまだというのに、一方通行がどうして無事でいられようか。いや、いられない。

すると一方通行の携帯から着信音が鳴り響いた。

一方通行は無言で芳川の方を向き、携帯を持ってこさせるよう手で指示をする。

どうやら走るのを止める気はないらしい。
一方通行は電話を手に取る。９９８２号からだ。
『もしもし、一方通行ですか？と、ミサカは一応確認します』
『……あン？９９８２号か……』
一方通行は返答するのに精一杯である。走るのを止めないあたり、根性は十分ある。体力はないが。
『信じてますからね、とミサカは本心を打ち明けます』
『……あァ？』
『用件はそれだけです、ではまた明日。と、ミサカは軽い挨拶を述べて電話を切ります』
意味がわからない。何しに電話をしに来たのか。
正直こちらはそれどころではないので、通話が切れたのを確認して、携帯を芳川に投げ返した。
９９８２号との通話が終わって早３０分。ランニング終了の狼煙は今だ上がらない。

「はぁ……筋トレは……「回数」っていうはっきりとした……ノルマがあったからよかったけど……
このランニングは……芳川さんが「終わり」って言うまで……続けろってどういうことだよ……」

「……」

芳川はニヤニヤしながら眺めている。いつになったらこの地獄から解放されるのか。
一方通行は上条の言葉にも答えないで走り続ける。

その様子を疑問に感じた上条は、そーっと一方通行に手を触れる。

「あ！こいつ能力使ってやがる！！」

「あァ！？お前言うんじゃねェよ！！」

根性はあるけど体力はない。その評価は根性無しの上に体力無しに変更された。

「あらあら、それは困ったわね……じゃあ、後一時間ね。
ずるをしたらノルマが倍になると思えば良いわ」

「お前……ぜってー能力……使うんじゃねえぞ」

「あァ？……だったらお前……さっきだって……
黙ってたら……よかったじゃねえか」

心の底から楽しい、と言う様子でノルマを課す芳川。
二人はこいついつか張り倒すと誓いを立て、無言で走り続ける。

・・・

２人がノルマを達成した時、既に１９時を回り、辺りが暗くなり始めていた。
一方通行は上条当麻に飯でも食いに行かないかと誘いをかけるが、

「あー、悪い！居候が腹すかせて待ってんだよな！」

と、言って帰る支度をしている。

「あァ？その居候は飯の一つも作れねェのかァ？」

人の事を言えない癖に、一方通行はストレートにその居候を批判する。

「あー、家事の一つでも手伝ってくれりゃうれしいんだけどなぁ…」

と、本気でガックリきている。

「まァ、人ンちの事とやかく言うつもりはねェよ。
つゥか急いでンなら、能力使って送ってやろォか？」

「お、マジかよサンキュー！」

一方通行は家まで能力を使って上条を送り届けることにした。
空を飛んでいたのはほんの少しの時間だが、他愛のない話で盛り上がり、
あっという間に上条の部屋の前に着地する。

そして一方通行はじゃあな、と告げ、通路から飛び降りて行った。
上条も飛び降りた一方通行に向かって、またなー！と声をあげる。

上条が部屋に入って行ったのを確認して、一方通行はその場を去る。
すると、上条の部屋から不幸だー！という叫び声が響き渡った。
一方通行は、あいつは居候と何やってンだ、と言った顔であきれながらも、
口元には笑みが浮かんでいた。

・・・

一方通行は帰路につく。が、部屋は荒れ放題で、食べ物も無い。
引っ越したほうがいいかな、と思うが、それを今思っても仕方が無い。
したがっていつものレストランに向かうのだが。

「あれ、今日はお一人様ですか？」

「お？あァ、たまにはな」

と、気づけば打ち解けていたいつものレストランのいつもの店員に、いつもの席に案内され、いつも通り肉を頼もうとしたが、いつもとは違い、サラダも頼んだ。

店員はこれまた珍しい、と言いながら厨房へと向かう。

……最近は誰かと飯を食うのが当たり前になっていた。

今まで、そんなことがあっただろうか。誰かと飯を食って、下らない雑談をする。

一方通行が望んでやまなかった事が、ここ最近ではそれが当たり前のように為されていた。

幸せか？と、問われれば、幸せだ。と答えられるだろう。

しかし、それでいいのだろうか。

自分が今まで何をやってきたのか、忘れられるはずもない。

自分のような大罪人が、何故こんな人並みの幸せを得ているのか。

あのツンツン頭のお人よしなら、「お前は罪を償わなくちゃならない。でも、だからってお前が幸せになってはいけない理由なんてない」などと説教をかますだろうか。

確かに、それは一理あるかもしれない。だがそうじゃないんだ。

自分が殺した妹達が、一方通行に何を望むだろう。

死か？

苦しみか？

はたまた何も望まないか？

違う。そうではない。死んだ妹達は、「望むことも、望まないことすらも、何も出来ない」のだ。

だからこそ、これからどうするのか、と言う事を決めるのはいつだって生きている者達だ。

故に一方通行は考える。自分はこのままでいいのか、と。

分からない。本当にどうしたいのか、どうするべきなのか。

と、ここで注文した料理が届いたので、一方通行は一端思考を打ち切った。

・・・

「はぁ……」

御坂美琴は常盤台のロビーのソファーに座りこみ、物思いにふけっていた。

実験の事、テレビの事、上条当麻の事、そしてこれからの事。

既に妹達の生存権は獲得できた。後は学園都市の闇が再び妹達に目をつけないか見張るだけだ。

しかし、それだけでは駄目だ。死んだ妹達の分まで、生きている

妹達には幸せになってもらわなければならない。

童話とは違い、囚われのお姫様を、そこから救うだけではハッピーエンドにはならないのだ。

いつか妹達と、笑って昔話が出来るように。そのための環境を作らなければならない。

しかし、忘れてはならない。自分が、一方通行が、妹達を勝手に生んで勝手に殺した、と言う事実を。

御坂の結論は、こうだ。
いずれ自分が死んで、妹達の元へ行った時。
笑ってこんなことがあった、あんなことがあった、と言えるような人生を送ろう。
その為には、まずはテレビと、妹達のことだ。

上条当麻の事も気になるが、言いたくないことを無理矢理言わせる趣味はない。
自分で話してくれるまでゆっくり待とう。

決意を新たにした御坂は、９９８２号の元へ向かうべく、ソファーを立つ。
９９８２号は今日、病院に泊りがけで調整を行うらしい。
流石に泊まるわけにもいかないが、軽く話でも、と思う。

「おねぇさまぁぁ～！！（ハスキーヴォイス）」

すると聞き覚えのあるハスキーボイスが飛んでくる。

「ってどこさわってんだコラァ！」

御坂は思わず自身に跳びついてきた少女に向かってカウンターでチョップを放った。寮内での能力使用は厳禁なのだ。

彼女もまた、常盤台屈指の能力者で、レベル４のテレポーターである。

更にジャッジメントに所属しているため、基本的には犯罪者を拘束するために能力をふるう。

しかし、御坂を相手にすると能力の使い方は一変する。

如何に不意をついて御坂に触れるか、揉みしだくか。

この欲望に忠実に生きる少女の名は。

「はぁあああん！！」

御坂の後輩の、白井黒子だ。彼女は御坂を強く慕っている。

その思いが行きすぎることが多々あるのが玉にきずだが。

「ところでお姉さま、どちらに向かわれますの？」

興奮状態から落ち着いたので白井は、よろしければお送りしますが、と言う。

確かに、黒子のテレポートは便利だ。
しかし、向かう先に私とほぼ同じ造形をした人がいるとなると、話は違う。

十中八九、いやほぼ確実、いや百発百中で黒子は暴走するに違いない。
そう考えた御坂は事情を悟られぬよう、やんわりと断る。しかし、

「お、お姉さま、もしや……あの白い殿方との逢引を……！？」

「は、はぁ！？何言ってんの！？」

「私、知ってますのよ！ここ最近白い殿方とよく一緒にいるのを！」

こないだは寮の近くまでお姉さまを送っていらしておりましたわね、
ああなんて優しい殿方なのでしょう、むきー！！いつかぜってーコンクリに沈めますの！！
と、この世の終わりはその白い殿方のせいだ、と言わんばかりにハンカチを噛む。

白い殿方。間違いなく一方通行だ。しかし御坂からしたら一方通行はただの友達で、
あちらは自分の事を友達と思ってるかどうかすらあやしい。

「違うわよ、あれはただの友達」

「あら、珍しいですわね。
お姉さまが友達だ、などと言いきれるほど、その白い殿方は素晴らしい人物なんですの？
成程、それは一度でいいのでお目にかかりたいですわね。
お姉さまともっと仲良くなるための参考になるやもしれません」

本当にこいつは軸がぶれないな。
と、目の前のストレートに自分の気持ちをさらけ出す白井を見て、クスリと笑う。

自分が思う事をはっきり伝える事の出来る白井の事を、御坂は少なからず尊敬している。
しかしそれを補って余るほどの変態っぷりを発揮しているので、素直に褒める事の出来ない御坂であった。

「悪いけど、その白いのは関係ないわ。そのうち紹介してあげる。
そして今日はただのお見舞いよ、お見舞い」

と、御坂はヘラッと笑ってこれからの予定を教える。

「あら、そうでしたの。その方と何か話したい事でもあるのですね？」

白井は変態だが、空気は読める。ついて行くと言いだすと思ったが、あっさり引いてくれた。

「まあ、そんなとこよ。悪いわね、気を使わせちゃって」

「いえいえ、お気になさらず。私はお姉さまの事を第一に思って行動いたしますから」

それでは、門限は守って下さいまし。と白井は別れを告げ、部屋に戻って行った。

「……いつもありがとね、黒子」

御坂は白井への感謝を告げ、座りっぱなしで固くなった腰の為に伸びを一つして寮を出た。

・・・

９９８２号は現在、病院にいる。生きていくために体を調整するためだ。

体の調整が終わると、各妹達は世界中の学園都市の機関へ向かう事になった。

実際に会う機会は減ってしまうから少しさみしい気分になるが、ミサカネットワークでいつでも話せるのでそこまででではない。

それぞれミサカ達も、急に実験が凍結されたことへの戸惑いがあったが、

終わってしまったものは仕方なく、どうせ拾った命だからという

事で、
　これからは自分の為に生きてみよう。と、ネットワークを介した大会議でこれからの生きる道を決定した。

　そんな中、９９８２号を含め、４名のミサカ達が学園都市に残る事になっている。
　番号の若い順から、９９８２号、１００３２号、１００３９号、１３５７７号である。
　彼女らは各自病院や研究所での手伝いをする事で生計を立てることになるのだが。

「どうにも納得が出来ません。と、ミサカは９９８２号の待遇の良さに不満を抱きます」

　９９８２号は一方通行の元で暮らすことになる。
　実際は、妹達が世界中に散らばるのが終われば、最早護衛は必要ない。と言う話だったのだが。
　本人たっての希望で、護衛と言う名目でそのまま一方通行の元に９９８２号を置くことを決定した。

　ところで、一方通行は学園都市第一位だ。実験などに大量の時間を費やしていた。
　故に趣味など皆無。その上実験による報酬で金は山の様にある。
　玉の輿も良いとこだ、学園都市第一位というブランドも相まって人生最早怖いもの無し。
　その上顔も良いときている。それらが１３５７７号にとって不満なのだろう。

「とはいったものの、一方通行だって別にいやがってませんでしたし。

と、ミサカは別に金の為何かじゃねーしとアピールします」

９９８２号は言い訳をする。なんだかんだで９９８２号は一方通行のことを気に入っているのだ。急に離れ離れになるのはイヤという程度には。

「ミサカは別に９９８２号の処遇に不満はありませんが、最近９９８２号はミサカネットワークにつながらないことが多くないですか？

と、ミサカはその間何やってたのだろうと素朴な疑問をぶつけます」

１００３２号は最近思っていた疑問を９９８２号にぶつけた。

「そ、それは……」

言えるはずもない。と言うか信じてもらえないだろう。テレビの中にいたなどと。

言えるはずもない。もしかりに信じられたとして、他のミサカ達を巻き込むわけにはいかない。

そう考える９９８２号は、１００３２号の質問に言い淀む。

「ひょっとして……９９８２号は一方通行としっぽり通行……！？

と、ミサカは全ミサカにこの事実を伝えねばなりません」

今まで無口を貫いていた１００３９号が口を開いた。流石にその

ダジャレはネタとしても品位としても駄目だ。

「おいカメラ止めろ」

「ず、ずるいです！と、ミサカも一方通行の寵愛を受け、金を――」

「何が寵愛か！！違います！事情は言えませんが！！と、ミサカは……」

と、弁明をしている最中、１３５７７号は何かを思いついたようで、提案する。

「一方通行の９９８２号への思いが本物か、テストしましょう。と、ミサカは３人に提案します」

テストの内容はこうだ、と１３５７７号は説明する。

９９８２号とは別のミサカが一方通行の元へ帰り、９９８２号ではないといつ気付くか。

「結構な時間を９９８２号と過ごした一方通行なら、朝飯前ですよね？

と、ミサカはドヤ顔で提案します」

「ぐぬぬ……これをクリアしたらもう文句はないのですか？と、ミサカは確認を取ります」

3人は、それで異論はありません。と同意した。
決行は翌日、と話し合った後、3人と別れる。
すると3人と入れ替わりのタイミングで、御坂美琴がやってきた。

「おーっす、ゼリー買ってきたけど、食べる？」

「おお、丁度いいところにお姉さま。実は相談があるのですが」

「へ？ああ良いわよ」

じつはかくかくしかじか時価二億とミサカは事情を説明する。

「あっはっは、面白いじゃない！良いじゃない、一方通行が気づけばいいんでしょ？」

「それはそうですが……見分けなんてミサカ達でもつかないと言うのに……と、ミサカは……ミサカは……」

一方通行の事は信じたい。でも、見分けつかなかったら、悲しい。
９９８２号はもしもを想像して、うなだれる。

「大丈夫でしょ、だってあんたにはこれがあるじゃない」

と、御坂は自身のゲコ太携帯を取り出し、９９８２号に見せた。

「成程、そう言えばゲコ太がいましたね！と、ミサカは希望を見出せたことに喜びを表します！」

「あ、でも、他の妹達は携帯持ってるの？」

「あ」

「まあ何にせよ、決まったことなんでしょ？一方通行の事信じてあげなさいよ」

「ぐぬぬ、仕方ないですね……と、ミサカは一方通行への信頼を示すため、ここは引きます」

「事の顛末、終わったら教えなさいよね」

御坂は９９８２号と軽く話した後、持ってきた見舞いの品を置いて帰って行った。

９９８２号は、その品をベッドのそばにある戸棚の上に置き、屋外へ向かう。

『もしもし、一方通行ですか？と、ミサカは一応確認します』

『……あン？９９８２号か……どォした？』

一方通行は何やら肩で息をしている。９９８２号は、とりあえず言いたい事だけ伝える。

『信じてますからね、とミサカは本心を打ち明けます』

『……あァ？』

『用件はそれだけです、ではまた明日。と、ミサカは軽い挨拶を述べて電話を切ります。』

プチッと電話を切る。

はっきり言って一方通行には何一つ伝わらなかっただろう。

電話をした途端、言いたいことが全部吹っ飛んで行ったのだ。仕方が無い。

「まあ……なるようになるでしょう。と、ミサカは後は静観するのみ、と言う事で高みの見物を決め込みます」

そして再び病院の中へと、吸い込まれるように入っていった。

・・・

一方通行は既に体力の限界だと言うのに、軽くランニングをしながら帰路につく。

今までは能力に頼った生活をしていたので、
こうした日常から能力に頼らず生活することで体を鍛えようという考えだ。

するとそこに御坂美琴が現れた。

「あれ、一方通行？どしたの？」

一方通行がランニングなど珍しい。と言うか奇跡？と言った具合でじろじろと一方通行の服装を見る。
見事にその辺でランニングしてそうな人のジャージ姿そのものである。

だと言うのに髪の毛は真っ白肌も真っ白なのだからものすごく目立つ。
一方通行は気にしていないようだが、はっきり言って

「に、似合わない……」

似合わなすぎて笑える。
御坂の様子を見た一方通行はというと

「うるせェ……ンなこと、分かってンだよ……」

割と真剣にランニングをしていた。

「ねぇ、ホントにどうしたの？第一位なのに体なんて鍛えて」

「あァ？俺はその能力に依存していたせいでこンなンなってンだよ……」

「もう能力使えませンから勘弁してください」で罷り通る世界にいるわけじゃねェンだ。

それをあのテレビン中で改めて実感させられた」

「成程ね……あんたも、色々考えてるんだ……」

御坂は邪魔しては悪いと思い、そこで別れを告げる。

一方通行は、ゆっくりだが、確実にペースを落とすことなく走り去って行った。

「……私も、能力だけじゃなくて体鍛えないとなあ」

妹達を守る。口だけならどうとでも言えるだろう。しかしそれには力を伴っていなければただの夢物語だ。

御坂はその日白井黒子に、ジャッジメントのトレーニングに混ざらせてもらうよう頼み込んだ。

# そのじゅうなな（後書き）

小さな事をこつこつと。

## そのじゅうはち（前書き）

日常パートです。変なノリになった
５／２９　１３：２７　痛恨のミス修正
５／２９　１４：０４　試験的にセリフから名前を削除。べ、別に全話編集が面倒だったとかそんなんじゃねーし

## そのじゅうはち

＜一方通行ｓｉｄｅ＞

何かがおかしい。一方通行がそう感じたのは調整を終えた９９８２号が一方通行の元へ戻ってきてから間もなくの事である。
違和感を感じたのは９９８２号の行動や言動だ。

９９８２号が一方通行の部屋に入るなり、何だこれは、と叫び声を上げた。

何だこれはと言われるのは仕方が無い。
一方通行の部屋はスキルアウトが逆恨みして荒して行ったのでものすごく荒れている。
ここ最近はそんなに無いのだが、いつ荒されるかわかったものではないので部屋はそのままにしている。

無駄な労力は使わない主義なのだ、一方通行は。

しかし、そんなこととうの昔に知っている９９８２号が何故今さらそんな新鮮なリアクションを取るのか。
ひょっとしてこの荒された部屋に大概嫌気がさしたのだろうか。

確かに、自分も一人ですむならまだしも、９９８２号と一緒に住むのだ。
いつまでもこんな荒れた部屋にいるわけにもいかない。

その考えを９９８２号に伝えたところ、なんだかものすごく嫌そうな顔をした。

わけがわからない。

何にせよいつまでも部屋にいたところで空腹からは逃れられないので、いつものようにレストランへと足を運ぶ。

すると何を思ったのか９９８２号が腕を組もうとしてきた。反射した。

９９８２号は不満そうな顔をしたが、飯の話をしたら顔を輝かせた。そんなに腹が減っていたのだろうか。

しかし、いつものレストランに連れて行ったところ、表情が一変した。

いつもこの店で飯を食っていたというのに、何だその金持ちがケチケチしやがってみたいな顔は。

よくわからないが、とりあえずいつも通りドリンクバー券を二枚店員に渡す。

９９８２号はなにやらものすごくショックを受けた顔だ。いつもは喜んでドリンクバーへと向かうと言うのに。

９９８２号はしょんぼりとハンバーグを食べ終え、自分も完食したので会計へと向かう。

と、そこで財布を開いた時、カードを落としてしまった。ブラックカードだ。

９９８２号はそのカードを見て目を輝かせている。ブラックカードだけあって珍しかったのだろう。

しかし正直なところ、クレジットカードと言うものは使いたくない。

どこで誰が見ているかわかったものではないからだ。情報は残さないに限る。

よっていつも通り小銭を確認して、小銭では足らなかったので普通に夏目漱石さんを二枚差し出す。

昔の紙幣はさっさと使うに限る。つい最近は新渡戸稲造とも別れを告げた。

学園都市第一位たるもの、常に時代の最先端を行かねばならないのだ。

しかし、９９８２号の表情は暗い。ひょっとしたら去りゆく夏目漱石を悼んだと言うのだろうか。

やはり、妹達は感情のある人間だ、と改めて思う。

こんな紙幣にすら別れを惜しむのだ。そんなこと普通の人間にだってできやしない。

どうして人形が人間にすら出来ないことを出来るのだろうか。いや出来ない。

一方通行は９９８２号の感情を再び知ることで、その表情に影をさす。

９９８２号が訝しげにこちらを見ている。

どうやら自分の表情が暗くなっているのを見て気を使っているのかもしれない。

自分は、９９８２号に何と言ってやればよいのだろうか。

その答えは、まだ一方通行には出ない。

しかし、ついポツリと、９９８２号に向かってつぶやく。

すまん、にくまずにはいられねェだろ……と。
だが、９９８２号はしばらく黙り込むと、そんなことはない、ありがとう。と返した。

ありがとう、だと？あれだけ殺した自分に向かって、ありがとうなんてありえない。

しかしここで、御坂美琴の言葉を思い出す。

「私がＤＮＡマップ提供しなくちゃ、あんたという超能力者がいなくちゃ、
久々葉や他の妹達は生まれてこなかったじゃない。
私たちはそれだけは誇りに思うべきなのよ」

そうだ、９９８２号はおそらく、自分が生まれたのは一方通行や御坂がいたおかげだ、と言いたかったのだろう。
だがそれで勘違いしてはいけない。それでも一方通行は一万人近くの妹達を屠ってきたのだ。

つまり、今まで殺してきた事は許さないが、生まれた事それ自体には感謝をしている。

やはり、妹達はまごうことなく人間だ。しかし、お世辞にもその将来は明るいとは言えない。
一方通行は、妹達の将来を切り開くこと、それが唯一の贖罪である、と再確認して。

もう一度、すまない、と９９８２号に向かって謝った。

・・・

＜１３５７７号ｓｉｄｅ＞

一方通行と９９８２号の関係を明らかにするため、
１３５７７号が９９８２号と代わって一方通行の元へと行くことになった。
というか立候補した。なぜなら第一位の生態に興味がわいたからだ。

実験漬けにより、一方通行は金持ちのはず。
ならば普段の生活にそれがにじみ出る事請け合いだ。
１３５７７号は、９９８２号の事よりも、一方通行の金で軽く遊べたら良いや程度の気持ちで一方通行の部屋へと向かう。

確か９９８２号の案内ではこの部屋のはずだ。

しかし１３５７７号の表情は硬い。
なぜなら目の前の扉は本来の形を逸脱して大きく歪み、
その扉には死ねとかファックとか、汚い罵倒の落書きで占められていた。

扉はさておき外装は立派なマンションだ。内装も良いに違いない。
そう思って扉を開けると、そこは魔空間だった。

思わず何だこれはと叫んでしまった。

荒された？誰に？まさか一方通行自身がこれを？
しかしそれだと扉の落書きの説明がつかない。
混乱する１３５７７号をよそに、一方通行は何を今さら、と言った顔をしている。

一方通行は少し考えこみ、１３５７７号はその様子をしばらく眺めていた。
　すると一方通行は、こんな汚い部屋にいつまでも居るのも居心地悪いだろうから、引っ越しでもするか？と、１３５７７号に尋ねた。
　しかし、自分は９９８２号ではない。自分を差し置いて９９８２号が良い部屋に住むのは許せないと思い、嫌そうな顔をした。
　一方通行は、何やら納得のいかない表情だ。だがすぐに切り替え、飯を食いに行くぞ、と１３５７７号に伝える。
　１３５７７号は待ってましたとばかりに顔をほころばせる。
　第一位の食事だ。質も第一位に決まってる。
　そう考えると気分も上がり、思わず一方通行の腕を組もうとする。
　反射された。
　こんな美少女捕まえて腕組み拒否とはなんて男だ、と憤慨した。
　さて、一方通行と１３５７７号は、レストランについたわけだが、１３５７７号は愕然とした。
　――――天下の第一位様が、ファミレスだと？ケチケチしやがって！！
　奢ってもらう手前、もっと高いもん食わせろ等と言えるはずもなく。
　しぶしぶ一方通行について行くのだが。
　更にショックを受けたのは、店内に入ってからだ。

――天下の第一位様が、ドリンクバー無料券だと!!?ケチケチしやがって!!

イメージ崩壊。金持ちから庶民へと、一方通行株は暴落していった。

１３５７７号はしょんぼりしながらハンバーグを食べる。美味しい。

あわよくばこのまま９９８２号と成り変って玉の輿を狙ってやろうとも思ったのだが。

幻滅だった。まさに幻滅びる。勝手に期待されて勝手に失望された一方通行からしたら迷惑以外の何物でもないのだが。

２人は食事を終え、会計に向かう。すると一方通行が財布からカードを落とした。

あれは……

――黒き富の象徴ッッッ!!!（ブラックカード）

あれをお目にかかるのは初めてだ。

ザ・金持ちの代名詞たるブラックカードを持つ一方通行は、やはり金持ちだ!

一方通行株急上昇ッッ！！復活ッッ！！一方通行株復活ッッ！！

そのまま会計で「じゃ、このブルァァック（巻き舌）カードで」とか言って支払いをするのだろうか。

これはかっこいい。濡れた。抱いてほしい。

そう思ったのもつかの間。一方通行はカードをしまい、小銭を確認しだした。

……あれ？なんで小銭？貨幣は持たない主義だと思ったのに。

すると二枚の夏目漱石を取りだす。ふ、古い……

これが二人の夏目漱石ではなく、裏には紫式部、表には守礼門が描かれた紙幣を取りだされていたら、

一方通行株は間違いなく崩壊していただろう。

それほどの衝撃だった。

金持ちは貨幣を持たないんじゃなかったのか！

持っていたとしても諭吉オンリーじゃないのか！

期待させやがってファッキンジャップめ！

１３５７７号は憤りを感じるが、すぐに考えを改める。

ひょっとしたら、実験中止になったことへの責任で、多額の賠償金でも請求されたのだろうか。

いや、そうじゃないにしても、１３５７７号を含む妹達の生活が

安定するまでの費用を、
一体だれが払っていたのだろうか。

学園都市がそこまでしてくれるとは思えない。
だとすると、それは目の前で財布の中身を確認している白髪なのではないか。

それならつじつまが合う。

荒れた部屋は、おそらく研究中止になったことへの恨みを一方通行にぶつけたものだ。

そしてブラックカードがあるのに使わないのは、現金しか使わない事で、確実に出費を把握するためだ。

これらが意味する事は一つ。

一方通行は今現在、金を持っていないッッ！！

１３５７７号は、途端に悲しくなった。
自分達を養ってくれていたのは、目の前の男だと言うのに、
勝手に金持ちだと思いこみ、勝手に失望した。こんな最低な話があるだろうか？

おそらく、目の前の男は妹達に罪を感じて、そのような行動を取ったのだろう。

確かに、一方通行のしたことを、１３５７７号は許すつもりはない。

だが、一方通行は真剣に妹達の事を考えてくれている。

実験道具でしかなかった妹達にとって、思ってくれる人がいると言うのは、新鮮であり、とてもうれしいものであった。

なのにその思いを踏みにじるような考えをしたことを、１３５７７号は恥じ、その表情は暗くなる。

それを見た一方通行は、ぽつりとつぶやいた。

１３５７７号はそれを余り聞き取れなかったが、「すまン……にくまず……」という部分は聞きとれた。

にく、というと先ほど食べたハンバーグの事だろうか。

そして一方通行の申し訳なさそうな表情。

これらが示す答えは一つ。

――――すまン……肉、不味かったか……？

うわあああああああああ申し訳ねえええええええええええええええ

奢らせといて肉不味いなんていえるかあああああああああ！！！

つうか普通に美味かったしいいいい！！！

思わず、そんなことはない、ありがとうと返した。

一方通行はそんな１３５７７号を見て、あっけにとられていた。

しばらくしてもう一言、すまない、と言ってきた。

ああ、まさか妹達の一人であるミサカに感謝の言葉を言われるとは思っていなかったのだろう。

そうだ、確かにミサカは彼が行ったことを許すつもりはない。

しかし、少ない時間しか過ごしていないが、彼がミサカ達のことを思ってくれているのは確定的に明らかであった。

今日は、そのことを知れただけでも十分だ、と思う。

１３５７７号は、病院から呼び出しを受けた、と一方通行に告げ、レストランで別れた。

・・・

「……と、言う訳で、一方通行がミサカ達の事を思ってくれているのは確定的に明らかです。

と、ミサカは３人に結論を述べます」

１３５７７号は、勘違いした主観をあたかも客観的事実であるかのように語る。

「つまり……どういうことだってばよ……？」

１３５７７号には、もはや当初の目的など存在していない。１００３９号はそう思い、頭を抱える。

「もうめんどくさいから９９８２号は一方通行の元で過ごすってことでいいんじゃないですか？」

正直どうでもいいんです、と言わんばかりに、１００３２号は投げやりに９９８２号と一方通行の同棲に賛同する。

「それにしても……一方通行がミサカ達にそんなことをしてくれてたなんて……

と、ミサカは実は金欠な一方通行に同情を隠せません」

９９８２号はなるべく金のかからない生活をしよう。

と心に誓うのだが、実は１３５７７号の見当違いな勘違いであった。

しかし、妹達の生活費を捻出していたのは一方通行、という予想は見事に的中していたのだが、

それでも財力が底をつく事はなかった、とだけ注釈しておこう。

こうして、一方通行の預かり知らぬところで一方通行は妹達と絆を育んでいた。

以下略

一方通行は、「戦車」属性のコミュニティである「９９８２号（ｗｉｔｈ妹達）」コミュを手に入れた。

・・・

９９８２号（１３５７７号）と別れた一方通行は、そのままトレ

ーニングジムへと向かった。
今日はなにやら黄泉川愛穂と実戦形式で組み手をするらしい。
ただし、能力使用は一切禁止だ。
一方通行は考える。
はたして能力のない自分に何が出来るだろうか。
相手はアンチスキル。能力者を能力なしで抑えるプロフェッショナル。
おそらく何もさせてもらえずボコボコにされるのだろう。
自分に出来るのは、歯を食いしばって相手の動きを見て、吸収していくしかない。
実戦で戦えるようになるには、やはり実戦で学ばなければならないのだから。
痛いのは嫌だな、と思いつつも、この痛みに慣れておく事で今後役に立つはずだと考え、一方通行はジムの中へと入って行った。
「おー、よく来たじゃん。上条はもうトレーニングはじめてるじゃんよ」
黄泉川は額の汗を軽くぬぐうと、仰向けに倒れている上条を一瞥する。
「し……死ンでる……」
「死んで……ねぇ、よ……」
一方通行に突っ込みを入れつつも何とか立ち上がる上条当麻。

その姿はさながら生まれたての小鹿である。
よっぽどしごかれたらしい、と言う事が見て取れる。

「それじゃあ、着替えて来るじゃんよ」

一方通行は黄泉川の言葉にうなずき、更衣室へと向かう。

すると、女子更衣室から思わぬ人物が現れた。

「あれっ」

「あァ？なンで居るンだよ」

御坂美琴である。先日御坂は白井黒子に頼んで、アンチスキル・ジャッジメント共用のトレーニングジムへ通う事を許されたのだ。
ただし、その場合は白井も一緒に行くという条件付きで。

「あら？あらあらあらあら？あなたもしやお姉さまのご友人の……」

「あン？……まァ、そォだな」

一方通行は御坂の友達。本人がそれを認めてくれて御坂は少し嬉しくなった。

「何でその貴方がこんなところにいらっしゃるのですか？
よろしければ教えていただけませんか？」

「あァ、知り合いのコネでなァ。ここ使って体鍛えても良いってンでな」

「そうなんですの……あ、申し遅れましたわね。私、白井黒子と申しますの。おもにお姉さまの露払い役を仰せつかっておりますわ」

「それはあんたが勝手に言ってるだけでしょうが」

「……「一方通行」だ」

「一方通行、ですの？それは能力名でしょうか」

一方通行は、自己紹介するたび、いちいちそれは能力名ですか？と聞かれることにうんざりしていた。

偽名でも考えておこうか、と思う。何が良いだろうか。

「まあ、そうだ。呼び名は能力名でかまわねェ」

「それで、どうして一方通行さんは体をお鍛えに？」

「ン？そりゃあれだ。俺の能力の性質上、体なンぞ鍛えなくても問題ないンだが、

能力に頼りすぎたせいで……自分で言うのもなンだが、虚弱体質なンだよ」

「それは……なんとも……」

「あァ、そうだ超電磁砲。上条もここに居ンぞ」

「へ？嘘！？……いや、あいつなんて関係ないわよ！」

「まぁ！お姉さまったらあの類人猿などとお付き合いなさってますの！？」

「そ、そんなことないわよ！！」

「まァ、アンチスキルの奴にしごかれてるからなァ。
今頃他界してるかもなァ」

最初上条の様子を見た時、本気で思ったことだ。あれはどう見ても死んでいた。

「そ、そんな！！今すぐ行かなくちゃ！！」

一方通行の冗談に本気になる御坂。一方通行は、こいつやっぱ面白いな、と思うがからかうのも程々にしよう、とも思った。
御坂は純真無垢なのである。

「お姉さま……焦らなくてもアンチスキルの方がそんな暴挙に出るわけありませんの……
それでは一方通行さん、ごきげんよう」

「あァ、俺も着替えたら上条のとこ行くんだけどなァ」

「あ、お姉さまはジャッジメントの方で一緒にトレーニングすることになっておりまして、
類人猿と会う事はないと思いますのであしからず」

「え、なんでｙ」

二人はテレポートしてその場を去った。

「……テレポーターか」

もし少しはまともに動けるようになったら、あの白井という少女にも組み手を頼むことになるかもしれない。

何にせよ今は着替えて黄泉川に鍛えてもらわねば。

一方通行は男子更衣室へと入っていった。

・・・

死線はある程度越えている。

実戦もある程度こなしている。

しかしそれは、能力ありきでの話だ。

同じ無能力者という条件でなら。

「ほらほらどうしたじゃん、攻めないと勝てるもんも勝てないじゃん」

「……ゼェ……ハァ……」

一方通行は例え自分が１００人になっても目の前の巨乳には勝てないと感じた。

だがしかし。突破口はある。おそらく黄泉川はその突破口をわざと見せているのだと考える。

観察眼。一方通行のそれを養うために。

ヒントは示すが、そこから答えに持っていくのは生徒が自分で考える。

成程、黄泉川ほど教師に向いている人物はいない。

目まぐるしく状況が動く実戦のように見えて、実は黄泉川の動きには一定の法則があった。

「来ないならこっちから行くじゃん！」

黄泉川から攻撃を仕掛ける時、拳か足かはわからないが、右左右右左右左左、と言う具合で一定のリズムの攻撃を8回放つ事がわかった。

それがわかるまでに随分とボコボコにされたが。

「ッ……！（右左右右左右左……！）」

ここしかない。そう感じた一方通行は、黄泉川の左ストレートに合わせる。

すると黄泉川は笑った。その笑みは、突破口を見つけた一方通行を褒めるものではなく。

罠にかかったな、と言う獰猛な狩人の笑みだった。

「お前今、私がわざとヒントあげてるとか思ったじゃん？」

一方通行は状況を理解できない。

「実戦はそんなに甘くないじゃんよ！」

黄泉川は、一方通行がはなった左をかわす。

更に自らの左ストレートの勢いそのままに、一方通行の懐へと潜り込む。
ジャージの襟をつかむと黄泉川は一方通行の足を払いそのまま床へ倒した。

「ガフッ……！！」

思い切り床にたたきつけられた一方通行は、思わず肺から空気が漏れる。

「いやあ、私が攻撃する時の攻撃パターンを読んだのまでは良かった。
だけどそれは一方通行へのヒントじゃなくて、ただの罠じゃん」

ひょっとして、私の事良い教師だ。とか思っちゃったじゃん？ぷっぷぷー
と言うむかつく答え合わせを聞いて、一方通行は意識を手放した。

・・・

目を覚ますと黄泉川愛穂と上条当麻が組み手を行っていた。
やはり一方通行と比べると、肉弾戦では上条の方に軍配があがるようで、
黄泉川は上条に対してはかなり熾烈な攻撃を放っていた。

「おっ、ようやく気付いたじゃん」

黄泉川は上条の攻撃を片手で払いながら一方通行の方へと向く。
その余裕っぷりに頭に来たのか、上条は黄泉川の死角からハイキックを放つ。

しかし何処に目があるのか、明らかに見えてなかったはずなのに、ちょっとしゃがんで回避する。
驚愕する上条の顎にそのまま体ごと浮かび上がるアッパーをぶつける。

上条は何とかガードを試みるも、黄泉川はガードごと殴り抜け、上条の体は宙へ浮き、そのまま地へ落ちた。

「いやあやっぱり上条の方が喧嘩慣れしてるじゃん？
土台は結構出来上がってるじゃんよ。まあ筋トレはやってもらうけど」

一方通行の方はまずは体作りからじゃん。と、

「あァ、端からお前に勝てるなんて思っちゃいねェよ」

いずれぶっ飛ばす。と黄泉川に向かって言うと、その調子じゃん！と一方通行の頭をがしがしと撫でる。
普段なら反射をするところだが、今日は何故かされるがままだった。

「なーんかいつもと違って素直じゃん……？
ははーん、ひょっとして、こうして褒められるの、初めてじゃんよ？」

「あァ！？余計なお世話だっつーの！！」

「あっはっは！照れるな照れるなじゃん！可愛げない奴じゃんって思ってたけど、
こうしてみると結構可愛いとこあるじゃんか！」

黄泉川は更に強く頭を撫でる。頭に来た一方通行は反射した。

「うるせェうるせェ！！俺ァ筋トレすっからなァ！！
お前らは勝手に殴りあってろォ！！」

ずんずんとその場を立ち去る一方通行。黄泉川は、その背中をクスリと笑いながら見送った。

以下略

一方通行は、「剛毅」属性のコミュニティである「黄泉川愛穂」コミュを手に入れた。

「さぁて……上条はこのまま実戦形式を続けるじゃん……？って、どこいくじゃん？」

これ以上この場に居ると殺される。本気でそう思った上条は、一方通行についていこうとする。

しかし　まわりこまれてしまった！

「い、いやあ……上条さんも筋トレをしてこようかなーなんて思っちゃったりしてるんですが……」

「何言ってるじゃん、上条は土台はそれなりなんだから、戦う技術メインで鍛えるんじゃんよ」

「あ、あはは……じゃあちょっと休憩がてらランニングマシーンでも……」

「さあさあ、どこからでもかかってくるじゃん！」

「……不幸だー！！」

上条の断末魔は、誰にも届かなかった。

・・・

一方その頃

「はぁ……はぁ……能力ないと、やっぱり黒子のが強いわね……」

「うふふ、当然ですの！それなりに鍛えてますので……」

白井黒子は歓喜していた。

組み手と言う名目の元、あこがれのお姉さまに触れたい放題なのだ。

ココはひょっとして天国か何かか？と勘違いしてしまうほどである。

しかし相手は常盤台のエース。運動能力もかなりのもので、寝技ばかりかけていた白井の技は既に見切られてしまったようだ。

「（流石お姉さま……ですが、まだまだですの）」

見切られたなら、別の攻撃を使えばいい。

例えば打撃技をもっと多様し、フェイントとして使って、寝技に

持ち込めばいいのだ。

しかしそれもすぐに看破される。

「あんたさあ」

御坂は手を止め、白井に尋ねる。白井も攻撃を止めた。

「なんですの？お姉さま」

「私に触れたいがために最終的に寝技に持ち込んでるんじゃないでしょうね」

「ギクッ！……そんなはずありませんの！！ジャッジメントの性質上、相手をとらえる術に長けているために、寝技になりやすくなっているだけですの！」

「成程ね……じゃあ、寝技禁止ね」

「そんな！殺生な！！」

これではまるでおあずけをくらった犬だ。

だが、犬……自分は御坂の、犬……？悪くない。

「……」

ジトーっと御坂は無言で白井を見つめる。

しかし、その視線に耐えられなくなった白井は。

「ッ……！お姉さまぁ～～！！」

しらいの　こうげき！
ルパンダイブ！
しかし　こうげきは　はずれた！

みさかの　こうげき！
かみなりパンチ！
こうかは　ばつぐんだ！

あぁ～ん！と、艶めかしい声が響き渡った。

## そのじゅうはち（後書き）

次回は非日常パートに突入です

# そのじゅうきゅう（前書き）

シリアスはじまるよ

## そのじゅうきゅう

上条当麻はお人よしである。
困っている人が居れば誰でも助けるという性癖を持っているため、気づけば重大な事件に巻き込まれていた、なんてことが多々ある。つい先日も、御使堕しなどと言う事件に巻き込まれた。
そこで、センスの悪い恰好をした巨乳の魔術師に幻想殺し消失の事実がばれてしまうのだが。
しかしその事件自体には一方通行は関与してないので、ここでは割愛させてもらう。

何にせよ、気づけば事件に巻き込まれていた。などと言うのはただの言い訳にしかならず、
夏休みも次の日は始業式だと言うのに、上条は宿題を一つも終わらせていなかった。
故の土下座である。学園都市第一位の頭脳を持つ一方通行相手に。

「いや……確かに今日は黄泉川もトレーニングは休みじゃンとか言ってたけどよォ」

「……見事な土下座ですね。と、ミサカは全身から漂う誠意から本気を感じます」

どうしたものか。

ここ最近はマヨナカテレビに人も映らないし、テレビの中を探索しても大したものは得られなかった。
対シャドウとの実戦にも慣れてきていた。
とは言っても、上条はここ最近学園都市外部に強制退去させられ

ていたので、余り実戦はこなせていないのだが。

ところで、毎日が夏休み状態の一方通行には関係ないことだが、御坂美琴や上条は学校がある。

そう考え、８月３１日、すなわち今日は休みにしようと昨日決めたのだが。

「……宿題くれェ出てからすぐに終わらせとけよなァ……」

と、呆れた目で上条を見つめる。

「夏休み始まって１週間で宿題は終わらせとくものですよ。まあ、きっーとまーいにーちが日曜日なミサカ達が言っても説得力皆無ですけどね。

と、ミサカは説得力半減な説教をします」

「はい。その通りでございます、閣下、公爵夫人」

一方通行と９９８２号の機嫌を損ねないように気を使う上条。

こんな交渉する暇があれば問題の一つでも解けばいいのに、と二人は思うが。

「まァ、わざわざこンなとこまで来て収穫無しじゃお前も報われないわな。つゥか９９８２号が夫人とかありえねェし」

そう、今現在上条は土下座をしている。一方通行の見るも無残な部屋の中で。

「痛そうですね。幸い血は出てませんが。と、ミサカは能天気に上条当麻の身体を分析します。

つーかそんなにミサカが不服ですか？」

ところで、本当にすまないという気持ちで胸がいっぱいなら、どこであれ土下座はできる。

例えそれが肉焦がし、骨焼く、鉄板の上でも。という名言がある。

肉焦がし、骨を焼く、鉄板の上……ではないが、何かの破片が散らばっている床の上で上条は見事な土下座を成している。

ここまでされて帰れはないだろう。そう考えた一方通行は。

「何にせよ、こンなとこで勉強なンざ出来ねェだろ。場所を変えるぞ」

「本当か！？サンキュー！！」

一方通行の言葉を聞き、まるで祖国の英雄が凱旋したかのように歓喜する。

どれだけ宿題を貯め込んでいたんだろう、と一方通行は思うが。

「（まァ、最近の学生が何を勉強してっか見てみるのも悪くねェ）」

だが、メンドクサイ方がデカいわなァ。と気だるげにつぶやきつつ、部屋を出る。

こうして、一方通行と、９９８２号、上条当麻の３人は上条の自宅へと向かった。

そォいえば、居候は？と上条に尋ねるが、それなら担任の教師に預けてきた。と言う。

別に居ても良いのに、とは思うが、おそらく居候は何か訳有りなのだろう。

「……なンかその居候に関して困った事があれば……相談くれェ、乗ってやる」

「……あぁ、ありがとな」

急にしんみりとした雰囲気になる二人をみて、９９８２号は

「（何これ？まさかのＢＬルート？あかんあかんそれはあかんて）」

見当違いな思考をしていた。

・・・

御坂美琴の朝は早い。

というのも、淑女たるもの優雅な朝を過ごすためには準備が必要ですの、

などというありがたい説法の元、白井黒子が無理矢理起こすからである。

御坂は特に朝が弱い、と言う訳では無いが、別に早起きする必要も無い日に早起きするのは好きではない。

故に休みの日はゆっくり眠りたいところなのだが、起きなければ白井が目覚めのキッスを、などとふざけた真似をするために、嫌々ながらも早起きをするのである。

かくして、ラジオ体操が行われる程度の時間に起きた御坂は、今日はテレビ探索も白井との組み手もお休みなので、特にやることがない。

とりあえず朝食をとり、身だしなみを整え、後は部屋でごろごろ（雷的な意味では無い）するだけなのだが。

「いけません、いけませんわお姉さま！常盤台のエースと言うものは、
常盤台中学の生徒たちにとって看板であり、模範となるべき存在。
そんなお姉さまが部屋でごろごろするなど、許されるわけありませんわ！
残念ながら私、本日はジャッジメントのお仕事があるので、お姉さまと一緒にはいられませんけども、
お姉さまはちゃんと外にでて女を磨かねばなりませんのよ！」

白井がものすごくうるさいので、渋々外に出ることにした。

女を磨く。と言われたところで何をすればいいのかさっぱりである。
そもそも、１日や２日で立派な淑女になれるかと言われたらそうではない。
日々の生活の中で少しずつ積み重ねていくものである。

淑女は一日にしてならず、なのだ。しかしこれは裏を返せば、今日一日くらいサボったって問題ないのではないか？
どうせ一日単位で見た時の淑女経験値（？）は微々たるものである。
０，００１くらいならニアリーイコールで０と考える事が出来るんだし。

などと微分というか極限っぽい思考を重ねていると。

「おや、御坂さんではありませんか。奇遇ですね、今日はどこかおでかけですか？」

目の前には背の高い、さわやかイケメンボーイがいた。その名も

海原光貴。

御坂は正直言って、目の前のイケメンが苦手だ。

奇遇ですね、とか言う割には常盤台の寮の前に居る事が多々あり、どうみても狙ってんだろと突っ込みを入れたくなる。

今までは街中であった時軽く立ち話をする程度だったのだが。何が彼をここまで積極的にさせたのだろう。

ひと夏がおりなす魔法か何かだろうか。夏の魔法。マジカルサマー。マジカルサマナーは悲しいけど糞台。

「あー、まあそんなところねー。待ち合わせしてるの」

棒読みで嘘をつく御坂。海原は鈍いのかそれとも察したけど気づいてないフリなのか。

「そうですか。でしたら、道中ご一緒しても？」

普通に振る、と言う考えもあるが、この海原光貴と言う男、常盤台の理事長の孫息子なので余り邪険にするのも気が引ける。

と言うか普通に良い人だからあまり酷い扱いにはしたくない。自分には合わないが。

まず、御坂は自分が感情的な人間であると理解している。そのため失礼にもいつも自分をビリビリなどと呼ぶ人間を相手にした方がやりやすい。

一方で海原は理知的な人間で、御坂と比べ「大人」なのである。

年齢的にもそうだが、精神的に成熟している海原を相手にすると、何だか頭が上がらないのだ。

友達相手と言うより優しい上司というか。何にせよ白井や上条、一方通行や９９８２号と比べて何だか気を遣ってしまうのだ。

故に長時間目の前の温厚そうな男を相手にするのはとても疲れるので、適当に切り上げてこの場を去りたいのだが。
しかし、そうは問屋がおろさない。

「あれ、どうしたんですか、待ち合わせ場所に今から行くのでは？」

どうみても、ついてくる気満々である。
本当はコンビニ行ってちょっと本立ち読みした後ふらふらとセブンスミストでも行こうかなーなんて思っていたのだが、隣に海原が居ると非常に気まずい。

海原の方は全く気にしてないのだが、御坂が勝手に気まずい気分になるのだ。

兎にも角にも、待ち合わせなんていう約束はしてないため、待ち合わせ場所など存在しない。
適当な場所に行っても、おそらく海原は来ない待ち人が来るまで待ち続けるだろう。
これは非常に拙い。拙いって使うと文章っぽいよね。
それはさておき、目の前の男をどう撒こうか。思考はそちらへと向かって行く。

・・・

夏季休暇課題掃討大作戦を決行することとなった一方通行と上条当麻、９９８２号の３人は、
何もない上条家よりも冷房効いたファミレスで勉強した方が勉強もはかどるのではないか？食べ物もあるし。
と言う事で急遽いつものレストランに向かうことにした。

「いやあ、悪いななんか。勉強教えてもらう上に奢ってもらうなんて」

「そうですよ、どこにそんなお金があるんですか？と、ミサカは一方通行の財力に不安を覚えます」

先日の１３５７７号と入れ替わり時に一方通行は金欠と言う勘違いをしている９９８２号は、見当違いな心配をしている。

「はン、お前らの飯代なンぞ痛くもかゆくもねェ」

非常に心強い発言をする一方通行。

しかし、近い未来、吸引力の違うただ一人のシスターと出くわすことになるのを、この時は誰も知らなかった。

「つーかお前らって学校とか行ったりしねえの？」

「俺は行く必要ねェなァ。実験してたら必要な情報は全部覚えたしよォ。

それに能力を操る為に昔は必死こいて勉強したからなァ。もう学ぶ事なンざねェ」

「ミサカも特に行く必要はないですね。必要な情報は全て学習装置（テスタメント）で得ていますし。

と、ミサカは自身の有能さを自信持ってアピールします」

「成程なあ……てか一方通行の事情はわかるけど、テスタメントって何だ？」

聞き覚えのない単語に疑問を浮かべる上条。９９８２号は、簡単

に説明する。

「そうですね、一言でいえば情報を植え付ける機械、でしょうか」

「何だそれ！ずるいぞそれ！チートよくない！」

知識を植え付ける機械。そんなものあれば勉強いらずではないか。

そう考えた上条は９９８２号を羨む。しかしこれは、人格形成をするための機械でもあるので普通の人間用としては使えない。

その旨を説明するとガックリする上条。

「まァ、勉学は一日にしてならず、だぜェ？

だがこの第一位が教鞭をふるうンだから、今日は覚悟しとけよ？」

一方通行は、ニヤニヤとどんな風にいじってやろォか、などと非常にどＳな思考をしている。

そんな思考を察したのか上条は、その一言に恐怖した。自分は始業式に無事に出席できるのだろうか。

これから始まる地獄を想像して、肩を震わせた。

すると、目の前の曲がり角から青髪にピアスをした少年と、金髪サングラスのアロハシャツを着た少年が現れた。

「おや？あそこに見ゆるはカミやんやないですか、しかも可愛い女の子も連れとる！

死ね！リアルで充実略してリアみつるは死ね！」

「これは絶対に許せんぜよ！このフラグ男、一体どうしてくれようかにゃー？」

如何にも怪しいです、と言わんばかりの風貌をした二人を見て、一方通行と９９８２号は眉をひそめるが、どうやら上条の知り合いだと言う事を知り、少し表情を和らげた。

「うげ、お前らかよ」

上条・土御門・青髪ピアス。この３人は三馬鹿（デルタフォース）と呼ばれる程の馬鹿猛者である。

そんな３人が夏休みの課題など終わらせているはずもなく。

「なーこの子ら誰なん？紹介したってやー」

「それはきっと叶わないぜよ。絶対カミやんのお手つきに決まってるにゃー」

その軽薄そうな態度にイラッと来た一方通行は、

「なァ、こいつら張り倒して良いかァ？」

凶悪な笑みを浮かべ、能力を発動させようとする一方通行を何とか上条はなだめるようとするが、

「確かにこいつらなんかイラッと来ますね。と、ミサカは何処からともなく鋼鉄破りを取りだします」

「だあああ！ストップストップ！！落ちつけお前ら！こんなんでも一応友達だから！」

記憶を失ってから土御門と青髪ピアスと出くわすのはこれで二度目なのだが、

この濃いキャラを忘れる記憶喪失……いや、記憶破壊の威力はすさまじいものだろう。

「こんなんってカミやん酷いこというわあ。というか目はきっついけどアルビノ美人に張り倒されるなら文句はないでぇ！」

「あっはっは、こいつ多分男ぜよ？」

「んな！？そ、そんなはずは……いやむしろこんなに可愛い子が女の子なわけが無いっちゅーことか……！？
なあ、どっちか確認したいから……
――――下、脱いでmうぎゃあああああ！！！」

余りの変態っぷりに耐えきれなくなった二人はそれぞれの持ちうる最大の攻撃力をもって、青髪を沈めた。
しかし、その顔には苦悶の表情はなく、余りの気持ちよさに昇天してしまったかのような恍惚の笑みを浮かべている。
二人は、本気で引いていた。

「とりあえず、こいつらは友達だ！一方通行と、御坂久々葉だ」

これ以上放っておくと一方的な虐殺になりかねないので、上条が仲裁に入る。

「……一方通行だ」

「……御坂久々葉です」

青髪に対して強く敵対心を露わにする二人だが、そんなことは全くお構いなしに青髪ピアスと土御門は続いて自己紹介する。

「どーも、青髪ピアスって呼んでやー。好きなものは女の子。嫌いなものは男。ただし可愛ければ大丈夫やで
好きなジャンルはあげたらキリないから割愛させてもらうわ」

「土御門元春っていうんだにゃー。まあ、よろしく頼むぜよ。
つーか御三方はこれから何かするのか？」

「ああ、こいつらに勉強教えてもらおうかと」

すると青髪ピアスと土御門の表情が一変する。

「カミやんは……デルタフォースを裏切る気ぜよ！！？」

「裏切るだけじゃなく、可愛い子らに勉強教えてもらう形で裏切るなんて……
うらやm……けしからんでぇ！！」

「おい今の話し方、俺もふくンでやがったろォ？
なあ張り倒して良い？張り倒して良い？」

「こんな濃い連中これ以上相手してられるか、ミサカは部屋に帰るぞ！
それが絶対安全なんだ！！」

「ご乱心！ご乱心めさるな！陛下！殿下！！」

「だァれが陛下だァ！！」

「あ、ミサカが一方通行の子供って設定ですか。と、ミサカは逆の

方が良いなあとどうでもいいことを考えてみます」

「俺らは宿題なんぞする気はないぜよ。
カミやんの邪魔しないようにここは退散しとくにゃー」

「せやなー、これから僕らとらのあな行かなあかんねんて」

とらのあな。略して虎穴。その存在を知らない一方通行は

「ほぉ……自ら虎穴に向かうたあ存外に根性あるじゃねェか」

何やら物騒な勘違いをしていた。

「多分一方通行が想像するのとは違うと思いますよ。
と、ミサカは目の前の青髪ピアスがそんな大それたことできるわけないと断言します」

「そ、そうかそうか！じゃあな、土御門、青髪ピアス！」

これ以上一方通行を怒らせたら面倒だ、と言う事で3人は速やかに土御門達と別れた。

・・・

御坂美琴は思考を加速する。ここで海原光貴と後腐れなく別れる方法を。
しかし思いつかない。ここで電話をかけるのもあやしまれそうだ。
御坂は海原のことを苦手としているが、かといって嫌いと言う訳ではない。
故に何も言わず逃げ去るという方法がとれないのだ。

このように思考を重ねている間にも、やれ美味しい寿司屋があるだの、やれ流行りの服がどうだの、やたらとデートのお誘い攻撃を海原は繰り出す。

これ以上断り続けるのも忍びなく感じ始めたその時、神は舞い降りた。

目の前に、いつものレストランへと向かう3人組が居たのだ。

これは僥倖と言わんばかりに、3人へと駆けよる。

「どるーん、待ったぁ～？」

その時、3人に電流奔る。

目の前の乙女オーラ全開で背景にキラキラが満遍なく振られてそうな、

そんな完全無欠に怪しい御坂を完全無視する事を瞬時に決定した。

そして無視する。

「って、無視すんなやゴルァアァアァア！！！」

レスラー顔負けの見事なタックルを炸裂させるものの、怪我しないようにやんわりとベクトル操作された。
反射では危険だと判断されるほどの威力を持ったタックルだった。
上条は自分に特攻してこなくて良かったと本気で思った。

「その方々が待ち合わせ相手ですか？」

待ち合わせ相手、何のことやらと首をかしげる3人。
御坂は話をあわせて！と、小声で囁く。何だかわからないがとりあえず合わせることにする。

「ああ、今から俺の宿題終わらすの手伝ってもらうんだ」

ここで９９８２号は閃く。現状を打破する圧倒的閃きっ……！
ざわざわと言う効果音の元ヒソヒソと御坂に提案する。

「ここでお姉さまが上条当麻に勉強を教えたら良いんじゃないでしょうか？
と、ミサカは上条当麻と二人きりになる策をさずけます」

御坂はその提案にハッとした顔になる。

「乗った！」

即決だった。

「そう、そこの男は我が姉御坂美琴に勉強を教えてもらうのですよ」

一方通行は怪訝そうな表情をするが、９９８２号に話を合わせろ、

と言われたので黙っておく。

「そう！わたくしこれからそこの男と勉強会するのよ！！２人きりでな！！」

上条がハァ！？と、どういう事やねんとリアクションを取る。

９９８２号もそれは演技力悪すぎだろ……と言った呆れ顔をしている。

一方通行は無表情で事の顛末を眺め、海原はなんだか気まずそうな顔だ。

そして御坂の声に呼応するように窓がバタバタと開けられる。

実は御坂は常盤台の寮の前からほとんど移動していなかったのだ。

その窓からは常盤台の女生徒の姿が。なにやらヒソヒソと小声で話している。

御坂に瓜二つな９９８２号の姿もそこにあるのだが、全ての視線は御坂と上条に集中していた。

どう考えても御坂の彼氏がどうたらとかそんな話だろう。

ついでに白井黒子は白目をむいている。

すると、窓の一つから、寮の最高責任者が現れた。

寮監との距離は離れている。故に声までは聞こえなかったが、口の動きから何となく何が言いたいかわかった。

『寮の前で逢引とはイイ度胸だな。覚悟は出来ていると言う事か、面白い』

その後妬ましい、とつぶやいたのだが、そのつぶやきは誰にも届かなかった。

どなたかお客様の中に寮監様とお付き合いして下さる殿方はおりませんか？

それはさておき。

顔を真っ赤にして頭から煙を噴きだす御坂は、ヤケクソ気味に笑いつつ、上条の手を引き走り去った。

一方通行も９９８２号が常盤台の前に居ると怪しまれそうなので、能力を使って早々に離脱する。

そこにはポカンとした海原だけが残された。哀れ。

# そのじゅうきゅう（後書き）

新たなシリアス導入部でした。

# そのにじゅう（前書き）

話が進まぬェ

## そのにじゅう

常盤台の寮から離脱した一方通行と９９８２号の二人は、とりあえず飯を食べるためにいつものレストランへとやってきた。

いつもの店員が案内にやってきたが、どうやらいつもの席には先客がいるようだ。

仕方が無いので２人は適当な場所へと案内してもらった。

「しかし平和でいいですね。と、ミサカはこんな日が続けばいいなあと願望を露わにします」

食事を終え、ドリンクバーでソーダ＋なっちゃんオレンジを混ぜたものを飲みながらのほほんと話す９９８２号。

一方通行はズズズ、とコーヒーを飲みつつ無言で頷く。

今は、学園都市暗部の事もあるため、毎日こうやってのんびり過ごす事は出来ない。

しかし、いつかは毎日こうやってゆったりとした時間を過ごせるようにしなければならない。

そのためにはまずマヨナカテレビと暗部に関連が無いか調べなければならない。

『マヨナカテレビ』と『暗部』。この二つの単語が頭に浮かんだ時、何かが引っかかった。

何か簡単な見落としをしている。そんな気になるのだ。

――――何を見落とした？

状況としては、９９８１号と１９０９０号は、おそらくマヨナカテレビに放り込まれて、死んだ。

……そうか、放り込まれて、これがおかしい。

だってそうだろう。初めてテレビに入った時、９９８２号や御坂美琴は自分の力ではテレビに入れなかったのだから。

それならば、最初から入れた一方通行と、二人の違いは？

おそらく、ペルソナだ。

そう考えるとやはり暗部にもペルソナを扱える人間が居る？

もしこれが事実だとして、妹達の殺害の動機は？

とここで、芳川桔梗から連絡が入った。伝えたいことがあるから来い、だそうだ。

一方通行は、残ったコーヒーを一気に飲み、一旦思考を終える。

「芳川から連絡が入った。何か知らせたいことがあるらしい」

「何でしょうか、嫌な知らせじゃなければ良いのですが……

と、ミサカは万が一を想像して気を引き締めます」

妹達が更に失踪した、などという知らせだけは聞きたくない。
一方通行は携帯を閉じ、そのままギュッと握りしめた。

さて、芳川から連絡が来た、と言う事で2人は会計をすまそうと席を立った。
するといつもの席に居た先客から声が聞こえた。

「結局、サバ缶が一番キてるってわけよ」

「あんたはいつもそれじゃない。まあ私もいつも鮭弁だけど」

「どうしてそこまで超魚好きなんでしょうか。いや、別に超悪いってわけじゃないんですけどね」

「……南東から信号が来てる……」

――アイテム。麦野沈利と可愛い滝壺理后、可愛い絹旗最愛とフレ／ンダの4人からなる暗部組織。

ぼんやりとそのやりとりを聞いていたのだが、超、超、と特徴のある口調に何やら聞き覚えのある一方通行。
それは誰だったかと思い出そうとするのだがその前に、鮭弁がどうたら言っている客を見て顔が強張る。
９９８２号はそんな一方通行の様子を見て頭にはてなマークを浮かべている。

――学園都市第四位『原子崩し（メルトダウナー）』麦野沈利。

その名前は以前聞いたことがあった。

実験中に能力が暴発して以来姿を消したとも聞いていたが、おそらく暗部入りを果たしたのだろう。

超能力者は大なり小なり暗部と関わりを持たざるを得ない。

たとえ、それを超能力者自身が望まないとしても。

御坂美琴がいい例だろう、あれは暗部被害者も良いところだ。

何にせよ、ここであの４人組に見つかると面倒そうなので、さっさと会計をすませて店を出ようと一方通行は考えた。

しかし、フレンダが一方通行の姿に気づいてしまった。

「あれ？あそこに居るの『一方通行』と『超電磁砲』じゃない？」

面倒なことになりそうだ、と内心舌打ちをする。

しかも、９９８２号の事を『超電磁砲』だと勘違いさえしていた。

一方通行の方に喧嘩を売るならまだしも、９９８２号の方を狙ってきたら拙い。

そう考えすぐにこの場を立ち去ろうとするが。

「ねえあんたたち、一方通行と超電磁砲よね？
ちょーっと面貸してほしいんだけどなー？」

ここは2人にとって行きつけのレストランだ。余り迷惑をかけて出禁になったら困る。
面倒になりそうだと頭を抱えつつも、仕方ないので麦野達を外へと誘った。

・・・

いつものレストランを発ち、一方通行と９９８２号は麦野率いる謎の４人組と相対していた。
と言ってもやたら好戦的な麦野を除き、フレンダと絹旗はものすごく面倒くさそうな顔をしている。
特に、絹旗に関しては一方通行に対して嫌悪感をあらわにしている。
ちなみに、滝壺はぼけーっとしている。可愛い。

「で、なんであんたらはそんな仲良しこよししちゃってるのかにゃーん？」

ありえない、どんだけビッチなのよ、と下卑た笑顔を浮かべ尋ねてくる。
９９８２号は何か言おうとするが、一方通行はそれを抑える。

「で？お前みたいな格下がわざわざ何の用だ？自殺願望あるなら首でも吊ってろォ」

どこまでも無感情に、どこまでも突き放した口調で言い放ち、一方通行はしっしっと追い払うしぐさをしてあしらう。

周囲への被害を考えると、こんな街中で目の前の「原子崩し（火力馬鹿）」を相手にする気にはならない。

しかしそれは麦野と言う名の火に油を注ぐ行為でしかなく、麦野はプルプルと震え青筋を立てている。

「第一位だからって……チョーシこいてんじゃねーぞコラァ！！！その真ッ白な素肌を綺麗な小麦色に仕立てんぞアァ！！？」

「ちょ、麦野落ちついてってば！」

「……どうあがいても、第一位と第三位を超同時に相手するのは、流石に超無謀だと思います」

「……」

フレンダと絹旗最愛は麦野を止めようとするが、滝壺はボーっとしている。可愛い。

だが、麦野は今にも噴火しそうな火山の状態である。どうあがいても戦闘は免れない雰囲気だ。

「結局、何が望みなンだよ?遊ンで欲しいのかァ?
俺なンかに構ってる暇あったら暗部の犬らしく上層部に尻尾振ってろってンだ」

今この場に居たら、麦野からブチッという効果音が聞こえたに違いない。

「ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね」

一文字ずつ強調するように言うと、腕からバチバチと光が発せられ、今にも能力が発動されそうだ。

「ああもうなんで第一位は煽る方向にもっていくの!?
結局、気付かないふりをしてたらよかったわけよ!」

先の自分の迂闊な発言を呪うフレンダ。
絹旗は諦めたかのように目をつむっている。
滝壺は相変わらずボーっと空を仰いでいた。

どう見ても、やる気があるのは麦野だけで、流石に任務でも無いのに街中でドンパチやらかすほど馬鹿でも無いらしい。
麦野はドンパチやらかしそうな気配だが。

「あのなァ、こンな街中で超能力者が暴れてただで済むと思ってン

のかァ？
任務ならもみ消せるだろォけどよォ」

「関係ねえよ！！カァンケイねェェんだよォォォ！！」

麦野は右腕を前に突き出し、「あいまいなまま固定された電子」を強制的に操る。
これにより本来「粒子」か「波形」かどちらかの性質を示すはずだった電子はいずれの反応も示さず、
「その場にとどまる」という性質になり、質量をほとんど持たない電子が擬似的な壁となるのだ。
そしてそれが発射された時、初速を維持したまま対象を叩き潰す。

原子崩しによる青白い光はその対象を破壊するべく一方通行へと突き進むが、相手はあくまでも『一方通行』。

その能力はベクトル操作。

一方通行は一歩も動かず、それどころか腕一本すら動かさずにあくびをしながら麦野の攻撃を受け止める。
そして周囲を考慮したのか、原子崩しによる光は空へと向かい、そのまま虚空へと消えて行った。

「……満足かァ？」

一方通行は心底どうでもいい、と言った表情で麦野を見つめる。

しかし、麦野はというと。

「ッ……！！（糞が！手加減された手加減されたふざけんな畜生反射しないとか舐めてんのかこの白豚があ！！！）」

ギリッと歯ぎしりをする麦野の心はまさに業火と言っても過言ではない。

今の自分では一方通行には勝てないと理解してしまうが、それが麦野にとっては我慢できない。

心底憎い、という殺気を視線に乗せて一方通行向かい飛ばすが、それすら歯牙にもかけない。

一方通行はめんどくせェ、と溜息を一つつく。

すると一瞬にして全員の視界から消えて、瞬く間に麦野の背後へと回り込み、首筋を叩いた時に生体電気を乱して失神させたのだ。

「麦野！！」

慌ててフレンダは失神して倒れそうな麦野を支える。

「失神させただけだ。さっさとそいつ連れて消えろ」

元々相手をしたくなかったらしく、フレンダは麦野を担いでその

場を立ち去ろうとした。
滝壺もそんなフレンダの後ろについていくのだが、絹旗は足をとめたままだ。

「……あなたは、暗闇の五月計画について超どう思いますか？」

――暗闇の五月計画。一方通行の演算パターンや精神性の一部を植え付け、被験者の人格を蹂躙した暗部の実験。
これにより被験者の自分だけの現実（パーソナルリアリティ）を最適化、能力の向上を目指したプロジェクトである。

「あァ？……そォか、お前、被験者か……」

「……はい」

「……悪かった、とは思ってるが……お前を助けることは、出来ねェ」

先ほどまで無表情で一方通行を見つめていた絹旗だが、この発言を聞き目を見開く。

「なんでですか……！私が、私たちが、一体超何をしたって言うんですか！！どうして！？」

叫ぶ。

心の底から。

思いの丈をぶつける。

今まで一方通行は、そんな思いすら反射していたと言うのに。

今は、その思いを、ただ受け止める。

「悪ィな……お前や、他の生き残りを助けることは……出来ねェ。
この俺だけじゃあ……力不足だ」

暗部の闇は、学園都市の頂点に立つ超能力者ですら掴んで離さない。
それほど深い闇だ。超能力者とはいえ一人の力では何もできないだろう。

一方通行は、先の発言に、だが、と付け加え続ける。

「お前らが、助かりたいってンなら……力添えしてやる。
助かるかは……お前ら次第だ」

自分のせいでこンな事になってるのに偉そうだな、と一方通行は思う。

「過程はどうあれ……俺たちはクソったれの悪党だ。
そンなクソ野郎を助けてくれるヒーローなンて居ると思うな。
なンでも利用しろ。俺の力すらなァ……」

1人だけでは無理でも。

2人いれば。

3人いれば。

絹旗は眉間にしわを寄せて考え込む。
そして覚悟を決めたように声を出す。

「なら……いつか私が超助かるのに、力を、貸して下さい……」

「……あァ」

ぺこりと絹旗は一方通行にお辞儀をすると、走って滝壺達の元へと向かった。

「……良かったのですか、あれで？と、ミサカは走り去る背中を見つめつつつぶやきます」

「……あァ。過程はどォあれ、あいつも俺も同じ悪党だ。
そンな奴が助けを求めるだけのお姫様になるなンぞ許されるわけがねェンだ」

「あの方も一方通行もそれでいいのなら、ミサカは何も言いませんが……」

話はこれで終わりだ、と言わんばかりに無言で歩きだす一方通行。

９９８２号もまた、それに無言でついて行った。

## そのにじゅう（後書き）

気付けばそのにじゅう。
各話にタイトルつけた方がいいかなあ。

## そのにじゅういち（前書き）

展開遅りーぬすぎてワロリッシュスターｗｗｗｗｗｗｗｗｗ

## そのにじゅういち

芳川桔梗が提示した情報は、一方通行を少なからず驚かせた。

長点上機学園所属・布束砥信が失踪した。

布束の資料を見た時、テレビの中に入った時に見つけた写真と同一人物だという確信をもった。

テレビ、で思い出したが、おそらく絹旗は声だけテレビの中で聞いたはずだ。

だとすると、絹旗ないしはアイテムが何かしら実験に関与していた、と言う事か。

何にせよ、テレビが一枚かんでいる事は間違いないだろう。

そう考えた一方通行は御坂美琴と上条当麻に連絡を取ろうとしたのだが。

御坂は電話に出ないし上条は通話中らしい。

常盤台で別れた後なにかあったのだろうか。考えても仕方が無いので思考は布束へとむかう。

一方通行の勘が告げている。ほぼ確実に布束とテレビは関係あると。

ならばテレビに今すぐにでもいきたいところだが。

何があるかわからないのに、戦力が無い状態でテレビに行くのは自殺行為だ。

今にして思うと初めてテレビに入った時は無謀も良いとこだっただろう。

兎にも角にも、今は布束について情報をもっと集める必要がある。布束について情報を集める事で、自分達以外にテレビについて知っている人物が居るかどうかわかるかもしれない。

そう考えた一方通行は、芳川の研究所にある情報端末から、布束について調べることにした。

――――布束砥信。長点上機学園３年に在学中。幼少時に生物学的精神医学で頭角を現す。

第七薬学研究センターの研究機関にて研究を重ねた後、長点上機に復学した。

９９８２号によると、学習装置にて妹達に知識を植え付けたと言う。

ただ、布束にあったことのある個体は１９０９０号のみで、その時の１９０９０号の記憶はミサカネットワークにも流れていないそうだ。

軽く調べただけだが、簡単なプロフィールのみで、これ以上の情報は出ないと一方通行は判断した。

探そうと思えば探せるのだが、更に情報を突き詰めようとすると、更に深く潜る必要がある。

そうなると芳川にも迷惑がかかるかもしれない。

それならば、布束に近しい研究を行っている人間を洗えばいい。

生物学的精神医学に連なる、バイオ関連を研究する人物から何か話が聞けるかもしれない。

そう考えた一方通行は、生物学的精神医学だけでなく、遺伝生物学、神経生化学、精神薬理学、脳生理学など、多岐にわたる分野を調べ、片っ端から連絡を取って行った。

しかし、これと言っためぼしい情報は得られず、研究者の名前ばかり無駄に覚えるだけに終わった。

危険を覚悟して『書庫』へハッキングしてしまおうか、とも考えるが、それは最終手段としてとっておくべきだろう。
何せ学園都市には『守護神（ゴールキーパー）』が居るのだから、下手なハッキングは命取りだろう。

ここで、改めて生物学的精神医学について考えてみる。
生物学的精神医学とは、自然科学の方法論に則り、脳科学の方面から、精神異常を研究する。と、言うものである。

脳科学から心の異常を調べる。

ならば脳内での生理的な出来事を研究する脳生理学の研究者などを更に突き詰めていけば良いだろう。
脳生理学の分野を更に詳しく調べる。

すると、一人の女性の名が目に入った。

――木山春生。大脳生理学専門チーム所属。ＡＩＭ拡散力場制御実験にて、実験を成功させる為、

置き去りの子供達に教鞭をふるい、子供達の成長データを仔細に取っていたとされている。

ＡＩＭ拡散力場制御実験。

これの実態は確か、木原幻生を主導者とした暴走能力の法則解析用誘爆実験だったはずだ、

と、一方通行は記憶している。

何にせよ、この女性には連絡を取っていない。ならばとりあえず連絡先を知らねば、

と思ったが、どうやら既に大脳生理学のチームからは去っているようだった。

どうしたものか、と考えていたが、木山春生は水穂機構病院の院長から招聘されたらしい、と言う事を知り、院長と連絡を取った。

すると丁度良いことに、木山春生はその病院に入院しているそうだ。

それならば、と見舞いがてら話を聞きに行くことにした。

・・・

木山春生は暴走能力の法則解析用誘爆実験で意識不明に陥った置き去りの子供たちを治すために、幻想御手を開発した張本人だ。

そんな木山は今現在、絶賛入院中である。

それはなぜか。それを説明するためにも、
ここで木山春生が開発した幻想御手について話をしよう。

幻想御手は能力者のレベルを上げる、という触れ込みだが、
その実脳波のネットワークを構築する、というものだったのだ。

なぜ能力のレベルが上がるのか？
それは同じ脳波のネットワークに取り込まれることで、
演算速度が向上及びその幅と演算能力上昇が見込まれるのだ。

また同系統の能力を持つ者同士が思考パターンを共有することによって、
より効率的な能力の使用が可能となった。

一見これだけならば良い事尽くしじゃないか、と思われるが、それは違う。
脳波と言うものは、それこそ妹達の様にクローンでなければ各個人でそれぞれ違う。
その違う脳波の上に、ある特定の（今回は木山春生の）脳波を上書きするとどうなるか。

そう、体がその脳波に合わずに拒否反応を示し、結果として意識不明の状態に落ち込むのである。

そして、複数の人間の脳を繋げた「一つの巨大な脳」状のネットワークを構成することで、
高度な演算能力―樹形図の設計者に匹敵する程のもの―を持った

演算装置が出来上がるのだ。

それを用いて意識不明になった置き去りの子供達を救う方法を調べさせようとしたのだが、御坂美琴によって阻止されてしまう。

しかし後に、御坂達と協力し、テレスティーナ・木原・ライフラインとの交戦を経て、
子供達を救う事ができたのだ。
その際怪我をした為、子供達と共に入院していた、と言う訳だ。

そんな木山は物憂げな表情で溜息をついている。
黙っていれば美人なのだが、それを自覚していないのが残念でならない。

科学者らしいといえば科学者らしいのだが、基本的に自身については無頓着で、
服が汚れたりすると、男性の前だろうと汚れた服を脱ごうとするのだ。
そんなん俺の前で脱いでほしいわ。おっとごめんよ、理后も可愛いよ。

閑話休題。

何故木山は物憂げな表情なのか。
それは周りでキャッキャと無邪気な笑顔を浮かべつつじゃれついてくる子供達だ。
とても可愛らしい子供達なのだが、如何せん以前と比べ成長しているため、少し重たいのだ。

だが、じゃれついてくる子供達を振り払うような事はしない。子供達は、そんな木山を見て喜ぶ。

失った時間を取り戻そうとするかのように。

足りないものを補うかのように。

木山の元から離れない。

あんな非道な実験を子供達に施したと言うのに、未だに子供達は彼女を信じている。

ならばそれに応えて、子供達に与えなければならない、愛を。教えなければならない、優しさを。

この子たちが大人になるまでは、休む時間はなさそうだな、と子供達を撫でながらクスリとほほ笑む木山。

するとそこに二人の来客がやってきた。

その二人を見て少し驚いた表情を浮かべる。

「一方通行に、超電磁砲か。……君には、世話になったな」

木山は９９８２号をちらりと一瞥すると、子供達を救ってくれたことに感謝をする。

しかし、９９８２号が装備している軍用ゴーグルを見て顔をしかめた。

「ん……？そのゴーグル……君は、本当に超電磁砲か？」

流石科学者、やっぱこいつ頭良いなと思いながら、９９８２号は一方通行にアイコンタクトを取る。

正体を明かすべきか否か。

しかし嘘をついても下手な嘘は見破られそうだ。そう考えた一方通行は素直に話す。

「クローンだ、超電磁砲の」

「そうか、絶対能力者進化実験……成程、クローンか……」

木山は一人納得するが、一方通行達を見て、子供達は不安そうな表情になる。

そんな子供達を安心させる為に、木山は穏やかな表情で子供達を撫でた。

「今回、９９８２号の事は関係ない。……率直に聞くが、布束砥信と言う名に聞き覚えはあるかァ？」

「布束……ああ、学習装置の開発者か。以前装置を開発している時に一度だけ会ったことがある、その程度だな」

「布束砥信が研究していた内容についてはどォだ？」

「……残念だが、生物学的精神医学、と言う分野を研究していた、と言う程度しか知らないな……
私が彼女と会う事になったのも、私が大脳生理学を専攻するチームに所属していて、
それぞれの分野に共通する項目について議論するためだったしな」

話を聞く限り、嘘をついている様子はない。本当に知らないのだろう。

「そォか……それならもォ聞く事はねェ。精々養生しろォ」

じゃあな、と告げ、一方通行達は見舞いの品として持ってきたのだろう、紙袋を置いてあっさりと立ち去った。

・・・

「結局、大した情報は得られませんでしたね。と、ミサカは精神的疲労を露わにします」

一端芳川の家に帰り、休憩をとることにした二人。
９９８２号はソファーに深く座り込み、溜息をついた。

「とりあえず手づまり……だなァ」

コーヒーを飲んで一息つく一方通行。
ハッキングと言う手段があるが、実力が未知数な『守護神』を相手取るよりも、テレビの中を探索する方がまだマシなように思える。
ただでさえ科学者達に連絡を取って暗躍しているのだ。
これ以上目立つ行為は避けたい。

とりあえず、テレビに入るのは明日でも構わないだろう。
外を見るともう日が落ちそうになっていた。
夕飯を食べながらでも情報はまとめられる、と言う事でやっぱりいつものレストランへと向かう。

そしていつものレストラン。
いつもの席に案内されようとしたが、またいつもの席には先客がいた。
しかしいつもの店員はいつも通り席に案内するので、どういうことだろうと首をかしげつつもそれについていくと。

「よぉ……来てくれると、信じてたぜ……」

虚ろな目で横たわっている上条当麻が居た。

「どうしたのです、そんな世界の終りみたいな顔をして。
と、ミサカは明らかにおかしい様子の上条当麻を心配します」

「いや、それよりもだなァ……」

ちらりと、上条の正面を一瞥する。

そこにはオムライスを頬張っている白い修道服を着た少女が居た。

「もご、もごご、むぐもぐもご！」

「食べながらしゃべるンじゃねェよ行儀悪ィ」

インデックスは何か言おうとしたのだが、初対面の相手に行儀を注意されたため、

一方通行の言葉にうなずくと、再びオムライスを相手にし始めた。

飲み込んでからしゃべるのかと思っていた一方通行はその様子を見て溜息をつく。

「こいつが噂の居候って奴かァ」

「ああ、そうだ……」

科学の街で修道女。どう考えても訳有りだろう。

それを匿う上条は相当なお人よしであったが、そんな上条の顔は今も暗い。

「こいつを連れてきてるってことは……」

何か込み入った事情があるのだろう。そう考えた一方通行は、上条の発言を待つ。

「いや……インデックスは関係ない」

「インデックス？あァ、そいつの名前か……
それじゃあ、なンでまたそんな深刻そうな顔してンだ」

インデックス、おそらく偽名か何かなのだろう、訳有りだし。
と一方通行はあたりをつけ、あからさまに変な名前に関してはスルーして本題に入る。

「課題が……全く終わってねえんだ」

重々しく、消え入りそうなほど小さな声で、それでいて確かに聞こえる声で、上条は話す。

「「は？」」

ここまで思わせぶりな態度を取っておいて、夏休みの課題とは何事か。

というか御坂美琴はどうした。一方通行と９９８２号はその疑問をぶつける。

「いや……お前らと別れた後さ、色々あって……その、一個もやってねぇんだ……」

「つまり……お姉さまとにゃんにゃんしてたから、課題はしてないと？」

ジト目で上条を見つめる９９８２号。その視線には呆れと若干の批判が乗せられていた。

それを察し、上条は気まずそうに眼をそらす。

まァ、何かあったのだろうな。こいつお人よしだし。一方通行はそう考え、助け船を出した。

「大方変な事件に巻きこまれたンだろ。お前結構運悪いもンなァ」

「ああ、そうだ……最近はあんまり不幸だって言う事は減ってきたんだけどなあ」

幻想殺しは神の加護すら打ち消しているのでは、とインデックスが予想したが、

どうやらその予想は当たっていたらしく、幻想殺しを失ってから、不幸な目にあう事が減っていたのだ。

と言っても、上条自身幻想殺しがあろうとなかろうと、どちらかと言えば運の悪い人間だった、というのは余談である。

それはさておき、上条が幻想殺しを宿していた頃、魔術師と大立ち回りを演じた名残で、魔術師から命を狙われることもしばしばあった。

今回も、その名残の一端だったのだが、上条はそこまでは言わない。

科学が全てのこの街に、『魔術』などと言う非科学の代表的存在を受け入れられるとは思わない。

故に訳有りシスターを匿っている、という事だけを伝えるにとどまった。

しかし、そんな上条の思惑（幻想）は、オムライスを完食したインデックスによってぶち殺された。

「とーまはいっつも私に隠れて厄介事に首突っ込むんだよ！！今日だって私の知らないところで魔術師と戦って！！」

その言葉を聞いて一方通行と９９８２号は首をかしげる。

まじゅつし。

魔術師。

魔の術師。

魔術の師。

魔術……？

そんな非科学が存在するのか。

何も知らない学園都市の住民はインデックスの発言を一笑に付すだろう。

上条自身も、魔術を目の当たりにするまではそういった態度だった。

しかし一方通行と９９８２号は、すでに「テレビの中」と言う非科学を体験していたので、割とあっさり受け入れた。

「へェ、超能力の他に異能を操る人間がいたンだなァ」

「まぁ確かに、学園都市の軍事力を相手に、普通の力をふるっていたのでは勝機なんてありませんしね。

と、ミサカは学園都市ないしは日本を相手にする諸外国を想像します」

「あ、あれ……？学園都市の人間がそんな非科学、信じちゃっていいんでせう？」

「じゃああのテレビをお前は科学の結晶だ、とか言うのかァ？ありえねェありえねェ」

まァ、あンなテレビがありえてるンだから、魔術の一つや二つあるだろ。と一方通行は言う。

「そうですね、それなら日本にも陰陽師とか居るんじゃね？
と、ミサカはテンプレっぽい平安の服装をした人物が妖怪を滅する様を妄想してみます」

「ふふーん、とーまと違ってこの人たちは頭が柔らかいみたいだね！」

ドヤ顔で話すインデックス。上条はぐぬぬと顔をゆがませるが。

「魔術は別にイインだけどよぉ。インデックス、っつったか？
お前のその修道服の安全ピン、ひょっとしてなンか魔術的な意味みたいなもンがあるのかァ？」

一方通行が聞いてはいけない質問をしてしまい、上条の顔はピシッと固まった。

「い、いいいやそそれはの、ののっぴきききならねねぇ事情ってものがでですね……」

言い訳を考えながら話したため、どもる。

「聞いてくれる！？ホントは安全ピンなんて要らないし、

ホントはこの修道服、強力な防護がかかった結界だったんだよ！！」

「ほお、それは素敵ですね。ですがその口ぶりだともう失われてるようですね。

と、ミサカは安全ピンが刺さった元強力な防護結界を見て同情します」

一方通行はインデックスの発言で大体の顛末を把握したが、インデックスの口からそれを聞くことにして、黙っている。

続いて９９８２号も察したのだろう。インデックスに同情して、話の続きを促した。

「それでね、それでね！とーまったら魔術の事全然信用してくれなくて、

それでこの結界、『歩く教会』って言うんだけど、この歩く教会の事話しても全然信用してくれなかったの！！

そしたらとーま、「俺の右手は異能なら神の奇跡だろうと打ち消せる」とか言ったの！！

私もそんなバカな話あるわけないじゃないって思って歩く教会にその右手を触らせたの！！

そしたら歩く教会が……バラバラになったの……！！」

一気に捲し立てて疲れたのだろう。インデックスは手元の水を飲んで落ちつく。

「成程なァ……つまり、上条はか弱い幼女の服をひんむいたことを

反省して、
アンチスキルの元へ行こうとしたが、その前に懺悔しに来た。そう言う訳か？」

「違いますよ！！？」

「駄目ですよ、罪を犯したら償うものです。さあ早く自首するのです。さすれば神もお許しになられるでしょう。
と、ミサカは目の前の性犯罪者を汚らわしいです、近寄らないで妊娠させられちゃうという本音を暴露します」

「違う、違うんだ……あれは、事故だった……不慮の事故だったんだよ……
まさかあんなことになるとは思わないじゃないですか……
大体あの頃は魔術なんてもの知ってるわけないじゃないですか……
だからあんなことになるなんて思いもよらなくて……」

ぶつぶつとうなだれながら呟く上条。

と、ここで上条当麻は記憶喪失だから、そんなこと知らないのでは？という疑問が浮かんだことだろう。
その通りだ。上条はその時の事は記憶にない。
しかし、上条が記憶喪失してからしばらくしたとき、上条も一方通行と同じ疑問をインデックスに抱き、質問したのである。

「なあ、なんで安全ピンなんてしてんだ？変過ぎるだろ」

覚えてないこととはいえ、それをした張本人からそんなことを言われて黙っている程インデックスはお人よしではない。
こっぴどくかみつかれた揚句、普段の愚痴も含め1時間ほど正座させられて事の顛末を細かく説明されたのだ。
インデックスは、上条はそんなことを覚えていないのか、と言う事を疑問に思う間もなく頭に血がのぼっていたのだろう。
ゆえに上条は安全ピンの話題はインデックスの前でしないよう心掛けたのだった。
と言っても、安全ピンの話題が浮かぶ事などなかったのだが、今日までは。

何にせよ、追い詰められて逃げ場のない上条は机に突っ伏して頭を抱えた。
その様子を見て流石にからかいすぎたか、と一方通行と９９８２号は反省する。

「まァ……なンだ、わざとじゃないンだろ？
上条もこうやって反省してることだし、この話題はこの辺で終わらせよォじゃねェか」

「そうですね、流石にミサカも言いすぎました。と、ミサカは素直に謝罪します」

「俺もまさかこンな事になるとは思ってなかったンだ。
そォだ、謝罪の意もこめて、今日の飯は俺が奢ってやるよ。インデックスの分も含めてな」

いつも一方通行が奢っていたのだが、一方通行の言葉に上条は感激する。

感激のあまり課題の事など頭の隅のタンスの奥へとしまいこまれた。

そしてインデックスの方はと言うと。

「こっからここまで持ってくるんだよ！あ、ご飯は洋食セットがいい！」

「は、はあ……お言葉ですがお客様、そんなに召し上がられるのでしょうか……？」

「問題ないんだよ！心配ならメニューにある順で一品ずつ持ってくるといいかも！」

「か、かしこまりました……では一品ごとにメニューを追加して行く、という形で注文を取らせていただきますね」

全部一気に注文をとって、食べきれないとなると常連のお客様が困るだろう。

そう考えた店員は手間がかかるのを承知で完食するたびに注文を追加して行く、という機転を利かせた。

そんな配慮は無駄だった、と知るのはインデックスが腹2分目辺りに到達した頃であったそうだ。

それはさておき、当のインデックスは、

「了解だよ！」

容赦なく注文していた。

結局、インデックスはメニューを二周させたところで、久々にお腹いっぱい食べれたんだよ！ありがとう！と、笑顔で感謝を示した。

ここまで遠慮なしだとむしろ清々しいくらいだ。

一方通行は、なんだかすごい見世物を見た、そんな気分で伝票を開く。

「……ファミレスでの会計で、そこいらの料亭で支払う金より多い金を払う事になるとは思わなかった」

「その……なんだ……すまん」

インデックスの胃の限界を知る代償は大きかった。

これならバイキングでもいった方が良いのだろうが、そんなことをしたらバイキングがつぶれてしまう。

そう感じさせられるほどの、食べっぷりだった。

・・・

結局、課題の一つもこなさずに、ただダラダラと駄弁っていた。

ここで、上条当麻はトイレへ行くと告げ、席を立つ。

９９８２号も新しいドリンクを開発すると告げ、席を立つ。

こうして、そこには一方通行とインデックスが残った。

インデックスはデザートのパフェをパクパクと食べ進めている。
これで5杯目だ。
初めは、先ほどお腹いっぱいだ、と発言したとは思えないほどのインデックスの食べっぷりに感心していたのだが、いい加減あきた。
かといって特に話題も無いので一方通行は黙ってコーヒーを口にする。

すると、インデックスの方から話を振ってきた。

「とーまは、私に何か隠してるみたいなんだけど、あなたは何か知らない？」

おそらく上条は、基本的に厄介事に首を突っ込む事を、インデックスには隠しているのだろう。
学園都市で修道服を着ている、と言う時点で目立つのだから。
上条とともにインデックスまでもが厄介事巻き込まれたら、更に面倒なことになるはずだ。

「……いや、俺は何もしらねェ」

インデックスを巻き込むまいとする上条の意図に沿い、一方通行もしらを切る。

「そうなんだ……ところで、あなたもこの街の能力者なんだよね？」

「……その通りだ、一応この街で一番の超能力者をやってる。一方通行と呼べ」

「あくせられーた……うん、あくせられーただね。分かったんだよ。それでね、あくせられーた……突然だけど、とーまの事を……守ってほしいの」

「あァ？なンでまたそンなこと」

「私は……魔術の事なら何でも分かるけど、この街の超能力に関しては門外漢なの。
だからとーまを狙う魔術師の力を知れても、
この街にとーまが狙われたら、きっと守ることができないと思う。
だから……」

力を、貸してほしいの。

インデックスは真っすぐ一方通行を見つめる。
その瞳は何処までも綺麗で、果てしなく澄んでいた。

「……そォだな、それくらいなら、かまわねェよ」

その言葉に、インデックスの顔は綻ぶ。
ああ、上条はこの笑顔を守るために、動いているんだろう。

そう感じさせるほど、インデックスの笑顔は美しかった。
この笑顔を守るためなら、力くらい貸してやろう。一方通行は、そう思った。

「ありがとう、なんだよ」

「気にすンな。事のついでだ」

「……やっぱり、今も何か厄介事に首を突っ込んでるんだね」

インデックスはジトっと一方通行を見つめる。
一方通行は口を滑らせた事にしまった、とした顔をしたが、インデックスは身を引いた。

「まあ、いいんだよ。魔術側は私がなんとかするから、科学側はあくせられーたがなんとかしてくれるんでしょ？」

あって間もないと言うのに、それはいささか信用が過ぎないか？
そう感じた一方通行はそれをそのまま質問した。

「大丈夫なんだよ、だってあくせられーたって、とーまと似てるもん」

そう言ってインデックスは、一方通行に笑いかける。

「はっ、あンなお人よしとこの俺の何処に共通点があンだよ」

「んー……優しいところ、とか？というか、何となく似てると思っただけだから、気にしなくていいかも！」

「あァ、そォかい。つゥかパフェ溶けてンぞさっさと食え」

一方通行の言葉に、インデックスは驚き溶けきる前にパフェをかきこむのだった。

以下略

一方通行は、「魔術師」属性のコミュニティである「インデックス」コミュを手に入れた。

・・・

一方通行とインデックスが話をしている間、いつまでも帰ってこない上条当麻と９９８２号は何をしていたかと言うと。

「なあ何であいつらのとこ戻っちゃいけないんだ？」

「それはですね、インデックスの真の目的を知るためですよ。と、ミサカはインデックスの動向に注目してみます」

２人は一方通行とインデックスの会話に水を差さないよう、ドリンクバーの前でたむろしていた。
ドリンクバーの前でたむろするのは、周りの人たちに迷惑なので、良い子も悪い子も真似しないように。

どうやらインデックスが、大量の食事を取る最中に、一方通行のことをチラチラうかがっていたのを９９８２号は察知していたらしい。
そのためあえてインデックスと一方通行を二人きりにすることで、インデックスの行動を監視しようと目論んだのだ。
と言っても、そのたくらみを考えたのは上条がトイレに行くと言って席を立った時思いついただけなので、かなり行き当たりばったりである。

実際、ドリンクバーからでは会話はうかがえない。
しかし、どうやらその会話は終わったらしく、インデックスはパフェに手をつけ始めた。

「ふん、ボディタッチの一つも無いのですか。まあどうせ反射されるでしょうが、
どちらにせよその程度でヒロインの座を狙おうとは片腹痛い。
と、ミサカはインデックスの事を非ライバル認証します」

「何のことかよくわからねーが……そうだな、あいつら二人とも白いし、意外とお似合いなんじゃねえの？」

「なっ！その発想はなかった。ですが見た目で全てを決めたら駄目です！
と、ミサカはありえる未来を想像して身をふるわせます」

一方通行とインデックスに関して、見当違いな勘違いをしていた。

## そのにじゅういち（後書き）

次回か次々回こそテレビの中へプラグイット！

# 番外編　上条当麻の華麗なる日常　そのいち（前書き）

番外編。
幻想殺しに家出された上条当麻が、魔術サイドとどうからんでいくのか。
そんな妄想を綴った番外編です。

# 番外編　上条当麻の華麗なる日常　そのいち

上条当麻が自身の『影』と遭遇してから1週間ほど経過した。

現在彼とその居候のインデックスは、ドナドナと学園都市外部へと運ばれている。

何故、そんなことになったのか。

それは「学園都市第一位・一方通行」と「たかが無能力者」とつるんでいる、という噂から、

その「無能力者」を盾に打倒一方通行を掲げるスキルアウトが増大したからだ。

将を射んと欲すればまず馬を射よ。と言う訳で、大幅な無能力者狩りが発生したのだ。

一方通行を狙うスキルアウトを探すよりも、ほとぼりが冷めるまでその無能力者を学園都市外部へ放り出した方が早い。

と判断されたため、無能者狩りの事態を重く見た学園都市の上層部が、

「落ちつくまでどっか行ってろ。その間に情報統制をおこなうから」

という判断を下したわけだ。

本来学園都市は、学生からの情報流出を避けるため、余り学園都市外部に学生を出すことを好まない。

もし仮に外部に出る事を希望したとしても、３枚の申請書に直筆サインを書き、保証人を用意して、更には血液に微小の監視用機械を注入して初めて外に出られるのだ。

それほど外に出すことに対して厳しい学園都市が、自ら「外に行ってろ」と命令するパターンは大変珍しい。

上層部がそれほどまでに迷惑した、と言うことだろう。

それはさておき。正式な手続きの元、堂々と出所した上条と違い、インデックスはそうではない。

この白いシスター、元々学園都市に密入国した魔術サイドの人間であり、そんな人間が正式な手続きなど踏める訳もなく。

故に「インデックスはお留守番。ただし飯は小萌先生のとこに行け」と説得を試みたのだが、インデックスはなみだ目でカチカチと口を開いたり閉じたりしていた。

このままでは出国する前に骨の髄まで食いつくされると危惧した上条は、こうしてインデックスを密出国させようとしているのだ。

と言っても、タクシーで外に出るための「門（ゲート）」を通過するときに、後部座席で横になって隠れるという、随分お粗末な隠れ方だったが。

案の定インデックスは門を通過するときにアンチスキルに見つか

った。
さらば学園生活、こんにちは臭い飯生活。と上条は思ったのだが。

何故かインデックスに対して「仮ＩＤ」が発行されていたため、事なきを得た。

仮ＩＤも発行するには正式に手続きを踏まねばならず、やはり密入国者であるインデックスにそんな芸当は不可能なわけで。

一体誰がそんな親切を?という一抹の疑問を残し学園都市を後にした。

・・・

海。夏と言えば海である。
上層部が上条当麻に提示した避難先は、海のある町だった。

学園都市は内陸部に存在する。そのため基本的には海とは縁が無い。
といっても、海に近い水質のプールはあるのだが、それでも本場とは気分が違う。

そういうわけで割とワクワクしていた上条は、町に到着してさっそく海へ向かった。

しかし、海水浴客が一人もいない。

どういうことだと考えたものの、夏休みも残りわずかだから最後は家ですごそうとか考えてる人が多いのか？
などと考えつつも、とりあえず旅館へと向かった。

・・・

良く言えば老舗。悪く言えば古ぼけた旅館。

上条当麻とインデックスの前には、木造の古い旅館があった。
台風が来たらビニールハウスのごとく吹き飛ぶのではないか、と言うほどボロボロな旅館を見て、上条は上層部のケチっぷりに泣いた。
とはいえ、わざとではないにしろスキルアウトを騒がせる、という事態の原因の一端を担う上条を無料で旅行させているのだから、文句は言えまい。

何にせよここに泊まることは規定事項なので、さっそく中へと入る。

「あのー、予約してた上条と申しますー。誰かいませんかー？」

旅館に入った上条は、人の姿は見えなかったので、誰かいないか確認を取った。

「誰もいないんだよ」

良く言えば老舗。と言うだけあって、外観はザ・日本っぽい旅館を見て大いに喜んだインデックス。
しかし誰も出迎えない従業員、埃のたまった棚、その上に乗れば抜けてしまうのではないかと思ってしまうほど脆そうな床。
マイナスポイントが次々と発見され、更にはその間プラスポイントが一個も見つからない事に不安を覚えた。

しばらくすると、旅館の亭主らしき人が現れ、二人は部屋へと案内される。
やたらと体の弱そうな亭主で、しきりにせき込んでいたので、客のはずの二人が亭主を気遣っていた。

「そういえば、海水浴客が誰も居ないのはどうしてなんですか？」

素朴な疑問を解消するため、亭主に聞いた。

「ああ、それはですね……ゴホッ実はゲホッ今年はクラゲが謎のゲホゴホ大量発生いたしましてなあガッハゴエエ！！」

疑問は解決したが、これ以上亭主に口を開かせないようにしよう、と二人は思った。

クラゲのせいで海水浴はろくに楽しめそうにない。

その上学園都市外部へ行くには保証人―詰まる所両親―の同行が必要で、明日にでもこの旅館に到着するそうだ。

高校生にもなって何が悲しくて両親とクラゲの居る海水浴を楽しまねばならないのか。

残念過ぎる海水浴に、不幸だ、とつぶやいた。

そしてそこまで考えると、これはひょっとして上層部の仕返しか何かなのか、とすら邪推をしてしまう。それが事実なのかどうかは不明だが。

兎にも角にも、部屋に荷物をまとめて、さあ遊ぶぞ！などと意気込んだところで、特にする事は無いため、部屋でインデックスとダラダラ過ごすのであった。

「むむ、このちゃぶ台におかれている煎餅は食べての良いのかな！？」

ちゃぶ台の上には、湯呑が何個か逆さまにおかれている。

その隣にはポットと急須、煎餅が皿の中にあった。

「なんだか食べるのに不安を感じるのはわたくしだけでせうか……？」

まあ、インデックスなら大丈夫だろ。と思い、食べたいなら食べたらいいじゃん。とある種の毒見を促す。

「むっ、なんだかとーまの目線があやしいかも！」

「いやいや、そんなことはないですことよ！さあさあ、こちらのお茶もどうぞ！俺は腹減ってないしな！」

「とーまにしては気が利くね！」

噛みつき攻撃が来る前にお茶を勧めることで気をそらす。

そしてインデックスはバリバリと煎餅を食べ始めた。

「このお茶と煎餅、すっごく食べ合わせいいかも！！」

ニコニコと笑顔を浮かべながら煎餅を咀嚼するインデックス。

その勢いは破竹。

煎餅を取る手は止まらない。

その様子をみて、最初は「ああ、ちゃんと食えそうだなー」などと能天気なことを考えていたが。

「……（いくらなんでも食べすぎじゃない？）」

そう、目の前に居るシスターの胃袋は宇宙。

そんなインデックスが食べ物を目の前にして残すなどありえない。

「待て待て、俺の分は？」

「だって、とーまはおなかすいてないんでしょ？」

迂闊。圧倒的迂闊。インデックスの興味をそらすための発言が裏目に出てしまう。

こうしている間にも煎餅はその数を減らしている。

これはどうしようもないな、という結論に至る頃には、煎餅は絶滅していた。

「……（インデックスの魔法名はｂｌａｃｋｈｏｌｅ０００―大食女な子羊は食べ物を喰らう―とかいいんじゃね？もしくはｄｅｌｉｃｉｏｕｓ０００）」

魔法名はラテン語を使うものだが、ラテン語など知ってるわけも無い。

そんなわけで英語でインデックスに似合いそうな英語を考える。

ｄｅｄｉｃａｔｕｓ５４５がインデックスの魔法名らしいので、綴りが似ているｄｅｌｉｃｉｏｕｓとか良いのでは、いやでもインデックスは美食家ではなく大食らいだし、とか結構失礼なことを思い浮かべた。

インデックスはそんな上条の思考を感じ取ったのか、

「……とーま、何か失礼なこと考えてない？」

「え？いやいや、そんなこと考えてるわけないじゃないですか」

「むう……それならいいんだけど」

そしてインデックスはあっさり煎餅を完食すると、他にはないのかな？と上条に聞く。

「ｏｈ……ｇｌｕｔｔｏｎｙ０００……」

上条は思わずグラトニー、すなわち暴食の罪の名を呟いた。

「むう～！それひょっとして魔法名のことかな！？だとしたら失礼かも！

そもそも魔法名と言うのは己の信念を英語ではなくラテン語にして魔法名に込めるもので……」

「いや、でもインデックスって滅茶苦茶食うじゃん」

「そっ……それは１０万３千冊の原典がカロリーを求めてるのかも……」

上条の突っ込みに思わずうろたえるインデックス。

それを見て自身の優位性を感じ、畳みかける。

「だって俺、インデックスが魔術師として働いてるところをあんまり見た事ねーし……
どっちかっていうと食ってるとこの方が多いって言うか」

するとインデックスはプルプルと震えだす。
しかし調子に乗っていたため、その様子には気付かない。

「つまり食べる事に関する言葉を魔法名にしたら良いと思うんだ。
例えば、大食い選手権とか、時間内にこれを食べたら賞金出します、みたいなときに名乗ればいいと思う」

「うがー！！！」

堪忍袋の緒が切れたのだろう。上条に向かって飛びかかってきた。

インデックス　は　かみつく　こうげき　を　くりだした！
きゅうしょに　あたった！　こうかはばつぐんだ！

「うっぎゃあああああああ！！！！」

上条の悲痛の叫びは、クラゲの多い海に沈む太陽と共に消えて行った。

・・・

＜？？？＞

影は溜息をついた。

影がいるその空間には何もなかった。

ただし、周りにはシャドウだけはいっぱいいたが。

どうやら人間の姿をしている自分が、最近持ち場を荒す人間だと思われているらしい。

「やれやれ……幻想殺しは幸運すら打ち消すんだったか」

やってられん。影はひとりごちるが、よくよく考えると、幸運を打ち消すからとはいえ不幸になるのはおかしい。

となると、不幸なのは体質なのだろう。不幸を回避する、という幸運が幻想殺しによって打ち消された。そう考えるとつじつまも合う。

「こういうときは、こう言えば良いんだったよなー」

間延びした緊張感の無い声で、叫ぶ。

「ふーこーうーだー！！」

そして一息つくと、ギラっとした目をシャドウ達に向け、獣のような唸り声をあげる。

「……オマエラがなぁああ！！」

跳躍。空中で宙返りし、回転した勢いでかかと落としをシャドウのうちの一体に喰らわせる。

かかとを叩きこまれたシャドウは、グチュリとグロテスクな音をあげる。

すると体液だろうか、黒い何かが、バケツの水を床にぶちまけたかのように辺りに広がった。

それを皮切りにシャドウ達は声かどうかよくわからない音を上げ、影に向かって魔法を放った。

「はっはあ！お前らみたいな脆弱な攻撃に幻想殺しなんぞ使う必要はねえんだよ！！」

シャドウが放つ炎や雷などの異能を目の当たりにして異能を打ち消す幻想殺しは不要と断じ、攻撃の全てを回避行動のみで避けて行く。

それらを避けたことにより、流れ弾が別のシャドウに直撃した。

影がひるんだシャドウ達に体術を叩きこむと、それを食らったシャドウは、一様に消滅して行く。

「ひゃっはー！！バカどもが！勝手に自滅してんなよ！！」

世紀末のモヒカンのような叫び声をあげる。
続いてもっと楽しませろよ、と獰猛な笑みを浮かべ、挑発する。
知能があるのかは不明だが、その挑発を見て一斉に影へ襲いかかるシャドウ達。

「はっ、この空間はもう、てめーらの現実じゃなく、俺だけの現実なんだよ！！」

上条は再び跳躍し、どういった原理か不明だが、そのまま空中にとどまる。

「俺だけの現実には、てめーらみたいな雑魚は存在しねえ」

消えろ。と一言つぶやくと、影は右腕を掲げた。
すると右腕から火、水、雷、風などありえないほど大量な現象が発生し、それらはシャドウを蹂躙して行く。

全ての現象がおさまった時、辺りには影しか存在しなかった。

「ははっ、雑魚ばっか」

空中から降りた影は、先ほどまで存在したシャドウ達を馬鹿にする。

それほどまでに力の差が存在した。

子どもと大人、と言うレベルでは無い。もはや神とその他の有象無象と言っても良いだろう。それほどまでに圧倒的な差だった。

「はぁ、ひまだなー」

この世界には基本的にはシャドウしかいない。

一方通行達というイレギュラーが居るが、いつもいるわけではないので、こうやって自我をもった存在は今現在、影しかいないのだ。

「海水浴とかしたいなー」

一人で泳ぐのってどうなんだ、と影は思うが。

何にせよ何も考えずに何かに没頭するのは悪くない。

そう考えた影は何もない空間。その中心（と言っても何処が中心かはわからないが）らしき位置に立つ。

「自分だけの現実＜妄想＞が支配する世界、か」

心の集大成。すなわち自分だけの現実の集まり。影がそれを理解するのに時間はかからなかった。

そして、それをする必要があるかは不明だが、片足を上げ、ダンッと地面を踏み抜く。

すると影を中心にして、周りの地面が水で埋め尽くされた。

半径１００m程度だろうか、綺麗な円形の湖に、その端には砂浜が広がっている。

「海の完成っと」

影は水、もとい海の中心から飛び立ち、砂浜へと着地した。

「……いや、実際目の当たりにしたら別に泳ぎたくはないな……」

クラゲとか居そうだわ、と呟く。

偶然にも、影と光は、同時に海に対して残念な感情を抱いたのだった。

# 番外編　上条当麻の華麗なる日常　そのいち（後書き）

本編の合間にちょこちょこと書いていこうかなとか思います。

# そのにじゅうに　しのぶじゃー！（前書き）

インｔｈｅテレビです

## そのにじゅうに　しのぶじゃー！

9月1日。
全国的に始業式である。
故に学生は夏休み気分の抜けない体を気だるげに学校へと向かって行く。
その中で、学校へ行くどころか私服姿で街中を歩いている一組の男女が居た。

「……やはり常盤台の制服でないと、落ち着きません。
と、ミサカは自身の体を眺めてそわそわします」

「我慢しろォ。学校が始まった今、平日の日中に制服姿で街中うろついてたら怪しまれンだろォが」

どちらにせよ、平日の昼間に見た目中高生位の男女が外を出歩いているだけで相当怪しいのだが。
私服姿になるのは単なる気休めだろう。常盤台の制服でなければなんでもよかった、そんなところだ。

「しかし暇ですね。と、ミサカは男なら率先してエスコートしろよと一方通行を批判します」

「うるせェ、こうして街中連れてきてやってるだけ感謝しろォ」

そう。本来上条当麻と御坂美琴の始業式が終わり次第テレビの中に行く予定だったのだが、
それまで空き時間があるので、９９８２号が出かけたいと駄々を

こねたのだ。
　一方通行は嫌々ながらも時間になるまで出かけることにしたのだが。

「かといって街に出て何をしたいかなんて、ミサカにはおもいつかないんですけどねー」

「……そォだな、俺らに年相応の遊び方なンぞ知ってるはずもねェ」

能力を鍛える事だけを考えてきた。

能力を鍛えさせるためだけに生きてきた。

そんな2人が集まったところで何をするかなど分かるはずもない。

仕方が無いので、結局いつものレストランで上条当麻と御坂美琴を待つことにする。

2人はそのうち上条と御坂に普通の学生の暇つぶしの仕方を教えてもらおう、と思った。

・・・

9月1日。

始業式を終えた上条当麻は、いつものレストランへ向かっていた。

もちろんテレビの中へ行くためだ。

インデックスには帰って来るのが遅くなるかもしれない事、

昼飯・晩飯は冷蔵庫に入れてある事、

もし全部食べてしまった場合は月詠小萌を頼る事、この三点を伝えた。

一応小萌先生にも三点目に関しては了承を得ている。

と言うのも、今日から姫神秋沙が上条の通う高校に転校してきたのだが、姫神は訳有りで小萌先生の住むアパートにやっかいになっていた。

そして転校した際、学生寮へと移住していたのだ。

そのため、小萌先生自身も一人きりのアパート暮らしは少し寂しいと感じていたらしく、

上条の頼みを喜んで聞きいれた、と言う訳だ。

自分の我儘―影を取り戻すこと―でインデックスには寂しい思いをさせてしまうのが申し訳なく感じる上条だが、

普段のインデックスとは思えないほど上条のお願いを快く受け入れていた。

こういった時、インデックスなら「またとーまは私だけ除け者にして！」みたいな感じでかみつく攻撃を繰り出すはずなのだが。

と、上条は疑問に思うのだが、インデックス曰く、

「あくせられーたが、とーまを守ってくれるから」

と言って笑顔を投げかけた。

おそらく昨日のレストランでの会話はこの事だったのだろう。

それにしても顔合わせは昨日が初めてだったはずだと言うのに、

インデックスは随分一方通行の事を信頼している。

上条はそんな2人を少しだけ嫉妬しつつも、一方通行と９９８２号が待ついつものレストランへと向かうのだった。

・・・

9月1日。
御坂美琴は現在困惑している。

とりあえず、「現在」という時間軸から遡り、時は8月31日。
この日は色々ありすぎたせいで、寮へと戻った後、寮監にこっぴどく叱られた。
叱られた際の肉体言語によって、気づけば朝になっていた。

ひょっとして1週間くらい気絶してた？などと考えてしまうが（それ程恐ろしい折檻だった）そんなことはなく、一晩気絶しただけだった。
一晩気絶すると言うのもすさまじいが、何にせよ朝と言う事は、もう少ししたら始業式がある。

まだ始業式まで時間はあるが、とりあえず着替えようと思い布団から出ようとした。
しかし何やら布団が自分の体の面積よりも広くこんもりしている。

死んだように気絶していた私、人の気配を感じさせない隣の布団。
この二つの符号意味するものは……一つ……！

「黒子ォォ！！」

「ヘブンッ！！」

自身の布団を思い切り引っぺがすとそこには白井黒子が丸まっていた。

それだけなら小動物的な意味で可愛らしいのだが。

その姿は黒いネグリジェであり、黒の布地であってもものすごく薄い布地で、いろんな部位が透け透けであった。

そんな白井の姿をみて思わず能力を発動させてしまう。白井は電撃を喰らって変な声を漏らした。

「な、何をなさるのです!?お姉さま!」

お姉さまがお望みならこういうプレイも……と言ったところで御坂が白井の発言を阻止した。

「あ、あ、あんたって奴は私が気絶してるのを良い事に何してるのよ!!?」

「あら?私、こんな格好ですけどお姉さまを介護した後に添い寝しただけですわよ?こんな格好ですけど。

ひょっとして、私とめくるめく夜をご想像なされて、照れ隠しに愛の鞭を……!?」

お望みでしたら、いつでもウェルカムですのに。と白井は言うが。

「そんなわけないじゃない!!てか起きたら自分の布団の中にネグリジェ姿の人がいたら誰だってビビるわ!!」

「では普通のパジャマなら潜り込んでも良いのですわね？」

「んなわけないじゃない！」

「それならば、どうやったら私とお姉さまは結ばれるんですの！？物理的に！」

「物理的にって何よ！」

ぎゃーぎゃーと口論を交わす二人。朝から騒いでいると、奴が来る事を忘れて――――

『何を騒いでいる』

でんでんでんでん。でんでんでんでん。でんでんでんでー（にゃあ）。

そんなＢＧＭと共に部屋の扉が開かれた。

「御坂、貴様反省が足りないようだな……？」

「イエ、深く、実に深く、ハンセイしてオリマス。ダウラギリの谷よりも深く」

「ならば何故騒いでる？白井もだ。何か弁明はあるか？」

背後に鬼が見える寮監の気迫に圧倒された白井は、部屋の隅に思わずテレポートしてしまった。

「ほう、寮内での能力使用は厳禁だ、と言う事を忘れたか？それとも……」

――抵抗する気か？

寮監の冷たい目が白井を貫いた。

その鋭い殺気のみで白井の戦意は根こそぎ奪われてしまう。

いや、別に白井は戦うつもりなど到底なかったのだが。

「あ……ああ……」

放心状態。

ジャッジメントとして最前線に立ち続けた白井がひと睨みで震え上がった。

白井は御坂の前では変態だが、ジャッジメントとしては一流だ。どんなに凶悪な犯罪者相手でも一歩も引かないその姿は他のジャッジメントに勇気を与えているそうだ。

兎にも角にも、そんな白井が、寮監の威圧のみで恐怖にかられたのだ。

寮監の実力はそれだけで説明可能だろう。

さて、寮監の注目が白井に行っている隙に、御坂はゲコ太パジャマのままソロリソロリと部屋を脱出しようとしていた。

「おや、寝間着のまま何処へ行くと言うのだ？」

「いや……ちょっと自分探しの旅に行こうかと……」

「ほう、自分を探しにな……ひょっとして、記憶喪失か何かか？だとしたら頭に衝撃を与えたら自分を見つけられるかもしれんぞ？」

嗜虐的な笑みを浮かべて、指ポキする寮監。

絶望的な笑みを浮かべて、涙を流す白井。

諦念的な笑みを浮かべて、その場にしゃがむ御坂。

ここが地獄か。そう思った瞬間には、意識がブラックアウトした。

「はっ！？」

気付いたらまたもや自分のベッドの上だった。時計を見るとそろそろ部屋を出た方がいい時間だ。

御坂は基本的に化粧などをあまりしない。

それゆえ、自身の身だしなみを整えるのに時間はさほどかからないのだ。

白井も目を覚まし、騒がないようにそそくさと着替えを始めたのだった。

・・・

そして時は「現在」へと戻る。

最初にも言ったが、御坂美琴は困惑している。

始業式を終え、教室へ帰った御坂に、女生徒達が群がっているのだ。

基本的に、御坂はレベル5と言う事で、周りが気を使って御坂を敬遠している。

別に御坂は嫌われているわけではない。むしろ多くの同輩後輩達が羨望の眼差しを送っているくらいだ。

しかし白井が「輪の中心に立つことは出来ても、輪に混ざることはできない」と評している通り、多くの生徒が恐れ多いと感じてしまう為に、本当に仲のいい友人は数えるほどしかいない。

そんな御坂が何故か女生徒達に囲まれていた。

「昨日の殿方とは如何なさったのです！？」

「寮監様に真っ向から逆らうほど心酔なされてるのですね……」

「今朝も寮でひと悶着あったらしいですわね、それも昨日の事で寮監様に逆らっての事ですか？」

「「キャー！」」

御坂をおいてけぼりにして騒ぐ女生徒達。やはり女学校だからだろう。

こういった恋愛話は大好物なのだ。しかし御坂と上条は残念ながらそういう関係では無い。

昨日だって、御坂に対する告白まがいの言葉を海原に扮した謎の人物に上条は吐いていた。

が、それを上条が意識して言ったわけではない。と言う事を御坂はよく理解しているため、

周りの女生徒達の質問攻めにうまく答える事が出来なかった。

そんなわけで御坂は女生徒達の制止を振り切って常盤台中学を走り去った。

向かう先はいつものレストランである。

「成程……流石の御坂様も恥ずかしがっておられますね」

「嗚呼、照れる様の何と愛らしいこと……」

「それにしても、御坂様をあそこまで惚れさせた殿方と言うのも一度お顔を拝見してみたいものですね……」

御坂が派手な逃走をかましたため、誤解は更に深まったのだった。

・・・

かくして、４人はいつものレストランへ集まった。

とりあえずテレビの中へ行く前に情報を整理することにした。

「えーっと、その布束？って人を調べにテレビの中行くんだよな？」

「あァ、そうだァ。」

「あ、上条クゥン、ちみは実戦も兼ねて射撃の練習もしますから覚悟しといてください。

と、ミサカは戦力を増やすために鬼軍曹になります。

そんなわけで、後で渡しますが、鋼鉄破りに何かあった時の為にハンドガンを懐に忍ばせといてください」

「うえっマジかよ……いや、まあそうだよな……」

力不足だもんな、と呟く。

「そんなことないわよ！何かあったら私が守るから！」

御坂美琴が上条当麻をフォローする。

しかし上条の表情は暗い。やはりテレビの中を体験したというのに、力不足を理解したうえでテレビの中に行くのは躊躇われるようだ。

「お前はあの影を取り戻したいンだろォが。そのために強くなりてェならいくらでも頼れ。

お前が力をつけるくらいまでは守ってやるからよォ」

「ああ……ありがとな！」

「さて、布束砥信についてだが……」

さて、元気を取り戻した上条だが、一方通行はそれをさっくり流して話を続ける。

「こいつは、妹達に知識と人格を植え付ける『学習装置（テスタメント）』ってのを開発した奴だ。

そして以前テレビに入った時、あの研究所にあった名簿の中にこ

いつの名前があった」

「つまりその布束って人がテレビと何か関係ある可能性が高いってことね」

「あァ、その通りだァ。さらにこいつは１９０９０号とも関連がある」

「布束砥信がテレビの中に居るとしたら、うまいこと接触しなければなりません。

と、ミサカは真実に近づく為の一歩を踏み出します」

布束砥信に関する事を軽くまとめた後、４人はテレビの中へと向かう。

・・・

４人が地面に着地すると、クマが待ちわびたかのように出迎えた。

「いやあ遅かったクマね！寂しかったクマよー」

一応レギュラーだけれど、久々の登場である。

「あァ、色々情報を集めてたもンでなァ」

「クマ？つまり何か情報を得たからここに来たってわけクマ？」

「まあ、そういうことね。それで、ここ最近放り込まれた人は居る？」

御坂がクマの質問に首を縦に振った。

そしてここ最近は雨が降らずマヨナカテレビを見れていなかった為、誰かテレビの中に来てないか確認を取る。

「いやー、それらしい気配は無かったクマよ？あ、でも普通の人とは違った気配は感じるクマ」

その言葉に上条が反応した。

「そ、それって何処から反応するかわかるか？」

普通の人とは違う反応。上条はそれを自身の影の事かと思ったのだが、

クマが言うには「普通の人とは違うけど、人の気配であることには変わらないクマ」だそうだ。

ゆえに可能性としてそれは布束である可能性が高い、と言う事で上条は少しがっかりした。

「普通の人とは違うってのはどういう事だァ？」

「いやさ、何だか普通の人にしては力を感じるクマよ」

『力』という言葉に反応する一同。この場で『力』というと答えはそう多くない。

４人は頭に思い浮かんだ単語を思わず口にする。

「「ペルソナ……？」」

布束の影、と言う可能性もあるが、今までとは違う反応を示したクマを見て、その可能性は薄い、と全員が考えた。

クマ「まあ何にせよ、力の感じるところまで行ってみないと分からないクマよ」

クマは大まかな気配を察するだけで、そこまで索敵能力は高くない。

結局その場まで行かないと何も分からないのだ。

一方通行「それもそォだな……そンなら、とっとと行くぞォ」

一方通行がリーダーとして仕切る。

「「了解！」」

こうして、仮称特別捜査隊（未だに正式名称は決まってない）の多分布束救出大作戦がスタートした。

・・・

＜不思議な忍者からくり屋敷＞

屋敷。どうみても屋敷だった。

観光に来た外国人が見たら「ｏｈ！ニンジャフジヤマＨＡＨＡＨＡ！」とか言いそうなくらいの昔ながらのジャパニーズ屋敷だった。

江戸時代によく見られる長屋門、その入口に立つと、木彫りの看板には「砥信流忍術屋敷」と書かれている。

「これはどぉ見ても……」

「布柄砥信ですね……と、ミサカは忍術ってどういう趣味してんだと突っ込みを入れます」

「同名の人……は無さそうよね、「砥信」なんて名前そういないでしょうし」

「おお！これが噂に聞くジャパニーズニンジャでーすクマー！？」

「お前はどこのミーハー外国人だよ……」

入口の門の前に立つと、勝手に門が開く。

何と言う自動ドア、江戸時代の様式の建物にはオーバーテクノロ

ジーだろとか学園都市組の４人は思うが、クマは大興奮であった。
開いた門の先、そこには屋敷まで真っすぐ通路が伸びていた。
しかしその通路の左右は、
「うわっ！何だこりゃどこの厳島神社だっての」
海で覆われていた。屋敷のまわりは長屋門で囲われていた為、屋敷の上層部しか見えなかったので気付けなかった。
それでも門が開かれるまで、潮の匂いすらしないと言うのは奇妙であるが、テレビの中なら仕方ない。
仮称特別捜査隊の一同は屋敷の敷地内へと足を踏み入れた。
「いやあ、実に面白い造りをしてますね。と、ミサカはわざわざ門の内側を海で覆う事の無駄さに笑います」
「そうよね、普通外堀と内堀だけで十分よね」
「テレビの中の建造物に突っ込み入れるなよなァ……」
「へー、これって人間にとって普通じゃない建造をしてるみたいクマね」
「つゥかこういう場所って、放り込まれた奴にとっての現実、っつってなかったかァ？」
一方通行の疑問の声をあげる。

「そうだぜ、こんな建物みたことねーよ」

テレビの中に降りたった時に渡された鋼鉄破りをいじりながら、上条も一方通行の疑問に便乗した。

「あっちにある建物が必ずしも出てくるわけではないみたいクマよ。あくまでも『その人にとっての現実』なんだクマ」

「じゃあ極端な話、その人自身の妄想とか願望が、『その人にとっての現実』になるってこと？」

『その人にとっての現実』。その言葉の意味を考えた御坂はクマに聞いた。

「そう！そうクマよー。美琴ちゃんあったまいー！」

どうやら正解だったらしく、素直な称賛を浴びて、御坂は少し顔を赤くして照れている。

「では今回は、布束砥信の願望か何かが具現化したと言う事ですね。と、ミサカは結論を述べます」

とここで、屋敷の扉までたどり着いた。

「皆準備は良いクマ？無線も持ったクマ？」

「あァ、つゥか無線持ったか？っていう確認はクマが一番しねェといけないンじゃねェの？」

「むむ！失礼クマねーちゃんと持ってるクマ！」

全く、失礼しちゃうクマね！とクマは無線を手にずんずんと扉の中へと進んだ。
クマが屋敷の中へ足を踏み入れた瞬間。

「あれ？」

クマの立つ床がパカッと開いて、クマは物理法則に従って落ちて行く。
床が閉まりそうになったので思わず一方通行が床の中へと飛び込んだ。
バタン、と床が閉じた時、再び床を開ける事は出来なかった。

「あ、あれ……？」

突然のことに戸惑いを隠せない上条。

「いきなり分断されましたね。と、ミサカは現状をまとめます」

９９８２号は割と落ち着いて現状を分析する。

「ま、まあ……一方通行もいるし、大丈夫じゃない……？」

御坂は一方通行なら、クマがいても何とかなるだろ、とアバウトな感じで言う。
そして残された3人は、その床を避けて屋敷内へと入って行った。

## そのにじゅうに　しのぶじゃー！（後書き）

サブタイの意味は忍者→しのぶじゃ→砥信じゃー！
とかどうでもいいこじつけですので気にしないでいいです

## そのにじゅうさん（前書き）

忍者屋敷です。

## そのにじゅうさん

＜一方通行・クマｓｉｄｅ＞

周りが海なのに落とし穴があるってどぉいう事だよ！と内心突っ込みを入れつつ、
一方通行は先に落ちたクマを何とか抱えて着地した。

しかし着地した先は、牢屋だった。

とりあえず一方通行は、自分達が落ちてきた天井を見据え、軽く跳躍し拳を突き刺そうとする。
しかしベクトル操作を以っても、天井は傷一つつかなかった。

自分達が落ちてきたところを逆走出来れば簡単に戻れると思ったが、そこまで甘くないらしい。
仕方が無いので、目の前の木でできた牢を壊そうと試みるも。

「……ハァ？ンだこりゃ」

「牢屋クマね」

「ンなもン見りゃわかるっつゥの。問題はここが開かねェってことだ」

「つまり……閉じ込められたクマね！」

「なンでそンな悠長に構えられるかねェ……能力が阻害されてるとはいえ、
この俺の能力ですらこじ開けらンねェって異常だぜェ？」

「まあ今のとこシャドウがいる感じはしないから問題ないクマー」

現状どうしようも無いと判断したクマは、その場に座り込んで無線を取りだした。

「あァ、そういや無線で連絡とらないとなァ」

「クマクマ。今回のクマは前回のミスを反省してるクマよ！」

ドヤ顔で話すクマにイラッとするが、クマが無線で話そうとする前に残った3人から先に連絡が来たので話すことにする。
クマはちょっと残念そうな顔をしていた。

『あんた達無事？こっちは一応3人そろってどっかの一室に居るけど』

御坂美琴だ。とりあえず無事であるが、それだけであるということを伝える。

『おォ、こっちは無事だ。なンか俺の力でも出られねェ牢屋の中に居るけどなァ』

『そう、とりあえずあんた達の事は何とか見つけるから、何とか耐えててね』

『任せたぜェー。こっちもなンとか出られねェかやってみるわ』

『了解。出られたら連絡頂戴。こっちも何かあったら連絡入れるから』

了解だァ、と言って無線を切る。クマは恨めしそうにこちらを見ている。

無視しますか？　はい↑　いいえ

「クマ！クマの貴重な活躍シーンだったのに！！」

「おいおい、お前はあンなンで満足だってのかァ？こっからの脱出方法考えるとかよォ、もっとあるじゃねェか！」

「……クマ！？そうクマね！クマ頑張るクマ！」

一方通行の言葉に奮起したクマは、木の牢の前に立ち、体当たりを始めた。

しかし　こうかはないようだ……

一方通行も何とか現状を打破するために周りの壁や床をペタペタ触って抜け穴でも無いかと調べてみるものの、

人を閉じ込めておくための牢屋の為に抜け穴があるわけが無い、と納得する。

よくよく考えると、周りは海のはずだ。
それならこの地下牢の周りはそこまで複雑な構造では無いはず。
ならば目の前の牢を何とかした方が良いだろう。
一方通行もクマと同じく牢の前に立ち、ペタペタと牢の構造を解析していく。

こうして一方通行とクマは、しばらくの間牢屋で過ごすことになった。

・・・

＜上条・御坂・９９８２号ｓｉｄｅ＞

目の前で2人が罠の餌食となった。

とりあえず無線も通じて無事は確認できたものの、流石忍術屋敷と言ったところか。罠が満載の様だ。

3人はこれからどうするかを考える。

「とりあえず無事は確認できたけど、まずは一方通行達の救出に向かった方がいいのか？」

「助けに行くと言ってもここの構造を全く把握してませんしね……」

「うーん、地図でもあればいいんだけど……そうね、構造を把握するついでに地図でも無いか探すってのはどう？」

「それしかなさそうだな」

「そうですね。では探索がてら上条に銃の扱い方を教えましょうか。
と、ミサカは上条にこちらのハンドガンを構えるよう指示します」

ハンドガン、と聞いて上条は９９８２号に質問をする。

「鋼鉄破りじゃないのか？」

「これは随分とじゃじゃ馬なので、上条にも渡してはいますが、今はまだトレーニング用の重り、という認識で良いですよ。
と、ミサカはまずは初心者コースをお勧めします」

「成程なー。分かった、じゃあこれは背中にくくって行けばいいってことだな」

先頭を御坂、その後ろに９９８２号と上条がハンドガンを構えて並列した隊列となり、３人は探索を開始した。

別に９９８２号にそんな気はないのだが、上条に手とり足とり拳銃の扱い方を教えている様子を見た御坂は。

「……（あんなにべたべたして……いや、別にうらやましくなんかないんだけどね！）」

軽く嫉妬していた。

御坂は考える事すらツンデレ。

どうせなら頭の中くらいデレデレすればいいのに。

・・・

＜不思議な忍者からくり屋敷Ｆ１＞

３人は通路内を慎重に歩いている。

通路は複雑に入り組んでおり、気を抜いたら何処から来たのか忘れそうになる。

しかし、御坂美琴は自分達の来た道を完璧に覚える程度には記憶力があるので、そこは問題ない。

問題は仕掛けられた罠だ。

例えば床の通路に足跡が刻まれていて、明らかに怪しいのでそれを避けて通ろうとすると、

横の壁から竹やりが飛び出してきたり。

慌てて避けたが今度は足跡を踏んでしまい、何か来ると思った３人は身を構えるものの、何も出てこなかった。

どうやらその足跡を踏んで行けば罠が出ないようだ。

安心してその足跡をたどって曲がり角を行ったすぐ先に今度は落とし穴があったり。

どうやら曲がり角の直前まで行けばもう竹やりは出てこないようだった。

しばらく罠も無く安心して通路を行くと、またも足跡が刻まれていた通路があり、今度は逆に足跡が罠かも？
と思った御坂はポケットに入れていたコインを足跡の上に乗せると足跡から刃が飛び出してきたり。

今度は警戒しながら歩いていると、躓いて倒れそうになった上条が、体を支えようと壁に手をついたら、その壁がスイッチの様にへこんだ。
何も起きないからどういう事だと思ったら、ゴゴゴ、と屋敷全体が揺れ始めた。

しかし揺れただけで3人に被害は一つもなく、不思議に思った3人が辺りを見回すと、
何と屋敷の地形が変わったらしく、引き返そうとしても知らない場所だった。
これは拙いと思ったが、もう一度へこんだ部分を押すと、屋敷が元の形に戻った。

紆余曲折を経てようやく地図らしき紙が置かれている部屋を発見し、嬉々としてその紙を取りに行こうとする上条。

どう見ても罠だろ、と突っ込みを入れる間もなく上条は地図を手にする。

すると部屋の襖が勝手に閉まり、開かなくなったと思ったら壁がクルリと回った。

そこから太った猿に警官の服装をさせたかのようなシャドウ「収賄のファズ」が7体程現れた。

シャドウを見て御坂と９９８２号はすぐさま戦闘態勢へと入る。

続いて上条もハンドガンを構えつつ手に取った紙を開くと、

はずれ（笑）

と書かれていた。

これにキレた上条は、紙をぐしゃぐしゃにしてシャドウへ放り投げ、紙ごとシャドウを打ち抜いた。

この時の事を、９９８２号は「あの時の上条の射撃には目を見張るものがありましたね」とコメントしている。

上条の見事な射撃で収賄のファズは残り6体。その6体は3人を囲うような形で円陣を組んでいる。

ここで、御坂がなにやらトライアングル・フォーメーションだー！とか叫ぶ。

上条と９９８２号は何言ってんだこいつとか思うものの、言いたい事はわかったので、3人はシャドウの陣の中心で三角形にならんだ。

それにしてもこの御坂、ノリノリである。

「いやしかし、上条は中々筋が良いですね。と、ミサカは素直に腕前を称賛します」

「へ？いやあ、夢中だったからなー」

この分なら鋼鉄破りの扱い方を教える日も近いな、と９９８２号は思う。

戦力はあって越したことにない。

早く上条にも鋼鉄破りを笑いながら振り回すくらいにはなってもらわねば。

どうやって鍛えてやろうか考える９９８２号は、それはそれは嗜虐的な笑顔だったそうだ。

こうしてる間にもじりじりとシャドウ達は円陣を縮めて行く。

３人はぎりぎりまでシャドウを引きつける。

「今よ！一斉掃射！！」

御坂の号令を聞いた瞬間、上条のハンドガン、９９８２号の鋼鉄破りから火を噴くように銃弾が飛び出す。

シャドウ達が３人との距離を縮めていたため、銃弾を当てるのは非常に容易であった。

号令を出した御坂も２人に負けじと電撃を放つ。

それだけでシャドウのうち３体はあっという間に沈黙した。

「ふん、雑魚どもめ。と、ミサカはさっきのシャドウを他愛も無いと切り捨てます」

「あー……よかった、当たって……正直ひやひやしたぜ。先走って打ちそうになったしな」

「よく我慢できましたね。と、ミサカはリーダーの指示をしっかり聞く事は良いことだとほめたたえます」

「まだ出てくるかもしれないから、警戒は怠らないでね」

何だか急激に仲が良くなっている上条と９９８２号を見て何だかやきもきした御坂は、２人に警戒を促す。

上条は了解了解、と再びキリッとした表情になるが、９９８２号は何やらニヤニヤした表情をして御坂を見ていた。

そんな９９８２号の視線を感じ、御坂は思わず声をあげる。

「な、なによ」

「お姉さま、ひょっとして妬いてます？と、ミサカはお姉さまも銃撃講座初心者編を上条と学びますか？と尋ねます」

「ややや妬いてねーし？別にあんなの何とも思ってねーし？」

９９８２号の指摘にあたふたする御坂。

やっぱお姉さまって面白！と９９８２号は思いつつも、ツンデレってやっぱ損気だよなあ、としみじみ思った。

下らないやりとりをしている間に、シャドウ達は３人へと襲いかかってきた。

御坂と９９８２号はそれぞれオオヒルメとワカヒルメを現出させる。

「へっへー、これ見てよ、これ！新技新技！……マハラギ！！」

御坂はマハラギ―敵全体にアギを喰らわせる魔法―を唱えた。
すると3体の影は炎によって焼かれる。しかし、火ダルマになりながらも3人へ向かうシャドウ。

「根性だけは認めましょう。ですが、これで終わりです。
と、ミサカは電光石火と言う名の新技を放ちます」

御坂に続いて９９８２号も電光石火―全体に1～2回小ダメージ―を放つ。
ワカヒルメは電光石火の言葉に反応し、９９８２号の体力を贄に、目にもとまらぬ速さで火ダルマになっている3体のシャドウを殴り、蹴り飛ばした。

「す、すげえ……」

上条はペルソナの圧倒的な力を前に感嘆の念を表す。
その力を前に、少し自信をなくしそうになるが、自分が御坂達に見合うくらい強くなればいい、と考え再び奮起した。
奮起したがシャドウはもう居なくなっていたため、少しがっかりした。

しばらく周りに気配が無いか探る。
しかしシャドウは居ないようだったので、警戒レベルを下げてその場に座って、休息をとることにした。

「はあ……それにしても何だよ外れって……馬鹿にしてるだろ畜生……」

「ていうかどう見ても罠じゃないの、どうして引っかかるようなことしてんの」

「ま、まあ落ちついてくださいお姉さま。
『はずれ』と言う事はどこかに『あたり』なる紙が存在するはずです。
と、ミサカは『あたり』が地図だったらいいなあ、という願望を露わにします」

「てことははずれ引くたびに戦闘になるってことか？」

「今回の事を考えると、そういうことになりそうね……今回は7体だけだったから何とかなったけど……」

「当たりを引いたら更に強敵が出てくるかもわからんですね……
と、ミサカは一層気を引き締めます」

結局手掛かりは『あたり』の紙を探すしかなさそうなので、再び

探索を始めるのだった。

・・・

＜不思議な忍者からくり屋敷・地下牢＞

詰んだ。

一方通行とクマは本気でそう思った。

だって、出られないんだもん。

仕方が無いので何かアクションが起こるまで牢の中でダラダラしよう、と言うのが一方通行とクマの結論なのだが。

「なァンでお前がいるンですかァァ！！？」

「何だよ、そう邪険にすんなよー」

牢を挟んだ閉じ込められてない側、そこには日本の城には似合わない洋風のテーブルで紅茶に砂糖を入れる上条の影がいた。

「これもお前の仕掛けた事かァ？」

「んにゃ、俺は場所を提供してやっただけだぜ？」

ここまで造り上げたのはアイツの力だ。と影は言う。
アイツとは、布束のことだろうか……？

「ちゅーか、なんでここに居るクマ？」

「いやさ、初っ端の罠にハマった馬鹿の顔を見にな。
あれだけは自作なんだよねー。上出来だろ？」

影はドヤ顔で語る。一方通行はその顔にイラッと来るが、逆らったところで何にもならないのでグッとこらえる。
「つうかてっきり上条の野郎が落ちたかと思ったんだが」と、影は厭味ったらしく一方通行を眺めた。

「はン、悪かったなァ。上条よりも不幸で」

「はっは、むしろここの方が安全って考えたら上に残ってる3人の方が不幸かもなー」

「……あいつらになンかあってみろォ……！
全身引き裂いて海の底に沈めてやるからなァ」

ギンッと眼に力を込め、影を射ぬく。
しかし影は意に介さず、飄々とした様子で紅茶をすすった。

「言ったろ？あの落とし穴以外は知らねえよ。まあ罠の設計図を見

たらすげえぐいなとは思ったがな。
つっても、布束の元に行きたいなら、あんな罠くらい鼻歌交じりで通過出来ないとな。やっぱ話になんねえよ」

「じゃあ、初っ端で引っかかった俺らは不合格ってかァ？」

「あっはっは、そんな事ねえよー。ここに来たのは……
まあなんだ、敗者復活のチャンスみたいなのをもってきたんだよな」

牢の前に立ち影は鍵を2人の目の前にぶら下げる。

「こっから出るための鍵だ。要る？」

「……どぉいう風の吹きまわしだ」

不自然すぎる。確かに現状手づまりで何もできないとはいえ、影の提案を受け入れるのもどうかと思う。

「（と言うか、影に借りを作るのが嫌だっつゥの）」

「まあ、俺としてはどっちでもいいんだが、あのままならあいつら確実に死ぬだろうしなー
力バランスをとるためにもお前らにはあいつらと合流してほしいんだよな。
そっちのが見てて楽しいし」

気の抜けた口調だが、物騒な内容を吐く影の言葉に、一方通行は驚愕した。

「ハァ！？どォいう事だよ！？」

「そのまんまの意味だよ。あいつらじゃ布束には勝てねぇっての。俺もそれなりに楽しい戦闘をさせてもらったしな。楽しませてもらった礼として、この空間貸したんだしなー」

ニヤニヤと一方通行へ向け笑みを浮かべる影。

影の戦闘力は未知数だが、確実に強いだろう。おそらく、今の一方通行よりも。

そんな影が認めた力だ。弱いはずが無い。それを理解できてしまう一方通行は、

「……こっから出してくれ。頼む」

迷わず素直に頭を下げた。

「ハハッ……イイね、ちょっとでも俺に頭下げるの迷うようなら鍵はあげなかったけどよ、」

――イイ悪党だ。

影はガチャリ、と牢を開ける。

「じゃ、もっと俺を楽しませろよー」

2人に一言残して、光も形も無く消え去った。

「……なンだったンだ、あいつ」

「いやーあいつって実は良い奴クマ？」

2人は牢を出る。

すると影の残したテーブルの上に1枚の紙が置かれていた。

その紙には『あたり』と書かれていて、裏面にはこの屋敷の見取り図と思われる図が描かれている。

「……見取り図？」

「この屋敷の地図っぽいクマね」

「まァ、参考程度にした方がイイだろォな。それが罠かもしれねェし」

「そうクマね、とりあえず美琴ちゃん達に連絡した方が良いクマ？」

「どォしたもンかなァ……」

今連絡を取って大丈夫なのだろうか。影の口ぶりなら、まだ無事なはずだが。

隠密行動をしている時に無線の声で敵に居場所をばらす。

なんてことになったら笑えない。

今は3人の力を信じるしかないと判断し、牢を出た2人は罠が無いか調べるが、ここはあくまでも牢屋。

人を閉じ込める事を前提とした場所に罠など仕掛ける必要はないと言うことだろう、罠らしい罠は無かった。

そして地図を見るまでも無く、上へ向かう階段は一つしかなかったので、2人は階段を上っていった。

・・・

＜???＞

「ｆｉｎａｌｙ、あなたは彼らに力を貸すのね」

屋敷の一室、茶室と思われる部屋で、和風の部屋に似合わないゴスロリの服を着た少女は、

茶杓で茶器から抹茶をすくい、茶碗に入れる。

続いて抹茶にお湯を加え、茶碗の中でかき回して均一に分散させている。

「そういうなよ、俺はいい勝負が見てえんだ。虐殺は趣味じゃねえ」

先ほどまで牢屋に居た影は、その少女前で胡坐をかき、ぶっきらぼうに言い放つ。

「ｂｕｔ、あのままでも相手はあの『超電磁砲』。良い勝負は見れたと思うけど？」

お茶が完成したのか、手慣れた動きで優雅にお茶を影へと差し出した。

「俺はこういうのよりコーヒーとかのが好きなんだけどな……ああ、結構なお点前で」

コーヒーの方が好みらしいが、社交辞令として賛辞の言葉を述べる。

「それはどうも。……ａｎｙｈｏｗ、彼らの力を知りたいからね。ｔｈｅｒｅｆｏｒｅ、こうやって罠とかいっぱい仕掛けたんだけど」

「はっ、よく言うぜ！殺す気満々だったじゃねえか！」

「ｉｎｄｅｅｄ、その通りよ？……死んだらその程度だった。それだけのことなのよ」

……出来れば、力を貸してほしいのだけれど。

少女の小さな願いは、果たして届くのか。

# そのにじゅうさん（後書き）

上条・御坂・９９８２号の努力は無駄なのです

## そのにじゅうよん（前書き）

注意

中途半端な化学知識（ねぼし的な）あれがでます。

## そのにじゅうよん

＜不思議な忍者からくり屋敷Ｆ２＞

１階は調べ尽くした。それどころか変なボタン押す事で屋敷内が変形した後も探索し尽くした。

内部構造が変わっただけで、基本的に部屋の中自体に変化はなく、よってはずれの紙すら見つけられないので、再びボタンを押して屋敷を元に戻した。

そして２階。２階も１階と同じような罠ばかりで、最早慣れた。

罠自体には慣れたのだが、普通にシャドウの数が増えた。

それも以前の研究所で戦ったシャドウ達よりも数段強力なシャドウだ。

しかしそれすら３人にとっては、戦闘の練習台に過ぎないようだ。

上条当麻はたどたどしい手つきで敵を打ち抜き。

９９８２号は手馴れた様子で敵を蹂躙し。

御坂美琴は作業の様に敵を焼きつくした。

――そして１０枚目のはずれを手にした時、数えるのを止めた。

もはや３人には当初の目的―布束砥信と接触すること―は無い。

『あたり』を見つけるその時まで、布束の事など頭の片隅にｚｉｐ形式で圧縮されてることだろう。

「ふぅ……俺らって何で戦ってるんだっけ……？」

「え？『あたり』を見つけるついでに上条を鍛えるんじゃなかったでしたっけ？

と、ミサカは当初の目的をおさらいします」

「あれ？そうだっけ？なんかあった気がするんだけど……」

本気で忘れている。布束どころか、一方通行達の事すら頭にない。

もはや『あたり』を引くまでバーサーカーモードが続くことだろう。

3人は再び屋敷の探索を始める。

・・・

＜不思議な忍者からくり屋敷・離れ＞

一方通行とクマはようやく外に出られた。

……と思ったら屋敷から少し行ったところに位置する離れ屋敷に出た。

「あっちに最初通ったところが見えるけど、ここの事も調べとくクマ？」

「そォだなァ……なンかあるかもしれねェしな……」

御坂達から何かしら連絡があるまで下手に動かない方が良いかもしれない。

とはいえ御坂達の身に何かあれば連絡できるはずもなく。

「しばらくこん中調べて、連絡が来なければ屋敷の方に戻る、ってのはどォだ？」

「むむ、これからの采配をクマに託すクマ！？これはクマ大活躍の予感クマ！」

「成程わかった、ならとりあえずこの離れを調べることにしよォか」

「あ、あれ……？聞いといてそういう事言っちゃうクマ？」

クマは不満そうな顔をするものの、最初から一方通行の考えに文句は無かったらしく、離れを調べることにした。

……と言ってもこの離れ、その辺にありそうな二階建の一軒家みたいな感じで、調べるところどころか、そもそも罠の類すらなかった。

「……あっという間に調べること無くなったなァ」

シャドウも居ない、罠も無い。むしろ住めるレベル。

と言ってもここにあるのは2階へ向かう階段と窓と壁だけだから住めるかって言われたら家具とかないと住めないって答えちゃうけど。

本当に何もない空間だった。

確かにこれだけ何もないと安心して休憩できるな、とは思うが。

クマ「逆に怪しすぎるクマよね」

何かを隠蔽している可能性すら感じられるほど、
テレビの中とは思えない平和さだった。

・・・

＜不思議な忍者からくり屋敷Ｆ２＞

特筆すべき事が無い。

それほどの作業ゲー状態だった。

『はずれ』の紙を引いてデストロイ。
『はずれ』の紙を引いてデストロイ。

目標をセンターに入れてスイッチを入れる少年のごとく、レイプ目でシャドウを倒す作業に明け暮れた。

そして今現在。
目の前には今までのシャドウとは一線を画したシャドウが存在している。

ボディビルダーも裸足で逃げ出すほどの鍛え抜かれた筋肉。
そしてそれを見せつける為の服装なのか、海パン一丁の半裸。「闘魂のギガス」だ。

それは部屋の中央でポージングをしていた。こちらにも気付いているはずだが、動く気配はない。

ふと「闘魂のギガス」の足元を見ると、『はずれ』とも『あたり』とも書かれてはいないが、何やら文章が書かれている。

これは確実に何かあるだろう、と3人は思うものの、目の前には筋骨隆々としたシャドウ。

なんだか妙に胸板がテカテカ光っていて、余り近づきたくない。

とはいえ、話を進めるには紙を拾うしかなさそうだ。

「「「じゃんけん、ぽん！」」」

じゃんけんで拾いに行く人を決めることにした。

「うあああ！いやだ！！お近づきになりとうない！！」

案の定上条当麻が負けた。上条はどっちかって言うと不幸だからね。

嫌がる上条を前に、2人はニヤニヤしながら筋肉ダルマの元へと行かせようとする。

「なによー、言いだしっぺが負けたんだから弁明のしようがないじゃないの」

「そうですよ、男なら覚悟を決めなさい。と、ミサカは激励します。あー良かった負けないで」

「御坂妹は本音が漏れてんぞ！ああ畜生やってやる！」

大体ダッシュで拾ってダッシュで逃げれば問題ないじゃん、と上条は覚悟を決め、

ギガスの元へ駆ける。

そして紙を拾い上げ再び御坂達の元へと逃げ帰ろうとする。

しかし、今まで無言でポージングをしていたギガスの顔が、グルンと上条の方へと向いた。

上条からするとホラー以外の何物でもない。

実際に「闘魂のギガス」がそんなこと言ったわけではないのだが、上条の耳には「やらないか」という幻聴が聞こえてきたそうな。

それはさておき、上条の方を向いた「闘魂のギガス」は、おもむろに自身の両腕を持ち上げる。

そして、こぶしを床へと叩きつけた。

畳の床は簡単に貫通し、その穴からは下の階が覗かれる。

畳に穴が開く、という結果から上条は避けられた、と言う事がわかるが、間一髪のところであった。

上条もそれを理解していたため追撃が来るかと思ったら、再びポ

ージングをして動かなくなる。

「し、しぬかとおもった……」

冗談抜きであんなパンチもらったら千切れると思った上条は、心を落ち着ける為に何度も深呼吸をする。

「闘魂のギガス」との距離はおよそ２０m。３人にとっては射程圏内だが。

「なんでアイツ攻撃してこないのかしら？紙は取ったのに……」

いつ攻撃が来るかもわからない為、上条は紙の内容は見ないでポケットにしまう。

攻撃してこないなら放っておいて逃げたいところなのだが、やはり襖は閉ざされて開かない。

「やっぱあいつ倒さないといけないんですね。と、ミサカはガチムチを見て溜息をつきます」

手の内が読めない。あのポージングに何の意味があるのか。

近づいたら攻撃を仕掛けてくるのか、はたまた一定の時間過ぎると攻撃を仕掛けてくるのか。

「何にせよ、後手後手に回ったんじゃ勝てるもんも勝てねえよな」

上条はハンドガンを構え、「闘魂のギガス」の足をめがけて銃弾を放った。

しかし、カキンッと甲高い音が鳴り、はじかれた。

「え？何あれ」

「たまにいるんですよね、魔法とか物理攻撃を反射する奴。と、ミサカは敵の能力を分析します」

「てことは、あいつも反射持ち？」

「なんだそれ反則だろ！どこの一方通行だよ！！」

しかし本来、「反射」持ちのシャドウに反射が有効な攻撃をした場合、その攻撃が自分に帰って来るはずだ。

だが、今回の上条の攻撃は反射はせずにあらぬ方向（見えたわけではないが）へと銃弾は飛んで行った。

続いて御坂がオオヒルメを出し、アギを唱え、御坂自身も電撃を放つ。

これらは普通に当たった。相も変わらずポージングをしているのでダメージの大きさは不明だが。

「うーん、何か体力がバカ高いってだけな気がしてきたわ」

「筋肉か！筋肉が悪いんか！！」

これじゃ俺いる意味ねーじゃん！と叫ぶ上条。そんな上条を御坂がなだめる中、９９８２号が提案する。

「そうですね……ならばこれはどうでしょう。と、ミサカは鋼鉄破りを構えます」

鋼鉄破り、今持てる物理攻撃の中では一番強力な武器だ。

しかし、鋼鉄破りが火を噴く前に、「闘魂のギガス」は再び動き出した。

狙いは鋼鉄破りを構える９９８２号。

９９８２号の顔よりも大きなこぶしは、真っすぐその体をとらえようとしている。

思わぬ攻撃に動けない９９８２号は、鋼鉄破りを盾にした。

この鋼鉄破りはその性能を発揮するために、最早鈍器と言えるような鉄の塊と化している。

しかし、「闘魂のギガス」のこぶしは、そんな鉄の塊すらへし折った。

９９８２号は、殴られる直前に後方へジャンプしていたため何とか衝撃を殺すことが出来たが。

「次殴られたら為す術もなくちぎれますね、物理的に。と、ミサカはあの攻撃力を目の当たりにして恐怖を覚えます」

そして再びポージングを始める。

「どうやら、一定時間過ぎると攻撃してくるみたいね」

「あのポージングにも何か意味があるのかもな」

ほら、お前らのペルソナだって攻撃力上げるタルカジャとか言うのあるじゃん。と上条は言う。

２人は、その発想は無かった、と言う顔をした。

「成程、そう考えたらつじつまも合いますね。攻撃力上げてから殴る」

９９８２号の言葉に合わせて御坂も続ける。

「ただし攻撃をしたら攻撃力は元に戻るってことね」

「なら今のうちに総攻撃しようぜ。鋼鉄破りならもう一丁あるんだし」

と、上条は９９８２号に鋼鉄破りを渡した。
今度はちゃんとぶつけられる。そのための時間は「闘魂のギガス」自身が与えてくれるからだ。
９９８２号は鋼鉄破りを構え、狙いを定める。
「闘魂のギガス」はポージングを止め、再び動き出す。

「跪け！と、ミサカはシャドウの足を止めさせます！」

９９８２号の放った強烈な銃弾は、「鋼鉄のギガス」の膝を砕き、その場に倒れ伏せさせた。
強力な筋肉の天然アーマーを装備していたとはいえ、流石に鋼鉄破りの威力には勝てなかったのか、見事に膝を打ち抜いた。
しかし、足を止めたとはいえ、まだ戦えるはず。９９８２号は今度は頭に狙いを定める。

だが、まだ「闘魂のギガス」は動くことが出来た。

片膝だけでで立ち上がり、そのまま跳躍した。その跳躍は、足に重傷を負っているとは思えないほどだ。
そしてそのまま９９８２号へ向かってこぶしを叩きつけようとしている。
９９８２号は突然の出来事に迎撃をしようとするが、鋼鉄破りを空中にいる敵に向けるのは難しい。
鋼鉄破りを持って避けるのは不可能と判断し、鋼鉄破りを放棄。

そして「闘魂のギガス」は鋼鉄破りを破壊し、再びポージングに戻った。

「すみません……最終兵器がやられました。と、ミサカは後はお姉さまの超電磁砲しかなさそうです、と言う事実を告げます」

「テレビの中じゃ本来の威力を出せないから不安があるんだけど……」

御坂は不安そうにポケットからコインを出すが、それでも攻撃するからには気合いを入れてコインを空中にはじく。

「吹っ飛べ！！！」

御坂の叫びと共にコインが射出される。強力な電気を帯びたそれは一直線に「闘魂のギガス」へと向かい、その直線状にある全てのものを巻き込んで消失させた。

あまりの衝撃に煙が立ち上がり、辺りを覆う。

煙が晴れた時、一同は愕然とした。

「まだ……生きてやがるのかよ……」

上条は思わず弱気な口調でしつこい奴だ、と言う。

「闘魂のギガス」は、全身ボロボロではあるものの、未だにポーズをとっていた。

「マズいです、また攻撃が来ますよ！と、ミサカは2人に警戒を呼びかけます」

再びその巨体は動き出す。
身近にいる敵を殴り飛ばすため。
そして今回のターゲットは。

「うげっこっちくる！」

足を引きずりながらもズシンズシンと御坂のところへやって来る。
逃げられれば良いのだが、この室内に逃げ場など無い。
直前で避けるか、迎え撃つしかない。その2つしかない選択肢に御坂は。

「どんとこい超常現象！！」

迎え撃つ事を選択した。

・・・

何だか急に静かになった。

迫りくるこぶし。

スローモーションになる世界。

そして。

「あれ……走馬灯ってやつ？これって」

もうこぶしは目と鼻の先だ。しかし一向に御坂の端正な顔がグシャグシャになる気配はない。

「ちょっとまってよ、まだやらなくちゃいけないことといっぱいあるんだけど」

などと軽口を頭の中で叩くものの、時間は遅い。

研ぎ澄まされた集中力によって圧倒的なまでに時間が濃縮される。

「走馬灯が流れる時間あるなら、敵を倒せばいいじゃん」

どうやって？御坂は自問する。

「劣化版とはいえ超電磁砲すら耐えきった奴なのに」

耐えた、とはいえ体力は削れたはずだ。
それなら、出しうる最高の力で電撃をお見舞いしてやるしかない。

「といってもなー、より大きな電流をお見舞いするには、何か媒体が欲しいのよねー」

より効率よく電流を相手にぶつけるにはどうしたらいい？
今手元にはコインとアギによる炎の力、そして自身の電気を操る力。これだけしかない。

「……いや、これだけあれば十分じゃない」

最早これが効くかは一種の賭けだ。
出来る出来ないではない。やるしかないのだ。

生き残るために。

「うぅ……あぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁ！！！！！」

御坂の咆哮と共に、最後の攻撃が放たれた。

・・・

致死性のある電圧の大きさとはどれくらいなものだろうか。

１００Ｖ？はたまた１０００Ｖ位だろうか？

答えは否（と言っても一般的には余裕で危険な電圧値なのだが）。

どちらかと言えば電流値の方が重要であり、致死に当たる大きさは５０ｍＡ程だ。

というのも一般的には電気抵抗、と言うものが存在するためだ。

電圧＝抵抗値×電流というオームの法則は、学校の授業や、どこかの教育番組で聞いたことがあるはずだろう。

電圧１０００Ｖに対してこの抵抗値の数値が非常に大きな値、例えば１０万Ωとしよう、の場合、電流値は１０ｍＡである。

これではまだ致死性を持った電気とは言えない。

と言っても、１０ｍＡの電流を喰らうと随意運動が不能になる程の威力はある、と言うのは余談であるが。

逆に電圧値１０Ｖに対して抵抗値が小さい値だと、例えば１０Ωとすると、電流値は１Ａとなり、簡単に死に追いやってしまう。

故に大きな電圧を持った電撃を作るのも重要なのだが、それよりも周囲の環境を、電気を流すのに適した状態にする方が重要だったりするのだ。

さて、そのための環境作りなのだが、ここで「炎」という現象に着目する。

実は、炎と言うのは電気を通す性質を持つのだ。
何故かと言うと、「燃焼」という現象を起こす際に火炎はイオンや自由電子を持つことになるからだ。
つまり、何が言いたいのかと言うと、普通の空気に電気を流すよりも、炎の中に電気を流した方が、効率よく高い電流値を持った電気を流す事が出来るのだ。

とはいえ、ただなんとなく蝋燭にでも火をつけてそこに電気を流すのでは話にならない。
プロパンやブタンなどで起こす、温度が高くて強い火炎でないと抵抗値は小さくならないわけだ。

ちなみに、炎には一定方向にしか電流を流さない性質があり、早い話が炎には整流作用がある、というのは完全に余談であり、ここでは取り上げないことにする。

さて、「電気」と「炎」について説明が終わったところで、御坂美琴が行った事は大体お分かりいただける事だろう。

そう。

御坂はアギによる炎で電撃に確実な指向性を持たせ、その上で電撃の威力を最大限に向上させる、と言う所業を成したのだ。
電気は抵抗の低い方に流れる性質があるため、空気よりも炎の方に電流が行くので、うまく炎を操れば周りにも被害は出ない。

炎と電気の性質を理解した上で、その作戦を一瞬で思いつき、確実に電流を流すための炎を作成して電撃を放った御坂の知識と、そんな不確かな作戦に身を委ねた御坂の胆力に軍配が上がった、と言

うことだろうか。

アギによる炎も相まって、「闘魂のギガス」は炭化し、ボロボロと崩れ去った。

上条と９９８２号は一瞬の事に唖然としている。

そんな中、御坂が声をあげた。

「……死ぬかと思った」

あの研究所で騎士と戦った一方通行も、こんな気分だったのだろう。

「何だあの筋肉んの耐久力、反則でしょ」と、御坂は思った。

「お姉さま、一体何をやったのですか？

と、ミサカはあの電撃は明らかにあちらの世界の電撃よりもすさまじかったと感嘆の念を表します」

「すげー！流石レベル５だな！つーかこのテレビの中って能力阻害されてるとか言ってなかったか？

なのにあんな威力の電気出すとかマジですげえよ御坂！」

あの筋肉ダルマとの戦いで走馬灯が見えたりと激戦を繰り広げた為御坂はとても疲れていたが、２人の称賛の言葉に素直に喜んだ。

でも御坂の貴重なデレシーンはカットします。

「で、この紙には何が書いてあんだろうな」

「と言うか、あたりともはずれとも書かれてませんね。と、ミサカは目の前の文章を眺めて何これと感想を述べます」

「何々えーっと……」

この有の世界から離れた場所に無の世界がある。

そこには東西南北４つの穴がある。

無心になって穴の下に潜り込め。

その中で持ちうる破壊の力をふるえ。

さすれば新たな道が開かれん。

ｐ．ｓ．　わなびー「おーる」でぃすわーるど　ｂｙ布束砥信

「「「……暗号？」」」

紙の中には謎の暗号文？が書かれていた。

と、ついでに布束砥信の存在も思い出した。

## そのにじゅうよん（後書き）

美琴は固有スキル「火炎整流器」（効果：電撃ブースタ）を手に入れた！

## そのにじゅうご（前書き）

暗号の解答。こじつけですよ

## そのにじゅうご

＜不思議な忍者からくり屋敷Ｆ１＞

「闘魂のギガス」を倒した後、一方通行達と連絡を取った３人は、屋敷の入り口で落ち合うことにした。

「あんた達無事だったのね。てかあたりの紙やっぱ地図なのね……」

御坂美琴は一方通行の持つ地図をみてガックリとうなだれる。

「というかその紙何処で見つけたんですか？と、ミサカは激戦の数々を思い出してうなだれます」

「……まァ、この紙見つけたのは偶然っつゥか必然っつゥか……」

この時一方通行は、上条の影と遭遇したことを伝えるべきか迷っていた。

特に上条当麻に伝えたら、独断専行してしまう恐れがある。

しかし、クマはそんな空気を読めなかった。

「クマクマ、上条の影が塩を送ってきたクマよ！何か良い勝負見てえーとか言って！！」

クマの言葉に３人は驚愕し、一方通行は頭を抱えた。

一方通行はクマに、上条がこれで勝手な行動に出たらどォすンだ！と、ヒソヒソと怒鳴る（↑？）。
クマもその事に気づいてしまったと言う顔をするが、上条は。

「そうか……あいつがここに……」

意外と冷静だった。

「……いいのか？」

あまりの冷静っぷりに一方通行は思わず尋ねた。

「ああ、いいんだ。……まだ、な。今行っても力不足でお前らに迷惑かけるだけだし」

一方通行を見据え、上条はそのまま続ける。

「……もっと強くなって、足手まといにならなくなったら……あいつと話に行くよ」

成程、既に上条当麻は捜索隊の一員としての覚悟を持っていると言う事か。
ならばコンなことを聞くのは野暮だった、と一方通行は思う。

「……そォか、そンなら、言う事はねェ」

「それよりよ、その地図見る限りじゃ多分大体回ったはずだからさ、後はこの暗号だけなのですが」

上条達は謎の暗号文を一方通行に読ませた。

「「無心になって穴の下に潜り込め」、これは多分窓の事だと思うのよね」

「穴」の下に「ム心」すなわち「窓」と考えたようだが、他の部分がわからないようだ。

「有と無の世界……『何か』がある世界から離れた所に『何か』がない世界が存在していて、
そこに東西南北四方向に窓があるから、それを壊せってことか……」

この時点で一方通行は、答えが大体分かった。
後は事実を一つ確認するだけである。

「俺ら、牢から出た後、この屋敷とは違う『離れ』に出たんだよなァ。
で、その『離れ』には本当に何もなくてよォ……なンだこりゃって思ったンだが……

この屋敷、『罠』でいっぱいだったろ？」

御坂と９９８２号は理解したようだ。３人は「離れ」の存在を知らないため、
暗号が解けなかったのもうなずける。

「う、うん……ってまさか『わなびー「おーる」でぃすわーるど』の『わな』って……」

「『ｗａｎｎａ』ではなく『罠』と言う事ですか？それで「おーる」は「有」と言う言意味でしょうか？
と、ミサカは何と言うダジャレに苦笑いです」

「……ああ、成程！」

御坂と９９８２号の言葉でようやく上条も理解したようだった。

「さっき俺らが居た「離れ」にある窓をブチ壊せば良いって事だな。
そしたらなんか有るはずだァ」

「そうときまれば、クマについてくるクマ！」

こうして、仮称特別捜索隊は再び「離れ」へと向かうのだった。

・・・

＜不思議な忍者からくり屋敷・離れ＞

離れに到着した。

上条当麻と御坂美琴、９９８２号は、その罠も何もない空間を見て納得した。

ここが暗号文に書かれた「無の世界」であると。

「本当に何もないわね……」

「窓も一階と二階合わせて４か所、東西南北として考えられる位置にありました。

と、ミサカは離れを調べた事実を述べます」

「それなら、クマを除いた４人で窓をぶっ壊す。これでどォだ？」

「クマー！クマはおいてけぼりクマ！？」

「クマは戦えないじゃない」

「こないだミサカとぶつかった時倒れて立ちあがれませんでしたよね？

と、ミサカはあの時の間抜けな姿を思い出して笑います」

フルボッコである。しかし事実なのでクマは言い返せない。

「クマは攻撃力が……残念と言うか……」

そして、上条からすらフォローがもらえなかったクマは。

「もう良いクマ……この辺でおとなしくしとクマ……」

部屋の中央でいじけた。

「……クマはほっといて、各自窓ンとこ行くぞォ」

「「「了解！」」」

行動開始。

４人はそれぞれ窓の前に立ち、各々の持つ力をふるう。

一方通行はシナツヒコによる風を。

御坂美琴はオオヒルメによる炎を。

９９８２号はワカヒルメによる蹴撃を。

上条当麻は、

「あれ、銃弾ねえし！！もうこれ一般人だろ俺！」

仕方ないと、覚悟を決める。

そして上条は右ストレートを放ち、ガラスを砕いた。

「おろ？」

窓が破壊された瞬間。

部屋の中央に鎮座していたクマの下の床がパカリと開く。

クマは物理法則に従って、下へと落ちて行った。

あまりにもデジャヴな光景だったが、開いた床は開きっぱなしだった。

おそらくは降りてこい、ということだろう。

「……行くしかねェだろォな」

一方通行の気だるげな言葉に、御坂が気合いを入れて応える。

「虎穴にいらずんばなんとやらって奴ね！」

しかし、どのくらい深いのかわからない。何も考えず飛び下りれば上条などは特に危ないだろう。

仕方が無いので一方通行が3人を抱え、下へと飛び降りた。

・・・

＜不思議な忍者からくり屋敷・地下茶室＞

3人を抱えた一方通行は、能力を使って衝撃を殺し着地した。

クマは先に落ちたせいであおむけに倒れ、起き上がれないでいる。

「起こしてほしいクマー！助けてクマー！」

緊張感の欠けるクマの姿に苦笑いしつつも上条当麻がクマを起こした。

そんな様子をクスクスと笑いながら眺める少女が居た。

「お前が布束砥信、だなァ？」

「ｉｎｄｅｅｄ、私が布束砥信よ。ここまでよくたどり着いたわね」

語頭に接続詞をつける変わった口調の少女は、のんびりとお茶を作っている。

「あんたは、絶対能力進化実験やこのテレビについて何か知ってるんでしょ？
それを教えてほしいの。というか何でこんな場所に居るの？危ないでしょうに」

御坂が代表して聞きたい事を尋ねる。

「そうね、ここに来たのは不本意ながらだけど。
ｂｕｔ、事情を教えるには、あなた達が私の力になれるかどうか知らないといけないわ」

その言葉に一方通行と御坂が反応する。
御坂は超能力者としてのプライドが傷つけられた気がして、頭から電気をビリッと出した。

「へェ……目の前に居るのが誰か分かってねェよォだな……」

一方通行と御坂の脅しにも気にせず、布束は歌うように話す。

「ｉｎｄｅｅｄ、学園都市第一位と第三位を相手にして勝てる道理はないわ」

ｈｏｗｅｖｅｒ、と布束は逆説の接続詞をつけて続ける。

「このテレビの中では、その道理は捻じ曲げられる。それはあなた達はよく知ってるはずよ」

お茶が完成したのだろう。しかし、そのお茶は一人分しかない。誰が飲むのか、と何となしに上条は思うが。

次の瞬間、上条の表情は驚愕の色に染められる。

「だから、お茶は苦手だっての。まあ、結構なお点前で」

気がつけば、目の前には上条の影が存在した。

「お、お前……」

「よお、上条君元気かなー？」

お茶を一気に飲み干して、影はニヤニヤしながら挨拶をかわそうとする。

しかし上条は驚きのあまり何も言えない。

「さあさあ、こんなところまでやってきて、お前は一体どうしたいんだ？
俺を連れ戻したい？どうやって？力づくで？」

影は矢継ぎ早に質問をする。しかし答えは聞いていない様子だ。

「俺は……多分お前が戻って来るにふさわしい人間じゃない。
だから……このテレビの中でお前は好きにやってろ。俺はいずれお前を認めさせる」

「はは、そうかい。それなら特に言う事はねえ、後は高みの見物と行こうかね」

上条の言葉や、決意に満ちた目を見た影は満足そうに言って、布束の後ろへと飛んだ。

「ｗｅｌｌ、力比べをしましょうか」

布束はおもむろに拳銃を取り出す。

拳銃を見た４人はさっと身を構えるが。

布束は、

その拳銃を、

自身のこめかみにつきつけ、

「「「!!?」」」

迷わず引き鉄を引いた。

## そのにじゅうご（後書き）

早ければ今晩にでも続きを。早ければね。

## そのにじゅうろく　しのぶむそう（前書き）

しのぶむそうです。
タイトルそのにじゅうななにしちゃってたからにじゅうろくに訂正。

## そのにじゅうろく　しのぶむそう

布束砥信は言葉にする。

この世界で力を行使するための「合言葉」。

「ペルソナ……！！」

布束はこめかみにつきつけた拳銃を下ろす。
その背後には薄手の布をまとった女性のようなペルソナが居た。

「アトロポス……！」

――――アトロポス（ａｔｒｏｐｏｓ）。曲げられない女。人々の運命を決める女神の３柱のうちの１柱。
運命を「糸の長さ」で表し、３柱はそれぞれ糸を「割り当てる者」、「紡ぐ者」、「断ち切る者」にわかれた。
アトロポス（変えられない者、という意）はそのうち「断ち切る者」に当たり、割り当てられた糸を断ち切る役割を果たした。
オリジナル造ろうと思ったら既存のペルソナでした。悲しいけどこれって現実なのよね。

「やっぱり……ペルソナを扱えるクマね……」

クマは納得しているが、やはり他の４人は混乱を隠せていない。

「ふふ……どうして？って顔をしてるわね……
ａｎｙｈｏｗ、これが現実よ。ペルソナを扱えるのはあなた達だけじゃない」

ｂｕｔ、あなた達みたいに天然じゃないけどね。
と、小さくつぶやく。その表情には若干影をさしている。
その言葉を一方通行は聞き逃さなかった。

「……何にせよ、ここで戦るってンなら、やってやるよォ！！
（天然じゃない……？人工的にペルソナを扱えるようになるってンのかァ……？）」

獰猛な笑みを浮かべ、威圧的な口調で叫ぶものの、頭の中では冷静に布束について考察した。
しかし情報が足らない。
布束が知っている事を教えてもらうしかないらしいと判断し、思考は戦闘にのみ集中する。

しかし、布束は動く気配が無い。
そして布束はぽつりと一言、

「……『コンセントレイト』」

コンセントレイト。日本語訳で「濃縮する」。すなわち次に放つ魔法を濃縮する事で威力を大幅に向上させるスキルだ。
そして、今まさに強力な魔法を放つために、布束は集中する。

コンセントレイトを知らない一方通行達は、布束の出方を見るためか、一向に動く気配がない。
しかし、「闘魂のギガス」と戦った上条が布束の様子に嫌な予感が頭の中を廻った。

「おい……あれって、さっきの筋肉と同じようなことしてるんじゃねえのか……？」

「闘魂のギガス」を知らない一方通行は何のことやら、と言った顔をするが。
御坂美琴と９９８２号はギョッとした顔をする。

「だとしたらヤバい！一方通行！ひょっとしたらあいつ、攻撃力を大幅に向上させるスキル使ってるかもしれない！」

御坂のその言葉を聞いて一方通行も事態を把握したのか、布束に向かってガルを放つ。

「私の目的に気付いたみたいね……ｂｕｔ、もう遅い」

――マハ、ガルーラ。（敵全体に疾風属性で中ダメージ―ガルより強力―を与える）

暴風、吹き荒れる。

この部屋には茶道具くらいしかなく、巻き込まれるのはその茶道具と。

「「「「～～～ッッ！！！」」」」

仮称特別捜索隊のメンバーのみだった。

全てを蹂躙する風が止んだ時、その場に立つことが出来たのは……

攻撃を放った布束と。

布束の後ろに控えていた上条の影。

そして、

「ゲホッ……」

一方通行のみだった。

「ｗｅｌｌ、流石は第一位と言ったところかしら。ガル……いえ、ガルーラかしら？
ａｎｙｈｏｗ、疾風属性の攻撃を能力で操って壁を作ったみたいね……
ｈｏｗｅｖｅｒ、周りを守りきれるほどの壁はつくれなかったみたいだけど」

一方通行の後ろには、ピクリとも動かず倒れ伏せた仲間達が居た。

「クソったれがァ……！」

明らかな力量差。それを理解してしまう。
１対１なら確実に完封されるだろう。しかし、全員が揃えば何とか出来たかもしれない。

後手に回った時点で、負けが決まったようなものだ。
だが、まだ確定したわけではない。
一方通行にはまだ手札があった。その手札を切るのは今だろう。

為さねばならない理想があった。
そのためには生き延びねばならない。
ならば考えなければならない。

一方通行が行動を起こす前に、御坂と９９８２号はゆっくりだが、

確かな意思を持って立ち上がった。
これはほとんど意地みたいなものだろう。例えギリギリでも、戦う意思を持って、布束と相対する。

「ハァ……こんなところで、倒れる予定はないのよ……！」

「まだ……終われません……我が同胞の為にも……」

そんな2人を値踏みするように眺めて、布束は小さく笑みを浮かべる。

「根性はあるみたいね……ｉｎｃｉｄｅｎｔａｌｌｙ、ツンツン頭の男の子は、もうダウンかしら？」

布束の言葉に反応し、御坂と９９８２号はゆっくりと上条の方を向く。
おそらくペルソナを所持してない為に、御坂達と比べ、耐久力に差があったのだろう。
頭から血を流し、目覚める気配が無い。

動かない上条を見て御坂は。

「ううぅ……うぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

逆上した御坂は「闘魂のギガス」の時と同じく、炎を媒体とした電撃の威力を向上させる―火炎整流器とでもいおうか。―技を放った。

しかし、迫りくる強力な電気を保った巨大な炎を目の前にしても、布束は慌てる様子も無く。

「ｕｎｄｏｕｂｔｅｄｌｙ、手持ちのカードで電気を効率よく扱う、と言うのはとても良い考えね。

ｂｕｔ、これでは炎を退けるだけで電気もその炎に追従してしまうわ」

生徒に教える先生の様に丁寧な説明をしながら、布束は電気を帯びたアギをガルで逸らす。

アギはそのまま空中に霧散し、電気も一緒に消えて行った。

しかし御坂の攻撃はそれだけに終わらない。

あえて消耗を無視して巨大な炎を作る事で、それを眼隠しとしたのだ。

御坂は既に自身の代名詞たる『超電磁砲』を放つ準備は完了していた。

攻撃力なら、火炎整流器の方が高いだろう。

しかし、速度なら。圧倒的に『超電磁砲』に軍配が上がる。

そして御坂は高い攻撃力を持った上で高い速度も持った最大限の攻撃を布束へと放つ。

御坂が攻撃を放つその瞬間。

布束の口元は。

――――笑っていた。

・・・

超電磁砲は、直撃した。

御坂美琴は自身の攻撃が確実に当たった、と確信をもった。

だがしかし。

この言い知れぬ不安は何だ？

そうだ、「闘魂のギガス」よりも強いだろうと思われる少女相手に。

――ただ一度の攻撃で倒れるわけがないじゃないか。

煙が晴れた時、布束砥信の服は、腹部が裂け、裂けたその部分からは血が噴き出していた。

明らかな致命傷である。

それでも布束の目は全く死んでいない。

それどころか口元には笑みが浮かんでいた。

「……イイ攻撃ね……ｂｕｔ、こんなに激しいと、彼氏さんも大変じゃないかしら？」

敢えてもう一度言おう。明らかな致命傷である。

だが、布束からは軽口を叩くほどの余裕が見られた。

最大限の威力では無い、とはいえ生身の人間に初めて超電磁砲を直撃させた御坂は。

「な……なんでそんなに、余裕なの……？」

自身の手で人間を傷つけたことによる恐怖と、目の前の布束の態度に対する戸惑いを隠せなかった。

「ｕｎｆｏｒｔｕｎａｔｅｌｙ、この世界では……回復スキル、と言うものが存在するのよ」

――ディアラマ。ディアの強化版。体力を中回復する。

布束が『ディアラマ』を唱えると、腹部の傷はみるみるとふさがって行き、超電磁砲によって乱れた服装以外は綺麗に回復した。

そんな回復スキルを間のあたりにした一方通行達は驚愕した。

「成程なァ……『ディアラマ』ならその程度の傷は完治出来るわけか……」

「ｂｕｔ、回復量は能力に依存するけどね。ｔｈｅｒｅｆｏｒｅ、『ディア』ですら使い手によっては他の人間が使う『ディアラマ』よりも強力な回復スキルになることもあるわ。」

一方通行の言葉に、布束は聞いてない事まで丁寧に答える。

実を言うと、一方通行だけはこの回復スキルの存在を知っていた。

しかし、それを使う事はなかった。

「あたらなければどうということはない」という言葉もある。
どのくらい回復するのかわからないスキルに頼って攻撃を喰らうわけにはいかない。
そう考えた一方通行は、御坂達に攻撃が当たらないように今までは配慮していたのだ。

だがしかし。それもついさっき破綻した。

今更手札を出し惜しみしても仕方がない。
だが、通用するかはもはや賭けだ。

「……ペルソナチェンジ」

他のペルソナ使いとは一線を画した特殊な能力。
『ワイルド』たる一方通行は、それを存分に発揮することにした。

・・・

「ここは……？」

確か忍者屋敷の地下で布束砥信と相対していたはずだが。
そして、布束の攻撃に倒れたはずだ。

「……ようこそ、ベルベットルームへ」

ツンツン頭の少年の前には、一方通行の前に現れた長鼻の爺と、金髪の女がソファーに座っていた。

## そのにじゅうろく　しのぶむそう（後書き）

さて、上条さんにペルソナフラグ。どんなこじつけをしてそんなことになるのかは次回。

## そのにじゅうなな　ぼーそーもーど（前書き）

ペルソナに関してねぼし的な理論が展開されるので注意

## そのにじゅうなな　ぼーそーもーど

戦力は拮抗していた。いや、拮抗しているという表現は正しくないだろう。

布束砥信は、疾風スキルを得意としている。ならば疾風無効の力を持ったペルソナに変えればよい。

今現在の一方通行の手持ちのペルソナには、その力を持ったペルソナが1体いる。

と言っても、火炎、氷結、雷、疾風の、4属性それぞれを無効のペルソナを1体ずつ用意していたのだが。

敵の得意な属性に合わせてペルソナを変えていく、という作戦は前々から考えており、今回はそれを実行したのだ。

しかしこの作戦には問題が一つだけあった。

どのペルソナも、シナツヒコに比べたら火力が無かった。と言うより鍛える時間が無かった。

故に今装備しているペルソナは『法王・アンズー』なのだが、イマイチ決定打に欠ける。（というか全く鍛えてないので、布束との力量差が著しい）

だがしかし、疾風属性が効かない布束も決定打に欠けるのは同じ事で、互いににらみ合いの状態になっていた。

隙をついて一方通行がシナツヒコに戻し攻撃を仕掛けるのが先か。はたまたそれを見切って布束がカウンターを仕掛けるか。

均衡状態は、長引きそうだった。

・・・

所変わって、こちら車の中。

上条当麻は困惑していた。

それもそのはず、先ほどまで和室の中で暴風に吹き飛ばされた。

……はずだったのだが。

「えーっと、どちらさまで……？」

「ふむ、お取り込み中のところをお呼び立てしてしまったようですな……」

これは申し訳ない、と鼻爺は謝罪する。

しかし上条が欲しいのは謝罪ではなく、情報だった。

そんな上条の気持ちを察したのか、イゴールは続けて話す。

「申し遅れましたな。私の名はイゴール。こちらに控えておるのがマーガレットでございます」

「ああ、そりゃご丁寧にどうも……ってそんなこと知りたいわけではないのでございますよ！？」

「おっと、そうでしたな。本来、貴方様はこちらにお呼び立てする事はなかったのですが……

『イレギュラー』が発生しましてな」

ふっふっふ、と思わせぶりな笑みを浮かべる。
しかし上条には話が理解できない。何にせよすぐに皆の元へ戻らねばと思うが。

「貴方様は現在『イレギュラー』によって『自身の片割れ』を失われておられます……
そのような状態で皆さまの元へ戻っても……」

言いたい事はわかる。その通りだ。
力のない自分が行っても足手まといにしかならない。
だが、力がなくたって、目の前で仲間が苦しむのを許容できるほど上条の諦めは良くない。

「例え俺が行くことが無意味でも……何か出来る事があるかもしれねえ！あいつらの盾にだってなれる！
力が無いからって……守ることを諦めて良いことにはならねえだろうが！！」

「確かに。その通りでございます……ですが、少し落ち着きなされ。
私がここにお呼び立て致したのには、ちゃんとした意味があるのです」

「意味……？」

「然様でございます。しかしながら、『力』を与えられるわけではないのですが……」

「『力』？ペルソナの事か？」

「ふっふっふ、その通りでございます。『力』は与えられませんが、『力』の使い方をお伝え致すことができるのです」

「どういうことだ……？俺は俺の『片割れ』を失ってるんだから、ペルソナは使えないんじゃ……？」

「確かに、お客人は『片割れ』を失った状態にあられる。ですが、『心』とは複雑怪奇……貴方様の『心』もまた、『片割れ』だけが全てではないのです」

「つまり……俺でもペルソナの能力を使う事が出来るのか？」

「然様。ですが悠久の時を漂う『心の海』では、貴方様の『片割れ』の代わりを成せる『力』を見つける事は困難……
その『力』を引き出すための道具が必要なのでございます」

「道具……？」

「ふっふ……先ほど、あちらでご覧になられたはず」

「あっちで……？」

道具、道具。そんなもの使ってる奴……そういえば一人だけ、居た。

成程！と言おうとした瞬間、世界が暗転した。

再び薄れゆく（覚醒していく）意識の中、イゴールが言う。

「『片割れ』を失った状態で『心』を御す事は困難……
さて、お客人はどのような選択を為し、進んで行くのか……
いずれにせよ、自身のご選択に後悔のあらぬように、
よくよくお考えになられますよう、お願いいたします」

・・・

上条当麻は目を覚ました。しかし、体は既にボロボロで、頭がやたら重たい。
どうやら倒れてる間に血を流し過ぎたようだった。
しかし、軽い応急処置は為されていた。御坂美琴と、９９８２号によるものだ。
そして目を覚ました上条を見て、その２人は少し安心する。

「よかった……目を覚ましたのね……」

御坂は軽く涙目である。９９８２号も、無表情であるがホッとした様子であった。

「全く、情けないですね。男が女を心配させるなんて。
と、ミサカは男の甲斐性無しは話にならんと説教します」

「ああ……悪いな……心配かけた」

体は重たいが、まだ動かせる。
後は召喚器だが……

「やっぱ、彼女が持ってるあれを何とか奪い取れなきゃなあ……」

よくよく考えると、布束砥信の持つ召喚器を奪い取れたなら、最初から上条にはペルソナは必要ないはずである。
だと言うのに、あのタイミングでイゴールが召喚器について話したのは何か意味があるのだろう。
そう考えた上条は、体力を温存するために、一方通行と布束との戦いを静観することにした。

・・・

さて、一方通行と布束砥信との対峙は、未だに拮抗している。
どちらも動くに動けない状況だ。
そんな2人を遠目に眺める上条の影は、新しいおもちゃを買ってもらった子供のように非常に楽しそうな顔をしている。

「おっ、上条君が目を覚ましたか……」

しかし上条の雰囲気を見て、影の表情が曇る。

「ちっ……『力』の御し方を理解したか……？

まあ、使いこなせるかどうかは別なんだけどなー」

どこのどいつだ、『ペルソナ』の扱い方を教えたのは。と影は憎々しげにつぶやき、
再び一方通行達のにらみ合いを眺め出した。

「こいつらもこいつらでまどろっこしいなあー」

いい加減にらみ合いにも飽きが来たのだろう。
しかし、それでも何故か影はにらみ合いを眺める事を止めない。

「俺を楽しませてくれた『あれ』、出てこないかなー。
『あれ』の時の布束自身は記憶になかったっぽいけど」

あの時の『あれ』、そろそろこないかなー。と、影はニヤニヤしながら眺め続ける。

・・・

「なァ……いつまで睨みあい続けンの？」

「ｗｅｌｌ……私も疲れてきたわ……」

互いに何か何で戦ってるんだろう？とか疑問に思うようになった。

ホントに何で戦ってんのこいつら。

布束砥信は一方通行達の力を知りたかった。

一方通行達は布束砥信から情報を聞き出したかった。

ある種の利害が一致したと言うべきだろうか。

戦うべくして戦ったのだろうが、『闘魂のギガス』を撃破した3人に、『ワイルド』の力を以って布束とにらみ合いを続ける一方通行。

布束はもう十分に一方通行達の力を知ることが出来たはずだ。

クマは……よくわからない。

布束は戦いを止めるタイミングを逃していた。

ペルソナも結構な時間発動させていて、疲労も蓄積している。

ところで、布束は最初に言った通り、一方通行や御坂美琴、９９８２号とは違って、

『自身の影』と向き合って、『自身の影を認めることの恐怖に打ち克った』わけではない。

拳銃型の召喚器を頭につきつけ、引き鉄を引く事で『恐怖に打ち克ち』、ペルソナを引きずりだすのだ。

『恐怖に打ち克つ』すなわち擬似的に『自身の影を認める』行為を成すことにより、

ペルソナを扱う事が出来るようになるのだ。

この『恐怖に打ち克つ』と言う行為は、前者と後者で全然違う。
前者は『自分にとっての根本的な恐怖を受け入れている』のに対し、後者はただ単に、『恐怖を飲み込む』だけなのだ。

故に後者の場合、『召喚器』が無ければペルソナは扱えないし、一歩間違えれば文字通り『恐怖に飲み込まれる』結果になる。

この『恐怖に飲み込まれる』結果と言うのは、先ほど上条の影がひとりごちた『あれ』のことである。
それはすなわち。

「おっ……やっと『あれ』が来た来たっ♪」

――――ペルソナの『暴走』だ。

「ッ！！？……あああッ！！ううッあぁあああああ！！！！」

「「「！！？」」」

それは突然訪れた。
突如として布束は頭を抱える。何かにもだえ苦しむようだ。
布束の背後にいたアトロポスも苦しそうに喉をかきむしっている。
そんな様子を一方通行達は呆然として眺め、上条の影はワクワクした顔をしている。

「これこれ、これだよ俺を楽しませてくれた『力』は！」

アトロポスの背中から、蝉の脱皮の様に、『何か』が現れた。
それは天使の様で、悪魔の様でもあり。
女神の様な微笑みを浮かべ、死神のような叫び声をあげた。
明らかに異様なその光景を前に、誰も動く事は出来なかった。
布束は諦念した顔で目の前の『何か』を見上げた。

この『何か』の狙いは。

布束砥信の。

『存在』そのものだ。

『何か』は布束へと手を伸ばす。

自身が布束と成り変る為。そのためには布束の存在は邪魔だ。

この行動はまさに、御坂や９９８２号の時と同じだった。

『宿主』から抜け出し、『自身を認めない宿主』を殺す。

――――すなわちペルソナは、シャドウへと堕ちた。

そんな布束と、布束の影を見て、一方通行はいの一番に動いた。

布束の影を止めるためだ。

しかしそんな一方通行を見据え、布束の影は嗤う。

「ｗｈａｔ’ｓ　ｕｐ？邪魔する気？ぶち殺すぞ？」

「何言ってンだ、そりゃこっちのセリフだっつゥの。俺はそいつに聞きてェ事がある。

だからそいつに手ェ出されちゃ困るンだよ」

「ｗｈｙ？何言ってんの？これは当然の報いだよ？
私の事分かった気になって調子にのっちゃってまあ……」

布束の影は布束を、心底憎い、と言った目で射抜く。

「『あんな計画』に利用されてこんなところにまで追いやられちゃってまあ……
ａｌｌ　ｖｅｒｙ　ｗｅｌｌ　ｂｕｔ、もう我慢できないよね。
過程はどうあれ、この『私』をいっぱい使いやがった」

借りたものは清算しないといけないよね？と布束の影。
『あんな計画』が何のことかわからないが、話を聞くためにも布束を保護しなければ。
そう考えた一方通行は布束と布束の影の間へと入った。

「ａｆｔｅｒ　ａｌｌ、君らは私の邪魔しちゃうんだね」

そっちがその気なら、こっちもこの気で行くからね。と布束の影は嗤う。

「我は影…真なる我…」

一呼吸置いて、叫んだ。

「邪魔をするなら、ぶっころす！！」

こうして、風の力をもつペルソナ使いとシャドウは激突する。

・・・

「さあて、面白くなってきたなあ！
あの時は力の片鱗だけ見てから速攻制御剤飲ませたからなあ……」

今回は全力を見られそうだ、と楽しそうに呟く。

「つか、この場所って実質海の中なんだよな……」

これ以上暴れると、この室内は間違いなく崩壊するだろう。
この事を伝えるべきかな。いや、別にいいや。

「そっちのが、イイリアクション見れそうだしなー」

それはまるでドッキリを計画するスタッフのような、悪だくみを思いついたいたずらっ子の笑みだった。

## そのにじゅうなな　ぼーそーもーど（後書き）

上条さんはベルベットルーム行ったけどワイルドじゃないです特例として招かれました。

そのにじゅうはち　つごうよくかくせいして、あっとうなんてしない（前書き）

**そのにじゅうはち　つごうよくかくせいして、あっとうなんてしない**

一人と一体が放つ風は、互いに互いを屠るための威力を伴っていた。
そして2つの暴風は、互角。風がぶつかるたびに互いを打ち消した。
しかし。

「まだまだまだあああ！！！」

一体は余力を残していて。

「ゼッ……ハァ……オオァアァアァアアアアァァ！！！」

一人は全力を出していた。

「ｈｅｙｈｅｙ　ｗｈａｔ，ｓ　ｕｐ？もう限界？まだまだ行けるんだけどなー」

布束の影は軽口を叩きながらガルーラを放つ。
一方通行はそれを抑えるのに精いっぱい、と言ったところか。
このままではジリ貧なのは火を見るより明らかだった。

そんな一方通行を見て御坂美琴と９９８２号は支援しようとするが。

「邪魔すんなよコラァ！！」

「「きゃあ！！？」」

「！？御坂ァ！！９９８２号ォ！！！」

布束の影は御坂と９９８２号の攻撃ごと、一方通行ですら抑えきれない暴風を以って吹き飛ばした。

・・・

上条当麻は布束砥信の持つ召喚器を見つめていた。

ふるえる手でその拳銃を手にする。

銃口は樹脂か何かで防がれていた。

銃弾は出るわけがない。それは分かっている。

なのに。

「なんで引き鉄が引けねえんだよ……！」

黄昏の羽根。『死』の象徴たる『月』から届けられたオーパーツ。

それを組み込んだ召喚器は、人間の根源的な恐怖を刺激する。

その恐怖を飲み込んで初めてペルソナを引きずりだすことが出来るのだ。故に拳銃から弾が出ないことが分かっていても、こめかみにつきつけて引き鉄を引く事は自殺することと同義である。

上条がこうやって逡巡している間にも、3人は布束の影に蹂躙されて行く。

・・・

クマはあわあわと上条と一方通行達を見てキョロキョロしている。

「どうしよう……どうしてクマには何も力が無いクマか……？力どころか、どうしてクマには中身すら無いクマ……？」

力が欲しい。

だが、クマの願いは、届かない。

・・・

絶対的な『死』がそこにはあった。

この拳銃を躊躇いなく引ける布束が不思議でならない。それが上条の見解だ。

『死』を踏破してでも、力が欲しい。

目の前で窮地に立たされている3人を前にこうして黙って座り込んでいることがもどかしい。
目の前で苦しんでる仲間を目の前にして、どうして手を差し伸べられないんだ。

今までだって、死ぬかもしれないと分かった上で様々な困難に立ち向かっていたではないか。

それなのに、どうして今それを発揮できない。

どうしてこんなに怖いんだ。
どうしてこんなに力が無いんだ。
どうして、どうして、どうして――――

すると、唐突に何かを理解した。

嗚呼、そうか。
今までは、この恐怖を『あいつ』が肩代わりしていたんだな。
今までは、この恐怖を見て見ぬふりして、押しつけていたんだな。

最低だ。
何が苦しんでる奴を目の前にして手を差し伸べないと、だ。

こんなに苦しんでいた奴が目の前どころか自分の中に居たと言うのに。

上条は考える。「俺は一体、今まで何回あいつを殺してきたのだろう」と。

ここまでされて愛想を尽かさないわけがないじゃないか。

それを理解して、自嘲の笑みを浮かべた。

自身の影には謝らなければならない。

「だけど、それはそれ、これはこれだ！！」

仲間を助けたい。この気持ちは本物だ。

ならば今からでも、乗り越えてやろうじゃないか。『死』への恐怖を。

上条は召喚器をこめかみにつきつける。

もはや手は震えていない。

銃を綺麗に構える必要はない。

標準を定める必要もない。

鉛もそれを飛ばすための火薬だって必要ない。

――――ただ、そこに決意の弾丸を込めればいい。

今なら自身の影に、本気で言える。

――――ごめんな。

上条当麻は、引き鉄を引く。

・・・

どうする、どうする、どうする。

一方通行は考える。

せめて仲間達だけは逃がせないか。
しかし出口は自分たちが落ちてきた天井の穴しかない。
そこを通るには隙を見つけなければならない。
だがその隙がない。

逆に、布束の影を打倒できるだろう方法は一つだけあった。

――――プラズマの生成。

これが出来ればおそらく行けるはずだ。
だが、大技を放つ隙があるはずもなく。
布束の影の風を抑えるだけで、無為に体力が削られて行く。
あと手札をもう一枚あれば――
「ッ……！！？」
唐突に『力』を感じた。
しかし自分からでは無い。
思わず『力』を感じる方向に振り向いた。
致命的な隙を自身で作ってしまったが、布束の影も攻撃を止め、
茫然とその方向を見ている。
「上、条……？」
一方通行は上条当麻に尋ねる。
目の前の人間は本当に上条なのか。
いや、確かに上条だ。そんなことは見ればわかる。
だが、しかし。
上条の背後に居るのは、何だ？

・・・

『力』を感じる。

これが『ペルソナ』か。

これが『力』か。

勝てる。そんな確信が持て……る……

上条の意識は、暗転する。

「お……あ……」

だが、意識を失ってもなお、上条は動き続ける。

何かに操られるように。

何かに縛られているように。

布束のペルソナの時のリプレイを見るかのように、

上条が出したペルソナから、『何か』が這い出てくる。

・・・

＜???＞

そこには男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える『人間』がいた。

培養液の中に逆さまになって浸り、目をつむりながらも、どこかを眺めているようだった。

「『天空神・ウーラノス』を屠った存在である、『クロノス』……『神浄』の拠所たる上条当麻なら召喚できて然り、か……むしろ『天空神』そのものを召喚してもおかしくは無いんだが……」

「……しかし、完全に支配下に置くには力が足らないと言ったところか……」

「と言っても、あの調子なら次に召喚する際、再びクロノスが顕現する可能性は薄いか……クロノスと彼では、性格が合うまい」

「まあ、何にせよ『片割れ』が上条当麻から抜け出したのは正解だったな……」

「間違いなく、このイレギュラーは私のプラン短縮の要因となるだろうな」

「くくっ……今後が楽しみだ……」

『人間』は、心から楽しそうに笑う。

・・・

影は上条から現れた『何か』を見て、驚きつつも笑う。

「なんだありゃあ！上条クンはとんでもねーもんだしやがったなあ！！」

「だが、力量差を考えずにあんなもん出すから使役するどころか逆に操られちまってるところが抜けてんだよなあ……」

普段の小馬鹿にした笑みではなく、出来の悪い弟を慈しむような笑みを浮かべる。

「……いつまでもこんなところに居たらあれだな……この場所が崩壊しちまう」

海に沈む前にさっさと消えちゃおう。

上条の影は、もう十分に楽しんだ、と言う事であっさりと消え去った。

・・・

布束の影は初めて恐怖する、目の前の人間に。

明らかに目の前の人間は『支配権』を『ペルソナ』に奪われている。

だと言うのに、『ペルソナ』は『宿主』を殺すどころか、布束の影を見据えていた。

しかし、『ペルソナ』は動く気配がない。

――本当に、『支配権』は奪われているのか？

・・・

どこだ、ここは。

何も見えない。暗い。昏い。冥い。闇い。

だがしかし、すぐに確信を得た。

「ここは俺の中だ……」

と言う事は、表には『片割れの代わり』が出ているのか。だとしたら拙い。

初めてのペルソナ召喚なのだ、布束砥信と同じく暴走していたっておかしくない。

「俺が勝手に呼び出しといてあれなんだけど……」

――邪魔を、するな！！！

上条は右手をのばす。

何かをつかむように。

何かを引きずり降ろすように。

上条のペルソナから這い出てきた『クロノス』。

そこから更に上条のペルソナが、クロノスの体の中から右手を貫き出してきた。

・・・

一方通行も、気絶から覚めた御坂美琴と９９８２号も、布束砥信も、布束の影すら。

目の前の光景に、息をのんだ。

そんな中、上条当麻は、自身のペルソナの名をつぶやく。

「……オケアノス」

――――オケアノス。ウーラノスとガイアの間に生まれたティターン一族の長兄。海の神で、オーシャンの語源とされている。

謀略を嫌う性格とされ、ウーラノスとガイアの間に生まれた末弟たるクロノスがウーラノスから王位を奪った時には、ティーターンの中でも、謀議に加わらなかったという。

「上条……お前、それは……」

「一方通行……俺が、時間を稼ぐ」

一方通行の言葉を無視して、上条は一方通行が望む「時間稼ぎ」を申し出た。

「ハァ？お前、いきなりそいつを使って……大丈夫なのかァ？」

確かに、プラズマを生成する時間を稼いでは欲しかったが。

先ほどまで上条の背後に居た『クロノス』は、非常に危険な力を秘めていた。

すなわち、上条のペルソナが暴走した時、止められる術は、無い。

そんな一方通行の懸念を察したのか、上条は笑う。

「大丈夫だ、あいつはもう出てこねえよ。なんつーか多分……性格が合わねえ」

根拠のない上に要領を得ない答えに、一方通行は首をかしげる。

しかし、その言葉には、何故か大丈夫だという確信が持てた。

「それに……今の俺なら、全力で攻撃を放てばあいつを倒せるかもしれないけど……

むしろそっちの方が危ないんだ。多分、制御しきれねえと思うか

ら……とどめは、頼んだ」

上条の言葉に、一方通行は首を縦に振る。

「分かった。……それじゃ、技を放つまでの盾役を頼むぜェ……！」

一方通行の言葉に、上条は無言で応えた。

・・・

上条当麻は、布束の影の前へと降りたつ。
もはやその目には『死』への恐れはない。
あるのは目の前のシャドウを、どうやって足止めするかの算段だけだ。

「は、はは……あははは！！！」

突然の布束の影による狂った笑い声に、上条は眉をひそめる。

「どうした、何か面白いことでもあったんかよ？」

上条は軽口を叩く。
別にペルソナを使って戦わなくても、時間さえ稼げれば良いと言

わんばかりに。

「ｗｈａｔ’ｓ　ｇｏｉｎｇ　ｏｎ!?嗤わずにはいられねえっての!!

え?何それ?マンガみたいなご都合主義の覚醒とか!」

ありえないっつーの!と布束の影。

「覚醒なんてしてねーよ。ただ……」

一つ、学んだだけだ!と上条当麻。

「ａｎｙｈｏｗ、あんたの後ろにいる白いのが何かする前にあんたを倒せば私の勝ち、

出来なきゃあんたの勝ちってことでしょうが!!」

「まあ、その通りだな!!」

一人と一体は、戦いの渦の中へと潜り込んだ。

・・・

「そこをどけえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!」

布束の影は、一方通行のプラズマ生成を阻止すべく、上条当麻に向かってガルーラを放つ。

「だぁれがどくかぁあぁあぁあぁあ！！！！」

しかし、上条は目の前の暴風をブフーラ（氷結属性のスキル・ブフの上位スキル）を放ち、氷の盾を作りだした。

上条の氷は、暴風の前に崩れ去るものの、暴風も氷の前に霧散する。

先ほどは、一人は全力を出し、一体は余力を残していたのだが。

「くっそがあああああ！！！！」

一体は全力を出し。

一人は余力を残していた。

そんな戦いを、布束砥信はただ茫然と眺めていた。

その布束の元に、御坂美琴と９９８２号が近付いてきた。

「それで終わりかあぁあぁぁあぁ！！！！？」

「……何か、用かしら？」

「……何よ、あれ」

「何、とは？」

御坂の端的な質問に、布束はとぼける。
そんな布束に御坂は食ってかかった。

「ふざけんじゃないわよ！！あんたがペルソナ召喚に使ってた拳銃、あれは一体なんなのよ！？
あいつは、自分の『影』を無くして、ペルソナ出せないんじゃないの！？」

「ｗｅｌｌ、目の前の事実を信じたくなくても、事実は事実よ。
「どうして」なんて事情を追及するよりも、「どうやって」現状を打破すべきか考えた方が良いんじゃない？」

まあ、私の召喚器は彼の元にあるから、私は協力できないけど。
と布束は残念そうに言うが。

「とは言っても、貴方の影とミサカ達の力量差は明白……
と、ミサカは援護したくてもできない事実を述べます」

９９８２号の言葉に、御坂も９９８２号自身も悔しそうな表情を浮かべる。
しかし、布束の表情は変わらない。

「ｉｎｄｅｅｄ、先ほどまでの戦いで分かるように、私の影は結構強いみたいね。
だけど、弱点はあるわ。あれは私自身なんだから、弱点なんてよくわかるもの。
……炎よ」

「炎？でも、私のアギじゃ簡単にかき消されちゃう……」

「ｗｅｌｌ、あなたの炎ではあの影は倒しきれないわ。
ｂｕｔ、影に攻撃が当たろうと、影が攻撃を防ごうと、必ず隙が出来るわ。
ｂｅｃａｕｓｅ、あくまでも『火炎属性』は弱点なのだから」

「成程、分かりました。あなたを信じましょう。
と、ミサカはミサカがお姉さまの攻撃を放つ隙を作りますと宣言します」

９９８２号の言葉に御坂は耳を疑う。
それもそうだ。自分の大切な妹を一人であの影の前に立たせたくない。
御坂の思いを９９８２号も察したのだろう。９９８２号はクスリと微笑む。

「大丈夫です、お姉さま。私が出るのは、上条ですら抑えきれなかった場合のみですから。
と、ミサカは急激に成長を遂げた上条に期待します」
「……分かったわ。でも、無茶はしたら駄目だからね！」
こうして、２人は再び上条達の戦いをハラハラしながら眺め始めた。
・・・
布束の影は焦っていた。このままではプラズマの完成を許してしまう。
それを阻止するにはどうしたらいいか。考えても答えは出ない。
いや、そもそも答えを出す時間を、目の前のツンツン頭が許さない。
布束の影は、現状を打破するべく、再びガルーラを放つ。
上条当麻は焦っていた。布束の影の攻撃は言わずもがな、苛烈なものである。
それを抑えられるレベルのスキルを放つ事はできるのだが、気を抜いたら『飲まれそう』になるのだ。
やはり、本来使役するはずのペルソナではないからだろうか。
この戦いが終わったらペルソナの扱いを学ばねば、と本気で思った。
上条当麻は、布束の影の放つガルーラを抑えるべく、再びブフーラを放つ。

一方通行のプラズマは、未だに完成しない。
それもそのはず、一方通行は布束の影との戦闘により、既にボロボロなのだ。
プラズマの形を成すのに精いっぱいで、それだけでは布束の影を倒せる程の威力は見込めない。

戦闘は、長引きそうである。

・・・

「はぁ……はぁ……」

「はぁ……クソ……まだか……」

布束の影も上条当麻も、既に限界が近かった。
このままだと布束の影が自棄になって何か仕掛けてくるかもしれない。
しかし、一方通行の方を一瞥すると、もう少し待てばプラズマは完成しそうな雰囲気だった。
あと一息。そう感じた上条は気合いを入れ直す。

すると布束の影は。

「ははっ……あははははは！！！」

笑った。

突然狂った笑い声をあげる布束の影にギョッとする上条。

すると布束の影は、ガルーラを上条に向けるのではなく、壁に向けて放った。

上条はその行動を不可解に思うが、すぐに理解した。

「てめっ……！この部屋を……！！」

「あははは！やっと気付いた！？」

こんな部屋、海で埋めてやる！と笑いながら壁を破壊していく。

壁はその破壊の力に耐えきれず、次々と決壊して海の水が流れ込んできた。

「海の神を相手に海の水が効くと思ってんじゃねえええ！！」

上条は全力で海の水をせき止めるための魔法を放つ。マハブフーラだ。

そのマハブフーラによって決壊した壁から流れる海の水が一瞬にして凍りつくものの。

「ッ……！！」

布束の影にはなっていたスキルよりも明らかに強力なスキルを使った事により、上条の負担が増える。
ペルソナの発動を止めなければ今すぐにでも『暴走』しそうだ。

「ははは！！さっさと自分に飲まれちまえ！！」

布束の影は再びガルーラを壁に向けて放ち続ける。
上条は、もはや海の水をせき止めるので精一杯であった。

・・・

「やべえ、アイツ自棄になりやがった。と、ミサカはお姉さまにタルカジャかけてアデュー」

９９８２号はふざけた口調で御坂美琴に攻撃力上昇のスキルをかけると、
布束の影の元へと向かおうとする。

「……無茶はしないでよ！！」

「……お姉さまこそ、隙作るから逃さないでくださいよ」

９９８２号と御坂美琴は互いにこぶしをコツンとぶつけ、布束の

影へと向かって行くのだった。

・・・

立場は再び逆転した。
上条は最早この部屋が水に埋もれないようにするのに精いっぱいだった。
後は一方通行のプラズマをつぶすだけでチェックメイトだ。
それを察して一方通行は、「クソが……」と声を漏らす。
しかし愚痴をこぼしたところでプラズマは出来ないし攻撃も止められない。

そんな一方通行と布束の影の間に、９９８２号が躍り込んだ。

「なっ!?お前なにやってンだよ!!下がってろォ!!」

「うるさいですね、一方通行は黙って元気玉つくってりゃいいんですよ。
と、ミサカは目の前の影はミサカ達に任せろとアピールします」

「ｗｈａｔ'ｓ　ｗｒｏｎｇ?お涙頂戴の3文芝居してる暇はないんじゃないのかな?」

一方通行と９９８２号のやりとりにニヤニヤと嗜虐的な笑みを浮かべながら茶々を入れる。

「うるさいですね、貴方は黙ってボコられてなさい。
と、ミサカはワカヒルメに攻撃を指示します」

９９８２号の声に同調して、ワカヒルメが布束の影へと向かう。
それを余裕の表情で待ち構える布束の影。

しかしワカヒルメは途中で立ち止まり、床のボロボロになった畳をひきはがして布束の影へと投げ飛ばした。
この行動に布束の影も驚いた。
と言っても、はっきり言ってダメージにならないのでその畳を軽く叩いて退ける。
すると畳を目隠しにして、後ろからワカヒルメが飛び込んできた。

「はっはあ！目隠しは悪くないけど！そんなんじゃ倒せるわけないでしょ！！」

ガルーラなど必要ないと言うことだろうか。
軽くガルを唱えるだけでワカヒルメを吹き飛ばした。
だが、そんなワカヒルメに目が行っていたせいで、気付かない。

――――御坂美琴が、布束の影の背後から、火炎整流器による炎と電撃を放っていたことに。

「ぐっがぁあああぁああ！！！」

焼ける背中に反応し、背後に向かってガルーラを放った。
御坂は既にその場から離脱していた為当たらない。
そして布束の影に出来た大幅な隙を、上条当麻が更に広げる。

「おっらあああああ！！！！」

海の水を抑えるのを一旦止め、布束の影にブフーラを放つ。
それによって、海の水が今にも流れ込みそうになるが、再びそれを抑えつけた。

「がっはぁ……！！」

後一撃。これで決まる。

「「「一方通行！！」」」

全ての視線が、一方通行へと注がれる。

「ッ……！！良い仕事してンぜお前らァ！！」

感謝の気持ちをプラズマの完成を以って表す。

そして、両手に掲げたプラズマが圧倒的なまでの破壊の力で、布束の影を蹂躙し尽くした。

## そのにじゅうはち　つごうよくかくせいして、あっとうなんてしない（後書き）

布束の影、アウトー。
上条当麻＜オケアノス＞　正義　武器：すてごろ・ハンドガン
スキル　ブフーラ　マハブフーラ　ハマ

物　火　氷　雷　風　光　闇
　　耐　弱　無

一方通行　＜シナツヒコ＞　愚者　武器：特になし
スキル　ガル　マハガル　ガルーラ　マッハパンチ　圧縮圧縮空気を圧縮（一方通行固有スキル↓ガル＋疾風ハイブースタ　今のところ一度使うのが限界）

物　火　氷　雷　風　光　闇
耐　耐　耐　耐　耐　　（耐は反射稼働時に限る。反射が切れたら耐↓弱になる。もやしなので）

御坂美琴　＜オオヒルメ＞　女教皇　武器：特になし
スキル　アギ　マハラギ　ディア　ビリビリ～超電磁砲（御坂美琴固有スキル↓ジオ～ジオダイン　威力は御坂の任意で変更可能。ただし威力が高いほど使用回数に限度がある）
火炎整流器（アギ＋電撃ブースタ付属の電撃。マハラギでも火炎整流器を使用可能だろうが、まだしたことない）

物　火　氷　雷　風　光　闇
　　耐　弱　耐

９９８２号　＜ワカヒルメ＞　戦車　武器：鋼鉄破り（メタルイーター）
スキル　二連牙　デッドエンド　タルカジャ　スクカジャ　めっちゃすごい弾幕（９９８２号固有スキル　敵全体に小ダメージ２～４回与える。連射性のある武器のみでしか使用不可）

物
火
氷
雷
風
光
闇

耐
耐
弱

# そのにじゅうきゅう（前書き）

布束編エピローグ。

## そのにじゅうきゅう

風が止み、煙が晴れた。
そこには、ボロボロになった布束の影が横たわる。

その布束の影の元に、布束砥信はフラフラと近づいて行った。
そんな布束に対して、影はかすれた声で、自嘲する。

「……はは、家出は、終わりってところかなー……」

「ｗｅｌｌ、我がままは止めて、さっさと帰ってきなさいな。
……お帰り、『私』」

「……ただいま、『私』」

布束の影は青白い光と化して、布束の胸元へと還る。
その神秘的な光景を前に、一同は息をのんで見守る。

「ハタ迷惑な家出だったわね……」

「……そうですね」

御坂美琴と９９８２号は、ようやく終わった戦闘に溜息をつくものの。

「あのーいつまでもここに居たら海に沈んじゃうのですが……」

もうペルソナ出すの無理、と弱音を吐く上条当麻。

そんな上条に空気読めよと９９８２号が突っ込みを入れるが。

「上条のペルソナが暴走する前に帰ンぞ」

一方通行の言葉に一同は恐怖してさっさと帰ることにする。

出入り口が天井にしかないと思っている一方通行は、一同を風で地上まで飛ばそうとするが。

「ｃｏｍｅ、こちらにエレベーターがあるわ」

「「「えっ」」」

エレベーター。

まさかの文明の利器。

「……この部屋に、私はどうやって入ったのかしら？」

布束の尤もな言葉に理解はするが、何となく納得できない。

屋敷の入り口にあった自動ドアならぬ自動門もそうだが、なんだ

かオーバーテクノロジーであるが、テレビの中でそれを言うのは野暮だろう。

何にせよ、地上に戻る手間が省けるのだ。こんな場所からはさっさと帰るに限る。

そんなわけで一同はエレベーターに入るのだが。

「……おいクマァ。さっさと帰ンぞォ」

クマはボケーっと崩れそうな壁を眺めていた。

何か考え事をしているようだ。

「……どうして力が、どうして中身が、クマには無いクマか……？」

先の戦闘で、目の前で傷つけられて行く仲間を前に、何もできなかった無力感を噛みしめ、悔しさで、悲しさで、眼から涙をこぼしている。

『力』も『中身』も持っている一方通行には、クマの思いは分からない。

だが。

「……いつかお前がどういった存在かわかったとしても。

……俺たちは、お前の仲間だ。少なくともそれだけは変わらねェよ」

一方通行は言う事は言った、と言う事でエレベーターへと乗り込む。

クマもそれについて行くが、その顔は先ほどまでの悲しみに暮れていた表情ではなく、初めて褒められた子供のようにはにかんだ表情であった。

以下略

一方通行は、「星」属性のコミュニティである「クマ」コミュを手に入れた。

・・・

さて、時間もかなりいい時間になってることだろう。

と言う事で、さっさとテレビの中から抜け出すことにした。

流石に全員疲労も限界に達していたようだった。

布束砥信の処遇についてだが、本人たっての希望でテレビの中に残ると言うので一同の顔は驚愕の色に染められた。

何やら訳有りでテレビの中に逃げ込んだらしく、詳しい事情は一方通行達が再びテレビに来た時に話すそうだ。

クマと一緒にいつもの広場で待っているそうなので、今日は帰って休もう。と言うのが一同の総意だった。

「ｗｅｌｌ、帰る前に適当に食べ物放り込んできてほしいの。

こっち来て何にも食べてないのよね」

「ああ、任せとけ……ってああ、そう言えばこの召喚器返しとかな

いとな」

上条当麻は手に持ったまま返しそびれていた召喚器を布束に渡すが。

「……あー、それあげるわ」

「へ？だってこれないとお前がペルソナ使えなくなるんじゃねえのか？」

「今まではそうだったわ。

ｂｕｔ、私も今さっき『影』が帰ってきた時、召喚器無しで召喚できるようになったみたいなのよね」

次来たら召喚器でペルソナ扱う時のコツを教えてあげるわ。そう言って再び上条に向かってポイっと投げ返した。

上条はわたわたと召喚器を受け取る。

「次来た時に話すわ。ここに来た理由も、召喚器がある理由も、何故ペルソナを使えるのかも。

ｓｏ、貴方達も今日はもう帰った方がいいと思うわ」

布束の言葉にウソはないだろう。そう感じた一同は今日のところは帰ることにした。

・・・

テレビからようやく戻ってきた一同。
そこには、芳川桔梗が待ち構えていた。

「今日は結構な時間潜ってたわね。と言うか、その服装何とかした方がいいわ。
特に御坂さんは常盤台でしょう?その状態で帰ったらこってりしぼられるんじゃないかしら?」

４人はぞれぞれ顔を見合わせた。
一方通行はまだマシだが、他の３人はボロボロだった。
この格好で外に出たら、間違いなく通報されてしまう。
御坂美琴の場合、それだけではなく、寮監に更なるトラウマを植え付けられてしまう。
そう感じた４人は芳川に着替えを借りて帰ることにした。もちろん、適当な食料を放り込む事も忘れずに。

「なァ……なンで男物がｒｙ芳川「うるさい」」

・・・

辺りは既に暗くなり始めている。

御坂美琴はこの間寮監に折檻された事を思い出し、一人で猛ダッ

シュして帰って行った。

上条当麻は月詠小萌に連絡を取ったところ、インデックスが小萌先生の元に居るとのことなので、そちらに向かって行った。

そして残った一方通行と９９８２号は。

「……飯、食うか」

「……そうですね。さっさと食って寝ましょう。と、ミサカは一見ぐーたらな感じの発言をしてみます」

いつものレストランへと向かうのだった。

・・・

そしてこちら、一方通行達の背後３０ｍ地点。

「……居た居た。ってミサカはミサカはドッキリさせる為にＭＮＷは切って追跡してみたり！」

そこには小さな少女がアホ毛を携え、一方通行の元へと向かっていた。

・・・

そしていつものレストラン。
いつもの店員が案内にやってきたところ、
「妹さんですか？」と９９８２号に質問してきたので、一方通行が代わりに「あァそォだ」と返した。

店員は別に気にした様子も無くいつもの席へと案内する。
さて、その「妹さん」と言うのは。

「いやあ、初めてのいただきまーす！ってミサカはミサカはハンバーグに下敷をうってみたり！」

「……で、このちンちくりンが妹達の上位個体ですかそうですかァ」

かちゃかちゃと、慣れない手つきでハンバーグを食べて笑顔を浮かべる少女。
その少女は成程、どこか御坂美琴の面影が見て感じられる。

「……ミサカ達に万が一の反乱を防ぐための上位個体が扱いにくいと駄目ですからね。
と、ミサカは上位個体のちんまさの説明をします」

ちんちくりんだのちんまいだの、どう聞いても馬鹿にしてるとしか思えないが、
打ち止めはハンバーグ（チーズイン）に夢中で気付かない。
こんなのが上位個体で大丈夫なのか？と言う一方通行の質問に、

９９８２号は何も答えられなかった。

「いやあごちそうさまでしたってミサカはミサカは行儀よくあいさつしてみたり！」

「……口周りにソースついてンぞ」

行儀よく、と言う割には口周りも汚いし、ハンバーグのあった鉄板周りも汚い。

と言ってもこれが初めての外食なのだから仕方ないのだろう。

とりあえずそのソースで汚れた口をナプキンで拭きとる。

「むううう」

打ち止めはされるがままであった。

やはり一方通行は、子供の扱いが上手な気がする。

「ところで、上位個体はわざわざＭＮＷ切ってまで何しに来たんですか」

９９８２号の尤もな質問に、拭かれ終わった打ち止めが答える。

「いやあ、実験が中止されたってことでミサカは調整中の段階だったんだけど、

外に放り出されちゃったってミサカはミサカは嘆いてみたり！
あ、ＭＮＷ切ってたのはドッキリだよ！」

よよよ、と崩れ落ちるその姿からはおよそ緊張感が感じられない。
しかし、調整が終わってないと言うのはいささか危ないだろう。
そう考えた一方通行と９９８２号は芳川の自宅へと打ち止めを連れていくことにした。

・・・

「あら？ここに連れてこられても私もう研究者首になってるんだけど」

「「えっ」」

「研究所から資料とか荷物とか持って帰ったらあの研究所とは完全に縁切りですが」

「「なにそれこわい」」

「絶対能力者進化実験は結構金かけてたからねえ。
中止になったことによる損失で研究者達は軒並み首になったのよね」

まあ貯金あるしやってることは外道だったし別にいいんだけど。
と芳川桔梗。
しかしあまりにあっさり首になった宣言をするもので何だか申し

訳なく感じる一方通行。

「気にしないで良いわよ。どっちかって言うと首になった事で自棄になる研究者達に気をつけた方がいいと思う」

と言うと？と相槌をうつ９９８２号。芳川は続けて話す。

「研究者ってのは自分の研究を自分の子供か何かと勘違いしてる人とかいたりするからね。
研究がおじゃんになる位なら周りを巻き込んでーなんて考える人も居るのよ。
そうなると危ないのは誰だと思う？」

「成程、打ち止めか……」

「ミサカがどうしたの？」

「上位個体としての権限を利用して、世界中の妹達を暴れさせるなんて事も可能でしょうしね」

芳川の穏やかな口調に反する穏やかでない内容の話に一方通行は眉をひそめる。

「……お前は違うンだろォが」

「私はそう言うめんどくさいのはお断りだから。
まあ明日辺り研究所行こうと思ってたし、調整の機材を勝手に借りるわ」

「……任せたぞ」

「ええ、まかされたわ」

「じゃあ、よろしくお願いしますってミサカはミサカは丁寧にお願いしてみたり！」

話はまとまった。
これでようやく帰って眠れる。

そう思った一方通行と９９８２号はフラフラと部屋へと向かって帰るのだった。

・・・

一方通行と９９８２号が芳川の部屋を出たのを確認すると、研究者風の白衣を羽織ったその男は舌打ちをする。
そして自身が乗っている車を運転し、どこかへと走り去った。

# 番外編　上条当麻の華麗なる日常　そのに　えんぜるふぉーる（前書き）

今回の番外編は上条当麻オンリーで影は出ません。
番外編は本編には影響無いので読まなくてもええんですことよ

# 番外編　上条当麻の華麗なる日常　そのに　えんぜるふぉーる

上条当麻は極度の不幸体質だったが、最近はどちらかと言えば運の悪い部類の人間。と言う程度に落ち着いていた。

そのため、自分から首を突っ込まない限りは変に不良に襲われたりとか、歩いてて靴紐千切れるとか、財布落としたりとか、携帯トイレに流したりとか、そういうベタな不幸はそうそう起こる事はなかった。

そんな上条は今現在、絶賛頭を抱え、「不幸だー！」と心の中で叫んでいる。

上条の身に一体何があったのか？

実を言うと、上条の身自体には、何も起きていない。

何かがあったのは、周りの人間全てだった。

・・・

上条当麻の朝は遅い。

と言うのも生活習慣が悪いと言うか、夏休みの影響でだらけているだけだ。

故になれない旅館の布団でもなんのその。日が昇って結構な時間がたつが、未だに眠っている。

するとそこに元気な声で、上条にのしかかり攻撃をかまして上条を起こす少女が一人いた。

「ふごっ！？」

思わぬ攻撃を食らった上条は肺から空気が漏れる。

「おきろおきろおきろー！！」

のしかかりをした少女は、声を聞く限りどうやらインデックスでは無い。

眠気まなこをこすりながら目の前にいるだろう少女が何者かを確認する。

「んなっ！？御坂！？」

そこには御坂美琴がいた。

「むうっ、御坂って誰だー？ひょっとして、寝ぼけてる？可愛い妹分の前で他の女の子の話なんて許さないからな！」

おかしい。

そんなはずはない。

学園都市を出る前に、御坂は「あんたが外行ってる間にテレビで鍛えてるわ」などと非常に頼もしい発言をしていた。

そんな御坂がわざわざこんな僻地まで来るはずが無い。

目の前の事態を受け入れられない上条は、思わず御坂（？）に突っ込みを入れた。

「いやいやいや、いつ俺がお前の妹になった!!?」

「そりゃあ、私が生まれてきた時?」

「最初から!?」

「ていうかどうしたの?朝からテンション高すぎない?」

「そりゃ高くもなるわ!!」

「あー、成程なー。私に会えたのがうれしかったんだー!」

頬に手を当てながらイヤイヤをする御坂（?）。

「ホワイ?何故?いや別にうれしくないなんてことはねーけども!!」

「はいはい、とりあえず目が覚めたなら一階に降りといでよー」

上条に朝ご飯の用意が出来ている事を告げ、御坂（?）はパタパタと下へ降りていった。

「……（わっつごーいんおん!?どういうこと!?意味分かんねーっ!!）」

目の前の現象に頭を抱える上条。

落ちついて考えると、御坂も学園都市上層部から追い出されたクチなのか?とか思ったりするものの。

「いやいや、俺がここに来た理由は『無能力者』だったからだろ…

…？」

御坂はその条件には当てはまらない。と言うかレベル５を倒すためにレベル５を狙うっておかしな話だし。

それなら後者のレベル５を最初から狙えばいーじゃん、とか思ったりする。

しかし、死屍累々とした不良たちの中に一人立つ、頭から電気をビリビリだしながら魔王のような笑顔を浮かべる御坂が思い浮かんだ。

「……やっぱ御坂がここに居るのはありえねーよな……」

でも実際にありえていた。

ありえないなんてことはありえないと言う名言を思い出したが、何にせよこの空腹を解消しなければと思い、着替えた後、一階へと足を運ぶ。

・・・

そして時は冒頭へと戻る。

先ほど不幸の一端を垣間見た上条当麻だが、一階へ降りた時の衝撃は桁違いだった。

赤髪ロン毛の、イギリス清教の魔術師、ステイル＝マグヌスが、あたかも旅館の亭主のような服装をしている。

修道服ばかりきていた白シスターは何故か薄緑のワンピースで上条の母を名乗っている。

御坂美琴は相も変わらず妹キャラで、亭主の女房役みたいな御坂妹。

訳がわからない。

これは壮大なドッキリなのか？と思うほどだ。

その中で上条の父、上条刀夜だけは上条の知り合いの顔をしていなかった。

改めて説明しておくと、上条当麻は記憶喪失である。
友達も、思い出も、自分の名前も、産みの親すら忘れてしまっている。
そのため両親と会うのはこれが初めてである。

どうやら上条刀夜だけは事前に写真を見たとおりの姿をしているようだった。

とはいえ、それ以外は全員知り合いの顔してはいるものの、中身は違う。と言った様子だった。
訳がわからないまま朝食を取ろうとするものの、そこに白い修道服を着た男が現れた。
あえてもう一度言おう。白い修道服を着たお・と・こが現れた。

「とーま！私を置き去りにしてご飯食べようなんてどういうつもりなのかな！？（テナー）」

青髪ピアスだった。
見事にインデックスを演じきっている青髪ピアスだが、正直言っ

て吐き気がする。
テレビの中、という珍事を体験していた為そこまで困惑することは無かったのだが、流石にこれは反則だ。

「ッ……うっぎゃあああああああああ！！！！」

思わず叫び声をあげ、朝食をかきこんだ上条は旅館から全力ダッシュで逃走する。

「あらあら、当麻さん的には朝食後には運動をしたい派なのね」

と、自称母のインデックス。

「元気ですねぇ……うらやましい限りですゲホッ」

と、自称亭主のステイル＝マグヌス。

「何であんな朝からハイテンションなのかな？やっぱり久々の再開だからかなー」

と、自称妹（実際は従妹）の御坂美琴。

「むうう、話はまだ終わってないのにー！」

と、自称インデックスの青髪ピアス。

カオスが、そこにはあった。

・・・

上条当麻は今現在絶賛ランニング中である。
現実から逃げるため。しかし現実はベン・ジョンソンよりも、タイソン・ゲイよりも高速で迫ってきている。

逃げられるはずが無い。

街中にある電器屋をふと見る。ショーケースにはテレビが並べられており、その中のニュースを何となく眺めていると。

「えー、それでは続いてのニュースです」

小萌先生がニュースキャスターとして本日未明がどうたら言っていた。

「……」

最早驚くまい。理解した。
この超常現象、心当たりがあった。

「……おのれ魔術師！！」

そう、魔術師だ。
自分がこんな目にあうのは多分最近魔術師と関わり合いがあったからだ、間違いない。
悪いのは魔術師だと責任を丸投げしたところで気分が楽になった。
何にせよ情報が無い。
かといって魔術師に知り合いなんていない。
いやインデックスがいるのだが、正直インデックスの格好をした青髪ピアスが自称インデックスだ。話しかける気にならない。
どうしたものかと考えていると、携帯にメールが届いた。

『今から海に行くから、お前も旅館に戻って準備して浜辺まで来てくれ　ｂｙ父さん』

成程。海か。泳いで頭を冷やすのも悪くない。
と思ったがクラゲがいるから止めておこう。
何にせよ、来いと言うのだから行ってやろうじゃないか。

・・・

時間は上条当麻をおいて進む。
さっきのあれは夢だったのではと思い、一縷の望みを賭けて海へと向かうが。

「とーまー！とーまー！たのしいよー！（テナー」

現実は無常である。
思わずその場を走り去った。
後ろからは野太いテナーボイスが響く。
その声を聞くまいと耳をふさいで全力走行をする。
その走りはウサイン・ボルトよろしく運動科学者高岡英夫が認めた『トカゲ走り』のフォームだったという。

全力で走ったところで「あー、やっぱ運動って良いなあ！ストレスたまった時なんて特に！」などと一人すっきりしていると。

「にゃー！こんなとこにいたんだにゃー！」

擬似猫ボイス。
何だ猫かと思って振り返るとそこには、

「何だ土御門か」

土御門元春。同じクラスメイトだった。
いや、見た目は土御門、心は別人かもしれない。と思って気を引き締めるが。

「そこいらににゃーにゃー言う擬人化猫が居てたまるか！！」

つまりお前は、土御門元春本人だ！！と、どこぞの名探偵のようにズビシと指をさす。

「いやあ見事な名推理だにゃー。そうです私が土御門ですってにゃー」

「やっぱなー。いやあ別人じゃなくてよかｔｔ……いや！何でお前が『外』にいるんだよ！！」

そんなホイホイ外に出られてたまるか！と上条は突っ込みを入れる。

「とりあえずその口ぶりからすると、カミやんは俺の事「土御門元春」に見えてるぜよ？」

「はぁ？何言ってんだお前当然だろ。他の奴らはおかしいが」

「なるほど、なるほどにゃー。とりあえず話は他でしようか。
ここにはねーちんが近付いてきてる。もうすぐここは戦火に包ま

れることだろう。そう、一人の聖人によって」

ねーちん？成人？何を言っているんだこの金髪エセ猫は？

「良いから早く来るぜよ！狙いはカミやん、お前なんだにゃー！！」

「狙い？！やっぱり……俺の周りがおかしいのも……！って何でその事をお前が知ってんだ！！？」

「何だか物分かりが良いカミやんは不自然だにゃー！まあいい！にげｒッ……！」

土御門は突如諦めたようにうつむく。

慌てたり諦めたり忙しい奴だなと上条は首を傾げる物の、上条の背後からズシン！という音と共に砂浜の砂が舞い上がった。

「上条当麻……見つけましたよ……！！」

オーガがそこには居た。

何やら親の敵と言うか恋人の敵と言うか、とにかく憎々しげな視線を上条へとぶつける。

しかしこんな巨乳で変な服装の女性に恨まれるような事をした記憶はない。

と言うか初対面だ。（記憶失う以前に会っていたのかもしれないが）

「ええっと、そちらのサムライガールが『ねーちん』？」

ひょっとして記憶失う前になんかやったのか？

ヤることヤったのか？おれ？と自問する上条。

そんな上条をみて土御門は注釈しておく。

「あー、大丈夫だぜよ、カミやん。カミやんに落ち度はない」

落ち度はない!?何かこう……酔っ払った勢いで何かやっちゃったのか!?

だとしたら男として……腹をくくらないわけにはいきますまいて!!

「男・上条当麻!既に覚悟はできております!!」

上条の言葉に巨乳で変な服装の女は怪訝そうな表情を浮かべる。

「成程、よくわかりませんが、罪を認めると言う事ですね……」

「安心しろ!こう見えて今年誠実そうな男ナンバーワンを獲得するんじゃないかと言う声が上がって止まないこの俺だ!

お前の事、一生幸せにしてやるからな!!」

土下座。見事な土下座をかましてプロポーズをする。

土下座をしながらプロポーズなんて前代未聞だ。

土御門は笑いを何とかこらえているが、女の方が顔を真っ赤にして七閃とつぶやいたところで、一人爆笑の渦にのまれていた。

「うわ!なんで!?不幸だー!!!」

幻想殺しを失ってもなお。その不幸さに衰えは見られない上条当麻であった。

「上条当麻、何か申し開きはありますか?」

巨乳で腰に刀を携えて、ジーンズの片方を太ももの付け根まで千切っている奇抜なファッションセンスをしたサムライガールは、上条当麻を砂浜の上に正座させて問うた。

「えーと、酒とかあんまり飲まないんですけど、ひょっとして酒の勢い余って色々やってしまったらしく、非常に、非常に申し訳なく思っております。

つきましては未だ学生の身分であれど、あなたを幸せにするという覚悟はできております。」

土御門は爆笑している。

サムライガールはぽかーんとしている。

上条が勘違いしていると気付くのに、時間はかからなかった。

・・・

「で、この新ジャンル「侍女」な女性は何者でせう?」

「まったく、やれやれです。そんな安っぽい演技でこの私をだまそうなどと。

先ほど貴方も私の事を「ねーちん」と呼んだではないですか。

と言うか、以前一度だけ相まみえましたよね?もうお忘れですか?」

こんな奇抜な格好をした女性を忘れるわけがない。

しかしそんなことを言うと刀でバッサリ行かれそうなので何も言わない事にする。

「（記憶を失う前の俺は何をやったらあんな女性と知り合いになるんだ？？）」

しかし、その心当たりは一つあった。

「……魔術師」

上条の答えに女は頷く。

「そうです。『必要悪の教会』の魔術師、神裂火織です。お久しぶりですね」

『必要悪の教会』。確かインデックスや、吸血鬼騒動のときに共闘したステイル＝マグヌスが所属していた対魔術師専用の特殊部隊みたいなやつだ。

それがここに居ると言う事は。

「やっぱり、この騒動の原因は魔術師か」

「その通りです。と言うか私は貴方を疑っています」

神裂のその言葉に上条は驚愕した。

「はぁ！？俺？！魔術なんて知らねえよ！つうか俺魔術の反対に位置する超能力者養成都市の住人だぜ？！」

……つーか、と付け加え、土御門の方をジロリと睨む。

「何でその魔術師と、土御門がお知り合いなのか、俺はそっちの方が気になって仕方ねえよ」

「そりゃあ俺も『必要悪の教会』所属の魔術師だからだぜよ」

土御門が、爆弾を投下した。

・・・

土御門元春が言うには、こうだ。

・本来学園都市のスパイとしてイギリスからやってきた魔術師。

・能力開発を受けたせいで魔術使うと体はボロボロになる。

・今回の事件でも、その影響を逃れるために魔術を使ったせいで体は既にボロボロ。

・しかも魔術を使っても、完全にはその影響を逃れられなかった。

確かに、科学と非科学が相容れるわけがない。

それなら敵地にスパイを送り込むのは当然だ。

ものすごく身近に非日常があるんだなあ、とぼんやり思っていると。

「カミやん。俺の事は別にいい、それよりも解決すべき問題が目の前にあるんだぜい？」

なんか気づいてる事あるだろと土御門。

なんかも糞も無いだろ、と上条当麻。

「いや、見た目と中身が合わないだろ。お前らは魔術でそれをかわしたんだろ？

だったら俺は何ｄ……」

何で魔術の影響を逃れたのか、それを聞こうとしたところで上条

は言い淀む。
難を逃れた原因に一つ思い浮かぶ単語があった。
『幻想殺し』だ。
しかしそれは既に失われた。それを言っても良いのだろうか。
今、インデックスは上条当麻の保護下にある。と言う事になっている。
それは『幻想殺し』なら魔術師から守りきれるだろう、という判断の元それが認められたのだと思う。
もし、その力を失ったとしられたら？
いや、むしろインデックスを守りたいなら、上条は手を引いた方が良いのだろうかと考える。
だがそれでインデックスの心はどうなる？
『必要悪の教会』は、インデックスの心も守ってくれるのだろうか？
何となく、それは無いんじゃないか、と思う。
それならば、上条自身が力をつけなければ、と考えるのだった。
上条が『幻想殺し』に関して言葉に出来ないため、口をもごもごしていると。
「それで、ねーちんは『中身』と『外見』が入れ替わる『御使堕し（エンゼルフォール）』、
こんな大魔術をシロートたるカミやんが引き起こせると思うか？」

口をもごもごしていたが、その言葉を聞いて上条はピシッとかたまった。

「まてまて、さっきから聞いてりゃ疑いやがって！魔術なんて使えねえっての！」

当然の怒りを2人にぶつけるものの。

「こんな大魔術の中、一人何もしないで難を逃れるなんて、怪しいとしか言いようがありません」

「むむ」

確かにそれはそうだ。だが、自分は犯人じゃない。と言う事は自分で理解している。

しかし、そんなことを言ったところで信じてもらえるわけがない。

「カミやん、何か言わんと冤罪押しつけられちまうぜい？」

「冤罪とはなんですか？現に御使堕しの影響下で一人無事じゃないでｓ――」

「ちょっと待てよ、さっきから言ってる御使堕しってなんだよ？それがこの事件の原因の魔術ってことで良いんだよな？」

「その通りだにゃー。で、その魔術がカミやんを中心に展開されてて、それのせいで容疑者がカミやんになっちまってんだぜい」

「その通りです。さあ認めなさい早急に罪を認めなさい、そして元に戻しなさい」

神裂は上条の肩をつかみ、ぶんぶんと揺らす。しかしそんなことを言われても困る。

「だ、だ、だから！し、しらね、え、もん、は、しらねえ！！」

上条は必死になって否認する。

例え無い罪をあると言ったところで、魔術が無くなるわけではない。

実際には魔術なんて使ってないのだから。

「まー何にせよ、『御使堕し』は未完成らしいからな。止めるなら今しかないんだにゃー。

カミやんの『幻想殺し』でも、燃えた後の灰を元に戻すことが出来ないように、

『御使堕し』が完成したら最後元には戻せないんだぜい」

土御門のその言葉に事態を理解するも、土御門が耳元でぼそりと

「と言っても、カミやん、今は『幻想殺し』を失ってるから関係ないだろうけどにゃー」

と言ったことにより、表情が一変する。

「な……お前……」

「こっちもこっちで色々調べて知ってるってことだぜい。三沢塾も、禁書目録に関しても。……『テレビ』に関しても。

ま、『幻想殺し』についてはトップシークレットってことで誰にも言わないから安心してほしいんだにゃー」

「……この際なんでそんなことまで知ってるのかは聞かねえ。

何にせよ、どうしたらこの事態を解決出来るんだ？」

「一つは術者を倒す事。もう一つは儀式場を崩す事。時間制限もあるし、カミやんがぼこられる事で無罪の証明をしてもいいんだが……」

流石に冤罪で気絶するほどフルボッコは嫌に決まってるよにゃー？と土御門は言う。

当然だ。そんなわけで、否応なしに事件の解決の協力を余儀なくされてしまった。

と言っても、『幻想殺し』は無いので、協力できそうにないのだが。

「そういや、完全に魔術から逃れたわけではないっつってたけど、どういうことだ？」

上条は2人に尋ねる。

「あー。俺らやカミやんを例外として、他の『入れ替わった』奴らには俺らが『入れ替わった』ように見えてるみたいだぜい？」

「成程……誰に見えてるんだ？俺は土御門は土御門に、神裂は神裂にしか見えないんだけど」

「……一一一（ひとついはじめ）だにゃー」

「……ステイル＝マグヌスです」

「えっ。あのアイドルと魔術師？」

「そうだにゃー！しかも一一一は最近人気女優との交際をすっぱ抜かれてたせいで！
俺は知らない女から釘バット片手に追われるハメになってんだぜい！！？」

「私は！やたらと日本語が上手な！赤毛外国人神父に見られてるんですよ！！」

２人の必死な形相に、上条は思わずたじろぐ。

「あー……なんだ……その、事件解決を目指して、頑張りましょう……」

「「当然！」　だにゃー！」

## 番外編　上条当麻の華麗なる日常　そのさん

さて、『中身』と『外見』が入れ替わる大魔術の完成を阻止すべく、上条当麻は必要悪の教会からやってきた魔術師・神裂火織と魔術師兼クラスメイトの土御門元春と共に行動を開始するのであったが。

「……一介の学生たるわたくしめが参戦したところで、何の意味もありませんよねー」

これと言った進展はなく、既に晩御飯のお時間になるのであった。

一応、上条当麻を中心に魔術が展開されていたことから、上条当麻に誰かしら接触する可能性を考慮して、神裂が護衛役をつとめることになったのである。

「いやあ、こんな外国の方とうちの息子が仲良くなるなんて、国際化がすすんでますなあ」

お近づきのしるしに、エジプトで買ってきたお土産いります？と瓶詰めにされたスカラベを取り出す上条刀夜。

和気あいあいとした食卓でふんころがしの死骸を出すとは何事かと上条は注意をするのだが、神裂が、「これは魔術的意味がうんたんかんたら～」といつもの口調で懇切丁寧にお土産としての価値を解説した。

上条はどうでもいい豆知識としてへー、そうなんだー。と４へぇ位へぇボタンを押した。

とはいえ、他の人からしたら神裂は『流暢な日本語（ただし女性っぽい）を話す赤ロン毛の外国人』なわけでありまして。

散々上条ファミリーにやれ「大柄な男性の割に柔らかい所作ですね」だの、「女性から習ったのか知らないけど、日本語が女性っぽい話し方になってるからちょっとずつ矯正した方がいい」だの、好き放題言われた次第であります。

そんな神裂は堪忍袋の緒が切れる前に風呂へと逃げるように向かうのだが。

「……見張っておいてもらえませんか？」

周りから男に見られても、精神的には女。

ぞろぞろと男どもが風呂に入って来るとストレスがマッハだろう。

上条もそれなら仕方ないか、と思い、見張りを請け負う事にした。

・・・

見張りと言ってもそんなに人が来るわけでもないので、風呂場の入口にしゃがんでぼけーっとする上条当麻。

そんな上条の元に抜き足差し足忍び足でやって来るアロハシャツが一人。

「……土御門か、今はこの辺にはだれも居ないみたいだからそんな安っぽい隠れ方しなくていいと思うぞ」

顔の部分に葉っぱが生い茂った木の枝をもってくると言う、何ともベタな隠れ方をして上条の元へと近づく土御門元春は、その枝をポイっと捨てると上条の隣にしゃがみ込んだ。

「いやー、人に見られないのが仕事みたいなところあるんだけど、ここまでバレないように気をつけたのは久々だぜい？」

そう、今現在土御門は御使堕しによる影響を回避しきれなかったために、周囲の人間から国民的アイドル「一一一」と認識されてしまっているのだ。
そのためただでさえスパイとして人目につかないようにしないといけないのに、その風貌のせいで更に人目に気を使うハメになってしまっている。

「つーかそんな悠長に構えてていいのか？時間制限がどのくらいあるのかもわからねえってのに」

「まー焦ったって仕方ないって。今はそれより別の話があるんだにゃー」

上条の意見ももっともなのだが、現状動きようがない。
それに土御門が何か話があるらしい。どうせ暇なので聞いてやろうと思ったのだが。

「テレビの話とねーちんを覗く話、どっちが良いと思う？」

いつになく真剣な表情を浮かべ、『テレビの話』の部分を聞いた瞬間上条の顔も固くなったのだが、『ねーちんを覗く話』と真面目な口調で言うものだから力が緩んだ。

「お前は真面目な顔して不真面目なこと言ってんじゃねえよ！！
アンバランスすぎだろうが！！」

「まーまー落ちつけってカミやん。せっかく肩の力抜いてやろうと思ったのにー」

へらへらと語るその顔からはおよそ緊張感は見られない。
上条もそんな様子に気を抜くが。

「カミやんはもうテレビの中に入っちまってる。最早当事者と言っても過言ではないだぜい？」

急に真面目な表情になる。おかげでペースが乱されっぱなしであるが、こう言った話術もスパイとしてのスキルなのだろう。
土御門の話に聞き入る。

「……そして、テレビの中でカミやんは『幻想殺し』を失った」

「……ああ、その通りだ」

「……」

土御門は急に黙りこむ。ひょっとして何か『幻想殺し』に関して重大なことを知っているのだろうか。
上条は次の言葉を待つ。

「……まあ、未だそれだけしかわかってないんだけどにゃー！」

「えっ」

「メインは『ねーちんを覗く』ことですからにゃー」

「なにそれひわい」

拍子抜けだった。何にせよ、土御門は上条の置かれている立場を理解している。そういうことだろうか。

「まあ何にせよ、カミやんはこの得体のしれない『テレビ』の中に足を突っ込むんだろ？
俺もなんか分かれば知らせるつもりだが……気をつけろ、言いたい事はそれだけだにゃー」

気の抜ける語尾だが、その言葉は本心からの言葉で、上条の事を心配していると言う事がよくわかった。

「……ああ」

上条は、小さくうなずくだけだった。
そして土御門は話は終わりだ、と言わんばかりに立ちあがると。

「さあ覗くぜい！」

「バカ野郎！！」

友人の犯罪宣言に黙って入られない上条は、土御門の自殺行為を必死で止めようとするのだが、
何処からともなく床を歩く足音が聞こえてきたため、土御門は忍者のように素早く飛び去って行った。
そんな土御門を見送った上条は、「見た目はアイドル中身は変態な土御門だから人目を避けてたんだっけかー」などとのんきに考えていると。

「おや、当麻じゃないか。何をしてるんだこんなところで」

上条刀夜が現れた。

「へ！？いやいや、何もしてませんことよ！？」

思わぬ登場人物に動揺して思わぬ事を口走ってしまう。

しかし、神裂の入浴に誰も介入しないか見張りしてますなんて言ったところで、男同士裸の付き合いがうんたらかんたらとか言って風呂場に連行されるだろう。

そうなったとき、神裂のことだ。七閃とか言って刀を振りまわすに違いない。

これは非常に拙い。

脳内加速装置を発動させて思考を加速させるが、空回りするだけでちっとも打開策は見つからない。

どうするよ俺、どうする！？と自問しながら手札のライフカードを見てみても、手札には「諦めたら？」としか書かれていない。

成程、どうせ諦めるなら盛大に散れ。そういうことか！！

そっちがその気ならと好きなことしてきたしー♪と、幸せについて本気出して考えながら風呂場に突入する。

――しかし、そこには既に着替え終わった後の神裂さん。

刀夜は「やあ、良い湯でしたかな？」などとマッタリとした面持ちで話しかける。

神裂さんはチラリと上条の方を一瞥し、ちょっと溜息をついてから「ええ、良い湯でした」と返答した。

神裂の上条に対する評価がちょっぴり下がったものの、裸を目撃するよりかは、よっぽどマシだと上条は本気で神に感謝した。

・・・

「こうやって親子水入らずで風呂入るなんて何年ぶりだろうなあ」

のほほんと上条父こと上条刀夜は上条当麻に話しかける。

しかし上条は記憶喪失なのでそんなことは覚えていない。

よって身も蓋も無い言い方をすると、「お前がそういうんならそうなんだろう。お前ん中ではな。」になってしまうのであいまいに笑ってうなずくことしかできなかった。

「それで、どうなんだ？学園都市での生活は」

「え？ああ、それなりに楽しいよ」

上条が記憶を失ってからと言うものの、周りは基本同年代の学生しかいなかったのでそれなりに距離感を保つ事は出来ていたのだが、こうやって親と対面すると、申し訳ないことに歳の離れた大人、という印象が大きすぎて距離感を測りかねてしまう。

そんなわけで刀夜とこうして腰を据えて話すと言う事を躊躇っていると、何やら刀夜は、

「……すまないな、父親である私がふがいないばかりに、苦労をかける」

何故か謝罪された。

「……え、何が？」

思わず素で尋ねる。本当に何のことだ。

「……昔から、お前は『不幸』だと言われ続けたな」

何やら独り語りが始まった。無視するのもあれなので、聞くことにする。

「何とか普通の人と同じ幸運をもたらせないか、なんて考えて世界各国のお守りとか集めてみたりして……
結局、何も変わらなかった。最後は藁にすがる思いで、学園都市に送り込んでしまった」

嘆くように、懺悔するように、刀夜は心の内を吐きだす。
上条はただ、黙ってそれを聞く。
すると刀夜から、頬から一筋の水滴が流れ落ちた。

「私は……逃げていただけだった……！
見てられなかったんだ、どんな目に遭っても、どんな言葉を吐きかけられても、
それでも前を見て、笑うお前から」

刀夜は微笑んでいる。
しかしその笑みからはマイナスの感情しか読み取れなかった。
そんな刀夜をみて、上条は。

「わぷっ！」

手で水鉄砲を作り、お湯鉄砲攻撃を刀夜にかました。

「な、何をするんだ！」

刀夜は思わず抗議する。
しかし上条はそんな抗議を完全にスルーして口を開いた。

「俺の知らないところで、父さんがどんな思いをしてたかは知らねえけど……」

一拍置いて、声のトーンを上げる。

「俺は、今まで生きてきて、本気で不幸だなんて、思った事はない！」

まあ、不幸だは口癖になっちまってるけど。と笑いながら上条は語る。

「……多分信じられないだろうけど、俺は今、父さんの言う『不幸』、それの根幹を失った状態なんだ」

不幸の根幹。もちろん『幻想殺し』の事だが、そんなことは刀夜は知らない。

上条もその事について話すつもりはなく、独白は続く。

「だけど俺は、それを取り戻したいと思ってる」

「……確かに、このまま普通に生きていけば、俺はおおよそ『不幸』とは言えない程度の生活は送れるだろうな。

だけど。」

「俺は、『あいつ』が居て初めて『俺は俺』だって断言出来るんだ！！

『あいつ』が居ないと、それだけで『俺は俺』じゃないんだ！！」

上条は叫び、心の内をさらけ出す。
刀夜がそうしたように。
上条の言葉は要領を得ないものだったが、刀夜には痛いほど伝わってきた。
「周りがなんと言おうと、俺は不幸なんかじゃない」、と。
そして、理解した。
「当麻は一人前の男になっていた」、と言う事を。

刀夜はつきものが落ちたかのように、晴れやかな顔だった。
「何だ……私がしてきたことは余計なお世話だったってことか」
「まあ、そこまで思ってくれるってのは息子冥利につきますことよ」
「はは、よく言うよ。……てことは家に置いてる１０８の魔術的お守り群は廃棄だなー」
「あんた無駄な事に金使うな！！俺が学園都市のやっすい奨学金でどんだけやりくりしてたと思ってやがる！！」
「何をいうんだ、当麻。お前はもう一人前の男だ。親からの援助なんていらんだろう？」
「うるせえ！お土産買う金あるなら仕送りくれ！！」

最初に勝手に感じていた刀夜との距離感は、『普通の親子』にまで縮まっていた。

## 番外編　上条当麻の華麗なる日常　そのさん（後書き）

次回でエンゼルフォール編終わると思う。
ひの神作さん？ああそんな方もいましたねえ

## 番外編　上条当麻の華麗なる日常　そのよん（前書き）

超絶無駄になげえんで読まないでいいです（でも、読んでほしいなあチラチラ）

次回から本編戻りますね。

## 番外編　上条当麻の華麗なる日常　そのよん

同日、２４時。神裂火織は砂浜に居る。何やら考え事をしているようだ。
そんな神裂の背後から金髪アロハサングラスの土御門元春がやってきた。

「どうしたんだにゃー、ねーちん。そんな考えこんじゃって」

「……土御門ですか」

神裂は土御門の事を一瞥もせずに、ひたすら思考を重ねている。
そして、意を決したかのように口を開いた。

「上条当麻は、確かに『御使堕し』を行った張本人ではなさそうです」

「まあ、実行する理由はないしにゃー」

「ただ……『幻想殺し』が無いのに、上条当麻に『御使堕し』の影響が行っていないのが気になります」

「……いつ気付いた？」

「先ほど、上条当麻が風呂場で彼の父に向かって『幻想殺し』が失ったと思わせる言葉を吐いていました。
まあ、確証はありませんが」

あいつは何を叫んだんだ、と土御門は思うものの、否定しても仕

方が無いので神裂をからかう事にした。

「へー、ねーちんは親子水入らずの会話の中に裸の付き合いで混ざって行ったってことか？」

「ぶっ！！そんなわけないじゃないですか！風呂場の入口まで声が響き渡ってたんです！！」

「ふむふむ成程、入口の戸に耳をひっつけて盗み聞きしtぎゃあああああああ！！！」

かんざきの　こうげき！
アイアンクロー！
こうかは　ばつぐんだ！

「こっちは真面目に話してんですよ！！そっちも真面目になりやがれ！！」

聖人の力を存分に発揮し、ぐるんぐるんと土御門を振りまわす（物理的に）神裂。
流石の土御門もふざけ過ぎたと思わず謝罪する。

「いたいいたいいたいぜよ！！わかった！わかったから放してほしいんだにゃー！！」

「次ふざけたら……千切ります」

ゴゴゴゴ、と背景から効果音を鳴らし、本気で威嚇する。
千切るという言葉に過剰反応した土御門は股間を隠し恐怖に震えながらも突っ込みを入れた。

「ナニをです！？」

そんな土御門を見て溜息をつきながら、汚いものを見るかのような冷たい目をして告げる。

「嫌ですね、ちぎるではなくせんきるですよ？」

「そんなに切られたら死んじゃうぜよ！！？」

１０００回も切られたら出血死もしくは途中でショック死してしまう。

そういう問題でも無いが。

「大丈夫です、千キルですから」

１０００回切るのではなく一騎当千宣言だった。

「もっとひどくなったぜい！？どこぞの吸血鬼並みの生命力ぜよ！？」

「……はあ」

土御門との下らない掛け合いをしている間にも、時間制限は迫っている。

だと言うのに捜査は最初から。溜息も付きたくなるだろう。

「どうしたんだにゃー？そんな溜息ついて」

「捜査が振り出しに戻れば溜息くらいつきたくなります」

「カミやんの周りにもあんな魔術かける理由ありそうな奴は居ないっぽいしにゃー」

インデックスと言う魔導図書館があるため、正しい手順さえ踏めば御使堕しを為す事は可能だろうが、上条当麻はもちろん、周りの人間もそれを為す理由があるとは思えなかった。

というより、インデックスがそれを許さないだろう。

「やはり、上条当麻の『幻想殺し』が無い状態で『御使堕し』の影響を受けなかったというのがヒントになってると思います」

「確かに。カミやんのみ選択して『御使堕し』から除外したと考えたらありえる話だにゃー」

「ならば、何故上条当麻なのでしょうか？」

「ふむ……確かに『中身』と『外見』が入れ替わるこの魔術で、カミやんだけその対象から除外する理由がわからんぜよ……

何にせよ、今はカミやんの周りを洗うしかなさそうだにゃー」

引き続き、上条当麻の周辺を調べて行くしかなさそうだ、と結論付け、明日へと備えることにした。

「あー、そうそう。明日ここに『殲滅白書』の人間が一人よこされるらしいぜい」

土御門の言葉にピクリと反応した神裂。

「ロシアの誇る『幽霊退治』のエキスパートですか……」

殲滅白書。ロシア成教の内部組織。
『御使堕し』を解決するには宗派がどうたらなどとは言ってられない。そういうことだろう。
何にせよ人手も増えるに越したことはない。
とりあえずいつまでも砂浜に居ても仕方が無いので2人は、今日はもう寝ることにした。

・・・

一方その頃

「バカが！今日は家族水入らずで川の字で寝るとしようじゃないか！俺は真ん中だ！！きさんは隅っこで布でもかぶってろ！！」

確かに、確かに父と母の情事に口をはさむのは子供としてはあれだろう。
しかし、上条当麻からしたら見た目はインデックスなのだ。もちろんそんな真似はさせられない。
よってなりふり構わず全力で阻止にかかる。

「なぬ！？当麻貴様私達の睦言の交わし合いの邪魔立てをするというのか！？」

上条のあまりに大胆な行動に、刀夜も思わず本音を出す。
刀夜の本音を聞いてしたり顔をする上条。

「はん！この俺の目が黒いうちは触る事すらゆるさねぇよ！」

「カラコン買ったら触っていいか？」

「駄目だ！！」

「あらあら、当麻さん的には久々に私達に甘えたい年頃なのね」

いつ来るかわからないタイムリミットが近づいて行く中、能天気なやりとりをしていた。

・・・

翌朝。

夏の朝の空気と言うのは、爽快感にあふれており、清々しいものであった。

しかし、上条当麻の体は重たい。

それは昨夜、見た目はインデックスな母と父のめくるめく夜を阻止するために夜通し刀夜を通せんぼし続けたためだ。

そんな上条は、眠たいながらも何とか起きて外へと向かう。

何やら援軍として魔術師さんが来たので紹介したいらしい。

とりあえず旅館に居ても、見たくない顔（青ピ）が居るので奴が起きる前にさっさと外へ向かう事にした。

上条のどんよりした様子に神裂火織は心配をするのだが、実質一睡もしてないわーという話を聞いてジトっと上条を見る。

こんな時に何やってんだと言う神裂からの批判の目を浴び、気まずい雰囲気のまま援軍魔術師の到着を待った。

・・・

そして上条当麻と神裂火織は、１人の少女を迎え入れていた。

ちなみに土御門元春は、どうやら個人で行動をとっているらしい。

ミーシャ＝クロイツェフと名乗るその少女は、全身を拘束具で身

をまとい、人類の最終兵器『バールのようなもの』を携え静かに佇んでいる。
上条は「何このカッコ」とか思った瞬間、ミーシャはそのバールをふりかぶり、上条へ向かって振りおろした。
思わぬ奇襲を受けた上条だが、刀夜との攻防で一睡もしてない。いや、寝てたとしても反応できなかっただろう。
しかし神裂は、それを見た瞬間に素早く上条とミーシャの間に入り込み、刀でバールを受け止めた。
ガキィッ!!と甲高い音が鳴ると、ミーシャは怪訝そうな表情を浮かべる。

「問一。何故邪魔をするのか」

「彼は『御使堕し』の犯人ではありません」

神裂の言葉を聞き、一応話を聞く気があるのか、ミーシャはバールを下ろす。

「問二。それの証明は可能か」

ミーシャはチラリと上条の方を向く。
その瞳からはおおよそ感情は感じ取れなかった。
何を考えてるかはわからないが、その場しのぎの嘘をついても仕方がないだろう。
上条は正直に答える。

「証拠はねえけど……『御使堕し』の解決に協力する……っても大した力なんてねーし魔術だって知らねえ。
だから協力するってのでそれの証明にならないか」

上条の言葉にミーシャは首をかしげた。
神裂はここで言い争うのももったいないと感じ、助け船をだす。
「一応、イギリス清教必要悪の教会の公式解答なら提示できますが？」
その言葉に反応し、ミーシャは続きを促した。
まず、超能力養成所である学園都市の学生たる上条当麻に、魔術は毒のはずなのに、その影響が出ていないと言う事。
次に、上条当麻は『御使堕し』の影響を受けていないが、それは魔術を行使した張本人が何かの目的を以ってそれを為したのではないかと予測していて、それの裏付けを今から行うと言う事。
「確たる証拠はありませんが、今ここで上条当麻に危害を加える事は私が許しません」
神裂がそう締めくくると、ミーシャは何やら考え込み始めた。
「評価。３０・４・２８・２。総評６４。信用とまでは及ばないが、様子を見る価値はあると判断する。
ただし、その少年の容疑が晴れない場合は、白か黒、それをはっきりさせる為に実力行使も厭わない」
「……わかりました」
神裂の言葉に納得したのか、ミーシャは軽く上条に謝罪を入れ、話題を変えた。
流石の上条も謝罪表明を地の文で軽く流されるのには納得できないのだろう。
抗議しようと声を上げようとしたが、神裂が話をややこしくすん

なと言う目を上条に向けた。
上条はうぐぅと呻き、そのまま黙りこむ。

「問三。今回の事件の中心点は確かにこの場にある。仮にそこの少年が犯人じゃないとして、他に犯人の心当たりはあるか」

あくまでもマイペースを貫くミーシャ。
上条は「ああ。マイペース娘。なんだなーなるほどなー」と一人納得し、ここから先は専門家の話だろうから、口を開かないようにした。

「先ほど申し上げました通り、上条当麻の周辺をもう一度洗い直してみるところです。
その作業は現在、土御門が行っています」

「問四。現在、すべき行動はあるか」

「今は有りません。強いて言うなら魔術の中心点、上条当麻に何らかのアクションがある可能性があるので、
土御門が戻るまでは護衛兼監視をするのが当面の活動指針です」

まだ疑われている事に上条はムッとするが、無罪の証明法も無いのでやっぱり黙りこむ。
ミーシャは少し考え込んで、再び口を開いた。

「問五。護衛も監視も、貴方が居れば十分なはず。よって私の個人行動は可能なはず」

「それでも構いませんが、貴方は元々『幽霊退治』専門の人間のはず。

『人間狩り』には慣れていないと思われます。
ならば『人間狩り』の専門たるイギリス清教の人間をガイドにつけておく方が後々有効だと私は考えます」

「……賢答。その申し出に感謝する」

ミーシャはおもむろに手を差し伸べる。
思わぬ行動に神裂は面食らうが、どうやら握手を求めているらしいと分かり、クスリと微笑んで握手に応じた。

「さて、今後の方針が決まったところで……とりあえず、土御門の報告を待つしかありませんので、上条当麻は部屋で休んでいてください。
ミーシャと私は続けて協議を行いますので。結果は追って沙汰します」

「何か……良いのか？俺だけ休んでいて」

「良いも何も、私や土御門だったら仮眠はしっかり取っているので体力に関しては何も問題はありません。
むしろ貴方が一睡もしてないのが問題なのですよ。有事の際眠くて動けないじゃ話にならないでしょう？」

神裂の最もな意見にグゥの音もでない。でも仕方ない。
見た目インデックスの母の寝込みを襲おうとするおっさんが居たらそれは止めるだろう。
だが今更そんなこと言っても言い訳にしかならない。
なので申し訳なく思いつつも神裂の申し出を受け入れ、仮眠をとることにした。

・・・

仮眠をとるはずだった、とるはずだったのに。

「おきろおきろおきろー！！」

上条当麻が仮眠で布団に入ってから5分もしないで御坂がフライングヘッドバッドを上条の腹に炸裂させた。

「寝させろ！！」

「何言ってんのおにーちゃん！朝だよ！」

そう。ミーシャ＝クロイツェフを迎え入れたのは朝の６時。
１時間程度話しただけなので、旅館に戻っても朝なのだ。

「うるさい！夏休みに惰眠を貪らずしていつ貪るというのだ！！」

「せっかくの旅行で惰眠を貪っちゃ駄目だと思うんだけど！？」

「ええいクラゲしかいないバカンスなんて惰眠にも劣るわ！！」

「そんなこと言わないで遊んでよお」

「ふん！そんなぶりっこ作戦なんて通じぬわ！」

「じゃあいいもん！私も寝るから！！」

そう言って御坂は上条の布団へと潜り込んできた。

「何をする！」

「何をするじゃないよう！構ってくれないのが悪いんだから！！」

どうやら御坂は意地でも起こしたいらしい。
一睡もしてないのに起こすという表現もおかしな話だが。
何にせよそっちがその気なら意地でも寝てやろう。そう決心して毛布をかぶった。

しかし、毛布をかぶった事で、奴の現出に気付けなかった。

「あー！とーまったら私の知らないところで女の子とイチャイチャしてー！（テナー」

しまった。反応が遅れた。
そのせいで奴がこちらに向かってダイブするのをよける事は出来なかった。

結果として、神裂が起こしに来るまで気絶していた上条だった。

・・・

突然だが、上条当麻率いる魔術師御一行は上条邸へとやってきている。

それは何故か。

とりあえず今現在、全く浮かび上がらない容疑者に、二つのパターンが考えられる。

一つ、敵魔術師が巧妙に隠している。とはいえ、術者までもが魔術の影響下にあるとは考えられないし、この可能性に関しては十二分に調べたのであまり高くないと言えよう。

二つ、偶発的に魔術を発動させてしまったパターン。
こちらの可能性の方が、前者より圧倒的に薄いものだったのだが（それも当然だ、本来秘匿するべき魔術がこんなホイホイとおおっぴらに使われるはずもない）、
前者がほぼ無いという結論になり、こちらの方が可能性としてありえるものとなってしまった。

何にせよ、偶発的に発動させるにも安定した術式を敷く必要がある。
魔術の素人にその辺の道端にそんな術式を敷けるわけがない。
ならば術式は何処に？

それは、上条刀夜の『お土産』に答えはあった。

刀夜は、上条の為に『お守りになる変なお土産』を大量に集めて家に置いているのだ。
それならば、そのお土産の中に『魔術的意味をもつお守り』が存在し、それらが偶発的に陣の形成と魔力の生成が為され、何らかのトリガーで発動されていてもおかしくはない。
それに、よくよく考えると、上条はこの町に来る前、すなわち『御使堕し』の発動以前に、上条夫妻の顔写真を確認していたのだ。
上条詩菜は発動前後で姿がかわっていた。
それに対して、上条刀夜は。

何も、かわってはいなかった。

しかし、上条刀夜からおおよそ悪意の欠片も見られなかった。
もしあれが演技だとしたら相当な役者だ。
おそらく、本当に偶発的、それこそ宝くじで一等が当たるより低い確率で発動させてしまったのだろう。

そんなわけで、この考えの裏付けを行う―あわよくば術式破壊をする―為に上条邸へとやってきたわけだ。

こんなに展開が早いのも、ひとえに上条が写真を確認していたおかげだろう。
と言っても今の今までその事を忘れていたわけだが。

「にしても、事故で魔術を発動ってどんだけだよ」

上条は気だるげにつぶやき、玄関のカギを開けた。
どうやって家の鍵を入手したかというと、「我が上条邸に友達（魔術師）を案内したいんだ」という何ともそれっぽい嘘で見事鍵を入手したわけだ。
しかも都合の良いことに、つい最近引っ越したらしく、「当麻は新居の場所をしらんだろう」と言う事で地図まで用意してもらった。
この態度を見るからに、やはり魔術は偶然のものだと思われた。

そして玄関の扉を開くと。

「……これは悪趣味だろ……」

「見事なまでに置物それぞれに魔術的に見て意味を持たせてありますね」

「ひょっとして、半端に調べて半端な知識で半端に置物を並べてしまった結果かもしれんにゃー」

思わず上条は頭を抱えた。

亀だのトラだのトーテムポールだの、様々な置物が家のいたるところにおかれていた。

魔術がどういう原理で発動するか知らないが、置物全てに『魔術的な意味をもつ』のであれば、偶然『術式の形』になってしまってもおかしくはないと思ってしまうほどだった。

と言っても、こんなケースは珍しいどころか奇跡的なパターンだと、土御門と神裂は口をそろえて話していた。

そして4人は、各々置物の位置を調べて行くのだが、調べれば調べるほど、話がややこしい方向へと向かう事になるのだった。

・・・

土御門元春と神裂火織は二階に上がって行った。

上条当麻に魔術の知識はないため、下手に置物はいじるなと厳命されたので、今現在手持無沙汰な状態である。

そんな中、黙々とミーシャ＝クロイツェフは置物を調べて行っている。

正直言って気まずい。かといってミーシャを一人にして二階に行くのも何か気が引ける。

何か話題でも無いかなと思うが、年齢もわからない（パッと見インデックスくらい？）上にロシア出身の少女相手に何話せばいいんだと頭を抱えてうんうん唸るものの、何も思いつかない。

当然と言えば当然だが、本気で気まずい。どうしようかと思ってじーっとミーシャの背中を眺めていたら、

「問一。何か用か」

ミーシャの方から話を振ってきた。とはいえ、特に用は無い。かといって馬鹿正直に何も無いと言ったら会話は二度と為されない気がする。

「えーっと、これ、食うかい？」

仕方が無いのでお近づきのしるしにポケットに入っていた板ガムで餌付けを試みた。

「問二。これは食べ物なのか？」

「食べるけど飲み込みはしないものだ」

「？？」

何やらとんちみたいな言い回しになったが、とりあえず口に含んで良いものだと言う事は理解したのだろう。

そろそろと手を近づけ、ちょん、と板ガムをもつ上条の右手に触れながらも、そろそろとガムを手に取った。

そして、ガムというものは初めてだったのだろう。

銀紙をさわさわといじり、中身があることがわかると、中のガムを銀紙からとりだした。

しかし、そのまま食べるのかと思いきやフンフンの匂いを嗅ぎ、次に舌でチロチロとガムを舐め始めた。

どうみても警戒されてます。本当にありがとうございました。

毒味が終わったのか、手に持ったガムを口の中へと放り込んだ。
モグモグと咀嚼して行くうちに、実は美味しいと言う事に気付いたのだろう、もう一個頂戴と言わんばかりに手を差し出してきた。
上条はようやく気まずさから逃れられた！と思い板ガムを再び取り出すのだが、ミーシャはそこで先ほどまで口に含んでいたガムを飲み込んでしまった。

「あー！ガムは飲み込んじゃ駄目なんだぞ！口の中で噛んで、味を楽しむだけのもんなんだ！」

その言葉に何か拙いことをしてしまったのか、と言わんばかりに、

「問三。飲み込んだらあぶないのか？」

と、恐る恐る尋ねてきた。
そんなミーシャの事がちょっとかわいいと思いつつも、一枚飲み込んだ程度なら大丈夫だろうと伝えてやると安心した表情を浮かべた。
そうこうしてるうちに、二階から土御門達が降りてきたので、術式について何かわかったのだろうと思い、上条は2人が口を開くのを待つことにした。

「術式を破壊するには―少しくらいの誤差は大丈夫ですが―ほぼ同時に全ての置物を破壊する必要があります」

置物が調べ終わったと思ったら、神裂火織は、上条当麻に向かって口を開いた。

「そんなこと出来るのか？」

魔術なら出来そうだなー、と魔術万能説を頭の中でとりあげていると、

「はっきり言って、この家ぶっ壊すくらいしないと無理だにゃー」

あっけらかんと言い放つ土御門に、上条は驚愕した。

「なあ、新居って言ってたよな……？ひょっとして、壊しちゃう系？」

「まあ確かに壊しちゃう系路線で行くのは忍びないけどにゃー。とりあえずは、最後の手段、ってことにしとくぜい」

「そうですね……それにしても、偶然とは思えないほどの出来なんですよね」

どこか一つを動かせば、全体に影響を及ぼす。

そんな互いが互いを支え合うような術式だ、と神裂は説明した。

「成程な……」

上条は、昨日の風呂場での会話と合わせて考えると、何となくこの事件の全容を理解できた。

このお土産達は、『上条当麻』の為の物だ。

すなわち、『どういう内容』の魔術かはさておき、『上条当麻』の為の魔術なのだから、その中心に『上条当麻』が居ると言うのは当然と言うことだろう。

しかし、それでは『上条当麻』に術式の影響が無かった理由が説明できない。

これは魔術の素人たる上条当麻個人の見解なので、あてにはならないが、上条は以下のように考えた。

『御使堕し』は『上条当麻』を中心に展開された。その効果は『中身』と『外見』を入れ替えると言うもの。いや、自身の『外見』と他人の『外見』を入れ替える

そしてそれの効果範囲は、日本からイギリスにもわたっていると言う。もし仮に、地球全土が効果範囲内であるとすると、その効果範囲内の広がり方は、どういうものだったのだろう。

おそらく、『円状』に広がる、と言うものだと思われる。

すなわち、魔術の効果範囲の円周に触れた瞬間に魔術が発動し、誰かの『外見』と自身の『外見』が入れ替わる。

つまりその円周状に居た人間と入れ替わるのではないか、と言う事だ。

この時効果範囲の広がり方は高速なため『円周』と言うよりも普通に『円』と考えていいだろう。

それでも、中心点である『上条当麻』は効果範囲が『点』だったため、『入れ替わる相手が居なかった』のではないか。

そして、術者である『上条刀夜』には普通に影響が及ばなかった。

と言っても、あの様子を見ると、『外見』は変わらなくても、『周りが変わったこと』には気付いていない。

言わば土御門達と間逆の状態と言うことだろう。どういう理屈かは知らないが。

とはいえ、やっぱり魔術は素人なのでこの理論には穴しかない。
例えば『入れ替わる相手が居なかった』としたが、『術式は今現在も発動しているのだから、誰かと入れ替わらないはずはない』とも考えられる。
が、結局『上条当麻は上条当麻のまま』だったのだから、そんなこと考えても仕方ないだろう。
なんにせよ『上条刀夜』が『上条当麻』に『幸せ』になってもらいたい、
という気持ちだけは痛いほど理解できたので、これ以上この事件の原因を思考する事はしなかった。

ただ、『術式にかかった者たち』から見て『神裂火織』は『ステイル＝マグヌス』に見える。
それに対して『上条当麻』から見て『旅館の亭主』は『ステイル＝マグヌス』に見える。
この『術式にかかった者』と『かかってない者』との情報の齟齬は一体どうなっているのだろう。

などと真面目に考察を重ねて見るも、やはり魔術の素人にそんなことが理解できるはずも無く。
やっぱりまあいいや、と納得した。

「何が成程なんですか？」

1人納得する上条に神裂が尋ねた。

「いんや、なんでもない」

上条はそんな神裂に対して、意味深な笑みを浮かべる。
神裂はなんだこいつと言う顔をするものの、軽くスルーした。

「それで、結局どうしたらいいんだ?下手に物動かして発動中の魔術が変な事になったら駄目なんだろ?」

「おお、カミやん理解が早くて助かるぜい!」

すると、ここまで黙って聞いていたミーシャは、

「解答一、自己解答。標的を特定完了、後は解の証明のみ。行動を開始する」

術式がどうにもならないのなら、標的―間違いなく上条刀夜―をどうにかするつもりだろう。

上条達が止める間もなくミーシャは窓から庭へと飛び立ち、そのまま走り去ってしまった。

「おいおい……まさか……!」

上条はすぐに理解した。ミーシャの行動を。

「父さんが危ない!!」

うろたえる上条に、土御門は声をかける。

「カミやんとねーちんは、上条刀夜の元へ行け。この場は俺に任せろ」

「な、なあ!父さんは、父さんは大丈夫なんだよな!?」

とはいうものの、偶発的とはいえこの大事件の原因だ。

無事で済むわけないんじゃないだろうか。

「大丈夫だぜよ。殺さずにすむ方法があるなら、俺はそっちをとる。
今回だって例外じゃあない。ミーシャの奴はちと早計過ぎる。
殺せばそれで済むと考える人間の典型だな」

殺さずに済む方法をとると言うなら、それで一端は安心したものの、
殺せばそれで済む。土御門の言葉に上条はぞっとした。
これが裏の世界、殺し殺されが当たり前の世界か。
何にせよここでうだうだしている暇はない。
すぐさまタクシーを拾って、上条と神裂は旅館へと急ぐのだった。

・・・

ミーシャ＝クロイツェフは途中で車を拾わなかったのだろうか、
ミーシャより先に旅館へと戻れた。
上条当麻と神裂火織は上条刀夜の元へと急ぐ。
旅館に戻り、最初に目に入った御坂に刀夜の居場所を尋ねたところ、海の方に向かっていたと答えた。
上条達はそれだけを聞くと、一目散に砂浜へと向かう。
御坂はこの旅行で全然かまってもらえなかったのが不満だったのか、何か言おうとしていたが、上条達はそれを完全無視して走り去った。

砂浜にたどり着いた時、既にミーシャと刀夜は相対していて、ミーシャが何か一言口を開くと、バールを思い切り振りかぶった。
刀夜は思わず後ずさりし、足を引っ掛けて転んでしまう。しかしそのおかげで初撃をかわすことが出来た。
続いてミーシャは再びバールを振りかぶるが、それは神裂に受け

止められた。
神裂は上条に刀夜を連れて逃げろと言う。
上条は逡巡するも、自分に力が無いと言うのはテレビの中でよく理解していたため、すぐに刀夜の手を引いて走った。
ちらりと後ろを見やると、ミーシャの長い前髪の中から、何の色も読み取れない瞳が、上条達を見据えていた。
ゾクリ、と背筋に寒気が走る。それにより更に足を動かし走る。
刀夜は訳がわからないと言った表情を浮かべているが、それを説明している暇はない。
上条が走るその数十m後ろでは、既に戦闘が始まっていた。

・・・

上条当麻は走る。
何処に行けばいいのかもわからず、何となく旅館に向かって走った。
するといつ戻ってきたのか土御門が並走していた。

「土御門！ミーシャは一体どうしたんだよ！！」

「いやあ、まず名前からしておかしかったんだにゃー！」

土御門はミーシャの行動に理解していたらしく、獰猛な笑みを浮かべ上条に事情を説明する。

「ミーシャってのは、ロシアにおいて男性に使われる名前なんだよ！偽名にしちゃもう少しまともな名前があるだろう？」

「は？それってどういう……」

「つまりあいつも、『術式の影響を受けた側』だったんだ！！」

上条の言葉を待たずに、土御門は続けて口を開く。

「ロシア成教に問い合わせをしたんだが、『サーシャ＝クロイツェフ』ってのだけは居るみたいなんだ。

つまり、そいつと『ミーシャ＝クロイツェフ』が入れ替わってんだろ！」

理屈はわかった。

しかし、それならばロシア成教・殲滅白書所属・ミーシャ＝クロイツェフと言うのは、一体誰だ？

「居るんだよ、この世には。男性にも女性にもなれる存在、神によってつくられた存在ってのが」

神。急に話がうさんくさくなり眉をひそめる上条だったが、

「忘れたのか？カミやん、この魔術の正式名称＜エンゼルフォール＞を」

丁度旅館にたどり着いた。

その瞬間、神裂と対峙していたミーシャの目が、カッと見開かれる。

ドン！と言う巨大な音と共に地面が大きく揺れた。

上条は思わぬ揺れに目をつむってしまったが、すぐに揺れは収まったので目を開くと、

夕焼けに染まったオレンジの空は、いつの間にか暗く星の輝く夜景へと変貌を遂げていた。

すなわち、地球ないしは他の惑星を魔術によって動かした、と言う事だ。

それを理解した上条は土御門に叫ぶように尋ねる。

「魔術ってのは星を動かしたりなんてとんでもねえことができんのかよ!?」

「『人間』じゃあ無理だ!!言っただろ!?この魔術の正式名称は、エンゼルフォールだと!!」

エンゼル。

エンジェル。

天使。

フォール。

落ちる。

堕ちる。

「ま、さ、か……!!」

「その通りだぜい、カミやん」

土御門は一息つく。

刀夜は未だに状況を理解できていない。それも仕方のないことだが。

「『ガブリエル』。左手に『神の力』を携えし大天使が一人だ」

上条達の背後からは何かが崩れるような、低くくぐもった音が響き渡った。

戦闘は、最早ただの人間に介入できるレベルではなくなっていた。

・・・

「成程、わざわざ空を夜に成したのは、自身の属性強化の為ですか。『夜』で、『月』を主軸に置いているところを鑑みると……水の象徴にして青をつかさどり、月の守護者にして後方を加護するもの。

すなわち、『神の力・大天使ガブリエル』」

土御門元春と同じ結論を導いた神裂火織は、ミーシャ＝クロイツェフだったものを眺める。

だったもの、という表現は正しい。

先ほど天体操作によって夕方を夜へと変貌させた際、ミーシャの背中から、天使の様な羽根が生え、その双眸からは異様な光りが見て取れた。

神裂はいつ攻撃を来ても良いように刀を構えている。
ミーシャは、月を背に上空へと飛び立つ。そして誰にも聞こえない声。いや、音だろうか。
確かにそれを発した。

――――ペ、ル、ソ、ナ。

ガブリエル。
確かに土御門と神裂の解説は、正しいものだっただろう。

しかし、ここでは違った。

別に、天使が堕ちてきたわけではないのだ。
魔術の素人がたまたま造ってしまった術式に、そんな大仰な意味は宿らない。

しかし、目の前の現象が、余りにも本物の大天使のそれと似ていたため、気付けなかった。

いや、知らなかったと言った方が正しいだろう。

ペルソナ、と言う心の仮面を。誰にでも宿る人間の心の裏側を。

そう、ガブリエルと言うペルソナが、誰かの心の中から抜け出したのだ。

そして、ガブリエルは本来の宿主の元へと戻るべく、術式の解除の協力をしていた。

それだけのこと。

ガブリエルは宿主の元へ帰るべく、それの邪魔をする目の前の人間を排除する。

敵の排除。それを為すための力を発動させる。

ガブリエルを中心に半径５０ｍ程、真っ白な光に包まれた。

そして、その光の範囲内には大量の氷の塊が出現する。

アイスジハード。

ガブリエルがそうつぶやくと、その全ては神裂へと殺到した。

流石の神裂も防戦を強いられる。いや、元々時間を稼げたらそれでいいのだろう。

土御門が、上条が、きっと何とかしてくれる。それを信じて、神裂はひたすら刀を振るう。

目の前の光景に、一抹の違和感を感じながら。

・・・

何か膨大な光が生じ、そこから何かが地面へと殺到するのを上条当麻はただぼんやり眺めていた。
最早手に余る。そう感じさせる光景だった。
しかし、それでいいのだろうか？
力が無いから、力がある奴に任せる。
成程、実に合理的だ。
改めて自問する。しかし、それでいいのだろうか？
力が無い奴は、立ちあがってはいけないのだろうか。
今までの俺は、そんな些細なことを気にして動いていただろうか。
違う。
そんな理屈をこねて動く人間じゃない。
もっと単純に、自分がどうしたいか、それだけを考えて動いていたはずだ。
ふと、『影』の言葉を思い出す。
「俺がそいつの心ん中で何回殺されたと思ってやがる？
俺は怖い、辛い、痛い、止めろ、って何度も何度も叫んでたってのによぉ」
その言葉を思い出して、失われた『心の片割れ』がチクリと痛んだ気がした。
だが、再び空が白く輝いたことで、その痛みは霧散して行った。
「土御門！！」
上条は叫ぶ。

「入院費は何とかしてやる!!死んでなきゃ何でも治せるとかいう医者も紹介する!!だから頼む!父さんを助けてくれ!!」

上条は、魔術の行使による術式破壊を土御門に頼んだ。
本来、それは上条当麻にとってありえない行為だ。
誰かを助けるために、誰かが犠牲を払う事を上条は病的なまでに嫌う。
その上条が、超能力者たる土御門に、魔術の行使を頼んだ。

たしかに、最良の策かもしれないが、上条の望む最高では無いのは明らかである。
だがしかし。上条の望む最高を演出する事は出来ない。そんな力はない。
だから頼るべきところは頼る。

「俺は、今から神裂のとこまで行ってくる!!盾位にゃなれるだろうから、俺や神裂が死ぬ前に何とかしてくれ!!」

上条の心からの叫びを、土御門は笑って受け取った。

「任せろ!!さっくり終わらせて、笑って入院してやろうぜい!!」

「入院確定かよ!!!」

上条と土御門は、ハイタッチをして別れた。

・・・

目の前の現象が全く理解できなかった。

だが、これだけはわかる。私の息子は、今から死地に赴くと言う事。

それを止める事は出来ない。なぜなら既にあいつは一人前の男だからだ。

親としては危ないことはしてほしくないが、子供と言うのはいずれ親を超えて行くもの。

それが今なのだろう。ならば私は、笑って見送らねばならない。

ただ、今までもこんな風に当麻は戦っていたのだろうか。何にせよ、そのうち武勇伝を聞かねば。

上条刀夜は、旅館の入り口で立ちつくしたまま、連続で発せられる謎の光を、ただ茫然と眺めるだけだった。

・・・

上条当麻は走る。

ガブリエルとやらと神裂火織が対峙している砂浜へ向かって。

何が出来るか？と聞かれたら何もできないだろう。『幻想殺し』だって存在しない。

盾どころか神裂の邪魔にしかならないかもしれない。

だがそれでも動かずにはいられない。

我動く、故に我あり。上条当麻が上条当麻たるゆえんだろう。

砂浜へとたどり着いた時、そこは最初の地形を保ってはいなかった。

数え切れないほどの氷の塊が地面に突き刺さっている。

その氷の上を淡々と移動する影が一つ。

ガブリエルはと言うと、最初に浮いた位置から全く移動せずに、ひたすら氷を生成し、操作していた。

それを見ていて「天体を操作できる」などと言う人間では不可能な業をもっているというのに、どうしてこの程度で済んでいるのだろうか、と。

その気になれば、術者の上条刀夜ごと、この地を消し去る事くらいたやすいはずだ。

しかし、それをしないのはどうしてだろうか。

手加減をしているのか、それとも……

「神裂ぃ！！」

思わず神裂を呼びとめようとする。しかし、目の前には氷が飛び交う戦地。

神裂に上条の言葉は届かない。

そもそも、呼び立ててどうするつもりだと上条は自重した。

・・・

上条当麻が叫び声をあげた事で、ガブリエルがゆっくりと上条の方を向いた。

神裂はガブリエルの視線が変わったので何事かと思い、視線の先を追うと、そこには上条が居た。

こんなところで何をやってるんだと思うが時すでに遅し。

ガブリエルはふよふよと上条の方へ向かって行った。

神裂は拙いと思いつつも降り注ぐ氷のせいで前に進めない。

しかしガブリエルはゆったりと上条の方へ飛んでいく。

神裂は逃げて下さい！と叫ぶが、上条は茫然自失としてその場から動かない。

次の瞬間には、上条はその氷でバラバラに吹き飛ぶ。そんな図が脳裏をよぎったのだが。

「……？」

ガブリエルは、何もしなかった。ただ、ペタペタと上条の頬を触る。

上条はその間、されるがままだった。神裂もあっけにとられていた。

すると、ガブリエルから音が発せられた。

――心を識る者がこんなところに居るとは思わなかった。

――そなたならば、信用してもいいかもしれない。

――我を、我が主の元へ

それだけ伝えると、ガブリエルから生えていた羽根はナリをひそめ、

宙に浮かんでいた氷も、地面に刺さっていた氷も、全てが消失した。

キラキラと星が輝いていた夜空は、オレンジ色の夕焼けを取り戻し、

そしてガブリエルはミーシャ＝クロイツェフに、戻った。

「……何だったんでしょうか……？」

「なあ、さっきのって、本当にガブリエルだったのか？」

「私も疑問に思っていました。魔法名も名乗っていない状態でしたのに、意外と何とかなったのは、手加減してもらっていたのか……

それとも、偽物だったのか」

心を識る者とは、ペルソナやシャドウの事だろうか。

心当たりと言うとそれしかなかった。そんなことをぼんやりと考えていると、一閃の光が上条家の方向へ向かって行くのが見えた。

おそらく、土御門が術式を行使したのだろう。それならばすぐに助けに行かなければ。

塗り替えられた世界は、再び元に戻った。

その瞬間に、全ての人間は元に切り替わり、ようやく終わったんだな、と嘆息をついた。

・・・

影は海の上で小舟に寝転がり、喋っていた。

「ったく……偶然出来た術式が、どうしてこの世界に届くんだっての」

そう、入れ替わりの術式は、上条当麻も例外では無かった。

ただ、入れ替わる相手に『異能を打ち消す』右手があった。

そのために、入れ替わる事が無かったのだ。

しかしそんなことは上条当麻は気付かない。影も知る必要はないと思っている。

結果的に未曾有の入れ替わり術式は不発だったのだから、それで良いだろう。

影は、砂浜に現れた待ち人を見て喜びを示した。

・・・

NGシーン

一方通行の朝は早い。（最近は）

特に今日は、反射の膜に何か違和感を感じて目を覚ました。しかし周りを見渡してもいつも通り荒れた部屋。

昨日から上条は外に出ていると言うので、一方通行は1人でトレーニングをすることになる。

９９８２号はまだ寝ているようで、毛布を頭からかぶっていた。

起こすのも忍びないので、もそもそとジャージに着替えて台所で歯を磨き、ランニングを開始する。

やはり日が昇り始めの時間帯は丁度良い温度で涼しい。

とはいえこれから徐々に熱くなるだろう。キリの良いところで部屋に戻るとしよう。

一方通行は淡々と走る。

そろそろ一般人も活動を開始する時間になったのだろう、ぽつぽつと通行人が見え始めた。

ところが、何かがおかしい。明らかに男なのに、女性がきる服を着ていたりする人間をやたら見かける。

１人ないしは２人くらいまでなら、「あァ、そういう趣味かァ」で済ませたのだが、ここ１０分で１０人は多すぎる。

どういうことだろうと思いつつも、とりあえず暑くなってきたので部屋に戻ることにした。

部屋に戻ると、９９８２号の姿はなかった。置き手紙には「ちょっち病院行く」と書かれていた。
調整が残っていたのだろうか？何にせよ腹が減った。
そう感じた一方通行はベクトル操作で汗をはじき（シャワーを浴びようかと思ったが、何だか面倒くさかったらしい）、私服に着替え、いつものレストランに向かう事にした。

いつものレストランに向かうと、いつもの……店員では無かった。
ウェイトレスの格好をしたガチムチのおっさんだった。
ウェイターの格好をした、以前アンチスキルのトレーニング所で御坂美琴と一緒に居た白井黒子の姿もあった。
話しかけようかと思ったが、そんなに仲も良くないのでスルーした。
向こうもスルーしていたのでそれでいいのだろう。

かくして、ガチムチウェイトレスは一目散にいつもの席へと案内した。
どう見ても初めて見る店員なのに、どうしていつもの席を知っているのだろうか？一抹の疑問を感じつつ、いつものメニューを頼んだ。

明らかにおかしいと感じたのは、アンチスキルのトレーニングジムについた時だ。
今日は冷やかしに芳川桔梗も来ると言っていたので、黄泉川愛穂か芳川のいずれかに会えるだろうと思ったら、一向に会えなかった。
どういう事だと首をかしげていたら、頭に花を乗っけた少女がじゃんじゃんと黄泉川の口調でなれなれしく話しかけてきた。
なンだコイツと思ったが、何やら黄泉川っぽいことを話している。
「さあ今日もボコボコにするじゃん」とか「さあ今日もヘトヘトに

するじゃん」等だ。
こんな語彙力のなさはどう見ても黄泉川だった。しかし見た目はお花畑。

よくわからないままにトレーニングを命じられた。
納得いかなかったが、いつも通りのメニューだったので、黄泉川の代理でも頼まれたのか？と判断し、いつも通りメニューをこなす。
ゼェゼェ言いながら、腕立て伏せをしていると、何やら自分のそばでニヤニヤしながらしゃがみ込んでいる９９８２号がいた。
見せもンじゃねェ、帰れと言うと、つれないこと言うわね、とか言いながらトレーニングが終わるまで居座っていた。
お前もトレーニングの一つでもしたらどォだ？と忠告してやったら、頬を膨らませて悪かったわね、太ってて。みたいなことを言われた。
別に太ってはいねェよ、とフォローしておいたが、妹達の一人称って「ミサカ」だったような気がする。
まァ、どォでもいいか。

トレーニングが終わり、今日は黄泉川いねェし終わりかァ？とか思っていたら、黄泉川の真似をしている少女が「じゃあ実戦するじゃん？かかってくるじゃん！」と身構えていた。
はいはいワロスワロスと思いながら腕を伸ばすと、見事に一本背負われた。
この技の切れ、動きのよどみなさ、どう見ても黄泉川のそれだった。

まさか、黄泉川の愛弟子!?だとしたら好都合だ、まずは愛弟子からボコボコにしてやろう。
一方通行は意気込んで攻撃を繰り出すが、いつもの黄泉川のように軽々とあしらわれる。

愛弟子どころか黄泉川そのものと戦っているような錯覚に落ちる。

さて、結局お花畑にボコボコにされて、いつも通りフラフラしながらいつものレストランで晩飯を食べに行く。

いつもの店員はやっぱりいなくて、服装のおかしな連中は居た。

ちょっとさみしいと思いながらいつものメニューを食べ、部屋へと戻った。

９９８２号はやっぱり戻っていなかったが、携帯にメールは届いていた。

「今日は、病院に泊まる」とのことだった。

成程、なら今日はベッドを独り占めできると言う事か。

それなら存分に寝てやろォ、と言う事で体の汚れをベクトル操作し、ゴロリとベッドに横たわる。

眠りに落ちるまで、時間はかからなかった。

次の日、昨日はめんどくさかったからシャワーを浴びていない。

ベクトル操作があるとはいえ、精神衛生上何日もシャワーを浴びないのは気持ち悪い。

なのでフラフラと脱衣場へ向かうのだが。

「ハァ！？木ィィィ原くゥゥゥンなァァにしちゃってンですかァァァ！！！？」

鏡には、木原くンがいた。

これは悪い夢だ、と思うが、ほおをつねると痛い。

思わず黄泉川に連絡を取り、今日は頭が痛いので休ませてほしいという旨を伝える。

すると昨日聞いた花畑の声でわかったじゃん、養生するじゃんと返答が来た。

黄泉川は電話すら愛弟子に任せているのか、と思いつつ、現実を

逃避するために布団をかぶるのだった。

# 番外編　上条当麻の華麗なる日常　そのよん（後書き）

番外編なんてもうやらないよ！

## そのさんじゅう（前書き）

布束さんペルソナあつかえるのか？

## そのさんじゅう

布束砥信は研究者である。

生物学的精神医学の分野でその才を見出され、第七薬学研究センターの研究機関に招聘されたのだ。

その際、妹達の『学習装置（テスタメント）』の開発を担当しており、量産型能力者計画に参加していた。

一度は研究チームから離れていたが、妹達が絶対能力進化計画に引き継がれた際に再び呼び戻されることになった。

布束はこれを「自身は研究が挫折した時の責任を転嫁するためのスケープゴート」なのだと感じつつも、

妹達を何とか救えないかと考え絶対能力進化計画に参加することを決めた。

そして進みゆく実験の中、実験が行われそうな人目につかない路地裏などにマネーカードをばらまく事で、それを集める一般人による監視の目を作ってみたりもした。

妹達に感情・心を植え付ける事で、一方通行の心を動かせないかと画策したりもした。

研究所のデータ移送作業に乗じてそれを１９０９０号に行おうとしたが、それを察知されて逆に襲撃されてしまったのだった。

何とか隙をついて感情のインプットを行ったものの、上位個体の命令以外は受け付けない仕様になっていた為、それは為されなかったが。

そして捕まった布束は、別の研究所の地下に拘束されてしまう。

何とか脱出できないかと思考錯誤するものの、部屋には壁に埋め込まれているテレビしか存在せず、
食事やトイレなどの生理行動は全て誰かしらの監視の元行わされていた為に、
ドラマとかでよく見る「針金をひそかに持ち込んでうんたら」みたいな事は出来なかった。
というかあのセキュリティを針金ごときで解決できるわけがない。
部屋に戻るたびに金属探知機だの身体検査だのされると言うのに。
どんだけ脱出するのを不可能にしたいんだよ。

何にせよ、学園都市相手にプリズン・ブレイクをかますのは不可能だった。

そうこうしているうちに、情報も得られないまま地上では話が進む。
９９８１号が何者かに拉致された言う話を聞き、どういうことだと布束は思う。
実験を阻止するため？はたまた別の目的があった？その辺はよくわからないようだった。

しかし、不測の事態が発生したからか、実験は一時中断となったらしい。
そのまま中止にならないかとは思うが、それはないだろう。
何にせよ、妹達の１人が拉致される事で実験が中断、と言うのは何とも複雑だ、と布束は思うのだった。

・・・

明くる日の昼の事である。
この時間は食事の時間だったはずなのだが、急遽研究所に呼ばれ

ることになった。
ついに終わりの時が来たか、と思い諦念しながら連れて行かれる。
たどり着いた実験場には研究者達がいた。
成程、自分は実験が中断された責任を取ると言う処分を受けた後は実験材料として使われるのか。
外道な研究者の末路としては上等だろう。と、布束砥信は無感情に思った。

実験の代表者と思われる白髪の男は、ニコニコと穏やかな笑みを浮かべている。
『自分だけの現実』と『心』の関連を調べるそうだ。
「その実験の被検体として選ばれたと言う訳だ」
「ｗｅｌｌ、覚悟は既にできてるわ。するならさっさとして」
「良いだろう、君に『力』を与えようか」

――狂気を目に宿したその男は、『ペルソナ』を布束砥信に植え付けた。

どうやってとか、何故ペルソナを知っているとか、どんな背景があったかはわからない。

しかし気がつけば、布束は心の仮面を植え付けられていた。
そして訳がわからないままに再び部屋へと放り込まれる。

チクリと痛む心と共に。

・・・

実験が進むうちに『自分だけの現実』が変質しているのを感じた。

心に何か別のものが存在している。
そしてそれは虎視眈々と布束の主導権を奪おうとしている。

しかし、どうやらその『力』を行使するには特定の状況下でないと出来ないらしい。
まず、『召喚器』が無いと何もできない。
次に、実験場で何かの装置を作動させ、その実験場内に居ないと『召喚器』を使っても何も起きないようだった。

どうやってその状況を作りだしているのかは知らないが、その実験場で『力』を発動させられ続けた。

『力』を使うたびに自分の中が侵されて行っている、そんな奇妙な感覚に陥る。
何にせよ、五体満足で生きられているのだ。諦めるにはまだ早い。
布束砥信は絶望的な状況の中、必死になって召喚器をこめかみにつきつけ、ペルソナを出し続けた。

・・・

いつものように頭に電極をさして、いつものように実験場でペル

ソナを発動させていた。
心は既に限界に近かった。頭痛が酷く、布束の顔は死人のように血の気が引いている。
いつもはこのようになる直前で終わるのだが、今日は引き続き実験が行われた。
いつもより酷い頭痛に耐え、ひたすら力を出し続ける。
実験は終わらない。
力を出す。
実験は終わらない。
頭が痛い。
実験は終わらない。
力を出す。
実験は終わらない。
心が痛い。
実験は、終わらない――
「あぁあぁぁぁぁぁぁぁあ！！！！」

そして布束砥信は、初めての『暴走』を迎えた。

布束の背後に居た『ペルソナ』は、布束から『支配権』を奪おうと布束に手を伸ばす。

布束はそうはさせまいと心を御そうとして頭を抱える。

布束の必死の抵抗を前に、『ペルソナ』は更に『暴走』した。

そんな布束の様子をガラス越しに見ている実験の代表者は、嗤っていた。

『心』の可能性に。『力』の強大さに。嗤っていた。

しかし、これ以上暴走されてはたまらないのだろう。『制御剤』の投薬をさせ、布束の『暴走』を鎮圧した。

・・・

布束砥信が目を覚ますと、知らない天井だった。医務室か何かだろう。

布束を看ていたと思われる研究員に、何が起きたのかと言う事を聞くと、どうやら布束のペルソナが暴走したらしい、と言う事がわかった。

どうやって鎮圧したのだろうと疑問を浮かべていたら、それを察したのか制御剤がある、と言う事を教えてもらった。

そんなものがあるのか、と感心しながら、布束はいつも閉じ込められていた部屋へと連れて行かれる

まだ目覚めたばかりだったが、まだ眠たかったので再び眠りについた。

・・・

目を覚ますと辺りは暗かった。どうやら消灯時間は過ぎているのだろう。

とりあえずもう眠くはないが酷く喉が渇いている。

暗くて何も見えないが、何とは無しに飲み物は無いかと視線を泳がせていたら、突如として壁に埋め込まれていたテレビから映像が流れだした。

今まではいくらテレビをいじっても電気が通ってなかったらしく何も映らなかったのだが、どういうことだろうとその映像を眺める事にする。

テレビには誰かが映っている。

何となく見覚えのある人影だったが、その人影は酷く苦しげだ。

はっきり誰かとはわからないが、余りに苦しそうだったので思わずテレビに触れた。

すると、テレビの中にずるりと手が潜って行った。

吃驚してすぐに手を戻してしまう。

人影の映っていたテレビは、それを境に消えてしまった。

一体何だったのか、と首をかしげつつ、もう一度手を伸ばすと、手は再びテレビの中に入ろうとする。

今まではそんなこと無かったのに、どういうことだろうと考える。

思い当たることは一つしかなかった。

『ペルソナ』だ。

ならばテレビの中に入った先には確実にこの『力』と関係するものが存在するはず。

自分は今囚われの身だ。助けも無いだろう。ならば自分で動くしかない。
だが手元には召喚器も、暴走した時にそれを抑えたと言う制御剤も無い。
ならば何としてでもそれらを手に入れるしかない。
どうやって言い訳を考えようか、そればかりを考えて朝を迎えた。

・・・

いつものように実験を終えると、絶対能力者進化実験が半永久凍結なされたと言われた。
はっきり言っておかしい。本当に実験をする気があるのだろうか？
そんな簡単にあきらめるとは。いや、諦めてくれることに越したことはないのだけれど。

ここまで来ると別の目的の為に妹達を生み出したのではと勘繰ってしまうほどだ。
とはいえ実験の責任は全て自分に回って来るのだろうなあ、とここまで完璧に拘束したことに対する感想を抱いた。

だが、この完璧な包囲網にほころびがある。
もちろんテレビの事だ。

布束砥信は召喚器と制御剤をもたせてくれないか画策しようとしていたのだが、それはあっさりと覆された。
何と研究所側から召喚器と制御剤を渡されたのだ。
制御剤は合計で８錠。召喚器も、偽物ではなくいつも使っていた召喚器だった。
もし部屋に居る時何かあったらそれを飲め、と言われた。

どうみても怪しすぎるのだが、どうせ使いつぶされて死ぬのなら、虎穴に入ってやろうじゃないか。

――布束はその日の夜、失踪を果たした。

・・・

テレビの中へと降りたった布束砥信は、ある確信を得た。
「この空間内なら、ペルソナが出せる」と言う事だ。
試しに出そうと思ったが、暴走されてはかなわないので何かあった時自衛の手段で出す飲みにしようと決めたのだが。

目の前には異形が数体うごめいていた。

どうみても敵意しか感じ取れない目の前の化け物を見て、布束は溜息をつきながら召喚器をこめかみにつきつけ、引き鉄を引く。

結果から言うと、召喚器も制御剤も本物であった。
何だかこのテレビの中に入る事すら予定調和だったのではと勘繰ってしまう。
あの狂った研究者どもだ、それくらいやってもおかしくはない。

何にせよ、布束以外にペルソナを扱える人間が居ないのならば、追手はこないだろう。

その点だけは安心できる。
しかし、制御剤の数が心許ない。
・・・
やはり、制御剤の数が少ないんです。
そう感じたのは数えるのも億劫に成程シャドウを殲滅した後だった。
どうやらこの空間だと、布束の中に居る者は更に暴走しやすい状態らしい。
御蔭さまで今制御剤を飲んだので、残りはあとひとつになってしまった。
これは拙いと思うものの、シャドウは待ってはくれないので、しばらくの間は逃げの一手に集中する事にした。
・・・
走って、走って、走り続ける。
そして、一見湖に見えるのだが、その水は海水で周りも砂浜という奇妙な場所へたどり着いた。
また、その湖（？）の中心には小舟がプカプカと浮かんでいた。
誰かいるのか？と布束はその船に向けて声をあげたところ、人の姿が見て取れた。
その人間は小舟から飛び立つと、どうみても人間の跳躍とは思えないほど、というかほぼ飛行と言っても良いだろう。
何にせよその人間は、布束のすぐ近くにまで飛んできた。
しかし、目の前でその人間を見た瞬間、ある事を感じ取ってしま

う。

これは、人間ではない。

人間改め人間では無い何かは、布束を見るとニヤッと笑うと、足を地面に踏み抜く。

瞬間、大量の砂が舞い上がり、辺りの視界を埋め尽くした。

何か来る、と布束は反射的にガルーラを唱え砂を払った。

しかし、目の前にはすでにその非人間の姿は無かった。

どこにいるのか辺りを見渡しても姿は見られない。

しかし、最初の跳躍を思い出し、すぐに上を向いた。

そこには巨大な太陽の様な、おそらくプラズマだろう。それを掲げている姿が見て取れた。

なりふり構わずペルソナを発動させる。しかし、それだけでは足らない。

もっと力を。

もっと風を。

もっと、もっと、もっともっともっと――――

瞬間、ペルソナは再び『暴走』した。

・・・

「いやあ、久々に人間と巡り合えて、ちょっと遊びたいなあとか思って調子にのっちまったんだ。すまん」

影は布束砥信の肩を叩きながら、笑って謝る。
しかし当の布束からしたらたまってものでは無い。
遊びでペルソナを暴走させられたこっちの身にもなってほしい。
しかもおかげで数少ない制御剤が底を尽きてしまった。

「まあ、無くなったもんは仕方ないさ。なんなら俺が匿ってやってもいいぜ？」

と、影は魅力的な提案をして来た。
確かに、影の力は先ほど十分味わった。しかし、信用しても良いのか迷う。
だが既に命を一度諦めているのだ。それなら世話になられてやろうじゃないか。

布束は影の提案を受け入れると、影はオーケストラの指揮をとるように腕を動かした。
すると海の中から建物が現れた。どういう原理でそんなことに、なんて思うが、
影が言うにはテレビの中にそんな理屈は要らない、だそうだ。
それならこっちの好きなように作ってもらおうじゃないか。

布束は、影に本格的な忍者屋敷の設計を頼んだ。忍者屋敷なのは布束の趣味らしい。

・・・

「……とまあそんなわけで、上条くんの影から貴方達の話を聞いた

から、
そのうち屋敷まで来るだろうと思って待ってたのよね」
布束砥信は、一方通行が持ってきた食料のうちの一つ（カロリーメイト・チョコ味）をもさもさと食べながら話を締めくくった。
「……成程なァ、やっぱり学園都市の中で既に『ペルソナ』に関しての研究は行われていたってわけか」
一方通行は、布束の話を聞いて『人工的にペルソナを扱える人種』がまだいるのだろうな、とあたりをつけた。
「しかも下手したらこのテレビの中まで調べられているかもしれません。
と、ミサカは学園都市の異常さを改めて思い知ります」
９９８２号は、学園都市の異常性について再認識させられた。
「……こんなん、絶対おかしいぞ」
上条当麻は、どこかの魔法少女みたいなことを言う。
「本当、狂ってるわね……」
御坂美琴は、９９８２号と上条の言葉に同意する。クマは話についていけず、寝ていた。
「ｓｏ、私は貴方達の力を貸してほしいのよ。
ｐｒｏｂａｂｌｙ、テレビの事もこの街は知っているはずだから」

「あァ、なンの力も無い奴がテレビの中に放りこまれたら間違いなく死ぬ。
お前が力を貸してほしいってンなら喜んで手伝う」

まァ、既に2人やられちまったンだけどなァ……と、一方通行は自嘲気味に言い放った。
その言葉を聞いて布束は眉をひそめた。

「ひょっとして、夜中にテレビに映っていた映像は……」

「……その映像、見てたのね？……あれは、妹達の一人よ」

「おそらく、９９８１号と１９０９０号のどちらかの映像を見たんだと思います。
と、ミサカは推測します。ちなみに、ミサカ達は１９０９０号の方だけ見ました……」

御坂と９９８２号の言葉を聞いて、布束は静かに涙を流した。

「そう……あの子が……あの子たちが……」

妹達を守ろうとして来て、誰一人守れなかった。
挙句、１９０９０号も死んでしまった。
これ以上学園都市の魔の手が妹達へ向かわないようにしなければ。
布束砥信は決意を新たにし、仮称特別捜査隊へと加わった。

・・・

「仮称特別捜査隊ってどうなの？」

「ゲコ隊がいいなあって思ってるんだけど」

「別に名前なンざどォでもいいだろ」

「でも何とか隊って名前をつけるのは男のロマンだと思うんだ」

「ミサカも別に何でもいいのですが、ゲコ隊はねーでしょう。

と、ミサカはお姉さまのセンスを真っ向から否定します」

## そのさんじゅういち　ういんどかったー！なんちって

平日である。

夏休みも終わり、平日の日中に外をフラフラする気にはならない一方通行は、

アンチスキル・ジャッジメント共用トレーニングジムで筋トレをしていた。

９９８２号も特にする事がないようでそれについて行って、一方通行のトレーニングぼけーっと眺めている。

こうやって一方通行が真面目にトレーニングしているのを見るのは、９９８２号にとって初めてのことだった。

確かに初めて一方通行に会った時よりも線が太くなっている気がする。

何よりどんなに息切れをし、どんなに汗を流そうとも淡々とトレーニングをこなす一方通行に思わずドキドキしてしまった。

と言っても、一方通行は黄泉川愛穂にボコボコにされるのが嫌だから必死こいて鍛えているのだが。

どうやら一通りトレーニングが終わったようで、一方通行は入念にストレッチをしている。

９９８２号はそれをみて、何となく「今この白いのと肉弾戦をしたらどっちが強いのだろう」と言う疑問を抱き、心の赴くままに手合わせを申し込んでしまった。

「筋トレで疲れた相手になんてこと言うんだ」と９９８２号はすぐさま訂正しようとするが、一方通行はまさかの乗り気。

それどころかかかってこいよ、と人差し指をちょいちょいして挑発してきた。

一応、９９８２号は軍用クローンと言う事である程度の近接格闘術も『学習装置』にてインプットされている。
そんな相手に疲れた体で挑む（と言っても喧嘩売ったのはこちらだが）とは何と愚かな。
９９８２号は軽くぶっ飛ばしてやると言う心持ちで手合わせに臨んだ。

・・・

ふたを開いて見てみると、９９８２号は一方通行に良いようにあしらわれていた。
９９８２号は流れるようなコンビネーションで打撃技をくりだすのだが、それの事ごとくを受け流されるのだ。
それどころか、その受け流した力をそのまま流用し、９９８２号へと跳ね返って行く。
ベクトル操作したんじゃね？とか思うものの、この技術はどう見ても合気のそれだった。
どうやら、相手の力を利用すると言う合気道が一方通行の性に会っていたらしい。
だがそれでも、まともにトレーニングを始めてまだ一月もたっていないと言うのに、随分と綺麗な動きである。

何だかあっさり自身の近接格闘術を破られて９９８２号は納得のいかない顔をした。
そんな９９８２号に対して、一方通行は軽く汗をぬぐいながら告げる。

「頭ン中に『戦い方』がインプットされてても、それを扱う『身体』が出来てなきゃ意味ねェだろォが……

それに、このくらい出来なきゃ……一方的にぼこられるンだよ……
『一方通行』の名を冠するこの俺に対して暴力の一方通行を行うあの女によォ……」

どんよりとした雰囲気でボソボソと呟いた。
よっぽど酷い訓練（リンチ）なのだろう。思わず合掌した。

「成程……一方通行の能力だけでも十分かもしれませんが……
合気の動きと併用することで更に効率のいい能力の運用が見込めそうですしね。
と、ミサカは上から目線で褒め称えます」

「そこまで考えてなかったけどなァ……だが、『体の動かし方』を学んだのはデケェと思ってる」

「だが……弱点が一つだけあると言ったらどうする……？」

９９８２号のしたり顔に一方通行は眉をひそめ、尋ねる。

「……どォいうことだ？」

「ふん、知れた事。相手の攻撃を利用する『合気道』……。
ならばこちらから仕掛けなければいい」

さあ、かかってこい！と９９８２号は床に横になった。

「……」

一方通行は、道端に落ちてる犬の糞を見るかのような目線を９９８２号に落とし、足蹴にする。

９９８２号は痛い痛いゴメンゴメンと必死で謝っていた。

・・・

上条当麻は今現在補修を受けている。

本来今日は短縮授業で昼には終わるはずだったのだが、上条は夏休みの課題を一つもしていないのだ。

故の補修である。

そしてその補修には上条・土御門元春・青髪ピアスの３人はもちろん受けている。

まさに３馬鹿（デルタフォース）にふさわしいと言えよう。

それどころかクラスの３分の２が補修を受けてる有様だ。

皆一様に小萌先生が好きだからだ！と言いながら補修を受けてるのだが、上条にはそれが信じられない。

小萌先生人知れず泣いてるんじゃないのかと思ってしまうほどだ。

と言っても上条自身も補修を受けているので何も言えない。

その３馬鹿を含めた生徒たちは皆、席に座ってぼけーっと小萌先生の講義を聞いている。

上条と土御門は自分の席に座っているのだが、青ピだけは何故かクラスメートたる吹寄制理の席に座っている。

何となくそれだけで青ピの変態度がわかってしまう気がする。心なしか青ピの息もハァハァしている気がした。

青ピが吹寄の席に座っている事で、上から見ると３人は丁度正三角形の頂点に位置していると言うのは余談である。

まさに馬鹿のバミューダトライアングル。

そのトライアングルの一角、上条当麻は思考の渦にのまれている。

もちろん授業内容ではない。テレビについてだ。
何となくついて行ったら何やら学園都市の暗部なんてものを知ってしまった。
知らなきゃ大食いシスターを匿うただの高校生として過ごせたのだろうか。
いや、変なシスターを部屋に置いてる時点でただの、という評価は正しくないが。

だがしかし、もう知ってしまった。
自分がへらへらして過ごしている間に、学園都市によって使い潰される人がいると言う事を。

だがしかし、もう知ってしまった。
自分がへらへらして過ごしている間に、上条当麻によって使い潰される心があると言う事を。

テレビの中ではいい思い出があるとは言い難い。
とはいえ、自分の心と真に向き合う機会を与えてくれたという点では感謝している。

だがしかしテレビの中での経験を考えると、いずれ自分の影と戦う事になるかもしれない。
確かに、今の自分には、ペルソナを扱う『力』を得られた。
それでもそれを扱う上条自身は、戦闘においてはまだまだ素人だ。
今日も鍛えてもらおう、そう思った瞬間。

「せんせー！カミやんが小萌せんせーの話を聞いてなさそうでーす！！

これは由々しき事態やでえ～！」

あおピが　かみじょうを　こくはつした！

「むう……」

こもえせんせいは　いかっている！

「先生の授業、つまらないですか……？」

こもえせんせいの　なきごえ（泣き声）　こうげき！

「す、すいませんでしたーっ！！」

かみじょうの　りょうしんが　ゆさぶられた！

ちなみに　つちみかどは　ねむっていた！（サングラスで　めもとが　みえない！）

クラスメートたちの　フルボッコ　こうげき！

こうかは　ばつぐんだ！

その日、小萌先生の小さな泣き声と、上条当麻の断末魔が響き渡ったという。

・・・

御坂美琴は溜息をついていた。

それもそのはず。この間上条当麻との関係を追及された際、劇的な逃走劇を繰り広げたために常盤台の女生徒達は更に盛り上がり、意地でも御坂と上条の関係を明らかにしようと躍起になっているの

だ。
故に常盤台中学の敷地内に居ると誰もかれもが「御坂様！あの殿方とはうんぬんかんぬん」と話しかけてくる。
昼休みはもちろん、授業と授業の合間や放課後にまで追手は迫って来る。
ちなみに、白井黒子も今回ばかりは御坂の敵だ。
「あんなウニ頭知らない、愛してるのは黒子だけよ」という言葉を聞くまで白井は敵で有り続けると宣言していた。
御坂はその言葉に対して、「だったらあんたは生涯敵よ」と言われて白井は灰と化した。

そして今、校舎の屋上で一人、溜息をついている。
もそもそと菓子パンを食べるその姿はさながら小動物のようだ。
ちなみにその隣にはだれも居ない。
確かに人望はあるのだが、高嶺の花と言うべきか、能力者のピラミッドの頂点に位置すると言うか、隣にならび立ってくれる人間がいない。

よく言えば孤高、悪く言えばぼっちだった。

まともな付き合いがあるのは黒子と捜査隊一同位だなあと思う。

一応御坂は、白井から派生して行った友人は居るのだが、あくまで白井という緩衝材が居たから仲良くなれたと言える。
そういう意味では自然と仲良くなれたのは白井と捜査隊一同しかいない、と言う訳だ。

「どっかに友達おちてないかなあ……」

何とも言えない不思議な現象を、独り言葉にする御坂であった。

・・・

その少女は街をさまよっていた。

行く当ても無く、知る人も無く。

霧ヶ丘の制服を着たその少女は。

ただただ陽炎の街を歩き続ける。

――人はその少女を『正体不明（カウンターストップ）』と呼んだ。

・・・

インデックスは街中をうろついていた。

上条当麻が学校に行っていて、やることも無いので仕方がない。

一方通行は現在トレーニングに励んでいるのだが、そんなことは知る由も無い。

そんなわけで愛猫・スフィンクスを胸に抱き、散歩に勤しんでいる、というわけだ。

「暇なんだよ……」

「にゃあ」

インデックスはスフィンクスに話しかけるように独りごちる。
スフィンクスはあくびをするように返事（？）をした。正直暑いので放して下さい、と。
そう。インデックスは常に全身を覆う白い修道服。暑いに決まってる。
これが黒かったら救いようのないほど暑い思いをするだろう。

そんな白いインデックスは、フラフラと公園にたどり着いた。
どうせ涼むなら図書館にでも行けばいいのだが、スフィンクスがいるのでそれは叶わない。
仕方がないので木の影で涼む事にした。

しかし、その前に自販機を発見してしまった。
一応上条から「昼飯＋足らなかった時の飯代１０００円」を受け取っている。

昼飯は既に食べた。少々足らなかったけど。

後は１０００円。如何にこの１０００円でおなかいっぱいになるか、そればかり考えていたのだが、暑い。喉乾いた。目の前には自販機。

吸い寄せられるように自販機の元へ行く。
が、しかし自販機がお札を認識してくれない。
何度入れてもゲロゲロと野口さんを吐きだす。

成程、これは試練だ。
この炎天下の中飲み物を買うまでその暑さに耐えきれるかどうかの。

それなら耐えきった上で飲み物もｇｅｔしてやろう。
インデックスが腕まくりをしてくしゃくしゃになった野口さんを再び自販機にいれようとしたが、自販機は活動拒否をする。
そんな自販機に嫌気がさしたのかインデックスは頬を膨らませ無機物相手に説教をかました。

「あのー、大丈夫ですか……？」

その言葉にインデックスはパッと振り向く。
そこには学生服を着た気弱そうな少女が居た。

「だれ？」

おずおずと尋ねるその少女に、インデックスは質問する。

「えっと、風斬氷華ていいます」

「そうなんだ、わたしはインデックスっていうんだよ！
それでね、この機械の飲み物が欲しいのに、この機械がいじわるするんだよ！！」

「えっと……この自販機はちょっと古いみたいだから……
こうやって、お札をピーンと伸ばした方がいいよ」

風斬氷華と名乗ったその少女はインデックスから野口さんを受け取り、
野口さんを二つに折りたたみ自販機に通した。
するとあっさりと野口さんを受け入れ、ジュースの模型の下にあるボタンが赤く光り自己主張し始めた。

「ひょうかすごいんだよ！一発でこの機械が言う事聞いた！」

キャイキャイと喜ぶインデックスを見て風斬もクスリと微笑んだ。

これが真っ白な修道女と、正体不明の少女の出会いだった。

## そのさんじゅういち　ういんどかったー！なんちって（後書き）

風斬さん登場しました。原作と比べ時系列がおかしいけどやっぱり御都合主義。

## そのさんじゅうに　かずおおいきはら（前書き）

いろいろ動きだしたかな？

## そのさんじゅうに　かずおおいきはら

午後１２時。

９９８２号は一方通行と軽く手合わせしただけだが、一方通行に関しては既におよそ3時間みっちり筋トレをしている。

一方通行は、基本的には1日筋トレ2日合気道の型を学んでいる。『超回復』と言う科学的理論に基づいて、だ。

だと言うのに黄泉川愛穂は「根性出すじゃん」とか言ってエブリデイヤンライ筋・ト・レ♪を強要して来る。

流石にそれは非効率だろ、と抗議をしたところボコボコにされた。曰く、「自分の限界を自分で決めないように、限界を越えて自身を追い込むじゃん！！」と真顔で言われた。

成程。

学園都市の能力者は、簡単に言えば『自分だけの現実』、すなわち『思い込みや妄想』の強さで能力の強度も変動する。

そう考えると、こういったトレーニングで『自身の限界』はまだまだこんなものではないと『思い込む』事で能力の強度が上がるのかもしれない。

と言っても飽くまで予測にすぎないが。

とはいえ、『学園都市第一位・一方通行』に対してそれを言っても仕方がないだろう。

能力開発に関しては、自身が色々された分だけそこいらの教師よりも詳しい自信がある。

どれだけ能力開発に時間を費やしたのだろうか。一方通行の半生は『一方通行』無しには語れまい。

と言うかそもそもトレーニングをしているのは純粋に身体を鍛えるためだ。

ならば科学的に効果が見られるトレーニングをした方がいい。

そんなわけで一見黄泉川に従っているように見せかけて黄泉川が居る時は合気道を学び、

居ない時に筋トレｏｒ合気道をすることで黄泉川の目を欺き続けている。

ばれたら多分ボコボコにされるだろう。しかしいつもボコボコにされてるので、そンなン怖くなンかねーし、と一方通行は語る。

そして一方通行と９９８２号はなんやかんやでトレーニングを終え、いつものレストランへと向かっていた。

「あ」

「あン？」

９９８２号が何かに気づいたように突然立ち止まる。

本当に唐突で一方通行も思わず足を止め、疑問を顔に浮かべた。

「どォした？」

「いやさ、上位個体が暇だっつって研究所から抜け出して迷子になったみたいです。

と、ミサカは何やってんだあのロリと愚痴ります」

「あァ……」

本当に何をしてるンだ。自分の立場をわかっているのだろうか。

一方通行は無表情相槌を打ちつつ内心舌打ちをする。

「探しに行きましょうか。と、ミサカは上位個体に周りに何があるかとそこから動くなと伝えておきます」

この街で一人さまようのは危険だ。一般人なら裏路地に行かない限りそうでもないが、打ち止めは違う。

機密性の高い実験の要だったのだから、変な研究員に狙われてもおかしくはない。

一方通行はめんどくせェと頭を掻きつつ、2人は打ち止めを捜索に行くのだった。

・・・

「はい？学芸都市？」

御坂美琴は現在職員室に居る。別に悪さを働いたとかそんなわけではない。

なにやら御坂と白井黒子に連絡事項があるらしく、2人でのこのことやってきたわけだ。

「あぁ。何か広域社会見学として複数の学校から何人かアメリカの学芸都市へ行ってもらうらしいんだが……

うちからお前と白井が抽選で選ばれたってわけだ」

「それで、いつから学芸都市へと向かいますの？」

「あ？聞いて驚け、明日だってよ」

「「はぁ？」」

いくらなんでも急すぎる。思わず聞き返したほどだ。

２人は驚きのあまり多くの言葉を口に出すことは出来なかった。

「いやさ、こっちもあんまり急でビビったんだけどな。

まあ夏休みが１週間伸びたと思って遊んでこいよ」

教師とは思えない発言が飛び出してきた。一応社会見学という名目なのだから遊び呆けるわけにはいくまいて。

何にせよ決定事項で覆せないとのことなので、御坂は渋々頷いて職員室を後にした。

「お姉さま……お姉さまとのバカンス……うふ、うふへへ……」

白井は何やらだらしない顔でぶつぶつ言っている。御坂は何言ってるのか大体わかったので何も聞かないことにした。

「おや」

「んん？」

すると２人の携帯にメールが受信された。中身は「初春と私は明日から１週間アメリカいきまーす！」というお知らせだった。

差し出し人は御坂と白井の共通の友人たる佐天涙子。どうやらその友人の初春飾利も一緒らしい。

「これは何とも……」

「すごい偶然ね……。まあ黒子と2人はちょっとあれだしよかったわあ」

「ひ、ひどいですの、お姉さま！！」

「常盤台の寮なら、管理人が最強だからある程度安心（と言っても油断ならないが）出来たけど、
それが居ない状況だとどうなることやら……」

「ううっ」

白井の今まで犯してきた罪状は数多……。（ナレーション：立木文彦）

覗き！猥褻行為！盗み（下着）！脅迫（猥褻行為の強要）！（ナレーション：立木文彦）

罪状の一部を明らかにしたが、これらは全て御坂美琴に対して白井黒子が行った罪の数々である！（ナレーション：立木文彦）

己が罪に自覚があるのか！白井、反論できず！（ナレーション：立木文彦）

純然たる事実を前に！！白井、反論できず！！（ナレーション：立木文彦）

閑話休題。

それにしても、1週間もこの地を離れるのは痛い。おそらくその間にもテレビの事件は進んで行くことだろう。

何もなければ良いのだが、そう言う訳にもいかないだろう。

「……（まぁ、一方通行達が何とかするか）」

一方通行達なら大丈夫だろう。

それに、アメリカなら『学園都市第三位』の肩書も無い。それこそ等身大の私（笑）を見てもらえるはずだ。

友達とか、出来ないかな、えへへ。

御坂の頭の中はテレビからリアル友達百人出来るかなへと移行して行くのだった。

・・・

「やっと終わった……」

小萌先生の涙、クラスメイトからの苛烈なる総攻撃。それらを乗り越え、上条当麻はようやく補修から解放された。

そんな上条の元に2人の紳士（へんたい）がやってきた。

「かっみやーん！べんきょー終わったし遊びにいこうぜい！」

「今日はボクもバイトも休みやし、ラウンドファイナルで遊びまくろうやないかー！」

土御門元春に青髪ピアスである。

普段ならこの誘いに乗って、最近流行ってる新型対戦３Ｄ格闘ゲーム「ストリートブレイギルティーブラッドｖｓサムライヴァンパイアオブマーベルファイターズ」に興じているところだ。

「ストリートブレイギルティーブラッドｖｓサムライヴァンパイアオブマーベルファイターズ」略してストファイ。

このストファイは、全ての格ゲーファンが一度は妄想する「他会社の格ゲーキャラ同士の対戦」を完璧に網羅しているものであり、格ゲー製作会社側も一度やってみたかったのか利益や利権関係全てを無視して、手を取り合って本気で製作に取り掛かった。

その心意気に学園都市が悪乗りして資金及び技術提供をしてしまったが為に、他格ゲーキャラ同士の火力差を考慮した完璧なゲームバランス、２Ｄだったキャラの美麗３Ｄ化、格ゲーにありがちな初心者狩りを避けるために完全会員制（登録費無料、年会費無料）でログインする際、指紋による生体認証にてログインし、オンライン対戦を重ねる事でランクアップを果たし（店内対戦ではランクアップ無し）、対戦をする際は基本的には（設定変更可）同ランクのものとしか戦えないという初心者に対するフォロー。

もちろん最初は初心者と上級者が同列になるため荒れるかもしれないが、しばらく稼働したらそれも減ることだろう。

更には対戦相手を決める前に使うキャラを選択しておき、あらかじめ「このキャラと戦いたい」という設定を行っておく事で、指示したキャラを使う同ランクの対戦相手を選ぶことが出来る。

しかしそれでは自分にとって有利なキャラを選ぶことが出来るのでは？という意見もあるだろう。

そんなことが無いよう、そちらに関してもあらかじめ「『このキ

ャラと戦いたい』という設定をした相手とは対戦しない」設定をしておくことが出来るのだ。

そんなわけで総製作費３１０億という途方も無い値段で製作されたそれは全てにおいて完璧である。

プロゲーマー桜原小吾も「今世紀この格ゲーを超える格ゲーは出ない」とコメントしたことも相まって、学園都市に投入された試作品段階で爆発的な人気が出た。

それにより晴れて完成版を全国へと送りだすことが出来たのだ。

ちなみにこのアーケード版は結果として大成功で、来年春には家庭用に移植されるらしい。

上条も土御門も青ピも、このストファイに関してはかなりうるさい。

実はかなりの猛者であり、「殴りの上条」「投げの土御門」「変態の青ピ」という名前は、行きつけのゲーセン「ラウンドファイナル」においては結構名の知れたものである。

しかし、そんな上条も放課後はトレーニングをしなければ黄泉川愛穂にぶちのめされてしまう。してもぶちのめされるが。

そう言う事だからトレーニング休みの日以外でゲーセンに行ける事はないだろう。

上条は、結局泣く泣く２人の誘いを断り、学校を発つ。

・・・

「うー、まだかなーってミサカはミサカは待ち飽きたって叫んでみたり！」

「ひまひまー！早く来てよってミサカはミサカは抗議してみる！」

「えー？もう少ししたらつくから待て？一方通行居るんだから能力でひとっ飛びじゃないの？

ってミサカはミサカは疑問に思ってみたり！」

一見すると独り言を言っている不審な迷子にしか見えない少女、打ち止め（ラストオーダー）。

打ち止めはＭＮＷを用いて９９８２号と一方通行に迎えに来させようとしているのだが、如何せん打ち止めの説明が下手と言うか、何処に居るのか特定できていなかった。

それもそのはず、「ビルがいっぱいある！」じゃ誰もわかるまい。

何にせよ、いつまでも同じ場所で何もしないでいるのは暇すぎる。

打ち止めは見晴らしのいい場所に行くと９９８２号に伝え、再び歩き出すのだった。

・・・

「それでね！とうまったらひどいんだよ！」

「へえ、そんな人も居るんですねえ……」

インデックスは、先ほど公園で知り合った少女・風斬氷華に向かって愚痴を吐く。

風斬はそれをいやがるどころか、インデックスの話を穏やかな笑みを浮かべ聞いている。

たまに入れる相槌も、インデックスの事を考えたもので、普通の

人なら初対面の相手にいきなり愚痴を聞かされるのは嫌なものだと思われるが、風斬はそんな様子をおくびにも出さない。
本当に楽しそうにインデックスの話を聞き入っていた。

そんな2人は今現在、街中を歩いている。公園でヤシの実サイダーを買い、それを2人で分け合った後、互いにする事が無いようで、何となくぶらぶらしていた。

「そうだ！とうまにひょうかを紹介しなくちゃね！」

インデックスはごそごそと胸元を探り、携帯電話をとりだした。
しかし、電池は切れていた。充電の仕方もわからなかったので電池が切れて以来充電していないらしい。

真っ黒な液晶を眺め、適当にボタンをぽちぽちおすが、携帯はうんともすんとも言わない。
インデックスが軽く涙目になったところで、風斬が電池切れのせいだ、と言う事を説明した。

「じゃあ、とうまの家で待っていればいいんだよ！」

突然の提案に、風斬は戸惑う。流石にそれはあれだろう。と言うか「とうま」なる人物は話を聞く限りじゃ男だ。
だと言うのにいきなり家に上がり込むのはどうなんだ。かといって理由も無く断るのも失礼だ。
風斬はどう断ろうか、と考えていたのだが、そこに1人の人物が現れた。

「あれ？インデックス？……と、どちらさま？」

ツンツン頭の高校生。
インデックスの言う「とうま」なる人物であった。

・・・

「くそ！くそが！！畜生！！！どうして猟犬の奴らに狙われるんだ！！？」

白衣を着た男は必死で車のエンジンをかけようとする。
しかしかからない。必死になってかける。逃げなければ。殺される。
何度か鍵を右にひねるとようやくエンジンがかかった。
これで逃げられる！男は嬉々としてサイドブレーキを落とし、ギアを入れ、アクセルを踏み込んだ。ハンドルを握る手は震え、汗によって掌はベタベタになっている。

しかし、ようやく走りだした車の前に、一人の男が立ちはだかった。

「天井くーん、テメェは一体何しようとしてくれてんだあ？仕事増やすなっての」

その男は頬に刺青を入れ、必死に逃げようとする男と同様に白衣を着た研究者風であった。
そんな刺青の男を前に『天井』と呼ばれた男の嬉々とした顔は一転して、恐怖に歪ませる。
天井はギアを変えアクセルを更に踏み込む。そのまま轢き殺さんとばかりに。

しかし、加速する車の前に立ちはだかった刺青の男は、後1秒もしたら轢かれるだろうと言うのに全く気にした様子も無く、ただただだめんどくさそうに頭を掻いている。
瞬間、車のタイヤは何処からか狙撃されパンクし、車の軌道は一気にずれて、男の隣を通過した。
いきなり車の操作を乱されたために、それを制御しようと天井はハンドルを右へ左へ回すが、そんな天井を馬鹿にするかのように、ふらつく車体をものともせず、正確無比に残りのタイヤ3つが打ち抜かれた。
制御を完全に失い、道路沿いに敷かれている金網の柵へと車は突っ込んで行った。
天井はすぐに車を脱出して逃げようとするが、刺青の男はそんな天井へと近づく。

「おいおいおーい、天井くーん。テメェ、自分のしよーとした事わかってんだろうなー？」

「ひっ……！違う、違うんだ……！私は何もしていない！！」

「そーだな。確かに見た感じ『未遂』だなぁ。だが、放っておいたら何かするんだろ？
だったらぶち殺しとかないとな！汚物は消毒するに限るってもんだ」

この時天井からしたら目の前の男は死刑執行を担当する死神にしか見えなかっただろう。
こうなった時点で、天井の命はもう終わったも同然だった。しかし、天井は無様に抵抗する。
そんな天井を刺青の男は鼻で笑う。

「つーか何もしてないっていうけどよお。だったらこれ何だよ？」

刺青の男は白衣のポケットからＵＳＢメモリーを取りだした。

それを見て天井はぎくりとした顔をするが、すぐにその表情を消し、知らないふりをする。

そんな様子を見て刺青の男は表情も変えずに天井の太ももを拳銃で撃ち抜いた。

「ぐあああ！！！！」

天井は太ももを打ち抜かれた事でその場にしゃがみ込み、太ももを抱える。

刺青の男はそんな天井をニヤニヤしながら眺め、あまつさえその太ももを踏み抜いた。

あまりの痛みに天井は更に叫び声をあげるが、刺青の男は全く気にした様子では無い。

「なあ、『これの中身』も『誰がこれを作った』かも、『これを誰に使う』かも全部わかってんだぜ？」

「ぐうう……！！」

もはや痛みで天井は何も聞こえていない。既に天井の周りは包囲されて、逃げる事も出来ないだろう。

刺青の男はもう話すことも無いと、どこからか武装兵がやってきて、天井を連れて行った。

その兵士達の装備を見る限りでは、どうやらこの兵士達が車のタイヤを打ち抜いたようだった。

連れて行かれる天井の背を眺めつつ、刺青の男は誰かに連絡を取り始めた。

「おー、こちら猟犬部隊。天井亜雄の捕獲かんりょーしたぜえ。ったく、なんでたかだか研究者なんかの為にうちのクソどもを使わなきゃなんねーんだよマジで」

刺青の男はぶつぶつと電話の相手に文句を言う。どうやら本来今日は非番だったらしく、いきなり命令されたため渋々天井亜雄の捕獲に当たったようだ。

「いやいや……すまないね。彼が秘密裏に研究していた事を下手に誰かに知られたら面倒だからねえ。

この研究については木原一族ですら君と私しか知らなかったというのに……

全く、彼は何処から知ったのやら」

「まぁ、天井に関する資料を見る限りじゃ、研究者としては優秀らしいからなぁ。

あんだけ妹達に近い立ち位置で研究してんだ。気づいたっておかしくはねーだろうよ」

「くく、何にせよ、彼はもう「知ってしまった」。彼についてはこちらで処分しておくよ」

「へいへい。俺ぁもう帰って寝るからなぁ……。俺の休日、これ以上邪魔してくれんなよ」

「また何かあったら呼び出させてもらうがね」

「うるせえ俺は寝だしたら誰にも止められねーからな」

刺青の男は携帯を切り、近くに控えていた兵士にその携帯を投げ渡す。

「あの爺に目をつけられるたあ、天井君も運が無いねえ」

刺青の男は、黒いバンの後部座席に乗り込み、発進させるよう指示を出す。

木原数多。

その刺青の男は、猟犬部隊という暗部部隊の隊長であり、それと同時に研究者でもあった。

## そのさんじゅうに　かずおおいきはら（後書き）

あまいくん、あうとー。

## そのさんじゅうさん

一方通行と９９８２号は今現在、空中を飛びまわっていた。

打ち止めが迷子になったからだ。９９８２号がナビゲートし、一方通行が足役というわけだ。

しかし見つからない。と言うか「ビルがいっぱい」でわかるわけがない。

そんなわけで打ち止めが移動することを許容した。というかどっか行くの止められないし。

徒歩の打ち止めは研究所からそう離れた場所には行けないはず。２人はそう考え、第七学区を中心に捜索を続けていた。

一応、目立つのを避けるため光学迷彩の要領で２人の姿は見えないようになっているので安心だ。

「チッ……マジでめんどくせェ……」

「せっかく昼ごはんの時間だったのに……と、ミサカは上位個体に愚痴っ……

何？未だ食ってないなら後でレストラン連れてけ？張り倒す」

こうして打ち止めとのんきにＭＮＷを介して話が出来ているのが救いだろう。

少なくとも打ち止めの身に何かあるというわけではなさそうだ。

それでもさっさと見つけた方が良い。そんなわけでひたすら風を切り空中散歩を続けている。

そんな中、一方通行の携帯にメールが入った。御坂美琴からだ。

ひょっとして、たまたま打ち止めを見つけたけど、対応に困っているとかそんなのだろうか。
いや、それなら９９８２号にＭＮＷで伝わるはず。一体何の用だ？

『拝啓、御坂美琴です。残暑の厳しい今日この頃ですが、いかがお過ごしでしょうか？
私は夏バテもすること無く、元気に過ごしております。これも日々のトレーニングの成果と言う事でしょうか。
さて、本日はどうしても伝えたいことがありまして筆をとらせていただきました。
と言うのも、明日から一週間、アメリカに社会見学することになったのです。
テレビの事が気になるので、本当はあまり気乗りしないのですが、どうしても避けられないようなので、仕方なく、本当に仕方なく渡米いたします。
私がいない間捜査隊一同の無事を祈っております。敬具』

メールを見て、思わず携帯をへし折りそうになった。何だこのくどい文章は。

「……誰からですか？」

９９８２号はギリギリと携帯を握りしめる一方通行を見て、怪訝そうな表情を浮かべ尋ねた。
人がイライラしている時にあんなメールを送られたら誰だってキレる。
て言うか絶対アメリカ行くことに対して乗り気だろ。

「……明日から１週間、御坂の奴はアメリカでバカンスだとよ。
良い御身分だぜ全く……」

一方通行は、そのメールを無言で削除し、「楽しンでこい」という一文だけ返信した。
キレながらも返信はきっちりするあたり律義である。

「はぁ、そいつはうらやましい限りですね。
ミサカもそのうち世界各国に滞在するミサカ達の元に旅行行きたいです。
と、ミサカは願望を露わにします」

旅行。確かに学園都市の外に言った記憶は全くと言っていいほどない。
色々落ちついたら外を旅してまわるのも面白いかもしれない。
外に出る手続きが面倒……と言うか下手したら一方通行という能力の価値の高さから、外に出してもらえない可能性はあるが。

「……そのうちなァ」

「ありがとうございぶぶぶ！！」

せめて９９８２号の願望はかなえてやろう。
一方通行は正面から来る風の全てをちょっと強化して、それを９９８２号へと向けながら空を飛び続けた。

・・・

一方、打ち止めは。

「ミサカは助っ人さいきょーぐん！ミサカは助っ人さいきょーぐん！
きょーうもこの街かっぽするー！きょーうもこの街かっぽするー！

ミサカー、ミサカー、ミサカー、サンハイ！ミサカー、ミサカー、ミサカー！

ちょうのうりょーく！ちょうのうりょーく！たーのしーなー！」

打ち止めは何で知ってるんだという歌の替え唄を口ずさみ、何処から拾ってきたのか木の棒を振り回して歩いていた。

それだけなら非常にほほえましい光景なのだが、歩いてる場所がまさかの路地裏。

ロリコンが居たら間違いなくさらわれてしまうだろう。

というか「見晴らしのいい場所」に行くと宣言していたはずなのだが、すっかり忘れて替え唄を考えるのに夢中になっていた。

なんというＮＯＰＬＡＮ。

「前略！ミサカネットワーク上より！」

セイヤ！セイヤ！と打ち止めの路地うライブは佳境を迎えていた。

「きょうも管理者ぶってます、わざとー２００００号処罰するー♪」

何やら物騒な内容の替え唄だが、その声を聞いてどこからか数人の人間が遠巻きに打ち止めを眺めている。

７５％がスキルアウト風のメンツだが、その組み合わせは中々に個性的だ。

「何？あの子。大体、どっから来たのかな。にゃあ」

フワフワした金髪に真っ白な肌。それに透き通った海の様な青い瞳。

その少女はまさしく人形の様な風貌で、特徴的な語尾を持つ少女

だった。

「……ほぼ確実に、迷子か何かだろう」

その少女を肩に乗せる大男は、その体躯とごつい顔に似合わず陰鬱な口調で、変な替え歌を歌う打ち止めの事を評価した。

「ほら、新たな幼女が目の前にいるんだぜ……助けなくてどうするんだ？駒場さん」

「……浜面。お前とは一度じっくり話し合わねばならんと思っていた」

天然で金髪の少女とは違い、人工金髪なジャージを着たいかにも不良ですみたいな恰好をした男は、

大男の事を『駒場さん』と呼び、ニヤニヤとした笑みを浮かべながら駒場をからかう。

しかし駒場は、額に青筋を浮かべ、金髪ジャージ・浜面に対して背後から鬼がスタンドとして出てきそうな覇気を飛ばしている。

「はっは！今のは浜面が悪い！いいぞ駒場のリーダーやっちまえ！あ、でも迷子のロリはヤっちゃ駄目だぜ？」

「半蔵……お前もか」

浜面と駒場のやり取りを爆笑しながら聞いていたバンダナを巻いた少年・半蔵は軽薄な口調で、駒場に対する追撃の茶々を入れた。

基本的に浜面、半蔵の２人は駒場の事をネタにいじる機会が多いため、どちらかが駒場をいじると、ついついもう片方も一緒になって駒場のことをいじってしまう。

そんなわけで半蔵も駒場のターゲットへとなってしまい、しまったと言う顔をするが時すでに遅し。
駒場の掌は半蔵にも迫っていた。しかし、救いの女神（幼）は居た。

「むう……大体、先にあの迷子（？）を保護すべきじゃないの？にゃあ」

「……それも、そうだな。それなら舶来……あの子の歳に一番近そうなお前が話しかけてこい」

「わかった！！」

「「死ぬかと思った……」」

「舶来」と呼ばれた少女の話題転換により事なきを得た2人は安堵のため息をつく。
とてとてと、その金髪幼女は打ち止めの元へ話をかけに走って行った。

「おいつーめらーれて２００００号！あとはー処罰のタイミング！罪がーかぶーったどうしよう。どうにーかなーるさ、ごまかーしーてー！」

セイヤ！セイヤ！と歌の終りが見えたところで、金髪幼女は打ち止めに話をかける。

「にゃあー」

丁度いいタイミングの合いの手を入れた形で。

「え？何？ってミサカはミサカは丁度イイ合いの手を入れてくれた声の方を向いてみたり！」

「こんなところで、大体、何をしてるの？」

「え？んー……道に迷ってるかも！ってミサカはミサカは照れながら話してみたり！」

「そうなんだ！あっちに私の友達がいるからその人たちに、大体、案内してもらえばいいと思う。にゃあ」

「いいの？ありがとう！ってミサカはミサカは感謝の気持ちを露わにしてみたり！」

「じゃあ、行こ！」

「うん！」

幼女と幼女が交わるとき、物語は始まる……？

・・・

「んで、インデックスと風斬はわたくしの家に行こうとしたところでタイミング良く俺が現れたってわけか」

「そのとおりかも！」

「あ……でも、初対面の方にそんな迷惑は……」

上条当麻は現在、インデックスに、インデックスが出会った少女・風斬氷華の2人とわいわい雑談していた。
インデックスは風斬と遊びたいらしいが、上条は今からトレーニングに行かねばならない。
よっぽどの事情じゃない限り、黄泉川愛穂のトレーニングを休むことは許されないのだ。

インデックス達をジムに連れて行ったとしてもする事が無いだろうし、そもそもこの街の学生でないインデックスがアンチスキル・ジャッジメント共用トレーニングジムに行くのは自殺行為だろう。
間違いなく不法侵入で臭い飯エンドだ。
いや、学園都市なら臭くは無く、むしろ上条家よりも上等なものが食べられそうな気がする。
いや、駄目だ駄目だ。そんなことしてみろ、インデックスを狙う魔術師が襲撃に来るに違いない。
Ｋｏｏｌになれ、上条当麻。お前はいつも冷静沈着、頭脳明晰で口先一つでちょちょいのちょいだったじゃないか。

なんて思考が着実に脇道へ逸れて行ってるところでインデックスから声がかかる。

「とうま？どうしたの？」

「へ？いやいや、なんでもございませんことよ！？」

思考の渦にのまれていた上条は突然その思考を遮られた事で声を上ずらせながら返答する。

「やっぱり、迷惑ですよね……」

風斬はちょっとションボリとしていた。そんな庇護欲を掻きたてる風斬の表情を見た上条は、

「いやいやいやとんでもないです！むしろバッチ来いっていうか？！」

「ふぇ！？」

「とうま！またそうやって女の子に言い寄って！！」

「ああ！違う、これは違うんだ！！別に俺ん家来ても良いんだけど、俺この後用事があるから俺は居られないんだよ！」

「用事？また知らない女の子と遊ぶとかじゃないの？」

「違う違う、確かに相手の性別は女性だけどあれは違う」

「結局女の子だよ！とうまったら！！」

上条は、ジト目で上条を疑うインデックスに何とか弁解しようと言い訳を重ねるものの、墓穴っている。

「ええいトレーニングジムで体を鍛えてんだよ！！」

にっちもさっちもいかなくなり、上条は正直にこれからの予定を暴露した。

「体を……？」

何で、という疑問がインデックスの頭をよぎる。
しかし、聞いてはいけないものだ、とインデックスは何となく思った。

「……わかったんだよ、とうま。頑張ってね」

「へ？お、おう」

あまりにあっさりと引きさがったインデックスに拍子抜けをする上条。
しかし、簡単に納得してくれるのはありがたかった。

「まあ、することねーなら風斬と一緒に俺んちで遊んでたらいいさ。俺んちもなんにもねーけどな」

インデックスの事よろしくな、と上条は笑いながら右手を差し出した。
風斬は、おずおずとその右手を握り、握手をする。

「え、ええっと……よろしく、お願いします」

「おう！」

上条は手を上下にぶんぶんと振りまわした。
風斬は振りまわされる腕以上に、上条の右手に注目していた。

「……？」

何かが足りない。風斬は何となくそう思ったが、その考えは一瞬で霧散した。

「……（まあ、いいか）」

風斬は、インデックスに手をひかれて上条家へと向かう。

上条は、２人の背中を遠目に眺めていた。

・・・

天井亜雄は目を覚ました。起き上がろうとするものの、診察台の様な所で拘束されていた上、足から鈍痛がする。

それもそのはず。天井は木原数多に捕獲される際に太ももを打ち抜かれたのだから、痛くない方がおかしい。

とはいえ、その足には治療された後が見られた。

一体誰が？そんな考えが頭をよぎった瞬間、目の前にはニコニコと穏やかな笑みを浮かべた研究者が居た。

「……あなたは……！！」

「おや、私の事を知っているのかね？」

「知ってるも何も……」

研究者の間では、『その名』は有名も有名だった。

先進教育局・木原研究所所長。胤河製薬・特別顧問。鎚原病院・木原研究室教。Ｕ．Ｅ．Ｇ．Ｆ・特殊客員教授。特殊学問法人ＲＦＯ・会長。学園都・脳科学特別研究員。

その男の役職を軽く列挙したのがこれだ。しかもこれらは有名だった主な役職であり、まだまだ沢山の重役を担っている。

木原幻生。

『木原一族』という研究者達の中でも特に異端な存在の1人。特にこの木原幻生と言う男は、天井も馴染み深い存在である。

と言うのも、幻生は数ある研究の中でも『レベル6』に至る道を熱心に研究していたため、天井も絶対能力者進化実験を行うに当たって幻生の研究に関していくつか調べた事があるのだ。

しかし、幻生は暴走能力の法則解析用誘爆実験以降、行方をくらませていたはずだ。

それが今、目の前に居る。天井は驚かざるを得ないのもうなずけるものだ。

「さて、君には『ある場所』へと行ってもらう」

「は……？」

そうだ、私は猟犬に捕まってここに来たのではないか。どう考えても私を処分するためだろう。

天井は現状を打破する策を考えるが、これはどう見ても詰みの状態だった。

「頑張ってくれたまえ。運が良ければ助けてもらえるから」

「は？……！！！？」

天井の言葉を待たずして、幻生は天井を堕とした。

そして、残ったのは幻生に張り付いた薄っぺらな笑顔だけだった。

・・・

「とっても美味しいんだよ！ありがと、あくせられーた！」

「あ、あの……すみません、私にまで……」

「うめえうめえと、ミサカはソフトクリームをペロペロします」

何故か一方通行は、上条当麻の居候の白シスターとその友人と思われる巨乳、そして９９８２号にソフトクリームを奢っていた。

打ち止めはどうした？と言われたら、「いや、何か同年代の女の子達と一緒に遊んでる」らしい。

何にせよ９９８２号のＭＮＷを介してその無事は明らかなので、焦って能力を行使する必要もなくなったわけで、のんびりと打ち止めの元に歩いて行っていたのだが、その道中、インデックス達と出くわしたのだ。

ちょっと立ち話をしてその後別れるつもりが、インデックスの連れていた風斬氷華を見て少し疑問を抱いたため、少し一緒に行動することにした。

この違和感の正体を暴かなければ、インデックスが危ないかもしれない、そう考えたためだ。

危険が無いと判断したら打ち止めの元へ向かえばいい。

今現在、一方通行の優先順位は風斬＞打ち止めとなっていたのだった。

結果としてその判断は正しかった、と言えよう。

一方通行の予想していた結果とは違っていたのだが。

## そのさんじゅうさん（後書き）

新約禁書をようやく入手しました。
あと、本作の青ピの一人称が違ったので気付いたとこから修正かけてきます

## そのさんじゅうよん　おちたさきは（前書き）

書いてて一方通行が憎くなった

## そのさんじゅうよん　おちたさきは

こちら『ラウンドファイナル』。

第七学区の地下街に存在するゲームセンターだ。

ここには学園都市の技術を結集したゲーム達が集まっている。

その為学生達は暇つぶしをするならとりあえずここに来たら暇する事はないだろう。

インデックスが最初にこの建物を見た時、「中からすごく音が聞こえてくるんだよ！ここはなにかな！？」

と、インデックスの興味の赴くままに入店するのに一同は着いて行ったのだ。

そんなわけで。

「……こぉいうのは苦手なんだがなァ……」

ゲームセンターにやってきたはいいが、一方通行がこんな場所になじみあるわけも無く。

「ミサカは初めてなのだらけで目移りしますよ。と、ミサカは辺りを見渡しながらワクワクします」

９９８２号がゲーセンで遊んだ事があるわけもなく。

ゲーセン初心者な一同はキョロキョロと店内を見回していた。

「あくせたれーた！あれなに！？」

インデックスは何やら目を輝かせ大きな四角い筐体に指をさしている。
四角い筐体の両サイドには仕切るようにカーテンが下がっていて、そのカーテンには「激撮り笑顔さん」と書かれていた。どうやらプリクラらしい。

「ンあ？ああ、プリクラって奴だなァ。チッセェ写真が撮れる奴」

写真、と聞いてインデックスの目は更に輝きを増した。
多分撮りたいとか言い出すだろう。一方通行はそう考えポケットから財布を取り出そうとする。

「ホント！？じゃあひょうか、一緒にとろ！」

「へ？で、でもお金とか……」

「ンなこと気にすンな。俺が出す」

どォせ１００円とか２００円とか３００円だろォが。と言いながらチャリンチャリンとお金を投入して行く。
金の使い道を知らない一方通行は、基本的に何かをする際は一緒に居る人の分まで金を出すのだ。
このままだと体の良い財布になりそうである。

「え、ええっと……あ、ありがとうございます……」

インデックスに続き、風斬氷華も四角い筐体へと吸い込まれて行くが。

「ほら、あくせられーたも、クールビューティーも早く来るんだよ

！」

「あァ？」

「ミサカもですか？ていうかクールビューティて」

プリクラに興味がない一方通行はもちろん、何やらＭＮＷで交信してたのか、虚空を見つめてぼけーっとしていた９９８２号も少しばかり驚きを示した。

正直嫌なンですけど、という気持ちを目線に乗せるものの、インデックスは意に介さない。

「……私と一緒があれだったら、私出て行きますけど……」

風斬の申し訳なさそうにションボリする姿を見て、考えを変える。

「チッ、わかったよ……（この分だと風斬にはなンの害もなさそォだな……）」

ただ、観測する限りじゃ体の構造はちと常人とはかけ離れてるみてェだが。と心の中で付け加えつつ、９９８２号と共に筐体の中に入って行った。

『それでは、「はい、チーズ」で撮りますねーっ！皆笑顔でお願いねー！』

軽快な声をした機械音が、４人に笑顔を勧めてくる。

その声につられてインデックスは満面の笑みを、風斬は柔らかな微笑みを、９９８２号は口角を少しだけ上げ、一方通行はすごく嫌そうな顔だった。

『ぶぶー！笑顔じゃない人がこの中に1人居ます。お前やろ！！』

「あァ！？機械風情が口答えするんじゃねェよ！！」

どうやらこの機械、学園都市製らしく、人間の表情を解析して、目の動きや頬の動き、口元の動きなどで笑顔かそうでないかを判断するＡＩ付きであるようだ。

そして笑顔でない人間が筐体の中に居る場合、いつまでたってもプリクラは撮ってくれないという面白機能付きである。

『皆笑顔じゃないと撮りません。変顔は許しますけど』

「ンだよこいつ！！あれか！？学園都市上層部の差し金かァ！？」

機械に突っ込みを入れる一方通行だが、ここで天啓ひらめくっ……！まさに神の思し召しっ……！

「……まァいい、お前ら3人でプリクラ撮ってろォ」

一方通行はそそくさと筐体内から退場しようとするものの、

『させるか！！』

ウィーンガシャーンという機械音と共に両サイドからシャッターが現れ、完全に閉じ込められてしまった。

「わわっ！？閉じ込められちゃったんだよ！？」

「うおっすっげー。と、ミサカは学園都市の技術の無駄遣いに笑い

ます」

『この中に入った人間は一様に笑顔を浮かべて立ち去ると言う……さあ、その白い顔に浮かべて見よ。

己が内に眠る本来の笑みを……』

「なンだなンだよなンですかァ!?そンなに俺の笑顔がみたいですかァ!?

だったら見せてやるよォォォ!!!クキコクカカコキコカァァァ!!!!」

奇妙な叫び声と共に、凶悪な笑みを浮かべる一方通行。

ウィーンと一方通行の顔をスキャンし、少ししてからＡＩはこう言い放った。

『ブブー、そういう笑顔はダメでーす』

「ふっざけンなァァァ!!自転ぶつけンぞコラァ!!!」

コイツぶっ壊してやる、と叫びながら自転から力を借りようとする一方通行。

こんな閉鎖空間でそんなもんぶっぱされたらたまったものではないとインデックスと９９８２号はは一方通行を必死でたしなめようとする。

風斬はあわあわして顔を真っ赤にしていた。

「お前らどけ!!そいつ殺せねェ!!」

「あ、あくせられーた?落ちつくんだよ?そんなことしても迷える

子羊は救えないかも！（？）」

「そうですよ、ここでこの機械を殴ったところで、誰も幸せにはならないんですよ！

殴った後に残るのはこの機械、いやさこの店の請求書だけです！」

インデックスの良くわからない説得や、９９８２号の実にあり得る今後を説いた説得を以ってしても一方通行の怒りは収まらない。

ゲーセン内の騒音の上に筐体はシャッターで覆われて防音されているため、この筐体内で一方通行が切れている事を外の人間は誰も気づかない。

ここで止められなければ終わりだ！（ゲーセンが）と９９８２号が危機感を最大にまで募らせたその瞬間、

テンパりすぎてどうしていいのかわからず、緊張が頂点に達した風斬が行動に出た。

「一方通行さん、おちついてください！」

むぎゅ、と一方通行は、風斬の豊満な双子山に包まれた。

・・・

「おー！オムライスに旗が立ってる！ってミサカはミサカは感動してみたり！」

「グリーンピース。にゃあ」

「……舶来、好き嫌いは成長を妨げになる」

「駒場のリーダーはその子が成長しない方が良ごめんなさい」

「駒場さんは自分の欲望よりも子供の成長を優先する良い男なｎごめんなさい」

打ち止めを保護したスキルアウト一同＋幼女は、打ち止めが腹減ったと言うのでレストランに連れて来ていた。

場所は奇しくも一方通行達の行くいつものレストラン。

いつもの店員はスキルアウト風の3人に似合わないロリが2人と言うアンバランスさにリアクションに困ったり「あれ？この子いつもの人が連れてきてた子じゃね？」とか思ったりするものの、そこはやはりプロ（？）。

いつもの店員は、それらに関して表情には一切出さずに笑顔で席に案内した。まさに店員の鏡である。

「ところで、あなた達は誰？ってミサカはミサカは尋ねてみたり！あ、ミサカは打ち止めって言うんだよ！」

『打ち止め（ラストオーダー）』と、目の前の少女は名乗ったが、どう聞いても偽名にしか聞こえなかった。

一人称にミサカを使っている時点で打ち止めと名乗るのは間違ってるのではと一同は思うが、細かいことは気にしたら負けである。

「そうなんだ。私は、大体、フレメア＝セイヴェルンっていうんだよ」

打ち止めに続いて舶来―フレメア＝セイヴェルン―が自己紹介を行う。
実はスキルアウト3人衆もフレメアの本名を聞くのは初めてで、へえーそんな名前だったのかー、と言った顔をしていた。

「そういやこいつの名前ずっと聞いてなかったなあ。
駒場さんがずっと舶来舶来言うから何となくそれで定着してたわ。
あ、俺浜面仕上な。ヨロシク」

「まあ最初の出会いが出会いだったからなあ。自己紹介なくても自然と慣れてたもんな。
俺の事は半蔵って呼んでくれ」

「……駒場利徳だ」

「そうなの、じゃあ改めてよろしくね！ってミサカはミサカはお辞儀をしてみたり！
それで、どんな出会い方をしたの！？」

自己紹介を促した打ち止めはもはや名前への興味は失われ、どうやら半蔵の言った「出会い」と言うワードに反応したようだった。
打ち止めの興味津津な反応に気を良くした半蔵は、浜面と共に面白可笑しくフレメアと駒場利徳との慣れ染めを語ろうとするも、駒場がものすごい形相をして圧力をかけてきた。

しかし、半蔵は思う。

「スキルアウト」すなわち「無能力者」ひいては「無能」の烙印を押された自分達は、いつだって虐げられてきた。
いつだって能力者に、教師に、周囲の人間に蔑まされてきた。

それに同調するかのように、浜面仕上は考える。

自分達は奴らの「力」に屈したつもりはない。

そんなスキルアウトの一員でもある浜面が、半蔵が、たかだか１人の「圧力」に、頭を垂れてどうする？

それだけは許されない。

屈する事だけは許されない。

例え、それが命を代償とすることになっても。

――――己に残された、最後の矜持に誓って。

浜面は、

半蔵は、

自身の矜持にかけて、駒場利徳を『全力でからかう』事になる。

それが、『血を見る結末』になるとしても――――

「……駒場さんについて語るには、その出生から話さねばならない――――」

・・・

「……で、結局そのボウガンを持ってフレメアのいる小学校に侵入した変態を、
比叡山に住んでいた師匠が駒場さんに遺した最後の業で駒場さんが跡形も無く消し飛ばしたんだよな」

「いやあ、まさか駒場のリーダーが現代に残された最後の「陰魔陽術師」だとは思わなかったぜ。
通りでデケエ図体してると思った。「神格」に釣り合う「身体」を考えたらその体躯でもミジンコレベルだもんな」

大仰に腕を振り熱く語る浜面仕上。それに相槌を打つ半蔵。
打ち止めは、明らかに作り話だろ、と言う話を本気で信じたようだった。
なにやら特撮に出てくるヒーローを見るような憧れの目線を駒場利徳へと飛ばしている。

「すっげー！！ってミサカはミサカは目を輝かせてみたり！！
それで、駒場さんはその火芳大僧正の遺した陰陽魔法『エレメンタルソードブレイカーχ』を使えるというの！？」

「私もそんな話は、大体、初めて聞いた。すごい！にゃあ」

実を言うと『ボウガンを持ってフレメアのいる小学校に侵入した

変態』と『それを撃退した』と言うのはまごうこと無き事実である。
消し飛ばしたのではなく、殴り飛ばしたのだが。
フレメア＝セイヴェルンはその事実を知っているはずなのだが、何故か浜面と半蔵の語る勧善懲悪式正義之味方物語を本気で信じたらしく、打ち止めと同じく駒場に尊敬の気持ちを抱いていた。

「残念な事なんだけど、その戦いによってエネルギーを使いすぎた駒場のリーダーはもう力を行使することは出来ないんだよな……」

「「えー！！？」」

打ち止めはもちろん、フレメアもその話を聞いてショックを受けた。
何せ自分を守るために駒場は力を失ったようなものだ。ショックを受けて当然である。

「うう……ごめんね……大体、私が悪いの……」

「大丈夫だ。駒場さんは、そんな事で後悔なんてしねーよ」

「え……？」

「そうだぜ。駒場のリーダーは例え自分にそんな力が無かったとしても、お前や、他の小学生達を助けに行ったはずだぜ」

「そうそう。駒場さんはなんてったって」

「「英雄（ヒーロー）だからな」」

浜面と半蔵は、語るべきことはもう無いと言わんばかりに、レス

トランの窓から見える、透き通った青い空を眺め、
力を失ってもなお英雄の生き様を魅せ続ける駒場の姿を想像していた。

陰陽英雄譚・駒場利徳物語
～完～

「フゴォオォオオォォォオオオォ！！！！」

今まで置物のように口を閉ざして黙り込んでいた駒場が、ついに爆発した。
それもポケモンの技にある「がまん」のごとく、貯め込んだ分だけ浜面と半蔵に炸裂させたのだ。

「やべええ！！駒場さんが切れた！！」

「落ちつけ！駒場のリーダー！！頭を冷やすのにジュースでも持ってこようか！？それともロリ人形をやろうか！？」

「……お前は、何処の閣下だ……全然うまくないぞ……！！」

しかも、腹立つし。と半蔵の冗談を真に受けた駒場の勢いは更に増す。
火に油を注ぐどころか火に爆弾投げ込むようなものだった。

「「た、助けてくれ！」」

2人は情けなくもフレメアと打ち止めに助けを求めた。何と情けない。
しかし、当のフレメアと打ち止めは。

「「嘘ついたんだ……」」

打ち止めはしょんぼりとし、フレメアはジト目で2人に非難の視線を送っていた。

神は居なかった。

その日レストランに二つの断末魔が響き渡った。
いつもの店員のお静かになられてくださーい！という注意の声と共に。

・・・

一方通行は突如自分を襲った謎のマシュマロのようなふわふわタイムに驚愕した。
何故反射が効いているのに触れられるのか。今までそんなことが出来たのはテレビの中のシャドウ位だ。
しかしここはテレビの中では無い。どういうことだ、と先ほどまで沸騰していた頭は急速に冷却され、思考を加速させる。風斬氷華の胸に包まれながら。

風斬の抱擁を振り払おうとじたばたするが、それも停止した。依然風斬の胸に包まれている。
まず風斬を観測することにした。今までは観察のみで風斬について考察をしていたが、今はしっかりとその身に触れている。
しかしその体の構造はおおよそ『ヒト』と呼べるものでは無かった。

思わずガバッと風斬の腕を振り切り、起き上がる。
何やら風斬は顔を真っ赤にし、インデックスも顔を真っ赤にし、９９８２号に至っては顔を真っ赤にして憤慨しているが気にしない。

違和感の正体。
それは風斬が人間ではなく、ＡＩＭ拡散力場の塊であるということだった。
成程、一方通行自身も無自覚に発しているＡＩＭ拡散力場ならば自分の反射は無害だと判断するということか。

風斬が触れられる理由はわかった。

ならば、インデックスの前に現れた理由は？

一方通行が、更なる思考の渦にのまれようとしていた瞬間、

『ほら、早く笑顔になってください！』

空気の読めない機械が４人に笑顔を促した。
こんな時に笑顔なんてできるわけがない、一方通行を覗いた３人は苦笑するものの、
完全に思考の渦にのまれて上の空な一方通行は、機械に促される

ままニコッと笑顔を浮かべた。本人は無意識である。
顔の筋肉が衰えていたらしく、少しぎこちない笑みではあったが、機械もこれを『笑顔』と判断し、パシャリと４人を撮った。

そして残ったのは、３人の苦笑と１人の純粋な笑顔だった。

「……何だか納得いかないかも」

インデックスはぶーたれていたが、９９８２号と風斬は何事もなくて良かったと溜息をついた。
一方で、このゴタゴタの中心であった一方通行は、未だに考え事に集中していた。
この上の空状態の一方通行をみた９９８２号は、「やっぱデカいほうがうれしいんや！」と何やら勘違いをして、一方通行の頭を軽くひっぱたこうとするも、反射された。
この事実に衝撃を隠せない９９８２号は、「やっぱデカいから受け入れられたんや！」と更なる勘違いを重ね、うなだれた。

上の空の一方通行、先ほどの出来事に顔を真っ赤にするインデックス、余りの衝撃にうなだれる９９８２号。

風斬は、どうしていいのか分からず印刷されたプリクラを手にしてオロオロとしていた。

・・・

さて、食事も終わったところで、これからどうするか話し合う一同。

そんな中、駒場利徳にフルボッコにされた浜面仕上と半蔵の表情は暗い。というかｃｒｙしそうな表情である。

駒場はそんな2人を見ても何も感じてないようで、さっさと打ち止めと言う名の迷子を保護者の元へ返さねばと、フレメア＝セイヴェルンと話し合っていた。

「迷子なら、大体、アンチスキルに任せたらどうかな？にゃあ」

「……間違いなく変な勘違いをされてしまう」

「あの子に連絡をとる手段が無いなら、大体、手づまりな気がする！」

「……その通りだな」

うーむ、と駒場は唸り声を上げ。

うむむ、とフレメアは駒場の肩の上で首をひねる。

すると、先ほどまで何やらぼーっとしていた打ち止めは突如驚きの声をあげた。

「……どうした」

「酷いんだよ！ミサカのこと放っておいてゲームセンターで遊んでるって言うんだよ！

ってミサカはミサカは憤慨してみたり！」

いつ連絡取ったのか？と４人は疑問に思うものの、このタイミングでわざわざ嘘をつく理由も無い。
それならそのゲームセンターにこちらが出向けばよいだろう。

「……打ち止め、そのゲームセンターは何処のゲームセンターだ？」

「えっと……『ラウンドファイナル』だって。ってミサカはミサカはこたえてみたり！」

別に電話を取り出したわけでもなく、打ち止めは誰かに聞いた風にゲームセンターの名前を答える。
精神感応系の能力者か？と思うが、そんなことは些細な事だった。
場所はわかった。後はそこまで行くだけだ。

「……全く、こんないたいけな少女を１人放っておくなんてロリコンの風上にもおけない」

「……保護者の元へ行ったら説教の１つでもくれてやる」

その声を聞いた駒場は思わず声の聞こえた後方へ顔を向ける。
浜面と半蔵は駒場の後ろにしゃがみ込み、駒場の口調でそれらのセリフをはいていた。
駒場は、２人を足蹴にした後、打ち止めを連れてラウンドファイナルへと向かい、そこに残されたのは二つの死骸だけだった。

・・・

テレビの中。いつも一方通行達が降り立つ空き地。そこには二つの影があった。

「ｗｅｌｌ、この世界は興味深いけど、正直暇ね。あなた今まで何して時間過ごしてたの？」

「クマ？そうクマねー、基本的にはシャドウに襲われないように隠れてたから、かくれんぼ？」

「……そいつは随分素敵なご遊戯ね」

「そうクマ？でへへ」

「……皮肉よ」

クマと布束砥信は、暇を持て余していた。

何せ基本的にやることがない。たまに布束はペルソナを鍛えに忍者屋敷に行き、クマもそれについて行ったりはするのだが、それくらいしかすることがない。

すなわちこうして２人きりでダラダラと会話をするくらいしかできないのだった。

布束はもしこの空間でずっと一人なら気が狂うに違いない、と軽く身震いした。

「クマ？」

先ほどまで布束の皮肉を額面通りに受け取り顔をにやけさせていたクマは突如として遠くを眺めるようにどこかを見つめ始めた。

そんなクマを見て眉をひそめつつ布束は尋ねる。

「……一体、どうしたというの？」

「……また誰か放り込まれたみたいだクマ」

誰かが放り込まれた。すなわち誰かがこのテレビの中にやってきたという事か。

ならば助けに行かねばならない。しかし、今この場で戦力になるのは布束1人しかいない。

やはり、一方通行達が来るのを待つべきだろう。多分そのうち来ると思うし。

「ａｎｙｈｏｗ、一方通行達が来るまで待つのが賢明でしょうね」

「そうクマねー」

布束は呑気にも、とりあえず寝ることにした。

## そのさんじゅうよん　おちたさきは（後書き）

憎い。一方通行が憎い

フレメア＝セルヴェインじゃなくてセルヴェルンなのな！

じゃなくてセイヴェルンなのな！！まじしにたい！

## そのさんじゅうご　ちじょうとちか（前書き）

テレビのごたごたもあるけど、現実世界でもごたごたします

## そのさんじゅうご　ちじょうとちか

御坂美琴と白井黒子は今現在、第七学区の地下街にやってきている。

アメリカへと渡るにあたり、着替えや必需品など色々と買い物をするためだ。

本来この時間は未だ常盤台中学で能力測定をしていた時間なのだが、教師が気を利かせて御坂と白井の能力測定を先に終わらせ、２人をさっさと帰らせたのだ。

教師曰く、

「女の子なんだからちょっとくらい準備したいだろ？こっちも急な事で悪かったと思ってるし」

だそうだ。御坂は別に放課後にのんびりと行けばいいのだが、白井はジャッジメントの仕事があるためそう言う訳にもいかない。

その為教師の提案を受け入れて常盤台を後にしたというわけである。

さて、ここ第七学区は学園都市のほぼ中央に位置し、その面積は学園都市内でも１位２位を争うほどだ。

その広さを相まって、この学区には多数の学校や学生寮が点在する。

それこそ上条当麻が通う普通の学校だけではなく、御坂美琴の様なお嬢様達が通うようなお嬢様学校までである。

また、多くの学校が点在する。と言う事は、それだけ学生も多いと言う事で、学生間のいざこざもそれなりに存在するわけで。

すなわちそれだけ教員だけでなくアンチスキルの数も多い。つまり教員向けのマンションだの寮だのも多数存在している。

故にそれぞれの学生や教員のニーズに応えるためにも多岐にわたった施設がこの学区には存在しているのだ。

そしてその施設は地上だけでは足らず、地下にまで及んでいる。

すなわち、それほどの数の学生がこの学区に住んでいると言うことだろう。

ところで、普通の女の子が服の買い物、となるとセブンスミストが挙げられることだろう。

しかし、今回は名目上では旅行に行くわけではない。

そのため、御坂と白井は見た目よりも実用性を重視した服装を吟味するために多数の店舗が開かれている地下街へと赴いたわけだ。

「しかし相変わらず人ごみがすごいですわね」

もう少し施設を分散させたらよろしいのに。と、白井は交通心理学や環境心理学の見地に立って目の前に広がる地下街をバッサリぶった切る。

「まあ、同じような店をいろんな場所に何個も立ててたらそれにかかる費用も馬鹿にならないしね」

御坂は顔も知らない地下街の設計者への一応のフォローを入れているが、御坂も同様にこの人がごった返す光景にうんざりしていた。

というか、おそらくこの場に居る人間の大部分が思っていることだろう。

空調は完備されているとはいえ、パーソナルスペースが狭すぎて、

何か暑い。と。

ところで、学生の街なのだから平日の昼にこの地下街で人ごみにあふれているのは妙だ。

と思ったが大体の学校が今日は短縮授業で昼間に終わったらしいとの事で、常盤台が優秀なのはこういうところで短縮授業などしないからというのが要因の一つになっているはずだ。

さて、こうしてのんびりと必需品を購入するついでにウィンドウショッピングを行っている御坂と白井である。

白井はデート気分を味わって昇天するかのような気持ちを味わっていたのだが、突如としてその逢瀬は、引き裂かれてしまう。

白井の本分は、ジャッジメントですの。

白井の携帯に連絡が入ったのだ。

『学園都市外部から侵入者有り。特別警戒宣言発令。至急侵入者の索敵及び捕獲を敢行されたし』と。

内容はもう少し詳しく書かれていたが、大まかに言うと上記の様なものだった。

更に詳しく言えば、その侵入者は白昼堂々『門』へと攻撃を仕掛け、その際『門』の警備に当たっていた２０名のうち、重傷者３名、負傷者１５名を出して強引に街の中へと入って行ったのだ。

これにより特別警戒宣言を発令し、ただちに侵入者を捕獲するよう全ジャッジメント・全アンチスキルに指令を出したと言う訳だ。

白井は大好きなお姉さまとのデートを邪魔されたこと以上に、既に１８名の被害を出したという侵入者に対して憤慨し、ただちにポ

ケットからジャッジメントの腕章を出した。
そして腕章を制服の袖に装着すると、携帯で連絡を取り始めた。

御坂は白井の行動を見て「ああ、仕事か」と納得するのだが、白井の表情は険しく、どうやらいつも以上に厄介な事になっているのだな、と確信した。
手伝おうか、と提案しようとした瞬間、白井が「お姉さまは早く寮へと帰って下さいまし」と言って地上へ自身と共に御坂をテレポートさせた。

・・・

地上につくと白井黒子はまず御坂美琴を部屋に帰そうと、有無を言わさずテレポートを繰り返す。
しかしそのテレポートは鳴り響く携帯電話によって中断された。

「初春ですの？」

「はいー、見つかりましたよー。と言っても、特別警戒宣言が出る直前に如何にも怪しいですって人を見つけてたんですけどね」

何となく間延びした声で話すそののんびりとした口調からは、おおよそ危機感が感じられない。
そんな声の主、初春飾利は情報収集及び情報解析のプロフェッショナルであり、どうやら学校が終わった後すぐにジャッジメントの支部で仕事をしていたらしく、その際たまたま侵入者を監視カメラ越しにみつけたようだ。

「だったら何でもっと早く知らせないんですの！？」

初春は優秀で後方支援が基本とは言え、危機感が足らないのではないか、と白井は叱咤するが、初春はやっぱりのんびりとした口調で答えた。

「いやあ、白井さんが何やらテレポートしてるみたいでしたので。白井さん、御坂さんを帰すために寮に向かってましたよね？その向かっている道中に丁度目標がいましたから……」

初春の言葉に白井はあたりを見回す。すると白井から１０ｍ程離れたところに、携帯に送られてきた写真と同じ顔の人間が見える。

ここで白井は初春の考えを理解した。

「……成程、お姉さまを戦力に組み込んでしまえと、そういうことですのね」

「はいー。どうせ白井さん、侵入者見つけたらそれを見失う前に単独で行動しちゃいますよね？だったら戦力はいくらでも居た方がいいと思いますよ？どうせ御坂さんも乗り気でしょう？」

白井は御坂を真っ先に安全地帯（寮監のいる場所）に帰そうとしたのだが、初春はその心理を逆手にとったのだ。

まあ、地下街から常盤台の女子寮をつなぐ直線上にたまたま侵入者が居ただけの話なのだが、瞬間的にその作戦を考えるあたり、やはり初春は後方支援向きである。

白井は御坂を戦闘に巻き込むことの申し訳なさよりも、名も知らぬ一般人を巻き込む可能性のある侵入者の確保を優先する。

この正義感こそが白井が白井たる所以であり、初春が白井を嵌めたのもその正義感が白井の首を絞める恐れがあるのを知っているか

らだ。
レベル5と言う戦力があれば、大抵の敵ならば早々遅れを取ることはないだろう。
それゆえ初春は御坂と白井が最も侵入者の近くにテレポートするまで何も言わなかった。

白井という同僚を守るために。名も無き一般人を守るために。
その力を持たない初春は、何にでも頼る。レベル5とはいえ、何の肩書もない一般人にすら。

「……わかりましたの。全く、あなたには敵いませんわね」

初春の想いを察した白井は、精一杯の賛辞と共に、精一杯の皮肉で応える。

「それじゃあちゃっちゃと終わらせて、明日から楽しくバカンスですよー。
あ、応援呼んどきますので捕獲できなくても足止めしといてくださーい」

最後まで呑気だな、と白井は思うものの、初春に感謝しつつ通話を終えた。

「ねえ、私も戦闘に参加して良いってことよね？」

御坂はニヤリと白井に笑いかける。白井は苦笑し、「無茶は禁物ですの」と自分自身にも言いかけながら、懐から拳銃の様なものを取り出した。
それの銃口はおよそ３ｃｍもありとてもじゃないがただの拳銃には見えない。

確かにそうだ。ただしその用途は武器としてではなく、信号弾などを上空に向けて飛ばすためのデバイス。

白井はそのデバイスを用いて周りに居る一般人に避難勧告を行う。白井が引き鉄を引くと、卒業証書を入れる筒のふたを開けるときの様な、少しばかりコミカルな感じの音が鳴った。

銃口から飛び出してきた口紅ほどの大きさをした金属筒は6、7mほど上方へと向かって行き、その直後、ボンッと音が響き渡り、人に向けて打てば目くらましになるほどの強い光が辺りを照らす。

それを見た辺りの人々はその光を遮るために目元を手で覆うが、光が消えた瞬間、行動を開始した。

悲鳴や怒号をあげつつ、周りのビルや店など、とにかく近場にある建物の中へと入って行く。

車で道路を移動していた人たちすら、その車を乗り捨てて避難するのだ。

この街の住人ならば、誰でも知っている事。また、外部から来た人間でも最初に説明されて知っている事。

これは、治安部隊による避難勧告である。これから戦闘を行うから、死にたい奴だけ残れ。と言うおおよそ治安部隊とは思えないような内容の意味が込められているのだ。

故に学生も大人も、誰彼構わず避難する。

そしてその場に残ったのは、2人の常盤台中学の少女と、1人の女だった。

白井と御坂はすぐさま臨戦態勢に入る。女は周りの騒ぎに表情一つ変えず、依然ゆらりと立っていた。
両者の距離はおよそ１０m。見るからに異様な女だった。

あまり手入れをしてないのか、長々と伸びた金髪と褐色の肌は荒れに荒れている。
そして身なりにも頓着がないらしく、長いこと着続けていたのか裾も袖も痛みに痛んでボロボロであった。
黒を基調とした長いドレス、ゴシックロリータと呼べばいいのか、それを身にまとっていたのだが、これをフレメア＝セイヴェルンが着ていたら、おそらく似合っていたであろう。

美人と言えば美人なのだが、ここまで女性としての身なりに気を使わない人間がゴスロリを着ていたら、ゴスロリに対するイメージのブチ壊しにもなりかねない。
そんなある種の幻想（イメージ）殺しの姿をして辺りを見渡している女は、臨戦態勢に入っている御坂と白井を見て、気だるそうに溜息をついた。
レベル５とレベル４のタッグと言う、学園都市暗部でも中々お目にかかれないペアを相手に戦闘をするかもしれないと言うのに、金髪の女に動揺は見られない。
外部の人間なのだから当然と言えば当然なのだが、その余裕そうな態度に御坂は苛立ちを見せた。

「あんた何者？てか何しにこんなとこに来てんのよ」

御坂の言葉にピクリと反応を示すが、御坂と白井よりも、一斉に非難したこの街の住人達に興味が行っているようだった。

「メンドクサ。手間かけさせんじゃねえよ」

金髪の女は明らかな侮蔑の意を言葉に込めて2人に発する。
そして懐から何かを取り出そうとしたので白井はすぐさまテレポートを行い、金髪の女の動きを止めにかかった。

「動かないでほしいものですわね。あ、日本語は大丈夫そうですので日本語で話させていただきますわ」

白井の急接近に、流石の金髪の女も少しばかり驚きを示した。
何せレベル４の「瞬間移動（テレポート）」だ。学園都市でも中々見られたものではないと言うのに、白井はその力を以って１０ｍは有った距離を一気に縮め、金髪の女の前へと迫ったのだ。
外部の人間がその力を目の当たりにしたら驚くのも頷ける。

しかし、金髪の女は驚きつつもとりあえず行動を続けた。
それを見た白井は、目の前の金髪は馬鹿か何かですの？と思いつつもドレスの袖から見える手首を掴んで仰向けになるよう地面にテレポートさせる。

少しばかりの驚愕を示した金髪の女は、目の前の事象に怪訝そうな表情を浮かべた。
だが、白井は説明するつもりはない。手札は切るべき時に切るものだ。無駄な情報は明かさないに限る。
実際、金髪の女は何が起きたのかよくわかっていないようだった。それもそのはず、衝撃も痛みも感じさせずに地面に倒されたのだ。
テレポートを使う能力者がいることを知らない女からすれば、得体のしれない武術か何かに見えたに違いない。

女はそれでも面倒くさそうに、立ちあがろうとして動きを見せるが、そうは問屋が卸さない。

瞬間、女のドレスから、金属矢が生えた。ドカドカッ！とアスファルトを貫き、裾や袖に存在する布の余剰部分に刺さった金属矢は１２本。

これはテレポートを応用した攻撃である。白井はスカートの下に隠した金属矢を一斉にテレポートさせる事で相手を壁や地面に縫いつける。

これを服の布地にではなく、人体に行えば大抵の敵は一撃で沈められるだろう。

しかし、基本的にジャッジメントは犯人を撃破ではなく、確保しなければならない。そのためこのように捕まえる方向に能力を鍛えているのだ。

そして女はそのまま地面に縫いつけられ、白井はその女を見下しつつ話しかける。

「ですから、動くなと言いましたの。それともｆｒｅｅｚｅ、ｄｏｎ’ｔ　ｍｏｖｅとでも言った方がよろしくて？」

流石お嬢様。英語も嗜まれているようで、流暢な発音で静止を命令するものの、動けなくなるよう地面に縫いつけたのだ。動きたくても動けまい。

御坂はあっけなく捕捉され捕獲された侵入者を見て、この分なら大丈夫かな、と気を抜いた。

しかし。

白井の力を目の当たりしてもなお。

女の表情は変わらず。

「ホント、手間かけさせてくれるわね」

地面に縫いつけられた状況を、危機にすら思っていないのか、余裕を感じさせる言葉を吐いた。

「「なっ……」」

流石にその言葉に御坂と白井は驚きを隠せない。

何を言ってるんだこいつと思いつつも応援がそのうち来るはずなので、しっかり捕捉すべく手錠を取りだした。

そして、その手に手錠をかけようとするのだが――

「ッ！！？」

それは突如とした背後からの地面の隆起により阻まれた。

突然隆起した地面は、白井を空中へと打ち上げた。訳も分からずテレポートを使う間もなく地面に叩きつけられた事で、肺から空気を吐き出しつつも、ようやく背後を見ることが出来た。

そこには巨大な腕が生えていた。しかしその腕は人の形を模していたが、その材料はアスファルトやガードレール等、辺りにあるものを何でも集めて粘土のごとくこねくり合わせたもので、人の腕と言うよりは、重機のアームと表現した方が近いかもしれない。

兎にも角にも、その腕は、白井を叩き潰すべく、そのまま振り下ろされてきた。白井は避けなければと思い、能力を発動させようとするが、発動できない。

先ほど地面にたたきつけられたことで、未だまともに息が出来ていなかったのだ。

白井の能力は「火を出せ」や「電気を出せ」など、単純な命令文（コマンド）によって出力されるようなプログラムではない。
『瞬間移動』とは、3次元を超えた11次元上にある座標を計測し、そこから移動するために必要な分のベクトル量を演算しなければならないのだ。
その計算は先にあげた火や電気の演算とはケタ違いの量を頭の中で計算しなければならない。
『幻想御手』で演算能力の底上げが為されれば話は別だが、白井の脳はあくまで1人分。
その為、痛みや焦燥、混乱等だけでもその複雑な演算を平時通りに行う事は出来なくなる。そう、今まさに息が出来なくなってしまっている時もまた然り。

目の前に迫って来る巨大な腕を前に、白井は能力を使わずに回避しなければならない。

白井はそれを不可能だと察して、キュッと目を閉じた。
しかし、金髪の女は知る由も無いことだが、白井は失念していた。
この場には『レベル5』が存在していたことを。

・・・

完全に気を抜いていた。

御坂美琴は詳しいことは聞いてなかったのだが、地面に縫いつけられていた金髪の女は『門』から堂々と侵入する程の手練なのだ。
そんな相手がちょっと拘束されたくらいで動きを止められるはずがない。

事実、金髪の女は仰向けに倒れたまま、手首のスナップのみで、何やら地面にチョークを使って何かを書きこんでいた。
それだけで周囲にある無機物を操り、白井黒子を窮地に追い込んでしまった。

御坂は目の前の現象に茫然としていたが、巨大な腕が白井に迫りくるのを見て、とっさに能力を発動させた。
アスファルトに含まれる砂鉄を磁力によって取り出して高速で振動させた。まるでチェーンソーのように。
しかしチェーンソーよりも高速で回転するそれは、切れ味は明らかにチェーンソーより上だ。

ガガガガガ!!と腕と砂鉄はぶつかり合うが鍔迫り合う間もなく腕は切り裂かれた。白井に害が及ぼさないように、磁力によって切り裂かれた腕を操る。

御坂はこの切れ味を見てテレビの中に行く時は砂鉄を持って行こうと本気で思った。

「ったくこっちから仕掛けたとはいえ……」

最早白井に危険はない。ここから先は御坂の憂さ晴らしだ。
御坂は手にコインを持ち、キンッと空中へと飛ばす。

「私の後輩に危険を晒すんじゃないわよ!!」

瞬間、『超電磁砲』の本領を発揮した。テレビの中で制限されていたものとは違い、こちらのものは「本物」であった。
音速の3倍の速度を持ったコインは、最早レーザーと呼べるものであり、そのレーザーは二つに分断された手と腕を丸ごと飲み込ん

で吹き飛んで行った。
やはり避難勧告を出して正解だった。こんなところに一般人が居たら大変なことになっていたに違いない。

超電磁砲によって発生した土煙りは、これまた超電磁砲の余波による風で吹き飛ばされた。

その光景を白井はただただ圧倒される心持ちで眺めていた。

（この風は……もはやお姉さまは『電撃使い』という枠では測れませんわね……）

どれだけ人間止めてるんだと白井は思うが、そこに痺れる憧れる。
白井は最早金髪の女ではなく御坂に心を奪われていた。

一方で御坂は悠々と白井の元に歩いてきて白井に手を差し伸べつつ言った。

「あー、今のはあの金髪が何かして腕を爆発させたみたいよ。
あわよくば私達を巻き込もうって魂胆でしょうね。その証拠に、ほら」

御坂が指をさした先。そこには本来地面に縫いつけられたはずの金髪の女が、居なかった。
大方作りだした腕を囮に逃げおおせたと言うことだろう。御坂はそう解説すると舌打ちをした。
どうやら久々に全能力をぶつけられる相手が居たのに、それが出来なくなった事に不満を抱いているようだった。

「お姉さま……ありがとうございますの……」

白井は御坂の手を掴み、立ちあがる。しかしその小さな体躯は、震えていた。

どうやら明確な『死』を感じ取って、後から恐怖がやって来たらしい。

御坂は白井の感情の機微を感じ取って、不安を消し去ってやるために白井の頭を撫でる。

「ごめんね、すぐに助けに入れなくて」

白井はキュッと御坂を抱きしめた。よっぽど怖かったらしい。その表情は、白井が御坂の胸元で頭をぐりぐりしていたため見えない。

そんな白井の頭をひたすら撫でていたのだが。

「グへへ……」

その声を聞いて全ての白井への思いやりは霧散した。

「あんた……まさか……」

はぁ、はぁと徐々に息を荒くしていく白井。

そして、

「お姉さま！お姉さま！お姉さま！お姉さまぁぁあああうわぁあああああああ

「いやな、何か外部からの侵入者らしくてな、アンチスキルの出番ってとこじゃんよ。
だから学生たる上条はとっとと帰るじゃん。なんならここで待っててもいいよん。ここは安全だし」

「え？ええっと……」

「それじゃあ、私は仕事行くじゃんよ！」

有無を言わさず走り去り、そこにはどういう事か考えている上条だけが残されていた。

・・・

「たのしかったんだよ！また連れてって欲しいかも！」

「そォかい、そりゃ重畳だ」

白い修道女・インデックスはやたら巨大な袋を抱える。その袋からは巨大なぬいぐるみの頭がはみ出していた。
どうやらＵＦＯキャッチャーにて入手したらしい。

インデックスは非常にニコニコしていたのだが、対象に残りの３人は少し疲れた様子だった。
何せ何から何まで初体験のようなもので、インデックスがあっちへ行きこっちへ行き、それについて行くだけで体力が持っていかれたのだ。

何にせよ、その間一方通行は風斬氷華を観察していたのだが、ど

うやら自身の体の構造を把握してない様子であった。
特にインデックスに対する悪意も見えるわけでもなく。特に何か目的があるわけでもなく。
ようするにそこいらの一般人と考えても差し支えない、と言う事だ。
少し引っ込み思案であるが、顔を赤くしたり微笑んだり恥ずかしがったりと、喜怒哀楽をはっきりさせていて暗部に蔓延る人間よりもよっぽど人間らしい、と一方通行は考える。

それならば、何も気にせずインデックスと風斬を一緒に居させたらいい。

一方通行は2人に別れを告げ、９９８２号と共に打ち止めを待つ事にした。
どうやら、打ち止めと一緒に居る奴が打ち止めを連れて来てくれるらしい、と９９８２号がＭＮＷを介して教えてくれたのだ。
一応打ち止めを保護してくれたのだからその礼もしないといけない。ならば無駄に動くのもあれだろう。

そんなわけでその旨をインデックスと風斬を伝えようとしたが、それは辺りの喧騒の変化を感じ取り、中断された。

人の流れがおかしい。

明らかに誰かに誘導されて外に出て行っている感じがする。

何かあったのだろうかと一方通行が考えていると、４人の目の前にジャッジメントの腕章をつけた高校生が走り抜けて行った。
するとそのジャッジメントの腕章をつけた少女は立ち止り、ズンズンとこちらに向かって来る。

「……なンか用かよ」

好戦的な笑みを浮かべつつギロリとその三白眼でその少女を睨みつけた。

少女は一方通行から発せられる威圧感に少し後ずさりしたが、すぐに持ち直し一方通行の前で仁王立ちになった。

「こら！人がこれだけ注意してるんだからさっさと逃げなさいよ！なにやってんの！」

「あァ？」

いつそんな注意をしたのか。今の社会「聞いてません」じゃ済まないが、流石にこれは横暴だと一方通行は感じる。

そんな一方通行の表情を見てジャッジメントの少女はムッとした顔をして、

「だからー！こんだけ念話（テレパス）で避難命令出してたのになんで聞かないの！？」

その少女がムムムと唸りながら顔を真っ赤にさせた途端、一方通行を覗いた3人が驚いた表情を浮かべた。

「あれ……どこからか、声が……？」

「おお、確かにこれは念話ですね。と、ミサカは頭の中に響く声を分析します」

「む。確かに頭の中に直接声が響いた気がするかも」

そんな3人のリアクションを見た一方通行は何か納得したように話す。

「あァ、成程なァ。反射は脳波に干渉する念話にも有効ってことだなァ。
だったら、これで大丈夫だろ」

一方通行は反射を切った後、もう一度念話するよう促した。
ジャッジメントの少女は一方通行の言う事を理解していなかったが、言われるがままに念話をもう一度した。

「……成程、わかった。ホラ、さっさと仕事に戻りやがれェ」

一方通行は興味なさげにその少女に向かってシッシと手を振った。
ジャッジメントの少女は人がせっかく注意してるのに！ムキー！さっさと避難しなさいよね！と捨て台詞を残して走り去った。やはり一方通行達だけに構ってる暇はないらしい。

「とりあえず、打ち止め達にはここにこねェ用に伝えとけ」

「そうですね。と、ミサカは念話の内容をそっくりそのまま上位個体に伝えます」

「それで、私達はどうするのかな？」

インデックスは一方通行に尋ねる。インデックスが不法侵入少女である事を一方通行は知っていた。
それに対するフォローを上条当麻に出来るはずが無いと言うのも容易に予想できる。

だとすると、何も考えずに避難するのは危険だ。おそらく地下街の出入口ではアンチスキルが張っているに違いない。
その場合インデックスが捕まる可能性が高い。更に言うなら、風斬も何かしらこの侵入者とつながりがあるのかもしれない。
後者に関しては万が一、と言う事でそこまで警戒してないのだが、事のついでに風斬の事も監視下に置いておけばいい。その方が非常時に守りやすいだろう。

そんな一方通行の思考は中断された。非日常を生きる一方通行に這い寄る新たな非日常の影によって。

「見ぃつけたぁ……」

どこからか、女の声が響き渡る。
しかし今度は念話ではなく、しっかりと音の振動を持っていた為、一方通行が張り直した反射の膜も通過した。

だが、誰も居ない。

この日、魔術師と、超能力者が、初めて交差する。

## そのさんじゅうろく　かがくとまじゅつ（前書き）

番外含めて４０話目。よく長続きするものですな

## そのさんじゅうろく　かがくとまじゅつ

「うふっ、くふふ、うふふっふふふ！禁書目録に虚数学区の鍵に、第一位とさっき居た電気を使う女の子じゃない！まさによりどりみどりって奴ね。迷っちゃうわあ」

女の声は、かすれているが、どこか妖艶な雰囲気を保っており、喉を潰してしまった歌姫を連想させる。

この声が何処から聞こえてくるかと言うと、何やら壁に泥と土で作られた目玉の様なものがへばりついていて、それはさざ波のように泥が振動し、スピーカーのように音声が発生していた。

しかしその声は一転して、

「まあ、ぶっ殺しちまえばいいよね。全部」

そこらのチンピラもはだしで逃げ出す程ドスの利いた声だった。

何にせよ問題は山ほどあった。インデックスの事を知ってそうな口ぶりに、『虚数学区の鍵』。

これはおそらく風斬氷華のことだろう。

そして自分のプロフィールを知ってる上に９９８２号とも面識があるらしい。

もしくは９９８２号の事を御坂美琴と勘違いしているのかもしれないが。

対して、相手の情報は、一切開示されてない。

戦闘において重要なのは、戦闘能力もそうだが、何より情報が大切だ。

馬鹿正直に戦闘能力を振るうのは、暴れ牛だけで十分である。
しかし、ここ学園都市で暴れ牛を地で行くと闘牛士にあしらわれるどころか、その突進の力を別の事に利用されるのがオチなのだ。
ここで敵を叩き潰すのは、おそらく可能だろう。これは第一位の驕りではなく、純然たる事実。
しかし、相手の目的がわからない以上、自身の力を発揮するのはどうかと考えた。

姿の見えない敵への対応を考察していると、インデックスが目の前の現象を解説し始める。

「土より出でる人の虚像――ユダヤの守護者たるゴーレムを無理矢理英国の守護天使にするあたり、うちの扱うアレンジ術式と似てるね」

「……これが、魔術って奴か……」

一方通行はインデックスの話を聞いて得心した。

魔術師ならばインデックスの事を知っていてもおかしくはないと言う事か。
これで知らない能力者すらインデックスの事を知っていたら色々と拙かった。
何せ『魔術』という、『科学』では説明できない現象だ。この街の科学者ならこぞって研究したがるに違いない。
そうなるとインデックスはあっという間に拉致されてあっという間に解剖されるかもしれない。
とはいえ、今こうして魔術の解説を出来ていると言う事はやはり魔術の事は知られてないと見ても良いのだろう。

何にせよ、目の前の泥を操っている本人をどうするべきか。
先に述べたとおり、撃退はおそらく可能だ。敵が攻め入るのを堂々と正面から突破し殲滅してやってもいい。
しかし、『科学』と『魔術』。この相反する二つの組織同士で争う事で何か弊害は起きないのか？
これが独断かどうかは知らないが、『魔術』側が勝手に攻め入ったとはいえ、『科学』側があっさり勝利してしまったら、『魔術』側の面目が無いだろう。
さらに言えば、この事件で魔術に関する事柄が科学側に露呈するかもしれない。

今まで生きてきた中で、『魔術』などと言うものは見たことも聞いたことも無かった。

それは何故か？

おそらく、秘匿するべきものだからではないだろうか。
『魔術』という『力』が普通の一般人にまで浸透した時、治安維持やら何やらで面倒な事になるに違いない。
それ故に、今まで『魔術』と言う存在は一部にとどめて世間に流出するのを防いでいたのではないか？
だとすると、魔術の事が学園都市に知られる、と言うのは相手側も本意ではないはずだ。
にも拘らず、敵はこうして学園都市に攻め入っている。

何が目的だ？

「お前……戦争でもしてェのかよ……？」

一方通行は唸るように低く冷たい声色で尋ねた。「うふふ」と、

泥は嗤う。

「戦争。戦争！！戦争ってのは、こういうことかしら！？」

刹那、地下街全体が大きく揺れた。

「「！！」」

突如として地面が大きく揺れたため、全員がよろめく。

しかし、一方通行はすぐに立ち直り、能力を行使する事で3人を支える事に成功した。

「お前ら、俺から半径５ｍ以上離れるなよォ……！」

揺れは収まったが、パラパラと大きな揺れの名残で天井から粉塵の様なものが落ちてくる。

チカチカと蛍光灯は不安定な光を地面に向かって注ぎ込む。しかし次の瞬間、その蛍光灯は同時に全てフッと消えた。

突然の揺れに突然の停電。避難が完了していなかった人垣が恐慌に陥るのは火を見るより明らかだった。

阿鼻叫喚。

先ほどまでのんびりと、たまに行われる避難訓練のようにのんびり避難していた人の波は、一気にパニックに見舞われる。

我先にと外へ向かって行くが、先の大きな揺れのせいかは知らないが、予定より早く出入り口がシャッターで封鎖された。

これによって先ほどまでドタバタと脱出を図っていた一般人達は完全に分断され、一方通行達はもちろん、逃げ損ねた学生達も暗闇の中に閉じ込められてしまった。

「さあ、パーティの始まりよ」

歌うように、愛を囁くように、泥は、一方通行達に向かって死刑宣告をする。

「――――コンクリ枕にしてピーピー鳴きながら土葬されやがれ」

ズドン！と一際大きな揺れが地下街を襲い、泥はその揺れに乗じて跡形も無く消え去っていた。

「チッ……」

元よりアンチスキルの前を通りすぎて脱出するつもりはなかったが、自分達の立ち位置からではどちらにせよ脱出は不可能だっただろう。

おそらくそれは敵の計算のうちで。

おそらく敵はこの場の構造を知り尽くしているのだろう。

厄介な敵だ。随分手馴れている。おそらく、魔術は大っぴらに使われるのではなく、秘密裏に暗殺などに用いられているのだろう。

やはり、一方通行の考えは正しそうである。

『魔術』は秘匿するべきものであり、無暗やたらと『科学』と交わらせてはならない。

おそらく、敵が本国へと帰らなければ、敵は学園都市に攻め入ることだろう。「秘匿すべき技術が奪われた」とか難癖付けて。

「面倒くせェ……」

一方通行は、心底面倒くさそうに、丁重にお帰り頂く方法を考える事にした。

・・・

『全く、何やってるんですかー、せっかく応援よこしてあげたのに』

電話の向こう側で、おそらくぶーたれているであろうその声の主、初春飾利は電話の相手、白井黒子にぐちぐちと文句を言っていた。

『面目ないですの……』

『御坂さんと言う援軍がありながら捕獲できないなんて、あれですか？

御坂さんに見とれてたんですか？全く、こっちに帰ったら書類私の分までやってもらいますからね』

『言葉もございませ……って初春、さりげなく仕事を押し付けないでほしいんですの』

『あ、バレましたぁ？てへっ』

『テヘッじゃありませんの！！それで、敵は見つかりましたの！？』

『あー、地下街に入って行った後見失いましたあ』

『地下街ですわね？わかりましたわ、それでは行ってまいります』

ブチッと電話を切る。白井は溜息を一つつき、そんな白井を見て御坂美琴は怪訝そうな表情を浮かべる。

「あいつはどこいったの？」

「地下街ですの。……はぁ、避難勧告のデバイス使ったのに捕まえられないだなんて……」

拳銃型デバイス。これを使うと基本的には始末書を書かされる。それもそのはず、周りに被害が及ぶであろう大規模戦闘を行うと宣言しているのだから、理由はどうあれ色々と書類を提出しなければならないのだ。

だと言うのに捕獲に失敗したら始末書の書き損である。

「あー、この後挽回したらいいじゃないの……」

どんよりとする白井を慰める。御坂には関係ない事であるためあんまり説得力がない。

しかし御坂の慰めというだけで幾万の真言より価値があるといえよう。

その日、白井の世界に希望が舞い降りた。

それはさておき。

「それじゃ、さっさと行きましょ。罠の可能性も高いけど虎穴にいらずんばっていうしね」

「わかりましたの」

2人は、地下街へ向かってテレポートを開始した。

・・・

＜???＞

『人間』のアレイスターは、笑っている。

そんなアレイスターをみて、土御門元春は不機嫌そうにアレイスターを問い詰める。

「どういうつもりだ。アレイスター」

「何のことだ」

とぼけるアレイスターに苛立ちは頂点に達し、彼もしくは彼女が浸っているフラスコに一枚の紙を押し付けた。

「一つしかないだろ。こいつの名前はシェリー＝クロムウェル。れっきとしたイギリス清教の魔術師だぞ!!?

一方通行と魔術師をぶつけるとはどういう了見だ!!?

先月の錬金術師は流浪の魔術師だったからそこまで波風は立たなかったが、

今回はそれとはわけが違う!それどころか科学の頂点と魔術師をぶつければ、どちらに転んでも面倒は避けられんだろうが!!」

土御門は一気にまくしたてる。

しかし、一方通行が予想していた通り、どちらかがどちらかを倒してハイ終わり。と言う訳にはいかないのだ。

身内での戦闘、例えば暗部同士やスキルアウトの抗争等、ならば適当に揉み消しも出来るだろう。
しかし、今回は外部の人間との戦闘だ。揉み消す等不可能だし、治外法権ですなんて言い訳通用するはずが無い。
何より、秘匿すべき技術が科学側に漏れてしまった、と言う可能性を示唆するだけで両者の間には簡単に亀裂が生じる。
下手するとそのまま戦争に発展するだろう。

そうなると危険なのはなんの力も持たない一般人だ。

土御門は、守りたい者の為に暗部に堕ちている。すなわち現状は本意ではない。

「……くくっ、なんだ。そんなことか」

土御門の考えを、アレイスターは、さも当然の事のように切り捨てた。

「そんな、こと、だと……！？」

ギリッと歯を食いしばり、アレイスターを睨みつける。
視線で人を殺せるのではないか、と言うくらいの殺意を込めて。

「問題ないさ。一方通行は負けないだろうしな。
それで今後何かが起きたところで、それは予測の範囲内。
何にせよ、これによってプランも２０８２から２３７７まで短縮が可能だ」

勝ち負けではないと、さっき言ったばかりだと言うのに、アレイスターは土御門の話を全くと言っていいほど聞いていなかった。

アレイスターにとって重要なのは、「プランが進むか否か」、それだけである。

「そう言う事だから、土御門。君は手出し無用だ。魔術師と超能力者は一度邂逅してもらう」

「なっ……！」

「くくっ……一方通行の知らない未知の法則を操る者との相対で、彼は一体何を得るのだろうか？」

最早土御門の事など眼中にないようで、これからどうなるのかただただ楽しみに夢想している。

土御門は、忌々しげに一瞥すると、テレポーターと共に外へと出て行った。

・・・

「どォしたもンかなァ……」

一方通行は顔も知らぬ魔術師の事を考え、今後の対策を考えている。

そんな一方通行にインデックスは声をかけた。

「あくせられーたも、ひょうかも、クールビューティーも、早く避難するんだよ。

相手は魔術師なんだから、ここは私の出番かも」

「バカ野郎、よしんば撃退出来たところで、この学園都市内で魔術師を撃退する事自体がマズい事なンだよ」

一方通行はうんうんと唸りながら、インデックスの提案を却下した。

しかし、その言葉だけではインデックスは納得しない。今まで何度か学園都市内で魔術師と相対してきたのだから当然のことだろう。

そして９９８２号と風斬氷華は最早蚊帳の外で、ミサカ達いらない子ですよね？とヒソヒソと話をしていた。

「まず、確認してェ事がある。『魔術』ってのは今までもこれからも、一般人に知られるべきでない秘匿される事柄なンだよな？」

今まで散々予想を立ててきたものの、それを裏付ける知識のない一方通行は、インデックスに尋ね、答え合わせを行う。

「そのとおりだよ」

「なら、今回の敵は、どこかの組織に属してンのか？」

「多分、術式を見る限りは私の所属する『イギリス清教・必要悪の教会』と同じ所属だと思う」

「同じ所属だと言うのに、お前の事まで狙うってこたァいくらか派閥があるって事だなァ？」

「その通りかも。単に『イギリス清教』と言っても、宗教と言うのは多岐にわたって根を張っているから、穏健派とか強硬派とか、色々な方面に分類できるんだよ」

一方通行の考えを知るために、インデックスは素直に質問に答え

て行く。

「成程なァ……やっぱ、完全に撃破するのは駄目だなァ」

「どうして？」

インデックスはきょとんとしている。魔術に関して詳しくても、政治方面には疎いのだろう。

一方通行は、自身が予想したこれからの事について説明することにした。

「学園都市内で魔術師を撃破することの弊害についてなンだが……『魔術』という秘匿すべき技術、それが学園都市にわたる事を敵は良しとしないだろう。」

ならば、俺みたいな能力者が魔術師を撃破したらどォなる？」

「……魔術が学園都市に知られた、って思われるかも」

「そのとォりだ。だから奴さンには互角の勝負の挙句何とか退く事が出来た程度でお帰り頂く必要がある。

つっても、俺や他の学園都市のメンツがたった1人の魔術師を撃破したくらいで戦争になるンならとっくの昔に戦争になってただろォし、

飽くまで可能性の一つにすぎねェンだけどな」

一応、最後の手段として一方通行が単独で撃破すると言う手段もあると言う事を伝えておく。

「能力者が駄目なら、私と言う魔術師がいるかも！」

ふんすと無い胸を張る。確かに、それは有効だろう。魔術師同士の戦闘なら波風も少ない。

一方通行も悪くない手だと考えるが、インデックスに危険な目にあわせたくないと言う事もあってそれを止める事にする。

「あのなァ、能力者に倒されるのもマズいンだが、何より『学園都市内』で倒される事がマズいンだよ。

学園都市の人間に捕まって万が一の事が有ってみろ、あっちが仕掛けた事とはいえ、戦争は免れられねェぞ」

割と出まかせを言ったのだが、一方通行が言った事によってそれなりの説得力を持ったのか、インデックスもうぐうと唸りながらも身を引いてくれた。

「わかったんだよ……でも、どうするの？」

「それは全く考えてねェ」

敵の姿もわかんねェし。と、一方通行は後手に出ないといけない現状に足踏みをした。

「あ、あの……私達に、何か……出来る事はない、の？」

恐る恐る、風斬は９９８２号と自分に何かできる事はないかと尋ねてきた。

「「ない」」

一方通行とインデックスは風斬が尋ねた瞬間シンクロしてその言葉を否定した。

風斬は二の句がつげず、そのままうなだれた。９９８２号も戦力外通告に、風斬と共にうなだれた。

その時身近な曲がり角から、不意にカツンと足音が聞こえてきた。一方通行は、３人をかばう形でその曲がり角の前に立つ。

するとそこから見えてきたのは。

「あれっ。一方通行」

「……ンだよお前らか」

御坂美琴と白井黒子だった。

「あらあら、一方通行さんはこんな時間から女の子３人を侍らせッ……！！？」

白井は一方通行を一瞥すると、風斬、インデックスと視線を移して、次の瞬間。

「お、お姉さま……！？」

９９８２号の姿を見て固まった。そう言えば夏休み最終日に御坂と同じような顔をした人間が居た気がする。

ひょっとして姉妹……姉妹丼……うへ、うへへへ。

白井の思考は無意識のうち言葉にしていたらしく、駄々漏れだった。

「うわ、引くわー。と、ミサカは目の前の変態を罵倒します」

「流石の私もそれは引くわ」

「はうっ！！」

白井にしてみたら、９９８２号や御坂の罵倒は幾万の真言より勝る。白井は万能属性。

「それで、この二人は一体誰なのかな？」

インデックスはきょとんとした表情で尋ねる。

風斬も９９８２号も知らない顔が居るので互いに自己紹介でもした方が良いだろう。

全員を知る一方通行はそれぞれ自己紹介するよう促した。

・・・

「ふーん、一方通行は女の子３人を相手にデートしてたってわけ。イイ御身分じゃない」

ニヤニヤと、心底楽しそうに一方通行をからかう御坂美琴。

「ばっ！ちげぇよ！！」

「みんなでプリクラ撮ったんだよ！」

インデックスはニコニコしながらイイ笑顔をした一方通行のプリクラを御坂と白井黒子に見せようとする。

「へイ！！」

「あぁっ！」

一方通行は自身の顔を見られまいと、器用にも自分の顔だけ穴を開けた。超能力の無駄遣いである。

「あくせられーた、酷いんだよ！！」

一方通行のあまりの仕打ちに涙目になるインデックス。

とてもじゃないが敵が潜伏している場所とは思えないほど和気藹々としている。

「久々葉さまとプリクラ……！？許せませんの……！！」

ゴゴゴとオーラをたぎらせる白井。しかし一方通行の懸念はそんなことではない。

「いやあ、イイ笑顔してましたよね、一方通行。と、ミサカはニヤニヤとあの機械にＧＪを送ります」

「え？どういうこと！？教えなさいよ！」

９９８２号の言葉に反応した御坂は事情の説明を要求した。今まで事あるごとに一方通行にからかわれてきたのだ。これはそれの復讐チャンス！

「あ、それなら……ここに余ったプリクラが……」

そろそろと余った分のプリクラを御坂に渡そうとする風斬氷華。

「そォい！！」

一方通行は、再びプリクラの顔部分だけ消去した。

「もう！何するのよ！！」

御坂はプンプンと怒りをあらわにする。風斬も思い出の品の一部を破壊された事でしょんぼりしていた。

風斬の顔を見て少し申し訳なく思うが、あの顔は黒歴史なンだ。譲れねェ。一方通行は毅然とした態度であった。

「諦めろ、俺はあの顔だけは晒せねェ……そう、誓ったンだ……」

「くっ……！」

御坂は心底悔しそうにする。しかしそんなことしている暇はない。

「つゥかここに来てるってこたァ、お前らも外部からの侵入者絡みかァ？」

「え、ええ……その通りですの。一度交戦したのですが、捕獲に失敗しまして」

交戦した、と言う話を聞いてギョッとする一方通行とインデックスだが、

どうやら2人も魔術師もどう見ても無事なので引き分けたということだろう。

しかし、話をややこしくさせないために何も言わない。

「成程なァ」

一方通行としては、狙いは自分たちなのでさりげなくこの場を離れるのが好ましい。

「そォだな、正直戦闘に介入するのはあれだから俺らは帰るわ」

「「えっ」」

御坂と白井は何言ってんだコイツと言う顔をした。どうやら戦力として頼りにしようとしていたらしい。

「何言ってンだよ、俺みたいな一般人が介入してみろォ。アンチスキルとジャッジメントの面目がねェだろォが」

確かにそうだが、白井は既に御坂を頼りにしている。

一度敵を取り逃がしたのだから、もういちいちそんな事気にするつもりはない。

「それにこっちにゃ非戦闘員がいるンだ。戦えねェ事もねェが、こいつらに害が及ぶのを俺は良しとしねェ」

とりあえずこの場から離れるための出まかせに過ぎないのだが、3人は一方通行の言葉に少なからず喜んでいた。

９９８２号はニヤニヤし、インデックスはちょっと照れた様子で、風斬は顔を真っ赤にしている。

「……か、勘違いすンじゃねェぞ。別に心配した訳じゃねェから！！」

ツンデレータ降臨。

・・・

「……駒場さん、どーすんだ？」

浜面仕上は、視界に入るシャッターを眺めながら駒場利徳に尋ねる。

しかし、駒場は未だ考えをまとめかねているようだった。

「……」

打ち止めの念話（のようなもの）で地下街に行く事を止められたスキルアウト一行は、地下街に向かう入口のところで足止めをくらっていた。

既に閉鎖された後らしくアンチスキルがシャッターの前で警備をしている。

「一方通行と９９８２号は未だ中に居るみたいだね、ってミサカはミサカは現状を報告してみたり！」

あまり緊張感の見られない声色で元気に報告をする打ち止め。どうやら閉じ込められてはいるものの、無事と言えば無事らしい。

ならば助けに行くべきか。どうすべきかの決定権は駒場にある。

「駒場のリーダー。俺は反対だぜ」

半蔵は地下街へ向かうのは反対らしい。基本的に能力者と対等に立ち回るには、情報を駆使して常に相手の裏をかかなければならない。

そうした時、顔も知らない人間の為に、顔も知らない敵と戦う気にはならないのは当然だろう。

打ち止めが言うには外部からの侵入者、との事だが、はっきり言って実力は未知数。

とてもじゃないが相手をする気にはならない。

「ううー……」

フレメア＝セイヴェルンも不安そうにしている。

そんな中、もっとも当事者に近いはずの打ち止めだけが笑顔を振りまいているという奇妙な状況であった。

「……行くか」

各々が黙り込む中、駒場は重い腰を上げた。

「リーダー！！」

半蔵は駒場を止めようとするが、浜面は何も言わない。

「……助けに行くぞ、この子を届けねばならんしな」

駒場はポンポンと打ち止めの頭を撫でながら、地下街に行くことを決めた。

「はぁ、わかったよ……駒場のリーダーは頑固だからなあ……」

「……何と言っても、英雄（ヒーロー）だからな」

「「ぶふっ！！」」

まさか駒場の口からそんな言葉が聞けるとは思わなかった。

「ぷっ……ふふ……まさか駒場さんからそんな言葉が聞けるとは……！！」

「……！！……！」

浜面はプルプルしているが、半蔵は言葉に表せないほど爆笑していた。

そんな2人を駒場はギロリと睨むと、一瞬で立ち直った。全く、よく訓練されている。

「……浜面は、フレメアと打ち止めを頼む」

「……了解」

流石に打ち止めやフレメアを連れて行くわけにはいかない。

半蔵か浜面のどちらかに守ってもらう事になるのだが、運転技術に長けている浜面の方に任せる事にした。

「……駒場のお兄ちゃん。」

フレメアは不安そうな顔をしている。

「……大丈夫だ、この場はスキルアウトの庭だからな……外部の人

間じゃわからないような裏道なんていくらでもある」

駒場はフレメアの頭を撫でると、地下街の入り口を後にした。半蔵もそれに追従するが、その前に浜面に一言。

「そいつら、しっかり守らねえと後でどやされるかんな」

「ああ、わかってるっての」

半蔵はそれから振り返ることなく、駒場の元へと走って行った。

「……大丈夫かな。にゃあ」

「心配すんな、あいつらは強いからな」

「そうだよ、きっと大丈夫だよ、ってミサカはミサカはフレメアを慰めてみたり！」

「……ってか何で打ち止めはそんなに余裕な感じなわけ？」

それだけは解せない。浜面は思わず打ち止めに尋ねた。

「だって、９９８２号には一方通行がついてるもん。ってミサカはミサカは信頼してみたり！」

はて。さっきから言っている一方通行？は能力名か何かだろうか。スキルアウトになって以来能力に関する知識はゴミ箱にポイした浜面は、何の事かわからなかった。

## そのさんじゅうろく　かがくとまじゅつ（後書き）

一方通行三ならシェリーさんは簡単に倒せることだろう。
でもそうはいかんざきかおりさんじゅうはっさい

## そのさんじゅうなな　いのうのさかいめ（前書き）

投下間に空きがあった割には文字数多くない。

## そのさんじゅうなな　いのうのさかいめ

「とりあえず」

平静を取り戻した一方通行は口を開く。

「白井はこの地下に残された連中を外に出してくれ」

「わかりましたの」

一応一般人の括りであるはずの一方通行が何故か指揮を執っていた。

９９８２号は別に文句は無いようでぼけーっとしていて、インデックスは何か言いたいようで口をモゴモゴとしているが、一方通行の一睨みで沈黙。風斬氷華は自分に出来る事は何もないと断言されていたのでションボリしている。

「あんた達はどうするの？」

御坂美琴は素朴な疑問をそのままぶつける。しかし、正規ルートで脱出するとインデックスに面倒な事が起きる可能性が高い。

と言っても仮ＩＤは一応発行されているのでこの非常時にいちいち調べられる事はないだろうが、そんな事は一方通行の知る由もなく、念には念を入れて、という意味も相まって一方通行一同は誰にも見つからないように地上に脱出する事にした。

「あー、色々訳有りだから、見つからねェよォに脱出する」

本当は一方通行達自身がターゲットになっている為、御坂と白井

の元から離れたいのだが、それを言うと間違いなくこの二人は首を突っ込んでくるに違いないと考え、適当にごまかす事にした。

「わかった。さっき侵入者と戦闘してきたけど、かなり手ごわいみたいだから、気をつけてね」

「わかってる。つゥか戦う気ねェし」

とにかくいつまでも居ても仕方ない。御坂と白井黒子に別れを告げ、一方通行はその場を立ち去る。

それに追従するように９９８２号とインデックス、風斬氷華も２人に別れを告げた。

「……お姉さま、どうしますの？」

「……はぁ、どうみても狙いは一方通行達だと思うんだけど……」

侵入者の潜伏先に偶然にも、一方通行達。きな臭いってレベルじゃねーぞ。

一方通行が何も言わないからそのままスルーしたが、間違いなく彼らは侵入者と対峙する事になるだろう。

「黒子は、地下街に残された人たちの救助をお願い。それは黒子にしか出来ないことだから」

「わかっていますの。それで、お姉さまは……」

「もちろん、侵入者の相手をするわ」

白井は御坂の目をちらりとうかがうが、一目見てわかった。駄目だ、こうなってはテコでも動かない、と。白井はそう判断し、諦めたように溜息をつく。

「……無理だけは禁物ですわよ、お姉さま」

「わかってるわよ」

御坂は一方通行達が向かった方向へ歩いて行き、白井は一般人の救助へと向かって行った。

・・・

地下街、と一言に行っても、その領域は割と広い。

蜘蛛の足のように枝分かれしていて、一般人は絶対に使わないだろうと言う通路はいくらでも存在する。

半蔵と駒場利徳は、その通路を進んで、まだ見ぬ打ち止めの保護者を探していたのだが。

「うわ、何あれどう見ても怪しさマックスだろ」

2人が影を、そして息をひそめ、視線を向けるその先。

「……確かに怪しいな……あれが『侵入者』か？」

ぼさぼさの金髪ゴスロリが壁に何かを書きこんでいた。

駒場は半蔵の言葉に相槌を打ちつつも、隠れるのに不向きな巨大な体躯を目いっぱいに縮こまらせながら発条包帯（ハードテーピング）を腕と足に巻きつける。

一方半蔵も「強くてカッコイイ」等と言うふざけた理由からマガジンの長さまで調整して作りだした三点バースト付きマグナムに銃弾を込めている。

問答無用で仕留めても構わないのだが、万が一、億が一であれが一般人だとしたら非常に拙い。

十中八九あれが侵入者だとは思うのだが、如何せん学園都市と言う場は変人が多く、あのような格好をしていても浮きはするがそれだけなのだ。

故に実際にアクションが見られるまでは何もできない。

事前に侵入者についてのプロフィールを知れていたら良かったのだが、今更言っても栓無き事である。

侵入者の情報などよっぽどの事では入手できないだろうと言うのも一つの要因だが、何にせよ半蔵は何も分からないと言う状況を極端に嫌っている為、現状に頭を抱える。

「……すまないな」

そんな心情を察したのか、駒場は申し訳なさそうに謝る。

「気にすんなって、確かに現状は本意じゃないけどさ、そんなあんただから俺たちは今までついてきたんだからさ」

へらっと笑いながらポケットから飴を取りだした。どうやらフレメア＝セイヴェルンや打ち止めにあげるつもりだったらしい。

「駒場のリーダーも飴ちゃん食べる？なんちって」

「……お前はどこの大阪のおばちゃんだ」

駒場は突っ込みを入れつつも、コロコロと飴玉を口の中でもてあそぶ半蔵から飴を受け取った。

「いちご味。この甘酸っぱい味は、甘酸っぱい青春を送れなかった俺達の鎮魂歌です」

「……俺は、お前らと馬鹿騒ぎするのは嫌いじゃないが……」

「おいおい、何でマジになるんだよ駒場のリーダーは……」

駒場の思わぬデレに半蔵の軽薄な口調もストップする。別にＢＬとかそういうあれじゃないので安心してほしい。

そうこうしているうちに、何かを書き終えた金髪ゴスロリが何かを唱える。

瞬間。

バキバキと壁や周りにおかれている機械や物を巻き込んで何かが生成された。

「……住民が避難する中、こんな事をしてると言うことは……」

「間違いなく黒ですな……」

あれが１００％黒だと事前にわかっていたら。

金髪ゴスロリが能力を使う前に無力化させていたのに。

今現在、２人が優位なのは、自分達に気付いていないという点だけだった。

武装しているとはいえ駒場と半蔵は無能力者で、侵入者は何かしらの異能を所持している。
それだけで大きな差があると言う事を、2人は熟知していた。

しかし、そんなたった一つの優位性すら、奪われてしまう。

「うふ。こんにちは。うふふ、うふふうふ」

金髪の声が響き渡る。こちらを向いては居ないものの、明らかに2人の存在に気付いていた。そんな女の横には、周囲にあるあらゆるものを圧し固めて作られた石像が寄り添うように立っている。
その声を聞いた2人はすぐさま行動を開始した。
駒場は金髪の女の前に立ち塞がり、半蔵はその間にどこかへと向かう。

先ほどまでは身をひそめ、最低限金髪の女の姿しか捉えられていなかったのだが、女の前に立つと、その周囲には破壊されたバリケードの跡があり、アンチスキルも何人か倒れていた。おそらく金髪の女がやったのだろう。

それらを見た駒場の顔は、元々いかつい顔であるが、眉をひそめる事で更に威圧感が増す。

「……少しは加減してほしいものだな、能力者」

もう少し早く手ひどくやられたアンチスキルの姿に気づいていれば、女が能力を発動させる前に、即座に攻撃していたものを。

後手に出ざるを得ない状況はなるべく避けるべきだな、と反省した駒場は目の前の女を睨みつける。
しかし女は駒場の睨みよりも、先の言葉が気に障ったようだった。

「くふ、誰が能力者ですって？うふふふ……嗤わせんなよ、科学の街に飼われた犬が」

錆ついた声だったが、笑い声も相まって少し陽気な雰囲気を醸し出していた女の声が、突如として重くなり、その重圧感が駒場を襲う。
その辺のチンピラならその時点で戦意を失うところだろうが、駒場は一歩も退かなかった。

「うふ。これはね、超能力とかいうホイホイ量産できる代物じゃないのよ？
魔術、って知ってる？それを扱う魔術師ってのが私なんだけど。
うふふ、一般人にそれを知られたら口封じするしか無いから、死んで頂戴な」

冥土の土産、と言わんばかりにニヤニヤと自身の力の説明をする。

「ふん……無能力者の俺からしたら、異能という括りだから魔術師も能力者も変わらん」

駒場は全く気にした様子も無く、科学と魔術をひとくくりにする。
すると、その言葉に笑みを浮かべていた女の顔から、一切の色が失われた。
やはり宗教と言うものは自身の考えを否定される事が一番怒りを

抱く原因となるらしい。
と言っても、女からすると宗教観の否定よりも、自身の力が科学と同列に扱われた事に怒りを感じているようだが。

「くふふ、何でも出来ると言われる位進んだ技術を持つ学園都市ですら見放す無能力者が、この私に立てつくなんて。うふふ、お笑い草だわ！」

高笑いをしながらも、手に持ったチョークを横に振るう。

「エリス！！」

石像の名前だろうか、女が名前を叫ぶと、その石像は駒場へと向かって走る。
駒場は向かって来る石像を見て身を構えるが、女は駒場の事など歯牙にもかけない、といった様子で笑っていた。

「くふ、存外に、衝撃吸収率の高い装備で身を固めていたのね。まさか生き延びるとは思わなかったわ。まあ、おかげで結構楽しめたんだがなぁ！！」

アンチスキル達のことだろうか、倒れ伏す彼らの事を見向きもしないで戦った感想を述べている。
女の笑い声が、明るい色から残虐なものへと変貌した瞬間、エリスの拳が駒場の居た床をとらえ、ズドン！という巨大な音と共に辺りを揺らした。

何の変哲もない無能力者なら、その重量に負けて潰されるだけだろう。
しかし、魔術師たるシェリー＝クロムウェルの前に立つ駒場がた

だの無能力者なわけが無い。
そんな事は彼女自身もわかっていた事で、小手調べ程度にエリスをけしかけたのだ。
初撃で潰されるならその程度だし、耐えきるなら、まあ遊んでやっても良い。その程度のつもりだったのだが。

「……へぇ」

次にシェリーが漏らした声は、感嘆の念。

駒場は、その体躯に似合わない程の素早い回避を行っただけでなく、エリスの肩の上にまでのぼり、シェリーを見下ろしていた。

「……ふん」

駒場の嘲笑うかの様な笑み（無表情だが）を感じ取り、シェリーの表情は変貌する。

「……ちょっと避けたからって調子に乗ってんじゃねえぞ、犬」

再びチョークを振るうと、それに同調するようにエリスが駒場を振り切るべく暴れ出す。
しかし、駒場はエリスが暴れる直前には既にその場から離れ、地面に着地していた。

「……随分とおざなりな攻撃だな、魔術師。……あたらなければどうということはない」

駒場は反撃する気があるのかわからないが、とにかくエリスの攻撃を避け続ける。

しかし、シェリーからすると駒場は目的の人物では無いのでさっさと潰して目的へと向かいたいところで、シェリーは駒場の態度に非常にイライラさせられた。

「はん、ちょっとすばしっこいからって私から逃れられると思うなよ」

シェリーが平坦な口調で言い放ち、更にチョークを振るった。するとエリスが駒場に向かってではなく、地面を思い切り叩きつけた。それにより地面は大きく揺れ、駒場の足を取る。駒場がよろめいた事でエリスが追撃で腕をふるい、駒場はそれに直撃してしまう。何とか身体を後逸させる事で威力を弱めさせる事が出来たが、それでも威力は甚大。

駒場の巨体がいとも簡単に浮かび上がり、吹き飛ばされてしまった。

「地は私の力。そもそもエリスを前にしたら、誰も地に立つ事など出来はしない。

ほらほら、無様に這いつくばれよ。その状態で私に噛みつけるかぁ、負け犬？」

シェリーは勝ち誇るようにペラペラと喋る。しかし駒場は倒れ伏したまま、反応を示さない。

「あぁ？もう終わり？雑魚は雑魚なりに必死こいて立ち向かってこいよ」

拍子抜けした、と言った口調で駒場を挑発するが、駒場は気にしていないと言った具合にフラフラと立ち上がった。

続いて口の中を切ったのか、つばと共に口の中にたまった血を吐きだした。

「……スキルアウトを、舐めるなよ」

絞り出すように言ったセリフ。その言葉にシェリーは鼻で笑うが、シェリーの背後から駒場の声に同調するように、

「そうそう、無能力者の戦い方を知らない他所者が粋がっちゃあ駄目だぜ？」

カチャリと音を立てながら、半蔵は三点バーストのマグナムをシェリーにつきつけた。

「テメェら……やってくれるじゃない。あんたは囮だったってことか……

最初2人いたうちの1人はとっくに逃げた物と思ったんだけど。

……随分とまあ身体に似合わずセコセコした事するなぁ」

シェリーは駒場達を嘲るが、2人からしたらただの負け犬の遠吠えにしか聞こえない。

策を弄し、相手を揺さぶり、力を発揮できない状況に追い込む事で完封する。

それが駒場率いるスキルアウトの戦い方。不意討ち闇討ち騙し討ち。人はそれを卑怯と言うかもしれないが、立派な作戦である。

そんな事を言ったら圧倒的な能力や才能を以って努力しか出来ない人間をすり潰す超能力の方が非道で卑怯。

結局、物を見る角度で価値観などいとも簡単に変わってしまうのだ。

それはさておき。

「汚いは褒め言葉」

半蔵はヘラッと笑う。シェリーの言葉など馬耳東風。と言った様子の半蔵を見て駒場も口角を少し上げた。

しかし、背後から銃を突きつけられていると言うのに、シェリーはそれを全く気にした様子も無く。

「まあ、一番つぶしたい相手はここにはいないけど、自己紹介をしときましょうか」

突然の自己紹介。2人はシェリーの言葉に眉をひそめる。何にせよアンチスキルの応援なりジャッジメントなり何でもいいから人が来るのを待ちたい2人は、とりあえず耳を傾けた。

「イギリス清教所属、シェリー＝クロムウェルよ。以後ヨロシク。と言っても、もう会う事なんて無いんでしょうけど」

イギリス清教？宗教の派閥か何かだろうか。と2人は思案するが、魔術に関する予備知識の無い2人はイギリスからやってきたんだな、と言う事しかわからなかった。

そんな2人を置いてきぼりにして、シェリーは話を続ける。

「火種が欲しいの。戦争の火種が。その為にこの街の住人に、イギリス清教の手駒である事を知らしめたいのよね。

それを成す為に、私はここにいる」

シェリーは銃を突きつけられていると言うのに、「戦争しにきま

すた」等とちょっとコンビニ行ってくる位の軽い口調で話し続ける。

「ははっ、この学園都市相手に戦争？止めとけ止めとけ。
狂った研究者どもにバラバラにされて生きたままホルマリン漬けで一生を過ごす事になるぜ？」

戦争、という言葉を聞いて半蔵は軽く驚きを示すものの、学園都市の軍事力にかなう相手が思い浮かばない。
故に軽いジョークをこれまた軽い口調で述べる。

「大人しくしてくれよ、王手って奴だ」

「……チェックメイト、と言った方がいいのではないか？」

駒場も余裕を感じたのか、半蔵に突っ込みを入れた。
戦況は『詰み』だ。

しかしそれはあくまでも「半蔵にとって」の『詰み』だ。

一方で「シェリーにとって」は、まだ「飛車落ち」程度のものに過ぎなかったようだった。

## そのさんじゅうなな　いのうのさかいめ（後書き）

明日というか今日、続きが投下出来たら投下しますん

## そのさんじゅうはち　こうさくする（前書き）

ペルソナはどこに？うぇあーいずぺるそな？

## そのさんじゅうはち　こうさくする

・・・

一方通行達が向かった先は、まさに戦場。
血を血で洗うような、非日常の気配。地下街と言う事もあり熱気が立ちこめるその空間は、負の気配に満ち満ちていた。

どう見ても劣勢。
それが感じ取れる程、アンチスキルの一同はボロボロだった。

数にしておよそ２０人。そこは野戦病院のような、応急処置をするためだけの空間だった。
どうやら侵入者に手ひどくやられたアンチスキルが集まっているらしい。

結局アンチスキルに見つかるのかよ、と一方通行は内心愚痴るが、そんな事を考えていたら目の前に１人の人間がズンズンと向かってきた。

「げェっ、黄泉川！！」

「私は何処の武将じゃん？つーか何でここに居るじゃん！？クソッ上条しかジムに居ないと思ったら！！」

等と悪態をつきつつマシンガントークで一方通行を質問攻めにする黄泉川愛穂。
面倒な奴に見つかったと一方通行は溜息をつくが、どうやら黄泉川もそれどころでは無かったらしい。

「はぁ、まあいいじゃん。お前らはさっさと地上に避難するじゃんよ」

あっちから出られるじゃん、と黄泉川は出口へと向かう道を指差す。

「……この近くで侵入者が暴れてンのかァ？」

「その通りじゃん、前線は潰されちまってるけど、出口へと向かう道は死守してるから、アイツが外に出る事は無いじゃんよ」

黄泉川は時折息遣いを荒くして、一方通行達を帰らせようとする。やはり黄泉川も手負いだったのだろう。すなわち、体術のみでは叶わない相手。

それはこの場で対抗出来る力を持つ者は、一方通行しかいないと言う事の証明のほかにならなかった。

（めんどくせェ……）

治安部隊が外部の侵入者を撃退した、ならば1対多数と言う事もあるので波風も立ちづらいだろう。

しかし1対1。それも能力者と魔術師による異能対異能。この状況でしか撃退できないと言うのは非常に拙かった。

だが、アンチスキルは十分に被害を出してしまった。最早丁重にお帰り頂く必要はない。

ならば体勢が整うまで時間稼ぎをして、アンチスキル達が侵入者を撃退出来るように動けば良い。

飽くまで侵入者を撃退するのは、アンチスキル。これさえ達成できれば難癖付けられる事も無いだろう。

「仕方ねぇ……お前らは、先に出口に行ってろォ」

一方通行はチラリと９９８２号を一瞥しながら、この場に残る宣言をした。

「「なっ！！？」」

「あ、あくせられーた？ももしかして、１人で魔術師の相手をするのかな？」

額に青筋を立てて、怒りからかプルプルとインデックスは身体も口調も震えていた。

「そうですよ……いくら一方通行さんが強いとはいえ、もし何かあったら……」

風斬氷華も同様に震えたような口調で一方通行を諭す。こちらは不安から震えているようだった。

「あー、わかりましたわかりましたぁ。この二人守ればいいんでしょう？

と、ミサカは都合のイイ女じゃないと愚痴りつつ踵を返します」

９９８２号は一方通行の意図を察して理解はしたものの納得はしていないので文句を言う。

と言っても異論は無いから文句を言うだけなのだが。

「何言ってるじゃん！？子供なんだからこういうのは大人に任せるじゃんよ！！」

学園都市の子供たちを守るために作られた大人達による自治組織。
それが子供に頼っていてはならない。そんな黄泉川のアンチスキルとしての矜持を感じ取るが。

「こォいう時に振るわねェでいつ力を振るえばイインだよ？」

一方通行から漏れる、懺悔の断片。
今まで力を持て余してきた一方通行。
その力の振るい方を知らず。
その力の振るい方を教わらず。
一万人もの人間を殺してきた。

しかし、９９８２号の心の欠片を垣間見た時、理解した。力をどう扱うべきか。

別に正義の味方になる、等と言うつもりはない。
強きを挫き弱きを助け、等と言うつもりはない。
罪滅ぼしをするために、等と言うつもりはない。

せめて自分の周り、この腕でつかめるだけでも守る。闇が光を侵さないように。

「何も倒すなンて言うつもりはねェよ……お前らの体勢が整うまでの時間稼ぎと思ってくれたらイイ。
つゥか学生どもを守りてェってンならなンでも頼れよ。そこにプライドなンざ必要ねェ」

「……守りたいのは学生じゃなくて、子供達じゃん……」

黄泉川はムスッとした様子で、未だに納得していない。確かに一方通行の言い分は理解る。

だがしかし、どんなに強大な力を持とうとも、黄泉川からしたら等しく子供なのだ。

だからこそ、黄泉川は第一位と言えど一方通行にも頼ってもらいたいのだが、現状が現状なので何も言えない。

「……」

「うぐぅ……わかったよ……ただし、無茶は禁物じゃんよ」

一方通行の無言の視線に耐えかねたのか、結局出撃の許可をだした。

「悪ィな。こっちもさっさと侵入者を倒せたら良かったンだが、そォいう訳にもいかなくてなァ」

「……何か訳ありじゃん？そこのシスターっぽい服装してる子とか。何か魔術師とかよくわからん事いってたけど」

「……いや、あれは関係ねェ。それじゃ、適当に戦って来るからとっとと体勢立て直せよォ。

そしてお前らはさっさと地上に戻れ」

「了解です。と、ミサカは返事をします」

「わかったんだよ……でも気をつけるんだよ、あくせられーた」

「わかりました……」

かなり正解に近いニアミスをする黄泉川に一方通行は少し焦り、さっさと話を切り上げる事にした。
これ以上インデックスをこの場に居させると、どんな余計な事を口走るかわからん。

・・・

一方そのころ。

「あ〝あ〝あ〝道に迷った!!最初のとこ右行っておけばよかったのか畜生!!」

迷宮の様な地下街を、御坂美琴はひたすら走っていた。
地響きと言うか、戦闘が行われているだろうと思われる音は響き渡っているのだが、如何せんここは地下街。
反響して音源がどこにあるのか全く分からないと言う状況。

しかし、御坂閃く。圧倒的閃き。

「電話すればいいじゃん」

流石学園都市製携帯電話、地下だろうが電波ゆんゆんだぜ。

「出ろぉ～電話出ろぉ～」

電波が届こうが、相手が出なければどうという事は無い。

「ああもう!!」

思わず携帯に八つ当たりしてしまうところだったが、この携帯は

十二分に仕事をした。
悪いのは通話に出ない一方通行なのだ。

「……黒子にあれだけ啖呵切ってこれじゃあね……」

御坂はトボトボと歩きだした。

・・・

「……そこの石像を動かそうと思うなよ。死にたくなければな」

「くふふ、とっとと撃てば良いのに。ひょっとして殺しはしたこと無いの？」

「……殺すだけならいくらでもできる。だがお前はアンチスキルに引き渡してそれで終わりだ」

「無傷で引き渡そうなんて優しいね。うふふふ！」

先ほどエリスに思い切り殴られた駒場利徳は、ようやくある程度回復する事が出来た。
駒場も動けるようになったと言うのに、シェリー＝クロムウェルは未だに顔に浮かべた嘲るような笑みを止めない。自身におかれた状況が分かっているとは思えなかった。

「くそっ！！」

瞬間、半蔵は後ろに大きく飛び退いた。
シェリーの背後から半蔵が銃を突きつけていたのだが、その地点にツララの様な石の塊が降ってきたのだ。

身体を後ろに運ばせながらも半蔵はシェリーに向かって弾丸を放っていた。しかし、それは降ってきた石のツララによって阻まれた。

「あっははは！！この私を止めたいなら四肢千切る位しないと駄目だっての！！！」

嘲るような笑みから一転、してやったりと言ったしたり顔で高笑いをしだす。

「マジでアンチスキル何やってんだよ！！」

いつまで待ってもやってこないアンチスキルに半蔵は悪態をつく。しかし、すぐ近くで地に伏していたアンチスキル以外の人員も既にシェリーにやられていた為、すぐさま立て直す、と言う訳にもいかなかったのだ。

「うふふふ、一気に劣勢に立たされたわね。劣等生だから仕方ないのかしら？」

「はは！こんなもん、コンビニでレジまで行ったのに！財布忘れた事に気付いた位の！
その程度のピンチだっつーの！」

「……それは……！中々の危機……だな……！」

チョークを一閃、二閃と振るってエリスを操るシェリーを前に、それをなんとか避ける事しか出来ない2人はこんなときでも軽口を叩いていた。

「ほらほらほらぁ！！女相手に無様にケツ振って逃げてんなよぉ！

！」

エリスが壁を、地面を、地下街のあらゆる場所を、殴る。殴る。殴る。

殴るたびに足がバランスを保てないほど辺りが揺れる。しかし、シェリーのところだけぽっかり穴が開いたように平静を保っていた。

「ずるいぞ！何であいつのとこだけ揺れてねえんだ！？」

必死で回避し続ける半蔵は、駒場に対して思わず文句を吐く。

「……揺れるのが嫌いなら、あの女のところまで行ってきたらいい……」

「そりゃごめんだね！あんな女の元に行ったら愛ある英国式ハグでデッドエンドだろ！！」

「うふ、この私を前に随分と余裕そうじゃない？」

そろそろステップアップしようか。シェリーの言葉を聞いた時、2人は誰か来たところで止められる奴居ないだろ、と頭を抱えた。

「今のはメラゾーマじゃない、メラだって言われたポップの気持ちがよくわかるぞ畜生！」

加速する苛烈な攻撃を必死になって避ける。

それでも駒場と半蔵、狙いが二つだったのでどちらかをねらっている隙に狙われていない側が攻撃をする事が出来ていた。

しかし、今になってエリスの動きは変化する。

「……狙いは飛び道具を持つ半蔵からという訳か……！」

2人同時に相手をするのではなく、1人ずつ潰す。二兎を追うもの何とやら、という考えに行きついたのだろう。

半蔵も狙いは自分だと理解したのか、避ける事に集中する。

「駒場のリーダー！」

「……わかってる……！」

エリスが半蔵を狙っている間に、術者本体を叩く。駒場は一歩も動かないシェリーへと飛びかかった。

「ふふ、こうなる事が今まで何度あったと思うの？」

ゴーレム使いの弱点。それはゴーレムを無視して操っている本人が直接狙われる事。

そんな事は数多の戦場で戦ってきたシェリーも重々承知していた。

シェリーがチョークを振るう。するとエリスも半蔵を狙った行動をするのだが、シェリーを狙う駒場の足元からバキバキと音を立て腕が生えてきた。

その腕は駒場の足を掴み、思い切り放り投げる。

一度だけでは飽き足らず二度までもその巨大な体躯を宙へと浮かばせた駒場は、何とか受け身を取るのだが、勢いを殺しきれずゴロゴロと地面を転がされた。

「大丈夫か!?駒場のリーダー!!」

半蔵は駒場の元へと向かおうとするが、エリスがいるので叶わない。

しかしその一瞬の逡巡を、シェリーが見逃すはずもなく。

「ごはっ……!!」

エリスが拳を叩きつける。そして叩きつけた地面から飛び出す瓦礫の破片に巻き込まれ、半蔵は地に伏した。

「うふ、うふふ。よく頑張ったと思うけど、敢闘賞じゃ誰も守れないのよ」

シェリーはとどめと言わんばかりにチョークを振り下ろす。

しかし、エリスの拳は、誰も叩き潰す事は無かった。

「はァ……どう見てもスキルアウトな2人が必死こいてるってのによォ……

アンチスキルマジで頑張れよなァ……」

駒場と半蔵の表情は驚愕の色に染められた。

何せ目の前の白髪の男は右手だけでエリスの拳を受け止めたのだ。

しかし明らかに運動エネルギーが釣り合っていない。

あの重量を受け止めるだけでも驚きなのだが、受け止めたと言うのに足元にはひび一つ入っていなかった。

「おいおい、何あれ?必死こいて避けてたのにあの拳は見かけ倒しかよ?」

「……そんなわけないだろう、この惨状を見たらわかることだ……」

ともすれば、エリスが弱いのではなく、白髪の男がすさまじい。そう言うことだろう。

「……何にせよ、援軍か。ありがたい」

「あーあ、来るならもっと早く来てくれよなー。まあ何にせよ、助かった」

「悪ィな。色々込み入った事情があるンだよ、こっちにも。そのうちアンチスキルが来るだろォから、そいつらの案内頼めるか?」

「あぁ、任せとけ」

「……すまないな、この場は任せるぞ」

正直アンチスキルとは関わりたくないと2人は思っているが、民間の協力者としてふるまえば良いだろうと言う事で一方通行の提案を受け入れた。

「あァ、よくここまで戦った。大したモンだぜェ」

とりあえず駒場と半蔵は敵では無いと一方通行は判断して、軽く会話を交わした。

しかし、そんな3人を見てクスクスとシェリーは笑う。

「あらあら？これはこれは第一位様ではありませんか、ご機嫌麗しゅう。ｌｉｔｔｌｅ　ｌａｄｙ？」

まるで紳士のようにふるまうが、その言葉の中にはトレーニングしたとはいえまだまだ線の細い一方通行への侮蔑の意が込められている。

一方通行は気にした様子ではないがとりあえず鼻で笑って返答する。

「ハッ、お前の眼は節穴か何かですかァ？」

「うふ、男だか女だかわかんねえようなひょろっちい身体してっから間違われるんだよクソガキ。

オスメス判別しやすいようにコーディネートしてやろうか？」

「おいおい、偉そうなこと言ってる割にファッションセンス０な服装してるお前に言われたくねェな。

アグリーベティも裸足で逃げ出す奇抜な格好してる癖によォ」

「うふふ、うふ。そうやってゴスロリを馬鹿にする人はたまにいたけど、今はもう居ないわ。

全部ぶちのめしてきたから。くふふ、あんたも例外じゃないわよ」

「はン、妄言はおうちに帰ってから言ってろォ。

……ｓｈａｌｌ　ｗｅ　ｄａｎｃｅ、ｕｇｌｙ　ｌａｄｙ？」

「なんだそりゃ、似合わねえしアグリーベティと掛けてんのか？ぜんっぜんうまくねえっての！！」

シェリーが再びチョークを振るう事で、戦闘は再開され、駒場と半蔵はシェリーとエリスが一方通行に釘づけになっている間に離脱した。

・・・

「むむ、一方通行が地下に残って、９９８２号達は地上に避難するみたいだよ！
ってミサカはミサカはナビゲートしてみたり！」

「じゃあ大体その人たちを保護しに行かなきゃいけないね」

パリパリと、呑気にポテチ（コンソメ）を食べながら２人の幼女は金髪ジャージのその辺に居そうな不良、浜面仕上に指示を出す。

「はいはい、かしこまりましたよお姫さま方」

何故俺だけこんなところで子守りをしているのか。
スキルアウトのアジトに戻り、車を一台持ってきた。
その際アジトに残っていたスキルアウトに「誘拐は駄目だって駒場さんに言われてるだろ」とからかわれたが。

そして今、９９８２号達が地上に出るだろうと思われる地点に車で向かっている。

「はあ、駒場さんと半蔵の奴は大丈夫かねえ……」

まあ、一方通行とやらと合流できればどうとでもなるか。とぼんやり思いながら運転を続ける。

・・・

一方そのころ。

「あれ……黒子……？」

「お姉さま、何をしていらっしゃいますの？」

御坂美琴は、一般人の避難を終えたばかりの白井黒子の元へとたどり着いた。

「道に迷ったの……」

「可愛いですの……（そうでしたの、ならば私と一方通行さんを探しましょう！）」

「え、何？」

「迷いながらもお姉さまは私の元へたどり着きましたの。
これはつまり私とお姉さまが運命の赤い糸でつながっている証拠！！！

（何じゃありませんの！こうしている間にもアンチスキルの方々は戦っているんですのよ！？）」

本音と建前がエンゼルフォールしていた。

## そのさんじゅうはち　こうさくする（後書き）

シェリー編終わったらペルソナ出てくるはず。はず。

## そのさんじゅうきゅう　せんじょうのかたるしす（前書き）

今回の投下でシェリー編終わるおもたのに、終わらぬェ
後いつもより長めェ

## そのさんじゅうきゅう　せんじょうのかたるしす

「はぁ、はぁ、アイツ1人で大丈夫か？」

「……問題無いだろう、あの石像の拳を受け止めたのだからな……」

駒場利徳と半蔵は一方通行が通った道を逆走している。

アンチスキルを侵入者の元へと導く為だ。しかし駒場と半蔵は何度か少年院にお世話になった事がある。

故に顔見知りのアンチスキルに当たるとどんな事を言われるかわかったものではない。

「……最悪、黄泉川に出くわさなければ恩の字だな……」

「えっ」

スキルアウトの天敵、黄泉川愛穂。彼女さえいなければ適当に案内してとんずらしたらよい。

駒場はそのように考えていたようだが、半蔵は違った。

「……こんな時に、奴に会いたい等と抜かすつもりか……？」

「うぐっ……！」

実を言うと、スキルアウトとしての活動（主に盗み）で何度か黄泉川に捕まった事があるのだ。

その際半蔵は、黄泉川の美貌と自分達を捕まえるための暴れっぷりとのギャップがどストライクだったらしく、以降黄泉川になら捕

まってもいいやと言わんばかりに、彼女を見かけた時は仕事量が半減したりしていた。

「……まあ確かに、この場に黄泉川が居たらお前のアピールするチャンスか……」

「そうなんだよな、間違って俺に惚れてくれないもんかね……」

「……」

何やら半蔵が走りながらも目を瞑り物想いに耽ると言う器用な事をしだしたので、駒場は口を閉ざした。

半蔵の妄想は続く。

「迫りくる拳に、彼女は目をキュッと閉じ、自身を守るように胸を抱きしめた。

しかしその拳はいつまでたってもやって来ない。恐る恐るその目を開くと、そこには」

「……颯爽と白髪の男が現れ、その拳を受け止めていた……」

「ヤメロオオオオオオ！！！せっかくフラグ立ちそうなところまで妄想したのによおお！！！」

「誰とのフラグが立つじゃん？」

すると、当事者の巨乳アンチスキルが現れた。

「「げえっ！黄泉川！！」」

「だから私は何処の美髭公じゃん！？」

どうやら下らない掛け合いをしている間にアンチスキル達の元にたどり着いたらしい。

半蔵は、いきなり思い人が現れて思わず叫んでしまった。

駒場は駒場で、「どうせ黄泉川の事だからこんなことがあれば最前線に居るに決まってるだろうけど、万が一居なかったらうれしいとか思ってたのにやっぱり居やがった」と言う心境を一言で表したら上記のようになってしまったのだ。

「つーか何でここに居るじゃん？まさかまた何か悪さしてるのか？」

「俺ら＝悪さって酷い誤解！！」

「……今回はただの民間協力者だ……侵入者が暴れているから、援軍を頼みたい……」

「……ふうん、確かに、嘘ついてる感じじゃないじゃん。
それなら案内してもらおうじゃんよ！」

こんなところにジャッジメントでも無い学生がいる事自体問題なのだが、今は一刻を争う。

アンチスキル達は何も言わずについてきてくれるようだった。

「おう、任せてくれ！」

半蔵は意気揚々と逆走してきた道を再び逆走し、駒場とアンチスキル一同は、それについて行く。

・・・

「ほらほらどうしたぁ！？あんたもケツまくって逃げるだけの無能力者と同じかぁ！？
学園都市第一位の名折れだなあ！！」

「チッ……うるせェ女だなァ……」

一方通行とシェリー＝クロムウェル、両者の距離はおよそ１０ｍ。
しかしその間にはエリスが立ちふさがっている。
エリスごとシェリーを吹き飛ばせたらいいのに、と愚痴をこぼす。
しかし余計なところで対立したくないと言うのが本心だ。何せ学園都市の機構とはいえ、今や全世界に妹達が点在している。
もちろんイギリスも例外ではない。ならばこんな事で敵対して妹達の居る研究所を襲撃でもされたらたまったものではないのだ。
確かに研究所の事は秘匿にされているはずだが、魔術師の手が何処まで伸びるのかわからない。
故に退いてもらいたいのだが、はいわかりましたと言って退いてくれるならこんなところには居ないだろう。

ところで、半蔵を庇うためにエリスの右ストレートを涼しい顔して受け止めた一方通行だが、実を言うと内心冷汗を流していた。

（石像の重さは受け止められたンだが、それ以外の何かが反射をすり抜けてきた……？）

これが魔術。
超能力とは別の法則を以って成り立つ異能の力。

テレビの中の事が無ければこの異能をそらす事が出来なかったか

もしれない。
いずれにせよ、ここで魔術を知ることが出来てよかった。と、一方通行は思う。

（時間稼ぎがてら、暴いてやろォじゃねェか……目の前のしらねェ法則を……！）

瞬間、一方通行の身体はエリスの拳で包まれた。そしてその状態で、シェリーはチョークを振るう。
エリスはシェリーの指示に従い、一方通行を掴んだまま地面に壁に天井に、何度も何度も振るう。
そして振るわれた腕の赴くままに一方通行を投げ飛ばした。

その間、一方通行は抵抗の一つも見せず、一回二回とバウンドした後、ゴロゴロと十数回転ほど転がされたところでエリスによって作られた運動は停止した。
エリスが暴れた事で辺りには土煙が舞う。

「うふ、うふくふふ。もう終わり？第一位ってその程度なのかしら？」

こんなに簡単に仕留められるとは、シェリーは正直拍子抜けだった。

だがしかし、そんな考えはすぐに霧散する。

「はァ……コンなもンで満足してるたァ……哀れだなァ……抱きしめたくなっちまう位哀れだわ」

土煙が晴れる。まるで意志を持っているかのように。

シェリーの視線の先、そこには獣のように、地面スレスレに四つん這いになる一方通行が居た。
一方通行の顔には壮絶で獰猛な笑みを浮かべていて、とてもじゃないがダメージを受けているとは思えなかった。

「は、はは」

そんな一方通行を見て、シェリーは笑い声を洩らし、

「あはははは!!!良いよあんた!!すっげえイイ!!」

それを皮切りに狂ったように高笑いをする。そして嬉しそうに、楽しそうに、まるで恋人へ向ける愛のように、殺意を磨く。
鋭い殺意を向けられた一方通行もまた、殺意をぶつけられる相手を見つけて喜びを殺意を以って表した。

「ひゃはは!!よかったなァまだまだ暴れられンぞコラァ!!」

一方通行は叫び声をあげると同時に両手両足に力を込める。
そのベクトルを操作し、ロケットのようにエリスに向かって飛びかかった。

「はっはァ!!転蓮華ってなァ!!」

一方通行はエリスの首を足で締めあげると、そのまま身体ごと側方に倒し、首から上をボキリと千切る。

「うふふ、首をねじり切ったところで、止まらないわよ?」

「ハッ、そンなこたァ百も承知だっつうの!!」

千切られた顔は地面に転がると、そのままドロリと溶けていったが、顔を無くした胴体からは、再びむくむくと顔が生えてきた。

（成程なァ……あの石人形は切り離された部分が近くに無ければ周りにある全ての物を使って再生するのか……面倒だなァ）

シェリーそのものを叩ければどンなに楽かと思考を逃げ（攻撃）に回そうとするが、それでは駄目だ。

（思うにあの石人形を操るためのラインみたいなモンが存在しているはずだ。魔術と言う未知の法則とは言え、所詮はこの世に存在している法則。ならこの俺に操作できねェはずはねェ）

エリスとシェリーをつなぐ、魔術的なライン。

シェリーがチョークを振るうのと同調してエリスが動いていると言う事はそれが存在しているはずだ。

もしくは、例えエリスが完全自律型の石人形だとしても、エリスを動かすための『核』があって然るべきだ。

なぜなら、先ほど千切り飛ばしたエリスの顔。それは胴体から離れた後泥に還り、一方胴体の方は顔が再生したからだ。

すなわち、エリスの胴体のいずれかに石人形に成る為の『核』があると言う事だ。

ならば、シェリーがエリスを操るためのラインかエリスに埋め込まれている『核』。そのいずれかをどうにかしたら良いはず。

（ならばアンチスキル共があの石人形を撃破するための手助けをしてやったら良いはずだァ）

簡単に言えば、表向きはアンチスキルが石人形を破壊し、シェリーを撃破したというシナリオ。その裏で一方通行が動けば良い。

アンチスキルはしっかり被害を出していたので、ちょっとくらいシェリーが怪我しても、アンチスキルがした事ならば十分言い訳も立つ。

問題は、撃破後にどうやってさっさと帰ってもらうかだ。

（つゥかこれが一番の問題だよなァ……）

相手は単身で学園都市に乗り込んできた猛者。少し負傷した程度で退くわけがない。

一方通行が考えをまとめあぐねていると。

「よーしよくやったじゃんお前ら！と言う訳で2人はさっさと帰るじゃん！！」

「なに！？つーかこっちは人探してるんだけど！？」

「ああん！？一般人の避難ならジャッジメント達に任せてるじゃん？！

ここに居る民間人はお前ら2人とそこに居る一方通行だけじゃんよ！！」

「あれが一方通行！！？」

「……成程……道理で強いはずだ……」

「あァ？俺になンか用かァ？」

「……打ち止めが迷子になっていたから保護していたのは、俺達だ……」

「ってもここに連れてくるのはあぶねーから今は地上で待ってもらってるけどな」

「……そりゃありがてェ。後で飯でも奢ってやらァ」

「おー、そりゃありがたい。ゴチになるぜー！」

「あら？負け犬どもがゾロゾロと……またやられに来たのかしら？うふふ、マゾってやつ？」

殺意と殺意のぶつけ合い。

それはアンチスキル達と2人のスキルアウトの介入によってストップさせられた。

なんとまあ気が抜ける。こっちはあれこれ考えていると言うのに。

一方通行は溜息を一つつき、ガリガリと頭を掻く。

「はァ……あの石人形をブッつぶす算段は付いてンのかァ？」

「かんがえてないじゃん？」

「……」

駄目だこいつ。

「まあ、一応あの金髪の背後にもアンチスキルを回すようにしてるから、そいつらが到着するまで持ちこたえるじゃんよ」

挟み撃ち。あの石人形を出す前に動きを止められるのなら有効だろう。

「了解。適当にあの石人形の相手するから、あの女が逃げられねェように固めろよォ」

「わかってるじゃん！」

「作戦会議は終わった？うふ、どうせ無駄でしょうけど」

「わざわざ待っててくれるたァ悪者の手本みたいな奴だなァオイ」

「うふ、イギリス清教では相手の話が終わるまではちゃんと待ってなければならないと言う暗黙の了解があるのよ」

「はっ、なンだその特撮悪役の大原則みてェなルール」

「嘘よ」

「なンだ嘘か……よっ！！」

戦闘は、再び始まる。

・・・

「音はあっちから聞こえたって！！」

「いいえこちらから聞こえましたの！！」

御坂美琴と白井黒子は、言い争っていた。
自身の聴覚が正しいと信じてやまない御坂と、あれだけ迷っておいてどうして御坂の意見が信じられようか、いや信じられないと言う白井。
意見はまさに真っ二つ。たがいに反対方向が正しいと指し示していた。

「じゃあこうしましょう！二手に分かれましょう！！」

「なっ！！確かに有効な手段かもしれませんが……」

白井はお姉さまと離れるのイヤイヤオーラを出すが、御坂は完全スルーした。

「良いわね、何か見つかったら連絡する事！！」

「は、はいですの……」

結局意見を押し通された白井は渋々自分が正しいと思う道を行き、御坂と別れた。

・・・

「ほらほら、逃げてばっかりじゃいずれ後ろで構えてる蟻共を潰しちまうぞぉ！！」

一方通行はエリスの拳を避けつつも、アンチスキル達に被害が及ばないように周囲にも気を遣っている。
回避をしながら、飛び散る破片を全て叩き落とし、今のところはアンチスキル達は一つも攻撃を浴びていないと言う状況だ。

「チッ……ガキみてェにじたばたしやがってよォ……少しはおとなしくしやがれってンだ！！」

エリスの拳を受け止める。

本来壁を殴れば壁が砕けたし、地面を殴れば地面に穴があいているのだが、一方通行が受け止めた時に限り、エリスの拳がひしゃげるのだ。

「うふふ、本当に、面倒くさい力をもっているのね、あんた！！」

「ハッ、そりゃどーも！！ついでにくれてやンよ！！」

地面に散らばっている瓦礫を軽く蹴りあげる。

するとそれはエリスに直撃し、エリスは勢いに負けて倒れてしまった。

「！！今じゃん！一斉掃射！！」

エリスが倒れた瞬間、エリスの影に隠れていたシェリー＝クロムウェルの姿が露わになる。

その隙をついて射撃の用意をしていたアンチスキル達は、黄泉川愛穂の号令に合わせ一斉に射撃を行った。

「ちっ……エリス！！」

シェリーは射撃に当たらないように伏せながらも、チョークを一閃させてエリスを立ちあがらせた。

エリスが倒れているうちは射撃も通ったのだが、エリスが立ちあがった瞬間、銃弾はエリスに当たって辺りに兆弾しだした。

それもそのはず、エリスの体を構成する物質は、辺りに散らばっている何かの鉄塊やコンクリートの寄せ集めだ。
そんなトン級の重量を誇るエリスに向かって銃弾を飛ばせば、あちこちに跳ね返るに決まっている。
おそらく、それのせいで先ほどは、アンチスキルがなす術もなくやられたのだろう。
これではそれの二の舞である。

「オイ黄泉川ァ！！無駄弾ばらまくンじゃねェよ！！チャンスはまだあるからその時まで我慢しろォ！！」

「うぐっ、ごめんじゃん……」

一方通行の叱咤を受けて、黄泉川はちょっとションボリする。
援護のつもりが邪魔にしかなっていない現実と、子供にしかられる大人ってどうなのと言う二重の悲しみが襲ってきたのだ。

（チッ……解析が終わらねェ……戦いながら解析ってのはやっぱ面倒だなァ……）

と、内心愚痴る一方通行だが、ふとテレビの中の事を思い出した。

――――『鉄の騎士』の事。

――――毒のスピアに貫かれた事。

――――「体を操作」しながら、「体内に侵入した毒の排除」をした事。

あの時の感覚を思い出せ。

「体を操作」しながら、「体内に侵入した毒の排除」をした事の「」部分を、
「魔術を解析」しながら、「敵の攻撃を防ぐ」に置き換えれば良いだけの事だ。

とはいえ、「敵の攻撃を防ぐ」と一言に言っても対象が自分自身だけではなく周りのアンチスキル達や2人のスキルアウトも対象だ。

演算量はあの時よりも多いはず。

しかし、それをこなせなければ、学園都市から守りたいものも守れない。

集中しろ。

集中しろ。集中しろ。

集中しろ。集中しろ。集中しろ。

集中しろ。集中しろ。集中しろ。集中しろ。

集中しろ。集中しろ。集中しろ。集中しろ。集中しろ。

回避しろ、集中しろ、防御しろ、集中しろ、解析しろ、集中しろ。

集中、集中、集中――

「っ……！」

カチリ、と頭の中で歯車が繋がった気がした。

・・・

「やっぱり、私が正しかったですの……」

白井黒子のおよそ５０m先、そこで巨大な石人形が暴れていた。
その手前では金髪の女が何かを振るっている。
おそらくそれで石人形を指揮しているのだろうとあたりをつけた。
そう、一方通行の事は白井から見えてはいないのだが、偶然にも白井と一方通行で挟み撃ちになっていたのだ。

白井は挟み撃ちが出来るとわかったのだが、一方通行がいるなど知る由もない。誰が向こう側にいるかわからないのに、どうやってその事を伝えられよう。と、判断に困っていた。
とりあえず御坂美琴に連絡を取ろうかとも考えたが、おそらく迷子だろう。

挟み撃ち出来るのに、意外と手づまりで地団駄を踏む。
すると、白井の背後からアンチスキルの部隊がやってきた。

「君は……ああ、ジャッジメントの子か。丁度いい、君も挟み撃ちに協力してもらえないか？」

「と言う事は、あの背後では、アンチスキルの方々が戦っていらっしゃるので？」

「まあ、そうだな……多分第一位が協力してくれているはずだ」

「そうなんですの」

結局戦ってるんじゃないか、と心の中でクスリと笑うが、すぐに気を引き締める。

『こちらアンチスキル第八十四支部才郷良太。目標の反対側に到着しました』

『おっけーじゃん。それならあの石人形を一方通行が張り倒すから、それを合図に武器を構えるじゃんよ』

『了解』

才郷良太と名乗ったアンチスキルは、どうやら向こう側に居るアンチスキルに連絡を取ったようだ。

「では、あの石人形が倒れ次第、行動開始だ。いいな？」

「「了解！（ですの！）」」

シェリー＝クロムウェルにばれないよう小さな声で一同は了解の合図をだした。

・・・

駒場利徳と半蔵の二人は、アンチスキルの後ろでただ茫然と戦いを眺めていた。

「はぁ、いやになっちまうよなあ……隣の芝は青いっていうけどさ、

青どころか黄金に輝いてるよ、マジで」

「……確かに、あの巨大な石像と渡り合っている一方通行の能力はすさまじいだろうな。

……しかし、よく見てみろ、一方通行の動きを」

半蔵が無能力者と超能力者の差に嘆いているが、駒場は一方通行に関して何かに気付いたらしい。

それが何なのか半蔵にはわからないが、駒場の言うとおり一方通行の動きに注目する。

「んあ？何を言って……って、合気道みたいな動きしてんな。能力ありゃ十分じゃねーの？」

一方通行は、能力で力の向きを操作しながらも、習った合気道によってより簡単に力の向きを変更し、その分の演算区域を出来るだけシェリー＝クロムウェルの魔術の解析に使用していたのだ。

「……何故かはわからないが、能力に頼っているだけの人間では無い、と言うことだろう。

……すなわち、俺達無能力者の使う技術も、全く必要ないと言う訳ではない……

ならば俺達が今まで鍛えてきたという事実も、無駄ではないと言う事だ……」

魔術の解析をしている、と言う事を2人は知らないが、超能力者である学園都市第一位『一方通行』が、能力だけでなくそういった無能力者の使う技術も必要としている。

その現実が、2人の心を少しだけ救った気がした。

・・・

それを理解した時、喉に詰まっていた魚の骨がとれたような、それか思い出せない言葉をパッと思い出したかの様な、そのような類のすっきりとした感覚が体中を廻った。

解けなかった数式が解けた時。

意訳に迷っていた英文を上手に噛み砕けた時。

一言でいえば、ピッタリとハマった。そう表現するのが正しいだろう。

「成程なァ……成程、成程」

急に黙りこんでうんうんと頷く一方通行を、シェリー＝クロムウェルは怪訝そうな表情で見つめた。

「うふふ、どうしたの急に？」

「あァ？なンだよ人様がわからなかった問題を一つ解けてすっきりしてたってのによォ」

「問題？うふ、何を世迷い事……」

シェリーが言葉を紡いでいる最中に、一方通行はエリスの足を掴み、地面へと引き摺り倒した。

「今じゃん！構え！！」

黄泉川愛穂の号令によって、アンチスキル達は一斉に銃とバリケード用の盾を構え、白井黒子もいつでも拘束できるように金属矢を手に取った。

「うふ、今更出てきて何をしようっての？」

いつの間に後ろに居たのやら、と言った具合で後ろを振り向きながらも、エリスを立ち上がらせようとした。

「撃て！！」

黄泉川はエリスの動きを見て、一斉に銃を乱射させる。

シェリーはまたやられに来たかと、この行動を鼻で笑いながら銃弾に巻き込まれないよう、地に伏せた。

しかし数百を超える銃弾は、

紙に穴をあけるように簡単に、

エリスを撃ち抜いた。

「ッ！！？」

何故？

先ほどまでいとも簡単に銃弾をはじいていた、と言うのに。

何をされた？

わからない。

銃弾が変わった？

否。そんな動きは見られなかった。

なら、撃ち抜かれる前、何が起きた？

――一方通行が、エリスを地面に倒した。

「……てめぇか……！！」

ギリッと歯ぎしりをさせながら、一方通行を睨みつけた。

「あァ？俺ですかァ？知りませェン。アンチスキルの方々の武器の威力がすごいンじゃないですかァ？」

いやァ、学園都市ってすごいですねェ。とニヤニヤしながら語る一方通行を見て、シェリーはやっぱこいつが何かしたのか、と理解した。

実はその通りで、シェリーの扱う魔術の解析が終わった一方通行は、エリスの足を掴んだ際、エリスを象った物質同士のつながりを緩めたのだ。

最早ただの塊と化したエリスを、学園都市製の銃弾が完全に瓦解させるのに問題は一つも無かった。

これで『パッと見アンチスキルが侵入者の攻撃を防いだ』と言っても差支えないだろう。

後はシェリーがゴーホームしてもらうのを待つだけだ。

「さて、そろそろお縄についてもらいますの。侵入者さん？」

怒りと殺意をぐちゃぐちゃに混ぜたような視線を一方通行に飛ばすシェリーに対して、アンチスキルと白井黒子が一歩前に出た。

それによってシェリーは頭に冷水を被ったように、頭を冷やして急速に落ち着きを取り戻した。

そして辺りを見渡す。武装したアンチスキルに、未だ健在の一方通行。ついでに一時とは言え初めて自身を拘束したテレポーター。

状況は、どう見ても絶望的だった。

「は、はは。なんだそりゃ。これじゃ、どこにも逃げられないじゃない」

「逃げなくても、お縄につけばいいじゃんよ」

黄泉川が銃を構えながらもジリジリとシェリーに向かって近づいて行った。

（はァ、流石にこれなら詰みだろォ）

一方通行は、さっさとなンかして逃げ帰れよ、それくらい余裕だろォが。と、心の中で念じた。

「あはははは！」

シェリーは思い切り笑いながら地団駄を踏む。

この行動に一同は疑問を浮かべるが、目的がはっきりした。

「「！！？」」

何とシェリーの足元にはぽっかりと穴があき、地下街の更に地下へと落ちて行ったのだ。

全員その穴へと走り込むが、走る足音が聞こえてきた為、逃走を図ったと判断された。

・・・

「黄泉川さん。どうしますか？」

アンチスキルの一員である才郷良太は、黄泉川愛穂の指示を仰いだ。

「これが罠である可能性が否定できないじゃん。

まさかこの下に地下鉄の線路が通っていたとは……ぬかったじゃんよ」

シェリー＝クロムウェルは、地下街の更に下にある地下鉄の通路を利用して逃走をしたのだ。

おそらく、念には念を入れてこの場で戦ったと言うことだろう。
何と用意周到な事で。

（これで帰ってくれればいいンだが）

一方通行はさっさと帰りたいという気持ちを抑えつつシェリー＝クロムウェル帰れと念じる。
しかし、何かが引っかかる。根本的に解決していない気がする。

ふと、シェリーの言葉を思い出した。

「うふっ、くふふ、うふふっふふふ！禁書目録に虚数学区の鍵に、第一位とさっき居た電気を使う女の子じゃない！まさによりどりみどりって奴ね。迷っちゃうわあ」

『禁書目録と虚数学区の鍵』

「まあ、ぶっ殺しちまえばいいよね。全部」

『狙いは第一位だけでは無い』

――――お前……戦争でもしてェのかよ……？

一方通行は、そこでハッと何かに気がついた。

「別に俺達を撃破する必要はねェンだよな……」

「ん？どうしたじゃん、一方通行？」

黄泉川は一方通行に尋ねるが、何やらぶつぶつと呟きながら考え事をしている。

「なァ、あの金髪なンか言ってなかったか？」

一方通行は自身の考えの裏付けを求めて、長くシェリーと対峙していたとみられる2人に尋ねた。

「んあ？あー、何か言ってたような……」

「……戦争の火種が欲しいから、暴れ回ってるんだ、みたいな事は言っていたぞ……」

駒場の言葉にアンチスキルの一同はギョッとするが、一方通行は確信を得た。

「クソ！！ってこたァ逃げたンじゃなくてターゲット変えただけかよォ！！」

一方通行は悪態をつきながら穴の中へと飛び込んで行く。

話についていけない一同は、ただ一方通行の動きをぼんやりと眺めるだけで終わってしまった。

・・・

「もぐ！もぐもぐもぐ！！うん、このポテチは中々かも！！」

「あー！大体そんなに食べちゃ駄目ー！」

「あなたはすっごく欲張りさんなんだね！ってミサカはミサカは呆れてみたり！」

「モノを食べる時はね、誰にも邪魔されず自由で、なんというか救われてなきゃあダメなんだ、独り静かで豊かで・・・と、ミサカはこのやかましい中もしゃもしゃとビーフジャーキーを食します」

「ええいやかましいぞ貴様らッ！！！」

今現在、浜面組と合流した９９８２号組は、互いに軽く自己紹介をした後、浜面仕上が乗ってきたワゴンでドンチャン騒ぎをしていた。

フレメア＝セイヴェルンと打ち止め、インデックスの３人は後部座席できゃいきゃいとポテチの取り合いをしていて、９９８２号はその取り合いに巻き込まれもみくちゃにされながらもげんなりとした表情で何処から持ってきたのかビーフジャーキーを食べていた。

そして。

「何だかすみません……お世話になってしまって」

「うへへ、別にかまわへんのよ……うふひひひ」

助手席に座る爆乳ガール・風斬氷華を見て、浜面の鼻は伸びっぱなしだ。

車は止まっているのにシートベルトをしている風斬。正直言って可愛い。

二つの丘に挟まれたシートベルトを見ていると、シートベルトが憎くて憎くてたまらないと感じる筆者。

今現在、浜面仕上は一方通行を越えるハーレムだった。
しかしその表情はイマイチ明るくない。

「はぁ……これが皆風斬ちゃんみたいだったらなぁ……」

「ミサカじゃ不満ですか？と言いたいところですが、あなたには言われたくねーです」

「うぐっ」

９９８２号の突き放した口調と、その言葉の節々に感じる「どうせあなたにフラグなんて立たない」と言う侮蔑。

「へっ……負け犬上等ォォ！」

浜面は自身のモテナイっぷりを鑑みて、それでも諦めずに奮起する。

「「！！？」」

しかし突如として、コンクリートで舗装されているはずの道路が、文字通り弾け飛んだ。

「なんだなんだ！？」

浜面は思わずワゴンから降りてその弾け飛んだ道路へと向かった。

するとそこには、

「ッ！！？」

巨大な石像に乗る金髪の女がいた。

一目見てわかった。

――――侵入者だ。

どう足掻いても勝てないだろう。浜面は素早い判断を下し、ワゴンへと駆けこんだ。

「あらぁ？うふふ、第一村人発見、てかぁ？」

シェリー＝クロムウェルは、目の前のワゴンをとりあえず叩き潰して、暴れながら禁書目録と虚数学区の鍵を探そうと決めた。

とりあえず最初の犠牲者は、目の前のワゴンに乗っている人々だ。

シェリーは舌舐めずりをしながら、エリスに獲物を狩るよう指示を出す。

エリスはズシンズシンと音を立てて走ってきた。

浜面は慌てて車を発進させようとするが、エンジンがうまくかからない。

学園都市製の車がなんてベタな真似を！！と心の中で叫びながら必死で鍵を捻る。

しかし、背後からは見た事も無いほどの巨大な石像が迫ってきていた。

これは車を乗り捨てた方がいいのではないか、と生死を分ける判断を迫られた浜面だが、思考は白いシスターによって中断された。

「ここは私に任せてほしいかも」

インデックスは、ワゴンから飛び出して、エリスの前に立ちはだかった。

「ばっ！！ガキが無茶してんじゃねえよ！！」

「先に行って！！狙いは多分、私かひょうかだから！！」

「な」

に言ってるんだ、と言おうとしたのだが、その叫びはインデックスの透き通るような声に遮られてしまう。

「左方へ歪曲せよ（ＴＴＬ）」

一言、宣告した。

それだけで、エリスがインデックスに向かって振り下ろすはずの拳は、左にそれて地面を叩きつけた。

どういうことだ、と浜面は考える。同時に、エンジンがかかった。

「早く、私が時間を稼ぐから」

逃げて。とインデックスは視線で訴える。

そうだ、インデックスが何をしたのかなんて考えている暇は無い。

「クソッ！！適当なとこにこいつら放り込んだら、戻って来るからな！！」

女の子に守ってもらうなんて、本当に情けねえな。と自嘲しながらようやく走りだせる状態になった車を、前方へと進めだした。

・・・

「あらあら、わざわざターゲットが残ってくれるなんて、ひょっとしてイージーモードかしら？」

得意気にチョークを振り回しながら、シェリー＝クロムウェルは笑う。

「上方へ変更せよ（ＣＦＡ）。左足を後ろへ（ＰＩＯＢＴＬＬ）」

シェリーはエリスに、インデックスを叩き潰そうと指示をだすのだが、インデックスの奇妙なアルファベットの羅列の朗読によって阻止されている。

彼女の発音法は、詠唱の暗号化と高速化を担うもので、膨大な魔術の知識を頭に納めているからこそできる芸当である。

――――強制詠唱（スペルインターセプト）。

これは魔術を詠唱中の魔術師に対して、でたらめなアルファベットの羅列を囁く事で魔術師の思考を遮り、詠唱をでたらめな状態で完成させると言うものだ。
目の前のゴーレムは、明らかにシェリーと言う術者が操っている。
ならばそれの邪魔をすれば、時間稼ぎが出来るだろう。

こんなとき、いつもは上条当麻がやってきて、魔術師を殴り倒すのだろう。
しかしインデックスは、何故か今日は一方通行が来るような気がした。

・・・

「あれ？地上だ……」

御坂美琴は、久々の日の光にうーん、と伸びを一つ入れた。

「ってなんでよ！！」

何故こんな結果になったのか。御坂には理解が及ばない。
思わずノリ突っ込みをしてしまったほどだ。

だがしかし、神は御坂に微笑んだ。

「あれ？侵入者と……白シスター！？」

前方で、巨大な石像がインデックスを追い回していた。

・・・

「あの……私も、行かせてください……！」

「ミサカは当然ついて行きますよ。と、ミサカは懐から銃を取り出し準備をします」

「まてまてまて！俺は戻るのは当然として、打ち止めとフレメアを守ってもらいたいんだが！！？」

３人は、誰がインデックスの元へ戻るのか揉めていた。

浜面仕上は、当然自分が戻らねばと思っているが、２人もインデックスを助けたいらしい。

９９８２号はただ単に出番が欲しいだけかもしれないが。

「何にせよ、じかんはねーから、風斬ちゃんと御坂ちゃんジャンケンでどっちか一人だけな！！」

「うぐ……仕方ないですね……じゃんけんしますよ。と、ミサカはグーを出すと宣言します」

「え、ええと……じゃあ、行きますよ……」

じゃんけんぽん。

９９８２号、チョキ。

風斬、グー。

「グー出すって言ったじゃないですか！！」

「で、でも……」

「ええい負けは負けだ！！打ち止めとフレメアの事頼んだからな！！」

おどおどする風斬を庇うように、浜面は叫び、３人をワゴンから降ろすと、猛スピードでＵターンして行った。

「ああ……出番」

「だ、大丈夫？ってミサカはミサカは慰めてみたり……」

「私たちほど、でばんは大体少なくないと思う。にゃあ」

・・・

「右方へ変更（ＣＲ）。両足を交差（ＢＢＦ）。首と腰を逆方向へ回転（ＴＴＮＡＴＷＩＴＯＤ）！」

インデックスの強制詠唱によって、ゴーレムは滅茶苦茶な動きをする。

それはまるで初心者のダンスのようで、それはまるで酔っ払いがやみくもに手を振り回しているようで。

滑稽だった。

しかし、そんなエリスとインデックスを眺めていたシェリー＝クロムウェルは、

「流石１０万３千冊を誇る魔道図書館。強制詠唱はお手のものって

かぁ？」

インデックスの知識量を褒め称えながらも、嗜虐的な笑みを浮かべてチョークを振るった。

瞬間、突如としてインデックスの命令を受け付けなくなったエリスは、予定通りインデックスを叩き潰すべく、拳を振るった。

それだけでインデックスは理解した。

――――ゴーレムは、遠隔操作から、自動制御に切り替わったのだと。

（ま、ずっ……）

まずい、と思う事すらかなわないうちに、拳はインデックスの元へと迫っていた。

「あんたこんな小さいのになにやってんのよ！！」

しかし、エリスの拳は、インデックスの目の前でストップした。

「あら？あなたはツインテールの子と一緒に居た電気の子！お久しぶりねえ」

「お久しぶりねえじゃないわよ！！こちとら地下街で迷ってたってのに、何で地上にでてんのよ！！？」

「そんなことより、エリスの拳、どうやって止めてるの？うふふ、是非教えてほしいわね」

「はぁ？私が電撃使いってわかってるんだったら簡単な話じゃない」

「電撃使い……ああ、なるほど。体の中に鉄とかも含まれてるからか……」

シェリーは突如として現れた御坂美琴の解説を聞き、得心した。

「つまり、エリスを完全にコンクリのみで構成してやれば良いのね？」

御坂に質問をしながらも、チョークを一閃させると、エリスの体から鉄筋やら何やら導電率の高い物質がボロボロと零れ落ちて行った。

「はい、これでほぼ導電率は0に近いものになったけど、どうする？」

「短髪、自分でペラペラと能力を語るのは頂けないかも」

「誰が短髪よ！どうせいつかばれる事でしょうが！！」

ぎゃーぎゃーと2人は言い争うものの、そんなことをしている暇は無いと理解しているのか、キッとシェリーを睨みつけた。

「「覚悟しなさい！（するんだよ！）」」

「……それは、こっちのセリフだっての！！！」

・・・

「……つうかさ、俺もあっちに戻ったところで何もできないかもしれねえってのに、
風斬ちゃんはどうするつもりなんだ？」

浜面仕上は、自分で言ってて虚しくなるが、風斬氷華にはとてもじゃないがあのデカブツをどうにかできるとは思えなかった。

「確かに、何もできないかもしれない。けど……友達が、戦ってるから……」

弱弱しい口調で、フルフルと震えながら語る風斬は、おおよそ「頼れる」とは思えなかった。

しかし、

その言葉は、

まぎれもなく本心で。

「……そっか。でも、無茶はするなよ」

浜面も、風斬を止める事は出来なかった。

・・・

「ていうか！何であの金髪ブッ倒したら駄目なのよ！！？」

「事情はあくせられーたにきいてほしいかも！！とにかく、倒すのはこの街の治安部隊じゃないと駄目だって！！」

御坂美琴は超電磁砲を放つのは3度目である。しかしいずれも石人形が再生して終わるだけだった。
直接石人形を操る人間を狙った方が早い、と言う御坂の正論に対して、インデックスは真っ向からそれを否定した。

「ええい、とにかく一方通行かアンチスキルが来たら良いのね！！だったら時間稼いでやろうじゃないの！！」

御坂はぷりぷりと怒りながらも、４度目の超電磁砲の準備を始めた。

・・・

「！誰かと一緒にあのデカブツと戦ってる……」

「あれは……御坂さん……？」

「知り合いか？だったら早く行った方がいいな……
風斬ちゃん、ちょっとここでワゴンから降りてくんね？」

「え？どうして……？」

「ちょっと考えがあってな。あのデカブツぶっ飛ばしてやる」

「……？よくわからないけど、わかりました。気をつけてくださいね……」

風斬氷華が降りたのを確認すると、浜面仕上は再びワゴンを走らせた。その距離およそ１００ｍ。

・・・

「あぁもう、早く誰か来てー！！」

御坂美琴は再生を続ける石の塊に辟易していた。

それだけならいいのだが、実は御坂もそろそろ充電が切れそうなのである。

学園都市第３位とはいえ、能力の使用には限度がある。

何度も何度も超電磁砲などと言う大技をかませば、能力使用に限界が来てもおかしくは無いのだ。

更に今は平時ではなく戦時。精神的に限界が来るのもいつもより早くて当然である。

さてどうしたものかと思案しているところに、黒塗りのワゴンが突撃してきた。

「そこの２人―！！！どけぇぇえええ！！！！」

「「！！？」」

その叫び声とワゴンのエンジンによる叫び声のシンクロを聞いて思わず横へと転がって行った。

「ＫＵＴＡＢＡＲＥデカブツゥゥゥ！！！」

浜面仕上もまた、限界まで加速したところで車から飛び降り、転がって行く。そして加速された車が、突然止まれるはずもなく。

エリスと言う巨大な石の塊にぶつかった事で、ようやく止まった。

その代わり、爆発したけど。

ワゴンと言う鉄の塊×速度×爆発＝浜面の魂の叫び。

エリスだったものの破片は、パラパラと辺りに散らばった。

「あ、あんた中々ド派手な登場するじゃない……」

ワゴンで突撃して自身はスタントマン顔負けの脱出劇。これほど派手な登場はなかなかないだろう。御坂はあきれながらも目の前の金髪ジャージをほめたたえる。

「あれ？御坂ちゃん？……じゃないなゴーグルしてないし、姉妹いるよね？」

浜面は９９８２号と面識があったため、御坂の顔を見て９９８２号かと一瞬思ったものの、ゴーグルの有無で違うと判断した。

「え？ああうん、いっぱいいるわよ」

どうやら浜面の予測は正しかったらしい。いっぱい、という表現はどういうことだと思ったけど。

「いっぱい居んの？まあいいや、俺浜面仕上。しがないスキルアウトです」

「私は御坂美琴よ、よろしく。こっちはインデックスって言うの」

「しあげ、さっきの登場はすっごくカッコ良かったかも！」

「へ？おう流石だろ？」

「ってあんたら知り合い……？どういう経緯で知り合ったんだか……」

と、和気藹々と自己紹介を織り交ぜた会話を交わす。

「あ、あのー……」

そんな中、おずおずと風斬が会話へと参戦した。ちょっぴり寂しそうな顔をしている。

「あ！ひょうか！！大丈夫だった！？」

「え、えと……何もしてないから無事、だよ……」

意を決してここまで来たと言うのに、本当に何もしていない風斬氷華は、しょんぼりしていた。

さて、ここで問題。風斬ちゃんは、シェリー編で何回しょんぼりしたでしょう。答えはＳＳ読み返してね。

・・・

モクモクと煙が上がっている。シェリー＝クロムウェルはおそらく無事だろう。エリスの後方１０ｍ程の位置にいたし。

自己紹介もほどほどに、辺りの警戒を再開する。何処から攻撃が

来るかわからない。何せ相手はコンクリを石人形に変えるのだから。

「これで終わりならありがてえけど」

「……多分、終わらないわよ」

御坂美琴の言葉に、浜面仕上はゲンナリとする。そう、あくまでも石人形は作られたもの。壊されたのなら作ればいい。

「エリスはこの程度じゃ、壊れないわ。うふふふふ」

ひゅん、と何かが空を切り、飛来してきた。それは高速でインデックスへと向かって行く。

シェリーの言葉に気を取られたのか、それとも飛来した何かが速すぎたのか、或いは両方か。いずれにせよ、高速で飛来する石に気付けなかった。

――――風斬氷華を除いて。

「!?危ない!!」

その石に気がついた風斬は、インデックスと石の間へと滑り込んだ。

しかし、それが精いっぱいだったのだろう。

パキン、と甲高い音を立てて、何かガラスが砕けるような音が響き渡った。

## そのさんじゅうきゅう　せんじょうのかたるしす（後書き）

ちょうど次回がそのよんじゅうなので、キリがいいし今度こそシェリー編ＯＷＡＲＡＳＵ
カタルシスって言いたいだけェ

## そのよんじゅう　すぺーすこぶらでまたあおうっ（前書き）

ちょっと駆け足気味。

## そのよんじゅう　すぺーすこぶらでまたあおうっ

「チッ！！あちこちに無駄に罠仕掛けやがってェエエェ！！」

盛大に愚痴を叫びながら地下鉄の通路を駆け抜ける。

何せ地下鉄の通路が無駄に枝分かれしていたせいで盛大に惑わされたのだ。

「あァもォいい！！一端外出るわ畜生ォォ！！」

面倒くさくなった一方通行は最初に見つけた駅から地上に出る。

そして高々と宙に飛びあがると、シェリー＝クロムウェルが何かしていないか、周りに聞こえてくる音に集中した。

すると、先ほど嫌と言うほど聞かされた、ズシンズシンという地響きの様な音が響き渡ってきた。

音が響き渡る。

と言う事はすなわち戦闘が再開されているのだろう。

急がなければ。

９９８２号も付いて行っているがあの石人形とは相性が悪いはずだ。

すると大爆発が起きた。何事かと眼を凝らすと、車が石人形にぶつかって爆発したのだろうと予測が出来た。

「っとよォやく見えてき……！！」

遠目からでもわかった。思わず目を見開く。
燃え盛る炎と煙を境目にして、シェリーが何かをして、石のような物を飛ばした。

高速で飛翔している今、まざまざと見せつけられた。

銃弾のように、インデックスに向かって突き進む石。
炎と煙の壁によって、それに気付かないインデックス。

一方で、一同の中で1人だけ気付いて石とインデックスの射線上に飛びこむ風斬氷華。

そして。

「風斬ィィィ!!!!」

風斬をとらえた、直径１０ｃｍ程の石を、一方通行は止めることが出来なかった。

・・・

シェリー＝クロムウェルの攻撃を受けた風斬氷華は、糸の切れた操り人形のように、地面に倒れ伏した。

「ひょうか！！」

そんな風斬を見て、インデックスは心配そうに駆け寄る。

風斬は、うつ伏せに倒れたまま、ピクリとも動かない。

「ひょうか……？」

ゆさゆさと、インデックスは一つも動かない風斬を揺する。

少し強く揺すったせいかゴロンと、風斬の体が仰向けになった。

「ッ！？」

仰向けになり、風斬の顔が露わになる。

しかし、彼女の顔は、文字通り欠けていた。

彼女の顔には、ソフトボール大の穴がぽっかりと開いていて、その中は、空白。

人体が機能するために必要な部位が、何一つ無かった。

その代わり、その頭部の中では、三角柱の形をした何かが、かちゃかちゃと音を立てて稼働していた。

あまりの光景に、インデックスは言葉を失う。

浜面仕上や御坂美琴も、その異様な光景に開いた口を閉じる事は

叶わなかった。

「え……？あ……」

誰とは無しに言葉にならない声を漏らす。すると、風斬が気付いた。朧げな視線を辺り這わせると、眼鏡がないなあと言った具合でペタペタと顔を触る。

「～～！！？」

風斬もまた、自身の顔の異常に気がつく。
そして冷静に辺りを見回すと、驚愕の色を浮かべた3人。
自身の顔に出来た空洞の縁を、ゆっくりと指でなぞる。

ふと、避難するためかは知らないが、道路に乗り捨てられていた車を見つけた。遠目に見ると、自分の姿がぼんやりと見える。
ふらふらと、夢遊病患者のようにその車の元へと歩いて行った。

「なに……これ……？」

黒塗りの窓ガラスから、風斬の顔が浮かび上がる。
ここにきてようやく、3人の表情の理由を理解した。

「う、そ……」

夢だ。そうにきまってる。そのように思いたかったが、インデックスに浜面に御坂と燃え盛るワゴン。

そして。

「ははは！何それ！！信じらんねえ！！学園都市ってのはこんな化け物作ってんのかよ！！趣味悪いなあ！！」

巨大な石人形を率いて高笑いをするシェリー。

これは風斬にとって、何処まで行っても、どうしようもない程に、現実だった。

「あ、ああ、」

自分が人外であるという事実を突き付けられた風斬は。

「うあああああああああ！！！！！」

今までの風斬とは思えない程の声量で叫び声を上げ、どこかへと逃げようするが。

「エリス！」

混乱のあまり、あろうことかエリスの正面へと向かって行く。

シェリーもその行動と叫びに驚きを示したが、冷静にエリスに風斬を殴り飛ばさせた。

エリスの拳を真正面から受け止めた風斬は、ピッチャー返しのように綺麗に真っすぐ吹き飛んだ。

そして無残に地べたを転が

……なかった。

「チッ……手間かけさせセンなっての……」

ボロボロの布切れのようになった風斬を、一方通行が受け止めた。

・・・

「風斬ィィィ！！！」

一方通行は思わず叫び声をあげてしまったようだ。

４人にはその声に気付かなかったが、シェリー＝クロムウェルだけはその声に気付いた。

「もう来やがった……」

自身の魔術は一方通行には通用しない。それを痛感させられた。

しかし何故一方通行がさっさと自分を倒さないのか。

答えは簡単、戦争を防ぎたいから、撃退したのは表向きはあの蟻共が行ったと言う事にしたかったのだろう。

だから一方通行は大っぴらに自分に攻撃は出来ない。

シェリーはそのアドバンテージを利用しようとすぐに決めた。

決めてからの行動は早い。何せわざわざ一方通行を相手取る必要はないのだ。

民間人を囮に一方通行の動きを封じればよい。

戦争を避けたいのであれば、民間人の余計な被害は避けたいところだろう。

故にシェリーは辺りの建物に向かって攻撃を放つ。

中に避難しているであろう民間人めがけて。

「クソが！」

散弾銃で銃弾をばらまいたように、弾丸と化した小石が辺りの建物へと向かって行く。

一方通行はそれを見て舌打ちをしながら小石を止めにかかる。

視線の先では、風斬が自身の異変に気がついたようだ。

（自棄になって変な気起こすなよォ……）

風斬の事を気にかけながらも、一方通行は小石を防ぎ、少しずつ近づいて行く。

（あァ！？なンであいつはあの石人形に突撃してンだよ！？）

混乱しているのか、風斬はエリスの真正面に向かって走っている。

シェリーもこの場で風斬を仕留めたら良いと考えたのか、一方通行への足止めの為の攻撃はストップした。

（チッ……！！）

すぐに風斬の元へと向かうが、エリスの拳が風斬を捉えた。

「あァークソったれが！！」

思い切り足を踏み抜き、吹き飛ぶ風斬の所まで跳躍した。

・・・

分からない。

誰が敵なのかも誰が味方なのかも。

分からない。

自分が何者かも、どうやって生まれたのかも。

分からない。分からない。

ただ、これだけは言える。

――――自分は、化物なんだ。

「あ、ううう……」

風斬氷華は我に返る。

自身の体を見渡すと、右腕はひしゃげ、顔には穴が開き、腹部にはひびが入っていた。

「は、はは……」

ばけもの。

化物。
バケモノ。
この体は人体としてあるべき姿では無い。
こんな化物がへらへら笑いながら綺麗な白いシスターと仲良くなろうなんて。
表情は乏しいが、多彩な感情を持ち合わせているゴーグルをした茶髪の女の子と仲良くなろうなんて。
そして。
「どう、して……私、何か……助けるん、ですか……？」
何処までも真っ白な少年は、風斬を抱えて地に降り立った。
自分が助けられたと言う事に気付いた風斬は、目の前の少年に尋ねる。
「……」
少年は、何も答えない。
「私は、こんな姿の、化物なんですよ……？」
「……」
少年は、何も答えない。
「クソッ……エリス！！」

何とか止めを刺そうとエリスを2人にけしかけるが。

「……お前らは黙ってろ」

片手で風斬を抱え、片手でエリスの拳を受け止めた。

「……私が消えれば、この戦いだって終わるかもしれないんですよ……？」

「……お前がこの戦いの行く末を決める必要はねェよ。黙って守られてろ」

「私は！！人間じゃないんですよ！！？」

助けてくれるのはうれしい。しかし、自分は人間では無い。見ての通り、今こうやって一方通行に支えられている間も、逆再生するかのように傷が治って行っている。明らかに致命傷だったと言うのに。そんな異物が、彼らの輪に加わっていいはずが無い。

「……そォだな」

一方通行は、風斬の問いを、肯定した。

「確かに、お前はヒトでは無いなァ」

「ッ……！！」

自分でもそんなことは分かっている。しかし、他人からそれを言

われるのは、やはり辛い。

「動物界後生動物亜界脊索動物門羊膜亜門哺乳綱真獣亜綱正獣下綱霊長目真猿亜目狭鼻猿下目ヒト上科ヒト科ヒト下科ホモ属サピエンス種サピエンス亜種。

……そォだな、確かに生物学的に見たらお前はこれには属さねェ」

だが、と付け加え、風斬が口を開く前に一方通行は話を続ける。

「そンな区分になンの意味があるンだ？」

「そ、れ……は……」

「初めてお前がインデックスと一緒に居た時、違和感を感じた。

その違和感の正体は、お前が『ＡＩＭ拡散力場の塊』である、と言う事だった」

「なら……あなたは、私が人間じゃないと言う事を前から知ってたんですか……？」

傷が治ったと判断されたのか、一方通行は風斬を地面へと降ろし、エリスの拳を弾いた。

「ッ……エリ」

ス、と言おうとした瞬間。

「……手を動かせば殺す。足を動かせば殺す。言葉を発したら殺す。石人形が動けば殺す。他の魔術を作動させたら殺す。

お前に許された行動は呼吸だけだ」

冷たい、機械音のような声で、一方通行は宣告した。

「……！！」

おそらく何かをしただけでシェリーはなす術も無く蹂躙される。
戦争だの何だのと言った事情など知らない、と言わんばかりに。
そんな近い未来が脳内に浮かんでくる程、一方通行の冷たい殺意は本物だった。
例えこのまま戦争に発展しても、目の前の白い悪魔には勝てないと、そう感じさせるほど。

シェリーの呼吸は荒くなり、手からはじわじわと汗がにじみ出るが、動かないように必死になった。

「……話が逸れたなァ。そォだ、あのゲーセンに行った時点で、お前がヒトでは無い事は分かっていた」

「……どうして、何も言わなかったんですか……？」

「だから、ンなことにどンな意味があるってンだ？
それとも、お前はなンか下心あってあのシスターに近づいたってのかァ？」

「そんなわけ、ないじゃないですか……」

わたしだって。

「わたしだって、あの子と友達でいたかった！初めて自分のことを友達と呼んでくれたから！！

だけど、私はこんな化物で、致命傷の怪我だってすぐ治って！！
そんなのとあの子は仲良くなりたいだなんて思いますか！！？」

風斬は、インデックスの表情を見ることが出来ない。

先ほど見た時は驚愕の一色に染まっていた。
確かにあんな物を見て驚かない方がおかしい。

それは別に構わない。

しかし、次の表情が、『恐怖』に染まっていたとしたら。
おそらく風斬の心は、崩壊する事だろう。

今の風斬に、それを確かめる度胸は、無かった。

「そォかつまりあいつが今でも友達だと思えるなら、それで大団円って事だろォ？」

「えっ？」

すると、背後から、小さなぬくもりを感じた。

「……」

インデックスは、何も言わずに、風斬を抱きしめる。

「どう、して……」

風斬は、今にも涙がこぼれおちそうな顔をするが、

「友達だから」

インデックスは多くは語らず、ただただ抱擁を続けた。

「う、あ……うああ……ふわあああああ！！」

風斬は、そんなインデックスの背中に腕を回し、貯め続けた涙を決壊させて、インデックスもそんな風斬に同調するように、もらい泣きを始めた。

「……別にヒトである必要はねェよ。ただ、心が人間なら、それで十分だ」

誰にも聞こえないほど小さな声で、一方通行は呟いた。ただ、風斬の耳はその呟きをとらえたのだが。

・・・

インデックスと風斬氷華は、身を寄せ合って恥も外聞も無く泣いていた。

シェリー＝クロムウェルは一方通行の命令に従って動けずにいる。

浜面仕上と御坂美琴は、よくわからないままに事態が収束して行くことについていけなかったのか、呆けている。

「……一体、どういう状況じゃん？」

ようやくやってきたアンチスキル＋αは、目の前の状況がわからないと頭を抱えた。

「あァ……やっちまったァ……」

なンか気分が乗ってあれこれ言ってしまった気がする。

それは厨二病患者顔負けの役者っぷりで。

（なんだよあのくっせえセリフ！！？臭すぎて鼻が曲がっちまうぞォ！！？）

早速、刻まれし黒歴史に顔を真っ赤にさせた。

一方通行の持つ殺意は完全に薄れ、それによりシェリーは我に返った。

これ以上は無理だと判断したのか、エリスを壊し、それを目くらましにしてどこかへと逃げて行った。

「……逃げられたじゃん……」

「そりゃお前らアンチスキルがちンたらしてるからじゃンよォ」

一方通行はその場に座り込み、もう仕事しませンよオーラを飛ばした。

「仕方ない……第八四支部はジャッジメントと協力して監視カメラで侵入者を追うじゃん。

第七十三支部は私と直接動くじゃんよ」

黄泉川愛穂は、アンチスキルを率いて再び仕事を再開した。
しかし、一方通行は、おそらく学園都市外に逃げたンだろうなあ、とあたりをつけた。
何故なら、主だったターゲットはこの場に集まっているのだ。そこから逃げると言うのならば、一時撤退なのだろう。

アンチスキルとそれについてきた白井黒子は、職務を全うするためこの場から立ち去ると、そこには一方通行、御坂美琴、インデックスに風斬氷華、そしてスキルアウト３人が残っていた。

「よう、お疲れさん」

「あ？あァ、互いになァ」

半蔵が一方通行に声をかけてきたので、適当に返答をした。

「ってそォだ打ち止めと９９８２号」

「あー、それならこっからしばらく行ったとこにある公園で待ってもらってるとこだぜ」

９９８２号って誰？と思いながらも打ち止めの事は知っているので、浜面はその居場所を教える。
一方通行はそれを聞いて９９８２号に電話をした。

『おォ、打ち止めは無事かァ？』

『ひょっとしてあなたはロリコンですか？と、ミサカはちょっと引

きます。
あと上位個体は無事です』

『ンなわけねェだろォが……つゥかついでかよ。
まァいい、今からそっち行くから、動くなよォ』

『了解です。ミサカももう腹ペコなんで後でご飯にしましょう』

『あァ、わかった。じゃあな』

通話を終えつつも、そう言えば打ち止めを保護してたスキルアウトに飯を奢らねば。と、自身の発言を思い出した。
こう見えて律義な男・一方通行である。

（まァ、俺も腹減ってるし、全員連れてけばそれでイイか）

最早思考すら面倒になったのか、半蔵達への約束を今日行ってしまおうと決めた一方通行は、

「おし、打ち止め達を回収したら飯行くぞォ。全員奢ってやる。まァ行くのはファミレスだけどな」

「「マジで！？」」

やだ、第一位の財力ってすごいと感じるスキルアウトや、
感動の涙を流していたが突如として目を輝かせる全自動食事機の白シスター。
第三位が奢られるのってどうなんだとか思うがまあいいやと電撃娘。

そして。

「私も……ついて行きたいけど……」

おずおずと、眼鏡をかけた少女は声をあげる。

「あァ？来たら良いじゃねェか、今更恥ずかしがってンなよ」

「ううん、そうじゃないの……もう少ししたら、帰らなくちゃいけないから」

「じゃあ帰るまで一緒に居たらイイじゃねェか」

「皆が楽しんでる中、途中で帰るのは無粋な気がするから、先に帰りたいの」

「……そォか。そンならじゃあ、またなァ」

「うん！じゃあ、また」

風斬は、笑顔で別れを告げた。

・・・

もう少ししたら、帰る。

どこに？

インデックスの、頭の中でぐるぐる回るまだ見ぬご飯の数々は、一気に霧散した。

急に不安になる。何気ない一言だが、そこに含みがあるように思われる。

まるで捨てられてしまった子犬のようなインデックスに、風斬氷華は優しく笑いかける。

「心配しなくても、私の本質は『ＡＩＭ拡散力場』だから、仮に消えるとしてもそれは何十年何百年後の話だよ。ただ触れられなくなるだけで、私は、あなたがわからなくても、ここに居るから……」

どうしてこのタイミングで告げるのだろう。まるで、今言わないといけないと言った口ぶりで、風斬が話す事にインデックスは疑問を浮かべた。

別に一生涯の別れを告げたわけでもないのに。

何の根拠も無いのに。

「ひょうか！！」

インデックスは、ゆっくり立ち去る風斬の背中に向かって、思わず叫んでいた。

「なに？」

クルリと振り返った風斬に向かって、

「また明日も、一緒に、皆と、遊んでくれるよね？」

インデックスは尋ねる。ぽろぽろと涙をこぼしながら。

風斬は、迷わず一言。

「もちろん！」

笑顔で応えた。

## そのよんじゅう　すぺーすこぶらでまたあおうっ（後書き）

「太陽」属性コミュニティである「風斬氷華」コミュを手に入れた。
「刑死者」属性コミュニティである「スキルアウト（半蔵、駒場、浜面）」コミュを手に入れた。

## そのよんじゅういち　ぱーそなる？ぺるそなる？（前書き）

久々に「マヨナカテレビ」ってキーボードに打ち込んだわ

## そのよんじゅういち　ぱーそなる？ぺるそなる？

外では雨が降っている。何となく窓から雨雲を眺めつつ、一方通行は電話で誰かと話していた。

『天井亜雄が失踪した？』

天井亜雄と言えば、絶対能力進化実験に参加していた研究者だったと一方通行は記憶している。それが今になって失踪したと言うのはどうにもきな臭い。

『……怪しいな』

『ええ、全く』

電話の相手、芳川桔梗も同意見らしい。何せ学園都市の研究者が失踪したのだ。もし仮に、外部に学園都市内で行われている事が伝えられたら、間違いなく面倒な事になる。

一般の研究者なら、そこまで秘匿すべき事柄を知る由も無いが、天井亜雄は絶対能力進化実験や量産型能力者計画にも参加していた。これが外部に漏れるのは学園都市側も防ぎたい事だろう。

『もう消された可能性が高いが、一応探してみるか……』

とはいえ、一介の研究者が後ろ盾無しに外へ逃げると言うのは難しいと言うか不可能だろう。

失踪した、と言う事は既に殺された可能性が高い。逆にテレビの中に入ったのだとしたら、それはそれで手がかりが増えるからあり

がたいのだが。

（もし仮にペルソナ能力に目覚めたとして、敵対された時。間違いなく面倒な事になるなァ）

何せ研究者だ。テレビの中の事について、何か知っているとしたら、是非とも話を聞きたいところ。

それが敵対するとなると、全く無駄骨になる可能性が高い。そう考えると、溜息も付きたくなるものだ。

『ええ、お願いするわ。あ、後打ち止めの調整は今日で終わるんだけど』

『あ？終わるならそれでいいじゃねェか』

『いや、９９８２号と一方通行が一緒に住んでるからか、打ち止めもその輪に加わりたいって言って聞かなくて』

『つまり打ち止めをうちのボロ家で引き取れ、と？』

確かに、打ち止めと言う存在は妹達の要と言えるだろう。これが狙われた揚句、上位個体として妹達に逆らえない命令を送られた、等洒落にならない未来が一方通行の脳裏をよぎる。

『まぁ、そう言う事になるわね』

『あー……それならもっと広いとこに引っ越した方がイイよなァ……』

それならある程度セキュリティがしっかりした場所。出来ればア

ンチスキル等の教師達が住んでいる地区。人の目による監視で、目立った動きが出来ないような場所が好ましい。

『えっ、いいの？』

すると、芳川が意外そうな声をあげる。電話の向こうでは目を見開いて、あら意外。みたいな顔をしているに違いない。

『何がだよ』

『打ち止めと住むの』

『……ンなこと言ったら９９８２号だってそォだろォが。それに、妹達の上位個体を狙う奴だっているかもしれねェ』

『ふむ……それもそうね……』

『まァ何にせよ、調整が終わったらまた連絡しろォ。こっちはこっちで色々調べるからなァ』

『ええ、分かったわ』

一方通行は電話を切ると、ボロボロになったソファーに携帯を放り投げ、ベッドに転がった。

ソファーで丸くなっていた９９８２号の頭に直撃して、

「あいたっ」と言う声が聞こえてきたが一方通行は無視する。

ところで、部屋の中はある程度掃除したものの、家具は買い替えてないのでボロッボロである。

唯一買い替えたのは冷蔵庫。これは重要で、気に入った一方通行は缶コーヒーを大量に購入するため、冷蔵庫は必須なのである。

「芳川からですか？」

「あァ、そォだ……打ち止めも一緒に住む事になったから、引っ越すぞォ」

「ミサカの時はあんなに渋ってたのに、上位個体の時はすんなり受け入れるなんて……
やっぱロｒあいたっ！」

「ちげェよ！……あの時と今じゃ、事情が違いすぎるっつゥの……」

「まあ、この部屋からおさらばして綺麗なとこ行けるなら何処でもいいですよ。
と、ミサカは劣悪だった環境を思い出してさめざめと泣きます」

以前、一方通行は金が無いと勘違いした９９８２号だが、今の今まで目の前で一方通行がたくさん出費をする姿を見てきたので、やっぱ金持ちなんだと認識を改めたのだ。
それゆえ、今回新しい部屋に引っ越すのは大賛成で、気を抜いたら足に何かの破片が突き刺さるような部屋からはＯＳＡＲＡＢＡしたいのである。

「まァ、その前に天井亜雄だなァ……」

「また失踪ですか？」

「その通りだァ」

一方通行は９９８２号の質問に適当に答えつつ、再び携帯電話を拾い上げ、電話をし始めた。

９９８２号はまた電話するなら、携帯電話放り投げるなよと内心愚痴るが、言ったら言ったでまた何かされそうなので言わない事にする。

『おーっす、こちら半蔵ー でぇっす』

電話先の軽薄な口調の主は半蔵。表でも裏でも行動出来る、そんなスキルアウトとつながりを持てたのは正直ありがたい。

とはいえ自分は能力者、それも第一位で、相手は無能力者のスキルアウト。

別に無能力者を馬鹿にするつもりはないが、相容れないと言うのは互いに理解しているため、それなりに仲良くしているのは半蔵、駒場利徳、浜面仕上の３人だけである。

フレメア＝セイヴェルンと打ち止めはかなり気が合うらしいので、そのうち打ち止めを連れて駒場達にも会いに行こうと思っている。

『よォ、ちと人探しを頼みてェンだが』

裏でもそれなりに動ける、と言う事でそのうち情報集めの依頼を頼む事になる、と言うのは先日ファミレス貸し切って馬鹿騒ぎした時に了承してもらっていたのだが、まさかこうも早く依頼を頼む事になるとは一方通行も思っていなかった。

『……誰をだ？ヤバい奴とか止めろよ』

学園都市第一位の一方通行の依頼となると、そんな簡単なわけがないと予想していた半蔵は、あらかじめ釘を刺しておくが、

『問題ねェよ。どっかに侵入しろとかはいわねェ。後で顔写真を送るが、天井亜雄って研究者を探してほしい』

一方通行もそのようなつもりは無かったらしい。

『研究者？何でまた』

『詳しいことは聞くな。……とりあえず、失踪したらしい。見つからねェ可能性大だが、探すだけ探してくれ。こっちはこっちで捜索にあたる』

『了解。期間はいつまでだ？』

『1週間。その間に見つからなかったら作業は打ち切りでかまわねェ。もしくはこっちが先になンか手がかり見つけたら、そっちに連絡する。その時も打ち切ってもらってかまわねェ』

『あん？一緒に探した方がイイだろ？』

『まァ、下手したら面倒な事になるからな。俺が見つける手掛かりは面倒な事になる可能性大だ。それでもイイなｒ『おっけー、深追いはしねぇよ』』

『……分かった。報酬は……そォだな、言い値で出そォか？』

『言い値っておま……難易度もわかんねーのに言い値でイイって言われても困るんだけど？』

『そンじゃ前金で３０。見つかったら７０上乗せで、見つからなくても２０乗せでどォだ？』

『……それは俺達スキルアウトへの依頼か？それとも俺個人？』

『お前個人の依頼だァ。駒場と浜面までなら追加で報酬を出しても良いぜ。
出来れば信用のおける奴だけで捜索に当たってもらいてェ』

『分かった。そんなら俺個人で動く事にするわ』

『ヤバそうだと感じたらさっさと手を引けよォ。最悪天井亜雄のプロフィールを軽く洗ってもらうだけでかまわねェ』

『見つかんなくても５０ももらうんだ。最低限の働きはしないと信用問題に関わるってもんだ。
まあヤバそうならさっさと逃げるけど』

『それでイイ。なンかあったらまた連絡するわ』

『おう、じゃあな』

電話を切ると、一方通行は再びソファーに向かって携帯を放り投げた。
ソファーで丸まっていた９９８２号は、「ふっ！！」と言う掛け声と共に見事に回避。

「ドヤァ…」と言わんばかりのドヤ顔をさらすものの、回避した勢いそのままにソファーから転げ落ちた。ドヤ顔で。

あいたっ、と短い断末魔が響き渡り、今日と言う日が始まった。

・・・

「また失踪者？」

上条当麻は一方通行の言葉を聞き返した。

「そォだ。まァ、テレビの中かどォかはマヨナカテレビを見ない事には始まらねェンだがな」

「それで、その半蔵ってのに失踪者に関して調べてもらってるわけか」

「失踪＝テレビって考えるのは早計だからなァ。外で見つかればそれでかまわねェし、テレビの中に居るってンなら見つけ出して色々聞きてェ」

先日の馬鹿騒ぎに1人だけ呼ばれず、しばらくいじけていた上条だが、「今度なンか会った時は手伝え」という一方通行のフォローで元気を取り戻した。

「てかマヨナカテレビ待たなくてもさ、テレビの中行けばクマが居るんだから、

誰か放り込まれてるかどうかだけでも分かるんじゃないのか？」

「確かにそうなんですけどね。そう思ってミサカ達も上条が学校行

ってる間に、布束の食糧送るついでに確認に行ったんです」

時はおよそ1時間前まで遡る。

・・・

「良いんですか？上条を待たずしてテレビの中行っても」

芳川桔梗の部屋。

家主は研究所に居るため、今この部屋に居るのは９９８２号と一方通行の２人だけである。

「あァ？誰か放り込まれてねェかの確認だけだからなァ。それならさっさと行った方がイイだろ」

一方通行はぶっきらぼうに答えると、ニュルンとテレビの中へと入って行く。

９９８２号も、特に異論があったわけではなく何となく聞いただけなので、

一方通行に追従してテレビの中へと吸い込まれて行った。

「ｗｅｌｌ、久々の登場ね」

「メタな事は言うンじゃねェよ」

「久しぶりクマー。さっそくだけど、人が放り込まれてるクマよ」

「……やっぱりかァ」

今までテレビの中に放り込まれてきた人物達は、それなりに絶対能力進化実験に関わってきていた。
ならば天井亜雄が放り込まれた可能性が高い。

「人が放り込まれたっぽいクマけど……何処に居るかまでは分かんないクマ」

「あァ？なンでだよ」

「最近、鼻のチョーシが悪いクマ。でも、放り込まれた人の人となりとか姿形みたいなのを教えてくれたら探せると思うクマ」

「つまり、天井亜雄について調べてきたらいいんですね？と、ミサカは確認を取ります」

「十中八九、天井亜雄が放り込まれたンだろォが、一応マヨナカテレビも確認しねェとなァ」

「確認出来たらまた来るクマー」

「ｆｉｎａｌｌｙ、私の出番……これで終わりかしら……？」

・・・

「……と言う訳なんですよ。と、ミサカは回想します」

「成程なぁ。でも何か、１人出番に関して不満をお持ちの方がいらしたようですが」

「気のせいだァ。そのうち出番回って来るだろ」

あんまりメタな事を言うと誰かに消されるので、話を元に戻す。

「そンな訳で、半蔵の報告とマヨナカテレビ待ちってところだなァ。幸い、今日は雨だからよォ。

俺個人でも調べてみるが、上条に出来る事はトレーニングしかねェ」

「この時間行くと間違いなく黄泉川先生いるから、行きたくねえんだけどなぁ……」

とはいえ、一般学生である上条に、研究者のプロフィールを調べられるような情報網はない。

そのためいつも通りトレーニングするしかないのだが。

「御坂はいいよなー。今頃アメリカだろ？」

広域社会科見学、と言う名目の元、アメリカへと渡っている御坂美琴をうらやましがる上条当麻。

「お前もこの間海水浴行ってきたンじゃねェのか？」

一方通行はきょとんとした表情で尋ねる。

どうやらアメリカもその辺の街も、一方通行にとっては『学園都市の外』という括りにすぎないらしく、余り興味を持っていないようだった。

「いやいやいや、アメリカと何の変哲もない街を同列に見たら駄目です事よ！？

海外、と言うだけで何だかすごいってイメージがあるんです！」

海外旅行の経験など一度たりともない人間の、説得力の欠片も感じられない力説に、２人は首をかしげる。

「ミサカも一方通行も学園都市の外にはろくに出た事が無いのでイマイチ伝わりませんね」

「んじゃ、そのうちみんなで旅行行こうぜ、旅行」

「良いですね、この間そのうち学園都市外に出たいってミサカ達も話してたんですよねー。

と、ミサカは学園都市の外に想いを馳せます」

「……まァ、このバタバタしてンのが落ちついたらだなァ」

とりあえず、いつも通りトレーニングだなァ。と言う一方通行の提案に、２人はげんなりとした。

・・・

「……」

芳川桔梗は、今現在研究所の一室にある高さ２ｍ大の円筒器の前でキーボードを叩いている。

モニター上のコンソールには大量の文字列が書き込まれ、

円筒器内の培養液では手術服を着た打ち止めが、芳川のタイピングに合わせるようにプカプカと浮かんでいた。

「後はこのプログラムを更新して終わりね……」

芳川は調整に必要なプログラムのダウンロードとインストールを終えると、ファイルの整理を始めた。

打ち止めの調整ついでに、自身の研究に関する幾ばくかのレポート等もまとめて自宅に持って帰るためだ。

調整の時間も残りわずかだが、持ち変えるべきデータは元々多くない。

故に調整が終わるまで、少しの間手持無沙汰になる。

その為、ただ何とは無しに、引き出しに放置されていた絶対能力進化実験の概要を納めたファイルを眺めていた。

特に意味なんてない。何度も何度も読み返したファイルだ。最早内容など暗記したも同然だった。

それは他の研究員も同じ事で、芳川は久々に見るなあ、と何となくそのファイルの中身を眺めていた。

すると、ファイルの中にある数百枚の紙の中に挟まれた、奇妙な用紙が見つかった。

「このデータは見たこと無いわね……？」

更新日時は、８月２０日と記されている。分からなくて当然だ。

自分がこのファイルを完璧に暗記したのはおよそ半年前。

それ以降このファイルを開く事は無かったため、分かるわけがない。

「自分だけの現実（ＰｅｒｓｏｎａｌＲｅａｌｉｔｙ）……？今更何の事を書いているのかしら」

何故、更新されているのか。
今更確認しても栓無き事なのだが、好奇心に負けて、そのデータを閲覧することにした。
そこには。
「これは……ッ！？」
突如として、芳川の後頭部に衝撃が走った。誰かに殴られたようだが、顔までは分からなかった。
そしてその部屋には更新が完了したと言うのに、培養液に浸り目を覚まさない打ち止めと、モニターに浮かんだｓｌｅｅｐｍｏｄｅという文字だけが残されていた。
・・・
夜。
いつも通りトレーニングを終え、いつも通りいつものレストランで夕食を取り、
いつもと違っていつもの店員に「たまには別の物食べた方がいいですよ」といつものメニューにサラダが追加され（サービスだそうだ）、
それらを完食した後いつも通り部屋へと帰宅していた。
そしてマヨナカテレビ。久々に眺めるなー等と何となく気の抜け

た感じで2人はテレビを眺めていた。

すると。

「「……！」」

やはり人影が映っている。顔は良く見えないが、誰かが何かから必死で逃げている様子だった。

映像は、それだけだった。

「……これでは誰が誰だか分かりませんね。と、ミサカは残念な表情を浮かべます」

「そォだな……」

研究者の失踪。それはすなわち暗部に消された、と言う事も考えられるため、必ずしもこの映像の主が天井亜雄とは限らない。

とはいえ、他に失踪したという情報も挙げられていないため、お手上げである。

どうしたものかと俯き思案する一方通行は、９９８２号の呼ぶ声で思考を中断した。

「またテレビに違う人が映っています！」

「あァ！？」

慌ててテレビに視線を戻すと、成程、人影がまた写っており、先ほどは男性のような人影だったが、こちらは女性の人影であった。
その女性は椅子に座り、頭を抱えているだけで特に動きを見せないまま、映像は途切れた。

「これは……」

「また、失踪者が現れたと言う事でしょうね。と、ミサカは目の前の事象を冷静に分析します」

失踪者の情報が無いまま、2人目の失踪者が現れた。
どういう事か分からないが、とにかく天井亜雄がテレビの中に放り込まれたと仮定して動いた方がいいかもしれない。

一方通行は、すぐさま上条当麻へと電話を飛ばした。

・・・

男は、溜息をつきながらある用紙を眺めていた。

「まさか、やっと見つかったと思ったら先に見られちまうとはなぁ……」

どうせ絶対能力進化実験は凍結されているのだから、誰も動きようはないのだが。
念には念を入れておくべきだ。

「ついでに、実験材料にもなるしな！」

結果オーライだろ！と気分を良くしたその男は、机の上にその用

紙を放り投げた。

用紙には、「Ｐｅｒｓｏｎａｌ　Ｒｅａｌｉｔｙ」と言うタイトルが新聞紙の見出しのように大きく強調されて書かれていた。

## そのよんじゅういち　ぱーそなる？ぺるそなる？（後書き）

誰がテレビの中行ったんだろーね（棒）

お気に入り６１件、じわじわと増えてて嬉しいです。ありがとうございます！

## そのよんじゅうに　なにこれちんひゃっけい（前書き）

おや、芳川さんの様子が・・・？

**そのよんじゅうに　なにこれちんひゃっけい**

＜？？？＞

落ちる。
落ちる。
何処までも落ちる。

こんな距離を落ちたらこの体もタダじゃ済まないな、などとぼんやりと思いつつも、すぐに終わりが見えた。

落ちた高さの割に、そこまで痛くなかった。
でもこんな異様な場所には居たくなかった。

「ここは……」

異空間が、そこにはあった。

・・・

「芳川が電話に出ねェ」

起き抜けに芳川桔梗に電話をしたのだが、出ない。
仕事を失った芳川に、今までそのようなことは無かったのだが。

「芳川は犠牲になったのだ……」

「うるせェってばよこのウスラトンカチィ」

「ナルトかサスケのどっちかにしてくださいよ」

「俺はナルトとサスケの両方を良いとこどりした奴よりも強えンだよ」

どこからそんな自信が来るのだろう、と９９８２号は思うが、これが第一位と言う事だろう。

冗談はさておき、９９８２号は話題を元の路線へと戻した。

「天井亜雄もそうですが、２人ともテレビの中に行ったものとして行動した方がいいのではないでしょうか？」

「そォだな……この状況だと、そう考えるべきか……」

しかし、それならば考える必要がある。

何故、２人の研究者が狙われたのか。

テレビの成り立ちもそうだが、妹達や２人が狙われた理由が分かれば、今後先回りする事も出来るかもしれない。

とはいえ、考えた結果が正解とは限らない、と言う事を念頭に置かねばならないが。

そして、芳川が失踪したとして、それがいつなのか。

昨日は打ち止めの調整を行っていた。ならば、打ち止めの安否はどうだろうか。

その旨を９９８２号に伝えると、

「今は、調整用の機材の中で睡眠中……みたいですね。上位個体の保護と芳川、天井の探索……どれを優先すべきか。

と、ミサカは多すぎるミッションに辟易します」

「そォだな……打ち止めの調整に関しては芳川頼り……かといって研究所に放置で無事でいられるのかもわからねェし……
何にせよ、上条と合流したら行くか、テレビ」

「そうですね。と、ミサカは相槌を打ちつつ立ち上がります」

「とりあえず、飯だ飯ィ」

案外呑気な一方通行と９９８２号であった。

・・・

＜??? ＞

「さて……ここはどこ?私は芳川」

記憶喪失はしてないらしい芳川桔梗は、目の前に広がるおかしな空間を見渡した。
巨大なホテルの様な建物に、そこから広がる広大な敷地。
それだけ。それだけしか存在せず、建物の周りには何も存在していなかった。
こんな意味不明な場所、寡聞にして聞いた事も、ましてや見た事も無い。

しかし心当たりは、ある。

「これはひょっとして、所謂テレビの中、と言う奴かしら……?」

堂々と正面入り口からホテルの中に入る。やはりホテルらしいその建物の一階は、ロビーの様な内装をしていた。と言っても、そこにはホテルマンもホテルウーマンも居ないのだが。

強いて言うなら趣味の悪いライオンの石像くらいだ、そこに存在していたのは。

初めて一方通行がテレビの中に入って行ったのを見て以来、一度は自分もテレビの中に入ってみたかった、と思っていたところなのだが。

「それはあくまで一方通行というボディーガードがあってこそなんだけれど」

1人でテレビの中に入るなんて思いもよらない。

（というか、一方通行や超電磁砲と、レベル5が2人も居たのにこないだはあんなにボロボロになってたし）

何も知らなかった当初ならば、入れるのならば1人で入りたかったところなのだが、ボロボロになった一方通行を見てその考えは霧散した。

それでも、入りたいという気持ちだけは変わらなかったのだが。

「何だか、嫌な気配がするわ……」

真っすぐ行って左に曲がったら、酷い目に会う気がする。

でも、真っすぐ行って右に行けば、大丈夫な気がする。

「どうせ駄目なら、大丈夫な気がする方に行った方が良いのでしょうけど」

絶対能力進化実験に関与した時点で、いつでも死ぬ覚悟は出来ていた。
しかし、それでは駄目だ。
無為のまま死ぬわけにはいかない。
無意味のまま生きるわけにはいかない。
ならばどうする？
「この直感が吉と出るか凶と出るか……」
何かつかめるかもしれない。そう考えた芳川は、左の通路を進んだ。
・・・
「はあ、スニーキングミッションなんて……」
面倒くさい。と、１００３２号はぼやいた。
９９８２号からＭＮＷを介して頼み事を頼まれたと思ったらこれだ。
もっと適任者がいるだろうと思うが、一応上位個体に関する事なので、仕方なく、本当に仕方なく任務を請け負った。
「９９８２号は前々から何かを隠してるようですし……」
一体何を隠しているのだろうか。
おそらくそれは、頻繁に９９８２号がＭＮＷから接続を切る事と

関係がある気がする。
おそらくそれは、一方通行にも関係がある気がする。

それは、直感に近い確信。

「全く、いつまでも隠し通せると思ってるのでしょうか。
と、ミサカは９９８２号の嘘の下手っぷりに笑います」

９９８２号が自身の体の調整の為に病院に来た時、それとなく話を聞いたのだが、あの時の９９８２号の慌てっぷりには内心大爆笑だった。
とはいえ、隠したいから隠しているのだろう。これ以上追及するつもりはなかった。

「おっと、この部屋ですね」

おそらく無人だろうが、一応辺りを警戒しつつ進んだ先には、打ち止めの眠る円筒器が佇んでいた。

「ふむ……無事は無事みたいですが……スリープモード……
と言う事は、休止状態ですか」

一体誰がそんな事を、と言う１００３２号の疑問には、誰も答えなかった。

・・・

上条当麻と合流した2人は、この後どうするかについて話し合っていた。

「どっちかって言うと、二手に分かれた方が良いんじゃないか？」

上条は素直な気持ちを答える。

「確かにそォなンだが……どンな不測の事態があるかわかんねェ」

「かといって上位個体を放っておくわけにもいきません。一応、１００３２号に研究所へ向かってもらって安否は確認してるのですが」

確認だけは済んでいる。調整は途中で中断されているが、中止されたわけでは無いので、再開出来れば問題ないそうだ。

それが不幸中の幸い、と言ったところだろう。

ただでさえイレギュラーなテレビの中で起こる不測の事態。

例えば、上条の影。例えば、上条のペルソナ。

「……上条関連ばっかじゃねェか」

誰にも聞こえないよう呟くと、一方通行は「お前やっぱ運悪いよな」と上条に同情した。

上条は、よくわかっていなかった。

・・・

＜？？？＞

「何これすごい」

芳川桔梗の視線の先、そこにはいつも一方通行達が相手にしてい

るシャドウ達がうじゃうじゃいた。
嫌な予感の赴くままに向かった先にこれだ。しかしそれだけでなく、その奥にもまだあると言う確信めいた予感があった。

「無いわー。本当、こんなのなら一方通行達について行かなくて良かったわ」

おそらく、こないだ一方通行達をボロボロにしたのは、目の前でうごめく異形達の相手をしたからだろう。

それ以外に心当たりが無い。

「ついて行かなくて良かったけど、結局テレビの中に来てるんだから世話ないわね」

と言いつつ自嘲した。
ついて行かなくてラッキーと思う反面、ついてないなあとも思う。
しかし、記憶をたどると、丁度打ち止めの調整が終わる直前から記憶がない。

「と言う事は、打ち止めが狙い……？」

これは拙いと冷汗をかくが、今更言っても仕方ない。
今はこの場を乗り切る事だ。あちら側の事は一方通行が居る。

「新ジャンル・戦う研究者、か……」

存外に、悪くない。
とはいえ戦う力など無いので、シャドウ達を避け、嫌な予感がする地点に更に近づいて行った。

・・・

いざテレビに向かった3人は、何やら慌てた様子のクマに迎え入れられた。
ちなみに、布束は寝ている。

「やっと来たクマか！また放り込まれた気配がしてるんだクマ！！」

「あァ、ひょっとしてコイツかもしれねェって奴について、1人だけ心当たりがあるンだ」

一方通行は芳川桔梗についての情報を、クマに語った。

「ふむふむ成程クマ……研究者だけど面倒くさがり、でも意外とおせっかい。それが芳川って人の人物像クマね？」

「まァそンなところだ」

「分かったクマ！……むむむ……」

一方通行からの情報を受け取ったクマは、頭を抱えてうんうんと唸っている。

「起きて下さい、朝ですよ。と、ミサカは布束に起きてもらうよう促します」

一方、9982号は布束を起こす為に、ゆさゆさと布束を揺らした。

「し、死んでる……」

「ｂｕｔ、別にそんなことは無かったぜ」

布束は９９８２号の言葉を否定しつつ、眼をこすりながら起き上った。

「おはよう布束」

「ｗｅｌｌ、やっぱり目を覚まして辺りが異空間だと、目覚めが悪いわ」

上条当麻は、のそのそと立ち上がる布束の手を取って挨拶を交わした。

こんな場所でよく眠れるなあと上条は苦笑しつつも、ペルソナについて尋ねる。

「なあ、起き抜けで悪いんだけどさ、ペルソナの扱い方……教えてくれよな」

「ｎａｔｕｒａｌｌｙ、そのつもりよ。……ところで、御坂さんは？」

布束は以前約束した通り、上条の言葉に同意しつつ、御坂美琴について尋ねた。

御坂は現在渡米中。

「……それは随分うらやましいわね」

「ずるいですよね、今頃お楽しみ中ですよきっと。と、ミサカはお姉さまの事を妬みます」

「だからこの事件が落ちついたら、皆でどっか遊びに行こうぜ」

「ｗｅｌｌ、それは面白そうね。私もほとぼり冷めたら外に出ようと思ってるし」

何だか戦闘前だと言うのに、和気藹々としていた。

今更変に緊張されても困るが、少し気を抜きすぎな気もする。

一方通行は、そんな3人を見つめ、少し溜息をつくとクマの方を再び向いた。

「むむ……あっちの方クマ！」

どうやら芳川はテレビの中に居たらしく、クマも芳川の事を捕捉できた。

「そォか……なら、行くぞお前ら」

3人も会話をすぐに中断し、気を引き締めた。

意外と切り替えが出来るンだな、とぼんやり一方通行は思いながらも、クマが向かう先について行った。

・・・

＜？？？＞

「本当、何なのかしら、ここは」

芳川桔梗は溜息をついた。
嫌な予感がする地点にまで足を運ぶと、そこには天井亜雄が横たわっていたからだ。
成程、今までの失踪者も、ひょっとしてこのテレビの中に入れられたと言う事だろうか。
と言う事は、布束砥信も？しかし彼女の死体は出ていない。

ならばどこへ？

流石の芳川も、テレビの中に留まりつつも生きているという選択肢は思い浮かばなかった。
それ程危険な場所である、と言う事を本能的に理解したからだ。

「さて、気絶してるだけならいいんだけれど」

おそるおそる、仰向けに倒れている天井に近づいて行くと、突如として天井が目を見開いた。

「んなっ」

ホラー映画の様なワンシーンを見せられた芳川は奇声をあげた。
流石にビビる。

「ここは……そうだ……私は……あ、あああ、あああああああ！！！！」

しかし、ビビっていたのは天井亜雄の方だった。
天井は芳川に気付いていなかったのか、一目散に駆けだして行った。

「なにこれ？」

芳川は訳がわからない、と言った表情で天井が走り去った方向を見やり、茫然とした。

意味がわからない。正気とも思えなかったが、あのようになった原因がここにあると言う事だろうか。

「ま、まあ元気そうだったし、大丈夫よね」

考えてもよくわからないので、先ほどの出来事は無かった事にしようとする。

しかし、そんな事をしなくても芳川の頭の中は、すぐにある事でいっぱいになった。

「……！！？」

ズキン、と鋭い頭痛が駆け巡って頭を抱える。

しかしそれはほんの一瞬の事で、すぐによくなったので顔をあげた。

すると、

「ドッペルゲンガー……？」

目の前には、自分が居た。

・・・

＜ホテル・グランドデトロイト＞

クマが連れて行った先には、ホテルの様な巨大な建物があった。
それはさながら海外の有名観光地の様な外観で、テレビの中では無かったのなら、楽しい旅行気分を味わえたのだが。

「おお……テレビの中とは言えこんな高級そうな建物の中に入っても良いのでせう？」

クマを除いた中で、一番貧乏な上条当麻は、目の前の立派な建物に尻込みしていた。

「見た目に騙されンな。どォせ中にはシャドウしか居ねェンだからよォ」

今までの中で一番捜索範囲が広いであろう目の前のホテルに、一方通行は溜息をつく。
新しい場所が増えるたびに面倒くさい構造になっていて、一方通行は、ＲＰＧじゃないンだから、もう少し楽させろよなと内心愚痴った。

「それが残念過ぎるんだよな」

上条もこんな立派な建物がテレビの中にあるという現実を嘆いているようだった。

「ｂｕｔ、そのうち旅行するなら、こんなところに泊ってみたいわね」

先ほどどっか行く話をしていた布束は、どうせ行くならこんなところがいいなあとのんびり話す。

それには一同も同意するようだが、如何せん目の前のホテルに泊まろうと思ったら、一泊いくら位するのだろうか。

「ですがどう考えてもこんな場所に泊ろうと思ったら、一方通行頼りですよね。

と、ミサカは進みゆく一方通行の財布化を懸念します」

「あァ？あンなモン端金だっつうの。気にすンな」

一方通行の財力は本当にすごい。しかも財布化している事も気にしていないと言う。

流石一方通行。諭吉１０や２０人くらいどうってことないと言う事だろう。

「クマ？クマも旅行行けるクマか？」

「何言ってんだよ、当然だろ？……あ、でもクマってさ、外に出られるのか？」

テレビの外に出た事のないクマは、旅行に興味津々であった。しかし出られるのかわからない。

「そういえば確かめた事も無かったクマね。帰る時に試してみて良いクマ？」

「好きにしろ。帰る為のテレビはお前が出すンだからよォ」

「分かったクマ！」

「ａｎｙｈｏｗ、このホテルを乗り切らない事には始まらないわよ

ね」

「だよな。それじゃあ、行こうぜ」

5人は、適度に落ちついて、かつ適度の緊張感を持ってホテルの中へと入って行った。

## そのよんじゅうに　なにこれちんひゃっけい（後書き）

最近投下が滞って申し訳ないです。
頑張ります

# そのよんじゅうさん　はるかにあおぎ、うるわしの（前書き）

芳川さんの夢と理想。

## そのよんじゅうさん　はるかにあおぎ、うるわしの

2人は相対した。
自分は自分を見つめ、一方で自分も自分を見つめている。わけがわからないよ。

「こんにちは」

「え、ええっと……」

穏やかな笑みを浮かべて佇む芳川桔梗（影）は、表情一つ変えずに芳川に対して挨拶する。
対して芳川桔梗（本物）は目の前の現象に理解が追いつかず、おどおどとしている。

ただでさえテレビの中という意味不明な空間に居ると言うのに、続いてドッペルゲンガーと来た。
ひょっとして、天井亜雄の元にもドッペルゲンガーが現れて、ドッペルゲンガーを見たら死ぬとか言う迷信を信じていた天井は必死こいて逃げていたとか、そんな感じですか？等とすさまじい勢いで目の前の自分について芳川は考察をしていた。

混乱は、必至と言えよう。

「ほら、挨拶されたら返答するのが礼儀じゃないの？」

ニコニコと、常識を教える母や教師のように、芳川の影は芳川に挨拶を促す。

「え、ああ、ごめんなさい、こんにちは」

思考が追いつかない芳川は、影の言うがままに挨拶を返す。

「よろしい」

芳川の影は、にっこりと微笑んだ。

そして芳川は尋ねる。

一見して悪い人間には見えなかったからだ。といっても見た目は自分だが。

「ところで、あなたは誰？」

「私は、あなたよ」

一言、言い放った。

私は、あなた。

私＝目の前の人・・・1

あなた＝私・・・2

2を1に代入すると、あなた＝目の前の人。

あなたとはすなわち芳川桔梗自身であり、目の前の人とはすなわち芳川桔梗の目の前に居る人。

と言う事は芳川桔梗＝目の前に居る人なので、あなたと私は同一人物である／／

成程、分からん。

意味がわからないから、とりあえず。

「へえ、あんたも芳川って言うんだ」

自分の好きな漫画の名台詞をオマージュしておいた。
ちなみに、筆者は未読なので実際に原作中にそのセリフが使われているのかは知らない。

・・・

芳川桔梗は今まで相当に気を張っていたため、目の前の自分自身を見ると、気を張っていた自分が馬鹿らしくなっていた。

「それで、何で私……だとややこしいわね。何であなたはここにいるの？」

最も気になる事。何故現れたのか。
研究者としては「どうやって」も気になるのだが、やはりここは「何故」の方が大きい。

この事は芳川桔梗の知るところではないが、そもそもテレビの中の霧が晴れた時初めて影は凶暴化するのだが、その時でなくとも、基本的には影は宿主から抜け出せるように誘導尋問のような行動に出る。

しかし、

「何でだと思う？」

ニコニコと子供の様な笑みを浮かべながら尋ねる影に、そのような意思は感じ取れなかった。

「……ここがそういう場所だから？」

どうとでも捉えられるような、割とアバウトな返答をしてみる。

「そういう場所ってどういう場所？」

しかし、逃げ道は防がれてしまった！

「なんて言うかこう……自分を見つめ直せよ的な？」

だが芳川は、ある種の正解を叩きだした。

上条当麻を例外として、御坂美琴も９９８２号も布束砥信も、自分の中に潜む影を見つめ直して、各々の影を受け入れて行ったのだ。

すなわち捉えようによっては、鏡は自身の外見を確認する物とすると、テレビは自身の内面を確認する物であると考えられる。

「ん、まあそんな感じでいいのかな？と言ってもこの世界の定義なんて曖昧だし、正解と思えば正解だし、不正解と思えば不正解なんだけどね。

ようは自分の心次第なんだよ、わかる？」

生徒の疑問を解消するべく、教師はゆっくりと丁寧に説明をするように、芳川の影は教鞭を振るう。

自分の心次第、ならば先ほど適当に挙げた「自分を見つめ直す為の世界」だと仮定すると。

――――なんとなく、わかる。

落ちついていて、諭すような口調。
物腰柔らかで、ゆったりとした態度。
まるで、小学生の頃、「こうなりたい」と夢見た憧れの――――

（これは、もし先生になった時の自分……すなわち、自分の願望の姿……？）

研究者になった時点で諦めた、夢。
絶対能力進化実験に加担した時点で霧散した、理想。

別に後悔はない。
許されるつもりもない。
許されていいはずが無い。

だがしかし、一方通行は、妹達は、打ち止めは、まだ子供だ。
罪を贖いたいと言う訳ではないが、３人が大人になるまでは、守ってあげたい。

おそらくは、芳川に残った夢の残滓。
それが今、目の前に居る。

それがわかった時、思わず笑みがこぼれてしまった。

「あなたは、私。ふふ……こんな私に、未だこんな感情が、姿が残ってるなんて。思わなかった……」

「良くわかったね、正解よ。私は、あなた」

芳川の影は、問題を正解させた生徒を褒めるように、微笑みを浮かべている。

しかし、残り物、みたいな表現を心の中でされたと感じ取った芳川の影は、一つ教えるついでにちょっと不満気味に口を開いた。

「ただ、「残滓」って表現はちょっと違うかなー。だって、夢は自分の中に残ってる限りは、残りカスだろうと自分の大部分を占めてようと、等しく夢なんだから」

先程までは芳川を導く教師の様であったと言うのに、今ではまるでからかわれてむくれる子供の様であった。

そんな芳川の影の姿を見て、芳川は更に笑う。

「ふ、ふふ……随分とまあ、子供っぽいわね……」

「ば、馬鹿にしないでよね！こっちだってちゃんと教えようと必死で……！」

芳川の影が弁明をしようとした瞬間、ゾクリとした何かが芳川の中を駆け巡り、続いてホテルが大きく揺れた。

最初このホテルで感じた悪い予感を数十倍悪くしたような、そんな嫌な予感が芳川の脳内で警鐘を鳴らしている。

おそらく、一方通行達が、戦っている。

だがしかし、何故こんなことがわかるのだろう。

ふと前を見ると、芳川の影が先程までの必死そうな表情を消して、穏やかな表情を浮かべていた。

「あの子たちが戦ってるけど、どうするの？」

芳川の影が問う。

「どうするって、決まってるじゃない」

答えは、一つ。

「なら、私を使えばいい。あなたの中の、夢の残滓を」

最後の最後に、芳川の影は自虐して、笑った。

そして、芳川は。

「全く、存外に見所があるものね、私にも」

２人は、１人に戻った。

・・・

＜ホテル・グランドデトロイトＦ１ロビー＞

無音。

それもそのはず、誰も居ないのだから音の立てようが無い。

しかし、そんな静かな空間に、足音が５つ。

「無粋な罠はねェよォだな……」

一方通行は前回、布束と上条の影によって作られた忍術屋敷を思い出して、罠の有無を調べている。

「あれは酷かった……」
「屋敷内の構造が大きく変わっても意味が無いあの罠にはマジギレしたものです」

あの時の事を思い出してげんなりとする2人。
しかしあの場での経験によって鍛えられたのも事実なのでそれ以上文句を言う事は無かったが。

「ｉｎｄｅｅｄ、あれはやり過ぎだと思ったけど、からくり屋敷なんだから仕方ないじゃない」

無粋とは失礼な。とやや憤った表情を浮かべつつも、布束砥信は壁をペタペタと触りながら歩いて回っていた。

一同はしばらくロビーを調べて回っていたのだが、特に何もなかった。
二階以降がどうなのかは不明だが、とりあえずこのフロアは安全そうである。

「さて……エレベーターがあるわけだが……」

扉を遠目に見ても分かるほどに、エレベーターは巨大だった。扉を見る限りでは、１００人は入るのではないかと言うほど。
奥行き次第ではあるが、横幅だけ見ると、そのように感じられた。

一方通行は、奥に見えるエレベーターと、その左右に見える二階へと進む階段を見据えた。
こんな訳のわからない空間に存在するエレベーターなど、誰が使うのだろうか。

安全だと言う事が分かれば使うのだが。いやしかし、以前行った研究所ではパソコンの電源が入らなかった。
だが一方で、からくり屋敷ではエレベーターが稼働していた。

なら目の前のエレベーターは？

興味本位で→のボタンを押しそうとした。

すると一方通行がボタンを押す前に、テンプレな機械音を立てつつ階数を示すランプに光が灯り、エレベーターは最上階から1階に向かって近づいてくる。
まさか本当に動くとは思わなかった一方通行は、ポカンとしてエレベーターの扉を眺めた。

「おや、どうかしましたか？と、ミサカは一方通行に尋ねます」

「いや、動くかどォか確認するためにボタンを押そうとしたら、その前に動いた」

「……迂闊すぎませんか？何が出てくるかも分からないのに……つーか押す前に動いたってことは」

「……虎穴に入らずンばなンとやらって奴だ」

誰か来るかもしれない。途中の階で止まるかもしれないが、何となく、それは無い気がした。何にせよ、エレベーターの行く先を見てから行動を再開したら良い。
そう考えた一方通行は、とりあえず何が起きても良いようにエレベーターから距離を取り、臨戦態勢に入った。
続いて９９８２号も新調した鋼鉄破りを構える。どこから入手し

たのかは聞かない。
そして残りの3人にも何か有るかもしれない、と呼びかける。

5人はエレベーターの扉に釘付けになっている裏で、ライオンの石像に埋め込まれた宝石が、ロビーを照らす光に当てられて、チカチカと石を持つように輝いていた。

しばらく待つと、エレベーターが1階に到着した。1階に降りてくるまで、他の階に止まることなく。
そして甲高い音が鳴り響き、エレベーターの到着を知らせた。

開かれる、パンドラの箱。

――ようこそ、おいでませ。

手荒い歓迎だな、と一方通行はほくそ笑み、上条当麻は、思わず「こ、こんにちは」と呟いた。
それを皮切りに、エレベーターからシャドウ達が殺到する。

## そのよんじゅうさん　はるかにあおぎ、うるわしの（後書き）

タイトルに深い意味はないです

あ、芳川さんはテレビに何ぞ入らなくても既に自分の心と向き合っていたのであンなンになりました。

っても芳川さんの裏側を想像できなかったってのがあるンだけども。

裏表ない人だし。

## そのよんじゅうよん　らくしたいんです（前書き）

久々にシャドウと戦います

## そのよんじゅうよん　らくしたいんです

＜ホテル・グラントデトロイト　Ｆ１０＞

１人に戻った瞬間、芳川桔梗の掌には、白く光るタロットカードが握られていた。

そして芳川の影が自分の中に居る事を理解した芳川は、この場にたどり着くまで、何故自分が危険を察知できたのかを把握した。

「成程……ここまで来られたのも、あなたのおかげだったのね……」

己の勘に従ってここまでやってきたわけだが、勘では無く、観測した結果だったようだ。

「ふふ、まさに研究者向きの『力』ね」

夢の残滓の癖に、皮肉った力をくれたものね。と、虚空を見つめ、笑いかける。

タロットカードは、芳川を祝福するかのようにキラキラと輝き続けていた。

・・・

＜ホテル・グラントデトロイト　Ｆ１ロビー＞

「数えンのも億劫になる数だなァおい」

エレベーターの扉が開いた瞬間、蜘蛛の子を散らすようにシャドウが解き放たれ、誰も居なくなったエレベーターは、再びその扉を

閉じた。

シャドウは一方通行達の存在を捕捉すると、獅子の様な咆哮を上げ、襲いかかって来る。

その動きを見た布束砥信はアトロポスを顕現させ、マハガルで威嚇した。

「ａｎｙｈｏｗ、最低限、心を強く保つ事が重要よ！悲しみだったり怒りだったり、負の感情があなたを蝕むわ！」

布束のマハガルによって足を止められたシャドウを確認すると、その隙をついて布束は上条当麻に力の振るい方を解説する。

解説と言っても、力を使えば使う程、暴走しやすくなると言うのは布束自身良く体験していたので、なるべく力の消費を抑えるようにとしか言いようがない。

「ａｎｄ、力の消費を抑えたいのなら、効率良く力を振るうしかない。マハガルーラ！！」

敵一体に対するスキルを連発するよりも、全体攻撃が見込めるスキルを使った方が良い。

ただ、その分力のコントロールにも気を使わねばならないが。

「中には、私の疾風属性が効かない奴が居るかもしれない。でも――」

更にコンセントレイトを唱えながら、チラリと全員を一瞥した。

ここまで説明すれば、全員が理解出来る。

「俺や一方通行、久々葉がそいつらを潰せば良いってわけだな！！」

「まァ、俺のシナツヒコも疾風属性メインなンだがなァ」

「せっかくいい感じのチームプレイなのに水を差さないでくださいよ。

つーかペルソナを変更するとか言うチートがあるじゃないですかと、ミサカは一方通行に突っ込みを入れます」

「クマ！あっちは疾風で、こっちは氷結が弱点クマ！

電撃は仕方ないとしても、美琴ちゃんが居たら火炎攻撃もできたんだけどクマ……」

マハブフーラ、マハガルーラ、電光石火。

広域範囲の攻撃が見込める技を、各々放っていく。

直接体を凍らされる。

吹き荒れる風に切り裂かれる。

鋭い拳撃と蹴撃に吹き飛ばされる。

風に煽られた氷塊に体を貫かれる。

そこらに居るようなシャドウでは、この全体への攻撃を抑えることなど叶わず。

中には吸収をするシャドウも居たが、吸収できない攻撃で殲滅される。

中には反射をするシャドウも居たが、反射できない攻撃で殲滅されるだけでなく、反射したスキルによって、周りのシャドウが殲滅される。

最早、災害だった。

しかし、クマが言った火炎属性が弱点のシャドウが、電撃属性が弱点のシャドウが、４人の放った攻撃の合間を縫って襲いかかってきた。

「お前らはそっち側を足止めしてろォ！！」

一方通行は火炎属性が弱点のシャドウ達を足止めするよう指示を出し、自身は電撃属性が弱点のシャドウ達の前へと飛び立った。

「――――クイーンメイプ！！マハジオンガァ！！」

マハジオンガ。全体に電撃属性の中ダメージ。

御坂美琴程の威力を持っているわけではないが、かなりの高出力である電撃をシャドウ達へと向ける。

一閃、シャドウ達の横を紫電が通過し、遅れて来るように巨大な雷撃がシャドウを襲う。

雷は、それを弱点としているシャドウだけでなく他のシャドウをも巻き込み、ことごとく蹂躙して行った。

シャドウの消滅を待たずして、一方通行は更にペルソナを変更する。

「カハク、マハラギ！」

火炎属性の方は、高出力のスキルを覚えていなかったのか、マハラギでシャドウの動きを止め、その隙をついて上条達３人が確実に仕留めて行った。

「……ｉｎｃｉｄｅｎｔａｌｌｙ、私と敵対した時そうやってペルソナをガンガン変えたら翻弄出来たんじゃないかしら？」

「本当だよ。俺なんかが無理して攻撃する必要なかったじゃねえか」

ペルソナチェンジと言うチート技を目の当たりにした布束は、若干ジト目で皮肉を言い放つ。しかし、あの時と今では状況が大きく違っていた。

敵対している人間に対して手の内を晒すのは愚の骨頂であるが為に後手に回った結果、味方達に余計な怪我を負わせるはめになったのだ。

最初から使っていれば、あそこまで被害は出なかったのだろう。流石の一方通行もあの時の戦闘は反省した。上条がペルソナを扱えるようになった、と言う事だけがあの時の戦利だろう。

とはいえ、暴走するかもわからない力をそう何度も振るわせるつもりはないが。

「バカ野郎、味方ですらあの時見せたのが初めてだってのに、敵対していた人間にそうホイホイと手の内を晒してたまるかよ」

本当は見せるつもりも無かったンだけどなァ。と、手の内を晒させざるを得なくさせた布束に対しての返答を、皮肉で返した。

この戦闘すらどこかで見られてるのではと考えると、余り使いたくはないのだが、余力は残しておきたい。

どの道、一方通行はシナツヒコより強いペルソナは今のところ所持してもいないのだから、ペルソナチェンジの存在を明かしている今、晒して困る手札は無い。

「それに、上条のペルソナの方が氷結属性攻撃の威力がたけェし、９９８２号のペルソナの方が物理攻撃の威力がたけェし、布束のペルソナの方が疾風属性攻撃の威力がたけェし。
なンつゥか、俺は器用貧乏属性なンだよ」

オールマイティだとか、万能だとか表現しないあたり、この空間では自分の力を過信出来ない事を良く理解していると言う事が見て取れた。
あの一方通行が、今までの経験上自身の力を器用貧乏などと断じてしまう程、この世界は甘くは無かった。

「とりあえずゥ……残り１０匹ィ！！！」

一方通行の叫び声を合図に、上条達は再び動き出した。
しかし戦闘による土煙も相まって、誰も気づかない。

――――エレベーターが、知らぬ間に最上階まで上昇し、そして下降を始めていた事に。

・・・

＜ホテル・グラントデトロイト　Ｆ７－８階段＞

「さて、一方通行達は1階に居るみたいね……」

芳川桔梗はエレベーターで1階まで降りようとか呑気に思っていたのだが、何故かエレベーターが作動してくれなかった（動いていたのに）ので、階段を使って下の階を目指していた。

「エレベーターがちゃんと動かないのも、この空間のせいなのかしら？

なんでも有り過ぎて考えるのが無駄に思えてくるわね……」

極力動きたくない芳川としては、エレベーターでガーッと1階まで行きたいところなのだが、如何せん何があるかもわからないのに密室空間に閉じこもるのは死亡フラグだろう。

とはいえ、この世界自体が死亡フラグだと思っている芳川からしたら階段で降りようとエレベーターで降りようとたいして変わらないので、どうせならエレベーターで降りたいと思うと言うことは自明である。

「1階にも強い気配を感じるけど、それとは別に強い気配がもう一つ……いや、二つ……？」

階段を下りつつも、うんうんと唸っている。

いくつか強そうな気配を感じとったようだが、どちらかあるいは両方がエレベーターに関わっているのだろうか。

逆にどちらも関わってないパターンも考えられるが、その場合はお手上げである。エレベーターの構造があちら側とは違うかもしれないし。

「何にせよ、一旦1階まで下りた方がいいかしら……？」

芳川は方針を決定すると、引き続き階段を下り続けた。

・・・

音が止んだ。

そこには一方通行達しか残っておらず、かなりの広さを誇っていたロビーだが、戦禍の傷跡が無い場所が無い、と言った状況だった。

「お疲れクマー」

「いえーい。と、ミサカはしゃがんでハイタッチします」

クマと９９８２号はハイタッチをして互いを労っている。

しかしここはまだ１階。何処まで行けばいいのかわからないと言うのに、最初からこれだと先行きが不安である。

「はァ……１階からこンな目に遭うたァ、今後が不安になって来るなァおい」

一方通行は気だるげに自身の白髪を弄びながら愚痴を吐く。一見気を抜いた様子に見えるが、その実周囲を警戒していた。

そんな一方通行を横目に、上条当麻は完全にリラックスして布束砥信と会話をしている。

「上条さんもあんまり長時間戦闘すると、後が怖いんですことよ」

「ｉｎｄｅｅｄ、暴走する可能性は否めないけれど、ある程度適性が合えばそこまでひどいことにはならないはずよ。

私の場合は、酷使しすぎたって言うのもあるし」

「へえ、成程な。それならマハブフーラよりも、普通にマハブフと武器使って戦った方がいいな」

「ｗｅｌｌ、敵の弱点さえ付ければ威力が低くても、私達で追撃できるから、その辺はあなたのさじ加減に任せるわ。どの程度の力を使えばいいのかって言うのは本人じゃないと分からないしね」

布束の言葉に、上条は少し思案する。

以前布束と戦った時と、先ほど戦った時、自分はどの位の力を発揮していただろう、と。

「そうだなー。強い威力のスキルは温存しておくとするよ」

今のところの最上位スキルは、『マハブフーラ』である。

しかし、鍛えればいずれはそれすらも使いこなせるようになるはずだ。ならば、少しずつ鍛えて行けばいい。

「何にせよ、さっさと移動した方がいいですね。かなり大暴れしましたし。と、ミサカは提案します」

「そォだな、とっとと上の階行くとするかァ」

「頑張って行クマー！」

一方通行の言葉を聞くと同時に、クマが階段に向かって駆けだした。

「クマッ！？」

すると、階段の手前で何か見えない障壁の様なものによってクマの通行は妨げられ、その光景を目にした一同は数瞬の間思考を停止させ、ポテンと倒れるクマを眺めた。

「あァ？」

最初に声を上げたのは一方通行だった。

しかし、どういう事かと考える間もなく甲高い音と共に、エレベーターの到着音が鳴り響いた。

そこから悠然と歩み寄る、2体の異形。

丸々と肥え醜い様相であるが、マントで身を包み、まるで女王の様な佇まいをしたシャドウ、『エンプレス』。

対して、長身に鎧を身に付けた、王冠を模した顔をして、まるで王の様な姿をしたシャドウ、『エンペラー』。

「新手クマ！すごく強そうクマよ！！」

2体のシャドウによって、ロビーの雰囲気は和やかな物から一変して、重苦しく、底知れない力を感じさせる物と成り変った。

しかし2体のシャドウは一方通行達の様子をうかがっているのか、これと言った動きを見せない。

先手を譲ると言う余裕を持っているのか、はたまたそのような事を考える知能は無いのか、何にせよ目の前のシャドウを倒さねば先に進めないようだった。

一方通行は様子見でマハガルーラを放つ。

するとエンペラーは大きくよろめいたが、エンプレスには効いて

いないようであった。
エンペラーは疾風が弱点で、エンプレスには無効。ならば布束と一方通行でエンペラーを、上条と９９８２号でエンプレスを相手に戦闘したらよいだろう。
一方通行は瞬時にその思考を脳内で巡らせ、指示を出した。
「そっちの丸いのはお前らで相手しろ！細なげェのは俺と布束でやる！！」
その叫び声に反応するよりも早く、３人は行動を開始していた。どうやら同じ事を考えていたらしい。
いち早く動き出した上条は、未だに動く気配を見せないエンプレスに攻撃を放つべく、ペルソナを出す。
「オケアノス！剛殺斬！！」
上条が叫ぶと背後からオケアノスが現れ、その手には身の丈ほどの大剣が握られており、それを力任せにして横薙ぎに斬り払った。
その斬撃は「斬る」と言うよりは「打つ」と言った方が正しいだろう。オケアノスの大剣を受け止めたエンプレスは、そのまま力の向きに従って吹き飛んで行ったのだから。
更にエンプレスが転がる方向に向けて、９９８２号が鋼鉄破りによる射撃を加えた。１発１発が２０００ｍ先にある戦車をも撃破出来ると言うその弾丸は、全てエンプレスへと吸い込まれるように直撃して行き、広大なロビーの隅にまでエンプレスは追いやられて行った。そこで一度、射撃を止める。
すると、ゴウ！とロビーを埋め尽くす音が鳴り響いた。
音の鳴った方を向くと、エンペラーが勢いよくエンプレスに向か

って転がってきていて、勢いそのままにエンプレスと正面衝突した。

・・・

＜ホテル・グラントデトロイト　Ｆ３通路＞

「あらら」

芳川桔梗は目の前の状況を見て苦笑いした。

戦闘を避けて避けて避け続けて１階を目指していたのだが、如何せんこの建物の構造を把握していない。

その為シャドウの接近を許した時、何処に隠れたらよいのか、皆目見当がつかないのだ。

その上、ただ単に階段が１階まで続いて居たら良い物を、この建物の階段は階数おきにいちいち階段の場所が違う。設計者出てこいと叫びたくなるほど嫌な構造をしていた。

それでも何とか気付かれないように、戦闘にならないように、慣れない隠密行動を取っていたのに。

そのツケが早くも回ってきたのか、『強い気配』のする所にまでたどり着いてしまった。まるで誘導されるかのように。

引き返そうにも、後ろにもシャドウの気配を感じる。幸いこちらには気付いていないようだったが。

「さてと、私も覚悟を決めるしかないみたいね」

進めども退けども、確実に戦闘になる。

「私の力、過信するつもりは無いけれど」

信頼くらい、しても良いと思うわ。

芳川は、引き返すことなく前へと進んだ。

・・・

上条当麻と９９８２号が余裕を持ってエンプレスを相手取る一方で、一方通行と布束砥信はエンペラーと相対していた。

相手は一体でこちらは２人。

自然と挟み撃ちの体勢になっていた。エンペラーがどちらかを攻撃しようとした隙に片方がガルーラを放つ。

それにより大きく仰け反ったエンペラーに対して、

「「ガルーラ！」」

まるで事前に話し合っていたかのように感じられるほど、息の合った攻撃を放っていた。

２人の放つ強風によって板挟みにされたエンペラーは、身動きが取れなかった。

続いてその隙をついた一方通行は、ガルーラを圧縮操作した物を掌に作りだし、エンペラーの元まで一瞬で近づき暴風の塊を胴長なその身体にぶつけた。

繊細な操作によって圧縮されていたその塊は、エンペラーに直撃

する事で捜査が乱れることによって暴風が一気に解放され、大砲のような勢いでエンペラーは吹き飛ばされる。
そして、吹き飛ぶエンペラーは上条と９９８２号によってロビーの隅に追いやられていたエンプレスとぶつかる事によって、ようやくその動きを止めたのだった。

そうして、４人の熾烈な攻撃によって大量の土煙が舞っている。
建物の中で土煙が舞う、と言う状況はおかしいとしか思えないのだが、華やかさを持っていたロビーは一転して、土煙が立つほどに廃墟のような空間と化していた為だ。
敵に反撃をさせる隙を与えずに攻撃を続けた。それ故に気付かない。
ただ単に、攻撃する気がなかっただけだった、と言う事に。

## そのよんじゅうよん　らくしたいんです（後書き）

頑張れ、芳川さん頑張れ

## そのよんじゅうご　ぅゎょしかゎっょぃ（前書き）

注意

んほおおおお！芳川さんしゅごおおおおおおい！

## そのよんじゅうご　ぅわょしかわっょぃ

「なにこのインリンオブジョイトイ」

芳川桔梗は身を隠しながら、げんなりとした表情で言い放った。
視線の先には縦に半分、黒と白の色をした体と、その逆白と黒で二分割され染められた髪の毛を有する変態が居た。

その名は『プリーステス』。
エレベーターの扉を背にしてM字開脚をしたセクシーなシャドウであり、どこかの青髪ピアスなら「アリやな」とか言うに違いない。
しかし一見ただの露出魔に見えるが、芳川はプリーステスからただならぬ気配を感じ取っていた。

（こいつ……強い……！）

一度は心でつぶやいてみたいワードベスト１６にランクインする、「こいつ……強い……！」を唱えられて芳川はご満悦であるが、実際に力をひしひしと感じ取っているので気を引き締めた。

「さて、一発かましておきましょうか」

気負った様子もなく、それが当たり前のような気軽さで、芳川は口を開いた。

「行くわよ、カシキヤヒメ」

どこまでも自然体の芳川の背後から、心の仮面が現出する。

・・・

芳川桔梗は誰に言う訳でもなく、自分にしか聞こえない程度の声で、呟いた。

「……カシキヤヒメ」

――――カシキヤヒメ。いわゆる初代女性天皇と言われた推古天皇。豊御食炊屋比売命（とよみけかしきやひめのみこと）だとか、豊御食炊屋姫尊（読みは前者と同じ）だとか呼ばれ、甥である聖徳太子を皇太子と摂政に就かせた。また、仏教とともに大陸文化を学び、中国の隋からも文化をとりいれたと言われている。別に芳川と何の関連も無い。ただ単に女帝コミュに芳川を据えるのに女帝っぽい推古天皇を使っただけで、別にこれと言って凄い逸話とかあるわけではない。

さて、ペルソナを出していつでも戦える状態にはなったのだが、如何せん芳川はただの研究員。

ペルソナによる補正がある程度かかるとはいえ、そんな簡単に動けるはずもなく。

（腰を据えて遠距離攻撃が良いんだけれど）

その意に反して自分のペルソナの特技（そのいち）は『観測』。

すなわち対象を観測、研究し、その弱点を導き出すと言う物。

微力ながら戦うためのスキルもあるのだが、残念ながら威力は高くない。

ちなみに、そのスキルはジオである。

（残念だけど、低出力。まあＲＰＧ的に考えて、弱いのは仕方ない、か……）

しかし、それを嘆いても無意味。今するべきは、目の前のシャドウを殲滅することである。

「あなたには悪いけど、その後ろにあるエレベーターは、止めさせてもらうわ」

芳川は、『観測』する力を以って自身の力と相手の力関係を測っていた。

しかし、単純に真正面から相対した場合、自身が勝つ可能性は、ほぼゼロ。

だと言うのに何故芳川は戦いに赴いたのか。

それはエレベーターにある。

別に楽して１階まで下りたい等では無い。プリーステスを観測した結果、今現在このシャドウはエレベーターに何らかの干渉をおこなっている。

何をしているかまでは分からないが、何かしら目的があるはず。

その目的は？

恐らく、異分子の排除。

異分子とは？

芳川と、まだ見ぬ一方通行達。

それならば、芳川がここで叩かねばと言う思考に至るのは、自明。

だが、芳川では少々役者不足である、と言う事は芳川自身も良く

理解している。

ならば、策を弄するしかあるまい。

（何とかエレベーターを捕りたいんだけれど……）

賭けに近い作戦しか立てられない現状に歯噛みしながらも、芳川は行動を開始した。

・・・

土煙が晴れる。

目線の先には変わらず2体のシャドウが泰然として佇んでいた。

かなりの力を以って打倒したはずだ。

にもかかわらず、結果は無傷。

一同の動揺は隠せなかった。

しかし、その隙はあまりにも大きく。シャドウ達が行動を起こすに十分すぎるほどの時間を与えてしまった。

「ガッ！！？」

「うぐっ！！」

一番近くにいた上条当麻と９９８２号の二人が、エンペラーとエンプレスの標的となった。

エンペラーは手に持った両刃の剣を上条に向かって振るう。

オケアノスを召喚して何とか受け止めさせたが、エンペラーの長

身から放たれた上から下への振り下ろしの威力はすさまじく、受け止めた上条も思わず膝をついた。

続いてエンプレス。

こちらは手に持った杖を振るい、マハガルーラのスキルを放つ。

これにより９９８２号だけでなく、その近くに居る膝をついた上条にまで凶刃の風が及び、２人して吹き飛ばされてしまった。

「２人とも大丈夫?!」

「どういう事クマ!?弱点が……」

うろたえる布束砥信とクマを横目に、一方通行は思考を加速させる。

最初に攻撃した時は確実に弱点をついた。

しかしいつの間にかその攻撃は弱点たりえなくなっていた。

ならばどうするべきか。

「こいつらの相手は俺が引き受ける!だからお前らは少し休んでろォ!!」

火炎・氷結・雷撃・疾風の４属性を扱える一方通行が、敵に通る攻撃としらみつぶしにするしかない。

「私も出るわ」

そんな一方通行の考えを知ってか知らずか、余力を残した布束もまた、戦闘に参加する事を申し出た。

「よし、なら布束は俺がペルソナを変える時の隙を埋めろォ！
そンで、クマは上条と９９８２号の事をしっかり見とけ！！」

「分かったクマ！がんばるクマよ！！」

クマは一方通行の言葉を聞くまでも無く、上条と９９８２号の元に駆け寄っていた。
それを見た一方通行はすぐさまシャドウ達に視線を合わせる。

「行くぜ布束ァ……」

「え、ええ……」

獲物を見つけた獣のような唸り声を上げた一方通行。布束は、ちょっと引き気味に追従する。
そして一方通行と布束は、上条達を遠ざけるようにシャドウ達を誘導させ、戦闘を再開した。

・・・

「とりあえず」

芳川桔梗はチラリとプリーステスの後ろに有るエレベーターを一瞥しつつ呟いた。

「エレベーターごとこのＭ字開脚女を何とかしたいわね」

それは異形でありながらも立派なプロポーションであった。そこに芳川の嫉妬が見え隠れしていたのは内緒である。

「まずは注意を惹きつけたいわね」

芳川は白衣の中から護身用の小型拳銃を取り出した。

「しかしどうして拳銃を持っているのかしら……」

テレビの中に来る事になってしまった原因を知らない芳川は、疑問に思う。

偶然こんなところに来るはずが無い。ならば誰かがここに来るように仕向けたはず。おそらく、明確な殺意を持って。

しかし御覧の通り、手元には武器がある。この程度の武器では役に立たないと判断したのか、それとも、「殺意を持って」と言う仮定が間違いなのか。

「何にせよ、使える物は何でも使いましょうか」

考える事は、後でもできる。

まずは生き残った後に考えればよいのだから。

思考を切り替え、目の前の異形を駆逐する方法を考えることにする。

「御坂さんの超電磁砲としての力があれば良いのに……」

と、芳川は溜息をついた。

エレベーターを『観測』した結果、最大定員は１５０人、容量は１トンに及ぶ建築基準法をガン無視した造りになってはいるが、その内部構造と機能は一般的なエレベーターと同じである事が分かっている。

「とりあえず、初手は頂いておきましょうか……ジオ！」

壁際に体を寄せ、プリーステスの死角に身を置いていた芳川は、一気に駆けだしてその身を露わにした。

プリーステスもそれにすぐに気がついたようだが、芳川のジオにひるんだらしく、再び身を隠した芳川を捕捉するかのように髪の毛を目まぐるしく動かしていた。

「やっぱり、エレベーターからは動けないようね……」

再び壁に身を寄せて、芳川はプリーステスから見えない位置に座り込んだ。

やはり芳川の予想通り、エレベーターに何らかの細工を施す為に、エレベーターの前から動けないらしい。

「エレベーターを操って何の得があるのかしら」

1階での出来事を知らない芳川は、プリーステスの行動に首をかしげた。

「まあ、どうでもいいわよね」

芳川を捕らえるべく伸びてきたプリーステスの髪の毛を避け、再びジオを放つべく駆けた。

「ジオ！」

威力にして妹達の『欠陥電気（レディオノイズ）』程度だろうか。

しかしそれでも、妹達の放つ雷撃の電圧は5万ボルトに達する。

とはいえ媒体が無ければその威力は半減するのだが。

「狙いはあなたじゃなくて、エレベーターなのよね」

芳川はエレベーターにジオが直撃した事を確認すると、手に持った小型拳銃をカシキヤヒメに投げ渡した。

それを受け取ったカシキヤヒメは、1発エレベーターに向かって発砲する。

すると弾丸は、エレベーターのボタンを直撃し、エレベーターが3階に向かって移動を始めた。

プリーステスは、移動を始めたエレベーターを見てそれを止めるためか、髪の毛をエレベーターの扉の間に滑り込ませる。

「そんな隙を作ったら、攻撃したくなるに決まってるでしょうに」

カシキヤヒメは着物を着ていたのだが、手に持った小型拳銃を袖の中へと滑り込ませた。

すると何かの骨を砕いたかのような鈍く低い音が鳴り響く。

音が鳴りやんだと思ったら、カシキヤヒメの着る着物の袖から、再び小型拳銃が出てきた。

「何か、ハガ〇ンっぽい能力よね」

カシキヤヒメの能力そのに、『作成』。

『観測』した物を材料にして、任意の何かを作り出す事が出来る。

ただし、無から有を作る事は出来ないし、例えば、鉄原子から炭素原子を作りだすなど、ある元素を別の元素に造り変えることなども出来ない。また、カシキヤヒメが触れた物でないと『作成』は発動しない上に、発動までタイムラグがあるので、最低でも5秒は触れないとならない。

「そんなわけで、擬似レールガン！」

芳川の言葉に反応したカシキヤヒメは、手に持った小型拳銃にジオをかける。

すると短い銃身に視認出来るほどの強力な電気を帯び、そしてカシキヤヒメが引き鉄を引くと、摩擦熱やジュール熱等の大きな熱量を帯びた弾丸が銃口から飛び出した。

音を置き去りにしたその弾丸は、プリーステスを捉え、エレベーターの扉を破壊してプリーステスをその中に吹き飛ばした。

プリーステスがエレベーターの通路に体をうずめているのを確認すると、芳川はカシキヤヒメの握る小型拳銃に目をやった。

「あー、間に合わせで作ったからこうなるわよね……」

先述したとおり、弾丸を発射するにあたって、その時に発生した熱によって銃口の中はドロドロに溶けてしまった。

時間をかければ電磁投射砲を作りだす事も出来たかもしれないが、そこまでする時間は無かった。

と言うよりは、最早擬似レールガンなど、不要。

「エレベーターだッ！！」

プリーステスが芳川の立つ通路まで戻ろうと髪の毛を伸ばすが、その頭上からエレベーターが降りてきた。

急な事に対応しきれなかったプリーステスは、何とかエレベーターを受け止めようと試みるが、その質量によって下へ下へと押しやられて行く。

「無駄無駄無駄、と言いたいところだけれど」

そんなラッシュ出来るほど芳川のペルソナは力に長けていない。

その為、とどめはどうするかと言うと。

「『観測』していたのは、あなたと拳銃だけではないのよ」

エレベーターに『作成』をかける。

しかし目的の物の質量が大きすぎる為、完成まで時間がかかりそうだ。

この『作成』の力、材料さえ有れば万能に見えるが、案外そうでもない。

なぜなら作る物の質量・大きさに応じて目的の物の完成に時間がかかるのである。

それゆえこのような世界で巨大な物を作ろうと思うと、単独では造る事は出来ないだろう。一言で言えば隙が大きすぎるのだ。

更に言えば、より大きな質量の物だったり、より精度の高い物だったりと、物の『質』によって『作成』するのに、より大きな『力』を使う。

故にあまり派手な事をすると『暴走』する恐れがある、と言うのは余談である。

エレベーターがプリーステスを下へと追いやり、芳川の目の前に現れる。

それを確認して芳川はエレベーターへと乗り込んだ。

「さて、それでは下へまいりまーす」

エレベーターガールの様に1階のボタンを押すと、壊れた扉が閉

じるふりだけをして、エレベーターは下に降りようとした。

しかし、それは叶わなかったが。

「やっぱり抵抗するわよねー」

のんびりと焦った様子も無く、芳川はエレベーターの天井に穴をあけ、その上へと登った。

しばらくするとエレベーターの床に穴が開き、白と黒の長い髪の毛がエレベーターの至る所に張り付く。そしてそれによってプリーステスの体を持ち上げた。

プリーステスは芳川の姿を探す。

するとすぐに天井の穴を見つけて、髪の毛を伸ばした。

だが、髪の毛は芳川に及ぶ事は無かった。

「あなたの敗因は……ただ一つよ……プリーステス……たった一つのシンプルな答え……

『私の力の丁度イイ実験台だった』」

憐れプリーステスは『エレベーター』と言う名の『弾丸』に詰め込まれて、1階に向けて放たれた。

芳川は、エレベーターとその通路を利用して、レールガンを『作成』したのだった。

これにより弾丸と化した女教皇『プリーステス』―完全敗北・死亡！

・・・

攻撃が通らない。
たまに攻撃が通ったと思った矢先、すぐに通らなくなる。
この現象を一方通行は「まるでパラダイムシフトだな」と評した。

「さァて……ここまで弱点がわかんねェとなると……」

少し思案するような顔を浮かべる。布束砥信は、一方通行に何か策があるのだろうかと思い、その口が開かれるのを待った。

「うン、勘で行くしかねェ」

布束は思わずこけそうになった。

「……ｉｎｄｅｅｄ、何の策もない私が言える事でも無いけれど」

「仕方ねェだろ。わかンねェもンはわかンねェンだよ」

完璧な人間なンて、居ねェンだよ。と、哲学っぽい言い訳をする一方通行。
確かにその通りだとすんなり納得した布束。

イマイチ緊張感に欠ける戦場だった。
しかし、突如としてその妙な空気は破られた。

エレベーターの扉が吹き飛び、膨大な熱を帯びた風が吹き荒れる事によって。

・・・

「なンだなンだよなンですかァ！？」

突然吹き飛んできたエレベーターの扉と熱風を見て、自身の背後に居る上条当麻や９９８２号、布束砥信とクマの４人を守るためにそれらを防いだ。

しかし、エレベーターに最も近い位置に居たエンペラーとエンプレスは、やはり効いた様子では無かったが。

上条と９９８２号が背もたれに使っていたライオンの石像に埋め込まれた宝石の輝きは、いつの間にか失われ、エレベーターの中に居たはずのプリーステスも、消滅していた。

そしてそのエレベーターからは、

「芳川ァ！？」

芳川桔梗がのんびりと現れた。

「あら、やっぱり一方通行達だったのね」

何処までもマイペースな芳川は、チラリと2体のシャドウを一瞥した。

「そっちの王様みたいなの、『エンペラー』って言うんだけど、氷に弱いみたいね。

あっちの女王みたいのは、『エンプレス』。こっちは殴る蹴るとかの、普通の物理的な攻撃が効くわね」

さも当然のように2体のペルソナの弱点を言い放った芳川に、一方通行達の動揺は隠せなかった。

「どォいう事だ？」

一方通行は怪訝そうな表情で、芳川に尋ねた。

「なんの事は無いわ。まあ、論より証拠って奴ね……カシキヤヒメ！」

説明するのも面倒だったのか、芳川はカシキヤヒメを呼び出した。そのペルソナを見て一同は眼を見開き驚愕する。

「何か私のドッペルゲンガーが出て……あ、そんなことより、早く攻撃して欲しいんだけど」

芳川の言葉通り、ゆったりと会話する余裕など有るはずもなく。エンペラーとエンプレスが、芳川に向かって走ってきていた。

「え？何でこっち来るの？」

芳川は、実を言うと既に限界だった。

初めてのペルソナに初めての力の行使。それだけでなくエレベーターを使ったレールガンは、威力・質共に高レベルなもので、非常に大きな力を使わされた。

故にこれ以上の『作成』は実質不可能。『観測』もあまり多用は出来ないだろう。

芳川の顔からは、フルマラソンを終えたランナーの様に大量の汗が噴き出ていた。

「そりゃお前が一番近くて手頃だったからだろォが！！」

何て呑気な奴だ、と内心愚痴りながらも一方通行は芳川の元へと駆ける。

そして2体のシャドウに追いつくと、まずエンプレスを思い切り蹴り飛ばした。

続いて、その蹴った勢いに乗ってエンペラーへと向かいながら、叫ぶ。

「ジャックフロストォ！！」

一方通行の背後から、雪だるまの人形のような可愛らしいペルソナが現れた。

御坂美琴が見たら目を輝かせる事間違いなしだろう。しかしそのペルソナが放つ攻撃は、非常に強力。

ジャックフロストから、全てを凍てつかせるブフーラが放たれた。

「エターナルフォースブリザード（笑）」

芳川が爆笑している。一方通行の強面からあんな可愛らしいのが生まれるとは思っていなかったのか、かなりツボにハマっていた。

芳川は「ペルソナチェンジ」を知らないため、一方通行＝ジャックフロストだと勘違いしたからというのも爆笑する要因になったのだろう。

呑気な芳川の相手をすると気が抜ける。

一方通行はそのように判断を下し、エンペラーとエンプレスに目をやった。

どうやら一方通行の一撃を受けたエンプレスは、今まで勘で放ち

続けた攻撃も相まって限界が来たらしいが、エンペラーに関してはまだ力は残っているらしく、手に持った剣を一閃させ、軽く地面を切り裂いた。

「あら、変わってるわねこのシャドウ。弱点が変わったわ。今度は風に弱いみたいね」

一方通行は成程、と思う。過程はどうあれ、芳川は「研究員」。ならばそのペルソナは「調べる」事に長けていると言う事だろう。その過程に関しては、後で聞く事にしよう。

一方通行は、最後の一撃を放つ。
シナツヒコの風と、自身のベクトル操作を使って。

「ｗｅｌｌ、オーバーキル過ぎない？」

元気玉を作るかのように両手を掲げる一方通行を横目に、布束はエンペラーに対してガルーラを放った。
その暴風を受け止めたエンペラーは、エンプレスと同様に消滅の運命を辿る。

そして戦闘は、ようやく一つの終わりを迎えた。

・・・

「俺のこの滾る思いは何処にぶつけりゃイインだよ？」

「ｗｅｌｌ、ラウンドファイナルにむかつくプリクラ機があるらし

いから、それにぶつけたら？」

「そいつは最高に楽しそうだなァ」

・・・

＜？？？＞

男は走る。走る。走る。

何かから逃げる。
ナニかから逃げる。

しかし、光ある所には影がある。
光が影から逃れられるはずもなく。影が光を逃すはずもなく。

「あはっ」

ナニかの笑い声が響き渡り、男は何処にも居なくなった。

## そのよんじゅうご　ぅわょしかわっょぃ（後書き）

ハガレンの錬金術っぽいオリジナルスキルです。
芳川さんが好きなのでこんな力が宿りました。
でもチート技は用法用量をお守りください。

そんなわけであまり多用は出来ないです。

## そのよんじゅうろく　うごめくわる（前書き）

なんか……禁書原作の事件と……ペルソナの要素を混ぜるみたいな感じで息まいてたけど……全然そんなことなかったぜ！（開き直り）

## そのよんじゅうろく　うごめくわる

「ここが噂の研究所ですかっと」

半蔵は身を潜め、息を潜め、体を無人の研究所へと滑り込ませた。
目的は、天井亜雄の行方。

こんな所に居るとは思えないが、何かしらの情報が掴めたら上出来。
と言っても、後1週間もしたらこの研究所は取り壊されるらしいので、ろくな資料も残っていないだろうが。

「はぁ……研究者って表と裏の境界線が曖昧だからなあ……」

何処まで深追い出来るのか。その境目を見定めるのが難しいことこの上ない。と、半蔵は溜息をつく。

今現在、天井亜雄に関するの情報はある程度集まってはいる。
概要は不明だが、ある研究で失敗した事による責任を負わされ、借金を重ねた所で路頭に迷っていた所を別の研究に据え置く事で拾われたようだ。こちらの研究に関しても概要は不明で、察するに人様に言えないような内容の研究をしていたと言う事だろう。
研究内容についてはこれ以上調べるつもりはない。

そして失踪。これは時期的には『侵入者』が学園都市外部からやってきた時の事らしい。
すなわち失踪してからまだ1週間経つか経たないか程度。

半蔵は、最後に天井が居たと思われる研究所を調べて、ここまで

やってきたのだが。

「うん、何も無いな」

やはりというか案の定というか、研究に関わる重大な資料は全て回収もしくは消去されたようだ。

こちらとしてもいらん事を知って狙われるのは本意では無いので、ありがたいと言えばありがたいのだが。

しかし、半蔵は見てしまう。知ってしまう。

命を狙われるに値する、『いらん事』を。

・・・

「成程なァ」

一方通行は芳川桔梗に起きた出来事を聞いて、納得する。

確かに表裏の無い性格だと思っていたが、ここまでとは思わなかった。

芳川もその影も平常運行。確かに無駄な戦闘を避けられたのは僥倖ではあるが。

（俺も最初からペルソナは使えたが、自身の影とは出くわしてねェ）

今まであまり考えてなかったが、異常な事である。

芳川に関しては、既に自分を受け入れていたから、すんなり影も受け入れられたと納得できる。

他の面子に関しても、紆余曲折を経て、何とか自分を受け入れられた。

なら、一方通行は？

柄にもなく色々考えてはいたが、自分を受け入れられるか？と問われたら、正直なところ、否である。

イゴールに聞けば何か分かるだろうか。

いや、その前に何か重大な事を忘れている気がする。

思い出せない。霧。夢。深い霧。夢。何かの声。

一方通行の思考は、芳川の発言により遮られた。

「ところで、天井亜雄が居たわよ。何か血相抱えて逃げ出したから、今は何処に居るか知らないけど」

「何？」

天井亜雄がこの場に居る。

やはりテレビの中に放り込まれたのだろう。

しかし、こちらは手負いが2人に、体力を使い果たしたのが1人。

とてもじゃないが探索する余裕などない。

「ｂｕｔ、このくらいでへこたれてたら、これから何かあった時、すぐに動けなくなると思うわ」

布束が立ち上がると、一言唱えた。

――メディラマ。

「お？おお！すげえ、体が滅茶苦茶軽くなった！」

「ハァー、こいつはイイモンだ。と、ミサカは消えた外傷を見て驚きを露わにします」

「ｉｎｄｅｅｄ、失われた体力だとか、怪我とかは回復できるけど、スキルを使った事による精神力は回復してないから、スキルの使い方には注意してね」

「へえ、こんな力もあるのね、ペルソナって」

回復した力を確認するかのように自身の手をニギニギしながら、芳川は布束の力を感心した。

それと同時に、やはり自分は何処まで行っても研究者であると言う事を理解する。

「どうして」だとか「どうやって」だとか、そんな事ばかり知りたくなるのだ。楽しいからそれはそれで構わないのだが。

「ていうか、早く天井ってやつを追った方が良いんじゃないのか？」

上条がストレッチをしながら提案する。芳川の安否が確認できた上に、天井の居場所まで分かったのだ。なるべく早く天井の元にたどり着く事については、誰にも異論はない。

「そォだな、芳川が上の階で天井の野郎を見かけたってことは上の階のどこかに居るって事だろォ？」

「ええ、何かすごいおびえた様子で、私の事を目もくれず何処かに逃げてったわ」

「あ、でも上位個体の事も気になるんですが。と、ミサカは上位個

体の安否を心配します」

「そしたら、クマがヨッシーをあっち側に返すから、皆は先に行けば良いんじゃないクマ？」

「よ、ヨッシー……？まあいいわ。調整があと一息で終わる所だったんだけれど……うん、そこから先の記憶が無いわね」

「だが、打ち止めは無事っぽいンだったよなァ……目的がわかンねェな……」

「空いた時間に実験の資料を眺めてたとこまでは覚えてるんだけれど……」

「成程なァ。だったらなおさら研究所まで行った方が良いな。何か思い出すかもしンねェ」

「ですが、芳川１人で研究所まで戻るのは危険ではないのですか？と、ミサカはミサカも芳川について行く事を提案します」

戦力が整ってきてはいるが、それを二分する事に不安を覚える一方通行。

しかし、今現在、天井も打ち止めも、どちらも急ぐべき案件である。

「……そォだな。クマと芳川、９９８２号の三人は、一旦いつもの空き地まで戻れ。

俺達は先に上に行く。そンで、打ち止めの調整が終わり次第、こっちに戻ってこい」

「中々人遣いが荒いのね」

「うるせェ、そンだけ切羽詰まってンだよこっちも」

考えるべき項目は山ほどある。それこそ考え出したら精神と時の部屋が必要になるほどに。

そんな中戦力を分割すると言うのは危険な賭けでもあるのだが、そうも言ってられない。

一方通行は、本当に仕方が無しに、二手に分かれる事を了承した。

「それじゃ、さっくり調整終わらせて来るわ。あ、後このホテル？の中にもう一つ強そうな気配があるから気をつけてね。それ以外は問題なさそうだけど」

芳川は一言告げると、スタスタと出て行ってしまった。

それに続いて９９８２号とクマがついて行き、ロビーには一方通行と上条当麻、布束砥信の３人だけになった。

「よっし、この面子じゃ俺が一番活躍してないから、頑張るぜ！！」

「ｗｅｌｌ、張りきり過ぎて文字通り『暴走』しないようにね」

「は、はい……」

「さっさと終わらせて、帰るぞォ」

３人は、ボロボロになったロビーを後にし、そこには光を失ったライオンの石像だけが残された。

・・・

＜？？？＞

研究者風の白髪の男は、液晶に映し出された光景を見て、笑った。

「成程……精神的に成熟していたり、『影』を受け入れられる度量があれば、『影』が離反することはない、と言う事か……面白い」

「『ペルソナ』に目覚める条件は、受け入れられるか否か、と言う事か。そこに能力者としてのレベルは関係がない。

強いて言うなら、確固たる『自分だけの現実』を持っている事が条件か……？」

「余計な事を知られる前にテレビの中に入れたが、面白い『力』を手にしたようだね……。

どうやらテレビに放り込まれる前後の記憶も無い様だし、しばらく様子を見ようか。

一方で、天井君はやはりというか何と言うか……」

男は1人考察を止めると、別の液晶に目をやる。

そこには一体の影が、存在していた。

「あっという間に飲まれたか……だが、『心』とは……実に興味深い」

研究者は狂った笑みを浮かべる。

・・・

「さて、ミサカもそろそろ帰りましょうか」

しばらくの間、眠り続ける打ち止めを横目に、何か９９８２号に関する資料は無いものかと研究所捜索をしていたのだが、特に何も無かった。

９９８２号と一方通行は、何か隠している。その疑いは今回の件で、更に深まった。

こういった場合、余計な事を調べてしまって死亡フラグを立てるとか、ミステリー小説によく見られるが、１００３２号はそんな事気にしなかった。

今までは自由意志など有ってなかったようなものだったが、今は違う。

自分で考え、行動をする事ができるのだ。それによって死亡フラグを立てようとも、後悔は無い。

そのように考え、色々と調べては見た物の、特に進展は無かった。

故に、もう帰ってご飯食べて寝よ。そんな事をぼんやりと思っていたのだが。

「ッ！？」

人の気配を感じる。数は１人。敵か味方か。はたまたいずれでも無いか。

一先ず１００３２号は、見つからないように身を隠す。このようなスニーキングスキルも脳内にインプットされているのでかくれんぼやケイドロ等はお手のものである。

（帰ろうとした矢先にこれですか……面倒ですね……）

いざとなれば他の妹達を呼べばいいのだが、かなり個人的な事情なので、余り巻き込みたくは無い。

そう考えた１００３２号は息を潜め、侵入者を待つ。

（あれは……）

９９８２号のＭＮＷで見た記憶がある。確か名前は半蔵とかいう、すごく忍者です……って感じの……。

その半蔵は、培養液に浸る打ち止めを見て驚きを露わにしていた。

・・・

「打ち止めちゃん……？」

半蔵は困惑していた。なぜ、こんなところに打ち止めが居るのか。それも培養液に浸かるという、明らかに異様な状態で。

どうみても厄介事である。それも天井が居た研究所に居ると言う事は、打ち止めも何かしら関係があると言う事か。

これで打ち止めが知らない人間だったら放っておいてスタコラサッサ、なのだが。

「もう、知っちまったからなあ……見捨てるって選択は……やっぱ出来ないか」

駒場のリーダーの事を知らなかったら、やっぱり見捨ててたんだろうなあ。と、ぼんやり考える。

「毒を食らわば皿まで、です。と、ミサカは一蓮托生できそうな相棒を見つけた事に歓喜します」

「！？」

この場に至るまで、誰とも遭遇しなかった半蔵は、少し気を抜いていたらしい。
何せ、１００３２号の存在に気付けなかったのだから。

「……ってあれ？御坂さん？」

半蔵の目の前には、『侵入者』の件で知り合った御坂美琴もしくは久々葉がいた。
と言ってもどちらでもないのだが、事情を知らない半蔵にそれを求めるのは酷であろう。

「あー、それに関しても説明した方が良いですよね……と、ミサカは面倒くさげに語ります。
ただし、先ほど申し上げました通り、『毒を食らわば皿まで』です。この件に首を突っ込む覚悟はお有りですか？」

１００３２号の冷たい視線が半蔵を射抜く。
はっきり言って事情を知らないのに、首を突っ込むも何も無いのだが、何となくここで退くと負けた気分になる。
半蔵は、首を縦に振って、肯定の意を表した。

「良かったです、ありがとうございます。こちらとしても事情を知る人材は有りがたいですからね」

そして１００３２号は語る。自身の存在理由と、一方通行を取り巻く環境について。
赤裸々に。有無を言わさず。何もかも。

こうして、半蔵は蜘蛛の巣に捕まった。

１００３２号と言う名の蜘蛛によって。

「何ですかその地の文は。と、ミサカは悪役っぽい感じになってるのが納得できません」

「何言ってんだ？」

「……なんでもありません。それでは、語らせていただきますよ」

・・・

「……話のスケールが予想以上にデカかった」

半蔵は１００３２号の語る話を全て聞いて、溜息をついた。

ここまで聞いたからには、逃げられないだろう。それを踏まえて覚悟があるかどうかを、１００３２号は尋ねたと言う事か。

「つまり、お前は俺と協力して、一方通行と久々葉ちゃんが何やってんのか調べたいって事だろ？」

「Ｅｘａｃｔｌｙ（そのとおりでございます）」

「あー、ここまで聞いたら、退くに退けないよなあ……」

「だから最初に言ったじゃないですか」

「そんなん、知ってたら初めから退いてたっつーの」

「知ってたら退くに退けないんじゃないですか？」

「そんな鶏と卵はどっちが先に生まれた、みたいな問答は止めてくれ……」

ここからは逃げられんよ。と、噛ませ犬もといトレヴェルヤンの様な口調で半蔵に笑いかける。

半蔵はその笑顔を見て思わずドキッとするが、すぐに平静を取り戻した。

「しかし、ミサカも大概ですが、あなたも中々の物ですよね」

「ん？何がだ？」

「あんな話を信じるだけではなく、一方通行の事も何とも思ってないようでしたから。

と、ミサカは本当にミサカの話を信じてるのか疑います」

「あー、半信半疑っちゃ半信半疑なんだが、こんな所に来てまで嘘をつくとは思えないし、

こうして打ち止めちゃんが眠ってるわけだし」

それでも、一方通行の事が怖くないのか。と言う視線を半蔵に飛ばすが。

「一方通行が今まで何してきたかは知らねえけど、そんな極悪人でも無いと思うぜ？

実際に会って話してる俺が言うんだから間違いないね。こう見えて意外と人を見る目はあるはずだ」

それに、規模は違えど人の生き死にに関わる悲劇なんて、この街じゃたまによくある光景だからな。

と、半蔵は笑った。

「……やはり、あなたも大概ですよ」

「俺を巻き込んでおいて良く言うよ」

一瞬にして、重苦しい空気は和やかなムードへと変貌を遂げた。

「さて、それじゃあ今日のところは一端帰りますか。と、ミサカは連絡先を渡しながら帰宅を促します。
スニーキングは家に帰るまでがスニーキングです」

2人はひとしきり笑いあうと、１００３２号が帰宅を促した。

「あれ？打ち止めちゃんは？」

どう見ても普通じゃない打ち止めを放っておくのか、と半蔵は尋ねる。

とはいえ、知識も何も無いので半蔵に出来そうな事はないのだが。

「大丈夫です、いずれ保護に来ます。むしろこの状態から動かす方が危険なのです」

どうやら誰かが保護に向かって来ているらしい。

それならそいつが来るまで待った方がいいのでは、とも提案するが。

「出来ればミサカ達が色々と首を突っ込んでる事は隠しておきたいのです。

と、ミサカは誰にも余計な心配をかけさせたくない心中を吐露し

ます」

「成程な……それなら、もう何も言わないさ。俺も色々調べたい事があるしな」

「それなら、誰かに見つかる前に、帰りましょう。と、ミサカはすたこらさっさします」

そして2人は、再び息を潜めて身を潜め、研究所を後にした。

・・・

「2人は先にホテルの方に戻って頂戴」

「今更何を言ってるんですか。と、ミサカは疑問を浮かべながら尋ねます」

「そうクマ、何か危ないらしいんでしょ?クマは目立つから行けても行けないクマけど、
久々葉ちゃんは連れてった方がいいクマよ」

「多分大丈夫と思うわよ。だって打ち止めが狙いだったら、そもそも手遅れだろうし。
でもそう言う訳でも無いみたいだから、誰かが私を狙うってことは無いと思うわ」

「確かに……それはそうですね……ですが、それならどうしてホテルに居る時にそれを言わなかったのですか?」

「それでもここに戻るまで何があるかわからないから、その護衛が

欲しかったのよね」

私ってほら、頭脳労働派だし。と、のんびりした口調で語る芳川桔梗。

「分かりました……それじゃあ先に行きますけど、結局芳川がホテルに戻るのに1人になってしまいますよね？

と、ミサカはその時はどうすんだと尋ねます」

「その時はまあ……ペルソナを存分に使うわ。と言っても、ホテルからこの空き地に来るまで何も居なかったみたいだし、大丈夫とは思うけれど」

「……そこまで言うなら、分かりました。でも気をつけて下さい。

と、ミサカは注意を促しておきます」

「分かってるわ。それじゃあクマさん、お願いね」

「あいさー！」

クマは威勢のいい返事をすると、何処からともなくテレビが降ってきた。

「これで帰れるのね……面白いわね」

「はいはい、早く行くクマよー」

「ちょ、ちょっと押さないでってあわー！！」

奇妙な断末魔を残して、芳川は旅立った。

「うっし、それじゃあホテルに戻るクマ！！」

「……クマのテレビはもう少し大きくした方が、皆余裕持って通れると思います」

・・・

＜ホテル・グランドデトロイト　Ｆ３＞

「芳川の奴どぉやってこのシャドウの中を潜り抜けたってンだ？」

「それが彼女の力ってことでしょう」

「芳川さんが居たらこれから探索が楽になりそうだな」

「まァ、今は居ねェンだけどな……」

見渡す限り、シャドウ、シャドウ、シャドウ。

芳川は１０階から3階までは階段で下りてきたそうだ。

しかし怪我と言う怪我は見られなかった。というか戦闘らしい戦闘は1度しかしてなかったそうだ。

すなわち、それこそが芳川の力。観測する力は周りに居るシャドウすら捕捉できると言う事だろう。

これなら芳川を待った方が良かったかもしれない。何にせよ、そんな事を言っていても仕方がない。一気に駆け抜けるとしよう。

一方通行達が意を決した瞬間、無線に連絡が入った。

『どぉした？』

『芳川が空き地までで護衛は十分だそうで、今からクマと共にそちらに向かいます。
と、ミサカは事後承諾で連絡します』

『……あいつがそう言うなら、大丈夫なンだろォな。それなら、今ホテルの3階に上った所に居るが……』

『出来ればそこで待っていてもらえませんか？すぐに合流します』

『了ォ解』

一方通行は無線での会話を終えると、階段の段差に座り込んだ。

「９９８２号とクマが来るらしいから、少し待つぞォ」

「あれ？早くね？」

「なンかテレビの外に行ったのは芳川だけらしい」

確かに、どちらかと言うとホテルからいつもの空き地の方が危険だろう。

そもそも打ち止めが狙いなら１００３２号の報告ももっと重大な物になったはずだ。

ならばクマと共に９９８２号が戻って来る、と言うのは悪くない。

「もう逆に一旦帰るのもありな気がするんだけど」

「そォだなァ……どォせ天井クンは出られないもンなァ……」

「いや、そういう問題でも無いんだけど」

「ｗｅｌｌ、どうせ天井亜雄は悪徳研究員だから。私が言えた事でもないんだけど」

「助けるつもりはねェンだが、正直情報は欲しいンだよなァ……」

一同はげんなりとした様子で、その場に座り込んだ。

・・・

＜???＞

「全く、僕の城に一体何の用だってのー。マジさっさと帰らないかなあっ！折角自由になれたのに！」

最上階のスイートルーム。

それはワイングラスを片手に、窓から見える不安定な景色を眺めていた。

「いや待てよ……あいつらがあれを助けに来るとは思えないから……」

求める物は、何だろう。

「僕が自由になれるきっかけを作った、『あの事』かな？」

多分、そうだろう。それ以外、心当たりが、ない。

「そうときまれば話は早いよね。どうせ僕には関係のないことだし」

それは立ち上がると、机の引き出しを開ける。
そこには1枚の紙が収められていた。

「Ｐｒｏｊｅｃｔ．Ｔａｒｔａｒｏｓ、ねぇ……面白そうな事を考える人間が居た物だけど」

「――――人間が考えるような事じゃないよね。ははっ」

それは心底楽しそうな笑みを浮かべてその用紙を綺麗に折りたたんだ。

## そのよんじゅうろく　うごめくわる（後書き）

妙な単語が出てきました。

## そのよんじゅうなな　なかみ（前書き）

会話回れす

**そのよんじゅうなな　なかみ**

＜ホテル・グランドデトロイト　Ｆ３大宴会場＞

「どぉしてこぉなった」

一方通行は頭を抱え。

「おぉー、すごいクマね！クマ食べらんないけど」

クマは食べられないと知りつつも目の前の光景に感動を抱き。

「ファミレスばっかで栄養バランス偏ってるのに、こんな料理食べて大丈夫か？

と、ミサカは不安になります」

９９８２号は栄養バランスを気にして。

「ｉｎｄｅｅｄ、カロリーはとても高いでしょう。ｂｕｔ、食べられる時に食べるべきでしょ」

布束砥信は今日くらい良いだろう、と紙じゃないナプキンで手をぬぐい。

「つか、芳川さん待たなくていいのか？」

上条当麻は打ち止めの調整を行っているであろう芳川桔梗を気にしていた。

何が起きたのか？

クマと９９８２号が到着するのを待っていた一方通行達なのだが、２人が到着するのを見計らっていたかのように、「それ」が現れたのだ。

一同は身構えるものの、「それ」から敵意が見られなかった為、迂闊ではと思う物の、既に敵地のど真ん中なのだから、行ってやろうではないか。

と言う事でそれの後について行ったのだ。

そして今現在、目の前に広がるは、豪華絢爛。

一流の材料をふんだんに用いて作られた一流の料理の数々。

「人の心を感動させることが出来るのは、人の心だけなのだ。材料や技術だけでは駄目だっ！！」という名言が頭をよぎるが、美味いものは美味いだろうと思うのは自分の舌が未熟だからだろうか、などと下らないことを考えてしまう。

初めここに案内された時は罠か何かかと勘繰ったものだが、シャドウがそのような手の込んだ事をするとは思えない。

更に言えば自身の能力「一方通行」にて料理の成分を解析した結果、普通に普通の高級料理だった。普通の高級料理ってどういうことだろう。

その旨を一同に伝えた所、上条当麻は目を輝かせて「こんなものを食べていいんでせう？」と、餌を前にした犬のような態度で感動を露わにしていた。

布束は布束で、「こんな物食べるのは久しぶりだ」とこの場に招いた主催者が、目の前に広がる料理の数々を食す事を許可するのを今か今かと待ち続ける。

９９８２号は頭の中でカロリー計算を行い、クマはキョロキョロ

と料理の数々を眺めていた。

そして当の主催者は、

「やだなあそんなに警戒しなくても良いじゃないかー」

天井亜雄。

しかし研究者が着るべき白衣はそこにはなく、灰色のスーツに赤色の派手なネクタイ。何処かの社長の御曹司の様な恰好をしていた。

「うるせェよ天井くン。研究職は止めて、ホテルのオーナーにでも転職しましたかァ？」

「あはっ。確かに研究なんてつまらない事はもう止めたよ。ここのホテルに居れば、飽きるまでは楽しめるからねー。

そんなわけで、このご飯食べたら帰ってくれない？あ、カジノでもやってく？６階に行けばあるよ」

陽気そうな口調に、人懐っこい笑み。それを浮かべるのは、テレビの外で一方通行が見た時は、陰鬱そうな態度で笑顔など欲望をごちゃまぜにした醜い物だったと記憶していたはずの、天井亜雄だった。

明らかに、一方通行の知る天井亜雄ではない。

そして、一方通行は知っている。

明らかに『自分』では無い『自分』の存在を。

「お前、『影』か？」

ストレートに、明確に、単純に、目の前に居るそれに、どのような存在か確認を取った。

「まあ、そうだね。『元』影って言った方がいいかもね。君らからしたら『影』ってことには変わりないけど。
残念ながら、『光』は僕が喰っちまいましたあ。だからもう光も影も、何も無いよ。
とどのつまり、『僕』は『僕』であって、他の誰でも、何でも無いのさ。あははっ」

そう、僕は自由なのだー！と、天井の影は椅子の上に立ち、ワインをボトルごと一気飲みをし始めた。
ああ、天井クンはストレスを貯め込んでたンだろォなァ。等と場違いな考えを一方通行は巡らせるが、天井の乾杯の音頭をし始めた事で中断された。

「えー、本日はおひがらも良く……あー、なんだ、飯だけはいっぱいあるから……食ってけ！！」

天井の影のその言葉を聞いた上条と布束は……音を置き去りにした。
目の前に広がる食べ物を口の中に次々と放り込んで行く。よほど『美味い食事』に餓えていたのだろう。
て言うか、クマは数に入れて良いか迷うが、まだ見ぬ芳川桔梗を含めて６人が集まったところで、目の前に広がる料理の数々は、どう見ても食べきれるレベルではない。
どちらかというとインデックスすらお腹いっぱいと言えるレベルである。

それにしても敵陣の中だと言うのに、随分と気が抜けている。

と言うのも、天井の影から、敵意や殺意と言った負の感情が全く見られないのだ。
とてもじゃないが、天井亜雄から、その存在を奪ったとは思えない。

「あはは、彼から抜け出せて、こうやって好き勝手出来るだけである程度満足してるからねえ。
君らが敵対しない限りは、何もする気は無いよ」

「……その割には、このホテルにいるシャドウどもはやたらめったら襲いかかってきたンだが？」

「酷い目にあったクマよ」

食指が働かない一方通行と、食べ物を食べられないクマが、天井の影に話しかける。何か情報が得られないか尋ねるために。

「それはシャドウとしての本能だろうねえ。僕は見ての通り、天井君を『喰った』事で自我があるから、それを抑えられるけど」

「シャドウの本能？」

考えた事も無かった。何故、シャドウ達が人間を襲うのか。
シャドウが人を襲うのは、「そういうものだ」と決めつけていた節がある。

「あはは、考えた事も無かった、て顔してるね？」

「うるせェよ。襲ってくる敵の事なンざ、いちいち考えてられるかってンだ」

と、口で言いつつも、テレビの成り立ちを考えるにあたって、シャドウの存在は切っても切れない存在だろう。
そしてそのシャドウの事を良く知っているシャドウそのものが、目の前に居る。

「ははっ、それもそうか！それで、シャドウってのはだね……」

そのシャドウ、天井の影は、口をつぐんだ。
一方通行は、天井の影が再び口を開くまで、黙りこむ。

そして、天井の影が、再び言葉を紡ぎ出す。

「……秘密☆ミ（ほしみ）」

イラッ。

「あははっ、怒った？ねえ怒った？怒ったの？おこた入る？」

イライラッ。

「張り倒して良い？なァコイツ張り倒して良いかなァ？」

「流石のクマもイラッと来たクマ。菩薩と呼ばれたクマですら百烈

張り手するレベルですクマ」

一方通行は自身の隣に座るクマに、一応の了解を求めた。

例え止められても張り倒すのだが。

「まぁまぁ、落ちつきなよ。天井君がここに落とされた原因となる情報がここにあるんだけど」

天井の影は、ふざけた態度を改め、懐から一枚の紙を取り出した。

「まあ、あんまり情報を渡すと、消されたライセンス的な事になりそうだから、危険が及ばない程度にしか教えらんないけどねー。これだけなら意味わからないから、信じる信じないは自由だぜ？」

「意味わかンねェ事言ってンなよ」

あからさまに嫌悪感を表情に表しながらも、天井の影から紙を受け取ると、

そこには。

（よ、読めんクマ……ペーソナレアリティ？あ、プロジェクトは読めるクマ。プロジェクト……ターターオス？）

「ハァ……？ｐｅｒｓｏｎａｌｒｅａｌｉｔｙとｐｒｏｊｅｃｔ．ｔａｒｔａｒｏｓ……？前者は分かるが、後者は一体なンだよ？」

「そう、パーソナルリアリチーとプロジェクトタルタロスクマよね。常識クマ！！読めん奴居たら今すぐここに来るクマよ！！」

二つの単語が書き込まれていた。

「だからそれを言ったら僕が消されるんだって」

「消されろよ」

「あはは、そりゃ手厳しい」

「ｔａｒｔａｒｏｓってェと、『奈落』を意味する神、だったかァ？」

『ｐｒｏｊｅｃｔ』と言う事は、何かの実験の計画か何かなのだろう。

そちらはいいとして、パーソナルリアリティ（自分だけの現実）……意味は分かるが、なぜここでその単語が出てくるのか。

一方通行はどちらかと言うとそちらが気になっているようだった。

「さあてね？どう捉えるかは君次第だし、僕は何も知りませんがな。食うだけ食ったら帰れ帰れー。ここまでもてなしてあげたんだから何もしないで帰れー」

イライライラッ。

「……つゥか、お前一応シャドウなンだろォ？なンでそんな理性的なンだよ？」

すごくむかつくけど。

「さて何でだろうね。実験で放り込まれたから？それともなんかの突然変異？

まあそんな事は、僕にとっちゃ些細な事さね、あはっ。ここで好き勝手出来ればとりあえず満足だし」

「実験で放り込まれただァ？ってことはやっぱ学園都市の実験とここが関係があるのかァ？」

「それはあっちに帰って自分で調べたらいいんじゃない？」

「お前から聞くのがてっとり早いだろォが」

「あれあれ？僕の言う事信じちゃうの？味方になったつもりないんだけどなー」

「……まァ、確かにそォなンだが」

かといって敵には思えない。

幼少時から「敵意」や「悪意」、「殺意」など、おおよそ負の感情を一身に受けてた一方通行だからこそわかる。

とはいえ警戒はするのだが。

「ていうかさ、なんでそんな頑張ってんの？」

「あァ？」

「いやさ、別に君らが僕に迷惑かけないってなら別にどうだっていいんだけどさ。

何か意味あんの？」

「お前にゃ関係ねェよ」

「クマの平穏の為クマ。あとクマの中身についても」

「自分の為だろうと、他人の為だろうと、どーせいつか皆死んじゃうんだし。書く言う僕だっていつ自我が消えるかも分かんないんだし。

それならたった今を楽しんだ方がよくない？目的は知らないけどさ、こんな危険な場所に来てまでやりたいことなの？」

「あれ？クマの事無視クマ？」

「今を楽しむ余裕がねェンだよ、俺らには。

あいつらが心から今を楽しめるよォな状況に持っていく為に危険を冒して動いてンだ」

「え？クマの平穏と中身は？クマの事忘れてないクマ？」

「……ふうん。まあ別に興味ないんだけどねえ」

一方通行の言葉を聞いて、興味を失ったかのように表情から色を消し、クマの方を向いた。

「所で、クマクマ言ってる君は、何が目的なのかな？」

「クマ？だからクマの平穏をですな……」

「いや、そうじゃなくて、君はさ、どっちかってーとこっち側の存在じゃないの？」

「……クマ？」

「ハァ？お前何を……」

突然話の方向転換をされた2人は、天井の影の言葉に首をかしげる。

天井の影の言う『こっち側』とは、『シャドウ』を指し示すのだろうか。

「君は自分の『中身』が何なのか知りたいんだっけ？多分何も無いんじゃないの？だってシャドウだし」

『光』のない『影』なんてただの虚無じゃん。

と、天井の影は、当たり前のことを当たり前のように語り、クマですら忘れていた現実を、爆弾を投下した。

・・・

「さて、一方通行達は無事かしら」

芳川桔梗はのんびりと研究所内を歩き、先ほどまで体験した、非日常について思いを馳せる。

「しかしあのクマ？君は……」

チラリと感じた『力』の断片。それは「ペルソナ」と言うより「シャドウ」よりの力だった。

「でも悪そうな感じじゃないし……」

悪そうな子では無かった。その為、芳川が感じた事を、クマに伝える事は無かった。

しかし、芳川は知らない。そんな配慮が元同僚の影によって覆された事を。

「成程。打ち止めは無事だけれど」

スリープモード。
文字通り休眠状態。

「本来、後は待つだけの段階だったから、とっくに調整は終わってるはずなんだけど……」

何故か、中断されている。
その原因を探るために、しばらくの間キーボードを叩き、調べていたのだが、特に異常は見られず、ただ単に中断された状態である、と芳川は判断した。

「スリープモード……とはいえ勝手にいじっていいものか……」

芳川はこのスリープモードが、芳川をテレビの中に放り込んだ『誰か』の罠か否かを判断しあぐねていた。

・・・

「クマが……シャドウ……自分なんて何処にも……無い……？」

「あっ、やべっ。これ地雷だった？ごめんね、あははっ」

「……どぉいう事だ？」

「どういうもこういうも無いよ。だってこの世界は、本来シャドウ

しかいないんだよ?」

シャドウしかいない世界。そこに住むクマもまた、シャドウだったと言う事か。

「クマはシャドウ……本当の自分なんて……居ない、クマ」

「おいクマ、あンなのの言う事なンざ気に……」

所詮は怪しい奴の戯言。と、一方通行はクマに声をかけようとするが。

「『本当』?『自分』?ククク……実に、愚かだ……」

それは不吉そうな、低く、重たい声によって遮られた。

その声によって、料理に夢中になっていた上条当麻と９９８２号、布束砥信も、声の聞こえた方向に視線を這わせる。

「「!?」」

「何がどーしたクマ!?……っておわあ!?」

「あははっ、シャドウからシャドウだって!こいつは傑作だ!僕がまだ研究者だったら喜んで研究してたろうね!」

クマの中から、『クマの影』が現れる。

その異常事態を前に、天井の影は、クマにとっての地雷を踏んでしまったことへの後ろめたさよりも、目の前の現象で頭がいっぱいになっていた。

「あ、でも何か僕のせいみたいになっちゃ嫌だし、僕はここでお暇をば……」

そそくさと部屋から出て行く天井の影を、誰も止められなかった。
それ以上に、目の前のクマの影に、視線が釘付けになっていたのだから。

（チッ、あの野郎、次会ったら問答無用でボコしてやる）

一方通行は天井の影をいつかボコすと誓い、クマの影を睨みつける。

「『真実』を得る事など不可能だ……『真実』はいつも霧の中に隠されている……
手を伸ばし、何かをつかんだとしても、それが『真実』であるかどうか確かめる術などない……
なら、真実を求める事に何の意味がある？目を閉じ、己をだまし、楽に生きて行く……その方がずっと賢いじゃないか……」

真実など誰にも分からないし、確かめる術などない。
ならば何かを考えるよりも、刹那的に生きた方が、楽だし楽しい。
先の天井の影の様な事を、クマの影は重苦しい口調で語るが。

「お前何言ってるクマ！？全然分からんクマよ！？
クマがあんまり賢くない事を知ってて、そんな難しい事を言って馬鹿にしてるクマ！？
失礼しちゃうクマ！クマはこれでも精一杯考えてるの！！」

「……それが、無駄だと言っているのさ……君は、初めから『からっぽ』なんだからね……」

その言葉で、クマは更に動揺した。
自分など存在しない。なぜなら、初めからからっぽなのだから。
クマの影の言葉を反芻させる一同をよそに、クマの影は語り続ける。

「君は心の底で気付いているはず……でも認められず、別の自分を作ろうとしているだけさ……
そして、その事実を、今の今まで隠し続けて、気付かないふりをし続けていた……」

「そ、そんなの……嘘クマ……」

「クク……さっきも言われただろうが……もう一度言ってやろうか……？
君は、私なのだからな……その方が信じられるだろう？
……君はただの……」

「〜〜ッ！！やめろって言ってるクマー！！」

クマは今まで聞いた中でも一番大きな声で、悲鳴のような叫び声を上げ、クマの影の発言を止めにかかる。

「「クマ！！」」

しかしそれは叶わずクマの影が発する何かによって、弾き飛ばされてしまった。

「君達も、同じ事さ。真実など探すから、辛い目に遭う……
そもそも、この深い霧に包まれた世界……正体すら分からないも

のを、この中からどうやって見つけるつもりだ？」

「あァ？真実はいつも一つって言うだろォ？どっかにあるンじゃねェ？」

と、投げやりに回答する一方通行。クマの影に対する敵愾心に満ち満ちていた。

「……真実が欲しいなら、簡単な事さ……君達が、何かを見つけた時、それを『真実』だと思いこめば良いのだからな」

クマの影の言葉に、全員が何も言い返さず、ただ考え込む。

「では、一つ真実を教えてあげよう」

「……君達は、ここで死ぬ。知ろうとしたが故に、何も知り得ぬまま……」

クマの影は、もう言う事は無いと言わんばかりに、体にまとったどす黒い気配を、更に黒に染め上げる。

バキゴキ、と鈍い音を立てつつ、クマの影が異形へと変貌を遂げて行く。

顔は崩れ落ち、崩れた顔から、闇と、光を見据える目が覗きこみ、巨大な体を這わせて、にじり寄ってくる。

「……お前ら、こいつをさっさとかたずけて、帰るぞォ……」

結局ろくな情報も得られず、新たに得た物は単語二つとクマの影。

一方通行は怒りながらも、もうやってらンねェ。と言った疲れた

雰囲気を出すと言う器用な事をしつつ、言葉を発した。

3人は、ただ首を縦に振る事だけで、了承の意をしめした。

## そのよんじゅうなな　なかみ（後書き）

あまいくんの影の扱いをどうしようかと思ったけど。
戦闘はさせませんでした。クマの影を出したかったので。戦闘シーンを何度も書きたくないという大人の事情もありｒｙ

そしたらなんかすごいむかつくキャラが出来てしまった。まあ抑圧された精神だからこのくらいはっちゃけていいか。
ちなみにあまいくんの影は、あまいくんが研究に借金にしばられてたので、開放的な生活をしたいという、単純明快な欲望のみで構成されています。

## そのよんじゅうはち　うそ？ほうそう？そーですか（前書き）

基本的にはご都合主義です

**そのよんじゅうはち　うそ？ぼうそう？そーですか**

巨大な穴に身を埋め、クマの影は唸る。
まるで呪詛を呟く術師のように。絶望を体現するかのように。

「我は影……真なる我……君達の好きな真実を与えよう……」

そして、一呼吸置いて、叫ぶ。

「ここで死ぬと言う、逃れ得ぬ定めをな！！」

その声を皮切りに、一方通行達はクマの影を包囲するように四角を埋めた。
一方通行はガルーラを放ち、上条当麻はブフーラを放つ。
風の刃と氷の塊を浴びたクマの影は、顔をしかめ、わずらわしそうに攻撃を払おうと手を振る。
一応効いているようだ。その隙に布束砥信はコンセントレイトを、９９８２号はタルカジャを唱えた。

「ククク……私を倒したところで、一体何になると言うのかね？逆もまた然り。
無為で無意味のまま、無作為に消えるが良いさ……」

布束と同様に、クマの影もコンセントレイトを唱えた。

「まだまだァ！！」

一方通行は、邪魔な料理とテーブルを一掃するべく、マハガルを唱えて、それらを動かした。

それだけではなく、料理とテーブルを一点に集めて、圧縮。
これによりあっという間に何かの塊と化したそれは、料理の良い匂いを振りまきながらクマの影へと投合された。

「お残しはゆるしまへんでってなァ！！」

インデックスも満足する程の量だ。重量は十分。更に圧縮する事で硬度も十二分。
鉄球をぶつけたかのような威力を持つそれは、クマの影を大きく仰け反らせる。

「ガルーラ！」「ブフーラ！」「デッドエンド！！」

三者三様の声色と、攻撃。
そのことごとくがクマの影へと吸い込まれて行き、ホテル全体が揺れているような地響きが鳴り響いた。

「クク……存外に出来るみたいだが……」

クマの影は巨木の様に太い爪を携えた巨大な手を上にかざし、唱える。

「凍てつくせ……マハブフーラ……」

力をセーブしている上条のそれよりも、明らかに力が上回っていた。
そしてそれだけではなく。

「ぐっ……うっ……やはり、氷は効きますね……と、ミサカは歯を食いしばります」

９９８２号のワカヒルメは、氷が弱点であった。
膝をつきそうになるのをこらえる９９８２号支えようと、上条が駆けよるが。

それを逃す程クマの影は生温くはない。

「マハラクンダ……」

マハラクンダ。敵全体の防御力を下げるスキル。
それを受けた一同は、戸惑いを覚えた。
見た目には何の異常も見られないのだ。

「おらァ！！！」

クマの影の言葉を待たずに、一方通行は行動を開始していた。
空中に高々と舞い上がり、ガルーラで加速を与え、更には重力をも味方につけたかかと落としを、クマの影の脳天へと突きさした。

「むっ……！」

無防備な状態でそれを受け止めたクマの影は、自身の下半身を埋めていた巨大な穴の中に更に埋め込まれる形になり、その威力の高さに顔を苦痛でゆがめた。

「……中々、効いた」

ぽつりとつぶやき、片手を天井に向けて掲げる。
再びマハブフーラが来るかと思った一同は、それぞれ防御できるような態勢を取った。

クマの影は、何か呪文を唱えるわけでもなく、単純にその巨大な手を地面へと振り下ろした。
瞬間、圧倒的な熱風と衝撃に、床を砕いた事による破片が一同を襲う。

「「！！！」」

それは、マハブフーラでは無く。

「……ヒートウェイブ」

ヒートウェイブ。敵全体に物理属性の中ダメージ。
一瞬にして大宴会場を廃墟に変化させたその攻撃は、一同に大きな損害を与えた。

布束や上条、９９８２号の３人がその攻撃を受けてしまうのは良い。

しかし、それだけでは無かった。

その熱風と衝撃は、一方通行の反射を平然と貫いていた。

今までは、ある程度のダメージは有った物の、逸らすなり何かしらの回避法でダメージを減らす事が出来ていたのだ。
しかし、今の攻撃は。

（完ッ全に反射を貫いてンぞォ……！？）

吹き飛ばされながらも、どうにか態勢を立て直し着地をした。

上条も日ごろの訓練の成果か、上手い事受け身を捕れたのだが、そう言った訓練を受けていない布束や、破片をまともに受けた９９８２号は受け身も取れずに、床を転がって行った。

「クソッタレがァ！！」

地面に横たわる２人を見て、一方通行は激昂し、スキルを唱える。

「ッ……！！？……！！ンだこりゃァ！！？」

しかし、唱えられない。ペルソナを召喚しようとしても、何故かその言葉だけ抜け落ちたかのように、口にする事が出来なかった。

一瞬で状況を理解した。

クマの影が、何かをしていた、と言う事を。

「……愚者のささやき……」

愚者のささやき。敵全体に一定確率で魔封状態（ペルソナ召喚不可）状態にする。

自身がペルソナを出せない事を理解した一方通行は、他の３人がペルソナを出せそうか聞こうとする物の。

「クソッ……！」

布束と９９８２号は地面に倒れ伏しながらも、スキルを放とうとするが、出来ない。

必死な表情を浮かべ、何かを叫び続ける２人を見て、一方通行はクマの影に対して更なる怒りが生じた。

「ブフーラ！！」

そんな中、上条だけはペルソナを出す事が出来た。
どうやら必ず魔封状態になる訳ではない、と言う事を一方通行は確認する。

「落ちつけ、一方通行！しばらくは俺が何とかするから！」

そうして、上条は更にブフーラを放つ。
その間に、一方通行は布束と９９８２号を拾い、クマが倒れ伏す壁際まで運んで行った。

「あの野郎ォぜってェ張り倒す」

一言怒りを凝縮させて呟くと、上条の元へと飛び立った。

・・・

「うーん、スリープモードをどうにかしようと思っても、動かせないみたいね……」

研究所の一室、打ち止めが眠る部屋で、芳川桔梗は頬杖をついていた。
モニターには、何かのプログラムだろうか、流れるように多数の文字が、上から下へと落ちている。

「おかしーし」

おかしい。
プログラムが書き込まれているモニターとは別のモニターに目を

やる。
そこには「Ｐｒｏｄｕｃｔｉｏｎ　ｒａｔｅ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｂｒａｉｎ」と書かれており、その下では目まぐるしく数値が変動していた。

「脳内稼働率が常に９０％を超えているのは、明らかにおかしいわ」

眠っている状態。にもかかわらず、打ち止めの脳は盛んに活動していた。
芳川がテレビの中に放り込まれる前、すなわち調整をしていた頃は４～５０％で落ちついていたはず、と芳川は考えるが。

「こんなの絶対おかしいわ」

明らかに何らかの負荷がかかっている。
それが何なのか、ひたすら流れゆくプログラムを見てデバックを試みるものの、間違いが一つも見当たらないのだ。

「何だか嫌な予感がするわね……」

ポツリと一言、不安そうな口ぶりで呟くと、再びモニターに目線を集中させた。

・・・

「……！！ッ……！？……ガルーラァ！！」

ようやくスキルを発せられるようになった一方通行は、ガルーラの呪文を唱えると、布束砥信に向かって叫ぶ。

「布束ァ！！」

「ｗｅｌｌ、分かってる！メディラマ！！」

魔封状態が解けた布束が、回復スキルを唱え、一同の体力や外傷を治していった。

「自ら苦しむ時を長引かせるとは……」

やれやれ、と言った具合にクマの影は嘲る。

そして、巨大な穴から大きく身を乗り出して、手をかざすと、

「無駄な抵抗は止めろ……抗っても何も見えはしない……」

手の中で得体のしれない力が凝縮されていく。

それは一目見ただけで、受け止められないと確信が持てるほどの力の塊で、見ているだけで絶望を覚えるような威圧感を放っていた。

「舐めンじゃねェぞ畜生が……」

ギンッ、と一方通行は双眸見据え、クマの影の手に浮かぶ力の塊を睨みつけた。

「上条……お前は９９８２号達を頼むわ」

「分かった。……お前はどうすんだ？」

上条は、分かり切った事ながらも、一方通行に尋ねる。

「ンなもン決まってンだろォ」

両手を掲げ、ガルーラを唱える。

――――力比べだ。

クマの影が更なる力を凝縮しているのを前に、一方通行は大量の風を一つに集めた。

闇と光。

クマの影が集める力は、まるで全てを飲み込む闇の様で、辺りを暗くして。

一方通行が集める風は、まるで全てを包み込む光の様で、辺りを照らした。

「無駄な事を……」

そして、クマの影は振り下ろす。全てを飲み込むべくその闇を。

そして、一方通行は振り上げる。全てを包み込むべくその光を。

「……魔手ニヒル」

「オオオアアアァァアアァァアアア！！！！」

クマの影の囁きを遮るように、一方通行は叫ぶ。

そしてその叫び声すらかき消す剛音で、部屋は満たされていった。

・・・

「おっ、やってるやってるう」

影は、笑う。

一方通行達の成長を見て。

「……あぁ？何であんなんが出て来てんだ？」

しかし、自身の予想とは違った光景だった。

「成程、『あいつ』の干渉を受けたってことか」

別に一方通行達の味方をするつもりはないのだけれど。

「だとしたら、ちょーっと反則だよなあ」

影は最後にもう一つ、笑った。

・・・

「……驚いたな、まさかこれが防がれるとはな……」

クマの影は今までの戦闘の中、一番の驚きを示した。

なぜなら自身持つ攻撃手段の中で、一番強烈な攻撃を相殺されたのだから。

とはいえ、それを防いだ代償は、如実に表れていた。

「ハァ……ハァ……」

一方通行の、戦力は半減。

明らかに体力が削られていた。

「何故だ……」

「何故、無駄な事の為に、何処からそんな力が湧いてくるのだ……？」

クマの影にとっては、理解が出来ない。
何故このような異形の巣窟に入りこむのか。
命を賭ける程の物なのか。

「……まあそれもまたいとをかし、か……」

クマの影は興味を失ったかのように、落ちつきを取り戻し、唱える。

――――虚無への導き。

「ガッ！？」

意味がわからない。

いつ攻撃を喰らった？

いつ攻撃を放った？

わからない。

わからないまま、一方通行の意識は途絶えた。

「一方通行!!?」

3人は突然気絶した一方通行を見て、クマの影に向かって攻撃を放とうとするが。

「「ッ……!!……!ッ……!!!」」

しかし、またしても愚者のささやきによって、阻止された。

「君達は黙っていてもらおうか……」

クマの影は再び力を凝縮させる。

今度は一方通行という邪魔もなく、存分に力を振るえる。

そして、一方通行が意識を取り戻すのだが。

「嘘だろオイ」

既にクマの影に集まった力は、今から一方通行がプラズマを作成してもどうにもならないほどに、巨大な力と成っていた。

「終わりにしようか……」

クマの影が呟く。

「それには及ばないぜ」ホムッ

影が、戦闘に介入を始め、瞬間、音が消え去った。

・・・

「……？」

おかしい。

あれほどの力を以って攻撃を為されれば、生きているはずがない。

誰とは無しに、何かに気付いたかのように声を上げる。

「お前は……」

「お前らちょっとだらしなさ過ぎないかあ？」

上条の影、それの右手がクマの影の攻撃を受け止めていた。

しかし幻想殺しを以ってしても消せない力の塊が、目の前で全員を押し潰さんと突き進もうとしている。

「ああもう、これうっとーしーし！」

上条の影は煩わしそうな顔を浮かべて、虚空に向かってそれを放り投げる。

その巨大な力の塊は、ホテルの壁と砕きながら、何処かへと消えて行った。

そんな光景を目の当たりにした一同は、クマの影も含めて茫然としている。

「おいおい、ホントしっかりしろよな」

床に座り込んだ一方通行達を、上条の影は右手を差し出し、立ち上がらせようとする。

「……何たくらンでンだァ……？」

疑いの目を向けつつも上条の影の手を取る。
すると甲高い音が鳴り響き、「愚者のささやき」の効果を失わせた。

「ほら、お前らもスキルだせねーんだろ？」

残る三人も次々と愚者のささやきによる効果を消してもらい、立ちあがった。

「……お前は何しに来たんだ……？」

上条当麻は、尋ねる。
何故助けたのか。自分が居なくなれば本当の意味で上条の影は『上条の』影ではなくなるはずなのに。

「あ？あー何だ、気まぐれ？」

上条の影は歯切れの悪い返答をして、４人の首をかしげさせる。
そんな上条の影を見て、クマの影も声を上げた。

「君は……何故こんな所に居る……？」

「そりゃこっちのセリフだぜ？」

「……何の事だ……？」

「お前が出てくるのはまだ早ェって言ってんだ」

「くっく……君にはお見通し、と言う訳か……」

話が見えない。
一方通行は怪訝そうな表情で2体のやり取りを見ていた。

「……結局、今は味方するってのかァ……？」

「まあ、手伝いはするけどよ。倒すのはお前らだ」

ほら、気張ってけよ。
と、上条の影はその場に座り込んで、手を振った。

「チッ……まァいい……さっきは助かった」

一方通行は舌打ちしつつも、少しだけ感謝して、再びクマの影と相対し、布束と９９８２号もそれに続いて行った。
そして、上条はと言うと。

「……」

未だに自身の影を見つめて、何かを考え込んでいた。

「……おいおい、俺がお前の元に戻ったところで、別に隠された力が覚醒して～……
なんつーご都合主義的な展開は無いぜ？強いて言うなら幻想殺しが使えるようになるくらいか？
まあ、お前はまだこの力を理解出来てねえみたいだが」

「どういうことだ？」

「それがわかんねーうちにゃわかんねーよ。ほら、あいつらの事手伝ってやれよ」

「……分かった。悪いな、助けてもらって」

「気にすんな。今回の件で貸し一つだから」

「おいおい、俺お前に滅茶苦茶貸し有るのに、これ以上どうやって返せっていうんだよ？」

「今までの分は俺が外に出られた事でチャラだよ、チャラ。これで貸し一って事でイイだろ。
借りも貸しも作り過ぎるもんじゃないってな」

「そっか……そうだな。じゃあ俺んとこ戻ってきたら借りた分返すけど？」

「はっ、ふざけんな俺を戻したきゃ張り倒して引っ張って行く位しろよ」

「はは、それじゃあ今日のところは見逃してやるよ」

「言ってろひよっこが」

双子の様に同じ姿形をした2人は、元に戻る事なく戦禍の渦にのまれて行く。

・・・

「オラオラオラァ！！」

「はぁあぁあぁあああ！！」

「ＫＵＴＡＢＡＲＥ怪物ゥゥ！と、ミサカはあああああ！！」

ガルーラガルーラガルーラデッドエンドガルーラ鋼鉄破りガルーラガルーラ。

３人は持てる攻撃手段を合わせて攻撃を続ける。クマの影に反撃する隙を与えないように。

この攻撃で決着をつけるかのように。

「ぐっ……むうっ……」

その猛攻を前に、クマの影は防御に回らざるを得ないようだ。

そこに更に上条当麻が加わった。

「お前ら……暴走しちゃったら、すまん」

唱える。

今出せる最強の氷のスキルを。

「ブフダイン！！」

瞬間、部屋の温度は氷点下に達し、オケアノスの世界と化す。

クマの影の巨体と同じ大きさに達する氷塊が出現し、クマの影を押し潰さんと突き進んで行った。

「ぐあっ……！！」

その氷を真正面から受け止めたクマの影は、苦悶の色を浮かべ、氷を何とかしようとする。

しかしそうはさせない。

「もういっぱあああああつ！！」

再びブフダインを唱える。すると次は、数えるのが億劫になるほど、鋭いドリルのような大量のツララが、クマの影を貫かんと降り注いだ。

「がああああああああ！！！」

十数本のツララが体を貫き、更に貫通しきらなかったツララが体中に突き刺さったまま、まるでハリネズミの様な姿になってしまう。それにより氷を抑える力が失われ、氷塊に押し潰されてしまった。

「やったか！？」

「上条さん上条さん、それはフラグですよ。と、ミサカは上条を諫めます」

「そんな漫画みたいなことが……」

肩で息をしてふらつく上条を、布束が支える。

「ａｎｙｈｏｗ、上条、あなたはもう休んだ方がいいわ」

これ以上は、暴走の危険がある。

本来なら、上条の攻撃に、一方通行のプラズマも合わされば倒せただろう。

しかし、最早それを為す事は叶わない。力の限界だった。

「……影、君は私が４人を殺す事になっても、止めはしないだろう

な？」

「まあ、力を貸すだけだからな。その上で負けるってなら、そりゃこいつらが弱すぎただけの話だし」

「それなら、このまま殺してしまっても構わんな」

土煙が晴れた先には。

クマの影が、満身創痍ながらも、両手を掲げ、力を集めていた。

一同は未だに余力が残っていた事に驚愕しながらも、魔手ニヒルを防ぐべく、行動を開始しようとした。

「待った！」

だがそれは、上条によって防がれた。

一方通行は思わず上条の方を向き、疑問を浮かべた。

「……お前今の状況わかってンのかァ？」

「分かってる上だって。お前ら、下がっててくれ」

と、上条は3人に後ろに下がるように促した。

何か策があるのだろう。3人は素直に従う。

「……オケアノス！」

そして上条の後ろに顕現する、オケアノス。

「今回の件で貸し一つ、って言ったよな」

「その通りだ」

上条は、影に向かって確認をとり、影はそれに対して肯定の意を唱えた。

「暴走するから、抑えとけよ」

「「なっ！？」」

「はっは！つーかそのつもりで来たんだし」

上条のその言葉に、３人は驚愕して止めようとものの、影は当然のごとく、了承した。

「それじゃあ、行くぜ」

上条は一言言うと、そのまま意識が暗転して行った。

・・・

オケアノスの背を破り、ナニかが這い出てきた。

「あれは……」

一方通行が、布束砥信が、９９８２号が茫然として上条のペルソナを眺める。

以前忍者屋敷で見た、初めて召喚したペルソナが、上条の背後に現れていた。

「ははっ！俺が貸し一つって言ったのを良い事に好き勝手やりやが

って……」

上条の影は悪態をつきながらも、その口調は、非常に楽しそうなものであった。

「まさか、自らその状態になるとは……」

クマの影は興味深そうに、それを眺めていた。

「……ク、ろ……ノ、、ず……」

上条の様子は、明らかにおかしい。

意識があるように見られないが、それでも自身の足で床を踏み、クマの影を見据え、背後に佇むペルソナの名を呟いた。

まるで自己紹介をするかのように。

そしてその声に反応して、『クロノス』は動き出した。

それに呼応して、クマの影も、両手に掲げた力の塊を、クロノスに向かって放つ。

ゴウッ、と今日一番の地響きと効果音が響き渡り、それが止んだ瞬間、先ほどまでの音量差で辺りがより静寂に感じられた。

・・・

「……ク、ろ……ノ、、ず……」

あれ？俺は確か……？

ああ、自分で『暴走』状態に持って行ったのか。

力がみなぎる感じがするけど、動かせない。

というか、勝手に動いてる。

そして目の前にはクマの影。怖いなあ、怖い。

でも、負ける気は、ない。

「ジ、お、ダい、ン……」

ジオダイン？雷撃属性なのか？ブフダインじゃなくて？

なんだろやっぱり、ペルソナって良く分かんねえや。

・・・

その時、打ち止めの脳内稼働率は、平時の数値に戻った。

「あれ？」

常に９０％を超えていたその数値は、徐々に低くなり、４０～５０％で落ち着いたのだった。

「どういうことだろ……」

芳川の疑問は解決されないまま、打ち止めの調整が完了した事を示す音が鳴り響いた。

・・・

「ぐうあああああああああ！！！」

クロノスの放ったジオダインは、クマの影の力の塊を打ち抜き、そのままクマの影へのとどめとなる。

クマの影は、ボロボロと崩れ落ち、その巨体は徐々に小さくなって行った。

「さあてと」

上条の影は立ち上がり、肩を回す。

まだ終わりでは無かった。

クロノスを止めなければならない。

「お、あ、、あああああああああ！！！」

クマの影を倒す、という明確な目標を失われたクロノスは、雄叫びをあげる。

まだ足りない。戦いが足りない。と言わんばかりに、上条の影へと迫って行く。

「まあ、なんだ。その幻想をぶちころす！ってか？」

何の変哲もない右ストレート。しかし威力は強烈。

それをクロノスではなく、上条本人が受け取り、ゴロゴロと５ｍ程吹き飛んだ所で、上条は糸の切れた操り人形のように倒れ伏し、クロノスは消え去っていた。

「……！」

声も無く吹き飛ぶ上条を前に、一方通行達は外道を見るような眼で上条の影を見た。

「え？イヤイヤ何？俺が悪いの？」

「いやァあれはちょっと……」

「やりすぎじゃないのかしら」

「流石のミサカもこれは引いた」

意識を刈り取るのが一番分かりやすいんだって！と、必死で説明をするが、３人の冷たい視線に上条の影はいたたまれなくなる。

「まあなんだ、あれだよ、貸しは無しって事で！ＨＡＨＡＨＡ、じゃあ僕はこれで！」

言うだけ言って、影はどこかへと消えて行ったのだった。

「……あいつはマジでなンなンだ」

・・・

「クマ？」

クマは目を覚ます。

その後ろには、クマの影が一言も発さず佇んでいた。

「クマは……」

クマは意を決して、自身の影に向かって語りかける。

「クマは、今まで自分が何なのか分からなかったクマ……」

「ひょっとしたら、答えなんて無いのかも……なんて思った事もあったクマ……」

「結局、クマはシャドウだったけど……だけどクマは、ココに居るクマよ……

今ココで、生きているクマ……」

「……シャドウだからなンだってンだ」

「一方通行の言うとおりです。と、ミサカは同意します」

「ａｎｙｈｏｗ、あなたは私たちの仲間。それでいいんじゃないかしら？」

「それじゃあ、クマはもう、一人で悩まなくて良いクマか？」

「つゥか悩んでる位なら相談しろってンだ。言われなきゃわかンねェ事なンざいくらでもある」

「クマ……およよよ、クマは果報者クマァ……」

すると、クマの背後に控えていたクマの影が、陰鬱な光を放っていた状態から、青白い光を放つようになった。

「「ペルソナ……？」」

その光を見て、直感的にそれがペルソナである事を理解する。
クマは、一歩ずつ、クマの影へと向かって行った。

「……」

支え合う仲間への想いが、立ち向かう『力』へと変わる……
クマはもう一人の自分……困難に立ち向かう為の人格の鎧、ペルソナ「キントキドウジ」を手に入れた！

――キントキドウジ。まさかり担いだ金太郎。

「クマ……疲れたクマ……」

「そォだな。さっさと帰るか……」

未だに気絶している上条をかついで、一同はホテル・グランドデトロイトを後にする。
旅行に行く時は、ホテルじゃなくて旅館に泊まろうと誓って……

・・・

「あれ？」

上条当麻は、いつもの空き地に戻ったところで目を覚ました。

「おォ、丁度いいとこで起きたなァ。もう帰るとこなンだわ」

「え？終わったの？まあ見た感じ無事って感じだけｄ……痛ッ」

頬から感じる鋭い痛みに、上条は顔をしかめる。
すると奥歯がポロリと落ちてきた。

「あれ？なんで歯抜けたの？痛いんだけど……」

どうやらあの時の記憶は無いらしい。
そっとしておこうと４人は思った。

## そのよんじゅうはち　うそ？ぼうそう？そーですか（後書き）

やっとクマもペルソナ覚醒。

## そのよんじゅうきゅう　うちはどこだ？（前書き）

日常編。しばらく日常編が続きます。
場合によっちゃちょっとした戦闘もあるけど、基本日常です

## そのよんじゅうきゅう　うちはどこだ？

さて、クマがペルソナを得てから二日程経った訳だが、これと言った進展は見られなかった。

マヨナカテレビも、誰も映らなかった為、天井亜雄はやはり死んだと見て良いのだろう。少し気の毒ではあるが、別にそれだけで天井に対して何の思い入れも無いので気にしない。

その為天井亜雄を調べる必要も無くなったので、半蔵に天井の件は終わっていいと伝えて、半蔵もそれに了解した事で、この失踪事件は一応の終わりを見た。

そんな訳でつかの間の落ちつきを取り戻した一方通行達だが、すっかり忘れていた問題があった。

――――部屋を探さなければならない。

新居探し。

今打ち止めは９９８２号と共に病院に行っている。調整は終わったものの、その後の経過を確実に調べる為だ。

研究所にそれを行うための設備は整っていないので、打ち止めもまたカエル顔をした名医の世話になっている。

と言う事で、９９８２号は今現在不在で、トレーニングも休みで、何より暇なので、一方通行の独断と偏見により住居探しを終わらせてしまおうと考えたのだが。

「何でお前が居るんだ？」

「あら、何か問題でもあるのかしら？」

芳川桔梗が、一方通行の新居探しについて行っていたのだ。

「なンですかァ？ひょっとして、保護者の代わりでも務めよォってのかァ？」

だとしたら、ンなモンいらねェよ。と、シッシと手を振りながら嫌そうな顔をする一方通行。しかし、芳川の返答はそんな一方通行の予想の斜め上を行っていた。

「いや、私も御同伴頂けないかと思いまして」

「……ハァ？わんもあぷりーず？」

「私も新居に住ませろって言ってんのよ言わせんな恥ずかしい」

「なンでだよ……？」

「研究職を追われて、貯金も確実に減って行くだろうから、今住んでる部屋にいつまでも居る訳にはいかないのよ」

だったら早く引っ越した方がいいでしょ、とドヤ顔で語る芳川。どうみても家賃を折半などする気は無く、全部一方通行の負担に

しようとか考えているに違いない。

「……盗人猛々しいと言う言葉を口にするのは始めてだわァ」

「ケチケチするなよ」

「そりゃこっちのセリフだっつゥの」

「そんなこと言われても、うち無職ニートやし」

そんなこと言われてもうちポンデライオンやし、みたいな口調だが、ポンデライオンとは違って物すごくイラッと来る。

「ンな事言ったら俺だってニートだっつゥの」

思わず芳川の言は言い訳にならないと、突っ込みを入れた。

退路を奪われた芳川は、考える。

ニートとニート。社会的地位は、同率。

ならばどうする？答えは簡単、一方通行の社会的地位を向上させる。

それにより一方通行＞芳川の図式が成り立ち、芳川は「キミは社会的地位が私より上なんだから、私に施しの一つでも与えるべきなのよ」と一方通行に合法的にたかる事が出来るはずだ。

と言った具合に瞬間的に脳内で結論を叩きだした。

そして芳川は、提案する。

「……あなたはまだ若いんだから、長点上機退学した後、別のとこに復学しなさい？

そうだ、上条君のとことかどう？あそこなら愛穂も居るわよ？」

一応、一方通行は長点上機学園に在学中、であるのが書類上の設定なのだが、『実験』から手を引き足を洗うには、少しでも『実験』に関わった場所全てを遠ざけなければならない。

もちろん、長点上機もその一つだ。

故に長点上機を止めたら、今住んでいる部屋（長点上機の寮）からも出て行かなければならない。

もっと早く出て行くべきだったのだが、色々とバタバタしていたり、引っ越す事に難色を示していた９９８２号が居た為、なんやかんやでココまで遅れてしまったのだ。

「こんな時だけ真面目になるなっつゥの。お前が働くってンなら学校行ってやっても良いぜ？」

芳川の思考を知らない一方通行は、突然芳川がシリアスモードに入ったと勘違いして、そのノリにはついていけねェと切って捨てた。

そして冗談交じりに芳川に働くよう促したのだが。

「そうね、私と一緒にニート生活を謳歌しましょう」

一瞬にして芳川は掌を返した。

「お前は妖怪手のひら返しかよ」

「妖怪とは失礼しちゃうわね。どっちかって言うと集利盛（たかりさかり）ね」

「ンな力士みたいな言い方すンじゃねェよ」

「そんなことより、部屋を探しましょう、部屋を。出来れば即日入居出来るような所。

私の部屋、最後の家賃は日割だから」

日割で余った分は戻って来る。ならば早めに引っ越すに越した事は無い。

何処までも金にこだわる芳川に呆れ１００％の視線を飛ばして、どんよりとした口調で突っ込みを入れる。

「お前どンだけ金に困窮してンだよ……」

「むしろ一方通行に生活費をたからずに、こうやって節約を考えてる事を評価してほしいわね」

「いや、たかり盛りとか言って俺から家賃たかろうとしていた時点で台無しだから」

評価すべき点を挙げる前にゲームセットだった。９回３アウトの時点でネクストバッターズサークルに入って素振りをしているようなものだ。

お前はもう負けている……一方通行はそんな視線を芳川に飛ばすが、全く意に介していなかった。

「それじゃあ私食事係するから、あなたは掃除係ね。９９８２号と打ち止めは洗濯係で買い物は最低２人で暇な人が行くと言う事で。

あらやだ一方通行ハーレムじゃない」

「何勝手に将来設計してンだ」

「お姉さんから年頃の女の子、更には幼女までよりどりみどり！更には姉妹丼だってついて来る！お買い得ね！」

「お姉ェ……さん、だと……？」

色々と突っ込み所が多すぎたが、一方通行が何より気になったのは、「お姉さん」だった。

芳川って何歳なンだ？と頭の中でぐるぐると思考の渦にのまれてしまったため、思わず「お姉さん」発言に疑問を呈してしまう。

「あぁん？」

そんな一方通行に対して、芳川は普段の眠たそうなジト目をカッと見開き、威圧した。

その威圧感は以前一方通行がシェリー＝クロムウェルに向けたそれと、互角。戦闘モードに入ってなかった一方通行も、思わずたじろいでしまう。

「イヤ、何でもねェです……おｂ……お姉さん……」

「よろしい」

おｂの続きが気になるものの、一応お姉さんと呼んだので、芳川は一方通行に及第点を与え、威圧を止めた。

「さあ、部屋探しにれっつごー」

いつの間にか芳川主導で部屋探しをする事になっていたのだが、
一方通行は考える事を止めた。

・・・

「見つからないわね」

不動産屋を回り始めて5件目が終わった。
しかしこれと言ってめぼしい物は無く、芳川桔梗はやれやれだぜ、
と言った具合に一仕事終えた作業員のごとく額から流れる汗を拭う。

「見つからねェのは」

一方通行は溜息をつきながら、芳川を睨みつける。

「お前が「あれもほしいこれもほしい」っつって我儘抜かしまくるからだろォが!!
何処のブルーハーツだよお前は!!」

「あらやだ、どうせ探すなら完璧な物件がいいでしょ?後になってこれがよかった……
とかなるのは私の本意じゃないし」

「俺はそンな些細な事にはこだわらねェンだが」

「私がこだわるのよ」

「住まわせてもらう分際で何言ってンだ」

「何!?食事係だけじゃなくて、掃除係もさせようっての!?分かったわよ、あなたは部屋では何もしなくていいわ!私が食事と掃除を兼任するから!!」

まさかとは思うが、食事と掃除で家賃代分は稼いだとぬかしおるつもりだろうか。

いや、家賃を払うそぶりを見せないことから、恐らくそうなのだろう。だがそれ以上に、一方通行は納得できないことがある。

「逆切れかよ!?」

朝の１０時位に家を出て、今現在、１７時。

ここまで何も得られないままひたすら芳川につきあってやったと言うのに、この仕打ちは何だ。一方通行の中に溜まってゆくもやもやはとどまるところを知らない。

９９８２号から、「打ち止めの調整はこれにて終了」と言う旨のメールが届き、いよいよ部屋を見つけなければと言う段階に差し掛かってきたのだが、突如として、後ろから声をかけられる。

「おっ、一方通行に芳川じゃん?こんなとこでどーした?あれ?不動産屋?ひょっとして2人でどうs」

「違うこいつがたかって来るだけだ」

黄泉川愛穂。芳川の友人であり、一方通行の師匠でもある。

そんな黄泉川だが、2人が不動産の前で立ちつくしているのを見て妙な勘違いをしたようだった。

「……一体、どーゆー状況じゃんよ?子供にたかるなんて大人とし

てどうなのさ」

「仕方ないのよ、これは仕方ないの。でもちゃんと食事係と掃除係を兼任するつもりだったのだからいいでしょう」

「どうせしばらくしたら飽きるじゃん？そしたら結局一方通行が色々動く羽目になるじゃんよ」

「ギクッ」

どうやら徐々に仕事を減らして、さりげなく全ての仕事を一方通行に押し付けよう、等と考えていたらしい芳川は、黄泉川の指摘に図星だった。

「お前……」

そんな指摘を目の当たりにした一方通行は、芳川に視線を合わせる。

料理は出来ないと言う思いと若干の侮蔑を乗せて。

一方通行の視線に居たたまれなくなった芳川は、この空気を何とかすべく、話を方向転換させようと試みた。

「そうだ！それなら、あなたの家は駄目なの？」

「「えっ」」

黄泉川の部屋は１人暮らしにしては随分広い。その上その部屋は１３階に位置していて、高い。どう見ても、削減されゆく公務員の給料では賄えないレベルの家賃の部屋である。にもかかわらず、普

通に高級マンションに住まう黄泉川であった。
それは何故かと言うと、そのマンションが建築方面の実地試験を兼ねた施設であるため、何かあった時の為に学生がそこに住まう訳にもいかないので、試験を実施している側が家賃の何割かを負担する事で、黄泉川等の教師に住んでもらっている、と言った状況なのだ。

そして実地試験だけ有ってセキュリティ面も万全。それだけでなく、住んでいるのは大人ばかりなので、いろんな意味で安全だろう。
流石に教師だけでなく、アンチスキル（スキルアウト）が何人も住まうマンションに襲撃をかける馬鹿はそうそういまい。

「この子ってば色々問題抱えてるから、出来れば近くに大人が居る状況を作りたいのよね」

割と本音を黄泉川に伝える芳川。
自身が担当するクラスは良い子ちゃんばかりで、月詠小萌が抱える問題児を見てきた黄泉川は、こうやって問題児を担当する事に対して割と乗り気になりやすい。それ故に以前一方通行や上条当麻が、自分達を鍛えてほしいと申し出た時は軽く歓喜したほどだ。
すなわち、芳川が冗談っぽく提案したのだが、一方通行が許容するなら喜んで受け入れたいと、黄泉川は思っている。

だがしかし、それに対して一方通行は難色を示した。

これ以上誰かを巻き込む訳にはいかない。
ただでさえいろんな所に目をつけられているのだ。そんな中、黄泉川の部屋に居候など、余計な被害が飛び火する恐れがある。
確かに黄泉川の部屋は色々とセキュリティ万全だろう。

だが、そんなセキュリティを無にするのが、暗部だ。

何があるか分からない。自分や芳川ならまだしも、光の住人である黄泉川が、わざわざ自ら闇に片足を突っ込む必要などは無いのだ。

そんな訳で、割と乗り気な顔をしている黄泉川には悪いが、この話は無かった事に

と言おうとした矢先。

「子供が遠慮するんじゃないじゃん」

先手を打たれた。

「そうそう、子供なんだからもっと大人に甘えなさいな」

お前は黙ってろ。

「お前今、「俺がいると迷惑が～」とか考えてるじゃん？そりゃ私を舐めすぎだ」

「うるせェよ、俺に関わると本当の地獄はこれからだって言うベジータの気持ちがよォくわかるぜェ？」

試してみるか？と、獰猛な表情を浮かべ、挑発する一方通行。

しかしそんな１００人見たら９９人が逃げだすだろうその表情を見ても、動じない黄泉川。

一方通行の目の前には1%側の人間が居た。

「学園都市第一位って名前は、裏でも良く聞くじゃん。だけど、それがどうした？
そんな理由で、「導く事が出来る子供」と「出来ない子供」なんて区別は出来ないしするつもりもないじゃんよ」

子供はもっと我儘抜かせばいいんじゃん。と黄泉川。
芳川は流石に空気を読んだのか、2人の会話を聞き入っていた。

「言っておくが、問題児は俺だけじゃねェぞ」

黄泉川は芳川を自身の元に引き寄せて肩を組む。

「こいつのことじゃん？」

「イヤ、それもだが違う」

「私も……だと……？」

衝撃的真実を知ってしまった、と言う表情を浮かべ、うなだれる芳川。
しかし芳川に構っている暇はない。

「お前は俺と芳川の2人だけだと思ってるが、それは違ェ。あと2人、訳有りが居る。
そいつらも間違いなく一緒に住めば面倒な事になる事請け合いだぜェ？」

「無問題じゃん。むしろ問題児をいっぱい引き受けたっつって小萌

先生に自慢してやるじゃんよ。
あれならきっと血の涙流して悔しがる事請け合いってね」

危険？むしろウェルカムだ。と言わんばかりにサムズアップする黄泉川。

「つーか、トレーニングジムで十二分に一方通行とは絡んでるんだから、同居なんざ今更じゃんよ。
むしろ今まで同居しなかった方が不思議じゃん！」

「いやなンでだよ！？」

ばしばしと芳川の背を叩く黄泉川。恐らく一方通行を叩こうとすると反射されると思ったのだろう。
芳川は非常にわずらわしそうな顔をしていた。

「ま、とりあえずうちに来たらいいじゃん？そーだ飯とかまだ食べてないだろ？
その２人も連れてきたらいいと思うじゃん！」

最早一方通行では黄泉川を止める事は出来ない。
なぜなら基本的にはトレーニングジムで上下関係が構成されているからだ。
頼めるほど頼りがいは無いが、頼みの綱？の芳川も、「冗談のつもりがこんなことになるとは」と言う顔をしていたので、詰みだろう。

「……わかったよ。行ってやる、行けばいいんだろォ？その代わり、覚悟しとけよ？」

「覚悟なんざとうの昔に出来てるじゃん。『生きる』覚悟をな！」

「……ハッ、ンだそりゃ馬鹿じゃねェの」

「それもとうの昔から知ってるじゃん」

口では黄泉川の事を馬鹿にする言葉を吐く一方通行だが、その割に顔では悪い気はしない、と言った笑みを浮かべていた。

しかしそれは本人も無意識の事で、割と自然な笑みを浮かべていた一方通行に、黄泉川と芳川も笑った。

・・・

「つゥか、テレビはどうすンだよ」

「ああ、すっかり忘れてたわね」

「テレビ？なんの事じゃん？」

「あァー、あれだ、あれ。最近流行りのプラズマテレビを買おうぜェって話」

「それなら問題ないじゃん！うちのテレビも試供品でモニターも兼ねてるから、その辺の電器屋で売ってるのよりも普通に新しいじゃんよ！

妙な機能がついてるのは御愛嬌だけど！」

（つか、テレビは場所が変わっても同じテレビの中に入るなら、同じ場所に出れるのかァ？）

そんな疑問が頭をよぎったが、芳川の力があれば問題は無いだろう。

そう判断した一方通行は、黄泉川に引っ張られて黄泉川邸へと向かって行く。

（……セキュリティとかガン無視で良いから、テレビの中に入る用の部屋を借りた方がいいな……）

流石にテレビの中に半身を突っ込むと言うマジックのような現実を黄泉川に見られる訳にはいかない。

結局、黄泉川の部屋に住むことが決定したと言うのに、後日部屋探しをする羽目になった一方通行だった。

## そのよんじゅうきゅう　うちはどこだ？（後書き）

まったりまったりした話の方が、私は好きです。でも厨二はもーっと好きです

## そのごじゅう　おんりーまいぺーすじゃん

「どォしてこォなった」

こんなはずじゃなかったのに。

と言うか、こんなことしている暇は無いと言うのに。

学園都市外部への外出許可を無理矢理ぶんどって、1週間だけ外に解放されたと言うのに。

何故。

何故『目的地』に1ミリたりとも近づかずに、こんな所で道草食ってるのか。

そんな不満を乗せて、目の前の『シスターさん』に突っ込みを入れる。

「だからバスに乗っても学園都市にはつかねェって言ってンだ！！こっからなら歩いて7、8分もありゃ着くから、適当に歩いてろってンだ！！」

「あらあら、そうなのでございますか？ご忠告ありがとうございます」

何故か、「学園都市外部への用事」を済ますのではなく、迷子のシスターを拾っていた。

・・・

時は少し遡る。

天井亜雄の影から得た『タルタロス』と言う単語に、シャドウやテレビに関する実験。
それを調べるべく、学園都市の暗部の情報源を片っ端から洗って行った。
もちろん足がつかないように、海外のサーバーを何重にも経由してみたり、ダミーを配置してみたり、兎にも角にも体を鍛えること以上に力を注いだ。
そのお陰だろうか、肝心の実験内容まではわからなかったが、学園都市創設から『超能力』とは別に『心』に関する実験も行っていた、と言う事は分かった。

そして12年前、学園都市外部から、新たに実験の協力者として『桐条グループ』と手を結んだようだ。

桐条グループ。これは学園都市外部にある有名企業で、今では世界有数の複合企業だったと一方通行は記憶している。
それが学園都市の実験に加担していたようだ。資金提供の代わりに学園都市から人材を提供してもらっていたのだろう。
表向きはよくある相互協力にて行われる技術向上、と言った所だろう。これだけなら『表』の情報源からでも調べられた。

しかし、『裏』では違うようだった。
11年前、桐条グループは「実験事故」を起こしている。それも大量の研究者を巻き込んだ未曾有の実験事故だ。
そのような危険な実験を、学園都市外部で普通に行われたとは考えにくい。
更にこの事故の原因はひたすら秘匿されているようで、原因は分からずじまいである。

このような危険な実験の内容は、一方通行にとって一つしか思い浮かばなかった。

すなわち、この桐条グループは、『シャドウ』に関して何らかの実験を行っていた可能性が高いのだ。

故に一方通行は、無駄かもしれないがこの桐条グループに直接赴き、色々と調べることを決めた訳である。

学園都市に残された桐条グループに関する情報では、まだまだ足りないのだ。

だがしかし、一方通行という能力の希少性では、外に出してもらえない可能性が高い。

それでも、この『桐条グループ』。一つ調べておかなければ気が済まない。

そうして一方通行は、「色々と色んな所に脅しをかけて」、1週間の外出権をもぎ取ったのであった。

しかし、良い事尽くめではない。

今回の件で確実に暗部に目をつけられたはずだ。

実害と言う実害は出していないので、何かを請求されると言った事は無いだろうが、確実に警戒の度合いは上がるだろう。

ならば、なおさら桐条グループで情報の一つでも得ないと割に合わないと言うのに。

一方通行は、一人のシスターと出会ったのだった。

・・・

一方通行は監視用のナノマシンを体内に注入され、外出用書類をアンチスキルに見せて、晴れて『門』の外に出られたとさ。

何だかアバウトなチェックで、アンチスキルは何か別の事で頭がいっぱいになっているようだった。

と言うのも、もうすぐ学園都市最大のイベント『大覇星祭』が行われるのだ。

その準備の為に、外部から内部からひっきりなしに業者が行ったり来たりするので、そちらを厳重に管理しなければ侵入者を容易に許してしまう事になるわけで。

１人の学生が外に出る程度の事で、アンチスキルの手を煩わせるわけにはいかないのだった。

「あァ、娑婆の空気は久々だァ」

あっさりとチェックを抜け、外に出ると、対して違いは無いのに何だか良い空気を吸えた気がする。

特に感慨深い訳でもないのだが、１人旅と言うのも中々そそるものがある。

「学園都市の外に行ってくる」と、黄泉川邸に居る面々に言い放ったところ、「自分探しじゃん？」とか「ミサカも行きたいです」とか「お土産よろしくね」とか「ミサカはミサカは」とか、黄泉川とゆかいな居候達が思い思いの言葉を吐いてきたので、耳をふさいでさっさと出てきた。

とりあえず９９８２号に、「御坂とかも帰ってきてるみたいだから、上条と一緒にペルソナ鍛えとけよ」と伝言を残して。

学園都市の外に出るには、一方通行の様に「合法的」に出て行くか、「違法的」に出て行くかしかない。

９９８２号や打ち止めが後者を行うような、そんな無謀な真似をするとは思えなかったが、一方通行もこれはとても重要な事で譲れない事でもあったためきつく忠告しておいたので、まあ大丈夫だろう。

唯一気がかりなのが、打ち止めが変に動いて暗部を刺激しないかどうかだ。

今は黄泉川邸に居候している、と言う事でアンチスキルの住む部屋ならそうそう手出しは出来ない、と考えている。

しかし、その気になればアンチスキルの一人や二人、「居なかった」事にするなど容易いのだ。故に９９８２号には打ち止めのストッパー役を頼みこんだ。

そうして渋々だが、９９８２号は一方通行の頼みを、お土産を買って来ることで受け入れたのだった。

さて、桐条グループと一言に言っても、文字通り「グループ」なので日本どころか世界中に企業が点在している。

そんな中、どうやって情報を探し出すのか。

方針は既に決まっている。

――――『学園都市』、である。

学園都市と言っても、先ほどまで一方通行が居た学園都市ではない。
別の場所にもあるのだ。

学園都市が。

これもまた桐条グループが関係している。
１１年前の『実験事故』によって、全てが蹂躙され尽くした土地。
桐条グループは、その土地を中心に学園都市を設立した。

まるで何かを埋め立て、隠すかのように。
恐らく、『実験事故』の隠蔽工作なのだろう。

ひょっとしたら昨年、その学園都市に発生した『集団無気力症事件』も何か桐条グループの実験と関係があるのかもしれない。

更に言えば、この学園都市に、桐条グループのご令嬢が住んでいるようだ。
と言っても「ご令嬢」なので、１１年前の事など知る由も無いかもしれない。
だが、桐条グループを片っ端から洗うよりも、本拠地に乗り込んだ方が早い。一方通行はそのように判断したのだった。

「停留場はこっから……」

そして今、一方通行はバス停を探していた。

桐条グループの学園都市に行くまで、バスと電車とバスと電車とモノレール、と言った具合に乗り継いで乗り継いで、ようやくたどり着けるのだ。

能力でさっさと行きたいところだが、学園都市外部でそんな目立つ事などできない。
次の日の朝刊に「宇宙人!?空飛ぶ少年」などと言う見出しで新聞に載るなど、許容できるはずがない。
故に時間をかけてマッタリ移動しようと言う考えだ。1週間あるし。

下調べしていた情報を頭の中で整理していると、ようやく停留所を発見した。
一応最初に乗るべき停留場は、視線の先にあるおんぼろ停留場である。

こんなバス停から、誰がバスに乗り込むのだろう。俺以外に。とか考えていたのだが、別の乗客が、居た。

（……シスター？）

インデックスでは無い、別のシスターが居た。
ここ最近シスターだの宗教だの、非科学と関わる機会の多かった一方通行は停留所でキョロキョロしているシスターを見た時、絶対なンかある。と嫌な予感が頭をよぎったのだが。

「あのー……」

そのシスターが、話をかけてきた。

「あァ？」

なるべく印象に残らないように、一般人を心がけて対応しようと

したのだが、無理だった。
何せ既に目立つ容姿なのだから。

「恐れ入りますが、学園都市へと向かうならこのバスに乗ればよろしいのでしょうか？」

流暢な日本語。今までに見た魔術師関連の人間もまた、流暢に日本語を話していた。
ついでに言えば、変な格好もしてた。目の前のシスターはどうだろう？

残暑の厳しい中、暑さと真っ向勝負するかのような黒い修道服。
もちろん長袖長スカートで、それでも肩口や膝上２０センチの所で着脱できるようにファフナーがついているのだが、前述した通り長袖長スカートのフル装備である。

どう見ても、変な格好であった。人当たりの良さそうな笑みすら、一気に胡散臭く感じられる。

何だかとてつもなく面倒な事になりそう。
一方通行の脳内で警鐘が鳴り響いたのだが、ここで上手に乗り切れば問題はあるまい。

「あァー、学園都市ってのは色々と警備が厳しいから、学園都市外部の公共機構では学園都市までいけねェよ。
唯一行ける乗り物ってーと、契約されたタクシー位なもンだぜ？
こっから歩いて7、8分くれェだから、金を節約してェなら頑張って歩くこったなァ」

と、ここで、丁度いいタイミングでバスがやってきた。

これに乗っておさらばしてしまおう。一方通行はバスに乗り込もうとする。

「あら、そうなんでございますか？わざわざありがとうございます。それであなたは学園都市からここまで歩いてきたみたいなのですね」

何故か、そのシスターは一方通行に伴って、バスに乗ろうとしてきた。

「いやアンタ、話聞いてましたかァ？」

「はい？」

「バス乗っても学園都市行けねェって言ってンだ。だから歩いて行けって言ってンだ！」

一方通行は、目の前の黒シスターと永久の別れを成し遂げるべく、バスからやんわりとそのシスターを降ろす。

「まあ、そうなんですのね。すみません、ご忠告感謝します」

と、シスターは苦笑いを浮かべながら、一方通行に伴って、バスに乗ろうとしてきた。

「だァアアァ！！！人の話聞いてますゥ！？歩いて行くかタクシーしかないンですよォォ！？」

これでは埒が明かない、と言った具合に、一方通行はそのシスターの両脇を抱え、共にバスから降りた。

するとバスの運転手は、2人がバスに乗る訳ではないと判断したのか（それともいつまでも乗るか乗らないかはっきりしないのは迷惑なのか）、プシューと扉を閉じて、発車させてしまった。

ちなみに、次のバスまで2時間半。

「どォしてこォなった」

時は冒頭まで戻る。

「あらあら」

そのシスターは、ニコニコと柔らかい笑みを浮かべ、次のバスが来るのを待つつもりなのか、停留所のイスに座った。

「だからバスに乗っても学園都市にはつかねェって言ってンだ！！こっからなら歩いて7、8分もありゃ着くから、適当に歩いてろってンだ！！」

「あらあら、そうなのでございますか？ご忠告ありがとうございます」

全く話を聞いていない。このシスターは笑顔で馬耳東風なのだろう。

とはいえ、行ってしまった物は仕方ない。と言う事で一方通行も苛々した面持ちでイスに座った。

「あら？何やらイライラしているように見えるのでございますが、大丈夫でございますか？」

「あァ、おかげさまでなァ……」

駄目だ、このシスターは天然記念物級の天然ボケだ。
いちいち言う事為す事に口をはさんでいてはいずれ円形脱毛症にでも陥ってしまうだろう。
頭をガリガリと強く掻く一方通行を見たシスターは、懐から何かを取り出した。

「それではこちらの飴玉など、如何ですか？」

「いらねェ」

「はい、どうぞ」

「いや、いらねェって」

そう。このシスターは人の話を聞かないのだ。
何だかんだで飴玉を渡された一方通行は、渋々その飴を口にする。

「苦ッ！！？ンだこりゃ苦すぎンぞォ！？」

「渋柿キャンディだそうでございますよ？」

「誰だそンなもン開発した野郎は！？学園都市に招聘されてもおかしくねェぞォ？！」

斬新過ぎる商品の試供品が蔓延る学園都市。
その外に来てまでこんな斬新な物を口にする事になるとは思っていなかった。

「詳しい事は良くわからないのでございますが、喉が乾きにくくなるみたいでございますよ」

「そォだな、飴舐めりゃ唾液が出て喉乾きにくくならァな。俺には関係ねェ話だが、この炎天下で体内の水分が消費されてる状態ならあまり意味はねェけど」

「成程、すなわちあなたは喉がお渇きになられている、と言う事でございましょうか」

「なンでそォいう話になるンだよ」

「俺には関係ねェ話」の部分を突っ込まれなかった事は良かったのだが、やはりこのシスター、掴み所がなく扱いづらい。

ホントなンなンだ?と思っていた所、シスターは今度は袖の中から魔法瓶を取り出した。

「お前の修道服の中は一体どォなってンだよ……」

「淑女のたしなみでございますよ」

「そォか、だが別に水分なンぞ欲してねェ」

基本的に余計な熱は反射しているので汗もかかない。その為のどなど渇くはずもない。

だが、そんな事情を知る由も無く。一方通行の話など聞く由も無く。

「はい、どうぞ」

「だァからいらねェって……なンでカップから湯気が立ってンだよ」

さっきから一方通行の考えの斜め上を行き過ぎである。

何故こんな炎天下の中、熱い茶を飲まなければならないのか（ベクトル操作によって暑くないし熱くもないけど、精神的に）。

とりあえず一気飲みで口の中にカップのお茶全てを含み、水分子の動きを抑制して、冷ました。

能力の無駄遣いである。

「あらあら、よっぽど喉がお渇きになられていたようでございますね」

「……」

最早、何も言うまい。

「それでは、学園都市まで案内していただけませんか？」

魔法瓶を再び袖の中に吸い込ませながら、シスターは提案した。

バスに乗らずに学園都市に向かおうと考えたらしく、すこしシスターが成長したように感じられたが、何故にそんな事をしなければならないのか。

「あァ？なンでそンな面倒な事を……」

確かに、さっさとこのシスターを学園都市に連れて行ってしまった方が精神衛生上良いのかもしれない。

そこまでする義理は無いのだが、このままではこのシスターは一方通行と共に学園都市（桐）の方まで行ってしまう事請け合いである。

このシスターの現在地を考えると、目的地は学園都市（桐）ではなく学園都市の方なのだろう。

どうせ歩いて１０分もかからないのだ。次のバスまで時間はたくさんある訳なので、案内してしまおう。

学園都市に入ってからはもう知らない。目の前のシスターは歩いて5分で迷いそうだが、そこまではもう知らない。

そう考えた一方通行は立ち上がり、シスターについて来るよう促した。

「行くぞ。手間かけさせンなってンだ」

「連れて行って下さるのでございますのね、何度も何度もご迷惑をおかけします」

「気にすンな。こっちも時間が出来たから協力してやるだけだからなァ」

と、皮肉を吐く一方通行。

しかし、シスターはその皮肉に気付かず、普通に感謝を示す。

「そうなのですか、それはありがとうございます。

あ、私の名前は、オルソラ＝アクィナスと申しますのでございますよ」

「……鈴科だ」

さらりと偽名を教える一方通行。

外部では飽くまで一般人を装うつもりなので、名前を尋ねられたら鈴科と名乗る事にしていたのだ。

「鈴科さん、ですね。それでは、バスの路線図の読み方を……」

「なンで話がバスに戻ってンだよ！？」

話が巻き戻っている。

超能力を開発するより、オルソラの脳内を調べた方が色々と研究がはかどるのではないか、と言う程マイペースさんであった。

「……まァいい、兎に角ついてこい。もォ相手してらンねェ」

マシンガンのごとく天然ボケを放つオルソラに、一方通行は辟易した。

さっさと案内してしまわないと次のバスすら乗れないのではと危惧して、学園都市に向かって、オルソラを引っ張っていくのだった。

# そのごじゅう　おんりーまいぺーすじゃん（後書き）

オルソラさんかあいいよお

## そのごじゅういち　たびはみちずれよはなさけ（前書き）

オルソラしゃんかあいいよお

**そのごじゅういち　たびはみちずれよはなさけ**

「だからなー、2学期と言うのは忙しいのだぞー。大覇星祭に一端覧祭。遠足宿泊学習修学旅行、芸術鑑賞祭や社会見学、大掃除に期末試験追試補修とよりどりみどりなんだからなー。

上条当麻が忙しそうなのも仕方のないことなんだぞー」

と、土御門舞夏はのんびりとした声でまくしたてた。

彼女はインデックスと同年齢程度の容姿に、何故かメイド服を着ていた。

更にそのメイド服ガールは、ドラム缶型清掃用ロボットの上にちょこんと正座し、掃除させろと自己主張するロボットをペシペシ叩いて、手にしたモップを前方に突き刺してその場から動かないように操っている。

有り体にいえば奇妙だった。

「でも、暇だし退屈だしおなかがすいたんだよ？とうまはちっとも構ってくれないし」

インデックスは口をとがらせながら、修道服の懐でじたばたする猫――スフィンクスを両手で抱き抱えながら愚痴る。

テレビとトレーニングと学校。何気にハードスケジュールな上条当麻は、インデックスと中々遊んでやる事が出来ていなかった。

インデックスも上条が忙しいのは理解しているし、邪魔をしてはいけないと言うのも理解している。

それでも、寂しいものは寂しいのだ。

それもそのはず、学園都市内での話し相手は主に上条で、上条がいなければ暇なのである。

もちろん、上条当麻はインデックスを自身の部屋に軟禁……等と言う事はしていない。

合い鍵はもらっているので、日中は街中を散歩して会話相手を探している。

そしてここ1週間での厳選された調査（機械がいっぱいある所には近づかなかったという点で厳選）によると、服屋さんのお姉さんなら、商品の入れ替え時以外だと気さくに話しかけてもらえるけど、これは何だか違う。

後、一方通行ご用達のファミレスのいつものウェイトレスさんも、ランチタイムを終えて落ちついた時は話してくれたりする。インデックス&一方通行のコンビは店の売り上げに多大過ぎる程に貢献している、と言う事で、ドリンクバーと軽食を奢ってくれる程だ。

一度そのウェイトレスさんがインデックスにご飯あげてるのが店長にばれた事があるのだが、インデックスを見て「いつもありがとうございます」と、恭しく一礼して行った。

これだけ見ればどれ程一方通行がこのファミレスに投資してきたかが分かることだろう。

とはいえ満足行くほどの食事ではないのだが、タダでもらっておいて更に要求する程図々しくは無い。

また、学校に行ってない同年代の人は一方通行や９９８２号もいるのだが、そちらはそちらで何やら忙しそうにしている。

たまに街中で会ったらご飯食べさせてもらったりしているのだが、最近は出くわす事自体が無かった。

兎にも角にも、学生の街、と言うだけあって日中は街の８割が学業に専念していて、１割が教鞭を振っているため、絡む相手が滅多にいなく、とどのつまり暇なのである。

しかし、インデックスの目の前に居るメイド服は、そんな制限が無いように思える。

ある時は道路のゴミ掃除、ある時はパン屋さんでパン作り、ある時はレストランで給仕、と言った具合に、神出鬼没、多岐多端なまでにメイドさんであった。

それがインデックスには理解できない。

自身はこの街の学生で無い為、学校に行く事が無いと言うのは仕方ないのだが、土御門舞夏は何故学校に行っていないのか、と。

「そりゃあ、私が例外だからなのだよー」

そんなインデックスの疑問にドヤ顔で回答する舞夏。

「どういうこと？」

「私の通う家政学校……まあ、メイドさん育成学校は現地実習が基本だからなー。

論より証拠、百聞は一見に如かず。事件は会議室でなく現場で起きているのだよー」

「つまり、私もメイドさんになれば、時間を気にせず場所を気にせずとうまに会えるってことかな？」

「メイドさんは一日にして成らずなのだよー。というか人に会う為に成るモノじゃないぞー」

「むむ……」

舞夏の突っ込みにインデックスは考え込む。

そして舞夏は更に追撃を与える。

「それに、家庭的スキルゼロな女の子には厳しいと思うなー」

「むぐっ……なら、とうまを私のメイドさんにする！！」

「それは色々と素敵過ぎる提案だけど……上条当麻の前でそれは言ったら駄目だからなー」

多分、泣くぞー。と舞夏。

「うん、そうだね。悪いけど君も奴もメイドになる時間なんてないしメイドにするつもりもないんだ」

唐突に、土御門舞夏とインデックスの会話が終わりを告げた。

・・・

「……あのクソ不良神父、一体何の用だってんだよ……」

上条当麻は、盛大に愚痴を吐く。

それは何故か。

何やら用事があるらしく、わざわざご丁寧にインデックスを誘拐してまで、上条を学園都市外部に呼び出しなさった。

土御門舞夏に伝言を残していたようで、上条が帰ってきたところに必死そうで泣きそうな顔をして突っ込んできた時はどうしたのだと焦ったものだ。

今日も今日とていつも通り授業に頭を抱え、軽くトレーニングを行い、お勤めを終えた所にこれだ。

つまらん用事だったら、泣いて許しを乞うまで殴って差し上げよう。

上条だけでなく、インデックスにも手を出しただけでは飽き足らず、更に紛らわしいことをして舞夏も泣かせたのだ。許せるだろうか。いや許せない。

土御門舞夏の義兄である、土御門元春もそれを望むはずだ。彼の代わりに自分が奴をボコす。

幕の内コールが脳内で鳴り響き、デンプシーロールを赤毛不良神父にぶちかます自分を想像しながら、上条は外出用書類を片手に『門』へと向かって行った。

・・・

「はァ、なンだって?もう一度言ってみろ」

一方通行は学園都市に向かって歩きながら、思わず尋ね返した。

「はい、実を言うと追われているのでございますよ。

ちょっとしたいざこざがありまして、学園都市なら教会勢力も手を出せないとかなんとか、と言う事を小耳にはさんだ次第でござい

ます」

追われている、およそ穏やかではない現状を、さも当然のように土御門舞夏とは異なるゆったりとした口調で語る、黒い修道服のシスター。

その名を、オルソラ＝アクィナス。

そのマイペースっぷりは会って間もない一方通行ですら頭を抱える程だ。

今もふらふらと路地裏に向かって、学園都市から離れようとしている。それを一方通行が止め、学園都市に向かって引っ張っていく。

何度同じ事を繰り返しただろうか、１０分もあれば学園都市に到達出来ると言うのに、既に２０分は経過していた。

そんな彼女は、今現在追われているらしい。

誰に？

一つ、心当たりがあった。

「……魔術師、か」

一方通行から漏れた、断片的なキーワード。しかしそれだけで十分だった。

それを聞いたオルソラは、軽く身震いして、何故一方通行がそんな事を知っているのか尋ねる。

「何故、魔術師の存在を認めておられるのでございましょう？」

「俺ァ魔術師って職業の人間を２人程、知ってる」

「そうなのでございますか。それで、お茶の味は如何でしたか？」

「あァ、美味かったよ。そのうちまた頼む」

「はい、いつでも申しつけくださいね」

このように、突如として話が切り替わるのも、慣れた。

しばらく話をしていて分かったのだが、どうやら会話の中に一定のアルゴリズムが成立しているらしく、大まかな規則性を把握する事は出来た。

しかし、学園都市第一位の頭脳を以ってしても、その規則性を十全に把握する事は未だ出来ていない。

一定時間が過ぎると一定の規則を以って変化して行く暗号のごとく、オルソラの会話における法則は常に変化して行っている。

反射すら切って、今ある演算能力を全力で用いてオルソラの会話アルゴリズムを検証してみるのも面白いのでは、と本気で考えてしまう程だ。

やはり、超能力などに力を注ぐよりオルソラの脳内を調べた方が、研究がはかどるのではと思う。

閑話休題。

話を元に戻そうとしたところ、携帯電話からメールの受信を知らせる音が鳴り響いた。

「つゥか、魔術師の手から逃れるために学園都市に来たってンなら、止めた方が良いぜ？」

一方通行は携帯を開き、その内容を確認しながら、話を戻す。
メールの差出人は、上条だった。
何やら上条も学園都市外部に用事が出来たらしく、下手したらしばらく戻れない恐れもある、との事だ。

「あら、何故なのでございましょうか？」

きょとんとした顔を浮かべ、ベンチに座っているオルソラ。
何だかんだで学園都市には近づいているが、かなり遠回りをしていると言えよう。
たまたま目に入った公園に腰を落ち着け、オルソラの話を聞いているという状況であった一方通行は、上条に対する返信メールを打ちこみつつも、オルソラの質問に答える。

「その気になりゃァ、魔術師はいくらでも学園都市に侵入してくるからだ」

一方通行は忌々しげに舌打ちしながら、ぼさぼさの金髪ゴスロリ女を思い出していた。
そしておそらく、上条当麻もまた、一方通行の知らない魔術師と遭遇した事があるのだろう。
そう考えると、学園都市が安全地帯かと問われれば否と答えざるを得ない。

「それでは、私は一体どうしたら……」

オロオロとし、眼にはうっすらと涙を浮かべるオルソラ。
上条当麻だったら、迷わず助けようと行動を起こすのだろうが。

一方通行には、そこまでする理由がない。

会って間もない人間を助ける程、お人よしになったつもりはないのだが。

（……いつからこンな甘っちょろい人間に成り下がったンだかなァ）

頭の中で嘆息しながら、一方通行はオルソラに向かって口を開いた。

「あー、それなら、俺とついてくるかァ？」

「はい？」

突然の提案に、オルソラも良くわからない顔をする。

「こォ見えて腕は結構立つから、護衛役くらいには成らァな。それに今から向かうところでは、魔術師もそうそう動けはしねェと思うぜ？」

桐条グループという、『表』の世界でも有数の企業。

これのお膝元で暴れようなどと言う馬鹿は、そうそう居ないだろう。居るとしたらそれはただの戦闘狂だ。

そしてオルソラは、そんな戦闘狂に狙われるような人間には見えない。

少なくとも一方通行と一緒に居るうちは、下手に学園都市に潜伏するよりかは安全であるはずだ。

とはいえ、この提案を断るなら別に引きとめるつもりはない。

上条なら有無を言わさず助けるために、自分の手を差し出すだけではなく自分から掴みに行くのだろうが。

（流石に差し出した手を払う人間まで、助ける気にはならねェよなァ……）

そう考えると、上条のお人よしっぷりがよくわかる。
断られたら、学園都市まで案内して、それで終わりだ。
一方通行が提案すると、オルソラはその言葉をしばらく反芻していたのか、何やら考え込んでいる。

そう言えば、オルソラは学園都市に入る為の許可証を持っているのか？等と一方通行にとってはどうでもいい思考が頭をめぐり始めた頃、ようやくオルソラが口を開いた。

「あの……不束者ですが、よろしくおねがいいたします」

「そのセリフは何か誤解を招きかねねェが……まァいい。とっとと行くぞォ」

「はい、ありがとうございます」

一方通行が立ち上がり踵を返すと、オルソラもそれに追従して、再びバス停へと向かって行く。
こうして再び、超能力者と魔術師が交差したのだった。

・・・

「今日は何かあれだな」

警備甘くね？と呟く上条当麻。
今現在、『門』ではひっきりなしに業者が行き来している。
そう考えると警備すべき相手の比重も変わって来るのだろう。

記憶を失っている上条には、何故こんなに業者が来ているのか分からなかったが、そういえば「大覇星祭」と言うのが近づいてきているとかなんとか、街中で聞いた。
話を伺う限りでは、かなり危険なイベントらしい。
端的にいえば、「能力有りの運動会」。

学園都市に住まう者ならば、その危険性は簡単に理解できることだろう。
そして上条当麻は、無能力者。

以前ならば『幻想殺し』も使えたのだが、無い物ねだりをしても仕方あるまい。

更に今年の大覇星祭では、ゲストに外部からアイドルを呼び寄せたようである。それは、何やら最近ＣＭなどでよく見かける「りせちー」だそうだ。
青髪ピアスも大ファンらしく、先日その情報を青髪が聞きつけた時は狂喜乱舞していたのは記憶に新しい。

だが、学園都市は割と治安がよろしくない。
そんな中で、外部からやってきた人気アイドルが間違って怪我でもしてしまったら大事である。
故に今年の警備は更に厳重なもので、外部からやってくる業者の方に警備の比重が偏るのは仕方ない事だと理解した。

かくして、あっさりと学園都市の外に出られた上条は、赤毛魔術師――ステイル＝マグヌスの指定した『薄明座』とか言う3週間程前に潰れたらしい劇場へと向かっている。

一応、いつ戻ってこられるかわからないので、一方通行にその旨を伝えるべく、携帯電話を開く。

すると、割とすぐに返信が来たのだが、一方通行も現在学園都市の外に出ているらしい。

第一位なのに良く出られたなあ、などと考えるが、色々手まわしをしたのだろうな。と思いつつも、一方通行からのメールは「実験に関して調べ物がある」との事なので、上条は自分の事に巻き込まないよう、それに対する返信は「了解、頑張れよ」と簡単なものにして携帯電話を閉じた。

そうして、おんぼろのバス停を通りすぎ、携帯のＧＰＳによる地図を睨みつけながら『薄明座』を目指して行く。

・・・

上条当麻がバス停を通りすぎて数分後、一方通行とオルソラ＝アクィナスはそのバス停に到着した。

「それじゃ、しばらく時間はかかるがここで待つぞォ」

ドカッ、とバス停のベンチに座り込む一方通行。

そのベンチは老朽化によって一方通行の軽い体重すら支えるのに一苦労していた。

「あのー」

「あン？」

「歩いて行くか、タクシーに乗らないといけないのでございません

でしたか？」

「ほォ、学園都市の行き方をよく知ってるじゃねェか。
外部から来る人間は、その事を知らずに結構苦労するってのによォ」

「ふふ、ありがとうございます」

「だが、これから行く場所は、バスに乗って行ける場所だから心配すンな。
何個か乗り継がなきゃならねェがなァ」

「そうだったのでございますか。これはこれは、ありがとうございます。
それでは、私はそろそろ学園都市の方へ赴かなくてはなりませんので……」

「オイ待て」

最早、この問答に意味を問うのは野暮だろう。
一種の様式美と化しつつある2人の問答は、バスが来るまでのんびりと続いた。

・・・

こちら『薄明座』の大ホール。

「卑怯者」

「返す言葉も無いし、必要もないかな」

インデックスは頬を膨らませながら、赤毛の魔術師、ステイル＝マグヌスを批判した。

その敵意ある視線に一瞬ひるみかけるものの、すぐに平静を取り戻し、「禁煙」の注意書きが貼られている場所でゆらゆらと吹かし、タバコの煙を弄ぶ。

そんな中、インデックスは先ほど説明された内容を思い返していた。

状況としては、イギリス清教が他教であるローマ正教の人間と手を組む程に、厄介である。

――『法の書』が、一人の人間によって解読された。

解読した者の名は、「オルソラ＝アクィナス」。

彼女は誰にも解読できないはずの『法の書』を解読したわけだが、この『法の書』は、解読できれば十字教のパワーバランスを崩しかねない程の術式、『天使の術式』を手にする事が出来るかもしれないのだ。

故にオルソラは狙われた。

――天草式十字凄教に。

オルソラが『法の書』と共に日本へと赴いた時に、それは起こった。

天草式十字凄教による、オルソラの誘拐。

ローマ正教はすぐさまオルソラの奪還へと動いた。

しかし、世界１１３カ国に教会を持ち、２０億もの教徒が居る魔術サイドでも最大勢力を誇るローマ正教を以ってしても、天草式十字凄教は一歩も退かなかった。

オルソラを奪還したりされたりを幾度となく繰り返したところで、いつの間にか当のオルソラが逃走を図って居なくなっていたのだ。

話半分に聞く限りでは、随分と間抜けな話だが、ローマ正教を相手にこのような特殊な状況まで持って行った天草式が優秀だった、と言う事だろう。

ところで、何故インデックスを誘拐したかを一言で表すと、『動機付け』だそうだ。

学園都市内で起きた魔術師関連の事件。

この場合は科学側の人間と魔術側の人間が戦闘になっても飽くまで『自衛』と言う言い訳が立つが、今は違う。

学園都市外部で起きている事件に、学園都市の人間を巻き込もうと言うのだから、上条当麻をそれに介入させようと思うのなら、『インデックスがさらわれた』と言うくらいの『動機付け』が不可欠だった。

とはいえ、状況を理解したはいいが、納得などできるはずがない。

「どうして一般人のとうまが魔術師同士の抗争に巻き込まれなくちゃいけないのかな？」

「そればっかりは僕も納得が出来ないし、承服しかねる命令だったんだが……

まあ、お上からの指令だったんでね。嫌々ながらそれに従ったまでさ」

別に許されるつもりもないし、許されたいわけでもない。

心底どうでも良さそうな口調で語るステイルに、インデックスは更に憤る。

「一般人に頼らざるを得ないなんて、イギリス清教もおちぶれたものかも」

皮肉を言い放ち、イギリス清教をバッサリと切り捨てたインデックスに、ステイルは苦笑いしながら、深いため息をつくかのように大きく煙を上空へと吐きだした。

「と言っても、基本的には天草式の元女教皇である神裂の監視が主だった任務だから、奴が戦闘に赴く事はよっぽどの事が無い限りは、あり得ないと思うけどね」

「どーだか」

ステイルの言葉を聞いて、少し安堵したインデックスだが、「神裂の監視」と聞いて訝しげな表情を浮かべた。

「うん？どうして神裂を監視するんだって顔をしてるね。

これはまだ教えてなかったんだけど、神裂火織と今連絡が取れない上に、なにやら日本で不穏な動きを見せているらしいんだ」

ローマ正教と共闘体制に入った理由。それが神裂の存在だった。

「イギリス清教の人間は、イギリス清教でなんとかしろ」、つまりはそういうことだ。

「……それで、これからどうするの？とうまの到着を待つのかな？それともその監視の任務を全うする？それかオルソラ＝アクィナスの救出に向かうの？」

「そうだね、一度に全部出来ればそれがいいんだけど」

そんな事は不可能である。

とはいえ、一度逃げたオルソラが天草式に捕まった場合、「逃走する気を削ぐ」為に何をされるか分かったものではない。

優先順位は、明白だった。

「出来れば上条当麻にも急いでもらいたいのだが、状況が悪い。今更ここに来いという命令を変えるわけにもいかないし……彼とはローマ正教の協力者がやって来る前に合流しておきたかったのだが……」

ステイルは何かに気付いてタバコを床に吐きだすと、足でその火種を消し去った。

それと同時に、２人の居る大ホールの出入口の一つに、人影が現れる。

その人影は、ローマ正教の協力者であった。

・・・

ステイル＝マグヌスとインデックスは、『薄明座』の大ホールを抜けて、元はチケット売り場だったと思われるロビーまで出てきていた。

その2人を先導するは、ローマ正教の協力者。

アニェーゼ＝サンクティスと名乗っていた。

「情報は錯綜してやがりまして、滅茶苦茶です。
天草式に捕まってるだのどっかに逃げてるだの、正しい情報を見つけるのに一苦労してまして、こっちも結構ヤバめなんですよ」

3人とも日本人では無いのだが、日本語を話す。
こういった異国人同士の会話だと、どちらかの母国語に合わせて話すよりも、両者にとっても『異国』の言葉を使った方がいいのである。
その方が言葉の訛りに関していざこざが起きたりしないから、とアニェーゼは話す。

とはいえ、その理論だと彼女は日本人に話しかける時どうするのだろう、とかいらぬ心配をするステイルであった。

それはさておき、アニェーゼは何とかまとめた現状を、粗暴さと丁寧さが同居した口調で語っていった。
その内容は概ねステイルが事前に知らされていたものと大差なく、状況はあまり変わっていないようだ。

しかし、その均衡がいつ崩れるか分からない為、今は性急に動く必要がある。

先程から黙りっぱなしのインデックスをチラリと一瞥すると、ステイルはアニェーゼに向かって再び口を開いた。

「それで、『法の書』を解析したと言うオルソラ＝アクィナスを拝

借した天草式だけど、
君達が手を焼く程の勢力なのかな？」

「それは暗に「世界最大勢力を誇る癖に」と言ってますよね。いや、まあ返す言葉もありませんがね。
確かに、数や武装はこちらが余裕で上回っています。ですが奴らは地の利を生かして、こちらをひっかきまわすんですよ。
自力では上回ってると言うのに、こちらが手傷を負わされる状況と言うのはとても腹立たしいのですが……
とにかく、奴らは十分につえーです」

「……ローマ正教の武力に屈しないか。それは厄介だね」

再びタバコに火をつけてそれを口にくわえる。何処までもスモーカーである。

ただでさえローマ正教を相手取り上手く立ち回れていると言うのに、その背後に『聖人』神裂火織の姿が見え隠れしている。
これほど厄介な物は無い、とステイルは思う。

これなら、下手に戦力を消費するのではなく、不意打ちによる電撃戦で一気に殲滅してから話し合いに持って行った方が楽なのではと考えるほどだ。

「まあ何にせよ、まずはオルソラ＝アクィナスの保護が最優先ですね。
目的は天草式ではなく、オルソラ＝アクィナスなのですから」

確かに、その通りだ。とステイル。

「それで、僕達は一体どうしたらいい？」

話を聞く限りでは、アニェーゼは２５０人体制でシスターを率いて、ここ日本にやってきているそうだ。

オルソラ＝アクィナスの探し方。それは単純明快で「人海戦術」で探しているらしいのだが、だとしたらそのままオルソラ＝アクィナスを見つけて本国に連れ帰って終わりでは無いのだろうか。

ならばステイルとインデックスが呼ばれた理由がわからない。

そう言ったもろもろの疑問を含めての、先ほどのステイルの質問である。

「そうなんです、一つだけ捜索出来ねえと言うか、しづらいとこがありまして、そこの捜索をお願いしたいのですが」

捜索し辛いところ。

日本におけるイギリス側の許可が無ければ捜索出来ない場所なら「イギリス大使館」が挙げられる所だが、捜索し辛いところとなると、

「……ああ、成程。すまない、僕も焦っていたらしくそこまで気が回って居なかった。

少し昔の僕に言って聞かせたいところだ」

学園都市。

インデックスを学園都市内で保護していることから分かる通り、イギリス清教と学園都市では一応の取り決めと言うか、細かい糸でつながっている。

対して、ローマ正教側にはそう言ったものがない。

「つまり、学園都市と何のつながりも無いローマ正教が学園都市に連絡を入れるよりも、
一応のつながりがある僕達イギリス清教が行った方が波風立ちづらい、と言う事か」

アニェーゼはステイルの言葉に同意した。
結局学園都市に赴くと言うのならば、上条当麻を呼び出す必要も、インデックスをさらってくる必要も無かった。
もっとよく考えればよかったと苦々しげな表情を浮かべるステイルに、少し申し訳なさそうにアニェーゼは口を開く。

「こちらも前もって教えられていれば良かったのですが、何分オルソラ＝アクィナスが学園都市に行ったかもしれない、という情報は新しすぎまして……」

「……その情報が本物だとしたら、厄介だね」

「まあ、あくまで可能性の話なんで。うちのオルソラ嬢にその辺の判断が下せる心の余裕がある事を祈りましょう。
で、連絡……つか、確認の為の時間はどのくらいかかります？」

「そうだね……電話一本で直接学園都市に連絡する訳にもいかないか……
一端、聖ジョージ大聖堂に連絡を入れて……それを経由して学園都市につないでもらわなければならないから……
緊急とは言え遅くて１０分はかかるかもしれないね」

「少なくとも確認だけでもしてえんで、もちっと早めにしていただけるとありがてーのでｓ……」

不意に、アニェーゼの言葉が止まった。それを見たステイルは首をかしげ、アニェーゼの視線を追う。

するとそこにはロビーの出入口があり、そこから駐車場の跡地が見える。その駐車場跡地なのだが、人通りも無く誰かが居るとは思えないのだが、誰かが居た。

遅れて、インデックスも駐車場跡地を向く。

そこには、

「とうま？」

上条当麻がやってきていた。

## そのごじゅういち　たびはみちずれよはなさけ（後書き）

うむ、オルソラ編、ペルソナ出ないまま長引きそうな予感！

## そのごじゅうに　あまくさしき（前書き）

注意：一方さんキャラ崩壊する場面があります
先に謝っとくわ、マジごめん調子のってたごめんな

## そのごじゅうに　あまくさしき

（よくよく考えたら、学園都市の外では『一般人』を装うつもりだったンだよなァ……）

オルソラ＝アクィナスとの会話も途切れ、９月に入ってから徐々に早くなりつつある夕暮れをぼんやりと眺めながら、一方通行は考える。

『一般人』とは、すなわち『超能力などと言う不思議パワーなんて使えない人』、だ。

学園都市の中なら能力者を見ても、なんだ能力者か。程度のものだが、外では違う。

それ故に、目立つ容姿をしている一方通行だが、せめて目に見えるレベルの能力は使うまいと思っていたのだ。

しかし、状況が変わってしまった。

（追って来る魔術師の事を考えたら、能力を使わざるを得ないよなァ……）

しかし、それをしてしまってよいものなのか。

科学の徒が、魔術の子を匿う。どう考えても互いに禁忌を犯している。

今はまだ能力を使ってないから、「何も知らない一般人が、シスターに道案内している」とでも言えば、苦しいながらも言い訳も立つだろう。

だが、能力を使ってしまったらどうなる？

超能力者と魔術師が、何の取り決めも無しに共に行動する。
これはすなわち裏切りと思われても不思議ではない。

ただでさえ敵に追われていると言うのに、味方すら敵に回る事になったら、余りに救われない。

（……やっべ、俺今すげェ勢いで墓穴掘ってるなァ……）

どう考えても、一方通行がオルソラを保護するのは、下策だった。

だがしかし、あの状況ならどうしようも無かったし、仕方ないか。
と考えを切り替えた。

今のうちに「反射の無い自分」に慣れておかなければならないので、反射を切る。
ただ単に桐条グループへ赴くのなら戦闘に入る事はほぼ無いと考えていたので、反射はそのままで良いと思っていたのだが。

魔術師と関わった今、万が一反射から能力者であるとばれる事は避けたい。

すると、なにやら横から視線を感じる。
その方向を向くと、オルソラがジーッとこちらを見ていた。

「なンだよ」

「いえ、ボーっとしておられるようでしたので、
ひょっとしたらこの暑さに負けてしまわれたのではと思ったので

ございますよ」

「……俺ァどっちかって言うと、お前の服装を見てる方が暑くなっちまうよ」

真黒黒助だった。

どう考えても、熱がこもるだろう。よくもまあそんな恰好で居られるものだ。

そんな一方通行の言葉に対してニコッと笑みを浮かべ、オルソラは語る。

「はぁ。肉の苦など心の痛みに比べたらどうということはございませんから」

「……笑顔でマゾ宣言してンなよ」

「あの、学園都市にはこのバスに乗って行けばよろしいのでしょうか？」

「あァ、そォだ。まァ学園都市っつっても学園都市（桐）だけどなァ」

「成程……あら？鈴科さん」

「なン……」

一方通行がオルソラの問いかけに返答しようとした瞬間、一方通行の顔が布で覆われる。

そしてオルソラはグリグリとそれを動かすと、一方通行の顔もそれに合わせてグリングリンと振りまわされた。

息が苦しくなり始め、一方通行が本気で抵抗を始めた所で、オルソラの手から解放された。

「ッ……なにすンだよ！？」

反射を切っていた一方通行は、純粋に自身の力で抵抗を試みたのだが、割とオルソラにされるがままだった。

これは一方通行がまだひ弱なのか、オルソラが常人より強いのか……

一方通行的には後者であってほしいと願うばかりである。

「何、と申しますと？」

オルソラの手にはハンカチが握られていたが、彼女は何故一方通行が怒っているのか理解できていないらしい。

「今さっき、した事だっつゥの！息が出来なかったじゃねェか！」

「いえ、額から汗が流れておられましたので……ご迷惑をおかけしたようでございますね……

申し訳ございません……」

夕暮れ時で涼しくなり始めては居たのだが、どうやらまだ暑かったらしく、一方通行も気付かないうちに汗を流していたようだ。

それに気付いたオルソラが、汗を拭こうとしてくれたらしい。

そんなオルソラなのだが、一方通行の怒りようを見て、しょんぼりしていた。

「……イヤ、悪ィな。助かった」

天然ボケではあるが、基本的に悪気がある訳ではないのだ。
一方通行も、反射に頼り過ぎていたせいで思わぬ不意打ちに気が動転していただけなので、すぐに謝る。

このように反射が使えない状況下に陥った時、如何に落ちついていられるか。
何気ない日常の中で反省する事になるとは思っていなかった。

「！……はい、次からは気をつけるのでございますよ」

オルソラは、一方通行の言葉を聞いて再びいつものニコニコ笑顔に戻ったのだった。

「あァそォだ。声上げたら喉乾いちまった。……お茶、もらっても良いかァ？」

「はい、こちらにございますよ」

バスは、未だ来ず。

・・・

上条当麻がようやく『薄明座』に到着した。
上条の目の前には知らないシスターと知っているシスター。
そして、赤毛不良愛煙家神父。

「よおおし！！何で俺を呼び出したのか説明しろしやがれしくさり

やがれええ！！！」

うがあああ！と雄叫びを上げながらステイル＝マグヌスの足を払い転ばせた。

あまりに突然の事に、アニェーゼ＝サンクティスはもちろん、インデックスも茫然としている。

「がっ……！？君は焼きつくされたいらしいね……良いだろう、焼き加減だけは選ばせてやる！！

ミディアムか！？レアか！？」

「黙れ下郎ッ！！」

「うごっ！！」

ステイルが懐からルーンの刻まれたカードを出すのだが、それを使う前に上条が腋腹にボディブローを打ちこみ、動きを止めた。

「座れェェェェェ！！まずは座れェ！！そこに直れ！！従わないなら蹴り捨てる！！」

怒涛の勢いでまくしたてる上条にひるんだステイルは、その隙を上条に突かれて無理矢理正座の体勢にされた。

「き、君は一体どうしたというんだ！！？」

上条のあまりの迫力に、ステイルさんは１４歳らしいリアクションを取る。

この年代の子供は、ちょっと年上の人に凄まれると大抵ひるむものなのだ。

それは、この百戦錬磨の魔術師にも適用されていた。

「どうしたもこうしたもあるかぁ……！！一体何の用だぁ……！？それはインデックスをさらう程重要なのか……？それは舞夏を泣かせる程重要なのかあ……？」

土御門の代わり兼俺の憂さ晴らしに馳せ参じた……！と、凄惨な笑みを浮かべて語る。

「……はぁ、何馬鹿やってやがるんですか？」

「あぁん？」

ギロリと鋭い視線を、先ほどの声の主、アニェーゼに向ける。

「悪いけど、人の生き死にに関わる案件だから、これ以上あんたにつき合ってる暇はねーんですよ」

生き死に、と聞いた上条もその表情が固まった。

残念ながら、上条が怒りを爆発させる時間すら惜しいのである。

「……そう言う事だ。インデックスを使った事は謝るよ。

だが、それほどに事態は深刻なんだ。あ、この人が現場の責任者で、ローマ正教アニェーゼ＝サンクティスだ」

ごほん、と咳払いをし平静を取り戻したステイルは、適当にタバコの端で指し、アニェーゼの紹介をする。

するとアニェーゼは「どーも」と、一礼する。

日本人はしょっちゅう頭を下げる、という事前情報を頭に入れていたらしく、口調は荒いが、一礼はとても綺麗なものだった。

「……それで、一体何させようってんだ？」

訝しげな視線を2人に送る。

流石の上条も、事情もわからないまま魔術師の抗争に巻き込まれるのは御免なのだ。

「人探しですよ。それもＶＩＰ級の」

アニェーゼは端的に説明した。

恐らく上条に魔術の事を説明しても仕方ないし、時間の無駄だと判断したのだろう。

「人探し……？なんでまた俺なんか……」

「君は学園都市の人間だろう？ひょっとしたら学園都市にその探し人が居るかもしれないんだ。

だから君には学園都市でそれの捜索を頼みたい」

「……だったら俺、わざわざここに来る必要なくね？」

「そうだね」

と、ステイル。

「そうだよ」

と、インデックス。

「ですね」

と、アニェーゼ。

「……」

三者三様の同意を前に、最早何も言えなかった。と言うより今さら言っても栓無き事である。

「まぁ、とにかく学園都市に戻って某（名前聞いてないので便宜上）さんを探せばいいのな！？」

「そうですね、名前は某さんではなく「オルソラ＝アクィナス」です。

私と同じ黒い修道服を着たシスターなので、学園都市では浮くと思います」

「分かった。……はあ、何かどっと疲れた。インデックス、今日の晩はおざなりモードで適当に作った飯になるわ」

「えええ？！」

インデックス、本日一番の驚愕だった。

何とか上条に仕事させようと、インデックスは上条のご機嫌取りに回る。

しかし、それを行う前に、アニェーゼの部隊の人間から報告が一つ上がった。

「……どうやら、学園都市には入ってねーみたいです」

その言葉に一同は眼を見開き反応する。

どうやら、魔術師とは別の協力者を得たのか、はたまた一期一会で偶然の出会いなのか。
オルソラ＝アクィナスともう一人、白髪の男が学園都市付近のバス停のベンチに堂々と座っているらしい。

「……白髪の男？」

上条は、何となく一方通行を思い浮かべる。
何となくなのだが、何故か確信めいたものがあった。

「何だ？君は白髪の男とやらに覚えがあるのか？」

「ん？あーいや、別にそういうわけじゃねーんだけどな」

頬をかいて、一瞬よぎった考えを霧散させる。

「それでは、もうあなたはぶっちゃけ必要ねーんですけど、どうしますか？」

オルソラが学園都市に入っていない、と言うのなら上条はもうお払い箱である。
とはいえ、勝手に呼び出して勝手に追い出されるなど、屈辱以外の何物でもない。

「ここまで来といて帰る気にはならねぇよ。俺も手伝う」

「そうだね、盾代わり位にはなれよ、幻想殺し」

スティルの言葉に、上条はピクリと肩を揺らした。
幻想殺しという単語に反応したのだろうか。しかしその表情に変

化は見られない。

「……そーだな」

ぶっきらぼうにステイルの言葉に首を振った。

・・・

「……なンかおかしい」

全身を奇妙な感覚が襲う。

いつか体験した、この感覚。

初めて触れた異能の感覚。

それは、土人形で。

シェリー＝クロムウェルのゴーレムで。

すなわち、魔術師。

魔術――――

「……魔術師かァ……？」

ポツリと呟くと、オルソラ＝アクィナスはビクリ、と肩を震わせ辺りを見回した。

「……これは、人払いの術式と言うものでございます」

「成程、文字通り人を払うってことか」

と言っても、この辺りに人はいなかったのだが、用意周到な事だ。

と、一方通行は舌打ちする。

超能力を目に見えるレベルで使う事は出来ない。

例えば、魔術による攻撃を反射したり、人に触れるだけで気絶させたり等。

だが、「自身の体を操る」のならバレはしないはずだ。

一方通行は身構える。いつでも動けるように。

『やっぱり、ローマ正教の指揮官を追っていて正解だったのよな。

こうしてオルソラ＝アクィナスを見つける事が出来た。後は奴らの先回りをするだけで十分なのよなあ！！』

瞬間。オルソラの周りに、３本の刀身がアスファルトを貫いてきた。

それらはサメの背びれのようにアスファルトを泳ぐ。一辺２メートル長の切れ込みが入り、正三角形に切りぬかれた。

「……！」

恐怖する前に重力が失われてしまった為、オルソラの目には戸惑いの色が映っていた。

そして切りぬかれたアスファルトと一緒に、地下へと落ちて行く。

「チッ！！」

まさか下から来るとは思わなかった。

相手は刃物を持っているので、このまま下に降りたら串刺しだろ

う。
だが、選択の余地は無かった。
・・・
「「なっ！！？」」
天草式十字凄教の一同は、余りの驚愕によってろくな声が出なかった。
ローマ正教の指揮官を追う事で、そこに集まったオルソラ＝アクィナスの情報を集めて先回りした所までは何も問題はなかった。
だが、問題はオルソラと一緒にいた白髪の男だ。
追ってこないなら放っておくし、追ってくるなら地下に降りてきた瞬間、串刺しだ。
そのつもりで待機していたと言うのに。
「……」
今天草式の面々の目の前に居る白髪の男。
彼は迷わず地下へと飛び降りてきたのだ。
勇敢と蛮勇は紙一重という言葉を思い浮かべながら、天草式十字凄教が教皇代理・建宮斎字は白髪の男を串刺しにするべく指示を出した。
しかし、そのことごとくを受け流されたのだ。まるで流水を行く柳のように。
「……貴様は一体、何者なのよな？」

位置的には、学園都市の能力者と言う線が濃いが、能力者と魔術師が一緒に居ると言うのはどういう事なのだろうか。
疑問と警戒を均等に混ぜた目線を、建宮は白髪の男に向けた。

「……」

「無言を貫くか。名乗る名など無いと言いたいのか！？」

フランベルジェ。全長１８０センチを誇る十七世紀フランスの両手剣。それを一方通行に向けながら、建宮は叫ぶ。

武具として用いるのなら、本来は鉄を使われているはずなのだが、その刃の色は、白色。
触れば何の素材か分かるだろうが、別に一方通行は、それに興味は無い。

とにかく、超能力者だとばれないように、適当に名乗りを上げる事にした。

「……柳生新陰流（やぎゅうしんかげりゅう）が師範・柳生厳生の門下生が一人、鈴科洪隆と申す。
此度は学園都市におられると言う名医に、師匠の治療を願いに馳せ参じた次第」

お前誰だ、超ノリノリじゃん。というおおよそ服装に合わない口調でまくし立てる。
天草式には突っ込みを入れる暇すら与えない。

「だがァ！その名医の元まで赴く前に為さねばならン事がある！！

……貴殿らの所業、許し難し！！
我が恩人たるオルソラ＝アクィナス殿に斯様な事を行った償い、その身体に刻んでもらう！」

一方通行は慣れた動きで、茫然としている身近な天草式の人間を無造作に投げ飛ばした。
どう聞いても嘘にしか聞こえなかった名乗りの声。更に、一方通行のおおよそ武人には見えない見た目に騙されてしまう。
今現在、一方通行は自身の能力による恩恵を受け、身体能力が大きく向上している。
更に黄泉川愛穂に扱かれる事で培った「力の向きを逸らす力」。
最早、是非も無し。

どちらかが倒れるまで、戦闘は続くのだと天草式の一同は理解させられた。

……と思ったら。

「悪いが、先程申し上げた口上は、嘘だ。オルソラ殿は、返していただくぞ」

嘘ってのは、ホントに全部嘘なンだが、騙されてくれれば幸いだ。
等と考えながら、一方通行は闘争ではなく逃走を開始した。

「なっ！？」

『戦闘』に気を取られていた天草式は、『オルソラ』の完全な捕獲を怠った。
故に、その隙を突かれたのだ。

建宮が一方通行を捕まえるように指示を出すが、時すでに遅し。
すぐに切り開かれた三角の穴から飛び出して行ったのだった。

「……くはっ！くっく……何なのよな、あれは！どう考えても、魔術師ではないのよなぁ！」

かといって学園都市の人間か？と問われたら、不明。
それもそのはず、天草式の面々は学園都市の人間と面識はないし、超能力を目の当たりにした事も無い。
故に先程一方通行が見せた動きも、「鍛えれば辿りつける領域」だと思いこんでしまったのだ。

「人は見た目によらず、てのは本当なのよな！」

あんな痩せた人間が、あのような動きをするとは。
更に、いけしゃあしゃあと嘘をつき堂々とオルソラを奪還すると言う胆力。
敵としては申し分ない。

「……お前らぁ！！天草式の誇りにかけて、奴らを必ず捕獲するのよな！！」

応！と言う決意を込めた声が、地下水路に鳴り響いた。

・・・

「ハァ……ここまで逃げりゃあ……大丈夫か……？」

人払いの結界を抜け、適当に拾ったタクシーにオルソラを押し込

み、自身もそれに乗り込んだ。

「ッ……」

オルソラ＝アクィナスは、肩を震わせている。

やはり今になって恐怖が遅れてきたのだろうか。

一方通行は何と声をかけようか思案していたのだが。

「ふふ……何でございましょうか、あのお芝居は？」

「……あン？」

「……面白過ぎでございます。あの場で笑いをこらえるのにどれほど苦労したか……」

「……」

肩を震わせていたのは、一方通行の変貌っぷりを目の当たりにしたからだ。

オルソラは、天然ボケであるが、かといって馬鹿と言う訳でも無い。

そのため、あの演技が悪ふざけではなく、自身の正体を眩ます為の隠れ蓑だと言う事は理解出来る。

だが。

――――面白いものは、面白いのだ。

「……学園都市まで。あァー、あっちに見える方じゃなくて、桐条

グループの方だァ」

返す言葉も無い一方通行は、タクシーの運転手に行き先を指定したのだった。

## そのごじゅうに　あまくさしき（後書き）

ホントごめんな……否ァ！申し訳なかったァ！！許せとは申さぬゥ！！

## そのごじゅうさん　ほろにがきは、せいしゅんのあじ（前書き）

今回も一方さんキャラ崩壊する部分有るので注意

# そのごじゅうさん　ほろにがきは、せいしゅんのあじ

「はぁ……」

階数を数えるのも億劫になる程の高層ビル。
その頂上の一室を陣取って、書類に目を通しながら溜息をつく女性が居た。

彼女の名は、桐条美鶴。

名字から分かるように、桐条グループの人間だ。
桐条グループの前代総帥・桐条武治の一人娘であり、今現在はその総帥の座を若くして引き継いでいる。
その背景には色々と悶着があったのだが、それに関して言及していると時間がいくらあっても足りないので、割愛する。

兎にも角にも、桐条グループ現総帥である美鶴は、その地位も相まって非常に多忙であった。
桐条グループは以前から研究やらシャドウやらによる事件や事故が起きていて、一言で言えば、ボロボロだった。
故にそれの立て直しを図る為、美鶴は尽力している。

さて、そんな訳で母校を卒業して以来多忙な日々を送っていた美鶴なのだが、今溜息をついている理由は、そちらには無い。

「「『実験事故』に関する資料は残っていないか？」か……」

最近、桐条グループと協力体制にあった学園都市の研究者が、１年前の件について資料を請求してきている。

何に使うかはわからないが、実験内容自体が非常に凶悪なものである為、はいわかりましたと言って渡すわけにはいかない。

「かといって頭ごなしに追い返す訳にはいかない……」

あのような事故があってもなお、学園都市と桐条グループは提携関係にある。

学園都市は技術を。
桐条グループは資金を。

しかし、学園都市のパトロンは桐条グループだけではない。
何だかんだ言って桐条グループは、学園都市の技術力には世話になっていたので、ここで提携関係を打ち切られるのは非常に拙い。

厄介な事になりそうだ。

美鶴は、机の引き出しを開けると『拳銃』らしきものが中に収められていて、それを手にする。

「少なくとも相手の目的さえ把握出来ればな。
こちらも対応の仕方を決められると言うのに……」

広い部屋。
その部屋の窓際に置かれた如何にも社長専用みたいな豪勢なイスに座り、美鶴はその拳銃を手で弄びながら、本日何度目になるかわからない溜息を、盛大にはいた。

・・・

ポロニアンモールに店舗を広げている喫茶店、シャガールのフェロモン珈琲に砂糖を入れてかき混ぜる。
そしてそれを一口口に含むと、ピンクのカーディガンとハートを象ったチョーカーを身に付けた茶髪の少女、岳羽ゆかりは一緒にシャガールに来ていたアイギスと山岸風香に尋ねた。
「アイギスと風花ってさー、卒業した後どうするか考えたりしてる？」
「どうする、とは？」
サラサラとした金髪。人形のような容姿。フレメア＝セイヴェルンとはまた違った美しさを持つ少女――アイギスと呼ばれた少女は、岳羽の質問に対して疑問を浮かべた。
対して、風花と呼ばれた青みがかったショートカットの髪の毛の少女――山岸風香は少し考えるそぶりをして答える。
「卒業後の進路って事ですよね……私は大学に進もうと思ってますよ」
3人の共通点としては、同じ高校の制服を着ている、と言う事だろうか。
同級生のガールズトーク、と言ったところか。
そんな3人だが、会話の内容は恋愛だのファッションだの女の子らしい話ではなく、今後の進路。
高校生でいられるのも、あと半年程しか残っていない。
そんな受験生もあわただしくなる季節が近づく中、3人もまた将来について考えていたのだった。
「風花も進学か……私と違ってやりたいこと決まってるんでしょ？」

「そうですね、工学部のある大学に進学しようとは思っていますが……」

どうやら岳羽は進学希望のようだが、山岸は何か明確な目標があるに対して、岳羽はとりあえず進学しておこう、位の気持らしい。

「成程、お二方は進学希望をなさっているわけですか」

「わけですかってあんた……」

岳羽は、マイペースな口調で他人事のように語るアイギスにげんなりとした様子で突っ込みを入れる。

「そうですね……強いて言うなら私は……世界を見て来たいと思ってます」

少し思案したアイギスは、今一番やりたい事をそのまま言葉にした。

それを聞いた2人は、やや驚いた様子で聞き返す。

「「世界を？」」

「はい。私はまだまだ知らない事が沢山あります。見た事のない物だって沢山あります。

私は、もっと見たい。もっと知りたいんです」

アイギスの真剣な眼差しを見た岳羽は、納得したように呟く。

「……そっか」

「と言う事は、卒業したらしばらく会えないかもしれないですね……」

少し寂しそうにしながらも、それぞれの夢を邪魔をしたくない山岸は、素直にアイギスの応援をした。

「順平の奴も、なんだかんだで進学するって言って息巻いてるし」

順平と呼ばれた男。その名を伊織順平と言うのだが、岳羽が言うには彼もまたやりたいことが決まっているらしい。

「吉野さんを支える、そんな男もとい漢になるって張りきってましたね」

その時の様子を思い出したのか、山岸はクスリと笑った。

吉野さん――本名を吉野千鳥と言う名の少女なのだが、彼女は今現在記憶喪失の真っただ中で、記憶を失う前は伊織順平がいなければ生きる希望すら無かっただろう。

しかし、記憶を失った今もなお心に残る「優しくて暖かい『あの人』」を探しだすと言った具合に、生きる希望を見出している。

「優しくて暖かい『あの人』」とはまさに伊織の事なのだが、いつか互いに報われる時がくるだろう。

そんな2人に思いを馳せた後、岳羽はコーヒーを手に取り、それを飲む前に別の名を口にした。

「真田先輩や桐条先輩も、自分の進む道を行ってるんだろうなあ……」

コーヒーを一気に飲み干した岳羽は、卒業して以来会っていない2人の先輩に思いを馳せる。
割愛するが、本当に色々あったのだ。
幾多の出会いも経験したし、たくさん、笑った。
そして。
別れも、体験した。
「はぁ……何だか、ネガティブになるなあ……」
「あはは……ゆかりちゃんもきっと何か見つかると思いますよ」
と、山岸。
「そうです、諦めたらそこで試合終了ですよ」
と、アイギス。
自分だけ何も決まっていない、と言うのは些か悲しい。
何だか皆と離れているようで。
そんなネガティブ思考が頭をよぎり、どんよりとする岳羽を2人が慰める。
「だって順平ですら「これ」っていう夢が定まってるのに……」

「順平ですら」と呼ばれるだけあって、伊織はかなりのお調子者だと分かる。
そんな彼も、今はすっかりなりを潜め、勉学に打ち込んでいた。

岳羽のどんよりとしたオーラに押され、空気が少しどんよりし始めた頃、その空気が壊れる出来事が起きた。

いらっしゃいませー。という店員の声を聞き、岳羽が何気なくそちらを向くと、

「何あれ？シスター……？」

シスターが居た。

「うわあ、本物のシスターさんでしょうか……初めて見ました」

山岸も少し興奮した様子で口を開く。
本場のシスター。修道服に身を包み、そこから見える顔は、美人の外国の女性だった。
その美しさと、優しげな笑顔も相まって、まさにシスター！って感じのシスターだった。

「隣の白い方は何をなさってる方なのでしょうか？」

そんな中、アイギスだけはそのシスターの連れと思われる白髪の男に目をやっていた。
白髪・アルビノ・三白眼と、明らかに目立つ容姿のその男は、キョロキョロと不機嫌そうな顔をして辺りを見回すと、周りに客があまりいない席に向かって歩き出し、シスターもそれに追従して行った。

「綺麗な人でしたねー」

山岸はキラキラと憧れの様な視線をそのシスターの背中に注ぐと、正直な感想を述べた。

「あれじゃあ、コスプレと言うより本場の人って言った方が信じられる位似合ってたよね」

岳羽は、そのシスターがコスプレか何かだと勘違いしていたが、実際は本場の人である。

それよりも、その隣の男が気になるアイギスは、窓際の席に陣取った白髪の男をジーッと見つめていた。

「アイギス、どうしたの？……まさかあの白いのが気になるの？」

確かにカッコイイ感じだったけど。まさかアイギスに……二度目の恋の季節！？でも、ライバルは美人外国人シスター……！と、一人妄想してもだえる岳羽を見て、アイギスはまた始まったと溜息をついた。

この岳羽、アイギスに関しては事あるごとに恋愛事に絡めようとするきらいがあり、ある日にその理由を尋ねたところ「そうしたら彼は私だけの……」と少しばかりヤンデレじみた発言をしたので、その事は記憶の奥底に封印した。

兎にも角にも、別に白いのは気になるだけで好きか嫌いか聞かれたら「どうでもいい」と答えるだろう。

「いえ、正直どうでもいいんですけど、少しだけ気になったので」

何故気になったのか。
多分目立つ容姿をしていたからだろうとアイギスはあたりをつけ、白いのから視線を外したのだった。

・・・

時は少し戻る。

「わあ、すごいでございます。私空飛ぶ列車など初めてなのでございますよ」

オルソラ＝アクィナスはその光景に感極まったのかイスから身を乗り出して、外に見える風景を見て興奮した面持ちで語る。

「違ェよ。空飛ぶ列車じゃなくて、見えねェけど上にレールがついてンだ。
ちなみに、モノレールと呼ぶ」

確かに、窓から外を見る限りでは空を飛んでいるようにしか見えなかった。
とはいえ、駅でモノレールの上につながっているレールを見ていたはずだろうに、オルソラの記憶からレールの事は消え去っていたようだ。

このモノレールの行き先は、ポロニアンモールとか言う桐条グループが開発した学園都市の中でもかなり大きなショッピングモールだそうだ。
上記の事から分かるだろうが、もうじき学園都市（桐）の中枢部にたどり着く。

もう学園都市（桐）自体には着いたのか、と思われる読者もいるだろうが、ここに来るまでの移動の間に、魔術師が襲ってくる事は何故か無かった。

確かに、たまに視線の様な違和感は覚えたりしたのだが、結局その視線も消えたり現れたりで、学園都市（桐）に辿り着くまで、特筆するような出来事は起きなかったというわけだ。

「はあ、ものれーる。と呼ぶのでございますね。この飛行機は」

「……」

列車から飛行機にジョブチェンジをしていた。

突っ込みを入れようか迷ったが、ニコニコしながら下に広がる街並みを眺めていたオルソラを見て、開きかけた口を閉じる。

そして、思考を切り替えた。

（たまに飛んできた視線は、敵意のあるものと、そうでないものの二種類だった）

すなわち、敵と味方が、交互に一方通行達を見つけるが、互いに互いの邪魔をする、と言ったところだろうか。

それから察するに、敵も味方も実力は互角、と言う事だろう。

そして今は、学園都市（桐）の敷地内。

表立った攻撃や行動は出来ないだろう。何より目立ちすぎる。

今から向かうポロニアンモールは、日中も夜も割と人が居る。

人を隠すなら森の中、とも言うが、裏を返せば一般人の目による天然の監視も多いということだ。

ならば人払いの結界とやらも、急に人が居なくなった事に違和感を覚える人間だっていると思われる。

まあつまり、こんな大勢の一般人が居る中、堂々と武器を持って襲ってくる事などありえないはずだ。

何より、味方ではないが背後に桐条グループが居る。

桐条グループは表の世界でも有数の企業で、その影響力は多岐の分野に渡る。

つまり、桐条グループに手を出せば、直接は影響が出なくても、間接的に影響を及ぼす可能性が高い。

そう考えると、大半が寝静まった夜、秘密裏に動くだろう。だが、それにも周到な準備が必要だ。

何にせよ、時間が出来たのだから、何とかして桐条グループに接近したいと考える一方通行だった。

そして、予想通り魔術師による襲撃も無いまま、学園都市の中枢部に位置するポロニアンモールに到着した。

・・・

「俺は、『喫茶シャガール』に、行かなくちゃならねェ。意地でもだ」

「はあ、私はどちらでも構いませんが……」

チラリと目の前に見える喫茶店に目をやるオルソラ＝アクィナス。

「私の見間違いでなければ、女性向けそうな外観なのでございます

が……」

外観。と言っても見た目は普通の喫茶店だ。
問題は、そこに貼りだされているポスターにあった。

フェロモン珈琲。文字通り飲むと魅力が上がると言われ、女性に大人気のコーヒー。
それ故に女性向けのポスターが所狭しと貼られていて、何だか男子禁制の雰囲気をまとっていた。

「……フェロモン珈琲。『ｃｏｆｆｅｅｔｉｍｅ』の記事にも乗っていた、有名なコーヒーだ。
その名の通り、飲むと魅力が上がると言われているが……このコーヒーの本領はそこにはねェ」

一方通行は荘厳な気配を漂わせ、語る。
その語りっぷりに思わずオルソラも硬くなり、話に聞き入った。

「特殊な焙煎技法と焙煎度合いによる、フェロモン珈琲独自の味わい深さ……
喉越しの良い苦みによる強めのフレーバー……あの記事を読んだ時に思ったンだ。
「ポロニアンモールに訪れる事があるならば、ぜってェここに来る」ってなァ！！」

「そ、そうなのでございますか？でしたら、その望みを叶えるべくは、今でございますね？」

あまりにアツく語る一方通行に、流石のオルソラも少しばかり引きつった笑みを浮かべて、話を切り上げるべく店の中に入るように

促した。

そして、時は現在。

一方通行は、『フェロモン珈琲』を前に、息を呑んだ。

店の中に入った時点で分かったが、既にコーヒー豆の匂いで埋め尽くされたそこは、一方通行にとってまさに楽園だった。

しかし、そこに『異物の匂い』を感じ取った。

一方通行は思わずあたりを見回す。

「この甘ったるい匂いは……ｓｕｇａｒ（砂糖）……だと……？誰だそンなもンでこの神聖な空気を汚す輩は」

コーヒーの良い匂いによって良い気分だったのに、一気に不機嫌になる。

お前は犬かと突っ込みを入れたくなるが、ことコーヒーに関しては一方通行はうるさいのだ。

一方通行の意外な一面を見たオルソラは、クスリと笑いながら何も言わず一方通行の様子を眺める事にした。

砂糖は、邪道。

苦いのが嫌なら、コーヒーなど飲むなと針の筵の上に正座させて言ってやりたいところだが、聖なる地にて暴力沙汰は許されないだろう。何より、そんな事をして出禁になりたくない。

そういう問題でも無いのだが、一方通行はせめて匂いが届かないように、客の少ない窓際の席にまで移動するのだった。

そしてようやく、一方通行の元に辿り着いた珈琲。

それは神々しいまでの輝きを放ち、2人を圧倒した。
砂糖によって一気に不機嫌になった一方通行の顔も、少しばかりゆるんだ。

まだだ、まだ笑ってはいけない。まだこの味を味わっていないのだから。

フルフルと手を震わせながら、一方通行はカップを手に取り、口をつける。

「う、うめェ……」

感極まった様子で、もう一口。

「うめェ……」

その日、世界が変わった。何か熱いものが込み上げて来て、頬から一筋水滴が流れ落ちる。
ちなみに、オルソラは紅茶を頼んでいた。砂糖付きで。

## そのごじゅうさん　ほろにがきは、せいしゅんのあじ（後書き）

次回から本格的にＰ３のメンツと絡んでいくこととなるでしょう。

## そのごじゅうよん　すべてをみたものは（前書き）

今回は、一方さんキャラ崩壊しないよ！安心して読めるよ！

## そのごじゅうよん　すべてをみたものは

「なンでこンなうさんくせえとこに行かなくちゃならねェンだよ」

喫茶シャガールにて、珈琲の真髄を味わった一方通行は、街中を散策して11年前の事について何か知っている人間が居ないか探していた。

昔からこの地に住まう人間なら、何か知っているかもしれないと考えたからだ。

その過程で、オルソラがあそこに行きたいとか、あの機械は何とか、オルソラの赴くままに街中を歩きまわっていたのだが、これと言って何か良い情報が得られた訳でも無かった。

そして、なんやかんやでたどり着いたのが、ここ。

「眞宵堂、ねェ……」

骨董品屋か何かだろうか。

ガラス張りの中に所狭しと展示されている品々は、好事家が喜んで収集しそうな骨董品であった。

「こういった骨董品屋さんには、魔術的な意味のある品々が置かれていたりするのでございますよ」

一方通行は少し得意げに語るオルソラの横顔を眺めつつ、興味なさげに相槌を打った。

「こういった事には、興味がございませんか……？」

少し目をうるっとさせて尋ねるオルソラ。
何も知らない人なら、もしも「では、この幸せになれる壺は如何ですか」と言われても喜んで買うだろう。
なぜならオルソラの庇護欲そそられる顔を見られた時点で幸せだからだ。

「……まァ、どっちにしろここの住民に色々聞かなきゃならねェからなァ」

その言葉を聞いて、花が咲くようにパァッと顔を明るくさせるオルソラ。
何だかんだ言ってここまで連れてきたのは一方通行自身なので、特に文句も無かった。

そしてそのまま、骨董品屋へと吸い込まれて行く。

・・・

一方通行は一口コーヒーを口に含むと、ただただその味に感動し、涙を流した。

「ねえねえ、あの人コーヒー飲んで泣いてるんですけど」

岳羽ゆかりは、興味深そうに一方通行達の動向に注目していた。
まさかコーヒーを飲んでなくとは思っていなかったらしく、想像以上に面白そうな人たちだ、と岳羽は思う。

「よっぽどコーヒーが好きなんでしょうねえ……」

朗らかな笑みを浮かべてその様子を微笑ましそうに眺めるは、山岸風香。

「……」

アイギスは、ただ黙して眺め続けている。

すると、2人とも飲み終えたのか、少し会話を交わすと会計へと向かっていた。

「あ、あの人たちもう行くの!?アイギス、風花、追うわよ!」

「「えっ!?」」

その言葉に2人は驚愕した。

何故追うのか、何がしたいんだと2人して岳羽に突っ込みをいれるのだが。

「だってあんな面白そうな人たち、滅多にいないでしょ!」

単純明快な回答だった。

この3人は、ある理由から戦いと言う名の非日常に身を投じていて、数か月前にようやく落ち着いたのだが、それ以来日常も嫌いではないが少々物足りなく感じているようだった。

そして、そんな岳羽の目の前には。

「あんな人たち、見た事無いでしょ?興味が湧いてこない?」

「……そうですね、追いましょう!」

「ええっ!?」

岳羽の一言であっさりと意見を覆したアイギス。
山岸では2人を止める事が出来なかった。

・・・

「私、あの人たちの目的がわからないんだけど」

「私もです……」

一方通行とオルソラ＝アクィナスを尾行することを提案した岳羽ゆかりは、心底疲れた口調で口を開き、山岸風香も迷わず同意した。

岳羽の提案で2人をつけて行ったは良いが、正直何がしたいかわからなかった。

デートにしては行く場所がデートっぽくない。
かといって仲が悪いかと言えばそうでもない。

とりあえず言える事は、シスターさんの気の向くままにいろんな場所に行っているのだろう。

迷子の子供を親元まで返したり。

猫に餌付けしているところをその猫の飼い主らしきひとに見られたが、一緒になって餌をあげたり。

カツアゲしているヤンキーを締めあげたり。

共通点としては、いずれも白髪の男が最後に何かを尋ねていた、

と言う事だろうか。
何かを探しているのかもしれないが、会話の内容までは聞きとれなかったので、目的は分からなかった。

そうこうしているうちに、渦中の2人は骨董屋へと吸い込まれて行った。

「あれは……」

岳羽の視線の先。
そこには『眞宵堂』があった。

その店は、『彼』が足繁く通っていた古美術店で。
何となく、胸が締まるような痛みが走った。

とりあえず3人は、相手にばれないよう近くにある噴水のふちに座り込んだのだった。

・・・

眞宵堂の中に入った2人は、店内を見回して嘆息する。
壺だの絵画だの土偶だの、およそ昔に存在した遺物は全て網羅しているのでは、と言う程の品ぞろえだった。

「なーンか雰囲気ある店だなァ」

「そうですね。何かがありそうに思えるのでございます」

「……そう言ってもらえたらありがたい限りだね」

すると店の奥から店主らしき女性が現れた。
鋭い目つきながらも見た目麗しいその女性は、「白衣の似合いそうな知的美人」と言ったところだろう。
とはいえここは古美術店で、白衣とは全くの無縁な場所なのだが。

「あンたここの店主かァ？」

「それ以外の何に見えるってんだい？」

「いや、随分とまァ白衣が似合いそうな美人が出てきたもンだって思ってなァ？」

「こんなおばさん捕まえて何言ってんだい？
口説きたいのなら、１０年早く生まれて出直してきな」

「ハッ、お世辞だっつうの。手厳しいババァだぜ」

「鈴科さん？女性に向かって「婆」などと言ってはいけませんでございますよ」

「ははっ、気にしなくていいよ、お嬢ちゃん。むしろ変にお世辞を言われても困るんだよ。むず痒い」

女店主は口角を少し上げながら気にしていないと言う。それでもオルソラ＝アクィナスは納得していないのか、まだ何か言おうと口をもごもごとさせていた。

すると女店主は、「そんなことより」と会話を打ち切り、その鋭い目つきで２人を射抜いた。

「こんなボロッちい店に何の用だい？
そっちのお嬢ちゃんはともかく、あんたの方はこんな場所に興味があるとは思えないんだが」

「まァ、そォだな。とりあえずこの街で出くわした住人に話聞いていってンだ」

「へぇ、てことは私にも何か聞こうってことかい？」

「まァそォだな。……単刀直入に聞く。『11年前の桐条グループについて』だァ」

「ッ……。いや、私は何も知らないね。その頃はここいらには居なかったからね」

その時、一瞬の動揺を、一方通行は見逃さなかった。
と言ってもこっそり能力を使って擬似的に嘘発見器の様な事をしていたのだが。

――ビンゴだ。

能力の事は言えないので、口で揺さぶりをかける事にする。

「へェ、「ここいら」で「桐条グループがなンかしてた」ってのを知ってたのに、かァ？」

「そりゃあんたがここの住人に色々聞いて回ってるっていうから、11年前もここに桐条グループが居たんじゃないかって思っただけ

さ。

何にせよ、知らないものは知らないよ」

一方通行の言葉に肩を少し振るわせるが、それはパッと見ただけでは分からない程度で、一方通行の能力がなければ、誰にも動揺したと言う事を悟らせないだろう。

しかし、一方通行だけはその動揺を感じ取れたので、それだけで十分だった。

（よォやく当たりか……どォせしらみつぶしに回るンだから、オルソラの好きなよォに動いてみたが……）

予想以上に、早くたどり着いた。

とはいえ相手は一筋縄ではいかなそうだ。年の功、とでも言えば良いのだろうか。

いや、そんな事を言ったらオルソラが怒りそうだ。女性に云々とか言って。

それはさておき、畳みかけるなら今だ。

「おいおい、否定するべきは「ここいら」じゃなくて「桐条グループがなンかしてた」って部分だろォが。

それじゃあまるで「桐条グループがなンかしてた」のを知ってるみてェじゃねェか」

言いがかりも良いところだが、女店主が内心動揺しているのを確信している一方通行にとっては、この言葉だけで十分だった。

「……若いくせに随分と動揺を誘うのが上手だね」

まるでギブアップするかのように両手を挙げる女店主に、一方通行は首を縦に振る。

「はン、腹芸の一つも出来ねェよォじゃ、生きていけねェ場所で生きてきたからなァ」

朝飯前だ、と一方通行。

「それで、実験に関して何が知りたいんだい？」

「お前の知っている事全部だ」

「ははっ、そういうことはストレートに聞くんだ。……いいね、気に入った」

女店主は満足そうにうなずくと、話を始める前に一つ一方通行に尋ねる。

「実験に関して聞くと言う事は、『あれ』を知ってるんだろう？」

「あァ、嫌ってほどになァ」

「……教える代わりに、あんたもその事を何処で知ったのか教えてもらうからね」

「言える範囲までならなァ。それ以上は危険だってとこは俺が線引きするが、かまわねェか？」

「あぁ、それで構わないよ。それで……」

チラリとオルソラの方を向く。空気を読んで黙っていたオルソラを、この会話に混ぜても良いのか、と言う意味を込めた視線と共に。

「……そォだな、オルソラ。お前はこの件に関わらせるつもりはねェ。

かといって少しの間でも離れるってのはなァ……」

一方通行は考える。

オルソラにシャドウに関しての話を教えるつもりは無いのだが、かといって話が聞こえないようにするべくオルソラに外に出て行っていてもらうと言うのも危険だ。

警戒する事に越した事は無いので、風呂だのトイレだの以外の時に一人にするつもりはない。

それが一方通行から同行を申し出た事から発生した義務であり仕事である、と考えて。

「大丈夫でございますよ」

そんな一方通行の懸念事項を読みとったのか、笑顔で返すオルソラ。

大丈夫、と言ってもどちらの意味なのだろうか。話を聞く覚悟があるのか、はたまた万が一の可能性を否定して外に出るつもりなのか。

「このままお話を続けて頂いても大丈夫、ということでございます」

本気か冗談か分からない微笑みを浮かべるオルソラだが、その瞳

からは純粋な気持ちしか感じ取れなかった。

「……ハァ。分かったよ」

一方通行もまた、先程女店主がしたように両手を挙げた。

そんな2人を見て、女店主は楽しそうに言う。

「ははっ、この私をあそこまで動揺させられる癖に、女の笑顔には弱いんだね」

まだまだガキだ。と、女店主は呵々大笑した。

「なっ！うるせェ馬鹿早く話進めろ馬鹿！」

女店主のからかうような口調に、一方通行は顔をやや赤らめ捲し立てた。

先程のお返しだ、と言わんばかりにニヤリと笑う女店主を見て、

「あァもう、俺の負けだよ。だからさっさと話せってンだ」

投降した。

流石に自分の半分かそこらしか生きていないような少年に良いようにされたのが腹立たしかったのだろうか、一方通行の投了を見て女店主は満足したようだ。

「分かった分かった。それじゃあ続けるが……恐らく、お嬢ちゃんには分からない単語が出てくると思うが……」

「後で、鈴科さんにお伺いしたらよいのでございましょうか？」

「ん。分かってるならそれで良いよ。さて、それじゃあ何処から語ろうかね……」

少し思案した後、女店主は口を開く。

――――初めは、私もただの研究員の一人だった。

・・・

建前としては、『人工島を発展させる為』の研究。
しかし、当時その概要を知らなかった私にとっては、不思議にしか思えなかった。

人工島へ、新たに電源の増設完了の報。

ただ学園があるだけのこの島に、どうしてこんな量の電力が必要なのだろう、と。

・・・

次に思った事は、「この島で、何かが始まろうとしている」と言う確信めいた予感。

桐条グループの傘下である研究機関、「エルゴノミクス研究所」がこの島に新たに研究所を設立すると言う報告を聞いた。
先程言った通り、ただ学園があるだけなのに、人間工学研究所が

わざわざこんな場所にラボを置くと言うのは、明らかに不自然だ。

その時に、思ったんだ。

この島で、何かが始まる……ってな。

・・・

それで、特に問題も無く新たにラボが出来た訳だが……予算額がありえない数字で、当時の私は声を上げて驚いたものだったよ。

この時点で嫌な予感しかしなかったのだが、私にもそのラボに参加するように通達が来てね。

最初は断ろうかと思ったのだが……今度はそのラボの人間が直接私に参加するよう頼みに来たんだ。

それも……私の恩師に当たる人が。

・・・

心の弱い愚かな私は、彼の傍に居られると、研究の参加を了承してしまったのだが……そこで初めて知ったよ。『シャドウ』って存在を……。

嫌な予感が現実になった瞬間さ。当主の顔を見た瞬間確信したね、これにつき合っていたら命がいくつあっても足らないってな。

当時、桐条の当主は、桐条鴻悦って名前なんだが……話に聞く限りでは、南条の分家として桐条が興って以来、桐条を本家・南条と並び称される一大ホールディングスにまで発展させた、天才的経営センスの持ち主だったんだ。

だったってことは、当主の顔を見た時にはもう駄目な奴だったって思うだろ?

だが、それも違うんだ。狂ってるようで、でもそのセンスはやはり本物で、それに惚れてどこまでも付いてきますって奴が沢山いたんだよ。

だから、私一人が騒いだところで、状況が変わるはずも無くてね。

そのまま、なし崩し的に研究に参加する事になったのさ。

・・・

結局、しばらくの間その研究所に身を置いていたんだが、その間ただ馬鹿みたいに研究に参加していた訳じゃない。

『シャドウ』とは何なのか、ずっと考えていたのだが……。

おっと、その顔を見る限りでは、『シャドウ』がなんなのか大体は分かってるみたいだね。

……『シャドウ』とは、人の心から生まれる物だ。

そして、桐条鴻悦の立てた計画の全貌を知った時、本気で奴は狂ってるって思ったよ。

その背景にどんな事情があったかは知らないが、どうしたらあそこまで狂えるのか、それを研究した方が面白いのではと思う程に。

確か……その頃だったかな、桐条鴻悦の元に学園都市……ああ、ここの事ではなく、別の場所にも学園都市があるんだが、知ってるか?科学の街って呼ばれてる程技術が進んでいるそうだ。

……話が逸れたね。とにかく、その学園都市から派遣されてきたとか言う研究者が居たんだが、奴もまた狂ってるとしか思えなかっ

たよ。

名前は確か、『木原幻生』と言ったかな……？とにかく胡散臭い笑みを浮かべる男でな。その笑顔は今でも印象に残ってる。笑顔なのに、全く善意というか、おおよその正の感情が見られなかったからな。

それと同時に、希望を持てそうな話も聞いた。

『シャドウ』とは、人の内から生まれるもので、それを人間が自身の内で御する可能性だ。

確かに、話を聞くと十分に合理性があると感じられた。

それが救世の力と成りうるのか、私には分からなかったが。

・・・

結局、私はこの研究所を出る決心をしたよ。このまま居ても先が見えてる。「滅び」で終わると言う未来がな。

彼は……私とは一緒に来なかったよ。最後にあった時、言っていた。

「あれを止められるのは、最早僕しかいない」ってね。

私が『それ』を止められるはずもないし、かといって彼を止める権利も無い。

それで私だけが、出て行ったよ。

もう研究者として生きるつもりがなかった私は、趣味の骨董品集めのついでにこの店を開こうと思ったんだ。

その後すぐだったよ。世間を騒がせた『爆発事故』が起きたのは。

・・・

『爆発事故』の責任は全て彼――――岳羽詠一郎に押しつける形で落ちついたみたいだけど……おかげで岳羽家は滅茶苦茶になったよ。
世間ってのはマスコミの良いように流した情報を鵜呑みにするからね……
詳しい情報は流れなかったから、真相は私には分からなかったけど……これだけは分かったよ。
あの計画を終わらせる代償が、あの『爆発事故』なんだって。

事件の概要に関してなら、あんたも調べてきてるんだろ？
あの災害レベルの事故が『それ』を止める代償だなんて、『それ』はどれ程の計画なんだって思うよな。
だけど、『それ』は下手したら実現していた。それどころか「全て」を滅ぼしていた所だよ。

・・・

女店主は、そこまで語ったところで言葉を切った。
これで話は終わりなのだろうと思い、一方通行が口を開こうとしたところ。

「待った。話を聞こうと思ったが……相当に厄介な話なんだろ？互いの為に何も聞いてないってことにしようか。
私は何も教えてないし、あんたは骨董品をあさりに来たただの客」

「……そォだな、俺もここまで教えてくれた奴が『消える』ってのは流石に心苦しい」

「それで、私の知っている事はここまでなんだが……」

「……まだなンかあるのか？」

「『桐条美鶴』。桐条グループの現総帥だ。それと会うのに橋渡ししてやろう」

「ッ！」

その言葉に、一方通行は眼を見開く。なにせ今回ここまで来た目的が、今すぐにでも達成できそうなのだから。

「お前にそんな事が出来るのか？って顔をしているな。まあ確かに私一人じゃ無理なんだが……」

チラリと出入口を見つめる。

すると、女店主は出入口までスタスタと歩き、勢いよく引き戸を引く。

そこには、岳羽ゆかりと山岸風香、そしてアイギスの3人が聞き耳を立てて佇んでいた。

「「……誰　（なのでございましょうか）？」」

一方通行とオルソラ＝アクィナスの疑問の声が、店内にこだました。

## そのごじゅうよん　すべてをみたものは（後書き）

Ｐ３メンバーとからみだしました。
ゆかりっちが明るい気がするけど、フェス後ならこんなもんでもおｋらしいので、こんな感じで行きます

## そのごじゅうご　あまあまなおれ（前書き）

魔術サイド、どこ行った？

**そのごじゅうご　あまあまなおれ**

「おそいですね」

アイギスは、ぼんやりと空を飛ぶ鳥を眺めながら呟く。
一方通行達が眞宵堂に入店してから、結構な時間が経過していた。

3人の位置は眞宵堂から15m程離れている為、話している内容が聞こえるはずもなく。
今までは監視対象が外に居て動向をうかがう事が出来ていた為、尾行にも飽きがこなかったのだが、今は全く見えない。

とどのつまり、ただ座っているだけと言う状況に飽きたのだ。

「そうですね……」

山岸風香もアイギスの言葉に同意した。
一方通行達の動きについてをネタに会話をしていたのだが、それも品切れ。

自分達は一体何をしているのだろうか。
頬から伝う冷たい何かは、噴水の飛沫だと思いたいところである。

「……よし！」

状況は手詰まり。それを打破すべく岳羽ゆかりは決意の声を上げ、アクションを起こす。

「2人とも！話を聞きに行くわよ！」

「「えっ」」

尾行は止めなのだろうか、と言う疑問が2人の言葉として現れる前に、岳羽はズンズンと眞宵堂の引き戸まで近づいて行き、堂々と耳をくっつけた。

……怪しい。

黒岩巡査が見たら間違いなく、「……程ほどにしておけよ」とかぶっきらぼうに言い放つ物のその目は世話のかかる妹を見る目だった。みたいな感じの描写が描かれるに違いないだろう。

「尾行とは見失う事以上にまず見つからない事が重要ですよ?」

尾行の初歩の初歩です。とドヤ顔で語るアイギスを岳羽は無視して、引き続き戸に耳をつける。

すると岳羽は『シャドウ』と言う不穏な単語が聞こえてきたので真剣な表情になり、聴力に全精力を注いだ。

そんな岳羽を見たアイギスと山岸は結局、2人も一方通行達が眞宵堂の店主とどんな会話をしているのか気になったので、岳羽と同様に聞き耳を立てるのであった。

・・・

オルソラ＝アクィナスに引っ張られて街中を歩いて居た時に感じた視線の正体。

それが一方通行の目の前に居る3人だった。

警戒はしていたものの、魔術師の尾行とは思えない程気配が駄々漏れだったので、実際に手を出して来るような事があればそれなりの対応を取るつもりだったのだが。

「……こいつらが、あの『桐条』に橋渡し出来るってのかァ？」

正直頼りないンですけど。と言わんばかりの疑惑的な目を3人に向けた。

「ゆかりさん、風香さん、私たちの実力を示す為の示威行為の許可を」

一方通行の挑発的な視線に青筋を立て（実際には立たないけど、精神的に）指ポキ（鳴っていないけど、精神的に）をするアイギス。

アイギスの指から銃弾を飛ばすと言う装備を知っている岳羽と山岸は、

「「止めて！」」

本気でアイギスを止めにかかるのだが。

「……あァ？返り討ちにしてやンよ」

アイギスの言葉に反応したのか、一方通行は人差し指をチョイチョイとさせ挑発を重ねる。

「「煽らないで！」」

アイギスの実力を知らないからそんな挑発が出来るんだよ！と岳

羽は自身の頭の中で捲し立てながら、２人は一方通行を諫めた。

一方でそんな４人の掛け合いを、オルソラと眞宵堂の女店主は微笑ましそうなものを見るかのような目で、大人な会話を交わす。

「ふふ、面白い方達でございますね」

「まあ、あいつも私みたいな年増と話すよりああいう若いのと話してた方が楽しいだろうさ」

「あら、貴方様もまだまだお若いでございますよ？」

「止めて頂戴な、むず痒いって」

「ところで、『シャドウ』とは？」

「……最初に、あいつに聞くって言ってなかったか？」

「はあ。そうでございましたか、わざわざありがとうございます」

「あ、ああ……」

オルソラ節について行けない女店主。

しかし、そんなことより『シャドウ』だ。

オルソラの口からその単語が飛び出した時、岳羽たちは表情を変えた。

「そうだった！ねえ、あんた達はなんでシャドウの事なんか調べてるのよ？」

聞き耳を立てた物の、断片的な単語しか聞こえなかった為、会話の全貌は分からなかったが、一方通行達はシャドウについて調べている事だけは分かった。

その『シャドウ』にはただならぬ因縁がある3人は、その単語が聞こえてきたから最後まで聞き耳を立てたのだ。

「……お前らもシャドウについて知ってンのかよ」

間が良すぎて作為的な物を感じる。と、一方通行はため息交じりに呟いた。

「知ってる、何てもんじゃないわよ」

自信満々に語る岳羽ゆかり。堂々とした口調だったが、その表情に一瞬の陰りがあったのを一方通行は見逃さなかった。

「……はァ、そりゃ悪かったなァ。嫌な事ほじくり返すよォな真似して」

一方通行は店内を見渡し、パッと目についた十字架のアクセサリーを手に取り、財布から諭吉さんを何枚か取り出した。

「こォいう品がどン位値段すンのかわかンねェンだが、足りるかァ？」

「……1万円札1枚でも多い位だよ」

「じゃ、情報料って事で頼むわ。行くぞォ、オルソラ」

「あら？」

3人に目もくれず、一方通行はオルソラを引っ張って店内から出て行った。
それを見た3人は慌てて店の外へと出て行く。
そうして、店内には女店主だけが残されたのだった。

「あー、やっぱあの白髪小僧はお人よしだな」

女店主は、会って間もない一方通行の事を「お人よし」だと判断する。
一方通行のぶっきらぼうな口調から、3人への配慮を感じ取ったのだ。
恐らく、一方通行の抱える事情に巻き込まない為に。
そう考えると、女店主が3人を紹介した事は蛇足だったかなと思った。

しかし、一方通行の考えは間違いだ。

「だが、あいつらはそんなに弱くないぞ」

それこそ、見知らぬ他人に心配されるようなタマじゃない、と女店主は笑う。
女店主の呟きは、ただ店内に響くだけだった。

・・・

「ちょっと！ねえ、待ってよ！」

「あン？ンだよ高校生。お勉強はしなくて良いんですかァ？」

「やはり、この白髪には天誅を下すべきではありませんか？」

「あ、あの2人とも落ちついて……」

「あらあら」

図らずも一方通行ハーレム。

しかし当の一方通行の思考は、如何にして桐条グループ本社に潜入するか。これしかなかった。

後ろで何やら騒ぎ声が聞こえるが、気にしない。

こういった手合いは、間違いなくタダで何かを教えるわけがない。絶対こちらの事情を聞いてくるはずだ。普通に話せる内容なら話してそれで終わりだが、そうはいかない。

『シャドウ』と『ペルソナ』。

岳羽達がどのような事情を抱えているかは知らないが、岳羽から一瞬垣間見た陰り。

それだけで十分だった。

だからこそ、これ以上面倒な事情に巻き込ませる訳にはいかない。

とはいえ、桐条美鶴はそうはいかない。

どういう事情があったかは知らないが、あれだけの事を「やらかした」のだから。

（まァ、責任をとれとか下らねェ事は言わねェが、情報位はタダでもらわなくちゃなァ）

1万近く殺した自分が、誰かを糾弾するなど出来るはずがない。どちらにせよそのような意志は無いのだが。

そう自嘲して、一方通行はオルソラと泊っていたホテルへと戻ろうとするのだが。

「……私は、岳羽詠一郎の娘よ」

その言葉を聞いて、一方通行はその場に立ち止り、振り返った。

「なンだって？」

「岳羽詠一郎の、娘よ。私は」

「なンで言い方の順番を変えた」

「……なんとなく」

「そォか」

「そうよ」

岳羽詠一郎。先程の女店主の話に出て来ていた、『スケープゴート』にされた男だ。

それの娘が、目の前の茶髪だと言う。

「……大人の尻拭いを、子供がする。かァ……」

ままならねェな、世の中。と一方通行は興味なさげに呟いて、再び踵を返す。

「ッ……！待ちなさいよ！その通り、私は父の尻拭いをしなきゃいけない！
だからあんたの抱える事情を知らなきゃいけないの！！」

「……シャドウはペルソナを使えば倒せるよなァ」

「？」

一方通行の突拍子の無い言葉に、岳羽は頭に「？」を浮かべるが、何を当然な事をと言った具合に肯定の意を示した。

「おそらく、お前らは……いや、俺もだが、シャドウを倒すにはペルソナが要る」

一同は一方通行の話に聞き入る。
オルソラはシャドウやペルソナを知らないようなので、良くわからない顔をしているが。

「だが、『人間』はどォする？とびきりの悪意を携えた『人間』を、お前らはどォするつもりだ？」

その言葉に、岳羽は固まった。
人間。確かにそれの相手をした事は無かった。

幾月修司と言う男がいる。

それが裏で手を引いて、岳羽達にシャドウを倒させるよう仕向けていたのだが。

結局、幾月の野望は阻止した形にはなった。

しかし、実際に幾月を自身の力を以って手にかけた訳ではない。

「今からお前が踏み込もうとしている領域は、シャドウと戦うだけじゃねェ。
シャドウを、ペルソナを使って何かをやろォとしている。
そンなクソッタレ共の相手が出来るってのかァ？」

つゥか学生なンだからこの場から離れらンねェだろ。と呆れた様子で3人をつき放す。

「そっちの青髪はどォだ？せっかく戻った日常を崩したくはねェだろォ？」

「そ、それは……」

いきなり話を振られて戸惑う山岸。

確かに、あのような命のやりとりに参加したいかと問われれば、否。

だがしかし、あの時の出来事と似たような事をしている人間がいると言うのに、自分は何もしないのか、とも思う。

そう簡単に、「はい」か「いいえ」で答えられる訳がなかった。

「ですが、私には……私達には、『力』があります。私は、戦闘向きではありませんが……
とにかく、そんな力があるのに、何もしないで、そもそも何も知ろうとしないでいるなんて……できません」

その言葉を聞き、一方通行はしばらく思案するような表情を浮かべた後、視線の向きを変えた。

「……お前はどォだ？その身体の武器は、シャドウの為のもンかァ？
それとも人間を手にかける為のもンかァ？」

「……気付いていたのですか」

「当たり前だ、足音で分かるっつゥの。まァそンなンで判断出来る奴はそうそういねェだろォが。
まァ、今はそンな話はどォだって良い。今重要なのは、日常を崩すか否かだ」

「私は……知るべきだと思います。またあのような事を繰り返そうとしている人間がいる、と言うのならば」

「それは機械として命令（コマンド）された機能（プログラム）かァ？
それとも、人間としての心からかァ？」

「……人として、です」

「……はァ。後悔すンなよ……」

「「！」」

後悔するな。すなわち事情を話すと言う意だろう。

「それじゃあ……」

岳羽は少しそわそわとした面持ちで、一方通行の次の言葉を待つ。

「いや、桐条美鶴に話を聞きてェ。恐らくその時に事情の説明を求められるだろォから、その時に話す。
……2度も同じことを話すのは面倒くせェ」

「わ、分かったわ！すぐに桐条先輩に連絡取るから！」

3人は一方通行達から少し距離を取ると、何処かへと連絡を取り始めた。

「良いのでございましょうか」

「あァ？……ンな事言ったら、お前だってそォだろォが」

むしろ、会って間もない俺なンかを信用しているお前の方がおかしい。と、一方通行は言うが、

「それは、貴方様も同じ事でございましょう？」

何せ会って間もない少女達や私に、ご自分のお抱えになられている事情をお話になられるのでございますから。と、オルソラ。

一方通行の事情を知る、と言う事はすなわち学園に潜む影――――『暗部』と敵対すると言う事だ。

それはすなわち、『暗部』に狙われる原因となる為、一方通行が

守るべき対象が増える、と言う事で。

何故、守るべき対象、ひいては一方通行の弱点となりうる対象を自ら作ったのか。

それはひとえに、一方通行の信頼の証だった。必ず守る、と言う意思を以って。

「……どいつもこいつもお人よしの馬鹿ばっかで、そいつらにあてられちまったのかもしれねェなァ……」

本当、甘くなっちまった。と、一方通行は思う。

オルソラは、そんな一方通行にただ微笑みかけるだけだった。

・・・

しばらくの間、3人がどこかへと電話をしていたようだが、それを終えるとすぐに黒塗りの長い車、いわゆるリムジンがさっそうと現れた。

「……ホントに桐条と知り合いなのな」

一方通行はそのリムジンの後部座席に腰をおろしながら呟く。

「何よ、あれ程の物を見て信じてなかったの？」

あれ程の物、とはアイギスの対シャドウ用の武器と体の事だ。

（エルゴノミクス研究所……学園都市に戻ったら似たような研究所が無いか探さなきゃなァ……）

人間工学研究所。そういった施設は学園都市にいくらでもあるだろう。その中でアイギスのような存在を造ろうとしている研究所があるかもしれない。
無いに越した事は無いが、仮にあったら面倒な事になりそうだ。

そうして、一方通行達を乗せたリムジンは、桐条美鶴の待つグループの総本山へと向かって行く。

・・・

「で、なンでこンなに人が増えてンですかァ？」

げんなりとした様子で、いつもの勢いのある突っ込みは見込めない。

それは何故か？

「当然だ、シャドウと聞いて黙っている訳にはいかないからな」

運動後なのか、白のロングショーツに黒のTシャツ。
桐条の豪奢なビルには似合わない、その辺でランニングしてる人の様な恰好をしたショートヘアのイケメン。
その名を真田肉彦。じゃない明彦。

彼はどうやら大学に進んでボクシングを続けているようで、いずれはプロを目指すそうだ。
それはさておき。

「で、そっちの髭も同じ意見かァ？」

「髭って……まあ、その通りだけどさあ……」

「髭」と、余りに単純明快、どこまでも端的に自身を表現されたのが気にくわないのか、その場にしゃがみ込んでいじけた。

坊主頭に帽子をかぶり、顎鬚を蓄えた何だかラッパーっぽい顔をした少年。

その名を伊織順平。チドリラブの純愛男である。

「で……」

チラリと一方通行は下を向く。

「？」

「わう？」

そこには少年と、犬がいた。猫はいないのかい？

「このチビと犬っころもかァ？」

「誰がチビですか、僕だってこれでも毎日牛乳飲んで……」

「ガキはガキなりに目線の低い人生送ってろ」

「むっ……そんなこと言って、あなただってなんだか怖い顔じゃないですか」

「ンだそりゃ意味わかンねーし。まァ精々頑張れよ」

天田乾。

その隣に居る犬を除いて、この場に居るメンバーでただ一人、小学生である。
高校生達の中に混ざる、小学生。そんな変わった状況下に居る彼は、中々に大人びている。
しかしそんな天田だが、身長が低い事を気にしている為、一方通行のチビ発言に反応すると言う子供らしい一面も持ち合わせていた。
コロマル。私は猫派なので語るべき点は無い。

「ワン！」

「そォかい、そりゃ重畳だ」

「あなたはコロちゃんの言葉が分かるのですか？」

少し驚いた様子でアイギスは口を開く。
勿論ノリで返答しただけなので、分かる訳が無い。

「ノリだ」

「へえ、ノリですか。なるほどなー……っておい！」

「おい、こいつはこンな俗物でいいのかよ」

あまりに機械っぽくないアイギスを見て、一方通行はこの部屋の一番奥にある豪勢なイスに座っている女性に尋ねた。

「ああ、それでいいんだ。彼女は人間だからな」

桐条美鶴。桐条グループの現当主であり、真田や伊織、天田やコ

ロマル達を連れて来るように要請した張本人である。
と言っても、真田や伊織、天田にも岳羽達があらかじめ連絡を飛ばしていたのだが。
3人とも電話をしていたのはそう言う訳か、とどうでもいい事に得心が行った一方通行は、とりあえず話を聞くべく口を開いた。

「まず、この部屋に盗聴・監視の類はねェだろォな」

「そのような事はありえんよ。この部屋を何だと思っているんだ、君は」

所謂社長室。最も警備が厳重な部屋だ、聞くまでも無いのだが。

「一応だ」

「そうか、ならいいんだ。それで……」

チラリと一方通行を見やる。どうみても手ぶらだった。

「君が「ペルソナ」を扱えると言う事実を確認したかったのだが……『召喚器』は無いのか？」

「あァ？ねェよンなモン。上条位か、召喚器を使ってンのは」

「「は？」」

召喚器を使っての召喚が当たり前だと思っていた（一応タカヤと言う少年が召喚器無しで召喚していたが、それは特殊な例である）一同は、その言葉に開いた口がふさがらない、と言った様子だ。
いち早く平静を取り戻した美鶴が話を聞く。

「ま、待て、ならここで召喚してみてくれないか？」

「ハァ？この世界でそンな事が出来ンのかァ？」

そのような事、試した事もそもそも考えた事も無かったと言った様子で一方通行は美鶴の質問に質問で返した。

「……ンン、多分出せねェなァ」

美鶴や他の面々が考える中、一方通行は少し唸り声をあげると、ペルソナは出せなさそうだと判断する。

そんな一方通行に猜疑心を抱いた美鶴が尋ねる。

「……君は本当にペルソナを使えるのか？」

「『マヨナカテレビ』っつゥ場所があるンだが、そこでなら」

どうやらペルソナの発動条件が一方通行と他の一同とは異なるらしく、一方通行から自身の抱える事情を語った。

オルソラにも分かるよう、新しい単語が出るたびに解説を加えながら。

・・・

「……成程、やはり学園都市はそのような実験をしていたのか」

一方通行の話を頭の中で噛み砕きながら、美鶴は納得したように頷く。

「どういう事だァ？」

「ああ……最近な、学園都市から研究者が来ててな……」

「……そいつの名前は？」

「田木原（たぎはらかず）一と名乗っていたが……どうにも偽名臭くてな、イマイチ信用の出来ない男だったよ」

聞いた事のない名前だった。知っている研究者だったらすぐにでも学園都市に帰ってボコにしていたところだが、帰った後に調べなくてはならないようだ。

とはいえ桐条家の総帥が偽名臭いと疑っているのだから、恐らく検索にかかる事は無いだろうが。

「しかし鈴科君って言ったっけか？学園都市ってーと超能力者を育成する！って奴だろ？

お前も何かつかえるの？なら見せてくれよ！」

伊織は何やら憧れの戦隊物のヒーローを見たかのような子供じみた笑顔で、能力を使用する事を頼む。

天田もそう言った超能力だのなんだのと言ったものに興味があるのか、非常に興味津々だった。

案外ガキっぽいな。いや、ガキなンだが。と一方通行は思いつつも、能力の一部を見せる事にした。

「……そォだな、一応の信用の証として、少し位見せても良いか……」

「一応のってオイ」

伊織の突っ込みの後、オルソラは楽しそうにクスクスと笑った。
その心は、恐らく素直じゃない一方通行に対しての笑いだろう。

すると、一方通行の姿が、唐突に消え去った。

「「！？」」

突然の事に一同は辺りを見回した。
しかし、一方通行は変わらず同じ場所に居て、

「まァこンな感じだなァ」

「凄いです……光学迷彩って奴ですか！？」

ものすごく興奮した様子で一方通行に詰め寄る山岸。どうやらどストライクだったようだ。
一方通行は若干引き気味に頷いた。

「なあ！俺らにもそう言うの使えるの？！」

伊織もまた興奮した様子で尋ねるが、一方通行はその幻想をぶち殺すべく口を開く。

「どォだかな。頭に電極ブッ刺して何本も注射をぶち込んで、毎日毎日勉強で、毎日毎日実験を繰り返した揚句能力なんてほとンど使えませンって奴も居るからなァ……」

「……諦めろ、お前には無理だ」

真田は伊織の肩を叩いて、同情した。
伊織は、泣いた――――。

「とりあえず、これが俺の力だ。つっても力の一部なンだが……つゥか俺が能力者だって事、周りに言いふらすなよ？」

「え？なんで？」

こんなすげーのに、と伊織は疑問に思うが、何処で誰が見ているのかわからないのだ。
一応この部屋の周りは安全の様だったが、他ではそうはいかない。
そんな訳で一方通行は自分が能力者である事は知られたくない、と言う事だけを伝える。
流石にオルソラの事までは語らなかったが。それとこれとは話が別だし。

「とにかく、学園都市には注意しろ、と言う事だな？」

「そォだ。つゥか情報だけくれてりゃそれで良い。実際にお前らに動いてもらうつもりはねェしな」

「じゃあ何で私達をここに連れて来たの？」

岳羽は、何故もっと頼ってくれないのかと憤った様子で尋ねる。
およそ半分はお前らが連れてきたのだろう、と一方通行は突っ込みを入れたくなったが、いちいち反応していてはキリが無い。

「お前らにはさっきも言ったが、『シャドウ』も怖い存在だが、何よりそれを実験材料にしている『人間』のが怖ェンだよ」

それに、と付け加え一方通行は続ける。

「俺はこの世界でペルソナを出せねェが、お前らは出せる。逆に俺は『マヨナカテレビ』でペルソナを出せるが、お前らはどォだ？」

「……試してみないと分からないわね。試して使えなかったら役立たずだし」

岳羽は手を顎にやり、考え込む。

如何にして一方通行の手伝いをしようか、などと考えているのだろうか。

「まァ、今後の事は後で考えるとするとして……」

――お前らの話を、聞かせろ。

そして一方通行は知る事となる。

この世界を、文字通り命をかけて救った英雄と。

本当の『強さ』と言うものを。

## そのごじゅうご　あまあまなおれ（後書き）

次か次々位で魔術サイドに戻るマス

## そのごじゅうろく　やってやるです（前書き）

この次であれだ、魔術サイドにもどる

**そのごじゅうろく　やってやるです**

一方通行は、全てを聞いた。赤裸々に、何もかも。

実験事故の原因と、幾月修司と言う男がそれを引き継いだという事。

それを阻止すべく動いたのが、一方通行の目の前に居る彼ら。

しかし、『それ』は一度起りかけた。

いや、起こったと言っても差し支えが無いだろう。

何せ、一人の男がいなければ、『それ』は実現したのだから。

『それ』とはすなわち、『滅び』。

『滅び』と聞いて、随分とまあ大言壮語なことだと思ったが、先に女店主からある程度の話を伺っていたので、やはり嘘では無いのだろう。

それはさておき、『滅び』で終わったはずの世界が、終わっていない。

胡蝶の夢だとか、今見ているのは走馬灯だ、等と下らない問答をするつもりはない。

実際には、『滅び』は防がれたのだ。

――一人の男によって。

・・・

「……随分と、波乱万丈な1年を送られたよォで」

作り話だったら、純粋に面白い話だった。で終わっただろう。

しかし、これは実際に起きた事だ。それが起きてからまだ1年も経っていないと言うのだから、ただただ驚くばかりである。

故に、少し砕けた口調での返答しか出来なかった。

無敵だの最強だのと息巻いていた自分が恥ずかしい。

無敵なら、最強なら『滅び』などちょちょいのちょいだろう。

しかし、その『滅び』を止めた男は、自身の命を楔にして『滅びをもたらす者』を封印したと言う。

『滅びをもたらす者』――『ニュクス』は、それ自体に害意はない。

無意識的だろうと意識的だろうと、心のどこかで『滅び』を望む人間達が、『ニュクス』を呼び寄せるのだそうだ。

成程、確かにそう言われれば自身が滅びに、死に触れてみたいかと聞かれれば、完全には否定できない。

1度しかない『死』だ。1度しかない故に希少であり、おいそれと触れていいものではない。

分かりやすく例えるならば、高いブランド品を欲しがるようなもので、希少な宝石を欲しがるようなもので。

「1度しかない」と言う希少性が、人々に触れてみたいという思いを助長させるのだろう。

（やっぱ、上には上がいるもンだなァ……）

本当に、世界は広い。

井の中の蛙ならぬ学園の中の番長ってとこかァ？などと下らない思考が頭を巡る。

（……やっぱ、その男を助ける訳にはいかねェンだよなァ……）

少し、話がしてみたかった。

純粋に興味が出たのだ、その男に。

だがしかし、それは許されない。

何故なら封印を解けば、人々の想いはすぐにでも『ニュクス』に触れるだろう。

そうなったら、文字通り『滅ぶ』。

（まァ、俺みたいな部外者が助ける助けないなんて口出しすべきじゃねェな）

無粋で不躾で、何より無様だろう。

兎にも角にも、今重要なのはその男についてでは無い。

「お前らは、召喚器があればペルソナが出せるンだよな」

一方通行の問いに、桐条美鶴が肯定の意を答える。

「成程なァ。で、それは「適正」がねェと無理って事か」

まるで超能力みたいだな、と思う。

才能が無ければ使えない超能力。

適正が無ければ使えない召喚器。

と、ここで、不意に違和感が脳裏をよぎる。

（そォいや、いつかインデックスが言ってたっけか。「魔術は、非才の者が才ある者に対抗する手段だ」ってよォ）

いつだったか、たまたま街中で散歩しているインデックスを見かけるたびにいつものファミレスで飯を奢って魔術に関して色々と話を聞いていた。

その時、才ある者とは誰かとインデックスに尋ねたのだが、世界には『原石』なる天然能力者が存在するらしい。

学園都市第七位もそれだと言う噂を聞いた記憶があるが、果たして『才ある者』とはそれだけを指すのだろうか。

原石の正確な数は分からないが、現在判明している限りでは５０余名だそうだ。

とはいえ、これから判明される原石がいるとしても、何百何千も居るとは思えない。

そもそも、そんなに居たらもっと目立つはずだ。

それに対して、魔術師の数を比較すると分かる事だが、余りに差が開きすぎている気がする。

非才が才に勝つには数で対抗するしかないのだろうが、それにしても差が開きすぎだろう。

原石が滅ぼされつつあるのか、それとも。

――原石とは別の『才』があるのか。

桐条美鶴曰く「ペルソナを出すには『適正』が要る」そうだ。
すなわち、『適正』があればペルソナは出せる。

それを『才』と呼ばずして何と呼ぶのか。

（……考え過ぎかァ？）

余りに突拍子もない事を考えてしまった。
こうして『適正者』が簡単に一同に介している状況が、微妙に説得力を持たせているのが笑えない。

『才ある者』の行方も考察したいところだが、もう一つ気になる事がある。

「さっき説明した『マヨナカテレビ』についてなンだが……」

一呼吸ついて、続ける。

「お前らの言う『ストレガ』って連中みたいに、ペルソナを植え付けられた奴が居る」

布束砥信。無理矢理ペルソナを植え付けられた少女。

その言葉を聞いて、一同は驚愕する。

何せ非人道的な実験を以ってペルソナを植え付けてきたのだ。

今もなお、それが行われていると聞いて黙っていられようか。

「だが、今はあいつも召喚器無しにペルソナが出せる」

そして。

「もう一人、その召喚器を引き継いで『マヨナカテレビ』でペルソナが出せる奴が居る」

――上条当麻。

自身の影と分離されてもなお、その影に飲まれる事無く生き続ける少年。

「ふむ……確かに、それだけ聞けば私達も『マヨナカテレビ』でペルソナを使えそうなものだが……」

チラリと一方通行の表情を見ながら、桐条美鶴は思考を続ける。

「……恐らく、無理だろォな」

「へ？なんで？」

召喚器使って出せる奴が居るなら、出せるんじゃないの？と、伊織順平は尋ねる。

「話でしかそいつらの事を聞いてないから分からないが、『特殊』な環境がそうさせたと考えるべきか？」

美鶴や一方通行もまた、真田明彦と同じ考えだったらしく頷いて同意した。

「鈴科がこちらでは使えないんだ。ならば私達も条件を満たさねば使えないのだろうな」

「そォだな。『マヨナカテレビ』の中で、自分の影と相対しなくちゃならねェが……

なンつゥか、お前らなら大丈夫そうな気もするが、そこまでしてもらうつもりはねェ」

ここまで聞かせておいて手伝わせる気が無いのか、と一同は突っ込みを入れたくなるが。

「あァ、勘違いすンなよ。現状ではお前らに出来る事は殆どねェンだ、実際。

こっちも分かってる事が少なすぎてなァ……だが、一つだけ分かった事がある」

――タルタロス、と言う名の実験名ないしは計画名が、学園都市の中で見つかった。

「「！！」」

タルタロス。
忘れもしない、影時間にのみ存在した『滅びの塔』。
シャドウについて調べる過程で見つかったのだから、どう考えてもシャドウ関連だった。

「はっきり言って概要も内容も何もかも分かってねェ。所謂手づまりって状態だ。
だが、この『タルタロス』がお前らの言う『タルタロス』と同一のものだとしたら」

「……その時に、僕達の力が必要になる、って事ですね」

「そォだ。よくできたなァ、１００点やろォか」

「……要りませんよ、そんな形の無いもの」

「まァ、このガキの言う通り、学園都市のどっかの学校を舞台とした『タルタロス』が出来るかもしンねェ。
そン時に備えて体でも鍛えとけ、ってとこかァ？まァ、桐条にはそれとなく学園都市の動きを見ていてもらいてェがな。
勿論会社側が損害を被らない程度で」

「あぁ、その位なら当然、やるつもりさ」

「頼むぜ、俺には『能力』って力があっても『権力』って力はねェからなァ」

「そうだよ、お前みたいなすげえ能力者が居ても、勝てない相手なのか？」

と、伊織はパッと思いついた質問をする。
それは割と核心をついた質問で、中々良い直感をしていると一方通行は内心褒めつつも返答をした。

「そォだな。だが、こうも考えられるぜ？「そう言った能力者共を抑えつけてるのが、一部の大人」だってなァ」

良くも悪くも優秀なのだ、学園都市の大人達は。
その言葉に息を呑む一同。能力無しに能力者と渡り合う科学力と言う者はすさまじいものがある。
とはいえ、能力者を生んだのが科学なのだから、当然と言えば当然なのだが。

「まァ、そう言う訳であンなクソ共の相手をお前らがする必要はねェよ」

「「……」」

学園都市の闇の一端、それの概要を教わった彼らは、それぞれが色々と考えこんでいるようだった。

・・・

「あ！そうだ！」

重苦しくなった空気を壊すかのように、岳羽ゆかりは一つ提案する。

「あなたって多分ペルソナの適正あるだろうし、召喚器使えばここ

でも出せるんじゃないの？ペルソナ！」

「「あ」」

そういえば、試していない。

確かに、召喚器があれば出せそうな気がする。

「……ふむ、ならばこれを使うと良い」

美鶴は自身の机の引き出しから、拳銃を取り出した。

その拳銃には、銃口がなかった。

「これは……」

「召喚器だ。別に私専用と言う訳ではないからな、それを頭にかざして引き鉄を引けば良い」

「ふゥン、それだけなら簡単だよなァ」

死の恐怖を一身に受け止め、それを乗り越える事で初めてペルソナが召喚できるものであり、銃口を頭につきつける事ですら常人には躊躇われるし、引き鉄を引くとなると死を覚悟せねばならないと言うのに。

召喚器を受け取った一方通行は、ノータイムで引き鉄を引いた。

『ペルソナ』が出てくるよりも、その行動の速さの方に、一同は驚かされる。

「おォ出た」

一方通行の相棒たるシナツヒコ。何となくだせるンだろォなと思っていたのだが、出せなかったら恥ずかしいので何も言わなかったが、内心出せて安心する。

現実世界でも出せる事に感動を覚えつつ、召喚器を返した。

「……私なんか、引き鉄引くのに相当時間かかったのに」

「あァ？お前が提案したってのに、なンでお前が不満そォな顔してンだよ？」

「う、ううるさい！！」

「……わけわかんねェな」

とにかく、これで用事は終わった。

後はもう帰るだけなのだが……

「おいオルソラァ」

「ｚｚｚ」

立ったまま寝ていた。

しばらく口を開いていないと思ったら、いや口は開いていたがそこから漏れるのは寝息だった。

「……わりィな、うちのお嬢様がオネムだから帰るわ」

「「……」」

ポカンとした一同を尻目に、一方通行はオルソラ＝アクィナスを小脇にかかえてそそくさと帰っていく。
そうして、残された面々は我に帰るまでポカンとしていた。

・・・

「何か……色々凄い人でしたね」

天田乾は最初に思った感想をそのまま口にする。
コロマルはそんな天田に寄り添い、不安げに鳴いた。

「……結局、俺達はどうしたらいいんだ？」

伊織順平はこれからについて考えを巡らせるが、分からない。
それもそのはず、まだ何も分かってないのだから、動き方が分かるはずも無い。

「それに関しては、桐条グループが色々調べてみよう。それよりも、私達自身はそうだな……」

桐条美鶴もまた、自分自身のこれからについて考える。とはいえ戦いから長らく離れていた為、勘も取り戻せていないだろう。
ペルソナが使えないにせよ、体を鍛えるくらいはした方がいいはずだ。

「俺はいつもと変わらずトレーニングだな。だが、お前らは受験勉強もしっかりしろよ？」

既に大学生である真田明彦には関係の無い事だが、この中に3名

程受験生が居る。

「うわ、先輩嫌な事思いださせないでくださいよ……」

せっかく頭の隅っこに追いやってたのに、と岳羽ゆかり。

最近は勉強ばかりだったが、久々に弓を持って来なければならないだろう。

睡眠時間、減るなあとしみじみ呟いた。

「私はその……頑張ります！」

能力の特性上、ペルソナを出さねば意味が無い山岸風香は、とりあえず頑張る宣言をしてみたものの、何をがんばればよいのか。

「なら私も、しばらくラボにこもりましょうか」

最後に、アイギスは体内の武器を調整するべく、ラボにこもる事にした。

「あ！なら私もアイギスのお手伝いします！」

それなら出来る、出来ますやらせてくださいと、山岸はすごい勢いでアイギスに迫る。

アイギスは諸手を挙げ、それを歓迎することで、今後について考えさせられたこの一件は収束を迎えた。

・・・

桐条美鶴を残して、他の一同は家へと帰って行った。

何だかんだで長時間話し込んでいたので、かなり遅くなってしま

った。
　このような不測の事態とはいえ、皆と会って話せると言うのは非常にありがたい。
　何よりストレス発散になった。
　やはり美鶴という若き器には、まだまだ桐条グループの重圧は重すぎたと言う事だろうか。
　何にせよ精進をせねばな、と美鶴はクスリと笑った。
　すると、自身の机の上に一枚の紙が置かれていた。
　それを拾い上げると、そこには。
『学園都市で『大覇星祭』ってのがあって、その時は外部から堂々と学園都市に入れる。
　侵入が容易ではない学園都市で、警備を甘くせざるを得ない数少ない機会だ。
　その時までに、召喚器を6丁用意を頼むわ。ついでに学園都市の能力者共を見てくのには丁度いい機会だろ』
　一方通行からの手紙があった。
　その内容は召喚器6丁の作成と、それの受け渡しの機会が書かれていて、何とも周到な奴だと思うがそれと同時に召喚器を要求するとは図々しい奴だとも思う。
　だが協力すると言ったのはこちらなので、すぐさま製作するよう指示を出した。
「全く、彼のおかげで随分と忙しい生活になりそうだ」

それを一方通行の前で言うと、「元々忙しいだろォ、社長さン？」などと返されそうだな。と美鶴は一人、部屋の中で笑った。

## そのごじゅうろく　やってやるです（後書き）

はふうようやく魔術サイドに戻りますよーにぱー。
Ｐ３メンバーと魔術サイドは、今回は絡みません。そのうち絡むかもしれないが今回は絡みません

## そのごじゅうなな　いっぽう、そのころ（前書き）

魔術サイドです。次回でオルソラ編は終わると思うマス

## そのごじゅうなな　いっぽう、そのころ

現在地、見知らぬ、キャンプ場。

オルソラ＝アクィナスを発見したものの、天草式の妨害により捕捉に失敗。

今はオルソラを追い掛けながらも、天草式の追跡を妨害したり逆に妨害されたりを繰り返していた。

とはいえ、いつまでもそんな事を続ける訳にもいかず、暗黙の了解的に夜には休戦状態へと入っていた為、２５０人と言う大御所帯を抱えるアニェーゼ＝サンクティスはたまたま見つけたキャンプ場に人払いをかけそこを拠点とする事にしたのだった。

だが、それはあくまでつかの間の休息で、互いに準備が整えばすぐにでも戦闘になる事だろう。

さて、その際にオルソラが追われる理由である『法の書』の解読の意味と意義について、インデックスに話を聞かされたのだが、それが終わるのと同時に斥候から連絡が入る。

第一にオルソラの行方と、第二に天草式の潜伏先。

「学園都市？」

上条当麻は疑問と驚きを混ぜたような口調で聞き返した。

オルソラは『学園都市』に、天草式はその『学園都市』の近くにある『パラレルスウィーツパーク』という名の、お菓子専門のテーマパークに居ると言う。

前者は聞き覚えがあるのだが、上条の知る学園都市では無いと言

った口ぶりで、後者はそもそも聞き覚えが無かった。

「うん？君も学園都市の人間のくせに、もう一つの学園都市の事を知らないのかい？」

遊園地はまだしも、学園都市は僕ですら知っているというのに、とやや馬鹿にした口調で上条の質問に答えるステイル＝マグヌス。

記憶喪失の上条にそれを求めるのはどうかと思うが、そもそもその事実を知らないのだから仕方が無い。

上条はステイルの口調にムッとするが、そこで反応しても話は進まないと気を静め、言葉を紡ぐ。

「オルソラってのと、その白髪はもう一つの学園都市に居るってことだな？」

「ああ、その通りだよ。……ある意味、君達の学園都市より手出しが難しい場所さ」

「何でだ？こっちほど警備が厳しいとこは無いだろ」

上条の住まう科学の街程、閉鎖的な場所は無い。

閉鎖的と言う事はそれだけ外部からの侵入には気を使っていると言う事だ。

「そうだね、君達の街は侵入は難しいし、対してあちらの学園都市……ややこしいな、『桐条グループ』と呼ぶ事にしようか。

学園都市そのものよりも、この桐条グループが厄介なのだから。

確かに、その桐条グループの方は、君が言う通り学園都市と比べて侵入自体は容易だよ」

ならどうして、と言う上条の声を聞くまでも無く、ステイルは続ける。

「学園都市は何だかんだ言って軍事力・科学力共に世界一と言って良いだろう。

だが、その軍事力は殆ど学園都市内に集中している。

逆に桐条グループの方は、宗家である南条グループと共に世界中に展開している巨大企業だ。

これに手を出す、と言う事は世界中に点在している桐条・南条を敵に回すと言う事なんだ。

さて、桐条グループと一言に言っても、それが着手している分野は数える事が億劫になる程の分野にわたって企業を展開している。

……ここまで言えば分かるだろう？」

「つまり、手出しをしたら物資の供給だとか、資金の供給だとか、そう言った面で多大な被害を出す恐れがあるって事か？」

「まあ、そんな感じだね。ついでに言えば南条・桐条のいずれかもしくは双方に世話になっている組織すら敵に回すと言う事だ。

数の暴力は1の才能よりも恐ろしいよ」

本当に厄介な場所に潜り込んでくれたものだ、と吐き捨てるように呟くステイル。

しかし、上条の思考はそんなところには無かった。

（桐条……）

少し前に一方通行に連絡を取った時、そんな事を言っていた気がする。

話を聞けば聞く程、「白髪の男」が一方通行に思えてならない。

どうするべきか。

この事をステイルやアニェーゼに伝えるべきなのだろうか。

しかし、天草式の動向も気になる。

何せローマ正教を出し抜いてオルソラを襲撃したらしいのだ。

らしい、と言うのはローマ正教の斥候は天草式に襲われたらしく、その事実を確認した者が居ないのだが、バス停に開いた正三角形の穴とそれに続く下水路と残された天草の術式が、オルソラを襲撃したのだろうと言う事が容易に想像できた。

にも拘らず、そのオルソラは今桐条グループの学園都市に居ると言う。

白髪の男と共にいると言う事はその男が何とかしたのだろうか。

だとすると、やはり白髪の男とは……。

「……おい、おい！」

すると、その思考を遮るようにステイルが声をかけてきた。

「な、何だよ？」

「いや、君が急に黙り込むからどうしたのかと思ってね。君に頭脳労働は似合わないよ。

馬車馬のごとく働く方がらしい。余計な事を考えずにね」

「うるせえよ、余計なお世話って奴だ」

そうかい、とステイルは興味なさげにタバコと共に吐き捨て、スタスタと何処かへ歩いて行った。どうやら何かを手伝いに行くらしい。

今現在、上条はテントの一つの中でポツンと座り込んでいた。
本来この時間は天草式に対抗するための準備期間と言うか、それぞれがそれぞれの武器だの術式だのを整えたりしていたのだが、上条は魔術など使えない。
故に適当にフラフラと外を歩いていては、一言で言うと邪魔なのだ。

一人。
誰も居ない。

今なら一方通行に連絡を取っても良いだろう。
そう考えた上条は、携帯を手に取り通話ボタンを押した。

『……どォした？』

一方通行の声を聞き、少し安心する。
先程ステイルに言われた通り、頭を使う作業は苦手なのだ。
故に判断に困る状況は、一方通行や御坂美琴等に任せたりしていたきらいがある。
兎にも角にも、上条の取り巻く状況と、一方通行の状況を照らし合わせるべく話を始めた。

・・・

『……成程なァ』

上条当麻が話を終えると、一方通行は一言呟くように発して黙りこむ。
何か考えているのだろうか。上条は一方通行の次なる言葉を待った。
『結論から言うと、オルソラは俺ンとこに居る』
『！』
その言葉にやはりとも思うが、ある程度の驚きもあった。
こう言った厄介事に巻き込まれるのは上条の専売特許と思っていたのだが、どう考えても一方通行の方が渦の中心にいるだろう。
『だが上条、俺がオルソラを匿ってンのは、誰にも教えないで欲しい』
いや、インデックスがそこに居るのなら、インデックスにも伝えておけ。と一方通行は付け加えた。
『何でだ？』
純粋に疑問に思う。
ローマ正教にオルソラを保護させて、それで終わりでは無いのだろうか。
『まず一つ、科学の街の人間、それも頂点に位置するこの俺が、魔術師を匿うとなると色々問題がある』
成程。言われてみればそうだ。
上条とインデックスは、イギリス清教と色々な取り決めの元、一

緒に住んではいるが。
今回一方通行とオルソラにはそれがない。
すなわち、今回の件で一方通行の存在がばれると、一方通行だけではなく、オルソラにも害が及ぶかもしれない。と言うのが一方通行の見解だ。

『成程……だけどさ、こっちじゃ「白髪の男」がオルソラを匿ってるって事になってるんだけど……』

『……一応、一般人の振りをしている』

その言葉の後、一方通行の後ろで誰かの噴き出したような声が聞こえた気がするが、何だろうか。

『ふうん、魔術師の事を知らず、たまたま桐条グループの学園都市まで案内したって事にするってことか？』

『あァ、そォいう事だ。後はバレないうちに学園都市にもどりゃそれで終わりだ』

『そっか。じゃあ俺とインデックスは、一方通行を見ても知らないふりしとけばいいってことだな？』

『それで良い』

『おっけー。それだけ分かれば十分だ……気をつけろよ？』

『俺を誰だと思ってンだよ』

その自信ありげな言葉に満足したのか、上条は電話を切ろうとす

るが、それを一方通行に止められた。

『どうした？』

『その「ローマ正教」とやらは、本当に味方なのかァ？』

『はい？』

それはどういう……と言ったところで、一方通行が「いや、なンでもねェ」と言うので、そのまま電話を切ったのだった。

・・・

『ローマ正教とやらは、本当に味方なのかァ？』

一方通行はホテルのベッドに寝転びながら尋ねる。

上条当麻は意味がわからないと言った具合に疑問の声を上げたので、すぐにそれを否定して通話を終えた。

何せ実際に会ったわけでもないので、信用が置けない。ローマ正教とやらも、天草式も。

何より、『敵意』ある視線と『そうでない』視線。

常識的に考えると、『敵意』ある視線が天草式となるのだが。

（それに、オルソラが何も言わねェのが気になる）

オルソラ＝アクィナスは、ローマ正教の人間……らしい。上条が言うには、だが。

ならば何故、オルソラは『ローマ正教が来ているというのに、一方通行にそこへ連れて行ってもらうように頼まないのか』。

それは短い時間とは言え、オルソラと共に行動し、更にはローマ正教を知らないが故に出来る客観的な見地であり。

何より、『知らない魔術師』が基本的には信用できないと言う経験則であった。

（言いがかり甚だしいけどなァ）

もしも本当に味方だったら謝らなければならない。

しかし、敵だったら？

『法の書』と言う魔術サイドにとって、かなり重要なファクターを担う存在を解読したと言うオルソラが、どういう目に会う事になるのかは、明白だった。

この一件に、どう落ちをつければいいのか、一方通行ですら判断しあぐねるものだった。

（まァ、とりあえずは桐条グループだなァ）

どのようにして桐条グループに近づくか。

まどろむ思考の中、一方通行は明日考えればいいやと眠気に身を委ねるのだった。

・・・

上条当麻は慣れない頭脳労働に従事している。

先程電話で言われた『ローマ正教が味方か否か』と言う事について。

現状ではどう見ても味方であるのだが。
確かに、人には誰だって「裏側」が存在する。
それはテレビの中で何度も体験したではないか。

とはいえそれとこれとは話が別なのだが、何年来の友人とか言う訳でもないのに、何となく「立場的にはローマ正教が正義で天草式が悪」だと勝手に思っていた。

事はそう単純ではないのに。

テレビのニュースを見て事件の全容を理解したと勘違いする視聴者の様に。
何処か他人事のように思っていなかっただろうか？

（あーもう、ホントに馬鹿だな！！）

渦中の人物は一方通行で、自分は脇役。
そんな下らない事を考えて思考を放棄するとは何事か。
考えるのが苦手と言うのは免罪符では無い。

苦手なりにも考える事を諦めるな。

分からないなら教えを請えばいい。
勿論、信用のおける人物に。

信用のおける人物は、この目で判断すればいい。

上条は、考え過ぎて痛くなった頭を冷やすべく、そのまま睡眠につくのだった。
風呂を覗いたり、幼女が布団にもぐりこんで来る等と言った事件も無いままに。

・・・

「で、俺の目的はあっという間に達成されちまった訳だが」

ホテルの一室、眞宵堂で「買い物をした」と言う名目を作る為、何となく買った十字架のアクセサリーをゆらゆらと揺らしながら、お前はこれからどォする？と言う視線をオルソラ＝アクィナスに送る。
テレビの中に誰かが放り込まれる事態があれば、すぐにでも戻らねばならないのだが、幸い今のところそのような事は起きていない。
そんな訳で、1週間と言う期間の内まだ2日しか経っていない状況をどうしたものかと考えているわけだが。

「……その十字架」

不意に、オルソラが呟く。

「あン？欲しいのかァ？あの女店主が言うには二束三文にもならねェもンだろォ？」

まァ欲しいってンなら、やる。と、一方通行は十字架を握り、手渡そうとするのだが。

「……あの、出来ればそれを、貴方様が私に掛けて頂きたいのでございますが」

「ハァ？」

何故そんな事が必要なのか。

よくわからないが、よくわからない発言をするのは今に始まった事では無い。

とはいえ今のオルソラには、それを為す事が重要であると言った、何か意志めいたものが感じ取れた。

別に減るもンでもねェし。いや、減る減らないの問題でもねェか。とか思いながらも、了承した。

一方通行は溜息をつくと、オルソラの真正面に回り、抱き寄せるように手をオルソラの首周りに回す。

そしてカチリと言う音が鳴ったところで、一方通行は手を離した。

「……よくわかンねェが、これでいいのかァ？」

「はい、ありがとうございます」

オルソラはニコニコと微笑みを浮かべながら、十字架を撫でる。

（別に正面から回る必要無かったな）

なんか変な電波を受信したらしい。

終わった事はもういいや、と言わんばかりに一方通行は思考を打ち切る。

「で、だ。ストレートに聞くが……『敵』は、ローマ正教でいいのかァ？」

核心をついた質問。
女店主の様な人間を相手にするなら、このような聞き方はしないのだが。
相手はオルソラで、余計な問答は無駄だろう。

自分の体が震えるのを止めようとして、それが失敗したかのように小さく肩を揺らした。

それだけで、答えは分かる。

（厄介な事が増えるなァ）

とはいえ、オルソラにも『預けた』のだ。自身の抱える『モノ』を。

見捨てる、と言う選択肢は初めから無かった。

・・・

翌日、午後１１時。日中は不気味なほど何も起きなかった。曰く、「桐条の総本山に、オルソラと白髪の男が向かった」らしい。
白髪の男に対する警戒が急上昇するまま、夜になっていた。
元々人が多く住まう地域では無かったのか、辺りは暗闇と静寂に包まれていた。

「さて、準備は出来ましたか？」

アニェーゼ＝サンクティスはローマ正教のシスター達に尋ねる。
答えは、聞くまでも無かった。

「恐らく、天草式の『渦』の性質上、敵もうかうかしてらんねーはずです。
つまり、敵方の作戦としては少数精鋭により、『渦』の発動直前にオルソラ＝アクィナスを奪取、すぐさま逃走と言ったところでしょうか。
こちらからオルソラを保護に向かおうとしても、天草式の邪魔が入っちまいますので……
私達の作戦としては、オルソラを奪取した事で有る程度動きが制限される奴らを強襲する形になります。
こちらの勝利条件は、『渦』から奴らを逃がさねー事です」

『渦』とは、天草式の特殊な術式で、簡単に言えば『劣化版どこでもドア』だ。
何処でも行ける訳ではないが、『渦』が設置されているポイントへならどこの『渦』からでも移動できるというもので、天草式にしか使えない。
すなわち、『渦』から逃げられれば『隠匿』に長けた天草式の面々を、捕捉する事は不可能になる。

そもそも、天草式にオルソラを奪取させない事が一番好ましいのだが、天草式なら少数で桐条グループにもばれずオルソラを誘拐するくらいは出来るだろうが、ローマ正教は統制された数を以って殲滅する事を得意としている為、どうしても桐条グループの目についてしまうだろう。

そうなった場合、互いに不利益になるだろう。

別に桐条グループと敵対したい訳ではないのだから、ならば一時の危険位はオルソラに請け負ってもらう必要があった。

作戦の概要と、戦力の配置をアニェーゼが振り分けて行く。

そして作戦会議が終わり、その場には上条とステイル＝マグヌスだけが残ったが、ステイルの表情は険しかった。

「どうした、ステイル？」

上条には、ステイルが少し、いやかなりイラついているように見える。

苦虫を噛み潰したような表情をするステイルは、

「なんだい？僕は今とてもイライラしているんだ。話はこの戦闘が終わってからにしてほしいね。

まあ、終わった後に君が生きていれば、の話だけど」

上条の心配を不要と切って捨てた。

しかし、本当にイライラしていたのか、独り言を吐くように上条に愚痴り始めた。

「『法の書』がどうというんだ。第一こちらにはそんなものよりもずっと重要な『禁書目録』が居ると言うのに。

どうして『法の書』ごときの為に、天草式の『渦』の設置地点の特定ごときの為に、インデックスが前線に赴かねばならない？」

危機管理能力が欠乏しているとしか思えないね。と忌々しげに言い放ち、更に愚痴り続ける。

「大体、「この決定はローマ正教従２０億人の総意だと思え」なん

て言われたら断れないに決まってるじゃないか！
その上僕が護衛をしようとしたら、「私らは統制された動きに重きを置いているので、部外者は下がっててください」だと！？
だったら最初から僕なんか要らないじゃないか！！ふざけやがって、インデックスに何か有ってみろ！あいつらオルソラごと燃やしつくしてやるからな！！」

英国紳士には似つかわしくない暴言の数々で、ローマ正教の部隊の指導者であるアニェーゼを罵倒する。
その必死さから、インデックスを思いやる余りに、と言う気持ちがにじみ出ていた。
ちなみに、ステイルと上条の主だった任務は「もし仮に『聖人』が武力介入してきた時、それを撃退」と言うもので、本当に来るかも分からない『聖人』を後方で待ってろ、と言うのだ。
すなわち、それは遠まわしに戦力外通告をしているようなものだった。

「なあステイル、お前さ」

「なんだい、さっきも言ったけど今僕は虫の居所が――」

「インデックスの事好きだろ？」

「ぶはっ！！！？」

「おお、図星か」

「なな……君は何を……」

「つーかさ、「後方待機」とか言うけどよ、ステイル。お前待機す

る気ないだろ？」

「……当然だ。例えそれが命令された事だとしても、命令違反でローマ正教やイギリス清教と敵対する事になっても、僕は彼女を守ると決めたんだ。だから誰だって殺すし、誰だって燃やす。

僕が今こうしてあいつらの命令を聞いているふりをしているのも、それが彼女の為になるからだ。

『禁書目録』の有用性が示せなければ、インデックスは今すぐにでもイギリスに強制送還だろう。

それはインデックスの望む事では無い。だから僕は奴らの作戦に乗る」

まあ、インデックスに危険が及ぶようなら、命令は無視させて貰うが。と、散々愚痴って落ち着きを取り戻したステイルは、タバコをふかしながら投げやりに語る。

「誓ったんだ。例え彼女が全てを忘れても、僕は何一つ忘れずに彼女の為に生きて死ぬ。と」

その思いは、恋にしては重すぎて。

その思いは、愛にしては一方的で。

その思いは、どこまでも狂信的で。

その思いは、どこまでも人間味を帯びたものだった。

・・・

午後１１時。

天草式教皇代理の建宮斎字は、天草式十字凄教所属の４７名と共に、お菓子テーマパーク『パラレルスウィーツパーク』に潜伏していた。

何故なら、この場に天草式の特殊移動法『縮図巡礼』の移動ポイントである『渦』が存在している為、潜伏するのに『渦』の近くに居た方が便利だからである。

このパラレルスウィーツパークなのだが、地元では非常に人気のある場所で、日中人がひっきりなしに行き来している。

何故そのような目立つ場所を、潜伏先に選んだのか？

まず一つ目に、目立つと言うのは敵も同じ事なので、日中人の目がある時は、互いに手出しが出来ない、中立地点となりうるからだ。

次に、天草式という『隠匿性』に優れた魔術の方式によるものである。

天草の歴史は、日本が昔、鎖国をしていた頃迄遡る。所謂『踏み絵』等が有名な例だろうか、鎖国をするにあたっての宗教弾圧は。

それから逃れるために、天草式と言うものは自身の所属を秘匿する技術に長けている。

例えばあからさまに術式や魔法陣を展開するのではなく、日常の作法、食べ物の食べ方、歩く距離、男女の配置など、動きのいたるところにさりげなく魔術的な意味を持たせる事で、術式を展開して

行くのだ。
故にこのように人が多い場所でそれを行っても、魔術の準備をしている等とは誰にもわからない為、この拠点が桐条グループの学園都市郊外に有った、と言うのは僥倖であろう。

と言っても、この『渦』の設置は日本で最初の『日本地図』を作成したと言う伊能忠敬が行ったと言われている。
『渦』が設置されている地点は固定されている為、時が過ぎるとその周辺もまた変化して行く。
『渦』の上にセキュリティの厳しい建物――例えば銀行等が建てられてしまうと、それだけでその『渦』は使い物にならなくなる。

この『パラレルスウィーツパーク』にある『渦』は、まだ運が良い方だろう。

兎にも角にも、作戦は制限時間がある。
作戦内容としては『白髪の男からオルソラを奪取して、『渦』を以って別の場に逃げる』、であるが、『渦』が展開できる時間は午前0時から5分間。
すなわち、オルソラを奪取できなければそもそも話しにならないし、奪取したところでその5分を逃せばローマ正教に負けるだろう。

今までローマ正教と渡り合っていたのは、『隠匿性』を用いた奇襲や不意打ちによるもので、正面から堂々と相対せば普通に負けるのだから。

「さあ、我々の力をローマ正教に、何より女教皇様に示すのよな」

武器は持ったし、術式は備えた。

そして意気は昂揚している。

オルソラ達が泊っているホテルに侵入するのに１０分、奪取に５分、渦まで戻るのに１５分。

作戦決行は、午後１１時３０分。

後は、作戦決行の時が来るのを待つだけだ。

しかし、その作戦は唐突に中止を迎える。

――――貴殿らを見極めに参った。

少し前に聞いた、武人の言葉によって。

## そのごじゅうなな　いっぽう、そのころ（後書き）

原作にあったいろんな人のいろんな思惑はカットです。原作読んでくれ、原作。（宣伝）

## そのごじゅうはち　とうそうちゅう！（前書き）

あれ？オルソラ編、終わらなかった！

## そのごじゅうはち　とうそうちゅう！

「あっはっはっは！！本当、お前は何者なのよな！？」

それを聞いた時、天草式教皇代理・建宮斎字は笑った。

普段から軽薄そうな口調で笑みを絶やさない男であったが、心の底から笑ったのは久しぶりである。

どうしてこのような『悪だくみ』が出来るのか。どう考えてもこの男、一般人では無い。

とはいえ、『ただの門下生である』と言われれば、追及する気にはならない。

遠まわしに「追求するな」と言っているのだろうから。

どうやら、オルソラから追われている原因を聞いたらしく、その内容は理解できないものだったが、ローマ正教よりかは天草式の方がまだ信用できそうなので、天草式に捕まったふりをしてローマ正教の出方を見ると言うのだ。

渡りに船とはこの事である。

こちらもローマ正教の『やり方』を知っている為、奴らの鼻を明かす事が出来るこの作戦に、乗らないと言う事はありえなかった。

それに、この男の後ろにオルソラ＝アクィナスも伴っているのだが、監視の目があったはずだ。

監視の目を単純な力を以って『消す』のではなく、どうやったかは知らないが『欺いて』ここまで来たのだ。それも誰にも察知させずず。

その背景には暗闇に乗じて光学迷彩を施した二人が、堂々と『渦』

という拠点に向かっていると思われる天草式について行ったというものがあるのだが、それは教えていない。

故に建宮はこの白髪の男の力は本物だと思う。オルソラと共に行動しても、２人ともバレないようにここまで来られたのだが。

とはいえ前述した通り、『超能力』の恩恵があったのだが、どうやらバレていないらしく、一方通行もその事に対しては安堵する。

「……そォだな、お前も俺らの事を信用してはくれるみてェだから、俺も信用の証としてもう演技止めるわ」

やはりというか何と言うか、先程までのは自身の立ち場（その詳細は流石に教えられないそうだ）を隠す為の演技だと言う。

驚愕の真実とはこの事か。あまりにも唐突の事に、一同はピシリと固まり、オルソラの噴き出した声だけが鳴り響いた。

・・・

「はっきり言って、俺はローマ正教が信用できねぇ」

誰も居なくなったテントの中、作戦開始まで１５分と言ったところだろうか、上条当麻はステイル＝マグヌスに口を開く。

「……君のその発言、『２０億人の信教徒を抱えるローマ正教』を敵に回す発言だよ」

ステイルの言葉は、諌めるような内容であるが、その口調は非常に楽しげで、どこか同意しているように感じられた。

「ステイル、お前だって自分で言ったじゃんか。

『たった1冊の魔道書の為に、10万3千冊の魔道書を頭に納めたインデックスを危険にさらすのはおかしい』ってさ」

それはすなわち、『法の書』に10万3千冊の魔道書よりも価値があると言っているようなものだ。

とはいえ、そんな事はありえない。

もしそうならば、インデックスの存在に価値は無いからだ。

上条の「インデックスに価値は無い」という言葉にステイルはピクリと反応を示すが、上条がそれを本気で思っている訳ではないと言う事は分かるので、上条の言葉を頭で噛み砕きながら、次の言葉を待つ。

「だけどさ、実際にはインデックスは最前線にかりだされてる。別に『渦』とか言うのの特定と指示なら、後ろでもできるのに」

――なら、何で俺やステイルを後方に追いやって、インデックスは最前線に居る？

そこまで聞けばステイルも理解出来る。

「……本当に君は上条当麻かい？君にそんな客観的な目線で物事を考えられるとは思えないんだが」

「失礼な、実際にこうやって考えてるじゃん。

……と言いたいとこだけど、実際には知恵袋が居る」

『白髪の男』、あれ俺の友達なんだ。

「……はっ！！それじゃあ何か？これから始まるだろう茶番劇は、全てその男の仕組んだ事なのかい？」

ステイルは、先程までは『ローマ正教』を親の敵のように、その言葉を口にするたびに憎々しげな表情を浮かべていたのだが、今はその『ローマ正教』に同情した。

数の暴力は1の才能よりも恐ろしい、とステイルは言ったが、一部訂正。

数の暴力は1の才能よりも恐ろしいが、そこに『知略』が介入したら話は別だ。

「まあ、そう言う訳でインデックスの安全は、俺達が上手く立ち回れば保障されるが……」

「……こんな話聞かされて、どうしてこの僕が黙って見ていられると思うんだい？

むしろ、どうしてこんな事僕に話そうと思ったね。裏切りは頭に無かったのかい？」

「そうだな、お前も俺の事認めた訳じゃないだろうし、俺もお前の事認めた訳じゃない。

だけどお前の『インデックスに対する思い』を信用……いや、信頼したからこそ、ここまで話せたんだ」

あれを味方につけて、得はあれど損はありえねえぜ？と、上条は自身の友人を得意気に自慢した。

・・・

この茶番劇の裏側を一方通行から教えられたのは、およそ1時間前。

ローマ正教らが作戦内容を煮詰めている頃に連絡が来たのだ。

『やっぱローマ正教は駄目だ。下手したらお前やインデックスも消す気でいやがるぜェ？』

信じたかったのだが、会って間もないローマ正教よりも、一方通行の方が信頼できる。

更に、その言葉は頭ごなしにローマ正教を否定するのではなく、具体的な根拠もあったし、実際にオルソラ＝アクィナスとも電話越しながら話して確信を持った。

オルソラは、ただ魔道書を何とかしたかっただけなのだ。

人々を不幸にしかしない魔道書を。

ただそれだけの事なのに、ローマ正教は一人の人間に力を持つ事を恐れたのか、オルソラを異端として消すつもりらしい。

あわよくば、『禁書目録』というローマ正教の手中に無い重要な存在すらも。

ところで、上条当麻がここに居る訳は、インデックスにある。

彼女を守るために、ここまでやって来た。

それに害を為そうと言うのならば、ローマ正教がどういう思惑で、各個人がどういう心持ちで動いていようが知らない。

天草式がどういう思惑で、何を思ってオルソラを助けようと動いていようが知らない。

絶対的な正義なんて無い。

絶対的な悪なんて無い。

ローマ正教から悪と罵られようとも、天草式が正義を唱えていようとも、そんな事は知らない。

自分達が絶対に正しいと思うなら。

――――まずはそのふざけた幻想をぶち殺す。

一方通行との通話を終えると、上条当麻は激情を抑えるかのように、そのまま圧し折るかのような勢いで、携帯電話を握った。

上条には既に、「誰もが笑って終われるハッピーエンド」という幻想は霧散して、その考えは心に無い。

自身の影と相対した時に。

自身の影の苦しみを見た時に。

今回も、インデックスが優先順位の最上位に来ていたと言うだけだ。

とはいえ、ローマ正教の位置に誰か別の――――例えば土御門元春

等が居たら、どちらも守る為に必死で走りまわっただろう。
今回は、インデックスや一方通行に味方する天草式と、たまたま利害が一致しただけだ。

兎にも角にも巡り合わせが違えば、ローマ正教の思惑に乗って天草式と敵対してしまっていたかもしれない。

何せ自分達を騙す為か知らないが、日中手持無沙汰だった時、色々とご高説垂れていたのだから。
今となってはあのような滑稽な演技など馬耳東風と言った具合に気にしないだろうが、一方通行がいなければ間違いなく騙されていただろう。

（まあ、そんな仮定に意味が無いのは、よく知ってるけどな）

落ちつきを取り戻した上条は、誰も居ないテントの天井を眺め、今後の動き方に関して思いを馳せた。

・・・

そして、各人の思惑が交錯し、舞台は整った。

・・・

演目『茶番』
主演『ローマ正教、天草式十字凄教』
助演『オルソラ＝アクィナス、一方通行』
演出『一方通行』

こんなものだろうか、今回の茶番劇のキャスティングは。

『パラレルスウィーツパーク』に、ローマ正教・アニェーゼ＝サンクティスの率いる部隊のおよそ8割が集結し、息を潜めている。
残りの2割は桐条グループの学園都市に、オルソラを捕らえに行ったであろう天草式を追わせていた。

だがしかし、天草式十字凄教所属『47名』は『堂々と』一同の目の前に現れた。

「くっく、いかんよなあ。何やっとんのよローマ正教諸君。
君達がのんびり天幕で紅茶すすっとる間に、仕込みは全て終わってるぞ？」

建宮斎字は2階建の建物の屋上で、自身の武器、フランベルジェを部隊を率いるアニェーゼに向けて、笑う。
その後ろには両手を縄で繋がれたオルソラが居た。

その事実に驚きを隠せない、と言った具合に表情をゆがめたアニェーゼは、動揺を隠すかのように建宮を睨みつける。

「それで？わざわざ私らのとこに現れてどうしてーんですか？
ひょっとしてオルソラは返すから天草式は許してください、とか甘ったれた事でも？
そうですねえ、土下座してこの卑しい犬共をお許しください、位言えないと駄目ですが」

「いやあ？『負け犬』どもの面を拝みに来たのよなあ、いやあ愉快愉快！
負け犬も数そろえりゃそれなりに威圧感出るもんだなあ！」

ローマ正教の一同から、「ブチブチッ」と何かが千切れた音が聞こえた。
おお怖い怖い！とか言いながら踵を返す建宮。
戦闘前の舌戦の軍配は、建宮に上がった。
「追え！！今すぐに！！あのクワガタをここまで引っ張って持って来い！！
あのふざけた髪形丸刈りにしてやります！！」
アニェーゼの悲鳴のような叫び声を皮切りに、シスター達は動き出した。
それとは別に、別動隊として『渦』を探すシスターの部隊も、インデックスに引き連れられて行動を開始する。
そんな一同の背を見つめながら、上条当麻とステイル＝マグヌスはその場に立ちすくんでいた。
監視の為か知らないが、幾人かのシスターと共に。
「さて、来るかもわからない『聖人』を待つのもつまらないし」
ステイルは気だるげに上条に話しかける。
「そうだな、とりあえず俺らは交代しながら休むか」
「あ、あのあの、そんな気を抜いていては……」
気弱そうなシスターが、そんな2人を諫めようとするが、2人は聞く耳を持たず近くにあるベンチへと向かって行ったのだった。

・・・

戦況は一方的だった。

圧倒的に、天草式が押されていた。

それもそのはず、『隠密性』に長けた天草式が、最前線に出てローマ正教と相対せばどうなるか。

そんな事は火を見るよりも明らかで。

みるみるうちにその数を減らしていった。

ローマ正教は、そんな彼らを一人残らず捕えるべく、散り散りになった天草式の面々を、１人に対してフォーマンセルで追う。

そんな戦況を、パラレルスウィーツパークの中でも一番高いと思われる建物の屋上で悠々と眺める影が一つ。

その影は、ある一点――――アニェーゼ＝サンクティスの前にひっ立てられた建宮斎字と、シスターに引っ張られるオルソラ＝アクィナスを見つけると、その屋上から飛び降りて行った。

・・・

「それで、なんか申し開きはありますか？」

アニェーゼ＝サンクティスは勝ち誇った表情で、グルグルと縄に縛られた建宮斎字を見下す。

「申し開き、とは？」

何のことやら、と言った表情でとぼける建宮を、近くに居たシスターが思い切り蹴り飛ばした。

「黙りなさい、神の敵。あなたは馬鹿みたいに質問に答えていれば良いのです」

背の高いシスターは、汚らわしい物を見るかのような目で建宮を見て、蹴り飛ばした足を見て、勝手に頭に血を登らせていく。

「ああ、やってしまいました。蹴りやすい高さにあったとはいえ、このような汚らわしいものに靴越しながら触れてしまうなど最悪です。

この靴はもう使えませんね、シスター・アニェーゼ。後で新しいものの用意をさせてもらってよろしいでしょうか」

「構いませんよ。それより……」

縄に縛られた状態で蹴られた為、崩れた体制を元に戻せない建宮の頭を思い切り踏み抜き、踏みにじる。

建宮のうめき声だけが、そこに響き渡った。

「『白髪の男』、あれはどうしちまったのですか？」

ひょっとしたらあの桐条と繋がっているかもしれない、そんな奴に手を出したりはしていないだろうか。

そんな不安が頭をよぎるが、とにかくこの男から情報を引きださねば。

アニェーゼはイライラとしながら、建宮を蹴る。蹴る。蹴る。

「ガフッ……出してねえよ、あいつはぐっすりオネムなんじゃねえのよな？
うちの睡眠薬は中々即効性と持続性に長けているからな……」

それだけ言うと、建宮は力尽きたように倒れる。
天草式の面々は、部隊に追われているため、建宮の救出は望めないだろう。

アニェーゼはそのように考え、建宮を捨て置き、オルソラを連れて何処かへと向かって行った。

・・・

「よォ、随分と手ひどくやられたなァ」

「はっ、こんなもん……我らが女教皇様の受けた『痛み』に比べりゃ……大した事ないのよな」

「なンだァ？女教皇様とやらは大けがでもしてンのか？そりゃ御愁傷様」

「あの御方が、御怪我などするはず無いだろう……
我々が弱いせいで、あの御方はいつも心を痛めておられたよ」

「はン、心の痛みに比べりゃ肉体の痛みなど、ってかァ？オルソラ

みてェな事言いやがって。
魔術師ってのはどいつもこいつもドMの集まりですかァ？」

「うるせーのよな……」

「で、あいつらの行く場所、大体分かってンだろォ？」

「そうだな……確か……この近くに……オルソラの功績を形にする為に……
『オルソラ教会』ってのが……建設中なのよな」

「あァ？あいつそンな偉いのかよ、俺不敬罪とかでしょっ引かれねェだろォな？」

「そう思うなら、さっさとこの茶番に幕を降ろすのよな。
土下座してこの卑しい犬をお許し下さい、とでも言えば許してもらえるんじゃないか？」

「バカ野郎、男が土下座するのは脱童貞をお願いする時だけだってンだ」

「……お前さんには誇りが無いのか？」

「冗談だ」

「知ってるのよな」

「張り倒す」

「その怒りをローマ正教にぶつけたらいいのよな」

「分かったのよなァ」

「……語尾を真似するンじゃねェのよな」

「お前こそ」

建宮斎字がまだ元気で、動ける事を確認すると、一方通行はニヤリと笑う。

縄を解き、白髪はふらつくクワガタ頭の体を支えながら、２人は宵闇に消えて行った。

・・・

「あぐっ！」

オルソラ＝アクィナスは、建設中の自身の名を冠する教会まで連れて来られ、その床に転がされた。

どう見ても、どう考えても、およそ仲間に対する扱いでは無い。

アニェーゼ＝サンクティスは、冷たい目でそのオルソラを眺めつつも、連れてきた１０人の部下達に簡易的な結界を張るように準備をさせる。

他の部下達がここに戻ってきた時に結界を完成させ、誰にも入れなくする為に。

「……ったく、手間ばーっか掛けさせやがって。私やシスター・ルチアが汚らわしい罪人に靴越しですが触れちまったんですよ？

どうしてくれるんですか？つーかこっちもあんたの遊びにつき合ってる暇はねーんですよ？」

縄に捕らえられたオルソラを、ボールを蹴るかのような気軽さで、思い切り蹴る。
先程の建宮斎字を相手にした時のように、何度も。
ボールならポーンと飛んで行く事だろうが、相手は人間。
鈍い音が鳴り、オルソラのくぐもった声が、建設中で色付けのされていない教会内に響く。

「死の淵に追い詰められて、最後にすがったのが小汚い島国のちっせえ組織の東洋人とはね！
あんなポークビッツよりも汚くてちっせえもんに自分を売るなんて、とんだ売女ですねえ！！
駄目ですよ、仮にもローマ正教徒のあなたがあんな獣に命を預けるなんて！！」

心底馬鹿にした口調で、オルソラをなじる。
しかし、オルソラの表情は変わらず微笑みを浮かべるばかりだった。
そんなオルソラを見て、アニェーゼの表情は歪む。

「……なに、笑ってんですか？今の状況わからないほど、あんたは馬鹿になっちまったんですか？」

「いえ……あまりにも滑稽だったものでございましたから……」

女性の力とは言え、全体重を乗せての蹴りを何度か受けたオルソラに、そんな台詞を吐く余裕があるとは思えない。
なら、何故そんな台詞を実際に吐いているのか――。

「そこまでにしてもらおうか」

振り返ると、そこにはステイル＝マグヌスと上条当麻が居た。

「なんであんたらがそこに居やがるんですか！？」

監視のシスターはどうした、と声を荒げる。

しかしステイルは事もなげに、

「うん？彼女らには寝てもらってるよ？心配しなくていい、こう見えて紳士だから怪我などはしていないよ」

と言い放った。

あり得ない。イギリス清教の人間が言っていい台詞では、ましてややっていい行為ではない。

明らかな越権行為。内政干渉と見られる行為を、現在進行形で行っているステイルに、アニェーゼは笑う。

「は、はは。あはは！あんた何してくれやがってんですか！？分かってますか、その意味が！私らローマ正教に立てついたという意味が！！」

「君こそ、分かってるんだろうね？『我らがイギリス清教の庇護を得た』オルソラに、手を出すという意味が」

あらかじめ用意された答えを、あらかじめ予測されたタイミングで言い放つように、ステイルは即答した。

「なっ……！」

何を、と言う前に、オルソラが胸元のアクセサリーを示しながら、口を開いた。

「こ、れ……イギリス清教の、十字架なのでございますよ……貴方様の言う『白髪の男』に掛けて頂きました……」

震える手で、愛おしそうに十字架を見せるオルソラに引き続き、ステイルが煙を吐きながら言葉を続ける。

「そう言う事だ。何処の誰だかは知らないが、ご丁寧にイギリス清教の庇護下に入るような事をしてくれるとはね。

ひょっとしてこれは、天の思し召しと言うやつでは無いのかな？

オルソラ＝アクィナスはイギリス清教の下に来る、と言うね。

ああ、そこの素人にも同じような十字架を持たせているから、インデックスと上条当麻、オルソラ＝アクィナスに手を出すと言う行為が、イギリス清教に喧嘩を売っていると言う事になると、理解できたかい？」

それこそが、オルソラがあの時一方通行に十字架をかけてもらった理由。

たまたまあの十字架がイギリス製のものだったから出来た、突拍子もない作戦。

いや、作戦と言うよりは、詭弁だとか、言い訳だと言った方が正しいだろう。

しかし、それだけで十分だ。

オルソラ＝アクィナスの立ち位置は、ローマ正教から逃亡した時点で、非常にあやふやな立場であった。

そんなオルソラが、簡易的とはいえイギリス清教の洗礼を受けたのだ。

それも魔術サイドの人間ではなく、逃亡先でたまたま出会った、立場も地位も不明の一般人に。

いくらローマ正教とはいえイギリス清教の判断無しに、ローマ正教の判断だけで彼女に手を出すなど、ましてや異端審問にかけようなど出来るはずがない。

「オルソラが、どこの所属の人間なのか、『時間をかけて』審議をすべきではないのかい？」

それに、と付け加えステイルの表情は一変する。

先程までの楽しげにアニェーゼを追い詰めていた物とは違い、怒りに身を委ねたかのような表情に。

「よくもまあ、あの子に手を出そうとしてくれたものだ」

そう言うと、教会の入り口から、白い修道服のシスターが現れる。

「びっくりしたかも。まさかどさくさにまぎれて私を亡き者にしようなんて」

まあ、今までもこれからも、そういう人生を送る事になるんだろうけど。と、ステイルをジトっとした目で見つめる。

ステイルはそっぽ向いて煙を吐いた。

「まあ、そう言う事だから、今日のところは諦めて帰ってくれない

か？」

オルソラに手を出した君達に、彼女を預けるなんてできないし、無駄な戦闘は君達も嫌だろう？と、つまらなそうに言う。

「は、はは」

アニェーゼは壊れたラジオのように、笑い「音」をあげる。

「あは、あははは！！馬鹿じゃねーですか！？こっちは部隊を動かしてるとは言え、戦闘員が１０人に、今は桐条グループに向かった部隊が４０人もこっちに向かってんですよ！？

あんたらをここで亡き者にしたらそれで終わりです！！」

数の利は、確かにローマ正教にあった。

しかし、それがどうしたと言わんばかりにステイルは答える。

「全く、２５０人も居た部隊が、『戦いもせず』ここまで削られている事に、どうして不思議に思わないんだい？」

ステイルのその言葉に、心臓を鷲掴みにされた気分になった。

天草式にしてもそうだ。戦闘らしい戦闘もせず逃走を続けているらしい。

成程、『隠密性』に長けた連中の事だ。「逃げ」に集中すれば４人１組で向かったところで捕まえられないだろう。

アニェーゼは、その事実を「ローマ正教に恐れを為して逃げた」等と軽い気持ちで考えていた。

しかし、それが仕組まれたものだったら？

天草式十字凄教の４７名を４人１組で追うのに、１８８名。
インデックスと共に『渦』を探し、あわよくばインデックスを消すのに、４名。
ステイルと上条の監視に、８名。
アニェーゼと共に動くのに、１０名。

そして、オルソラ＝アクィナスと白髪の男が潜伏していると言う（実際にはどちらも居ないから無駄なのだが）学園都市に向かうのに、４０名。

ローマ正教は、図らずも戦力を分散させられてしまったのだ。

「どう、いう……」

「この馬鹿みたいな茶番劇は、初めから仕組まれたようなものなんだよ」

今まで口を閉ざしていた上条は、簡潔に結論を述べた。

## そのごじゅうはち　とうそうちゅう！（後書き）

次回……次回でケリをつける……

## そのごじゅうきゅう　それはやおいなけつまつで（前書き）

戦い？誰がするか戦闘描写難しいわばかばか、だめぇ～！

## そのごじゅうきゅう　それはやおいなけつまつで

「貴殿らを見極めに参った」

一方通行は、いつでも戦闘できる！と言った状態の天草式の面々の下へと向かっていた。オルソラ＝アクィナスを伴って。

「「な！？」」

天草式の面々は驚きを隠せない。

なにせ最優先である目的たるオルソラがそこに居るのだから。

「……見極めに来た、とはどういう事なのよな？」

天草式十字凄教教皇代理・建宮斎字はフランベルジェを、真意を測るかのように一方通行へ向けながら尋ねる。

「オルソラ殿から事情は伺った。羅馬（ローマ）正教とやらが、オルソラ殿に偽の罪をなすりつけ、

あまつさえ本来同門の者を殺生する事は許されない教会内で、異端審問にかける事でそれを為そうとしていたところを、貴殿らが救ったとな」

事情を知らなかったとはいえ、誠に申し訳なかったァ！！と、一方通行は頭がめり込むのでは、と言う程の土下座した。

あまりに見事な謝罪体勢に感銘を覚えた建宮だが、すぐに気を取り直して口を開く。

「い、いや、とにかく分かってもらえたらそれでいいのよな……

それで、見極めに来たってのは……？」

とはいえ、動揺を隠せはしなかったのだが。

「貴殿らの本心を知りたい。『法の書』とやらには興味はなく、とにかくオルソラ殿を助けたい一心か否か」

真っすぐな視線が建宮を射抜く。

嘘は許さないと言ったその視線に圧され、建宮は言葉を紡ぐ。

「助けたいと思うのに、法の書だとかなんだとか、理由がいると思うのか？」

それが、天草式の意志。

救われぬ者に救いの手を。

その意志は、今も昔も――――これからも変わらない。

「……そうか」

幼少時から悪意に晒されてきた一方通行が、建宮の言葉からは悪意を感じられないと思うのだから、それに間違いは無いのだろう。

一方通行は納得したように呟いた。

「なら、作戦がある。乗るか乗らないかは貴殿ら次第だ」

一方通行は有無を言わさず、語り始めた。

ローマ正教を分散させる事。

戦力を散らしたところでオルソラを連れた建宮が捕まる事。
恐らく、弱小勢力の頭領の首などどうでもいいだろう。何より戦力が散っている今、時間の無駄は避けたいところだ。
故に建宮は放置され、オルソラはローマ正教に捕まるはずだ。運が悪ければ建宮は始末されるかもしれないが。

そして本当にオルソラを助けたいだけなら、それで終わりだろう。
とはいえ、恐らくそうはならないと思われる為、オルソラの首には『イギリス清教の庇護を得られるような』、簡易的な洗礼を行ったと言う事。
すなわち、ローマ正教がオルソラに手を出した時点でイギリス清教が動く、と言う事実をローマ正教に思い知らせる事。

しかし２５０人と言う数を以ってすれば、そんな意見、丸ごと押し潰して隠蔽できるだろう。

故に分散させる。
天草式の、地の利を以って。学園都市に、オルソラがいると思わせて。

その数を減らして、「対等な」対話に持っていく為に。

後はその事実を隠す為に、ローマ正教に挑発して頭に血を昇らせる程度に思考力を奪えば良い。

「一つ いいか？」

そこまで聞いたところで、建宮は一方通行に尋ねた。

「なンだ？」

「『イギリス清教』を使うのはどういう訳だ？」

「今、英吉利（イギリス）清教なる教会の人間が一人か二人、あちら側についてる。信用できる者達だ」

「……それを信じろと？」

「故に乗るか乗らんかは貴殿ら次第だ」

どうしてイギリス清教の人間とつながりがあるのか。

気になる事は山ほどある。もちろん白髪の男の正体も。

だがしかし、この男の力は本物だとも思っている。

建宮はこんな『悪だくみ』を考える一方通行に、笑った。

・・・

「それは……どーいう……」

アニェーゼ＝サンクティスは作戦の全貌を明らかにされ、恐怖した。

数の利、力の差、統率力……地の利はあちらにあるとは言え、その他は全てこちらが勝っていると言える。

その慢心をつかれたのだ。それも互いに顔も合わせた事も無い相手に。

まず、統率力。

これがある、と言う事は優秀な上官がいると言う事だろう。

しかし、裏を返せば、その上官の判断を仰がねば動けない。分断され、自身の判断のみで動かねばならない状況に、慣れていなかったのだろう。

何せ、「上官に命令された」という名目さえあれば、何も考えずに動けるからだ。

責任など何もない。

個など存在しない。

そんなローマ正教の特性を、逆手に取られた。

恐らく、天草式を追っている部隊はこう考えているだろう。

「戻るべきか、追うべきか」と。

その逡巡が、天草式達に逃げる隙を与え、ローマ正教が天草式を捕らえられないという悪循環へと導かれる。

そして、学園都市郊外へと向かった部隊４０名。

こちらは天草式だけではなくオルソラと白髪の男の姿が確認できなかった為、指示を仰ぐべくすぐにアニェーゼの下へ戻っていた。

その報告を受けていたからこそ、アニェーゼは気を確かに保っていられた。

２５０とは行かなくても、５０も居れば倒せると。口さえ防げば全ておじゃんだ、と。

だがしかし、その４０人を率いてやってきたのは、２人の男女だった。

「――君達、ここが『桐条建設』の傘下にある建設会社が建設している建築物だと言う事を理解しているのか？」

「あー、無駄な抵抗はやめるのよなー」

・・・

神裂火織はビルの屋上に佇んでいる。
辺りは暗闇に包まれ、人の気配を感じさせない程静寂であった。
目線の先、そこには建設段階のオルソラ教会があるのだが、その教会も例外ではなく、無音。

優しく吹き抜ける風だけが、ビルの周りを彩る。

常人なら、風の音だけを耳に捉えていただろう。
しかし、『聖人』たる神裂の聴力は、かなりの距離を保ったオルソラ教会の中から発せられる声を聞き漏らさず、神裂はただただ会話に耳を傾けていた。

天草式がオルソラ＝アクィナスを誘拐したと言われるこの事件。
神裂火織は天草式を擁護する為でも、それに敵対するローマ正教を斬る為でも無い。

ただ、全ての結末を見届けたかっただけだった。

天草式が『変わってしまった』のだとしても、ローマ正教の『裏のやり方』に嵌められただけだとしても、手出しをするつもりはない。
彼女は、既に『元』女教皇であり、イギリス清教所属の人間なのだから。

だが、その心は天草式に、「今も昔も変わらずにいて欲しかった」と言うもので会ったのだが。

それ故に神裂は、心底安堵した。

天草式は、今も変わらず理不尽な暴力を受ける人間に、手を差し伸べるべく動いていたのだから。

ただ、ローマ正教の『裏のやり方』で虐げられそうになったオルソラに、手を差し伸べただけなのだから。

その真意を確認して、神裂は昔を懐かしむように、眼を細める。

最早戻れない場所。

戻れないとはいえ、変わらずそこに在るだけで、安心できる場所。

触れられないとはいえ、いつまでも大切にしたい美術品のように、どこまでいっても変わらず在ってほしいと思っていた場所。

その場所は、神裂の望み通り、変わらずそこに在った。

ローマ正教を相手にして、無傷で相手を完封している様子を見て、無事に終わりそうで良かったと思う。

すると、そんな神裂の背後から隠そうともしない足音が一つ。

「いやー、ねーちん感極まるってとこですかい？

天草式がねーちんの意思の下、オルソラを守る為に動いてただけってことがわかって」

「……土御門ですか、結局そちらの首尾はどうなんですか？
『法の書』を横から掠め取る、と色々画策していたようですが」

神裂は、そんな土御門元春に一目も置かないで、引き続きオルソラ教会に目を向けている。
土御門もまた、静まり返ったオルソラ教会に目をやり、話を続けた。

「上々……なわけないですたい。何せ『法の書』はバチカンの奥の奥に安置してあるんだろうしな。
こっちにあるとか言う『法の書』はダミー。天草式に罪をなすりつける為だけに存在する偽書ってとこだろうにゃー」

ま、ローマ正教だしそんなとこだろうと思ってたけど。と興味なさげに土御門は言う。

この土御門と言う男、イマイチ言う事が嘘か本当か分からない。
ひょっとしたら先程の言葉が嘘で、実際には『法の書』を手にしているのかもしれないし、本当に偽書なのかもしれない。

ようするに土御門は嘘つきなので、いちいち真に受けていたらキリが無いと言う事だ。

そんなわけで神裂は、土御門の報告を話半分に聞き、やはり引き続きオルソラ教会を見つめている。

「それで、満足かい？」

「ええ。十分……いえ、二十分にも三十分にも満足ですね。
彼らは今も昔も変わっていませんでした」

「ん、そりゃよかったですたい。でもまあ、カミやんだけじゃなく、もう一人恩を作っちまったみたいだけど」

土御門は『法の書』よりもそちらの方に興味が行っているようで、先程の業務連絡よりも楽しげな表情を浮かべていた。

「彼は……一体何者ですか？」

「あれがシェリーの暴走を止めてくれた奴ぜよ」

シェリー＝クロムウェル。下手したらイギリス清教と学園都市の全面戦争になりかねない程学園都市で暴れた女。

彼女を止めた超能力者が、ここまで戦局を裏で操作したと言う。

「しかし、下手したら超能力者と魔術師が手を組んだと、双方から糾弾されかねないところでした」

そうなった場合、天草式だのローマ正教だの言っている場合ではなくなる。

それこそ『法の書』を学園都市が奪っただの、『超能力者』をローマ正教が奪っただの、その間に板挟みされた2人がどのような扱いになるか、想像するに難くない。

「だからこそ、上手く立ち回って（？）裏方っていう難しい役柄をこなした一方通行には、感謝してもしきれないんじゃないんかい？」

裏方って本当報われないからにゃー。と、裏方の厳しさを知っている土御門はさめざめと泣く。

とはいえ本気でそう思っている訳ではない、と言う事は神裂もよくわかるのだが。

「そそ、そ、それは……そうですが」

真に受けていた。

上条当麻に関しても、『御使堕し』やインデックスの事に関しても礼を言っていない。

その上今回も巻き込んでしまった。

それだけでも借金は山ほどあると言うのに、更に別の人間も巻き込んでしまった。

それもローマ正教、天草式共にほぼ無傷で終わらせるという結果をもたらすと言う、『聖人』たる神裂ですら出来ない戦果……いや、殆ど戦っていないから、結果だ。

むしろ、どうやったらあのように戦わずして場を納められるのか、教えてもらいたい程である。

「まあ奴も、ここまで綺麗に事が運ぶとは思っていなかっただろうにゃー。

例えば、もう少しローマ正教の面々が『個』を持っていれば、天草式など放っておいてオルソラに集中しただろうし。

例えば、オルソラの立ち位置を保障してくれるステイルやインデックスが裏切れば、この作戦はご破算だし。

そして何より――」

オルソラ教会をチラリと一瞥する。

そこには変わらず建設中の教会が見えるだけで、何も変わらない。

「――『桐条美鶴』の協力が得られなければ、５０人のシスター

達と戦闘になっていただろうしにゃー」

・・・

「まず、ここがどこだか分かっているのか？」

桐条美鶴は、敵も味方も関係無しに、武装している面々に注意をする。

「ここは日本だ。彼女らもそうだし、君達の国ではどうだか知らないが、郷に入っては郷に従え。
銃刀法違反で取り締まる権限は私には無いが、注意くらいはさせてもらうぞ」

「あ、そりゃすまんかったのよな。てっきり何も言わないから持っていていいのかと」

美鶴に言われるがまま、建宮はフランベルジェを放り投げた。

「あ、あんたは誰なんですか！？」

突然自分の部隊を引き連れ現れた女に、言われるがまま武器を捨てる建宮に、アニェーゼ＝サンクティスは叫び声をあげた。
自分の部隊が、何でも従順に命令に聞く部隊が、一人の女につき従っている。

あり得ない光景が、そこにはあった。

「ああ、済まない。自己紹介がまだだったね」

チラリと上条当麻やステイル＝マグヌスを見やりながら、続ける。

「桐条美鶴、桐条グループ現総帥だ。話は大体聞かせてもらっている。

問題は『オルソラ＝アクィナス』の現在の立ち位置と言う事だそうだが……

イギリス清教とローマ正教が協議を終えるまで、僭越ながらこの私が彼女の身元保証人となろう。

つまり、今から彼女に手を出すと言う事は、桐条グループを敵に回すと言う事だ。

何、君達の協議が終わり次第彼女はどちらかへと返還しよう。なんなら、この場で誓約書でも書こうか？」

そう、ローマ正教の部隊が彼女に手を出せなかった理由。

桐条美鶴が、桐条グループの総帥を『名乗っていた』からだ。それも高級リムジンの後部座席から降りて来て。

確かに、これが嘘なら『桐条グループを騙った』として、消しても波風はたたないだろう。

ただ、本物なら？

洒落にならない結果になるだろう。

故に判断を仰がなければならない、『上官』に。

自分で判断する事に慣れていないから。

いや、慣れていたとしてもこれを判断する事は難しいだろう。

桐条美鶴から発せられる威圧感が、総帥としての芽が芽吹いている。

学園都市の郊外とはいえ、桐条グループのお膝元で騒げばこのような事態になってもおかしくは無い。
美鶴の言葉に、アニェーゼの部隊は従わざるを得なかった。

この時点で、誰が一番上に居るのかは、明白。

「さて、今日のところは双方ともに引き下がってはくれないか？
ここの状況は、いつでも君達の本部に伝える事が出来るのだから」

権力って怖い。
上条当麻は、美鶴の言葉に従って武器を捨てる面々を見て、そう思った。

・・・

後日談と言うか、今回のオチ。
オルソラ＝アクィナスが解読したと言う『法の書』。
１０万３千冊の魔導書を持つインデックスに、オルソラが導き出した解読法を伝えたところ、『その解読法は間違いで、それは第３章４節にある序文をリードミスしてるかも』との事。

結局、オルソラの思いは空回りで、おそらくローマ正教は、オルソラを生贄だったり、見せしめにでもしたかったのだろう。『ルールを破った人間の末路』として。

とはいえ、そのような非人道的な事を為そうとしました。などと馬鹿正直に声明を発表できるはず無く、ローマ正教の言い分では「オルソラ＝アクィナスに手を出すつもりはなく、アニェーゼが率いる部隊の独走」らしい。
部下の暴走を止められない上司とは如何なものかとは思うが、天

草式もローマ正教も怪我をしたのは互いに一人ずつ。

そしてオルソラ＝アクィナスは今回の件でイギリス清教の洗礼を受けたとして、その下に帰順。

天草式の面々もイギリス清教の傘下に加わるそうだ。

と言うのも、彼らは天草式十字凄教・元女教皇神裂火織が属するイギリス清教に参入したかったらしく、彼らが背負う象徴（シンボル）には、イギリス清教の十字架を織り交ぜてあるようだ。

「結局、彼女らは上の指示に従った結果、その責任を負わされる形になったわけだ」

バサリ、と届けられた書類を自身の机に放り投げ、ジトっとした目で目の前の男を見やる。

「全く、君が来て以来忙しさに拍車をかけているぞ」

桐条美鶴は、余計に仕事が増えたと愚痴るものの、

「そォいうな。上条と顔合わせも出来たし、今後について軽く話し合えただけでも良しとしよォじゃねェか」

一方通行は悪びれもせず言い放った。

戦後の処理は非常にスムーズで、夜が開ける頃にはこの報告書が届けられたのだから驚きである。

どうやらイギリス清教もローマ正教も、ある程度は「勝った場合」や「負けた場合」の結果を予測していたらしい。

今回はイギリス清教が勝ち、ローマ正教が負けたというパターンだが。

「それで、君はいつまでここに滞在する気だ？」

仕事手伝ってもらえるのは非常にありがたいから、いつまでも無償奉仕してくれ。と言う意志を込め一方通行に尋ねる。

「あァ？今回の借りを返したら帰るっつゥの」

今回、桐条美鶴を動かした一言。

「仕事手伝ってやる」

一方通行に、試しとして桐条エレクトロニクスの予算案を見せた所、美鶴と同じ意見を上げただけでなく美鶴すら気付かなかった改善点を上げて見せた。

これにより、あの晩桐条美鶴は桐条グループの当主として事態の収束に動いたのだ。

とはいえ人の生き死にに関わるとだけ言えば損得関係なく動いたかもしれないが、一方通行がそれを許さなかった。

何にせよ全てが終わった後、オルソラ＝アクィナスはステイル＝マグヌスと共にイギリスへと向かい、上条当麻はインデックスと共に帰り、そして一方通行は桐条美鶴の仕事を手伝う。

それだけの事だった。

「ンな事より、『召喚器』の件。頼むぜマジで」

「ああ、分かっているさ」

2人の会話はそこで途絶え、黙々と新たな書類と睨めっこを再開するのだった。

その『召喚器』の件が、後々重大な結果をもたらす事になるとは、両者ともに分かるはずも無く。

**そのごじゅうきゅう　それはやおいなけつまつで（後書き）**

「私の出番はこれで終わりでございましょうか？」

「最近の御坂とか９９８２号よりは目立ってたからいいンじゃねェの？」

「ところで、学園都市にはどうやって行けばよろしいのでしょうか」

「そォだな、今度案内してやるよ」

「そうでございますか、楽しみにさせていただきますね」

## そのろくじゅう　まくあいてきなおはなし（前書き）

大覇星祭前のひと時。

## そのろくじゅう　まくあいてきなおはなし

「もう！！なんで1週間もどっか行ってるのよ！？」

御坂美琴は激怒した。必ず、かの安如泰山（あんにょたいざん）とした女を除かなければならぬと決意した。

御坂には芳川桔梗がわからぬ。御坂は、学園都市の学生である。電気を出し、皆と遊んで暮して来た。

けれども怠慢に対しては、人一倍に敏感であった。先日未明御坂は学園都市を出発し、テレビに入り、1里はなれたかの布束の屋敷にやって来た。

「ねえ、聞いてよ一方通行。御坂さんったら私に働けって言うのよ？私は相手の弱点を探る弱点探知機なのに」

そう。

一方通行がいない間、他の面々は修行の為にテレビの中に入ったと言うのに、芳川はそれに着いてきて何をしていたかと言うと、ほぼ何もしてなかった。

「この！いけしゃあしゃあと！危なそうな攻撃が自分に来たら上手く避けたり、上手く受け流して他のシャドウに攻撃したり！」

絶対強いのに、何で自分から動かないのよ！と、御坂は激怒した。

「落ちついて下さいよ、お姉さま。芳川が働いている姿を私は想像することができません。

と、ミサカは遠まわしに芳川を馬鹿にします」

いつものファミレス。
９９８２号は慣れた手つきでドリンクバーで作ったミックスジュースを飲みながら、やや疲れた表情を浮かべる一方通行に近況報告をする。
と言っても、誰かがテレビに放り込まれた、なんてことは無かったのだが、修行と言う事で布束砥信の忍術屋敷に向かったところ、本来の家主である布束を差し置いて、その屋敷を占拠したシャドウがいたのだ。
屋敷内番長的存在のそのシャドウは中々に強力で、この場に居ない上条当麻も含めて苦戦を強いられた。
しかしそんな中でも、芳川と言う名のニートは、一つも動く事は無かった。

本当に何しに来たんだ。

そんなことを一同は思ったのだが芳川曰く、

「大人が私しかいないからね。保護者よ、保護者」

いけしゃあしゃあと言い放った。

「まァいい。それでちったァ成長できたのかァ？」

芳川は相変わらずだな。一方通行はコーヒーを一口飲むと、ジロリと御坂姉妹を見やる。
ちなみに、打ち止めはフレメア＝セイヴェルンの下に遊びに行っている。

「当然！」

御坂はふんすと胸を張る。何か掴んで来たのだろう、次回以降の戦闘に期待しよう。

「それよりも、1週間もバカンスにでて、何も掴んでないなんて言わないでしょうね？」

一方通行の試すような視線を見て、逆に９９８２号は同様の視線を一方通行に向けた。

「あァ、十二分になァ」

桐条グループと、その研究の結果。
桐条美鶴と、それを取り巻く環境。
そして、その下に集った「適合者」。

一方通行は先日起こった出来事をかいつまんで話した。オルソラ＝アクィナスと愉快なシスター達に関しては何も話していない。話すべき事でも無いし、何よりこの場に魔術は関係ないからだ。

それはさておき、外でペルソナを出せる可能性と、学園都市が何かをしようとしている可能性を一方通行は語る。
そして明日からの大覇星祭で、外でペルソナを出せる可能性を持って、桐条美鶴達が来るそうだ。

その話を聞いて、ゆったりとケーキを食べていた芳川の表情も一変した。
研究者の顔、と言うべきだろうか。学園都市の裏を知る顔に変貌を遂げる。

「成程……流石に十数年前の事は知らないけれど……学園都市の事

だからきっと良からぬ事を企てているのは間違いないわね……」

そんな真剣な顔出来るなら、テレビの中でも真剣になってほしい。

芳川を除く3人は同様の内容を三様に考えた。

「そして……」

一方通行は言葉を続ける。

まだ何かあるのか、そう思って女性陣は再び口を閉じた。

すると一方通行は席を立ち、ドリンクバーへと向かう。

なんだじらしやがってとか9982号は思うが、一方通行のコーヒーカップには、まだコーヒーが残っていた。

どういう事かと考える間もなく一方通行は3杯のコーヒーを持って来る。

「……なんですか、これは」

3人を代表して9982号は尋ねた。

「飲んでみろ」

それが桐条グループの学園都市に行って、一番の戦利品だァ。と一方通行は言う。

このコーヒーがどうしたと言うのだ、と言った疑問を浮かべつつも、一同はその言葉に従ってそれを口に含んだ。

「「……コーヒーね（ですね）」」

まごうことなくコーヒー。それだけだった。

ていうか苦い。３人はサラサラと砂糖を入れた。

「お前らァァァ！！！そのコーヒーがどンだけ貴重なもンかわかってンのかァァァ！！？」

ネットでも販売されねェから現地でしか買えねえンだぞォ！！と熱弁する一方通行。

３人は引いている。

わざわざドリンクバーの中身を挿げ替えて（許可済み）だなァ云々。

３人は引いている。

そのコーヒーはなァ、『フェロモン珈琲』って言ってだなァ云々。

３人は引いていたが、その説明を聞いてコーヒーを一気飲みした。

「「熱！！熱い！！」」

「俺の熱意が伝わったよォだなァ……

何、コーヒーはまだある。とはいえドリンクバーのコーヒーが無くなれば終わりだけどなァ」

一方通行は自身の熱弁の甲斐があったと喜んではいたが、女性陣の気を引いたのは、味ではなく『魅力が上がる』という点だ。

その日、他の客が『フェロモン珈琲』を口にする事は無かった。

「げふっ……飲みすぎました……と、ミサカは……」

「と、トイレ……」

「……流石に……飲みすぎたわね……」

女の魅力は、1日にして成らず。
お腹をぷっくりと膨らませた3人は、満足そうな顔をする一方通行と共にファミレスをでるのだった。

・・・

その日、『ラボ』が何者かに襲撃を受けた。
一方通行が帰ってから次の日、それが起きたのだ。

桐条グループが持つ研究所が、何者かに襲撃され、研究資料及び完成間際の『召喚器』を奪われたのだ。

その報を受けた桐条美鶴はすぐに『ラボ』に直行。
やはりというか、報告通りであった。

『実験事故』に関する資料及び『黄昏の羽』を編み込んだ製作途中の『召喚器』6丁。
これらが盗まれたものの、被害は1名。研究者達は眠らされたようだった。その1名は行方をくらませている。
ひょっとしたらその襲撃を行った相手に誘拐された恐れもあった。

「くそっ……一体誰が……」

美鶴は荒された様子も無く、手際良く目的の物だけ盗まれた、と言った状態のラボを見て1人毒づく。

とはいえ、行動は早かった。

すぐに情報封鎖をおこない、侵入者の足跡が残っていないか、調査を始める。

美鶴はその調査の結果をまとめるべく、次々と挙げられる報告を自身の執務室で吟味していた。

そんな時だ、再び男が来訪して来たのは。

「どーもー、いやあ此度は御愁傷様でしたねえ」

「……何の話かな？田木原さん」

金髪を逆立てた短髪の男、田木原一。

学園都市からやってきて、『実験事故』に関する資料を求めていた研究者。一見して研究者には見えない容姿をしているのだが、それはさておき。

「御愁傷様」と言うのは奪われた研究資料の事だろうが、情報封鎖を施したはずだと言うのに、何故知っているのだろうか。

「何か、『どっか』の『誰か』が『ラボ』に侵入したらしいじゃないですかー。

駄目ですよお、本当に大事な物なら、大切に大切に、懐の奥の奥にしまわなきゃ」

田木原はニコニコと笑みを浮かべているが、その笑みからは不快感しか感じられない。
むしろ、ニヤニヤと笑みを浮かべる、と表現した方が正しいだろう。

「ッ……。何で知っているのかな?そのようなことを」

「いやはや、私も驚きましたけどねー。何度も通ってお世話になったラボが襲撃されるなんて。
こう見えてラボの方には足繁く通わせて貰っていたのでね。お陰で研究の参考になったのですが……とにかく、誰も怪我をしていないようで、安心しましたよお」

「私は、何故そのような事を知っている、と聞いているんだ」

ギン、と田木原を睨みつける。
疑いの目を向けられた田木原は、飄々とした態度で言葉を続ける。

「はあ、そう言われましても……『足繁く』通ったおかげで、研究員の方と『仲良く』なったからですかねえ。
情報封鎖されているとはいえ、人の口に戸は立てられない、と言うじゃないですかあ」

ニコニコと、がニヤニヤに変わった瞬間である。
それまで不快感を煽っていた笑みは、一層嫌悪感を煽る物に変貌を遂げた。

しかし、それが本来の表情であると感じ取れる程の自然な笑みで。
まるで勝ち誇るかのような笑みを見た美鶴は、確信を持ち、核心

に迫る。

「……貴様か」

「はい？」

「貴様がやった、と言う事か？」

美鶴の言葉を受け、田木原の笑みはなりを潜め、再び胡散臭いものに戻る。

「いやだなあ、それは冤罪と言うやつですよお。僕はやってませんよ？

それにしても残念ですね、私が資料をもらい受ける前に奪われるとは……

と言う事はすなわち、私がここに来るのも最期と言う訳ですね」

「別に来てほしい等と思ってはいない」

「くくっ……手厳しいですねえ」

「それで、何の用だ？ここにはお前が欲しいものなど残ってはいないはずだ」

「いえ……『居なくなった』研究者の代わり、うちから派遣してもいいですよ？

それだけ尋ねようと思いまして」

「要らん。と言うより貴様の所から人材を借りるよりも、学園都市にこちらの人員を送った方が後々利益になる」

「そうですかあ……そりゃ残念。あ、もし人材をこちらに派遣したいのであればいつでもご連絡下さいな」

別に本気で研究者を派遣したい訳では無いらしく、田木原はすぐに身を引いた。

言いたい事は挨拶のみだったらしく、踵を返し、執務室を後にしようとするが。

「そうそう、桐条さんのとこのような大企業には、『スパイ』ってのはよくある話ですからねえ。

何て言うんでしたっけ、産業スパイって言うのかな?まあ何にせよ、気をつけて下さいね」

意味深な一言を言い放つ。

それでは、縁があればそのうち。と、田木原は立ち去った。

・・・

田木原一が立ち去り、しばらくの間桐条美鶴は思考に耽っていた。

会話の間に織り込まれた気になる単語をまとめる。

『『足繁く』通ったおかげで、研究員の方と『仲良く』なった』

『僕『は』やってませんよ』

『居なくなった研究者』

そして。

『産業スパイって言うのかな?』

スパイ。

「やはりというかなんというか……」

恐らく、田木原が裏で糸を引いていたのだろう。
だが、それをわざわざ言いに来た理由が分からない。

「だが、何にせよ舐められっぱなしは趣味じゃない」

忌々しげに何処か虚空を見つめると、携帯電話を手に取る。

「学園都市……鬼が出るか蛇が出るか」

罠かもしれない。
とはいえ、動かずに泣き寝入り等できるはずもない。

美鶴は、学園都市に派遣する人材を数人集めるべく、通話を開始したのだった。

・・・

夜。
学園都市。
その路地裏。

人通りの少ないそこに置かれた『廃棄物処理場』。
そこの焼却炉では文字通り「廃棄されるモノ」を処理している。

生ゴミから人様には言えないナニかまで。

そこで焼かれる人間大の大きさの黒いゴミ袋を眺めながら、その男はニヤニヤと笑っていた。

中身は、言わずもがな。

「はっ、馬鹿だねえ。金と地位につられて裏切るような奴、信用できるわけねーじゃねえか」

燃え盛る炎に焼かれつつある物体を嘲ると、その男は満足げに笑った。

目的は、上々。

『実験事故』の詳細。これは正直のところ要らなかった（桐条の下へ行く理由づけの為だけに必要だった）のだが、あって損する訳でも無いので、色々と参考にしようと考えている。

重要なのは、『黄昏の羽』の方だった。

何せ急ごしらえで『適合者』を『造った』せいで、召喚器が足りなくなっているのだ。実験では召喚器を使い回せばよかったが、これでは実戦が出来ない。

その際だ。今は亡きスパイから連絡が入ったのは。「桐条が召喚器の製作に取り掛かった」と。

とはいえ、召喚器の製作は何重にも様々な研究所を通して、それも1丁ずつバラバラに造られているらしく、スパイ程度では『黄昏の羽』の出どころを掴む事が出来なかった為、完成間近で召喚器が一つにまとまったところで奪う事にした。

幸い、そこのラボには彼自身本当に足繁く通っていた為セキュリティの程度も把握出来ていたし、それを無効化する位学園都市の技術力なら容易だった。

「おっと、もうこれも要らねえよなあ」

何かを思い出したかのように、左頬を掻く。するとペリペリと人工の皮膚が剥がれ落ち、そこには刺青が刻まれていた。

木原数多。

猟犬部隊を動かしてラボを襲撃させた張本人である。

「桐条のお嬢様は多分この挑発に乗って来るだろうなあ」

良くも悪くも、まだ若い。

若いと言う事はしばらくの間後継ぎの問題はないが、それだけ経験も浅い。

相手が桐条美鶴の父である桐条武治だったり、更にその父である桐条鴻悦だったりしたらこうはいかなかっただろう。

その若さに付け入る隙があるのだが、逆に言えば成長の余地がある、と言う事だ。

ならば自身の懐に彼女の懐刀を潜り込ませ、桐条の動きをある程度予測できるようにしておいた方が良いだろう。

何せ、これから始まる実験で、木原数多はしばらく学園都市外に出られなくなるのだから。

「ったく、研究者ってのも忙しくていけねぇや」

木原は愚痴を一つつくと、剥がした人工皮膚を焼却炉の中に放り込んだのだった。

## そのろくじゅう　まくあいてきなおはなし（後書き）

おまけ
マヨナカテレビに映った人々。

美琴の場合

マヨナカテレビ「ゲコ太！ゲコ太！ゲコ太！ゲコ太ぁぁぅぅううう
わぁあああああああ　あああああああああああああああああん！！！
　ぁぁあああ…ああ…あっあっー！あぁああああああ！！！　ゲコ太ゲコ太ゲコ太ぁぁあぅううぅわぁあああああ！！！！

　あぁ！クンカクンカ！　スーハースーハー！
スーハースーハー！いい匂いだなぁ…くんくん
　んはぁっ！ラヴリーミトン製ゲコたんの緑色の肌をクンカクンカしたいお！クンカクンカ！あぁあ！！
　間違えた！モフモフしたいお！モフモフ！モフモフ！肌肌ツルツル！お髭モフモフ！カリカリモフモフ…きゅんきゅんきゅぃ！！

　電撃大王のゲコ太たんかわいかったよぅ！！
あぁぁああ…あああ…あっあぁあああ！！ふぁぁあああんんっ！！
　アニメ3期決まって良かったねゲコ太たん！
あぁあああああ！かわいい！ゲコ太たん！かわいい！あっあああぁあ！

　コミックも発売されて嬉し…いやぁあああああ！！！にゃあああああああん！！ぎゃあああああああ！！
　ぐあああああああああああ！！！コミックなんて現実じゃない！！！！あ…フィギュアもアニメもよく考えたら…

　ゲ　コ　太　ち　ゃ　ん　は　現　実　じ

ゃ　な　い？にゃあああああああああああああん！！うぁあああああああ！！

そんなぁあああああ！！いやぁぁぁああああああああ！！はぁあああああああん！！学園都市ぃぃぁあああああ！！

この！ちきしょ　！やめてやる！！現実なんかやめ…て…え！？見…てる？携帯ストラップのゲコ太ちゃんが私を見てる？

アニメのゲコ太ちゃんが私に話しかけてるぞ！！！よかった…世の中まだまだ捨てたモンじゃないんだねっ！

いやっほぉおおおおおお！！！私にはゲコ太ちゃんがいる！！やったよケロヨン！！ひとりでできるもん！！！！

あ、携帯契約特典のゲコ太ちゃあああああああああああああああああん！！いやぁあああああああああああああ！！！！

あっあんああっああんあピョン子様ぁあ！！チェ、チェイサー（自販機からジュース）！！ゲブ太ぁあああああ！！！ぁあああ！！

ケロヨンんんうううぅううう！！私の想いよゲコ太へ届け！！ラヴリーミトン社のゲコ太へ届け！」

美琴「」

黒子「お姉さま……ストレスがたまっていらっしゃるのであれば…私が……その……」

・・・

黒子の場合

マヨナカテレビ「自主規制」

美琴「」

黒子「」

・・・

寮監の場合

マヨナカテレビ「はあ?ちょ、ドタキャンとかマジ萎えるしー!もういい、あんたもう電話かけてくんな!どうせキープの一人だしさー!」

マヨナカテレビ「ったくマジ萎えるし……ケンの馬鹿……」

マヨナカテレビ「はあ、どっかに白馬の王子様落ちてないかなあ……」

マヨナカテレビ「誰か……助けてよ……」

寮監「」

美琴「あの……私男友達とかあんまり居ないけど……出来るだけ紹介とか……」

黒子「ですがお姉さま、年代が違」

ゴキバキャゴキャゴキャ!!!!!

美琴、黒子「「」」

・・・

上条の場合

彼は歩く、桜が散り始めた並木通りを。
出会いと別れの季節。それもそろそろ終わりを迎える。
もうそろそろＧＷの予定を考えてもいい頃だ。

彼は、いつもの待ち合わせ場所に、いつものように歩いて行く。
そんな当たり前の毎日に感謝して。そんな当たり前の幸福を与えてくれたあの人に感謝して。

「よお、今度のＧＷさ、何処行く？〇〇――」

一方通行「全米が泣いた」

土御門「カミやん、どんだけ「不幸な事が起きない」日常に餓えてんだ……？」

青ピ「ていうかあんなにモテてんのに彼女の１人も居ないカミやんが、こんな望みを持つのはおかしいと思うんやけど？」ピキピキ

美琴「それより、待ち合わせの相手って誰よ！？」

上条「いや、あれテレビだから！！フィクションだから！！ああも

う、不幸だー！！」

・・・

駒場の場合

マヨナカテレビ「えー本日は幼女の集いにお集まり頂き、誠にありがとうございます。

都条例的に色々と不味い事が起きそうなので、ここに集まられた真なる紳士諸君は、

イエスロリータノータッチを原則として、幼女を悲しませないようにこれからも遠目に愛でて行きましょう。

それでは、挨拶もこの辺にして……今日は飲みましょう、歌いましょう！無礼講です！乾杯！！」

～中略～

マヨナカテレビ「ロリコンに向かって走るー♪あの幼女について行こう～♪はだかのままで飛び出して～♪あの幼女について行こう～♪

見えない都知事が怖くて～♪見れないパンツを夢見る～♪本当のパンツ見させておくれよ～♪

ロリーロリー♪イエスロリコン♪ロリーロリー♪ノータッチ♪ロリーロリー♪イエスロリコン♪ロリーロリー♪ノータッチ♪」

わあああああ！！

駒場「」

半蔵、浜面「「……！！」」↑笑いすぎて声が出ない

・・・

一方通行の場合

マヨナカテレビ「鈴科洪隆「出おったな、怪人ドメスティックバイオレンズゥ！！」」

マヨナカテレビ「怪人「ぐーふーふー遅かったな、アクセライダーマン！！」」

マヨナカテレビ「鈴科洪隆「貴殿らの所業……許し難し！！覚悟はできておられるか！？私は常にできているゥ！！アクセル……全開！！！！変・身！！」」

マヨナカテレビ「アクセライダーマン「貴殿らが好き勝手出来るのも……今宵が最後であるゥ！！！！」」

マヨナカテレビ「怪人「ぬかせえええええ！！」」

マヨナカテレビ「アクセ・怪人「「おおおおおおおおおおおお！！！！」」」

どごおおおおん

一方通行「」

９９８２号「アクセライダーってホリケンのパラグライダーみたいに言わないでくださいよ。と、ミサカは噴くのをこらえます」

オルソラ「……！！」↑笑いすぎて声が出ない

美琴「（悔しいけど…かっこいい……）」

上条「あー、ヒーローものへの憧れって子供の頃あったよなー」↑居たたまれなくなってのフォロー

インデックス「それって遠まわしにあくせられーたを子供って言ってるかも」

上条「あ」

一方通行「」

一方通行「」　黒翼発動

どごおおおおおおん

# そのろくじゅういち　だいはせーさいまえ（前書き）

大覇星祭編。マッタリいきます

## そのろくじゅういち　だいはせーさいまえ

大覇星祭。

９月１９日から１週間にわたって行われる、いわゆる体育祭。

それも１つの学校だけで行われるものではなく、合同体育祭。

それも複数の学校だけで行われるものではなく、全ての学校と合同体育祭。

能力をフルに活用して行われる、万国びっくりショーもびっくりな体育祭であり、この大覇星祭は閉鎖的な学園都市には数少ない外部からの見学ＯＫな貴重な機会である。

故にまだ開催日の早朝だというのに、ここぞとばかりに父兄達は学園都市内に集結していて、人口密度は優に普段の二倍以上に達していた。

それもそのはずで、学園都市が超能力を開発している、というのは外部でも有名な話である。

といっても、どのような実験をしているのかまでは知る由もないのだがそれはさておき、人が手から火を出したり５０ｍ先まで一瞬で移動したり、超電磁砲を放ったり風を起こしたり、という光景は非常に珍しいのだ。それこそテレビ中継で全国ネットに瞬く間に拡散され、ツイッターでは「学園都市なう」が蔓延るほどには。

そんな中上条当麻や御坂美琴もまた、競技に参加するのを義務付けられており、それぞれが自身のクラスメイトの下に居る。そちらはそちらでひと波乱あるのだが、それはまあ原作を読んでもらえばおおむねわかると思う（メタ）。

さて、学生でない一方通行たちがなにをしているかというと、特

に何もしていない。
何せ９９８２号や打ち止めは外に出たがっているのだが、一方通行はめんどくせェとか言って動く気配を見せないのだ。
なるほど、前述したとおり人がごった返した街中を歩きたくない、という気持ちは分からないでもない。

とはいえ、遊びたい盛りな９９８２号や打ち止め（実年齢は気にしない）をして外に出ないという選択肢はありえないのだろう。

「やだやだやだー！！だいはせーさい見に行きたい！ってミサカはミサカは駄々こねてみたりー！！」

テンプレな「寝ころんでじたばた」を用いて外に出たいアピールをする打ち止め。しかし一方通行はげんなりとした様子でそれを眺めるだけで、心ここにあらずといった様子だ。
というのも、桐条美鶴から「学園都市の手のものに召喚器を奪われた」と連絡が来たのだ。事情を聞く限りでは『黄昏の羽』の出どころは学園都市にはばれてはいないようだが、それはすなわち、召喚器を作らなければ襲撃に遭うことはなかったということだろう。

これは明らかな一方通行の失策である。
学園都市の人間が桐条の下に資料を求めに動いていたのだから、もっとそちらにも警戒を向けるべきだったのだ。

そんなわけで一方通行の頭の中は「なァにィ～～！？やっちまったなァ！！」というワードがぐるぐると渦を作っていた。

「一方通行？何を考えてるのか知りませんが……外に出て気晴らしでもしてはどうですか？
と、ミサカは上位個体とはうってかわって大人の対応をとります」

「そーよー、子供は風の子元気の子、ってね。３人で外出てきたらどう？」

芳川桔梗もまた外に出たくない派なのだが、これは一方通行とは違い純粋に動きたくない盛りなのだろう。

床に座り込んではいる物の、いつでも立ち上がれそうな一方通行とは違い、ソファーに寝転んで完全なスリープモードでテレビを眺めていた。

と言ってもどのチャンネルを回しても学園都市一色で、見飽きた風景が映ったりしている為、どちらかと言えばＢＧＭ代わりにテレビをつけているだけ、と言った様子か。

何にせよ動かざる事山の如しな芳川は、確実にお留守番担当員筆頭だろう。

一方通行は一方通行で、いつまでも失敗の反省をするつもりはなかったのか、というより芳川と同列に扱われたくなかったのか、おもむろに立ち上がる。

どうやらようやく踏ん切りがついたらしく、気晴らしに外に出て、上条達の冷やかしに行くのも良いかなとか考え出したらしい。

「外行くぞ」

と、首をバキバキと鳴らしながら言い放つ。

９９８２号と打ち止めは嬉しそうな顔をして、一方通行に着いていった。

・・・

さて、外に出たは良いが、まだ競技は一つも始まっていない。

とはいえこの圧倒的人だかりは、アンチスキル・ジャッジメントを全て投入してようやく整理出来る、と言ったところだろうか。
移動用の公共機構は自動運転のバスと地下鉄が主で、一般車両の外部から学園都市への侵入は禁止としていたのだが、これでもしそれが許可されていたら、お前らの渋滞で学園都市がヤバい、と言った状況に陥る事請け合いだ。

それはさておき、９９８２号と打ち止めにはいつものファミレスで時間を潰してもらっておいて、一方通行はテレビの中侵入用の為だけに借りたボロアパートへと赴いた。
クマが外に出られるらしいので、ちょっとそれを確かめようと思ったのだ。

そんな訳で、ガチャガチャと建てつけの悪い戸を開くとそこには。

「お前誰だ」

布束砥信がお茶を飲みながらテレビを見ていた。それはまあいい。だがしかし、窓を開けて外を眺めている金髪は誰だ。

「お！一方通行ン！やっと来たクマか！？待ちくたびれたクマよー！」

「はァ？クマァ？」

語尾にクマ。
特徴的すぎるその語尾を扱う奴を、一方通行はただ一人しか知らないのだが。

「あっ、そーかそーか、クマが着ぐるみパージした姿をしらないク

マね！そう言えば！」

「あァ？どォいう事だァ？」

説明を要求する、と言った目線を布束に送ると、どうやらペルソナが覚醒したあと、不意に着ぐるみを脱ぐとその『中身』が有ったらしい。

原因は不明だが、ペルソナが関係しているのだろうか。

「そんな訳で、今日からお祭りらしいクマね！クマも行くクマよ！！」

「待て、別にかまわねェが、その着ぐるみは止めろ。目立ちすぎる」

「ガーン！そんなせっしょーな！これはクマの半身タイガースで……」

「止めろ」

「……はいクマ」

クマは一方通行の言う事に従い、別れを惜しむようにテレビの中に着ぐるみをグイグイと押し込んで行った。

とてもじゃないが、自分の半身の扱い方とは思えない。

「ｗｅｌｌ、久々の外だし羽伸ばしましょうか」

どうやら布束も付いてくる気らしく、軽くストレッチをして体をほぐしている。

色々と訳有りな布束ではあるが、人を隠すなら森の中。この人ご

みにまぎれれば研究者達にバレる心配も無いだろう。

「……はァ。あンま目立つ事すンなよォ」

外に出る事に関しては何ら異論の無い一方通行であるが、色々と不安であるのは事実。

打ち止めの子守もそうだが、面倒くさい事にならなければ良いのだが、と嘆息を吐く一方通行だった。

・・・

召喚器が奪われた、とはいえ学園都市の技術力の高さを一度は見ておきたい桐条美鶴達は、どうやら3日目以降にこの学園都市に来るらしい。

そんな訳で初日と2日目は本当に何もすることが無い。

一方通行はいつものファミレスでコーヒーをすすりながら、今後の予定について考えを巡らせる。

目の前では、打ち止めと意気投合するクマ。

一方通行の隣では布束砥信と共に新たなミックスジュースの作成を試みる９９８２号。

なんだか、ファミレスの外では大覇星祭だと言うのに、こちらではいつもの光景が広がっていた。

「また新しいお客様が増えていらっしゃいますね」

そう声をかけてきたのは、いつも、いつものファミレスで働いているいつもの店員だった。

茶色のショートヘアにクリっとした目。身長は御坂美琴や９９８

2号よりも一回り小さく、下手すると小学生にも見間違われそうと言った外見を持つ彼女であるが、本当にいつもファミレスでバイトしているので、ひょっとしたらもう高校すら卒業しているのかもしれない。

「あァ、明後日あたりまた新しいの連れて来るかもなァ」

「……ここ最近、急速にお客様の新たなお友達が増えてきてますね……」

こちらとしては非常に売り上げに貢献して下さってるので、有りがたいのですが。と店員。

確かに、何だかここ一月かそこらで急激に人と関わりを持っている。

とてもじゃないが、今までの学園都市第一位の姿とは思えない。

「なンでだろォな」

一方通行自身も、何故かはわからなかった。

そんなことより、と一方通行はジロリと店員を見やる。

店員はどこからか椅子を引っ張ってきて、その椅子にちょこんと座ってソーダをすすっていた。

明らかに客側として馴染んでいる。とはいえ恰好はウエイトレスなので、サボっているようにしか見えない。

確かに、まだ朝と言う事もあり、客の姿もまばら……というか一方通行達しかいない。

外では父兄達がパンフレットを広げながら、我が子の雄姿をどこでなら最も間近で見られるのか、と右往左往しているというのに。

「……つゥか、仕事しなくていいのかよ」

「良いんですよ、この後ランチタイムに突入したらこんなことしてる暇もなくなっちゃいますし……
今の内に休んでおくんです」

まだ競技も始まっていない朝。
父兄達は我が子の応援をする準備は万端、と言った様子で応援席を陣取っているのだが、恐らく昼休みの時間になれば一気に近場のレストラン等になだれ込む事だろう。
そうなった時、真の地獄が始まる。
ならば今の内に英気を養っておくべきではないか？というのが店員の弁であるが。

「休むなら裏で休めよな……」

休んでる様を客に見せるとは何事か。
一方通行はそんな接客業の基本を怠っている店員を軽く叱咤する。

「むう、バックグラウンドじゃまだ誰も来てなくて暇なんですよー」

深夜組はもう帰ったらしく、朝組の店員はいつもの店員だけでしばらくしないと誰も来ないらしい。
大覇星祭当日で忙しくなると予想されるのに、イマイチ緊張感に欠けるホールと厨房だった。

「お前しか居ねェなら、なおさら仕事しろよなァ」

「仕込みは既に深夜組の方が終わらせてくれてます。後はお客様が来るのを待つだけなんです」

実は意外とやる気はあるらしく、店員はいずれ埋まるだろう客席を夢想して奮起している。

となると、インデックスと言う食物吸引機を連れて来ると、まだ見ぬ客の分まで食べ物を喰らってしまうだろう。

売上的には同じかもしれないが、どうせならいろんなお客さんに味わってもらいたいと考えているようだ。

このファミレス、チェーン店の冷凍食品とは違って手作りを心がけているようで、意外と好評なのだが、如何せん不定期に訪れるインデックスによって唐突に本日の営業は終了しましたのお知らせをせざるをえなくなるのだ。

故に大覇星祭がおこなわれる間は、インデックスを連れてこないようにしとこう、と一方通行は思う。

「まァなンだ。ランチタイムの時は邪魔しねェよォにするわ」

「あ、それなら……もしお暇だったらここのお手伝いとかしてみませんか？」

「えっ」

「最近バイトが少なくて困ってるんですよ。普段なら満員御礼！なんてことはありませんが……

今日から1週間は否応なしにそんな状況になると思いますし……」

「だからってなンで俺なンだよ」

「だって、業務に関しては大体把握なさってるでしょう？

見えない厨房は別として、ホールでの接客なら」

確かに、毎日のように店員の仕事っぷりを見てきた一方通行だし、

恐らくやれと言われれば出来るだろう。

「めんどくせェよ、ンなこと」

「あはは、ですよね。まあいきなりこれから始まるラッシュアワー的な中に放り込むと言うのもあれですし、気が向いたら大覇星祭後でもいつでも声掛けて下さい。
お客様方なら店長もよろこんで採用すると思いますよ」

そして店員はグイッとソーダを飲み干すと、持ってきた椅子と共に業務に戻ると告げ、厨房の中へと吸い込まれて行った。

「暇だったらミサカも参加しますよ？」

「ｉｎｄｅｅｄ、ここを隠れ蓑にするのも良いかもしれないわ」

「どのジュースの組み合わせが一番おいしいか」という題目を、真面目に検討を重ねていた９９８２号と布束は店員の後姿を眺めながら、アルバイトも悪くない、と言う。
布束はどうだろうか、表向きでは既に研究職も除籍と言う事になっているだろうから、ここで働いても問題は無いのだろうか。

「そォだな。まァ、これからの事を考えるとバイトしてみるってのもアリかもなァ」

妹達の生存権。
はっきり言えば、それは学園都市がまだ握っているだろう。
とはいえいずれはそれを奪い返すのだが、それを行った後、妹達はどうするのか。
ここで社会見学、と言う訳ではないが働いてみるのも一興だろう。

じゃれ合っているクマと打ち止めの精神年齢について考察をしながら、一方通行は近い未来に関して思いを馳せるのであった。

・・・

「むう……打ち止めと、大体一緒に居たい！にゃあ」

フレメア＝セイヴェルンは頬を膨らましながら駒場利徳を見上げた。

大覇星祭初日。フレメアは自身の通う小学校もあるので、競技に参加しなければならないのだが、そんなのよりも打ち止めと一緒に遊びたいらしい。

とはいえそんなフレメアの我儘で他のクラスメイトに迷惑をかけられるはずもない。

「……ならば、打ち止め達をこの場に呼ぶ。それでは駄目か……？」

駒場は譲歩案を出し、フレメアに納得してもらうよう説得を試みる。

と言っても、フレメア自身も別に競技に参加したくない訳ではなく、打ち止めと共に行動したいだけなのでその言葉に異論は無かった。

「良かったねえ駒場のリーダー。せっかく用意したフレメアの雄姿撮影セットが無駄にならなくて！

ついでに周囲の子供達の撮影も……とか考えたら駄目だぜ？」

茶化すような口調で語る半蔵。

実際、今朝方に駒場と合流した時、浜面仕上と共に爆笑したもの

だった。

一言で言えば『運動会前のお父さん』。

喉が渇いていいようにスポーツドリンクを入れた1，5Lの水筒に、汗をかいていいように数枚のタオルをカバンの中に常備させ、更には思い出を刻むべく用意されたデジタルカメラに極めつけは駒場特製弁当だ。リンゴはうさぎさんで、ウインナーはたこさん。どう見てもフレメアが喜びそうなラインナップを重箱に入れて現れた時は、ひょっとして狙ってやっているのかと疑ってしまう程に爆笑させられた。

「いや実際、駒場さんはいい『お父さん』になれると思うぜ！弁当とか滅茶苦茶美味そうだったしな。あの中身見て食べさせてもらえないのは非常に悔しい！だけど『初めて』はフレメアに……だよなぁ！」

駒場のフル装備を見て爆笑して、そして駒場に粛清された訳だが、駒場の隠された意外なる特技・料理を見た浜面は意外と感心したように語る。

でもやっぱり語る内容は駒場を茶化しているもので、結局浜面は半蔵と共に本日二度目の粛清を受けた。

「「この程度の……暴力に屈して……たまるか……！」」

成程、言葉だけ見れば非常に勇ましく格好いいものなのだが、TPOを弁えねば非常に不格好な物になる、という良い例だろう。

フラフラと立ちあがりながらも、決意に満ちた目を駒場に向ける浜面と半蔵。

ただ、先程までの掛け合いを見ていた周りの人間からすれば、非常に滑稽なものに映っただろう。

「……とにかく、一方通行に聞いてみるとするか……」

浜面と半蔵に軽く溜息をつきつつも、駒場は一方通行に連絡を取るべく、携帯電話を開く。

大覇星祭開催まで、後1時間を切っていた。

## そのろくじゅういち　だいはせーさいまえ（後書き）

無駄に登場人物増えてさ、何か原作で言う姫神的なポジションの人がｒｙ

## そのろくじゅうに　りせちーとりせ（前書き）

くぎゅで一番好きなキャラ？
僕は、久慈川りせちゃん！

**そのろくじゅうに　りせちーとりせ**

「一日アンチスキル部隊長……ねぇ……」

「よ、よろしくおねがいします……」

黄泉川愛穂は目の前の少女を見て、改めて嘆息した。

外部からアイドルを招き入れて何をさせるかと言うと、一日警察署長の様な事。

事前にこの事は知らされてはいたのだが、実際に目の前の少女を見ると非常に面倒な事になりそうだと思う。

はっきり言って、大覇星祭でのアンチスキルの業務は普段の２０割増しくらいに激務である。

何故かと言うと、いくら頑張ろうとも外部からの侵入が容易になってしまうからだ。

従って、毎年大覇星祭の裏側では何かしらの事件が起こっている。

去年は某研究所への諜報活動。

一昨年は某病院へのテロ活動。

これらだけではなく、もっと小さな事件や事故も多発していたのだが、それらは全て秘密裏に処理されてきた。

外部に「この街は危険だ」と悟らせてはいけないから。それを悟らせては、外部からの学園都市への編入が減ってしまうだろう。

だからこそ、久慈川りせのアンチスキル業務の参加も許可された

のだ。

「アイドルが警察の真似事出来る程度の安全度は有る」と思わせる為に。

「『りせちー』って言ったら、もっと元気な感じじゃなかったじゃん？テレビあんまり見ないからよく知らないけど」

黄泉川はこれからの予定を頭の中で組み立てながら、目の前の少女に声をかける。

赤みがかった茶髪のツーサイドアップ。両サイドで結われた髪の毛は、彼女が動くたびにサラサラと揺られる。

小さな体躯に似合わずスレンダーな体型で、パッチリとした二重の瞼。

成程、これがアイドルだ！って感じの見た目じゃん。とか黄泉川は思うものの、目の前の少女からはイマイチ元気やら覇気やらが感じられない。とてもじゃないが、芸能界の荒波で生きていけるとは思えないほどに。

以前テレビで見た時は、もっとはっちゃけた感じだったと記憶していたのだが。

「え、えっと……緊張しちゃって……」

久慈川は曖昧な笑みを浮かべて黄泉川の質問に答える。

その表情には若干の陰りが見え隠れしていたが、本当に緊張してるのだなと黄泉川は納得した。

「まあいいじゃんよ、これから「一日アンチスキル部隊長」って名

目でうちの部隊を指揮してもらうけど、何か質問あるじゃん？」

「あ、いえ……分からない事があったらその都度聞いて行けばいいんですよね……？」

「ん、それでいいじゃんよ……てか、そんなんで大丈夫じゃん？ちゃんと朝飯は食ってきたかー？」

元気があれば何でもできるじゃん！と黄泉川は快活に笑う。
そんな黄泉川を見て、久慈川もまたクスリと笑った。

「大丈夫です、仕事に入る時はスイッチ切り替えますから」

「お？公私使い分けてるのか？そりゃ凄いけど駄目駄目じゃんよ、子供はもっと好きなように生きるべきじゃん！」

こんな子供が公と私を使い分けている、と言う現実に黄泉川は少々驚いている。
公私混同というか、常に素で動いている黄泉川には考えられないだろう。

「あはは……いちおう、仕事ですので」

「そうかい、ならまあ……あんまり息苦しくならない程度にするじゃんよ」

「……そうですね」

黄泉川の言葉に、久慈川は再び少しばかり表情を暗くしたのだが、すぐに元に戻して同意の言葉を言った。

今度は先ほどとは違い、その陰りを黄泉川はしっかりと捉えていた。

・・・

「いえーい！皆見てるー！？今日はぁ、学園都市にやってきちゃいましたぁー！

よくわかんないけどぉ、警察みたいなことをやってぇ、学園都市を守っちゃいたいと思いまーす！」

久慈川りせは、テレビカメラが向いた瞬間豹変した。いつもテレビで見かけていた『りせちー』そのものである。

まさに公と私が切り替わった瞬間だ。お茶の間の一同は久慈川の『公』しか知らない為、「その姿」が当たり前のものだと思っているのだろう。

黄泉川愛穂は目の前で可愛らしい動きと口調を続ける少女を見て、『私』を見せられるような、信用できる相手は居るのだろうかと場違いな考えが頭を廻った。

初めて会った時の、あの少し控えめな態度。

黄泉川の予想ではあるが、久慈川は緊張から来るとは言っていたのは嘘で、あれが本来の久慈川の性格なのだろう。

だとしたら、こうしてハイテンションを保つと言うのは非常につらい作業になっていると思う。理想の『りせちー像』を演技し続けなければならないのだから。

更にそれを裏付けるかのような、先程見せた表情の一瞬の曇り。

一期一会、今日だけの出会いだろうけど、逆に今日しか会わないからこそ話せない事もある。

（それなら……）

黄泉川があれこれと久慈川について考えていると。

「ちょーのーりょくとかよくわかんないけどぉ、悪い人がいたら私がみぃーんなやっつけてあげるからねー！」

すると中継は一端終わりらしく、テレビカメラが回り終えると久慈川は髪の毛をかき上げ少し溜息をついた。

「黄泉川さん……」

少し不安げに久慈川は黄泉川を見上げる。

その表情を見た黄泉川は真剣なまなざしで久慈川を見た。

「どうしたじゃん？」

「超能力って……本当は私が思ってるよりすごいんですよね？大丈夫かな……」

何を聞かれると思ったら、先程の自身の発言について不安に思ったらしい。

年相応のかわいらしい一面を見た黄泉川は、思わず噴き出した。

「……ぷっ、大丈夫じゃんよ。あんたは部隊長なんだから、後ろでふんぞり返ってりゃそれらしくなるさ」

「むっ、黄泉川さん？子供だからって馬鹿にしてるでしょ？」
「違うじゃん、「年相応」に扱ってるだけじゃんよ」
「もう！ひっどーい！」
少しだけ心を開いてくれたのか、久慈川は最初の頃とは違いかなりフランクに話してくれるようになった。
これが『公』に引っ張られたものなのかはたまた本来の『私』なのか、黄泉川にはわからないが、せめてこの場にいる間だけでも本音で話してくれたらうれしいと黄泉川は思う。
――『今日しか会う事がない』からこそ話せる事もあるだろうから。
・・・
「ンだこりゃァ……」
「「ぎゃはははは流石ロリコン皇太子！！」」
「ミサカはそれ食べたいってミサカはミサカは」
「ｗｅｌｌ、中々良いポジションを取ったものね」
「……ふごおおおお！！！」
「お？このアイスキャンデーを食べたいクマか？３本か？甘いの３本欲しいクマか？いやしんぼクマね！お腹壊すクマよ！」
「そうですね。とはいえジャリガキの低レベルな争いしか見られないのがたまに傷ですが」
「うぎゃあああああ！！！」
「じゃあミサカのと交換しよ！ってミサカはミサカはオレンジシャ

ーベットを差し出してみたり！」
「ｉｎｄｅｅｄ、自分だけの現実があまり定まっていない子供達の能力だけど、発想が私たちより柔軟だからね。
自分の能力をどう使うか楽しみってところよね」
「うわあああ！？浜面ァァァ！！！」
「お、ありがとクマ！ならクマはこのグレープ味を差し出すクマよ！」
「……貴様もだ。半蔵」
「成程、確かにミサカは能力の運用法がインプットされていますが、それ以外の使い道もあるかもわかりませんね」
「うぐあああああああああ！！」

カオスだった。

スキルアウト一行と合流して、フレメア＝セイヴェルンの応援に回ったのは構わないのだが、訳がわからないよ。
フレメアは既に競技に参加してるので、この場には居ない。

いや、居ない方が良いだろう。既に場が出来上がってしまっている。酒は入ってないはずなのだが。

一方通行は眼のやり場に困って、ふと校庭の外を見ると黄泉川愛穂がいた。恐らくアンチスキルの業務を行っているのだろう。
お疲れ様だなァとか思いながらその動向に注目していたら、知らない少女がアンチスキルを率いていた。

「なンだありゃ」

テレビだのアイドルだのに興味のない一方通行は、黄泉川よりも一回り若そうなのにアンチスキル率いていると言う事は、それだけ

有能なのだろう。と見当違いの予想をしていた。

「ここではぁ、子供達が頑張ってるみたいだよー！それじゃあ、頑張ってる子供達にインタビューしたいと思いまぁす！」

と思ったら、何やらその少女が周囲に居る小学生達にインタビューを始めた。

「……本当になンだありゃ」

どうやらアンチスキルの隊長だとかそういうあれでは無いらしい。だが、一方通行には久慈川りせに関する知識は無い。

近くに黄泉川がいるので、少し話を聞いてみようか。

と言うより、この宴会のような騒ぎの渦中に居たくないのが本音だ。

そんなわけで、そろそろとその場を離れて、黄泉川のいる方へと向かう。

「よォ、なンだありゃ？」

「お、一方通行じゃん？こんなとこで何してるじゃんよ」

「いや、あれなンだが……」

黄泉川の問いに、一方通行はげんなりとした様子で指をさす。

そこには花見でもしているのか、と言う程に馬鹿騒ぎをしている一団がいた。

「……成程、あのノリに着いて行けなくなったとこに、私らが来たってとこじゃん？」

「そのとぉりだァ。で、ありゃなンだ？」

「お前『りせちー』って知らないじゃん？今をときめく有名アイドルだってのに……

いくらなんでも俗世から離れすぎじゃんか」

「興味ねェもン知ってどぉすンだよ」

チラリとインタビューを続けている久慈川りせを見やると、一方通行は興味を無くしたかのように視線をそらした。

本当に興味が無いらしい。

枯れていると言うか何と言うか……。そんな呆れた様子で黄泉川は一方通行を見る。

すると再び中継を終えた久慈川が黄泉川達へと向かって歩いてきた。

「あれぇ？その人だぁれ？」

どうやら周りに人目が有る時はキャラを崩さないよう心掛けているらしく、先程と同じテンションで話しかけてきた。

ぶりっ子な久慈川を見た一方通行は、心底鬱陶しそうな顔をして、

「なンだコイツうっとぉしいぞ」

そんな久慈川の仕事魂を真っ向から否定する台詞を、一方通行は堂々と吐いた。
流石のりせちーも、その全否定っぷりに驚きを隠せないようで、

「んな!?あんただって残暑厳しいこの時期に真っ白なくせに!!もっと外出なさいよ!!」

「あァ!?俺だって好きで真っ白でいる訳じゃねェンだよ!!せめて服だけでも黒くしてェってこの気持ち分かンねェかなァ!?」

「分かんないわよ!そんなウルトラマンみたいな服装から、そんな事情をどうやって導き出せっていうの!?」

今のは聞き捨てならない。ウルトラマンは禁句だ。明らかに久慈川は一方通行の服装を馬鹿にしている。
しかし、一方通行にとってはこれがベストファッションなのだ。それを馬鹿にするという行為は、一方通行のセンスを全否定することと同義だ。

一方通行は久慈川の言葉に激高した。

「ンだとォ!?」

「なによ!」

キレた一方通行の迫力はかなりのものだが、久慈川は一歩も退かない。
何せ自身の仕事を否定するかのような態度を見知らぬ他人がとったのだ。それを許すことが出来る程、久慈川は長い時を生きてはい

なかった。

2人がギリギリと歯ぎしりさせ互いをにらむ。
そんな2人を黄泉川は楽しそうに眺め、茶々を入れた。

「あっはっは、初対面とは思えない程息が有ってるじゃんよ」

「「誰がだ（よ）！？」」

やっぱコンビネーション抜群じゃん！と黄泉川が爆笑する中、番組のプロデューサーらしき人がそんな3人に近づいてきた。

「あのー、そちらの白髪の方は一体……」

「ん？ああ、こいつ学園都市でも有数の超能力者じゃん。けして怪しい者とかじゃないから心配しなくていいじゃんよ」

「なに？超能力者だって？それはいい！もしよろしければしばらくの間久慈川と行動してもらいたいのですが、どうでしょう？」

どうやら黄泉川が一方通行の保護者と思ったのか（実際その通りだが）、一方通行の同行の許可を黄泉川に求めるプロデューサー。
一方通行がそのような事を許可するはずもないのに。

「あァ？なンだってそンな面倒くせェ事を……」

「ふん、超能力者とか言って訳のわからない私服着てる時点で学生では無いんでしょ？
怪しいに決まってるわ！」

「あァン!?誰の服が怪しいってェ!?」

「落ちつくじゃん、一方通行。私の眼から見てもその服は怪しい」

「なン……だと……!?」

ほら見た事か、と言ったドヤ顔を一方通行に向ける久慈川。

一方通行のボルテージはマックスだ!

「あの……それで御同行の方は……」

プロデューサーは恐る恐る黄泉川に尋ねる。

まだ高レベルの超能力者を目の当たりにしていないからか、不安そうな様子である。

「ん?ああ、どーせこいつ暇だし構わないじゃん。なんかあの子と息あってるし」

「それで、彼はどのような超能力を……?」

一番気になる所。

より凄い能力である程、画も映える。黄泉川の言が本物ならば撮影しがいもあると言うもの。

これが逆に地味なものだったら、放送事故につながりかねないから慎重にもなる。

「んー、説明しにくいなあ。実際に見てもらった方がいいかもしれないじゃん」

黄泉川はしばらく考え込むが、本当に説明し辛い。

「火を出せます」とか「電気出せます」とかならまだしも「ベクトルを操作できます」と言われても分かり辛いだろう。

「ハァ？なンだって俺が全国のお茶の間に超能力をお届けしなきゃならないンですかァ？」

「あれ、怖いの？ホントは超能力なんて使えないんでしょ？カメラも回ってないし、謝るなら今がチャンスじゃない？」

と、久慈川は言う。一方通行がその言葉を聞き逃すことができるわけがないというのに。

それはすなわち、久慈川からの挑戦状だった。それを無視出来るほど、一方通行は長い時を生きてはいなかった。

「……やってやろォじゃねェか。後になって後悔してもしらねェぞ」

「ふん、精々放送事故にならないよう気をつけることね！」

何より、当の一方通行があの様子だ。はっきり言って頼りない。強いて言うなら姿形は目立つから、超能力者ですと紹介してもそれっぽいだろう。

「それでは、あなたのお名前をお伺いしてよろしいですか？」

何にせよ、一度能力を行使している所を見てから決めたらいい。プロデューサーはそう思いなおし、一方通行に名前を尋ねた。

「あァ？……鈴科だ」

少しイライラとした面持ちで、一方通行は偽名を名乗った。

・・・

「あれ？そんな名字だったじゃん？」

「いや、偽名だから」

「……本当の名前は一体どこに行ったじゃんよ……」

「……家出して帰ってこねェンだ。俺の名前」

「……」

「……」

## そのろくじゅうに　りせちーとりせ（後書き）

番長に対しては初めからデレというくぎゅキャラには珍しいパターンだけど、別に仲良くもない相手ならつっけんどんな態度をとってもおかしくないと思う。くぎゅだし

# そのろくじゅうさん　どはつてんをつく（前書き）

上条さんのキャラ崩壊注意

## そのろくじゅうさん　どはつてんをつく

「勢いとは言え、やっちまった……」

またやらかした。桐条グループの時と言い、なンだか墓穴掘る事が多い。と一方通行は思う。学園都市第一位が誰の許可も無しにテレビの前に出るとは、色々と問題が出そうな気がする。

いや、まだ自分が第一位だとは名乗っていない。諦めるにはまだ早い、諦めたらそこで試合終了なのだから。

「能力を見せる」とは言ったが、余り手の内を晒す事はしない方が良いだろう。何せ誰が見ているかわからないし。

（となると……）

この間桐条御一行に見せた光学迷彩、あれでいいだろう。あれなら「ｔｈｅ　超能力」と言っても差支えないはずだ。何より桐条達にはそれで通していたのだから、もし間違って別の能力を使っているところを見られたら何を言われるか分からない。

とはいえ、一方通行の目の前にいるツーサイドアップは、「えーマジ光学迷彩？キモーい光学迷彩が許されるのは小学生まで」とか言って難癖付けてきそうな気がする。

弱った。

今現在、一方通行の頭の中には、適当にお茶を濁して立ち去ると言う選択肢は無かった。

何だか久慈川りせに負けた気になってしまうから。

今までも魔術師相手やシャドウ相手に色々と立ち回ってきたが、

ようは負けず嫌いなのである。例えどんな分野だろうと。

そんな訳で、適当に能力を見せた後に、一方通行が選んだ道がこれだ。

「今日はぁ、ちょーのーりょくについて教えてくれる野良のーりょくしゃの方に来てもらっちゃっいましたぁ！」

「どォもー、鈴科でェす。光学迷彩で姿消せまァす」

「それじゃあ早速ですがぁ、ちょーのーりょく見せてほしいなあ！」

「そォですね、俺が能力使ったらこンなンなりますゥ」

「あれれー？鈴科さんがいないよぉー？」

「……とまァ、こンな感じに姿を消せるンだよなァ。
原理とか語ると時間の無駄なので実際に見てもらいましたァ」

「それは凄いですねぇ！覗きとかいっぱいなさってたんですかぁ？」

「いや、そォいうの防ぐために『アンチスキル』が居るンですがァ」

「分かりましたぁ！それでは一日部隊長として、あなたを逮捕します！」

「まて、落ちつけ。これは罠だ、俺は覗きなンざしてねェからな？」

「本当ですかぁ？嘘だったらすぐに取り押さえますんで覚悟しといて下さぁい！」

久慈川は間延びする口調だが、何処か棘があるように思えるのは気のせいか。

そんな感じで一方通行の紹介が終わった。

そう、一方通行の選んだ道は。

――――所謂解説ポジション。

何やら久慈川りせ率いるアンチスキルの部隊は学園都市各地を回り、色んな能力者を見て行こう！みたいな事をしているらしい。

と言うのも、アンチスキル本来の任務は基本交通整理であるから（秘密裏に色々と処理はしているが）、アイドルの交通整理映像など誰得だと言う事で見回りがてら色んな能力者を見てみようと言うのが目的なのである。

そんな中、「あれ？何この能力」となった時に「ああ、それは定温保存だね。有り体に言えば魔法瓶みたいなあれさＨＡＨＡＨＡ」「すっごーい博識なんだね☆」「いやあＨＡＨＡＨＡ、それほどでも」と、素早く解説してくれる人間がいると非常にありがたい。

学園都市第一位の一方通行なら、それは天職と言っても過言では無かった。

何せ一目見て観測すれば、大体の事はすぐに把握できるのだから。

とはいえ、これは全国の男どもから怨念の念が飛んで来るだろう。

何故なら皆のアイドル・りせちーと共に行動出来ると言う特典付

き。一方通行にその自覚は無いが、ファンなら金をいくらでも積んでいるところだ。

この映像を見た事で、学園都市行きを決めた思春期の少年が数多くいたとかいないとか、というのは余談である。

「それじゃあ、次の勤務地行ってみよー！」

久慈川は笑顔全開で拳を突き上げている。

そしてチラリと一方通行の方を向くと、その視線に「お前もやれよ」と言う物を乗せてきた。

「……おォー」

本当、何やってンだ、俺。

勢いだけで行動すると馬鹿を見る、それをまざまざと教えられた一方通行は、若干気だるげに拳を天に向けたのだった。

・・・

「諸君。聞いているか？

今日は、良い天気だ。今日は、非常に恵まれた天候だ。

諸君。聞いているか？

今日は、適度に暑い。今日は、非常に恵まれた気温だ」

男は語る。

その語りを聞く者たちは一言も声を発さず、身動き一つもせずに男の声を聞いていた。

「風が気持ちいい。日差しが気持ちいい。頬を伝う汗が気持ちいい」

男は語る。
空を仰ぎ、日差しをまぶしそうに捉えながら、軽く汗をぬぐった。
「……そしてなにより、戦う前のこのピリピリとした空気がたまらなく気持ちいい」
男は語る。
荘厳な雰囲気を漂わせるその空間は、男と兵達（つわもの）だけの空間で、何人たりともよせつけないものであった。
「諸君、今日は戦うには非常に良い日だ。
諸君、今日は死ぬには非常に良い日だ。
諸君らには今日、死地へと赴いてもらう。私もまた然り、だ。
もちろんただで死ねとは言わない。
奴らの喉笛に噛みつき、奴らの阿鼻叫喚を鎮魂歌とし、何も語らず、何も残さず、一片の肉片と化すまで一気呵成に修羅と成って果てろ！！」
そして男が一呼吸つくと、最期の口上を一気に述べ上げた。
それに呼応するように、兵達の意気は立ちどころに上昇する。
「「「うおおおおお！！！！！」」」
午前十時。上条当麻達の最初の競技は『棒倒し』。
上条の厨二病も真っ青な口上で、彼の所属するクラスのボルテージは最高潮。
妙な威圧感を放っている割には、上条の号令に反応を示しただけで後はシンと黙りこんでいる。

いつ練習したんだと聞きたい程に彼らの息はぴったりと合い、彼らの意気はすさまじかった。

先頭に上条を据え、彼が仁王立ちするとその背後に横一列。

グラウンドには、ザザッ！と足並みをそろえる音が鳴り響いた。

まるでこれから国賓を相手にするかのような、丁寧で威厳を持たせた軍隊の様である。

もしくは、戦国時代で言う合戦が始まる一歩手前の兵団の様でもある。

兎にも角にも、彼らが持つ緊張感は、テレビカメラが彼らに向いている事から来るものではない。

彼らは一様に「敵軍」……否、「的群」だけを見据えていた。ただひたすらに、それらを倒すと言う意志が、彼らの目から見てとれた。

その様子だけを伺うと、これから始まる戦いは戦いではなく、虐殺なのではないかと錯覚させられるほどだ。

そんな彼らの数は優に3ケタに達する。

それもそのはずで、学校単位で行われる大覇星祭は、基本的に一つの種目に一学年分の学生を投入して行われる。

すなわち、上条はこの一学年分の生徒たちをまとめ上げたと言うのだ。

何故このような事になっているのか。

一言で言えば、対戦相手の担任が、うちの小萌先生を悲しませた。

これに尽きる。

自分達を馬鹿にするのは構わない。負け犬根性、と言う訳ではないが無能力者が多く集まり、高位能力者の少ない上条達の学校は、その地位自体があまり高くない。

それゆえに能力に関してあまり頓着を持っていないのだが、その事に関して敵方の大将（担任）は上条達の大将（担任）を裏で馬鹿にしていたのだ。

その言葉に小萌先生は大層悲しんだ。

これを許してしまっていいのか？

能力を持つ事にこだわりは持たない事が負け犬根性に近いと述べたが、実際には負け犬等では無い。

これを許してしまった時点で、上条達は負け犬へと成り下がるのだ。

それだけは受け入れられない。

例え無能力者の烙印を押されようとも。

例え低能力者だと陰口を叩かれようとも。

例え落第者だと馬鹿にされようとも。

大好きな恩師を馬鹿にする事だけは許されない。

その一部始終を見たのは上条とその周りに居たクラスメイトだけなのだが、この話はあっという間に棒倒しに参加する味方達へと伝わり、上条が無駄に発揮したカリスマで彼らの怒りをまとめ上げたのだ。

そんな光景を見ていた観客一同は上条達に息を飲み、上条達の雰囲気に呑まれた。

死地へ赴く兵士達を見送るように、いつまでも彼らの姿を見ていたいと思ってしまう。

だが、それは許されない。戦地へ向かう彼らに、心残りを残してはならないから。

そして、そんな奇妙な一体感を持った彼らと別れを惜しむ観客を引き裂くように、棒倒し開始のアナウンスが鳴り響いた。

棒倒し、と言う事ですべき任務は二つ。

殲滅と、敵方の棒を倒す事。

……ではなく棒を倒す側と棒を倒させない側の二種類。

『能力』の有無でハンデを背負っている彼らは、防御に回っている余裕はない。

故に最初からクライマックス、攻撃が最大の攻撃と言わんばかりの戦力の大半を攻撃につぎ込む突撃。

これが本当に戦争だったら愚の骨頂とも言うべき選択肢だろう。

しかし、それしか選択肢が無かった。例え他の作戦が有っても、これしか選ぶつもりが無かった。

無能力者の底力を見せつける。

彼らの頭の中は、それだけで埋め尽くされていた。

「「「おおおおおお！！！！」」」

兵達は自然と声を張り上げていた。
先程からそうなのだが、たかだか体育祭の棒倒しごときに一体何をそんなに、と思うだろう。

しかしここは学園都市。

ただもみくちゃと押して押されを繰り返して棒を倒す、等と甘い事は言っていられない。
上から下から右から左から、能力の数々が人の代わりに押し寄せてくるのだ。
気合い入れて声を張り上げないと、不意に一撃を喰らった時に立ちあがれなくなる。

炎、氷、雷、水、風、土、その他諸々、あらゆる物体・物質が兵達を飲み込んで行く。
そんな学園都市内でも滅多に見られない、多数の能力のぶつかり合いに観客は沸いた。

しかし、戦禍の渦中にいる上条達は笑い事ではない。
何せこの能力の嵐の中だ。少しでも気を抜いたら、それだけで意識を刈り落とされるはずだ。
テレビの中で数々のシャドウと渡り合って勘を磨いてきた上条だからこそ、この嵐を潜り抜けてこられたのだろう。
一方で避けきれずに次々と兵達は地に伏して行く。

しかし、その程度で彼らの足を止める事は叶わなかった。

まだ無事な兵はなるべく頭を低くした前傾姿勢を取る事で、攻撃を喰らう無駄を極力減らし、攻撃を喰らってしまった兵は、地に伏しながらもジリジリと敵本陣へと這っていた。

この死兵のようで、それでいてまだまだ闘志を目に宿した兵達を相手に、敵軍は震えあがった。
やはり能力者として鍛えられたとはいえ、本物の『闘志』を目の当たりにするのは初めてだったのだろう。

だがしかし、その怯みこそが、彼らにとって最大のチャンスだ。

地に伏していた兵は立ちあがり、一気に駆け上がる。
敵陣に向かっていた兵は、更にその足を速める。

能力などそっちのけで行われた１００人の突撃は、それだけで相手の出鼻を挫くのに丁度良かった。
戦争なら愚の骨頂と評したが、この場ではこの作戦こそが最上だった。

・・・

「……」

（なにやってンだよ、上条の野郎は……）

いや、それを言うなら自分もだが。と一方通行は自分に突っ込みを入れた。
りせちーの一日部隊長計画。彼女が小学生にインタビューした次に向かった先は、高校生達が争う種目。
この年齢になると能力の質も上がっているだろうと向かったところ、妙な現場に遭遇してしまったのだ。

面白そう！と言う事でそのまま種目を終えるまで見学する事にし

たのだが、余りの景色に当の久慈川りせも、まさに開いた口がふさがらない様子で口をポカンとさせていた。

これではテレビ番組にならないと一方通行は思い、軽く解説をしてみる。

「あァー、やっぱ能力者数そろえるとその辺の見せもンよかずっと面白ェ事になるなァ。

見た感じだと、強い能力者をそろえた学校と能力開発にそこまで力を入れてない学校との対戦ってとこかァ？

押してるのはどっちかって言うと後者の方だから、まァ能力が全てじゃねェって事の証明には成るだろォな」

誰に向けての言葉かは知らないが、見た感じの状況をそのまま実況した。

一方通行の声に我に返ったのか、久慈川も気を取り直して目の前に広がる光景にリアクションを取る。

「ちょーのーりょくってすごいですねぇ！

私びっくりしてどう反応して良いのかわからなくなっちゃったぁ！」

普段のハイテンションを2割増しくらいに興奮させ、りせちーは目の前の光景に目を輝かせた。

カメラの外では、プロデューサーが少しほっとした様子で2人のやり取りを眺めている。

やはり一方通行の気遣いはファインプレーだったのだろう。

「あのレベルで能力の撃ちあいをするのは滅多にねェからなァ。俺でも割と驚いてる。

普段、無能力者があそこまで能力者に真っ向から向かって行く事ってあまり見ねェからなァ。
何が有ったかはしらねェが」

本当に何が有ったのか。後で上条に聞きに行こうと思う一方通行。
そんな一方通行の思考を知ってか知らずか、久慈川は言う。

「なんだかすごいですねぇ！ちょーのーりょくある方がやっぱり有利だと思うんですけどぉ、
それでもそのハンデを乗り越える彼らに拍手を送りたいと思います！
それで、あそこ走ってるツンツンとげとげ頭の人があっちのチームのリーダーっぽいからぁ、
後でインタビューしてみようと思いまーす！」

はい、カット！それではＣＭはいりまーす！と言う声で、一端カメラが打ち切られた。
その声と同時に一方通行はだらんとその場にしゃがみこんだ。

「ハァ、テレビに映るってのは慣れねェもンだなァ」

「お疲れじゃん、初めてのテレビ中継のくせによくやってると思うじゃんよ」

力を抜き気だるげにガシガシと頭を掻く一方通行だが、その姿からは緊張のきの字も見られない。
黄泉川愛穂が手放しの称賛をする一方で、久慈川は本当に素人さんですか？と言いたい程に手なれた解説をした一方通行に、称号として解説王ヤムチャを与えたいとか思う。もちろん悪意１００％だ。

「……よく言うよね、カメラ回ってても回ってなくても表情一つ変わらない癖に」

ジトっとした目で一方通行を見やる久慈川だが、当の一方通行は全く気にした様子もなく、黄泉川が持ってきた飲み物を口にしている。

「まあ、こいつに緊張しろって言う方が無理があるじゃん」

「いや、お前が変わりすぎなンだろォが。なンだあのぶりっこはよォ？

つゥか黄泉川、お前は余計な口出しすンじゃねェ」

「……わたしだって、好きであんなのしてるわけじゃないんだもん」

一方通行の歯に衣着せぬ物言いに、久慈川はむくれて言い返す。

そんな久慈川を見た黄泉川は、やっぱり色々抱え込んでるんだろうなーとか思ったりするが、一方通行がそれを受け止めてくれないかなとか、そんな場違いな期待を一方通行に抱いていた。

「……嫌なら止めりゃ良いんじゃねェのかァ？」

「……それが出来たら、どんなに良い事か」

「……違いねェな」

嫌なら止めたらいい。それが出来ればどんなに良い事か。

一方通行も久慈川の言う事は良くわかる。

内容は違うが、嫌な事を止められなかった人間だから。嫌な事を

それでもやり続けた人間だから。
自分の為だけに行動しきれなかった人間の末路。それが一方通行だ。

久慈川もまた、同じなのだろう。周りの期待に、押されて、推されて、圧されて。
きっと圧し潰されているのだろう。

だからこそ苦しむ。
理想の自分と、現実の自分との差を見て。

理想の自分を演じ続ける道化。それが久慈川りせの今の姿だった。

「まァなンだ、これでも飲んで気分落ちつけろよ」

掛ける言葉が思いつかなかった一方通行は、話題を変えるかのように手に持っていたスポーツ飲料を差し出した。

「ん、ありがと……」

久慈川は何も考えずにそれを受け取り、口にしたところで、気付いた。

「あ、あんたこれさっきあんたが飲んだ奴じゃないの!?」

「あァ？間接キスってかァ？ンな事気にしてンじゃねェよ、思春期かお前は」

「まさに思春期真っただ中の年齢なのよ！私は！！少しは気にしてよ！」

「そりゃ悪かった、じゃあ返せそれ。オークションで売るから」
「何よそれ嫌がらせ！？」
「おォ」
「「おォ」じゃないよ、あなた馬鹿じゃない！？」
「あ、そォだサインくれよ、サイン。そのペットボトルに」
「更に価値を高めようとしてるの！？」
「ハッ、ンだよ元気じゃねェか。ガキはそォやって何も考えずにはしゃいでりゃ良いンだよ」
「……うるさい」
一方通行に、良いように感情を引きだされた久慈川は、悔し半分にそのスポーツ飲料を飲みほす。
そこに先程までの恥ずかしさは見られず、飲み干した後ペットボトルを一方通行に投げつける程度には元気を取り戻していた。
ペットボトルは、ゴミ箱に捨てた。

## そのろくじゅうさん　どはつてんをつく（後書き）

りせちーがＰ４時とくらべてやっぱりツンってる。
でもくぎゅキャラだから良いよね。ダメ？

## そのろくじゅうよん　おなかすいたっていってる（前書き）

甲子園始まったね。
去年の歳内（神）がまいもどってきたと思うと胸熱。
でも初戦から危なかったね。僕てっきり負けるかと思っちゃった。
まあ日南も強かったと思うけど、最初のタイムリーはあれどっちかってーとレフトのエラーな気ががが

**そのろくじゅうよん　おなかすいたっていってる**

「何やってるのよあいつら……」

御坂美琴は呆れた目をして2人を見やる。

かたやヘルシングにでも出てきそうな演説。

かたやテレビ出演でアイドルと共演。

御坂は現状を理解できなかった。

確かに、上条当麻とは赤組と白組に分かれて事で敵対していたし、負けた方が罰ゲームみたいなことをすると話してはいた。

その結果が、あれだ。

基本的に、学園都市では優劣が能力の程度で決まる。

故に上条の所属する学校では、対戦相手にはほぼ勝てないと言うのが普通なのだが、どうしてあそこまで味方を奮起させられたのだろうか。

更に言えば、現状では上条達が押している。

と言うよりこのままいけば、勝って番狂わせが起きそうだ。

「あいつどんだけ私に罰ゲームさせたいのよ……？て言うか私に何をさせたいの？」

ドン引きだった。

まさかあそこまで学生達をまとめ上げて一致団結して勝ちに行くとは思ってもいない。

そして、一方通行は何をどうしたらりせちーと共演出来るのか。
学校行ってない一方通行は、こう言った催し物の時何してるのかなーとか思ったりしていたのだが、まさかテレビに出てるとは思いもよらない。

変だ変だと思っていたが本当に変な奴らだった。

（そしてこいつも……）

チラリと横を見る。
そこには、うつ伏せに寝そべっている白いシスターが居た。

「うう……お腹すいたかも……」

空の弁当箱と割り箸を手に、力なく倒れ伏している。
はっきり言って、説得力の欠片も見られない。

「いや、さっき食べてたじゃない。私なんて今日と言う日になってまだおにぎり1個しか食べてないのに……」

「私と短髪とじゃ胃袋の出来が違うかも」

「そんなデカい胃袋要らないから。後短髪じゃなくて御坂さんと呼びなさい」

インデックス。
御坂から見た印象としては大喰らいの少女としか覚えていない。
あの時、外部からの侵入者と対峙していた時点でただ者ではないと思っているのだが、お腹すいたお腹すいたと手足をじたばたさせ

てカロリーを無駄に消費している姿を見ると、とてもじゃないがただ者にしか見えなかった。

そんなただ者・インデックスは割り箸（先程まで弁当を食べるのに使用していた）を握りしめ、空腹を訴え続けている。

「うう……あれじゃあ足りないかも……」

「ってもここには食べ物なんか無いわよ……」

そういえば、一方通行がいつもインデックスにご飯を奢っていた気がする。

その時に食べていた量を考えると、弁当1食分はインデックスにとっては0，1食分にも満たないのかもしれない。

とはいえ食べる物など存在せず、御坂の手元にスポーツ飲料があるだけなので、強いて言うなら水分でごまかしてもらうしかないのだが……

「空腹を飲み物でごまかすなんてできないかも」

「ですよね」

言わずもがな。

インデックスがぐったりしているのはひょっとして熱中症のせいなのでは、と万が一に賭けて御坂はそのスポーツ飲料を提供したのだが、無駄だったようだ。

「ところで、短髪はこんな所で何してるの？」

「だから御坂さんと呼びなさい……まあ、敵情視察ってとこねー。

勝負するって言ったし。
てか、あいつはいつからあんな調子だったの？」

形はどうあれ、勝負すると決めたのだ。敵の戦力を把握するのも悪くない。
とか思ってたらあれだ。何故あのようなノリになったのか小一時間問い詰めたいところなのだ。

「うーん……とーまはいつも通りだったよ？」

いつもって、いつも一緒にいるのかと突っ込みを入れたくなった。
そういえばこの白シスターも、どう見ても学園都市の住人とは思えない。
今までその辺の事情を聴く機会が無かったから（有るには有ったが、何だか有耶無耶になってた）、この場で聞いてみても良いかもしれない。

「あー！あくせられーただー！」

とか何とか御坂が思っていたところ、インデックスが今更一方通行の存在に気付いたらしく、急激に元気を取り戻した。
と言うか、インデックスは上条の応援に来たのではないのかと聞いてやりたい。

とはいえ、インデックスは一方通行に会った時は高確率でご飯を奢ってもらっていたので、パブロフの犬のごとく一方通行を見るとよだれが出てくるのだ。
これを抑えるには空腹を何とかしなければならない。

「ちょ！？待ちなさいよ！」

「お腹すいたお腹すいたお腹すいた」

御坂の制止も虚しく、インデックスはゆらりと幽鬼のように立ちあがると、上条達の様な突撃を一方通行へと向け、無意識のうちに空腹の訴えを呪詛の様に唱え続けるのだった。

「……私も次の競技に向かいますか」

あれは見なかった事にしよう。そのように御坂は考えた。

インデックスの後姿を見送った後、御坂は何事も無かったかのように自分の競技が行われる会場へと歩いて行くのだった。

・・・

「さぁ！そろそろ勝負が決まりそうだけど……なんと押してるのはぁ、ツンツン頭君のチームでーす！」

「最初の勢いそのままに押しこンだ、ってとこだなァ。

もォ少し作戦を立てておけば、奴さンも健闘出来ただろォが……

まァ、上条達の事を侮った結果ってとこだなァ」

「上条達？……あれぇ、鈴科さん知ってる人があの中にいるの？」

「あァ、例のツンツン頭がそれだなァ」

「へー！それならそうと早く言ってくれればぁ……」

パッと見同年代の男女が雑談しているようにしか見えなかった。

しかし、かたやアドリブかたや演技と言う、いつ事故ってもおか

しくない2人だが、それをおくびにも出さないと言うのは流石と言わざるを得ない。

とはいえ、恐らくは画面の向こうでは、りせちーファンが血の涙を流しているに違いない。

芸能人ならまだしも、普通の素人さんなのだから。

だが、白髪にアルビノと、見ようによってはロックバンドにでもいそうな見た目な一方通行とりせちーのコンビは無駄に絵になっていた。

そんな2人の語らいを遮るように、一人の少女が割り込んできた。

「あくせられーた、こんなところで何してるのかな？」

ひょこひょこと歩いて一方通行の下へと向かう。

一方通行は反応に困ったような顔をしながら、突っ込みを入れた。

「……そりゃこっちのセリフだ」

「ええっと、その子は……？」

突然会話を中断されたせいで戸惑う久慈川りせ。

一方通行の様子を見る限りでは知り合いなのだろうが、今は撮影中だ。

更に言えば生放送なので、編集してカット、等は出来ない。

ならばこの状況を何とか利用するしかないのだが、どうすべきか思いつかない。

番組のプロデューサーは頭を抱えるが、そんなプロデューサーをよそに放送は続く。

「私はね、インデックスって言うんだよ」

「呑気に自己紹介してンなよ……」

「外国の人かなぁ？私海外って言った事無いから、色々と話聞きたいなぁ」

「あのね、私は記憶ｓ「こいつは日本育ちでなァ。ほら、日本語流暢だろォ？見ての通り俺の従兄妹だ。真っ白同士で似てるだろォ？」」

「真っ白って見た目は確かに真っ白だけどぉ……」

「こいつの家庭環境よりも……見ろ、上条達が勝ったみたいだぜェ？」

「あ！本当だ！それじゃあ今からインタビューに行ってきまーす！」

「それよりあくせられーた！私はお腹がすいてるんだよ？」

視聴者からしたらネタなのか、はたまたガチで事故なのかわからないやり取り。て言うかアクセラレータって何？

しかし上条達が勝負を終わらせた事で、りせちーの興味は上条へと向かう。

それに伴いカメラもそちらへと向かうので、そのままこの事実をうやむやにする事が出来そうだ。

プロデューサーは心底安心した。

そしてカメラの外。一方通行とインデックスがマイペースに話をしていた。

先程インデックスの言葉を遮るように一方通行が発言をしていたが、恐らくインデックスが生放送中に爆弾を放り込もうとしたのを阻止してくれたのだろう。

確かにこのインデックスと言う少女、天然なのか知らないが悪びれもせず火に油を注ぎそうな、危なっかしい雰囲気の持ち主であった。

「いや、助かったよ鈴科君……」

生放送とはトラブルが絶えないものだが、今まで行ってきた生放送の中でもかなり疲れた。

そして、プロデューサーは一方通行に感謝の念を抱く。

例え一方通行がインデックスの知り合いだったせいで、この事態が起きてしまったのだとしても。

「気にすンな、ありゃ俺の責任だ……」

何せ能力の解説役は一方通行が申し出たのだ。結果的に、そのせいで放送事故になってしまったら申し訳なさすぎる。

和やかな雰囲気で話をしている中、突如謎のシスターが現れた上に「私記憶喪失なんです」等と爆弾が投下された日には、放送局に苦情が殺到するに違いない。

一方通行は何とかその爆弾の除去は出来たはずだと思うが、お茶の間の一同は困惑している事だろう。

何にせよ、次からこのような事が無いようにインデックスの空腹を何とかしなければならない。

苦情とか来なければ良いのだが、と言った具合に一方通行は素直に謝罪した。

「で、これは一体どうするじゃんよ」

ひょい、と言った具合に軽々とインデックスを持ちあげた黄泉川愛穂は、これからどうするのかと、一方通行とプロデューサーの話し合いの合間に入って2人に尋ねる。

「お腹すいたお腹すいた」

そんな中、いつまでも空腹を訴え続けるインデックス。

「弱ったなァ、俺はあの小娘に敗北を認めさせなきゃならねェ（↑？）」

「でもでも、それじゃあ私の空腹はどうしたらいいの？」

インデックスへの餌付けの結果がこれだとしたら、一方通行はインデックスの育て方（？）を誤ったと言う事だ。

あの大食い少女を貧乏学生・上条が養っているという状況を憐れんだ事がきっかけなのだが、インデックスはイマイチ一方通行への感謝が少ない気がする。

別に感謝されたい訳ではないのだが、このままでは養ってもらうのが当たり前だと思う駄目人間になってしまうだろう。

故に一方通行は突き放す。我が子を谷底に落とす獅子の様に。

「そンなもンお前……その辺に出店があるじゃねェか」

「お金は無いかも」

「お前上条の奴から食費もらってねェのかァ？」

そんな金有るわけないと思いながらも一方通行は尋ねる。

「ちょっとしたお弁当はもらったけど、もう食べちゃったかも」

やはりと言えばやはりなのだが、上条からもらった食料も既に消費済みらしい。

この返答を受けた一方通行は、少し考えるそぶりをしてから口を開いた。

「そりゃかもじゃなくて喰っちまったンだろォが……仕方ねェな」

財布から一枚の紙幣を取り出す。

――――野口さんだ。

インデックス矯正計画のその一歩目が、今踏みだされた。

「これで食えるだけ食って、それでも足りねェってなら草でも食ってろ」

紙幣の価値を食べ物の満腹具合で理解させた方が良いと考えた一方通行は、インデックスに１０００円だけ渡す。

どう考えても満腹には程遠いだろう。

しかし、インデックスがこうなった理由の一端を一方通行が担っ

ているのだ。
　上条家の家計のやりくりの大変さを理解させるために、敢えてあまり高くない額の金を渡した。
「む、私はそこまで意地汚くないかも！」
「最早意地汚ねェとかそォいうレベルじゃねェから……」
　食い意地張っているとか意地汚いのではなく、喰い意地汚い。
　それこそ、いずれは飼い猫・スフィンクスと上条を比較してどちらから食べるか検討しだすのではとか勘繰ってしまう程に。
「それじゃあ、これで私がお腹いっぱいになれるかどうか、勝負だね！」
「……はァ？」
「負けたら罰ゲームだからね！」
「いや、何言ってンだよお前。そンなモン俺の勝ちに決まってるじゃねェか。
　どォせちょっと目を離したら、お腹すいたお腹すいた言ってンだろォ？」
　突然勝負を申し出た理由は分からないが、野口さん１人で抑えられるような胃袋では無い事を一方通行はよく理解している。
　上手に野口を使って空腹を満たすには……バイキングが手っ取り早いだろうか。
　１０００円で食べ放題と言う店なら、いくらでもあるはずだ。

しかしインデックスは、バイキングでは粗方出禁になっていたはずだと記憶している。
いや、実際には出禁になったのは1店舗だけなのだが、インデックスの噂が一気に広がった事による店側の措置だった。
それに伴って一方通行もまた然りだ。全然食べてないのに、おかしな話である。

「とにかく、私がお腹いっぱいになった時点でお金あったら私の勝ちだからね！」

インデックスはそれだけ伝えると、足早に立ち去って行った。

空腹か否かを判断するのはインデックスなのだから、どうとでも言えるだろ。
と一方通行が突っ込みを入れる前に、インデックスはどこかへと行ってしまう。

「……まァいいか」

どォせ忘れるだろ。と一方通行は思考を切り替え、インタビューを受けている上条の方を見やる。
何やら久慈川りせがインタビューをしているが、その周りにいるいつか見た青髪と金髪が怨嗟の念を上げていた。
確かに久慈川はアイドルの有名人だ。それからインタビューを受けている上条を妬むのは当然と言えば当然か。

（……だとしたら、インタビューどころか共に行動している俺は一体なンだ？）

要らぬ恨みを買ってねェだろォな、と今更になって現状に頭を抱えた。

・・・

りせちーのインタビューを受けた上条当麻は、少しだけご機嫌だった。

近日のアイドル事情は詳しくないのだが、あのような可愛い子にべた褒めされて喜ばない男は居るまいて。

青髪ピアスの守備範囲の広さは心得ていた為、りせちーの事が大ファンなんやでとか青髪が言っていても余り興味は持てず、テレビも余り見ないのでりせちーを見る事は無かったのだが、実際に目の当たりにしたらファンにならざるを得ない。

何やらそれに伴い、青髪をはじめとするクラスメイトの恨み数値が跳ね上がった気がするが、気のせいだと思いたい。

そんな訳で、クラスメイト達をガン無視してインデックスを探す事にした。

あの場にいたら多分フルボッコにされるだろうから。

インデックスを待たせっぱなしにしていたから、多分どっか行ってしまっていると思う。

どうやって探そうかなーとか思っていたら、先程のりせちーと、黄泉川愛穂や一方通行が共に居るのを見つけてしまった。

その三人のいるテントの周りでは野次馬がりせちーりせちー言っていたが、アンチスキルが警備をしているのでそれ以上は近づけないらしい。

「なんで一方通行？」

インタビューを受けた時、一日アンチスキル部隊長がどうたら言っていたので、黄泉川が居るのは分かる。
だがしかし、一方通行がそこにいる理由が結び付かなかった。

とはいえ一方通行ならインデックスの行方を知っているかもしれないので、尋ねる事にしようと思い、一方通行達の下へと歩いて行った。

・・・

「どォだった？上条の奴は」

簡易テントの下、パイプ椅子の背もたれにだらんと寄りかかりながら、一方通行は久慈川りせに尋ねた。

その一方でプロデューサーは、黄泉川愛穂と共に次に向かう場所を話し合っている。

学園都市は閉鎖的な場所である、と言うのは周知の事実なのだが、だからと言って完全に鎖国状態と言う訳でも無い。
何故なら得体のしれない科学技術を秘密裏に開発してます、等と言われてどうして信用できるだろうか。

そんなわけで大覇星祭を含めて、一般開放する機会が年に何回かあるのだが、能力開発等に関する機密事項に一般人が触れないように、研究所の警備はより厳重になる。
だが、警備が厳重な事すら悟られないようにしなければならない。
その様を見られたら、「人様には見せられない事をしている」等と勘違いされる可能性だってあるのだから。

それ故に、黄泉川とプロデューサーの話し合いも慎重になる。
黄泉川はそれとなく研究所などから逸れる様に意見を出し、プロデューサーは視聴率が上がりそうな、面白そうな場所に行くように意見を出す。

その過程でどうしても黄泉川と言うか、学園都市が許容できない場所をプロデューサーは挙げるし、プロデューサーが見てて楽しくないと思えるような場所を黄泉川は挙げてしまう。

この話し合いは少しだけ長引きそうだった。

そんな事情も相まって、まったり話をする事にした一方通行。

久慈川もまた、暇が出来そうだった所での一方通行の質問だったので、少しだけ考えるとすぐに口を開いた。

「んー、イイ人だと思ったかな？あなたとは違って」

「そォだな、俺なンかと比べていい奴じゃねェよな」

軽くからかうような久慈川の口調だったが、一方通行は全く気にした様子もなく受け流す。

そんな一方通行をつまらなそうに見ると、久慈川は視線をそらした。

「つまんない人ね……ってあれ上条さんじゃない？」

「あァ？……ホントだなァ、何やってンだ？」

アンチスキルの包囲網の外で自己アピールする上条。

明らかに怪しい動きをしていた為アンチスキルに捕らえられて、黄泉川の下へと連れられていた。

「ぷっ……あの人何してるのかな」

「俺らの事に気付いたけど近づけねェから、敢えて捕まったンじゃねェの？あいつ黄泉川とも知り合いだし」

すると一方通行の言葉通り、黄泉川の前にひっ立てられた上条は少し黄泉川と言葉を交えると、すぐに解放されて一方通行達の下へと歩いてきた。

「よぉ」

上条は何事も無かったかのように手を振ってあいさつしてきた。
久慈川はもちろん、流石の一方通行も呆れた表情を浮かべる。

「よォじゃねェよ何やってンだお前……」

「いや、インデックス見なかったかって尋ねようと思ったんだけどな」

「インデックスってさっきの子？」

何の用かと思ったら、インデックスを探しているらしい。
久慈川の質問に首を縦に振りながら、一方通行は続いて上条へと突っ込みを入れる。

「そンなモンお前、携帯で聞くなり探すなりしたら良いだろォが」

「携帯はガッコーの教室の中。人づてに探していくしかないんですよ、上条さんは」

「はン、昔の人間は文明の利器なンぞ持ってなかったからなァ……進み過ぎた技術に頼ってきた弊害だな……携帯を使える事を当たり前だと思っちまう。

今みてェにそれに頼れない状況が有るってのに、その可能性に目を向けずに生きてきた結果がこれだ」

「そう言われたらそうだよね……私も携帯の無い生活なんて考えられないし……

なら昔の人ってどうやって連絡してたのかな、狼煙？」

「狼煙もそォだなァ。ただ短い時間で連絡するってのはどォしても無理だから、早馬飛ばして手紙って手段くらいしかねェだろォな。

だがそれもできるのも一部の上流階級だけだろォから、昔の一般人は遠くの人と話すって考え自体無かったはずだ。

日々の生活で手いっぱいだろォし」

「そう考えると、私達って恵まれてるんだね……てゆーか、何の話だっけ？」

「なンだったか、『身分の差による生活水準の差』だったか」

「……たかだか人探しでそこまで深く考えさせられるとは、流石の上条さんも思いもよらないですことよ……」

ボケなのかマジなのかわからない会話に、上条はリアクションに困りながらも突っ込みを入れる。

そして意外と息の合っている一方通行と久慈川に少しばかり驚き

を示すが、一方通行の次なる言葉に更に驚いた。

「ついでに言うと、インデックスはさっきまでここにいたぞ」

「うえっ、マジ？何処行ったかわかるか？」

「腹減った腹減ったってうるせェから、金のありがたみを理解させるために、
１０００円だけ渡してどれだけ腹いっぱいになれるか体験させてやる事にした」

「成程……それは意外と良い作戦かも……悪いな、いつも」

「はン、お前の貧乏っぷりはよォく見せられたからなァ。気にすンな、こっちにも責任はある。
これで少しは学ンで、あわよくば自らバイトする位言ってくれりゃ恩の字なンだがなァ」

「そうしたら上条さんちの家計は大いにたすかります事よ……」

一方通行に激しく同意しながら軽くうなだれる上条。
今までの家計の圧迫具合を考えると、それは当然の事だろう。
しかし、蚊帳の外だった久慈川が思ったことをそのまま上条に尋ねた。

「……話を聞く限りじゃ、あのインデックスって女の子、上条さんと同棲してるの？」

「あっ、え、ええっと……」

年頃の男女が同棲。
久慈川もまた女の子だからそう言った話には興味津々である。
先程言っていた一方通行とインデックスの関係など、とうに何処かへと消えていた。と言うより元から信じていなかったのかもしれない。

「いや、大丈夫だよ大丈夫。別に誰かに言いふらすなんてしないし！ただ、男と女が一つ屋根の下なんて……」

「はン、ガキがいっちょ前にませた事考えやがって……」

「なによ！」

「なンだよ」

上条は返答に窮していたのを見て、一方通行は久慈川の関心を逸らす。
内心多大な感謝を一方通行に示すものの、それをこの場で言う事は叶わなかった。

「見つけた！！私の勝利条件！！」

「「！？」」

それはあまりに突然の事で、アンチスキルすら反応を出来なかった。
彼らの包囲網を針の糸を通すようにすり抜け、上条をかっさらって行く。

一方通行もまた反応できなかったが、追う事は出来るだろう。

しかし、敢えてそれを追う事はしなかった。

「あああれえええええええ！！？」

上条の叫びはむなしく響き渡り、御坂美琴は彼の首の後ろを掴んだまま目的地へと駆けあがるのだった。

「……あれは何だったの？」

「……多分、借り物競走かなンかの条件に合うやつが、上条だったンだろォよ。

まァ一応、上条連れてった奴も知り合いだから安心しろォ」

久慈川は高速で小さくなる御坂と上条の後姿をポカンと眺めながら一方通行に聞き、一方通行は事もなげに「私の勝利条件」という言葉だけから状況を推測した。

それが正解かどうか確かめる術を今は持たないが、上条を連れて行った人間が知り合いと言う事を聞いて久慈川は安心したのだった。

・・・

「じゃあ、この通りをこのようなルートで行くのはどうですか！？」

「んー……駄目じゃん！」

「あれも駄目これも駄目って！じゃあ逆に何処だったらいいんですか？！」

「もう！なんであんたはそうやって正確に来てほしくないとこ指定するじゃん！？

なんかもう才能あるじゃんよ！」

「何の才能ですか！？面白くなりそうなとこ選んでるだけですよ！それを才能と呼ぶならうれしいですね！ありがとう！」

「ええい駄目駄目じゃん！！こっちだって一般公開はするものの、見られたくない秘密の技術だってあるじゃんよ！！」

「それってつまり、私が指定した場所であなたが否定した場所に何かあるって言ってるようなものじゃん！？」

「あ！今の言葉忘れるじゃん！誰かに言ったら逮捕するじゃん！！」

「なんですかそれ脅しですか？！マスメディアは権力に屈しないじゃん！」

「語尾真似すんなじゃん！」

「あなたがじゃんじゃん言うもんだから語尾が移ったじゃん！！」

「じゃんじゃん！！」

「じゃんじゃんじゃん！！」

黄泉川愛穂とプロデューサーの話し合いは、長引きそうだった。

## そのろくじゅうよん　おなかすいたっていってる（後書き）

NGシーン

「語尾真似すんなじゃん！」

「あなたがじゃんじゃん言うもんだから語尾が移ったじゃん！！」

「じゃんじゃん！！」
「じゃんじゃんじゃん！！」

「「ジャーンジャーン！」」

「「げぇっ、関羽！」」

2人は無言で見つめ合い、握手をするのだった。

～完～

## そのろくじゅうご　しょせんこのよはしほんしゅぎ

野口さんを1人受け取ったインデックスは、宣言通りお腹いっぱいになるにはどうしたらいいか考えながら、街を歩いていた。
気を抜くと、ソースやら何かを焼いている匂いやらが漂う屋台ゾーンに足を向けようとしてしまうインデックスだが、何と我慢している。

自身の食欲を封じてまで何をしているのかと言うと、記憶を遡っていた。
過去に見た学園都市の光景を全て、一切合切を脳裏に巡らせ、思いだしていく。

実を言うと、インデックスは完全記憶能力者である。
超記憶症候群だとかサヴァン症候群だとか言われる事もあるが、兎にも角にも一度見た物は忘れないと言う能力の持ち主だ。

それが意味する事は、一つ。

（街中で見かけた食べ物の金額は把握してるかも）

自然と食べ物の匂いがする方向に目の行くインデックスは、それらの値段を十全に覚えているのだった。

しかし、１０００円と言う値段。

普通の食事処に行っていては満腹になれるはずが無い。
だからと言ってスーパーに行ってもやし三昧は何だか違う気がする。

と言うか、インデックスの家事スキルは０なので、安い材料を買い込むと言う手段はありえない。

（あれ！？美味しくお腹いっぱいになれそうな値段の食べ物がないかも！？）

残念な事に完全記憶を使ったところで、それを応用する事の出来ないインデックスである。

何も考えず勢いで勝負を挑んだインデックスだったが、１０００円と言う値段がこの程度の物だったと考えが回っていなかったようだ。

完全記憶能力も全くの無駄だった。

（こうなったら、自分の足でまだ見ぬ楽園（お腹いっぱいご飯食べられる場所）を探すしかないかも！！）

決意に満ち満ちた表情を浮かべるインデックスは、一般客がごった返す屋台ゾーンの中へと吸い込まれるように消えて行った。

・・・

あれから３０分程経過した。

若きプロデューサーの真っすぐな思いと、学園都市の思惑がぶつかり合った結果、プロデューサーが折れる形で落ち着いた。

やっぱり権力って怖い。

それでも黄泉川愛穂が気を利かせた為、なるべくプロデューサーの意向には従う形でこれからの予定を立てる、と言った形でプロデ

ユーサーを納得させた。

そんな訳で研究所などの要所要所は、さりげなく避ける形で学園都市内を行脚していた。

だが、特に面白いものがあるわけでもないので、バスで移動中だ。

次の目的地は父兄参加型の競技で、許可は得ているのでそれに混ぜてもらえば番組的にも面白いだろう。

「見回りも、何も見つからなかったら暇ですね」

「基本的には大覇星祭じゃ交通整理が主な任務じゃん。そっちが良いってなら……」

「い、いえ止めておきます……」

久慈川りせはロケバスの窓から辺りを見回しながら、黄泉川愛穂に向かって口を開いた。

科学技術が進んでいると言うから、久慈川は少し近未来的な都市を想像していたのだが、近未来的なものはそこまで見られなかった。

区画された道路に、建ち並ぶビルや店舗。日本では普通にみられるオフィス街と言った外観だろう。

とはいえ、自動清掃ロボや無人のロケバス等は初めての体験だったのだが。

「アイドルが交通整理って新しいンじゃねェの？」

久慈川が交通整理をする姿を想像したのか、一方通行はニヤニヤしながら冗談交じりにアンチスキル本来の任務を勧める。

「数時間微動だにせずに手を振るだけの仕事を見せられてうれしい

のは、
心底心酔してるファンだけじゃん？」

「それだけで喜ばれるのは、何だか複雑な気分ね……」

「まァ、大半からは苦情が殺到するだろォがなァ」

「その時はあなたも一蓮托生だから。1人だけ途中棄権なんてさせる訳ないでしょ」

「あァ？この俺が交通整理なンざする訳ねェだろォが。そンな事になったら帰るっつゥの」

「何言ってるじゃん、ここまで来たんだから最期まで付き合うじゃんよ」

「……なンか「さいご」のニュアンスが違う気がするンだが」

「死ぬまでこき使ってやるって意味じゃない？
よかったね！うちの会社大きいから、安定した収入が期待できるよ！」

「うちの部隊は無償奉仕だけど、教師になれば収入に期待できるじゃん！」

「あァ？いらねェ、いらねェなァ。金なンざ掃いて捨てる程あるっつゥの」

「「ゴチになります（じゃん）」」

「……アイドルと手に職のある大人が、一般人のガキにたかるなってンだ」

一方通行が突っ込みを入れた所でバスが止まり、自動扉が開いた。
ようやく着いたか、と3人は思って席を立とうとしたところ、スタッフがその扉から入って来る。

「あ、そろそろニュース終わって中継入りまーす」

瞬間、変貌した。

「わっかりましたー！それじゃあ、がんばっていこー！」

「「……」」

やはりこの豹変っぷりはすごい。
人の目を気にする術に長けていると言うか、人目が無いと判断した時はがっつり素を出すし、人目が有る時にはすぐさま切り替える。
これは一朝一夕で得られる技術ではないだろう、と一方通行はそのように評価を下した。別にそんな技術欲しくは無いのだが。

「行くとするかァ……」

「あ、次は父兄参加型競技なんだけど、それに2人は参加してもらうから」

黄泉川は思い出したかのように一方通行と久慈川に言う。
前もって言うと久慈川はまだしも、一方通行は間違いなく嫌がると考えられた事による処置であった。

一応、父兄参加型なので能力の使用は無しだ。

「はーい！」

「えェー……」

嫌そうな顔をしながらも、ここで嫌がったところで時間の無駄だと判断した一方通行は、渋々と言った形で承諾するのであった。

とはいえ、能力無しでの運動には少しばかり不安を覚えているようだが。

「ちなみに、競技名は「ピンチを乗り越えろ！」で内容は二人三脚大玉ころがししながらの障害物競走じゃん。

障害物競走のコースはくじ引きでランダムに選ばれるじゃんよ」

「なンでもかンでも混ぜりゃ面白いとか思ってンじゃねェぞ！！」

・・・

インデックスは屋台ゾーンを抜けると、カイジが騙された時ばりに背景をぐにゃ～～っとさせた。

たこ焼き（６個）、３００円。

イカ焼き、２００円。

焼きそば（大盛り）、５００円。

お好み焼き、５００円。
わたあめ、３００円。
りんごあめ、２００円。
串焼き（３本）３００円。
・
・
・
所持金、プライスレス。

上記のうち上から3行目までを購入した時点で、所持金は消滅していた。
だがしかし、腹は未だに膨れぬ。
腹は膨れぬが、辺りには屋台が良き香りを放ち、インデックスの嗅覚を刺激する。
その刺激が脳内を駆け巡り、すぐに空腹を訴える信号を全身に掛け巡らせた。

インデックスは、一瞬にして空腹になった。

けれども、金は無し。

インデックスは、逃げるように屋台ゾーンから駆けた。

・・・

その一団は依然としてグラウンドの一角を占拠して、のんびりと時間を過ごしていた。

そして、競技を終えたフレメア＝セイヴェルンを交えて昼食タイムを迎える。

「いやあ、ホント駒場のリーダーの意外すぎるスキル発揮してんなあ」

「たこさんウインナーが大体美味しいよ！」

「ミサカはこのきんぴらがお気に入りです。と、ミサカはフェイントを入れつつ本命のから揚げを取ります」

「な！？……ぬかった……ｓｕｒｅｌｙ、こんな所でそんなフェイントを織り交ぜてくるなんて思わなかったわ……」

「残念だったな、布束サン？食う事は生きる事。生きる事とはすなわち……戦いなんだぜ？
ってああ！？それは浜面さんが取っておいたダシ巻き卵！？」

「へっへーん！気を抜いて背を見せた事がハマヅラの敗因クマ！！」

「わーいクマありがとー！ってミサカはミサカはディフェンスが強くて取れなかったダシ巻き卵を前に歓喜してみたり！」

「……ここまで喜ばれるとは、思っていなかった」

いつの間にか一方通行が居なくなっていたので、一時は「あれ？一方通行何処だ？」とか言いながら辺りを見回したものだが（↑動いてまで探す気が無い）、一方通行の事だから何かに首突っ込んでるんだろと言う意見で満場一致した為、落ちついて弁当を食べる事にしたのだった。

駒場印の弁当は、このように大人数になることを想定していた為……と言うかインデックスと共に昼を過ごす事を考えていた為に、割と大量にある。
それも駒場の予想よりも今この場に居る人数が多いのだが、インデックスは居ない為余裕で全員が満腹になれる事だろう。

しかし、インデックスがこの場に居ない、と言う事は何処かの誰かがインデックスにたかられているのだろうか。
９９８２号は今日になってまだ見てないインデックスの胃袋の被害に遭っている人が居ることを前提に、空に向かって黙祷をささげた。

何となく空を仰ぐと、そこには飛行船に搭載された巨大モニター。
普段だとその日の天気やらニュースやらが放送されているが、今は学園都市内の大覇星祭模様が流されているようだ。

そのモニターには。

「きゃあああ！」

「障害物っておかしいだろォこれェェエエェ！！？」

「ひゃあああああ！！」

「クソ！こいつ動きやがるぞォ！？」

「いやあああああ！！」

「うわァァァァ！！なンだコレヌメヌメしてやがるゥゥ！！！？」

「ほぎゃあああああ！！」

「大玉が落とし穴にィィィ！！？」

「なに……これ……？」

「うそ……だろォ……？」

「「うぎゃあああああああああ！！！」」

「……一方通行は、一体何をしてるんでしょう」

少し目を離したらテレビ出演とは、流石学園都市第一位と言う事だろうか。

だがしかし、見ている限りでは能力を使用していない。ならば学園都市第一位という肩書は要らない。

「何でテレビ出演？と、ミサカは首をかしげます」

９９８２号は少し考え込むが、すぐに興味を失ったのか、再び駒場の弁当争奪戦争に戻るのであった。

・・・

「ハァハァ……」

「……はぁぁ……はぁ……」

一方通行と久慈川りせは、テレビカメラが回っていようと関係無しにその場に四つん這いになり息を整えていた。

まさか障害物競争のルートが最難易度・修羅のコースを引き当てるとは思いもよらない。

この最難易度のコースは１００枚有るくじ引きの中でも1枚しかない為（クジは毎回元に戻して引く）、

このコースは引き当てる人が居ない割に鬼畜すぎるコースで、次引いた時の評判次第では修羅コースは封印する事になっていた。

使われないコースを毎年用意するのは面倒だし。

そんな背景がある中で、二人三脚でりせちーに急接近した一方通行への苦情が上がると思われたが、どちらかと言うと、アイドル・りせちーのあんな姿やこんな姿を見られた事で評判が急上昇した。

これを受けた大覇星祭実行委員は味をしめて、来年もこの修羅コースを織り交ぜることを決定したのだが、

翌年の修羅コースの評価は最悪（何せ父兄がそのコースを行くのだから）。

結局修羅コースは翌年に封印する事を決定したのだが、これは完全なる余談である。

「ちょマジ待って……マジで休憩させて」

どうやら次の目的地も決まっているらしく、近場で歩いて行ける距離なのでそのまま歩いて行くみたいなのだが、一方通行は本気で休憩を求めた。

それほど厳しい道のりだったのだ、修羅の道は。

そんな一方通行を見て、久慈川は息切れさせ乳酸を貯め込んだ足を震わせながら嘲笑する。

「その程度で……へこたれるなんてね……私はまだ体力の半分を残してるわ……」

「ハッ……俺ァまだ6割を残してるぜェ……」

「さっきのは嘘で……はぁ……余裕で１００％元気よ……」

「深呼吸してンのバレバレだぜェ……まァ、俺は隠し玉で１２０％の力を発揮できるンだが……？」

「ふん、さっき「ちょマジ待って」とか言ってた癖に……」

「ありゃ演技だァ……中々の演技派だろォ？」

「そうね、『本当に演技』だったらね……」

何て言うか、不毛な争い。

確かに、あのコースは中々にハードだったが、あれで息切れするとは鍛えが足らないと言う事。

黄泉川愛穂は、一方通行に更なる鍛錬を課すことをを心に決め、この無駄な争いに終止符を打つ事にした。

「……ガキみたいな意地の張り合いしてるんじゃないじゃんよ」

「「誰が！！」」

（本当に仲が良いんだか悪いんだか）

少なくとも相性は悪くないじゃん。だとか黄泉川は思いながら、息の合った2人を見て苦笑するのであった。

・・・

科学の街・学園都市で生き倒れ。それは滅多にない状況と言える。とはいえ、「滅多にない」と言う事は「たまにある」と言う事なのだが。

その「たまに」に該当する人間……シスターが1人。

「お腹……減った……かも」

インデックス。一方通行に対して一方通行な挑戦状を叩きつけ、野口さんを相棒にどれだけ空腹を満たせるか、と言う意味のわからない勝負の真っ最中なイギリス清教所属のシスターである。

そんな彼女だが、今現在徹底された資本主義社会に絶望していた。

何をするにも、金。

何処に行くにも、金。

そして何より。

――――何を食べるのにも、金が要る。

しかし、金はただでは無い。

当然だ。

一定の価値を与えてあるものが金なのだから。

そして、それを引き換えにしてようやく食を得られる。

だがしかし、金が無い。

金を得るには？

働くしかない。

だがしかし。

「お腹が減って力が出ないかも……」

腹が減っては戦は出来ぬ。

しかし、食べ物を買う金が無い。

しかし、金を稼ぐだけの体力（満腹度：０）が無い。

「今までよく考えてなかったけど……お金って大事なんだね……」

何せこんなにお腹が減っているのは、お金が無いから。

今までだって上条家に居た時、そのような状態に何度か陥っていたではないか。

その時は一方通行や月詠小萌の家に駆け込んだりしていた為、事無きを得ていたのだが。

「お腹減った……」

一方通行との勝負は既に決していた。

# そのろくじゅうご　しょせんこのよはしほんしゅぎ（後書き）

なんだこのノリ

## そのろくじゅうろく　にちじょうがひにちじょうになるとき（前書き）

オリアナさんでるけど、でません

## そのろくじゅうろく　にちじょうがひにちじょうになるとき

今の時間帯としては3時のおやつくらいの時間で、大覇星祭開始から数時間たっている為、開始当初の盛り上がりは落ちつきを見せ、競技に参加する選手以外は大体日陰で涼んでいるようだ。

さて、学園都市も一通り回ったところでテレビ中継が一端打ち切られた。

次にカメラを回すのはナイトパレードだそうで、一方通行や久慈川りせは中々に疲れた表情で設営のテントで休息を取っていた。

一方通行が急遽生放送に参加し、二人三脚に参加など追加の予定が加わった事で仕事量が増えたようだ。

スタッフ達も一様にぐったりしていたが、その顔は何か達成感に満ちたものであった。

「正直あれでよかったのか不安なンだが」

「カメラの前なのに、普通に喋れてて良かったと思うよ。あそこまで自然体なのも珍しいけど」

久慈川は素直な評価をそのまま口にした。

その評価を受けて、一方通行は心底意外そうな顔をする。

「俺はてっきり、難癖つけてくると思ったンだが……」

「む、こう見えて公私はわける主義なの！

評価すべきなのは評価するし、駄目なのは駄目っていうし」

公に私を持ってこない、と言うのは非常に良い事だ。
態度はあれだが、評価されたという点のみを見れば素直に喜んでも良いのだろうか。
とはいえ、私の方はあまり快く思われていない気がする。

「公は良くても私は駄目ってことかァ」

「その通り！」

「……いや、まァ別にどォ評価されてても興味はねェンだけどなァ」

（……そこまで悪くは思ってないんだけどなぁ）

ぷい、とそっぽ向く一方通行を見ながら、久慈川は思った。
出会い方が悪すぎた、と言う事だろう。
互いに互いを否定した事が始まりなのだから、どちらも良い思いを持つ訳が無い。
とはいえ本当に嫌いなら、こうやっていつまでも一緒に話しているなどありえないだろう。

最初に取った態度を軟化させるタイミングがつかめない、と言ったところか。

今日限りの付き合いの割には、久慈川は黄泉川愛穂の事もそうだし、一方通行の事もそれなりに信頼していた。

・・・

ナイトパレードまで後3時間と言ったところだろうか。
休憩を始めて早３０分。会話も途絶え、２人は何やらボーっとし

ていた。

とどのつまり、暇だった。

特にすることも無いから学園都市を案内しろ、と久慈川りせが言うので、一方通行は面倒くさそうにしながらも腰を上げた。

一方通行自身、この何もすることのない時間にすぐ飽きたのだろう。

ナイトパレードに向けて打ち合わせをするプロデューサーと黄泉川愛穂に許可を取り、テントを後にした。

「有名人が帽子とサングラスでゴマかそォとするって、本当なンだなァ」

一方通行は自身の隣を歩く帽子＋サングラスを装備＆ツーサイドアップ↓ポニーにジョブチェンジした久慈川を見て、しみじみと呟いた。

それが独り言なのかはたまた久慈川に話しかけたのかは分からないが、久慈川自身一方通行に言いたい事があるので、一方通行の言葉に返答する形で口を開いた。

「そりゃ、さっきまで生放送してたんだからちょっとは気を遣うに決まってるじゃない……」

「ふゥン」

「ふぅんじゃなくてさ、あなただってさっきまでそこらにある大きなモニターにしっかり映ってたんだからね？」

ただでさえ目立つ容姿してるのに、そんな堂々と歩いていては久慈川が変装した意味がなくなりそうである。

しかし、そんな細かいことを気にしないのが一方通行。

何やら近づきがたいオーラの様な威圧感を放つ事で、「あれ？テレビに出てた人？」と思われたところで、話をかける勇気を持った人間が居ない限りは問題ない、と言う訳だ。

「まァ、話しかけられなきゃどうという事はねェよ」

「そ、そうだけど……」

余りに自信満々に言い放つものだから、何となく言い返す事が出来なかった。

とはいえ、実際に話しかけてくる人間が居ないのも事実。

道行く人がちらちらとこちらをうかがっているのは感じられるものの、実際に話をかけて来る様子は無い。

何やら自身の三白眼を以って、ギラギラと獲物を狙うかのような眼力を発揮していて、それに恐怖したのか誰も近づけていないようだった。

「まァ、万が一なンかありゃアンチスキルがすっ飛ンで来るから安心しろ」

「あれ、あなたは守ってくれないの？ちょーのーりょくで」

「言っただろォが、『万が一』って」

どこまでも自身を信じている。

だがしかし、それを過信だとも思えず、純然たる事実なのだと久慈川は何となく思った。

それは自分には無いもので、少しだけ――――

すると、不意に一方通行が足を止め、後ろを振り向いた。

久慈川もその動きを見て足を止める。

「どうしたの？ってあれ……？」

久慈川は一方通行に尋ねながらも、後ろを振り向くとそこには。

「あぐぜられーだあああああ！！」

ぐすぐすと泣きじゃくりながら、一方通行にしがみつくインデックスが居た。

どうやら一方通行を見つけられた事で安堵して、そのまま涙が出てきたようだ。

「……その様子だと、あれだろ、あっという間に金使いきっただろォ？」

「……」

インデックスは何も答えない。ぐしぐしと涙をぬぐい、一方通行の言葉を待っていた。

一方通行はそのまま言葉を続ける。

「知ってっか？１０００円ってのはなァ、人がおよそ1時間働いて初めてもらえる額なンだぜェ？

……別に働いて金稼げなンて言うつもりはねェが、

あのお人よしは、空っぽの頭をフルに使って家計をやりくりして

るって事ぐれェは念頭に入れとけ」

「……うん」

言いたい事は言ったし、伝わった。

一方通行はそのように判断を下すと、歩く先を方向転換する。

「……それじゃ、屋台行くぞォ」

「うん！」

訳がわからん、と言った顔をする久慈川を差し置いて話が完結していた。

何だか、すごくいい話っぽくなってるし。

「お前も、あンま食ってねェだろォ？行くぞ」

「え？う、うん……」

久慈川を置いてきぼりにしたまま2人は屋台に向かうので、何も言い返す暇も無いまま久慈川もそれに追従して行く。

しかし、元気を取り戻したインデックスが突然足を止めた。

「……魔術の気配かも。これは回復術式かな？」

「何ィ？」

「え？ま、じゅ……？」

一方通行が怪訝な表情を浮かべ、久慈川はポカンとする。

そんな2人をそのままに、インデックスは一目散に駆けて行った。

「おい、インデックス！……あァもォ、緊急事態だ！久慈川お前テントに戻れェ！！」

そのように一気にまくしたてると、一方通行もインデックスの行く方向に向かって走り出した。

そして訳もわからず行き先を屋台に変更されたと思ったら、訳もわからず行き先を元のテントに戻るように言われた久慈川。

しばらくの間、小さくなりつつある二つの背中を眺めた後、

「ああもう！何よ私だけ除け者にしてー！誰が帰るかってのー！！」

ぷりぷりと怒りながら、２つの背中が向かう先へと走りだした。

・・・

時は遡り、上条当麻が御坂美琴の借り物競走に借り出された後の事である。

何か無理矢理御坂に引っ張られたと思ったら、借り物の条件は「棒倒しに参加した生徒」だそうだ。

そんなんいくらでもいるやん？って思ったけど俺が知り合いだから丁度良かったのかと、上条は納得した。

今度こそインデックスを探すかと思い、地に降ろした腰を上げる。

すると人ごみの中に見た顔が２人いた。

――土御門元春とステイル＝マグヌス。

一見して和やかな雰囲気で会話をしているように見えるので、ステイルもインデックスを見に来たのかなーとか思うが、土御門とステイルと言う組み合わせと言うだけで嫌な予感がする。

離れようかと思ったが嫌な予感が本物だった時、恐らく後悔するだろう。そのように考えた。

逆に、普通にインデックスに会いに来ただけだとしたら、インデックスの事を預かっててもらいたいところだ。

上条自身競技に参加していると、どうしてもインデックスの事を構ってやれない。

それなら、魔術サイドの事情を知っている人間が近くに居てくれた方が色々助かる。

そのような打算的な考えも相まって、何気なく2人に近づいたのだが。

「――――だから……そう言う事情があるから……」

近づくたびに声が聞こえてくる。

「そりゃそうだ――――連中にとっては……チャンスなのだろうな」

笑顔で会話していると言うのに、イマイチその口調からは良い予感が感じられない。

とはいえ、ここで引く気は無い。この嫌な予感が本物だとしたら、なおさら。

そうして、上条の嫌な予感を裏付けするように、ステイルは口を開いた。

「――この街に侵入した魔術師を何とかしなければならないわけだ」

上条の日常はそこで崩れ去り、今日もまた非日常が幕を開けることとなる。

・・・

魔術師が侵入している。

と言ったところで、大覇星祭をほっぽり出してそれを探す訳にはいかない。

周りにその事を悟らせてはならないのだから。

故に上条当麻と土御門元春は何事もなかったかのように、次なる競技に向かった。

競技は『男女混合大玉ころがし』。父兄参加型のとは違い、純粋に大玉を転がす競技である。

と言っても、能力使用は有りなのでその危険度は何倍にも跳ね上がるのだが。

競技が行われる喧騒に紛れ、上条と土御門は今後の方針について話し合っていた。

本来、『幻想殺し』を失った上条が魔術サイドのいざこざに関わらない方が身のためだ。

だがしかし、上条当麻の下にインデックスが居られるのは、「上条当麻が幻想殺しを持ち、インデックスの保護者たりえる」からだ。

とはいえ、必ずしも幻想殺しを持っている必要はない。インデックスの保護者足り得る実力さえ持っていればいいのだから。

故に上条は示さなければならないのだ、「力」を。

だが、上条にそのような思惑は無いだろう。

この街に住む友人に、インデックスに害が及ぶかもしれない。

動く理由はそれだけで十分だった。

「……そう言う訳だから、携帯を持っておいてほしいぜい」

「分かった……つか、インデックスは放っておいて良いのか？」

「ああ、それはな……「ぐあああああ！？」」

上条の質問に土御門が答えようとするが、その瞬間唐突に上条の背後から衝撃が走った。

衝撃の正体は。

「コラ上条！ぼさっとしてるんじゃない！」

「最近はそうでも無かったけど。上条君。やっぱり君には女難の相が出ている」

後ろから追い上げてきた女子勢の大玉。

上条のクラスメイト達が、前を走っていた上条ごと巻き込んでそのまま先へと行ってしまった。

倒れ伏す上条に、同情を禁じ得ない。

「ふ、不幸だ……」

「……カミやんからそのセリフ、久々に聞いた気がするにゃー」

・・・

なんやかんやで傷つきながら息絶え絶えに競技を終わらせた上条当麻は、ふらつきながらも携帯電話を取りに教室へと戻っていた。

「イテッ……畜生、思い切り轢かれたなあおい……」

ぶつくさと文句を垂れながらも、自身のカバンをあさり、携帯を取り出そうとする。

すると携帯電話の前に、あるものを見つけた。

「召喚器……」

召喚器。以前学園都市外部でごたごたした際、桐条美鶴と言う女性に言われて試したところ、この（現実）世界でも召喚が可能だと言う事がわかった。

上条には力が足らない。確かに、鍛えてはいるのでその辺の人よりかは動けるだろう。

とはいえ、魔術と言う異能に対しては非常に弱いと言える。

それではインデックスを守る力が無いと思われてしまう。

そうなってはインデックスがイギリス清教へと戻されてしまう。

インデックスがそれを望むのならば構わない。

ただ、それを言葉にしないうちにインデックスを帰らせるなど、認めない。

上条は、召喚器を腰に差し、ハーフパンツのひもをギュッと締めると、続いて携帯電話をポケットの中に滑り込ませた。

願わくば、引き鉄を引く事の無き様に。

上条は人に心の仮面を見られる事よりも、その力をこの世界で振るう事にためらいを覚える。

・・・

敵の名前は、リドヴィア＝ロレンツェッティとオリアナ＝トムソン。

前者はローマ正教。後者は運び屋。

ローマ正教、と聞いて上条当麻はまたかよ、と気だるげに愚痴った。

端的に言えば、ローマ正教が運び屋を雇い、何かを誰かに運ばせているというものだ。

その何かの名称は、『刺突抗剣（スタブソード）』。

――あらゆる『聖人』を、一撃で即死させる霊装。

すなわち、それを使用された場合、あの強力な力を持った神裂火織は何もできずに死ぬと言う。

故に今回、運び屋のオリアナを捕まえる事が主な目的なのだが、神裂は参戦できない。

それを使われてはたまったものではないからだ。

また、他の魔術師を集め人海戦術をさせてはと上条は土御門元春

に聞いたが、それも出来ないそうだ。
今回、ステイル＝マグヌスと言う魔術師が学園都市に来られた理由は、「知り合いを見に来た」という大義名分がある事に起因する。
すなわち、その大義名分を持たないイギリス清教の人間を呼び寄せては、他の組織が黙ってはいないだろう。
「お前達が学園都市に入れるなら私達も」等と言って、堂々と学園都市に侵入する機会を与えてしまう事は防ぎたいのだ。

そんな訳で今回の任務は、上条と土御門、そしてステイルの3人で行わなければならない。

インデックスと言う魔術の専門家が居れば良いのではとも思うが、今現在のインデックスの立ち位置は非常に繊細なもので、本来学園都市の外に出てアニェーゼ部隊と相対したり、シェリー＝クロムウェルと相対したりなどしていたら、いつか敵対勢力に学園都市入りさせるきっかけを与えてしまう恐れがあるのだ。
故に今回は意図的にインデックスをこの件には絡ませない。と言うかこれからもそうすべきなのだ。
そういう事情も相まって、今回の上条の主な任務としては「インデックスをさりげなくこの件から遠ざけつつも、オリアナを捕捉する事」だ。
流石に捕まえるのは無理としても、見つけてそれを知らせる事は出来る。

上条はまずインデックスを見つけようとしたのだが、何処に行ったのやら全く見つからなかった。
結局、インデックスより先にオリアナが見つかった為、そちらを追う事を優先させたのだが。

――それは大きな失敗だった。

・・・

目的の人物は割とすぐに見つかった。

しかし、彼女は『運び屋』で、『逃げる』事に特化した魔術を身につけているようで、彼女との追いかけっこは結構な時間をかけて行われていた。

運び屋・オリアナ＝トムソンの得意とする魔術は、『速記原典（ショートハンド）』という魔道書の持つ魔法陣としての側面に特化したものである。

土御門元春が言うには、その魔術が近くの競技場に罠として仕掛けられているらしい。

何故『ただの運び屋』であるオリアナが、競技場と言う一般人も居るような場所にそのようなものを設置したのは謎だが、一般人が傷つく恐れがあると言う時点でそれを無視する事は出来ない。

恐らくそれに時間をかけさせる事で、オリアナが逃げる時間稼ぎをするつもりだったのだろう。

思惑に乗るのは癪だが、そんなことを言っている暇はなかった。

競技場、と言う事でステイル＝マグヌスは入れない。

故に上条当麻と土御門が選手の振りして校庭に入ることにしたのだが。

上条は競技場を前に、躊躇いの表情を浮かべている。

「中学生に混じるって抵抗あるなあ……」

その競技場では、中学生が学校単位で玉入れをするそうだ。
それに混じって術式探しとは弱ったものだと思う。万が一高校生だとばれれば変態扱いされるではないか。

「これが小学生とかだったら色々詰みだったぜい？生徒に混ざる訳にもいかないしにゃー」

土御門は冗談交じりに笑う。その笑みに幾ばくかの苦悶が浮かんでいるのは、この競技場に仕掛けられている術式を探知するのに魔術をつかったからだ。
とはいえここは学園都市。変な輩を侵入させないようにチェックは万全である。

と言う訳で、まずは全身を泥だらけにして「体操服がどの学校かわからない」ようにします。
続いて、着替えが無い振りをして警備を言いくるめます。
最後に、泥だらけの手でＩＤカードを調べる機械を狂わせます。
そして状況があやふやなまま、着替えを取りに行くふりをしながら競技場へ向かいます。

「以上！楽に侵入出来る方法大全その１１だぜいっと」

土御門は手馴れた様子で警備員を騙すと、上条を引っ張って保健室へと向かって行った。

「体操服の予備ってのは保健室にあるのが相場で決まってるもんだにゃー！」

競技開始まで、残り僅か。
２人は保健室につくと、着替えを二着頂いて、競技場へと赴いた。

そこには実行委員が玉入れの準備として大量の玉をばらまく姿と、そのもう少し後ろで、常盤台中学のお嬢様方が優雅に競技前のティータイムをしている。

「な！おい土御門、敵は常盤台だぞ！？気を抜いたらオリアナどころじゃなくなる！」

「分かってる！気張っていくぞ、カミやん！術式もそうだが、流れ超能力にやられないようにな！」

相手は常盤台中学。

見た目はお嬢様と言う事で、観客席から向けられたカメラも多い。それは単純に華があるということだろうが、学園都市を知る者にとってはそうではない。

何せ最低でも強能力者（レベル３）、最高は超能力者（レベル５）を有する学校だ。

それを相手にするという事で、上条達が居る側の学生達はその数２０００に及ぶと言うのに、何処か負け戦に赴くかのような、悲壮な死相に満ちた顔をしていた。

常盤台中学側から見ても、彼らからどんよりした雰囲気が感じられる。

今回も大丈夫そうですわね、と言うのが彼女らの総意だ。

そんな中、彼女達の中でも最も強いとされる能力者だけが、動揺を隠せない顔をしていた。

（な、何で高校生のあいつが中学生に混ざって私達の敵にまわってんのよー！！？）

御坂美琴は困惑した。
どれだけ負けにさせたいのか、理解が追いつかなかった。
だがしかし、これだけは分かる。

（敵に回るなら、倒すまで！！）

ギンッと強い意志を持った目で上条を見据えると、その視線に気付いた上条は気まずそうな顔をする。

「うげっ御坂かよ……」

「いや、あれも常盤台なんだから、居るのは当然だぜい？覚悟した方がいいんじゃねーのか？
ありゃどう見てもカミやんだけを狙ってる目だ」

「うぐぅ……や、やってやります事よ！」

上条はヤケクソ気味に叫ぶ。それに押され周りの生徒達も戦意を上昇させた。
何だか上条に共感の念を抱いたらしい。無駄なカリスマの発揮である。
そうして、高校生2人を交えた玉入れは開幕する。

・・・

「恐らく、『速記原典』は籠のどっかに仕掛けられてるっぽいぜい。
玉は今ばらまいてるけど、それならさっきまでは玉は倉庫にあったはず。
ならさっき探知術式を行った時に、倉庫に探知が向かないとおかしいんだにゃー。

だけど、探知は『競技場内』に向いた。て事はこの場に固定されてる籠が怪しいってことだ。
それに、籠の方は随分前から設置されてたらしいからにゃー」

赤組と白組、それぞれ２０００人ずつがこの競技に参加するのだ。
それに伴い籠の大きさは半端ない。故に当日に籠を設置するのは手間なので、あらかじめ籠だけは設置して置いてあると言う訳である。

「でもさ、どうやって？外の警備見る限りじゃ、わざわざそれを突破するのって無駄じゃないか？」

「多分、籠が外部からの備品だったんだろうさ。それなら、警備の薄い外であらかじめ設置しとけばいいはずだ。
おそらく、『速記原典』の発動のタイミングはオリアナの方で決められるんじゃないか？
そうすりゃどっかでこの場の事は放送されるだろうから、モニターから見れば発動するタイミングは決められる。
それに、あっちだって取引は円滑に行いたいはずだぜい？
なら、騒ぎを無駄に起こすような愚行はしないと思うぞ」

土御門元春は、軽くストレッチをしながら笑った。

「なるほどなー」

兎にも角にも、籠を調べて怪しい何かが無いかを調べればいい。
とはいえ上条には幻想殺しは無いので、何か見つけたら土御門をすぐに呼ぶ事。
上条は自身のすべきことを確認すると、両手で頬を叩き、気合いを入れた。

それに合わせるかのように、玉入れ開始のアナウンスが鳴り響いた。

「「おおおお！！！」」

一同は叫び声を上げながら、玉を拾うべく駆ける。

２０００人の塊が二組。赤と白に分かれて走るものだから、土煙が一気に立ちこめた。

何だかノリの軽いＢＧＭを背景に、その内容は苛烈だった。

何せ学園都市が誇る常盤台中学の生徒達による一斉掃射だ。

「うわあああ！カミやん、右から来るぞ、気をつけろぉぉ！！？」

「うぎゃあああ！！！」

上条に引っ張られる形で、絶望していた生徒達が気合いを入れて常盤台に立ち向かうが、その能力差は圧倒的だった。

２０００人も居るので大抵の能力は使えるのだが、敵方に常盤台が居るせいで、大抵はその上位互換の能力をぶつけられる形になる。

純粋に力の押しあいでは勝てない、と言う事だ。

とはいえ、上条と土御門は何も助っ人として勝ちに来た訳ではない。

何とかして籠の傍へと寄る事。それが重要であった。

とはいえ、土御門は既に魔術の行使で体が傷ついている。

ちょっとした攻撃で、土御門の傷口が開いてしまうかもしれない。

目の前に広がる、自分達が体験した棒倒し以上の能力の応戦に、上条と土御門は顔を見合わせた。

「……」

「……」

最早玉入れではなかった。

しかし、そうして顔を見合わせている間にも、次々と能力は飛来して来る。

「行くぞ、カミやん」

「……おう」

2人は心を決めると、一気に駆けだした。

目の前では次々と人が、玉が吹き飛んで行くが、それに目もくれず真っすぐに籠へと向かう。

「よし、とりあえず俺はこの籠から調べてくけど、カミやんも何か怪しそうなの見つけたら教えてくれ。

後はこっちで何とかする。あ、間違っても何か見つけたとしてそれに『触れる』なよ？

恐らく、発動のキーは『触れる』事だと思うからな。声とか音だと俺達に狙いを定められないはず。

つーかこの喧騒の中発動してないのが何よりの証拠かにゃー？」

「分かった！……ってあれ？そういやその術式を見つけてからどうするつもりなんだ？」

「もちろん、土御門印の陰陽術で封印するぜい？何、陰陽術ってのは元々防御や探知、封印に長けた術だからな。
粗雑に造られた原典の封印など容易いさ」

「……そうか」

止めたい。しかしそれを為すだけの『力』が無かった。
悔しそうに歯？みする上条を見て、土御門は嬉しそうに笑う。

「そんな顔するなよ、カミやん。出来れば超電磁砲とかで術式ごと籠を消し飛ばすのが楽だし上手く行けば誰も怪我しない方法だろうけど、あれを巻き込みたくはないだろう？」

「まあ、そうだけど……」

そうして、上条と対話を交わしながらも1本目の籠のチェックが終わったらしく、次の籠へと走って行った。

「クソッ……ホントに無力だな、俺……」

上条の呟きは、玉入れの喧騒の中に消えて行った。

・・・

「……何も、不自然なとこは無い、よな？」

魔術の知識など皆無な上条が、籠を調べたところで何か分かる訳がなかった。
これなら、この場は土御門に任せてオリアナを追う方が効率が良いのではと後悔した。

「いや、土御門は怪我を負ってるんだから、それの盾位にはならなきゃな！」

考えを改め、とりあえず籠のチェックよりも土御門の護衛に回る事にした上条は、土御門の方へ走ろうとしたのだが。

そんな上条の真横を一閃、よぎった。

「こ、このビリビリっとした感じ……」

「あ、ん、た、は……何やってんのよ～！！！」

「げぇっ、御坂！？」

御坂美琴は全身からビリビリと放電させながら、手にはコイン。この大覇星祭ではレベル５としての力は制限されている（圧倒的力量差を埋める為）が、それでも十分強力な武器を携えている彼女は、目の前に居るツンツン頭に一言物申す為に立ちふさがった。

「何であんたはこんなとこに居るのかな？かな？」

「え、ええっと……それはのっぴきならねえ事情って奴がございましてね……へへっ」

ぺこぺこと縮こまって言い訳をする上条。

しかし、そんな姿すら御坂の怒りの炎に油を注ぐ結果にしかならない。

「のっぴきならねえって……私に罰ゲームをそんなにさせたいのか

しら……？」

「いや！そういうことじゃない！みての通り玉を入れる気０だから！な！？」

「じゃあ何でここに居るのよ……」

御坂は怒るのも馬鹿らしくなったのか、疲れた表情で籠のポールに寄りかかろうとする。

そのポールには１枚の紙が。

『速記原典』、一度オリアナ＝トムソンと相対した時には単語帳の様なものを使っていた。

ならばここに刻まれている魔術だって、紙が使われているかもしれない。

「あ！御坂ストップ！」

「え？何？」

「……そのポールにくっついてる紙、何か書かれてるか？」

質問の意図が分からず、はい？と言った表情を浮かべる御坂。

とはいえ、真剣な顔をする上条からは、悪ふざけではないと言う意図が十分伝わったので、

御坂は素直に答える事にした。

「……野木中学校備品、って書かれてるわね、それがどうしたの？また何か厄介事？」

御坂は、意味のわからない質問や言動をする上条から、何か事情を抱えている事が見て取れた。
何で手伝ってほしいだとか、助けを求めないんだこいつはいつもいつも、と言った具合に愚痴が脳裏を駆け廻るものの、それどころでは無いので御坂は上条に対して文句は言わない。

「……まあ、ちょっとな」

上条がそんな御坂の言葉に返答しあぐねていると、

「そこで何をしている。上条当麻」

聞き覚えのある、クラスメイトの声がした。

「その声は……」

恐る恐る、上条は声の聞こえた方向を向く。

「そこで何をしている、と私は聞いたんだけど？」

上条のクラスメイトで大覇星祭実行委員でもある吹寄制理が、怪訝そうな表情を浮かべながら、体を支えるように籠のポールを掴み佇んでいた。

「全く、何でこんな所に居るのかは知らないけれど、ここは中学生同士が戦う場よ。
高校生であるあたしやあなたは場違いな存在なの。こんな能力のぶつけ合いのなかここまで来たあたしを褒めて欲しい位ね。
何にせよ、さっさとここから離れるわよ。言い訳は後にしなさい」

体操服の上に薄いパーカーを羽織るが、そのパーカーはこの立ちこめる土煙や、飛び散る泥のせいか、少し汚れが目立っている。
どうやらこの競技の参加者では無い上条の姿を確認して、実行委員としてそれを止めに来たらしいのだが、上条の視線は吹寄には無かった。

彼女の掴む手とポールの間に挟まれた、1枚の紙に目が釘付けになっていた。

それが先程の様に、何処かの備品であると示す言葉が記載されていれば幸いなのだが。

そんな上条の思いを嘲笑うかのように、『英語の筆記体』の様なものが青字で書かれていたように見えた。

瞬間。

「吹寄ぇえぇえぇえぇ！！！！」

バギン！と言う鈍い音が響き渡り、吹寄の体はぐらりと斜めに揺らぐ。
その倒れ方は明らかに異常で、上条は思わず叫び、吹寄の体を支えるべく駆けよった。

その声を聞き駆けつけた土御門が、すぐに『速記原典』を止める術式を構築しにかかる。
辺りは相変わらず能力がひっきりなしに行ったり来たりしているので、土御門が何をやっていても目立つ事は無いだろう。

しかし、間に合わない。

『術式を止めるだけ』では間に合わないのだ。

とはいえ、止めなければもっとひどい事になる。

土御門は体に鞭打ち、『速記原典』を止めるべく術を発動させた。

その反動で更に体に傷を作る事になったが、今はそれどころではない。

「……カミやん！吹寄の様子は！？」

ゲホゲホと、血を吐きながら吹寄の様子を問うが、明らかに土御門も重傷であった。

訳のわからない、と言った顔をする御坂を完全に無視して、上条は吹寄の様子をうかがっているが、動悸が激しく、ダラダラと汗を流していると言うのに体はひんやりと冷たい。

明らかに異常だった。

しかし、それを何とかする術が上条にはない。

苦しそうに息を吐く吹寄に、何もしてやれない。

何とかしたい

力が無い。

吹寄の体を蝕む『異常』を何とかしたい。

そんな都合の良い力が、今すぐ欲しい。

すると、不意に何かが頭をよぎった。

その直感は、腰に差してある召喚器に起因しているのか知らないが、真っ先に上条は召喚器を手にした。

辺りには御坂と土御門、それに吹寄しかおらず、他の一同は互いに飛んでくる能力に集中しているようで、更には誰かの能力か知らないが突風が吹き、土煙が更に巻き上げられた。

それを上条は好都合と見る。

カチリと召喚器をこめかみにつきつけると、

上条は引き鉄を引いた。

「……オケアノス、アムリタ！！」

御坂と土御門が驚愕の表情を浮かべているが、それを無視して叫ぶ。

吹寄を助ける『力』を、『心』から求めた結果が、これだった。

アムリタ。死亡・ダウン以外の状態異常を回復させる。

『心』はそれに応えたようで、オケアノスが吹寄に手をかざすと、何か白く柔らかい光が吹寄を照らした。

オケアノスが消えると、吹寄は先程までの苦悶に満ちた表情は落

ちつきを取り戻し、安定した寝息を吐いているようだった。

「……カミやん、今のは」

土御門が上条に尋ねる。土御門も何となく予測はついている、と言うか『それ』しかあり得ないと思っているが、先程までの光景が何となく嘘か夢かに思えて仕方がなかった。

「……とにかく、一旦この場を離れよう。御坂、お前には後で事情は話すから、この場では何も聞かないでくれ」

「え、えっと……うん……」

上条は吹寄をおぶさり、土御門の体を支えると、辺りを見回して最短距離でこの戦場から離脱するルートを探し始めた。

「カミやん、お前は吹寄を頼むぜい。俺は大丈夫だから」

「……本当か？」

「本当本当」

「……分かった」

渋々、と言った様子で上条は土御門から手を離した。

（……あれが、『ペルソナ』か……）

土御門は、上条が召喚したオケアノスを思い出し、考える。

（アレイスターが、いや、『暗部』がこの力で何かしようとしてるのもうなずけるな）

これほどの力。研究者達の唱える『レベル６』に至る道も見えるかもしれない。

ならば研究しないわけにはいかないと言う事だろう。

オリアナに関してもそうだが、この件が終わったら色々と調べなければならないな、と土御門は休みの日が欲しいと、内心愚痴りながらも重たい体を引きずって、競技場を後にした。

## そのろくじゅうろく　にちじょうがひにちじょうになるとき（後書き）

かんっぜんに詳しいとこは原作読んでって感じの流れ。
オリアナさん姿を見せてないのに吹寄さんになんてことを！！

## そのろくじゅうなな　がちんこ（前書き）

一方さんは出ないです。上条さんｖｓオリアナさん

**そのろくじゅうなな　がちんこ**

朦朧とする意識の中、吹寄制理は見た。

とある少年の顔を。

最初は、ふらつく身体を日射病か何かのせいかと思っていた。

しかし、自身の体調管理は普段から厳密に行っている。

特に、大覇星祭実行委員として働いている今は、殊更に。

だが、彼女の身体は重く、日の下に居るとは言えそこまで言う程動いていないと言うのに、汗でべた付いている。

別の要因があるとするなら、心的疲労だろうか？

実行委員として大覇星祭を成功させねばと、一人肩肘張った結果、知らない間にストレスを貯め込んでいたとか？

確かに、吹寄はこの大覇星祭を成功させるべく、色々と働いた。

慣れない力仕事や、審判の手順を暗記等、円滑に大覇星祭を進めるべく。

だがしかし、そんなことを上条当麻が知るはずはない。

なら、どうして？

（――どうして目の前の男は、こんなにも悲痛な顔をしているの？）

別に上条の事は何とも思ってはいない。
はっきり言えば赤の他人だ。

そんな上条が、何故そのような顔をして吹寄の名前を叫ぶのか。

それが理解できない。

いや、確かに上条からは吹寄を心配する気持ちは伝わってくるのだが、それ以上に別の何かを見ているように感じた。
まるで予定外の出来事が起きてしまった、と言う焦り。それが見え隠れしていた気がする。

何か、大覇星祭の裏で予定外の出来事が起きている？
だとしたら、凄く嫌だ。

実行委員の皆で、この大覇星祭を成功させると誓った。
そして、学生も一般の人も皆に笑ってもらおうと、頑張って準備してきて今日と言う日を迎えたのだ。

だから、目の前の上条にも、大覇星祭を楽しく過ごして欲しいと思ったのに。

そんな悲しそうで、悔しそうな顔はしないで欲しいと思う。

そして、吹寄は。

――拳銃をこめかみにつきつける少年を視界に捉えた後に、意識を閉ざした。

その後すぐに、玉入れは一時中断を迎えた。

何でも能力のぶつけ合いをしすぎたせいで、籠がバッサバッサとなぎ倒された為に玉入れどころではなくなったからだそうだ。

そんな訳で籠を直す作業のどさくさにまぎれて、上条当麻は吹寄制理を担架で病院に運んでもらうよう頼み、その場を後にした。

その時吹寄を受け取った救急隊員は、「鬼の形相をした少年を見た」と供述している。

・・・

「何かごちゃごちゃと込み入った事情があるのは分かった」

上条当麻は、土御門元春とステイル＝マグヌスの電話越しでの会話をまとめた。

だがしかし、そんな事情は魔術師同士で頑張ってくれと言いたい。

ただ一つなのだ、上条が望む事は。

――オリアナ＝トムソンをとっ捕まえて、張り倒す。

真っすぐ行ってぶっ飛ばす。右ストレートでぶっ飛ばす。と、頭の中でリフレインさせながらも、今もなお続く土御門とステイルの会話に耳を傾ける。

電話越しなので、ステイルの言葉は余り聞き取れないが土御門の

言葉から察するに、何やらステイルが今からオリアナ＝トムソンを探知する為の術式を起動させるらしい。

つまり、その術式が発動したらオリアナの位置を特定出来るのだが。

一度オリアナと邂逅した時に、ステイルに向かってオリアナが発動させた魔術があった。

その魔術は、それを受けた術師が魔術を発動する事をキーとして動く自動迎撃式の魔術だ。

術師は魔術を発動させる事は出来るのだが、この自動迎撃の魔術によって術師の魔力精製を空回りさせられる。

魔力とは生命力と言い換える事が出来、それを空回りさせられると人体に変調がきたされるのだ。

すなわち、そんなものを受けたステイルがいつまでも戦線に居られる訳が無いので、その術式を展開している場所を特定及び破壊を行うべく、先程は玉入れ合戦の中に入り込んだのだ。

さて、先程土御門が体をボロボロにさせながらも術式を封印・破棄したわけだが、ここで疑問が一つ浮かぶ。

何故一般人たる吹寄に術式が反応したのか。

それは術式が反応する条件に起因する。

条件としては、「オリアナの魔術を受けた術師が、「魔術」を発動させる事で魔力精製を空転させる」と言う代物なのだが、『速記原典』の性質上かなりアバウトな仕上がりになっている。

すなわち、その術式の中で意図するしないに関わらず、『魔術的な意味を持つ行為』を行う事でも迎撃術式が発動されてしまうのだ。

これがもっと練り込まれて造られた魔法陣であれば、そのような

事態を避けるように陣を展開しているのだろうが、それはさておき。
とどのつまり、『魔術的な意味を持つ行為』とは『手で触れる』と言う行為であり、それを行えば最後、魔術を使えなくとも生きとし生ける者なら、自身が持つ生命力を乱されてしまう為、魔術に耐性の無い一般人がこの術式を受けてしまえばどうなるのかは考えるに難くない。

と言うより、実物を見せられてしまった。
ギリ、と上条が歯を食いしばったところで、土御門から声がかかる。

「カミやん、もうすぐオリアナの場所が特定出来るぜい」

「そうか……ステイルは魔術を使ってももう大丈夫なのか？
さっきその術式を壊したけど、それだけで本当に大丈夫なのかはわかんないだろ？
いや、魔術の事なんてわかんねーから、それもよくわからないけどさ」

「ああ、電話で聞く限りなら大丈夫そうだったぜい。
心配ならステイルの声でも聞いとくかにゃー？
どうせオリアナを捕捉したらまた電話かかって来るし」

土御門は上条の質問に軽い口調で答える。
鬼気迫ると言った様子の上条の雰囲気を和らげようとしたからなのか、はたまたただ単にからかっているだけなのかは知らないが、そんな土御門に上条は少しだけ表情を柔らかくした。

「いや、別に良いよ。あいつと俺は仲良しこよしなんて関係じゃないだろ？」

上条も先程までは頭に血がのぼっていたが、腰に感じるひんやりとした召喚器の感触を確かめると、心を落ちつけたのか冗談交じりに土御門へと返答する。

「よーしカミやん、吹寄の仇討ちに息巻くのは構わんが、そうやって落ちついてねーと上手く行くもんも行かなくなるぜい？」

「そうだな、悪かったよ……もう、頭に血は上らせねえ」

先程と同様に表情を硬くするものの、その表情は先程のように怒りから来る表情ではなく、非常に真剣なもので落ちつきを持った顔だった。

それを確認した土御門は最後にもう一つ笑って、そして2人はオリアナを探しだすべく動き出す。

・・・

「間違えちゃった、てへ。じゃ済まされないわね……」

行きかう人だかりの中でただ一人、誰も目に向けない電光掲示板に掲載されたニュースを眺めて、金髪の美女は呟いた。

内容としては「玉入れ中断の際中に、女生徒が倒れた」と言うもので、ニュースとしては話題性に乏しく、よく見る日射病には気をつけましょうという呼びかけの為の内容だろう。

それだけの内容だと言うのに、この女性は予想外の内容に衝撃を受けたと言った表情を浮かべている。

「謝って済まされる訳が無いのは当然だけど」

自分には為すべき事がある。
と、オリアナは脇に抱えた看板の様なものに、強く指を喰い込ませた。

・・・

上条当麻と土御門元春は走っている。
しかし、人ごみの中押しのけるように走っているので周囲の人たちは迷惑そうな顔をしていたが、それを気にしている暇もましてや謝っている暇もない。

先程ステイル＝マグヌスと会話した時はスピーカーがオフになっていたので、上条は２人の会話が分からなかったが、今はオンになっているので会話を聞きとる事が出来ている。
そうして上条と土御門は、２人同時にステイルのナビを受けつつ走り続けていた。

『オリアナ＝トムソンの位置を特定出来た。第七学区の地下鉄、二日駅周辺だ。
もう少し探知を続ければ正確に特定できる』

「な！？そこならさっき通り過ぎちまった！」

上条は慌ててブレーキを踏み、身を翻して今まで通った道を引き返す。
途中路地裏に入り込み、駅へのショートカットを図った。

先程までは土御門が先導していたのだが、やはり傷が響いているのだろう。

今では上条が先行して土御門を先導していた。

『北上しているみたいだね……道が3本に枝分かれしていて、どの道に行っているかは不明だが、すぐに特定させる……とにかく北方向だ』

上条と土御門はその声を聞きながらも走り続けていた。

路地裏を抜けると、歩道の隅に寄り添う形で地下鉄への入り口があり、2人はそのまま北へと進む。

『3本の道のうち……一番右だ、たった今その道を抜けた』

「……いた！」

上条は、ステイルのナビゲートの声とほぼ同時にオリアナの後姿を見つけ、移動の速度を緩める。

ようやく見つけたオリアナに思わず声をあげてしまうが、それでもオリアナにはバレないよう、小さく声を上げたのでオリアナの方からは見つかっていないようだ。

だがしかし、相手もプロ。

すぐさま上条達の視線を察したのか、後ろを振り返って来た。

上条と土御門が迫ってきているのを確認すると、慌てて脇道の中へと吸い込まれて行く。

「～～クソッ！！」

上条は苛立ちを声に表し、土御門と共に脇道へと入って行く。

しかし脇道はすぐに終わりを迎え、その先にあったのは寂れた商店街だった。

寂れた、と表現したのは本来営業しているべき時間帯だというのに、どの店も歓迎する様子はなく、シャッターが閉まってばかりだったからだ。

と言うのも、この商店街の位置が悪かったらしく、客を入れようとしても無駄だと経営側が理解しているのだろう。

普段はそれなりに客入りが良いのかは知らないが、割と綺麗な店舗と広い道路で商店街は構成されていたのだが。

恐らく、店の人間はどこかもっと人の多い競技場周辺に仮設の店舗でも建てて、今日も元気に商売に従事しているに違いない。

それはさておき、この商店街の道は真っすぐと伸びており、オリアナはその通りの左側を走っていた。

上条達もそれに伴い左側へ行こうとするのだが、その前に自律式のバスが横切ったので、それが通りすぎた後に左側の歩道へと入る。

そうして、バスの行き先を目で追っていたのだが。

「まずっ……アイツ、バスで逃げ……！」

上条達の視線の先、そこにはバス停の中、自律式のバスを止める為のボタンを押しているオリアナの姿があった。

バスはボタンを押された事で、プログラムされた事を当たり前にこなすべく、バスを止めオリアナを乗せる。

そしてプシュー、と音を立てながらバスの扉を閉めると、上条達がバスを止めようとボタンを押す前に走り出してしまった。

これればっかりはプログラムされている事なので、バスを止めて開けてもらう等と言う融通は利かせられない。

「くっそ誰も見てねえだろうな……！」

上条はキョロキョロとあたりを見回すと、召喚器を取りだした。

「カミやん、『それ』を使う事で何か不具合は起きたりしないのか？」

吹寄制理を救う為に使われた『力』。

魔術とは違い、かなり簡単な手順（出来ない人間には出来ないが）で力の行使を行ったように見えるが、そのような力を何の制約も無しに行う事が出来るとは思えない。

呪詛返し、という言葉があるように失敗したらその失敗が全て術者に帰って来るような事だってあるのだから、未知の力を前にそのように心配するのも無理はなかった。

だがしかし、上条は何も気にした様子もなく引き鉄を引きつつ、行為でそれに答えた。

「オケアノス！マハブフ！！」

上条の背後から現れたそれは、バスのタイヤを一瞬にして凍らせる。

その凍り方は地面にまで至っており、身動きの取れなくなったバスが緊急信号を飛ばしながらも扉を開いて、乗客を降ろすべくプログラムを作動させた。

「……大丈夫だ、『飲まれない』のなら、制限付きだけどこの『力』は行使できる」

「そうか、なら良いんだが……」

どういう原理でその力を発しているのかは分からないが、土御門は何となく超能力寄りの異能であるように感じられた。

術を行う下準備を行い、言葉や行動によってそれを発動させる魔術。

自分だけの現実を観測し、ミクロな世界を操るべく頭の中で演算させる超能力。

使えない人間からしたらどちらも異能には変わりないのだが、見た目は大きく違う。

魔術は「魔術っぽい準備」が見て取れるが、一方で超能力は、一見して何も無い所から異能を発生させているように見える。

実際には複雑な演算を行っているのだがそれはさておき、「銃を突きつけ引き鉄を引くだけ」で人を治したりバスを凍らせたりするあの力は、魔術っぽく無い。と、何となく思った。

とはいえ、見た目で分からないだけで何かを犠牲にしたり、何か条件付であの力を使っているのかもしれないが、土御門は研究者では無いのでそこまでのメカニズムは分からない。

そう言った意味で魔術か超能力かどちらかと問われれば超能力っぽいと直感したのだが、今はそんなことよりもオリアナをとっ捕まえねばと考え、先程までの思考は霧散して行った。

「つーかカミやん、その力ホイホイと見せていいのかにゃー？」

「問題ねえ……と思う。さっきちらっと見ただけだけど、オリアナしか乗客は居なかったし。

お前はペルソナの事知ってるし」

「そうか。ならいいんだが」

オリアナに見られても良いのかと言う意味で聞いたのだが、上条の回答から察するに別に気にしてないと言う事なのだろう。

「俺としてはどちらかと言うと、監視カメラとかが気になるかな……何も考えずにバス止めたけど、これって色々とマズいよな？」

駅のホームで飛び降り自殺をしたら、運行ダイヤが乱れるせいでかなりの損害を被るので、遺族に莫大な請求が行くとかなんとか、聞いたことがある。

ただの噂なので事実はどうなのかは知らない。

何にせよ、バスを無理矢理止める事で、それを確認する為の人件費やら、本来バスに乗っていただろう乗客（大覇星祭時は特別運行なので運賃は無料だが）やら、このバスが止まった事での損害がいくらかでるだろう。

そうなった時その損害を何処に請求するかと言えば、勿論加害者。

もし上条がバスを止めたと言う事がばれたら、アンチスキルのお世話になる以上に「無能力者が強力な能力を使った」と言う事実が広まってしまう。

それは上条としてはものすごーく避けたい事象だった。

そんな上条の心配を察したのか、土御門は笑いながら言う。

「大丈夫だぜい？証拠隠滅は俺の得意分野だ。なんてったってスパイだからにゃー。

今日カミやんが暴れた事は全力でなかった事にする。

っても人の目だけはごまかせないから、隠したいなら人のいない

所で力を使ってくれな」

「そうだな。例えばこの商店街みたいなとこだな」

土御門の返答に対し、上条はニヤリと笑いながらバスに近づいて行く。

そのバスの中からは、ゆったりと看板の様なものを抱えた女が出てきた。

どうやら逃げるのではなく、迎え撃つつもりらしい。妖艶な雰囲気を纏いながら話しかけて来る。

「ふふ、それが超能力って奴かしら？さっき会った時は使わなかったけど」

「さあ、どうだったかな」

オリアナの質問に対してしらばっくれて返答する上条。

そんな上条を見てクスクスと笑いながら、ゆったりと単語帳を手にした。

「どちらにせよ、あんな冷たい氷使われちゃあお姉さんの熱も冷めちゃうわ。

もっとも、いきなりあんな力を見せられちゃって、ちょっと滾っちゃったけど。

見てみる？下はもう濡れ濡れよ？」

分かっているはずだ。自分が何をしたのかを。誰に手を出してしまったのかを。

故意か事故かと問われれば、恐らく事故だったのだろう。

しかし、それでも「魔術と何のかかわりもない人間に手を出した」

と言う事実は変わらない。

だと言うのに、悪びれもせず出てきた言葉は冗談だった。

その事実に、上条は少しだけ眉をひそめた。

「……お前が施した術式で、一般人が倒れたぞ。覚えてるか？お前と出くわした時に一緒にいた女だ。

あれが魔術関係者に見えたか？見えたんだったら眼科に行くことを勧めるぜ。

それでも駄目なら目の移植でもした方が良い。腕の良い医者を知ってるから、紹介するけど？」

少しでもこの怒りを、苛立ちを抑えるべくオリアナに向かって皮肉を言い放つ。

その言葉を受けて、上条と土御門に気付かれない程度にピクリと反応を示すが、見た目には動揺したようには見えず、相変わらず軽く笑みを浮かべていた。

「この世に関係の無い人間なんていないわ。その気になればどんな人間とも関係を作れるもの」

「……そうか。そんな冗談を言えると言う事は、理解してるってことだな。

理解した上で、そんな態度なんだな？」

上条の口調からは、明らかな侮蔑が込められていた。

「今更どうこう言うつもりはないけれど、お姉さんだって一般人を傷つけるつもりなんてなかったわよ？

……こういうのとは違って」

言った後、オリアナは単語帳の1ページを口で破いた。

カキン、とグラス同士で乾杯した時の様な、甲高い澄んだ音が鳴り響く。

瞬間。

「ぐっ……があ……！！」

うめき声を上げ、土御門は膝から崩れ落ちた。

脇腹を押え、ガチガチと震えながらも土御門はオリアナを睨みつける。

「土御門！！」

やはり今までの負荷が一気に来たのか。思わず上条は土御門へと駆けよった。

傷口は開いた様子は無いが、土御門は痛みに耐えるように歯ぎしりをしている。

「あら？てっきり怪我を負ってるのはあなたの方だと思ってたんだけど。

使い道を間違えちゃったかしら」

言っている間にも、土御門の両手足からは力が抜けて行く。

何とか立ち上がろうとするものの、その力すらなくなった所で、そのまま動かなくなった。

上条は慌てて土御門の呼吸を確認したところ、気絶をしただけらしく少しだけ安心する。

その様子をニコニコと眺めるオリアナを見て、先程の単語帳を千切る作業によって、何かをしたのだと理解した。

「お前、土御門に、何をした？」

「再生と回復の象徴である火属性を、青で消しただけ。さっきの鈴の音を発動のキーとして動かしたんだけど、簡単に言えば「一定以上の傷を受けている者を昏倒させる術式」よ。……あなたはそこまで傷を受けていないようね」

幻想殺しが無い今、オリアナの魔術を打ち消す術は無い。オリアナの言葉が事実なら、これ以上の傷を負えばいずれ昏倒させられる、と言う事だろう。

（って事は、土御門の傷が治るか、術式を何とかしないといけないと言う事か……）

とはいえ、術式―オリアナが握る単語帳の１ページを何とかしたところで、昏倒させられた土御門を治す事は出来ないかもしれない。だがしかし、昏倒させられ続ける効果だけはなんとか出来そうなので、どうにかして単語帳の破壊を目指すべく、オリアナの隙を窺う。

そんな上条の視線を感じて、オリアナは楽しそうな笑みを浮かべ、自身の正面へと風が吹いているのを見て問題の術式が刻まれている紙を放り投げた。

紙は風に乗ってひらひらと飛んで行く。

「てめえええええ！！！」

上条は激昂して叫ぶが、頭の中は冷静に思考を続けていた。

（あれの手から離れたのなら、紙が見つからなくなる前に……斬るっ！！）

召喚器を頭につきつけ、すぐさま引き鉄を引く。オリアナはその様子を観察するかのように眺め、動く気配を見せない。

そうして現れたオケアノスへ発した指示は、単語帳を切り裂く事。

オケアノスの持つ大剣には似合わない程の小さな目標に対して、オケアノスは鋭く重い剣を一直線に投げつけた。

それによりあっけなく真っ二つに紙が斬り裂かれる事で術式が破壊されたのか、苦悶の表情を浮かべていた土御門の顔が穏やかなものへと戻る。

しかし、目を覚ます気配が無いので上条は少し考えた後、納得したように呟いた。

「やっぱり一度気絶したなら目を覚ますまでは気絶しっぱなしか……」

「へえ、やっぱり魔術では無いみたいね。超能力に関しては分からないけど……

お姉さん興奮してきちゃったなあ」

「うるせえよ、こっちはとっくに怒髪天を衝いてんだ。冗談なんて言ってんじゃねーよ！

……『刺突抗剣』とやらがどんなもんかしらねーけどさ。

それがどんなにすげーもんか、価値の欠片も理解できてねえけどさ」

上条は、ツンツンした髪の毛を怒りの度合いだと言い張りながら、続ける。

「こんなクソつまんねー結果しか生まねえような、ちっぽけなもんだって事だけは分かってんだよ！！
だから、その道具をさっさとこっちによこしやがれ。そしたら拳骨一発で許してやるよ！」

「あらあら、そんなこと言われたって、はいそうですかってなる訳ないじゃない。
その程度の説教で諦めるような、詰まらない内容の仕事なんて請け負わないわ。お姉さんはね」

「一応の確認だよ。こちとらそう答えて来るのを待ってたっての。心おきなくボコにしてやる。
つーか別に説教したいわけじゃねーよ。お前にだって何かしらの考えがあるんだろうし。
それを否定するつもりはないんだけどさ……何つーか、プロが素人さんに手を出したって事実が信じらんねーだけだ。
そしてそれが偶然にも俺の知り合いだった。んな事されて黙ってられる程、俺はお人よしじゃない。
更に言えば、そんな奴を放っておいて他の奴にまで手出しするかもしれないって考えたら、な……
だからお前を殴る。全力でだ！！」

正義も悪もない。善も悪もない。
ただ気にくわないから殴る。知り合いに手を出したから殴る。
そのような本能的な怒りを、当たり前のようにさらけ出す上条の事を、心底楽しそうにオリアナは眺めていた。

「ふふ、強気なのね。お姉さん、そういう子を腰砕けにするのが好きなのよねー」

「言ってろ！！」

上条は走り込む。明確な意思を以って、敵の前に。

そんな上条をオリアナは、楽しそうに見つめていた。

・・・

両者の距離はおよそ１０メートル。

上条当麻はオリアナ＝トムソンへと走り込んだ。

策も無く、考えも無く。

ただただ殴り倒す為だけに。

そんな相手の迎撃はオリアナにとって容易いもので、オリアナは１枚、単語帳を破るという動作のみで魔術を発動させた。

上条がオリアナとの距離を５メートル程縮めたところだろうか、氷の塊が上条の目と鼻の先に現れ、厚さ５０センチ・高さ３メートルに至るそれは、道路全体を覆って上条とオリアナを遮る壁となる形でその場に鎮座していた。

その氷壁を境に、オリアナと上条は視線を交わす。

思わぬ壁が現れて、足を止めた上条はオケアノスを出現させた。

勿論、壁を取り除く為である。

「剛殺斬！！」

叫ぶと、上条の望みをかなえるべくオケアノスが氷壁を切り裂く。
それによって人が2人か3人か通れる程の空間が出来たのだが、その先にオリアナは居なかった。

（まずっ……氷は、光の屈折……！？）

そのような思考が頭を巡った刹那、上条の全身に衝撃が襲う。
それと同時に激しい風切り音が鳴り響き、風の刃がオケアノスへと向かったようだった。
これを受けたオケアノスへのダメージが、上条へと伝わる。
更に、オケアノスが受け切れ無かった風が上条に直撃した事で幾ばくかの切り傷が生じ、顔を歪めた。

その様子を見たオリアナは、うんうんと頷きながら上条へと話しかける。

「へえ。あなたの使うそれ伝いに、あなたにもダメージが行くのね。何処から、ましてや何から造り出したのかは分からないけど、それであなたにダメージが通らないようじゃお姉さん焦っちゃうとこだったわあ」

オリアナは終始楽しげに笑っているが、上条はオリアナの話を全くと言って良い程聞いていなかった。

「一定以上の傷を負った相手を昏倒させる術式」。これに該当する傷を受けてしまったのではないかと、考えていた。
上条の傷口は、見てわかる程ぱっくりと開いていて、血がダラダラと流れている。

「んふふ、あなたのその能力もそうだけど、学園都市ってずいぶん珍しい子を集めているのね」

そんなことを言いながら、オリアナは単語帳を破る。

上条はオリアナが単語帳を口にした瞬間、反射的に耳を塞いだのだが。

しかし、次なる魔術は予想していたそれではなかった。

「お次は影の剣。飽きさせないわよ？」

オリアナが手を振るうと、それと同時に振るった手から真っ黒な剣が出現した。

その剣はその長さを伸縮自在に伸ばすと、上条の影に突き刺さる。

その瞬間、

ゴッ！！と地雷を踏みつけたかのように上条の体が宙を舞った。

そのまま地面に叩きつけられる所を、何とか受け身を取った上条は、黄泉川愛穂に鍛えられてて良かったと初めて思った。

「何故さっき使った昏倒術式を使わないのかって顔をしてるわね。でもお姉さん、一度使った術式を何度も使う趣味は無いのよ」

オリアナは絶対的な余裕を持った顔をして、自身の術式に関して説明をする。

魔術を知らない上条にその内容はほとんど分からないので、それを無視してオケアノスを出そうとするが。

「あら？駄目よ、おいたしちゃあ」

それよりも早く、オリアナが単語帳の1枚を千切った。
上条の地面の周りが隆起し、地面がアッパーのごとく上条の腹に直撃して再び宙へと舞う。

「ぐっ！！」

一瞬息が止まったが、それどころでは無い。
再び受け身を取った上条は、一旦オリアナと距離を取った。

「どうしたの？逃げたいなら逃げてもいいわよ、男の子でも怖いものは怖いのよね。
そしたら、お姉さんもお仕事に戻るから。それが一番互いの為になると思わない？」

「げほっ……バカ野郎、距離とればこれが出せるだろ？」

上条はボロボロの体でゆったりと召喚器をつきつけ、オケアノスを顕現させる。
そして放つスキルは、ブフーラ。オリアナが先程出したような巨大な氷が、2人を遮った。

更にその氷壁の上を越えて、一つ一つは小さいものの、大量のツララがオリアナへと向かって行く。
しかし、人体程度なら簡単に貫くような鋭利さを持ったそのツララを前にしても、オリアナは笑っていた。

「言ったでしょう？こんな冷たい温度じゃ、お姉さんアツくなれるわけが無いって」

そんな余裕を持った言葉を発しながら、ブフーラを止めるべく魔術を展開させた。
これによってブフーラによるツララで、オリアナに直撃しそうなものは全て撃ち落とされた上、氷壁もバラバラに砕かれる。
しかし、その先にはオケアノスしかおらず、上条の姿はどこにも見当たらなかった。

「言っただろ？『お前を殴る』って」

「な！！？」

このまま遠距離で魔術とスキルの撃ち合いにすると見せかけて、上条は急接近していた。
先程オリアナが光の屈折を利用したように、その壁の向こうに上条が居ると思わせて。

オリアナが一度使った作戦なのだから、彼女自身も光の屈折の事は念頭に置いていた。
しかしオリアナの視線の先、氷壁の頂上からオケアノスの頭が見えていて、その下氷壁越しに上条の姿を確認していた為、そこに上条が居ると勘違いしてしまったのだ。

何せ、先程まではオケアノスは常に上条の傍にいたのだから。
風に飛ばされ距離のあった昏倒術式を刻んだ単語帳を切り裂く時でさえ、命中するか分からないと言うのに剣を投げつける程で、常に近くにいなければならないと勘違いさせられた、と言う訳だ。

「おっらあああああああああ！！！！」

「ッ！！！」

上条が気合いを入れて叫びながら、渾身を込めた一撃を、全身を乗せた一撃を。

男も女も、老いも若きも関係無しに、目の前の女の顔に、叩きこんだ。

この瞬間だけを黄泉川に見せたら、「女を殴る為に教えた訳じゃ無いじゃん！！」と言って地獄の特訓を課しそうな程の一撃だった。

これによって、オリアナは脇に抱えた荷物を落とし、そのままゴロゴロと地面を転がる。

目の前に落ちている看板の様なものを見て、上条は呟いた。

「これをどうにかしたら、良いんだよな……？」

上条は少し後ずさりしながら、足の先でちょんちょんとその板に触れる。

下手に触って何かが起きたら、嫌だ。そんな気持ちがにじみ出ているのが見て取れた。

そんな上条をみながら、クスクスと笑う声が、一つ。

その声に対する心当たりも、一つ。

「ふふっ……そんなに恐がらなくても大丈夫よ。お姉さんがあんなに動いたって何にも起きないんだから」

全力で殴ったはずだ。それこそ男女平等と言わんばかりに全力で。

男としてそれはどうなんだと自問する程に全力で殴ったはずなの

に、オリアナは絶えず笑みを浮かべていた。
痛みに耐えての強がりには見えない。

「何で、って顔してるわね。そうね……確かにあなたのパンチ、か・な・り利いたわ～。
惚れ惚れする位のパンチだったけど……何て言えばいいのかしら、有り体に言えば、こちらもプロなのよね。
こうやって攻撃される事なんてザラにあるし、一撃で倒れているようじゃ『運び屋』は名乗れないわよね」

単に、このような攻撃に慣れていた。
それだけの事だった。

それはすなわち、経験値の差。

インパクトの際、無意識的に体を後ろに逃がし、拳に合わせて首を回すことで衝撃を殺すなど、訓練を積むか、実戦で恒久的に殴り合いでもしてないと出来ない芸当だ。
それをオリアナは当然のごとく行ったと言う。

上条の驚愕した顔を見て満足げにうなずくと、オリアナは再び１枚の単語帳を口へと持って行く。
それを見て上条はすぐさま召喚器を構えようとするが、全身に出来た傷が上条を蝕み、瞬間的に体が硬直した。

それを好機と言わんばかりに、オリアナは単語帳を千切って魔術を行使する。

だがしかし、攻撃はいつまでたってもやってこない。
その代わりに上条の目の前で竜巻の様な風がオリアナを包むと、

オリアナの体を雑居ビルの屋上へと持って行った。

「それがあなたの所にあるのにどうしてって思ってる？」

その通りだった。

オリアナにとって重要なファクターであるはずの、『刺突抗剣』が上条の下にあると言うのに、どうしてそれを放っておくのか。

「それじゃあ、お姉さんからの宿題ね。お姉さんの真の目的、分かったら褒めてあげるわ」

言いたいだけ言うと、オリアナは身を翻した。

建物の屋上に居るのですぐにその姿は見えなくなったので、上条はその場に座り込む。

「……何なんだよ、あいつ」

一発殴ったは殴った。

しかし、まだ何かすると言った様子なので止めなければと思う。

（……その前に）

逃げよう。

オリアナの残した看板的なものを抱えながら気絶した土御門元春をおぶさると、人が来る前にこの場を離れることにした。

その際、近くにあった監視カメラはオリアナによって破壊されていたと言うのは余談である。

## そのろくじゅうなな　がちんこ（後書き）

なーんか長くなるよねえ。
でも仕方ない仕方ない

## そのろくじゅうはち　かいこう（前書き）

ぐぬぬ……

**そのろくじゅうはち　かいこう**

「私だって何かするんだから……！」

少女は何か決意に満ちた表情を浮かべ、人ごみを縫うように走る。
全身を、安全ピンで取り繕っただけの白い修道服で覆い、必死に走るその様はどこかドラマのワンシーンのようにも見えるだろう。

インデックス。

１０万3千冊の魔道書を持つ少女は、その知識を以って感知した魔術の元へとたどり着く為に、犬のごとく駆けまわっているのだった。

そしてそれを追う影が１つ。
一方通行は周りの一般客によって思うようにインデックスに近づけていなかった。
能力を使っても良いのだが、如何せん人目があり過ぎる。
何とか人が少なくなったところで一気に距離を詰めたいと思いながらも、やはりまだまだ鍛え方が足らないなと考えていた。

すると、一方通行の携帯に着信が入る。

『なンだ、上条？』

『ああ、インデックス何処に居るか知らねぇか？』

『丁度イイ。なンか魔術がどうたら言って走り出したからよ、俺もインデックスについてってるンだが。

場所は沖合通りの服屋・シャングリラの――』

『なっ!?事情は後で話すから、インデックスを止めてくれ!!』

『あ?そりゃ構わねェが……なン』

一方通行の返答を待たずして電話を切ったようで、携帯は通話を終えた事を示す音しか発さなくなった。

「……わけわかンねェな」

良くわからないが、止めろと言うなら事情があるのだろう。丁度人通りも少ない場所に来たので、一気にインデックスに接近すべく能力を使用し、路地裏に入って行ったインデックスに迫る。

その際、一方通行よりも先にインデックスを追い掛けるようにしてピンク髪の少女が路地裏に吸い込まれるのを見た。

誰だ?とか思う一方通行なのだが、インデックスを追う事に集中し過ぎていた為に、気付かない。

インデックスを追う一方通行を、更に追い掛けている人物が居たことを。

・・・

(なんだこれは)

ステイル＝マグヌスは公園のベンチに座り携帯電話に耳を傾け、苦い顔をしていた。

ベンチの隣には人はおらず、その代わりにコンビニで買ったサンドイッチとペットボトルの紅茶が置いてある。

流石紅茶大国・イギリスの国民であるからかは知らないが、紅茶

は一口飲んだだけで、それ以降口にする事は無かった。
どうやら工場で大量に生産されたそれは、風味も風情も無いように感じられたようだ。
それも苦い顔をしている原因の1つなのだが、他にも原因はある。

携帯電話の向こうから響き渡る、賑やかな声。

『別に「使徒十字（クローチエディピエトロ）」を調べるのは構わねえんだけどよ。
そもそもそれって、ローマ正教が表に公開するのをかたくなに拒んできた奴でしょう？
だとしたら、今出回っている情報が本物かどうかなんてわかんねえじゃねーか。
つーか、「刺突抗剣」の方はどうなったんだ？』

『事情が変わったんだよ。現場の判断って奴さ』

男言葉と女言葉が同居しているような口調をした声の主の名は、シェリー＝クロムウェル。
同じイギリス清教の所属だと言うのに、インデックスに牙をむいたり、かといって今のようにイギリス全体の問題が起きるとなると迷わず協力すると言う、非常に複雑な立ち位置に居る女性だ。

戦闘員でありながらも暗号解読専門官でもある彼女は、今現在謹慎的な意味合いを込めて書類整理をしていたので、こうしてステイルはシェリーに『使徒十字』に関する資料を求めている。

内心、ステイルは腸が煮えくりかえっていた。
仕事とはいえ何故インデックスを手にかけようとした奴と話さねばならないのか、と。
だがしかし、未遂は未遂なのでステイルも一発シェリーに炎剣を

ぶち込めさえすれば満足である為、シェリーの声を聞いて苛立ちながらも円滑に話を進めるべく、冷静を装った声で話を続けていた。

『ふぅん。まぁいいさ、こまけぇ話はそのうちで。
時間もねえだろうし、とりあえず電話代わるわ』

『ああ、そうだね。『そのうちゆっくり』話したいところだ』

ステイルの意図が伝わったのか伝わらなかったのか、シェリーはそれ以上何もいう事無く電話を代わる。
そして次に出てきた声は。

『もしもし、もしもーし?あ、もう話せるのでございますか?わかりました、ありがとうございます。
ええっと、もしもし、もしもし?応答を願うのでございますよー』

『……もう話して構わないよ、シェリー＝クロムウェルもご立腹の様だしね』

『はぁ、そうなのでございますね。ご指摘ありがとうございます。
……「使徒十字」。何分ローマ正教に所属していた私でさえ、実際に拝見した事はございません。
それだけの隠し玉、と言う事なのでございましょうね。これの弱点を見つけるのには、かなり苦労しそうでございますよ』

シェリーの代わりにのほほんとした口調で語るは、オルソラ＝アクィナス。
こちらもシェリーと同様に暗号解析を得意とし、魔道書『法の書』の騒動によってイギリス清教に改宗する事になったシスターである。

現在、ステイルは大英博物館から分離独立している英国図書館に眠る膨大な記録をあたる事で（実際に探すのはシェリーとオルソラだが）、『使徒十字』の使用条件を調べる事にしたのだ。

そんな訳で電話の向こうでは、バサバサと書類か本か知らないが、紙をめくっている音と何か口論（シェリーが一方的に言っているだけ）が繰り広げられている。

『もふもふ。シェリーさん、シェリーさん。
鈴科さんが学園都市に連れて行ってくれるのでございますよ？』

『あぁ！？テメェ何度言えば分かんだよ、図書館内でマフィンを食うなって言ってるだろ！？
ていうか鈴科って誰だ！？』

『まぁ。それでは、この辺で軽いお食事など如何でしょうか？
天草式の皆様が作ってくださった、体力補給に治癒促進の為の、食の儀式を盛り込んだ特製マフィンでございますよ』

『要らねえよ！！要らねえって言うかここでは食えないわよ！！
ああもう、だからマフィンを頬張るなと言ってるだろーが！
アンタそのぽろぽろと口から零してんのも、天草式的に意味のある行為なんだろうな！？』

ステイルはシェリーとオルソラの小芝居を電話越しに聞かされて、溜息をつく。
話をまとめるに、まだ資料に関しては探し始めだから後で掛け直した方がいいと言う事だろう。
電話を切ろうと思った瞬間、あちらの電話が先に切れた。どうや

ら何かの拍子に電話が切れてしまったらしい。
意図せず電話が切れるとは、どれだけバタバタしていたのか。

（……どうでもいいか）

ステイルは思考をすぐさま切り替え、先程の事は忘れることにした。

とりあえず土御門元春が学園都市内のセキュリティをあたるとの事なので、自分はどうしたものか、と思考する片手間にタバコに火を付け、深く煙を虚空へと吐き出した。

「……？」

すると、何やら視線を感じる。

煙を吐き出すのに真上を向いていたのだが、その視線を真っすぐに戻すと、ピンク髪をした合法ロリ先生が居た。

・・・

午後二時二十分。お昼休みの終わりである。

上条当麻は、大覇星祭の応援に駆け付けた上条夫妻や、御坂親子（姉妹と思っていたので事実を聞いた時は驚いた）と共に昼食を食べたのだった。

結局インデックスは見つからないし、そんな中１人自分だけ飯を食うのはあれだなーと思い、ボケーッと目の前に広げられた弁当を見ていたら、何を勘違いしたのか御坂が色々と突っかかって来た。

そういえば玉入れの時に事情は後で話すとか言ってたしなー、と上条はのんびりと思うものの、こんな場所で話す内容でも無い。

例えば馬鹿正直に魔術師が侵入したんですだとか、そんなこと言えるはずが無いので、と言うよりお前何言ってんだみたいな顔をされるだろう。

そんな訳でインデックスが見つからんから自分だけ飯は食えんと、断片的な事実だけを教える事にした。

一同のリアクションを見る限りでは、魔術師が裏であれこれしてると言う事は悟られていないようだ。

御坂だけは訝しがっていたが、ここで言える話では無い事は何となくわかっているようで、それ以上の追及はしてこなかった。

上条は思う。

彼らはそのまま、何も知らず大覇星祭を楽しんでもらいたい、と。

吹寄制理が望んだ事は、恐らくそれだ。

だからこそ、オリアナ＝トムソンと顔も知らないリドヴィア＝ロレンツェッティを止めなくてはならない。

大覇星祭を成功で終わらせる。

その目的の為に、魔術などそこに必要ないのだから。

等と1人気合いを入れ直していたのだが、周りはそれを競技に対する気合いと勘違いしたのか、「やっぱ食っとけ、力出るから」と言う事で弁当を完食した上に、何個かおにぎりも押しつけられた。

このような思いやりは息子冥利に尽きると言うものだが、どうしたものか。

まさかこんなものを持って戦う訳にもいかない。

「まあ、インデックスを見つけて食べさせるか、見つかんなかったら自分で食えば良いか」

とりあえず父と母の無事を確認し、自身も別に何もやましい事はしてませんよというアピールも終わったので、上条夫妻と御坂親子と別れた上条は、最後にもらったおにぎりの入った袋をぶらぶらと揺らしながら街を歩いて行った。

……午後三時三十分。

結局、インデックスもオリアナ＝トムソンも見つからないまま１時間以上が経過していた。

オリアナに関しては土御門が動いているようなので、インデックスを見つけらないようでは上条は用無しである。

と言うのも、先述した『使徒十字』についてなのだが、最初オリアナは『刺突抗剣』を取引先に持って行く『運び屋』のように考えていた。

だが、それは誤りで、と言うか敵の罠で、本当は学園都市に『使徒十字』を設置するのに囮になる事がオリアナの仕事だった。

ならば、今はオリアナを全力で追うよりも、『使徒十字』の使用条件について考えた方が良い。

土御門もオリアナを探しはするものの、その片手間に『使徒十字』について考察を重ねている。

相手の目的がその術式の発動なら、自分達はそれを阻止したら良いのだから。

そして、気になる『使徒十字』の効力とは。

『使徒十字を発動させた場所は、全てローマ正教の傘下に入る』と言うもの。

成程、それはあかん。と上条は思った。

他にも幸せがどうとか不幸せがどうとか言っていたが、一言で言うとそう言う事だそうだ。

上条はローマ正教に良い印象を持っていない。

故に、上の人（国会議員とかそういうの）に興味が無い典型的な若者である上条ですら、ローマ正教が自身の上に来る事に難色を示した。

そう言う訳でその魔術の発動を阻止すべく動くのだが、上条には『使徒十字』を破壊する力も、発動条件を考える魔術的知識も、何も無い。

そのために、上条の任務はインデックスをこの件に関わらせない、位しか出来る事が無いのだ。

だと言うのに、インデックスは一向に見つからない。

屋台に行っても居ないし、フードコートやらレストランやらと、食べ物関連の建物を探して行ったが、見つからない。

運悪くすれ違っているのだろう、念の為インデックスに持たせていた携帯にも電話するのだが、出ない。

機械音痴のインデックスの事だから仕方が無いとは言え、出来れば出て欲しかったと心の中で叫ぶ。

続いて一方通行。事情も話せる上にインデックスも知っている貴重な相手なので電話しない手は無い。

『なンだ、上条？』

『ああ、インデックス何処に居るか知らねぇか？』

『丁度イイ。なンか魔術がどうたら言って走り出したからよ、俺もインデックスについてってるンだが。
場所は沖合通りの服屋・シャングリラの――――』

詳しい事は分かっていないが、魔術師が居る事は分かったらしい。
兎にも角にも時間が無い。一方通行にインデックスを止めるよう頼むしかないと判断した。

『なっ！？事情は後で話すから、インデックスを止めてくれ！！』

『あ？そりゃ構わねェが……なン』

そして上条は、一方通行の言葉を待たずに電話を切りながら、駆ける。
場所は沖合通り。やはりといえばやはりだが、第七学区には居たらしい。
こういう時に不運を発揮するなよ、と愚痴りながら上条は走り続けた。

・・・

オリアナ＝トムソンは、人通りの少ない路地裏に潜み、息を整えながら体を休めている。
いくらオリアナが実力者とはいえ、魔術師２人＋謎の能力者を相手に休憩なしで戦い続けていた為に、割と体はボロボロだった。
とはいえ、彼女を追うべく構成された探知術式『理派四陣』。こ

れを破壊出来た上に魔術師のうちの１人―土御門と呼ばれていた男も再起不能に出来たのは僥倖である。
だがしかし、それの代償も深かった。
――『聖人』、神裂火織の介入の恐れがある。
来るか来ないかは関係ない。「来るかもしれない」と言うだけで普通の魔術師なら聖人に目をつけられるのを避けるため、行動に支障をきたす。
オリアナもそんな１人だ。いくらこの作戦を成功させねばならないとはいえ、聖人が介入するとなれば全力でかかったとしても、時間稼ぎ程度で精一杯だ。
故に、おとりとしては危険な行為だが、敢えて足を止め魔術を用いて体を休める事にした。
もし仮に、神裂が介入してきても良いように。
来ないなら来ないで構わない。
どちらにせよ何処かで一度休まねばならないと思っていた所だし。
そんな訳で生命力の象徴である火、すなわち赤の文字で書かれた単語帳を千切って回復術式を展開し、じわじわと傷を防いでいた。
一気に治すような魔術も使えなくはないのだが、如何せんそちらはどうしても派手になるのでゆっくりと回復するしかない。
回復力で言えば土御門のもつ『肉体再生』のレベル１か２程度のものだが、それでも長時間使用すれば十分に回復が期待できる。
と言っても、この術式はもって３０～４０分程度しか展開出来ないので完全に回復する、と言う訳にもいかなかったが。
（まあ、贅沢は言ってらんないわよね）

ふう、と仕事を増やしてくれる若者達（オリアナ自身も若いが）に溜息をつきつつも、やはり楽しそうな表情を浮かべていた。

だがしかし、そんな表情もすぐ歪む事になる。

「見つけた！」

1人のシスターの声によって。

・・・

インデックスは見つけた。見つけてしまった。

ステイル＝マグヌスとは違い、外部から侵入してきた魔術師の姿を。

これにより、上条当麻や土御門元春、ステイルの三人の思惑を見事にブチ壊してくれた。

とはいえ、そんなことをインデックスは知る由も無いのだが。

インデックスはただ単に、学園都市に侵入する魔術師は大抵良からぬ事を考えているので、何がしたいのか知りたかっただけだ。

先程働かざる者食うべからずの精神を身を持って体験したこともあり、自分も何かしなければと考えての事かもしれない。

はたまた何も考えず、誰かが傷つくのを嫌がったからこそ魔術師がどんな人物か知りたいと思ったのかもしれない。

何にせよ、魔術師・オリアナ＝トムソンとインデックスは、邂逅してしまった。

しかし、そんなことはインデックスもオリアナも知った事では無い。

インデックスは目の前の魔術師が何者か。

対するオリアナは目の前のシスターが何者か。

ただそれだけを考えていた。

（この修道服……イギリス清教のっ……！！）

どう見ても『必要悪の教会』の人間だった。

今、自分を追ってきているのも、イギリス清教。

思わず迎撃する為に単語帳をくわえ、一気に千切った。

オリアナの魔術は、『速記原典』と呼ばれるだけあって、速かった。

それも、インデックスが『強制詠唱』をする間も無い程に。

不安定な魔道書のままに、一気に魔力が練り込まれ、それを解放する。

ドッ！！と言う鈍い炸裂音が路地裏に響き渡った。

## そのろくじゅうはち　かいこう（後書き）

最近地の文率が上がってる気がする

# そのろくじゅうきゅう　おもわく（前書き）

今回も1万字こえやがった

## そのろくじゅうきゅう　おもわく

・・・

月詠小萌は憤怒した。

いくら言っても目の前に居る神父さんはタバコを吸う事を止めてくれないからだ。

確かに、見た目２メートルを越える身長を持つ彼は、２０歳以上に見られてもおかしくは無い。

だがしかし、小萌先生の長年培った目はごまかせないのだ。

大人びた顔に見え隠れする幼さは、明らかに天然物であり、大人びた顔は仮の姿で、本来は１４歳かそこらなのだと、一瞬にして見抜いた。

そんな訳で子供の成長を妨げるタバコを、目の前の赤毛神父が吸う事を許さない。

だから必死になってタバコを止めるように諌めた。

その甲斐あって、日本では中々見られない銘柄のタバコを何箱もゲットt……もとい没収する事に成功した。

そしてタバコを回収するどさくさにまぎれて、その赤毛の神父に逃げられてしまったのが心残りなので、神父を探しだすべく街中を歩いたり、走ったりしてまわっている。

……のだが、なかなか見つからない。

「はふう、タバコは……いけませんね……体力が……あうう……」

体力の限界だった。
運動不足、と言うのもあるだろうが一番の原因はタバコだろう。
重度のヘビースモーカー（↑言葉が重複する程に重度）な小萌先生の肺は、ズタボロですぐに息切れする。
ちょっと休憩……と思って近くのガードレールを背もたれにしようとしたところ、目の前を通り過ぎる白い影。
「あれは……シスターちゃん？」
何故こんな所にいるのだろうか。
何だか誰かを探しているようにも見えたので、一度声をかけようと思ったのだが、インデックスの方が体力が上らしく、中々追いつけない。
ちょっと禁煙しようかなとか思うが、何処から持ってきたのかコンビニの袋に先程の赤毛神父から徴収したタバコを大事に入れている時点で、禁煙もすぐに終わりを迎えるに違いない。
とはいえ、インデックスはシスター。
ならば先程の神父に関しても何か知ってるかも、とも思ったので諦めず追い掛けていたら、インデックスが路地裏に入って行った。
こんな所に何の用なのだろう、と首をかしげながらも、ピンク髪の先生もまた路地裏に吸い込まれて行った。
・・・
インデックスが路地裏に曲がった。
何やらそれについて行っているピンク髪も居たが、この際どうだ

っていい。
足に力を入れ、高々と跳躍し、距離を縮める。
そして路地裏の入り口に差しかかった瞬間、インデックスの声が響き渡った。
その手前に先程のピンク髪の少女が居たのだが、気にしない。
「見つけた」、と言う事は、およそ５０m先で対峙している金髪の女が、『魔術師』なのだろう。
それは別に構わない。
ただ、どうして。
――どうしてその魔術師は、真剣な表情を浮かべて、行動を起こしたのか。
考えずともわかる。
敵を排除するための行動、魔術を発動させたと言う事だ。
一方通行は反射的に地面を踏み抜いた。
良くわからないが、敵対行動をしたと言う事は、インデックスの敵なのだろう。
一瞬にしてオリアナ＝トムソンとインデックスの間に滑り込んだ。

滑り込んだはいいが、もう目の前には斬撃が。
何故斬撃だとかわかるのか。

既に魔術を受け止めてしまっている。
ゆっくりだが、体に傷が出来ているのを感じられた。

反射は出来そうにない。シェリーの時も、初めはそうだった。
しかし、演算の為時間も足りない。

この魔術を逸らす事ならできるだろう。
ただ、何処に逸らすかは選べないが。

しかし後ろにはインデックスや、更に距離を取った所には知らないピンク髪が居る。
逸らして流れ弾がその2人に行ってしまった時、どうなるのか。

走馬灯のようにそれらの思考が瞬間的に脳内を流れて行った。

(甘くなっちまった結果が、これかァ……)

ドッ!!という鈍い音が鳴り響くのと同時に、一方通行は地に崩れ落ちた。

・・・

「なんなのよ、もう……」

久慈川りせは一方通行に追いかけている。

帽子をかぶり、ポニーテールをはためかせ走るその様はトレーニング中の女性のようであった。

とはいえ、こちらも人ごみに捕まって、思うように一方通行達に追いつけなかったが、後姿が見えなくなる程では無いのでその距離を保ち続けている。

そして１０分程走っただろうか、一方通行が突如として大きく跳躍して１００m先まで一瞬で進んでしまった。

「はぁ!?なにあれ、あんな事も超能力ってできるの!?」

ていうか、能力は一人につき一つとか言っていなかったか?

一方通行は自身の能力を光学迷彩で光を歪めるとか何とか言っていた気がする。

その能力であんな跳躍、ありえない。

（と言う事は、何か嘘をついていた?）

何のために?

一方通行が入った路地裏を確認しながらも、思考を続け、駆け続ける。

しかし思考の先に答えを見出す事は叶わず、その前に路地裏に差しかかったので、直接一方通行に聞けばいい、と思考を打ち切った。

そうして見つけた一方通行は。

――――血まみれで金髪の女に立ちふさがっていた。

・・・

血が流れ落ちる。

それを見たインデックスと月詠小萌は顔を真っ青にさせ、オリアナ＝トムソンは怪訝そうな表情を浮かべていた。

（もしこの白髪の子が魔術師なら、何かしらの対処をするはずだけど……）

明らかに、インデックスの味方をする少年はオリアナの攻撃を受け止めた結果、血を流している。

と言う事は、インデックスが知り合ったこの街の住人……なのだろうか？

（でも一瞬にして私とあの子の間に入り込んだ……）

魔術は関係ないが、この街の能力者と言う事なのだろう。

ならば警戒するに越した事はない。

とはいえ、魔術に関係の無い人間をまた傷つけてしまった後ろめたさか、目の前の少年には退いてもらいたいとも思っているが。

（それに、本当に関係なさそうな子も混ざっちゃってるしね……）

これ以上、一般人には手を出すまいと誓いながら、チラリとインデックスのさらに奥に居る2人を見やる。
2人は状況が飲み込めず、ただただ一方通行の怪我を見て顔を真っ青にさせていた。

「……で、お前はなンだ？」

一方通行は、自身の胸のあたりを触り傷の様子を確認すると、能力を発動させる。
久々に使った血流操作が、自分を守る為とは皮肉だなァ、と自嘲しながら。

質問しながらも、血を正しい流れに操作しているため、ぽたぽたと流れ落ちる血はみるみるうちに無くなっていった。
その光景にこの場に居る全ての人間が驚愕を露わにする。

何せ明らかに致命傷の傷を負いながら、血が止まっているのだから。

別に完治した訳ではない。
今すぐにでも治療しなければ、細菌が入り込めば最後、更に症状が悪化する恐れもある。

しかし、一方通行はオリアナの前に立ちふさがった。
そんな一方通行を見て、オリアナは喜一色、と言った表情を浮かべる。

「すごいわね、流石のお姉さんも、何の準備も無しに血を止めるなんてできないわ。

それがあなたの力かしら」

「そォだな。力の一部ってとこだ。
……質問に答えてやったンだから、今度は俺の質問に答えろ。
お前は、何しにこンなとこに居やがる？」

「うっ、素直に答えると思ったらそう言う事……まあいいわ、教えてあげる。
んー……怪我した体を癒す為、ここに居ましたってとこかな」

「もっと広義的な意味で聞いてたンだが？どうして学園都市に来たって感じの」

「そんな指定は受けてないから、さっきの答えでおあいこよね？
坊やだって全部を答えてる訳じゃないみたいだし」

「……チッ、まァその通りだなァ……」

随分と落ちついた会話だ。
とてもじゃないが攻撃した側とされた側の会話とは思えない。
久慈川は勿論、小萌先生やインデックスもポカンとしていた。

どうしてあのような怪我を負わされて、何事も無かったかのような顔をしているのか。

「……まァイイや。帰れ帰れ。こっちは胸かっさばかれて痛ェンだよ……
こいつが狙いで、こいつに攻撃を仕掛けようってンなら話は別だが」

一方通行はそのすぐ後ろに居るインデックスに親指をさしながら問う。
本来の目的は、インデックスか否か。
あんな怪我をさせた上に見逃してくれるとは申し訳ないところだが、オリアナにとってそれを受けない手は無かった。
「……見逃してくれるの？」
「こっちも良くわかンねェけど、上条が居るしな。何とかなるだろ」
インデックスを止めろとは言われたが、協力しろとまでは言われていない。
何より、血を止める為の演算を行っている為、ここで戦闘になれば他の3人を守り切る自信が無かった。　久慈川はなンで来たンだ、とか思うが、来てしまったものはどうしようもなく。
オリアナの攻撃に巻き込まれないようにするしかないのだ。
「へぇ、やっぱりあの子とも知り合いなのね……にしても、随分信頼してるみたいね」
「当たり前だろォ？あいつは強いしなァ。
ま、精々ボコにされねェよォに注意しとけよォ……」
「ふふ、もう既にお手つきなのよね。
お姉さん、びっくりしちゃったわあ。あんなに激しいなんて思わなかったから」
「うるせェよ、エロいフリしてどォせ未経験なンだろォ？」

「なっ！」

一方通行の指摘にうろたえたのか、顔を真っ赤にしてワナワナと震えている。

冗談のつもりで言い返したが、まさか事実とは思わず指摘した一方通行もまたうろたえた。

どうやら図星だったらしいが、あからさまなセクハラに他の女性陣はドン引き。

構図としては、一方通行ｖｓこの場に居る女性陣。

先程まではオリアナの四面楚歌（と言っても戦力は一方通行しかいないが）だったと言うのに、いつの間にか一方通行の背後からも敵意ある視線が飛ばされている。

何と言うか、先程までの殺伐とした空気が、馬鹿みたいな空気に成り下がっていた。

そんな弛緩した空気の中、オリアナは耐えきれなかった、と言った具合に噴き出す。

「……ふふっ、本当に見逃してくれるみたいだし、ここは退いておこうかしらね。

怪我させちゃったのは謝るわ……今は言葉でしか謝れないけど、そのうち何かお礼してあ・げ・る」

「うるせェよ不法侵入者、とっとと失せろ。

こっちは傷口が自己主張して血ィ吐きだそォとしてンだよ」

「へぇ……なら、やっぱり今戦っておけば……」

「戦うのはやぶさかじゃねェが……上条達、すぐにでも来ると思うぜェ？」

考えなしにこンなとこに来るかよ、と一方通行。

「成程ねぇ……それじゃあやっぱり、ここは退くわね」

もう一度、ごめんなさいね、勘違いで手を出しちゃって。とオリアナ。

反省してねェだろこいつ、と一方通行はちょっと思うが、オリアナがこの場を去って行ったのを確認すると、崩れるように座りこんだ。

「「大丈夫なの（です）！？」」

三者三様の声が響き渡り、三人は一方通行に駆け寄った。

「ハァ……久々にデケェ傷作っちまったなァ……」

誰かを守りながら戦う事の難しさを認識した一方通行は、これからの事を考えて嘆息した。

何せ相手は学園都市暗部。先程のオリアナのように話をして去ってくれる程甘くは無いはず。

その時、自分は護り切る事が出来るのか？

チリチリと、焼けるように痛む傷を指でなぞりながら、表情を歪めた。

・・・

「……すまん、一方通行」

上条当麻は一方通行の情報を受け、ステイル＝マグヌスと共に事が起きた路地裏まで急行した。

その中に土御門元春が居ないのは、まだ動ける程に回復していないからだろうか。

何故小萌先生やらりせちーが居るのかは分からないが、恐らく３人を守るために傷を受けざるを得なかった、と言う事だろう。

これも全てオリアナ＝トムソンを取り逃した自分の責任だ、と上条は自身を責めた。

「うっせェよ、こりゃこっちの不手際だ。謝られる程じゃねェ」

未だに手で傷口を覆いながら、一方通行は事もなげに答える。

血流操作をして、一応の応急処置をしているとはいえ、傷口が痛むのだろう。額からは汗が流れ落ちている。

「……すまなかったね、本来僕達が君らを守るべきだと言うのに」

ステイルも苦々しげに、噛みしめるように一方通行に謝る。

以前のアニェーゼ部隊の時もそうだったが、迷惑をかけっぱなしだと考えていた。

ちなみに、アニェーゼとのいざこざが終わった後軽く顔合わせをしているので、ステイルと一方通行の面識は一応ある。

そしてこの場で場違いな人、２人。

「で、上条ちゃんやこの神父さんや、シスターちゃん。白髪ちゃんにポニーちゃん。
これは一体どういうことなんです？」

「ポニーって私の事……？あ、そっか今ポニーか……
っていうか私も事情を説明してほしいんですけど！」

月詠小萌と、久慈川りせ。

明らかな一般人である彼女らは、ここいらが境界線だろう。
魔術師の顔を見てしまったからと言って、消さなければならないと言う訳ではない。それ以上追及しなければ良いのだ。

しかし、彼女らはその境界線を越えようとしている。

「鈴科さんは良くわかんないけど凄い能力使うし！
血がいっぱい出てるのに相変わらずの態度だし！！
心配してるこっちの身にもなってよ！！」

「そうですよ！私だって白髪ちゃんの事は知らないですけど、し、心配したんですからね！！」

「いや、なンかもう大丈夫ですよみたいな雰囲気だしてるとこ悪ィが、早めに治療しねェとマズいから。
破傷風にでもなっちまったら大事だから」

「「うええ！！？」」

どうにも気の抜けた会話を交わす一方通行達に、上条もステイルも拍子抜けさせられた。

そんな中、インデックスだけがうつむいてプルプルと震えている。
一方通行は平気そうな顔をしているが、実際は重傷で、無駄に動く事が危険だと言う事を理解した上で戦闘を避けるべくオリアナと会話を交わしたのだ。
狙いは一方通行ではなく、インデックスだったから。
その事実を理解しているインデックスだからこそ、何も話せない。
何て一方通行に声をかければいいのか分からなかった。
自分の独断専行のせいで、このような事態に陥っているのだから。
そんな風に、色々と考えてズブズブとネガティブの泥沼に飲み込まれて行くインデックス。
それに見かねたのか、一方通行はインデックスに声をかけた。
「悪ィな。病院いかねェとなンねェから、屋台はまた今度だァ」
「……ごめん、なさい……」
「気にすンな。ありゃ俺のミスだ」
「……うん」
ポンポン、と一方通行はインデックスの頭を軽く叩くと、ステイルと上条の方へと向く。
「とりあえず、ちょっと話した感じだと、如何にも時間稼ぎてェって感じだったなァ。
ひょっとすると、あの女自身が捕まっても問題ねェのかもしれねェ」

インデックスを確実に倒さねばならない、と言うのならあのような掛け合いをするはずが無い。問答無用で攻撃を仕掛けるはずだ。

ならばインデックスに攻撃した理由は、所属がイギリス清教だった、だとか明らかに魔術サイドの人間だった、といったところだろう。

とどのつまり、個人ではなく所属の問題、と言う事だ。

「そうだね、僕達も奴らの狙いは分かっている。『使徒十字』だ」

最早インデックスもこの事件に関わってしまった。ならば自分のしなければならない事は、この件を早急に片付けた後に、波風を立たせないように動き回る事だ。

ならばインデックスの知識を借りた方が良い。毒を喰らわば皿まで、だ。

毒を食うのがインデックス、と言うのは非常に気にくわないが、即死するような毒では無い。

インデックスの無事の為なら、インデックスに有事も辞さない。

そんな矛盾を全て飲み込み、受け入れる。例えそれによってインデックスに恨まれようと構わない。

ステイルの確固たる意志を知ってか知らずか、インデックスは少しだけ眉をひそめながら答える。

「一言で言えば、『星座』を利用した術式かな。効力は知ってると思うけど、対象地の『支配』。

とはいえ、そんな大それた術式を、ちょっと陣を築いたり、ちょっと絵を描いてみたりと、そんな簡単な条件でこなせるわけがない

よね」

インデックスの言葉にステイルは頷く。

魔術をある程度知った一方通行や上条も、何となく理解しているようで、各々が独自に噛み砕きながらインデックスの言葉を待っていた。

相変わらず、久慈川と小萌先生は頭にはてなを浮かべていたが、口をはさむ場面では無いと思っているのだろう。黙って話を聞いていた。

「重要なのは、『時間』と『場所』。『使徒十字』の十字架は夜空の光を魔法陣という一点に集める為の装置……ええっと、科学風にいうんだったら……」

「パラボラアンテナ、ってとこかァ？」

「そう、それかも！で、その光を一点に集めることで星座から莫大な力を借りることが出来るの。

それによって、その十字架を中心に術式が展開されて行くんだよ」

「成程、どのくらいすげえ力かわからねーけど、それだけの力があれば『使徒十字』による魔術は完成するってことだな？」

「その通りかも。でも、正しく必要なだけの光を集める為には、周りに陰りが無いような……

そうだね、開けた平地とか、高い丘の上とかが有効だと思う」

「つまり、学園都市内でそう言った場所をあたっていけば……」

「何処かにさっきの魔術師が居るはずかも」

インデックスの簡潔な説明に光明を見出したのか、上条は物凄くうれしそうに、ステイルは少しだけ口角を上げ喜んだ。
今までは追う側で常に後手後手に回っていたから、鬱憤もたまっていたのだろう。
何にせよ、それだけ分かれば、術式発動の阻止も可能のはずだ。

2人はすぐさま行動を起こすべく、動き出した。
しかし、それを大きな傷を抱えた一方通行が止める。

「どうした、一方通行？ひょっとして着いてくるとか言うんじゃねえだろうな」

「違ェよ、気になった事があるンだ」

気になったこと？と上条は首をかしげる。
ステイルもどういう事だと言わんばかりの顔をしていたが、あの一方通行の考える事だ。
重要な事に違いない、と動きだした足を止めた。

「その『使徒十字』ってのはよォ、発動範囲とか指定できるのかァ？例えば、学園都市の隅っこの方に条件を満たす場所があったとして、その『使徒十字』ってのを使ったとするだろォ？
そォした時、学園都市どころか学園都市外まで支配下に置いちまう、なンて事になるのかァ？」

「その通りかも。一応、『使徒十字』によって支配下における範囲って言うのは最大で四万七千平方キロメートルってところかな。
つまり、学園都市外ごと支配下に置こうって考えたなら、わざわざ学園都市に侵入する必要はないかも！

だってそれでも十分、学園都市を覆える広さのはずだよ！」
その言葉を聞いて、上条とステイルはあっけにとられた表情をして、一方通行だけは納得した顔をしていた。

「はン、やっぱさっきの金髪女、完ッ全に囮じゃねェか。
最後の最期までお前らを学園都市に縛りつける為の」

クックッ、と楽しそうに笑う一方通行を横目に、上条は焦った様子で声を上げた。

「ちょ、ちょっと待てよ、ローマ正教は学園都市以外の事も全く考えてねえってことか！？」

「おいおい、上条よォ。お前この間シスター集団と相対したこともォ忘れたのかよ？
ああ言う、自分達がする事が絶対的に正しいンです、って思ってる奴らがする事だぜェ？
あいつらにとっちゃ日本全てを支配下においても、正しい事をしてるンですとかのたまうに違いねェよ」

「クク、確かにその通りだな。ローマ正教の事だし、その程度の罠は打って来る、と言う事か。
何せ囮はオリアナ＝トムソン。例えこの件で死んだとしても、ただの捨て駒として処理されると言う事だろうな」

一方通行の言葉に納得したステイルも楽しそうに笑うが、目は全く笑っておらず、インデックスにまたもや害を為そうとするローマ正教に怒りを示した。

「まァなンだ。『学園都市外』の事はお前ら『外』の人間で処理し

ろよなァ。
　一応、俺の深読みってこともあるから学園都市内のめぼしいとこも探して欲しいところだが」
「ああ、任せてくれたまえ。『外』の事なら心おきなく人間を動かせるからね。
　今すぐ上の奴に人員を動かさせるように指示を仰ぐよ」
　ステイルはそれだけ言うと、この場を足早に去っていった。
　どうやら事のついでに、インデックスがこの件に関わってしまった事による弊害の処理もする算段なのだろう。
　非常にあくどい顔つきをしていて、その顔を見た一方通行はニヤリと笑った。
「さァて、俺はいい加減病院行きてェから移動するが……上条、お前はどォする？」
　はっきり言えば、ほぼ詰みの状態だろう。
　何せ相手の『使徒十字』は何処でも発動できる代物ではなく、開けた場所で待機しなければならない為罠だって限られた物しか配置できないはずだ。
　と言うか遠距離で攻撃してしまえば済む話である。
　むしろ学園都市内で事を起こされる方が面倒なレベルだ。
　なので上条も万が一を想定して、学園都市内でオリアナを探すようだった。
　その言葉を聞いて、一方通行は上条に言う。
「なァ、あの金髪に会ったら一つ伝言頼むわ」

「あぁ、いいぜ。何伝えりゃいいんだ？」

「『お前の作戦崩した事で満足なので、お礼は要りませェン』って」

「プッ、なんだそりゃ。まあいいや、承ったぜ」

そう言って上条も立ち去ろうとするのだが、インデックスがそれを引きとめた。

「とーま……」

「……インデックス、隠してた事は悪かった。だけどな、もう一度あいつに会わなくちゃならねえ。

何だってこんな下らねえ事に加担したのか、納得のいく回答を聞けなきゃもう一発殴る事だって辞さねえつもりだ」

グッ、と拳を握りしめ、決意表明をする上条。

しかし女性を殴る決意をするとは、最低だと思うがそれはさておき。

やはり単身魔術師の元に向かわせる事が躊躇われるのだろう。

しかし、自分がついて行く選択肢を取る事も、躊躇われた。

何せ目の前には自分のせいで傷ついた一方通行がいるのだから。

「……はァ、着いて行きてェンなら、行ってこいよ。俺は動けるからよォ」

「でも……」

「上条なら守ってくれンだろォ？今までだってそうして来たはずだァ。

だったら、安心して守られてろよ。そンでオリアナの出す魔術に関してアドバイスの一つでも出来れば上等だな。

飯1食分くれェには値するぜ」

「……うん、わかった！とーま、私も着いて行くからね！！」

一方通行とインデックスのやり取りを見ながら、上条は溜息をついた。

既にインデックスを巻き込んでしまっているが、これ以上巻き込んで外の連中が余計に騒がないか、それが気がかりらしい。

「……まぁ、その辺は何とかするか、ステイルが」

上条は考えた末に、ステイルに丸投げする。

行くぞ、インデックス。という言葉を聞いて、インデックスは嬉しそうに上条と共に駆けだしたのだった。

「やっと行きやがったか優柔不断コンビが……」

軽く嘆息をつきながらその場に座り込む一方通行。

しかし、まだすべきことは残っていた。

「……それで、私達はいつまで蚊帳の外なの？」

「そうですよ、先生、まだお話は始まってすらいなかったのに皆居なくなっちゃいました……」

「一生……蚊帳の外に居ろォ」

フラリ、と一方通行は立ちあがると、病院に向かう為かゆったりと歩きだした。
あの3人の前では気丈に振舞っていたが、相当に限界が来ていたのだろう。
おぼつかない足取りに、久慈川と小萌先生は慌てて一方通行を支えるのだった。

・・・

『ハァ!?何を言ってるのですか最大主教(アークビショップ)!?』

『だから、リドヴィア＝ロレンツェッティを追う為の部隊は出したるけれど、
禁書目録を狙いたる『外』に居る不逞の輩は放っておいて良い、と言いたりけるのよ』

『それが意味がわかりませんって言ってるんですこの馬鹿口調女!!』

『なっ!それは飽くまでも日本語を話したる時だけで、今は母国語(英語)で話したりけるに、変な口調でありけるなどありえぬのよ!?』

一応、英語での会話をしているはずなのだが、ステイル＝マグヌスの指摘によって普段よりも口調が更に荒くなっている。
そんな変な口調の持ち主であるローラ＝スチュアートだが、彼女は一応イギリス清教で一番偉い人、と言う立ち位置で、ステイルにあれこれ指示を出していた。

今回の件も、ローラの指示によって学園都市入りを果たしたステイルだが、流石にこの指示は承服しかねる物だった。

何せ、今にでも事後承諾で学園都市入りを果たしそうな魔術師どもを、放っておけと言うのだから。

ただ単に教えを広めたいと言う人間も居るだろう。

しかし、学園都市と敵対している勢力だって実際には居るのだ。

それを放っておいたらどうなるか、考えるまでも無い。

『大丈夫、大丈夫なのよ、ステイル＝マグヌス。

そちらに関しては、学園都市側が秘密裏に処理をすると、連絡が入りたりけるから』

『……その学園都市側の人間が、へまをやらかしたらどうするのですか』

『そこは問題無きと思いたるわ。何せ学園都市に『強行突破』も掛けられない強硬派など、おそるるに足らず。

学園都市の治安部隊でも十分制圧できるはずよ』

『もし、万が一があれば……』

楽観的な答えを放つローラだが、ステイルとしてはインデックスの事が心配なので、完全に学園都市に頼るのも気が引ける。

何せ学園都市の人間と共闘はするものの、学園都市そのものを信用している訳ではないのだから。

『ああもう、ステイルは心配性なりけるのね！！

それならば、適当に両者の戦いを眺めたりければ良いのよ！！』

いい加減しつこいステイルにわずらわしくなったのか、適当な指示を出すローラ。

その言葉を待っていたと言わんばかりに承服した、と伝え電話を切るステイル。

微妙な上下関係が、そこにはあった。

・・・

「あなたの交友関係って謎が多すぎるよね」

久慈川りせと月詠小萌は、一方通行を近くの病院まで連れて行くと、小萌先生は実は先生らしいので、他の生徒達も見なければならない、と言ってこの場を久慈川に任せて立ち去った。

実は教師、と言う事実に驚きを隠せない一方通行と久慈川だが、兎にも角にもさっさと治療を受けなければ、と言う事で妹達の件で世話になっているカエル顔をした医者があっという間に一方通行の傷を治療していった。

そして1時間もしないうちに治療を終え、病室へと押しこまれた一方通行の元に、久慈川がやって来ている。

久慈川はパタパタと手で自分を仰ぎながら、一方通行の謎すぎる顔の広さについて問うた。

この大覇星祭と言う名の体育祭は、全校生徒が参加しなければならない。

例外として実行委員やジャッジメントは除外されるが、一方通行はそれには属していないと言う。

ならば学生では無いと言うのに能力者で、かつアンチスキルやら学生やら見知らぬシスターやら神父やらと知り合っているのだから謎すぎる。

「あァ？……そォ言われりゃ俺でも理解出来ねェな……」

久慈川の言葉に同意しつつ、一方通行は首をかしげた。

自分でも知らないうちに色んな人と仲良くなる。
それは久慈川に無いもので。

喉から手が出る程に、とてもとてもうらやましいものだった。

「私ね、本当はただ友達が欲しくて、情けない自分を変えたくて、この仕事はじめたんだ」

ポツリと語りだす。
一方通行が押しこまれた病室は個室だった為、久慈川の声は一方通行にしか届かない。

「それでがむしゃらにここまでやって来たけど、結局何も変わってないの」

何故このような事を一方通行に話すのか。
彼自身には分からないが、久慈川も何か思う事があったのだろう。

一方通行はただ耳を傾けていた。

「皆が見てるのは、底抜けに明るくて前向きな『りせちー』だけ。
私の事なんて誰も見てくれない……」

どうせ明日以降会う事は無いのだから、愚痴るだけ愚痴ってしまえ。

そのような事を久慈川は考えているのだろうか、ただただ思いの丈を吐きだす。

「結局、本当の自分なんて何処にも居ないんだなあって思うと、こうやってテレビ出てるのも馬鹿らしくなってきちゃって……」

一息ついて、続ける。

「どうしたらいいのか、分かんないの」

「……そォだな、『りせちー』って人間すら、自分自身だって思いこンじまえば良いンじゃねェのか？」

「えっ？」

思わぬ返答だった。

『りせちー』は自分ではない、と言っているのにそれを自分だと思う。

とてもじゃないが久慈川が一人で考え続けても思いつくものではなかった。

それだけに興味深い意見で、久慈川は一方通行の言葉を待つ。

「まァ、なンつーか……本当の自分だか自分探しだか知らねェが……行き遅れたＯＬかっつゥの。

お前はまだ中学生だろォが、若ェンだから、余計なこと考えずに走り続けてみりゃいいンじゃねェの？」

お前は生き急ぎ過ぎなンだよ、とあっけらかんと言い放つ一方通行に、久慈川は一瞬あっけにとられて、その後大きく笑った。※病院内ではお静かに。

「ふ、ふふ……ふふふ！何よそれ、今まで私が悩み続けてたのが馬鹿みたい！

でも……何だか楽になれた気がする。そうだね、とにかく頑張ってみたらいいのかな？

……さっきまでの出来事がひっじょーに気になる所なんだけど、誰だって知られたくない事もあるよね」

「お、おォ……」

急に物分かりがよくなったように感じられて、一方通行は思わずたじろいだ。

そんな姿を見て更にひとしきり笑ったところで、久慈川は病室を後にしようとする。

「それじゃあ、私いかなくちゃ。もうすぐナイトパレード始まるし、インタビューの続きもしなくちゃね」

「そォいやそンなのもあったなァ。いやァ良かった良かった。堂々とあの場から離れられて」

「む、そんなこと言って良いのかな？

後でテレビ付けた時、私が他の人とイチャイチャしてるの見てやきもちやいても知らないんだから！」

「はン、あンなぶりっ子キャラ売れるかってェの」

「売れたからあの場に居るのよ！！」

「そォなンだ、じゃあ私入院するね」

「興味無し！？」

「なンだよ、実は初めて見た時から……興奮してました。とか言われてェのかァ？」

「何でそこで雰囲気ブチ壊すの！？そこは初めて見た時から好きでしたとかそんなんじゃないの！？
流石にぶっちゃけすぎじゃないかな！？」

「よォし、その調子でナイトパレードも頑張ってこいよ。
まァ、気が向いたらテレビも見てやる」

「……分かった、それじゃあね」

「おォー」

バタン、と病室の扉を閉めた所で、久慈川は小さく微笑んだ。

（素直じゃないんだから……）

来年もまた、大覇星祭に来られたら良いな。
久慈川は決意を新たに、自分の仕事場へと向かうのだった。

・・・

「あ、うわぁあああぁぁ！！化物ォォォ！！」

とある山岳地帯。
人気の無いそこは学園都市に最も近いとされる山で、潜伏するにはもってこいの場所だった。
しかし、そんな山の中に潜入した魔術師たちは、ことごとく殲滅させられて行く。

恐らく証拠どころか、肉片すら残されない程に、全てを隠匿し、隠滅されるだろう。

学園都市が秘密裏に動かした『猟犬部隊』は、それを容易に行う事が出来るのだから。

しかし、メインで動いて戦闘を行っているのは、どう見ても『猟犬部隊』の人間には見えなかった。

「よぉし、全員殺ったかぁ？あぁ、違うな、何人か残して後は殺ったかー？」

「「……はい」」

「ＯＫＯＫ、初の実戦にしちゃあ上等だぁ……にしても、『魔術』なんて非科学、初めて見たぜ。
ワクワクするねぇ、今までの常識ぜーんぶひっくり返してくれんだからよお。
危うく命令（オーダー）通り殲滅しちまうとこだったわ。こんなサンプル、使わねえ手はねえもんな？
お前もそう思うだろ？」

木原数多は心底うれしそうに、楽しそうに笑っている。
そして同意を求めたその相手は。

「……はい」

子供。
小学校高学年から中学1年生程度の年齢だろうか、明らかに場違いな少年は、手に拳銃を持ち、木原の言葉に同意した。

「よーしお前ら屑どもは捕獲した奴らをつれてけー。
そんで、てめーら6人はこの後研究所で実験なー。」

「「……はい」」

薄暗い山の中、木原の言葉に答えたのは。

――――6人の子供達だった。

## そのろくじゅうきゅう　おもわく（後書き）

この後、土御門さんとステイルさんの補助を交えてオリアナさんｖｓ上条さん＆インデックスさんという話があるのですが、カットします！

いやあ、１０万字に及ぶ笑いあり涙ありの壮大なファンタジーアクションＳＳに仕上がったのですが、さすがに長すぎるだろうと思い、止めます！（虚言）

オルソラさんの努力が無駄になるけど、オルソラさんを出したかったんです！おっす！

## そのななじゅう　うそつきはら（前書き）

これも幕間的な感じのお話かなあ

## そのななじゅう　うそつきはら

「おいお前ら」

病院の一室。

一方通行は窓から吹き抜ける風を受け、髪の毛がサラサラと揺れている。

ベッドの傍ら、そこには果物詰め合わせだの花だのと見舞いの品々が敷き詰められており、一方通行が入院したと聞きつけた人々がお見舞いに来たと言う事は想像するに易い。

しかし、そんな一方通行は苦々しげな表情をうかべ、見舞いに来た人々へと声をかけた。

「「「んん？」」」

「……ンン？じゃねェよ、いつまで居座る気だァ？！ここは避暑地じゃねェンだよ！！」

そこには仮称特別捜索隊＋幼女＋白シスターにスキルアウト＋幼女が見舞いの果物をガンガン消費していた。

いや、別に果物を食うのは構わないが、いつまでも居座ってワイワイされると、静かにしてくれと怒られるのは一方通行なのだ。

学校に通ってない奴らはずっと居座るし、選手な上条当麻に御坂美琴、フレメア＝セイヴェルンは競技が終わる度に病室に足を運んでいる。

フレメアに関してはスキルアウトの面子がいるから分かるが、上条と御坂は何故いちいちここに来るのか。

大覇星祭初日に入院を始め、今日は大覇星祭三日目。
一方通行は能力を行使して傷の治癒力を促進させていた。

とはいえ、傷は大きく早くても2週間、すなわち大覇星祭など余裕で終わっている頃までは入院を余儀なくされた。
常人で学園都市外の病院なら普通に2カ月は入院させられるレベルであるが、学園都市の医療技術に一方通行の能力によって入院期間をここまで縮めたのである。

出来れば静かに過ごしたいとか思っていたと言うのに、周りはそうは問屋が卸さないと病室に居座る。
一方通行はいやがらせか?とか思うのだが、実際は皆一方通行の事が心配なのだ。
とはいえ見た目はただ涼みに来てるようにしか感じられないから、一方通行がそのように考えるのも仕方が無い。

すると、外から今後の競技予定のアナウンスが入った。

「お、もうそろそろ俺の出番か」

「そうなの?それじゃあ私も着いて行く!」

「おォ、行ってこい行ってこい。そして帰って来るな」

「負けろー」

上条はアナウンスを確認するように窓の外を眺めると、座っていた椅子から立ち上がる。
続いてインデックスが果物を何個か抱え、上条について行った。
一方通行はシッシと手を振り、御坂は上条の負けを祈願している。

そんな2人に苦笑しながら、上条とインデックスは病室を出て行くのであった。

上条が病室を出ると、真っすぐ伸びる通路の一番奥にある階段から、女性が1人昇って来た。

「あれは……」

女性は少し回りを見まわすと、上条の視線に気付いたのかこちらを向き手を振って来たので上条もそれに応えた。

インデックスはそれを見て、ジトっとした目で上条を見るが、別に上条にやましい事はないので堂々としている。

そしてその女性はこちらに向かってきたので、上条もその女性の前へと歩みを進める。

「やあ、君がここに居ると言う事は彼の病室はこの先かな？」

「そうっすね、何か人いっぱい居ますけど……まあ気にしないでください。

それじゃ、俺これから競技があるんで」

「む。それは引きとめてしまって済まなかったな。

健闘を祈る……と、そこのお嬢さんは上条君の彼女か何かか？」

「へ？いやいやいや、そんなことはありませんことよ！？」

「むう！そんな頭ごなしに否定されると頭に来るかも！」

インデックスは上条の否定っぷりに頭に来たのか、キラリと白い

歯を見せつけ、噛みつきの体勢に入るが、ここは病院な為にあんまり騒がないよう注意されてしまったのでインデックスはシュンと小さくなった。

「ふふ、やはり君達は面白いな。その仲の良さ、大事にすると良い」

「あはは……ありがとうございます。それじゃあ失礼します、桐条さん」

「うむ、それでは頑張ってくれ。上条君」

桐条美鶴。

他の面々を連れて学園都市入りを果たしたのは良いが、一方通行が入院したと聞きいち早く病院に向かっていた。

残りの一同はゆっくりと学園都市を見物してから来るそうだ。

というのも、山岸風香やアイギスと言った科学馬ｋ……ではなく技術に興味のある面々が学園都市に見え隠れする技術力の高さに目を輝かせていた為である。

ある意味今回の目的である『学園都市を知ること』という目的に近いものがあるので、彼らにはそのまま学園都市観光をしてもらうことにして、美鶴だけが見舞いがてらここ最近で集まった情報を一方通行に知らせるべく病院にやって来た、というわけだ。

そんな訳で、美鶴は一方通行の病室の前、何やらワイワイと声が聞こえてくるが気にせずノックすると、息の合った声で「「どうぞ」」とドア越しに響いてきたので、それに従って入室した。

「やあ、意外と元気そうで安心した。あのように立ち回る君が入院

などありえないと思っていたのだがね。
いや、完璧な人間など居ないと言う事を改めて教えられた気分だ」

美鶴は少しだけ口角を上げて微笑みながら、見舞いの品を適当な場所に置きながら捲し立てた。
彼女の事を知っている人間は、この場では一方通行と上条しかいないため、一同はポカンとしている。
何せスタイル抜群でクールな印象を受ける彼女は、『知的美人』とか『仕事出来る美人』とかそんな感じの評価を得られたからだ。

そんな彼女を見た一方通行以外の面子は、ただただ状況を飲み込めずにいた。

「ふむ……どうやら私以外に先客が居たようだな……」

一方通行はジッと美鶴を見つめ、その視線を察した美鶴は、

「ここは彼らの団欒の邪魔をしないようにしておこうか。
どうせもうしばらく入院するのだろう？『2人きりで』色々話をしたかったのだが……
大覇星祭が終わるまでは滞在する心算だから、そのうちまた来るよ」

「そォだな。来るならこいつらがいねェ時に頼むわ、『2人きりで』なァ」

2人のやり取りを見た一同は、ポカンとしていた表情から驚愕の色に変貌を遂げた。
何？そういう関係なの？2人きりってそう言う事ですか！？みたいな思考が一同の中に渦巻き、自分達は空気の読めない一団なので

はと勘違いしてしまう。

「「自分達これで退散します！！」」

駒場利徳がフレメアを、浜面仕上が打ち止めを抱えて病室を出る。

９９８２号に御坂は勿論、クマや布束砥信は２人の関係に興味津々だったのだが、半蔵に無理やり引っ張られて部屋を出た。

そんな彼らが出て行った後の病室の扉を見て、美鶴はクスリと笑う。

「随分と面白そうな奴らだったな」

「そォだな、病室を避暑地として使う位には愉快な連中だな……」

一方通行は疲れた表情を浮かべながら、紙とペンを取りだした。

それを見た美鶴は、チラリと扉を見た後、頷きそれらを受け取る。

「しかし入院したとは聞いたが、何をしてそんなことになったんだ？」

口では一方通行に入院した背景を尋ねるような内容だが、

『学園都市内に桐条のラボの研究者を送った。

やはりペルソナを扱える人間を人工的に開発しているようだ』

と、一方通行から受け取った紙に美鶴は書き込んだ。

一方通行はピクリと小さく眉を動かすが、動揺を見せず口を開く。

「いや、なンか通り魔的な事故に巻き込まれてよォ……」

「君ならばその程度の輩は返り討ちなのでは？
私は、それ程の実力を持った通り魔など聞いたことが無い」
『十中八九情報は正しいものだと思われる。
とはいえ、このように簡単に情報を察知できるのには裏があるとしか思えない』

一方通行は同意をするかのように首を縦に振り、

「学園都市ってのは色々と裏があるからなァ……力を持った野郎も中には居るってことだ」

紙に書かれたことへの返答なのか、言葉への返答なのか。
おそらく、両方なのだろう。美鶴は軽く息を呑みながらも口を開いた。

「それは私が知るべきことでは無い、そうだな？」
『やはり、与えて良い情報だけ与えて、我々の動きをみる、と言ったところだろうか？』

「そォいう事だな。それでだなァ……」

筆談が無ければ、ただの雑談にしか聞こえないだろう。
現に、外で聞き耳を立てている連中にはそのようにしか聞こえなかったはずだ。

（何か……恋人！って感じの会話には聞こえないんだけど……）

聞き耳を立てながらヒソヒソと話しているのは、御坂。
同じく扉に耳をくっつけるクマ、９９８２号、布束の３人。と言うか上条を除く捜索隊のメンバーだ。
駒場達はそんな４人を呆れた目で見ながら（ただ単に人数の都合上聞き耳を立てるスペースが無かったのかもしれないが）、上条の応援に行くことにしたのか病院を後にしていた。

（ｂｕｔ、一方通行の事だからこうやって聞き耳を立ててるのがばれてるのかもしれないわ）

（ぐぬぬ……ミサカと言うものがありながら……
と、ミサカはところてん方式で出番を奪われつつある現実を憤ります）

（僕達どんどん影薄くなってるクマよねー）

（（それは言ってはいけない））

「では、私は皆と合流しなくてはならないから、そろそろ帰らせて貰うよ」

「わかった……と言うか他の皆も連れてまた来るよ」

「そォか、岳羽達にもよろしく言っといてくれ」

「はン、次くる頃にはもォ退院してるかもなァ」

「ふっ、休める時に休まねば、後で困った事になるかもしれないぞ？

先輩からの助言だ、しっかり受け取っておけ」

「はいはい、アドバイス感謝しますゥ」

では。と美鶴が言うと、足音が病室の扉へと近づいてきた。

どうやら今日はもう帰るらしい。この場に居ては聞き耳を立てていた事がばれてしまう、と４人は焦った顔を浮かべる。

（やばいクマ！あの美人さん帰るっぽいクマ！エマージェンシークマ！）

（ちょ、どーすんのよ！？隠れる場所がない！）

（ａｎｙｈｏｗ、それでも適当な場所に隠れましょう！）

（こっちです！と、ミサカはこの病院の中を熟知している者として先導します！）

ガチャ、と美鶴が扉を開くと、そこには誰も居なかった。

とはいえ聞き耳を立てていたのは承知していたので、慌てて逃げたのだろうな、とその様を想像して美鶴は微笑む。

チラリと下から布片が見える長椅子を見やると、何事も無かったかのようにその場を後にした。

そして、美鶴が階段から降りて行ったのを確認すると、４人は長椅子の下かニュッと出てきた。

「ふぅ～、ギリギリチョップだったクマねぇ」

「何がギリギリよ！あれ、どうみてもバレたわよね……」

「ｗｅｌｌ、熟知してるとか言って結局隠れた場所は誰でもわかる長椅子の下だしね」

「仕方ないじゃないですか！熟知してるからこそ隠れる場所がないと瞬時に判断したんです！」

「なァにが隠れる、だよアホ共が……」

「「！！？」」

「病院内では静かにしろって何度言えば分かるンだァ……？」

突如現れた一方通行は、４人に病室に入るように促し、先にベッドへと戻っていく。

４人は顔を見合わせると、一方通行と同様に再び病室の中に入っていった。

「芳川も居れば結構話も進められそォなンだが……」

居ないものは仕方が無い。研究者の観点も欲しかったのだが、とりあえず今いる面子でこれからについて話し合うしかないだろう。

そのように考え、先程美鶴から受け取った情報と美鶴達について話を始めた。

・・・

「あの人が桐条さんだったのね……一方通行恋の季節と思ったのに」

「何か、変な想像をしてたミサカ達が馬鹿みたいですね。

と、ミサカは信じてたぜ一方通行とサムズアップします」

「てっきり、一方通行ンの彼女さんかと思ったのに、残念クマー」

「ｂｕｔ、聞き耳立ててたの完全にバレてたのが恥ずかしいわ。

人目もはばからずにしてたのに」

「……人目はもォ少しはばかれよ」

やはりというか、やはり勘違いをしていたようだ。

御坂美琴と９９８２号に関しては桐条美鶴の事は話していたはずなのだが。

「いや、あんな美人なんて聞いてないわよ」

「むしろあんな美人と一方通行がフォーリンラブ何てあり得ませんよね。

と、ミサカは冷静に考えればそうだと納得します」

「ハァ……」

何のために『全員』を病室から追いだしたのか、その意味を深く考えなかったようだ。

いや、深く考えなかったというより勘違いをしてしまったと言った方が正しいだろうか。

一方通行は軽く溜息をつくと、本題に入る事にした。

もちろん学園都市が行っている実験と、その内容についてだ。

人工的にペルソナを扱えるようにする実験。

以前布束砥信が受けていた実験で、他にもそれを受けている人間が居るそうだ。

「人工のペルソナ使いが他に居る……ｔｈｅｒｅｆｏｒｅ、その人ないしは人達が私達の前に立ちはだかるかもしれないって事ね」

事情を理解した布束は少し考えるしぐさをしながら口を開いた。

その言葉を聞いて、一方通行や９９８２号は布束に同意するように頷くが、御坂は納得できないような顔をする。

クマは良くわかってないようだ。

「なんで私達と敵対するの？だってそんな実験を施した相手の言う事なんて……」

「実験者共が言う事を聞かせる為に、心を壊すだとか、そいつが取り巻く状況を利用して脅したりだとか……

まァ、従わせる方法なンざいくらでもあらァな」

「そんな……」

暗部の非道さ、強かさをよく理解しているからこそ言える台詞で、それは御坂には理解が出来ないものだった。

ある程度暗部を垣間見た御坂でも、やはり理解したくないという気持ちがにじみ出ている。

いや、むしろこのまま理解も納得もしないでいて欲しい、とも思う。

「だからまァ、さっさと退院して情報を集めようと思うンだが……」

「そうですね、ミサカ達だけでは手に余ると言うものです」

「ｗｅｌｌ、調べるってもどうやって調べるの？ハッキングは危険だと思うんだけど。

ダミー掴まされた挙句こちらの動きがバレたりとか」

「クマはよう分からんクマ、話が終わったら教えてほしいクマ」

「うぐっ」

一方通行の言葉に９９８２号や布束はこれからどうすべきか考えているようだったが、クマは仕方ないとして御坂は何も言ってないのに勝手に図星みたいな顔をしている。

それを見た一方通行が御坂に突っ込みを入れた。

「……御坂ァ……お前まさか「研究所を片っ端から襲撃しよう」とか思ってねェだろォな」

「え、ええっと……」

本当に図星だった。

しかし無謀も良い所で、そんなことをされて本格的に暗部に動かれたらたまったものではない。

「アホかお前」

「ｗｅｌｌ、愚かとしか言いようが無いわ」

「流石のミサカも擁護出来ないです、お姉さま」

「うぐぅ」

とここで、攻め立てられている御坂を救済するかのように、競技のアナウンスが。

それを聞いた御坂は、好機と言わんばかりにそそくさと病室から退場しようとする。

「お姉さまの出番ですか。ミサカ達も応援するので着いて行きますよ。

と、ミサカは話はまだ終わってねえとほくそ笑みます」

「ｉｎｄｅｅｄ、御坂さんの無謀っぷりを矯正する為なら仕方ないわ……」

「お？美琴ちゃんの出番クマか？クマも着いてクマー」

「おォ、行ってこい行ってこい。ついでに御坂に現実を教えてやってくれ」

９９８２号と布束はラジャーと返答し、御坂を引っ張って病室を後にし、クマもそれについて行く。

そこでようやく一方通行の静寂は取り戻されたのだった。

「やっと誰も居なくなったか……」

あっという間に静かになった病室の中、１人嘆息する一方通行。

やはり後になって看護婦さんにどやされるのがいやだったらしい。

昨日も久慈川りせが学園都市を発つ前にお見舞いに来たのだが、

その時にも彼らが騒ぎ立てた為にこっぴどく叱られたのだ。
何せ被害者は一方通行なのに、非は完全にこちらにあり何も言えないのだから辛いところだった。

今日も結局騒いでいたが、昨日よりかはマシだったはずなので怒られはしないはずだとか一方通行は思う。

「……まずはその外傷をぶち治すってかァ？」

心地よい風を受け、ひと眠りする事にした一方通行は毛布をかぶり、目を閉じるのであった。

・・・

時は大覇星祭初日にまでさかのぼる。
ステイル＝マグヌスは『使徒十字』とそれを取り巻く魔術師達を何とかすべく、学園都市を動き回っていた。

上条当麻やインデックスの協力もあり、『運び屋』オリアナ＝トムソンの捕獲に成功する。
しかし、もう1人この事件の首謀者であるリドヴィア＝ロレンツェッティは逃がしてしまったが、あの最大主教（バカ）の事だから何か対策は講じているのだろう。
ステイルは早々に追撃を切り上げると、学園都市の周りで潜入しようとする魔術師達を撃退すると言う部隊を見学しに行くことにした。
その部隊の手に余るようなら力を添えようと考えながら現場へと向かうのだが。

「あぁ？なんだテメェ、誰だ？」

そこには部隊とそれを率いる代表者らしき男が居た。
随分と人相の悪い男だ、とステイルは内心毒づくが恐らく話は通っているはずだと考えイギリス清教を名乗る。

「お？てことはあんたらの代表がうちらにこの戦場を用意してくれたって事になるなぁ。
そうだ、俺は木原数多ってんだ。会う事はもうねぇだろうが、ヨロシク」

「そう言う事になるね……というか、この様子だと戦闘はもう終わったのかい？」

ステイルの心配は杞憂だったらしく、魔術師達は既に始末していたようだ。
ある程度有能な連中を使った、と言う事かと1人納得するステイルを値踏みするように木原数多は赤毛の神父を見ている。
そんな木原の視線を受け、ステイルはピクリと反応を示すが表情には表わさず、タバコを吸いながら木原の返答を待った。

「あぁ。大した事の無い奴らだったぜ。死体は適当に処分するが構わねぇか？」

「問題無いと思うよ。死体の処分に関しては何も言われなかったからね。
そちらで何とかしてくれると言うのならお言葉に甘えさせてもらおうか」

「そーかそーか、それなら任されよーじゃねぇの。
ま、そぉいう訳でこっちも仕事が山盛りなんでね。ここいらでお

暇させてもらうぜー」

ヒラヒラと軽く手を振って早々に立ち去っていく木原を見て、何となくステイルは違和感を覚えたが何も言わない事にする。

ステイルの見た木原の率いる部隊には、大人しかいなかった。

「いやあ、まさか依頼主から直々に人をよこすとは思わなかったぜ。ま、それだけ信用されてねえって事だろうが」

木原はステイルに嘘をついていた。

魔術師達を全て始末したと言ったが、そうではない。

実験に使う為何人か生かしておいたのだが、それがバレたらややこしい事になりそうだと判断した為に、あのような嘘をついたのだ。

「あの赤毛は俺らの事は信用してなかったみたいだが、任務さえこなしてくれりゃ文句は無かったらしいな。

死体の確認もせず引き下がるなんざ、依頼主がわざわざこの場に人をよこして確認させに来た意味がねえ。

ってことはあいつは依頼主に頼まれて来たんじゃなくて、個人的に確認したいから来たってことだ。

それなら俺らの姿を確認するだけでもできるしなあ。

って事はだ……学園都市に奴らが侵入されて困る事でもあったってことか？」

先程のやりとりで、木原は自身の情報を名前しか明かすことなくステイルから彼個人の事情を推測する事に成功していた。

使う事は無いかもしれないが、あって損は無い。そう考えてステイルの動向を軽く探ったのだ。

とはいえ、インデックスと言う存在も、それを取り巻く環境の事も知らない木原に、ステイルの抱える事情を知る事は叶わなかったが。

「それに、あのガキ共だけは見られたくなかったしなぁ」

チラリと背後を向くと、そこには先程は居なかった子供が6人居た。

どうやらステイルがこちらに来ることをあらかじめ察知していたらしく、6人の存在を隠す為に猟犬部隊から離れさせたようだ。

「ま、今はあの赤毛よりも実験だな、実験」

切るぞ～刻むぞ～、と物騒な内容の鼻歌を歌いながら、木原は学園都市へと帰還する。

「全く、何なんだあの男は……」

ステイルは不快そうな顔を浮かべ、口から煙を吐いた。タバコの味も二割減だな、と煙と同時に愚痴も吐く。

あの値踏みするような視線に、悪意と狂気を滅茶苦茶にかき混ぜたかのような目。

確かに有能かもしれないが、信用出来る人間とは思えなかった。

「まぁ、任務さえこなしてくれればこちらとしても文句は無いのだが……」

何かを隠している。

いや、むしろあのような人間が上の言う事を素直に聞いて行動するとは思えない。
飽くまでも自分本位で自分の為だけに部隊を動かす、そんな人間であると、そう考えた。

何より「この戦場を用意してくれた」という発言。

皮肉のようにも取れるが……と言うより最初は皮肉かとステイルは思ったのだが、これが皮肉ではなく額面通りの意味だと捉えると、戦場を用意してくれた事に感謝していると考えてもいいだろう。

何故戦場等に感謝をするのか？

戦闘中毒かと問われれば、違う気がする。

なら、何故か。

ステイルは知らない。木原が研究者であることを。
故に気付けない。これも実験の過程に過ぎないと言う事を。

ステイルは1人、思考の渦に呑まれながらも『使徒十字』騒動の事後処理に関して思いを馳せたのだった。

## そのななじゅう　うそつきはら（後書き）

原作１１巻部分、どうしようか迷ってる。
木原君を本格的に動かしたくてうずうずしてるけど、神の右席動かす理由付けが１１巻にあるからなあ。
ヴェントも出る予定なのでやっぱ１１巻もやった方がいいのだろうか。

明日から４日程実家に帰るので、更新できなくなりそうです。その間にいろいろと考えてきます。という名の業務連絡。

そしてお気に入り登録が気付けば１００件越えてた！超感謝！評価点くれた方にも、激感謝！

## そのななじゅういち　はじまりのとき（前書き）

原作１１巻はぶっとばす。

## そのななじゅういち　はじまりのとき

朝である。
御坂美琴はカーテンの間から照らされる木漏れ日の様な朝日を受けて目を覚ました。
未だ眠気を訴える瞼をこすり、頭の覚醒を促すと、伸びを１つ入れて気合いを入れる。

時間にして、５時２０分。
常盤台の朝は早いとは言え、その起床は些か早すぎるのではと思う。
流石に、鶏が鳴く頃より早く、おじいさんが起きるより早く起きる御坂の真意は読めない。

御坂はとりあえず顔を洗おうと洗面台に向かうのだが、鏡で自身の顔を確認して驚愕を浮かべた。

「うわっ、眼の下の隈ヤバッ……」

普段の早起きをふた回りほど上回る早起きの訳。
それは遠足前の小学生的なあれだった。
本日九月三十日は、全学園都市的に授業は午前中に終わる。
と言うのも、学園都市の住人２３０万人のうち８割が学生と言う大御所帯が衣替えしようものなら、それはもう大変な事になる。

そうは言っても採寸や注文自体はあらかじめ終えているので、後はそれぞれの学校が生徒達の制服を受け取るだけだ。
確かに、去年から今年にかけて体の成長が見られなかった場合、新たに制服を発注する必要はないのだが、学生と言う事で成長期の

人間の方がマジョリティである。

それ故に学生の大半が新たに制服を注文するのだが、それだけでもう服飾関連の店はデスマーチ確定だと言うのに、それの受け取り時期を各学校で決めてしまっては、店も今日はこの中学校で明日はあの高校でと、振り分けに余計な時間を割く事になる。

そんな事情も相まって制服の受け取る日は本日九月三十日で固定しているのだ。

それでも服飾の店は十二分なまでにデスマーチなのだが、何にせよ今日の学園都市は全学校で午前授業なのである。

ちなみに、御坂は去年と比べ特に大きくなった所はない（誠に遺憾ながら）ので、彼女にとっては今日と言う日はただの短縮授業だ。と言う訳で、御坂は今日と言う日を上条当麻に対する『罰ゲーム』の日として定めることにした。

大覇星祭における御坂と上条の争いの軍配は、御坂に上がったのだ。　順当と言えば順当なのだが、御坂は罰ゲームを何にするか全く考えてなく、『何でも言う事を聞かせる』とは斯くも魅力的で、斯くもあそこまで人間性を露わにするとは御坂も思っていなかった。

大覇星祭での勝負がつき、ドヤ顔で上条の前に立った時、上条が土下座しながら『何でも命令するがよい』と言われ、何でもってことはあんなこともこんなことも、と脳内を一気にめぐって御坂は顔を真っ赤にさせて逃げ帰ってしまった。

御坂は純朴なのであんなことやこんなこと、と言うのは「手をつないだりとか一緒に買い物行ったり」とかそういうあれであり、不純な想像をした輩は心が穢れているので煩悩を払いに寺に行くこと

を勧める。
　兎にも角にも、結局罰ゲームをこなす前に上条が北イタリアなどに旅行へ行ってしまった為、罰ゲームを行う日がこのような月末まで伸びてしまった。

「何してもらおっかなー……ふふ」

　御坂が今日の予定に1人思いを馳せていると、隣のベッドがガタリと揺れた。

（あんの類人猿ンンン！！！お姉さまを毒牙にかけおってからにぃぃ！！！）

　白井黒子。
　彼女は昨晩御坂があーでもないこーでもないと今日の予定を考え続けているのを見せられ続けていた為、彼女もまた寝不足でパンダの様な隈が出来てしまっている。
　まさに白黒。とか言うとテレポーターの本領発揮されそうなので何も言わない事にする。

　そんな訳で化粧台の前で身もだえする御坂と、ベッドの中で身もだえする白井。

　今日もまた長い一日が、幕を開ける。

・・・

　上条当麻は上の空で授業を受けていた。

原因は、北イタリア5泊7日の旅にある。
普段不幸な上条とは思えないほどのクジ運を発揮して、『大覇星祭来場者数ナンバーズ』で一等賞を当て、上記の旅行券（2人分）を得ることに成功した。
上条自身この結果が信じられないもので、何か裏があるのではと勘繰った程だが、周りの人間の「たまにはそんなこともある」と言われ素直にインデックスと共に旅行に行ったのだが、そこでも魔術師の抗争に巻き込まれたのだ。

その際、ビアージオ＝ブゾーニとか言うローマ正教の司教と対峙し、オケアノスを使わざるを得ない所まで追い込まれてしまう。
結局、天草式やらオルソラ＝アクィナスの協力もあったし、『海の神』を冠したオケアノスのフィールド上である海と氷の艦隊では、敵地とは言えビアージオが叶う相手では無かったのだろうか、辛くもその司教を撃退する事に成功した。

しかしこの時、この力を最も見られたくない相手に見られてしまった。

インデックスに、この力の存在を知られてしまった。
オリアナ＝トムソンと対峙した時だって、インデックスのナビのお陰であの力を見せる事は無かったのに。

――彼女の知っている上条にはあのような力は存在しない。

故にその事について問いただされ、この力と引き換えに幻想殺しが無くなった……と言う事にしたのだが、そのような端的な言い訳

でインデックスが納得するはずがなく、いつから無くなったのかだとか、幻想殺しと言う異能に対するジョーカーが無いのに魔術師に立ち向かったのかだとか色々言われてしまい、何となく気まずい感じになってしまった。

実際には上条も無事は無事なので、インデックスは思いの丈を全部ぶつけた事ですっきりしたのだが、上条が勝手に気まずい感じになっている為に、腹を割って話し合う機会が得られないまま月末を迎えたのだった。

（どうしたもんかなー……無いものは無いんだもんなー）

インデックスが怒った理由が、幻想殺し消失にあると勘違いしている上条は、早く影に帰ってきてほしいと思う。

と言ってもインデックス激怒の訳はそんなことではなく、上条が危険な事に首を突っ込みすぎていい加減堪忍袋の緒が切れたという状態であった。

とはいえ先述したとおり腹を割って話す機会を得られないまま、今日と言う日を迎えているので上条の悩みはある意味無駄なものとなっている。

なんやかんやで上の空で授業を受けようと受けまいと、本日は短縮授業。

上条もまた入学時春先に買った冬服でサイズはピッタリなので、衣替えのドタバタに巻き込まれる事無く、単純に短縮授業の恩恵にあずかっていた。

結局終始上の空で授業を終え、次の授業までの１０分休憩になると、土御門元春や青髪ピアスが「ガッコー終わったらゲーセン行こうぜ」と誘ってきたのだが、上条には予定があるので上の空のまま

それを断る。

「すまん。今日上条さんは先約があるのでまた今度でお願いしたいのです」

「先約ってまさか……女!?」

土御門が大仰なリアクションを取りながら、教室中に聞こえるように叫んだ。

すると教室の空気が一瞬で凍りつき、男子はまたかこいつと言う目を向け、女子は先を越された!と言う顔をする。

「な!?」

ぼんやりしていた上条は一気に覚醒し、普段の調子に戻る。

それを見ていた青髪ピアスが追撃の突っ込みを入れた。

「カミやん?そのリアクションにさっきまでのぼんやりと何か考えていた顔……

それらが意味する事は……1つやで……!」

青ピは「犯人はお前だ」と言う探偵のように上条を指差しつつ、語る。

そんな青ピを見て周囲の生徒達は息を呑む。

上条は何故こんなに追いこまれているのか理解できない、と言った顔で青ピの次なる言葉を待っていた。

「デートのプランを立てていた!……そうなんとちゃうの?」

「「な、なんだってー！！？」」

「違ぇよ馬鹿！！いや、確かにこの後会う子は女の子ではあるが決してそのような関係では……」

告げた瞬間。上から下から右から左から、衝撃が走る。

全方位から均等に衝撃を与えられた為、慣性の法則に従って吹っ飛ぶ訳にもいかず、万力で全身を押し潰されたかのような感覚が襲った。

何をされた？それを考えるより早く上条は彼らを視界に入れる。

土御門、青ピをはじめとするクラスメート達。

彼らはそれぞれ拳を握りしめ、中には血の涙を流す漢（おとこ）も居た。

「ら、らにするのれすかー！！？」

ぐらぐらと揺れる意識と頭を定め、彼らに対して声高々に文句を叫ぶのだが、それに対して土御門がギラリとサングラスを輝かせると、

「……にゃー。言い訳など聞きたくないんだぜい？『女の子と今日出かける』。それが全てだろう、違うか？」

「カミやんがフラグを乱立する事は百も……いや千も万も承知の上やったんやけど……

それでも、カミやんと仲間（とも）……いや、戦友（とも）でいられたんは、

カミやんが『フラグを回収する事が無かった』からやでえ……？

それを、それをカミやんはぁあぁぁ！！！」

相変わらず意味のわからないことを言う彼らだが、そんなクラスメート達に悪気はない。
一種の愛情表現の様なもので、何だかんだ言っても上条は慕われていると言えるのだが、それでも許せないものは許せない。
上条の断末魔と共に、本日の学業（おつとめ）は終わりを告げた。

・・・

一方通行は荷物をまとめ、病室を後にしようとしている。
以前にオリアナ＝トムソンの魔術によって入院を余儀なくされた一方通行は、本来全治2カ月はあったところをたったの11日で退院することになった。
その背景には能力使用やら学園都市の医学力は世界一など、色々あったのだが、兎にも角にも退院を許可されたのだ。

とはいえ、主治医のカエル顔をした医師からしたら後もう1週間は入院してほしかったのだが、一方通行の強い希望によって渋々ながらも退院を許可された。
そんな訳で退院の準備をしているのだが、実際は完全に治った訳ではなく、強い衝撃を与えられたりしたら傷口が開くから注意するように言われている。
それでも傷が開くことよりも、ここ最近不気味にテレビの中に放り込まれる人が居ない事や、学園都市で行われている実験が気になって仕方が無い。

退院したらまずはテレビの中の様子を見に行くかァ、だとか後の予定を組みたてながらスポーツバッグをかつごうとするのだが。

グイッと引っ張られる感覚を受け、一方通行は首をかしげた。

（そンな重てェモン入れてねェンだが）

そんなことを思いながら、一方通行はバッグを見やる。するとそこには、

「何やってンだお前」

「んー？」

「ンーじゃねェよ、降りろクソガキ」

「やだー！降りないもん！ってミサカはミサカは拒絶してみたり！このバッグの上はミサカに残された最後の領地だ！ってミサカはミサカは断固拒否！！」

「お前なァ……俺が病み上がりだって事理解した上でこンなくだらねェ事やってンのかァ？

つゥか降りろクソガキ、重てェ」

「な！？うら若き乙女に「重たい」はちょっとひどいんじゃないかな！？

ってミサカはミサカは猛抗議してみたり！！」

「そォか、そりゃあ悪かったなァ……あー軽い軽い、羽のよォに軽いぜェー」

「じゃあこのままでいいよね！ってミサカはミサカは誘導尋問してみたり！！」

「やっぱ降りろお前！！」

別に能力があるので打ち止めがスポーツバッグの上に腰をかけようと問題は無いのだが、何と言うかつまり、邪魔なのだ。

歩こうとすると肩に下げたバッグが揺れ、それに伴い打ち止めも揺れる。

その度に打ち止めの頭が一方通行の腕にあたるのだが、一方通行は打ち止めを気遣い念の為反射を発動させていないので、その腕に当たるのが非常にわずらわしい。

なら反射してバッグから弾けばいいのではと思うが、そうしないところが一方通行の小さな配慮だった。

結局、打ち止めを降ろすことなく一方通行は病院の出口までたどり着いた。

それとほぼ同時に出入口の自動ドアが開き、白衣を着た女性が入って来る。

「全く、退院当日まで病院内で騒いで、他の人たちに迷惑をかけたら駄目でしょう」

「はーい、ってミサカはミサカはボリュームを下げてみたり」

「うるせェ、俺が騒がしいンじゃなくて俺の周りで騒ぐ奴が悪い」

黄泉川愛穂は今現在学校に居るので、代わりに2人を迎えに来た芳川桔梗が呆れた表情を浮かべて諌める。

打ち止めは素直に言う事を聞くが、一方通行は悪びれた様子も無い。

そんな2人を生温かい目で眺める芳川だが、実を言うと一方通行入院の凶報を聞いてもお見舞いに来る事は1度たりとも無かった。
理由は恐らく「面倒だから」とかそんな感じで、芳川の代わりに黄泉川を見舞いに行かせる位なので徹底している。

そんな訳で黄泉川邸に引っ越してから芳川はパソコンのモニターと睨めっこし続けるだけで、下手するとろくに飯も食べないと言う凄惨たる状況だった為、黄泉川が「一方通行を迎えに行かないとパソコンをとりあげるじゃん」とか言うので渋々病院まで足を運んだと言う訳だ。

兎にも角にも、こうして迎えにやって来た訳なので、芳川のパソコンの平穏は無事守られた。

「はいはい、ここは出入口なんだから、いつまでも遊んでると出入りする人たちの邪魔になるわ。
そういうのは荷物を片してからにしましょう」

「むっ、ミサカは遊んでなんかいないもん！ってミサカはミサカはブランコの要領で前後に揺られてみたり！！」

「お前どォ見ても遊ンでるだろォが！！
人のバッグをちょっとした遊具代わりにしてンじゃねェよ！！」

打ち止めの言動と行動が見事に正反対さに思わずカッとなって反射を起動させる一方通行。
一方通行はバッグから打ち止めが落ちる様を想像したのだが、そうはならなかった。

「おー！これは新しい遊び方かもしれない！ってミサカはミサカは

激しく揺れるバッグにしがみついてみたり！」

打ち止めはスポーツバッグに腰を降ろし、その肩ひもに手を付けまるでブランコに乗っているような格好なのだが、反射を行った事により一方通行の右肩に下げているスポーツバッグが反射されて、アメリカンクラッカーの片方だけの動きを取って来たかのようにスポーツバッグと打ち止めが跳ね続けていた。

思わぬ遊び方を体験したことで打ち止めの喜びは最高潮に達し、一方通行の苛立ちも最高潮に達したところでスポーツバッグが床に降ろされた。

「あー！折角楽しくなったのにってミサカはミサカは――」

「うるせェ！俺はレジャー施設じゃねェンだよ、遊びたいなら他当たれ」

「むううー！」

「ほら、いつまでもそんなところに居ないで、移動するわよ」

打ち止めの不満をそのままに、芳川はタクシーを呼びとめそれに乗り込むように2人を促す。

それを聞いた一方通行は再びバッグを肩に下げ、打ち止めはそれに乗りかかろうとするが、

「うわあ離して！ってミサカはミサカはアホ毛を掴んだその手を離すようにお願いしてみたり！！」

一方通行はそれを阻止した上に、打ち止めのアホ毛を掴みそのま

ま宙にぶら下げた。

「もォしませんって誓うなら無事に降ろしてやっても良いが、まだやるってンなら……」

「やるなら……？」

「このままアホ毛を引きちぎる」

「鬼！悪魔！！真っ白！！」

「お前、今の立ち場分かってねェよォだなァ……まず、アホ毛だけで全身を支えられている今の状況、

これはすなわち俺が能力を使ってやってるから、全体重を支えられてンだよ。

つまり、お前のアホ毛の命運は俺の気分次第ってことだァ……」

「わ！わ！ごめんなさい！もうしないからってミサカはミサカはアホ毛を守るために謝ってみたり！」

自身の置かれている状況をようやく理解したのか、打ち止めは両手足をじたばたさせながら謝った。

ここまで脅しを利かせればもう大丈夫だろう。一方通行は打ち止めのアホ毛を掴んだままタクシーへと乗り込もうとする。

「わ！離してくれないの！？うそつき！！ってミサカはミサカは一方通行を糾弾してみたり！！」

「バカ野郎、お前は前科一犯だからなァ。再犯防止策だよ」

一方通行は一言告げるとアホ毛から手を離す。
先程まで一方通行に掴まれていた事でピンと上を向いていたアホ毛は、打ち止めの元気メーターを示しているかのように萎びて行った。

芳川はそんな2人のやり取りを見ながら、クスリと微笑む。
出来れば、こんな日常が末永く続いてほしい。

しかし、それが叶わない事は芳川自身よく理解している。

それでも、1秒でも長く。
そう思う芳川は、ペルソナとマヨナカテレビ、それに学園都市の関わりについて思いを馳せたのだった。

## そのななじゅういち　はじまりのとき（後書き）

ジェバンニが一晩でやってくれたのでちょっとだけ予約投稿。

## そのななじゅうに　こわいほうさいど（前書き）

短いれす

# そのななじゅうに　こわいほうさいど

上条当麻が『アドリア海の女王』にてビアージオ＝ブゾーニを撃破してから、１日程経過した頃の事である。

バチカン、聖ピエトロ大聖堂。

ローマ正教の総本山と言えるその場所は、ローマ正教徒にとっては何に置いても神聖で不可侵。

そんな見る者全てを圧倒する、そんな芸術性すら帯びて静寂に包まれていた大聖堂を、不躾に歩く音で満たしていく。

「あーやだやだ！ブゾーニの野郎がヘマやらかしたせいで私の思惑何て全部ぶち壊しじゃない！！

しかもミスった張本人は行方不明とか舐めてるでしょ？」

闇に包まれた大聖堂を歩くは、２人の男女。

外から優しく注がれる月明かりでは、その闇を照らすには値せず、彼らの細部までは分からない。

１人は腰の曲がった、老人らしきシルエットで。

もう１人は、若い女性のような、メリハリのあるシャープな体型をしたシルエットだった。

「しかしなあ、いくらお前と言ってもあれは性急過ぎるぞ。

……と言うより、いずれにせよビショップ・ビアージオでは成功出来なかったはずだ。

あれに、想定外の出来事に対処できる程の能力を期待する方が間違っている」

「はっ、誰にモノ言ってんのよ?私がヤレっつったらヤル。それが世界の法則で、あんたらはそれにはいかイエスで返答したらいいんだっつーの」

「……貴様こそ、誰に向かってその口を開いているか、分かっているのか?」

老人の言葉に対して、女性の様な声が嘲るように返答すると、老人の威圧感が一気に増す。

その威圧感はまさに『頂点に立つ者』と言って差し支えないもので、それを受けた相手は自分が是だろうと非だろうと、有無を言わさず頭を下げざるを得ない程、場の空気はピンと張りつめた。

それでも、女性のシルエットは動きを見せず、

「『ローマ教皇』。それがどうしたの?」

ローマ教皇、すなわち20億の信奉者を抱える宗派の中でも、その頂点に立つ人間。

その頂点に対して、女性の声は対等な口調、いやむしろ女性の方が上位に当たるかのような口調で話を続けた。

先程までのローマ教皇によって支配されていた空気が一気に弛緩する。

それほどまでに軽い口調だった。

「ま、何でもいいわ。アンタが『名目上』てっぺんに位置しているのは事実だし。

そう言う訳でこれにサインして頂戴な」

「……全く、この私に命令形か」

明らかな不遜。
不敬で首を飛ばされてもおかしくは無い態度で女性は1枚の書類を取りだした。
そんな女性の態度に教皇はピクリと反応を示すが、これの態度は今に始まった事では無い。
ポツリと愚痴をこぼした後、書類に目を通す。

「……！待て、これは」

「何よ、アンタだって2年か3年か、そのうちしたらこの書類を用意するつもりだったんでしょ？
いずれやるなら遅かれ早かれ関係ない。それなら今やればいい、違う？」

「しかし……魔術に深く関わる者ならともかく、彼のもの達は主とするものを知らぬだけ。
それなら彼らに示してやればいい。真に従うべき主を」

「『ローマ正教に盾突いた』、それだけで十分罪深いことよ。
『アドリア海の女王』と『法の書』での騒動……表立って動いた馬鹿と裏で動いた阿呆。
目立とうが目立つまいが、罪は罪。それを裁くか裁かないかは私次第」

「確かに、異教は罪だが、知らぬだけならまだ救いの道はある。
それを見せないうちにここまでするとなると、私も否定的な意見を出さざるを得ない」

「この私に否定形は無い」

教皇の意見を、一言で断ち切る。

「受動、連用、連体、命令、未然、已然、終止、仮定……後何だっけ？まあこんなもんか。

兎に角、私は否定だけは認めない。私がやれっていったらやる。

それはそこらを歩いてるガキだろうと、ローマ教皇だろうと『神の子』だろうと等しく同じ。

だからアンタはこの書類にサインをするの。分かった？」

教皇は僅かながら苦々しげな表情を浮かべながらも、首を縦に振った。

女性はそれを見て満足そうにうなずく。

「よろしい」

それだけ言うと、女性の影は闇に消えた。

本当に姿を消したのか、はたまたそのように見せかけたのかはわからない。

というより教皇はそんなことを考えはしなかった。その代わりに、書類へと目を落とす。

やはりといえばやはりだが、その内容は最初に読んだ通りのものだった。

（……あやつは性急すぎるきらいがある）

老人は忌々しげな表情を浮かべると、書類にサインをすべく自身の居室に戻ることにする。

この場にペンは無い。そして、書類にはこのように記載されてい

た。

それを日本語に訳すると、『上条当麻及び学園都市第一位『一方通行』。上記の者達を速やかに調査し、主の敵と認められし時は確実に殺害せよ』というもの。

前者はローマ正教の司教を撃破し、後者は『法の書』の騒動において裏で糸を引いていたと思われる人間と似た容姿をしている。

後者に関しては正しい情報かはわからないが、所詮は科学の徒でローマ正教の敵。いつ処分に動いても同じなのだから、今処分してしまえという考えだろうか。

なんにせよ、実質的にはローマ正教が総力を挙げ、たとえ『神の右席』を使おうとも、確実に暗殺するようにするための申請書だった。

これが意味する事は、１つ。

『神の右席』が１人、『前方のヴェント』……先の女性が動く、と言う事だ。

その書類を読み終える頃には自身の居室までたどり着いており、ローマ教皇はキリキリと痛む胃を抑えるように腹を抱えながら、書類にサインするべくペンを走らせるのだった。

・・・

木原数多は研究者だ。

暗部として『猟犬部隊』を動かし、人様には言えないような事も行ってはいるが、基本的には様々な研究に携わる人間だ。

といってもその研究も主に人様に言えないものなので根っからの

暗部気質というか、つまりはそう言う人間なのだが。

そんな訳で、彼が研究所に出入りすると言う事は当たり前の事で、今日もいつものようにとある研究所に顔を出していた。

目的は、ある人物の顔を見る為。

その人物は女性なのだが、それってひょっとして……とか思うかもしれない。

しかし、残念ながら別にそういった関係ではなく、飽くまでも研究を行う為の『協力者』だ。

とはいえ、木原数多が行う研究は非道を極めるものなので、それに加担するものは木原と同様狂っているか、それか木原に「脅されて」いるかのいずれかに当たる。

「おーっす木山ちゃん。元気にしてっかー？」

木山春生。

木原は彼女の顔を拝みにやってきていたのだが、彼女は勿論後者の人間である。

木山は、木原の顔を見るなり仇敵を見るかのように恨みを込めた視線を飛ばすが、当の木原は何も感じてはいないようで、

「その様子なら元気そぉだな。安心安心。飯はちゃんと食えよ？『人質』ってのは無事だからこそ、その価値を発揮するもんでね」

木原は愉快そうに語るが、木山にはそれらは一つも聞こえておらず、ただただ木原を睨みつける。

「……あの子らは本当に無事なんだろうな……？」

木山はギリッと歯ぎしりをさせ、爪が自身の手に食い込み、そこから血がにじむ程思い切り握りしめた。

その様子を見て更に楽しそうに笑った木原は、

「あーんしんしろって。あのガキ共の中から『適正』の高い奴６人選んでんだから、一番安全だろうよ。

あいつらも必死こいて働いてるぜ？あんたと、残ったガキ共の日常を守る為になあ。

いや、ホントに泣ける話だわ」

ニヤニヤと笑いながらも、涙をするかのような動きを見せ、木山を煽る。

その動きを見てキッと木原を睨みつけるが、やはり無駄なあがきにしか見えていないようで、木原はただただ嘲るような表情を浮かべていた。

「ま、少なくともあんたはここで余計な事せずコーヒーでもすすってくれりゃいいんだよ。

そしたら最低限研究に関わってねえ６人以外のガキ共は何も考えず、何も知らずにいつも通り学校言っていつも通りダチと遊んでって言う日常を謳歌できるだろうぜ？」

「貴様は！！どうしてそんな風に子供達を研究材料に出来る！？」

「……はっ！それをお前が言うかよ！『樹形図の設計者』の代わりにこの街のガキ共１万程使って実験してた癖によォ！！」

「ッ……！それは……子供達の為に……」

「ガキ共の為なら1万人を使っても良いってかあ!?
いや、大は小を兼ねるって言うけどよ、小が大を越えるってのは初めて聞くぜ実際!
助けられたガキ共も重すぎるだろ、「1万人と引き換えに助けられました」ってよお!」

ある意味、その方法で助けられなくて良かっただろ!と呵々大笑する木原に、木山は何も言い返せなかった。
そうして、ひとしきり笑ったところで、木原は木山に言う。

「ま、さっきも言ったけどよ。俺ァお前に何もしないと言う事をしていてもらいてえんだわ。
刑事ドラマとかでよく見るだろ?『余計な事をしたら殺す』って。
とどのつまり、そーいうことだから。じゃあなー」

ひらひらと手を振りながら研究所の一室から去る木原に対して、木山はただその後ろ姿を眺めるだけで何もできなかった。

9月のある日、ある時の出来事だった。

## そのななじゅうに　こわいほうさいど（後書き）

みじかかったれす

## そのななじゅうさん　おーい、んちゃ！（前書き）

久しぶりです。
実家では特にすることもなくぼけーっとしてました。
今後の展開を妄想はしてましたが、文字には起こしてないので休んだ分だけ更新速度が上がるなんてことは無いです。

## そのななじゅうさん　おーい、んちゃ！

最近春上さんの様子がおかしい。

初春飾利が最近付き合いの悪いルームメイト兼クラスメイトな春上衿衣に対して小さな違和感を覚えたのは始業式を終えた後、アメリカへ社会見学から帰ってきてすぐの事である。

放課後になるとたまにどこかへと直行しているようなので、その事について何となく聞いたら、研究所に用事があると言われた。

一緒に着いて行っても良いか春上に尋ねたところ、「『実験』に直接関した関係者以外は駄目なの」と言われたが、「あの実験の後遺症か何か調べるのかな」と納得したので、その時は素直に引きさがった。しかし、それにしても研究所へ行く頻度が高い。

更に言えば最近春上の表情が浮かないもので、日を追うごとに疲れが蓄積されているように感じられた上に、ジャッジメントで部屋に帰るのが遅くなることがしばしばある初春よりも春上の帰宅が遅くなる日もあった。

極めつけは、先日行われた大覇星祭だ。

初春自身はジャッジメントの仕事に駆り出されていたのだが、その際競技場で会った友人の佐天涙子によると、顔を見せはしたが途中から抜け出しているらしい。

しかし、それは春上の独断によるものではなく、きちんと手続きを踏み許可を得ての事だそうで、周りの生徒達も特に不振がる事も無く。

結局、初春は大覇星祭における警備で第１７７支部に缶詰状態だった為、ろくに春上、佐天や他のクラスメイトと会う事が出来なかった為に、その話を聞いて春上に対する違和感やら不信感を抱く事になったのが一般客も減りにあわせて少し仕事が減った大覇星祭最終日の事だった。

初春は春上に対して不安を抱きなんとか話を伺いたいところなのだが、彼女が時たま見せる憂いを帯びた顔、どこか諦めにも似た何かを押し込めたかのような表情に言葉を失う。

とはいえ、それを感じたのは四六時中春上の事を観察してようやく感じられたもので、他の人間にそれを感じさせない事が初春にとっての違和感を増す結果になったのだが。

更に、部屋で顔を合わせても普段通りなのなの言って気丈に振舞っているように感じられた為に、その現状を崩すことや彼女の表情を更に悪くする事を躊躇われ、何も聞くことが出来ずにいた、と言う訳である。

そして本日、九月三十日。

（春上さんは今日も早々に帰ってしまいました……）

初春飾利は決めた。

（木山さんに、直接話を聞きに行きます！）

直接、『幻想御手』及び『暴走能力の法則解析用誘爆実験』に関わっていた木山春生に、直接話を聞きに行く。

……そのように決意を固めたのに。

「うーいーはーるぅー！！」

「にゃあああああ！！？」

出鼻をスカートめくりにて挫かれた。

男子の目もあるこの学内にて堂々とジャッジメントたる初春のスカートをめくると言う行為。

明らかなセクハラで、ジャッジメントとして動いてもおかしくは無いのだが。

「何するんですか佐天さん！！？」

「いやあ、初春がずーっと考え事ばっかしてて構ってくれないからさあ……

それにしても、今日は水色のストライプかあ」

スカートめくりをした張本人、それはクラスメイトの佐天涙子。

彼女は初春の友人であり、女子でもある為セクハラとして捕まえる訳にもいかない。

とはいえ、衆目を集めるような雄叫びと同時にスカートめくり。

初春は佐天への抗議をしながら、めくられたスカートを元に戻す。

周りの生徒達も最早見慣れた光景らしく、女子は初春と佐天の２人をチラッと見て、男子は初春の下半身を凝視し、視線を逸らして行った。

いつもの学校での、いつもの日常。

その中に、初春の友達が１人、足りない。

この事実が初春の心を締め付け、決意をさらに固めることとなる。

「佐天さん、話があります」

「何々？どーしたのそんな改まって？」

初春の表情が急激に真剣なものに変化し、それを察した佐天も軽い口調ではあるが表情を硬くした。

そして、初春は語る。ここ最近感じていた違和感について。

・・・

「……あァ？そりゃ別に構わねェが……」

「じゃ、そう言う事だから、行くわよ打ち止め。後でパフェでも食べに行きましょう」

「え？いいの！？わーい！行く行く！ってミサカはミサカはホイホイと着いて行ってみたり！」

一方通行は芳川桔梗の提案に訝しげにしながらもそれを受け入れた。

何やら打ち止めをしばし借りたいらしいのだが、確かにその提案は一方通行にとってもありがたいものである。

何せこの後テレビを置いているボロアパートに行きたかったのだが、打ち止めをどのようにして離れさせるか考えていたのだから。

今月に入ってから余りテレビの中には行っていなかったのだが、これからはその問題も付きまとうだろう。

その問題とは、テレビに入る際、打ち止めに悟られないようにすること。

黄泉川愛穂は教師やアンチスキルとしての業務もあるので余り気にしなくていいが、打ち止めはそう言う訳にはいかない。

何せテレビの中に行っている間に打ち止めに何かあっては困るのだから、事情を知っている人間がそれと無く一緒に居なければならない。

今日は芳川に任せれば良いが、これからはその事に関しても考える事にしよう。

一方通行はぼんやりとそんなことを思いながら、2人と別れ、テレビを安置しているボロアパートへと向かった。

……はずだったのだが。

「すみません、先生の部屋少しだけ汚れちゃってて……適当に空いてるとこに座ってください、お茶入れますから！」

「……」

「お茶っぱお茶っぱ……お菓子お菓子……ってひゃあああ！！ご、ごきごごきｂひゃあああ！！」

「……」

「親子連れですー！！？おかえりくださーい！！」

「……」

「はぁ、はぁ……すみません、お菓子はなさそうなのでお茶しか出せません……」

「……イエ、オキヅカイナク」

一体何が起きたのか？
それはテレビを置いているボロアパートに起因する。

時は少し遡り、目的のアパートに辿り着いた頃まで戻る。

「あ！あの時の白髪ちゃん！」

「あァ？」

一方通行の借りた部屋は二階にあるので、階段を上らねばならない。
と言う事で一方通行がアパートの二階へと向かうべく、階段に足を乗せた所で背後から声がかかった。

「まさかわざわざ先生の居場所調べてまでお礼に来てくれたのです！？」

「……はァ？」

何やらいつぞやのピンク髪の自称教師が目を潤ませながら声をかけてきた。
どうやら、自室が一方通行の借りたアパートにあるらしい。
確かに、一方通行の目の前で感極まっているピンク髪は、何度かお見舞いに顔を見せに来ては居たが、結局互いに知っている事は自称教師であることと、一方通行の名乗った偽名位だろうか。

互いに細かなプロフィールを知らないまま退院を迎えた為、もう会う事は無いだろうと思っていた矢先にこれだ。
彼女の勘違いも仕方が無い……だろうか？

とはいえ一方通行からしたら別にそんなつもりも無いので思わず尋ね返すのだが、ピンク髪の自称教師こと月詠小萌は何も語る必要はないと言わんばかりに掌を前につきだして、

「大丈夫です！みなまで言わずとも、わかりますよー！」

「……どォでもいいけど、自称教師がこンなとこで油売ってンなよ」

「違います！今日は短縮授業なので、だから普段のこの時間は授業中ですよ！」

「……ふゥン」

「……その目は信じていない目ですね！？
この後もお仕事はあるんですが、お弁当を部屋に置きっぱなしだったからこうして取りに帰って来たのです！」

「そォか、お勤め御苦労さン」

じゃ、これで。と言った感じで一方通行はその場を後にしようとするのだが、

「ではでは、汚いところですが少しだけくつろいでってください」

「えっ」

いや、そんなつもりでここにいるわけじゃないのですが。

一方通行はどこまでもすれ違う思惑に頭を抱えつつ、なし崩し的に部屋へと案内された、と言う訳だ。

ちなみに、一方通行の借りた部屋とお隣さんだったのは余談である。

そして時は現在。

「……どうですか？」

小萌先生はちらちらと差しだした湯呑とそれに手をつける一方通行を見やっていた。

それに構わず一方通行はグイッと緑茶をあおると、

「……まァ、うめェよ」

それを聞いた小萌先生の表情は花を咲かせるように明るくなり、気を良くしたのか更にお茶を淹れようとした。

一方通行は天井のシミをボケーッと眺めつつ、どうしてこうなったか反芻している。

すると、小萌先生が急須を持ちあげた所でガチャリと玄関が開いた。

「あ！結標ちゃん、おかえりなさい！」

「あら？どうしてこんな時間に……ってあなたっ……！！」

当たり前のように入って来た、と言う事は小萌先生と同居している事だろう。

一方通行は結標ちゃん、と呼ばれた女性を見やりながらどうでもよさげに考えた。

対して、その女性の顔は驚愕の一色に染められている。

恐らく、『一方通行』というネームバリューを知っている者、と言う事だ。

それは総じて暗部に通じている、と言っても差し支えない。

とはいえここは月詠小萌の部屋である。

別に事を起こすつもりはないし、させるつもりもない。

そんな視線を結標に送ると、それを察したのか口をつぐんだ。

結標淡希。

冬服のミニスカートに金属製のベルトを付け、桃色の布で胸を隠しただけの上半身にブレザーを引っかけている。

見た所霧ヶ丘女学院の制服だ。確かにそのレベルの学校ならば暗部に関わる生徒も居て然るべきだろう。

余りに斬新過ぎる着こなしをする彼女に対して、一方通行は不信感を露わにするものの。

どういう経緯でこの場に居るのかは知らないが、不干渉を貫く。

互いに視線を交わらせながら同様の内容を頭に思い浮かべた。

「あれ？結標ちゃんは白髪ちゃんと知り合いなのですか？」

そう言えば、基本的に『〇〇ちゃん』は名字が来るのだが、一方通行の時だけ『白髪ちゃん』と呼ぶ。
名前の知らない相手ならまだしも、一応「鈴科」と名乗ったのだが、彼女から『鈴科ちゃん』と呼ばれた事は一度も無い。
（まァ、どォでもいいことだが）
一方通行は思考を切り替えつつも、結標が帰って来た事は丁度良い区切りになると判断し、腰を上げた。
「あれ？もう帰っちゃうのですか？」
「あァ、この後用事があるンでなァ。茶ァごっそさン」
「そうですか……よかったらいつでも来るのですよ！先生次は茶菓子も用意してますから！」
「……そォかい、楽しみに待ってる」
ポツリと小さく、呟く。
「はい！」
小萌先生はそれに笑顔で応え、それと同時にスタスタと玄関へと向かって行く。
その際最後に結標に対して少しだけ視線を這わすと、すぐに前を振り向きそのまま出て行った。
直後、隣の住人（小萌先生は勿論結標も見た事が無い）が帰って

来たのか、ガチャリと扉が開かれる音がした。

「丁度隣の人も帰って来たみたいです。
白髪ちゃんに今度会った時、お隣さんがどんな人なのか教えてもらわないといけませんねー」

「……まだお隣さんのこと、諦めてなかったのね」

そう。「お隣さん」と言う事でたまに訪問するのだが、いつも居ないのだ。

明らかに今は居る。

ならば今から尋ねればいいはずなのだが、こういったケースで訪問しても居留守をしているのか知らないが、居ない。
居留守をしているんじゃないかと、結標の能力である『座標移動（ムーブポイント）』にて小萌先生特製の肉じゃがを鍋ごと（手紙付きで）送ってみた。

一応部屋の内装は小萌先生の部屋と左右対称なので、玄関から１ｍ先の５ｃｍ程宙に浮かせる形で送ったので何かに埋め込まれる、と言う事は無い。
一応、明らかに玄関からは人の気配が無い時にそれを行ったので、誰かの体に肉じゃがが……と言う事もない……はず。

次の日に玄関の前に空の鍋があったのでやはり住人は居るのだろうが、どうにも会いたがらない。
何か事情があるのだろうとは思うものの、ここまで徹底されると非常に気になるが、やはり事情を抱えた人間に無理矢理それを聞くと言うのは良くない。

そんな考えも相まって結局お隣さんの事は放置すると言う方向で考えがまとまったのだが、あのタイミングなら確実に一方通行はお隣さんの顔を見たはずだ。

こうなると気になると言う気持ちが再燃して来る。

「どんな人なんですかねー。今度は鯖の煮付けでも作りましょうか」

「……今度はあんな博打みたいな真似したくないからね」

「分かってます！今度は堂々と、玄関からですねー」

のほほんと話す小萌先生を見やりながら、結標は考える。

何故、一方通行がここに。

と言うかさっきの扉の音、下手したら一方通行自身の可能性だってある。

（まあ、こんなセキュリティもへったくれも無い場所に隠れ家なんてありえないだろうけど）

馬鹿みたい、と斬って捨てた考えが正解だとは結標も思わなかっただろう。

小萌先生に学校はどうしたと突っ込みを入れながら、一方通行との邂逅を記憶の奥底に封印するのだった。

・・・

部屋選びに失敗した、と後悔を露わにしながら部屋の中に入った。

するとそこには呑気にも見舞いの品で食べきれなかったもの（生

ものは優先的に消化していたのでお菓子等）を黙々と食べる布束砥信とクマ、それに９９８２号の姿が。

確かに壁が薄いので大声で話すと会話が筒抜けになる。

とはいえ無言になるほど意識する必要もないというのに。

「……辛気くせェ顔して何してンだよ」

狭い部屋の中、３人の男女が言葉も無くただただマドレーヌを食べ続ける。

何と言うか、シュールを通りすぎて軽くホラーだ。思わず突っ込みを入れさせられる程度には。

「いやさ、お見舞いの品をもらいうけたは良いのですが……多すぎです。

と、ミサカは辟易した表情を浮かべながら部屋に詰まれた日本各地の銘菓を眺めます」

見舞いの品。

食べきれなかった分、とあたかも余り物のように表現したが、食べきれなかった分の方が多いのだ。

量にして食べた分：食べきれなかった分＝１：９。

単純に９倍の量が残されている、というわけだ。

何故そんな量の物が残されたのか？

その原因は、久慈川りせと桐条美鶴。

彼女らは嫌がらせのごとく（前者は本当に嫌がらせ、後者は天然の好意による行為だろうと一方通行は予測している）見舞いの品々

を送りつけてきたのだ。

久慈川にしても美鶴にしても、病院に直接来た時は軽く果物一式を持ってきた程度だった。

後日郵送で大量に送ってきて、誰に文句を言えばいいのか分からなくなった一方通行なのだが、わざわざ返送する訳にも行かずそのまま受け取ったわけだが、当然ながら食べきれない。

誰かにあげれば良いのでは、と思うだろうが、まずクマは論外として、布束は足がつくようなまねはできないし、９９８２号もそこまで人脈は広くない。

駒場利徳や上条当麻、御坂美琴に黄泉川愛穂らにもあげて行ったのだが、それでも余りまくっている。

ここで最終兵器・インデックスの名が挙げられるだろうが、驚いた事に、何か心境の変化があったのだろう。他の面々がもらった量と同じ分しか受け取らなかった。

ところで、そのインデックスなのだが、驚くべき事に今現在バイトをしている。

家事スキルを鍛えるのと同時にお金も稼げる、と言う事で勤務地はいつものファミレスだ。

そこで店員とインデックスが繰り広げるどたばたファミレスコメディをおよそ３０万字にわたって書きあげたのだが、この話は別の機会にするとしよう（虚言）。

兎にも角にも、余った見舞い品はこのボロアパートに集結したのだった。

「ｗｅｌｌ、捨てると言う選択肢もなんだかもったいないし……」

「捨てる位なら胃袋に納めてやるクマよ！！もったいないおばけが出るクマ！」

「……そォだ、良い事思いついた。お前お隣さんと関わりとか持ってるかァ？」

「肉じゃがもらったクマよ。とっても美味しかったクマ！でも顔は見てないけどクマ……
お礼をしたいところだけど、変に動いてめーわくはかけたくないクマ……」

「そォだな、顔をあわせねェのなら、変に首を突っ込まれる事もねェだろ」

チラリと箱の山を見ながら一方通行はクマの言葉に返答した。
それを聞いたところで、９９８２号と布束も理解する。

「それはまた……ａｎｙｈｏｗ、ある意味恩をあだで返すような……」

「大丈夫です、飽くまで『善意』ですから。
と、ミサカは黙々と未開封の菓子を段ボールに詰めて行きます」

翌日、月詠小萌宅には明らかに食べきれないだろう量の銘菓が敷き詰められた段ボールが３箱程詰まれていた。

## そのななじゅうさん　おーい、んちゃ！（後書き）

「あ！白髪ちゃん、また来てくれたのですか！？
今日はいっぱい茶菓子があるので、ゆっくりしていってください！
生八つ橋にサーターアンダーギー、ひよこに東京バナナ、白い恋人にマス寿司とかもあります！」

「お、おォ……」

生モノは先に消化したのではないのか、と場違いな考えが一方通行の脳内をめぐった。

# そのななじゅうよん　うごきだすくらやみ（前書き）

風呂敷ひろげるよー

## そのななじゅうよん　うごきだすくらやみ

学園都市。

東京西部の山岳地帯を切り開いて作られた街で、面積は東京都のおよそ１／３にあたる広さを持ち、その周囲は高い外壁で覆われている。

人口は２３０万人でそのうちの約８割が学生と言う、学園都市の名に恥じない人口比率である。

あらゆる分野で科学技術を応用した研究を続け、世界の中でも１位２位を争う程学問に力を入れているのだが、この街にはもう一つの側面がある。

それは超能力育成機関であり、この学園都市にある学校に入学したいと言う子供達にとってはそちらの方面の方が有名だろう。

そうして学生を対象にして超能力を開発していくのだが、その価値や強度、応用性や商業性によって６段階、レベル０～レベル５に分類されて行き、そのレベルが高くなる程に希少性も高くなり、レベル５とまでなるとこの学園都市には現在７人しかいない。

人工２３０万人のうち８割が学生でそのうちの７人なのだから、希少性も一目瞭然だろう。

そんな中で、浜面仕上は無能力者（レベル０）である。

厳密に言えば『目に見えないレベルで何らかの変化をもたらしている状態』にあるのだが、目に見えないのなら意味が無い。

浜面自身、学校などとうの昔に止めてしまっているので『〇〇系能力者』と書類に書いてあった気がする、と言う程度のものでどんな能力者なのか忘れたまま今日までを過ごしてきた。

学生のうち6割がこれにあたるので、別に恥じるような事でも無いのだが、やはり明確な『差』があるためか、時には無能力者の人間は落ちこぼれと揶揄されることもある。
酷い時には生徒を導くべき教師にすら馬鹿にされるようなこともあり、そのような環境にいつまでも身を置いておけるような人間は少ないだろう。

そうして能力開発に絶望して学校を止めて行った者達の集団の事を『スキルアウト』と呼び、先述した通り基本的にはグレて学校を止めて行っているなので、中々の荒くれ者の集団である。

浜面もまたスキルアウトの1人で、駒場利徳をリーダーとしているグループに属している。
駒場自身は女子供などの弱きものを虐げることを嫌っているからか、このスキルアウトのグループは比較的優しい部類にあたるだろう。
それでもＡＴＭ荒し等の窃盗行為でお縄にかかることもしばしばあるのだが。

そんな駒場の思想を受けて、浜面自身も弱い者いじめ等をする事は無い。
かといって上条当麻のように不良に絡まれているのを片っ端から助けるような熱血漢でもないのだが、ある日、状況が違う現場に遭遇してしまった。

目の前にはお姉さん系からロリ系まで網羅した4人組がナンパされているのだが、非常に嫌そうな顔をしており、ナンパをする側は明らかに不良っぽい感じの2人組で、しぶとく喰い下がっている。
人数としては4対2なのだが、女の子達が無能力者ならはっきり

言って危ない。

普段ならスルーするところなのだが、相手は2人で何とかなりそうだし、何だかボーっとしているジャージの娘など浜面的にはかなりストライクであった為に、助太刀として助けようと動いたのだが。

時は九月三十日。

「はぁまづらぁあぁぁぁ！！！！テメェドリンクバーごときに時間かけ過ぎだろーがああ！！」

ファミレスに響き渡る少女の声に、浜面は複数のグラスを持ったままビクッ！と肩を震わせ、またある所ではそれに吃驚した店員と思われる長い銀髪の少女は片付け最中と思しき皿を床にぶちまけた。

（畜生ォォォ！！どうしてこうなった！？どうしてこうなった！？）

邪な心を持って人助けに及んだ結果が、これだ。

情けは人の為ならず、という言葉がある。

この言葉の意味は「情けをかけ、恩を売っておけばいつか巡り巡って自分に帰って来るから人には親切にしておけ」と言うものだが、まさに真逆の結果になってしまっている。

更に、そのナンパをしていた不良、確か横須賀とか言う男なのだが街中で会うたびにやたらと絡まれるようになってしまい、まさに泣きっ面に蜂状態。

この事から情けなどかけぬと心に誓った浜面なのだが、助けた女の子４人組は高レベルの能力者だったらしく、浜面の打算が入り混

じった親切心は無駄も無駄だった。

華麗に助けに入って白馬の王子様計画は根本的に誤りで、女の子達は待っているだけのお姫様等ではなく。

普段の2割増し程イラついた口調なのは、このファミレスに立ち寄る前に買おうとしていたシャケ弁が売り切れだったからだろうか、今現在怒声を上げながらドリンクを催促した少女の名は、麦野沈利。とある暗部組織のリーダーを務めており、それに伴って実力も折り紙つき（レベル5）なものである。

浜面はそんな超能力者の前にのこのこと現れ、眼に付けられてしまった為に暇さえあればこうしてパシリとして駆り出されているのだ。

そして、そのテーブルには他にも少女が3人。

1人は絹旗最愛と言う名で、座席の上で体育座りをしながら映画のパンフレットを流し読みしている。その内容はB級もB級で、物凄い残念そうな顔をしているがそれはB級な事で残念な顔をしているのではなく、更にその下があるにも関わらずB級と言う中途半端な出来に残念がっていて、絹旗の本来の趣味はC級映画なのである。

続いてその隣でサバ缶をつついているのがフレンダ＝セイヴェルン。浜面とフレンダが自己紹介した際フレンダはファミリーネームは名乗らなかったのだが、「なんかフレメアに似てんな」と言う発言に過剰反応した結果、実は姉妹である事が発覚。

後に感動（？）の再開を果たしたのだが、それはさておき。

最後に何処か虚空を見つめ、何を考えているのかはたまた何も考

えていないのか、表情から読み取れないその可愛い少女は滝壺理后。どこか一点をジッと見つめ、その目に揺らぎは全く見られない。何秒その状態が続くのか数えてみたいところだが、こちらが根負けしそうな程にボーっとしていた。

「結局、浜面ごときに何か期待する事自体無駄ってわけよ。見てよ麦野、このぬるっぬるのジュース。罰ゲームを提案したくなる位ぬるぬるだよ」

「そうね、ホントに使えないわね浜面は。満足にジュースの一つも入れられねえのかっての。これなら初めてのおつかいに出たガキの方がまだいい仕事してんぞ」

「確かに、ミジンコ以下の仕事量しか出来ない超浜面です。ですが私らの為に超奉仕活動をさせて下さいって言ってきてるのですから、シェンムーの続編程度には期待してもいいんじゃないですか？」

フルボッコだった。

余りの言われよう（と言うかパシリは浜面の願望ではなく、強制されたもの）に浜面は何も言えなくなった。

何となく目のやり場に困って、唯一何も言ってこない優しき少女の方を見やる。

「あーあ、優しいのは滝壺だけかあ。文句あるなら自分で取ってきてくれよな、つーか何で俺ここに居るの？」

味方がいない、まさに四面楚歌の中で見た希望の星、何も文句を

言わない優しい滝壺。
そんな滝壺に助け船を求めるべくパシリにされていることへの嘆きを呟くのだが、
「……ぐー、ぐー……」
「寝てる！？と言う事は俺の味方確定ではないのか！？」
味方か敵かと問われたら、中立だった。
浜面のぬるジュースを見ていない為どのようなリアクションを取るのかは、不明。
すなわち滝壺が起きるまでは、敵しかいない状況で、とどのつまり圧倒的危機だった。
「きっと滝壺さんも目を覚ましたらこのぬるい飲み物達を見て、「流石の私も超応援できない」って言うに違いないです」
「いいやそんなことはない！！滝壺だけは俺の味方で居てくれるはず！
じゃないと不公平だ！ただでさえ男1人で肩身狭いというのに！」
絹旗が浜面を絶望の淵に追いやるべく悪魔の囁き攻撃をするが、浜面はそれに負けじと反論する。と言うかただの希望的観測だった。
「逆だと思う。結局、中途半端に浜面の味方なんてしたら、勘違いして付け上がるに違いない訳よ！」
「その幻想は初対面の時にぶち殺されてるので是非とも安心してほしいものだぜ」

「いや、ジュースもまともに運べねえ浜面だ。
きっと学習能力ゼロで滝壺と2人きりになったら、
滝壺がどんな目に会うか分かったもんじゃないって」

フレンダはサバ缶を食べ終わると、手持無沙汰になったのか何とは無しにメニューを広げていた。
するとメニューの最初に「本日九月三十日から1週間は、魚フェアー！」と言う見出しと共に様々な魚をメインにした品ぞろえが描かれている。
それを見たフレンダはいじける浜面をいじることを止め麦野にそれを見せながら、

「麦野！これ見てよ！鮭のムニエルが美味しそうって訳よ！」

それを見た麦野は先程までの鬼がマジギレ5秒前の様な表情から一気に可愛らしい少女が可愛い人形でも見つけたかのような表情に変貌を遂げた。

麦野は何も言わずフレンダに対しサムズアップしながらもう片方の手で店員呼び出しボタンを押す。

すると、先程麦野の叫びに吃驚した店員がムスッとしながらやって来た。

「……やっとドリンクバー以外に注文する気になったのかな？」

店員の文句は最もなもので、彼女らはドリンクバーだけでワイワイと騒ぎながら持ちこんだ食べ物を食べていたのだ。
ドリンクバーのみ、と言う注文は良くあるのだが、更に食べ物を持ち込む人間はそうはいない。

更には先程の麦野の声のせいで皿を割ってしまったのだから、彼女達に良い思いを抱くと言うのは無理だろう。
とはいえ、それをあからさまに不機嫌な口調で客に対して表すと言うのは、店員としてどうなのか。

「あー、ごめんなインデックス。こいつらホントに我が強い奴らでさ、俺じゃあ止める事はできねーらしい」

「大丈夫だよ、しあげ。私も最初から期待していなかったから」

バッサリと斬られた浜面は、その場に崩れ落ちた。
それを見た麦野は笑いながら鮭のムニエルを注文して、告げる。

「私らよりも付き合いの長いインデックスにすら見捨てられたら、終わりね」

実を言うと、最近アイテムの面々＋浜面は、インデックスの働くいつものレストランに足繁く通っていた。
何故か一方通行達とは出くわす事が無かったのだが、ただの偶然だろう。

それはさておき、この店に来る度に基本的にはドリンクバーしか頼まずに過ごしていた為、インデックスの事を顔見知りな浜面を通じてそれなりに仲良くなっていたのだ。メニューをろくに頼まないことにインデックスが堂々と苦言を呈す程度には。

その為にあのような口調で文句を言っても、客である麦野達は顔色を変えることなく話を続けられるので、インデックスの接客が常にあのような辛辣なものと言う事では無いと追記しておく。

鮭のムニエルに、ライスのＢセット（オニオンスープとサラダ）を注文したことでインデックスはウキウキと伝票を刻む。
浜面はまだ立ち直れずｏｒｚの体勢を保っていたのだが、ふとその状態で顔をあげると。
視線の斜め左。
超ミニニットのワンピースを身にまといつつ体育座りをする絹旗の両足と、太ももを覆うワンピースの先端部分が目についた。
浜面は驚きのあまり、飛び上がる。しかし浜面が崩れ落ちていた地点は、テーブルの端。
彼の頭の射線上にはテーブルがギリギリあった為に、それに従って思い切りテーブルを下から突き上げる。
と言っても、ぬるぬるのドリンクは嫌々ながらも大体消化し終えていたので主な被害は無造作に置かれていた水の方にあった。
見事にグラスが飛び上がるものの、何とか着地を決めたり、中身の無いグラスが倒れるだけで事は終わるかと思われたのだが。
１つだけ、水の入ったグラスが目を開けて寝ていた滝壺に。
結果として、滝壺は水を思い切り浴びる羽目になった。
そして滝壺は、開いていた目の焦点を浜面の方へとゆっくり合わせて、
「……はまづら……どうしたの……？」
「……原因は確かに俺だけど、ろくに情報を集めもせずに、犯人を俺と断ずる。

成程、四面楚歌に変化はなし、か……」

よよよ、と再び崩れ落ちそうになる浜面を、麦野は煩わしそうな顔をして止める。

その手には、何やら長い文章が表示されている携帯電話が握られていた。

「浜面、アンタはもう帰れ。会計は私がしておくから」

「へ？」

浜面の言葉を待たずして、麦野は続ける。

「仕事が入った。こっからはR指定よ」

ぼんやりと浜面は、俺がアウトなら絹旗とかもアウトじゃないのか？とか場違いな事を思った。

・・・

垣根提督は第三学区にある高級ホテルの一室で嘆息した。

この学区では外交等、外部からの客を多く招く。

その為警備員関係の施設や、ホテルのランクは学園都市の中でも最高で、学園都市の最先端技術を紹介する国際展示場が数多く並んでいる。

外部からお偉いさんを呼び寄せたり研究の成果を示す展示会を行ったりする為に、自然とセキュリティも学園都市内でもトップクラスの物であり、垣根が所属する暗部組織『スクール』でも隠れ家を

1つ置いていた。

その隠れ家とは、今現在垣根がこもっているホテルの一室の事なのだが、彼はそこにあるキングサイズのベッドに寝転びながら携帯電話をいじっている。

同室に居たスクールの所属と思われるドレスの少女は、何度も何度も携帯を見返す垣根に対して訝しげな表情を浮かべ、

「どうしたの？携帯ばかりいじって溜息なんてついちゃって。恋煩い？」

「ちげえよ、馬鹿かお前」

「じゃあ何よ。さっきから何度も携帯見たり見なかったり。好きな子からのメールを待ってる思春期の中高生にしか見えないんだけど」

「はっ。そんな楽しい青春を送って来たとでも思ってんのか？めでたい頭してんなあ、おい」

ドレスの少女の冗談を鼻で笑い受け流す垣根だが、相変わらずカチカチと携帯をいじっている。

「それじゃあ何してるの？出会い系サイトで私の真似事とか？」

「金なんざ掃いて捨てる程あるっての。お前みたいな意味不明なバイトはしねえよ。

探し物だよ、探し物。見つけにくいもんでな、カバンの中も机の中も探したけど見つかんねー」

「へえ。あなたが見つけられない程度のセキュリティに守られてるってことはよっぽどの物なのね」

意味不明、と言われて少しムッとするものの、実際中々にずるい商売をしている為に、何も言い返さない。

しかし、探し物と聞いてドレスの少女の興味はそちらへと向かって行く。

「そうだな。昨日行われた展示会にも出てなかったからな。やっぱ本当に重要な技術はコソコソと秘匿しやがる」

それでも、技術を十全に示さなくとも、各国のそれより一回り二回りも上回っているそれに対して、垣根は忌々しげに吐き捨てた。

「『あの意味分かんねえ物体』はまだしも、『ピンセット』の方は公開されてると踏んだんだけどな。

やっぱ本物はどっか別の場所に隠してるらしい」

二つのキーワードを受け取ったドレスの少女はピクリと眉を動かす。

「『未元物質（ダークマター）』を扱うあなたが「意味分かんねえ」って、よっぽどなのね」

「まあ、そうだな。つってもそんなもんがこの世に本当に存在するのか怪しいけどな。

だが、実際に存在しちまってるんだから仕方ねえ。『黄昏の羽』は、実際に存在しちまってるんだよ」

「黄昏の羽？」

事もなげに言い放つ垣根に対して、ドレスの少女は首をかしげた。

「ああ、『黄昏の羽』だ。知ってるか？『絶対能力進化実験』って奴」

垣根はけらけらと無邪気な笑みを見せながら、暗部の人間なら誰だって知っているだろう言葉について尋ねる。

それに対し、ドレスの少女は何を当たり前のことを聞いているのか、と言った顔をするが垣根はそれを無視して言葉を続ける。

「あれ、一時凍結……つか事実上中止になってるってのがもっぱらの噂だけどよ、

まだ終わってないっつったらどうする？」

「……それはまた随分な話ね。第一候補（メインプラン）がまた動き出したっていうの？」

ドレスの少女のきょとんとした顔に、垣根は悪戯が成功した子供のように笑う。

どうやらそう言う訳ではないらしい。

「絶対能力者への道は、人の『心』にあるらしいぜ？

非科学も良いとこだよな、人類は心が何なのかすら理解できてねえってのによ」

「ふうん。よくわからないけど、それなら精神感応系の私もレベル６になれるのかしら？

心を操るってそう言う事じゃない？」

クスクスと笑いながら冗談を告げるドレスの少女に、垣根は更に笑った。

「はっは、そりゃ傑作だな！レベル５の俺や『一方通行』を差し置いてお前が飛び級で昇進か！
んな事になったら脳みそ切り開いたり人体いじくったりしてレベル５の研究を続けた科学者どもが馬鹿みてーだなオイ！！」

「……そこまで笑う事無いじゃない」

「ははっ、そりゃ悪かったな！何故かツボにハマっちまってよ。お前もあるだろ？
別に面白くないのにどうしてかわからねーが、笑っちまう事ってよ」

「何だか釈然としないけど、まあ良いわ……
それで、その『黄昏の羽』っていうのがレベル６に至る為のキーになるって事よね？」

ふてくされた顔をするものの、気を取り直したかのように話を本筋に戻した。
垣根はドレスの少女に対して首を縦に振りながら返答する。

「その辺はよくわかってねえけどな。
とりあえず何かしら関わってる事だけは分かってる」

「なーんだ。その程度しかわかってないってことは、本当に実験が行われているかもわかってないんじゃないの？」

散々偉そうに話してた癖に、詳しい事はまだまったく分かっていないらしい。
ドレスの少女はつまらなそうな顔をして垣根に話を聞くが、やはりその通りのようだ。

「……まぁ、そうだけどよ。それを調べる為に色々調べてんの！携帯をいじくってんのはそう言う訳だ」

「だったら最初からそう言えば良いじゃない」

「うるせえ、そうやって人と話して金取んのがお前の仕事だろうが。俺の話も聞け」

ドレスの少女のバイト、それは援助交際……もどき。

実際に性行為を行う訳ではないのだが、出会った男性と話をするだけでお金をもらう、実にボロい商売である。
仕事ばかりで人間関係を築けない、そんな悲しき男達の自尊心を満たす為の仕事で、ドレスの少女の能力『心理定規』に恥じない、人の心を手玉に取るバイトをしていた。

「じゃあ、あなたからもお金取っていいの？」

「……リーダー権限で、無しだ」

そんな訳なので、ドレスの少女と話したと言う事でバイト代を請求するのだが、職権乱用攻撃をした。
大人げない垣根に対し、ドレスの少女はクスリと微笑みながら、冗談交じりに皮肉を言う。

「お金は掃いて捨てる程ある、が聞いてあきれるわね」
「金は無駄に使わねえに限る。必要な時に必要なだけ使うもんだ」
「それを世間一般ではケチって言うのよ。
あなたがお金くれたら私だってバイトなんてしないのに」
「……何で俺がお前を養わなきゃならねえんだ」
「今ならもれなく私の手料理も付いてくるけど」
「んなもんあれだ、普通にそこらの飯屋で事足りる。
お前に金払う位ならレストランに払うわ」
「ゴチになりまーす」
「……誰が奢るっつったよ」
「やっぱりケチじゃない。たまにはいいでしょ？」
「チッ……仕方ねえな。だが場所は俺が決めるぞ」
垣根は少し不機嫌そうに腰を上げ、それと同時にドレスの少女は少し嬉しそうな表情を浮かべ腰を上げる。
しかし、その瞬間。
垣根の携帯が鳴り響いた。
「……仕事だ。いつもの隠れ家に行くぞ」

垣根は普段は仕事が入ると不機嫌な顔になるのだが、この時だけは少し嬉しそうな顔をし、それと同時にドレスの少女は少し不機嫌そうな顔になった。

## そのななじゅうよん　うごきだすくらやみ（後書き）

「ところで、ピンセットって？」

「ああ、ちっせーもんつまむ為のもんだよ」

「……それはわかるけど」

「まあ、そのうち教えてやるよ。大した話でもねーんだけどな」

## そのななじゅうご　いたいっていきてるってことだよ（前書き）

木原編、これ書きたいがためにこの物語を書き始めたのです。
苦節（↑？）３か月、ようやくこの時がきたです

**そのななじゅうご　いたいっていきてるってことだよ**

よくよく考えたら、木山春生の入院先は知っているが、退院した後の居場所までは知らない。

初春飾利は佐天涙子と共に木山の元に行こうとしたのだが、居場所が分からないのなら意味が無い。

またしても出鼻を挫かれた初春は、今日は白井黒子に仕事を押し付けていたのだが結局その仕事を消化しながら色々調べようと決め、第１７７支部へと向かった。

「何にせよ情報を集めないといけません！」

１人息巻く初春に対して、佐天はイマイチ乗り気ではない。

「ねーういはるー、本当にその話は本当なの？」

初春や佐天が通っている柵川中学の中に第１７７支部があるので移動は非常に楽だ。

最新鋭のセキュリティによる声紋、指紋、指先の静脈と振動のパターンのチェックによって本人確認が行われている中で、佐天は気だるげな表情で初春に尋ねた。

たまにあるのだ。

初春が勘違いで暴走した揚句周りを巻き込んで何かをやらかす、と言う事が。

もちろん勘違い率１００％と言う訳ではないのだが、それでも結構な確率で勘違いしているので、佐天の目の前で爛々と決意の目を

輝かせている初春の事を疑うのは自明の事である。

しかし、突き詰めるとそれは初春の正義感やら善意やらで行われている為に、誰も文句は言えない。

そんな訳でセキュリティに認証された事で、扉を開ける事が出来るようになった為、それを開けながら初春は言う。

「『今回』は、間違いありません！！」

（だからそれ前にも聞いたから、今改めて聞いてるんだけどなー）

フン、と胸を張る初春。

その奥で書類の山を死んだ眼で消化する白井。

白井の隣では悠々と武蔵野牛乳を飲んでいる皆の巨乳先輩。

何だかいつもの光景だなーと、佐天は初春の話を気楽に受け止めていた。

・・・

何と言うか、普通にデートだった。

学友達の追撃から辛くも逃げ切った上条は、予定通り待ち合わせの場所へとたどり着き、罰ゲームを甘受するつもりだったのだが。

まずは何やらいちゃつくカップルの多いカフェで昼食をとり、続いて御坂美琴が機種変をしたいと言うのでそれに着いて行ったらゲ

コ太が何とかと言いながら2ショットの写真を撮ってみたり、それが終わったらラウンドファイナルにてパンチングマシーンの記録をそげぶで更新したところ、前最高記録は御坂が樹立したものらしく、それを越えるまでマシンを殴り続けたり、ＵＦＯキャッチャーにてゲコ太再びでもの欲しそうに見ているのに上条が気付いたのでそれを取ろうとしたところ、何と一発でゲットすると言う快挙を成し遂げそれを御坂にプレゼント。御坂はあわあわ言いながら顔を真っ赤にさせてそれを受け取り最後にプリクラをまたもや2ショットで撮って（何やら笑顔を強要する機械だった）ラウンドファイナルを後にした。そうして向かった先はカラオケで、ここ最近トレーニングやら魔術師やらマヨナカテレビやらでろくに遊べなかったのだろう、思いの丈をぶちまけるべく上条はシャウトし、それに負けじと御坂も高らかに歌った。最終的に採点で得点の高い方が罰ゲームと言う、何だか当初の目的を逸脱しているのではないかと言う遊びに発展し、それが終わると次は歌う前にあらかじめ自分が予想した得点と歌った後の採点を一致させると言う遊び（勿論負けた方は罰ゲーム）に昇華していった。

何と言うか、リア充はしねば良いと思う。

そして時は現在。

「なあ……ちょっといいか？」

「ん？何？」

声が枯れそうになる程歌ったので、２人は休憩がてら個室のソファーに座りこんでいる。

２人はテーブルをまたいで向かい合うように座っており、何やら上条が黙りこんでいるので御坂も話題は無いものかとあれこれ考え

ながら口をつぐんでいた。
そんな中、上条は真剣な顔つきで意を決したように口を開くので
御坂はちょっとだけドキドキしながら上条の言葉を待つ。

「実は……」

「じ、じつは……？」

溜める。

「実はだな……」

「実は……？」

溜める。

「……御坂！」

「ひゃ、ひゃい！！」

「……実はインデックスに、ペルソナの事がバレた」

御坂は思わずずっこけた。
そう言えばそう言う奴だった、といちいち怒ることも億劫になる
程に、思わせぶりな男。

「な、なによ期待させちゃって……ってバレた!?」

思っていた内容と違う言葉が飛んで来たのだが、その言葉は御坂を驚愕させるに値する内容だった。

一体何があったのか、話を聞くべくソファーへと再び座る。

ＢＧＭは御坂が話題が思い浮かばずに、何となく送信した曲の「私京都さ行ぐだ（銅剣ｖｅｒ.）」。

これは大阪にある芸能人プロダクション「歳本興業」所属の芸人達が、カラオケの映像をプロデュースしようというもので、としもと芸人である銅剣（紙芝居をネタにしている芸人）がカラオケの映像を紙芝居にしていると話題になっていた為に、御坂も普段歌うはずの無い演歌を何となく機械に送信してしまった。

その為、上条が真剣に事情を話す（魔術の事は避けて）中、その背景でガイドだけあってハイレベルなガイドボーカルがかなり珍妙なテンションで歌いあげている。

その内容としては歴史大好きな女の子が田舎のくせに歴史を感じさせない地元に絶望し、独り立ちして京都に行き寺巡りをするんだ、と言うものでオチとしてはでもやっぱり地元が良いとなるちょっとネタに走った臭い歌詞を感じさせるものだった。

普通にＢＧＭだけで良いのに何故ガイドボーカル付きを選んだのか。

ガイドボーカルなので歌い手の邪魔をしない程度の音声なのだが、誰も歌ってないので囁くように耳に入って来る。お陰で上条の話をろく聞けなかった。

「……ってな感じなんだけどさ、御坂。お前どう思う?」

全く聴いていなかった、とは言えない。
こんな真剣な顔をしている人間の話を一言たりとも聞いていていない。
そんな不真面目な人間だと思われるのは嫌だ。
御坂はレベル5としての学園都市最高峰に位置する頭脳を駆使した結果、

「まぁ……あんた馬鹿なんだから、突っ走るしかないんじゃないの？今までだってそうして来たじゃない」

良くわからない事を言って有耶無耶にする道を選んだ。
しかし、上条は真面目な顔をして御坂の言葉にうんうんと唸っていた。
御坂はヤバい、間違えたか！？とか思うものの、上条は何やら感じ入っている様子だ。

「そっか……やっぱ考え過ぎても駄目か……そうだよな、ありがとな！御坂！！」

「へ？」

「何か人に相談したらすっきりしたな！それじゃ、上条さんはまた歌うとしますか！！
って何だこれ？私京都行く？わはは、私京都さ行くだー！！」

「……」

何と言うか、結果オーライだった。

・・・

無造作にダンボールの中にお菓子を詰め込む作業を終えた一方通行達は、とりあえずテレビの中に入って話をする事にした。

とはいえ、ここ最近はテレビに放り込まれる人間が居ないので、情報は集まらない。

天井亜雄の影も、いつか行ったホテルへと赴いたのだが、文字通り影も形も無く。

代わりと言わんばかりにいつの間にか直っていたエレベーターから全身墨汁で塗りたくったように真っ黒な身体で頭に青い花を咲かせた巨大な赤ん坊のようなシャドウが出てきた。

しかし、一方通行はまだ病み上がりで下手に動くと傷口が開く恐れがあるので遠距離からの支援にあたる。そうして一方通行の傷を悪化させること無く撃退する事に成功したのだが、その巨体から繰り出される「暴れまくり」や「デスバウンド」はかなり強力な物理攻撃で苦戦を強いられた。

ちなみにこのシャドウは『刹那の児』と言って氷が弱点だったのだが、上条当麻がこの場に居なかったのであそこまで苦労したと言うのは何とも運の無い話である。

結局、いつも通りテレビの中でペルソナを鍛えるだけに終わった一同は、今日のところは解散しようと言う結論に落ち着き、一方通行と９９８２号はボロアパートを後にしたのだった。

辺りはもう夕方で、私服姿の学生達も最終下校時間を過ぎるなあと言った感じで家に帰り始めている。

そんな中で一方通行と９９８２号は、

「外食にする？コンビニ弁当にする？それともミサカにする？」

「全部却下だ、打ち止めと芳川を回収しに行くぞォ」

ろくな選択肢が無い。

などと言ったら９９８２号は怒るだろうか、一方通行は軽く９９８２号の言葉をスルーして歩きだした。

「まさか……！」

しかし、９９８２号は何かイケナイことを知ってしまったかのような顔をしている。

思わず一方通行は立ち止り、

「なンだよ」

「いえ、大丈夫です。動揺は少ないです。一方通行のストライクゾーンは変則ストライクゾーンだったのですね？

と、ミサカは今までミサカに迫って来なかった事に対しての理解が及んだことを一方通行に伝えます」

「……はァ？」

「だってそうでしょう、年頃の乙女がこんなに近くに居ると言うのに、

一方通行はミサカを無視して幼女と年増の元に行くと言うのですから」

「……」

「何も言わない、と言う事は図星なんですね？
ストライクゾーンは真ん中ではなく、本来はボールのはずの所をドーナツ状に囲んだところがストライクなんですよね？
と、ミサカは一方通行がどんな趣味をしていても大丈夫ですと女神の様な微笑みを浮かべます」

「……」

一方通行は何も言わない。と言うか、９９８２号の背後を見ていた。

そこには、

「年増、年増年増、とりま年増……」

何やら負のオーラを発散させながらブツブツと念仏を唱えるかのように年増と連呼している芳川桔梗が。
その後ろでは状況を飲み込めずポカンとしている打ち止めがいるが、９９８２号にとって今はそちらはどうでもいい。

「あ、あの……芳川、さん？」

思わずさん付けで９９８２号は尋ねるが、芳川の耳には入っていないようだった。

「成程……成程ね……命を散らす場所はここで良い、と言うことね？
大丈夫、毎年この日この場所に花束を添えてあげるから」

「ちょっと待っ――――」

９９８２号の弁明を待たずして、芳川は動き出した。
研究者のくせにいつそんなに鍛えたのかと言う程の俊敏な動きで９９８２号へと急襲し、９９８２号は意識的ではなく反射的にバックステップをして何とか避ける事が出来た。

しかしあの場に居たらもれなく潰されていたに違いない。それを感じさせるほどの威圧を芳川は放っており、思わず冷や汗が頬を伝う。

そして、９９８２号の汗が、顎から地面に零れ落ちた瞬間。

「ッ～～！！」

２人は声も無く駆けだした。
しかし、駆ける方向は、２人とも同じ方向。

それはすなわち、９９８２号の逃走と、芳川の追跡の開始だった。

そうして取り残された打ち止めと一方通行は、

「ねえねえ、お腹すいた！ってミサカはミサカは甘えてみたり！」

「……そォだな、ファミレスでも行くかァ」

何事も無かったかのように晩御飯を食べる事に決める。
空を彩っていた夕焼けは、徐々に雲による陰りを増し、地上を染めていたオレンジは徐々に灰色と化して来ていた。

雨が、降りそうだ。

・・・

夕陽を雨雲が覆ったまま、太陽は沈んで行ったのだろう。
雨がポツポツと降る中で、辺り一面は暗闇に染まっていた。

とはいえ、ここは科学の街。

道を照らす為の街灯を設置するなど当たり前の事で、学園都市の中は人工の光で満ちていた。
ただ、基本的には学生しかおらず、夜になって出歩く人間はそのまま夜遊びするんだぜと言ったごくごく少数派の人々しかいない為、道がわかる程度の照明しか学園都市には設置されていない。
更には最終下校時間を過ぎると最後、バスや電車などの公共の乗り物は完全にストップする為、それを過ぎて帰れなくなると言うのは下校時間を過ぎた一種の罰と言って差し支えないと言えよう。

そんな中を、一方通行と打ち止めは歩いて帰っている。
芳川桔梗と９９８２号に関しては、知らない。そのうち帰って来るだろと言う事で放っておくことにした。

晩御飯をいつものファミレスで食べインデックスの働きぶりを見た後に、丁度上がりの時間だったインデックスを家まで送り届けた帰りが今現在の一方通行達の状態である。
しかしまだ上条当麻は家に帰っていないらしく、インデックスはプリプリと怒りながら帰る道中で買った食材を持って部屋へと帰って行った。

流石完全記憶能力の持ち主だけあって、教わった事は確実に覚えるようでダイソンの掃除機のごとく店員達から教わったことを吸引

していった。
しかしそれはあくまでも記憶の話で、家事スキル自体は実践して身につけるしかないのでこうして部屋でも料理の練習をしていると言う訳だ。

そう言う訳なので少し部屋に上がって料理の味見をしていかないかとインデックスに誘われたのだが、さっき飯食ったばっかだし雨が強まっても面倒だと言う事で断った。

しかし誘ってもらった手前それではインデックスがかわいそうなので、今度味見しに来ると約束をしてから帰ったのだが。

「あの子の料理って上手になったのかな？ってミサカはミサカはあの時の事を思い出しながら尋ねてみたり！」

あの時の事。それは一方通行が入院を始めて1週間程度した時の事だろうか。
いつものファミレスでバイトを始めたインデックスが、初めての料理そのいち「お粥」を一方通行の元へと持って来たのだ。

それは病院食のように単純に水で煮込んだもので、それだけでは味気ないので塩と梅干で味付けをされたものなのだが、煮詰める時間が短かったのだろうか、米は中まで水がしみ切っておらず、だというのに米の外側は焦げており、さらにはもってきた塩は砂糖と間違えるベタなミスを犯して、結局美味しかったのは市販されていたと思われる梅干だけ、と言う惨状を三乗した状態だった。
その時の事を考えれば打ち止めの疑問も頷けるものだろう。

「まァ……それなりに必死こいて働いてたみてェだし、大丈夫じゃねェの？」

よっぽどでない限りは、普通に食べられるものが作れるはずだ。
別に凄腕料理人と呼ばれるようなレベルの料理は求めていないのだから。

「じゃあ今度皆でカレーパーティとかしたいね！ってミサカはミサカはチキンカレーを所望してみたり！」

「なンでカレーなンだよ、そォいうのって鍋とかじゃねェのか？」

「んー、それじゃあ余りに普通すぎるかなって思って！
ってミサカはミサカは実はただカレーが食べたいと言うだけの事をそれっぽくごまかしてみたり！」

「……お前のその本心駄々漏れな語尾は何とかならねェのかよ」

「でもこれがないとキャラが……」

「ガキがキャラとか気にしてンじゃねェよ！何処ぞのアイドルみてェなこと言ってンなよ！！」

思わず盛大に突っ込みを入れてしまうが、打ち止めは楽しそうに笑うと駆けだした。
しかしそれも束の間で、地面には何も無いのに足を捻って思い切り転んでしまう。

雨はそこまで強くないものの、降り始めから時間がたっていた為にかなり湿っていたので打ち止めもそれに伴いすりむいた膝周辺に泥が付いて汚れてしまった。

しかし、打ち止めは服に付いた汚れ以上に出来た傷口を見て痛そうな顔をしてしゃがみ込む。

「……馬鹿が馬鹿見てェに走るからそォなるンだよ」

「うう……痛いってミサカはミサカは出血多量で危険が危ない……」

「……チッ、お前そこのバス停でおとなしく待ってろォ」

一方通行はそれだけ告げると、打ち止めの言葉を待たずして足早に少し先に見える薬局へと目指して行った。

・・・

絆創膏を買った。

足を捻っていたので念のために湿布も買った。

ついでにこれからそんなことがあっても良いように絆創膏は多めに買った。

一言で言えば、過保護だった。

それらを入れた袋をぶら下げて、一方通行は打ち止めを待たせているバス停まで戻っていく。

打ち止めを連れて行っても良かったのだが、足が痛くて動けないとかのたまうに違いないと判断し、さっさと応急処置をして帰る道を選んだのだ。

バス停まではおよそ２００ｍ。殆ど目と鼻の先と言っても良いだろう。

しかし、雨脚が強くなり始めた上に、夜の暗闇に余り多くない街

灯。これらが相まって打ち止めの姿までは確認できなかった。
ここまで雨が強くなると、打ち止めを抱えて飛んで行った方が良いと判断した一方通行は、バス停まで能力で移動しようとしたのだが、瞬間。

「ッ」

ドガッ！！と、何かがひしゃげた音が背後から聞こえた。
何だと思って振り返るとそこには、「元」を付けた方が良い位グシャグシャになった黒塗りのワンボックスカーが電柱にぶつかったかのように潰れて止まっている。

一方通行の歩いていた場所は、歩道と車道をガードレールで仕切られた、歩道側の道。
車道には誰も居ないのに、吸い込まれるように一方通行へと突っ込んできたのだ。
更にはこの暗闇の中、ライトも付けずに走ってきていた。まるで誰にも見られたくないと言わんばかりに。

一目見てわかった。

「狙いは俺か……面倒くせェな」

個人的に恨みがあるのかはたまた組織として恨みがあるのか、或いは。

「まァ、知ってる事聞けばそれでイイか」

面倒くさそうに溜息をつくと、一方通行は自身の反射によって潰れたボンネットの上に乗ると、そのままヒビの入っているフロント

ガラスに右腕を突き入れ、剥がした。

そこには黒づくめのまるで特殊部隊の一員とも見受けられる男が武装して呻いていた。

どうみても事故で突っ込んできたとは言い難い。

「とりあえず、何も知らねェクソからの指令か、何か知ってるクソからの指令か。

『じっくりと』話を聞かせてもらうぜェ？鍛えられたクソか貧弱なクソか、

どっちでもいいが、早めに吐いた方が楽になれるとだけ言っておく」

一方通行はニヤリと笑った。

運転席に座る男からしたら、それは死刑宣告をしに来た死神にでも見えた事だろう。

ここ最近、と言うかペルソナと言うものを入手してからそうなのだが、余り人間に対して能力を振るう事は無かった。

それが一種の成長なのかそれとも衰退なのか、一方通行には分からなかったが、とにかくこうして人間に「直接」能力を使うのは久しぶりだ。

「なァ？誰に言われてここに来たンだ？今ならもれなく1／3殺しで許してやる。

病院で適切な治療を受けりゃあ後遺症も残らねェだろォよ。お買い得だけど、どォする？」

バキリ、と一方通行はあっけなくその男の右腕をへし折る。

自分の腕がポッキリとあり得ない方向に曲がったのを見て、そし

てその瞬間全身を駆け巡った痛みに対して、男は悲鳴を上げる。
しかし、一方通行はただただそれを煩わしそうに見つめると、再び能力を行使した。
すると男が感じていた痛みが一瞬にしてシャットアウトされ、訳のわからないと言った顔をする男に対して、一方通行は告げる。

「安心しろよ、痛覚は完全に遮断してやってるから。
だから爪とか剥いでも問題ねェよなァ？」

1つ間を置いて、一方通行はつまらなそうに吐き捨てた。

「『俺が能力を使ってる間は』痛くねェもンな？」

能力を使っている間、と言う事は傷つけられた分だけ、後からそれの痛みが一緒くたに襲ってくる。
それを想像しただけで男の顔からは生気がみるみると失われて行った。

「あのさァ、さっさと吐けって言ってるのがわかんねェ？」

一本目に一方通行の手が伸びた所で、男が許しを乞い始めた。
勢いそのままにある事無い事しゃべるだろうと思っていたのだが、それよりも早く一方通行達の周囲を似たような黒塗りのワンボックスカーが3台ほどで囲んだ。

「ったく、わざわざご苦労なこったな」

一方通行は愚痴をつくと、3台の車の動向を探るべく、ジッとそれらを見つめる。
すると中からヒトではなく、長い銃口だけが顔を出し、一方通行

を狙っていた。
それを見た一方通行は男の首根っこを掴むと同時に自身が乗っているボンネットを踏み抜き宙へと舞う。
一方通行が足で思い切り踏みつけた事をきっかけに、最早限界に達していたのだろう、ワンボックスカーは爆発してその役目を閉じた。

「思わず助けちまったが……こンなクソったれ助けるとかヤキが回っちまったかァ？」

地に降りたった一方通行は、男の首を掴んだまま、それを未だ銃口しか見せてないワンボックスカーの元まで転がす。
すると続々と3台の車の中から兵隊達が現れ、その部隊のリーダーと思しき男が、地面で呻く男の前まで歩いて行くと、止めを刺した。

「だーから言ったじゃねえかよお」

事もなげに人間を撃ち殺した刺青を入れた研究者風の男は、ゆったりと一方通行の方へと振り向いた。

「あのガキ潰すのに車1台なんて甘っちょろいことしてんじゃねえよ。
だから言っただろ?俺が出るってよぉ」

「ンだよ、木原くンかよ。思わせぶりな登場しておいて、今更何の用だァ？
つゥかそこに転がってるクソだって限りあるだろーって思って助けてやったのによォ。
俺の善意を踏みにじりやがって、返せよ俺の善意」

木原数多。
かつて一方通行の能力開発にも携わった事のある研究者で、今は『猟犬部隊』を率いている部隊長でもある。
そんな男が、こんな所で、そして自分に何の用なのか。

木原は手に付けたグローブをいじりながら、一方通行の発言に対して笑った。

「ハッ！使えねえ奴が残ってる方がこっちとしては迷惑なんだよ。いわばゴミ処理みてえなもんだなぁ。ま、お前もその中の１人なんだと。
だから悪ぃーんだけど、ここで潰されてくんねーか？」

「あァ？何言ってンだお前？俺の能力研究に匙投げてどっか行った人間とは思えねェ発言だなァ？
どっちが上でどっちが下か、そこンとこわかってますゥ？
まずは上下関係はっきりさせるべくゆっくり話し合うべきだと思いませンかァ？」

「あっはっは、イイ提案だなそりゃ。あんまり素晴らしい提案なんかしてくれんなよなあ？
思わず、殺したくなっちまうから。昔からお前はむかつくガキだったよなぁ？
いやあ失敗失敗。あの時さっさと処分しちまえば、こんな憎たらしいガキが世間様にご迷惑をかける事も無かったのになぁ」

木原は、両手を広げまるで恋人に向かって抱擁をしに行くような体勢で、無謀にも悠然と近づいてくる。

そして一方通行の元まで残り５ｍ程になったところで、笑みを消して言い放った。

「……つーわけで、殺すわクソガキ」

瞬間、５ｍと言う距離を０に縮め、まるで上条当麻のように愚直な真っすぐを放ってきた。

先程も述べたが、木原数多は研究者だ。

それもただの研究者ではなく、超が付く程優秀で、それこそ一方通行の能力開発を担当する程に。

木原もまた他の研究者と同様に、開発に携わったのは短い期間で、その時色々あったのだがそれはさておき。

一方通行は瞬間的に考えた。

自身の能力を深く知っているであろう研究者が、何故ここまで無策なのか。

いや、それはあくまで一方通行から見て無策に見えただけであって。

――――木原数多は策があるからこそ、向かってきたに違いない。

そう判断してからの行動は早かった。

回避する事もできただろうが、相手の策を見る為に、直接攻撃を受ける。

そんな訳で一方通行は両手を十字に交差させると、木原の右ストレートを受け止めた。

その衝撃によって少し仰け反ってしまったのだが、やはり正解（ビンゴ）のようだ。

一方通行に考える暇を与えさせないかのように、木原は更に拳を振るう。

対して、一方通行は混乱する思考を一端打ち消し、その全てを受け流す事に集中した。

とはいえ、黄泉川愛穂にも「まだまだトレーニング不足」と言われるだけあり、肉弾戦を得意とする人間相手に格闘で挑む気にはならない。

数合ほど打ち合ったところで隙を見つけ大きく後ろへとジャンプした。

木原は口笛を吹いて一方通行の判断をほめたたえるが、一方通行の耳には入っていないようだ。

何故、反射を貫いたのか。

思考はそれだけに集中していた。

「へぇ……あの時の馬鹿っぷりからちったぁ成長したみてぇだなぁ。てっきり能力に頼ってノーガードで鼻血ぶちまけるかと思ったんだけどよォ」

一方通行の腕を捉えた右手をプラプラさせながら、木原は見下したような声で言い放つ。

対して、一方通行はその言葉を無視して、考えていた。

（反射を貫くのは構わねェ。魔術だってあるンだ、『こっち側』にだってそンな奴が居ても不思議じゃねェ）

例えば、『幻想殺し』。

例えば、風斬氷華。

そういえば風斬とはあれから会わないなとか、戦闘中にもかかわらず木原の攻撃についてから、思考が徐々にズレて行く中で、木原は子供の成長を喜ぶ親のように、楽しそうに歪んだ笑みを作る。

「まぁ、なんだ。お前の成長を見てる暇はこっちにはねぇんだわ。『アレ』はこっちで回収しとくから、テメェはここで潰れて掃除ロボにでも回収されてくれや」

アレ、と聞いた瞬間、一方通行の思考は熱を帯びた。

この場で言うアレとは、ほぼ間違いなく、

しかし、木原は再び動き出し、一方通行の思考時間を奪いにかかる。

そんな木原の攻撃を再び後ろに跳ぶ事で避けると、一方通行は両手を空へと掲げた。

「ハッ！お前のボクシングごっこにつき合うつもりは毛頭ねェンだよォ！！」

ズタズタになれ、と一方通行は笑い飛ばすと、風も飛ばした。

彼の能力、ベクトル操作を以ってすれば大気の制御、すなわち局

地的な暴風を巻き起こす事すら可能。
風速１２０ｍにも及ぶ暴風は、最早自動車や家屋の屋根を吹き飛ばすほどの威力で、木原率いる猟犬部隊へと向かって行った。

しかし、その風が木原達を吹き飛ばす事は、無い。
一方通行は、暴風を放った瞬間に、何かピーッ、と甲高い音を聞いた。
その音が鳴り響いた途端に、集められた風が霧散して行ったのだ。

成程、策は反射以外の分も用意しているのか。
一方通行は制御の離れた風を仰ぐと、先程爆発した車の破片を無造作に投げ飛ばした。
勿論狙いは木原なのだが、唐突に横やりから風が吹きつけ、破片はあらぬ方向へと飛んで行く。
どうやら、あちらも何かしら機材を使って風を操っているらしい。
と言ってもその破片は木原に当たらなくとも後ろに控えている車に命中し、中で誰かが呻く声も聞こえたのだが。

「なンつーか、俺ごときを潰す為にわざわざごくろーさまな事で」

「お、分かってくれんのかよ！！嬉しいねえ、前言撤回だ。ムカつくクソガキからクソガキに昇進だな！
つか、クソガキの癖に妙に謙虚じゃねぇか！本当にお前はあの一方通行なのかよ！？」

後ろで破片による一撃を受けた部下がいると言うのに、相変わらず馬鹿みたいに高笑いをしている。
別に一方通行自身、あの場で武装している男達は何かやらかして暗部に堕ちてきているのだから、それを殺める事自体はどうも思わない。

とりあえず、不快だった。

何となくあの姿が昔の自分のように思えて。

人を殺すことを、何とも思わない自分だった頃に思えて。

しかし、その考えはすぐに消え去る。

何せそれが事実なのだから。自分はただの人殺しなのだから。

木原と同類と言われて当然だろう。ならこの不快感は、同族嫌悪とかそのように表現すべきだ。

なんて、またしてもどうでもいい事に思考を重ねているうちに、再び木原が接近してきた。

「なぁ？俺がどのくらいテメェの反射を貫けると思う？」

言った直後、手からパチンコ玉のような球体を投げ飛ばした。

それを見た一方通行は、木原の拳のように受け止めるのではなく、完全に回避する形でしゃがみこむ。

木原は避けることを念頭に置いていたらしく、更に接近して前蹴りを放った。

高さにして丁度一方通行の顔に当たる高さで、喰らったらマズいと一方通行も両手で頭をガードする。

しかし、衝撃自体は守れないのでそれを受け止めるとゴロゴロと地を転がった。

「おいおい、そんな必死こいて避けなくてもよ、別に身体に害のあるもんじゃねえよ？

つか、お前の場合そんな物質は勝手に反射してくれんだろぉが」

一方通行は地面を転がりながらもすぐさま体勢を立て直すが、木原はその隙を突いて更に先程と同様のパチンコ玉の様なものを今度は避けきれない程の数投げ込んできた。
今度は避けられないと判断して、能力によってその全てを破壊する。

しかし、その玉は。

「!?ンだ、こりゃ……!」

所謂、煙幕。
しかし先述した通り、その煙幕に毒を仕込んでいたとしても反射をすりぬける事は出来ないので、純粋に煙幕だ。
とはいえ、一方通行の思考は数瞬の間、止まる。

それが大きな隙だと、一方通行自身も理解できる程に。

「ガッ!!」

やはりその隙を突かない馬鹿は居ないと言う事だろう。
ようやく木原は一方通行に対してクリーンヒットを入れられたようで、満足そうに両手の指をバキバキと鳴らした。

「たくよぉ、まさかこんな小道具まで使わされるとはなあ……
嬉しいねえ、やっぱクソガキは学園都市一位だけあってそこそこ強えクソガキだわ」

心底嬉しそうに、楽しそうにする木原だが、一方通行は殴られた後地面に伏したまま、立ちあがる気配を見せない。

普段黄泉川によって鍛えられているのだから、1発2発良いのをもらったところで気絶等ありえないのだが。

しかし、それは『本調子』の時だけの話で。

「ォ……ァ……」

倒れ伏した一方通行の周りには、濁々と血が流れていた。
雨によって薄らいでいくはずなのに、その血はますます濃さを増しているように感じられる。

開いた傷口は、大きかった。

「おいおい、俺のパンチは人を切り裂いちまうのかぁ？
いやあ怖い怖い、ボクサー目指すとこだったけどやっぱ無理だな、このままじゃ人殺しになっちまうわ」

一方通行が入院していて、何処に傷を受けたのか分かっていたのだろう。
木原は寒がるように両肩を抱き、わざとらしく言い放った。

しかし一方通行からしたらそれどころでは無い。
すぐさま止血を施したが、これによって片手がふさがれてしまっている。

原理はわからないが、反射を貫く攻撃。
これを何とかしなければこの場を乗り切る事は出来ないだろう。
あの金髪巨乳魔術師は言葉だけで退いてくれたが、こちらはそう

もいかない。

何せ金髪と違い、木原の狙いは打ち止めにあるのだから。

一方通行の考えを裏付けるかのように、一同からおよそ１００ｍ程離れたところから、武装した男２人が１人の少女を連れて現れた。

どうやら気絶させられているようで、２人が両肘を握ってやらなければその場に崩れ落ちてしまっているだろう。

思わず一方通行は、倒れ伏したまま叫ぶ。

「打ち止め（ラストオーダー）ァァァァ！！！」

「いちいちうるせーぞクソガキ、ご近所さんの迷惑を考えやがれ」

そんな一方通行をあざ笑うかのように、木原は軽く一方通行を蹴り飛ばした。

それだけで一方通行の軽い身体は地面を転がり、再び地面に這いつくばらせる。

木原はそんな一方通行に興味を失ったのか打ち止めの方を見やると、部下の報告を受け、一方通行に向けたのか、はたまた打ち止めを連れてきた部下に向けたのか。

ともかく勝ち誇ったように言う。

「回収完了ってとこだな。本命は生け捕りって話だが、アレは大丈夫なのかよ？

あぁ？気絶させただけってお前どんだけ痛めつけりゃあんな生傷できんだよ。

まあ生きてるってんならなんでもいいや、とにかく始末書は御免だからな？アレが死んだらお前も死ねよ？」

（……ふざけンじゃねェぞ）

小さく、呟いた。

恐らくは生きているだろう。あの口ぶりからして、一方通行を絶望に追いやる為の嫌がらせだけに打ち止めを殺すとは思えない。

しかし、利用する事は火を見るより明らかで。

そうしている間にも打ち止めは一方通行達の元へと近づいてくる。と言っても近づいているのはワンボックスカーに向かってなのだが。

このまま連れ去られたら、文字通り終わりだ。

打ち止めはクソ共に散々使われた揚句、ボロ雑巾のように捨てられるだろうし、一方通行はそもそもこの場で朽ち果てるだろう。

（やら、せる、か）

まずは隙を作りだす。

「打ち止め（ラストオーダー）ァアァアァァ！！！」

ピクリと、少女は小さく肩を揺らした。

一方通行は思い切り両手を叩きつけると、辺り一面にアスファルトの欠片が舞い上がる。

それを受け木原もわずらわしそうに後ろへと下がった。

時間にしてわずか1秒足らずだろう。

一方通行の『風の制御』は非常に繊細だ。その繊細さを木原は狙ってきたはずだ。

ならば木原がその隙を突く前に、打ち止めだけでも助ける――――！

その意志を形に表すように、一瞬で制御した風は確かな力を以って、打ち止めのみを吹き飛ばした。

しかし、それは破壊する為の物ではなく、優しく包み込むような風で、地上１０ｍはあるだろうビルを何棟も飛び越え、打ち止めは夜の闇の中へと消え去っていく。

それをぼんやりと眺めると、木原はのんびりとした口調で告げる。

「あーあーあー、面倒くせえことしやがって。ドヤ顔してる暇あったらさっさとクソガキすり潰しとけばよかったわぁ。

つぅか誰が回収すると思ってんだよテメェはよ、俺はしねぇけど」

「どうしますか」

そんな中、部下の１人が木原の耳元で指示を仰ぐべく小さく話す。

木原が指示を出そうとした瞬間、再びアスファルトが舞い上がった。

「だぁー……ホントしつけークソガキだな。

んだよあのしぶとさゴキブリか？それとも油汚れかぁ？

ホウ酸団子かジョイ君もってこねーとな」

冗談を軽く呟くと、ボリボリと頭を掻きながら今度は部下への指示を出す。

「班を三つに分けろ。本命追うのと俺とここに残るの、後処理するの三つだ。
異論反論ある奴は後で聞く。殺すけど」

それだけ聞くと、部下達は迅速に動き出した。
随分と統率されている動きだが、これは単に木原に対する恐怖から来ている。
それはさておき、数人の部下を残した木原は無駄なあがきを続ける一方通行へと向く。

「木原くンよォ……ちっとばっか早漏すぎねェ？まだ終わっちゃいねェぞコラァ！！」

「ハッ！！テメェが1人でイッちまったからどうしようか悩んでたとこだっつーの！！
グダグダ言ってねぇでとっととかかってこいやぁ！！」

鬼の様な形相で、2人は肉薄する。
一方通行は左手で止血を施しているので、思い切り右手でストレートを放つ。

とにかく、木原が動く事がマズい。
なるべく時間を稼ぐ為に、木原をこの場に縛りつける為に、得意でない肉弾戦をする。

そんな意志が見え隠れする中で、木原は一方通行の思惑に乗ったのか、笑いながらこちらも左腕を振りかぶった。

そして、交差する拳。

片方が、大きく仰け反った。

## そのななじゅうご　いたいっていきてるってことだよ（後書き）

やっぱ長くなりそうだわ

# そのななじゅうろく　けいかく（前書き）

うふふ

## そのななじゅうろく　けいかく

辺りは暗くなってしまっていた。
はっきり言えば、御坂美琴の門限が迫っている。
カラオケの個室にこもると時間間隔がくるってしまうから困る。

あっはっは、と快活に笑う上条当麻とは違い、御坂は顔を真っ青にさせていた。

今からダッシュで帰れば、ギリギリで間に合いそうな時間だ。
ヤバいヤバいと言いつつも、運動前のストレッチをのんびりとしているとイマイチ危機感が伝わってこない。

「まぁ、ちゃんと謝れば許……」

「されないからこうして焦ってるのよ！」

「いや、そんなゆっくりじっくり丁寧にストレッチしているのを見てるととてもじゃないけど急いでいるようには見えないのですが」

「柔軟馬鹿にすんな！怪我する奴に限って柔軟怠ってるのよ！！」

「だぁー！そうですね！！ベストコンディションには欠かせませんよね！！」

ちなみに、場所はカラオケ店の受付の隅っこの方。
邪魔とは言わないが、そんな姿を見せられては仲睦ましいカップルの姿を妬む男もいるだろう。
だがそんなことはお構いなしの掛け合いだった。

「よし！終わった！」

「いや、むしろ今からが本番だろ。頑張れよー」

「な！女の子が1人で帰るってのに送ろうとかそんな心遣いは無いの？！」

「今からダッシュで帰るって宣言してる奴について行こうとは思わねーよ！」

「トレーニングと思いなさいよ！今日してないでしょ！！」

「うぐっ、そう言われると上条さんも言い返せません事よ……」

結局、御坂と共にランニングをする事にした上条は、カラオケ店の外へと足を踏み出した。

すると、雨。思わず上条は顔をしかめながら、

「うげっ、雨かよ……ちゃんと天気予報見とけばよかったわ」

上条は外に出てすぐさま空を仰いだために気付かなかったが、続いて御坂が外に出て周りを見渡した時に、異変に気付いた。

「何、あれ……？」

何やらアンチスキルの数が多い。

何処かで事件でも起きたのだろうかと思ったのだが、その瞬間、目の前を走っていたアンチスキルが突如として糸の切れた操り人形のように、プツリと倒れ伏した。

本当に、何の前触れもなく。

意味も無く水溜りの中に突っ込む人間がいるだろうか。

いや、居た所で上条の目の前でそんな事をする意味がわからない。

防水機能の自慢でもしたいのですか？とか馬鹿みたいな事を考えつつ近づいてみると、

「この人……意識が……？」

御坂が上条の代弁をするように、呟いた。

防護服に身を包んだアンチスキルは、ピクリとも反応を示さない。

明らかに異常事態で、すぐさま他のアンチスキルを目で探す。

アンチスキルはすぐに見つかった。

「「ッ！！？」」

上条達の目の前にいるアンチスキルと同様に、いや、『一斉』に倒れた。

意味がわからない。音も無くアンチスキルだけを狙って意識を飛ばすなど、あり得ない。

麻酔ガスか何かかと思ったが、それなら自分や御坂が無事なのもおかしい。

とりあえず防護服で身を固めたアンチスキルのヘルメットの様なパーツを剥がすと、とりあえず顔からは生気が感じられ、口からは確かに呼吸を感じられた。

何処か怪我をしているようにも見えないし、純粋に意識が無いだけに見える。

とはいえ、その現象そのものがあやしいのだが。

「……とりあえず救急車だな」

「……うん」

頭の理解が追いつかないが、ここまで落ち着いていられるのも互いに互いがいたからだろう。

もし仮に1人でこの状況に陥って居たら混乱は必至だったはずだ。

携帯電話でお決まりの番号を押してコールセンターへと接続した。

こういった通報は初めてという訳でも無いので落ちついて状況と場所を説明し、電話を切る。

一先ずはこれで大丈夫だろう。だが、この現象の原因が未だに不明。

ならばそれをなんとかせねば、目の前で倒れているアンチスキル達の様な人間が続々と増えるに違いない。

これからどうしようか、考えるところで地面に転がっている無線機からノイズ交じりの声が聞こえてきた。

『ザッ……聞こえるか……ザザざザざ……侵入ｓザザ……繰り返す、

侵入者！ゲートの破壊を確認！誰か聞いていないか！！？こちらの部隊も侵入者ｎ』

無線機からの声は、最後まで言い切ることなくブツリと通信が途

絶えた。
その先の声の主がどうなったかは、分からない。何にせよアンチスキルが持っていた物なのなら、相手もアンチスキルなのだろう。
そう考えると、侵入者がアンチスキルをこのような姿へと変えたと見て間違いないはずだ。

（インデックス、大丈夫か……？）

侵入者と聞くと、魔術師しか思い浮かばないのは今までの生活が生活だったからだろうか。
何にせよ、魔術師だとしてもインデックスが狙いとは限らない。とはいえやはり彼女の事が真っ先に心配になる。

安全確認を兼ね、インデックスと合流したい。しかし、御坂の事もある。
帰宅は一端諦め、一緒に行動しないかと提案しようとしたところ、

「？」

その前に上条の背後から衝撃が走った。

衝撃を受けた位置は上条の腰辺りで、そちらへと振り向くとそこには、

「「打ち止め？」」

打ち止めが居た。
こんな時間に一方通行や、他の奴らも伴わずにどうしたと聞きたいが、打ち止めは上条にぶつかったと言うより、しがみついたと言った方が正しいだろう。

その身体は雨の冷たさからかガクガクと震え、濡れた髪の毛がぺたりと打ち止めの神に張り付いて、その表情は読めない。

しかし、切羽詰まっている事は分かった。

「ねえ、一体どうしたの？」

茫然と2人を見ていた御坂は気を取り直して打ち止めに尋ねる。

打ち止めが顔を上げると、その瞳は真っ赤に充血し、頬を伝う水滴は雨だけでは無いと言う事が容易に見てとれた。

そして、打ち止めは息絶え絶えに叫ぶ。

「あの人を助けてほしいのっ……！ってミサカはミサカは頼んで…みたり……！！」

その願いを、聞き入れない理由は存在しなかった。

・・・

拳が交錯する。

男は、大きく仰け反ったが、拳による痛みよりも、殴られたと言う事実に驚愕していた。

「テメェ……！！」

木原数多は、一方通行によって殴られた。

木原数多は、一方通行を殴る事が出来なかった。

木原は先程の出来事を頭の中で反芻する。一体何が起きたのか。
まず、互いが互いに急接近する中で、一方通行は自身の傷口から手を離した。
そうして、木原の攻撃を真っすぐ伸ばした右腕で払って受け流し、血まみれの左手で攻撃を放ったのだ。

しかしそれでは傷口から血液の流れを操作する事が出来ない。にも関わらず、血は流れおちなかった。

恐らく、演算を手で触れることを介して行うのではなく、直接血管から行ったのだろう。
しかし人間の体を十全に理解して、血管の強度や位置を把握していなければ出来ない行為だ。

それを為せるだけの演算力と知識があったと言う事なのだが、それでも脳内の演算区域はかなり切迫するはず。

そこで気がついた。

（一方通行が『気付かないうちに』反射を切ってやがったってことか……！！）

木原が一方通行を殴る事が出来た理由。
それは反射の直前に手を引く事で、一方通行自身がその木原方向に向かう運動ベクトルを一方通行へと反射させてしまっているのだ。
言ってしまえばそれだけの事なのだが、それを為す事の難易度は非常に高い。

何せ無駄な紫外線すらカットしている一方通行の反射の、わずかな隙をついての攻撃。

一方通行の動きや思考、能力の使用状況までも完璧に読みきる頭脳。

それが狙い通りとはいえ、『引き戻す』という本来の動作とは真逆に動かされているのに問題無く動き続ける筋肉や関節。

そしてその理論に寸分の疑いも持たず、迷いなく実践する胆力。

はっきり言えば、ほぼ不可能な事を可能にしてしまっているのだ、木原数多と言う男は。

しかし、その自身の理論に対する疑いが無さ過ぎた。

確かに、一方通行が反射を切ると言う可能性も頭に入っていたのだ。

しかし、こうして一方通行自身が「反射をさせていたつもりだった」時は、木原の理論が足元から崩れさる。

とはいえそのような偶然、二度は無いのだが、それでも。

「成程なァ……」

それでも、一方通行が木原の攻撃法に気付くのには、十分だった。

「今、明らかに俺は殴られなかったが……

成程、反射を貫いていたのは、拳を反射する瞬間に引き戻してたからかァ……

普通、考えついてもそンな事するかァ？

失敗したら拳ぐちゃぐちゃになるじゃねェか、狂ってンなァオイ！」

攻撃方法がバレた。しかし、それがどうした？

意図的に反射を切ろうとも、一方通行の思考パターンなら完璧に

読み取る自信はある。
先程の偶然程度では木原の理論は揺るがない。

一方通行は口から血の混じった唾を吐きだしながらも、ニヤニヤと木原に向かって笑いかけるが、木原もまたニヤリと笑った。

「ギャハハ！たった一度の偶然程度に喜んでんじゃねえよ！！
そっこーでひねり潰してすり潰して肉団子にして好色家にでも売り飛ばしてやるよ！！
つぅかあのガキ放っておいたらうちのクソ共がさっさと捕獲しちまうぜ？
追わなくていいのか？まぁ邪魔するけどよ」

「ハッ！！だったらこっちはお前の四肢を千切り飛ばして達磨さんにして石膏で固めた後石像にして東京湾の海の底に沈めてやンよ！！！
てか、お前の事そっこーでブッつぶせばそれで万事オーケーだろォが！！！！」

「言ってろクソガキ！！」

「吠えてろオッサン！！」

「「ぶち殺すぞクソ野郎ォオォォオオォォォ！！！！」」

舌戦は再び殴り合いへと発展。
二つの影は一つになり拳が交錯を始めた。

・・・

次々と人間が倒れて行く。

冷たい雨が降りつける中で、抵抗も無く、無造作に、悲鳴も無く、無意識に、鮮血も無く、平等に。人々は倒れ伏して行った。

彼らは一様に装甲服だとか防護服だとか呼ばれる耐ショック機構を備えた物を着こんだ大人ばかりだ。

学園都市の守護を司る、アンチスキル達。

倒れた彼らは、冷たい雨に晒されて居ながらも、指一つ動かさない。

ドサリ、と音を立て倒れて行くアンチスキル達とは別に、カツンコツンと細々とした足音が辺りを響かせる。

そのシルエットは女性の物で、その女は傘もささず、雨をふる街を、倒れるアンチスキルの隙間を縫うように歩いていた。

まるで気軽に散歩でもするかのような足取りで。

そうして歩いた先、そこにはアンチスキルが無線機を用いて何かを発信していた。

「ふうん」

女は武装した男相手に、何の用意も無しに堂々と近づいて行く。

そして後ろからトントン、と肩を叩くとアンチスキルの男の顔は驚愕に染まり、続いて意識を失ったのか、力なく崩れ落ちた。

女の方はそんなアンチスキルに目もくれず、男と共に地面に落ちた無線機を拾い上げる。

地面に落ちた事で泥にまみれている事に対して、眉をひそめながら。

そうして、女は無線機に向かって声を放った。

『はぁーい、アレイスター元気ぃ～？』

ザザ、とノイズが混じった後に困惑するアンチスキルの声が聞こえてくるが、それに構わず女は続けた。

『どうせあんたはこういう回線とかも傍受してんでしょ？せっかくだから相手してくれるとうれしーなー』

すると無線機のチャンネルが切り替わったのかアンチスキルの声が聞こえなくなり、代わりに別の声が聞こえてきた。

先ほどとは違いこの場に居るのではと言う程の、明らかにクリアな声で。

『何の用だ』

『聞く気があるなら、話してやってもいいかな、って感じなんだけど』

『私がその挑発に乗ると思っているのか？』

『そっ。統括理事会の頭を何個か潰してきたけど、これくらいじゃあ揺るがないのね』

『当然だ、その程度の替え等いくらでも利くし、例え「全滅」させられたとしても、反対意見はねじ伏せて替えを据える事は容易いさ』

『それって独裁宣言？おー怖、ニンゲン身の丈にあった力を持たないと性格歪んじゃうってことね』

『……それは自分（きざま）に言っているのか？』

『そうね、自分（アンタ）に言ってるのよ』

『何やら見解の相違がありそうだが、まあいい。
それで、もう一度聞くが一体何の用だ？』

『んー、とりあえず私の名前わかる？』

『さてな。賊は取調室で調べるので』

『神の右席』

あっさりと、自身の立ち場をばらした。
それはローマ正教でも最も重要で秘匿すべき組織の名前。
知っている人間が居たとしても、それを『知るに値する』者で無いと判断された場合、秘密裏に「処理」される程秘匿されるべき組織で。

そんな組織名をあっけらかんと女は言い放った。

『ふむ、テロ行為指定グループにそのような名前はあったかな』

しかし、その名を聞いてもアレイスターの口調に変化はない。

『6割、7割か。この街の掌握された人員は』

『へぇ、被害状況の把握は出来てるんだ。でもまあ、それの対応も出来ないようじゃ司令官としては置物レベルね。
アンチスキルだかジャッジメントだか知らないけど、脆弱すぎてあくびが出るわ』

『クク、この街を甘く見てはいかんよ』

『ふふ、負け惜しみとして受け取っておくわ。いずれ１０割にするから覚悟しといてね』

『「その程度」で、学園都市の防衛網を砕けたと思うのなら、本当におめでたいな。
この街の形をまるで理解していないと見える』

『へぇ……』

『隠し玉は、君だけの専売特許ではないと言う事だ。この場でいつまでも暴れると言うのであれば、見せてあげよう。
最も、そこまで学園都市で立って居られるかは君次第だがな』

『何であれ、私は敵対する全てを叩いてつぶす。それは生まれた時からの決定事項』

歌うように、女は無線機に口元を近づける。

『私は、『前方のヴェント』。２０億が誇る最終兵器』

一息ついて、最後に告げる。

『全部壊してあげるわ。あんたの思惑も、禁書目録も、幻想殺しも、超能力者も。
そしてこの街も、文字通り『全部』。この一晩の間にね』

アレイスターの言葉を待たずして、ヴェントは無線機を握りつぶし、2人の通信は終わりを迎えた。

・・・

＜???＞

アレイスター＝クロウリーは、相も変わらず窓の無いビルの中で、フラスコのような円筒器の中に揺られていた。
自身の生命維持を全て科学技術に任せて、そして彼もしくは彼女は思考のみに全てを捧げている為、今もなお目の前に広がる異常を知らせるモニターの数々を見て、笑みを浮かべた。

普段そのモニターには異常など感知されるはずもないのだが。
それは大覇星祭の『使徒十字』でも同様だったのだが。

たった1人の魔術師によってここまで場を乱されてしまったのだ。

ヴェントが侵入してからわずか1時間足らずで、ここまでの人員が犠牲になった。
アンチスキル・ジャッジメントの7割弱が、ヴェントの手にかかったのだ。

調べる限りでは犠牲者は居ない、と言うか恐らくそう言う『術式』なのだろう。
とはいえ、いつまでもこの状態が続けば立て直しは図れないだろ

う。

この街は、既に死に体だった。

しかし、その街の長は、笑みを崩す事は無く。

『人間』は喜怒哀楽の全てを同時に表し、それでいて全てを否定するかのような笑みを浮かべていた。

そうして呟いた言葉。

「面白い」

「これだから人生は止められない。人生にイレギュラーは付き物だが、ここまでの物は久方ぶりだな。

しかし、これは丁度良い。飛んで火に居る夏の虫、とはこの事を指すのだろうな」

予想より早いが、『実験』にはうってつけの環境を奴は作ってくれた。

アレイスターはヴェントに対して感謝の意を示すと、無線装置の一つを使い、とある暗部組織の部隊長に連絡を飛ばす。

「猟犬部隊――木原数多」

相手の返答を受け、アレイスターは短く指令を出した。

「虚数学区・五行機関……ＡＩＭ拡散力場だ。少し早いが、ヒューズ＝カザキリを起動させ『選別』のついでに奴らを潰すぞ。

現在逃走中の検体番号２０００１号を捕獲後、指定のポイントへ

と運んでくれ。
早急かつ丁寧にな」
無線を切ると、彼は言った。
「Ｐｒｏｊｅｃｔ．Ｔａｒｔａｒｏｓ、まずは『適正者』を選び出すとしようか」

# そのななじゅうろく　けいかく（後書き）

タルタロス計画！

## そのななじゅうなな　けつい（前書き）

8月がもうおわるのに

## そのななじゅうなな　けつい

月の淡い光と人工の光が学園都市を彩る。
雲の隙間から見る限りでは、今宵は満月のようであり、普段の一回りほど強い光が街を照らしていた。
辺りは静寂に包まれ、雨が降る音だけが響き渡る。

そんな中で。

「ぎゃはっ！！テメェクソガキの癖に中々根性見せるじゃねえか！まあこのままならうちのクソ共があのガキ捕まえてゲームオーバーだけどなぁ！！」

「そンならお前ぶち殺してその首振り回しながらクソ共あぶり出してやるよ！！！」

「それが出来てねぇからこその現状だろーが！！やせ我慢してんなよ！！」

「ハァ～？そっちこそもう歳なンじゃねェの！？動きが鈍くなってンぞオッサン！！」

「ぶち殺すぞクソガキィィィ！！！」

「二度と朝日拝めなくすンぞクソ野郎ォォォ！！！」

一方通行と木原数多は互いに決め手を得られないまま殴り合いを続けていた。
と言うよりは、木原の攻撃を一方通行がひたすら受け流している、

と言うのが現状だ。

反射を捨て止血することに全てを捧げている為、木原は一方通行に触れる事が出来る。

しかし、それだけでは肉弾戦では木原には及ばない事がよく分かった。分からされてしまった。

木原の反射を貫く戦い方、それは常人にはできるはずもなく、理論を立てそれを実行するだけの格闘センスの持ち主である木原数多に、ちょっと鍛えただけでは勝てるはずもなかった。

とはいえ、能力を使用した戦い方をしていては木原の理論通りになってしまう。

現状が最善の戦い方なのだが、それでも木原には及ばない。

何か綻びが無いか、それを探すものの見つからない。

一方で、木原も現状に歯噛みしていた。

こんな所でいつまでも子守をしている時間は無い、と言うのが正直な気持ちだ。

（……わざわざこいつに付き合ってやる必要もねぇか）

先程まで一方通行が何をして来るのか、楽しみで仕方なかったのか木原は獰猛な笑みを浮かべていたのだが、どうやらここまでのようだと表情を消した。

何か考えつくまでの時間稼ぎ、と言った様子の一方通行に終わりを告げるべく、一端距離を取る。

その為の準備も完了している。

「もーいいや。オッサンだからもう疲れた」

突然やる気なさげにヒラヒラと手を振る木原に、一方通行は怪訝な表情を浮かべる。

その表情からは疑いの色しか見えない。胸元に手を当てて止血をしていると言う事は、そちらの方が演算しやすいのだろう、恐らく反射も戻っているはずだ。

しかし木原は、一方通行がそのまま疑心暗鬼で居れば良い、と思う。

「もうさー、じゃれつくガキをあやすのも飽きたしさー、とっとと死んでくんね？」

「ハァ？何を……」

瞬間、一方通行の側頭部に何かが直撃した。

「ッ……！？」

「ギャハハ！！よかったなあ俺が離れたからってとりあえず反射を起動させてて！

俺だけを見てたら間違いなく昇天してたな！！」

一方通行は木原の言葉を無視して弾丸の軌道上へと振り向くが、少なくとも1キロは離れているだろう。狙撃手の姿形までは見えなかった。

そんな一方通行の姿を見て木原は更に高笑いをする。

「ギャーッハッハ！！！俺と戦うなら反射もつかわねーとその真っ白な頭を真っ赤に染める事になるぜ！？」

そして木原は一方通行の言葉を待たずして駆けだした。

一方通行は、それを今まで通り待ち構えたいが、狙撃手の存在もある。

時間が足らない。

かといって逃げると言う選択肢もあり得ない。

木原が居る限り、猟犬部隊は打ち止めを追い続けるだろう。

何故なら木原の命令が絶対だから。

言われた事を必ずこなさねば殺されるから。

故に猟犬部隊は木原の命令に忠実に従う。

ならば木原を生かしておくわけにはいかない。

だが、一方通行だけの力では及ばない。

それでも、一方通行は抗う。

護れなければ、一方通行が今存在する理由が無くなってしまうから。

そんな大義名分以上に、打ち止めを、妹達を護りたいから。

迫る木原。

いつ来るかわからない弾丸。

双方に対抗するには少なくとも反射が必要。

かといって反射をさせると片手を止血にあてがわなくてはならな

い。

そんな状態で勝てるかと問われれば、否。

ならば、どうする？

瞬間。

一方通行の両手が木原へと伸びていった。

（このガキッ……！）

それを見た木原は足を止め勢いが前に前に向かおうとする身体を無理矢理後ろに持って行った。

何とか体勢を整えてバックステップをする。

そうして一息ついた所で一方通行を睨みつけた。

「テメェ、正気か？」

「ハッ、何言ってンだこれくらい屁でもねェよ」

一言で言えば、「止血」を止めた。

更に言えば、足で地面を踏み抜き身体を固定した。殴られても、その場から動かないように。

そうして一方通行は木原を抱擁するように迎え入れようとしたのだ、確実に仕留める為に。

そんな一方通行は濁々と血を流し、服の白地の部分を赤に染めていた。

雨が血を薄めるように降り注ぐが、赤々とした血を洗い流す事は叶わない。

そのままではすぐに血が足らなくなるので一方通行はすぐさま傷口に触れ、血の流れを整える。

とはいえそのような戦い方を続けていればいずれ失血死もありえるだろう。

捨て身の策を捨て身でぶつけてきた一方通行に、木原は楽しげに笑った。

「クソガキにしちゃあ、まぁまぁの作戦考えたじゃねえか！
お前は弱いんだからその位しねぇと俺には及ばねえんだよ！やっと気付いたか！！」

「ハァ……御託並べてねェでとっとと来いよ、お望み通りさっさと終わらせてやるからよォ……」

「まあ、その策は悪手だけどなぁ……だったら、こっちから動かなきゃいいじゃねぇか。
オラまだ動けるだろーが、かかってこいよ！こねーなら俺はあのガキ捕まえるまで仮眠でもとるかぁ！！？」

とは言え、この策は完全に受け身。
木原がそれに付き合う理由など存在しない。
ならば一方通行の策など、無視すれば良い。
捨て身の策は、決死の策は、一瞬にして瓦解してしまった。
そして、一方通行は。
「クソッ……たれがァァァ！！！！」
「そーだぜ一方通行！！亀が甲羅にこもってるだけじゃあ勝てるもんも勝てねーってもんだ！！
まあ、どっちにしても勝たすつもりなんざねーけどなぁ！！！」
このまま戦うのなら、最早詰みだった。
とはいえ、逃げると言う選択肢は頭になく。
しかし、そんな一方通行を動かす出来事が起きた。
「そこで、何をしているの？」
思わぬ方向から声がかかり、木原も一方通行もそちらを振り向いた。
距離はおよそ２０ｍ程だろうか、木原と一方通行が相対している大通りの脇道から不意に出てきたその少女は、とても長い銀髪で修道服を身に包んでいる。
一方通行ともなじみのあるその少女の名は。
「インデックス！？お前こンなとこで何してやがる！！？」

血を大量に流しながらも、未だギラギラと生きた目を輝かせる一方通行だが、流石にこれには狼狽した。
猟犬部隊は、元々非公式の工作部隊で一般人が知っていいものではない。
ならばそれを見たインデックスがどうなるかなど明らかで、普通に逃げた所で3日ともたないだろう。

ここにきて、暗部から護らねばならない対象が増えてしまった。
打ち止めとインデックス、どちらかを選ぶなど、どちらかを見捨てるなど、一方通行には出来ない。

故に、一方通行は、すぐさま逃げる事を選択した。
打ち止めへの手がかりが木原しかなくとも、打ち止めを見つける為に自分しか動けなくとも。
木原より、猟犬部隊より先に打ち止めを見つけてみせる。

その決意を抱いてからの行動は早かった。

先程地面を踏み抜いた時とは反対に、自身が高速で動く為に地面を蹴り抜き、まるでロケット砲の様な加速でインデックスの元まで移動し、そのままビルの屋上まで飛び上がる。

そんな一方通行を茫然と見届けた木原は。

「ギャハハ！！第一ラウンドは引き分けって事でいいかぁ！？
第二ラウンドは鬼ごっこってとこか！？先にあのガキ捕まえた方の勝ちな！！
その為のヒントくれてやる、『マヨナカテレビ』だ！！真夜中のテレビは部屋を明るくして離れて見ろよぉ！！」

インデックスを抱えて逃げる一方通行の背を、まるで遊ぶ約束をした子供のように笑いながら木原は見送った。

その言葉を、一方通行の耳は捉えていたのだろうか。

とはいえ、タダで見送る程木原は甘くない。

「まぁ、あの白いガキにはくたばってもらうけどなー」

気の抜けた声で超長距離対物ライフルを構える。

一方通行達は空中に舞い上がり真っすぐに飛んで行く。成程、的としては丁度良いだろう。

そうして後１ｍｍ、引き鉄を手前に引いたら弾丸が飛び出すその瞬間、一瞬だが照準に黄色い影が見えた。　更に不幸な事に、その影に遮られた間に一方通行は一端地面に降りたらしく、照準から見えなくなっている。

「？」

木原はそれが何なのか確認するためスコープから目を離すと、女が地面に着地していた。

何やら顔面にピアスの数々を付けバランスの悪い顔つきになっている。

服装は学園都市に似つかわしくない中世ヨーロッパのようなものの色違いの様なものとなっており、黄色一色に染められたそれは見ていて目が痛い。

とはいえ、そんな事はどうでもいい。

今重要なのは、目の前の女のせいで標準を見失った事だ。

せっかく白いガキの血を以って楽しい楽しい幕間を迎えられそうだったのに、それを邪魔された。　木原の表情は一瞬にして消え失せ、迷わず女に対して引き鉄を引く。

しかし、何処からか風が吹き荒れ、木原や猟犬部隊達の視界をふさぐ。

そして風が消えると、女は変わらずそこに居た。

「良い街ね」

明らかに生きている。

弾丸を喰らった形跡も無い。

そんな中黄色い服の女は事もなげに呟いた。

まるで木原達等眼中にないと言わんばかりに。

「学生と教師ばかりの街ってのも考えものね。お陰で『侵食』が進むのが遅れたわ。

まあ、それだけの話なんだけど」

そしてようやく、木原達の存在を認めたのかそちらの方を向きながら、

「最も、あんたらは真っ黒みたいだけどね。

どんないい場所にも黒い部分はあるってことかな」

「何者だ」

「商売敵ってとこ？まあ別にあんたらがあいつらを殺っても良いんだけど、ターゲットを横から取られるのは気に食わないの」

「……殺せ」

木原は黄色い女と問答をするつもりはなかったらしく、迷わず部下達に女の処分を命じる。

それと同時に部下達は行動を開始するが、

「やめとくコトね……ってもう手遅れか」

部下達が構えた銃から、銃弾が放たれる事は無かった。

引き鉄を引く寸前に、バタバタと部下達がうめき声を上げながら倒れて行く。

それが当たり前のように、一切の抵抗なく。

木原はそれを見て眉をひそめる。

「なんだそりゃ」

「見て分かんない？」

「分かんねーから聞いてんだよ。馬鹿かテメェは」

「分からないとすぐ答えを求める、ひょっとしてゆとりなの？」

「ブチ殺すぞ」

「おー怖。にしても、殺意があっても敵意は無しと来たか。

殺す事が当たり前で、その辺の雑草を摘む程度にしか思っていな

い。
少なくとも、私程度には腐ってるわけね」
木原は、そんな女の言葉を無視しながら、まだ意識のある部下達に億劫そうに指示を出す。
「あー、班を二つに分けろ。使えねー奴を下から１０人そこの黄色いのに当てがえ。
残りは俺と本部に戻る。異論反論は殺す」
余りにもざっくりとした命令だが、木原の思い通りに動けねば殺される。
更に言えば、木原数多に一方通行、そして黄色い女。
先程までの一方通行と木原の戦いぶりを見る限りでは、そこの黄色いのを相手にした方が幾分かましな気がする。
素早く囮を残して当の木原は黒のワンボックスカーへと乗り込む。
そんな木原の背中に、女は声をかけた。
「アンタには敵意が無いのね」
「向けて欲しけりゃ、もうちょい有能になるこった」
それだけ言い残し、運転手の頭をはたいて発進を促した。
そうして残ったのは女と囮。
「……全く、私の術式はこういう情報収集には向いてないってのに……
あいつらが何者か知りたいけど、手加減も出来ないし……倒し過

ぎってのも考えものね」

囮の方を見向きもせずに、女は小さくなっていくワンボックスカーを見やりながら、溜息をつき、

「さてさて。随分と舐めてくれたみたいだけど、アンタらは私の役に立てるのかしら？」

ジャラリ、と鎖を舌から垂らしながら、ニコリと笑った。

・・・

上条当麻と御坂美琴、そして打ち止めは雨の中立ちつくしていた。

そこには濛々と燃え盛るワンボックスカーと、先程見たアンチスキル達のように身動き一つしない黒づくめの武装をした男達。

しかし、その男達は何となく正規の部隊には見えなかった。

別に武器に関して詳しい訳でも無いので、アンチスキルの武装と男達の武装の違いが分からないのは事実なのだが、あくまでも何となくだ。

目の前で意識を失い倒れ伏す男達が何者なのか考えていると、打ち止めが口を開く。

「あの人たちに襲われたの。ってミサカはミサカは黒づくめの事を思い出して話してみたり」

打ち止めが嘘をつく理由は無い。ならば本当なのだろう。

たとしたら、目の前の男達は一体何だ？何故、打ち止めを襲うのだろう。

そして、

「一方通行はここで戦ったってことだよな」

「そうだよ、ってミサカはミサカは答えてみたり」

「ってことは、一方通行がこれを……？」

「そこまでは分からないかなってミサカはミサカは……」

「あっ、ご、ごめんね打ち止め。あなたは一方通行のことを途中までしか見れなかったんだよね」

そこで3人は口を閉ざした。

状況を何とか理解しようと試みるものの、分からない。当の一方通行が居ないのだから仕方ない。

とりあえず無事か確認すべく連絡をしようかと思い携帯を開いたのだが、電話がつながらなかった。

「出ないじゃなくて、繋がらない……？」

それは上条達の不安を煽るものだが、一方通行の事だ。何か行動を起こしているに違いない。

一旦一方通行の事を頭から外して、目の前の状況について考える。

（まず、こんなひでぇ状況なのに、誰も居ない、来てないってのはおかしい）

どうやら御坂も同じようなことを考えていたらしく、辺りを見渡

しながら呟くように語りかけてきた。

「ねえ、何で『倒れている人』しか居ないのかな……？」

「ああ、こんな異常な状況だ、誰かしら通報してもおかしくないのに」

現状の異様さに息をのむ2人だったが、そんな中で打ち止めだけは1人黒づくめの男達の1人の懐をあさっていた。

何をしているのだろう、と上条達はぼんやりと思うが、打ち止めは突如として何かに気付いたように顔を上げ、こちらへと駆けこんできた。

「奴らが来た！ってミサカはミサカは2人を物陰に引っ張ってみたり！」

奴らとは？と2人は思うが、十中八九『仲間達』の事だろう。

武器の事には詳しくないが、あのように完全武装する連中だ。スキルアウトの様な素人ではなく、訓練されたプロなのだろう。

そんな奴らに追われた時、逃げ切れるかと問われれば無理と言わざるを得ない。

足元は水たまりが池のように溜まっており、靴の中どころかくるぶし辺りまで水につかってしまうが、この際気にしていられない。

何故なら3人が車の影に隠れ、その視線の先にはヘッドライトも付けずに、まるで人目を避けるように走って来た奇妙な黒いワンボックスカーから黒づくめの男達が現れたからだ。

数にして10人程。素手で戦えば勝てないし、ペルソナを使った

ところで狙撃される方が早いだろう。
男達は全員肩にサブマシンガンを下げ、他にも腰に手榴弾や拳銃で武装している。
どう見てもアンチスキルがして良い武装では無い。
そんな中、御坂美琴だけはその男達を強い意志を以って見据えていた。
思わず上条は御坂に尋ねる。
「……おい、何するつもりだ？」
「私が奴らを相手するから、その隙に逃げて」
「……そんなことできる訳ねぇだろうが。奴らだってあれで戦力のすべてとは限らないんだ、
お前がレベル５の超能力者だからって長距離から狙撃されてそれを回避できるのか？」
確かに、いつまでもここに隠れてやり過ごせるかと言ったらどう考えても無理だろう。
何せ、相手はプロなのだから。何か指紋や血痕を調べているのか、薬品の様なものをばらまいている。
そこまでする相手だ。こんなに近くに潜んでいる事自体が奇跡だ。
そんな相手が真正面から戦ってくれるのか？
そんな訳が無いだろう。
「分かってるわよ、だけどね」

雨は私の領域だから、あんたらが居ると邪魔なの。

御坂は突き放すように告げると、車から顔を出し、そのまま男達へと近づいて行く。
まるでアンチスキルに助けを求める少女のように。瞬間、

紫電が辺りを駆け巡った。

ここまでされて、最早この場に居る訳にはいかなかった。

「くそ！行くぞ打ち止め！」

打ち止めの返答を待たずして、上条は打ち止めを抱えるようにして駆けだした。
しかし猟犬部隊の面々は御坂の攻撃によって気付かない。

（無事でいろよ！御坂！！）

路地裏に駆け込んだ上条は、どこか隠れられる場所が無いか模索を始めた。

・・・

御坂美琴はレベル５の電撃使い（エレクトロマスター）だ。
その能力は『超電磁砲』と言う異名が出来る程の強度を持っている。
しかし、彼女の力の真髄は、超電磁砲では無い。

（あいつはああ言ったけど）

上条の心配をよそに、御坂はのんびりと佇んでいた。

何せ彼女の力は、電磁波を自在に扱う事が出来る。

それはすなわち。

「近代兵器で私を打倒できると思ったら、大間違いよ」

彼女は電磁波や地の文など関係無しの、超電磁砲を放った。

一応、電磁波でレーダーの真似事だとか、機械の制御を奪ったりだとか出来、多岐にわたった攻撃法を持っているとだけ追記しておく。

# そのななじゅうなな　けつい（後書き）

地の文ブレイカーミサカ

## そのななじゅうはち　それぞれのうごき（前書き）

次のバトルフェイズに移行する前的なサムシング

## そのななじゅうはち　それぞれのうごき

一方通行はインデックスを抱えて重力を逆らって空を舞っている。
何処に向かっているのか知らないが、とりあえずインデックスは一方通行の身体が血に染まっている事を見てギョッとした。

「あくせられーた！病院行かなくちゃ！！どうしてそんな……」

「うるせェそりゃこっちのセリフだっつゥの！なンでまたあンなとこに……！」

「……とうまが帰ってこないから探してたんだけど、物音が聞こえたから……」

どうやら帰宅しない上条当麻を探すべく外に出てきたらしい。
しかし、インデックスと言うイレギュラーが無ければ一方通行は自ら退くことをしなかっただろう。
それを感謝すべきか否かと問われると、どちらを選ぶと言うのは出来そうもない。
何故なら、インデックスが暗部を見てしまったから。

ほぼ確実にインデックスも狙われる事になるだろう。
ならば自分がしなければならない事、それは猟犬部隊ごと木原数多をこの世から消し去る。
とはいえ、その間インデックスを安全地帯に置いておきたいのだが、心当たりが一つしかない。

最悪マヨナカテレビに放り込んでしまおうとか考えたのだが、木原数多はマヨナカテレビと関わりがありそうだ。

とてもじゃないがそんな事は出来ない。
魔術側の人間を、これ以上科学の闇に引きずり込む訳にはいかない。

従ってその心当たりに頼ろうと携帯を取り出そうとするが、電波を傍受される可能性を考え何処か適当な公衆電話に行こうと決めた。
その前に、目的地の近くに辿り着いたので地面に降り立つ。
どうせ雨が降っているのであまり意味は無いのだが、なるべく水溜りの少ないところを選び、水が跳ねないようにゆっくりと。

「こっから歩いて5分か10分した所に、俺が入院してた病院がある。お前もわかるだろォ？」

「うん、今からそこに行くんだよね？」

その言葉に、一方通行は首を横に振りながら、

「あァ、行くのはお前だけだけどなァ」

「何で!?治療が必要なのはあくせられーたのほうで……！」

「まァ待て、何もこの状態で行動しよォって訳じゃねェ。
ただ、じっくり腰を据えて治療って訳にもいかねェから、応急処置だけしてェンだ。
だからこっから病院まで行って来てくれねェか？
俺の傷の具合を把握してるのは冥土帰し……あのカエル顔の医者しか居ねェから、あいつに会って話を聞けばわかる」

「……わかった！」

インデックスは一方通行の言葉に訝しげにしていたが、一方通行の様子を見る限りでは相当に切羽詰まっているのだろう。
了承の意を示すと同時に病院へと駆けだした。

一方通行はその背が曲がり角を行くのを見送ったと同時に近くの公園に公衆電話があったはずだ、と再び宙へと舞い上がった。

・・・

木原数多は一方通行が逃走を図った後、数人の部下を伴って本部へと戻っている。
しかし、その前に気になる事があるので運転手の後頭部をはたき、自身の研究所で道草を食う事にした。

（あの女……）

黄色い女。
あれに銃を向けた奴全員が突然糸が切れたように倒れていった。

全くをもって不可解。

あの場はすぐに離脱した為倒れた部下達を連れ帰り検分する事は出来なかったが、あのような理解不明な出来事に少しだけ覚えがあった。

――――魔術。

大覇星祭の時に外部の人間が侵入しようとしているのでそれを殲滅、という指令が下ったのだが、その際に魔術と言う物と出会う事

となったのだ。
超能力とはまた違ったプロセスで発動させる異能に、木原は大いに喜び、命令を無視して何人かの魔術師を生きたまま連れ帰った。
その後その魔術師達がどのような目にあったのかは、不明。
しかし、こうして木原が研究所に赴いて話を聞きに行くと言う事はまだ生きている者も居ると言う事だろう。
そうして自身の研究所に辿り着いた木原は、真っ先に一番奥にある地下へと向かう階段へと進んだ。
そこには全身に電極を刺されている男に、培養液に全身を浸からせている女や、とりあえず健康そうな人間は木原を除いて誰1人として居なかった。
先に挙げた男女はまだマシな方で、元々なのかあるいはこの場で持っていかれたのか、四肢や身体の一部が欠損していたり、腹部を切り開かれてそこから何本もチューブが通され何か薬品の様なものを注入されている者も居た。
そんな中で、電極を刺されている男の耳元で、木原は囁くように質問をする。
「ある特定の相手の意識を問答無用で飛ばす魔術ってのはあるのか？」
「……」
男は何も答えない。
しかし、そんな男を見ても木原は眉一つ動かさない。
その代わりに男の隣に設置されているモニターに顔を移す。

そこには一般人が見てもわからないような大量の数字と、脳波を示すグラフか何かだろうか、波線が絶え間なく変動していた。
今この男の状態としては、意識はあるが身体を動かす事が出来ない、という状態である。
更には薬品と電極からの信号によって常に大脳上皮を麻痺させられながらも無理矢理正常な状態を保たせている為、本人が望む望まないに限らず質問した事には必ず自身が知っている情報を以って返答をする。
それはモニターに示されている大量の数字で判断出来るのだが、それをできるのはこの場では木原しかいない。

そんな木原はじーっとモニターを眺めた後に、キーボードを叩き始める。
しばらくの間、何かをモニターに打ちこんだ後にエンターキーを押すと男の身体がビクンと震えた。

続いて、再び木原が男に質問をする。

「あー、魔術に関して詳しい人間ってのは居るのか？」

もしあれが魔術師だとしたら、今までも似たような感じで魔術師が侵入してきた事があるのだろうか。
だとしたら色々と調べないといけない事が出来る。
はっきり言って木原もあまりこの実験体からの情報に期待はしていなかったのだが、とりあえず何も知らない木原からしたら無いよりマシ、と言う程度で質問をしていたのだろう。
しかし、その思いとは裏腹に、実験体は予想以上の答えを返答してきた。

「お、あ……Ｉｎｄ…ｅｘ…あ、Ｌｉｂｒ、、ｏｒｕう、ｍ…Ｐｒｏｈｉｂ、ｉｔｏｒｕｍ……」

無理矢理口と声帯を動かされているからだろうか、母国語で語っているというのに何処か慣れない異国の地の言葉を使っているかのような片言で、魔術に関するヒントを提示した。

聞き取りにくい口調だったが、このようなやりとりは今までに「何度も」してきたので、もう慣れた。

「Ｉｎｄｅｘ－Ｌｉｂｒｏｒｕｍ－Ｐｒｏｈｉｂｉｔｏｒｕｍ……？姿形は分かるか？」

「イギリス……清教…う、ぎ、…シスター…ぐ、修道服…」

イギリス清教と言うと、この実験体を回収するきっかけを作ってくれた組織の名前ではなかったか。

どうやらそこに所属する人間らしいが、『インデックス』という単語。

「……あのクソガキが何か言ってたよなぁ……？」

まさかとは思うが、一方通行は既に魔術と関わっていたのだろうか？

木原の思考は呻く男の声すらも聞こえない程に深くへ潜り込んで行った。

・・・

インデックスと別れた一方通行は、公園の公衆電話にて通話を開始した。

とりあえず、打ち止めに対して電話をかける。

しかし、相手からの返答は無い。電話が壊れたか、落としたか、電波が届かない所に居るか、或いは。

そこまで考えて思考を打ち切った。

そもそも逃げている最中で、声を出せない状況かもしれないし、何にせよ打ち止めの安否を考えるより、打ち止めの安否を信じた方がまだマシだろう。

兎にも角にも、こうしている間にも状況は変動して行くのだから。

一方通行は続いて別の番号へと電話をかける。

何度かコール音が鳴り響くと、女性看護師と思われる声の主が応対をした。

一方通行はカエル顔の医者に取り次ぐように命令すると、すぐに医者に代わった。

『こんな時間にどんな用件かな？』

『デケェトラブルが起きた』

『一応、『彼女達』の電気的ネットワークを介して情報はある程度集まっているけど？』

『成程なァ、そォいやそんなのもあったな。だったら話は早ェ。あのガキは今どォなってる？』

『今は猟犬部隊の別働隊に追われていたらしいけど、上条君と御坂さんに保護されたらしいね？

ただ、御坂さんが囮になったから今は上条君と2人で逃げているようだが……』

それを聞いて思わず舌打ちをする。

まさか上条達がこんな所で暗部に目をつけられる可能性を持ってくるとは思わなかったからだ。

そして何より、自分の抱えた闇を、上条達に尻拭いさせてしまっている自分自身に腹が立つ。

『場所は？』

『どこか路地裏を走っているようだが……場所までは分かっていないようだね？』

それだけの情報では何も分からなかった。

とにかくこの電話を終えた後、上条にも連絡を飛ばさねばと思う。

このような闇の世界に上条達の様な人間に足を踏み入れて欲しくないと思うが、今の自分では、自分だけではその闇には及ばない。

ならば、頼るしかないじゃないか。惨めだろうと、情けなくとも、弱弱しくとも。

だけど、それでも、結果だけは出して見せる。

何せこちらには『冥土帰し』が居る。

怪我前提と言うのもどうかと思うし、勿論無傷で全員が帰ってこられるのに越した事は無い。

それでも、可能性として十分あり得る事なのだ。

一方通行は、ギュッと受話器を握りしめると口を開いた。

『そっちに白シスターは来てるな？』

『今対応に困っていたところだよ。それはそうと君、また無茶なことしたみたいだね？
この件が終わったらまた戻ってきてもらうけど構わないかな？』

『問題ねェよ』

『それは入院など要らないという意思表示なのか、僕の言葉に同意したのか、どっちなんだい』

『ンなこたァどォだってイイ。そのガキ保護してくれ。猟犬部隊のクソ共に目をつけられた。
少なくとも２４時間程度は命を狙われるかもしれねェ』

『……やれやれ、ネットワークを介して話を聞いたけど、こうやって当事者と話をすると、ますます危機感が募って来るよ』

『わかってンなら丁度イイ。難しいだろォが、非戦闘員……特に重病者や妊婦とか、退避させられるか？
急患の対応もそォだが……出来るか？』

はっきり言って無茶苦茶を要求しているのは一方通行自身良くわかる。
しかし、事は急を要するのだ。それだけ切羽詰まっているのだろう。

そんな一方通行に対して、冥土帰しはきっぱりと告げる。

『やろう』

そして一方通行の言葉を待たずに、冥土帰しは続ける。

『発煙筒か何かで火事が起きたと言って、そこからテロにでも結び付ければ大義名分も立つ。

動かすのも危険な患者もいるが、そう言った者達を救うのが僕の仕事だ。やってやるよ』

『……悪ィな。最悪あと数人急患を送りつける事になるかもしれねェ。

勿論、俺も含めてなァ』

『おや、意外だね。僕はてっきりこの件に関わった者全てを救ってみせる位言ってくると思ったんだけど？』

少し申し訳なさそうに感謝の意を示す一方通行だが、冥土帰しはそれ以上に一方通行の言葉に対して意外そうな口調で返答した。

『ハッ、夢は寝て見るもンだぜェ？まァ、それが出来るのに越した事はねェンだけどな。

なるだけ無傷で助けてみせる。だが、最低限『助ける』しか出来ねェ場合もある。

……ムカつくけどな、形振り構ってらンねェンだ。だからその後は任せる……俺達を、助けてくれ』

『……当然だ、僕を誰だと思っているんだい？……『冥土帰し』、だ。

それが出来なくてその名を名乗るなんておこがましいとは思わないかい？』

その力強い返答が、どれだけ心強いものだったろう。
一方通行は感謝の意をもう一度示すと、続いて病院の退避先を聞いてから受話器を降ろす。

その目には、今まで以上に炎のようなギラついた何かが滾っていた。

・・・

ビリビリッ！と電撃が水たまりや宙を駆け廻りあたりを照らした。
そうしてその電撃が止んだ時、その周辺には黒づくめの男達が倒れ伏し、電撃が放たれたと思われる中心点には、茶髪の女子中学生。

彼女の名は御坂美琴。
ここ学園都市が誇るレベル５の序列第三位『超電磁砲』その人だ。
彼女は今現在手ぶら状態で、学生鞄とゲコ太ストラップの入った携帯電話の紙袋は近くのコインロッカーに放り込んでいた。
というのも、上条当麻と罰ゲームと言う名のデートを敢行するにあたってその日の日程や天候は既に把握していた為、上条の学生鞄も共にそのロッカーにしまっておいたのだ。
しかし、カラオケ店に入るまでは雨が降らなかったので結局雨の事を忘れていた為に、鞄に入れた折り畳み傘を取り出す事は無かったせいで、今現在彼女は水もしたたるイイ女状態になっている。
自分は濡れ濡れだが、主にゲコ太ストラップをあらかじめコインロッカーに置いといて本当に良かったと思う。

そんな中で、ポケットに入れた携帯電話が鳴り響いた。

彼女の携帯は見た目ゲコ太だが中々に実用性が高く、勿論防水機能もありありなので雨の中でも気にせず携帯を開く。

表示は白井黒子、彼女の後輩だ。

『おっねえさまーん』

『何よ黒子』

『あのですね、ジャッジメントの職務の為寮に帰れないので、あの口うるさい寮監に一言連絡してほしいのですの。
ほら、もう門限も過ぎてますでしょう？』

そこで御坂も思い出した。
自分は門限ギリギリだったという事実を。そしてそれは既に過ぎてしまっているという事実を。
冷汗を雨で洗い流しながらも、それでもなお流れ落ちる水滴は、やはり雨だと思いたい御坂は震える声で話す。

『あの、ごめん、私も今外』

『何……だと……？』

思わず白井も淑女らしくない返答をよこした。
そんな中で、白井の少し後方から、別の声がスピーカーに届く。

『あれー？白井さん、御坂さんに連絡付かなかったんですか？
よかったですね、これで寮監さんからの懲罰確定で――』
『うおっとしいですの！！』

何やら騒がしいが、この声は恐らく初春飾利のものだろう。
となると、彼女らは今現在支部でお勤めの真っ最中という事か。

『しかし、これはまずいですの。2人して外に出ているという事は門限超過に関する書類を提出できませんし。
と言う事は2人してあの寮監に……』

『あれ？そういえば白井さんは良いとして、御坂さんはどうしてこんな時間に外に？』

『ッッ！！？』

白井と初春の声をぼんやりと聞いていた御坂だったが、ここで通話の音声に雑音がすこし混じり、ミシミシッと何か圧のかかったような音が響いた。
恐らく、白井が力の限り携帯を握りしめているのだろう。

『お、お姉さま？まさかとは思いますが、あの類人猿と今一緒に……？
己れあのクソッタレめ！！雨の夜景を楽しむとはなんて渋いチョイスを……だが、良いセンスだ！』

『……良かったわね、私は1人よ（今は）』

白井の憎々しげだが何処かライバルの力を誇るような声に、御坂は少しだけ間をおいて返答する。
この冷静さは実際にデートっぽい事をできた事による余裕だろうか、何にせよ落ちついた口調で返答して来るので白井は安心したように少しだけ溜息をついた。

『良かったですの……てっきり黒子は、お姉さまの貞操の危機かと思い、今すぐにでも逆探知をかけお姉さまの元へと誰よりも早く向かおうとしてしまいましたわ』

本当にやりかねないから怖い。

御坂はそんなことをぼんやりと思いながら突っ込みを入れようとするものの、初春によって遮られた。

『駄目ですよー、白井さん。今晩はこのアルプス山脈の様な書類達を更地に変えるって誓ったじゃないですかー。

ほらほら手が動いてないですよ、電話しながらでも書類は減らして行って下さーい。ここで遅れた分だけ私の仕事もしてもらいますよ？

とにかく、今日は徹夜です。デスマーチです。お弁当はありますし部屋から出る必要もありませんね、お風呂も駄目ですトイレは書類を片しながらなら許可します』

『……にゃあああああああああああああああ！！！！』

『！？白井さん？白井さーん！！』

電話の向こうで何やらドタバタと物音が聞こえる。

携帯電話を離しながら、もう片方の手でうるさそうに耳をふさぐと、御坂は呆れたように口を開いた。

『もう切っていい？』

白井はどうやら錯乱しているらしく、代わりに初春が答える。

『はい、もう大丈夫です。白井さんは馬車馬のごとく働いてもらうので、あの、邪魔は入りませんので！』

『だから違う！（今は）』

割と事実なので、あまり言い返せない御坂であった。

・・・

上条当麻は打ち止めを抱えて走る。

前にも後ろにも『立っている』人は居ない。

その代わり、地面に倒れ伏した人、人、人。

ここでもアンチスキルの部隊が１つ撃破されたらしい。

（マジで何が起こってんだ……！？この街で！！）

焦る思考の割に冷静にあたりを見渡せているのは、御坂美琴が囮になって猟犬部隊を引きつけてくれたからだろう。

追手は今のところ来ていないようで、緊張感はもっているがそこまで張りつめたものではなかった。

それでも不安なのだろう、打ち止めは心細そうに上条のシャツをギュッと掴んでいる。

そうして、バシャバシャと水たまりに足を取られながらも大通りへと躍り出た。

そろそろ追手にも気を張るべきか、そう考えた所で１００ｍ先だろうか、ある異変を見つける。

そこには、１人の女が悠然と佇んでいた。
そこには、多数のアンチスキルと思われる人員が倒れ伏していた。

――――そして、その女は、こちらを振り向いた。

思わず身を翻して曲がり角に隠れる。

「ハッハァーイ♪びっくりしちゃったカナ？怖がらないで出ておいでー？」

聞こえてきた女の声は、想像以上に自己主張の激しいものだった。
遠目に見る限りでも黄色を基調とした服で、どう見ても御坂が相手をしている黒づくめとは違う人種だ。
そして、倒れ伏す人々の中で、あのように笑う人種とは。

（魔術師……か……？）

だとしたら、マズい。
何がマズいってどう見ても打ち止めより上条の方が狙われているだろう。

別にそれは構わない。

しかし、そうなった時打ち止めだけでも逃がしたとして、打ち止めが１人になってしまう。
とは言え２人で逃げ切れるかどうか、相手の力も出方も不明なのだから、分からない。

ならば、囮になるしかない。

「打ち止め、お前携帯は？」

「えっと……あれ？落としちゃったかもってミサカは――――」

「なら、これ持ってけ。とりあえず逃げろ。
一息ついたら一方通行でも誰でも連絡を飛ばしてくれ。
多分、あれの狙いは俺だ」

「でも、」

「打ち止めには辛いかもしれねぇけど、頼む」

「……分かったよってミサカはミサカは静かに駆けだしてみる」

そうして打ち止めが先程来た道を引き返すと同時に、上条は再び大通りへと歩いて行った。
そこには、変わらず女が雨に打たれていた。

ただし、その距離をゆっくりと縮めながら。

「さてさて、ようやく見つけた最初の被害者（ターゲット）。他にも居たけど、普通にこっちに気付かずに逃げられちゃったしねー」

じゃらじゃらと音を立てながら、その女は笑った。
あまりに女性に似つかわしくない醜い笑いに、上条は少しだけ動揺しながらも口を開く。

戦わなくとも、とにかく打ち止めがここから離れるだけの時間稼ぎをする。それだけで頭はいっぱいだった。

「お前、は……？」

「『神の右席』、前方のヴェント」

ヴェントは手にしていたハンマーを肩に担ぐように振り上げながら、続ける。

「とりあえずまあ、ぶっ殺されてくれない？」

舌から垂らされた十字架付きの鎖から、唾液か雨水が滴り落ちた。

## そのななじゅうはち　それぞれのうごき（後書き）

ちなみに木原くンのシーンはハンターのポックルを科学的にしたイメージですというどうでもいい補足をしてみる。
本当にどうでもいい

# そのななじゅうきゅう　てんじょうらくど（前書き）

天上楽土のＢＧＭ水晶

## そのななじゅうきゅう　てんじょうらくど

暗闇の中、とある大通りでは張りつめたような緊張感で覆われていた。

ドクドクと脈打つ心臓が持つ熱を、降り注ぐ雨が幾度となく冷まして行く。

それでも、上条当麻の極度の緊張感から来る熱を冷ます事は叶わない。

「緊張なんてしなくても大丈夫ダヨ？痛みなんて感じるヒマも無いんだし」

彼の目の前にはヴェントと名乗った女が、薔薇の茎のような有刺鉄線を巻きつけたハンマーを持って、鼻歌交じりに野球選手の様な素振りをしていた。

何だかそれだけを見てると悪そうな人には見えないが、倒れ伏すアンチスキル達の中、平気な顔して素振りをしているのでその評価は一気に覆るというものだ。

何にせよ、呑気に素振りしてるしそろそろお暇をば……と言った感じでそそくさとその場を去ろうとする上条に、ヴェントは声をかける。

「私をムシして何処行こうっての？」

「え、ええっと……その、あっちの方に」

「ふうん、成程ね」

しどろもどろに返答する上条だったが、何やらヴェントは納得したように頷いた。
え？どゆこと？と疑問符を浮かべる上条をガン無視しつつも、ヴェントは笑う。

「他の人間に被害が及ばないように場所を変えようってことね？ＯＫＯＫ、そう言う事ならいくらでも付き合ってあげるヨン。私もアンタを抹殺する為にやってきてるんだし、周りの事気にしなくてもイイかなーとか思ったりしてたけど、死者への手向けってのも乙なモンだしね、その望み叶えてあげよう！」

「は？イヤ、そげなことなかですたい！？」

「またまたそんなこと言ってー」

もう、イヤン♪と言った突っ込みのテンションでヴェントがハンマーを振るった。

両者の距離はおよそ１０ｍ。

突如として上条の体に、横殴りに衝撃が走りそれに従って車道の端にあるガードレールまで紙切れのように吹き飛ばされる。

そんな上条を見てヴェントは少しだけバツが悪そうに呟いた。

「あ、いっけね。術式発動したまんまだった。ごっめーん」

ガードレールにぶつかったことでその勢いを止めた上条はすぐに直感した。

あれと敵対してはならない、と。

・・・

「さァて……」

まずは上条当麻と御坂美琴の安否が知りたい。

とりあえず上条の電話にかけたが、誰も出なかった。

それだけで不安を煽るものであるが、とりあえず御坂にも電話をするべく硬貨を入れる。

すると今度は繋がった。

一先ず御坂は無事そうだ、と言う事実に安堵しながら口を開く。

『御坂、無事か？』

『その声、一方通行？……その口ぶりだと、あんたも無事そうね』

実際は胸がぱっくりと開いていて、それを無理矢理閉じているという状態なのだが、気を抜くとすぐに傷口から血も抜ける。

しかし、そんな重症な状態だと微塵も感じさせない一方通行の口調に、御坂は安心したように溜息をついた。

『ただ、上条と連絡がつかねェ。何処行ったかわかンねェか？』

『ごめん、途中まで打ち止めと一緒だったんだけど……』

『そりゃ仕方ねェってもンだ。誰が悪いってあのクソ共が悪ィ。とりあえず、インデックスの奴も暗部に目をつけられたかもしれねェから、あいつはあのカエル顔の医者に匿ってもらってるンだが、戦力に不安がある。だからお前にそこでの防衛を頼みてェンだが……』

『あら？てっきり俺1人でやる位言ってくると思ったのに……』

『……そォしてェのは山々なンだがな。ちっとばっか俺の手に余る問題なンだよ。とにかく、頼めるかァ？』

『了解～、頼まれちゃあ行くしかないわね。』

『何でちょっと嬉しそうなンだよ』

『いや、こうやって一方通行から頼みごとされるのって初めてだから……何でもかんでも1人でこなしたりこなそうとしたりするし』

『……うるせェさっさとしろォ』

『はいはい、それじゃあね』

何だか楽しそうな雰囲気を醸し出しながら、御坂は電話を切った。そうして取り残された一方通行は、舌打ちをしながら硬貨を入れる。

続いて芳川桔梗にも連絡を入れるためだ。
恐らく鬼ごっこを終えて９９８２号も近くに居るはずだと考えながら、電話に出るのを待つ。

しかし出なかった！

チッ、と舌打ちをしながら受話器を置き、返却された硬貨をもう一度入れ、今度は９９８２号の電話番号を押す。

しかし出なかった！

一方通行は叩きつけるように受話器を置いて、硬貨をポケットに突っ込み公衆電話を後にした。

（なンであいつらは電話に出ねェンだよ！！）

ひょっとしたらあいつらにも何かあったのだろうか。
そんな嫌な予感が脳裏によぎりながらも、とりあえずテレビの中に言って何か異常が無いか調べに行く事にした。

・・・

一方その頃。

「はぁ、はぁ……！！」

少女は雨の降る街を駆ける。
その表情は焦燥に満ちており、明らかに異常事態であると主張しているようにも見える。

しかし、そんな少女に助けは来ない。

その代わり、背後からは追手がやってきている。

彼女が前進しながらも背後にチラリと視線を送ると。

「悪ぃ子はいねぇか～？人を年増呼ばわりする悪ぃ子はぁ～いねぇが～！！？」

「ひぃぃぃい！！！こいつしつけえ！と、ミサカは芳川に戦慄します！！」

修羅の国を生き抜いてきたような威圧感……いや、最早存在感と言っても良いだろう。

圧倒的な恐怖を携えて、鬼が少女に迫っていた。

成程、未だに追いかけっこをしていたようで、一方通行の電話に出る余裕などなかったのだろう。

あまりに呑気な2人は、家に帰る事も忘れて走り続けていた。

「一発！一発ぶん殴らせて！全力で！！」

「だが断る！と、ミサカは逃走を続けます！！」

「先っぽ！先っぽだけでいいから！！」

「何処の部位を指して言ってるんですかそれは！！？」

未だに2人は街の異常に気付いていなかった。

・・・

風が、吹き荒れていた。

それは一方通行や布束砥信のペルソナに勝るとも劣らないレベルの風だと、上条当麻は感じている。

その風は辺りに溜まっている雨水や地面へと落ちようとしている雨粒すら吹き飛ばし、局地的に雨が降って来ない空間を生み出していた。

そして吹き飛ばされた雨は、何処かの店の看板やら駐車されていた車両やらと共に上条に襲いかかる。

そんな中で上条は回避できないと反射的に判断して、オケアノスのブフーラによる人工の氷壁を作りだし防御に回った。

何とか逃げ切ろうとか思っていたのに、力を使わざるを得ない。

（どうする!?逃げる!?いや、既に逃げ切れてねぇし!!
かといって、あんな風を使われたら、成す術なく吹き飛ばされるんじゃんかよ!?）

そして何より、『頭に召喚器を突きつける』という過程が圧倒的なまでに隙を作ってしまう。

テレビの中では仲間達も居たからその隙を無くす事も出来たし、オリアナ＝トムソンの時は事前にある程度の情報―オリアナの魔術について知っていたからこそ、ペルソナを使って戦う事も出来た。

しかし、今相手の力は未知数なのである。

例えば今使っている風も、全力ではないかもしれないし、それ以上の魔術を行使して来る可能性もある。
そして何より、アンチスキルが事ごとく意識を奪われたという現実。

どう見ても隠し玉があると言っているようなものだ。

少なくとも、打ち止めが遠くに移動するまでは相対して戦う気にはならない。

（クソ、打ち止めの安否が気になって仕方ねぇ……一方通行も何処居るかわかんねーし、あああ御坂も大丈夫なのか？！久々葉とか芳川さんとか、気になりだしたら止まんねーぞ！！？）

上条が極限まで思考をフル回転させて現状を打破する策を考えていると見せかけて思考が脱線している一方で、風を生み出した本人はぼんやりと上条が使用した力について反芻していた。

（どう見ても幻想殺しではなく、別の力を行使している）

（ひょっとすると、幻想殺しは、使わないじゃなく使えない？）

（でも、時折織り交ぜている『本命』には引っかからない）

（それはただ単に戦意が無いから？
てっきり幻想殺しに阻まれているだけかと思ったんだけど、
『幻想殺し消失』の噂は本当なのか、確かめる必要があるわね）

まあ、そんな反則は消失してくれてた方が楽なんだけど、とヴェントは声にならない程小さく呟いた。

「てゆーかさ、アンタと一緒に居たちっさいの、どっかに逃がしたみたいだけどイイの？」

「……何がだよ？」

「こんな暗闇にあんな幼子を1人放り込んで、嗚呼可愛そうに。
今も雨の寒さに、暗闇の深さに震えてるかもネ。それだったらこの場で苦しみも無く死んだ方が楽じゃない？」

「……大丈夫だよ、携帯持たせてるし、すぐに誰か助けを呼ぶだろうさ。
それに、俺も居る。すぐに打ち止めの元まで向かうさ」

ヴェントは上条のリアクションを見て、やはり自分と敵対する気はない……と言うかそもそも別の事に気を取られていると考えた。

それはやはり、上条が逃がした子供の事だろう。

（全く、心ここにあらずなら、そりゃ私の術式も反応しないわ）

だったら、こっちに意識を向けさせなきゃね。
ヴェントはジャラリと舌から垂らした鎖を揺らしながら、口を開く。

「とりあえず、あなたの背後に居る『ソレ』、一体何？」
「お前は、自分の魔術についてペラペラ人に話すのか？
つまりはそう言う事だよ、手の内は晒さないに限るよな」

「え？同業者には結構話してるけど」

「えっ」

「私のチカラは、分かってて避けられるモノでも無いし。
それこそ、『幻想殺し』でも引っ張って来ないと。
……どんな力か、知りたい？」

ニタァ、と言う効果音がふさわしいだろうか、おぞましい笑みを浮かべたヴェントに対して、上条は焦りながら召喚器を頭に突きつける。

「……ケッコーです！」

上条はオケアノスを召喚し、マハブフを唱えた。
すると降り注ぐ雨粒が氷のつぶてとなって無差別に降り注いで来る。
それを目くらましに上条は逃走を図ろうとしたのだが。

すると氷のつぶての中心点、前方のヴェントはその氷を全く気にする事無く、少し風を操るだけでその氷を退けつつ、笑った。

「アンタが相手してくれないなら、あっちで寝転がってる奴らを玩具にして遊ぼっカナー？
だってそっちが約束反故にして逃げようとしてるんだモン。仕方ないよね」

基本的に軽いノリでどんな事でも大したことない、と言った口調をするヴェントだが、彼女は一度口にした事は何があってもやり遂げる、上条は、ヴェントがそんな人間に違いないと、彼女と相対している間に理解させられた。

その彼女が、『意識の無い一般人に手を出す』と言ったのだから、それは確実に行われてしまうだろう。

上条当麻が前方のヴェントから逃げ続ける限りは。

その言葉を受けて、思わずカッとなった上条は、逃げる足を止め召喚器をこめかみに突きつけた。

――――明確な『敵意』を持って。

それを感じとったヴェントはニヤリとほくそ笑む。

トリガーは上条の手によって引かれた。

そして、魔術と言う名の弾丸は上条当麻の喉笛を食い破る。

「ガッ……！！？」

条件は、魔術を発動させる条件は完全に出揃い、上条当麻もまたヴェントの『チカラ』に呑まれてしまった。

突然息が出来なくなった上条は召喚器を地面に落とし、喉に手をやる。
しかし、彼を蝕む魔術を解除する事は叶わずに、彼は水たまりの中に音を立てて崩れ落ちた。

そして薄れる意識の中、ヴェントの笑い声と。

――――いけ好かない自分の片割れの溜息が聞こえた気がした。

・・・

一方通行はテレビの中へ入った。
何か情報が無いか、何でもいいからという藁をもつかむ思いで。
するとそこには何か焦った表情を浮かべるクマと、狼狽する布束砥信が居た。

何かあったな、と一方通行は考えながら地面に降り立つと2人に声をかける。

「オイ、なンかあったのかァ？」

「ｗｅｌｌ、クマが何か嗅ぎ取ったらしくて……ってむしろあなたの方が何かあったの？！」

白と黒のストライプの変則形みたいな服を着ている一方通行だが、その服の白地部分は真っ赤に染まった上、全身ずぶ濡れ状態である。
布束の突っ込みは当然のモノなのだが、詳しく説明する暇も無いので「暗部が動き出した」とだけ言うと、布束も何となく理解したようだ。

「それで、クマどぉしたってンだ？」

「クマ。最近放り込む人の匂いを感じなかったけど、ここにきて強烈に嗅ぎとれるんだクマ！
これは１人じゃなくて、いっぱい居るクマよ！！」

クマの言葉と、木原数多の言葉を合わせると、これは罠なのではと考えた。
とはいえ放り込まれた人間が関係の無い一般人だとしたら、ただ巻き込まれただけの存在だとしたら、助けねばならないとも考える。

「……案内しろ、行くぞォ」

「ｉｎｄｅｅｄ、事は急を要するみたいだけど、他の人を待つ時間も無い程切羽詰まってるの？」

「それは移動しながら説明する。とっとと行くぞォ、こォしてる間にも事態が悪くなる」

先導するクマを抱え、布束の首根っこを掴むとクマのナビを受けて足を踏み抜きジェットコースターのごとく一気に駆け出した。

悲鳴を上げる布束に、悲鳴のようなナビをするクマ。

そんな中で、ふんふんとクマのナビを聞きながらも、２人に状況説明をする一方通行。

いちいち２人のリアクションを気にする暇などなかった。

・・・

＜天上楽土Ｆ１＞

「すごくきれーな場所クマね……」

「ｂｕｔ、暗部の人間でこんな場所を作りだせる人が居るとは思えないんだけど……」

「……確かになァ……」

そこは天国、と言う物を具現化したような場所だった。

豪奢な装飾の施された石造りの柱や壁、石畳などに木々が絡まっており、ところどころ浮き島のような構造をしていて、一面が静かだった。

何処か中世ヨーロッパに建てられた城の園庭の様な外観をするその場所は、純粋な「白」に覆われた世界で、人の心から生まれるこの地において、ここまで真っ白でまっさらで、ここまで純粋で綺麗な場所を作りだせると言うのは、とても素晴らしい事だと思う反面で、そんな人間がこの場に放り込まれたという事実にただただ驚愕させられる。

そして何より、今まで不気味なまでに放り込まれる人間が居なかったというのに、動き出した暗部と木原の言った言葉、そしてこの状況。

どう見てもこの現状には木原数多が関わっている。だとしたら、この場を作った人間もしくは人間達は木原の味方か、敵か。

何にせよ一度顔を合わせねばならない。

そう考えた所で入口に足を踏み入れた一方通行だが、不意に『声』が聞こえてきた。

それは初めてこの地に降り立ち、御坂美琴や９９８２号を伴って研究所に行った時に聞いたような、ラジオか何かで放送しているような音声で、思わず一同はその声に聞き入った。

・・・

《《――木山先生っ！》》

・・・

《いよう木山先生？元気してるー？》

《誰だ、貴様は》

《俺？俺ぁ木原ってんだ。しがない研究者だよ、今日はお前んとこのガキ共を……５人かな、回収にあがったわけだ》

《なっ！？貴様どういうつもりだ！！？》

《どーもこーもねーよ、つべこべ抜かしたら殺す。

そーだな、医療ミスにでも見せかけて殺すか？

そしたらここの医者もおしまいだな、お前ここの奴に世話になってたんだろ？

恩を仇で返す気かぁ？》

《ふざけた事を……！！》

《しーんぱいすんなって、そもそもこっちもこんな事するつもりなかったっつーの》

《どの口が抜かすんだ……！？》

《だーかーらぁ、飽くまでも一時の間……そーだな長くて3カ月、早くて1カ月ガキ共のうち何人か借りるだけだって。
色々しなきゃならねぇ事があってな。それが終わったら解放するっての》

《そんなふざけた話、信じられると思うのか？》

《いや、信じる信じないの問題じゃねーよ。既に規定事項だし、そいじゃおやすみー》

《なっ！？ふざけ……る、な……》

・・・

《とりあえず、おめーらには普通に学校に行ってはもらうが、放課後たまに呼び出しすっから、その時は必ず来いよ？
でねーとお前らの大好きなセンセーはサヨナラする事になるからなぁ！
ん、そーいやお前は木山春生とは関わり無かったんだっけか。
まーいいやお前の場合そっちのデコっぱちの危険が危ないってなぁ！！》

《《……》》

《俺の命令に対しては、はいかわかりました、もしくはイエッサーと返答しろよ？
あんまり我儘なクソガキは殺したくなる程大嫌いだから。
まぁ、言う事を聞く限りはそんなひっでーことにはならねーから安心しな……
例えば、何年も意識不明になったりなぁ！ギャハハッ！！》

《《……はい》》

《よーしそれでイイ。そんじゃ一人ずつ身体検査してくから……右から順にあっちの部屋に行ってこい》

《《……はい》》

・・・

《よーしガキ共、朗報だぜー。今回の任務が終わればお前らも木山センセーもお役御免で解放してやるよー。
何せ『適合者』があつまりゃお前ら『人工』のはいらねーかんな。
実際人工のはお前らと言う成功例もあるし、いつでも造り出せるしよぉ》

《《……はいっ……！》》

《それでだな、最後の任務地は――》

・・・

《《――木山先生！》》

・・・

《……バァーカ、解放するって意味を履き違えてんなよ》

・・・

一方通行はあふれんばかりの激情を抑えきれずにいた。

布束砥信は血が出る程に唇を噛みしめていた。

クマは状況が分からないものの、放り込まれた人たちは被害者なのだと理解した。

今、この場に居ると思われる人間達は、『暴走能力の法則解析用誘爆実験』の被験者達の一部。

そして響き渡る音声を聞いた限りでは、本来『暴走能力の法則解析用誘爆実験』は『ＡＩＭ拡散力場制御実験』を隠れ蓑として行われた実験だったのだが、実はそれすらフェイクに過ぎず、この実験での目的は『人工』のペルソナ使いを作りだす事にあったのだ。

結局その被験者達が昏睡状態に陥った為、見た目上は中止になった。

しかし木山春生や御坂美琴達がその被験者を見事に救ったので、『色々』とデータを収集する為に再び被験者達を集めたようだ。

そして今、用無しになったからか、適当な事を言ってテレビの中に放り込んだのだ。

事もあろうに、一方通行達の足止めをするついでに。

「あンのクソ野郎ォ……何処までも馬鹿にしやがってェ……！！」

ギリギリと歯ぎしりをする一方通行だが、そんな中で布束砥信は神妙な顔つきで一方通行に語りかけた。

「ｗｅｌｌ、この世界は、「木山先生と共に日常に戻れる」という安心感から出来たものかもしれないわね……

それはさておき、一方通行。あなた外に戻った方がいいわ。ここは私とクマが何とかするから」

「ハァ？何を……」

「私とクマは、ココでしか動けない。でも、あなたは違う。そうでしょう？

ｔｈｅｒｅｆｏｒｅ、適材適所って奴」

「……」

確かに、そうだ。

あの音声を聞く限りでは、木原はここには居ない。

だったらいつまでもこんな所に居る暇は無い。かといって騙された子供達を放っておく訳にもいかない。

ならばクマと布束がこちらで動けばいい。

そして一方通行はあちらで木原を叩けばいい。

「それじゃークマと一方通行ンは一旦戻るクマ？」

「イヤ、ここであっちに戻る」

「「えっ」」

「考えても見ろ、あいつらが何処から入って来たのか」

「……高確率で奴らの研究所がありそうね」

「恐らく、罠なンだろォな。だが、あいつは、あいつらは骨の髄まで消し飛ばしてやらなくちゃー気が済まねェ」

「……分かったクマ、それじゃあここで出口を出すけど、気をつけるクマよ?敵は人を人とも思わない外道クマ!!」

「分かってる。餅は餅屋、蛇の道は蛇……ってなァ。
あァいうクソ共の相手は俺がすべきなンだよ」

落ちついた口調に聞こえるが、その表情を見ると今にも爆発しそうな時限爆弾、と表現したらいいだろうか、これを敵に回した奴らの方に同情したくなる程に、一方通行はキレている。

布束とクマは南無南無と心の中で念じながら、一方通行がクマの出したテレビの中に吸い込まれて行くのを見送ったのだった。

## そのななじゅうきゅう　てんじょうらくど（後書き）

普通にヴェントと相対して勝てるわけもないから、上条対ヴェントを1文字でも長引かせるために上条さんの心ここにあらずという言い訳がましい状況を作ったわけだけど、駄目？

## そのはちじゅう　えくすとらすてーじはとつぜんに（前書き）

もう九月だぜ！しんじらんねー！

## そのはちじゅう　えくすとらすてーじはとつぜんに

「ホントに第一位は来るのか？」

黒づくめの1人は第五学区に点在する研究所のうちの一つの中で待機しながらも、本当に来るかもわからない敵に対して溜息をついた。

ここ第五学区は大学や短大などが多く、多くのビルが建ち並ぶ学区で、それに伴い大学の付属研究所なども多い。

そんな学区にある『野村産業技術総合研究所』の敷地内で『猟犬部隊』の1班は待ち伏せをしている。

待ち伏せをするにあたって武装している事を怪しまれないように、テロリストが潜伏している可能性ありと言う名目の元、アンチスキルに扮した状態で目的のポイントに部隊を並べた訳だが、こんな場所で戦闘行為をしても良いのかという疑問が一同の頭の中にあった。

この研究施設はそこらにある研究所とは一線を画しており、環境を利用したエネルギー運用や、ナノテクノロジーを駆使した材料の製造、個人の身体に合わせた健康維持や増進、回復を支援する技術の開発など、とにかく名前の中に『総合』とあるだけあって多くの研究が為されており、分野ごとの研究所が野村産業技術総合研究所の敷地内に、所狭しと立ち並んでいる。

この「野村産業技術総合研究所（通称ノムケン。その名を呼ぶ者は少ないが）」と言う名はその地を呼ぶ為の便宜上の物に過ぎず、その実態は大量の研究所をショッピングモールの様に一つにまとめている場所だった。

その広さは約9平方キロメートル。およそ3キロ四方にわたって展開されるこの場所では、一流と呼べる優秀な研究者達が集まっている為、研究者にとっては一つのパーソナリティと言うか、ここに配属される事を目標にしている者も少なくない。

木を隠すには森の中、と言う事で人の為に尽力している研究者が居る傍らで、人に言えないような実験を行う研究者も中には存在している。

ここ野村産業技術総合研究所には木原の研究所もあり、その研究所から置き去りの子供達はテレビの中に放り込まれた。

そして、木原数多には放り込む事は出来てもそこから戻す術を知らない。だが、そこから戻る力は一方通行達には存在する。その事実を知っている木原は、一方通行は間違いなくこの研究所にやって来るはずだと考えている。

そんな訳でこの班に対する指令の内容は、一言で言うなら「時間稼ぎ」。

この研究所に20時までに一方通行がやって来た場合、最低でも30分足止めを、可能であれば一方通行及び一方通行に加担する者を撃破しろ、と言うものであった。

ペルソナに関する実験は猟犬部隊の面々は知らない所で行われている為、木原の指示に頭をかしげたいところだが、命令は絶対なのでこうして待ち伏せをしつつも、影で疑問を露わにする黒づくめだった。

「さぁ、とりあえずあの人の言う事は絶対だから、来るんじゃない？」

「全く、とんでもねぇ上司が居る所に配属されたものだな、ナンシー」

黒づくめのため息に対して、どうでもよさげに返答した、女の声。

同僚の「ナンシー」という言葉に、言われた本人は思わず笑って誰がナンシーかと呟いてしまうのだが、そう言うコードネームで行動しているのだから仕方が無い。

ナンシーは普通に普通で黄色人種のジャパニーズだ。勿論黒髪黒眼で日本人ぽくない部位は存在しない。

本人も別にその事にコンプレックスは抱いていないのだが、どうせなら普通に漢字のコードを付けて欲しかったものだ。

この名付け親である木原数多はきっとネットなどでは派手なハンドルネームを使っているに違いない。

（例えばなんだろう、アクセラキラーとか？）

ナンシーは自分で考えた事に自分で噴き出した。

本人は面白いのだろうが、もし仮に周りの人間達と仲が良ければ、突然噴き出してどうしたという和やかな雰囲気に包まれるかもしれない。しかし、このメンツではそんなことはありえない。

ナンシーは勿論そうだし、ここ『猟犬部隊』に配属される人間は男女問わずとにかくクズばかりを集めた組織なので、とりあえず仲良しこ良しなんて雰囲気が出来るわけがない。

例えばアンチスキルとして犯罪者を嬲る様に追い詰める快感に酔いしれた奴や、身体に傷を残さない拷問方法を提唱・実行に移した奴。

兎にも角にも、自分も含めて周りの人間は全て軽蔑されるべきク

ソ野郎なのだから。

彼女は周囲の重苦しい雰囲気などガン無視し、未だにくつくつと笑いながら手の中の先程まで使っていた器具をゆっくりと揺らしていた。

一見玩具の拳銃に見えるのだが、それは実は嗅覚センサーという、対象の匂いを追い続ける道具だ。

途中までそれを使って一方通行を追っていたのだが、突然対象の匂いが『消えた』。

このセンサーは例え雨によって匂いが混ざろうとも、正確に対象のみを追う。

だと言うのに文字通りセンサーから消えたのだ、当然ナンシーは驚きを隠せなかった。

と思ったらこの研究所で待ち伏せしてろと言う木原数多の指示。

更には命令の中から分かる通り、一方通行に加担する者が居るかもしれない、と言う事実。

自分の知らない裏側に、一体何があるのだろうか。

気にはなるが、追及する気にはならない。好奇心は猫を殺す、つまりはそう言う事だ。

ただでさえこんな肥溜めにいるのだから、これ以上余計なことして命すら散らすのは勘弁したい。

しかし、これだけは気になる。

「あの人は自分の研究所で戦闘されても気にしないのかしら？」

「気にしないからこうやって班を動かしたんだろ」

別に誰に向けて言った言葉でも無いのだが、ナンシーの隣に立った黒づくめの男が返答をした。
無駄口であるが、確かにその通りである。

木原の研究所は３００m四方程度の敷地で、研究所としてはかなりの広さを誇る。
野村産業技術総合研究所の中では裏の研究も為されていると先述したが、木原数多は『木原一族』のブランドも相まってかなり有名である為、「この」研究所ではあまり裏側の研究は為されておらず、基本的には表向きの立ち位置を固定する為の研究しか木原はしていない。

つまり、そんな研究所にて一方通行を待ち伏せする意味がわからない。

「まあ、何か俺達の知らない裏があるんだろ」

「そーね」

またしても聞いてないのに返答をする同僚に対して、ナンシーは気の無い返事を送った。
それと同時に、嗅覚センサーに反応が示された。音も気配も無く。

「……来たわね」

そして猟犬部隊は動き出す。音も気配も無く。

・・・

学園都市は東京西部の山岳部を切り開いて作られた街だ。

自然破壊だ何だと騒ぐ団体もあるが、利益とそれに代わる植栽の技術を提供したら全員が黙った。

兎にも角にも紆余曲折を経て造られた学園都市だが、山岳部にある為にその周りには村すら存在せず、学園都市から一度外に出ると人と出くわすのにかなりの時間を要する。

そんな中で山道を通る豪奢で面長な車体が1つ。

所謂リムジンと呼ばれるそれはもっと走るにふさわしい道路があるだろうと突っ込みを受けそうだが、突っ込みを入れる人間がその周囲には居ない為に、リムジンは丁寧な運転で音も無く快適に目的地へと向かっていた。

その車内には、運転手のほかに7人の男女と犬が1匹。

明らかにリムジンに似合う面子ではないと突っ込みを受けそうだが、やっぱりそもそも周りに突っ込みを入れる人間が居ないので、何事も無かったかのようにリムジンは進む。

「ところで、学園都市に入る時どうするんですか？」

まるで戦闘前の張りつめた空気が漂う中で、少しでもそれを和らげようとする為か、ふかふかリッチな座席に縮こまりながら岳羽ゆかりは口を開いた。

「そうっすよ、だってこないだの大覇星祭に行った時もかなり厳重な感じだったじゃないっすか」

やはり緊張感はある程度持った方が良いのだろうが、こういった重苦しい雰囲気は苦手なのだろう。

岳羽の質問に同調して伊織順平も桐条美鶴に対して質問をした。

2人の質問は他の面々も気になっていたらしく、美鶴が口を開くのを一同は待つ。

「……いつだったか、夜の学校に侵入したのは。
懐かしいな、私は今あの時の事を思い出しているところだ」

「……いや、流石に学園都市へ侵入するのと夜の学校に侵入するのを同列に考えるのはどうかと思うぞ」

思わずずっこけそうになった真田明彦だが、体勢を立て直すとかなりズレたことを口走る美鶴に対して突っ込みを入れた。
しかし、流石にそんな無計画なはずもなく、美鶴は口角を上げながら答える。

「ふふ、冗談だ。一応先方には話を通してある。
学園都市に送った研究者達の様子を見る為にそちらに向かう、とな」

「「何だよかった……」」「わん！」

「……」

「どうしたの？アイギス」

美鶴の言葉に安堵する一同とコロマル。
しかし、そんな中で1人アイギスだけが思案顔をしていたので、山岸風香がアイギスの顔を見やる。

「いえ、先程の美鶴さんの言葉だと……桐条グループの長として学

園都市に行くのですよね？
なら私達は一体どんな立ち場として学園都市に入れるのかなーって思いまして」

「「あっ」」「わふ……」

そこのとこどうなのだ、と言う視線が美鶴に集まった。
すると先程と同様に口角を上げながらなのだが、若干の動揺が見え隠れしつつ言い放つ。

「……ぶ、部下と言う事にしよう」

「それ、かなり苦しいと思うんですけど……」

パッと思いつきましたみたいな事を言う美鶴に対して苦言を呈したのは、天田乾。
しかし、彼の言い分は最もだ。何せ桐条グループの人間とは思えないような普通の私服でリムジンの車内に居るのだから。

「ぐぬぬ……」

「？どうしたのアイギス」

するとまたしてもアイギスが思案顔をしながら呻くので、山岸は再びアイギスに声をかけた。

「いえ、強行突破も已む無しという事で、弾薬が早くも減りそうだと思うとちょっと今後が不安になりますね」

「「止めて！」」「わふ！」

それだけはあかん。学園都市を敵に回すのはあかん。
美鶴に対して総突っ込みを入れていた面々が一気にアイギスに対して総突っ込みを入れた。

え？駄目なの？と言った感じでキョトンとするアイギスだったが、

「……冗談ですよ」

「いや、今の絶対マジだったでしょ！？」

岳羽が代表してもう一度突っ込んだ。

・・・

木山春生の本職は研究職である。
色々あって今は木原数多と言う男が所有する研究所に半ば監禁状態で押し込まれているが、厳重に拘束されたり監視されたりはしておらず、所内ならば自由に動いていいと言うのでそれに従って彼女も自由に動いている。

一応この研究所にはシャワールームも仮眠室も、更には娯楽室としてビリヤードやら卓球やらゲームやらが出来ると言う何だか研究所と言うよりは娯楽施設だなと間違えそうな程過ごしやすい空間であった。

そんな中何か木原の弱みでも握れまいかと、自分の得意分野とする大脳生理学の研究をする傍らで度々木原の研究室を漁るという暴挙に出ているが、今のところ何も見つかっていない。

と言うよりは、この場では木原にとっても木山にとっても本当にどうでもいい（表側）の研究しかしていないらしく、火の無い所に煙は立たないと言うか、本当にこの研究所にはやましい部分が無いらしい。それ故に木原も木山に対して別に好きに動けばいいと言ったのだろう。

唯一気になる点が今日の夕方頃に、監視の目を付けた上で部屋から出ないように命令された事だ。

確実に裏があると思いながらもそれを調べる事は不可能な状況で、結局日が落ちた所でようやく解放された為、今日もまた所内をうろうろと徘徊している。

すると、ある異変を察知した。

（今日は誰も居残ってないな……）

ここ木原研究所では「アフターファイブは残らない」をモットーにしているのだが、それは木原数多のみで他の研究所員は律義に仕事をこなしてから帰る為、かなりの確率で誰かしら残っている。

しかし、今日に限っては人っ子一人いない。

仮眠室やらシャワールームも行ってみたのだが、誰もいないのだ。

確かに、居残りメンバーが少ない日は存在する。しかし、０と言う日は今まで一度も無かった。

そして今日の監視も相まって、それが酷く不自然なものに感じられる。

（一体何が……）

木山の疑問に答える者は誰もおらず、彼女は1人所内を彷徨う。

・・・

意識が暗転する。

目を開いているのか、はたまた閉じているのか。

落ちているのか飛んでいるのか。

倒れているのか立っているのか。

何も分からない。

しかし、深い暗闇だけが視界を捉えている事と、ぼんやりと自分が上条当麻であると言う事だけは分かった。

すると徐々に先程まで感じていた息苦しさは無くなり、何だか天に召される時はこんな感じなのかとぼんやり思っていた。

（いやいや、天に召される時はこんな感じって……）

それってまさに今なのではとか自分で突っ込みを入れられる辺り、本当に自分は死ぬ直前なのか？とか考えてしまうものの、やはり先程受けた謎の攻撃で息が出来なくなったと言う記憶がある所を見ると――――

そこまで考えた所で暗闇が一気に晴れる。

「ふっふ。ようこそ、ベルベットルームへ。お久しぶりでございますなあ」

するとそこはいつか見た車の中で、目の前にはいつか見た鼻の長いおじいさんと、いつかみた幸薄そうな金髪美人。

そして、

「おーっす」

「何でテメーがここにいるんだよ?」

「まあ、ちょっとな」

上条当麻の影が、金髪美人・マーガレットの隣で紅茶をすすっていた。

以前も意識を飛ばされた時にここに来た事があったが、あれ以降この場に来る事は無かった。

いや、そもそも意識を飛ばされるような事態に陥る事が無かったからなのか、はたまた何か別の事情でもあるのか。

何にせよ「客人」でない上条が、またしてもこの場に呼ばれた。

それにはきっと何か意味があるのだろう。

本能的に何かあると察知した上条は、改めてイゴールの方を向く。

「いやはや、本来は『今』お呼びする事は無かったはずだったのですが、

こちらの方がどうしてもとの事ですので、こうして再びお呼び立てた次第でございます」

「ま、そーいうこと。で、どうだった?今回の敵は強かったか?」

「強いも何も……」

何もさせてもらえなかった。
訳もわからずここに来た。

そうとしか言えない。

ポツポツと語り出す上条を、影は楽しそうに眺める。

「まあ何て言うか……完敗？」

「なっさけねーなー。少し位どんな力か見定めてからこっち来いよなー」

「うるせえよ！」

何だか双子の兄弟のやり取りの様だ。
そんな2人のやり取りを、イゴールもまた楽しそうに眺めていた。
マーガレットは上条の影が飲み干した紅茶に注ぎ足して、更に別のカップに紅茶を入れて上条に勧める。

「あ、ども」

上条はそれを受け取るとゆっくりと紅茶を口にした。

「まあ良いや。何にせよ、おめーがあいつに勝つには、『コレ』が無いと駄目だろ？」

上条の影は左手でカップを掴みながらも空いた右手をプラプラと

揺らす。

「そりゃあ異能に対しては『ソレ』が合った方がありがたいけど……」

「オッケーオッケー。本当はそこのおっさん風に言えば『命のこたえ』を見つけたらってつもりだったけどあれだ、緊急事態って奴だな」

「は？」

どういう事だ、と上条が尋ねる前に、上条の影は紅茶を一気に飲み干して続ける。

「俺を屈服させろって言ってんだよ、その為の場を借りる為にこいつらの所に来た」

「ふっふ、私どもからは特に用があった訳ではございませんが、思う存分動ける場所をお貸ししろとの事でしたので……こちらのマーガレットが御用意致します」

「そう言う訳だから、着いてきて頂戴」

今まで紅茶を淹れる以外には置物の様に口を閉ざしていたマーガレットだが、ポツリとつぶやくように口を開くと、腰を上げ車の扉を開いて外へと出て行った。それに追従して上条の影も出て行く。

訳もわからないうちに話が進んで行く為、首をかしげながら上条もまた流されるようにして車内から出て行った。

そして一人、残されたイゴールはどこから取り出したのか、1枚のタロットカードを眺めている。

以前一方通行に占った時の様に、1枚のカードを選び出したのだ。その対象は、今回は上条当麻である。

イゴールの手に握られたカード。

そこには左手に天秤を、右手に剣を持った女神が描かれていた。

「正義の正位置……相反する二つの力の調和……

ふっふ……彼はお客人ではあられませんが、やはり面白い……

いずれ、彼もまた『命のこたえ』に辿り着けるやもしれませんな」

「しかし、それと同時に一歩間違えるとその均衡は一気に崩れさる……

さて、彼らは無事均衡を保つ事は出来るのでしょうか」

イゴールの独り言は、彼以外に誰もいない車内に響き渡るだけだった。

・・・

一方通行は暗闇の中に突如として現れた。

先程まで割と明るい場所に居た為に、目が慣れない。

ゆっくりと目を慣らしながら、辺りを見やるとどうやら何処かの研究所内の様だ。

何か機材のようなものがずらりと並んでおり、自身の背後には巨大なモニター。恐らくここから置き去りの子供達は放り込まれたのだろう。

更に、この場は無菌室の様に厳重に閉め切られた空間のように見受けられた。

（木原の野郎が居ないにせよ……猟犬部隊のクソ共が居る可能性は高い）

ならば、何かしら対策を講じてくるはずだ。

何せこちらは腐っても超能力者で、相手はプロといえども無能力者の大人。

普通の武器を普通に扱っても勝てるはずが無い。

（キャパシティダウンやらＡＩＭジャマーは当然として、他に何かあンのかァ？）

能力者の力を削る物としてはそれらが有効だろうが、そのどちらもあらかじめ存在を予測しておけば対策するのは易いものだ。

とはいえ、そんなことを思えるのは学園都市第一位としての力があるからなのだが。

（とりあえず、ココが何処なのか、それからだなァ）

動かない事には始まらない。

一方通行は暗い室内から出るべく、目を凝らして出口を探すのだった。

# そのはちじゅう　えくすとらすてーじはとつぜんに（後書き）

サヨナラ8月

# そのはちじゅういち　かくれんぼ（前書き）

俺は風邪の子元気無い子

## そのはちじゅういち　かくれんぼ

暗闇の中。
一方通行は室内から廊下へと出た。

廊下を照らす淡い蛍光灯が一方通行の視界を明るくするが、急激に明るくなった事で目がはっきりするのに少しだけ時間がかかる。
ようやくはっきりとし始めた目を良く凝らしながら前を見ると、壁。
両サイドに道が広がっており、奥まで歩くのにはかなりの距離があるようで、相当にデカい研究所だと言う事が見て取れる。
まるで研究所と言うよりどこかの企業のビルの中、と言った内装をしているその場から、一方通行は足を踏みだした。

（とりあえず、近くに誰かが居る感じはねェな……）

きょろきょろとあたりを見回しながら、右か左か、どちらから行ってみるか考える。

（まァ、ンなもンどっちでもイイか、どォせここが何処かすらわかンねェンだし）

とりあえず右で。と、アバウトに決めた一方通行は、再び歩き始めた。

・・・

「どういう事だ？」

猟犬部隊の1人がナンシーの提案した作戦に首をかしげる。
と言うのも、今現在猟犬部隊はアンチスキルの格好をしているのだが、名目上は研究所に潜伏していると思われるテロリストの捜索と言う事なので、なるべく戦闘は避け目標を捕捉する事だけに集中するべき、と提案したからだ。
ナンシーはだらんとしてやる気なさげに自身が潜伏している待合室のソファーに座りこみ、とてもじゃないがこれから任務を行う姿には見えない。
ナンシーの同僚は、彼女の考えが読めずに首をかしげている。

ここで、一方通行がこうして猟犬部隊に狙われているのは、彼が打ち止めを保護しているからだ。

その為、打ち止めを捕獲するにあたってその障害になり得る一方通行は出来れば排除したいところ、と言うのがお上の決定である。
とはいえ、最低限時間稼ぎが出来ればそれで良い為、必ずしも排除をする必要はない。

本気で一方通行を殺害するなら、このように大々的に部隊を動かすよりも、普段の日常の中で一方通行が本領を発揮する前に暗殺する、と言った方法を取った方が人材的にも金銭的のも楽なものである。
そう言った事情もある為、木原数多は猟犬部隊に対して「時間稼ぎ30分もしくは撃破」と言う条件で任務を与えたのだ。

確かに、今後も障害になり得る一方通行は、今撃破した方がいいのだろう。しかし、

「手負いとはいえ、反射を稼働させた状態の一方通行を打倒できる人間は限られているわ」

例えば、木原数多。
例えば……ここでもうナンシーが挙げられる人物は居なくなった。
ナンシーは嗅覚センサーをゆらゆらと揺らしながら、事もなげに続ける。

「あの人は私らに何も期待していない」

木原は、猟犬部隊に何も期待していない。
失敗したら殺すし、成功したら引き続き使い潰す。
それが当たり前で、従前から十全に当然のことで。

「そんなこたぁここに居る全員が知ってるっての」

何を急に、と言った表情でナンシーの同僚は拳銃に弾を込めながら呆れた様子で突っ込みを入れた。

「ま、有り体に言えばどうせ死ぬなら、なるべく楽な道を進みたいわよねって話よ。
何が楽しくて超能力者何かと戦わなきゃならんのさ」

ナンシーに宿っている感情、それは諦念。
自分がクズである事はとうの昔に知っているし、自分が無様に死ぬと言うのも暗部に落ちた瞬間に理解している。
木原数多と言う男の下についた時点で、明日死ぬかもしれないし今すぐ死ぬかもしれないし、何にせよ長生き等望めるはずもない。
とはいえ自殺しようと言う気にもならないナンシーは、どうせ死ぬなら困難はなるべく避けたい、そのように考えて今までの任務も気を抜いて行ってきていた。

今回も、例え相手が学園都市最強といえどもその精神は変わらない。
いつも通り楽な道を選び、任務に失敗したらあっけなく死んでしまおう。
そして「時間稼ぎか撃破のどちらか」と言うのなら、迷わず時間稼ぎを選ぼう。
と言っても、何も無い状態で時間稼ぎと撃破を比較したら、そんなん無能力者のナンシーからしたら五十歩百歩で縊り殺されるのがオチだろう。

しかし、今回は違う。

作戦の為の装備と場所は、既にそこにあるのだから。

「ここが『表』の研究しかしてないってのと、木原の名前に宿ったブランド。
そして私らの格好を考えたら、わざわざ反射を貫く方法考える必要も無いって事よ」

嗅覚センサーは、相手の大まかな位置を知らせる事は出来るものの、はっきりと何処に居るのかまでは分からない。
何せ匂いを追う為だけの機械なのだから、そこに地図などはインプットされていないのだから。
そんな訳で、この研究所内に一方通行が居る事は分かっている為、一先ず嗅覚センサーは用無しである。

ナンシーはスッと立ち上がると嗅覚センサーを腰に差し、軽くストレッチをしながら床に放置していた装備品を拾い上げた。

「どっからどうやってこの場にやって来たかは知らないけど……」

彼女はニヤリと意地悪な笑みを浮かべながら、呟く。

「何にも情報すら得られないまま時間をつぶしてしまえば良いのよ、主に私の為に」

・・・

テレビの中から直接木原が居たと思われる拠点を叩くべくクマの力を借り、何処かの研究所へと降りたった。

まず一方通行は自身が何処に居るのか調べる為に所内を動き回る事にしたのだが……。

（うげっ、蜘蛛の巣張ってやがる……反射出来ねェのがなァ……）

今現在の一方通行の所在地。

それは通風口の中。

研究所の中でもかなりの広さを誇るこの研究所は通風口も人が通れるくらいの大きさで、隠れるには持って来いだろう。

いや、そんな話はさておき、何故隠れざるを得ないのか。

（なンだってアンチスキルがここに居るンだよ……！）

アンチスキル（ホントは猟犬部隊）が所内を探索して回っているのだ。

こちらには気付いていなさそうだったが、一方通行が先にその姿を発見できたのは不幸中の幸いだと言えよう。

しかし、彼らの武装はアンチスキルに模しているだけであり、本物ではない。

それ故に黄泉川愛穂などの本職ならば遠目に見ても気付けただろうし、一方通行も間近でよく見れば分かったはずだ。

――それがアンチスキルの真似事をしているナニかだ、と言う事が。

しかし、ここは敵の懐で、そんな場所にアンチスキルの姿を見ればまずは身を隠すことを考えてしまうのも無理は無い。

そう言う意味ではやはり一方通行は不幸だったと言う事だろうか。

（本物かどォかはわからねェが……偽物と見極められるまでは手を出せそォにねェな……）

一方通行は肘を立てながらほふく前進で進んでいる為、胸の傷に触れて血流操作を行う事が出来ない。

その為、今は反射を切って通風口の中を這って進んでいる。一定の距離を行くたびに通風口の出入口が見える為、そこから辺りを見渡して。

何度かそれを繰り返したところで、一方通行は異変に気付いた。

（アンチスキルしか居ねェ……）

今現在、この建物で見つけた人間はアンチスキルしか居なかった。

はっきり言って、何かあったとしか思えない。

（待て待て、ここは木原の手が加わってる可能性大な場所だ、アンチスキルが踏み込んでくるようなヘマをあのクソ野郎がするかァ？）

先程まで頭に血がのぼっていたのか、考えが巡ってなかったがようやく落ち着いてきた。
まず、何故アンチスキルがこの場に居るのか。
アンチスキルの任務、それは街の治安維持。
（ってこたァ犯罪者がこの中に居るってことだァ）
犯罪者。
（一番怪しいのって、俺だよなァ）
不法侵入の一方通行。
ならば彼らの任務は、研究所に侵入した一方通行を逮捕する事だろうか。
何故既にいるのかと言うのは、あらかじめアンチスキルを動かすように手配をしていた等が考えられる。
一方通行は、過程は違うが結果として正しい結論を導き出した。
そして一方通行の思考は続く。
（だとしたら、木原の目的は俺を潰すンじゃなく、時間稼ぎでこの場に縛りつけるってことかァ……？）
頭に血がのぼっていた時は、立ちはだかるモノ全てを撃破して進む位のつもりだったが、こうして冷静になってみると馬鹿みたいである。
一方通行も、妹達も、打ち止めもここで終わりではない。

これからも学園都市で生きて行くと言うのに、この程度の事で学園都市と敵対してどうするのだろうか。

そこまで考えると猟犬部隊も潰す必要はないのではと思う。

どうせ替えの人材（クズ）はいくらでもいるはずで、あれらを消したところで何の意味も無い。

それどころか無駄に戦力を削いで、「じゃあ削いだ戦力の分働け」等と言われたらたまったものではない。

まず第一に何としても打ち止めの命を救う事。

そして余裕があるのなら、木原数多を殺す。

（まァ、あのクソッタレも有能だ。消して困るのはやっぱ学園都市じゃねェか……）

とはいえ、飽くまでも所詮は1人。

その程度なら膨大な要求をしてこられるはずもない。

（ハッ、結局助ける過程でアイツは殺す事になりそうだけどなァ……）

一先ずこの場を相手に見つからずに抜け出すとしよう。

結局何一つ得られてねェじゃねェか、と自嘲しながら一方通行は蜘蛛の巣を払ってほふく前進を続けた。

・・・

『こちらクリス、監視カメラからターゲットは発見できない。

恐らく予定通り通風口を移動中と見られる、オーバー』

『りょーかーい。それじゃクリスは引き続きカメラから所内を探索、私を含めたその他は予定通りのポイントで待機。
今回の作戦はターゲットをこの場に釘付けにする事だから、適当にアンチスキルのフリをして時間稼いで頂戴な、おーばー』

『『了解』』

必要な事だけ伝えると、ナンシーは無線を切った。
状況を開始してから１０分が経過して、交戦は０。依然どちらも被害は無し。
この時点で一方通行がアンチスキルと言うか、表側の人間に手出しはしない人種であると言う事は確実となった。
流石にこちらが偽物だとバレれば命も無いだろうが、その前に先手は打てる。

アンチスキルとして動く理由を先に一方通行に教えるのだ。
それと同時に、この場所がどういった場所なのか、知らしめる。

木原数多は裏の世界の人間であるが、何も普段からずっと裏側に居る訳ではない。
表としての立ち位置もあり、それを作っているのがこの場所である。
すなわちこんな所で殺し等働けば、表側の人間を表立って敵に回す事になるのだ。
こうなってしまえば一方通行の逃げ場がなくなってしまうだろう。

（ま、後２０分、適度に時間つぶしてから外に出してあげればいっか）

等とナンシーはぼんやりと気楽に思っていた。

しかし、そこに小さなイレギュラーが介入する。

『こちらクリス。監視カメラに人影、恐らく木山春生と思われる。オーバー』

『うげ、そう言えば木原さん、科学者1人ここに軟禁してるみたいな事言ってたよねー……。

その地点から一番近いのは誰？そいつに木山と接触させるから』

『ナンシーだな』

『げっ面倒くさ……了解、変に動かれて邪魔されても困るから、部屋に戻ってもらう事にするわ、おーばー』

『了解』

ブツリ、と無線が切れる音と同時に、ナンシーは通風口の見える潜伏ポイントから移動を始めた。

・・・

「あ、それポン」

「オイオイ、またかよ畜生。どんだけポンすんだよ、ポンポンとポンすんなよ」

垣根提督は対面の少年―３６０度にプラグが挿してあり無数のケーブルを腰の機械に繋げている、土星の輪のように頭全体を覆うゴ

ーグルが特徴である少年に対して苦言を呈した。

「速攻で上がるのが僕のやり口だよ。何事も早い方が良い」

「その理論だとベッドの上じゃ1人先にイクんだろうな？」

「……一応、女子が居る中でその発言はどうかと思うぞ」

ゴーグルの少年の早上がり安上がりのお陰で何度も良い手が潰されて、鬱憤がたまったのだろう、垣根は冗談交じりに下ネタを吐くのだが、下家に座る傭兵の様な装備をした短髪の男、砂皿緻密はそんな垣根を諫める。

「こいつを女の子扱いしてくれる奴がまだいたとは……お兄さん嬉しい」

「……黙って聞いてれば、言ってくれるじゃない。あんまりふざけた事言ってると、ムキムキのそっち系な男の人との『距離』を『ゼロ』にするわよ？」

「「すみませんでした」」

そして上家に座る少女は、舐めた扱いをしてくれた一同に対して（主に垣根のせいだが）ギロリと人睨みすると、3人は平伏した。

何せ彼女の能力は心の距離を操るもの。

その気になればノンケをガチにすることも、逆にする事も出来るのだから。

とはいえ、彼女よりも上位のレベルの垣根に効くかは怪しいものだが、そこはノリと言うものだ。

彼らは『スクール』と言う名の暗部組織に所属しており、今日は任務のはずだったのだが。

「……しかし、学園都市に呼ばれて何をするかと思えば、麻雀とは……

俺の値段はそんなに安いものだったか？」

「いやいや、紹介料だけで７０万ってとんでもねえ額だっての。俺だってお前の初仕事をこんなんになっちまうとは思ってなかったわ。

まぁ、こーして麻雀牌いじってるだけで金もらえるなんて、なんて楽なお仕事でしょ、って気楽に受け止めてくれや」

垣根はヘラヘラと笑いながら、不要牌を不用心に切った。

それを見たゴーグルの少年は自身の疑問を吐露するついでに、上がる。

「……ていうかさ、『隠れ家』で待機っていつも通りじゃん。どゆこと？あ、それロン。白のみ」

「げっ……まあ大した手も入ってなかったから良いけどよ……」

やってらんねー、と自身の牌を閉じた垣根に続いて、何事も無かったかのように砂皿も牌を裏返した。

そんな中でプルプルと震え、何度もゴーグルの少年に上がりを阻止された事に怒り心頭したのか、ドレスの少女は頬を膨らませながら文句を言う。

「私トイトイと三色同刻だったんだけど！？」

「……上がれなければどうという事はない」

彼女の文句を一刀両断する、砂皿。
しかし彼自身今日に入ってまだ一度も上がってない。
だと言うのに何も気にした様子も無く牌の山を崩して行く。

「とか言う砂皿さんよぉ、アンタ今日一回もあがってねーじゃん。
その代わり放銃もしてないけどさ」

「……む」

「とか言う垣根さんは僕から何回上がられたのさ？
大物狙いか何か知らないけど、狙い撃ちさ、そんなのは（↑？）」

「……良いぜゴーグル野郎、てめーが何度も俺から上がれるってんなら、まずはそのふざけた常識ぶち壊す」

そう。

「隠れ家で待機してろ」と言われて、こうしてダラダラと待機しているのだ。
ついでに『アイテム』によって潰されたスナイパーの代わりとの顔合わせも行った。
しかし、顔合わせに何時間もかかる訳も無く、上からの指示が来るまでどうしようか話し合う事にした。

そうして始まったのが、麻雀。

隠れ家の中でじゃらじゃらと麻雀牌がぶつかり合う音が響き渡る。
ここは雀荘では無いので、自動の麻雀卓は置いてない。

少し早目のこたつに麻雀用のゴムマットを乗っけただけの簡易的なものだ。

ドレスの少女はすっかり白熱した様子で、メラメラとゴーグルの少年に対して対抗意識を燃やしていた。

「見てなさいよね……その早上がりが、巨大な「ツキ」の偏りを生むみたいな事を燃牌って漫画が言ってたんだから……！」

「あ、それ読んだ読んだ。４巻だか5巻だっけ？面白かったよねー。でも実際にそんな事が起きてないから今の状況じゃない？」

て言うか、あの漫画のは自動卓だしね。とゴーグルの少年。

「ぐぬぬ……」

そんな突っ込みに対して、ドレスの少女は何も言い返せずに呻いた。

しかし、垣根がドレスの少女をたしなめながら、

「まあまあ、落ちつけよ。あのゴーグルに俺達の点棒剣山のように突き刺してやろうぜ、勿論麻雀でな」

「え？それって僕に点棒献上してくれるってこと？しまったなー、お金かければよかったよ」

「……言ったなクソったれ、金賭けるぞデカピンくれー行っとくか？」

「乗ったわ！」

「僕は構わないよ」

「……問題ない」

一応、この場に待機しておくと言うのも任務の一つなのだが、そんな事は頭の隅っこに追いやって、全力で麻雀を始めるスクールのメンバーだった。

・・・

「ヘイヘイヘイテメェそれでも心にソウル刻んだブラザーなのかよ!?」

「抜かせ短足!!お前程度の炎じゃちっともたぎらねぇんだよ!!」

「だったら……燃やしてやるよ!!テメェのソウルをよ!!」

「御託は良いからかかってきな!!」

「「うおおお!!!!」」

アフロの男とロン毛の男が荒野で向かい合って、決闘をしている。互いが互いに違った信念を持ち、それがぶつかり合ったからだ。最早この戦いを止められるものは、ただ1人。

「もう止めて!!」

「「その声は、キャサリン!!」」

「もう、戦わなくても良いのよ!?どうして血を流すことでしか語りあえないの……?」

「そんなもん、決まってらあ……」

「そうさ、最早生まれる前からの運命ってとこだな……」

「「俺の中の魂が、信念を貫けと叫んでいるんだ」」

「トム……ダニー……なら私はもう何も言わないわ。でも、これだ

けは言わせて。
……2人とも、無事で戻ってきて頂戴」
「「……当然さ！！」」

「……絹旗ァ、いつまで続くの？この茶番」

絹旗最愛が借りてきた映画の数々を見せられて、辟易した表情で絹旗に尋ねるは麦野沈利。

アイテムに課せられた任務、それは「隠れ家にて待機する事」。

最初それを言われた時、意味が分からずに電話の主と口論をしたものだったが、電話の主はこいつときたらこいつときたらと捲し立てて一方的に電話を切った。

何が恥ずかしいって、浜面仕上に対して、「こっからはR指定だ」的なこと言ってかっこつけたのに、任務の内容が待機だったことだ。憤死する武将の気持ちを垣間見た。

結局良くわからないが、隠れ家で待機する事にしたアイテムだったのだが、絹旗がウキウキと映画を用意していたので待機で暇な麦野やフレンダ＝セイヴェルン、滝壺理后もそれに便乗する事にした。

しかし、

「ちょっと今いいところなので、少し超静かにしてもらっていいですか？」

「……分かったよ」

はっきり言って、詰まらない。
何が面白いのかさっぱりなのだが、麦野はそれでも根気よく映画を見続けた。
そんな中で、フレンダと滝壺は。

「「ｚｚｚ」」

寝ていた。
それはもう気持ちよさそうに。

（私も寝たいんだけど……）

この待機と言う任務。
任務と言うからには何か裏があるのだろう。
いざ何かあった時、動けないのはマズいはずだ。

「行くぜ！！燃えるソウルハンド！！」
「させるか！！凍てつくコールドソウル！！！」

最初はカウボーイとか、西部劇的な感じだったのに、いつの間にか超能力バトルみたいな特撮物に変貌を遂げていた。
全く理解できない。

（……暇つぶせるモン、そのうち買ってこよう）

映画に釘付けになる絹旗に、肩を寄せ合って眠っているフレンダと滝壺。
そんな3人に囲まれた麦野は、とりあえず4人だし麻雀か？とか

そんなことを考えていた。

## そのはちじゅういち　かくれんぼ（後書き）

話は全く進んでおりません

## そのはちじゅうに　げんきがあればなんでもできる（前書き）

突拍子もない

**そのはちじゅうに　げんきがあればなんでもできる**

「さて、こちらの扉へどうぞ」

本来は、私が闘う為の場所なんだけど。

と、マーガレットは面倒くさそうに2人に部屋へ入るよう促した。

「ここは……」

そこは無数の扉が宇宙の中を漂っている、と表現したら良いのだろうか。

上を見ても下を見ても、左を見ても右を見ても。

そこはキラキラと星が3人を照らしていた。

上条当麻はそんな幻想的な風景に見入るが、そう言えば地面はどうなっているんだと思い、ぺたぺたと地面を触る。

下も星空だったが、しっかりと足を踏みしめる事が出来ていた。

透明な何かが辺りを覆っているのか、それとも周りの星は作りものなのか。

そんな疑問を浮かべるが、今そんな話はどうでもよかった。

「ガッ！？」

唐突に、後頭部から衝撃を受けたからだ。それによって地べたを這う上条だが、体勢を立て直して衝撃を受けた方向を振り向くと、

「おいおいどーしたァ！？この俺をどうにかしてお前ん中にもどせ

ねーと、あっちにゃ帰れねーし何にも助けらんねーよ！！」

それの正体は、上条の影。

思い切り蹴り上げた足をそのままに、戦闘は既に始まっていると、笑った。

「ちっくしょ……！オケアノス、ブフーラァ！！」

上条はちょっと涙目で頭をさすりながら召喚器を取り出すと、オケアノスを顕現させる。

それを見た上条の影は大仰に両手を広げながら、上条の攻撃を迎え入れるべく攻撃を受け入れた。

「ハッハァ！！良いぞ、かかってこいやぁ！！今後良い関係を築く為にも、殴り合いで語りあいってのも悪くねぇだろ！！？

時間はたっぷりあんだからよ！！心配すんな、こっちとあっちじゃ時間の流れが違うから、あっちじゃまだ1秒もたってねーだろうよ！！」

それをあっさりと影が持つ幻想殺しで打ち消すと、真っすぐ上条へと向かって行く。

「そんなもん俺ん中帰ってきたらいくらでも出来るだろ！？」

影は右のハイキック。上条はそれをしゃがんで避けると、影の軸足である左足を屈んだ状態で蹴り払い、体勢を崩しにかかる。

しかし、影は余裕の笑みを浮かべつつも、蹴りの勢いで横に回転しながらその場で軽くジャンプし上条の足を避けた。

「たしかにそれもそう……おっと、そう言う誘導尋問的なもんはお

断りってなあ！！」

そして空中で1回転すると、影はその勢いを利用し宙に浮いた状態で回し蹴りを放つ。

しゃがんだ状態で避ける事の出来そうにないと、上条は両腕でガードしたものの、回し蹴りの威力によって思い切り地を転がった。

「オケアノス！ブフーラだ！！」

しかし、タダでやられる上条ではなく、影の追撃をかわす為に転がりながらも器用に召喚器を使い、オケアノスに攻撃させる。

面ではなく、点での攻撃。それも右手だけでは止めきれない程の量を伴って。

大量のツララが、影を襲う。

明らかに一つ一つが必殺になりうる威力を持っている。

しかし、これは上条に殺意があった訳ではなく、その位しないと自身の影には勝てないと判断したからだ。

そしてその考えは正しかったらしい。

「……イヤイヤ、ありえねーだろ、右手だけでそんなとめられるわけねーだろ！？

これでも、かなりの量を飛ばしたつもりだったんだけど……」

体勢を崩しながらの攻撃だった為、影が何をしたかは分からなかったが、確かに上条は影に向かって攻撃を放っていたはずだ。

それも大量のツララで、それこそ広い壁でも生み出さねば止めきれないだろうと、上条が考える程の。

しかし、何かを使って攻撃を止めたと言う痕跡は残されておらず、影の射線上だけぽっかりと空き、その周りの地面にツララが突き刺さっていた。
と言っても、下は星空にしか見えないので、ツララも宙に浮いているように見えるのだが。

・・・

「へえ、中々の威力を持ったブフーラね」

マーガレットは感心したように上条と影の戦いを眺めていた。
やはり、力を司る者としては強い力には興味が沸くのだろう。

影と初めて対面した時も軽く手合わせしたのだが、どう考えてもこの影は上条が勝てる相手では無い。
それ程に強敵だった、とマーガレットは思う。

（それでもここで勝たねば、これから一生勝つ事は無くなるわね）

有り体に言えば、自分に勝てない者が一体何に勝てようか、と言う事だろうか。
マーガレットは最初3人がこの場に入って来た扉にもたれかかりながら腕を組み、2人の戦いをゆったりと観戦し続ける。

・・・

「あっはっは、あぶねーだろこのやろー」

間延びした間抜けな声で、影は上条に対して文句を言う。

確かにあんな攻撃を受ければ誰だって文句は言いたくなるだろう。

「何言ってんだよ、この攻撃すらノーダメージの癖によく言うぜ…」

「いやいや、まあまあ焦ったぜ?流石に『右手だけじゃ』止めらんねえよ」

「……そりゃどういう事だ?」

「前も言ったけどわかんねーだろうな、幻想殺しの本質は、今のお前じゃわかんねーよ。
よしんば俺がお前の中にもどっても。まーそのうち理解出来るようになるって」

やはり、何の事かわからない。
上条は影の言葉に首をかしげるが、それを待つ程影も甘くない。

「真っすぐ行ってぶっ飛ばす、右ストレートでぶっ飛ばす!!」

真っすぐと上条の元へ向かった影は、渾身の右ストレートを放った。
影の放つ何の変哲もない右ストレートを上条は左腕で止めたのだが、かなりの威力でビリビリと痺れさせられた。
それにより上条は少し表情を歪めるが、余った右手で影の右手を掴むと、

「……オケアノス、剛殺斬」

「おろ?」

ポカンとする影に対して何のためらいも無く、自身が持つ最大の物理攻撃を上条の影へと放った。

しかし、影は表情を切り替え、再び笑みを浮かべる。
その口から、何か短い単語が吐かれた瞬間に、オケアノスの剣が振り下ろされた。

・・・

木山春生は不気味に静まり返った研究所内を彷徨っていた。
人の気配を感じないこの異様な雰囲気に呑まれまいと、ギュッと手を握りしめ、辺りをきょろきょろと見渡す。
……人は居ないはずだ。気配を感じない、だというのに。

嫌な予感がする。
木山の素人ながらに研ぎ澄まされた神経は、その予感だけを感じ取った。
気配は感じないが、誰かいるのではないか？という確信めいた予兆。

そして、それはすぐさま現実として現れる。

木山が居る地点の１０ｍほど先に見える曲がり角から、１人の女が出てきてその場から木山に語りかけてきた。

「止まってくださーい、アンチスキルです。
只今この研究所はテロリストが潜伏している恐れがあるので、この場に居ては危険です。
あなたここの研究者さんですよね？」

「あ、ああそうだが……」

一応木山は表向きはこの研究所で働いているという設定である。
そんな訳で女のアンチスキルに対して曖昧に頷いたのだが、少しおかしい。
確かに、アンチスキルはかなりの手練も中にはいるはずだ。

しかし、ここまで鮮やかに気配を感じさせない人間が、アンチスキルに何人いるだろうか。

戦闘に関しては門外漢な木山ではあるが、この研究所に軟禁されている間は人目を避けて木原数多に関する情報を集めていたのだから、ある程度は人の気配を感じ取る事は出来るようになってきた。
とはいえ、意図的に気配を消している人間相手に、それを読みとることなどは出来ないのだが。

そんな木山だからこそ感じた違和感。

（目の前に居る人間は、本当にアンチスキルなのか？）

そこまで瞬間的に考えた木山は、とりあえずカマをかけてみる事にする。

「……私はこう見えて昔はやんちゃしててな」

「はい？」

「アンチスキルには結構世話になってるんだが、君は何処の支部の人間なんだ？

ひょっとしたら私の知っている人も近くに所属しているかもしれん」

木山はジッと女を見つめる。しかし、女には動揺は見られない。
女は自分にしか分からない程度に目を見開くと、続いて口も開いた。

「私はこの通り、第八十三支部でしがない下っ端をやらせていただいてますよ」

女は懐をごそごそとまさぐった後、警察手帳の様なアンチスキルとしての証明証を取りだした。
これは研究員達をこの場から離れさせる為にも使った偽造手帳なのだが、一般人に対してならほぼ確実に騙せるほどの精度である。
それを見た木山は納得したように一つ頷きながら、続ける。

「ほほう、これはすごい偶然だな。数多くあるアンチスキルの支部で、私が知ってる支部と一致するとは……
そこの部隊長に『黄泉川愛穂』って女性が居るんじゃないか？彼女には随分と世話になってね」

黄泉川愛穂とは、『幻想御手』の際に顔を合わせていたのだが、彼女は第七十三支部の所属だ。
これにどう反応するか、木山は表情一つ変えずに女の様子をうかがう。

「え？違いますよ、うちの隊長は『山笠』さんですけど、
どっか別の支部と勘違いしたんじゃないですか？」

当たり前のように返答する女からは、動揺の一つも見られない。

「そうか、そういえばそうだったな。黄泉川さんは第七十三支部だったか」

「そうですよ、そんな人聞いたことも無いです」

少し首をかしげながら言い放つ木山に対して、女は笑いかけながら答えた。

そして木山も、そんな女と同様に笑いながら答える。

「……おや、おかしいな？彼女は第七十三支部の部隊長なんだが、やる事為す事物凄く派手でな。部隊長全員を把握する事は出来なくとも、

彼女の名くらいは知っていないとおかしいぞ？」

両者の距離は、変わらず１０ｍ。

木山はジリジリと後ずさりしながらその距離を伸ばしつつ、女に対して質問する。

「そして何より、その装備、一見してアンチスキルに模してあるが、アンチスキルのそれでは無いな。

非殺傷を目的として改造された装備ではなく、本来の殺傷を目的とした非改造（ふつう）のライフルなのではないか？」

木山はもう一度、笑った。

「アンチスキルには、ずいぶんと世話になっていてな。装備の違いがわかる程度には」

「あーらら、バレちゃ仕方がねぇ。

とりあえず動かないでくださいね、ケツに挿れられる穴を増やしたくないでしょう？」

「……残念ながら、そのような関係を持った事など一度も無いよ。研究者とは孤独なものだ」

「……そいつは失礼しました」

瞬間、２人は動き出す。

木山は後ずさりそのままにバック走で勢いを付け身を翻し、女―ナンシーは笑みを浮かべながらライフルを構えつつ駆けだした。

・・・

「嘘、だろ……？」

剣を振り下ろしたはずだ。

自分の半身だとかそんな事情抜きに手加減なしで渾身の一撃を入れたはずなのに。

影が持つ幻想殺しも自身の右腕で動かせないように止めたはずなのに。

確実に、攻撃を当てることが出来る状況だったはずなのに。

故に上条当麻は驚愕を隠せずにいた。

この攻撃すら、止められたと言う事実に。

そして何より。

「何だってお前が……『ペルソナ』を出してんだよ……！？」

「あ？そりゃ防御するためだろ」

上条の知りたい内容はそんなことではない。それは影も分かってとぼけたのだろう。

オケアノスの剣を、影の背後から現れた天秤を持つ『女神』が止めたと言う事実について知りたかった。

「ユースティティア、ってんだ。法を司る女神様ってとこか？そしてお前のそれは、本来ミカエルが持つべき断罪の剣なんだけどな……」

何処を間違えてオケアノスが持ってんだか、と影は笑うが、何の事かさっぱり分からない。

何にせよ、幻想殺しを持つ影が、上条と同じくペルソナを扱っている。

力量差は、はっきりしていると言えよう。

「何かよくわかんねーが、やる事は変わんねえよな……お前を俺ん中に戻して、そんであっちに戻るだけだ！！オケアノス、ブフーラァ！！」

「だったら、力と覚悟をこの場で示してみろ！！ユースティティア、ジオンガ！！」

ペルソナは、すなわち心の力。

覚悟と、折れない心を持つ事が、自身のペルソナをより強くする。

オケアノスは、上条の強い思いに呼応するように力を発揮し、それを見た影はニヤリと笑いながらユースティティアに攻撃の指示を

出した。

・・・

木山春生は逃げる。

この研究所内は隅々まで歩きまわったので監視カメラの死角を縫って行くのは容易い。

ナンシーの追走を振り切ると、監視カメラにも気を回して見つからないように隠れる事にした。

とはいえ、逆に死角を縫って捜索されればすぐに見つかるだろう。

どう考えても、敵は単独では無く複数で行動しているはずだ。

そして何より、木山自身が戦闘を得意としない。

何度も言うようだが、彼女は素人なのだ。

確かに戦闘は経験した事はあるものの、訓練していた訳でも無い。

（それでも上手く撒けたのは、見逃してもらったと言う事だろうか……？）

そんな事があるのだろうか。

木山は監視カメラに気を使いながらも、思考の渦に呑まれていく。

一方で、ナンシーは動くのが面倒なのか、本来のポイントに戻っていた。

『あー、こちらナンシー。目標喪失。多分監視カメラにも映ってないから

所内の見取図と比較してカメラの死角を挙げてってー。多分そこに隠れてるから』

『了解……ナンシー、お前のやる気の無さは前から知ってたが……もう少し本気出さないか？俺はまだ死にたくねーんだけど』

『はいはい、それじゃ私の分まで頑張って頂戴』

ナンシーの面倒くさそうな声に、監視カメラを監視しているクリスが苦言を漏らした。

適当な返事をして無線を切ると、ナンシーはそんなクリスの言葉に嘲るように笑う。

「なーに言ってんのよ、私らみたいなクズが生きたいなんて望み叶えられる訳ないでしょー。

それを叶えるには、クズなりに有能になって周りの人間出し抜く位出来ないとねー」

こんな肥溜めで燻ってる時点で、たかが知れてるっつーの。

ナンシーの独白……もとい毒吐くは小さく所内に響き渡った。

・・・

「……それで、こんな狭い所で何をしようって言うのだ？」

「……とりあえず、お前の知ってる事を話せ。

俺ァお前の教え子の居場所を知ってる。それと引き換えだァ」

その言葉に木山春生は息を呑んだ。

一先ず敵ではなさそうだ、と考え木山も自身の事情を話す事にす

る。

２人は、通風口の中でうつぶせになって向き合っていた。

と言うのも、木山の姿を一方通行が通風口から発見し、話を聞く為に通風口にぶら下がりながらＵＦＯキャッチャーのように木山を捕まえて通風口に引きずり込んだからだ。

何だかシュールな光景ではあるが、２人は真面目も大真面目で話をしている。

一方通行は木山がここに居る理由や、ここが何処なのか等の情報を仕入れると、溜息をついた。

「すると何か？あのアンチスキルは偽物っつゥ事は……」

十中八九猟犬部隊の連中だ。

それを知った一方通行は更に深く溜息をつく。

「時間稼ぎ確定だなァ……そして何故時間を稼ぐ必要があるのかってのを考えっと……」

木原数多が打ち止めを必要とする理由が思い浮かばない。

一方通行の心をへし折り、そして殺すつもりなのであれば、さっさと打ち止めを物言わぬ肉塊に変えて一方通行の下へ送りつければ良いはずだ。

それをしない理由は、目的はそんなことではないから。

（なら、目的はなンだ？）

こう考える事も出来る。
木原は自発的に行動をしているのではなく、誰かからの指示を受け、こうして動いている。

木原数多と言う男を動かせる存在となると、学園都市内に何人もいるとは思えない。

（こりゃ下手すると……統括理事会……いや学園都市そのものが、打ち止めを使って何かしようとしてるのかァ……？）

ギリッと歯ぎしりをすると、一方通行は口を開いた。

「まず、こっから先は常識が通じねェ事だけを理解してくれ」

「……？良くわからないが、とにかく君を信じれば良いのだな？」

「まァ、そォだな。それにお前が居ればあいつらも止める事が出来るだろォし」

「それはどういう……」

木山の言葉を待たずして、一方通行は通風口を降りた。
そして木山にも降りるように促す。
続いて、降りてきた木山を抱えると、一気に駆け出した。

目的地は、モニターのあった研究室。

最早人目は気にしなくて良い。
何せ相手はアンチスキルでは無いのだから、こちらを捕まえる権

限など無く。
そしてこちらが相手に手出しをしなければ、表側の人間が動く事は無い。

途中何人か猟犬部隊と思われる人間と遭遇したが、これを一切無視して突き進み、木山の言葉も無視して有無を言わさずモニターの中へと駆けこんだのだった。

・・・

『ハァ？一方通行が消えただぁ？』

木原数多は猟犬部隊からの報告を受け、もう一度確認を取る。

『ええ、文字通り消えました。場所は第三実験室です。後木山春生も同様です』

『くは！オーケーオーケー、取り逃がしたかと思って危うくおめーらを処分する命令を出すとこだったじゃねえか！！
そこで消えたんなら問題ねえ、てこたあアイツはケツまくってテレビん中に逃げたって訳だ！
殺しに日和って逃げだすたぁ情けねぇなあオイ！！』

木原は1人納得していたが、報告をしたナンシーは良くわかっていなかった。
何せ失敗したと思い、今日が命日だなー、と気楽に考えていたのに、何故か任務成功だと言われたのだから。

『よし、今そこの実験室に居るな？』

『はい』

『その室内の中央に、デケェモニターがあるだろ？それ粉々にぶっ壊してくれや』

『了解です』

ナンシーは終始木原の考えが読めなかったが、その疑問を質問にする事は無い。

余計な口をはさむ事自体が無駄な事であると理解しているからだ。

とりあえずモニター壊せば良いんだな、とライフルを構えながら無線を切った。

そして通信を終えた木原は、用済みの無線をその辺に放り、笑う。

「ったく馬鹿だねぇ、こっちはとっくに目的を捕まえてんのに、まだ必死こいて動きまわってやがる」

笑う木原の視線の先、そこには頭に何か機器を取りつけられた打ち止めの姿があった。

意識は無く、ピクリとも動かさない打ち止めだが、死んでいると言う訳では無く、確かに呼吸も心臓も働いている。

「ったく、こんな時間なんだからガキはオネムの時間だってのに、一方通行の野郎添い寝の一つもしてやれねえたぁ保護者失格だなオイ」

木原は1人自分の冗談に笑うと、キーボードを叩きパソコンの液晶を眺め始めた。

「虚数学区……ＡＩＭ拡散力場……そして……ペルソナ」

ブツブツと呟きながらも思考を回転させる。

いや、むしろこの呟きは無意識的なもので、思考に全てを注いでいる状態だろう。

それでもキーボードを叩く指の動きは止まらない。もはや身体に染みついた動きで慣れたものである、と言ったところか。

（『心』と言う自分だけの現実と演算によって事象を歪める超能力。対して、『心』によって直接現実を歪めるペルソナ……。

そして、現実の理に沿って現実を歪める魔術……）

（魔術と超能力は対を為す存在であるってのは分かったが、ペルソナと言う存在の立ち位置は……どちらかと言えば超能力寄りだよなァ……）

（いやむしろ、超能力をもっと広義的なものにしたのがペルソナと言えるか……？

だとすると、学園都市の超能力開発の目的は……イヤ、そりゃいくらなんでも突拍子なさすぎるな）

（……『召喚器』が無い場合、マヨナカテレビの中でしかペルソナを出せない。

マヨナカテレビとこちらの世界、その差はなんだ？）

そこまで思考を続けた所で、ふう、と息をついた。

知らない間に呼吸をしろと言う命令すら脳が行えない程に思考が集中していたのだろうか。

身体が限界に達し、酸素を求める事で一旦思考を中断した。

「マヨナカテレビに虚数学区。ヒューズ＝カザキリだったか、それにＡＩＭ拡散力場とペルソナ。
この辺の関連性をはっきりさせりゃ、色んな疑問が解決出来そうだよなぁ」

やはり人生はこうでなくてはならない。
分からない事を理解出来るようになる、それが気持ち良くて、研究職についた。

子供の時からそうだった。

どうして車は動くのか。
どうして物は下へ下へと落ちるのか。
どうして生き物は息をするのか。

日常の中で『どうして』と言う疑問はいくらでも浮かび上がっていた。
そしてそれを一つ一つ調べ上げ、理解する。

そんなことを繰り返しているうちにいつしか人の身体をもいじくるようになっていた。

少し前までは何故こうなるんだ、と言う事を考える事自体が少なくなっていたが、最近は違う。
魔術に超能力、そしてペルソナと、自身の理解を越えた何かがそこにはある。
木原はそれを確信したものの、理解には程遠いと痛感したが、そこには喜びしかなかった。

（アレイスターの野郎は、どんだけ俺より先に行ってんだぁ！？）

ワクワクが止まらない。と、木原は高らかに笑ってキーボードを叩き続けた。

## そのはちじゅうに　げんきがあればなんでもできる（後書き）

展開早いけど、ぶっちゃけ木山さんを保護するためだけにりょうけんぶたいとか動かしただけなのでちゃっちゃといきます。更新ペースはちゃっちゃといけてねーけど

# そのはちじゅうさん　かげときあいだ（前書き）

ご都合☆主義

## そのはちじゅうさん　かげときあいだ

最初は、上条当麻と影は基本的に殴り合いの肉弾戦を行っていた。たまに上条が隙をついてオケアノスによる攻撃も放ってはいたが。つまり、影は上条ともう一つ、オケアノスによる攻撃も視野に入れて立ち回らねばならない。

そんな中で上条は影に大きな隙を作り、オケアノスによる強力な一撃を入れたかに見えた。

しかし、それは影に更なる本気を出させる為の布石に過ぎなかったのだ。

「うらあああああああ！！！！」

影は咆哮と同時に上条へと向かって駆けあがる。

その背後には天秤を左手に持った『女神』が全身から雷を纏って、まるで御坂美琴が能力を放つ3秒前のような状態を見ているような佇まいをしていた。

それを見た上条はオケアノスを顕現させ、まず先にブフーラにてユースティティアに対する迎撃を行う。

しかし、オケアノスを出す為に使う召喚器。これが隙となるのだ。

上条は基本的に召喚器を持って戦っている。ちなみに召喚器はかなり丈夫なので乱暴に扱っても問題は無い。

と言うのもいちいち召喚器を取り出す暇も無いからなのだが、それでも召喚する瞬間はどうしても隙が出来てしまう。

上条と影による攻防は目まぐるしく何度も入れ替わっていたが、やはり上条がペルソナを召喚するのと影がペルソナを召喚するのではワンテンポ差がついてしまっていた。
その隙を突く事は簡単だが、上条にその隙を埋める方法を考えつかれてはたまったものではない。

隙を突く時は、そこで上条に大ダメージを与える。
そしてその隙を突く瞬間は、今。

影は笑いながら、上条が右のこめかみに召喚器を突きつけているのに対して、左のこめかみに向かってハイキックを放つ。
対する上条は思わずそれを回避するために首を下に曲げることで、辛くも影の足を避ける事に成功した。

しかし、

「あっ！？」

上条の頭上を通過した影の足は、上条の右手に持ったままの召喚器を弾き飛ばしていた。
からからと音を立てて弾かれた召喚器は、上条から１０ｍは離れてしまっただろうか。
取りに行くには隙が大きすぎる。

しかし、その一瞬の逡巡すら、大きな隙となっていて。

「あぐっ！！？」

召喚器の方を見やった上条の腹に、思い切り前蹴りを放つ影。

痛みによる叫び、と言うより思わず肺から息が漏れてしまったような音を出しながら、上条もまたゴロゴロと地に倒れ伏した。

「さぁて、いつまでもあんなオモチャに頼ってんじゃ……ねぇよ！！」

倒れ伏した上条に対して、影は。

――ボキリ。

「～～～ッ！！！」

鈍い音が鳴ると同時に、上条は自身の右腕を抱えて声にならないままに叫んだ。

それを見た影は、盛大に笑って嘲る。

「おいおい、まだ右腕がやられただけだろ？足は動くし左も動く。もうギブアップ何て言うんじゃねえだろうな？」

影は、いともたやすく上条の右腕を圧し折った。

普段から怪我の絶えない上条ではあったが、こうして骨がポッキリしてしまう事など初めての体験である。

いや、確かに三沢塾に行った際にポッキリどころかバッサリと斬り落とされた事はあったが、何かあそこまで行くと色々と吹っ切れてしまいアドレナリン全開だった為に痛みはあまり覚えていなかっ

た。

しかし、今回はあまりにあっけなく、あまりに当たり前のように折られた為に、すぐに現実を受け入れてしまい、それによって右腕から常に電気を流されているかのようなビリビリとした痛みが全身を駆け廻る。

「ぐっ、うぅ……！」

その痛みに耐えようと、残った左腕で自身の肩を抱き、歯を食いしばる上条だが、チラリと右腕を見やるとあらぬ方向に腕が曲がっており、新たに追加された関節部は真っ赤に腫れあがっていた。

追撃を入れないのは、影の余裕だろうか。

何にせよ、上条はまだ戦いを止めるつもりはない。

前方のヴェント。

彼女の目的が分からない以上、インデックスどころか学園都市の住人全員が危険の可能性もある。いや、既にアンチスキルは全滅してしまっているだろうか。

早く戦わねば、早く戻らねばと思い、何とか立ち上がろうとするものの、少し右腕が動くたびに鋭い痛みが上条を襲う。

（痛え……くっそ、動くたびにズキズキしやがる……）

しかし、ここで違和感が上条の脳裏をよぎった。

（何で、痛いんだ？）

（いや、腕折られりゃそりゃ痛ぇに決まってる）

（だが、それは現実の世界での話だ）

現実での世界。

上条は確かにヴェントによって意識を刈り取られた。

そして、イゴールの下へとやって来たはずだ。

ならばその世界が現実のはずは無い。

ここは夢の狭間。

（そんな場所なら……！！）

ここは心の世界。

（ペルソナくらい、召喚器に頼らなくても、出せてもいいだろ！？）

ここは信じる心が力となる世界。

とはいえ、それは『この世界』だけの話ではないのだが、上条はまだそこまでは気付かなかった。

だが、それでも十分だ。

それを見た影は、待ちくたびれたように呟く。

「やっと気付いたか……この場での戦い方ってのによ」

あっちでもそれが出来れば上等なのだが、凝り固まった常識と言

う物は中々覆す事は出来ない。
それは異世界だろうと変わらない。目の前の現実を受け入れたつもりでも、心のどこかで信じきれない事もあるのだ。

しかし、上条はここだけとはいえ、受け入れた。
そして心のままに、その言葉を口にする。

「ペ、ル、ソ、ナ……！！」

痛む腕に耐えながらの発声だった為にとぎれとぎれになったものの、その合言葉を口にする事によって発現する。

「オケアノス！！」

召喚器があらぬ所に転がったままに。
上条は何もこめかみにつきつける事無しに。
自発的に『死』を受け入れ、『恐怖する心』を受け入れた。

それにオケアノスも上条の望んだ力を以って応える。

「オケアノス、アムリタ」

上条が唱えると、以前吹寄制理に降り注いだ淡い光が、上条の右腕にも照らされる。
すると真っ赤に腫れあがりあり得ない方向に曲がっていた右腕は、いつもの真っすぐな状態へと戻った。
それを確認した上条は手を何度か握ると、影を見やる。

「わざわざ待っててくれるとか、ありがとな」

「悪役は正義の味方の準備が整うのを待つもんだろ？」

「それってお前負けフラグだろ……」

「バカか、そんなテレビみたいな事が現実にあってたまるか。
いつだって生き残るのは生きる意志の強え奴だ。そこに悪も糞もあるかよ」

「そうだな……はっ！つまりやっぱり俺が勝つってことじゃねえか！！」

「バーカ、言ってろ三下！！」

「へっ、そっちこそいつまでもえらそーにしてんなよ！！」

「ブン殴んぞテメェ！！！」

「そりゃこっちのセリフだ！！人の腕へし折りやがってえええええ！！」

第二ラウンドの、ゴングが心の中で鳴り響いた。

「オケアノス、ブフーラ！！」

「ユースティティア、ジオンガ！！」

再び、異能と異能がぶつかり合う。
今度は互いに隙は無い。

しかし、ペルソナ同士の戦いではある意味決着がつく事は無いだ

ろう。
何故なら、本質的には上条と影は同一人物なのだから。
それでも、今まで影が上条を上回り続けたのは、『心』に対する理解の深さの差から来るものだろう。
だがそのアドバンテージは、この場においてのみ、無に帰すこととなった。
上条もまた、本能的にそれへの理解を深めた為だ。
「駄目だな、やっぱ男なら夕陽を背後に殴り合いだわ」
「確かにこんな宇宙みたいな場所で殴り合うのは何か違うよなー」
「いや、俺ぁそう言うつもりで言ったんじゃねーっての!!」
影は相殺されたジオンガを見ると同時に上条の下へと駆ける。
しかし、上条も同じことを考えていたらしく、上条もまた影の下へと駆けて行った。
・・・
紫電と氷塊がぶつかり合い、氷塊に遮られた電は四方八方へ霧散していき、電撃を受けた氷塊は粉々に砕け散っていく。
紫電が辺りを駆け巡り、氷がつぶてとなって降り注いでいる中で、上条当麻と影はその中を無傷で潜り抜け、互いに肉薄する。
高ぶる心と研ぎ澄まされた神経が瞬間的に身体を動かしたのだろうか、上条と影は舞うように拳を突き合わせていた。
何度繰り返しただろうか。

互いが互いの拳を受け止め、まるで鍔迫り合いの様な状況になる中で、上条は影に笑いかける。

「なぁ……俺は今記憶をなくしちまってるけどさ……」

「あん？」

言葉を紡ぎながらも、上条は掴んだ影の手を離すと同時に影に掴まれた手も振り払うと、少しだけ後ろに下がり影の顎を蹴りあげる為か思い切り右足を振り上げる。

何だか不意討ちっぽいが、戦いの最中に動きを止める事は致命的になるかもしれない事は影もわかっているので、上条の言葉に返答しながらも軽く仰け反ってその足を回避した。

「ごめんな、お前の味わった苦しみも、わからなく……てっ！！」

とか言いつつ上げた右足を踵落としする。

謝る気があるのかと問いただしたいが、その言葉からは真摯な思いが込められていた。

それを聞いた影は少しだけ口角を上げるが、軽く踵落としをいなしつつ口を開く。

「はっ、別に謝罪が欲しくて『外』に出てきたわけじゃねえっての！」

「……それ、どーいう……」

右足をいなされた事で若干体勢を崩しながらも地面に踵を叩きつける。

しかし崩れた身体を立て直す隙を、影は逃さず突きながら意地悪そうな笑みを浮かべた。

「おしえ……ねぇっ！！」

「うおっ！？……だけどさ、『死』と向き合って、『死』を体感して、分かったんだ」

影の放った右ストレート、それをスウェーバックで衝撃を和らげると、顔を回した方向に身体も回すことで勢いを付け、後ろ回し蹴りを影の側頭部目掛けて放った。

「何を分かったって！？」

上条の足は影に届いたかに見えた。

しかし、足の動きに合わせて影も側転した為に、上条の後ろ回し蹴りは空振りする。

そして影は一端距離を取ると、攻撃の手を止めた。続いて、それを見た上条もファイティングポーズを構えつつも警戒を解く。

「俺が、お前に『死』への恐怖を押しつけていたって事だよ」

上条当麻が記憶を失って、そして上条の影と別れるまでに、命を賭して戦った事は吸血殺し騒動の時しかなかったはずだ。

しかし、頭で覚えていなくても、心が覚えていた。

『死』の恐怖を影に押しつけながらも、それを見て見ぬふりをしていた自分が居たと言う事を。

そして、それに気付いたのが、召喚器に組み込まれた『黄昏の羽

根』を通して『死』と向き合った時。

「人を助けて、怪我して。
俺が怪我するだけで事が済むならそれでいいと思ってたんだけどな……
それじゃ駄目だって事だよな……「誰もが笑って終われるハッピーエンド」、
そんな事考えてたけどさ、俺自身もそこに含まれているつもりになってただけだった。
だからこうして俺とお前が対峙する事になってんだ」

まあ、自業自得っつったらそれまでなんだけど、と上条は自嘲気味に笑った。
上条の謝罪に対して、影もまた笑った。上条の笑みとは違って、楽しげな笑みである。

「……その謝罪、記憶がある時に言えりゃあ説得力もアップするもんだがな」

「そりゃ悪かったな、記憶戻ったら改めて謝るわ。許してくれるかしらねーけど」

「まぁ、その時の態度によるなぁ。なんつーかこう、金一封でも持ってよ」

「……お前って意外と俗物なのな」

「……まぁ、『お前の分身』みてーなもんだしな」

影はそう言ってバツの悪そうな顔をする。

その言葉を聞いた上条は鬼の首を取ったかのような顔をすると、

「今、認めたな？お前＝俺だって認めたな？」

「あっ」

「だったら話は早いじゃん！戻ってこいよ！！
つーかさっさとあっち戻りたいんだっての！！」

大体、屈服させろってなんだよ！厨二病かよ！と大笑いする上条だったが、影は自分の失言にプルプルと震えている。
しかしすぐに落ちつきを取り戻すと、軽く溜息をついて背後にいるユースティティアを消した。

「……ハァ。おーけーおーけー、何か疲れた。このまま戦っても埒が明かねえしな。
とりあえず、戻っても良い」

影の言葉を受けて、「ホントか？！」と上条は聞き返そうとするが、それより早く影の言葉が遮る。

「ただし、だ。飽くまでも緊急事態による措置みてーなモンだからな。
色々と事が落ちついたら俺は帰るぞ。第一完全には認めてねえから」

「よし！話が決まれば善は急げだ！！あっちに帰る！！あ、でもどうやって！？」

そしてそんなやり取りを、マーガレットは楽しそうに眺めていた。

「ふふ……戦わずとも、影の心を変える。か……私には出来ないわね。
力が全てじゃないってことかしら」

「……2人が本当の意味で1人になった時、手合わせを願いたいわね」

私より強い奴に会いに行くと言わんばかりの力に対するこだわりは、やはり力を司る者にふさわしいものであった。

「心配しなくても、すぐ帰れるわ」

そして、マーガレットが上条と影を元の場所へ帰す為に案内をするのだった。

・・・

窓の無いビル。
その中でただ1人の住人である彼、もしくは彼女は、実に人間らしい笑みを浮かべながら、誰に向かって言う訳でも無く呟いた。

「予定の時間より早いが、それによる予想との差異を調べるのも悪くない」

くつくつと笑い、それに合わせてアレイスターを包んでいる液体から、ゴポゴポと空気の泡が浮かんで行く。

――その時、『学園都市』と言う場は、世界から切り離された。

・・・

場はオーラス。
手牌は最悪。

垣根提督は今現在、残り１７６００点。
対して、ゴーグルの少年は３００００点。
１位のゴーグルに追い付くには跳ね満以上をツモで上がるか、満貫以上を直撃するしかない。
しかし、ドラは東。せめて南がドラならまだ何とかなりそうなものだったが。

（金はある、金はあるんだが……こいつにやるのだけは許せねぇ）

チラリと対面に居るゴーグルの少年を見やる。
何を考えているかわからない眼が、ニヤリと歪むのを見て、垣根は軽くプチッと来た。

（ぜってぇ上がる……いや、まずこの場は何とかテンパイして流すしかないか……？）

とはいえ、親は砂皿緻密であり、彼がノーテンだった瞬間終わってしまう。
下家の砂皿を見るが、相変わらず何を考えているのかわからない。

場にはまだ役牌が白と發が1つずつしか出ていない上に、ゴーグルの少年の手の動きを見る限りでは手が良く進んでいる事がわかる。

（やっぱ早上がり濃厚くせえ……）

切る牌に迷いが無い。真っすぐ最短ルートを目指していると考えて差支えないだろう。

ゴーグルを上がらせず、かつ砂皿に差しこむ。

（いや待てよ、砂皿の捨て牌を見る限りじゃチャンタ濃厚じゃね？）

ヤオ九牌を一つも捨ててない。

何を考えているかは分からないものの、鳴いてすらいない為、字牌どころかドラの東を抱え込んでいる可能性もある。

そうなると差しこんで泣きを見るのは垣根だ。

だがしかし、ゴーグルの少年が東を捨て、続いてドレスの少女も東を捨てた。

（まず親の砂皿は東のみで上がる事は無くなった、か……）

順子でも明刻でも構わない。とにかく鳴いてくれれば何考えてるかわからん砂皿の動きもわかると言うもの。

淡い期待を抱きながら萬子の1を捨てようとした瞬間。

垣根の目の前のゴーグルの少年と、右に見える砂皿が。

「何だこりゃ」

「何よ、これ……？」

思わず呟いたのだが、ドレスの少女も同じような事を呟く。
考えた事は同じだったらしい。

「敵襲？にしちゃ随分突拍子どころか殺気もないな。
つーか何の気配もねーし」

敵襲だとして何故自分達だけが無事なのか。
そして2人が棺桶の様な姿になったのは一体何なのか。

「とりあえず外出てみるか？」

「え、ええ、そうね」

狼狽するドレスの少女を率いて垣根は外がどうなっているのか確認を取る事にした。

「あ、その前に」

垣根はドレスの少女の後ろを通り、ゴーグルの少年が居た所まで移動すると、

「やっぱ中握ってやがったか……つーかもうテンパイだし」

犯罪は見つからなければ犯罪ではないし、イカサマも見つからなければ……いや、例え見つかっても黙認されればイカサマではない。
サムズアップするドレスの少女を見るのと同時に、垣根は中で出来た暗刻を王牌の3つと入れ替えた上に、ゴーグルの少年の捨て牌と手牌をぐちゃぐちゃに入れ替えると言う鬼畜も真っ青な所業を為した。

「よし、これでこいつがこっからテンパイすることもねーだろ」

「そうね、後は私達がノーテンで終われば、砂皿さんがテンパイしようとするまいとこの局は千点以上の被害はない、と言うことね」

利害が一致した、と言う事だろう。

2位のドレスの少女と3位の垣根。彼らはこの場においてのみ同盟を結んだ。

「ああ、だがこの後からは敵通しだと言う事を理解しておけよな」

「ええ、分かってるわよ」

こんな異常な状態の中、いつまでも冷静な垣根を見て、ドレスの少女も落ちつきを取り戻したのだろう。

先程の狼狽はどこへやら、隠れ家の出入口へと向かう垣根にドレスの少女も迷わず追従して行った。

・・・

「生まれてから死ぬまで、いつだって俺は俺だけの味方だよ」

成程、台詞はカッコイイのだが、半裸でブーメランパンツのみと言う装備で言われても説得力に欠ける。

麦野沈利は辟易した表情で映画を見続けていた。

相変わらず絹旗最愛はワクワクした面持ちで映画を眺めている。

「生きるも死ぬも自由だ。立ち向かう事も逃げる事も出来る」

「だが、お前が例え死んでも何も変わらない。世界は変わらず回っ

てるだろうさ」
「だが、お前が生きているのであれば、きっと何かを変えられるはずだぜ」

やはりカッコイイ事を言っているのだが、彼は半裸なのだ。
これを作った脚本家と監督に今すぐ物申したい。「真面目に作ったの？」と。

だがしかし、役者の演技力自体はかなり高いもので、金ばかりかけてイケメンタレントを映画に出演させるよりも、この役者を安く使った方が儲けも出るのではと思うほどだ。

（私が生きても、何も変わらなかったっつーの）

あれは映画、あれはフィクション。
それは分かっているものの、その台詞に何か思う事があったのだろう。
脳内で毒を吐きつつも映画を見続けていたのだが。

唐突に、ブツリとテレビが切れた。

そして全身にザワザワとした違和感が走り、思わず辺りを見渡すと。

「滝壺！フレンダ！？」

先程まで寄り添って寝ていたはずの滝壺理后とフレンダ＝セイヴェルンの居た場所には二つの棺桶があった。

そしてその場に残ったのは、麦野と絹旗。

「これは……超敵襲ですか？にしても物音どころか殺気の一つも感じませんが……」

「分からない。分からないけど……とりあえず、外に出てみる？」

コンコンと棺桶を叩き、丈夫な何かで出来ているらしいと言う事だけを確認すると、麦野は外に出て行く為か上着を着込んでいた。それを見た絹旗もポップコーンに洗濯バサミで封をしてテーブルの上に置く。

「まずはこの超異常現象の中、私達みたく無事な人を超探してみるって事ですよね」

「そゆこと。何となく、これが私達を狙った事って訳じゃなさそうな気がするしねー」

修羅場には慣れている。

麦野と絹旗は散歩に出るかのような気軽さで外へと向かって行った。

## そのはちじゅうさん　かげときあいだ（後書き）

次はいつ投下出来るかな（白目）

## そのはちじゅうよん　うらのじかんがおとずれて（前書き）

登場人物が多い。
しかもそれぞれが別の場所でいろいろしてるから面倒である

## そのはちじゅうよん　うらのじかんがおとずれて

桐条御一行が誰もいないゲートを潜り抜け、学園都市入りを果たしてからしばらくの事である。
懐かしいあの感覚が一同の身体を駆け廻った。

「これは……！」

誰とは無しに辺りを見渡す。
まだ零時では無いと言うのに、表の時間はなりを潜め、裏の時間が影を出した。

「待て待て！まだ影時間には早すぎじゃねーのかよ！？」

伊織順平が、皆が同時に抱いた疑問を叫ぶ。
しかし、それに答えてくれるものなどおらず、結局は自分達のすべきことをするだけであるという結論に達した。

すべき事、それは影時間に誘われた者の救助。
はっきり言って、この現象自体を止める事は不可能だった。
何より情報が足らず、今日と言う日に影時間が来る、と言う事しか分からなかったのだ。
とはいえそれだけ分かったのも僥倖で、後は何も知らない人間を助けることと、この事態に一方通行も動いているはずなので、彼と合流し今後の方策を考えることの二つを同時に行おうと言うのが一同の考えである。

とはいえこの学園都市はかなり広い上に連絡を取ろうにも影時間では普通の機械は動かせないし、事実岳羽が懐から出した携帯も動

かなかった。
やはり、『黄昏の羽根』を組み込んだ無線機しか使えそうにないらしい。

「さて、とりあえず４人二組に分かれるか……」

ここでどう分かれるかはかなり重要になって来るため、桐条美鶴は慎重にそのメンバーを選び出す。

「山岸程ではないが私にも索敵能力はある。
それ故に山岸と私は分かれて行動しようと思うんだが、どう思う？」

「そうですね、私もそれが良いと思いますよ。
それなら戦闘面も考慮して、私は風香さんの方に行きましょうか」

「それじゃ、男女のバランスも考えて僕とコロマルもお２人の方に混ざりますね」

「何だか適当な感じはするが……まあ確かにバランスは取れているか……？」

「まあ何とかなるでしょ！天田君はしっかりしてるし、アイギスの手綱を握ってくれるはず！」

真田明彦が思案顔をするが、岳羽のそんな言葉にすんなりと納得し引き下がった。
何だか後半は割と適当だったが、そんなやり取りをして４人ずつのパーティを二組作って行動を開始した一同であった。

・・・

時は少しだけ遡り、学園都市に影の時間がやって来る前の事。
土御門元春は学園都市の外でただ一人、剣山のように大量の杭が刺さっている中で、杭の一つにもたれかかり気だるげな表情を浮かべていた。
何故学園都市の外に居るのかと言うと、勿論魔術師関連である。

ローマ正教が誇る『神の右席』が1人、前方のヴェントが学園都市に侵入した。

それが学園都市における現状ではあるが、いくら戦力に自信があろうとも本当に彼女だけが単騎で攻め込むだろうか？
結論から言えば、それはあり得ない。
まず間違いなく学園都市の外で他の魔術師が待機し、制圧する準備でもしているだろう。
学園都市を本気で制圧するなら数で押すなりなんなり出来ると言うのに、それをしないのはヴェントと言う人間の力がそれほどまでに圧倒的なのだろう。
すなわち、学園都市の周囲にはヴェントが先攻した「後始末」をするだけの人員しか配備されていないのかもしれない。

兎にも角にも、ヴェントの扱う術式が一体どんなものなのかすら、土御門は分かっていなかった。

そして今、土御門は学園都市の外にてとある術式の破壊に成功した。
恐らく、学園都市内部で動けなくなった人間達を、目の前に広がっている杭のにて串刺しにしていくつもりだったのだろう。しかし、それは阻止した。

後はヴェントを何とかしなければならないのだが。

（カミやんは無事なんだろうな……？）

まず第一に上条当麻、インデックス等が狙われると考えて間違いないだろう。

ある意味、学園都市制圧は事のついでと見ても良いはず。

それでも学園都市の中には、舞夏が居る。

彼にとって、彼女の無事を確保する事が最優先事項であった為にこうして術式の破壊を行った。

しかし、それを行う為に何度か魔術を使ってしまった為に、既に身体はボロボロだった。

土御門は、血の塊を吐きだすと、自身が出てきた第三ゲートから再び学園都市に戻ろうと身を翻す。

しばらく重たい身体を引きずるように走っていくと、視線の先から車のヘッドライトが見えたので、思わず木の影に隠れその車がなんなのか確かめる。

そこには山道に似合わないような面長な車体をしたリムジンが目の前を過ぎ去っていった。

遠目に見る限りでは黒塗りの窓である為に、運転手が乗っていると言う事しか分からない。

（リムジン……？）

どこのどいつだ、と土御門は思うがどうやら土御門を探している訳でも無く学園都市に行くのが目的であるらしい事から何処かのお偉いさんがノコノコやって来たという事だろうか。
魔術師、と言う可能性も考えたが、あのような目立つ車に乗って来るだろうかと思ったら、それは無いと考えた。

（敵なら排除すればいい、か）

どの道ここからならあのリムジンに追いつくことなど出来ないのだから。
隠れていた木の陰から身体を出して、再びゲートへと向かう。
しばらく歩を進めると、先程のリムジンも第三ゲートを目指していたのだろう。リムジンがゲートの前に止まっていた。
どうやら中に乗っていた人間は既に学園都市入りを果たしたらしく、そこには運転手しか居ないようだ。

（さて、接触すべきか否……ッ！？）

瞬間、全身を衝撃が駆け抜けた。
突然受けた謎の攻撃に、土御門はゴポッ、と音を立てながら血を吐きだす。

一体何が、と考える前に背後から爆発音。恐らく先程まで居た木の杭が破壊されたのだろう。
敵の魔術師による攻撃にしては随分となおざりな攻撃だった。
リムジンの運転手も物音であたりを見回していた。
みたところ執事の様な姿をしていることから、何処かのご令嬢でも学園都市に連れて来たのだろうか。

それでもここにとどまっている、と言う事はそのご令嬢も用事を済ませばすぐに帰るつもりだったはずだ。

兎にも角にも、その執事の様な人間は無事だった。

（となると……？！）

思考を進める前に、学園都市に起きた異変に気付く。

（アレイスターの野郎……使いやがったな……！？）

はるか遠くに見える、学園都市内部に展開されている光の翼。

開かれたゲートのほぼ真下に居る為、そのゲートから無数のそれを見る事が出来た。

それだけで、思わず呼吸が止まる。

人工の天使。

魔術師の排除。

しかし、魔術の排除は、飽くまでも副次的なものに過ぎない。

あれの本質は、ＡＩＭ拡散力場の集合体。言うなれば、心の欠片を無理矢理一つにまとめ上げた『人工のペルソナ』。

更には虚数学区・五行機関。学園都市を中心に収束し、世界中にばらまかれた妹達によって拡散されたＡＩＭ拡散力場を制御する事で生み出される『人工の界』。

あの光の翼を纏ったペルソナは、言うなれば『妹達のペルソナ』と言う事だろうか。

しかし、恐らくそれは飽くまで便宜上の話で、あらかじめプログラムされた機械か何かでその制御を奪われていると考えて良いだろ

う。

更に言えばあの『界』は、まだ完成していないはずである。

『界』の完成とは、あの世界がＡＩＭ拡散力場と言う心の集合体によって造られた世界であり、その世界では現実の理が歪められオカルトは悉く消滅するはずで、しかし現に土御門と言う魔術師はまだ生きている。

とはいえ、学園都市の外に居る土御門ですらダメージを受けたのだから、学園都市内に居るヴェントがどうなるかなど考えるまでも無い。

そして何より、あの世界では、『適合者』でなくてはまともに動けない。そういう風に造られているはずだ。

（と言っても、完成された『界』では無い所を見ると、いくらかのイレギュラーはありそうだがな……）

未だにうろたえているリムジンの運転手の前に土御門は姿を現す。

暗がりから見える血まみれの土御門は最早ホラーの域に達しているだろうが、狼狽するリムジンの運転手をなだめつつゲートへと向かった。

しかし、ゲートは開かれていると言うのに、見えない壁がその場を区切っている、と言えば良いのだろうか。

全く先に進めそうにない。

無駄だと分かりつつも、身体を蝕む魔術を行使し、ゲートの上へと向かってみる。

しかし、ゲートの上もドーム状に学園都市を覆っているのか、透明な何かがそこを遮っていた。

（クソ、何も出来そうに無いってのか？！）

ガリガリと苛立ちを抑えるように頭を掻くと、再び地面へと降りたつ。

すると先程のリムジンの運転手がこちらへと話をかけてきた。

「恐らく、『影時間』の最中なのでしょう。本来私どもはそれを感知することすらできないのですが……学園都市はどうやったか知りませんが、学園都市にのみ影時間を迎えさせると言う事をやってのけたのだと考えられます」

「……待て、影時間、だと？」

「その通りです、先程は初めての事にうろたえましたが、美鶴様の言う通りの事が起きたようですね」

「美鶴……成程、桐条か……」

「おや、よくご存じで」

「職業柄、お偉いさん方の名前と顔位は一致させてるさ」

どうやら、ここでリタイアらしい。

ストン、と土御門はその場に座り込んだ。

（後は任せるしかない、か……）

土御門はこれ以上介入できそうも無いと言う事実を確認すると、恐らく学園都市入りをしたであろう桐条美鶴に後を託すのであった。

・・・

ヴェントは倒れ伏した上条当麻に一瞥もくれず、その場を去ろうとしていた。

しかし、しばらく歩いたところで背後から気配を感じる。

誰だ、と思うよりも早く、条件反射的に後ろを振り向いたところそこには驚愕すべき光景が広がっていた。

「アンタ……不死身か何か?学園都市の実験で生み出されたバケモノ的なサムシングなの?」

「いや、残念ながらふつーの高校生ですが何か?」

そこには、先程自身の術式を受け倒れた上条の姿があった。

ヴェントは少しうろたえるものの、それをおくびにも出さずに上条へと問いかける。

「ふつーの高校生が、私の術式喰らってへーゼンとしてて良いはずが無いっての!」

ヴェントが上条の身に起きた事を確認すべく、ハンマーを振るい風の塊を上条へと飛ばす。

今までは頭に拳銃を突きつけ背後から異形を出し、その異形の力によって攻撃を回避していたと言うのに。

今の上条は右手をかざすだけで攻撃を受け止めた。

つまりは。

「何？ご都合主義的な漫画によくある力の復活とかそんな感じ？」

「まあそういう解釈でもかまわねーよ！」

上条は念の為左手にて召喚器を扱う。
そして背後から、出てきた異形は。

「アンタ、さっきの剣持ったデカブツはどーしたっての？」

「あ？……あれ」

上条の背後に居たペルソナ。
それは今まで暴走時に上条の身体を乗っ取っていた存在の、クロノスと呼ばれるペルソナで。
今は上条の指示を待っているかのように静かに佇んでいた。

「んん……？オケアノス！」

何か怖い。チェンジ。
そんなことを思いながらオケアノスの名を叫ぶ。
すると今までお世話になった、剣を持ったペルソナが現れた。

「おー、これこれ……」

とここで、上条の動きが止まる。
ヴェントは一体何なんだ、と言った様子でジッと上条の事を眺めていた。
そして、当の上条は心の中に響き渡る声を聞いていた。
それは先程まで殴り合っていた自身の片割れの声。

と言ってもそれはヴェントが知る由も無い事なので、ヴェントからしたら何も無いのにしきりにうんうんと頷く上条の姿しかなく、何だか気味が悪い。

そうしてようやく上条は動き出す。

「よし、それなら行くか！ユースティティア！ジオンガ！」

「なっ！？」

すると今度もまた別の異形が現れ、紫電がヴェントへと向かって解き放たれる。

ヴェントは瞬間的に風を操り雨水をも操ることで上条の電撃を雨水で受け止め、電流の流れる方向を逸らすことで攻撃を受け止めたのだが、ヴェントの表情は驚愕に染められていた。

『幻想殺し』は、復活した。

それも何か別の異能を携えた状態で、だ。

幻想殺しはその性質上能力も魔術も使えない。

だと言うのに、今現在上条は異能をも操っている。

右手にしか宿らない幻想殺しの倒し方などいくらでも考えつくが、それだけでは無く何か別の力も操るのでは、彼を倒すのは一筋縄ではいかないだろう。

元々確定事項だった事だが、ヴェントの決意は更に固まる事となる。

（こいつは、ここで確実に殺す！！）

それを決め、いざ攻撃に移ろうとしたところで、学園都市に異変が生じた。

「ゴハッ！？」

辺りに倒れ伏していたアンチスキル達は1人残らず棺桶の姿へと変貌し、更にはヴェントが突如として苦しみながら血を吐きだし始めた。

そして上条の視線の先には、無数の光の翼が空へと向かっていた。

あの光の翼を見て、上条は反射的に思った。

（シャドウ……！？いや、ペルソナか……？）

なんにせよ、すんごく強そう。

それよりも、目の前の魔術師。

死人に鞭打つ、とはこのことか。

明らかに苦しんでいる人間を殴るのは心苦しいが、意識を失う前に放った言葉は、間違いなく事実でヴェントは遊び半分に人の命を奪う事すら出来る人間に違いない。

そう考えるとここでヴェントを倒さねばと思う。

何より、右手の力と共に影がいつ出て行くかもわからないのだから。

（事が落ちついたらってーと、こいつ倒したらって事でいいんかな……？）

そんなことは後で考えるか、と思考を切り替え、一気にヴェント

の下へと駆けあがる。

「ぐっ、がぁあああぁぁぁ！！！！」

しかしそんな上条への牽制の為か、ヴェントはハンマーを二度、三度と振りまわし、辺りに風をばらまいた。

それを防いでいる間にヴェントは路地裏の中へと駆けこんで行き、上条がその路地裏へと入った頃には既にその姿は分からなくなっていた。

「……何なんだ……？」

その呟きは、様々な疑問が一緒くたになって現れた結果だろう。

本当に、何なんだ一体。

・・・

第七学区のとある立体駐車場に、１０台ほどの巨大な病院車が鎮座していた。

その車体は観光バス程の大きさなのだが、窓が無く、１台につき１０人の人間を収容できる生命維持装置付きのベッドが完備されている他、簡易ながらも手術をする為のスペースも各車両に搭載されており、これをフルに使えば単純に１００人の患者をこの場に置いておく事が出来る。

そんな車両の陰に、３人の小さな影があった。

妹達だ。

少女達は常盤台の制服には似合わないアサルトライフルやら対戦車ライフルやらを武装しており、彼女らは今現在、木原数多なる人

物が放った猟犬部隊と言う暗部組織の警戒をしている。
そんな中で、ある2人の少女の声が響き渡る。

「放してほしいかも、短髪！街の様子は何だかおかしいし、あくせられーたも何処かに行ったみたいだし、私はここで何が起きてるのか調べないといけないかも！」

「だーかーら、それが危ないって言ってんの！あんたはここでおとなしくしてなさいよ！私だって動きたいのに！」

インデックスと御坂美琴だ。
一方通行の治療を行う為の道具をもらおうとしたインデックスをなし崩し的に保護した訳だが、その後すぐに御坂という護衛と合流したのち、この場までたどり着いたのだ。
今のところ敵襲が無い所を見ると安心して良いのかもしれないが、敵が敵なので警戒は固めるに越した事は無い。
しかし、2人はまだ気付かない。

象徴化した医者と患者達と、妹達の異変。そして無数の光の翼に。

少女達が口論する中で、妹達はそれを止められそうにないと判断した。
まともに首すら回すことが出来ない程に、身体が何かに縛られたかのごとく動かない。

最終信号からの緊急コードだ。
この命令には下位個体である妹達は抗う事が出来ない。
一瞬にして脳の稼働領域を奪われた彼女達は、ただ呼吸をおこなうだけの生物と化し、各々がその場に固まっていた。

どうする、それは妹達全員が同時に思ったことだ。

例えば奪われた演算領域を取り戻す為の抵抗を止めるとしよう。
そこから出来る1人1人の演算区域はさほど広いものではないが、それを1万人分集めるとなると話は違う。
1人分の演算能力を補助する程度には脳の稼働を取り戻す事は可能である。

しかし、誰の演算能力を取り戻す？

そんな中、1人の声が、ミサカネットワーク上を巡った。

『ミサカに、皆さんの演算領域を貸しては頂けませんか？と、ミサカ９９８２号は提案します』

別にそれは構わないのだが、何故？と言う疑問が浮かび上がる。
だがしかし、それに答えている暇も無く、９９８２号の提案を断る理由も存在しないので妹達は一瞬にして一致団結した。

『――ありがとうございます』

薄れゆく意識の中、９９８２号の声を聞いた。
そして妹達の1人である１００３２号は、確信を持つ。

（やはり、９９８２号や一方通行の抱える事情と関わりがある、と言う事ですね……）

色々と調べてはみたが、ろくに調べは進む事が無かった。
やっぱり直接問いただした方が早い気がする。

（あの似非忍者は無事なのでしょうか……）

もはや深く何かを考え込む程の演算領域は残っていない。

最後に残った意識の残滓は、自身の我儘に嫌々ながらも付き合ってくれていたお人よしの忍者を想っていた。

## そのはちじゅうご　しゃどうとおれたち（前書き）

襲ってくるなら迎撃しますよそりゃあ。
いや、俺なら必殺されるけど

## そのはちじゅうご　しゃどうとおれたち

「ふう……ようやく動けるようになりました。と、ミサカは現状を確認します」

妹達の1人である９９８２号はミサカネットワークの力を借りて、上位個体から送られてきた命令（便宜上これをウィルスと定義した）によって演算領域のほとんどを奪われていたのだが、その残った演算力を全て９９８２号に回すことで動けるようになったのだ。

なんにせよ、この分だと上位個体は敵の手に落ちたのだろう。

とはいえ、この上位個体の命令文こそが彼女の生きている証となっているのは何とも皮肉な話である。

そして、今。

９９８２号は未だに雨にぬれたコンクリートの上に横たわっていた。

先程のウィルスコードのせいで少しの間とはいえ「立て」という命令を脳から送る事が出来ない程にまで演算力を奪われてしまったからだ。

突然の出来事だったので、芳川桔梗から逃走を図っている最中だったと言うのにそれはもう無様に、盛大にこけた。すりむいた傷が痛い。

とりあえず、元々雨に打たれてずぶ濡れだったので今更水たまりの上を這おうとも何とも思わない。

しかし、しかしだ。

９９８２号はうつ伏せに倒れたままじろりと背後を見やる。

「……いつまでも勝ち誇ってないでそこからどいてもらえませんか？重た「何か言った？」……いえなんでもないですと、ミサカは慌てて訂正します」

「あら、せっかく勝利の余韻に浸っていたのに。仕方ないわね」

そこにはドヤ顔しながら足を組んで９９８２号を椅子にしている芳川の姿があった。

芳川は、先程まで見事なダッシュをしていた９９８２号が突如として転倒するので少し疑問に思ったのだが、とりあえず疲れたので９９８２号を椅子にする事にしたのだ。ミサカネットワークで会話している間もずっと。

「とりあえず、緊急事態みたいね」

「あ、分かった上でその態度なんですね。と、ミサカはいつまでもどかない芳川を振り落とすべく身体を揺すります」

「わわっ……もう、そんなに焦っても事態は好転しないわよ？」

９９８２号が懸命の抵抗をするので、芳川は渋々ながら立ち上がると、誰もいない大通りを見回して怪訝そうな表情を浮かべた。

「この感じ……」

「どうしたんですか？と、ミサカは芳川に尋ねてみます」

「それがね、私が初めてマヨナカテレビに行った時と同じ感じがするのよ……」

少し考え込む芳川だったが、すぐに納得した表情に切り替わり、９９８２号へ向けて口を開く。

「そう、シャドウの力を感じた時みたいな……」

「……え」

嘘だ、そんな短い単語が口から飛び出すよりも早く、芳川の言葉の証明になる出来事が起きた。

対面して話をしている９９８２号の視線の先、すなわち芳川の背後およそ３０ｍ程先だろうか。

そこには明らかに人間じゃないだろうお前、と言った姿をした異形の姿があり。

それはマヨナカテレビで色々とお世話になったにっくきシャドウの姿であった。

「ッ！！ペルソナァ！！」

それを見た９９８２号は条件反射的に自身のペルソナであるワカヒルメを召喚しようとするのだが。

「……」

何も出てこなかった。

「……ブフッ、「ペルソナァ！」ですって」

それを見た芳川は思わず噴き出す。

あたかも結果が分かっていた上で、９９８２号の言葉を止めることが無かったかのように。

芳川の笑いを見た９９８２号は、羞恥に顔を赤らめながらも芳川に対して文句を言った。

「どーいうことですか！！説明を要求します！と、ミサカは芳川に苦言を呈します！！」

「この感覚はね、私がペルソナを使えるようになる前に感じた感覚なの。

あれを使えるようになってからはもう少し鋭敏な感じになったわ。

でなきゃここまでシャドウの接近を許すはずが無いじゃない」

９９８２号にもわかるように、簡単に説明する芳川。

しかし、芳川の言葉通りにシャドウは着実にこちらへと這い寄ってきていた。

「な、成程ですね……ってことはミサカの能力だよりって事ですか？！」

「そう言う事。まあ、レベル２とか３で何処までいけるか……試してみる？」

「いえ、逃げます」

「その言葉が聞きたかった」

同時に、2人は同じ方向に走り出す。

今度は2人とも逃走する為に。

・・・

「全く、何だこりゃひょっとして夢でも見てんじゃねーのか？」

「夢か現か調べてあげるわ、えいっ」

パシン、と頬を叩く音が響き渡るが、その音は2人が歩く事によって起きる水たまりを踏む音と混じり合い溶けて行った。

しかし、ドレスの少女の痛烈な平手を受けた垣根提督からすると文字通り肌で体感した訳で、突然の痛みにそれを行った本人をギロリと睨む。

「痛ぇじゃねぇか、殺すぞ」

「良かったわね、これが夢じゃないって分かって」

少し不機嫌そうな顔をする垣根ではあったが、あまりに飄々とした態度をするドレスの少女を見て、げんなりとした表情を浮かべた。

「畜生……未だに人も居ねえしあるのは棺桶だけだし、アレイスターの野郎またろくでもねぇこと始めやがったな？」

「あなたって任務の時もそうだけど、身の危険が及ぶたびにアレイスターのせいにしてるわよね」

「バカ野郎、俺に降りかかる不幸は全部アレイスターのせいだろうが。
そうだと思わなきゃやってらんねーよ」

盛大な舌打ちをしながら、垣根は雨の中を歩く。勿論傘はさしている。
割と歩いてみたのだが、日が落ちたとはいえまだ２１時を回ったところだろうか。

全く人の気配を感じさせない。

それどころかこの時間ならまだ空いているであろうコンビニなどにも明かりはともっておらず、そんな中で街灯だけが不気味に街を照らしていた。

「にしても、ここまで何も無いとホラー感じるわよね。
学校の怪談とかだと町に出たら全員のっぺらぼうだったとか」

「あー、鏡の世界だったか……そんな映画もあったっけなあ。人面犬とかかなり強烈だったわ」

「あれって結構シリーズ続いてた気がするけど、どの辺まで行ったっけ？」

「４だったか？俺は３までしか見た記憶ねーけど。３がのっぺらぼうの奴だよな？」

「あー、それなら多分私も３までしか見てないわね。私も３つしか見た記憶ないわ」

「何かなついな。久々に見たくなった」

「でも科学に染まった今、それを見てもあんまり怖く感じない気がするんだけど」

「ハッ、そんなもんその場のノリだろ？」

「ウギャー！とか間抜けな悲鳴を上げるのなら一緒に見てあげても良いけど？」

「……俺の役者魂に火を付けたぞ、その発言」

ＤＶＤボックスが確かあったはずだ、と自身の記憶を探る垣根を見て、どんだけ詳しいんだとドレスの少女は微笑んだ。

非常で異常な事態の中で、何処までもマイペースに街を歩く。

しかし、そんな中でその和やかなムードを引き裂く『ナニか』が現れた。

「なんだあれ……」

ぼんやりと遠くから何かが見える。垣根もまたぼんやりと呟いた。

ガシャガシャと鎧がぶつかり合うような音が、こちらに近づくにつれて大きくなっていく。

それは騎士だった。

いつか一方通行がテレビの中で相対した漆黒の騎士を、真逆の真っ白にしたかのような姿をしたそれは、『征服の騎士』と言う名のシャドウであった。

しかし、そんなことを垣根やドレスの少女が知る由も無く。

「俺に武器を向けてるっつーことは、戦るって事だな？」

純白の羽をはためかせながら、垣根は獰猛に笑った。

その羽を見たからかは知らないが、鉄の塊のような馬にまたがる騎士は、２人に向かう速度を上げてきた。

しかし、いざ戦らん！と言った状態まで気力を高めた垣根に対して、ドレスの少女が取った行動は。

「ストップ！駄目～！！」

「ぐふっ！？」

垣根の背後からのフライングヘッドバッドだった。

それにより盛大に転倒する垣根だったが、彼らの頭上を突進して騎士は通りすぎると、その身体を急停止させている。

そんな中で、尤もな文句を垣根はドレスの少女に対して言った。

「何しやがる！？」

「駄目……あれは違う……人間じゃない……」

「あ？」

自身の背中でプルプルと震えているドレスの少女を一瞥すると、彼女を背中からどかした後に騎士の方を見やる。

何か能力でも使って馬に模した鉄の塊にでもまたがっているのかと思っていたのだが、近くでよく見るとそうでは無く、鉄の塊その

ものように見えた。
しかし、それならば鉄の塊を遠隔操作でもしていると考えるのが一般的な見解だろうに、彼の目の前で震える少女は、明らかにあれが「人間ではない何かである」と断言した。
しかもそれはただの無機物に向けるべき感情ではない、『恐怖』をその何かへと向けている。

「どういう事だ？」

再び騎士がランスを構える中で、垣根は冷静に尋ねた。

「ただの無機物なら、私の『心理定規』は作動しない。
更に言えば普通の動物……犬とか猫とかでも一応私の能力って適応されるんだけど……」

心理定規と言う、対象の心の距離を測ったり操作したり等するこの能力。
それは動物等にも適用される。例えば飼い犬と飼い主同士の心の距離を図ることだってできるし、野良犬を飼い犬のごとく従順にさせることや逆に飼い犬を野良犬のごとく警戒心丸出しにする事も出来る。
そんな能力を持ったドレスの少女は、敵対するにあたってとりあえず自分との心の距離を測ってみる。
赤の他人に対して意味があるのかと問いかけたいが、よっぽど鍛えられた相手ではない限りは殺意の度合いから金を積めば退いてくれるのかやら逆に確実に仕留めないといけないやら、そう言った情報を引き出すことが出来るのだ。

そしてその能力を、『征服の騎士』にも使った結果。

「あれには確かに心がある……いえ、その表現は正しくないわね……言うならば、『心そのもの』だと思う」

「ハァ？」

どういう事だ、と尋ねる間にも、騎士はこちらめがけて再び突進してきている。

垣根は舌打ちをしながら、彼女の話を聞く為に一旦空へと回避しようと再び翼を展開してドレスの少女を小脇にかかえて飛び立った。

「……もうちょっとイイ感じの抱え方は無かったの？」

意外と力持ちだな、とドレスの少女は思う。と言っても自分はそこまで重くは無いはずだと脳内で訂正を入れる。

それに続いて、お腹を抱えられ、両手両足をだらんと地面の方に向けながら不平を洩らすドレスの少女だったが、垣根は完全にその言葉を無視して続けた。

「で、どういうことだ？」

「……何て言うか、人間って複雑な感情が一緒くたに混ぜられてるから、一度測ってみるだけでも色々と距離がわかるのよね。

それで、例えば犬だの猫だの動物を相手にしても、人間程じゃないけど対象にした者に対する心の距離をそれなりに見ることが出来るの。

でもね、あれは違った。あれには一つしかなかった。どんなに心を殺した人間にも、あそこまで洗練できるはずが無い。

ましてやただの無機物から観測出来て良いはずが無いのよ」

「……1つってーと？」

「……食、欲」

「……うげぇ」

どう表現したらいいのか分からなかったのか、ドレスの少女は言葉を選ぶようにゆっくりと口を開いたが、垣根はその言葉にドン引きした。

「……いや、食欲が一番近いと思ったけど、何て言うか食事したいって意味じゃないのよね……」

「ホントにどういうことだよ？」

「私にだってわからないわよ……ううん、存在その物が欲しいって感じかしら……」

だらしなくぶら下げられた両手のうち右手を顎に置いて考え込むドレスの少女。

彼女の言葉を反芻させながら、今までに起きた現象について垣根も考察する。

「……わかんねぇな。あの変な騎士に、俺ら以外の棺桶姿。それにあの光の……翼？」

「まず、私達以外にも無事な人はいるはずだと思うから、その人達を探した方がいいと思うわ」

「まぁそれが懸命だろうな。あれに話が通じるとは思えねーし」

ドレスの少女の提案には文句も無かったので、そのまま翼をはためかせて雨空の中宙を舞い始めた。
傘は、2人ともとっさの事に捨ててしまっていた為に、前方からの雨が冷たい。

「ところで、この抱え方って何とかならなかいの？」

「お姫様だっこ、どっちがいい？」

「……お姫ひゃわあああああ！！」

彼女の言葉は、飛行速度を上げた垣根によって遮られてしまうのだった。

・・・

「なンですかこれ！この超B級感漂うモンスターはなンですか！？もっと手作り感の沸く超C級モンスターは居ねェンですか？！いつまで出てくるンですかこれ！？」

「うるせーよ絹旗ァ！！こっちが聞きたいってのそんなことは！！」

「麦野も実はC級映画が超好――」

「私が言ってんのはそういう話じゃねー！！」

悲鳴のような叫び声を上げながら、麦野沈利は自身の能力である『原子崩し』を放つ。

その対象は突如として現れた異形。

1体1体はそこまで強くないのだが、こうしてワラワラと出てこられては非常に面倒だ。

一方の絹旗最愛も、そこらの街灯を引っこ抜いて無双をしていたが、そろそろ街灯の方が限界に達しそうであった。

「あー、そろそろ限界ですねこれ！次はガードレールでも使ってあのクソ共ぶつ切りに……！」

手に持った街灯を思い切り投合する。

その射線上に居たシャドウを3、4体程巻き込んだところで街灯は動きを止めた。

そうして空いた両手で近くにあった5m程のガードレールを引きぬくと、まずはくっついてきたコンクリートでシャドウを叩き潰し、ブチュリと言う嫌な音と共にコンクリートを砕いて行く。

続いてガードレールの平べったい部分を使って再びシャドウをその重さを以って叩き潰していく。

まるで北斗神拳でも喰らったかのように異形達は次々と潰されて行く中で、麦野はもっと派手に敵を殲滅していた。

「麦野のそれは、相変わらず凶悪ですね！！」

「あんなグロテスクに叩き潰してるお前の力もどうかと思うけどな！！」

その点一瞬で蒸発させる私の方が良心的だろう、と麦野はシューティングゲームのように指をかざしながら次々とシャドウを消し飛ばしていった。

「つぅか、本当になンなンでしょうねこれ！？」

「だから、私に聞くな！！」

身長差があるものの、互いが互いに背合わせになるような体勢を取りながら、息を整える。

最初は2、3体程のシャドウが襲ってきたので、突然の事にうろたえながらもサクッと対処した。

しかし、それで騒いだのがいけなかったのだろうか、はたまたそう言う場所だったのか、何にせよ次々とシャドウが群がって来たのだ。

「いつまでも戦っていても、超埒があきやがりませンけど、どォしますかァ？！」

「アァ！？向かってくる奴は全部つぶして行くっつーの！！」

絹旗の言葉に、麦野は後ろを振り向きながらも手を前に突き出して『原子崩し』を放った。

照準も何もない。割とうじゃうじゃと居たのでとりあえず放つだけで敵に当たった音がする。

そんな中で、絹旗もまた麦野の方を振り向くと同時に、ガードレールも横に振りまわした。

これによって麦野の死角から急接近していたシャドウが真っ二つに切り裂かれる。

「戦闘中によそ見なンてするから、接近に超許しちまうンですよ！」

「ハッ！そりゃてめーにブーメランだっつーの！！」

続いて、そのガードレールを思い切りしゃがんで避ける麦野もまた、足を大きく広げている絹旗の股下から光の塊を放つと、今まさに炎を放とうとしていたシャドウに直撃した。

「……やはり、コンな意味不明な空間での生存者を探す方が重要なンじゃねェですか？
何かしら知っているかもしれませンし」

「……それもそうだな、こんな訳わかんねぇのに殺されるってのも癪だし」

冷静になったのか、絹旗の言葉にうなづいた麦野は、そのまま前方に向けて今までで一番特大な一撃を放った。

それによって車が通れる程度の道がシャドウ達の真ん中に出来た為、２人は一気に駆け出す。

「逃げんのは良いけど、アンタのそのガードレール、私も巻き込まないでよ！？」

「大丈夫です、麦野なら避けるって超信じています！」

「言ってくれるじゃないの畜生！」

シャドウ達を横切る瞬間、麦野は左に居るシャドウに向かって、絹旗は右に居るシャドウに向かって迎撃を行った。
息の合う攻撃を放った２人は、その隙をついて更に駆けるペースを上げる。

元々足は速くなかったのだろう。シャドウ達が追いかけてくる音

は、程なくして消え失せる。
　動かす足を止め息を整えることに専念する2人は、程なくして口を開いた。

「……追って来る感じはしないわね」

「……これが、ただ単に雨音で近づくのが分かんないってだけだったら超ホラーですね」

「そーゆーの止めろって、イヤマジで」

「あれ？麦野って怖いの超苦手でしたっけ？」

　ニヤリと鬼の首を取ったかのような顔をする絹旗である。
　恐らくその頭の中は今度借りて来るＤＶＤはホラーで決まりだ、とか考えているのだろうが、麦野の言葉は予想の斜め上を行っていた。

「いや、いちいちビビられるとイライラするんだよね。
軽く消し飛ばしたくなる程に」

「……そうですか」

ホラー中止。

# そのはちじゅうご　しゃどうとおれたち（後書き）

沈利さんマジ沈利

## そのはちじゅうろく　かてい（前書き）

みじっけーです
木原くんの意味のわからん考察回みたいな

## そのはちじゅうろく　かてい

「は、はは……ははははは！！！！」

木原数多は笑った。

喜怒哀楽のうち、「喜」だけを前面に押し出したような表情を浮かべる木原は、自身が潜伏しているビルの窓から見える景色を見やる。

「あーっはっはっはっは！！！なんだよありゃ！？畜生アレイスターの野郎、どんだけ先に行ってやがんだ！？悔しいなあ理論の理の字もわかんねーぞ！？科学者のくせに科学を否定するたぁ、何たる科学者だよオイ！！」

視覚では人工の天使から発せられる光の翼を捕らえ、感覚ではこの場が学園都市出会って学園都市にあらずと本能的に察せられ。

アレイスター＝クロウリーの言う『適合者』を探すという行為がどういうものかすぐに理解した。

「つまり、虚数学区ってのは、『あのテレビそのもの』ってことか！？

そして学園都市と言う箱庭を舞台に、虚数学区……いや、テレビの中を再現してみせたっつーのかぁ！？」

興奮のあまり思考がそのまま言葉になっているが、それを聞く者はこの場におらず。

「成程なぁ！だからこそ、『適合者』の選別ってことか！」

木原はチラリと背後を見る。そこには猟犬部隊だった人間達の棺桶が並んでいた。

この場で棺桶となっている者は、もちろんペルソナなど使えない。その為にこのような棺桶姿となって影時間に気付かずにいるのだが、それと似たようなものでテレビの中に入るにも、ペルソナを使えるかもしくはペルソナを使える者と共に行かなければテレビの中には入れない。

「つぅか、ＡＩＭ拡散力場の塊に指向性を持たせるだけであんなことが出来んのかぁ！？

あぁ畜生ォ！！任務なんぞほったらかしてあの天使がなんなのか調べてぇなあ！！

間違いなくアレイスターの野郎が見てる景色に一歩以上近づけるはずなのになぁ！！」

木原は嬉しそうにキレると言う器用な真似をしながら、ガリガリと頭を掻くと同時に頭を抱える。

しかしここで文句を垂れていても仕方が無い事は木原自身良く分かっている為、ひとしきり叫び声を上げ頭を冷やすと再びパソコンのモニターに眼をやった。

「……つか、『黄昏の羽根』がなきゃろくに機械もうごかせねーのな」

木原の居る部屋の温度を調整していた空調の音が消えていた。

更にはポツポツと光がともっていたビルの窓からは、全ての光が消え去っていた。

そんな中で、動かせている機械は、木原が扱うパソコンと。

「……」

こんこんと眠る打ち止めの頭に取り付けられた学習装置だけだった。

・・・

「……なんだここは」

「だから言ったろォが、常識は通用しねェって」

木山春生は、一方通行に連れられてテレビの中へとやって来た。
そこには少し前に一方通行が来た時と変わらず天国の様な光景が広がっており、それは木山を驚愕させるに値するもので、一方通行もその事は分かっているのか興味なさげに木山の呟きに返答した。

「確かに……ここまでとは思わなかった、が……」

最早幻想的とも表現できるそれは、夢では無く現実。
この世界が何なのか、と言う事は木山も気にはなるところだが、一方通行も木山も今はそれどころでは無く。

「それで、あの子達は何処に居るんだ？」

「ここに居ることは分かってる。後はアイツらが連絡に応じてくれりゃ問題ねェ」

何処から取り出したのか、一方通行は無線機を用いて布束砥信とクマに連絡をする。
戦闘中などでない限りは無線に出ることが出来るはずだ、と考えて。

（無事でいろよ……）

一方通行は2人の安否を気遣いながら無線機を耳に近づける。
するとそこから聞こえてきたのは。

『おいーっすひょっとして一方通行ン？こっちは無事クマよー』

想像以上に間の抜けた、かつ気の抜けた声で無線に応じたクマだった。

『……なンだその気の抜けっぷりはよォ』

こっちの心配した気持ちを返せと言ってやりたかった。
そしてクマの背後から聞こえてくる子供達の声。

『子供達は無事クマよー』

『戦闘は無かったのかァ？』

『この場に行くまでは戦闘が何度かあったクマ。
でも子供達の目的はクマ達の足止めだったクマよ』

足止めが目的。

つまり2人は戦わずともその場に残ると言う意思表示でも示した

のだろう。
　それにより子供達は無傷で、布束とクマはシャドウと戦闘した事によって少し傷ついただけのようだった。

『とりあえず、そのガキ共の保護者を連れてきた。
　一旦あのボロアパートまで戻るから、そのガキ共連れてこい』

『え？でもこの子らは時間稼ぎしないと、木山センセーが危ないって言ってるクマよ？』

『だから、その木山センセーを連れてきたっつってンだ』

『マジで！？』

『マジだ』

『わかったクマ！すぐに戻るから待ってるクマよ！！』

　ブツリ、と無線を切る音が響き渡る。
　この場は周りにシャドウの気配も無く静寂を保っていた為、クマとの会話の間に子供達の声が聞こえたからか、木山も安心したような表情を浮かべていた。

　しかし、一方通行の心配事はそれだけでは無かった。

（……布束の場合、ペルソナを酷使する事で暴走し、自身の影を生み出す結果になっていた）

　となると、２人と一緒に居る子供らは戦ってすらいない為、暴走の心配は無いだろう。

チラリと木山の方を見る。安堵の表情を浮かべて、天国への門を見ながら彼らの帰還を今か今かと待ち続けていた。

（だが……）

しかし、木山春生の場合はどうだろうか。

彼女は別にペルソナを扱う為の開発は行われていないらしい。

（なら、高確率で木山の影が出てくるはずだ）

だとすると、なるべく早くテレビの外に出たい。

こちらから迎えに行っても良いのだが、如何せん何処に居るかわからない上に土地勘も無い。

土地勘は仕方ないとして何処に居るかわからないと言うのが問題だった。

互いにすれ違ってしまう事を避けるために、ここからは動けない。

「チッ……」

結果として一方通行の苛立ちは、小さな舌打ちへと収束されるのだった。

・・・

「あれはＡＩＭ拡散力場の塊……」

ポツリと木原数多は呟く。

紫電を撒き散らしながら雷光のように天空へと伸びている光の翼

が、異変の塊となった学園都市を照らしている中で、その光を背景にしながら木原はデスクの上にだらしなく足をのせながら、パソコンの液晶を眺めていた。

「そういえば……」

木原は何か思いだしたかのように足をデスクから降ろすと、キーボードをたたき始める。

しばらくして、木原の望む情報が載っているページまでアクセスできたのだろう。木原は再び足を組むとそのページをスクロールして行った。

「『幻想御手』の主演女優は木山ちゃんだったな、そーいや」

どうでもいい事を思い出したかのように吐き捨てながらも、木原はそのページを下へ下へと移動させていく。

木原がアクセスした場所、それは学園都市にはびこる「裏」の実験の一部始終を収めたデータベースであり、それを見ることが出来るのはほんの一握りの科学者と統括理事会しか居ない。

そんな中で、木原は当たり前のようにそのページへと行っている辺り、かなり優秀な科学者である事が見て取れる。

「つか、こうしてアクセス出来るってこたぁ、この回線も『黄昏の羽根仕様』って事か？」

だとすると、この異世界の様な場と異様な天使を降臨させた計画に、統括理事会も一枚噛んでいるのだろう。

「ま、そんなこたぁどーだって良いんだけどな……」

自分は任された任務をさっさと終わらせて研究を続行するだけだ。
そう考えた木原は任務を放って調べ物を進めて行く。明らかに真逆の行為を行っているが、考えとしては一方通行が邪魔しない限りはこうして最終信号を手元に置いておくだけで任務は終わる、と考えているのだろう。

「木山春生から現出した『幻想猛獣』……これは明らかに不完全なものだが……」

チラリと背後の光の翼を見やる。

「恐らく、木山の場合ネットワーク自体に無理があったんだろーな。だがしかし、こっちのミサカネットワークは全てのネットワークをつなぐ個体が同一のクローン体だったからこそ、こうして完全に近い状態を作り出すことが出来たってことか……？」

とここで、木原は今まで考えていた仮定のうちの一つを頭の中に浮かべた。

「……もし俺の考えが正しいのであれば……」

――木山春生もまた、ペルソナを扱う事が出来るのではないか？

「ま、あいつらが無事テレビの中から帰ってこれたからっつってこの仮定の証明にはならねぇけどな……」

木山春生をあの研究所に置いておくんじゃなかった、と木原は少

しだけ残念がりながら開いていたページを閉じたのだった。

「しまった、魔術師（モルモット）共に取り付けた機材も全部止まってんじゃねーか？」

だがしかし、このイレギュラーな世界では魔術師もまた棺桶になっているのだろうか？だとしたら何も問題は無いのだが。

まあ、どっちでもいいやと木原はキーボードを叩き続ける事にするのであった。

## そのはちじゅうろく　かてい（後書き）

天上楽土で戦闘しようと思ったけど、止めた。
ひとえに俺の技量の無さが原因だった。泣いた

## そのはちじゅうなな　いがいとよわい（前書き）

というよりはタルタロスを踏破した特別課外活動部が強い。

## そのはちじゅうなな　いがいとよわい

小雨、と表現する程度には雨脚が弱くなっていた。
それでも実際に雨は降っている為に、じめじめとした感触がより一層この場の雰囲気を重くしている。
そんな中で、ある場所ではそのじめじめした雨を吹き飛ばす程の風が吹き荒れていた。
それは能力者による攻撃では無く、単なる余波。

そしてそのような強い余波を生み出すような戦闘を行っている面々は。

「アイギスさん！前方にいっぱい居る敵は貫通攻撃に弱いので一気にやっちゃってください！
天田君は右に見える大きいのに光属性、コロマルはあっちの敵に火炎属性の攻撃をお願い！」

「了解です！」

「ペルソナ、ハマオン！！」

「わうわう！」

山岸風香は周囲を見渡して瞬時に最適な攻撃方法の指示を出した。
それに対して一同は指示された攻撃を以って返答とする。
本来山岸は学園都市の外の安全地帯にてシャドウの感知を行うべきだったのだが、彼女の護衛に裂く人員すら作れなかった、と言うべきか。
アイギス、天田乾、コロマルが山岸を囲うようにして陣を取りシ

ヤドウを迎え入れていた。
とはいえ、山岸が危険な戦場のど真ん中に立つ事と引き換えに、『感知する事』に秀でた彼女のペルソナ『ユノ』はその本領を発揮していた。
タルタロス内では距離の離れた場所から敵の弱点などを探っていたのだが、こうして近距離で相手の力を調べるのは前者のそれよりもはるかに楽なものである。

そんな彼女の懸念、と言うよりは特別課外活動部の面々も「それ」に対して不安を覚えているのだが。

（あの光の翼は……）

紫電を撒き散らしながら天へと登っているような、はたまた天から落ちる雷のようなその翼は。

――明らかに自分達の扱うペルソナと同列の力を感じる。

（それも、かなり強い……ううん、私達1人1人の力よりも……）

何度も何度も注ぎ足して圧縮して、そうして無理矢理枠に収めたかのような人工的な力。
しかしその力の大きさ、と言うより密度と言った方が良いだろうか。
兎にも角にも視界の端に捉えている光の翼は、見た目だけでなく実際に強い力を有していると言う事が山岸には感じられたのだった。

そうしているうちに、アイギス達が戦闘を終えたらしく、近くに

シャドウの気配は感じられなくなっていた。

「皆さん、お疲れ様です！この調子で頑張りましょう！」

山岸のその言葉と同時に、一同の周囲が淡い光に包まれる。
癒しの波動、という彼女の持つ力の一部で対象の力を少し回復させるといったものだ。
優しく包み込むような光を受けたアイギス達は、すっきりした面持ちで山岸の方を振り返った。

「久々の戦闘でしたが十分動けましたね。とはいえまだ敵自体が強かった訳ではありませんが」

アイギスの言葉に一同は同意を示す。
タルタロスを踏破した特別課外活動部のメンバーからしたら、今の敵は『奇顔の庭アルカ』に出てくる程度のものだったろう。
山岸のアシストも相まって更に楽にシャドウを倒す事が出来た。

「それで、とりあえずあの光の翼を目指すって事で良いんでしょうか？」

先のシャドウの事などすぐに忘れ、次にすべきことを考えていると言う子供の癖に少し大人びた少年。
天田乾は天に昇る光を指差しながら尋ねてきた。

「そうですね、それが賢明でしょう。何の手がかりも無い今、あからさまな異変はあの光からしか見てとれませんし」

アイギスが同意すると、山岸やコロマルもそれに同意するように頷いた。

それと同時に、無線に連絡が入る。
桐条美鶴からだ。

『山岸か、そっちは大丈夫か？』

『はい、今のところ問題はありません。とりあえずあの光の翼を目指して移動しようかと思います』

『成程、君が直接あの光の翼を見た方がよさそうだな……
それならこちらは鈴科や他に無事な人が居ないか探す事にしよう』

『わかりました、気をつけて下さいね』

『ああ、ありがとう。そちらもな』

無線が切れる。
山岸は無線をしまうと、恐らく美鶴の声が聞こえていたのだろう。
アイギス達も光の翼へと向かうべくそちらの方を向いていた。

「それではあっちは無事みたいですし、私達も頑張って行きましょう！」

「「はい！」」「わう！」

そして3人＋1匹という表現するにあたって少しばかり変わっているパーティは、光の翼を目指すべく水たまりを蹴って駆けだしたのだった。

・・・

一方、特別課外活動部のもう半分はと言うと。

「ふむ……シャドウ自体はあまり強力なものではない、か……」

「しかしこんなイレギュラーの中だ。たまたま弱い奴に当たっただけかもしれん」

「まー楽な分には良いっすけどね、でも何か拍子抜けっつーか」

「じゅんぺーはそーやって気を抜くから足元すくわれるのよ」

丁度戦闘を終えたようだが、気合い入れた割にはシャドウ自体は強くなかった。

この位の敵なら4人がそれぞれ単独行動しても問題無い考えてしまう程に。

しかし、どんな不足な事態があるかわからないからこそ4人1組のパーティを組んだのだ。

一先ず山岸風香達の状況を聞いてから方針を考えることにしたのか、桐条美鶴は無線を取り出して連絡を飛ばしてみる。

『山岸か、そっちは大丈夫か?』

『はい、今のところ問題はありません。とりあえずあの光の翼を目指して移動しようかと思います』

どうやら無事のようだ。今のところは問題無いようで（この状況が既に問題なのだが）、安心したように軽く息を吐いた。

『成程、君が直接あの光の翼を見た方がよさそうだな……

それならこちらは鈴科や他に無事な人が居ないか探す事にしよう』

『わかりました、気をつけて下さいね』

『ああ、ありがとう。そちらもな』

無線を切る。

それと同時に3人の方を向き再び口を開いた。

「山岸達はあの翼を目指すらしいから、我々は鈴科や他に無事な人間が居ないか探そうと思うんだが…」

「それが良いだろうな」「ですね」「ですな」

その言葉に3人は同意する。

折角別れたのに同じ場所を目指しても仕方あるまいだろう。

どうやら3人も同じことを考えたらしく、光の翼に関しては一先ず山岸達に任せることにし、自分達はこのまま探索を続ける事にしたのだった。

・・・

そうしてかれこれ２０分位。

あれからシャドウの気配は感じられず、ただたまに見かける棺桶を見て少しだけ安心するだけだった。

棺桶を見て安心、と言うのもおかしな話だが、この場ではそれが当たり前となっている。

影時間においては、本来死を意味する棺桶は自身の身を守る盾となる。

死を司る空間で生きる為には、生を司る空間での死に包まれる必要があるからこその棺桶なのだろうか。
だとしたら随分な皮肉だ、と桐条美鶴はぼんやりと思う。

すると、唐突にシャドウの力を感じた。
とはいえ美鶴の探索能力は山岸風香のそれと比べると少し劣る。
その為はっきりあそこにいるだとかこちらにいるだとかまでは分からない。

「……どうやら、先のシャドウよりも数段強い敵のお出ましのようだ」

「「！」」

その言葉を聞いた3人は気を引き締め、警戒のレベルを一つ上げた。
中でも真田明彦の、張り巡らしかつ研ぎ澄まされた神経はすぐさまその力の出どころを発見し、それと同時に3人に知らせるべく声を上げる。

「お前ら、上だ！」

彼の言葉を聞いたと同時に、トマトか何かが潰れたような、聞いて少し気持ち悪いと思う音が上空から発せられた。
そしてその音の正体は。

「……オラァァァ！！！」

誰かの叫び声と同時に、鳥の様なシャドウ―ブラックレイヴンが数匹まとめて地面にたたきつけられ、その中身を辺りに巻き散らす。
その上にはブラックレイヴン達を踏みつけるように地面へと叩き落とした張本人が居たのだが。

「うげっ、汚ぇ！ふざけんなこの靴たけーんだぞ！？」

「それを言うなら私だってそうよ、ほらドレスのすそに何か付いちゃったじゃない！」

「そんなもんお前おっさんから買ってもらえよ！！貢いでもらえよ！！」

「あなただって新しく買えばいいじゃない！金持ちの癖に！！」

女の子を抱えてその子と口論をしている。
シャドウを撃破したと言うのにイマイチ緊張感に欠ける2人を見て、美鶴達は軽くずっこけそうになった。

「うるせぇ！最近買った靴をまた買いに行くって恥ずかしいだろうが！何か別の奴買うか畜生！」

「じゃあ私のドレスも見繕ってよ！よっ、日本一の優男！」

「けなしてんだろ、それ」

「むしろあなたからしたらご褒美でしょ？」

「いつ俺はドM認定されたんだよ!?」

「ていうか何であの鳥をあんな倒し方したのよ?もっと楽な方法があったんじゃ……」

ドレスの少女がそこまで口を開いたところで周りの状況に気がついた。

2人の口論をポカンと眺める4人組が居る。

「よーやくこの場で無事な人間を発見したんだ、さっさと会いに行きたいって思うのは当然だろ?」

その代償が靴なら、安いもんだ。とちょっと格好よさげに髪をかきあげるは、垣根提督。

どうやら戦闘中で上空に居たにも関わらず4人をいち早く発見し、シャドウを倒すついでに自分も地面へと降りようと考えたようだ。

女の子を1人抱えながらというハンデをものともしない戦闘を目の当たりにした美鶴達は、何が何だか分からないと言う表情をしていた。

そして何より特筆すべきは。

「あー、君達取り込み中のとこ悪いのだが……その背中の翼は……」

代表して美鶴が垣根に尋ねた。

「あ?ここが学園都市って事考えりゃわかるだろ」

ポイッとドレスの少女を地面に捨てた垣根が翼を消しながらも美

鶴の質問にさらっと答える。
その際ドレスの少女が何か文句を言っていたのだが、垣根がそれを無視するので美鶴もそっとしておこうと思い、思考を切り替える。
確かに、学園都市は「超能力者を育成する機関」である事は知っているのだが、こんな力は初めて見た。
何より垣根の発する威圧感が、「この翼はただの翼ではない」と言う事をひしひしと感じさせる。

そんな人間が突然現れたのだ。いくら無事な人間を探すと言うことを条件に入れていたとしても警戒は解けない。

「成程、超能力か……それで、君達は私達に何の用かな？
おっと、自己紹介がまだだったな。私は桐条美鶴と言う者だ」

警戒は解けないが、敵と確定した訳でも無い。
なるべく敵対はしたくない為まずは対話から入る事にする。
そんな美鶴を見た垣根は感心したようにほうと息を吐いた。

「へぇ……この潰れた何かを見ても動揺はない、か……
てこたあこいつが何か、俺よりも知ってるってことだな。
そんでご丁寧にアリガトウ。俺の名は垣根提督だ」

一発目でジャックポットだ。それを感じた垣根はニヤリと笑う。
その意味深な笑みは４人の警戒を引き上げるに十分なもので、いつでも動けるように各々が召喚器をギュッと握りしめていた。
一見拳銃にしか見えないそれをしっかり握っている４人を見た垣根は、拳銃など効かないのにとか思いながらも情報を引き出すべく口を開く。

「あー、待て待て別に敵対するつもりはねぇよ。

俺らだって訳もわからずこの何か良くわからんのに襲われたんだからよ。
とりあえず、情報が欲しい。俺がお前らにやれる情報はないかもしれねぇけどよ」

威圧を解くように両手を上げて攻撃意志の否定をする。
それにより少しだけ警戒心を解いた美鶴が再び口を開いた。

「成程な……まず、君が今倒したのは『シャドウ』と呼ばれるモノだ。
そしてそのシャドウが現れる時間の事を『影時間』と呼び、普通の人間にはその時間を感知する事は出来ない。
それを証明するのが、棺桶なのだが……」

「棺桶……納得。だからあいつらは棺桶になってんのか。その口ぶりだとむしろ棺桶の奴らの方が安全ってことだよな？」

「ひょっとして君達の知り合いも棺桶になったのか？だとしたら安心して欲しい、その通りだからだ。
しかし、私達はこうして動くことが出来るんだが……」

「棺桶になってる奴とお前らに、何か違いと言うか明確な差があるってことだな？」

「そうだ。理解が早くて助かる」

美鶴の言葉にうんうんと頷きながらとめどなく質疑応答を続ける。
どうやら美鶴の目の前に居る金髪の少年は、かなり頭が良いらしくすんなりと現状を受け入れて行った。

「それで、その差ってのはなんだ？」

「ああ、この力の事だ」

カチャリ。

別にそんな音が鳴った訳ではないのだが、何となく垣根の脳内に響き渡った。

「おいおい、自殺でもする気か？」

「ふふ、まあ見ててくれ」

美鶴が召喚器……垣根からしたら拳銃なのだが、それをこめかみに突きつけているのだ。

窮地に追いやられて頭に拳銃突きつけて自殺する、何て光景など何回か見た事があるので別に驚くような事でも無いのだが、唐突にそんな行動をされると突っ込みを入れざるを得ない。

そう言う訳で垣根が怪訝な表情を浮かべながら美鶴に尋ねたのだが、どうやら違うらしい。

ふうん、と相槌を打ちながら美鶴の動向に注目する事にした。

「これが……ペルソナ、だ！」

突きつけた召喚器の引き鉄を引く。

すると美鶴の背後からペルソナ『アルテミシア』が出現した。

突如現れた異形に垣根とドレスの少女は今日一番の驚きを示したのだが、すぐに落ちつきを取り戻して美鶴に質問をする。

「で、そのペルソナってのを使えるか使えないかで棺桶行きか否かが決まる訳だ」

「そうだな。一応一般人でもこの場に来てしまうと言うイレギュラーもあるのだが……」

美鶴は言葉を区切り、垣根とドレスの少女、そして潰れて消滅したシャドウの跡を見やる。

「まあ、十中八九君達は『こちら側』だろうな」

「そうか、俺にもペルソナってのが使えるのか……」

顎に手をやりながら少し思案顔を浮かべる垣根を見て、美鶴は軽く提案をしてみることにした。

「どうだ、この召喚器をこめかみにつきつけ引き鉄を引けたらペルソナがだせるんだが……」

ただでさえ能力者として強者である、と言う事が分かっているのだ。

それにペルソナの能力を加えれば確実に戦力になる為、彼の協力を得られればと思い美鶴は提案したのだが。

「いや、俺は止めとくわ」

垣根は考える間もなくその提案を断った。

「む、何故だ?よかったら理由も聞かせて欲しいのだが」

「単なる我儘さ。ガキみてえな、な……」

「ほう、物分かりの良い君が子供、か……」

「そうさ、こう見えて俺はこの力に愛着があるんだよ。どうも他の力に頼る気にはならねぇんだ」

「……そうか、なら仕方ないな」

おどけながら口を開く垣根に対し、美鶴は軽く笑みを浮かべながら身を引いた。

どちらにせよ今すぐ召喚器を準備できる訳でもないのだから。

「所で、お前達2人はこの後どうするんだ？」

ここで、美鶴と垣根のやり取りを見ていた真田が垣根とドレスの少女に尋ねた。

情報が欲しいからここに来た、と言うのは分かるがその後どうするかを決めるのは垣根達自身なのだ、状況が状況なので垣根の動向も気になる所である。

「そういや現状を把握する事しか頭に無かったからな……どうしたものか」

その発想は無かった、と言った表情を浮かべる垣根は本気で考え込み始める。

「だったらさ、私達と一緒に行動しない？戦力は多いに越したこと無いと思うけど！」

「そうだぜ、お前らみたいに無事な奴がまだいるかもしれねえから、それ探すの手伝って欲しいんだ！」

「あ？あーそれが一番かもなあ……お前もそれが良いだろ？空中で抱えられるよりかは」

「そうね、私も別に文句は無いわ」

そんな垣根を見た岳羽や伊織が垣根とドレスの少女の勧誘を始めた。

確かに戦力は多いに越したことはないのだが。

（戦場……死が付きまとうこの場に置いて、平常心どころかおどける余裕すらあるこの２人……警戒に値すると言って差し支えないだろう）

美鶴は内心警戒していた。

以前に一方通行と邂逅した時も垣根に抱いた警戒心を一方通行にも抱いたものだったが、あの時は一方通行も自身の状況を包み隠さず全て教えた為に美鶴もその警戒心を解いたのだが。

（……彼はまだ何か隠している）

隠している、と言うよりはこちらが聞かないから答えていない、と言ったものだろうか。

しかしそれが何なのかは美鶴には分からずに、ただただ警戒心が募るばかりだった。

（……上手いことこいつらの中に混ざれたな）

一方で垣根は岳羽や伊織の相手を適当にこなしつつ、頭では別の事を考えていた。

（ペルソナ……明らかに学園都市の中で見られる異能とはまた一線を画した代物に見える）

（表も裏もそれなりに見てきた俺ですら、「頭に拳銃突きつけて異形を召喚する」なんて超能力は初めて見たしな……）

垣根が求める『黄昏の羽根』が美鶴達の手にした召喚器の中に内蔵されている、と言う事を彼は知らない。

故にこのペルソナと言う力が『絶対能力進化実験』の要である、と言う事にも気付けず。

兎にも角にも今の垣根には、あらゆる点で情報が足りてなかった。

ペルソナにシャドウに影時間。

いくら思考を巡らせようとも知らない事は分からないのだ。

（だったらこいつらに着いてった方が色々と分かることもあるかもしれないな）

そんな垣根なのだが、一つだけ仮定を頭の中に浮かべることが出来ていた。

（……棺桶になる奴とならない奴の条件……）

先程、美鶴は『ペルソナ』を使えるか否かと言ってはいたのだが。

確かにそれも正解なのだろう。しかしここは学園都市、超能力者の住む街だ。

それを知る垣根は、別の正解を頭に思い浮かべていた。

（それの証明には他に無事な奴を探す必要があるな……）

だとすると、美鶴達と共に行動し人を探すと言うのはやはり有効だろう。

そんな訳で岳羽や伊織の提案を受け入れ、しばらく一緒に行動する事にしたのだった。

・・・

とある大通り。

シャドウが円を作るように並び、誰かを囲うように蠢いていた。

その中心には、黄色い女。

彼女は呪詛のように学園都市に、アレイスター＝クロウリーに怨み言を呟いていた。

「クソ、クソが、舐めやがって、殺す、幻想殺しだの超能力者だの後回しだ……殺してやる！

そうか、これが虚数学区・五行機関の全貌……いや、まだ一部かもしれないけどそんなことどうだってイイ！！

舐めやがって、そこまでして、私達を貶めたいかアアアアァァアァァァァ！！！」

ヴェントは八つ当たりをするようにハンマーを振りまわす。

すると彼女の周りに居たシャドウ達が突如として現れた風に吹き飛ばされ、互いの身体が凶器となり互いにぶつかって消滅させられてゆく。

「ゴハッ……！！」

しかし、ヴェントの身体は魔術と引き換えに蝕まれて行く。
と言うよりは『そう言う空間』と化している為に、魔術を使う事自体が毒になってしまっているのだがそんなことお構いなしの一撃だった。

「ハァ……ハァ……一先ず、あのクソッタレの似非天使をブッつぶす……アレイスター……アンタも絶対殺してやる……」

ハンマーを杖のように扱い、フラフラとおぼつかない足取りのままにヴェントは光の翼の下へと向かう。

ただ一つ、心に科学への憎しみを抱いて。

## そのはちじゅうなな　いがいとよわい（後書き）

ていとくんがペルソナの存在を知りました

## そのはちじゅうはち　しゅうそくする（前書き）

ぼちぼち終わりが見えてきた気がする

## そのはちじゅうはち　しゅうそくする

「クソ！何だよこれ！？」

ここは学園都市のはずだ。

なのに目の前にはヒトでは無くシャドウ。

上条当麻は学園都市に何が起きたかわからないまま、目の前で蠢いているシャドウを殲滅していた。

そしてその視線の先には。

「あの光……」

あれが間違いなく何らかの形で関わっている。

直感以前の問題だった。他の面子もあの光を見て動いているに違いない、と上条は考えとりあえず光の翼の下へと向かおうとしていたのだが。

「ああ畜生！オケアノス、マハブフーラだ！！」

いい加減煩わしい。

そう感じた上条は氷の壁を作り、無理矢理シャドウの居ない道を作りだした。

そしてその道を一気に駆け抜けると、氷の道の終点にシャドウの姿を発見する。

「またかよ畜生！！」

人工の道は人が1人通れる程度にしか開いておらず、シャドウが

入って来ることは叶わないようだが、はっきりと待ち伏せしていると言う事が見て取れる。
しかし氷の壁によって何体のシャドウが居るかまでは分からない。
瞬時に戦闘は避けると判断した上条は、再び銃口をこめかみに突きつけると、

「オケアノス、ブフーラ！」

自身の望みをかなえるべく、オケアノスに攻撃の指示を出した。
背後の氷の壁を無理矢理突き破りながらも、オケアノスは前方に氷の塊を作りだす。
一見自分自身で行き止まりを作ったかにみえるがそうではない。
上条は目の前の壁に臆することなく賭ける速度を上昇させた。

「……よっ、と！」

それは壁では無く、氷壁の上へとよじ登る為の足場。
勢いをつけた上条は一足飛びに氷の頂点へとたどり着いた。

「うげ、いっぱい居るんですけど……」

氷壁の下ではラッシュアワーを見ているかのようにシャドウ達がうじゃうじゃといた。流石に気持ち悪い。
氷の壁は高さにして５ｍ程しかないので、シャドウ達の攻撃も普通に届く。
このまま氷の壁を階段のように造り出してビルの上にでも向かおうか、とも思ったが。

「それならこいつら倒した方が良いよな」

その音で誰かがこっちに来るかもしれないし。
淡い期待を抱きながら、上条はペルソナを召喚する。

「……クロノス、マハジオンガ」

あの光の翼に負けない程の紫電が、その場を支配しシャドウ達を屠って行く。誰か気付いてくれ、という自己主張を発しながら。

・・・

「あーもう！雑魚は引っ込んでやがれ！！！」

罵倒の言葉と同時に射出されるは、『原子崩し』と言う名の破壊の光。
一閃、シャドウ達の合間を通過するとその射線上に居た全てのシャドウを貫いて行く。

一体何度繰り返した事だろうか。
確かに弱いので倒すのに苦労は無いが、こうもたくさん群がって来られると非常にわずらわしい。

そしてその怒涛とも呼べる攻撃を運良くすりぬけて接近してきたシャドウが1体。
麦野は右手でシャドウの頭を掴むとそのまま原子崩しを発射した。
その光景を見て麦野と共闘する少女はげっそりとした顔を浮かべる。

「逃げても逃げてもこいつらが超居ますね！他の場所でも超こんなンだとしたら、生存者は滅多にいねェンじゃないですか！？」

ブン、グシャ、ブン、グシャ。
絹旗最愛の攻撃を擬音で表現するならこのようになるだろう。
単純な力押し。物量・重量にモノを言わせた連打。
おそらく次の日に車の持ち主がそれを見たら「ローン何年残ってたっけ」と絶望する事請け合いである。
絹旗は、ステーションワゴンを振りまわしていた。
明らかに体格と不釣り合いなそれを軽々と振りまわすその様は、最早見る者にトラウマを植え付けるレベルなのではと錯覚を覚えてしまう程である。
その光景を捉えた麦野もまた軽くげっそりとした表情をしていた。
「つーかさ絹旗、その車の持ち主の事考えてる？」
「ていうか麦野、周りの建物の事超考えてます？」
「「……」」
「「仕方ない仕方ない」」
２人が生み出した破壊の爪痕、それを互いに見やると２人は何も言わず戦闘を続けることにした。
「これはこの車の超持ち主の分！これも超持ち主の分！これも！これも！」
と、絹旗は原形をとどめていない車の持ち主の分までシャドウを倒すと誓いながら鉄の塊を振りまわしている。

「これはあのビルの分！これはあの銀行の分！これはあの郵便局の分！！」

一方で麦野も周りの建物の分まであの異形共を倒すと誓いながら原子崩しをあちこちに飛ばしている。

この場における破壊の主だった理由は麦野と絹旗だった。

しかし、その一方的な蹂躙も終わりを迎えようとしている。

「超さらばです！レガシィィィィ！！！」

車種名を叫びながら絹旗は車を真っすぐに放り投げた。

その投擲によってグシャグシャとシャドウが巻き込まれて行くのだが、突如として車が真っ二つになり爆発した。

「レガシィィイイィィィイイ！！？」

思わず絹旗も声を上げた。心からの悲しみを表現するかのように。

何せ短い間とはいえ戦闘を共にした相棒（戦友）をこうもあっさり真っ二つにされてしまったのだから。

そしてその怒りは絹旗の視線の先に居るシャドウへと向かう。

「超良い度胸ですね、私の大事な超戦友をぶっ壊してくれるなンて」

いや、あれはお前のじゃない。

そんな突っ込みが何処からともなく聞こえてきそうなものだったが、それはともかく絹旗の目の前にはマドハンドに大剣を持たせたような異形が3体居た。

その名を『判決の剣』。恐らく3体のうちどれかの剣によってレガシィは分割されてしまったのだろう。
絹旗は、必ず仇は取ると心に誓ってガードレールを手に取ったのだった。

「何やってんだアイツは……」

小さく溜息をつきながら次々とシャドウを倒して行く麦野。
如何に効率よく、如何に早く、如何に多く倒すかだけを頭に入れて、ひたすらシューティングゲーム感覚でシャドウを消し飛ばしていたのだが、突如としてシャドウの動きが止まる。

「……？」

今までは有無を言わさず襲って来たというのに、今更どうしたのだと言った怪訝そうな表情を浮かべる麦野だったが、シャドウ達の動きが止まった原因がすぐに分かった。

「「……」」

それは3体の巨人。
明らかにそこらのシャドウとは別格の力を持ったそれは、周りのシャドウをおびえさせるに十分な威圧感を放っている。
その名は『平衡の巨人』。全身が城壁で造られたかのようで、その手には判決の剣程ではないがかなりの業物が握られていた。

それを見た麦野は、先程までつまらなそうにしていたのだがようやく楽しそうで、それでいて獰猛な笑みを浮かべる。

「はっ！さっきまでイージーモードでクソつまんねぇって思ってた

が、ようやくまともそうなのが現れたじゃねぇか！！」

その言葉と同時に平衡の巨人の一体が剣を振るった。

それによりその周辺にいたシャドウ達が一気に殲滅される。

「……何だ？仲間割れかぁ！？それとも私なんぞの攻撃よりも自分の方が沢山潰せるってアピールかぁ！！？

だったら見せてやるよ！！私の超能力をよォ！！」

真実は定かではないが、巨人による一撃を自分へ向けた挑発だと判断した麦野は、懐から三角形のパネルが組み合わさったカードの形状をした何かを取りだした。

そのパネルをトランプ投げの要領で巨人たちに向けて放ると、続いてそのパネルめがけて原子崩しを放つ。

するとパネルに直撃した電子線と言う名の破壊が辺り一面に拡散され、一瞬にして大量のシャドウが消滅した。

そして土煙が立ち込めるが雨のお陰ですぐに収まる。

「……！」

しかし、そんな中で平衡の巨人3体だけは無傷。

それを見た麦野は一瞬驚きを示すがすぐに表情を変えた。

「ははははは！！！イイね、やっぱただやられるだけの的を相手にしてもつまんねぇもんなぁ！！」

高らかに笑う麦野は、更に戦果の渦へと自ら呑まれて行くのだった。

・・・

「……！」

「どうしたんですか、風香さん？」

光の翼に向かって移動中の時の事。

突如として山岸風香が立ち止まると、虚空を見上げた。

その行動に合わせるように、ある二つの地点から紫電と光線が空へと向かって舞う。

それを見た山岸やアイギス、天田乾やコロマルは顔を見合わせた。

「あれは……！」

あちこちで戦闘の気配を感じていた山岸であったが、ここ一番の力を感じた為に思わず立ち止まってしまったのだ。

紫電が巡った方向では戦闘が終わったように感じられたが、一方で光線の方はそれが交戦の合図のように感じられ、実際に力を持ったシャドウがその方向から居ると山岸は判断した。

「強いシャドウです！先の光線が見えた方向に居ます！恐らく……誰か戦っています！」

「「！」」

それはすなわち、自分達以外にも生存者がいると言う事だ。

だとしたら早く救出に向かわなければならない。

しかし、シャドウの気配が無いとは言え紫電が舞った方角にも誰かが居る可能性が高かった。

「二手に分かれますか？今のところそこまで強力なシャドウは出ていませんし」

天田が山岸とアイギスに尋ねる。

しかし、今までで一番強い気配を今まさに感じているのだから二手に分かれるのは得策でないように思える。

紫電が見えた方向も光線が見えた方向も、どちらも自分達よりも光の翼に近い位置にあったのだが、紫電と光線自体に距離があったのが問題であった。

とここで、二兎を追う者なんとやらと言う言葉が山岸の頭をよぎる。

どちらかに集中すべきか、分散すべきか。

「……まず戦闘をしている方へ行ってみましょう。
もう片方の戦闘は終わっているみたいですし、
そちらへ向かっても誰も居ない可能性が大きいです」

考えをまとめあぐねている山岸の代わりに、アイギスが結論を出す。

ただでさえ一刻を争う時に戦力を削るのはまずいと判断したのだろう。

「そうですね、僕もそれが良いと思います。もう片方も気になりますけど……」「わうわう」

「では……行きましょうか」

「「はい！」」「わふ！」

そうして再び3人と1匹は駆けだすのだった。

・・・

「ここまできたら大丈夫でしょう。と、ミサカは大丈夫じゃないフラグを立ててみます」

「そう言うの止めて」

９９８２号と芳川桔梗は命からがらシャドウ達の追撃を逃れていた。

それまでは考える余裕など皆無だったが、ようやく落ち着いたのでこの現象について考える事にする。

「何でここにシャドウが居るんでしょうね。と、ミサカは息を整えながら芳川に尋ねてみます」

「分からないわ……何にせよ連絡取らなくちゃ……ってあれ？」

明らかに緊急事態だ。一方通行だけでなく他の皆も何かしら動いているに違いない。

そう考えて携帯電話を開いたのだが、電源が入らない。

「充電切れ……はあり得ないわね、毎日充電してるし」

「とりあえず、そこに見える棺桶も気になりますね。

と、ミサカは今までどうして気付かなかったのかと反省します」

９９８２号が指差す方向には棺桶が何体か鎮座していた。

「ところで、棺桶の単位って何て言えばいいのかしら。箱？ケース

？」

「少なくともその二つは違う気がします。個で良いんじゃないですか？」

と、ミサカは適当に返答します」

「……」

「……」

「「はぁ……」」

どうしたものか。

全く方針が思い浮かばない。

歩きまわっても泥沼に沈んで行く気がするし、かといって動かなくてもシャドウに気付かれればアウトだ。

更に致命的なのは、シャドウが居るのにこっちはペルソナを使えないと言う事実。

やはり『召喚器』が関係している、と言う事なのだろう。

「全く、ハードモードすぎじゃね？と、ミサカは愚痴ってみます」

「ちょっとしたバイオハザードね」

「他人事みたいに言わないでくださいよ、あなたも当事者なんですし」

「て言ってもねぇ……ペルソナ使えないなら出番は無いかなって…」

「そんなんミサカも同じですよ……」

「「……はぁ」」

とりあえず誰か居ないか探すしかないだろう。
そのような事を芳川が提案しようとした瞬間、それは起きた。

立ち上る、二つの光。
一つは雷光、一つは光線。

曲がりくねって拡散する紫電と、真っすぐに拡散する光線。
とりあえず眼に見えた二つの地点には何かがある、と言う事だろう。

「これは……」

「行くしかありませんね。と、ミサカは芳川の言葉を引き継ぎます」

その言葉に、否定する理由が無かった。

・・・

「あれは……」

一方で、桐条美鶴らも先程山岸風香達や９９８２号達が見た光景を目の当たりにしていた。
それはすなわち、生存者の可能性を示す指標であったのだが。

「遠すぎるな……」

垣根提督が呟いた。
確かに、誰かが居る可能性はある。しかしここから向かおうと思うと結構な距離があり、行ったところで既に誰も居ないかもしれない。

「だがまあ、このまま闇雲に動き回っていても埒が明かないだろう。だったらとりあえずどちらかに向かってみるのも悪くない」

真田明彦の言う通り、情報も無い今やみくもに走り回るよりかは良いだろう。
伊織順平や岳羽ゆかりもまた同意見のようだ。

「そうッスね！誰か戦ってるんだとしたらなおさら行かないと！」

「誰か居るとして、無事だったら良いんだけど……」

そして４人は紫電が見えた方向へと駆けだす。
続いて、垣根やドレスの少女も特に文句は無いらしくとりあえず前を走る４人について行った。

・・・

「あーもう！何やってるのよ、インデックスの奴！！」

光の翼だけでなく、御坂美琴が扱う電撃の様な紫電と、電撃使いである御坂だからこそわかった事だがもう一つの光線もまた電子を扱ったものである攻撃であり、それら二つをみて驚きを示している瞬間に自身の制止を振り切ってインデックスが外へと行ってしまった。
追おうにもここには護るべき患者が大勢いる。

どちらかを選べ、などと言うのは御坂には少し酷だろう。

一先ず判断に迷ったので他の妹達やゲコ太先生に相談しようと思って妹達の下へ向かったのだが。

「どうしたの！？」

そこには無造作に倒れ伏している１００３２号、１００３９号、１３５７７号の姿があった。

すぐさま３人に駆け寄る御坂だったが、呼吸はしっかりしている為、何らかの原因で身体が動かせなくなっている事が見て取れた。

（とにかくゲコ太先生を……）

あの医者なら何か分かるかも、そう考えて病院車の中に駆け込んだのだが。

「！？」

そこには異様な棺桶しか存在しなかった。

「なに……これ……？」

敵襲？ありえない。

気配も影も形もなにも感じられなかった。

確かに、インデックスと口論している最中に何か違和感を覚えたのだが、インデックスを引きとめることで頭がいっぱいだった為にそちらに関して頭が回っていなかった。

恐らく、その違和感がこの現象の正体で。

モゾリ、と何かが蠢く音が病院車の外で聞こえた。

「……」

御坂は何も言わず病院車の外に出る。

恐らく、イヤ確実に。

「……やっぱり、アンタら……」

シャドウの仕業。

「インデックスの事も気になるけど……」

ピンッ、と1枚のメダルを宙へ弾く。

「まずは自分の妹を護らなきゃね！！」

そして放つは自身の十八番。

それによってあっけなくシャドウを殲滅出来たのだが。

「そういえば、調子自体は本調子ね……」

十全に能力を発揮していた。

その事に違和感を感じ、ペルソナを召喚しようとしたのだが。

「……成程、ペルソナは出せないのね」

1人納得する御坂だったが、だとすると非常にまずい。

この場で戦力になるのは自分と一方通行、それに召喚器を持つ上

条しか居ないのではないか？
９９８２号は武装していれば問題無いのだろうが、果たしてどうだろう。

考える事柄が多すぎる為、とりあえず妹達の様子を診ることにした。

「……」

この異常事態、恐らくミサカネットワークが関わっているのだろう。
そう考えた御坂は、問題のミサカネットワークへの侵入を試みる。
何せ彼女の能力は『電撃使い（エレクトロマスター）』。
自身のクローンである妹達の脳波リンクに干渉する事も理論上は可能なのだが。

「……！？」

しかしそれは叶わなかった。

（……何かプロテクトが掛けられていた、って印象ね……
それを為すには打ち止めと言う上位個体の存在が不可欠。
だとすると、打ち止めは……）

確かに、この試みは初めての事で成功するかは軽く賭けのようなものだった。
失敗すると自身の脳が焼き切れてしまう程度には。

それを迷わず実行するあたり妹達の大切さが眼に見える事であるが、このような形で防がれるとは思わなかった。

「成程ね、敵は一筋縄じゃいかないってことか……」

ギリッと歯ぎしりをする御坂であるが、この場を離れるわけにはいかない。

どうにもできないジレンマが、御坂を襲っていた。

## そのはちじゅうはち　しゅうそくする（後書き）

いい加減グダってるよね、ごめん

# そのはちじゅうきゅう　ごめんなさい（前書き）

勝手にドレスの少女とかゴーグルのレベル決めましたと注意書き

**そのはちじゅうきゅう　ごめんなさい**

＜天上楽土Ｆ１＞

「……」

「……」

無言。

一方通行は近くの柱に寄りかかり、木山春生は花壇の縁を椅子にしていた。

結構な時間を待機に……と言ってもまだ３０分も経っていないだろうか、兎に角待機に費やしているが、未だに帰ってきていない。

本来ここまでする義理は無かったのだが、どちらにせよクマが居ないと帰れないのだから仕方ない。

そんな中で、一方通行は物憂げにする木山の顔を見ながら、一つ疑問を浮かべた。

（……やっぱ影が出てくる気配がねェな）

今までマヨナカテレビに入った中で自身の影と遭遇していないのは一方通行のみで、他の面々は自身の恐怖やトラウマを乗り越えてきた。

クマに関してはある意味例外であるが、他の面々はマヨナカテレビに入ったその日に自身の影と遭遇している。

このまま影が出てこないのであれば、それはすなわちペルソナを扱う事が出来ると言う事実を示しているのではないか？

以前桐条美鶴らと初めて対面した際、美鶴達もまた『影』と相対せねばマヨナカテレビではペルソナを扱えない、と一方通行は言っ

たがそうではない。
美鶴達は問題無くペルソナを扱う事が出来るだろう。布束砥信のように暴走さえしなければ。
そして話を聞く限りでは美鶴達はペルソナの制御を出来ているらしいのでとどのつまり問題など無いと言う訳だ。
ただ、それを証明する術は実際に美鶴達のうち誰かがマヨナカテレビに入る必要がある為真実は不明であるが。

あの時の一方通行の言葉はただ単に、彼女らをマヨナカテレビにまで付き合わせる必要が無いと判断した為の発言である。

それはさておき、未だに木山に異変が見られない、と言うのは偶然かはたまた必然か……

「ン……？」

すると、門の奥から人影が見えてきた。
どうやらようやく到着したらしい。

・・・

（『幻想猛獣』の上位互換……いや、正しい形がヒューズ＝カザキリ……
しかしその根本、『ＡＩＭ拡散力場の塊』つまりは『自分だけの現実』を元にして造られていると言うことには変わりない……）

木原数多の思考は未だに続いていた。
打ち止めは相も変わらず頭に機材を付けた状態で眠り続け、木原の背後にある窓からは光の翼が学園都市の明かりとして機能している。

（自分だけの現実とはすなわち、心の形……）

心の形は千差万別。

それと同時に、ペルソナの形も。

（はん、ｐｅｒｓｏｎａｌｒｅａｌｉｔｙたぁよく言ったもんだな……）

自分だけの現実（パーソナルリアリティ）というネーミングは、ペルソナから取って来たものなのではないか？などと考えた時期もあったが、そんな駄洒落みたいなネーミング誰がするかいとか思いなおした訳で、まさかそれが当たりだとは思わなかった。

と言うよりは、自分で勝手にその可能性を否定していたと言った方が正しいだろう。

やはり、魔術の時もそうだったが自分自身で築き上げてきた研究を、常識を崩すと言う事は簡単な事では無い。

しかし、そうでなくては見る事は出来ない。

アレイスター＝クロウリーの見ている景色はこんなものではない。

（待ってろよ……いや、どこまでも進めよアレイスター。

じゃねぇと追いこしちまって培養液からポイだわな）

木原数多は、着実にアレイスターの持つ知識へと近づいていた。

・・・

＜天上楽土Ｆ１＞

「よォやく来たか……」

先導するクマと布束砥信の後ろから、恐る恐る歩みを進める６人。
そのうち５人は木山春生の教え子で、残りの１人は教え子の１人の友人。

「おーっす一方通行ン！待った～？」

「あァ、あくびが出る程になァ」

ようやく動ける。
そう感じた一方通行は一同が無事な事に少しだけ安堵しながら口を開いた。

「ｗｅｌｌ、木山春生も居るわ。皆行かないの？」

いつの間に仲良くなったのか、布束が子供達の先導をしていた。
一方通行は、顔に似合わず布束は保母さんとか似合うんじゃねェ？とか思ったりしていたのだが、どうにもその子供達が動く気配が無い。

「お、お前達……どうしたんだ……？」

思わず木山が尋ねる。
すると子供達はビクンと肩を震わせた。まるで悪さがばれてしまった時のように。

「あの……私達……先生とは一緒に行けません」

「な！？……どうして……？」

枝先絆理が木山に対して放ったのは、拒絶の言葉。
木山は驚きのあまり声を荒げるが、ぶんぶんと顔を振り落ちつけると続いて優しく尋ねた。

「「……」」

しかし、子供達は口を開かず、ただただ俯いている。
そんな中、教え子たちの代わりに意を決したように春上衿衣が口を開いた。

「……私達は、人を、殺した、の」

恐る恐る言ったせいか、言葉が区切り区切りになっていたが意味は伝わった。

人を、殺した。

その言葉に他の子供達は更に肩を震わせる。
その反応から察するに、春上は嘘や冗談を言っている訳ではないということがよく分かった。
そしてその告白を皮切りに、子供達が口を開く。

「僕達は、人を殺しました。命令されるがままに、何人も、殺しました」

「実験の一環と言って、魔術師と呼ばれた人々を、殺しました」

「だから、ここに来たのは木山先生にお別れを言う為です」

「本当は他の皆にも言いたかったけど、木山先生から伝えておいてほしいです」

「俺達はもう、皆と一緒に居られません。ですが」

――――どうか、嫌いにならないでください。

5人が一斉に頭を下げる。

木山を見上げるその瞳からは、悲しみしか見てとれなかった。

その事実を初めて知った木山だけでは無く、布束やクマも驚愕の表情を浮かべている。

そんな中でただ一人、事の顛末を一方通行はただただ眺めていた。

「……」

対して、木山は言葉を選ぶ為か何も言葉にせずただただその場に立ちつくしていた。

その様子を柱に寄りかかったまま眺めている一方通行は、ただ一

言。

「……先に生きる者と書いて先生と読むンだ、お前がそンなンでいいのかよ？」

「……！」

そうだ、自分のすべきこと等何も変わらない。

自分は子供達を護り、導くだけだ。

人を殺した？それがどうしたと言うのだ。

確かに殺された側は気の毒ではあるが、自分は正義を名乗るつもりなど皆無だ。

故に殺された側に立って糾弾するつもりなど無い。

悪と罵られようとも構わない。

ただただ、子供達の為だけに動く。

子供達が後悔していると言うのなら、その罪を一緒に背負ってやる。

子供達が罪滅ぼしをしたいと言うのなら、一緒に動いてやる。

だから、だから……！

「そんな、悲しい事を、言わないでくれ」

ちゃんと意図は、意志は伝わっただろうか。口が震えて上手くしゃべれなかった。

駄目だ、目頭が何だか熱くて前が見えない。気付いたら腰に何か

ぶつかったような感触を受けた。子供達だ。

自分はこれからも先生として皆と一緒に居ても良いのだろうか。
兎に角皆の顔が見たい。

木山春生は袖で顔を拭うと、５人を抱きとめるのだった。

そんな中、木山達をぼんやりと見守る影が一つ。
それに対して一方通行は声をかけた。

「……お前は行かなくていいのかァ？」

「私は……あの人の教え子じゃないの」

「そォか」

「……私は悪い人なの。あなた達はどうして何も言わないの？」

「逆に悪い奴が居たらいちいち説教して回る人間が居ると思ってンのかァ？」

「それは……そう、なの」

「それにお前にだって説教してくれるダチの１人や２人居るだろ？悪ィと思うンならそいつに懺悔でもしてきたらどォだ？ちったァ気が楽になるだろォぜ。
……俺が言うのもなンだが、人間と言わず生きてる奴は大なり小なり何かしら誰かしらを殺して生きて来てンだ。
そう深く考え過ぎる事もねェと思うがな」

本当にどの口が言うんだ、と一方通行は内心自嘲しながら春上に対して事もなげに言う。
それをどう受け止めるかは春上自身の問題だ、と割と無責任な事も同時に考えながら。

・・・

（さて、テレスティーナの馬鹿はいつまでも能力体結晶にしがみついて悪あがきをしてたが……）

存外に良い仕事をする、と木原数多はほくそ笑んだ。
何せ自分だけの現実やＡＩＭ拡散力場と、ペルソナとの相互関係を導き出せた要因にテレスティーナ＝木原＝ライフラインの行っていた実験が挙げられるからだ。

（ポルターガイスト事件……あれの真相はあのガキ……春上衿衣の精神感応が枝先絆理の思考と共鳴した事に起因する）

元々レベル２程度の『精神感応（テレパシー）』である春上だが、場合によってはレベル４相当まで強度が跳ね上がる事が分かっている。
それは言うなれば、布束砥信の実験の際に見られた暴走に近い。
自分だけの現実が乱される事による暴走と、ペルソナを制御できずに起こる暴走。

これはどちらも『心』のリミッターが外れる、とでも表現したらよいだろうか。

（つまり、あの悪あがきは存外的外れなもんでもねぇってことか）

そう思って木山春生の教え子を使うついでに春上も連れて来たのだが。

（ま、あのガキじゃ元々のレベルが低すぎたって事だな。だが、新たな可能性は示せた）

ミサカネットワークによって発現したヒューズ＝カザキリもまた、ある種の精神感応による共鳴である。

何もかも同一であるクローン体による、力の重ね掛けとでも表現すれば良いだろうか。

その結果が、窓の外に見える力の片鱗だ。

「楽しみだなぁ、おい」

快活に笑う木原。

底なしの知識欲は、まだまだ新たなる発見を求めていた。

・・・

「……ま、期待なんてしてなかったけどな！してなかったけどな！」

誰か来ないかな、そう思ってしばらく待っていたが。

この異常な状況の中でホイホイと危険そうな場所に来るはずもないか。

もしくは戦闘中で手が離せない、と言う可能性もあるし。

上条当麻は再び動き出すべく腰を上げた。

「どうしよう……アパートの方行ってみるか？誰かいれば良いんだけど……」

布束砥信やクマが居ればいいんだけど。と、上条は独りごちて駆けだした。

……それが、桐条美鶴らがこの場に来るほんの１０分程前の事である。

「これは……」

上条が戦闘した跡へやって来た桐条達は、まず氷の壁による道に驚きを示す。

この場では雷撃も放たれていた事を見ると複数人この場に居たのではと勘違いしてしまったようで、

「この氷壁を作った奴と雷を放った奴の最低2人居るって事になるよな」

そして垣根提督も例外ではない。

なにせ『多重能力（デュアルスキル）』など机上の空論で実現不可だと言う事は過去の実験で明らかになっているのだから。

「能力者か、ペルソナによるものか、はたまたシャドウによるものか……結局何も分からず仕舞いか……」

真田明彦が少し残念そうに呟く。

誰か居たら良かったのだが、既に移動した後かそれとも最初から人間など居なかったのか。

こう言っては何だが、死体すら残っていない為何も分からない。

しかし、この場に来たのも悪くは無いと思える事が1つ起きた。

「あ、何してるんですかあなた。と、ミサカはいつか見た知的美人を指差します」

その言葉に一同は一斉に振り返った。

そこには９９８２号と芳川桔梗が。

特別課外活動部と顔合わせする機会が無かったのか、芳川桔梗は目の前に居る面々を誰も知らないし、９９８２号も美鶴の顔しか知らない。

何にせよ美鶴達に敵意はなさそうなので2人はホイホイと近づいて行った訳である。

「あなた達もあの雷を見て来たの？」

「ええ、そう言う感じ。御坂さんかと思ったけどどうやら違うようね」

岳羽ゆかりの質問に芳川がのんびりとした口調で答える。

「そっちの子は桐条先輩の事知ってたみたいだけど、どういう関係？」

「あ、病院の見舞いで見たんですけどね。と、ミサカは簡単に答えてみます」

一方で伊織順平の質問に９９８２号もまたのんびりとした感じで答える。

そんなのんびりした雰囲気の中、垣根提督は1人思考を回転させていた。

（あれは……第三位のクローン……か？第三位が変な語尾付けるなんて聞いたことねぇし、多分そうなんだろうな。
で、あっちは研究者風だが……てこたあ、俺の予想は外れか？）

垣根提督の予想。
それはこの場で棺桶化しない人間の条件が、『ペルソナを扱える事』もしくは『能力者としてのレベルが一定以上である』と言う事である。

（『未元物質』はレベル5で、『心理定規』はレベル4。そんでゴーグルはレベル3だし砂皿はレベル0だ。
レベル4とレベル3がその境目だと思ったんだが……まあ、直感だしそんなもんか）

そして垣根は自身の考えを1人取り消す訳だったのだが、その予想が限りなく正解に近かったと言う事に気付くのはまだ先の話である。

「でさ、あなた達が敵じゃないってのは分かるんだけどこの後どうするの？
雪だるま式に無事な人見つけてっても結局この空間？を何とかしないといけないじゃない」

ドレスの少女が口を開いた。
その言葉は誰もが思った事だったので一同はそれについて考える事にする。
続いて９９８２号が真っ暗な画面の携帯を閉じながら美鶴に尋ね

る。

「とりあえず、一方通行と連絡が取りたいですね。と、ミサカは使えない携帯をポケットにしまいつつ他に連絡方法が無いか尋ねます」

「そうだな、この場では普通の機器は使えない。その為この無線機を使っているんだが……
あちらがこれを持っていないことにはどうしようもない」

うーん。と、一同が唸る中で芳川が小さく挙手しながら口を開いた。

「それじゃあ一度あのボロアパート行かない？
軽く拠点みたいになってるとこあるし、一方通行や他の面子も居るかもしれないわ」

「ふむ、そんな場所があるのか……ならば案内してもらってよろしいでしょうか？」

「任せて頂戴。ここからならそんなに遠くないし」

その意見に対して特に異論も無いようで、一同が小さくうなずくと芳川と９９８２号はアパートへ向けて移動を始めるのだった。

# そのきゅうじゅう　ちょう・のうりょくしゃです！（前書き）

３０００字しかねーっす！

**そのきゅうじゅう　ちょう・のうりょくしゃです！**

「さあて……ヤルかぁ……？」

ゴキリ、と指を鳴らしながら『平衡の巨人』を見やる。その言葉を聞いたからかは分からないが、３体の巨人たちは剣を携え麦野沈利へと向かって行った。

愚直に突き進む『平衡の巨人』を見た麦野は、そのあまりの考えのなさに思わず噴き出す。

「ははは！！考えるオツムもありませんってかァ！？真っすぐ向かってくるだけの案山子で私を倒せると思ってんじゃねぇよォ！！！」

腕を横に一閃。

それと同時に光線が地面を抉る。

チェスの駒のような体躯をした『平衡の巨人』。平べったい足元は麦野の作った溝に引っ掛かり３体は同時に前方へこけた。

少しばかりシュールな光景にまたしても噴きだし、指をさしながら嘲る。

「ひゃはははは！！！やっぱ頭わりー！」

ゲラゲラと下品に笑う麦野はお嬢様のような綺麗な容姿に反して醜い。

あまりのギャップにトラウマを植え付けられた暗部の人間も少なくは無いそうだがそれはさておき。

「ま、絹旗の奴があっちの片付けるまで、遊んでやるよ」

チョイチョイと指で挑発する。まるで映画のワンシーンを再現するかのように。
そんな中で彼女の心は、先程原子崩しの直撃を受けたにもかかわらず、傷一つなく佇んでいた異形に対して麦野は少しだけ感謝を示していた。

――――イイ実験台になる。

先程の嘲笑うかのような笑みから一変、獣が獲物を狙うかのような獰猛な笑みへと表情が変貌を遂げた。
この笑みにもトラウマを植え付けられた人間は少なくない。

・・・

瞬間、地響きとともに轟音が辺り一面に響き渡った。
『判決の剣』、剣の側面部分をガードレールにて叩いて攻撃を逸らしたことでその剣が地面にたたきつけられたからだ。
絹旗最愛はその剣が生み出した惨状を目の当たりにして冷汗をかく。

（やっべーやっべーですね、この威力となると流石にあれを『窒素装甲』で防ぐのは超辛いかもしれねーです）

しかしその思考とは裏腹に表情は非常に軽い。
同時に、両サイドから2体の『判決の剣』によって剣が横薙ぎに

振るわれるのだが、絹旗の表情に焦りは無い。

「当たらなければ超どうという事は無い、って奴です！」

身軽な体が宙を舞った。

バク転によって、２本の剣をギリギリ回避し白銀の剣に絹旗のドヤ顔が映る。

無駄にスタイリッシュな回避を見せた絹旗はガードレールを用いて『判決の剣』の手首を狙った。

「折れろ！超折れろ！」

マドハンドのような見た目をしたシャドウであるために、攻撃できる部分も限られてくる。

明らかな武器である剣をその手から離れさせられれば無力化は易いはず。

絹旗はそう考えて岩のような手に攻撃しているのだが、

「超かってークソったれだなァオイ！！」

思わず言葉も汚くなる。

絹旗の力はとある実験にて一方通行の思考パターンを植え付けられている為、能力を発揮した時一方通行のような口調になってしまうのだ。

車も真っ二つにしたあの剣ならばダメージも通るだろう、と『判決の剣』から剣を奪う算段を頭で付けている最中に殺気のような何かを察知した。

「！」

すると絹旗は自身の背後に向けてガードレールを振るう。
ガキィッ!!と金属がぶつかり合った甲高い音が鳴り響き、『判決の剣』と鍔迫り合いになった。
暗部で鍛えられた戦闘技術や不意打ちに対応する直感。
それが3体の異形を前にしても一歩も引かずに絹旗に戦闘を続けさせた。

「ハッ!!そうですよ、そうやって無ェ頭……って言うか手?を超ひねってかかってこねェと、私は殺せませンよ!?」

しかし、その瞬間に全身に電撃が走ったかのような痺れが絹旗を襲った。

「ガァッ?!」

その正体は『判決の剣』によるジオダイン。
剣に帯電させることで剣を直撃させずともダメージを与えたのだ。
実際にガードレールを握っている訳でもないのに絹旗にもダメージが及ぶ程の威力。

絹旗は身体を後逸させ鍔迫り合いから逃れると、更にガードレールを一本引き抜き二刀流のような体勢になった。

「チッ……超めンどくせェですね」

手を何度か握り、しっかり動く事を確認すると射殺さんとばかりに『判決の剣』を睨みつける。

「さァ、行きますよ」

地面を思い切り踏み抜くと、莫大な推進力を体に持たせ1体の『判決の剣』を狙う。
狙われた『判決の剣』もそれを迎え撃つように上から下へと剣を叩きつけた。

「アアァァァァァ！！！」

絹旗は体を無理矢理ストップさせただけでなく先程のようにバク転して後ろに少し下がりその剣を回避する。
それだけでなく、宙に浮いたまま2本のガードレールをクロスさせ地面に突き刺すと、地面に叩きつけられた『判決の剣』をそのまま固定した。

勿論、剣を持ち上げるのでなく普通に引き抜けば問題無いのだが、それをさせる絹旗ではない。

「↓殺してでも　超うばいとる」

『判決の剣』が握っているその手を無理矢理開くと剣を奪う。
そして奪い取った剣を残された手に全身全霊を以って叩きつけると、簡単に真っ二つに裂けるのだった。
それと同時に残された剣も消滅した。どうやら『判決の剣』の剣と手は一心同体らしい。

「ふン、超他愛もねェですね」

すると後ろから2体の剣が迫っている気配を感じる。
それに対して2本のガードレールを再び握り締め、迎撃の体勢を取った。

「戦闘ってのは手だけで出来ると思ったら超大間違いです！」

まず1本目。

ガードレールの側面を滑らせるようにして剣を受け流し地面に叩き付けさせる。

続いて2本目。

こちらは横薙ぎに払ってきたのでガードレールを地面に立たせ棒高跳びのように飛び上がると、今度は剣の側面を思い切り殴りつけることでその剣もまた地面へと叩きつけられた。

これにより1本目の剣が2本目の剣に邪魔される形で動きを阻害される。

隙は作った。あとは突くだけ。自身の掌を固く、強く握りしめると絹旗は気合いを入れた。

「最初は超グー！じゃんけん、超・グー！！」

2体の『判決の剣』のうち1体を、全霊を込めた右ストレートでその手を砕く。

「ちょっと借りますよっと！」

砕かれた事により剣を地面に落とした。

『判決の剣』は既に消滅しそうな状態である為、剣自体もすぐに消える事だろう。

そうなる前に、もう1体に対して一撃入れるのに使う。

「超とどめです！！」

野球のバッターのように剣を一閃させた。

『窒素装甲』の馬鹿力は剣速を限りなく最速へと近づく。
その速度は『判決の剣』と言う名を冠した剣その物と言って良いシャドウのそれを圧倒する。

「おらあああああああああ！！！」

斬。
まさに一刀両断を地で行った絹旗は、最後の『判決の剣』を一刀の下に斬り伏せた。
そしてあっけなく剣は手と共に消滅する。

「ふぅ……おっと麦野の方は大丈夫でしょうか？ひょっとしてやられ」

その刹那、ジュッと頬を何か光線のようなものが通りすぎていった。

「……るわけないですね、分かります」

「当たり前よ、私を誰だと思ってんだ」

絹旗は小さく裂かれた頬をなぞりながら背後を振り向くと、そこには麦野沈利の姿があった。
どうやら麦野の方も戦闘を終えたらしく、まだまだ余力を残している所を見ると、そこらのシャドウよりかは強力だったのかもしれないが、それでも麦野には及ばなかったということだろう。

実際、『平衡の巨人』は基本的に物理攻撃しか扱えず、一方で麦野は原子崩しによる遠距離攻撃が可能。

とどのつまりフルボッコだった。

例えば麦野が愛用している三角形のパネル。

これを『拡散支援半導体（シリコンバーン）』と呼ぶのだが、これは簡単に言うと電子を拡散するパネルであり、レーザーのような1点集中型の原子崩しを拡散するにはもってこいの道具である。

しかし拡散する事により威力が下がる為に、先程拡散支援半導体を用いた原子崩しを直撃しても『平衡の巨人』は無傷だったのだ。

なら話は簡単で、原子崩しを普通に放てば良い。それで足りないのなら更に出力を上げれば良い。

『平衡の巨人』は、その防御力の高さが仇となり麦野の能力の練習台と成り下がってしまったのだった。

「さーて、さっさとあの翼のとこに……って」

またしても何かの気配を感じる。

背後を振り向くと、５０m先から人影が徐々に近づいていた。

**そのきゅうじゅういち　はんげきののろし**

「うおっ、ホントにテレビから出てきた」

一方通行がテレビから戻って来た時に聞いた第一声がこれだ。
そしてその声に聞き覚えがあるなと思ったら伊織順平だった。
どうやら桐条美鶴と愉快な仲間達の一部もこの場に来ているようだ。

はっきり言って狭い。この後クマや布束砥信、木山春生だけでなくその教え子らも出てくる予定なのに既にこの人口密度。
辺りを見渡すと右から岳羽ゆかり、真田明彦に伊織、美鶴に９９８２号、芳川桔梗に上条当麻。
そして……第二位とドレスを着た女。

こんなボロ家に何の用だろうか。全くをもって意味がわからない。
何やらやけに敵愾心向きだしな第二位の視線を無視しつつ一方通行はこの状況について尋ねる事にした。

「で、なンだこの状況はよォ」

「いや、お前の方がどうしたんだよ！？大丈夫か！？」

上条当麻が思わず突っ込みを入れた。

平然としている一方通行に対し垣根やドレスの少女を除いた他の一同の顔は青い。
何せ一方通行の胸元からは大きく血の跡が出来ているからだ。

明らかに傷は深い。だと言うのにその声は落ちついている。

そのギャップが更に不安を煽る要因になっているようだったが、一方通行がとりあえず無事であると言う事を説明したことでようやく落ち着きを取り戻した。

そして一方通行の質問に対して美鶴が現状をまとめる。

「学園都市に起きている状況をどうすべきか話し合う場を設けた、とでも言おうか」

「何？」

学園都市に影時間が訪れたのは一方通行がテレビの中に入った後の為に、今現在学園都市を取り巻く環境について何も知らない。故にそれについて尋ねようとするのだが。

「……この感じは……」

どこかテレビの中の世界と似た感覚を覚えた。

それはすなわちペルソナやシャドウに関係する。そして桐条達と来たら……分からないはずが無い。

「影時間、か……」

一方通行が1人納得する中、その背後から続々とにゅるにゅるとテレビからの帰還者達が現れていた。

「ｗｅｌｌ、いつの間にこのボロアパートは集会場になったのかし

らね」

「暗黙の了解って奴クマね！難しい言葉知ってるクマはひょっとして物知りクマ？」

まず布束とクマがテレビから這い出てきた。

一同がクマの姿を見てリアクションを取る前に木山や子供達もニュッと出てきたのでその場は更に混沌と化す。

人口密度は最高潮に達し何が何だか分からない状態の中、玄関の方からドンドンと扉を叩く音が聞こえてきたのでワイワイと騒ぐ一同の中一方通行はその輪から抜け出して扉を開けた。

するとそこには。

「いっだいな”んな”のよ”ぉぉおお！！！」

扉の前でグスグスと泣きじゃくるのは、結標淡希。

背後では人々が敷き詰まり、前方では結標が泣きじゃくり。

本当に何なんだ。一方通行は夏休み明けの学生のように気だるく溜息をついた。

「……そりゃこっちのセリフだァ……」

「だって！いきなり暗くなったと思ったら小萌が棺桶になるし、光の翼みたいなのが出てるし、外に出ても棺桶しかないし！」

「お、おォ……」

怖かったんだから！！と涙を流しながら物凄い形相で睨みつける結標に少しだけ気おされる一方通行だった。

とりあえず無事な人々も居ると言う事を確認できた結標はようや

く落ち着きを取り戻したのかぐしぐしと目元をぬぐうと一方通行の横をすり抜け部屋の中に入ろうとする。

「何してンだお前」

「え？」

「え、じゃねェよお前の部屋は隣だ、そっちに帰れ」

「良いじゃないこんなに人が居るんだから今更1人や2人くらい！！あなたこんなか弱い女の子が1人棺桶しかない部屋に取り残されてる姿を想像してみてよ！！」

とどのつまり、誰でも良いから人が居る場所に居たいらしい。

ぎゅうぎゅうに詰め込んだこの部屋に更に人が増えると言うのは少し嫌だ。

とはいえそんな事を言えばまた先程のような癇癪を起こしかねないと判断し、一方通行はそれ以上何も言う事は無かった。

「まァいい。それで、お前らはどォすンだ？俺は別件で動いてっからあンま協力出来ねェぞ」

「む、そうなのか？一先ず光の翼……まぁ後で外を見たらわかるだろうが、それに原因の一端があるかもしれないからここに居ない山岸達がそれを調べに行くはずだ。

だから私達も無事な人を探しつつそちらへ向かおうと考えている」

「そォか。はっきり言ってこっちもいっぱいいっぱいでなァ。とりあえず光の翼とやらは任せるぜェ。

そこの上条も持っててってくれて構わねェ」

「あぁ、任せてくれ」

「一方通行はどうすんだよ、そんな傷で」

淡々と話を進める様子を見る限りでは大丈夫そうに見えるが、あのような大きな傷を作って大丈夫なはずがない。

上条は自分の事を棚に上げ一方通行が無茶をする一方通行を咎めようとするが、一方通行は意に介さない。

「とりあえず９９８２号、お前はミサカネットワークから打ち止めの場所を割り出すとか出来ねェのか？」

「残念ながら無理ですね、上位個体からの命令文が何処から送られているのか分からないようにプロテクトをかけてあります」

「そォか……」

９９８２号から打ち止めの位置を逆探知出来るならその方が良かった。

それが叶わないとなれば手段は一つしかない。

「この件、恐らく学園都市上層部……統括理事会も一枚噛んでるはずだ。

そォいう訳だから、俺はそっちを洗ってくる」

美鶴の話を聞く限りではこの場では通常の機器は使えないと言う。

だがしかし、統括理事会もこの件に関わっているのであればそれの対策が為されている可能性も高い。

もちろん統括理事会に歯向かうと言う行為の意味がわからない一方通行では無いが、そこら辺に関してはどうなんだ、と言う疑問を学園都市組は考えたのだが。

「大丈夫だ、誤魔化す。もみ消す。犯罪はバレなけりゃ犯罪じゃねェ」

ニヤリと笑みを浮かべる。

この一方通行に狙われた統括理事会の人間の方に同情したい。一同は本気でそう思った。

「あー、その前にちょーっと試したい事があるんだけど、良い？」

その声の元に視線が集中する。

発言者は芳川。一同がその発言に対して口を開く前に芳川は続ける。

「ミサカネットワークを『解析』したら打ち止めの居場所を突き止められるかもしれないわ」

成程、と一方通行は思う。

決してそんな設定あったなとかそういうあれはない。決して。

「そう言う訳だから誰か召喚器貸してくれない？」

その言葉に一番近くに居た春上衿衣が反射的に召喚器を差し出した。

「それはあげるの」

「あら、良いのお嬢ちゃん？」

「それはもう、要らないから大丈夫なの」

「そう。それならありがたく受け取るけど……」

チラリと一方通行を見やる。

影時間が今回だけで終わればいいのだが、これからもこうならないとは限らない。

そうなった時自衛の手段がないのは危険なのではないだろうか。

その考えを知ってか知らずか一方通行は美鶴に対して口を開いた。

「なァ桐条。一つ頼まれてほしい事があるンだが」

「何だ？」

「木山春生とその教え子共、桐条グループの学園都市で引きとっちゃくンねーか」

「な！？そんなことできるはずがないだろう！？何の犠牲も無しにここから離れることなど……！」

その言葉に美鶴よりも早く木山が反応を示した。

しかし木山の言葉に対して一方通行は何の動揺も見せない。

「問題ねェよ、俺に考えがある。もうお前らが学園都市に居る理由もねェンだろ？コンな危ねェ目にあってまでよォ。

つゥかお前らの為じゃなく、俺の為にこの提案をしてンだ。変に義理立てする必要もねェよ」

「し、しかしだな……」

「こちらとしては特に問題は無いぞ、鈴科が上手くやってくれるならな」

「はン、誰にモノ言ってンだ」

「そう言って2週間近く入院したのはだれだったかな？確か通り魔（笑）に襲われたとか何とか……」

「グッ……」

一方通行と美鶴のやり取りを見て決心したのだろう。この2人なら頼りにしても大丈夫だと、自分達を利用するような人間では無いと。

木山は意を決したのか、一方通行へ返答をする。

「すまないがよろしく……頼む。この場には居ないが後5人程居るんだが構わないか？」

「問題ねェよ。後は……」

一方通行は春上を見やる。

彼女は木山の教え子では無いが既にペルソナに関する出来事に巻きこまれてしまっている。

しかし学園都市から出ていくかどうかは彼女次第な為に、一方通行は春上の返答を待った。

「私は……ここに残るの」

「衿衣ちゃん!?どうして!?」

それに対して声を荒げるのは、枝先絆理。

当然だ。自分を含めた置き去りの子達はこの学園都市で幾度となく実験材料にされてきた。

そこから抜け出せる機会を、『普通の日常』に帰るチャンスを、自ら捨てると言うのだから異論を唱えざるを得ない。

しかし春上の表情から察するに、その決意は固い。

「知りたい事があるからなの」

「知りたい事って!?」

「絆理ちゃん達が受けた実験の裏側を知りたいの。

このペルソナの力と、何か関係がある気がしてならないの」

何故木原数多と言う男は枝先達置き去りの子達がペルソナの適性があると考えたのだろうか。

それは適正があると言う予想ではなく、適正があると言う事実に基づいて自分達を使ったのではないのか。

枝先達5人は既に適性があったにも関わらず、自分だけはペルソナの力を人工的に植え付けられた。

5人と自分の違い。それは暴走能力の法則解析用誘爆実験を受けたか否かではないだろうか。

そして自分が連れてこられたのは、枝先と自分が『精神感応』で繋がっていると言う事実があったからではないか。

木原の主導の元行われた実験の数々をこなしながら春上は以上の

事ばかり考え続けていた。

ペルソナと言う力。そして暴走能力の法則解析用誘爆実験。

学園都市は一体何を考えているのか、何を求めているのか。

その牙は、枝先だけでなく初春飾利らにも及ぶのか。

そう考えただけで身震いしてしまう。

「そんなこと知らなくたってもう良いじゃん！！」

そんな春上の思いとは裏腹に、枝先は依然として納得をしていない。

「それに……木山先生との時間、大事にした方が良いの。

私と絆理ちゃんは『精神感応』で繋がってるから、離れたってずっと友達なの」

「そんなの当たり前だよ！それより、一緒に行こうよ！

衿衣ちゃんまでこれ以上危険な目に合う必要なんて無いじゃん！！」

「それでも、私は知りたいの。本当の事を。

学園都市が裏側で何をして来たのかを……」

春上の目からは意志が感じ取られた。

テコでも動かない程に固く強い意志、それは親友たる枝先ですら動かせそうにない。

数瞬目線を交えると、枝先は諦めたように溜息をついた。

「……分かったよ、それだったらこれ使って」

ゴソゴソと懐から取り出したのは、召喚器。

「私はもう使わないし、これを私だと思ってくれたら嬉しいかな」

それを受け取ると、春上は強く頷き、手を差し伸べる。

「握手なの」

「……うん、それじゃあ約束だよ。次会う時まで無事でいる事」

「大丈夫なの、この人たちも居るから」

続いてチラリと一方通行を見やる。

どうやら一方通行達の力を当てにしているようだ。

「あァ？なンでそォなるンだよ」

「皆さんが関わっている事と私達の関わっている事は多分同じ道だと思うの。

だから私は皆さんに勝手について行く事にするの！」

確かに、春上は既にペルソナと関わりを持ってしまっている。

そうである以上ペルソナの制御法も知っておかなければならない。

一方通行は布束と上条にアイコンタクトを取ると溜息をついた。

「分かった。ただしお前は自分の意志でこっちの領域に踏み込ンだって事を忘れるなよォ。

必ずしも助けが入るとは限らねェ。そうなって来ると頼れるのは

自分の力だけだ」

「大丈夫なの、でも代わりに鍛えて欲しいの！」

「まァ、その辺は当てがあるから任せとけェ……ってチョット待て。木山ンとこの教え子、これだけじゃねェンだろ？残りの奴らは無事なのか？ペルソナの適性はあるのか、ないのか？」

ペルソナの適性があるなら影時間にも気付けるし存在できる。だとすると危険だろう。

春上は自身の予想が概ね正しいと確信していたので首を縦に振って一方通行の質問に肯定する。

「……そうなの、他の子達も少なくともペルソナを使う事は出来ると思うの。

だとしたら危ないかもしれないの、早く助けないと」

「成程なァ。桐条、悪ィが光の翼よりも木山の教え子の保護を優先に頼むわ。

どォせこの場に居ない山岸達が光の翼の方に向かってンだろ？」

一方通行の言う通り、２つのグループに分かれて行動していた為山岸達はこの場には居らず、既に光の翼の方に向かっている。

美鶴は一方通行の提案に特に異論は無かったようで小さく頷いた。

「そうだな、ならば私たちはその子供達を保護した後に木山さん達を連れて一旦学園都市の外へ出てみようか。出られるかは分からないが……」

「その辺の判断は任せる。ソンで、上条達で光の翼の方に向かって

くれ」

「分かった。その山岸って人たちも味方で良いんだよな？」

実は上条は美鶴の事しか知らなく、今日他の面子と初対面したのだ。

故に山岸達の事は話にしか聞いたことが無い為、一応の確認をする。

「そぉいやお前らまともに顔合わせしてなかったンだよなァ。丁度良い機会だから自己紹介でもしてこいよ」

一方通行のあまりに軽い言葉に一同は脱力する。

だがしかし、変に気張るよりかは良いだろう。誰とは無しに噴き出した。

そんな中で話についていけない結標はボケーッとし、ドレスの少女は垣根の様子を見てクスクスと笑い、当の垣根の表情は暗い。

方針は決まった。後は動くだけだ。

決意を新たにした美鶴は立ち上がり、動き出すべく口を開いた。

「では、時間も押してる事だろうし急ごうか。木山さん、他の教え子の現在地は把握しておられますか？」

「住所は分かっている。一先ずその場所まで向かおう」

「分かりました、それでは先導をお願いします。子供達とあなたの警護は任せてください」

「俺たちなら対シャドウとしての戦力なら申し分ないはずだ」「まっかせといて下さいよ！このじゅんぺーさんに！」「じゅんぺーは頼りにならないけど真田先輩と美鶴先輩は頼りになるから安心してください！」

美鶴に引き続き三者三様に心の準備が整っている事を示した。
それによって美鶴達と子供達は木山が先導するままに部屋を出ていく。

その前に木山は最後に一方通行の方を振り向くと、

「一方通行……すまないな、迷惑をかける」

「さっきも言ったが、気にすンな。精々自由な時間を謳歌すると良い」

「……そうだな、そうさせてもらうよ。少しだけ……疲れたからな」

そして木山は簡単な別れの言葉を述べた後、部屋を出て行った。
これにより部屋の人口密度は大幅に小さくなる。
とりあえず芳川は打ち止めの位置に関してミサカネットワークを『解析』する事で逆算出来ないか実験を始めていた。

そんな中で垣根はこの部屋に一方通行が現れてから初めて口を開いた。

「なぁ、第一位さんよ」

「あ？なンだよ第二位さン？」

「お前さ、今更人助け何かして英雄（ヒーロー）気取りか？
それとも良いことした分だけ今までの分は帳消しになるとでも思ってんのか？」

詰み上げてきた罪。
それは清算するにはあまりに重すぎる。
1人や2人の命を救ったところで、殺した命は戻って来ない。

垣根の言葉に一方通行は口を開かない。
そして垣根の言葉は続いた。

「そりゃ無理ってもんだろ？今更正義を語ったところで騙ってるだけにしか見えねぇよ。
俺達はクソだ。クソったれの悪党だ。そんな奴が今更良い事したからって何になるんだよ？
お前が殺した連中に「僕はこんなに良い事したから許して下さい」とでもいうつもりか？
そりゃ甘すぎんぞ実際。甘過ぎて反吐が出る」

贖罪、すなわち罪を贖う事。
しかし根本的に罪を帳消しにする事など不可能だろう。
いくら償っても、いくら取り繕っても、過去に行った事実を変えることなど出来ないのだから。

自分と同じ悪党が、暗闇から抜け出そうともがいている。垣根にはそのように感じられて、心底腹が立った。
だったら最初からするな。最初から罪を犯すな。堕ちるのが嫌なら、その場から動かなければよかっただろうが。
だと言うのに、一方通行は今誰がどう見ても善行を行っている。
まるで贖罪を求めているかのように。

それが垣根には我慢ならない。

ギロリと睨みつける垣根の目を、一方通行はつまらなそうな表情で見つめ返した。

それはまるで、話が噛み合ってない人間に対してどう理解させようか悩んでいるようにも見える。

「お前よォ、なンか勘違いしてねェ？」

「あ？」

「俺ァクソったれの悪党だ。ンなもン言われなくても分かってるっつゥの。

つゥか人助け？木山の話か？ありゃ飽くまでも俺の為だ。事のついでに助かる道を提示しただけだ。

別に罪を清算してェとかそォいう考えがあった訳でもねェ。

打ち止めの事だってそォだ。別に償いとか正義とか悪とかそンな事考えてやってる訳じゃねェよ」

一息に垣根の言葉を否定すると、一旦呼吸を整える。少し溜めた後に再び口を開いた。

「……助けてェから助けるンだ。木原はぶちのめしてェからぶちのめす

それだけの事にいちいち漫画みてェな善悪論持ってこられてもどう返答しろっつゥンだよ」

その言葉に拍子抜けしたかのような表情を浮かべる垣根。

しばらく放心したように考え込むと、ばつの悪い表情へと切り替

わった。

「……悪かったな、見誤っていたよ。勝手に勘違いしちまってたらしい。
テメェは相も変わらず俺と同じクソったれだ。さっきの言葉は訂正させて貰うわ」

それだけ言うとドレスの少女を促し共に部屋を出ようと腰を上げた。

「ちょっと気になる事があるんでな、俺らはここで帰らせてもらうぜ」

「別に期待してねェから気にすンな。帰れ帰れ」

「はん、大したムカつきっぷりだぜ、第一位」

「お前ほどじゃねェよ、第二位」

「ま、そのうち相対する事もあるだろうから、その時地面に這いつくばらせてやるよ」

「そりゃこっちのセリフだ。そンときゃパシリにでも使ってやるから安心しろ、命までは取らねェ」

「言ってろクソ野郎。じゃあな」

「おォ」

ひらひらと手を振りながら玄関から出て行く2人。

そうして残ったのはいつものメンバー（御坂美琴不在）と春上に隣人Ａ。

一方通行は明らかに場違いな少女に対して苦言を呈する。

「少し待ってもらったらこの騒ぎも終わるンで、隣の部屋に帰ってもらえませン？」

「イヤよ」

「でも僕達これからそと行くクマよ？結局君は取り残されるクマ」

「イヤよ」

「諦めろよ」

「イヤよ」

「諦めるなよ」

「イ……勿論よ」

「……足引っ張ったら容赦なく置いてって構わねェ。上条、そいつも連れてけ」

その言葉に若干の驚きを示しつつも上条は了承した。

流石にこの場に１人放置するのも可哀そうに思ったのだろうか。

「あら？こう見えてレベル４だから足手まといにはならないと思うわよ」

「だったら1人で頑張れよ」

「イヤよ」

「……」

結局、春上だけでなく結標とも一緒に行動する事にした一同だった。

・・・

その時、打ち止めの脳波に一瞬だけだが異常が見られた。

これを発見できたのは本当にたまたまだ。先程までＡＩＭ拡散力場についての考察を深めていた所で、ようやく1段落ついたのか何とは無しに脳波を検出するモニターを眺めていたのだが、その際に瞬きする程度の時間だけだが脳波が乱れ、再び安定した状態に戻ったのだ。

（これは……？）

本来ならあり得ない事象。例えば下位個体は上位個体に逆らえないように作られているし、上位個体を使うにあたって強固なプロテクトをかけたはずだ。

（いや、待てよ……そのプロテクトを突かれたってことか？）

ネットワーク上でただ1点だけ強固な壁で覆われた場所がある。

それこそが打ち止めの居場所であり、木原の潜伏場所でもある。

（だが、下位個体からはどうにも出来ないよう命令文を送っている。だとすれば……）

ペルソナしかないだろう。第3位ですら介入出来ないプロテクトを打ち崩せる存在は。

だとすると、もうじき奴が来る。そう思うと笑いが止まらない。

「ははははは！！来いよ一方通行！軽く遊んでやるぜぇ！！」

木原の笑い声は、止まらない。

## そのきゅうじゅういち　はんげきののろし（後書き）

何故木山先生達を学園都市からプリズンブレイクさせたのかという一方通行の考えはそのうち描写する予定です

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4477t/

【習作】とある仮面の一方通行

2011年10月11日11時12分発行